

岩手県埋文センター文化財調査報告書第55集

# 上里遺跡発掘調査報告書

二戸バイパス関連遺跡発掘調査

上里遺跡発掘調査報告書正誤表

ページ	行	誤	正
5	22	10度東 <u>偏</u>	10度東 <u>偏</u>
10	5	カラ <u>リ</u> パーサル	カラ <u>リ</u> パーサル
12	15	最 <u>と</u> も	最 <u>も</u>
15	25	vol <u>  </u> No. 1	vol <u>5</u> No. 1
17	10	「中 <u>掘</u> 石層」	「中 <u>掘</u> 浮石層」
31	31	3.75 <u>cm</u> ×1.50m	3.75 <u>m</u> ×1.50m
45	1	約5.10 <u>cm</u>	約5.10 <u>m</u>
46	25	<u>話</u> した如く	<u>記</u> した如く
49	11	<u>坑</u> 穴状	<u>坑</u> 穴状
49	18	<u>坑</u> 穴状	<u>坑</u> 穴状
49	18	<u>7</u> 基	<u>5</u> 基
49	24	18 <u>0</u> .53m	14 <u>0</u> .53m
54	32	多 <u>量</u>	多 <u>種</u>
70	13	141.73 <u>cm</u>	141.73 <u>m</u>
70	13	141.78 <u>cm</u>	141.78 <u>m</u>
80	1	全体 <u>で</u> 8基	全体 <u>が</u> 8基
104	28	底部 <u>面</u> 近い	底部 <u>に</u> 近い
113	11	自然 <u>堆</u> 没	自然 <u>埋</u> 没
126	30	<u>厚</u> 体圧痕文	<u>原</u> 体圧痕文
133	22	沈線 <u>で</u>	沈線 <u>を</u>
163	12	同様 <u>な</u> 特徴	同様 <u>の</u> 特徴
168	4	撚糸文 <u>の</u> 付され、	撚糸文 <u>が</u> 付され、
181	10	付し <u>し</u>	付し <u>、</u>
202	21	どうか <u>な</u> 非常に	どうか <u>は</u> 非常に
207	5	分類 <u>規</u> 準	分類 <u>基</u> 準
207	20	縦向 <u>  </u>	縦向 <u>き</u>
215	5	文様 <u>をも</u> つ	文様 <u>をも</u> ち
217	17	<u>サ</u> ラッと	<u>ザ</u> ラッと
217	17	次の7 <u>  </u> の	次の7 <u>類</u> の
222	26	鈍角尖底 <u>が</u>	鈍角尖底 <u>か</u>
257	2	面種 <u>が</u>	面積 <u>が</u>



ページ	行	誤	正
299	23	搔器 <u>な</u> もの	搔器的な <u>もの</u>
328	10	使用 <u>を</u>	使用 <u>面</u> を
329	13	A-08周溝 <u>遣</u>	A-08周溝 <u>遣構</u>
334	5	<u>周辺</u> の南寄り	<u>西辺</u> の南寄り
372	18	染付磁器 <u>は</u>	染付磁器 <u>で</u>
379	13	<u>23</u> 遺跡	<u>24</u> 遺跡
409	3	伴う <u>土器</u> はなく	伴う <u>遺構</u> はなく
420	28	1ヶの貫通 <u>が</u>	1ヶの貫通 <u>孔</u> が
422	22	器種別出 <u>点</u> 数	器種別出 <u>土</u> 点数
431	20	<u>袂</u> 状耳飾り	<u>袂</u> 状耳飾り
436	19	中曽根 <u>遺</u> 跡	中曽根 <u>II</u> 遺跡
456	7	( <u>附図3-1</u> 参照)	( <u>付図・付表-1</u> )
457	8	( <u>附図3-2</u> )	( <u>付図・付表-2</u> )
458	11	( <u>附図3-4</u> 参照)	( <u>付図・付表-4</u> )
459	3	( <u>附図3-5</u> )	( <u>付図・付表-5</u> )
459	7	( <u>附図3-6</u> )	( <u>付図・付表-6</u> )
459	14	( <u>附図3-7</u> )	( <u>付図・付表-7</u> )
460	6	骨格所 <u>見</u>	骨格所 <u>見</u>
460	15	<u>た</u> らに説明	<u>さ</u> らに説明
485	13	達し <u>っ</u> いた	達し <u>て</u> いた
487	6	始ま <u>っ</u> て	始ま <u>っ</u> た
508	6	<u>(</u> 上里人のうち	<u>(</u> をとる

## 序

四国四県に匹敵する広大な面積をもつ本県にとって地域開発の基幹となる道路など交通網整備事業は県政の重点施策となっております。

一方、本県は遺跡の宝庫といわれるほど数多くの埋蔵文化財包蔵地を有しております。貴重な文化財の保護、保存と現代生活を豊かにするという開発指向との均衡を保つことは大きな課題でもあります。

本報告書にかかわる二戸バイパスは、二戸市中心部を通る国道4号線の交通渋滞緩和のため二戸郡一戸町鳥越駒木平を起点に、現国道4号線西側馬淵川左岸の山沿を北上し二戸市金田一上田面までの総延長7.7kmに及ぶ計画路線であります。

このバイパスルート内に13遺跡が所在し昭和49年度から県教育委員会事務局文化課によって発掘調査が行われ、52年度からは当埋蔵文化財センターが文化課の調整と指導のもとに調査を続行してまいりました。

本報告書は昭和54年度発掘調査した上里遺跡の結果についてまとめたものであります。当遺跡では縄文時代前期末から中期初頭にかけて営まれた集落跡と、平安時代から中世に及ぶ遺構、遺物が発見されております。特に注目すべきものとして縄文時代前期末の住居跡廃絶後につくられたフラスコ形土坑から7体の人骨が出土していることであります。これらは考古学の面からも、また当地方の歴史解明上も貴重な資料を提示できるものと思われまふ。

この報告書が研究者のみならず、広く一般のかたがたにも活用され埋蔵文化財に対する理解が一段と深められることを願ってやみません。

最後にこれまでの発掘調査から報告書刊行に至るまでの間ご協力、ご援助を賜りました建設省東北地方建設局岩手工事事務所、二戸市教育委員会をはじめ関係各位に対し心から感謝するとともに今後のご指導ご協力をお願い申し上げます。

昭和58年3月

財団法人 岩手県埋蔵文化財センター

理事長 新 里 盈

財団法人 岩手県埋蔵文化財センター組織

役員

理事長	新里 盈	(県教育長)
副理事長	柴内 真	(県教育次長)
常務理事	熊谷 正男	(県立埋蔵文化財センター所長)
理事	吉田 良和	(県農政部長)
〃	田代 太志	(県林業水産部長)
〃	後藤 光雄	(県土木部長)
〃	板橋 源	(県立博物館長)
〃	草間 俊一	(県立盛岡短期大学長)
〃	小形 信夫	(前常務理事)
監事	小白 石丈雄	(県教委総務課長)
〃	小原 吉雄	(県教委財務課長)

職員

所長	熊谷 正男	
副所長	小野寺 登	
[総務課]		専門調査員
総務課長	小笠原 喜一	〃
庶務係長	阿部 詔夫	〃
主任	佐藤 久四郎	〃
〃	戸草内 幸男	〃
〃	立花 多加志	〃
技能員	佐藤 春男	〃
[調査課]		〃
調査課長	嶋 千秋	〃
主任専門調査員	近藤 宗光	〃
〃	遠藤 勝博	〃
〃	村上 達夫	〃
専門調査員	畠山 靖彦	〃
〃	朝野 孝二	[資料課]
〃	菊池 利恵	資料課長
〃	鈴木 一治	主任専門調査員
〃	大原 則一	専門調査員
〃	渡辺 一夫	〃
〃	田鎖 嘉直	〃
〃	佐々木	〃
		吉田 努
		国生 尚
		小平 忠孝
		鈴木 隆英
		高橋 文夫
		高橋 義介

## 例 言

1. 本報告書は二戸市石切所字上里地内に所在する上里遺跡に対する発掘調査の結果を集録し、二戸バイパス関連遺跡発掘調査報告書の第5分冊としてまとめたものである。
2. 本遺跡に対する発掘調査は、国道4号線二戸バイパス工事に関連する事前緊急調査であり、調査は建設省岩手工事事務所と岩手県教育委員会事務局文化課との協議を経て（財）岩手県埋蔵文化財センターが担当した。
3. 現地での発掘調査や整理期間は次のとおりである。

調査 昭和54年4月8日～同年10月8日

第1次整理 昭和54年11月1日～昭和55年3月25日

第2次整理 昭和57年7月1日～昭和58年3月31日までの間に4ヶ月間。

4. 当遺跡の面積は約60,000㎡に及んでいるが、本調査はバイパス路線内10,000㎡を調査対象面積として調査した。
5. 調査担当者と整理担当者は次のとおりである。

発掘調査 遠藤勝博、高橋与右エ門、高橋義介

整理担当 高橋与右エ門

6. 本遺跡の調査では縄文時代、古代、中世に亘る遺構が検出されたが、遺構数は以下のとおりである。

①縄文時代 ○住居跡——10棟 ○土坑——78基 ○集石群——1ヶ所

○遺物包含層——2ヶ所

②古 代 ○住居跡——1棟 ○土坑——1基 ○周溝遺構——10基

○溝跡——1条

③中 世 ○住居跡——1棟 ○堀跡——1条

7. 本遺跡の調査によって多数の遺物が出土し、その中から1,995点を本報告書に掲載したが、種類別の掲載点数は以下のとおりである。

①縄文土器——1,116点（実測図500点・拓影図616点） ②土師器——11点

③須恵器——21点 ④陶磁器——2点 ⑤土製品類——21点

⑥石器・石製品類——821点 ⑦貨幣——3点

8. 本報告書の執筆分担は次のとおりであるが、各文末に氏名を記し、文責を明らかにした。

I. 調査に至る経過 嶋 千秋（調査課長）

II. 調査の方法 高橋与右エ門



III. 地形と周囲の環境	1・3・4——高橋与右エ門、2——遠藤勝博
IV. 基本層序	高橋与右エ門
V. 縄文時代の遺構と遺物	I-19住内土坑-1のみ遠藤勝博・その他は高橋与右エ門
VI. 古代の遺構と遺物	高橋与右エ門
VII. 中世の遺構と遺物	高橋与右エ門
VIII. まとめ	高橋与右エ門
IX. さいごに	高橋与右エ門

9. 調査結果の中から、次の事項については次の方々へ分析や鑑定を依頼した。(敬称略)

①石質鑑定 佐藤二郎(県立大船渡農業高等学校教諭)

②岩手県上里遺跡人骨の鑑定書 山内昭雄(東京大学教授)他3名

③上里遺跡出土人骨の歯牙に関する報告書 野坂洋一郎(岩手医大教授)他4名

④歯牙からみた上里遺跡人骨の性別と血縁関係 山内昭雄(東京大学教授)

10. 現地調査や整理報告に当り、次の方々より御教授・御指導をいただいた。(敬称略)

北海道大学 林 謙作、弘前大学 村越 潔、青森県立郷土館 市川金丸・鈴木克彦  
青森県立埋蔵文化財センター 三宅徹也・三浦圭介

岩手県立博物館 名久井文明・熊谷常正、独協医科大学 馬場悠男・茂原信生

11. 本遺跡の発掘調査では、中間報告として現地説明会資料や調査略報を公表しているが、本報告書の記載事項と喰い違いがある場合は、本報告書を正しいものとする。

12. 本報告書の全体的な編集・レイアウト・校正は高橋与右エ門が担当した。

# 本文目次

序	
例言	
I. 調査に至る経過	3
II. 調査の方法	5
1. 野外調査	5
2. 室内整理	10
III. 地形と周囲の環境	12
1. 地形	12
2. 二戸市の遺跡	18
3. 遺跡の位置と周囲の環境	26
IV. 基本層序	28
V. 縄文時代の遺構と遺物	31
1. 住居跡	31
2. 土坑	104
3. 集石遺構	201
4. 遺物包含層	206
5. 粗掘り・表採の遺物	313
VI. 古代の遺構と遺物	329
1. 住居跡	329
2. 土坑	331
3. 周溝遺構	333
4. 溝跡	350
VII. 中世以降の遺構と遺物	363
1. 住居跡	363
2. 堀跡	363
3. 石切所城について	371
4. 遺物	372
VIII. まとめ	373
1. 縄文時代	374
2. 古代	435
3. 中世	437
IX. さ い ご に	439

# 付編目次

付編一	岩手県上里遺跡人骨の鑑定書	455
付編二	上里遺跡出土人骨の歯牙に関する報告書	485
付編三	歯牙からみた上里遺跡人骨の性別と血縁関係	499

# 図版目次

第1図	岩手県全図	1
第2図	二戸バイパス関連遺跡の位置図	4
第3図	遺跡付近の地形と調査範囲	6
第4図	上里遺跡グリッド配置	7
第5図	地形区分図( $\frac{1}{50,000}$ )	13
第6図	二戸市の遺跡位置図	21
第7図	基本土層図	27
第8図	D-23住居跡(遺構)	33

第 9 图	D-23住居跡(遺物-1)·····	35	第 41 图	I-22住居跡(遺物-4)·····	91
第 10 图	D-23住居跡(遺物-2)·····	37	第 42 图	I-22住居跡(遺物-5)·····	93
第 11 图	D-46住居跡·····	38	第 43 图	I-22住居跡(遺物-6)·····	94
第 12 图	E-22住居跡(遺構)·····	40	第 44 图	I-22住居跡(遺物-7)·····	96
第 13 图	E-22住居跡(遺物-1)·····	41	第 45 图	I-22住居跡(遺物-8)·····	97
第 14 图	E-22住居跡(遺物-2)·····	42	第 46 图	I-22住居跡(遺物-9)·····	98
第 15 图	E-22住居跡(遺物-3)·····	43	第 47 图	I-22住居跡(遺物-10)·····	99
第 16 图	E-23住居跡·····	44	第 48 图	I-22住居跡(遺物-11)·····	100
第 17 图	G-16住居跡(遺構-1)·····	47	第 49 图	I-22住居跡(遺物-12)·····	101
第 18 图	G-16住居跡(遺構-2)·····	49	第 50 图	I-22住居跡(遺物-13)·····	102
第 19 图	G-16住居跡(遺物-1)·····	51	第 51 图	I-22住居跡(遺物-14)·····	103
第 20 图	G-16住居跡(遺物-2)·····	52	第 52 图A	A-06土坑·····	105
第 21 图	G-16住居跡(遺物-3)·····	53		B A-09土坑·····	105
第 22 图	G-16住居跡(遺物-4)·····	54	第 53 图A	A-10土坑-1·····	108
第 23 图	G-16住居跡(遺物-5)·····	55		B A-10土坑-2·····	108
第 24 图	G-16住居跡(遺物-6)·····	57	第 54 图A	A-11土坑-1·····	111
第 25 图	G-16住居跡(遺物-7)·····	58		B B-04土坑·····	111
第 26 图	G-16住居跡(遺物-8)·····	59	第 55 图	B-04土坑(遺物-1)·····	112
第 27 图	G-16住居跡(遺物-9)·····	60	第 56 图	B-04土坑(遺物-2)·····	113
第 28 图	G-24住居跡·····	61	第 57 图A	B-08土坑·····	115
第 29 图	H-41住居跡(遺構)·····	63		B B-09土坑·····	115
第 30 图	H-41住居跡(遺物)·····	64		C B-10土坑-1·····	115
第 31 图	H-42住居跡(遺構)·····	66	第 58 图A	B-10土坑-1(遺物)·····	117
第 32 图	H-42住居跡(遺物)·····	67		B B-10土坑-2·····	117
第 33 图	I-19住居跡(遺構-1)·····	71		C B-10土坑-3·····	117
第 34 图	I-19住居跡(遺構-2)·····	73	第 59 图A	B-11土坑-1·····	119
第 35 图	I-19住居跡(遺物)·····	77		B B-11土坑-2·····	119
第 36 图	I-22住居跡(遺構-1)·····	81	第 60 图A	B-11土坑-3·····	123
第 37 图	I-22住居跡(遺構-2)·····	83		B B-15土坑·····	123
第 38 图	I-22住居跡(遺物-1)·····	85		C B-22土坑-1·····	123
第 39 图	I-22住居跡(遺物-2)·····	87	第 61 图A	B-22土坑-2·····	125
第 40 图	I-22住居跡(遺物-3)·····	89		B B-23土坑·····	125



第 61 回	C	C-16土坑	125	第 81 回	A	G-16土坑-2	160
第 62 回		C-22土坑	127		B	G-16土坑-3	160
第 63 回	A	C-23土坑	129	第 82 回		G-23土坑	162
	B	D-22土坑-1	129	第 83 回	A	G-24土坑-1	165
第 64 回		D-22土坑-1 (遺物)	130		B	G-24土坑-2	165
第 65 回	A	D-22土坑-2	132		C	G-24土坑-2 (遺物)	165
	B	D-22土坑-3	132	第 84 回		G-44土坑	167
第 66 回		D-23土坑-1 (遺構・遺物-1)	134	第 85 回		G-45土坑	168
第 67 回		D-23土坑-1 (遺物-2)	135	第 86 回		G-46土坑-1	169
第 68 回		D-23土坑-2	136	第 87 回	A	G-46土坑-2	171
第 69 回	A	E-14土坑-1	138		B	G-46土坑-3	171
	B	E-15土坑-1 (遺構・遺物-1)	138	第 88 回	A	G-46土坑-4	174
第 70 回		E-15土坑-1 (遺物-2)	139		B	G-47土坑-1	174
第 71 回		E-15土坑-1 (遺物-3)	140	第 89 回		G-47土坑-2	175
第 72 回		E-15土坑-2	142	第 90 回		G-47土坑-3	176
第 73 回	A	E-22土坑	143	第 91 回		H-39土坑	178
	B	E-46土坑	143	第 92 回		H-41土坑-1	180
第 74 回	A	E-47土坑-1	146	第 93 回		H-41土坑-2	181
	B	E-47土坑-2	146	第 94 回		H-41土坑-3	183
第 75 回	A	F-45土坑-1	148	第 95 回	A	H-41土坑-4	184
	B	F-45土坑-2 (遺構・遺物-1)	148		B	H-42土坑-1	184
第 76 回		F-45土坑-2 (遺構・遺物-2)	149	第 96 回		H-42土坑-2	186
第 77 回	A	F-45土坑-3	152	第 97 回	A	H-43土坑-1	189
	B	F-46土坑-1	152		B	H-43土坑-2	189
	C	F-46土坑-2	152		C	H-44土坑	189
第 78 回	A	F-42土坑-2 (遺物)	154		D	H-46土坑	189
	B	F-43土坑-3	154	第 98 回		H-46土坑 (遺物)	190
	C	F-47土坑-1	154	第 99 回	A	H-47土坑-1	193
第 79 回	A	F-47土坑-2	156		B	H-47土坑-2	193
	B	F-47土坑-3	156		C	H-48土坑-1	193
第 80 回	A	F-48土坑	158	第 100 回	A	H-48土坑-2	194
	B	G-16土坑-1	158		B	H-48土坑-3	194



第101図	I-19住居跡内土坑-1	197	第133図	北端部遺物包含層(石器-1)	238
第102図	I-19住居跡内土坑-2	199	第134図	北端部遺物包含層(石器-2)	239
第103図	I-19住居跡内土坑-3	199	第135図	北端部遺物包含層(石器-3)	240
第104図	I-43土坑	201	第136図	北端部遺物包含層(石器-4)	241
第105図	集石群	203	第137図	北端部遺物包含層(石器-5)	242
第106図	集石群(土器)	205	第138図	北端部遺物包含層(石器-6)	243
第107図	集石群(石器)	205	第139図	北端部遺物包含層(石器-7)	244
第108図	北端部遺物包含層(土器-1)	208	第140図	北端部遺物包含層(石器-8)	245
第109図	北端部遺物包含層(土器-2)	209	第141図	北端部遺物包含層(石器-9)	246
第110図	北端部遺物包含層(土器-3)	210	第142図	北端部遺物包含層(石器-10)	247
第111図	北端部遺物包含層(土器-4)	211	第143図	北端部遺物包含層(石器-11)	248
第112図	北端部遺物包含層(土器-5)	213	第144図	北端部遺物包含層(石器-12)	249
第113図	北端部遺物包含層(土器-6)	214	第145図	北端部遺物包含層(石器-13)	250
第114図	北端部遺物包含層(土器-7)	216	第146図	北端部遺物包含層(石器-14)	251
第115図	北端部遺物包含層(土器-8)	217	第147図	北端部遺物包含層(石器-15)	252
第116図	北端部遺物包含層(土器-9)	218	第148図	北端部遺物包含層(石器-16)	253
第117図	北端部遺物包含層(土器-10)	219	第149図	北端部遺物包含層(石器-17)	254
第118図	北端部遺物包含層(土器-11)	220	第150図	I-19住居跡内遺物包含層遺物 取り上げブロックと実測個体数	255
第119図	北端部遺物包含層(土器-12)	221	第151図	I-19住居跡(Q-2・土器-1)	256
第120図	北端部遺物包含層(土器-13)	223	第152図	I-19住居跡(Q-2・土器-2)	257
第121図	北端部遺物包含層(土器-14)	224	第153図	I-19住居跡(Q-3・土器-3)	258
第122図	北端部遺物包含層(土器-15)	225	第154図	I-19住居跡(Q-3・土器-4)	259
第123図	北端部遺物包含層(土器-16)	226	第155図	I-19住居跡(Q-3・土器-5)	260
第124図	北端部遺物包含層(土器-17)	227	第156図	I-19住居跡(Q-3・土器-6)	261
第125図	北端部遺物包含層(土器-18)	229	第157図	I-19住居跡(Q-3・土器-7)	262
第126図	北端部遺物包含層(土器-19)	230	第158図	I-19住居跡(Q-4・土器-8)	263
第127図	北端部遺物包含層(土器-20)	231	第159図	I-19住居跡(Q-4・土器-9)	264
第128図	北端部遺物包含層(土器-21)	232	第160図	I-19住居跡(Q-5・土器-10)	265
第129図	北端部遺物包含層(土器-22)	233	第161図	I-19住居跡(Q-6・土器-11)	266
第130図	北端部遺物包含層(土器-23)	234	第162図	I-19住居跡(Q-6・土器-12)	267
第131図	北端部遺物包含層(土器-24)	235	第163図	I-19住居跡(Q-7・土器-13)	268
第132図	北端部遺物包含層(土器-25)	236	第164図	I-19住居跡(Q-7・土器-14)	269

第165図	I-19住居跡(Q-7・土器-15) .. 270	第197図	I-19住居跡(石器-4)..... 303
第166図	I-19住居跡(Q-7・土器-16) .. 271	第198図	I-19住居跡(石器-5)..... 304
第167図	I-19住居跡(Q-7・土器-17) .. 272	第199図	I-19住居跡(石器-6)..... 305
第168図	I-19住居跡(Q-7・土器-18) .. 273	第200図	I-19住居跡(石器-7)..... 306
第169図	I-19住居跡(Q-8・土器-19) .. 274	第201図	I-19住居跡(石器-8)..... 307
第170図	I-19住居跡(Q-9・土器-20) .. 274	第202図	I-19住居跡(石器-9)..... 308
第171図	I-19住居跡(Q-10・土器-21) .. 275	第203図	I-19住居跡(石器-10)..... 309
第172図	I-19住居跡(Q-11・土器-22) .. 274	第204図	I-19住居跡(石器-11)..... 310
第173図	I-19住居跡(第4面・土器-23) .. 277	第205図	I-19住居跡(石器-12)..... 311
第174図	I-19住居跡(第4面・土器-24) .. 278	第206図	I-19住居跡(石器-13)..... 312
第175図	I-19住居跡(第4面・土器-25) .. 279	第207図	粗掘・表採(土器-1)..... 314
第176図	I-19住居跡(第4面・土器-26) .. 280	第208図	粗掘・表採(土器-2)..... 315
第177図	I-19住居跡(第4面・土器-27) .. 281	第209図	粗掘・表採(土器-3)..... 316
第178図	I-19住居跡(第4面・土器-28) .. 282	第210図	粗掘・表採(土器-4)..... 317
第179図	I-19住居跡(第4面・土器-29) .. 283	第211図	粗掘・表採(石器-1)..... 319
第180図	I-19住居跡(第4面・土器-30) .. 284	第212図	粗掘・表採(石器-2)..... 320
第181図	I-19住居跡(第4面・土器-31) .. 285	第213図	粗掘・表採(石器-3)..... 321
第182図	I-19住居跡(ベルト・土器-32) .. 286	第214図	粗掘・表採(石器-4)..... 322
第183図	I-19住居跡(ベルト・土器-33) .. 287	第215図	粗掘・表採(石器-5)..... 323
第184図	I-19住居跡(ベルト・土器-34) .. 288	第216図	粗掘・表採(石器-6)..... 324
第185図	I-19住居跡(ベルト・土器-35) .. 289	第217図	粗掘・表採(石器-7)..... 325
第186図	I-19住居跡(ベルト・土器-36) .. 290	第218図	粗掘・表採(石器-8)..... 326
第187図	I-19住居跡(埋土・土器-37) 291	第219図	粗掘・表採(石器-9)..... 327
第188図	I-19住居跡(埋土・土器-38) 292	第220図	B-09住居跡(遺構・遺物).... 330
第189図	I-19住居跡(埋土・土器-39) 293	第221図	B-09住居跡(遺物)..... 331
第190図	I-19住居跡(埋土・土器-40) 295	第222図	C-08土坑(遺構・遺物)..... 332
第191図	I-19住居跡(埋土・土器-41) 296	第223図	A-04周溝遺構..... 333
第192図	I-19住居跡(埋土・土器-42) 297	第224図	A-08周溝遺構(遺構・遺物) 335
第193図	I-19住居跡(土製品)..... 298	第225図	A-15周溝遺構(遺構・遺物) 336
第194図	I-19住居跡(石器-1)..... 300	第226図	B-03周溝遺構..... 337
第195図	I-19住居跡(石器-2)..... 301	第227図	B-05周溝遺構(遺構・遺物) 338
第196図	I-19住居跡(石器-3)..... 302	第228図	B-05周溝遺構(遺物)..... 339





## 写真図版目次

PL-1	調査後全景(空中写真)……………	513	PL-17 A	B-11土坑-2……………	529
PL-2 A	調査後全景(集石群)……………	514	B	B-10土坑-2……………	529
B	調査後全景(北端部土坑群)……………	514	C	B-10土坑-3 土層……………	529
PL-3 A	南端部土坑群……………	515	D	B-11土坑-3 土層……………	529
B	調査風景……………	515	E	B-15土坑……………	529
PL-4	調査風景……………	516	PL-18 A	B-22土坑-1……………	530
PL-5 A	基本層序(北端部基本層序)……………	517	B	B-22土坑-2……………	530
B	基本層序(南端部基本層序)……………	517	C	B-23土坑……………	530
PL-6	I-22住居跡(遺構)……………	518	PL-19 A	C-16土坑……………	531
PL-7 A	D-46住居跡……………	519	B	D-22土坑-1・2……………	531
B	E-22住居跡……………	519	C	C-22土坑……………	531
PL-8	G-16住居跡(遺構-1)……………	520	D	C-23土坑……………	531
PL-9 A	G-16住居跡(遺構-2)……………	521	PL-20 A	D-23土坑-1……………	532
B	G-24住居跡……………	521	B	D-23土坑-2……………	532
PL-10 A	H-41住居跡……………	522	C	E-14土坑……………	532
B	H-42住居跡……………	522	PL-21 A	E-15土坑-1……………	533
PL-11	I-22住居跡……………	523	B	E-15土坑-2……………	533
PL-12	I-19住居跡(遺構-1)……………	524	C	E-46土坑……………	533
PL-13	I-19住居跡(遺構-2)……………	525	PL-22 A	E-47土坑-1……………	534
PL-14 A	A-09土坑……………	526	B	E-47土坑-2……………	534
B	A-10土坑-1……………	526	C	F-45土坑-1……………	534
C	A-10土坑-2……………	526	PL-23 A	F-45土坑-2……………	535
PL-15 A	A-11土坑……………	527	B	F-46土坑-1……………	535
B	B-04土坑……………	527	C	F-46土坑-2……………	535
C	B-08土坑……………	527	PL-24 A	D-22土坑-3……………	536
D	A-06土坑……………	527	B	E-22土坑……………	536
PL-16 A	B-09土坑……………	528	C	F-44土坑-3……………	536
B	B-10土坑-1……………	528	D	F-46土坑-3……………	536
C	B-11土坑-1……………	528	PL-25 A	F-47土坑-2……………	537

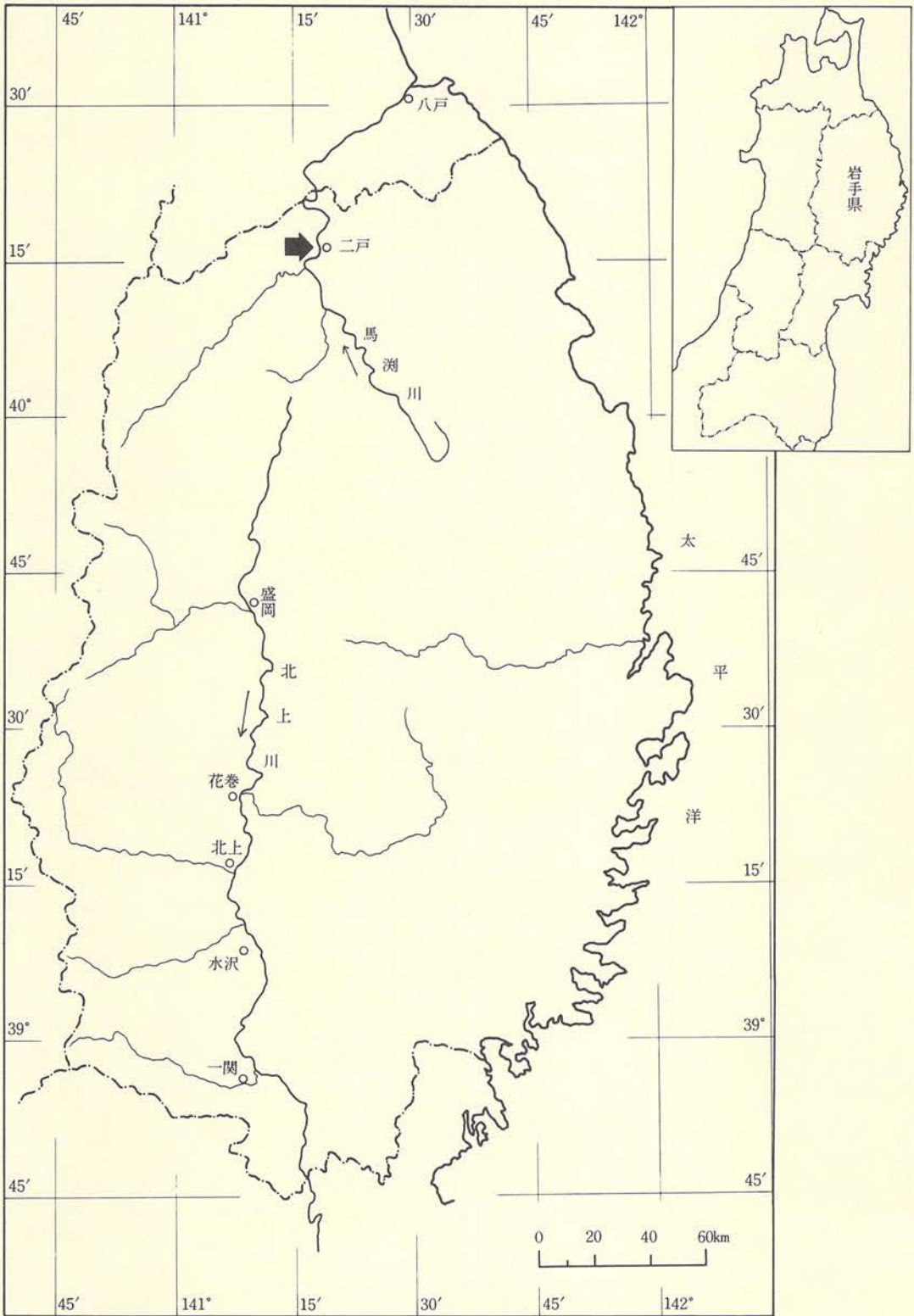


PL-25 B	F-47土坑-1	537	PL-35 C	I-19住居跡内土坑-1	547
C	F-47土坑-3	537	D	I-19住居跡内土坑-2	547
PL-26 A	F-48土坑	538	PL-36	I-19住居跡内土坑-3	548
B	G-16住居跡内土坑-1	538	PL-37	集石遺構	549
C	G-16住居跡内土坑-2	538	PL-38 A	B-09住居跡	550
PL-27 A	G-16住居跡内土坑-3	539	B	C-08土坑	550
B	G-23土坑	539	PL-39 A	A-08周溝遺構全景	551
C	G-46土坑-2	539	B	A-15周溝遺構全景	551
D	G-24土坑-1	539	PL-40 A	B-05周溝遺構全景	552
PL-28 A	G-44土坑	540	B	C-06周溝遺構全景	552
B	G-45土坑-1	540	PL-41 A	E-22周溝遺構全景	553
C	G-46土坑-1	540	B	I-19周溝遺構全景	553
PL-29 A	G-46土坑-4	541	PL-42 A	C-19周溝遺構全景	554
B	G-47土坑-1	541	B	D-24周溝遺構全景	554
C	G-47土坑-2	541	PL-43	D-16住居跡(遺構)	555
PL-30 A	G-47土坑-3	542	PL-44 A	A-12溝跡	556
B	H-39土坑	542	B	空堀	556
C	H-41土坑-1	542	PL-45	遺物(D-23住居跡·E-22住居跡)	557
PL-31 A	H-41土坑-2	543	PL-46	G-16住居跡(遺物-1)	558
B	H-41土坑-3	543	PL-47	G-16住居跡(遺物-2)	559
C	H-41土坑-4	543	PL-48	遺物 $\left(\begin{smallmatrix} G-16住居跡·H-41住居跡 \\ H-42住居跡 \end{smallmatrix}\right)$	560
PL-32 A	H-42土坑-1	544	PL-49	I-19住居跡(遺物-1)	561
B	H-42土坑-2	544	PL-50	遺物(I-19住居跡·I-22住居跡)	562
C	H-44土坑	544	PL-51	I-22住居跡(遺物-2)	563
PL-33 A	H-46土坑	545	PL-52	I-22住居跡(遺物-3)	564
B	H-47土坑-1	545	PL-53	I-22住居跡(遺物-4)	565
C	H-47土坑-2	545	PL-54	I-22住居跡(遺物-5)	566
PL-34 A	H-48土坑-1	546	PL-55	I-22住居跡(遺物-6)	567
B	H-48土坑-2	546	PL-56	I-22住居跡(遺物-7)	568
C	H-48土坑-3	546	PL-57	遺物 $\left(\begin{smallmatrix} A-06土坑·A-10土坑-2 \\ A-11土坑·B-04土坑 \end{smallmatrix}\right)$	569
PL-35 A	H-43土坑-2	547	PL-58	遺物 $\left(\begin{smallmatrix} B-09土坑·B-10土坑-2·B-11土坑-1 \\ B-11土坑-2·B-11土坑-3·C-22土坑 \end{smallmatrix}\right)$	570
B	I-43土坑	547	PL-59	遺物 $\left(\begin{smallmatrix} C-23土坑·D-23土坑-1 \\ E-15土坑 \end{smallmatrix}\right)$	571

PL-60	遺物 (D-23土坑-1·E-15土坑-1)	572	PL-92	I-19住居跡内遺物包含層(土器-3)	604
PL-61	遺物 $\left(\begin{array}{l} E-15土坑-1 \cdot E-46土坑 \\ E-47土坑-1 \cdot E-47土坑-2 \end{array}\right)$	573	PL-93	I-19住居跡内遺物包含層(土器-4)	605
PL-62	遺物 (F-45土坑-1·F-45土坑-2)	574	PL-94	I-19住居跡内遺物包含層(土器-5)	606
PL-63	遺物 $\left(\begin{array}{l} F-45土坑-3 \cdot F-46土坑-1 \cdot F-47土坑-1 \\ F-47土坑-2 \cdot F-48土坑 \end{array}\right)$	575	PL-94	I-19住居跡内遺物包含層(土器-6)	607
PL-64	遺物 $\left(\begin{array}{l} F-48土坑 \cdot G-23土坑 \\ G-45土坑 \cdot G-46土坑-1 \end{array}\right)$	576	PL-96	I-19住居跡内遺物包含層(土器-7)	608
PL-65	遺物 $\left(\begin{array}{l} G-44土坑 \cdot G-46土坑-2 \\ G-46土坑-3 \end{array}\right)$	577	PL-97	I-19住居跡内遺物包含層(土器-8)	609
PL-66	遺物 $\left(\begin{array}{l} G-46土坑-4 \cdot G-47土坑-1 \\ G-47土坑-2 \cdot G-47土坑-3 \end{array}\right)$	578	PL-98	I-19住居跡内遺物包含層(土器-9)	610
PL-67	遺物 (H-39土坑·H-41土坑-1)	579	PL-99	I-19住居跡内遺物包含層(土器-10)	611
PL-68	遺物 $\left(\begin{array}{l} H-41土坑-2 \cdot H-41土坑-3 \\ H-41土坑-4 \cdot H-42土坑-2 \end{array}\right)$	580	PL-100	I-19住居跡内遺物包含層(土器-11)	612
PL-69	遺物 $\left(\begin{array}{l} H-42土坑-2 \cdot H-44土坑 \cdot H-46土坑 \\ H-47土坑-2 \cdot I-19住居跡内土坑-1 \end{array}\right)$	581	PL-101	I-19住居跡内遺物包含層(土器-12)	613
PL-70	遺物 $\left(\begin{array}{l} I-19住居跡内土坑-1 \cdot I-19住居跡内土坑-3 \\ I-43土坑 \cdot H-48土坑-3 \cdot 集石群 \end{array}\right)$	582	PL-102	I-19住居跡内遺物包含層(土器-13)	614
PL-71	北端部遺物包含層(土器-1)	583	PL-103	I-19住居跡内遺物包含層(土器-14)	615
PL-72	北端部遺物包含層(土器-2)	584	PL-104	I-19住居跡内遺物包含層(土器-15)	616
PL-73	北端部遺物包含層(土器-3)	585	PL-105	I-19住居跡内遺物包含層(土器-16)	617
PL-74	北端部遺物包含層(土器-4)	586	PL-106	I-19住居跡内遺物包含層(土器-17)	618
PL-75	北端部遺物包含層(土器-5)	587	PL-107	I-19住居跡内遺物包含層(土器-18)	619
PL-76	北端部遺物包含層(土器-6)	588	PL-108	I-19住居跡内遺物包含層(土器-19)	620
PL-77	北端部遺物包含層(土器-7)	589	PL-109	I-19住居跡内遺物包含層(土器-20)	621
PL-78	北端部遺物包含層(土器-8)	590	PL-110	I-19住居跡内遺物包含層(土器-21)	622
PL-79	北端部遺物包含層(土器-9)	591	PL-111	I-19住居跡内遺物包含層(土器-22)	623
PL-80	北端部遺物包含層(土器-10)	592	PL-112	I-19住居跡内遺物包含層(土器-23)	624
PL-81	北端部遺物包含層(土器-11)	593	PL-113	I-19住居跡内遺物包含層(土器-24)	525
PL-82	北端部遺物包含層(土器-12)	594	PL-114	I-19住居跡内遺物包含層(土器-25)	626
PL-83	北端部遺物包含層(土器-13)	595	PL-115	I-19住居跡内遺物包含層(土器-26)	627
PL-84	北端部遺物包含層(土器-14)	596	PL-116	I-19住居跡内遺物包含層(土器-27)	628
PL-85	北端部遺物包含層(土器-15)	597	PL-117	I-19住居跡内遺物包含層(土器-28)	629
PL-86	北端部遺物包含層(土器-16)	598	PL-118	I-19住居跡内遺物包含層(土器-29)	630
PL-87	北端部遺物包含層(土器-17)	599	PL-119	I-19住居跡内遺物包含層(土器-30)	631
PL-88	北端部遺物包含層(土器-18)	600	PL-120	I-19住居跡内遺物包含層・粗掘……	632
PL-89	北端部遺物包含層(土器-19)	601	PL-121	粗掘・表採(土器・その他)……	633
PL-90	北端部遺物包含層(土器-20) .. 602 I-19住居跡内遺物包含層(土器-1)	602	PL-122	石器(住居跡)……………	634
PL-91	I-19住居跡内遺物包含層(土器-2)	603	PL-123	石器(住居跡)……………	635



PL-124	石器(住居跡)·····	636	PL-136	石器(包含層)·····	648
PL-125	石器(住居跡)·····	637	PL-137	石器(住居跡·粗掘)·····	649
PL-126	石器(住居跡·土坑)·····	638	PL-138	石器(粗掘)·····	650
PL-127	石器(住居跡·土坑·集石群)··	639	PL-139	石器(粗掘·住居跡)·····	651
PL-128	石器(集石群·包含層)·····	640	PL-140	石器(土坑·周溝·溝跡)····	652
PL-129	石器(包含層)·····	641	PL-141	石器(溝跡)·····	653
PL-130	石器(包含層)·····	642	PL-142	石器(溝跡)·····	654
PL-131	石器(包含層)·····	643	PL-143	土器(住居跡·土坑·周溝)····	655
PL-132	石器(包含層)·····	644	PL-144	土器·····	656
PL-133	石器(包含層)·····	645	PL-145	土器·····	657
PL-134	石器(包含層)·····	646	PL-146	土器·····	658
PL-135	石器(包含層)·····	647	PL-147	土器·陶磁器·古錢·····	659



第1図 岩手県全図



## I. 調査に至る経過

二戸バイパスの建設は、国道4号線工事の一環であり、建設省東北地方建設局岩手工事事務所が事業主体である。

バイパス工事は昭和48年から工事施行となり、その時点で埋蔵文化財の取り扱いが県教育委員会事務局文化課と岩手工事事務所との間で開始されている。文化課では早速、48年49年に分け遺跡分布調査を実施し、全路線内13遺跡が発掘調査の対象となった。

発掘調査は昭和49年度4月から文化課が担当し路線中央部にある上村遺跡から開始され、順次北に向って進められた。

昭和50年度長瀬地区発掘調査の経過の中で、火山灰を間層として縄文時代早期から平安時代までの文化層の堆積が約1kmに亘って続いていることが推定されたため、その確認をすべくこの区間に30mメッシュのトレンチを入れ試掘調査を行った。その結果ほぼ全面に遺構、遺物の検出が見られたが特に北端の長瀬D遺跡には土師器伴出の住居跡と、縄文時代住居跡、土坑類が集中していることがわかった。この結果をもとに文化課では文化庁の指導のもとに岩手工事事務所と遺跡保存を含めてその取り扱いについて検討を重ねた。結局、長瀬D遺跡の第一面については記録保存を前提とした発掘調査を行い、第2面以下は現状保存措置とすることにした。

発掘調査は昭和51年度までは文化課が担当し、52年度以降は当埋蔵文化財センターが継続し行うことになった。

昭和52年度は長瀬B、C、D遺跡と上田面遺跡の側道分を調査した。ただし長瀬C遺跡の一部は用地買収未解決のため未調査となった。

昭和53年度は上田面遺跡を継続調査した。中曽根遺跡は二戸市教育委員会で調査した。さらに12月には54年度調査予定三遺跡の範囲確認調査を、文化課、当埋蔵文化財センター、岩手工事事務所の三者で行い、その結果、調査対象面積が増加することが判明し、面積の修正を行った。

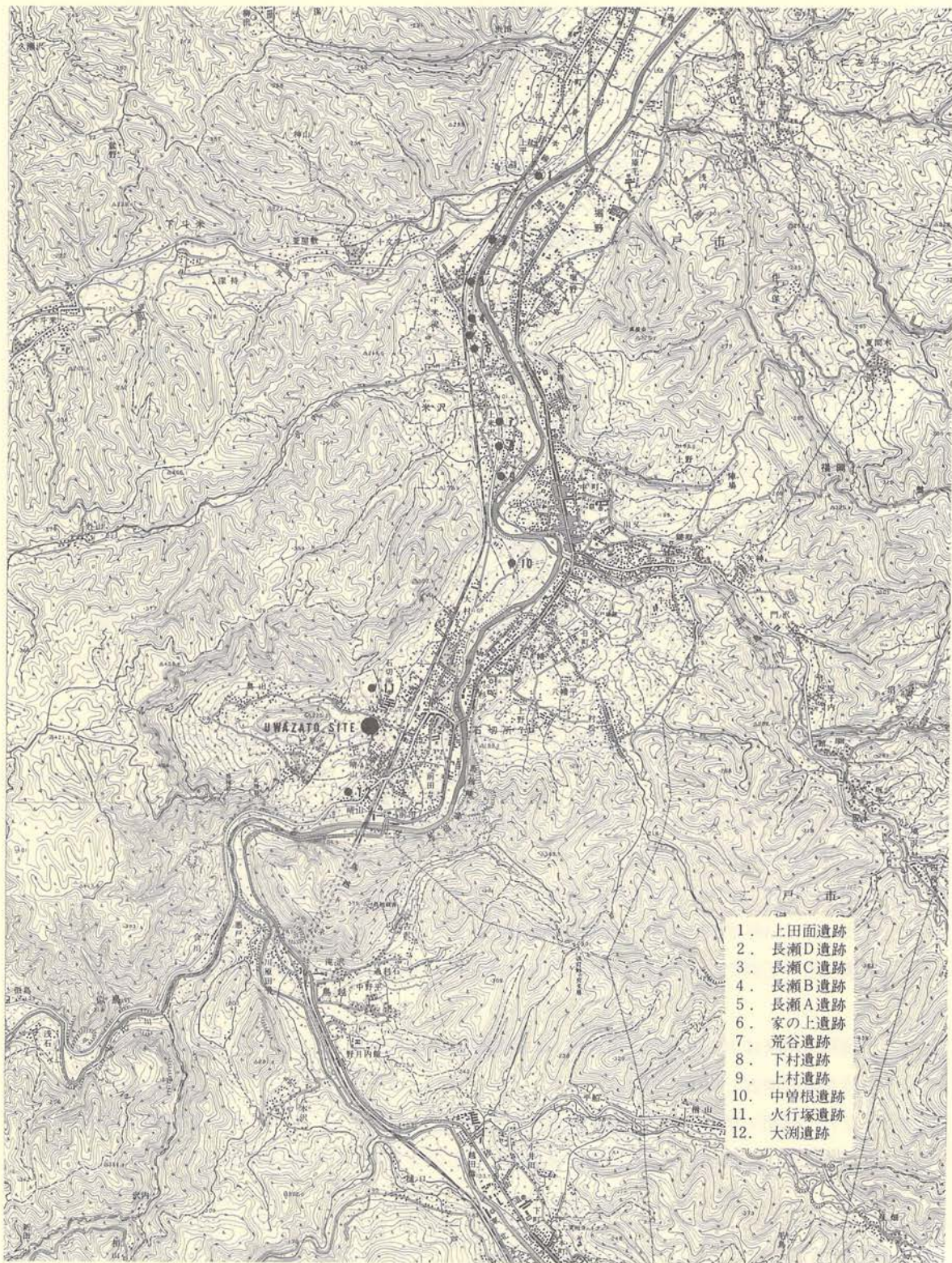
昭和54年度は大淵遺跡、上里遺跡、火行塚遺跡の調査を行った。二戸市教育委員会は中曽根遺跡を継続調査し終了している。

なお、昭和56年度に長瀬C遺跡の調査が終了し、これによってバイパス関連遺跡発掘調査は全て終了し、これらと関係する報告書は既刊のものを含めて57年度内に完了のはこびとなっている。

(第1図・第2図)

(島 千秋)





第2図 二戸バイパス関連遺跡の位置図

— 戸 ● 陸奥福岡  
 500m 0 500 1,000 1,500m



## II. 調査の方法

### 1. 野外調査

#### 〔調査区の設定と遺構の命名〕

(第3図・第4図)

本遺跡に対する調査範囲は道路中心杭「No74～No86」までの全長220mの距離があり、路線巾は平均38mを測り、総面積は約10,000m<sup>2</sup>である。この間の路線がほぼ直線であることから、道路中心杭を直線で結びグリッドの基線として利用した。軸線の呼称は、東西は東よりアルファベットでA～Jまで命名し、南北は北よりアラビア数字で1～53までとし、グリッドの呼称名は南東の交点名を呼称し、A-1・B-1というようにした。グリッド軸線の間隔は東西・南北ともに5mとし、調査区画の最少単位は25m<sup>2</sup>である。これは、全面調査を前提として、調査の計画を立案したことによる。遺構名の呼称はグリッド名と遺構の種別を組み合わせ、A-1住居跡・A-1土坑・A-1溝跡・A-1周溝遺構と命名し、所在する位置と遺構の種別が同時に判るようにした。1グリッド内に同種の遺構が複数ある場合は、遺構名の次にアラビア数字を加えてA-1住居跡-1・A-1住居跡-2というように命名して区別した。

なお、遺跡の位置や遺跡内での遺構の位置を明確にするため、遺跡内に2ヶ所の基点を設置し、公共座標値の測定を行なった。「基点-1」は道路中心杭「No84」の東方11m（グリッドでC-12の交点の東方1m）に、「基点-2」は道路中心杭「No81」の地点である。測定の結果、平面直角座標第X系による座標値は次のとおりである。（実際の測量はアジア航測KKに依頼）

基-1      X=+28,462.88m、Y=38,405.75m、H=141.741m

基-2      X=+28,402.74m、Y=38,396.71m、H=142.218m

なお、道路中軸線を北方に向って視準すると、磁北に対して約10度東偏している。


#### 〔粗掘りと遺構検出〕

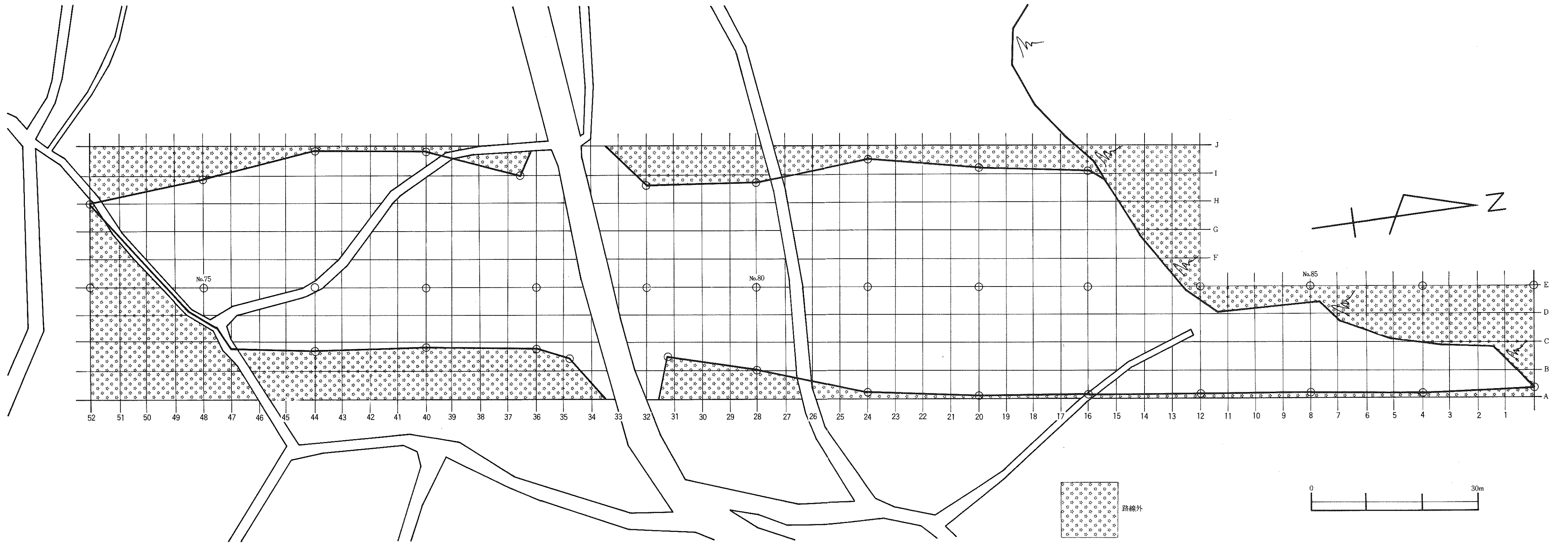
本遺跡の調査予定面積は10,000m<sup>2</sup>であり、そのほぼ全範囲がかつては畑地として利用されていたが、調査時には雑草や小木が繁茂した荒撫地であったため、刈り払いや雑物を除去する必要があった。したがって、調査前における調査範囲内での表探遺物はあまり多くなかった。しかし、調査区域外の畑地部分では多量の遺物が散在していたことから、大規模な遺跡であろうことが予想された。以上のような調査前の状況から、遺跡の範囲や性格、遺構数等を早急に把握する必要があるものと考え、粗掘りは重機を利用することで計画され、そのように実施したが、重





第3図 遺跡付近の地形と調査範囲

 遺跡の調査範囲を示す



第4図 上里遺跡グリッド配置図



機を稼働させる前に、人手によってテストトレンチを設定し、土層の確認や遺構検出面の確認を行なった。テストトレンチの結果、表土の層厚が一様ではなく、場所場所によって差のあることが判明し、実際の層厚では20cm～70cm位の巾があった。このようなことから重機で除去したのは表土層で、極力そこで止めることに努めた。なお、I-22住居跡・I-19住居跡の範囲では、粗掘り段階に多量の遺物が出土したことから、何んらかの遺構の存在が推定された。遺構検出は重機で粗掘りを行った後作業員によって行われた。遺構が検出されたのは基本層序第III層の暗褐色を呈する浮石混じりの浮石層（中振浮石相当であろう）の上面であり、時代別による検出面の違いは確認されていない。実際には違いがあるものと推定されるが、基本層序第II層とした白色浮石混じりの黒色土（十和田b降下火山灰の可能性ある）が層厚10cm位と薄いため識別できなかったものである。最終的には粗掘りの可能な部分はほぼ全面に亘って粗掘りを行い、遺構検出を行った。粗掘り中にも遺物が出土したが、表土中の遺物であることから、原位置を保っていないものと判断して、地点と層位を確認の上、地点ごとに一括して取りあげた。遺構検出時の遺物で、遺構に伴う遺物は遺構埋土最上層として取り上げ、その他の遺物は地点と層位を確認の上、地点ごとに一括して取り上げた。完形土器や特殊遺物の場合は写真撮影や実測による記録処置を講じた場合もある。

#### 〔遺構精査〕

遺構の掘り上げは、住居跡は4分法・土坑は2分法を原則としたが、重複がある場合等には必要に応じて随時土層観察用の畦を残した。溝跡や堀跡は適宜土層観察用の畦を残した。柱穴状の小土坑についても、所謂「貯蔵穴様土坑」と同様に2分法を原則とした。実際の発掘にあたっては、できるだけ層位ごとの分層発掘に努力したが、埋土上位での出土遺物は出土層位を確認の上一括して取り上げた。しかし、完形土器や大型破片・特殊遺物等は床面が検出されるまでそのまま残置し、写真撮影や図面の作成等の記録処置を講じた。床面直上や床上10cm以内での出土遺物は写真撮影や実測図等に記録した。

#### 〔記録〕

実測図は平面図・土層図ともに縮尺 $\frac{1}{50}$ を原則としたが、状況によっては $\frac{1}{20}$ や平板測量を併用した場合もある。実測作業は作業員の中から2人1組で6組の実測班を編成して行い、実測班に対する指示や指導および実測図の点検は調査員が行った。遺構の中で溝跡や堀跡は平板測量を行ったが、他の住居跡や土坑・周溝遺構・集石遺構等はグリッド軸に沿って地面に1m×1mの水糸を張って実測した。

埋土土層の細分や注記は調査員が行い、土層名は、基本層序はローマ数字で上位層よりI層

・II層・III層とし、質的に同じでさらに細分される場合はアルファベットの小文字を付してIII a層・III b層とした。遺構の埋土はアラビア数字で上位層より1層・2層・3層とし、さらに細分される場合は基本層序と同じようにアルファベットの小文字を付した。なお、土層の色調は新版標準土色帳（農林省農林水産技術会議事務局監修）にしたがった。

写真撮影は6 cm×7 cm版1台（モノクローム）と35mm版2台（モノクローム・カラリバーサル）を一組にして使用し、状況に応じて適宜使いわけた。実際の撮影は埋土土層・遺構全景・出土遺物・炉跡・調査前遺跡全景等を中心に行った。なお、検出遺構の精査がほぼ終了した時点で、遺跡全景を空中から撮影している。

## 2. 室内整理

出土遺物の洗浄は、野外調査中に雨天日等を利用して現地ですべて終了したが、ラベル記入は出土遺物の量も多く、遺物の分類ができかねたので、石器の一部に記入しただけでほとんど手付かずで室内作業に入った。したがって、室内での整理作業は遺物を出土した遺構ごとに分類仕分けすることから始め、土器は接合・復元作業と併行してラベル記入を行った。石器についてはフレークや自然礫とおもわれるものも含めて全てに記入した。記入した項目は遺跡略号「UZ」・調査年次「79」と出土したグリッド名、層位である。復元された土器は破片の不足した部分を石膏で補強した後実測作業に入った。土器以外の土偶等の土製品や石器・石製品等も実測した。遺物の実測は実物大で作図したが、土器や石棒・砥石の大型のものは $\frac{1}{2}$ に縮小してトレースした。石器や土製品等の小型のものは実物大でトレースした。実測不可能な遺物の中で報告を必要とする土器は拓影図を作製した。拓影図の中で縄文時代早期の土器片と古代の須恵器の破片については表裏両面の拓影を作製して本報告書に掲載した。遺構に関する図面の点検や修正は現地で終了していたが、再度点検し誤りがないかどうかを確認の上、トレースをして本報告書に載せた。以上の作業の中でラベル記入・接合復元・実測・トレース等は調査員の指示・指導のもとに室内整理作業員がそれぞれを分担して行った。また、遺物関係のトレースは一部を業者に委託した。

本報告書の全体的な凡例は次のとおりである。

### [遺構関係]

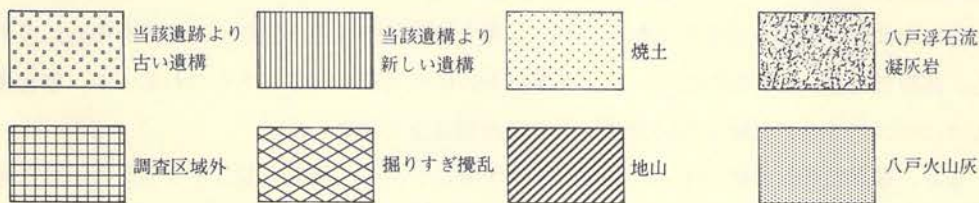
遺構配置図は現地で作製した $\frac{1}{50}$ の平面図を $\frac{1}{100}$ に縮小して作製し、本報告書では縮尺 $\frac{1}{200}$ で袋詰図版とした。遺構個々の平面図や土層図は規模によって $\frac{1}{40}$ ・ $\frac{1}{60}$ となるように心掛けたが、溝跡や空堀跡は不定縮尺とし、各遺構ごとにスケールを付してある。それらの遺構図面の中で、礫・



土器・柱穴状土坑はアルファベットで略記した。また、焼土・地山・掘りすぎや攪乱・調査区域外・重複遺構の新旧関係等はスクリーントーンで次のように図示した。

S——礫 P<sub>0</sub>——土器 P<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>・P<sub>3</sub>……P<sub>n</sub>——柱穴と柱穴状土坑

凡例-1



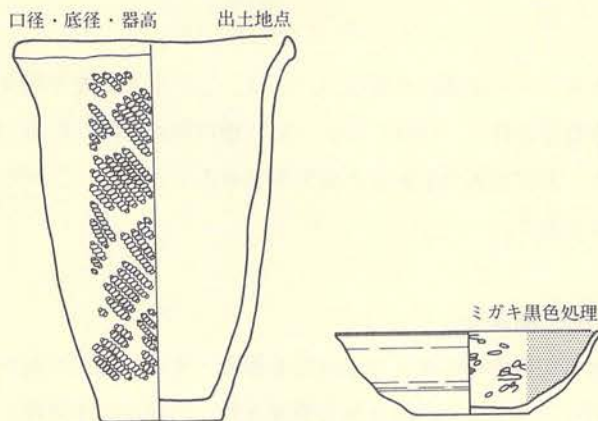
[遺物関係]

遺物には土器・土製品・石製品等が含まれている。土器については実測可能な個体は全て実測するように努力したが、量が多すぎるため、口縁部の残存する個体で全体の(口縁部の)1/2位残存するものまでは実測をした。しかし、底部のみを残存する個体や底部に体部下位を含む残存状況を示す個体については若干実測できかねたので報告書から割愛した。しかし、出土量が極端に少い土器については、小破片でも出来るだけ実測図か拓影を掲載した。拓影を掲載した土器の中で、縄文早期の破片や須恵器片については表裏両面を採拓し掲載した。その他、土製品・石器・石製品はすべて実測して掲載した。実測図は実物大で作製したが、本報告書には次のように縮小して掲載した。縄文土器は1/4を主にして小型土器のみ1/2、拓影や土偶・土製品はすべて1/2で統一、剝片石器は1/2で統一、礫器は1/3で統一、礫器の中で石皿・砥石・石棒の一部は1/4と1/3の併用貨幣は実大となるようにしたが、それぞれの図版の中に縮尺を明記してある。

以上のような実測図や拓影図は出土した遺構の図版と同じページに掲載してある。

なお、出土土器の計測一覧表を作成しなかったため、法量や出土地点及び、土師器に対する調整技法は次の凡例-2のように表現している。

凡例-2





### 〔写真関係〕

遺構や遺物出土状況の写真は野外調査中に現地撮影したフィルムの中から選択して使用し、一部の遺構（土坑関係）に撮影漏れがあったものの、報告したほぼ全遺構について掲載した。遺物写真は当埋文センターの写真担当員が撮影したものを使用した。実測図や拓影として掲載したものは全て収録するように努力したが、縄文土器は口縁部の残存する個体を中心に選択した。拓影で掲載した土器片については遺構出土の中から若干割愛したものもあるが、包含層のものについては全て収録した。土製品や石器の類は全て掲載した。

なお、写真の縮尺は統一すると紙数が不足することから、縄文土器は不定とした。その他土器片は $\frac{1}{2}$ 、剥片石器が $\frac{1}{2}$ 、礫器類は $\frac{1}{4}$ となるように心掛けたが、正確な縮尺率ではないことをお断りしておく。

### 〔執筆分担〕

本遺跡に対する発掘調査での担当者は筆者であったが、調査途中から、遠藤勝博と高橋義介の両名が合流したが、3名が同時に調査したことはなかった。その後8月からは筆者が他遺跡の調査を担当することになったため、遠藤に調査を引き継いだ。ところが、9月から筆者がまた本遺跡の調査に戻ったために、調査担当期間の最も長い筆者が、整理・報告を担当することになったものである。しかし、筆者だけでは不明な部分もあったので、それぞれの調査担当者との協議をして分担をきめた。具体的な執筆分担は巻頭例言に記したが、各文末には執筆者を記し、文責を明らかにした。

（高橋与右エ門）

## III. 地形と周囲の環境

### 1. 地 形

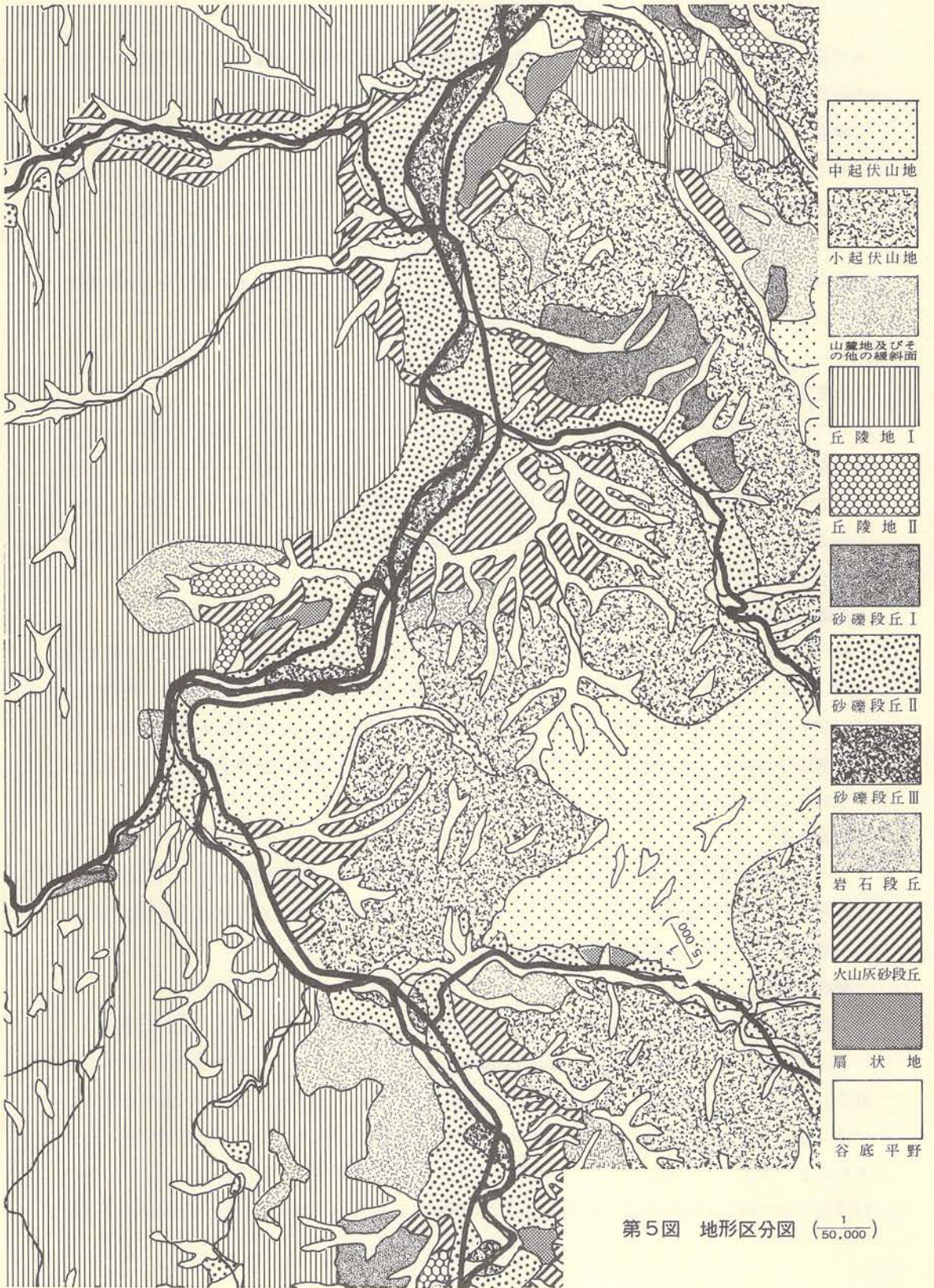
本遺跡の所在する二戸市地域の地形については、二戸市が調査を担当した中曽根II遺跡の調査報告書<sup>11</sup>（二戸市教育委員会 1981）の中の第II章自然的環境（松山 力 P<sub>11</sub>～P<sub>30</sub>）に詳しく記述されているが、本報告書でも先学の成果を参考にしながら、二戸市地域での地形や地質について簡単に触れておく。

#### (1) 二戸市地域の地形面区分

（第5図）

二戸市地域は岩手郡葛巻町の多々良山付近を源流とする馬淵川が南から北に向って貫流しており、この馬淵川によって多くの段丘面が形成され、二戸市の市街地もこれらの段丘面（特に





第5図 地形区分図 (1/50,000)



米沢段丘)に発達している。各段丘面と段丘面の間は比較的明瞭な崖線で限られる場合が多く、各段丘面とも良好な残存状態を示し安定した地形面を形成している。馬淵川流域の段丘面区分の調査研究は大池や中川らの業績(大池・中川他 1966)に負う所が大きく、その報告の中で二戸市地域には仁左平・福岡・米沢・堀野の各段丘に区分されることを記述している。その後、松山は前記の報告の中で大池ら(1966)の米沢段丘は高位の部分と低位の部分に二分されるとして、前者は中町段丘(新称)と命名し、後者は大池らの堀野段丘に包括している。ここでは大池らの区分を基本として松山の論考を加味しながら、各段丘面の概略を高位面から順次紹介していくことにする。

#### [仁左平段丘]

この段丘は仁佐平付近や馬淵川の東岸川又地区の北東部付近に分布し、標高は140m~220m位である。やや起伏があり比較的強い傾斜をもっている。基盤層の上にチャートや頁岩等の中礫を主とする砂礫がのり、その上位には層厚2m位の高館火山灰と、さらにその上位1.0m位を八戸火山灰が覆っている。低位の福岡段丘とは30m前後の比高があり、低位面とは比較的明瞭な崖線で限られている。

#### [福岡段丘]

この段丘面は、金田一・川又・五日町・米沢・上里等の他海上川や十文字川流域に比較的広範囲に分布している。標高は110m~140mで低位面との比高は15m~20mを測り、明瞭な崖線で限られている。また、本段丘は八戸浮石流凝灰岩に相当する火山灰流凝灰岩の堆積層によって構成されるシラス台地としての性格をもっている。火山灰流凝灰岩の上位には八戸火山灰やそれより上位の浮石や火山灰が覆っている。

#### [長嶺段丘]

この段丘は長嶺地区の中で高森山(325.2m)の西麓に張りついた標高110m~120mの小規模な段丘で、松山(前掲 1981)によって命名報告されている。低位の米沢段丘高位面(松山の中町段丘)とは4m~6mの段丘崖で限られている。

#### [米沢段丘]

この段丘は馬淵川の両岸に広く分布する段丘で、二戸市の市街地の多くはこの面に発達している。河床面との比高は約25mで、標高100m~110mのほぼ水平に近い平坦面を呈している。円磨された中礫によって構成され、その上位に南部浮石とそれより上位の浮石や火山灰をのせている。しかし、松山(1981)は、この面は標高110m前後の高位面と100m位の低位面に細分されるとした上で、前者を中町段丘(新称)そして後者を堀野段丘に包括している。松山が中町段丘としたのは市街中心部の中町付近の面を標式とし、<sup>うきたい</sup>上平より北方の馬淵川西岸と市街地

の長嶺～五日町付近の馬淵川東岸に分布している。

#### 〔堀野段丘〕

堀野段丘という名称は大池ら（1966）によって命名され、その特性は南部浮石をのせないことであると報告されている。所が、松山（前掲1981）は堀野遺跡の発掘調査（草間1965）で南部浮石の堆積が確認されているとした上で、このことは大池ら（1966）の米沢段丘低位面（米沢付近）と同じ層相を呈すると判断し、大池ら（1966）の堀野段丘と米沢段丘低位面を包括して、松山が新たに堀野段丘と命名している。しかし、大池ら（1966）の堀野段丘と米沢段丘では5m前後の比高があり、位置によっては明瞭な崖線が観察される部分もある。馬淵川との比高は15m位で明瞭な崖線で限られている。分布範囲は、大池ら（1966）は金田一や堀野付近を標式とし馬淵川両岸に細長く分布するとしているが、松山（1981）は馬淵川西岸と金田一や堀野付近に分布するとしている。

#### 〔中曽根段丘〕

この段丘は白鳥川河口付近の馬淵川東岸と、その対岸の中曽根I遺跡付近にみられる小規模な段丘である。標高は96m～100m位で高位の堀野段丘とは2m～3mの比高がある。砂礫層と中振浮石を含む黒色土の堆積が観察されるが、南部浮石を欠いている。

以上、大池の論考を中心にして、松山の区分と対比させながら二戸市地域の段丘面区分について紹介したが、これらの段丘面の中で洪積段丘といえるのは仁佐平段丘（中位）と福岡段丘（低位）だけで、他はいずれも沖積段丘であるという。馬淵川と福岡段丘との比高は約50mもの大差があり、馬淵川の浸蝕したその営力の強大さというものを感じさせられる。

このような地形面の中で、二戸バイパス路線に直接関わりのある段丘は福岡段丘と大池らの米沢段丘であり、関連する遺跡は両段丘ともに立地している。例えば、福岡段丘には上里と火行塚の各遺跡が立地する以外は、いずれも米沢段丘に立地している。（高橋与右エ門）

#### 引用文献

- (1) 松山 力 1981 「第2章 自然的環境」『中曽根II遺跡発掘調査報告書』二戸市教育委員会
- (2) 大池昭二・中川久夫・七崎 修 1966「馬淵川中・下流沿岸の段丘と火山灰」『第四紀研究 vol 1 No. 1』  
松山 力・米倉伸之
- (3) 草間俊一 1965『岩手県福岡町堀野遺跡』福岡町教育委員会（現二戸市教育委員会）

## 2) 遺跡群の環境

（第2図）

岩手県の西には奥羽山脈が、東には北上山脈がそれぞれ南北に連なっており、県の南半ではその二つの山脈の間を北上川が南流し、広い谷底平野を形成している。これに対して、県の北半では馬淵川が二つの山脈の間を北流しているものの、谷底平野の発達が不良で、河口の八戸



市に至るまで、狭い河岸段丘と深い浸蝕谷が続いている。そのような状況の中で延長142kmの馬淵川の河口から約40km上流の比較的広い数段の河岸段丘上に立地し、県北内陸部最大の市街地を形成しているのが二戸市である。二戸市のある低地に向って裾野を引く山々の中にあつては、東方の折爪岳（標高852m）が最も目立つ山となっている。標高で優る南方の西岳（標高1,018m）・稲庭岳（標高1,078m）、さらに西方の十和田湖に続く奥羽の山々も、20km以上の傾斜面を延ばしてはいるものの、間近に迫る200m～300mの丘陵の背後に隠れているため、その存在を感ずることは極めて難しい。

二戸市の一つ南の一戸町を過ぎた馬淵川は、鳥越の峡谷で安比川を合流させて東へ屈折し、馬仙峡の崖裾を洗って北へ流れを変え、白鳥川・沢内川・十文字川等の小河川を合わせつつ、大きく蛇行しながら北流を続け、金田一の東方で北西に屈折して間もなく、再び峡谷に入る。この間、直線で凡そ8kmの流路の両側に四つの段丘面が形成（大池ら1966）されている。段丘としては低位から高位へ、堀野段丘・米沢段丘・福岡段丘・仁左平段丘と呼ばれているものがある。（第5図地形面区分図を参照のこと、砂礫段丘Ⅰ＝仁左平段丘、火山灰砂台地＝福岡段丘、砂礫段丘Ⅱ＝米沢段丘、砂礫段丘Ⅲ＝堀野段丘）。馬淵川の両岸に接して最も広く分布するのは米沢段丘面である。また、北流する馬淵川が西よりに蛇行する部分では右岸に、東よりに蛇行する部分では左岸に、最下位の段丘である堀野段丘が発達している。米沢段丘は他の面に比較して広いとはいえ、絶対的には狭い河岸段丘の僅かな平地を、人間は各時代を通じて活用せざるをえず、結果的にいわゆる複合遺跡が形成され易い。二戸バイパスに関連して次の14遺跡が調査されたが、その大部分は複合遺跡であった。

大淵遺跡（縄文・弥生・古代・中世・近世） 上里遺跡（縄文・古代・中世）

火行塚遺跡（縄文・弥生・古代） 中曽根Ⅰ・Ⅱ遺跡（縄文・古代）

上村遺跡（縄文） 下村A遺跡（時期不明） 下村B遺跡（縄文・中世）

荒谷A遺跡（縄文・古代） 家の上遺跡（縄文・古代・中世）

長瀬A・B遺跡（縄文・古代） 長瀬C・D遺跡（縄文・古代・中世）

上田面遺跡（縄文・古代）

なお、石切所地内の上里・火行塚の二遺跡が福岡段丘上に立地しているが、他はすべて米沢段丘面上に営まれている。ただし、中曽根遺跡付近の区分については若干の疑問が提出されている（関 1978）。

各段丘面上の堆積物としては、十和田湖火山を起源とする火山噴出物が大部分を占めており、それらの層序や噴出年代についての地質学的研究の成果は、発掘調査の際の極めて有効な手懸りとなっている。調査段階で担当者が良く観察された土層の基本的な層序は次のようになる。

Ⅰ、表土層 火山灰起源のためか、極めて軽い。いわゆる「くろぼく」である。

- I'、「十和田 a 降下火山灰層」 灰白色から淡黄褐色の極めて微粒の火山灰層。広範囲に連続堆積していることは余りないようで、ロクロ使用以前の土師器を出土する竪穴住居跡の埋土中に、レンズ状に弓なりに堆積している点が極めて印象的である。ロクロ使用土師器を出土する竪穴住居跡の場合は、単一の層を形成することなく、埋土中に塊状をなして混入する。堀野遺跡の調査（草間1965）で報告され、後に地質学の方から十和田 a 降下火山灰とされたのは、この層である。
- II、黒色砂質土層、黒色砂層と呼んでも良い程、真黒で少しザラザラした感じの土である。良く観察すると、直径2 mm～3 mmの断面白色の小石が含まれている。これは発泡の良くない軽石である。
- III、「中振石層」、上部は黒褐色で中部では黄褐色、下部ではしばしば淡黄色の全く粘性のない土層で、地元では「あわずな」と呼んでいる。浮石とはいうものの、二戸市付近では正しく砂に近い細粒状をなしている。
- IV、黒色砂質シルト、旧表土とおもわれる土で、極めて黒くまた少し粘性があり、中に下位のV層起源の浮石を含んでいる。
- V、「南部浮石層」、湿っている時は黄橙色、乾燥すると黄白色を呈する粗粒の浮石で、空隙部が目立つ層である。地元では「ごろた」と呼んでいる。
- VI、「八戸火山灰層ないし八戸浮石層」、白色ないし灰白色の火山灰層で、米沢段丘の基盤をなしている様子が、馬淵川の崖で良く観察される。長瀬B遺跡南端でのボーリングの結果では、地表下1.5 mから8.5 m位まで7 m近く堆積している。

I'層・III層・V層・VI層の噴出年代についての地質学の成果は、次のとおりである。（大池1972）、I'層 1000年B. P.、III層 4000年B. P.、V層 8600年B. P.、VI層 13000年B. P. これらの層序と遺構・遺物との関係は次のようである。

I'層は前述のとおり、古代の遺構と深く関わっており、この地域での竪穴住居跡の検出の目安となることが古くから指摘されている（草間 1965）。II層は古代の地表であったとおもわれるが、埋土との区別がつきにくいいため、掘り込み面を確認することは極めて難しい。III層は、古代の住居跡に限らず、縄文中期以降の住居跡等の壁面として一般的に観察される土層であり、この土層中において大部分の遺構の輪郭が明瞭に把握される。ただし、上部の暗色部以外では遺物を包含しないようである。IV層は上部が縄文早期後半から前期初頭の遺構や遺物を包含し、下部では早期前半の遺物を含んでいる（高橋 1979）。V層には全く遺物を包含しないが古代の竪穴住居跡では大部分、より古い住居跡でもしばしば床面としているのはこの層である。VI層上面には縄文早期の竪穴住居跡が存在し、貝殻文土器（寺の沢式併行）や遺構が包蔵されて



いることが、長瀬B遺跡（四井 1982）の調査で確認されている。また、縄文時代の「陥し穴状遺構」の底部は、VI層中まで掘り下げられている。

段丘面上には前述の遺跡以外にも多数の遺跡がある。中でも堀野遺跡は古代集落として良く知られており、復元家屋が1棟展示されている。なお、同遺跡の北東2kmの小高い丘陵（仁左平段丘）上の地名「仁左平」は、日本後紀弘仁2年の文屋綿麻呂の記事にある「爾薩体」と無縁ではあるまい。さらに、堀野遺跡および「仁左平」と同じ右岸に、国指定史跡の九戸城跡も立地する。（遠藤勝博）

#### 参考文献

- 関 豊 1978『二戸市中曾根I遺跡発掘調査報告書』 二戸市教育委員会  
 松山 力 1981「第2章 自然的環境」『中曾根II遺跡発掘調査報告書』 二戸市教育委員会  
 大池昭二・中川久夫・七崎 修 1966「馬淵川中・下流沿岸の段丘と火山灰」『第四紀研究 vol. 5.No1』  
 松山 力・米倉伸之  
 大池昭二 1972「十和田火山東麓における完新世テフラの編年」『第四紀研究 vol.11 No4』  
 草間俊一 1965『岩手県福岡町堀野遺跡』 福岡町教育委員会  
 高橋与右エ門 1979「二戸市沢内B遺跡」『岩手県埋蔵センター文化財調査報告書』  
（財）岩手県埋蔵文化財センター

## 2. 二戸市の遺跡

二戸市内に所在する遺跡は昭和57年12月31日現在で123ヶ所が知られている（県教委文化課の遺跡登録台帳による）。これらの遺跡名と性格等は第1表に、時代別の集計は第2表、縄文時代の遺跡では時期別の遺跡数を第3表に示しておいたが、登録遺跡数と時代別遺跡数や時期別遺跡数とが合致しないのは、1時代1遺跡、1時期1遺跡として第2表と第3表を作成したからである。

第2表 時代別遺跡数

項目	時 期					
	縄 文	弥 生	古 代	塚	城 館	不 明
遺 跡 数	79	3	26	1	29	7
比 率	54.5%	2.1%	17.9%	0.7%	20%	4.8%

第2表でもっとも目につくのは、総遺跡数の50%強の79遺跡で縄文土器が採集されていることで、堀野遺跡に代表される古代は17.9%の26遺跡である。また、二戸市地域は日本中世史を

締め括った九戸政実の乱の合戦が行われた所でもあり、それを反映してか、中世と目される城館跡が20%の29ヶ所も在る。その他の弥生時代は2.1%の3遺跡、特殊な遺跡として経塚が0.7%の1遺跡の構成比率である。また、遺跡の種別として散布地と登録された遺跡の中に、時代・時期ともに不明という遺跡が4.8%の7遺跡あり、今後の分布調査で確認していく必要があるものと考えられる。

第3表 縄文時代の時期別遺跡数

項目	時期					
	早期	前期	中期	後期	晩期	不明
遺跡数	4	6	12	14	23	33
比率	4.34%	6.52%	13.04%	15.21%	25.00%	35.86%

では、次に時代別にみてみよう。まず縄文時代の遺跡であるが、92遺跡を時期別に分類したのが第3表である。この時代の遺跡でもっとも多いのは晩期の遺跡で25%の23遺跡が相当する。岩手県内の縄文時代遺跡の中でもっとも多いとされる中期が13.04%の12遺跡と少ないのと、対照的である。そのほか後期が15.21%で14遺跡、早期が4.34%の4遺跡、前期が6.52%の6遺跡でそれぞれ構成されている。しかし、縄文時代とされている遺跡の中に、時期不明として明示していない遺跡が35.86%の33遺跡があり、今後これらの遺跡の時期が確定されることによってこの構成比率に異同があることは勿論のこと、この比率がそのままこの地域の実態と考えるのは早計であり、今後の分布調査によって新しい遺跡が発見されていくことによっても、構成比率に異同がでるものと思う。

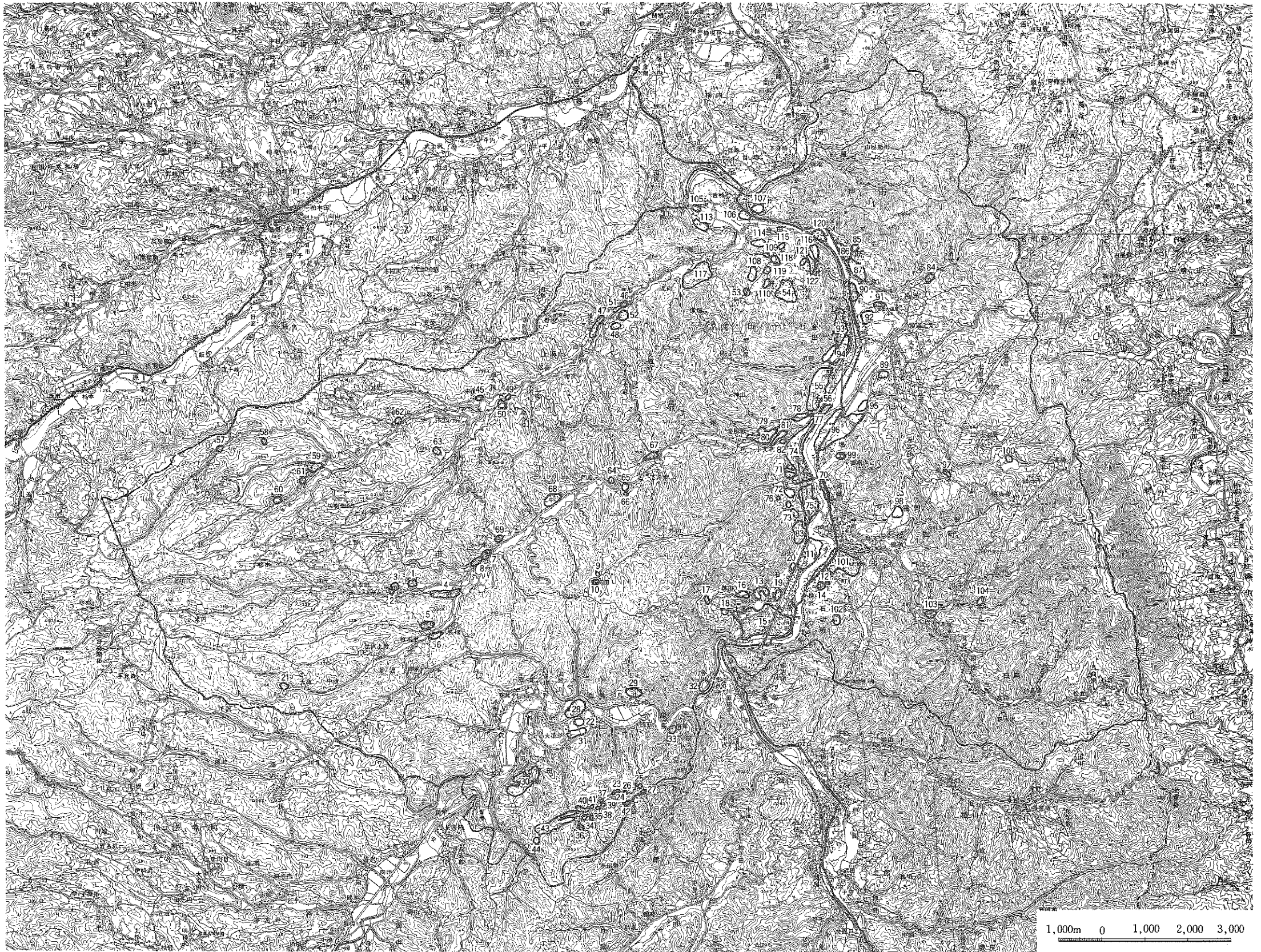
古代の遺跡が26遺跡あるわけであるが、その中の14遺跡は馬淵川本流の兩岸に位置し、残る8遺跡が支流域で発見されている。土師器が採集されたとは記載されているが、奈良時代なのか平安時代なのか明示していないのが多いものの、中に前期土師器が採集されたことを記録しているものもあることから、奈良時代の遺跡も含まれているであろう。現在までの調査成果からいうと、平安時代の遺跡より奈良時代の遺跡が多いことからみて、時代によって集落立地が違う可能性がある。少なくとも、米沢面や掘野面でのこの時代の遺跡は奈良時代に相当する場合が圧倒的に多いことは事実である。これは弘仁二年の爾薩体の賊の征伐に関連するものでもあろうか。

中世の遺跡としてもっとも多いのは城館跡で、29ヶ所が登録されている。この地域は先にも記したように、九戸政実が本拠を置いた所でもあり、その城跡が現在九戸城跡として国の史跡指定を受けている。各支流域にも多くの城館跡が存在することは集落の発生と無縁ではある











整理番号	遺跡登録番号	遺跡名	種別	所在地	遺構・遺物	備考
62	IE-97-0127	金田一川	散布地	上斗米字金田一川	土器、縄文晩期、注口、土偶、土板	
63	IE-97-0296	外中沢	集落跡	下斗米字中外沢		
64	IE-98-1268	蝦夷森	集落跡	下斗米字寺久保	土師器、腐蝕した鉄器	
65	IE-98-1370	下斗米A	散布地	下斗米字寺久保	土師器、腐蝕した鉄器	
66	IE-98-1380	下斗米B	散布地	下斗米字寺久保	縄文土器	
67	IE-98-0397	下斗米館	館跡	下斗米字寺久保		
68	IE-98-2103	田中館	館跡	上斗米字田中		
69	IE-98-2091	上斗米古館	館跡	上斗米字梅水		
70	IE-99-1277	長嶺	散布地	福岡字長嶺	縄文土器、矢ノ根	
71	IE-99-1249	佐々木館	城館跡	米沢字家の上	居館、土器、縄文、土師	
72	IE-99-1289	上平I	散布地	米沢字上平	土器、縄文、土師	
73	IE-99-2330	上平IV	集落跡	米沢字上平	土器、縄文、土師	
74	IE-99-0390	米沢遺跡群	集落跡	米沢字下平長瀬家の上	土師器、縄文土器	
75	IE-99-1393	下村遺跡群	集落跡	米沢字下村、上村	土師器、縄文土器	
76	IE-99-2207	上平II	散布地	米沢字上平	縄文土器	
77	IE-99-0305	上平経塚	経塚	金田一字上平		
78	IE-99-0312	海蛇田	散布地	金田一字海蛇田	縄文土器、土師器	
79	IE-99-0242	十字字I	散布地	下斗米字十字字	縄文土器、土師器	
80	IE-99-0263	十字字II	散布地	下斗米字十字字	縄文土器、土師器	
81	IE-99-0266	細十字越	散布地	下斗米字細越	縄文土器	
82	IE-99-0277	十字字III	散布地	下斗米字十字字	土師器	
83	IE-99-2372	円館	館跡	米沢字上村		
84	IE-70-2281	天狗	散布地	金田一字天狗	縄文晩期土器	壊滅
85	IE-70-2084	下山井館	館跡	金田一字下山井		
86	IE-70-2021	下山井	散布地	金田一字下山井		
87	IE-70-2074	段ノ越	散布地	金田一字段ノ越		
88	IF-80-1041	館	散布地	金田一字館	縄文土器、土師	
89	IF-80-2110	戸花	散布地	仁佐平字戸花	土器、縄文晩期	
90	IF-80-0024	駒焼場	集落跡	金田一字駒焼場	土師器、須恵器	
91	IF-80-0150	大釜	散布地	金田一字大釜	縄文土器	
92	IF-80-0086	馬場	散布地	金田一字馬場	縄文土器	
93	IF-80-1011	秋葉	散布地	金田一字仲町秋葉		
94	IF-80-1061	四戸城	館跡	金田一字仲町秋葉		
95	IF-80-2076	大川原毛	散布地	堀野字大川原毛		
96	IF-90-0000	堀野遺跡群	集落跡 祭祀跡	堀野字長地	土器、縄文	
97	IF-90-1230	夏間木	散布地	福岡字夏間木	土器、縄文後晩期、注口、土板、土偶	
98	IF-90-2134	横山	散布地	福岡字横山	土器、縄文晩期、注口、土偶	
99	IF-90-0091	堀野館	館跡	堀野字小四郎館		
100	IF-91-0091	大萩野	散布地	福岡字大萩野	土器、縄文後期?、石鏡	
101	JF-00-0053	九戸城	城跡	福岡字城の内		
102	JF-00-1070	村松館	館跡	石切所字榎木沢		
103	JF-00-1262	坂本館	館跡	白鳥字館		
104	JF-00-1334	内ノ沢	散布地	白鳥字内ノ沢	弥生式土器	
105	IE-79-1026	道の下	散布地	金田一釜沢字道の下	土器、縄文前期	
106	IE-79-1148	舌崎石造	散布地	金田一釜沢字雨滝	土器、縄文晩期、石器、土偶	
107	IE-79-1221	舌崎B	祭祀跡	金田一釜沢字雨滝	土器、縄文晩期	
108	IE-79-2179	林向	散布地	野々上字林向	土器、縄文晩期	
109	IE-79-2233	出張	散布地	野々上字出張	土師器	
110	IE-79-2293	仏畑	散布地	野々上字仏畑	土器、縄文後晩期	
111	IE-79-1126	舌崎A	包蔵地	金田一字雨滝	土器、縄文晩期	
112	IE-79-1200	舌崎上野	散布地	金田一字上野	土器、縄文晩期	
113	IE-79-1077	釜沢館	城館跡	金田一字釜沢	居館	
114	IE-79-2201	野々上I	散布地	野々上字野々上	土器、縄文	
115	IE-79-2216	野々上II	散布地	野々上字野々上	土器、縄文	
116	IE-79-2325	勝負沢I	集落跡	野々上字勝負沢	土器、前期、土師	
117	IE-79-2077	海上館	城館跡	金田一字海上	居館、中世	
118	IE-79-2246	野々上館	城館跡	野々上字野々上	居館、中世	
119	IE-79-2263	野々上III	散布地	野々上字野々上	土器、前期、土師	
120	IE-79-1396	小野	散布地	金田一字小野	縄文土器	
121	IE-79-2352	勝負沢II	散布地	野々上字勝負沢	縄文土器、土師器	
122	IE-79-2354	勝負沢III	散布地	野々上字勝負沢	縄文土器、土師器	
123	IE-99-2218	上平III	散布地	米沢字上平	土器、縄文晩期、土師コノハタイプ	

昭和57年12月31日現在の県教委文化課資料による。

まい。これらの支流域奥深くにも相当早い時期から集落が形成され、その結果が九戸政実の底力ともなったのであろう。

以上の遺跡をさらに流域別にみてみよう。二戸市内の河川をみると、馬淵川とその支流があり、遺跡は主にそれらの流域で発見されている。これはまた、その範囲が現在我々の手によって開発されていることを表してもいる。地形と環境の項でも記したように、二戸市域はこれらの河川によって形成された河岸段丘が平坦地として観察される以外は、起伏の大きい地形を形成し、遺跡立地としての好条件とは必ずしも言えない。現在の集落立地をみてもそのほとんどは河岸段丘に立地し、流路に沿うように点在している。まず、支流からみると、もっとも南にある安比川流域では22遺跡が知られている。これらはさらに、安比川本流7遺跡・支流15遺跡になる。時代別にみると、18遺跡が縄文時代で、その他古代2遺跡、城館跡2遺跡である。沢内川流域では2遺跡が知られているが、いずれも縄文時代である。十文字川流域では19遺跡の存在が知られている。時期別にみると縄文6遺跡、古代6遺跡、城館跡7遺跡である。この流域には、現在も多く集落が立地していることから、古い時代から集落が発達したことによって城館が多いものとおもわれる。海上川流域では16遺跡の所在が確認され、縄文11遺跡、城館跡5遺跡が含まれている。白鳥川流域では2遺跡と少なく、それには弥生時代1遺跡、城館跡1遺跡がある。馬淵川本流域には58遺跡と非常に多くの遺跡があり、特に馬淵川左岸に多く所在し、段丘面では米沢段丘と堀野段丘・福岡段丘に多く立地している。遺跡の時代や時期が単一という例はほとんどなく、いずれも複合遺跡で、特に古代と縄文時代の遺跡が複合している場合が多い。古代の中では前期土師器を出土するという遺跡が多い。

以上、二戸市の遺跡を時代・時期別にそして流域別にその分布状況をみてきたわけであるが、これらの遺跡に対する発掘調査の経過・歴史もたどっておく必要がある。

二戸市内の遺跡を最初に発掘調査したのは小田島祿郎氏であろう。氏は大正13年に発表した著の中で、未だに完全に埋没しきらない竪穴住居が県北部に多数存在することを報告し、17遺跡<sup>①</sup>を紹介している。その中で当二戸市に関連する遺跡が4ヶ所含まれている。その遺跡は①上斗米字立當144-2に30棟（立當竪穴群）、②上斗米字立當144-11に29棟（外中沢竪穴群）、③下斗米字寺久保に8棟（寺久保竪穴群）であり、その他に爾薩体字浅内にもあるとしている。これらの中から各遺跡とも何棟かずつを発掘している。調査経過の詳細は報文にゆずるとして、これらの遺跡は奈良時代の遺跡で、いずれも白砂（十和田a降下火山灰とおもう）が堆積していることを述べている。その後、戦前はしばらく発掘調査はなかったらしい。戦後になると、昭和27年に金田一字舌崎で偶然発見された配石遺構が草間俊一氏（現盛岡短大学長）によって調査され、翌28年には明治大学の芹沢長介氏（現東北大学教授）が金田一の雨滝遺跡<sup>②</sup>を調査している。舌崎の配石遺構を調査した草間俊一氏は、その時に爾薩体堀野にも配石群<sup>③</sup>が存在する



ことを知り、昭和28年にこの配石群を調査し、配石遺構とともに<sup>4</sup> 竪穴住居も1棟調査している。その結果、この住居跡は7世紀末～8世紀頃に位置づけられることを報告している。昭和30年に上斗米字小端の小端遺跡で道路工事中に炉跡（図では石囲い炉）が発見され、翌31年には上斗米字子子沢の子子沢遺跡で、水田工事中に多くの土器・石器が出土したことを、亀沢馨氏が岩手史学研究に報告している。続いて同氏は同じ岩手史学研究No29誌上に「福岡町の金田一川遺跡」<sup>5</sup> という報文を<sup>6</sup> 発表し、上斗米字金田一川の金田一川遺跡で人骨の入った縄文晩期終末の合口甕棺が発見されたことを報告した。昭和28年に雨滝遺跡を調査した芹沢長介氏は昭和35年に再度この遺跡を調査し、氏はこの時の層位的事実にもとづいて雨滝式を提唱し、山内清男氏の大洞式土器の編年の中でB式とBC式は同時存在する土器であることを発表した。その後、昭和36年には県民待望の岩手県史第1巻が刊行され、小岩末治氏が考古学関係を担当し、<sup>8</sup> それまでの研究成果を集大成した。県史の中で二戸市関係の遺跡に直接触れているのは少ないが、その中で二戸市に29遺跡が存在することを記述しているし、特に本書で報告する上里遺跡は縄文前期～晩期（実際は縄文早期～中世）までの土器が出土することを述べている。その他、弥生時代の土器が、金田一川遺跡、矢沢遺跡、足沢遺跡、月折遺跡等から出土していることを紹介している。一方、草間俊一氏は昭和37・38・39年と3ヶ年間堀野遺跡を発掘調査し、この遺跡の性格を明らかにし、昭和28年調査の分も含めて、昭和40年に「岩手県福岡町堀野遺跡」<sup>9</sup> として報告書を刊行している。それによれば、本遺跡は縄文時代（後期か？）の配石遺構と古代（奈良）の集落、そして石室を伴う古墳等の複合した大集落遺跡であるとしている。現在、この時調査された住居跡が復元されて展示に供されている。その後はしばらく発掘調査や考古学的な発表もなく過ぎたが、昭和40年代後半になると、国道4号線二戸バイパスやそれに伴う県道の一部改修工事が計画された。地形の項でも詳述したように、二戸市は馬淵川の両岸に細長く続く段丘に市街地が立地し、同じ面に遺跡もまた多く立地している。結果的にバイパス路線が遺跡の上を通ることになり、建設工事に関連する記録保存のための緊急調査が昭和49年より開始され、昭和56年まで続けられている。終了後、引き続き国道4号線金田一バイパスに関連する遺跡も昭和56・57年に調査している。その間に調査された遺跡は20遺跡であり、時代的には縄文時代早期から近世に至る非常に多くの遺構や遺物が発見されている。例えば、長瀬B遺跡の縄文早期の集落と共伴土器（寺の沢式）、上里遺跡と沢内遺跡の縄文前期初頭の土器群、上里遺跡の縄文前期の人骨7体出土、荒谷遺跡の縄文中期の大型住居跡、下村B遺跡の配石群、大淵遺跡の弥生時代住居跡、中曾根遺跡・長瀬遺跡群と上田面遺跡の奈良時代の大集落（住居跡が合計約200棟）等々、枚挙にいとまがない。このような調査結果は岩手県北のみならず、また、岩手県に止まらず、「みちのく」の歴史解明のための資料として集大成されて行くものと確信している。

以上簡単ではあるが、二戸市の遺跡とその分布、傾向、調査研究史を振り返って本項の終りとしたい。  
(高橋与右工門)

#### 引用文献

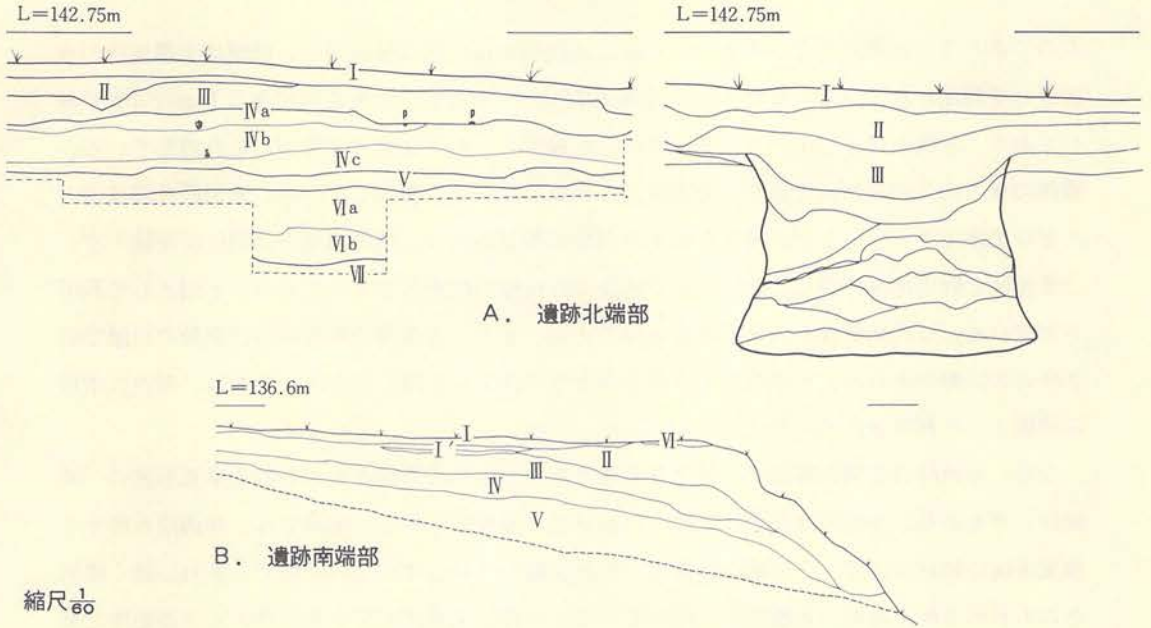
- ①小田島祿郎 「県下における竪穴及「チャシ」に関するもの 其1」『史跡名勝天然記念物調査報告 第4号』 岩手県 大正13年
- ②草間 俊一 『岩手県福岡町堀野遺跡』 福岡町教育委員会 昭和40年
- ③芹沢 長介 『石器時代の日本』 築地書館 昭和35年
- ④前記②に同じ
- ⑤亀沢 磐 「福岡町上斗米の子子沢遺跡と小端遺跡」『岩手史学研究 No23』 岩手史学会 昭和31年
- ⑥亀沢 磐 「福岡町の金田一川遺跡」『岩手史学研究 No29』 岩手史学会 昭和33年
- ⑦前記③に同じ
- ⑧小岩 末治 「上古篇」『岩手県史 第1巻』 岩手県 昭和36年
- ⑨前記②に同じ

### 3. 遺跡の位置と周囲の環境

本遺跡は二戸市石切所字上里地内に所在し、国鉄東北本線「北福岡駅」の西方450m、「二戸市役所」の南々西2.5kmに位置している。前項までは二戸市全域に亘る地形面区分や、環境、そして、二戸市内の遺跡について記述したが、ここでは遺跡周囲に限定した立地と環境について触れておく。

本遺跡の立地する地形は、段丘面区分に従えば洪積低位の福岡段丘に立地していることは、前項で記した通りであるが、石切所地区の福岡段丘相当面は、本遺跡と沢を挟んで北方200mに対峙している火行塚地区（火行塚遺跡以外にも遺跡が存在する）と、同じく沢を挟んで南100mに位置する野中地区・上里沢地区・小壁平地区に分布しており、沢による開析がみられるものの、面としては大きな起伏のない平坦面で、そのほとんどは畑地・果樹園・宅地として利用されている。この段丘面の西方は、北方から南西方向の「男神岩」と「女神岩」に至る半円状に標高390m～440m前後の丘陵地があり、その丘陵地の東麓に張りついた状態で福岡段丘が立地している。石切所地区の福岡段丘の標高は140m～150mの範囲で、下位の米沢段丘とは約20m、馬淵川の河床とは約50mの比高がある。本遺跡の立地する地点は「女神岩」から北東方向に舌状に張り出した台地の舌端部と東側段丘崖縁沿いに広がっており、遺跡全体では6万㎡に達する広大な面積を有し、多くの遺物が過去にも出土しており、周知の遺跡で、岩手県史の中でも縄文前期から晩期までの土器が出土するとしている。旧地形では北方の対岸火行塚地区と連続する地形面であったものと推定されるが、沢の開析によって別々の地形面となった





A. 遺跡北端部

L=136.6m

B. 遺跡南端部

縮尺  $\frac{1}{60}$

A土層注記

層位	色調	土性
I	7.5YR 3/5 黒褐色、砂質シルト	耕作土として利用されている。
II	7.5YR 3/5 黒色土、シルト	粒子が幾分粗く、この上面に十和田 a 火山灰の降下堆積が見られる。
III	7.5YR 3/5 暗褐色、浮石質砂質シルト	0.1~1.0cm位の浮石粒が混入している。中礫浮石に相当するであろう。
IVa	7.5YR 2/5 黒褐色	中礫浮石と南部浮石の混入した黒色土との混合した層で、若干褐色が強い。
IVb	7.5YR 2/5 黒色	黒色土と南部浮石質の0.5~1.0cm位の浮石の多く混合した土である。
IVc	7.5YR 3/5 暗褐色	南部浮石層に若干の橙褐色のシルトが混入した層である。
V	7.5YR 4/5 褐~明褐色	南部浮石層である。本層は遺跡全面では観察されず、部分的にみられる。
VIa	7.5YR 3/5 褐色	ソフトローム層で、白色の軟石浮石が混入する。八戸火山灰に相当するであろう。
VIb	7.5YR 3/5 明褐色	▼層の白砂を起源とするソフトローム層。白色で軟石の浮石を含む。
VII	7.5YR 3/5~2/5 明褐色	八戸浮石流凝灰岩を起源とする白砂で多量の炭化物を含む。

B土層注記

層位	色調	土性
I	7.5YR 4/5 褐色	1mm以下の小石を含む砂質土。しまりなし。
I'	7.5YR 4/5 褐色	上層は、シルト層の細砂、下層は、それより粗い細砂が分化堆積。
II	7.5YR 3/5 暗褐色	径1~2mmの小石を含む砂質土。
III	7.5YR 3/5 暗褐色	径3mm土の小石を多量含む砂質シルト。しまりなく、少し力を入れると指痕がつく。
IV	7.5YR 3/5~2/5 暗褐色	IIIに類似する。IIIより僅かに明色で若干硬めである。
V	7.5YR 2/5 黒褐色	IIIに類似する。最も暗色。径1cm土の小石も目立つ。
VI	7.5YR 3/5~2/5 黒~黒褐色	Vに近い暗色土。少し硬めで、径2mm土の小石を多量に含む砂質土。

第7図 基本土層図



ものであろう。本遺跡の北～西方の段丘崖は比高約20mの急な崖を呈し、低地は半湿地状の水田として利用されている。なお、この低地は巾20m～50mで、台地舌端部から1km西方まで続いており、水流を伴う小川となって米沢段丘を開析し、約1km東方で馬淵川と合流している。遺跡の東方は比高約20mで低位の米沢段丘と明瞭な段丘崖で接続している。米沢段丘面はほとんどが宅地化されているが、現在も若干の畑地が散見される。遺跡の南方は同位面が続くが、上里地区と野中地区の間には巾20m位で延長400m位の開析谷が入っており、水田として利用されている。この開析谷との比高は5m位である。また、本遺跡の調査範囲は路線の距離で約220mの距離があるが、その中央より若干南寄りの部分にも浅い谷が入っており、現在は市道の路線として利用されている。

なお、本遺跡の北側舌端部は、時代が明確でないが中世の遺構とおもわれる単郭形式の「城館跡」でもあり、今回の調査では路線巾の部分だけ調査している。現状では、北西段丘崖から南東方向に約40m伸び、その地点で東方に方向を転じている巾15mの空堀と、それに続く帯郭とおもわれる削平段地が北端部まで続いている。一部は宅地化しているがほとんどが畑地と墓地であるので、保存状態は良好である。

(高橋与右エ門)

## IV. 基本層序

本遺跡は福岡段丘上に立地していることは再々記述しているとおりである。段丘を覆っている土層は、米沢段丘のそれと比較して大差がない。しかし、福岡段丘のそれは層が全般的に薄く、層によっては断続している場合も多々観察される。本遺跡では北半と南半では若干差がみられ、特に南東部の斜面部分では表土が薄く、表土を除去すると直接基盤層の火山灰流凝灰岩が露出する。以上のような状況が観察されるものの、全体的にみればそれほどの大差でもないもので、共通するものとして記述していく。第7図Aに示した位置は遺跡北端部の東側路線巾境界部分である。この位置を基本層序とした理由は、遺跡で観察される土層が、この付近ではすべて堆積しており、層位を明らかにするのに丁度都合がいいからである。なお、土層名は上位層からローマ数字でI・II・III層とし、さらに細分される場合はアルファベットの小文字を付してI a層・I b層・I c層とした。層序区分にあたっては土性や混入物等を吟味し、色調をも加味して区分した。以下にその概要を記す。

(第7図・PL-5)

I層 7.5YR $\frac{2}{2}$ 黒褐色 砂質シルト、現在の表土で、耕作土として利用されているため攪乱層

- である。縄文土器や石器等が包含されているが、原位置を保っていない。この層は斜面部は薄く、10cm位の部分もみられるが、遺跡全体では15cm～20cm位が平均的層厚である。
- II層 7.5YR $\frac{2}{10}$  黒色 シルトであるが若干粒子が粗い。白色で硬く角ばった1mm～3mmの浮石が若干混入している。この上面には部分的ではあるが十和田a降下火山灰の堆積が観察される。縄文土器や石器が若干混入している。この層の上面を検出面とする遺構は、平面的に確認されたわけではないが、土層図でみると周溝遺構が本層の上面から掘り込まれているようである。この層は遺跡全面を覆う土層ではなく、断続的である。層厚は10cm～20cmである。
- III層 7.5YR $\frac{3}{10}$  暗褐色 浮石質砂質シルト 中掘浮石層に相当する土層と考えられる。1mm～5mm位の浮石粒が多量に混入しているが、所謂「あわ砂」の成層は部分的に観察されるのみである。遺跡南端の斜面部では本層を欠いているが、その他の部分ではほぼ全面を覆っている。本層の上面で本遺跡で検出された縄文時代の住居跡や土坑のほとんどが検出されている。層厚は15cm～25cm位である。
- IVa層 7.5YR $\frac{2}{10}$  黒褐色 粗粒浮石の混入した黒色土で、IVb層に比較して若干褐色が強い。本層は遺跡南端の斜面部では欠いているが、ほぼ遺跡全面を覆う。前期初頭の縄文施文尖底土器群が出土している。層厚は10cm位である。
- IVb層 7.5YR $\frac{2}{10}$  黒色 黒色土と0.5cm～1cm位の粗粒浮石を多く混入した土層で、層厚は10cm位である。黒色部分はシルト質で若干粘性を帯びている。本層は遺跡南端の斜面部を除くと遺跡ほぼ全面を覆っている。本層下部でムシリI式併行の土器片が出土している。
- IVc層 7.5YR $\frac{3}{10}$  暗褐色 南部浮石に若干の橙褐色のシルトが混入した層である。ほぼ遺跡全面を覆い、層厚は10cm～20cmである。本層では貝殻背圧痕文（住吉町式系）や貝殻腹縁文の付された土器片が出土している。
- V層 7.5YR $\frac{4}{10}$ ～ $\frac{5}{10}$  褐色～明褐色 南部浮石層である。本層は遺跡全面で観察されず、断続的であるが、層厚は5cm～15cmである。無遺物層である。
- VIa層 7.5YR $\frac{4}{10}$  褐色 八戸火山灰に相当する土層であろう。かつて、筆者が同市内の沢内B遺跡の発掘調査報告書の中で二の倉火山灰とした土層と同じ土性で、その後、松山 力氏の指摘により八戸火山灰を誤認したものであることが判明した。ここで沢内B遺跡の方を訂正しておく。遺構のほぼ全面を覆い、層厚は40cm前後である。無遺物層である。
- VIb層 7.5YR $\frac{5}{10}$  明褐色 VII層の白砂を起源とするソフトローム。白色で軟質の浮石を含み、フカフカで軟かい。おそらく白砂の風化によって生じた土層であろう。遺跡全面を覆い層厚は30cmほどである。無遺物層である。
- VII層 7.5YR $\frac{7}{10}$ ～ $\frac{7.5}{10}$  明褐灰色 八戸浮石流凝灰岩と同質のもので、福岡段丘面の基盤を構成



している。この層には直径30cm位の樹幹や大小無数の炭火物や、直径20cm位の浮石等が混入した浮石層である。非常に良く締っている。層厚は確認していない。

以上、本遺跡の基本的な層序について説明したが、土層と遺構・遺物の関係について若干触れておこう。

二戸市地域には十和田火山を噴出源とする火山灰や浮石が降下堆積しており、それらの火山灰や浮石と遺構・遺物の対応関係がしだいに明らかになって来ている。本遺跡例では、中振浮石との対応関係と南部浮石層の上位に堆積する浮石の混入した黒色土との対応関係が判明した。

先ず、中振浮石との関係であるが、所謂「あわ砂」を埋土内に堆積する遺構はまったく検出されていないという事実がある。本遺跡で検出された縄文時代の遺構は、そのほとんどが前期末から中期に属しており、中振浮石の降下年代が約4000年B. P. で妥当であれば、本遺跡の縄文時代遺構の埋土内に成層化した「あわ砂」が堆積していなければならない。このことは、降下時期がもっと古いのか、二戸市に降下したのは中振浮石と別の浮石であるのかいずれかであろうが、今後に残された問題である。後者の粗粒浮石の混入した黒色土の上半部分では、前述の沢内B遺跡と同様、縄文の施された尖底土器が出土していることから、前期初頭の文化層といえるだろう。その下位からはムシリI式系の条線文土器や、貝殻腹縁文や貝殻背圧痕文を付す早期の遺物が出土している。本遺跡の場合には南部浮石層より下位に文化層が存在しないので、南部浮石層より上位での文化層を明確にすることができるものと考えている。

(高橋与右エ門)

## V. 縄文時代の遺構と遺物

本遺跡の調査で検出された遺構や遺物の中で、縄文時代に属するものは次のとおりである。

### 〔遺 構〕

- ①住居跡 10棟      ②土 坑 78基      ③集石群 1カ所

### 〔遺 物〕

- ①土器      実測個体 500 個体      拓本個体 616 個体      その他破片多数  
②石器    ◦石鏃 99点 ◦石槍 13点 ◦石匙 68点 ◦石錐 19点 ◦石篋 60点 ◦搔器 45点 ◦切  
削器 176点 ◦打製石斧 ◦7点 ◦磨製石斧 37点 ◦磨(擦)石 ◦68点 ◦凹み石 62点  
◦半円状扁平打製石器 ◦80点 ◦石錘 30点 ◦敲き石 24点 ◦石皿 7点 ◦その他26点  
以上であるが、ここでは遺構内から出土した遺物についてはその遺構の項の中で記述しているが、遺構外から出土した遺物については一括した。包含層から出土した遺物は各包含層ごとに遺構と同じ扱いにし、別項にした。

## 1. 住 居 跡

### 1) D-23住居跡

〔遺 構〕 (第8図、PL-6)

本住居跡はグリッドC・D・E-22・23にまたがって位置し、C-22土坑・C-23土坑・D-23土坑-1・D-23土坑-2・E-23住居跡等と重複している。重複遺構との新旧関係はC-22土坑が本住居跡より古い以外はいずれも本住居跡より新しい。

規模は約9.30m×8.10mを測り、平面形は東西に長軸をもつ胴張隅丸長方形を呈している。壁高は35cm～75cmの範囲であるが、北壁部分が一般に高い。壁は床面と直交ではなく若干外傾し、壁直下の床面には巾15cm～25cmで深さ3cm～10cmの壁溝が全周している。床面には軽い起伏があるものの、大きな凹凸はほとんどなくほぼ水平状態に近いが、全体的に軟弱でフカフカした感がある。本住居跡の床面にはP<sub>1</sub>～P<sub>9</sub>までの柱穴状土坑とP<sub>10</sub>の浅い掘り込み状の土坑がある。これらの規模はP<sub>2</sub>とP<sub>5</sub>は径約35cm・深さ35cm位で平面形が楕円形である。その他のP<sub>7</sub>・P<sub>10</sub>以外は径50cm～60cm・深さ60cm～85cmで平面形は楕円形である。P<sub>7</sub>は径約72cm×55cm・深さ105cmで平面形は楕円形である。P<sub>10</sub>は径約3.75cm×1.50m・深さ28cmで、平面形は長楕円形である。性格としてはP<sub>1</sub>～P<sub>5</sub>は位置や規模等から考えて本住居跡の主柱穴



を構成するものと考えられるが、全体が東壁に寄る様な配置関係を示している。配列状況をみると東側3ヶ・西側3ヶであるが、東側と西側の間には約3.50mの距離がある。しかし、 $P_1 - P_6 \cdot P_2 - P_5 \cdot P_3 - P_4$ は相對し、全体が変六角形になるように配列されている。

$P_{10}$ を除いた他の土坑も柱穴状を呈しているが、位置関係をみると主柱穴を構成するものではなく、支柱穴となるものであろう。 $P_{10}$ は底面の短軸方向に溝状の掘り込みをもち、底面が北側から南側に向って緩やかな斜面状を呈している。この様な土坑はI-19住居跡・I-22住居跡でも検出されているが、性格はまったく不明である。

本住居跡の床面では炉跡や炉跡と考えられる焼成を受けた痕跡を残す部分は検出されていない。

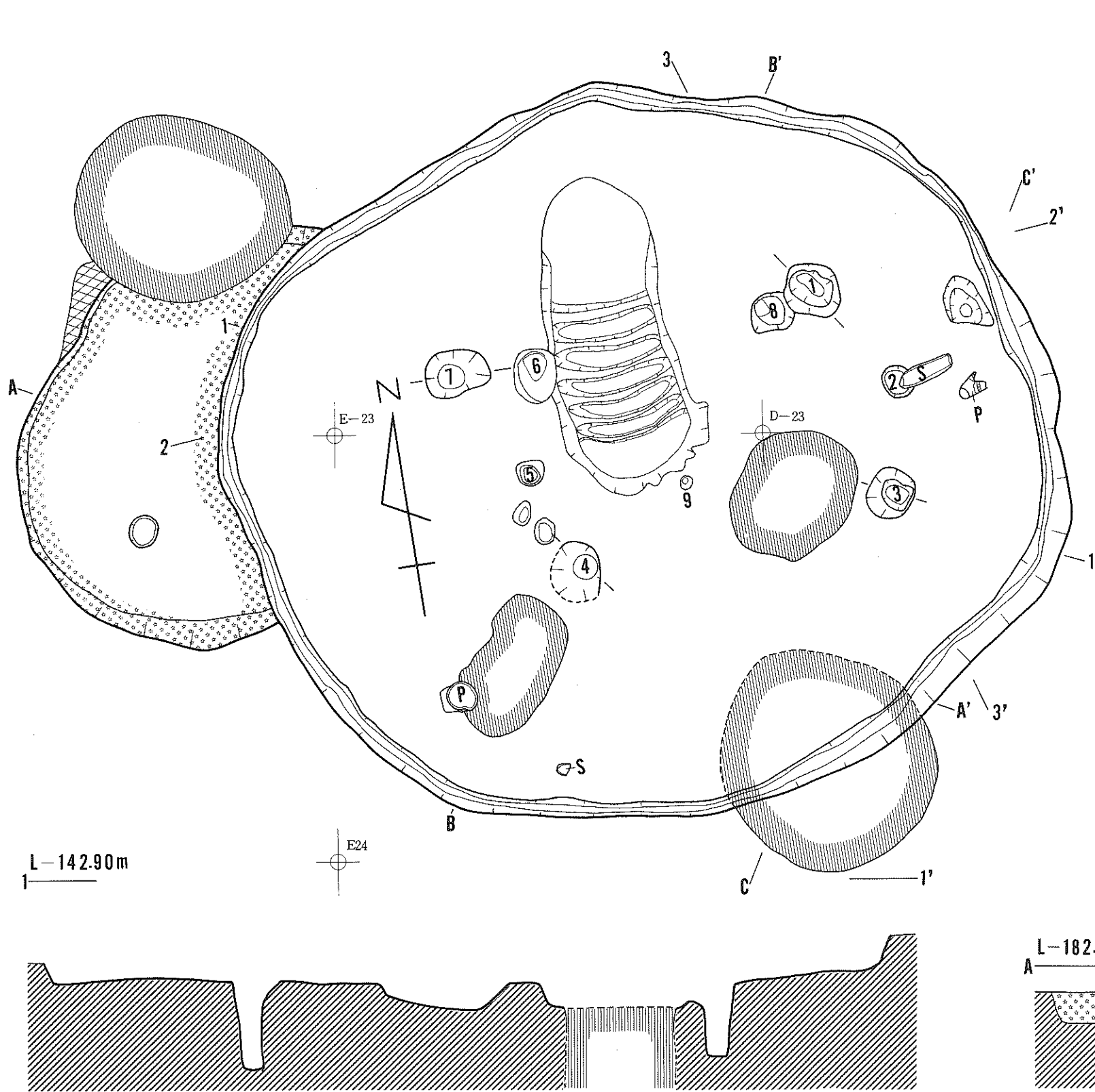
埋土は黒褐色・暗褐色・褐色・明褐色・橙色等を示すシルトや八戸浮石流凝灰岩とそれらの混合した土で構成されており、色調や混入物によって12層に細分されている。全体的にみるとどの層も浮石や八戸浮石流凝灰岩層が多く混入し、その多少によって色調に差が生じている。なお、6層は八戸浮石流凝灰岩層に少量の黒色シルトが混入してにぶい橙色を呈す部分である。また、いずれの土層にも炭化物が混入し、どの層もしまりがなく軟かい。この住居跡は廃絶後に人為的に埋め戻された可能性が強い。このことは埋土内に多量に混入する八戸浮石流凝灰岩の存在によって知られる。

#### [遺物]

本住居跡よりの出土遺物としては縄文土器と石器がある。土器には実測可能なものが5個体含まれているが、主体は破片であり、量的にも少い。石器も11点とあまり多くない。

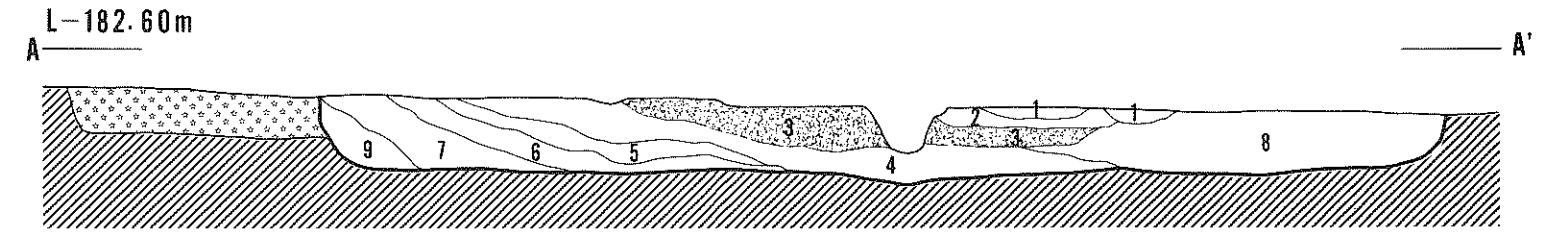
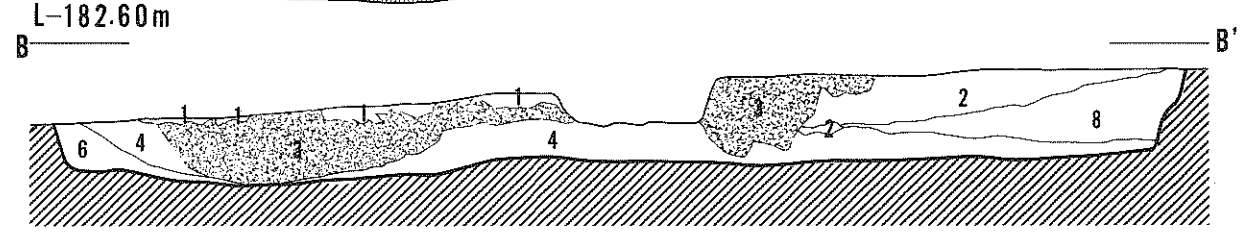
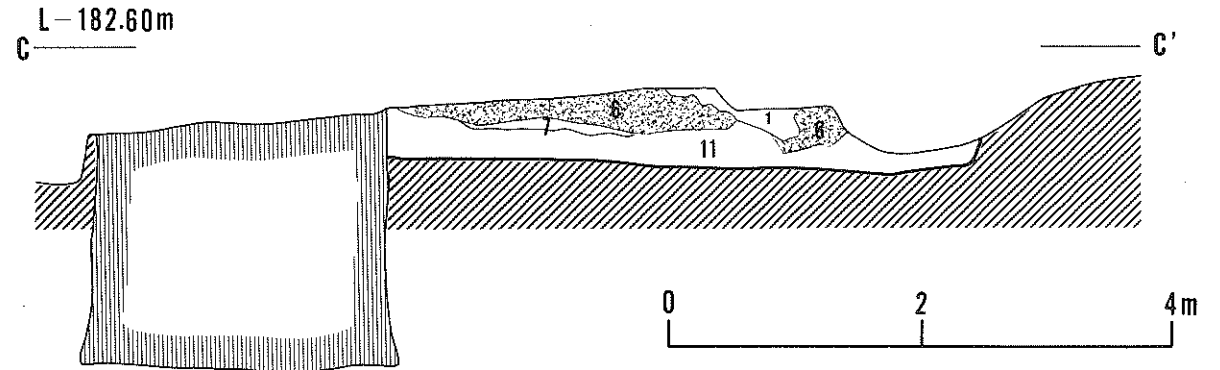
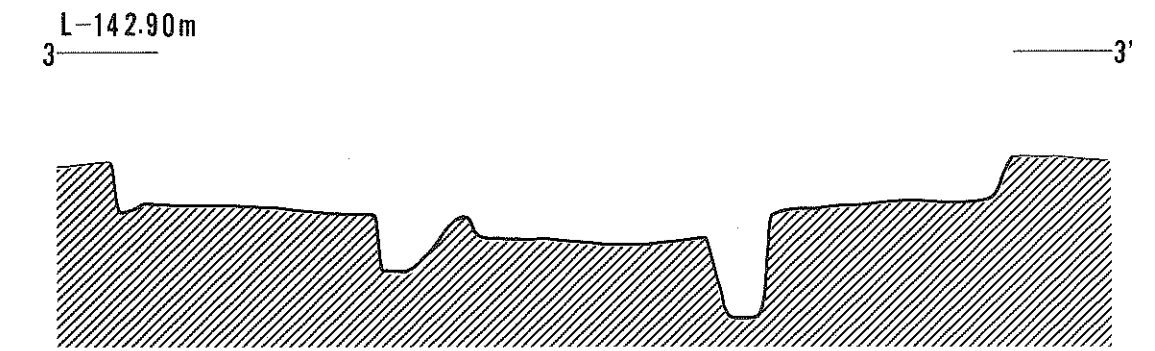
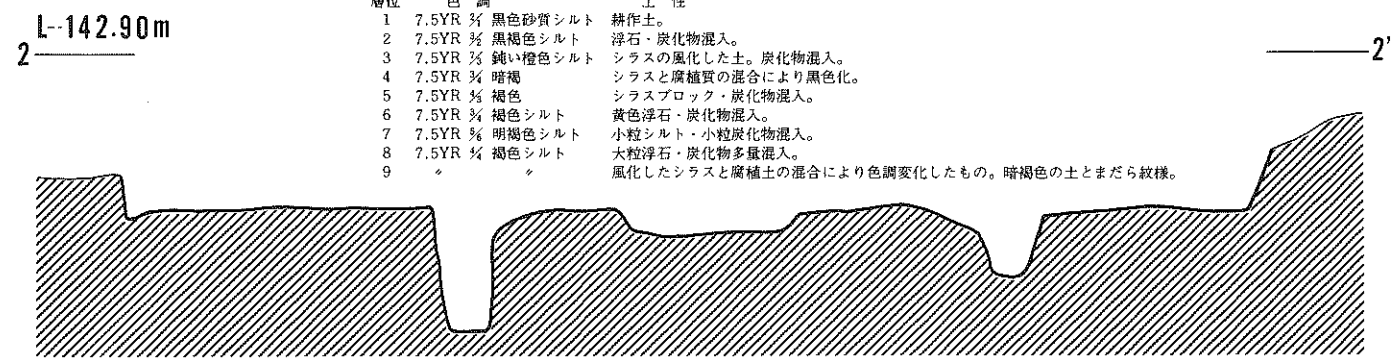
#### 土器 (第9図、PL-45A)

土器の中で完形は2~4の3個体のみで、1と5は反転実測したものである。その他の6~11は破片である。出土状況を見ると、1と2はD-23土坑との重複部に近い位置ではあるが、床面直上からの出土であり、他はいずれも埋土内からの出土である。3・4は完形ではあるが、埋土中下位層からの出土である。これらの土器は1~8は第Ⅲ群に属し、9~11が第Ⅳ群に位置づけられるものである。1~4は口縁部文様帯と体部が全周する1条~2条の隆帯によって限られている。口縁部の文様は、隆帯の他に縄文原体の押圧によって施文されたもの(2・3)と、篋先の刺突によるもの(4)があり、体部縄文は原体LRの横回転で施文され、原体の末端に結束による綾絡文をもつもの(1・2)と、原体LR横回転による単節斜縄文だけによるもの(4)、羽状縄文(3)等がある。5~8は口縁部文様に原体圧痕の手法を用いているが、使用原体には単軸絡条体(5~7)とR2段撚り(8)が使用されている。体部縄文は単軸絡条体縦回転による木目状撚糸文が施されている。9~11は沈線と隆帯によって表出された渦巻を特徴とし、地文には原体LRが使用されている。これらの諸特徴から、5~8はⅢ群2類、1



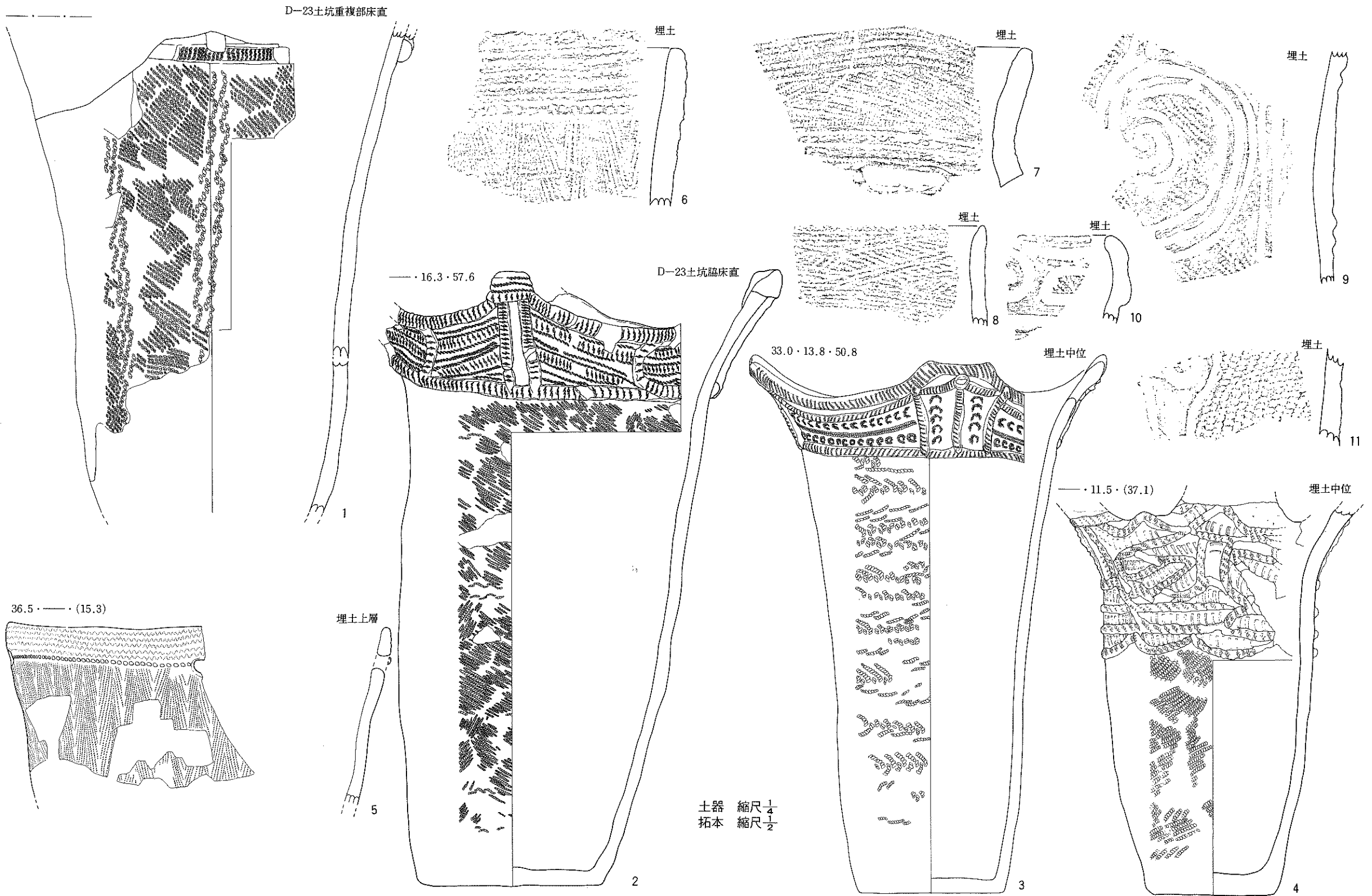
D-23住居跡埋土層注記

層位	色調	土性
1	7.5YR 3/4 黒色砂質シルト	耕作土。
2	7.5YR 3/4 黒褐色シルト	浮石・炭化物混入。
3	7.5YR 3/4 鈍い橙色シルト	シラスの風化した土。炭化物混入。
4	7.5YR 3/4 暗褐色	シラスと腐植質の混合により黒色化。
5	7.5YR 3/4 褐色	シラスブロック・炭化物混入。
6	7.5YR 3/4 褐色シルト	黄色浮石・炭化物混入。
7	7.5YR 3/4 明褐色シルト	小粒シルト・小粒炭化物混入。
8	7.5YR 3/4 褐色シルト	大粒浮石・炭化物多量混入。
9	〃	風化したシラスと腐植土の混合により色調変化したもの。暗褐色の土とまだら紋様。

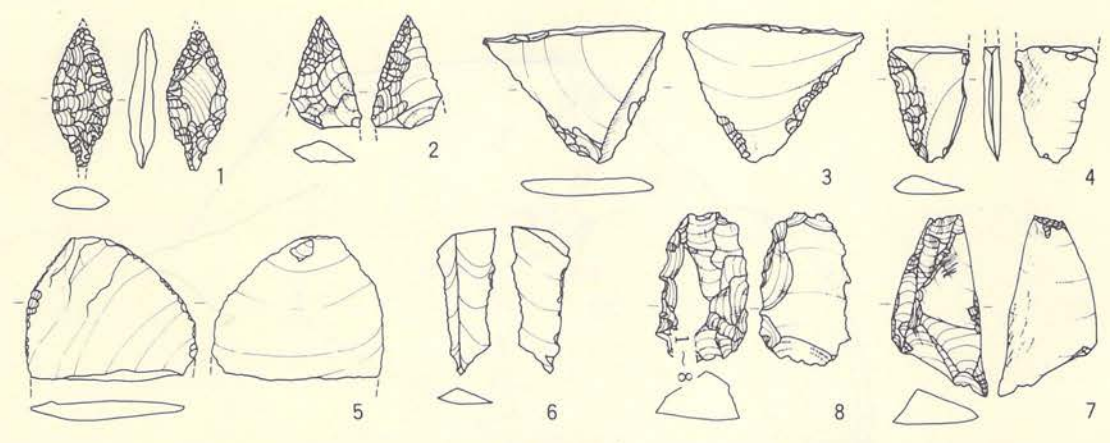


第8図 D-23住居跡(遺構)

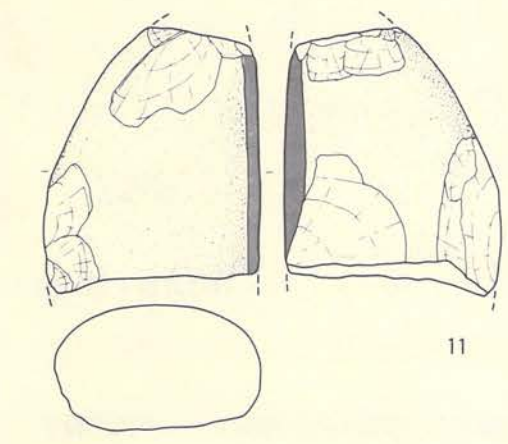




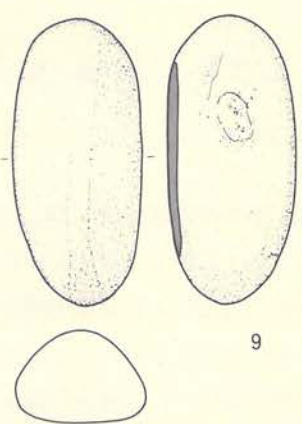
第9圖 D-23住居跡(遺物-1)



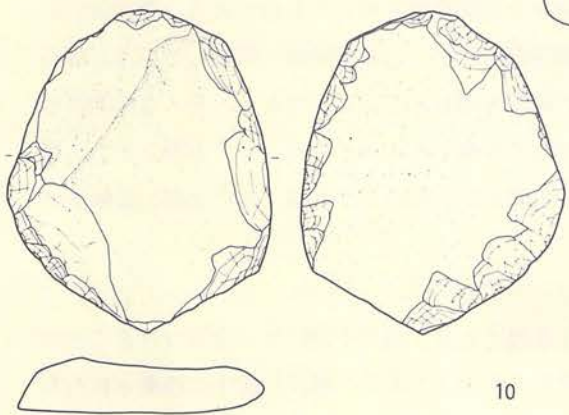
1~8 縮尺 $\frac{1}{2}$



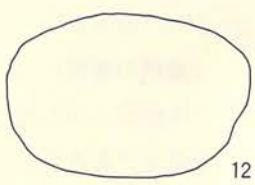
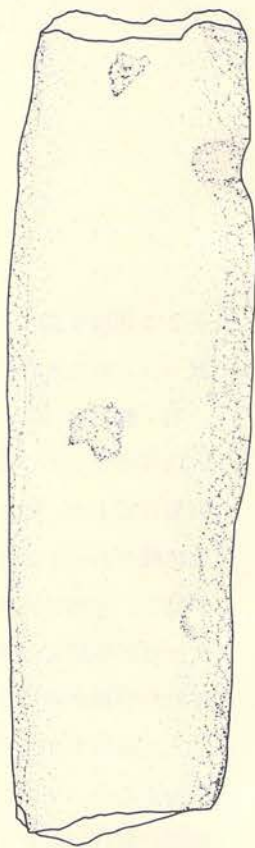
11



9



10

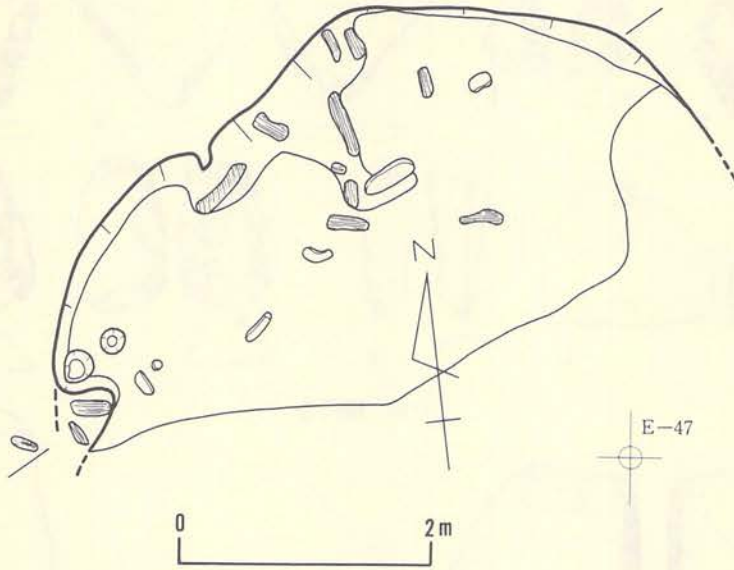


12

9~12 縮尺 $\frac{1}{3}$

第10図 D-23住居跡 (遺物-2)





第11図 D-46住居跡

～2はⅢ群6類、3はⅢ群8類、4はⅢ群9類に相当するであろうし、9～11はⅣ群4類に位置づけられるものであろう。

#### 石器 (第10図、PL-122)

12点出土しているが、その中には石鏃2点、切削器5点、搔器1点、擦石1点、半円状扁平打製石器1点、敲き石1点、石棒1点が含まれている。出土状況では石棒がP2付近の床面直上に横たわって出土した以外はいずれも埋土内からの出土である。石鏃(1・2)は、1が完形品で、基部に丸味をもつ有茎型である。2は先端部を残存する欠損品である。切削器(3～7)は形態的には不定形のもので、側縁部に簡単な剝離調整を加えたものである。3には切断された形跡がある。搔器(8)は縦長剝片の周縁部を片面(一部は両面)剝離している。擦石(9)は扁平な長円形の円礫を使用し、長軸の側縁を擦石としたものである。平らな片面には凹みをもつ。半円状扁平打製石器(10)は敲き石的要素もあるが、取り合えず本種とした。周縁部に敲打剝離がある。敲き石(11)は擦石的な面もみられるが、頭部(図の上部)に敲きつぶれた面をもつことから本種とした。

#### 〔遺構の年代〕

床面直上から出土した1・2の土器の存在を重視すれば、縄文中期初頭に位置づけることが出来るであろう。3・4の完形土器は埋土中位からの出土であり、埋没の途中に投棄されたものと考えられる。

## 2) D-46住居跡

〔遺構〕（第11図、PL-7A）

この住居跡はグリッドD-46・E-46にまたがって位置し、他遺構との重複もなく単独で検出された。また、南東に向う傾斜地に立地するので、斜面下位の部分は崩壊・流亡して残存しない。検出された部分は全体の $\frac{1}{3}$ 位と推定される。

検出された規模は3m×1.3m位の範囲で、全体がほぼ半円に近い円弧を呈している。このことから、全体の平面形は円形を示すものと推定される。壁高はもっとも高い位置で約20cmで、壁は床面に対して軽く外傾している。床面の残存部はほぼ水平状態に近く、比較的しまりが良い。壁溝は検出されていない。なお、本住居跡の床面で小土坑（坑穴状）が30ケほど検出されているが、いずれも浅い窪地状を呈しており、明らかに柱穴といえるものは検出されていない。

炉跡や炉跡と考えられる焼成面は検出されていない。

埋土は黒色～黒褐色（10YR  $\frac{3}{4}$ ～ $\frac{2}{2}$ ）を示すやや軟らかな砂質シルトの単層である。全体的に1cm～2cm位の浮石粒や八戸火山灰が若干混入している。さらに、床面直上や埋土下位の部分には炭化物片が多量に混入しているため、色調も黒味が強く感じる。炭化物の状況には規則性が見られず、また、原形を保っているものもないが、本住居跡は火災で焼失した可能性が大である。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の年代〕

遺物の出土がないので断定資料を欠いているが、平面プランや周囲に立地する他遺構との関係から、縄文時代のある時期に属する住居跡であろうと考えている。

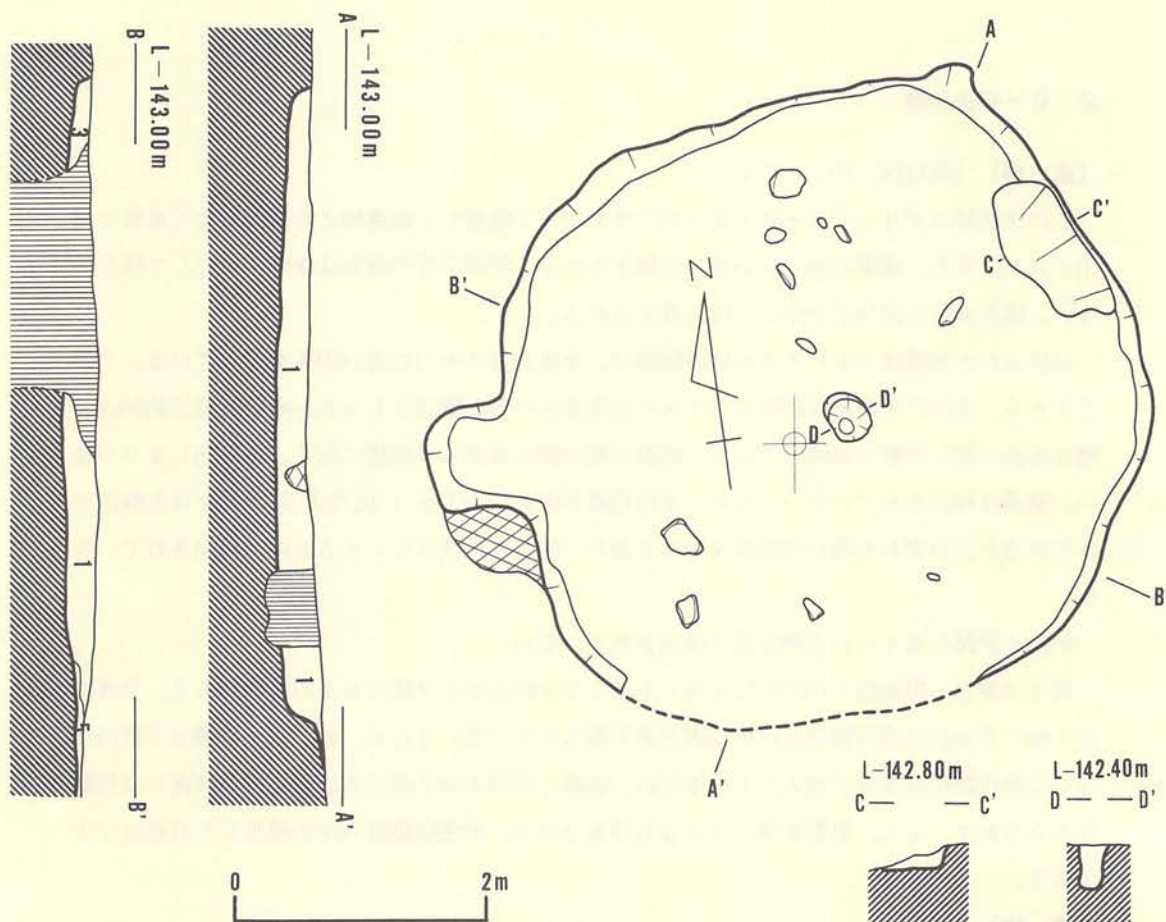
## 3) E-22住居跡

〔遺構〕（第12図、PL-7B）

この住居跡はグリッドD-21・D-22とE-21・E-22にまたがって位置し、D-22土坑-3、E-22土坑やD-23住居跡と重複している。重複遺構との新旧関係はD-22土坑-3とD-23土坑は新しく、E-22土坑は古い。

規模は径約5.40m×5.05mを測り、平面形は楕円形を呈している。壁高は15cm～25cmの範囲であるが、北壁は他の部分より若干高い。床面は周縁部に比較すると中央部が若干低いものの凹凸はない。また、床は黒褐色の砂質シルトを最大10cm位を貼って床面としている。貼床の厚





E-22住居跡埋土層注記

層位	色調	土性
1	7.5YR 5/2 暗褐色	砂質シルト。浮石多量混入。
2	7.5YR 5/1 黒褐色	耕作土。
3	7.5YR 5/2 黒褐色	砂質土。浮石混入。
4	7.5YR 5/1 褐色	シルト。浮石多量混入。

第12図 E-22住居跡（遺構）

さは場所によって若干差があるが、周縁部が薄く、中央部が厚い。なお、北東部の壁際の床面が壁から床面中央に向って緩斜面を示している。出入口に関連する施設である可能性がある。

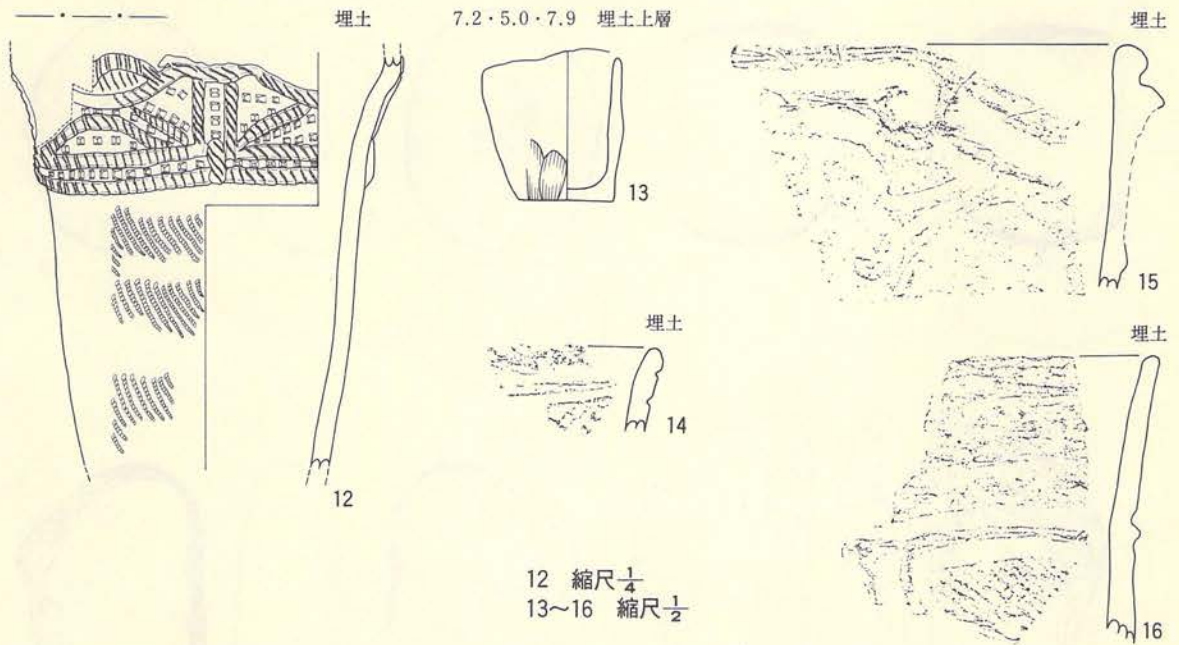
床面直上で検出された土坑は P<sub>1</sub> のみである。位置は床面ほぼ中央で、規模は径約40cm×30cm・深さ約35cmである。おそらく本住居跡の柱穴を構成するものと推定される。

本住居跡の床面では炉跡や、炉跡と考えられる焼成面は検出されていない。

埋土は黒褐色・暗褐色・褐色を呈するシルトや砂質シルトで構成され、4層に細分されている。いずれの土層にも浮石粒が多く混入し、締まりはあまりない。

〔遺物〕

土器（第13図、PL-45B・46A）



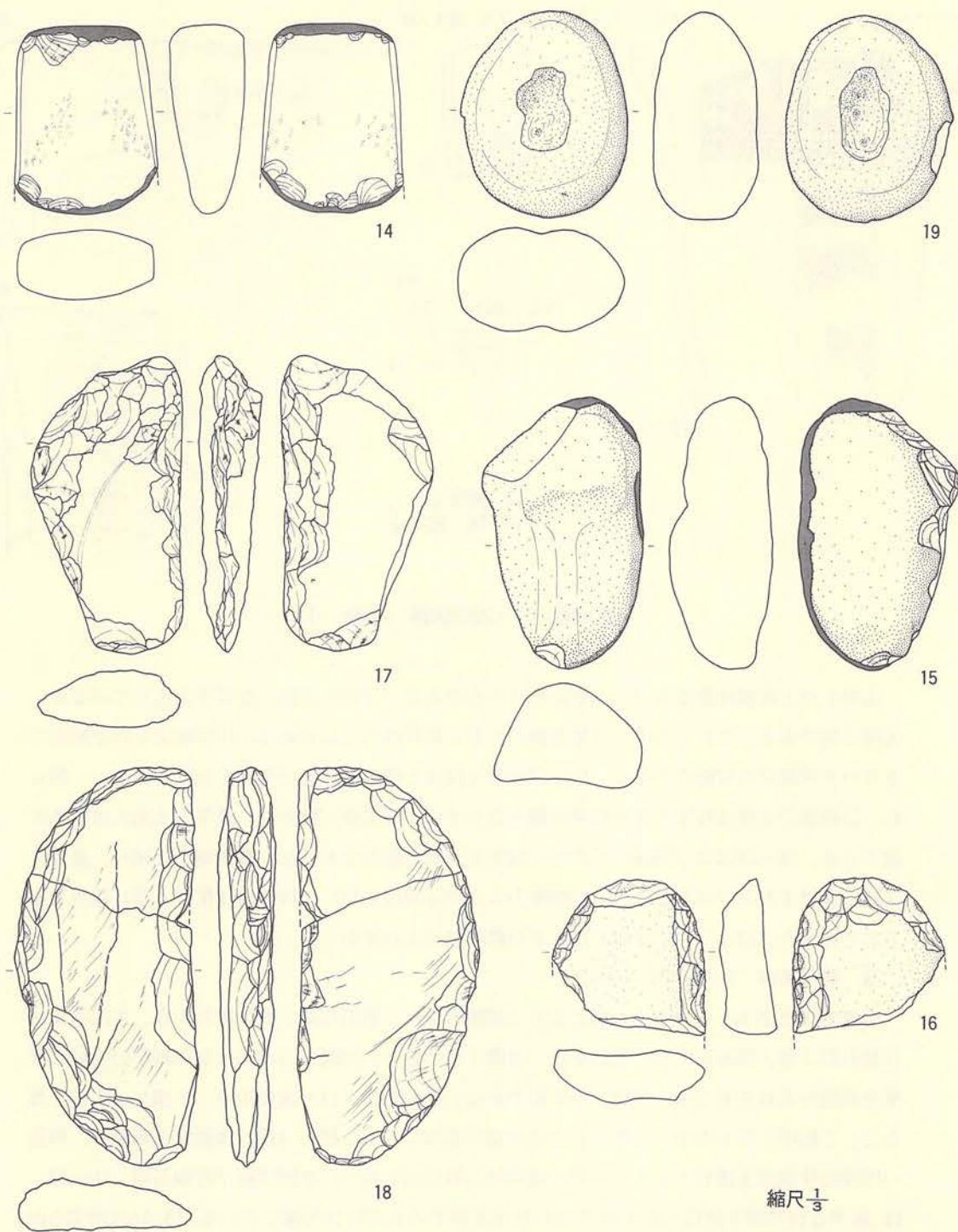
第13図 E-22住居跡（遺物-1）

完形1点と実測可能なもの1点を含めて5点である。小破片は他にも若干出土しているが、大同小異である。これらの中には第Ⅲ群の土器と第Ⅳ群の土器がある。13は無文なので断定できないがⅣ群系の可能性がある。12は口縁部文様帯と体部が2条の全周する隆帯によって限られ、口縁部の文様は隆帯と篋先刺突の組み合わせによる文様が付され、隆帯の上面には原体圧痕がある。14~16はほぼ同種のもので、隆帯と沈線の組み合わせと、磨消縄文（16）、渦巻文（15）を付すものである。これらの特徴から、12はⅢ群9類に、14~16はⅣ群4類に相当するものであろう。13については取り合えずⅢ群13類に入れておく。

#### 石器（第14・15図、PL-122）

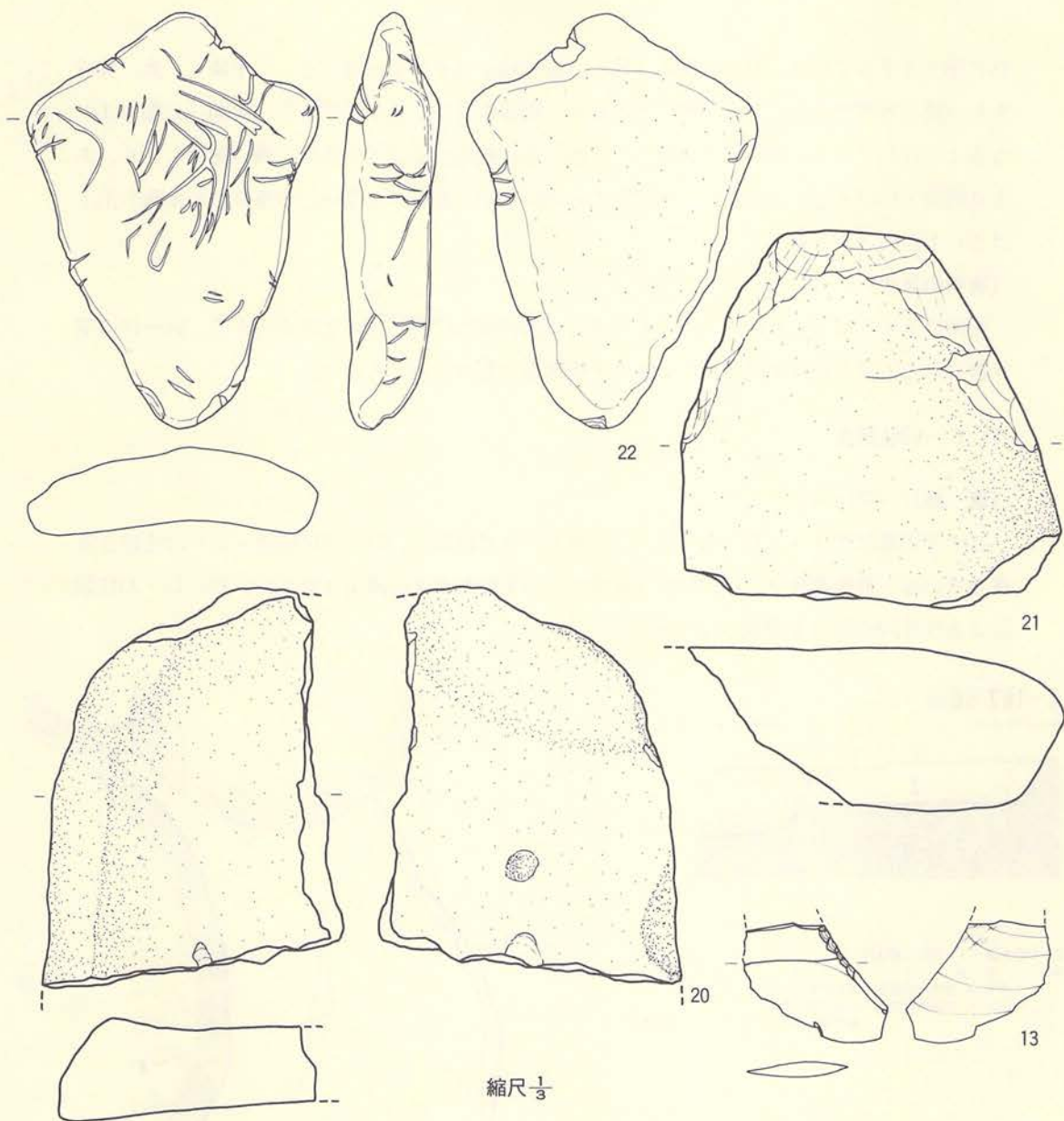
全部で10点出土している。器種としては切削器1点、磨製石斧1点、擦石1点、半円状扁平打製石器3点、凹み石1点、石皿2点、岩偶1点がある。切削器（13）は薄い剥片の周縁に簡単な剥離を入れたもので、形態は不定形である。磨製石斧（14）は使用中に欠損し、刃部を擦石として転用したもので、石斧としては大型の部類に入る。擦石（15）は断面三角形で、細長い円礫の稜線部を擦石としたもので、周縁部に敲打痕をもつ。半円状扁平打製石器（16~18）は、扁平な自然礫を使用したもので、17・18は完形であるが16は欠損している。16・18は所謂半円状を示すように周縁部を敲打剥離調整している。17も周縁部に敲打剥離がある。いずれも直線部分に主たる使用面をもつ。凹み石（19）はやや扁平な円礫の両面に凹みをもち、磨石としても





縮尺  $\frac{1}{3}$

第14図 E-22住居跡 (遺物-2)



第15図 E-22住居跡（遺物-3）

使用している。石皿（20・21）はやや大き目の自然礫の平坦面を利用したもので、特別な加工は施していない。20は全体の $\frac{1}{3}$ 位の残存と考えられるが、使用面が周囲より若干窪んでいる。21は全体の $\frac{1}{2}$ 位であるが、二次的な火熱を受けて周囲が剥落している。岩偶（22）は白色粗粒凝灰岩塊から削り出したもので、法量は全長12.1cm、全巾8.5cm、厚み2.2cm、重さ115gである。形状は、左右の肩部を結んだ線を最大巾とし、頭部はその線から隅に丸味をもつ三角形



状に作りだされている。足部（図の下端）は肩部線よりそのまま細くなって下降し、隅に丸味をもつ逆三角形である。全体の割付で見ると、肩部線を境にして頭部を1、体部～足部を3となるようにしている。身体部の表出は、すべて細い線刻によっているが、浅い部分もあり、あまり明瞭とはいえない。側面にも線刻が入っているが、裏面にはない。本遺跡での本種の出土はこれ1点のみである。

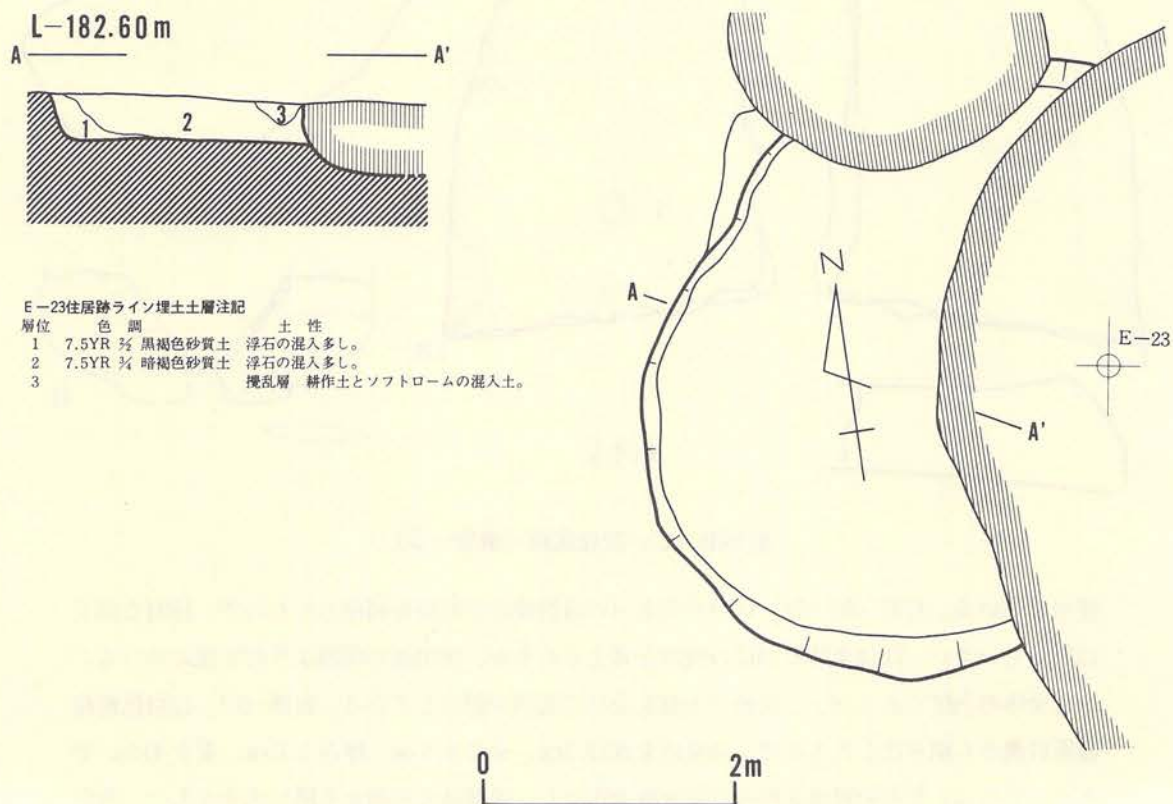
#### 〔遺構の年代〕

床面直上から出土した12の土器からみると中期前葉に位置づけることができる。14～16の第IV群に入る土器との共伴関係にも大きな矛盾はないものと考えられる。

#### 4) E-23住居跡

##### 〔遺跡〕（第16図）

この住居跡はグリッドE-22・E-23にまたがって位置し、D-23住居跡・E-22土坑と重複している。重複遺構との新旧関係は重複するいずれも本住居跡より新しく、特にD-23住居跡は本住居跡の約 $\frac{1}{2}$ を破壊している。



検出された部分の規模は径（南北方向）約5.10cmで、平面形は明確でないが、検出された部分から円形か楕円形を呈するものと推定される。壁高は5cm～35cmの範囲で北壁は一般に高く、壁は床面に対して若干外傾している。床面には凹凸もほとんどみられずほぼ水平に近く、良く締まっていて固い。貼床された痕跡はない。壁溝は検出されていない。

床面上で検出された土坑は P<sub>1</sub> のみで、規模は径約37cm×32cm・深さ約57cmで、平面形は円形である。この土坑は柱穴状であるが、位置が床面中央より若干南西に寄っていることや、検出されたのが1基だけであるので、本住居跡の柱穴を構成する一部なのかは明確でない。

この住居跡では炉跡や炉跡と考えられる焼成面は検出されていない。

埋土は黒褐色と暗褐色を示す浮石粒混じりの砂質シルトで構成され、全体的に良く締まって固い。

#### 〔遺物〕

出土はない。

#### 〔遺構の年代〕

遺物の出土がないので断定できないが、D-23住居跡によって東側が破壊されていることから考えると、D-23住居跡より古い住居跡であることは事実である。このことから考えると、前期末葉から中期初葉頃に位置づけておきたい。

### 5) G-16住居跡

#### 〔遺構〕（第17図、PL-8・PL-9A）

この住居跡はF-15・F-16、G-15・G-16にまたがって位置し、G-16住居跡内土坑-1・2・3およびA-12溝跡と重複している。重複遺構との新旧関係は、重複するいずれの遺構より本住居跡の方が古い。特に、本住居跡の北側から北西部分がA-12溝跡の雨裂崩壊によって大きく削り取られている。A-12溝跡の北側に本住居跡が延びていないので、A-12溝跡内に本住居跡北側の限界があるものと考えられる。

検出された部分の規模は長軸（南-北）約11m、短軸（東-西）約6.6mであり、平面形は一部明確でない部分もあるが、長楕円形か隅丸長方形を示すものと推定される。壁溝は高い部分では95cmと高く、低い部分では10cm位と北に寄るほど低くなる。これは立地する地形が北に向う傾斜を示していることによるものである。壁は床面に対して軽く外傾する部分が多いが、一部はほぼ直角を示す部分もある。床面は比較的締りが良く、南側が若干高く北側の床面とは約10cmの比高がある。また、本住居跡の床面では、前記の土坑以外に183基の柱穴状の小土坑が検出されている。柱穴状土坑の規模は図版中に規模一覧表として記したが、それぞれによって差があり、一概に平均化することは不可能である。また、土坑以外に巾約10cm～20cmで深さ10



cm位の壁溝状の溝跡が4条検出されている。全体的にみると、床面に10cm位の段差をもつ面が3面あり、それらはいずれも壁溝状の溝で限られており、何棟かの住居跡が重複し合う様子を示しているものであろう。

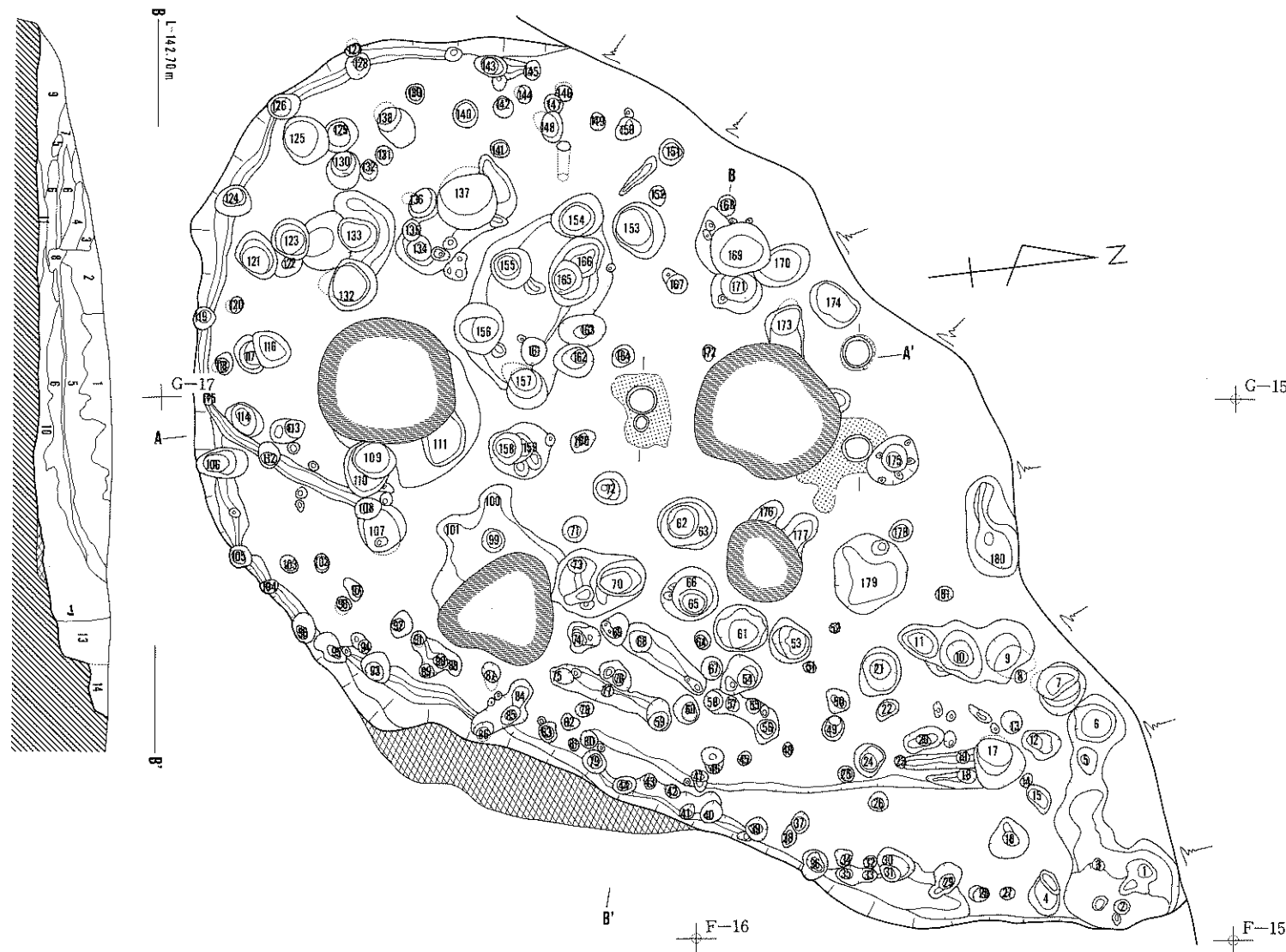
この住居跡には、床に土器を埋め込んだ埋設土器炉が3基検出され、埋設土器の周囲の床面は焼成によって赤変していた。炉-1 (FP-1) は検出された部分のほぼ中央に位置し、東西に接して2個の土器が埋設されている。西側の土器(17)の方が東側より大きく、頸部から上位を欠失しているが残存器高47cm・底径14cmの大きさがあり、器形は深鉢形とおもわれる。東側の土器(18)は、体部下位～底部までを残存し、残存器高12.5cm・底径13.5cmである。器形は深鉢形で体部上位が大きく膨らむ吹浦型となるようである。西側にある土器の内部には拳大の円礫が6個入っており、その上位に床面と同じ面まで土を埋めている。東側の土器はすべて土だけであった。土器周囲の床面は、焼土も厚さ1cm以下と焼成の痕跡を残すのみであるが、面的な広がりには約70cm×45cm位の範囲がある。炉-2 (FP-2) は北端部やや西寄りのA-12溝跡沿いに位置し、頸部から上位と底部を欠失した土器(19)が埋設されている。土器の大きさは残存器高約38cm・残存部口径約25cmである。この土器周囲の床面は非常に小範囲が微かな焼成の痕跡を残すのみである。炉-3 (FP-3) は先の炉-2の東約90cmに位置し、埋設された土器の大きさは残存器高約30cm・残存口径約25cmで、頸部から上位と底部を欠失している。土器周囲の床面は約50cm×50cm位の範囲が焼成を受けた瘍跡を残しているが、層としては1cm未満である。埋設土器内部の焼土は炉-1・炉-2・炉-3ともに観察される。その他、炉-1と炉-3には炭化物の純層ともいえる層がみられる。このように埋設土器内に焼土層や炭化物層が観察されることは比較的長期に亘る使用があったことによる結果であろう。

埋土は、黒褐色・黒色・褐色・明褐色等を呈する浮石混じりの砂質シルトが主体で構成されているが、7層と9層は八戸火山灰や八戸浮石流凝灰岩が堆積した土層であり、このことは自然堆積である程度埋没した所で9層から上位の埋土が投棄され、人為的に埋め戻された状況を示すものであろう。

以上、本住居跡の検出された状況の概略を説明したが、先にも話した如く、非常に多くの柱穴状の土坑、複数の壁溝状の溝跡、段差のある床面等から、本住居跡は複数の住居跡がお互いに重複し合うことによって形作られた結果であろうことが推定される。次にこれらの状況を踏まえて、個々の住居跡に分解してみたいとおもう。しかし、これは現地調査中に現地で把握確認された結果ではないことを付記しておく。

### 1 号 (第18図A)

この住居跡は東壁北端部の壁と壁溝および6基の柱穴状土坑によって推定した。柱穴の規模は、P<sub>0</sub> (42cm×36cm・底面141.00m)、P<sub>21</sub> (42cm×36cm・底面140.83m)、P<sub>70</sub> (36cm×



**Bライン埋土層注記**

層位	色調	土性
1	10 YR 5/1 黒色	Aラインの1層と同じ。
2	10 YR 5/2 暗褐色砂質シルト	Aラインの褐色土グループに類似。
3	10 YR 5/3 暗褐色砂質シルト	2層に近いが2層より明色。
4	〃	下半に川砂を多量に含む。
5	10 YR 5/4 鈍い黄褐色	八戸火山灰上層土。
6	7.5YR 5/2 明褐色	Aラインの9層と同じ。
7	10 YR 5/3 黒褐色～暗褐色	砂質シルト。8層より暗色。
8	7.5YR 5/4 褐色	Aラインの8層と同じ。
9	10 YR 5/3 黒褐色	砂質シルト。
10	7.5YR 5/3 暗褐色	Aラインの13層と同じ。
11	10 YR 5/3 暗褐色	砂質シルト。ソフトロームを僅少含む。
12	10 YR 5/4 黄褐色	砂質シルト。ソフトロームを僅少含む。
13	10 YR 5/3 黒褐色	砂質シルト。
14	10 YR 5/3 黒褐色	砂質シルト。13層に類似。

**伊勢土層注記**

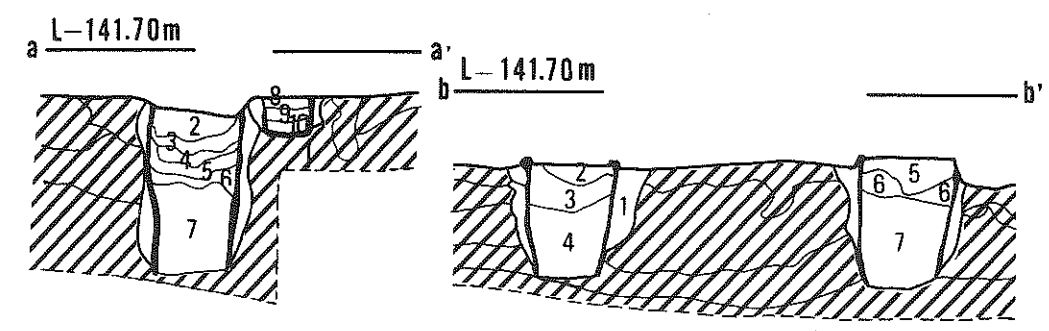
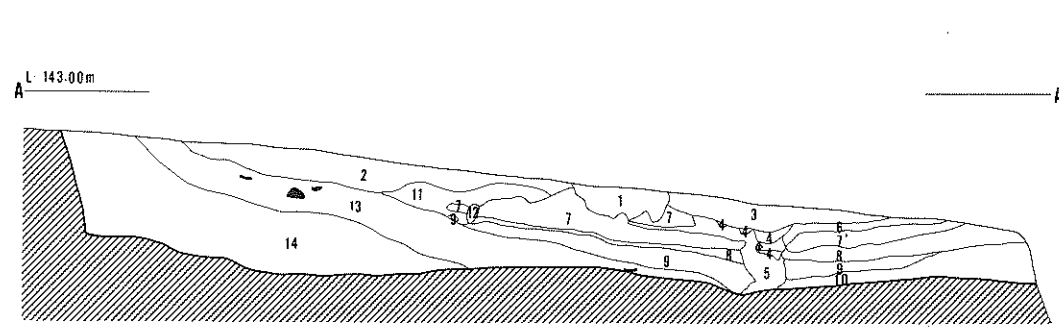
層位	色調	土性
1	10 YR 5/3 暗褐色	少し軟かい砂質シルト。
2	10 YR 5/3 黒褐色	少し軟かく粗い砂質シルト。
3	10 YR 5/4 褐色	火山灰+粗い砂質シルト。
4	10 YR 5/3 褐色～暗褐色	硬い砂質シルト。
5	10 YR 5/3 黒色	硬い粗い砂質シルト。
6	10 YR 5/3 土褐色	ソフトロームと汚れた砂質シルトとの混合。

**G-16住居跡Aライン埋土層注記**

層位	色調	土性
1	10 YR 5/3 黒色砂質シルト	少し汚れた八戸火山灰ブロック混入。
2	10 YR 5/3 黒色	浮石混入。
3	10 YR 5/3 暗褐色	汚れた火山灰の薄層を中層に含む。
4	10 YR 5/4 鈍い黄褐色	汚れた八戸火山灰。
5	10 YR 5/3 〃	3層に類似。
6	10 YR 5/4 褐色	汚れた火山灰と3層の土の混合土。
7	10 YR 5/4 鈍い黄褐色	八戸火山灰中層土類似の土。
7'	7.5YR 5/3 + 7.5YR 5/2 + 7.5YR 5/3 鈍い橙～褐色～明褐色	砂質シルト。
8	7.5YR 5/4 褐色	7層に類似。汚れは全くなし。
9	7.5YR 5/4 明褐色	砂質シルト。
10	7.5YR 5/4 褐色	砂質シルト。
11	7.5YR 5/3 暗褐色	砂質シルト。木根貫入。
12	〃	砂質シルト。
13	〃	11層に近似。完形土器含む。
14	7.5YR 5/3 黒褐色	11・13層に近似。若干暗色。

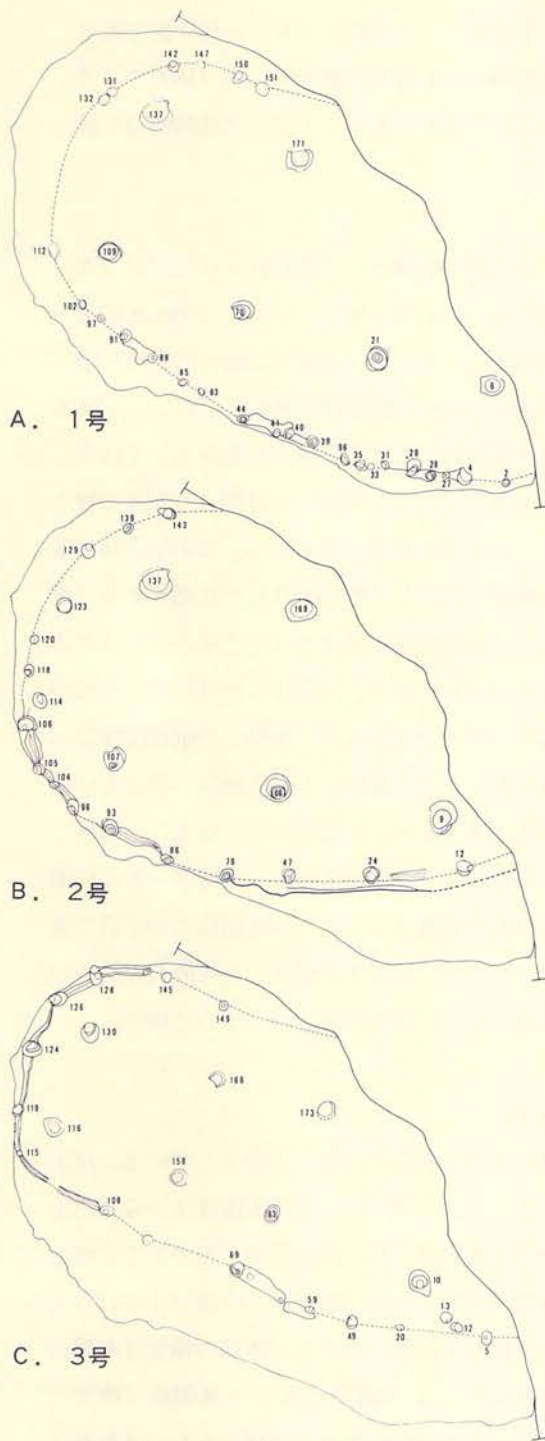
**柱穴計測値一覧表**

No.	長径×短径	底面の高さ	No.	長径×短径	底面の高さ	No.	長径×短径	底面の高さ
1	28cm×20cm	141.49m	51	12cm×10cm	141.53m	101	26cm×	141.134m
2	12cm×12cm	141.29m	52	10cm×8cm	141.39m	102	16cm×14cm	141.33m
3	12cm×8cm	141.48m	53	40cm×36cm	141.30m	103	20cm×16cm	141.41m
4	36cm×28cm	141.44m	54	18cm×18cm	140.95m	104	16cm×10cm	141.58m
5	25cm×18cm	141.35m	55	16cm×13cm	141.26m	105	20cm×20cm	141.58m
6	42cm×36cm	141.00m	56	16cm×15cm	141.20m	106	34cm×24cm	141.34m
7	46cm×40cm	140.92m	57	14cm×14cm	141.335m	107	42cm×40cm	180.53m
8	14cm×10cm	141.44m	58	20cm×18cm	141.32m	108	25cm×22cm	141.18m
9	36cm×30cm	140.93m	59	24cm×24cm	141.19m	109	40cm×32cm	140.58m
10	40cm×40cm	140.94m	60	24cm×22cm	141.205m	110	52cm×46cm	140.77m
11	36cm×22cm	140.90m	61	48cm×46cm	140.73m	111	40cm	140.79m
12	34cm×26cm	141.27m	62	30cm×24cm	140.85m	112	26cm×18cm	141.28m
13	20cm×20cm	141.17m	63	56cm×42cm	141.18m	113	16cm×16cm	141.30m
14	14cm×10cm	141.50m	64	17cm×14cm	141.25m	114	38cm×26cm	141.30m
15	28cm×16cm	141.20m	65	25cm×24cm	140.76m	115	10cm×10cm	141.34m
16	40cm×40cm	141.485m	66	50cm×50cm	140.63m	116	38cm×32cm	141.13m
17	34cm×32cm	141.07m	67	22cm×20cm	141.295m	117	30cm	141.26m
18	20cm×10cm	141.37m	68	10cm×10cm	141.22m	118	22cm×16cm	141.07m
19	12cm×12cm	141.37m	69	25cm×26cm	141.35m	119	20cm×20cm	141.28m
20	15cm×10cm	141.23m	70	36cm×36cm	140.85m	120	16cm×16cm	141.14m
21	42cm×36cm	140.83m	71	25cm×22cm	141.09m	121	46cm×36cm	141.04m
22	24cm×15cm	141.27m	72	32cm×30cm	141.32m	122	32cm×	141.57m
23	10cm×10cm	141.40m	73	〃	141.01m	123	40cm×34cm	141.23m
24	30cm×28cm	141.15m	74	18cm×13cm	141.23m	124	35cm×28cm	141.51m
25	16cm×16cm	141.265m	75	22cm×14cm	141.23m	125	44cm×42cm	141.09m
26	18cm×18cm	141.34m	76	14cm×10cm	141.30m	126	30cm×22cm	141.44m
27	24cm×20cm	141.60m	77	12cm×10cm	141.53m	127	15cm×15cm	141.48m
28	20cm×15cm	141.46m	78	16cm×15cm	141.345m	128	20cm	141.68m
29	26cm×24cm	141.27m	79	20cm×25cm	141.285m	129	30cm×24cm	141.19m
30	10cm×10cm	141.50m	80	20cm×14cm	141.43m	130	36cm×32cm	141.38m
31	20cm×14cm	141.29m	81	12cm×10cm	141.51m	131	18cm×16cm	141.16m
32	10cm×10cm	141.59m	82	16cm×14cm	141.735m	132	20cm×18cm	141.45m
33	12cm×12cm	141.49m	83	16cm×12cm	141.55m	133	38cm×30cm	141.34m
34	12cm×10cm	141.45m	84	25cm×20cm	141.25m	134	20cm×20cm	141.39m
35	16cm×10cm	141.15m	85	20cm×18cm	141.25m	135	20cm×14cm	141.31m
36	24cm×24cm	141.33m	86	20cm×12cm	141.28m	136	34cm×24cm	141.11m
37	16cm×	141.485m	87	20cm×16cm	141.465m	137	58cm×50cm	140.62m
38	14cm×	141.485m	88	〃	141.65m	138	40cm×30cm	141.12m
39	22cm×20cm	141.13m	89	18cm×16cm	141.43m	139	20cm×18cm	141.38m
40	20cm×18cm	141.37m	90	14cm×14cm	141.41m	140	24cm×24cm	141.10m
41	14cm×12cm	141.58m	91	12cm×12cm	141.31m	141	20cm×20cm	141.25m
42	12cm×12cm	141.33m	92	25cm×20cm	141.05m	142	20cm×18cm	141.26m
43	15cm×12cm	141.57m	93	30cm×24cm	141.12m	143	33cm×18cm	141.21m
44	20cm×15cm	141.50m	94	14cm×12cm	141.70m	144	〃	141.34m
45	16cm×12cm	141.42m	95	16cm×10cm	141.62m	145	18cm×16cm	141.32m
46	25cm×20cm	141.38m	96	16cm×12cm	141.40m	146	16cm×16cm	141.15m
47	16cm×10cm	141.32m	97	16cm×16cm	141.44m	147	16cm×16cm	141.91m
48	17cm×10cm	141.42m	98	16cm×13cm	141.58m	148	30cm×20cm	141.24m
49	〃	141.25m	99	20cm×20cm	141.00m	149	18cm×16cm	141.19m
50	24cm×20cm	141.20m	100	26cm×	141.25m	150	24cm×20cm	141.22m



第17図 G-16住居跡 (遺構-1)





第18図 G-16住居跡 (遺構-2)

36cm・底面140.85m)、 $P_{108}$  (40cm×32cm・底面140.58m)、 $P_{140}$  (58cm×50cm・底面140.62m)、 $P_{173}$  (48cm×48cm・底面140.86m)で、東側柱穴列4基と西側柱穴列2基が検出されている。本来は東西ともに4基の柱穴で構成され、西側柱穴列北端の2基は雨裂崩壊によって削り取られてしまったものと考えられる。検出された部分から推定される規模は、長軸10m以上、短軸6m位で、平面形は長楕円形を示すであろう。東壁際の床面には坑穴状の小柱穴が不等間隔で並び、その間を断続する壁溝が周っている。本跡に明らかに伴うとおもわれる床面は、北東部に若干残存するのみであるが、この部分は良く締り固い。

## 2号 (第18図B)

本住居跡は南東部の壁とそれに沿う壁溝および坑穴状の小柱穴や7基の柱穴状土坑によって推定したが、前の1号跡に交差するように位置し、1号跡より新しいと考えられる住居跡である。柱穴の規模は、 $P_9$  (36cm×30cm、底面140.93m)、 $P_{66}$  (50cm×50cm、底面140.63m)、 $P_{106}$  (42cm×40cm、底面180.53m)、 $P_{113}$  (38cm×26cm、底面141.30m)、 $P_{122}$  (40cm×34cm、底面141.23m)、 $P_{140}$  (58cm×50cm、底面140.62m)、 $P_{171}$  (70cm×55cm、底面140.59m)であり、本来は東側柱穴列と西側柱穴列が対を成す配置関係を示すものであろう。これを妥当なものとする、全体規模は長径10m以上、短径約6.50m位と推定され、平面形は長楕円形を示すものとおもわれる。新旧関係を埋土土層図で検

討すると、前の1号跡の埋土を掘り込んでいることが判り、1号跡より新しい住居跡である。北東壁付近の床面の高低差をみると12cm～15cm位を測り、1号跡の床面をも掘り込んでいる。本住居跡に伴う床面は、東壁寄りに小範囲残存するのみであるが、この部分は比較的良く締った固い面を作っている。

### 3号 (第18図C)

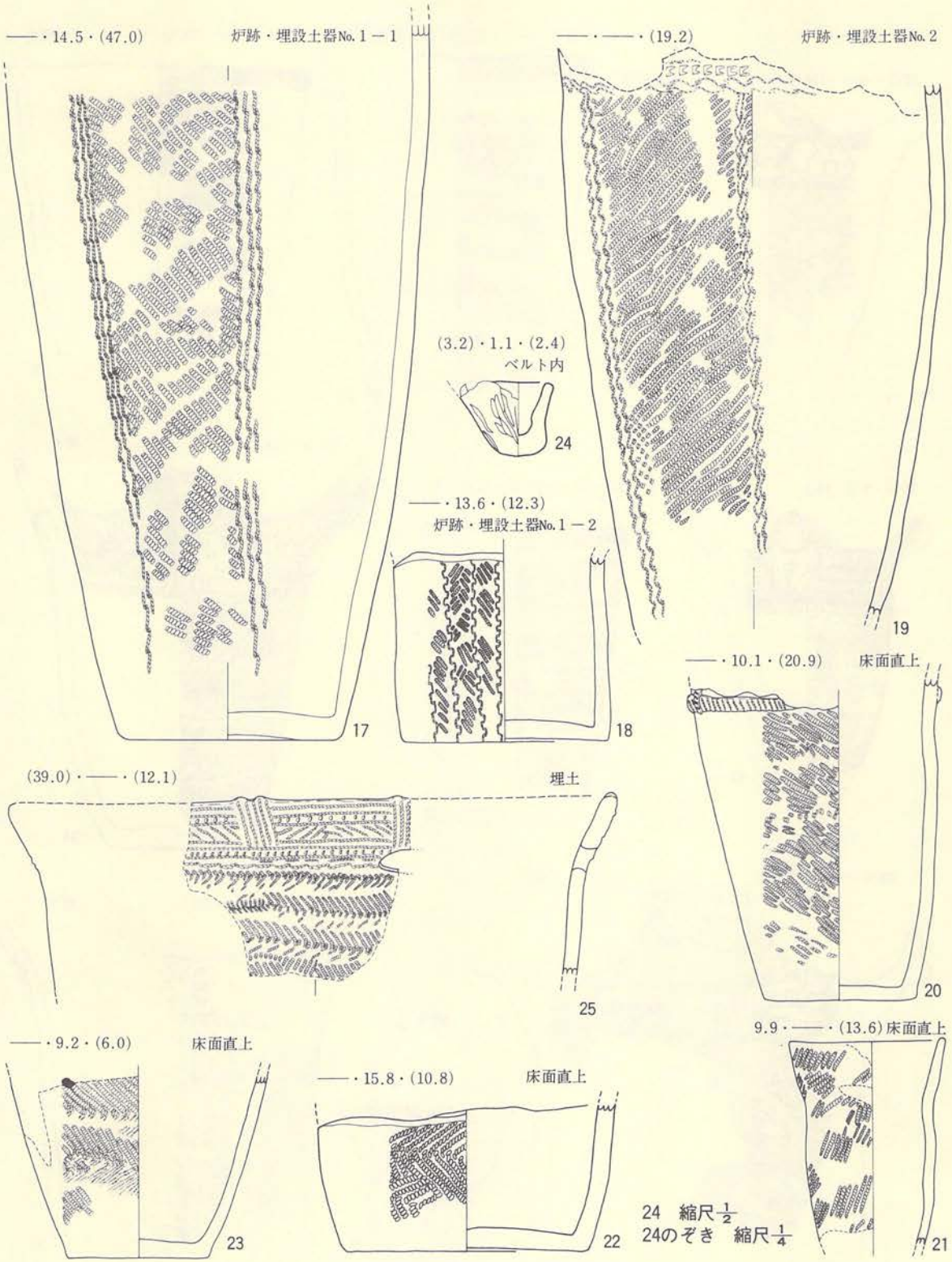
この住居跡は南から南西部にかけての壁やそれから続く壁溝と、7基の柱穴状土坑の存在によって推定された。柱穴の規模は、P<sub>10</sub> (40cm×40cm・底面140.94m)、P<sub>62</sub> (56cm×42cm・底面141.18m)、P<sub>160</sub> (28cm×28cm・底面140.96m)、P<sub>115</sub> (38cm×32cm・底面141.13m)、P<sub>129</sub> (36cm×32cm・底面141.38m)、P<sub>168</sub> (30cm×30cm・底面141.08m)、P<sub>175</sub> (34cm×34cm・底面140.14m)で、東側柱穴列と西側柱穴列が対をなし、全体が8基かもしくは北にもう1間延びて10基で構成されるものであろう。平面形は前の1号跡・2号跡より短径が狭くなる長楕円形を示し、全体規模は長径約11m以上、短径4.5m以上であろう。この住居跡の床面は前期の柱居跡の床面より低い面で、2号跡の床面と比較して約20cmほどの比高がある。埋土土層図から新旧関係を検討すると、土層図-Aでは重複関係を示すような土層の乱れは北寄りの部分(G-16住居跡内土坑-2との重複部分)でみられるが、南壁よりでは観察されない。土層図-Bでは東壁寄りで1号跡～2号跡の重複を示す部分はあるが、本跡との重複関係は示していない。また、本跡の床面はもっとも低い面であるが、土層図-A・土層図-Bともに貼床の存在を示す土層がない。これらのことから単純に考えると、土層図-Aではもっとも新しい状況を示し、土層図-Bではもっとも古いことを表わしている。しかし、土層図-Bに床面の段差が記録されており、この付近の埋土12層の存在を考慮すると、この床面段差の位置で他の住居跡と重複し合い、そのまま壁が立ち上っていたのを、調査中に見落した可能性が大きい。もしそうだとすると、本跡がもっとも新しい住居跡になる。床面は良く締っていて固い。

### 〔遺物〕

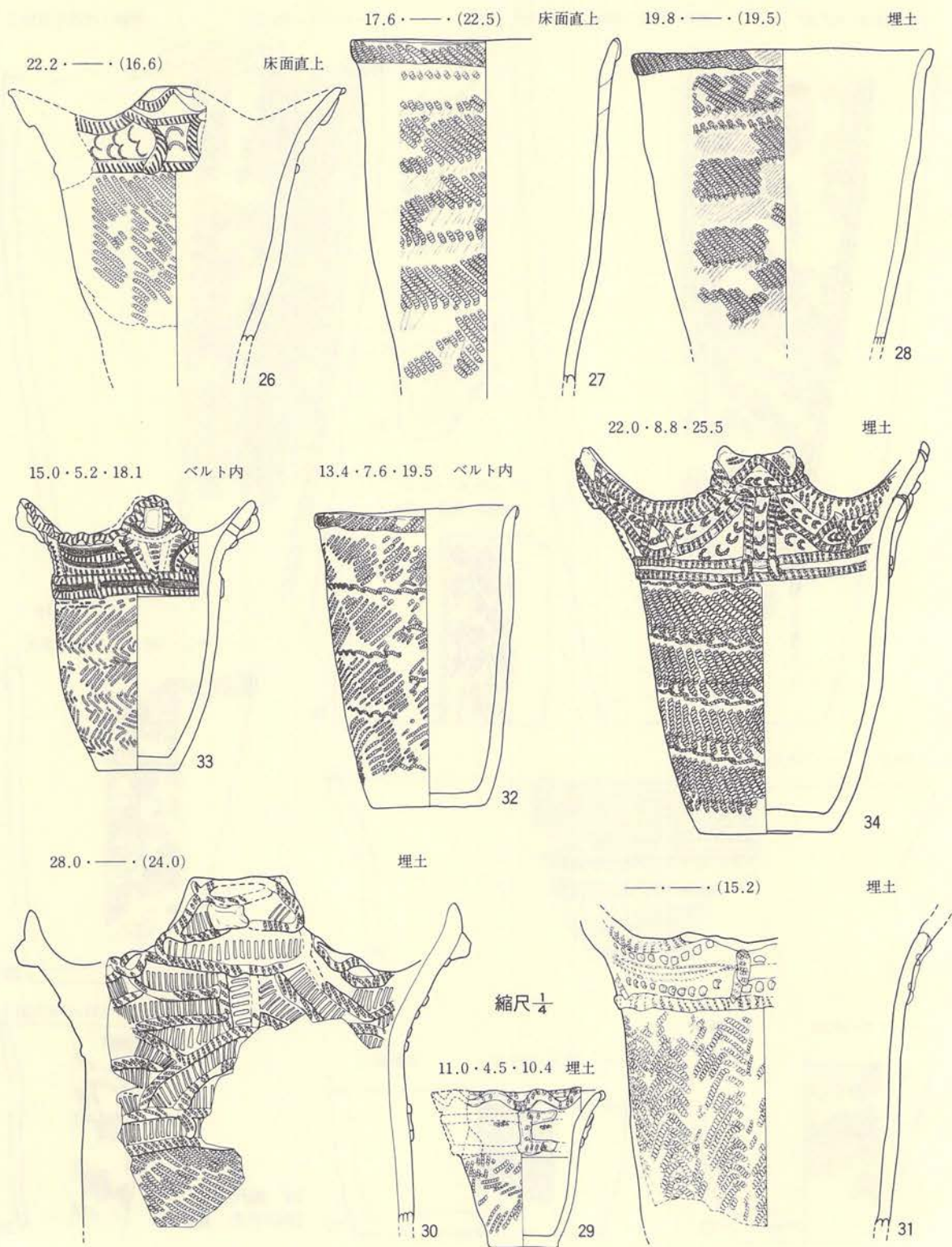
#### 土器 (第19～22図、PL46B～PL-48の28～49)

実測図26個体、拓本7個体の合計33個体を掲載したが、破片では他にも出土している。出土状況を見ると17～19は炉跡に埋設された土器であるし、20～23・26～28は床面直上からの出土であるが、他の土器はいずれも埋土内からの出土である。32～34・38は完形土器であるが埋土内からの出土である。これらの土器は17～48は第Ⅲ群に属し、49は第Ⅳ群に位置づけられる土器であろう。炉に使用された17～19は、いずれも口縁部文様帯を欠失し、体部の縄文は末端に2個の結節をもつ原体LR (17)・RL (19)の縦回転による綾絡文をもつ単節斜行縄文が付されている。18には原体LRの2本の原体を連結させて縦回転させた綾絡文をもつ単節斜行縄文を付している。なお、19の頸部(体部上端)には横走する綾絡文があり、その上位に半截



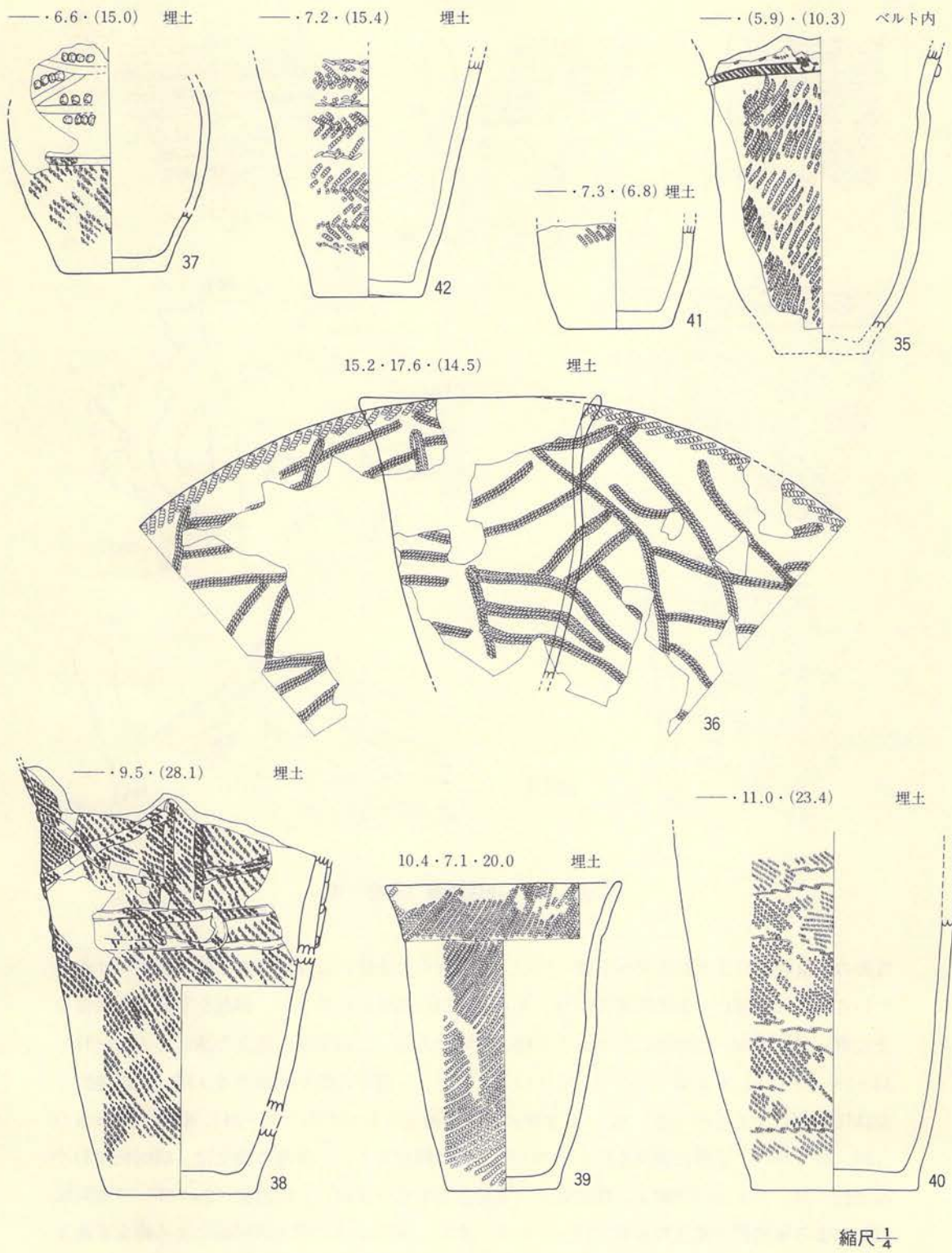


第19図 G-16住居跡 (遺物-1)

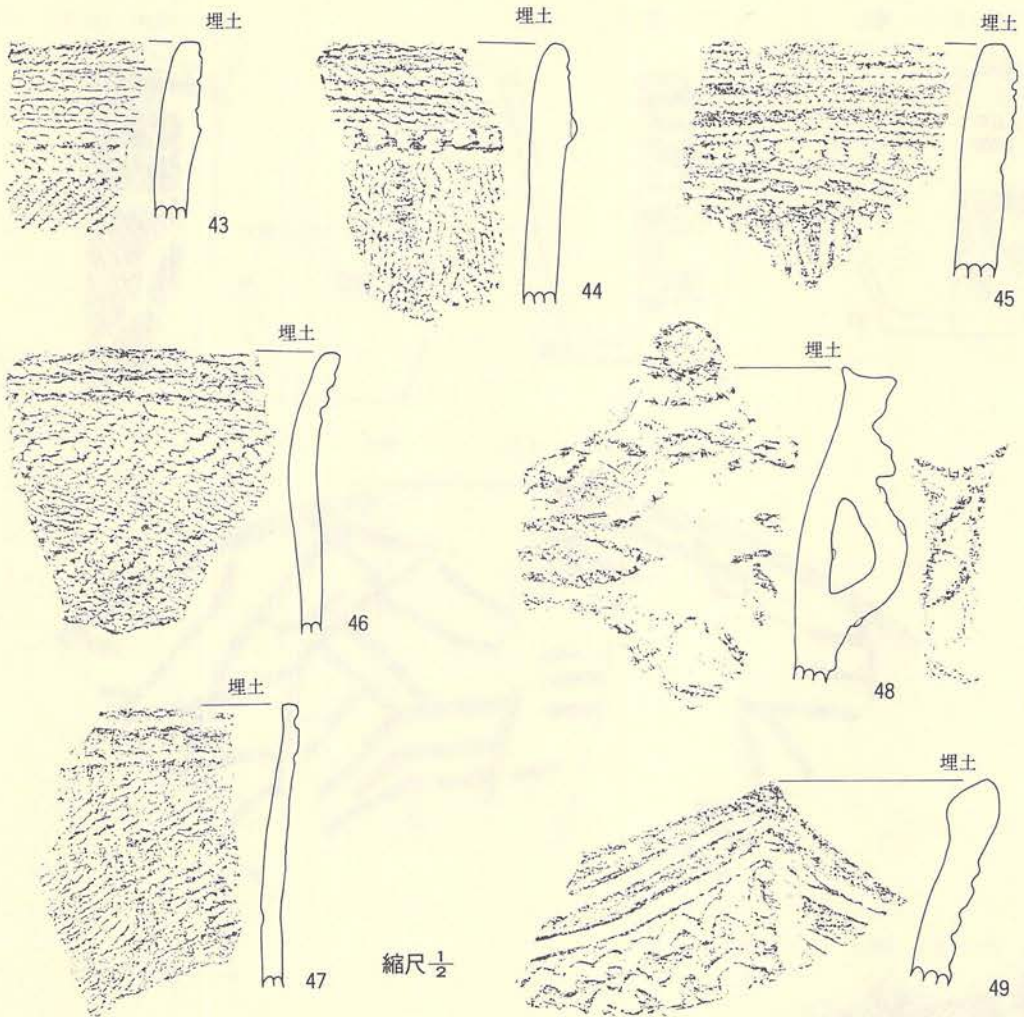


第20図 G-16住居跡 (遺物-2)





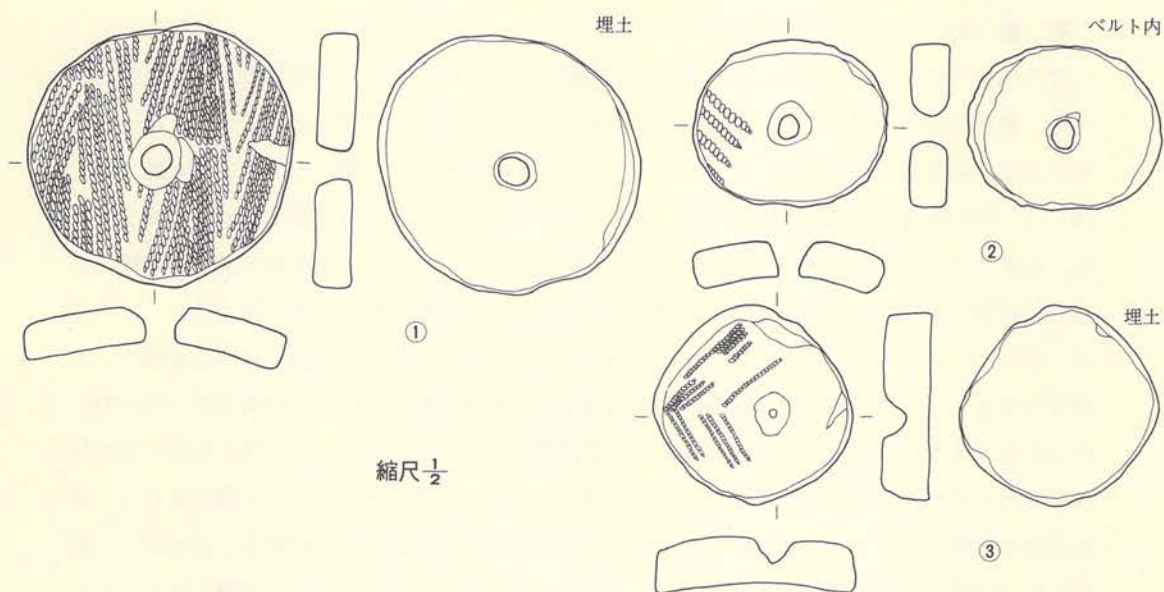
第21図 G-16住居跡 (遺物-3)



第22図 G-16住居跡(遺物-4)

竹管の斜位刺突による刺突列が全周(?)し、そのさらに上位には原体Lの原体圧痕文が付されている。20は頸部に1条の隆帯が周り、さらに、口縁端部から垂下し、頸部を全周する隆帯の上に乗っているが、口縁部に付された文様は不明である。このように施文方法は26・29~31・33~35・37・38にも共通する面をもっている。しかし、隆帯の間を充填する文様は、直線的な原体圧痕文によるもの(29・33)、C字状の原体圧痕文をもつもの(26・34)、刺突によるもの(30・31・37)、全面に縄文を付すもの(38)等の種類がある。体部の縄文は、横回転(33)や縦回転(31)による羽状縄文、横回転による綾絡文をもつ(34)、横回転(20・30)や縦回転(26)による単節斜行縄文等多量に亘っている。また、36のように原体の回転による縄文を地文





第23図 G-16住居跡（遺物-5）

としてもたないで、長目の原体を折り曲げて3条併行させて押圧するものもある。なお、25・27・28・32・39は地文としての縄文以外に文様をもたないものである。43~47は口縁部に数条の原体圧痕文をもつが、この中には頸部が若干肥厚しその上面にC字形の刺突痕をもつもの（44・45）や原体圧痕文の間に刺突列を充填するもの（43）もある。体部の縄文は単軸絡条体縦回転による木目状撚糸文を付すもの（44・45）と横方向の羽状縄文を付すもの（43）、原体LR横回転による単節斜行縄文のもの（46）、単節斜行縄文を付す原体に撚り戻しをかけたもの（47）等種々みられる。48は波状口縁を示し、突起部下位の器表には縦形の橋状突起がある。文様は器面に細い粘土紐を貼りつけ、その上面に原体回転による縄文を付している。49は波状口縁で、直線的な沈線と小波状の沈線によって施文されている。このような特徴から、43~47は第Ⅲ群2類、17~19は第Ⅲ群3類、20・36は第Ⅲ群4か5類、25・27は第Ⅲ群6類、26・29・34・35は第Ⅲ群8類、30・31・37は第Ⅲ群9類、38・48は第Ⅲ群10類、24は第Ⅲ群12類、21・27・28・32・39は第Ⅲ群14類にそれぞれ相当し、49は第Ⅳ群1類に位置づけることができるであろう。

#### 土製品（第23図）

土器片転用による有孔土製円盤が3点出土している。①は大型で径約7cm、②・③は約5cm位である。①・②は孔が貫通しているが、③は中ほどで止っている。周縁は良く擦られ、形が調整された痕跡を残しているが、形が正円ではなく歪んでいる。

## 石器 (第24～27図、PL-122C～124A)

37点出土している。この中には石鏃2点、石筥1点、切削器8点、打製石斧1点、磨製石斧5点、磨石3点、半円状扁平打製石器13点、凹み石1点、砥石3点が含まれている。出土状況を見ると、床面直上から出土したものはなく、いずれも埋土内から出土している。石鏃(23・24)は、23が先端部と基部を欠失しているので定かでないが、24は有茎型で茎部を欠失している。石筥(25)は断面三角形で縦長の剥片を利用して作っているが、先端部の調整は粗雑である。切削器(26～33)は不定形剥片の側縁や周縁部に片面剥離調整したものを主体としているが、中には31～33のように両面剥離をしているものもある。打製石斧(34)は断面菱形で、刃部が丸味をもつように成形され、周縁部が入念な両面剥離調整している。磨製石斧(35～39)には完形品はない。36～38は刃部を欠失し、35は頭部を欠失している。36～38とも頭頂部に敲打痕をもっており、楔状にして頭部を別の工具で叩く使用方法があったものと推定される。35は刃部を破損している。39は石材として粘板岩を使用し、局部的に磨き調整をしたもので、両面ともに自然面を多く残し、刃部は破損している。磨石(40～42)は扁平な円礫を使用したもので、41にはさらに両面に凹みをもつ。40は全面に磨きが入り、41・42とは性格を異にするものであろう。半円状扁平打製石器は半円状を示す扁平な礫を使用したもので、中には(43・45・51～53)周縁部を敲打剥離し、形態調整しているものもある。また、46・47・49～51・53のように擦石的要素をもつものもある。さらに、50には凹みをもつ。この種の石器は直線部に主たる使用面をもつ。凹み石(56)は一部を欠損しているが、扁平で長円形の自然礫を利用したもので、片面に凹みを、別の面に磨き面をもつ。砥石(57～59)は凝灰質砂岩を利用したもので、砥ぎ減りの著しいもの(57)もある。

### 〔遺構の年代〕

炉跡に埋設された土器は3点とも口縁部を欠失してはいるが、頸部を残す19の文様や18の推定される器形(吹浦型)そして体部の地文等から考えると、中期初頭に属する住居跡といえるだろう。埋土内から出土した完形土器は埋設土器より若干時間的に下るものである。

## 6) G-24住居跡

### 〔遺構〕 (第28図、PL-9B)

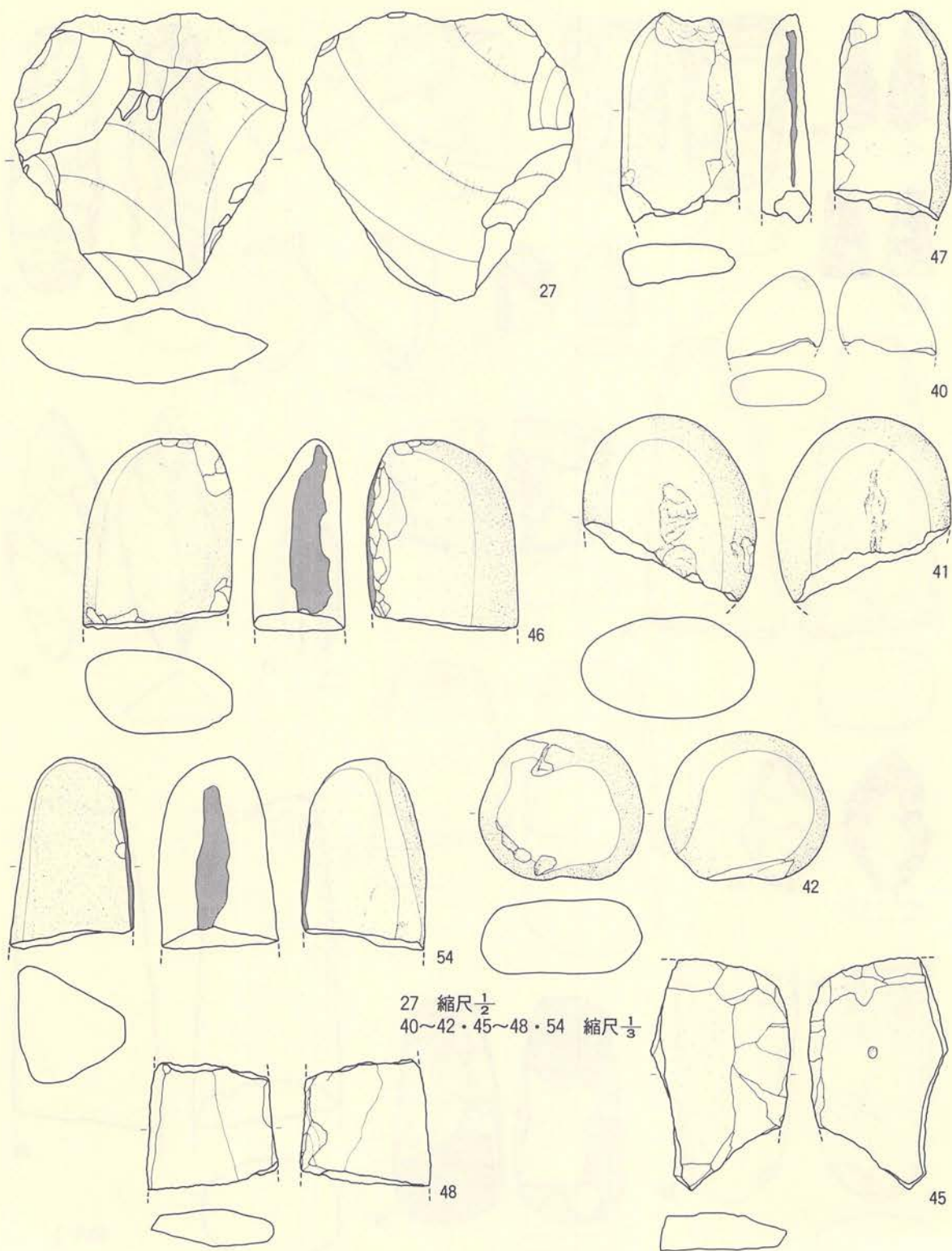
この住居跡はグリッドG-24・G-25にまたがって位置し、G-24土坑-1・G-24土坑-2、空掘等と重複している。重複遺構との新旧関係は、いずれの遺構よりも古い。本住居跡は耕作による削平や他遺構との重複によって残存状態が悪く、特に東側部分は壁も明瞭でない状況であった。柱穴や炉跡は検出されていないものの、西壁が良く残存していることから、住居跡と認定した。





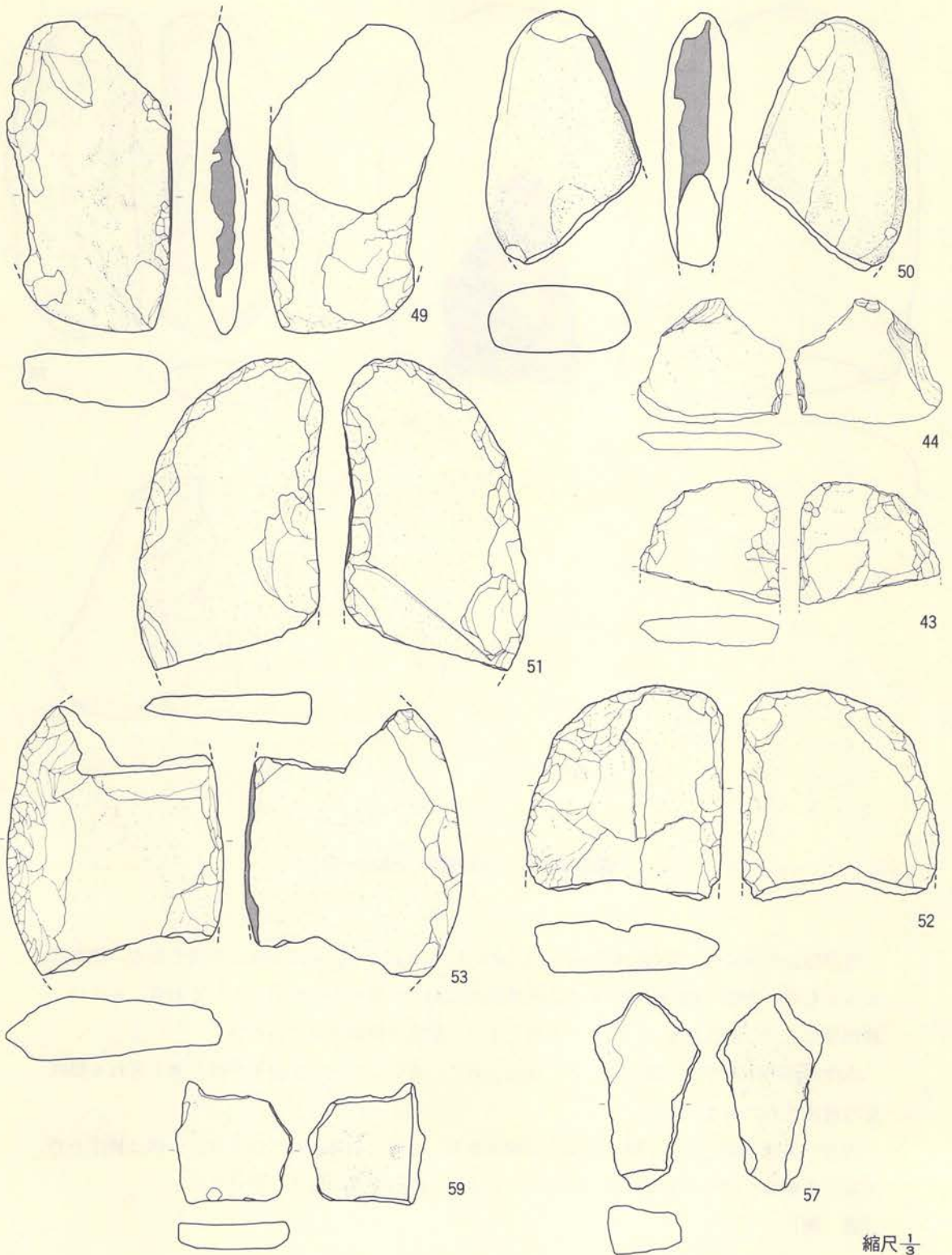
縮尺  $\frac{1}{2}$

第24図 G-16住居跡 (遺物-6)



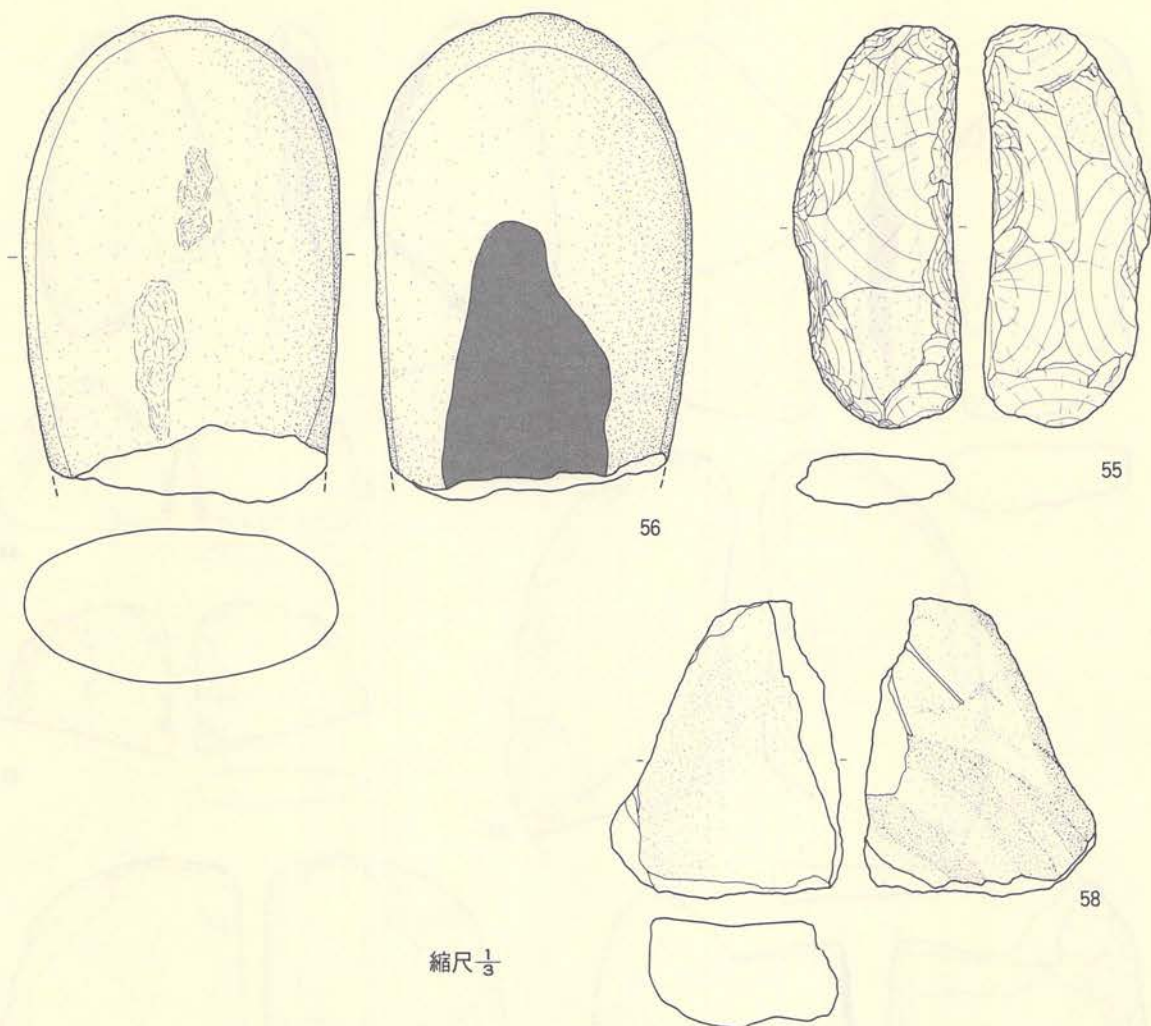
第25図 G-16住居跡 (遺物-7)





縮尺  $\frac{1}{3}$

第26図 G-16住居跡 (遺物-8)



第27図 G-16住居跡（遺物-9）

残存部分の規模は、東西約4.75m・南北約4.85mであるが、全体規模は不明である。壁高はもっとも高い西壁で約10cm位である。床面は東に向って緩やかな傾斜を示しており、さらに、耕作等によって攪乱を受け、しまりも良くない。壁高は検出されていない。

本住居跡の床面では土坑がまったく検出されていない。また、炉跡や炉跡と考えられる焼成面は検出されていない。

埋土は黒色と褐色を示す砂質シルトで構成され、2層に細分されているが、1層は耕作土である。2層は八戸浮石流凝灰岩の風化土であるので浮石が多く混入している。

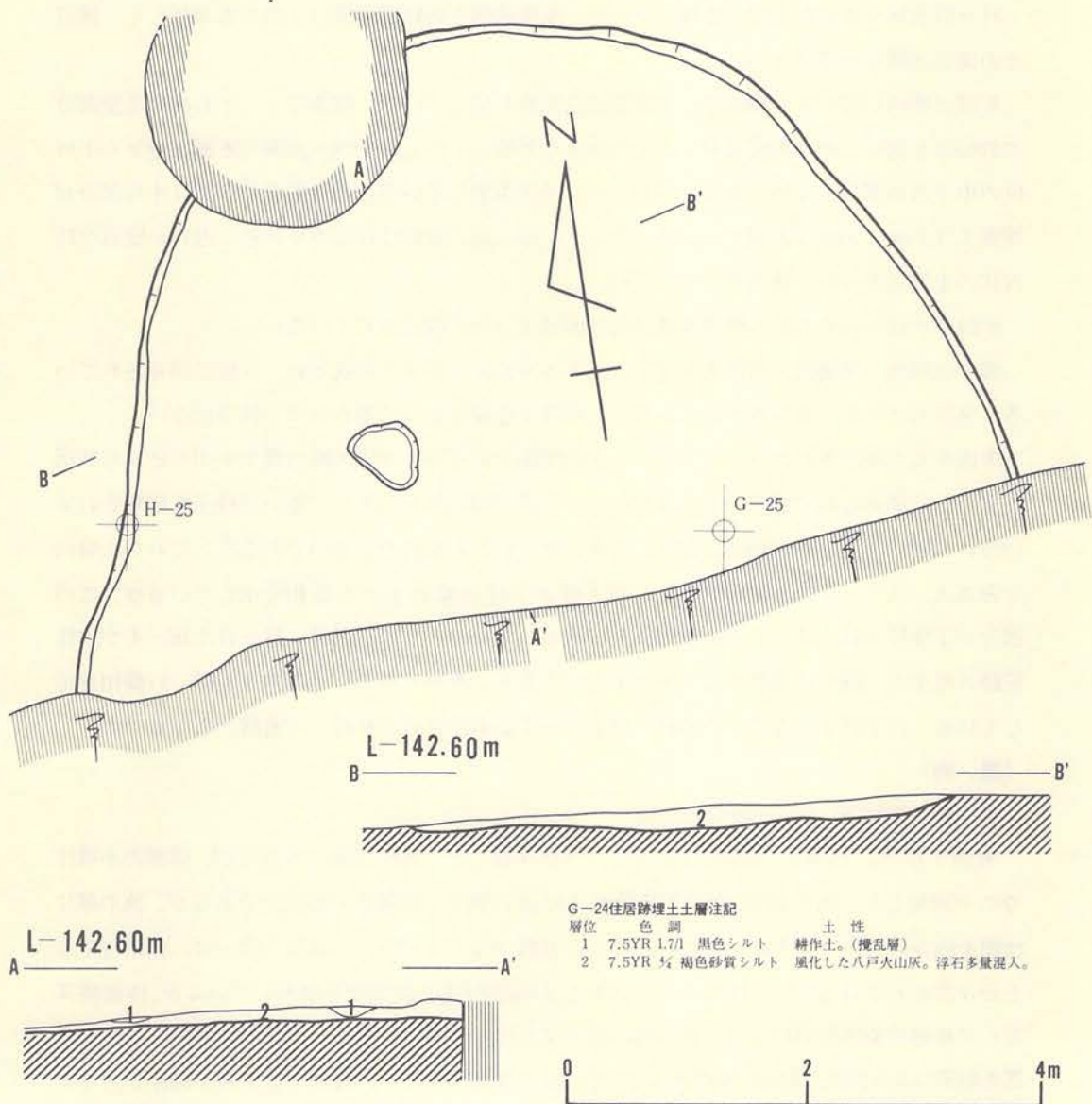
〔遺物〕



出土していない。

[遺構の年代]

遺物が出土していないので断定できない。重複しているG-24土坑-1・2ともに遺物を出土していない。しかし、G-24土坑-1と形態がほぼ同じのG-23土坑では中期初葉(Ⅲ群4類)の土器を出土していることから考えると、本住居跡と重複する土坑は中期初葉に位置づけ



第28図 G-24住居跡

られる可能性が大である。これらからみると、本住居跡は前期末葉から中期初葉に位置づけられる可能性が強い。

## 7) H-41住居跡

### 〔遺構〕 (第29図、PL-10A)

本住居跡はグリッドH-41とI-41にまたがって位置し、H-41土坑-2・H-41土坑-3・H-41土坑-4の各土坑と重複している。重複遺構との新旧関係は、前二者が新しく、後者との関係は明らかではない。

規模は径約4.10m×3.80mで、平面形は楕円形を呈している。壁高はもっとも高い北壁部分で約65cmを測り、壁は床面に対してやや大きく外傾している。南側～西側の床面は壁から1m位の巾で他の部分より約7cmほど高く、ベンチ状を呈している。低い部分の床面は中央部分が周囲より7cm～8cmほど緩やかに低くなっている。高い床面はほぼ水平状態に近い。壁溝や柱穴状の土坑はまったく検出されていない。

炉跡や炉跡とおもわれる焼成を受けた床面はまったく検出されていない。

埋土は黒色・黒褐色・褐色等を呈するシルトや砂質シルトで構成され、6層に細分されている。全体的にみると浮石粒の混入が多く、締りは各層によって差があり一様ではない。

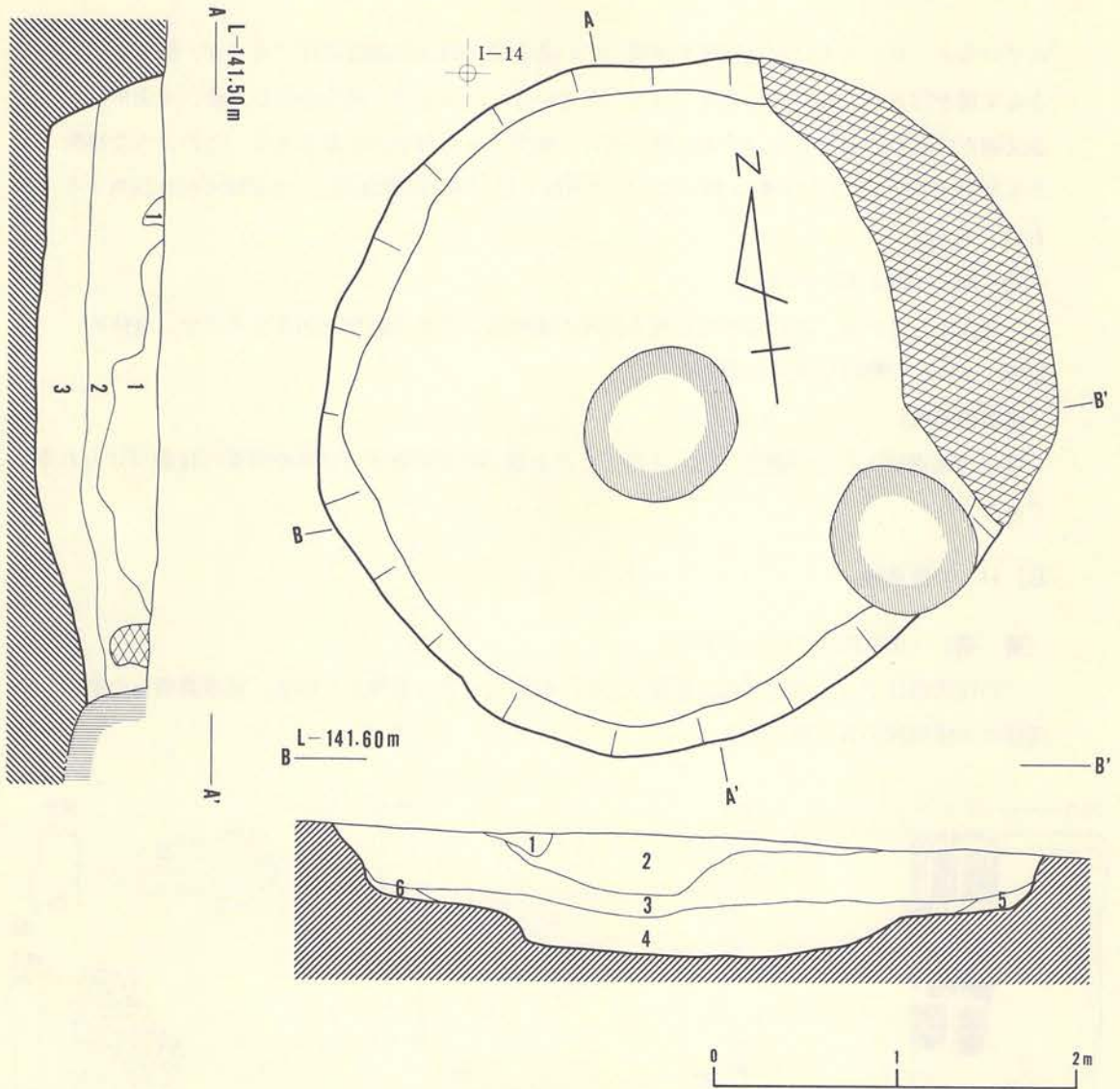
床面中央で検出されたH-41土坑-4との関係であるが、本住居跡の埋土を切り込んだ状況がまったく認められていないし、さりとて、土坑の開口部を貼床して塞いだ様子も観察されていないので、本住居跡と同時に存在したか、新しいことを表わすものであろう。これを土層図でみると、Aラインの1層とBラインの2層が下位に垂れ下がる様相を示しているが、この部分が丁度H-41土坑-4との重複部分に相当している。この状況は、H-41土坑-4が本住居跡の埋土内に掘り込まれたことを示すものである。遺物でみても土坑の方が新しい様相を示している。以上のようなことからH-41土坑-4は本住居跡より新しい遺構としておく。

### 〔遺物〕

#### 土器 (第30図、PL-48の51～56)

実測1個体、拓本6個体の合わせて7個体掲載した。破片は他にも在るが、体部の小破片なので割愛した。出土状況はほぼ床面直上に近い埋土下位層からの出土であるが、他の破片は埋土内からの出土である。これらの中にはII群(50・51・55)、III群(52～54)に相当する土器が含まれている。50は体部下半を欠失し、口縁部付近の約1/2位を残存しているが、体部縄文として単軸絡糸体縦回転による縦方向の撚糸文が付され、口縁端部～口唇部には斜上方からの篋先刺突による斜位の刻み目が付されている。51は体部上位から口縁部下位を残す破片であるが、体部器表に原体LR横回転による単節斜縄文、口縁部は不明瞭であるが横走する綾絡文が付さ





H-41住居跡Aライン埋土土層注記

層位	色調	土性
1	7.5YR 1.7/1 黒色硬い砂質シルト	中振浮石と十和田 a 火山灰下の黒色土混合。
2	7.5YR 3/5 暗褐色硬い砂質シルト	中振浮石。
3	10 YR 3/5 黒褐色硬い砂質シルト	中振浮石に類似。

Bライン埋土土層注記

層位	色調	土性
1	10 YR 1.7/1 黒色やや硬い砂質シルト	十和田 a 火山灰ブロック少量混入。
2	7.5YR 1.7/1 黒色	Aラインの層に同じ。
3	7.5YR 3/5 暗褐色	Aラインの2層に同じ。
4	10 YR 3/5 黒褐色	Aラインの3層に同じ。
5	硬い砂質シルト	ゴロタを含む浮石まじりの黒色土。(地山)
6	7.5YR 5/6 褐色少し硬いシルト	少し汚れたソフトローム。

第29図 H-41住居跡(遺構)





規模は径約3.10m×3.00mを測り、平面形はほぼ正円に近い楕円形を呈している。壁高はもっとも高い部分で約60cmであるが、低い東壁部分では20cm位の所もみられる。壁は床面に対して若干外傾しているが、東壁は他の部分と比較して不整である。床面は比較的良く締まっているが、全体的に小さい起伏がみられ、特に東壁寄りで著しい。壁溝は検出されていない。

本住居跡の床面では土坑が1基検出されており、規模は径約28cm×20cm・深さ約23cmである。この土坑は規模や位置は柱穴状であるが、1基だけの検出であるので、本住居跡の柱穴を構成する土坑であるかは不明である。

この住居跡に伴う炉跡や炉跡と考えられる焼成面は検出されていない。

埋土は黒褐色・暗褐色・褐色を呈するシルトや砂質シルトで構成され、3層に細分されている。全体的にみると、八戸火山灰や浮石粒が多く混入しており、いずれの層も軟らかい。

#### 〔遺物〕

##### 土器 (第32図、PL-48の57~61)

実測可能なものは1個体もなく、破片の拓本を5個体掲載した。この中には口縁部文様帯をもつものは57だけであるのでその属性が明確でない。57は体部に原体LR横回転による単節斜行縄文を付し、口縁部には横走る不明瞭な綾絡文を付すものである。他の58・59は口縁端部に無文部をもち、58は末端に結節をもつLRの原体を縦回転して付した綾絡文をもつ単節斜行縄文を付し、59もほぼ同様である。60・61は原体RL横回転による単節斜行縄文を付した体部破片である。これらの土器は分類に従えば、57はⅡ群5類、その他58・59はⅣ群のある種に相当するであろう。60・61は不明である。

##### 石器

出土していない。

#### 〔遺構の年代〕

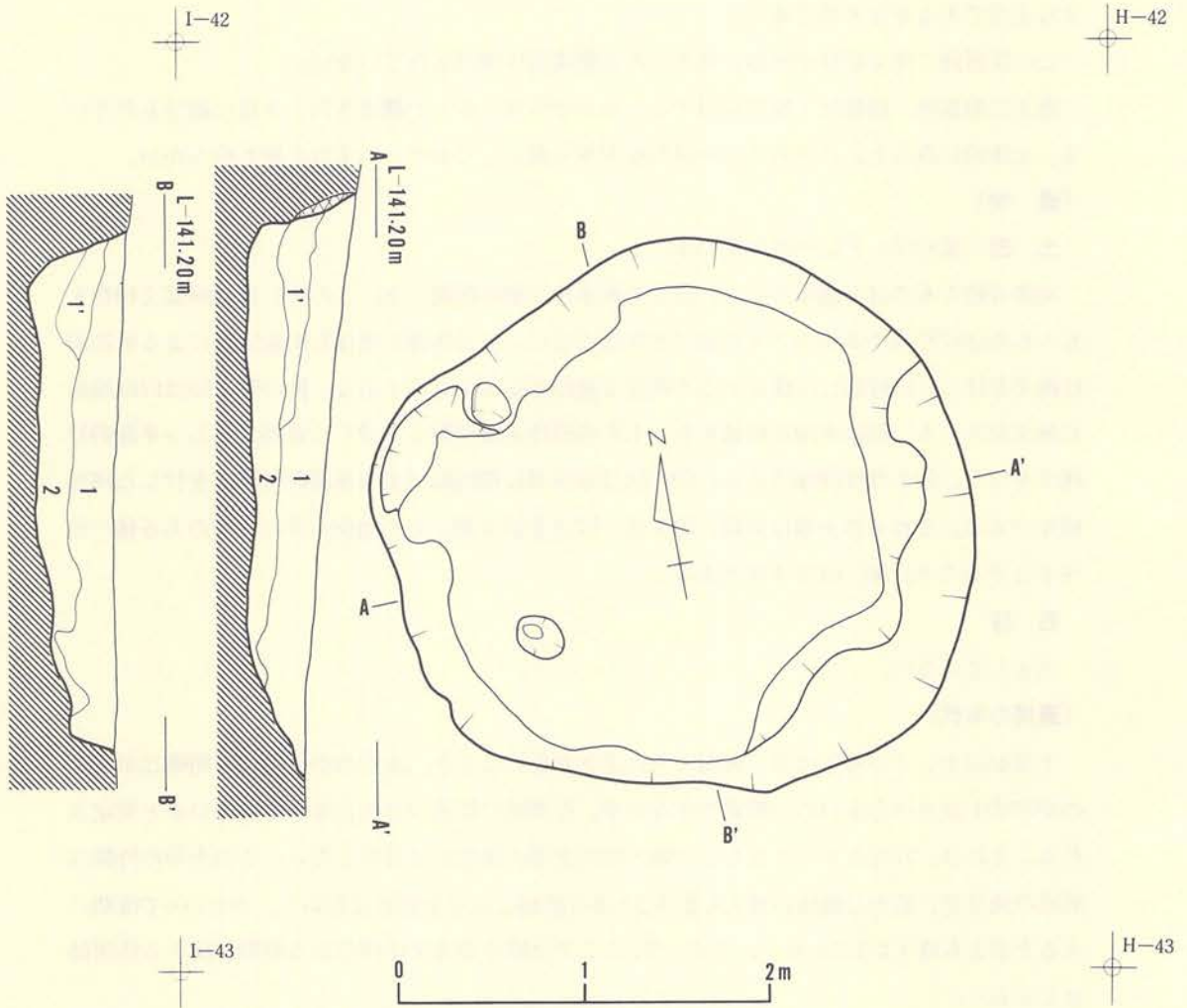
土器が出土しているものの、床面からの出土がないことと、土器の中に属性を明確に示すものが57の1点だけと少いので断定できないが、中期頃に位置づけられるのではないかと推定される。それは、57はともかくとして、58・59の土器の属性に注目をしたい。この土器の特徴は前述の通りで、胎土に繊維の混入もないことから前期に入る土器ではないし、かといって後期に入る土器とも違うようにおもう。したがって、ここでは取り合えず中期のある時期に属する住居跡としておく。

### 9) I-19住居跡

#### 〔遺構〕 (第33図、PL-12・PL-13)

本住居跡はグリッドG-18・H-18・I-18・H-19・I-19にまたがって位置し、南西部

はさらに路線外に延びている。他遺構との重複関係は、I-19住居跡内土坑-1・I-19住居跡内土坑-2・I-19住居跡内土坑-3・I-19周溝遺構と重複し、それらとの新旧関係は、住居跡が廃絶後あまり時間を経過しないでI-19住居跡内土坑-1と同一-3が掘削され、これらが完全に埋没しきった後にI-19住居跡内土坑-2が掘られていることから、土坑の方が新しい。I-19周溝遺構は古代の遺構であるので、本住居跡よりも新しい。



H-42住居跡Aライン土層注記

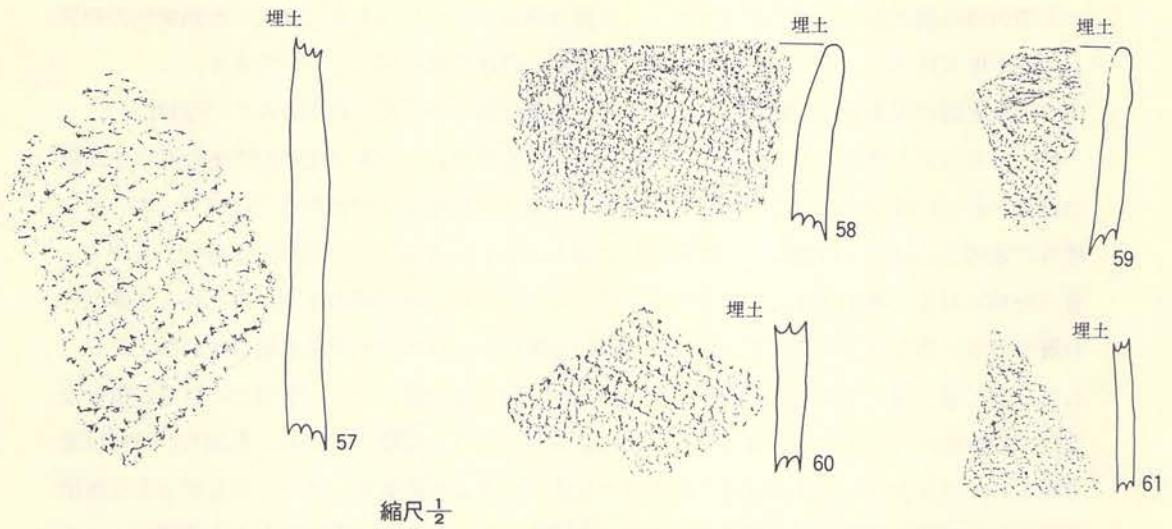
層位	色調	土性
1	10 YR 3/6 黒褐色砂質土	耕作土に近似。
1'	10 YR 3/6 暗褐色	1層の土に地山のソフトロームが混入。
2	10 YR 3/6 褐色	砂質土、シルト質土の混合土。

Bライン土層注記

層位	色調	土性
1	10 YR 3/6 黒褐色	Aラインの1層。
1'	10 YR 3/6 黒褐色	Aラインの1'層。より暗色。
2	10 YR 3/6 褐色	Aラインの2層。

第31図 H-42住居跡(遺構)





第32図 H-42住居跡（遺物）

検出された規模は、長軸（南西―北東）約12m、短軸（北西―南東）約7.50mであるが、全体的なことは不明である。検出された部分から平面形を推定すると、長楕円形を呈するものとおもわれる。検出面から計測される壁高は位置によって差があるものの50cm～90cmと比較的高い。調査時の地表面から床面までの深さも約1.70mと他の住居跡に比較して非常に深い。壁は床面に対してほぼ直角に近い部分と若干外傾する部分があるが、全体的にみると直角に近い部分の方が多い。床面には位置によって3段の段差が観察されるとともに、断続的ではあるが7条の溝が検出されている。この溝は面の異なる各床面と対応するような位置関係を示すとともに、円弧を描くような状況を示すことから、住居跡に伴う壁溝の痕跡と理解される。これも1棟の住居跡ではなく、複数（5棟以上）の住居跡が重複していることを示すものであろう。これらの壁溝は巾が15cm～20cm位で、深さは3cm～10cmとまちまちである。

本住居跡の床面では、先の3基の土坑以外に109基の土坑が検出されている。前の3基は本住居跡とは直接関連しないのでここでは詳述しないが、端的にいえば所謂「貯蔵穴」状の土坑である。ところが後者の109基は前者と違って規模が小さく、いずれも柱穴状の小土坑である。しかし、規模も径15cm～60cmとそれぞれによって異なり、深さについても同じような状況があり、深い土坑と浅い土坑では70cmもの差がみられる。また、P<sub>60</sub>とした柱穴状土坑より西方に向って巾約1.65m・長さが1.5m以上（西方が路線外に延びているので全長は不明）で、深さが7cm～8cmの浅い掘り込みがあり、D-23住居跡やI-22住居跡の例と同じように、床面

に5条の浅い溝が掘られている。なお、この掘り込みは浮石粒が多量に混入した黒褐色の砂質シルトで埋め戻されていた。溝の巾は15cm～20cm、深さ5cm～10cmと不定である。

この住居跡の床面では炉跡や炉跡と考えられる焼成面はまったく検出されていない。

埋土はもっとも層厚のある部分でも約1.40mもの堆積があり、本住居跡の埋土分だけで26層に細分されているが、これらの各土層の内容や特徴は図版中の注記に詳述したので、ここでは埋没の過程と全体的な様相について記述しておく。まず、土層図Cの観察によると、大きく3層に分類される。第1は3・4・6・8・10・12・15・17の各土層のように炭化物を多量に含む層である。第2は5・7・9・14・16・18の各層にみられる草木灰を多量に含む層、第3としては前二者と異なり、炭化物や草木灰をほとんど含まない層になる。その中でさらに微妙な変化で細分されている。特に前二者は交互に挟み合うように堆積しており、方向も、最初は北方向よりの流入を示し、最後は逆に南方向から流入したことを表わしている。このような堆積状況を自然堆積と理解するには無理があり、おそらく、人為的に投棄された土の堆積によって埋没したことを示しているのであろう。また、埋土下位の22・24・26の各層は八戸浮石流凝灰岩で人為的に貼床された部分であり、これらを合計すると6枚の床面が在ることが判る。特に、もっとも新しい住居跡が廃棄後に1層～20層までの埋土が堆積しており、この部分が人為的に投棄された可能性の強い土層であり、21層より下位の埋土とは性格を異にしている。遺物の包含状態も、ほとんどが1層から18層までに包含され、それも400個体に及ぶ完形や半完形の土器が大量に出土している。おそらく、これらの土器も人為的に投棄されたものであろう。

以上のように、埋土中にみられる貼床された床面や多数の柱穴状土坑、7条の壁溝と考えられる溝等の存在から、複数の住居跡が重複し合うことによって生じた結果であろうことは明白であるので、次に前述のことを前提として個々の住居跡に分解してみたい。しかし、これは現地調査中に現地で確認された結果によるものではないことを付記しておく。

検出された平面形から検討すると、まず、北端や南端まで床面が延びている住居跡群と、I-19住居跡内土坑-1と同一-3の中間付近を北端とする住居跡群が存在することが判る。さらに、土層図Cの検討では、もっとも低い面にある床面は北端からP<sub>101</sub>付近までであり、南端部とは10cm～20cmの高低差がみられる。次いで、これらを埋めたり掘り込んだりしているほぼ中央付近の住居跡の存在が考えられる。このような検討結果から、各群の新旧関係を整理してみると、古い方から、南端→北端→中央の順になる可能性が強い。一つの傾向としては、古い時期の大型から新しい時期の小型へと変化していることが考えられる。次にそれらの考えられる住居跡を述べるが、柱穴配置では5棟分しか明らかにできなかった。なお、各住居跡と柱穴の対応関係は第34図に示しておいた。

#### 1号(第34図A)



この住居跡は次の9基の柱穴状土坑と検出された平面形全体のもっとも外側に在る壁溝によって想定されたが、柱穴の規模は次のとおりである。

P<sub>1</sub> (37cm×35cm・底面141.49m)、P<sub>46</sub> (30cm×30cm・底面141.71m)、P<sub>32</sub> (25cm×20cm・底面141.37m)、P<sub>28</sub> (25cm×18cm・底面142.16m)、P<sub>30</sub> (30cm×20cm・底面142.01m)、P<sub>36</sub> (35cm×30cm・底面141.53m)、P<sub>54</sub> (30cm×25cm・底面141.62m)、P<sub>74</sub> (35cm×30cm・底面141.49m)、P<sub>93</sub> (35cm×32cm・底面141.36m) というように、長軸12m以上、短軸は7.50m以上の所謂「大型住居跡」の範疇に入る住居跡である。この住居跡に対応すると考えられる床面は、P<sub>28</sub>・P<sub>30</sub>の存在から、これと関連してP<sub>18</sub>付近の床面と、P<sub>106</sub>・P<sub>101</sub>付近の床面と推定される。柱穴は東側柱穴列・西側柱穴列ともにほぼ一線上に位置し、間隔が不等であるが、相対する柱間はほとんど同じ間隔を示し、全体的には東側柱穴列と西側柱穴列が対になる配置関係を示している。

北端部と西端部の床面の高さに若干差があるものの、概ね標高142.60m前後である。外周には東壁の一部が切れる壁溝がまわり、壁溝内には不等間隔ではあるが、杭穴状の小柱穴列が掘られている。平面形は隅丸で各壁が外方に軽く張り出す長方形気味を示すであろう。

土層図との対比では、本住居跡群の中ではもっとも古い住居跡に属するものと考ええる。

## 2 号 (第34図B)

本住居跡は前の1号跡より一回り小規模で、前者より若干低い床面をもつ住居跡で、8基の柱穴と、壁際に並ぶ杭穴状の小柱穴列から想定した。各柱穴とその規模は次のとおりである。

P<sub>7</sub> (55cm×30cm・底面141.71m)、P<sub>20</sub> (37cm×30cm・底面142.05m)、P<sub>33</sub> (45cm×35cm・底面141.96m)、P<sub>34</sub> (30cm×30cm・底面141.94m)、P<sub>42</sub> (35cm×35cm・底面141.95m)、P<sub>57</sub> (35cm×30cm・底面142.03m)、P<sub>78</sub> (25cm×20cm・底面142.06m)、P<sub>92</sub> (30cm×25cm・底面141.93m) で、各柱穴の間隔は不等であるが、東側柱穴列と西側柱穴列はお互いに対をなし、ほぼ左右対象である。先の1号跡の柱穴配置は一線上に位置するような状況を示していたが、本住居跡の場合は、大きな円弧を描くように配置され、前者と若干異っている。床面の高さも前者より幾分低くなり、標高142.50m位である。また、この住居跡には壁溝がなく、壁際に杭穴状の小柱穴が不等間隔でほぼ全周している。平面形は前の1号跡を若干小規模にした形態と同じ平面形となるものと推定される。土層図Cの中から本住居跡に伴う床面を考えると、24層の下位面にみられる床面が本住居跡に対応する可能性が強い。いずれにしても1号跡の床面を掘り込んで本住居が構築されていることから、本住居跡の方が新しいであろう。

## 3 号 (第34図C)

この住居跡は、前の1・2号跡よりも幾分南に寄った検出状況を示し、4基の柱穴と周壁の限界を示すとおもわれる壁溝状の溝跡によって推定され、平面形はほぼ楕円形を示すであろう。

柱穴の規模は、P<sub>52</sub> (50cm×50cm・底面141.60m)、P<sub>76</sub> (40cm×40cm・底面141.78m)、P<sub>109</sub> (60cm×50cm・底面141.78m)、P<sub>110</sub> (35cm×35cm・底面141.61m) であるが、検出状況から推定すると、全体が8基で構成され、東側柱穴列と西側柱穴列がお互いに相対した左右対象となる配置関係を示すものであろう。北壁に相当する部分では検出されていないが、壁溝がほぼ全周し、壁溝内には杭穴状の小柱穴が不等間隔で並んでいる。本住居跡に伴う床面は平面的には明確でないが、土層図Cの南端付近にみられる26層の上面が対応する床面の可能性がある。これが妥当であれば、ほぼ標高142.70m位の高さをもつ床面といえる。新旧関係では前の2号跡より新しいことは事実であろう。

#### 4 号 (第34図D)

この住居跡は前の3号跡を若干小型にしたような規模をもち、5基の柱穴と壁溝によって推定されたが、平面形は楕円形を示すであろう。柱穴の規模は、P<sub>3</sub> (30cm×30cm・底面141.60m)、P<sub>8</sub> (33cm×33cm・底面141.92m)、P<sub>51</sub> (50cm×50cm・底面141.56m)、P<sub>72</sub> (35cm×30cm・底面141.73cm)、P<sub>109</sub> (60cm×50cm・底面141.78cm) で、本来は路線外にもう1基の柱穴が存在し、6基の柱穴で構成され、東側柱穴列と西側柱穴列がお互いに対をなす配置を示すであろう。壁溝は北壁部分を除いてほぼ検出され、壁溝内には杭穴状の小柱穴をもっている。本住居跡に伴う床面は、土層図Cの23層の上面に貼床された床面が対応する可能性がある。それが妥当だとすれば標高142.70m位の高さをもつ床面である。新旧関係は前の3号跡の床を切り込んでいるので、本住居跡の方が新しいであろう。

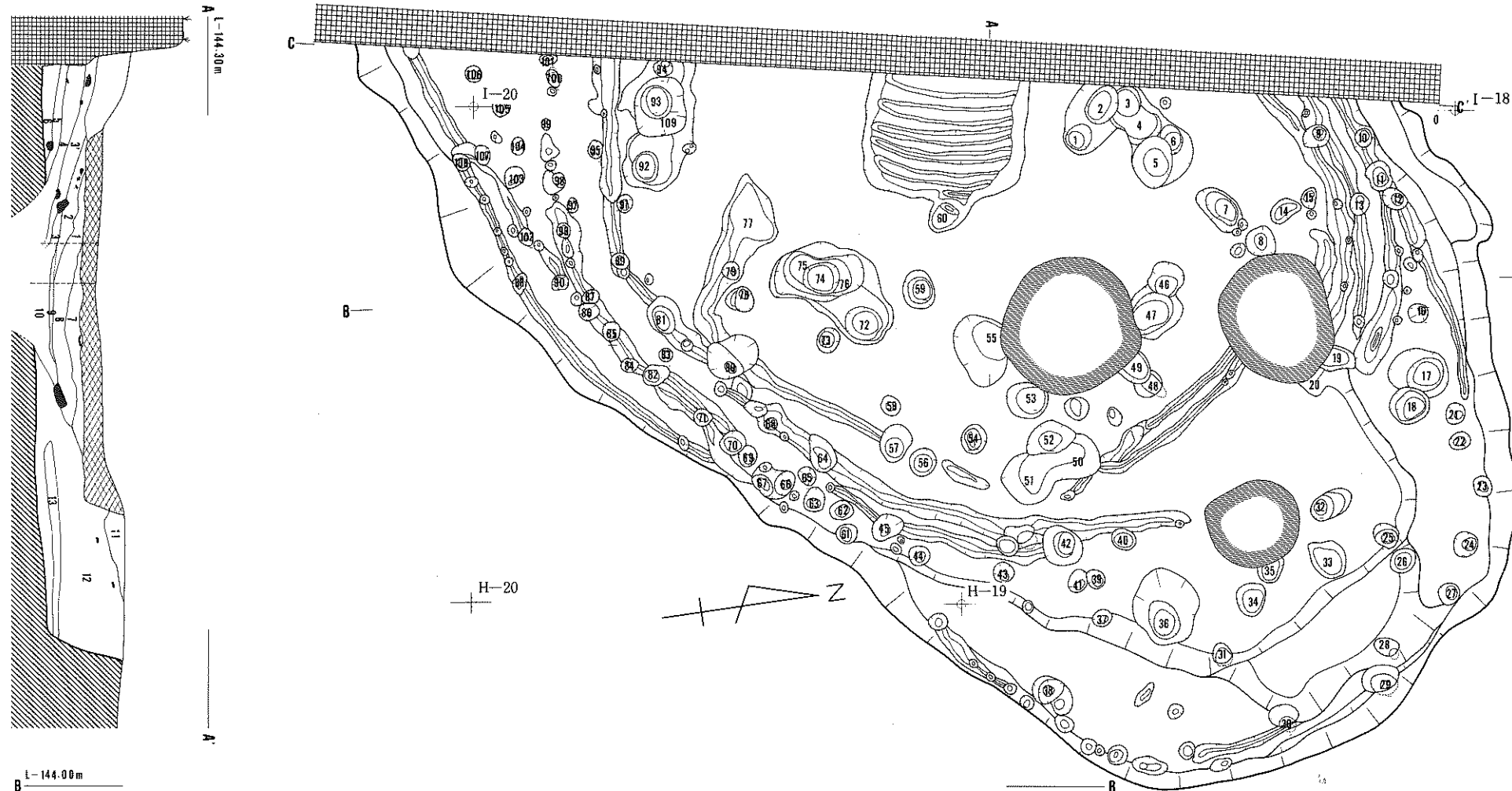
#### 5 号 (第34図E)

この住居跡は前の3号跡より若干小型で、次の3基の柱穴と周壁の限界を示すとおもわれる壁溝によって推定された。柱穴の規模は、P<sub>7</sub> (50cm×30cm・底面141.71m)、P<sub>53</sub> (43cm×38cm・底面141.62m)、P<sub>77</sub> (60cm×50cm・底面141.99m) で本来は路線外にもう1基の柱穴が存在し、全体が4基の柱穴で構成され、方形の配置関係を示すものであろう。北壁に相当する部分では切れているが、他ではほぼ全周するように壁溝が周っており、壁溝内に1・3号跡と同じように杭穴状の小柱穴が不等間隔に並んでいる。床面の高さは明確でないが、土層図Cの23層の上位にみられる貼床された床面が本住居跡に対応する可能性があり、これが妥当であれば、ほぼ標高142.80m前後の高さをもつであろう。床面の高さでは1号跡とほとんど差がないが、1・2・3号跡を埋め込んで床面としたものであろう。新旧関係は前の4号跡の床を埋めて本住居跡の床を構築しているので、本住居跡の方が新しいであろう。

#### 6 号 (第34図F)

この住居跡は、土層図Cで4・5号跡の床面を切り込んでいる住居跡が相当するが、柱穴や壁溝の対応関係は不明である。しかし、底面に複数の浅い溝をもつ浅い掘り込みは本住居跡に





炭化物混入層を表わす 灰混入層を表わす

A-19住居跡Aライン埋土土層注記

層位	色調	土性
1	7.5YR 3/5 暗褐色	焼土の混入ブロック。
2	7.5YR 3/5 黒色	炭化物・土器片・浮石を含む。
3	7.5YR 3/5 黒暗褐色	砂質シルト。炭化物を含む。
3'	7.5YR 3/5 黒色砂質シルト	炭化物を多量に含む。土器片・浮石も含む。
4	7.5YR 3/5 黒褐色砂質シルト	浮石を多く含む。軟かい。
5	7.5YR 3/5 黒色砂層	炭化物を多量に含む。土器片も含む。
6	7.5YR 3/5 黒褐色	質的に4層と同じ。
7	7.5YR 3/5 黒褐色砂質シルト	炭化物・浮石混入。土器片が多い。
8	7.5YR 3/5 極暗褐色砂層	炭化物・浮石混入。
9	7.5YR 3/5 暗褐色シルト	焼土・炭化物の混合ブロック。
10	7.5YR 3/5 黒色シルト	炭化物の混入に含む。浮石も混入。
11	7.5YR 3/5 黒色シルト砂質	浮石多量に混入。
12	7.5YR 3/5 黒褐色砂質シルト	浮石混入。中層浮石層上部に近似。
13	7.5YR 3/5 褐色汚れたシラス	しまりがなく軟かい。土器片は含まず。

Bライン埋土土層注記

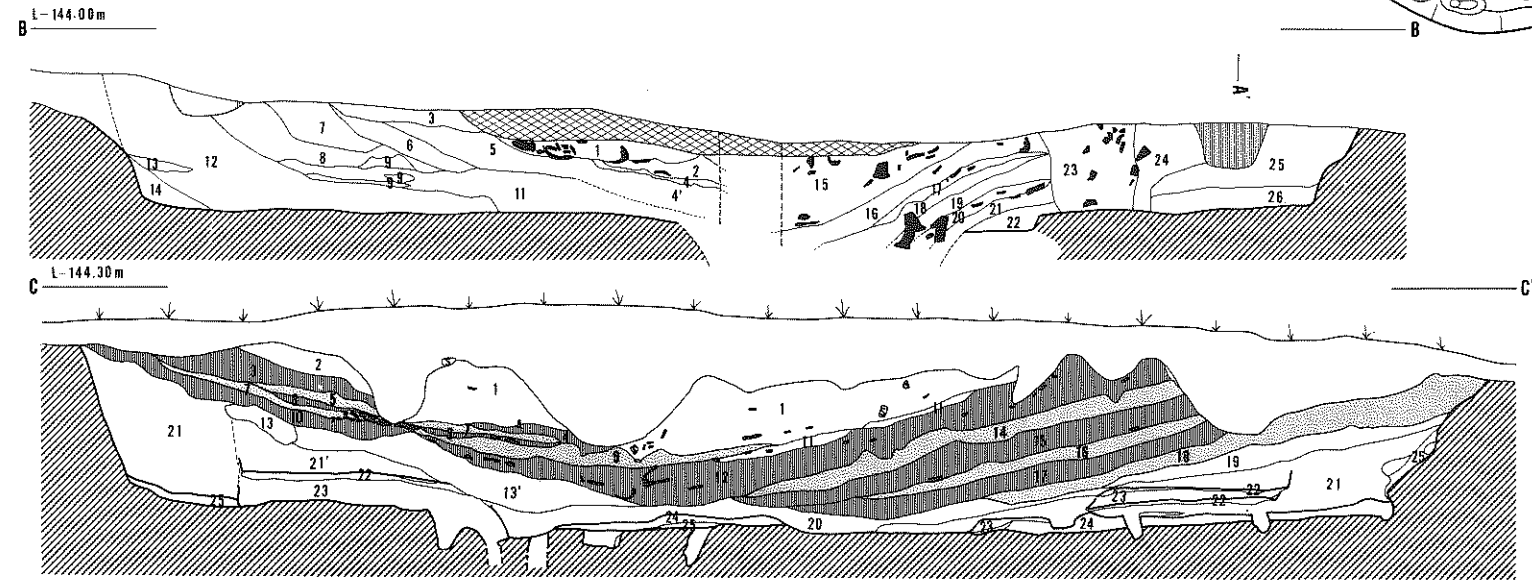
層位	色調	土性
1	7.5YR 3/5 褐色シルト	土器を多く含む。
2	7.5YR 3/5 黒褐色シルト	Aライン8層に相当。
3	7.5YR 3/5 極暗褐色	しまりやよい。
4	7.5YR 3/5 暗褐色シルト	焼土炭化物の混入ブロック。
4'	7.5YR 3/5 黒色シルト	炭化物混入。土器片が多い。
5	7.5YR 3/5 暗褐色	砂質シルトしまり良い。
6	7.5YR 3/5 褐色砂質シルト	白砂と暗褐色土の混入した物。
7	7.5YR 3/5 黒褐色	質的に5層と同じ。
8	7.5YR 3/5 黒褐色砂質シルト	炭化物混入。その他は7層と同じ。
9	7.5YR 3/5 鈍い褐色	白砂の混入したシルト。炭化物を含む。
10	7.5YR 3/5 褐色	6層と同じ。
11	7.5YR 3/5 黒褐色砂質シルト	炭化物・浮石を多く含む。硬くしまり良い。
12	7.5YR 3/5 黒色砂層	あわ砂の浮石を多く含む。
13	7.5YR 3/5 黒色	黒色シルトとあわ砂の混入した層。
14	7.5YR 3/5 黒褐色砂質シルト	土器片多く、炭化物混入。
15	7.5YR 3/5 極暗褐色	砂質シルト。炭化物と木灰が混入。
16	7.5YR 3/5 黒色	炭化物の量が多い。
17	7.5YR 3/5 暗褐色砂層	焼土と木灰の混合層。硬くしまり良い。
18	7.5YR 3/5 黒色	17層と同じ。
19	7.5YR 3/5 暗褐色砂層	質的に18層と同じ。土器片を多量に含む。
20	7.5YR 3/5 黒色	19層と同じ。
21	7.5YR 3/5 黒褐色砂質シルト	白砂の混入層。炭化物を含む。
22	7.5YR 3/5 黒色シルト	土器片・浮石を多く含む。
23	7.5YR 3/5 暗褐色	浮石・炭化物を多量に含む。
24	7.5YR 3/5 黒褐色	浮石を多量に含む。炭化物は少量含む。
25	7.5YR 3/5 暗褐色	白砂のブロック混入。他は25層と同じ。

Cライン埋土土層注記

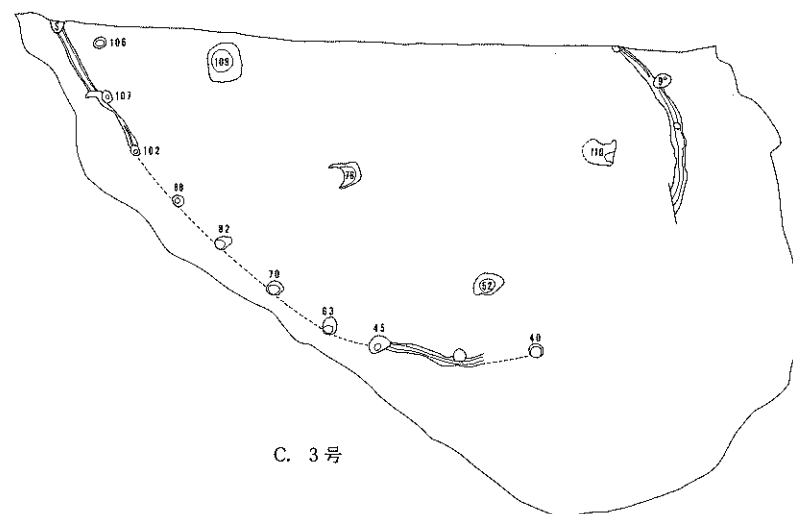
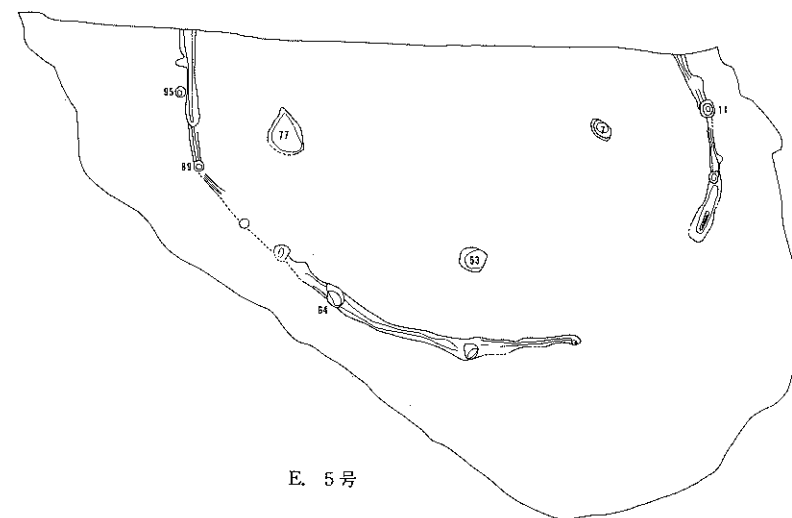
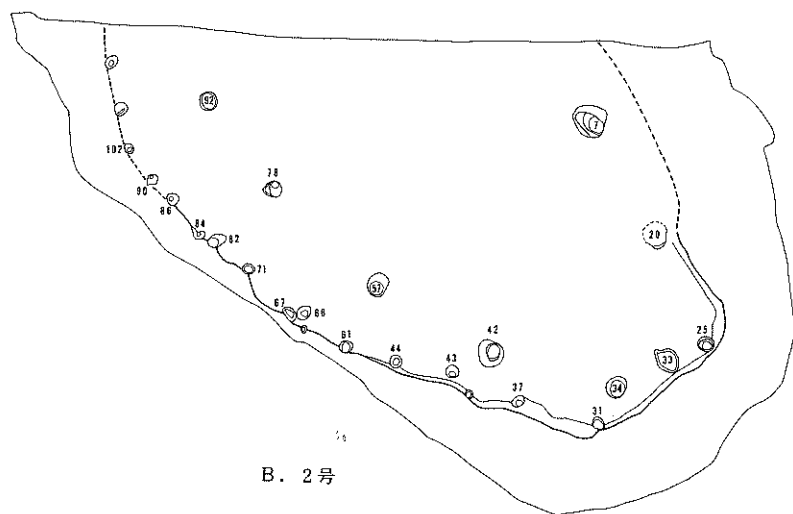
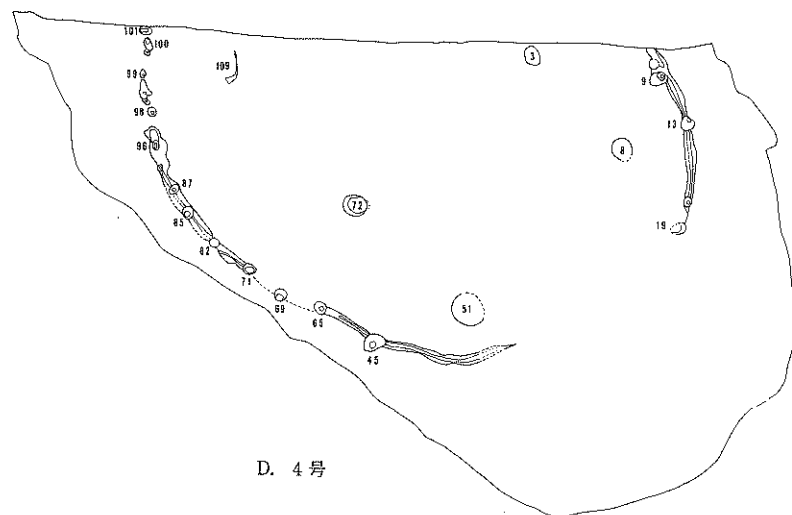
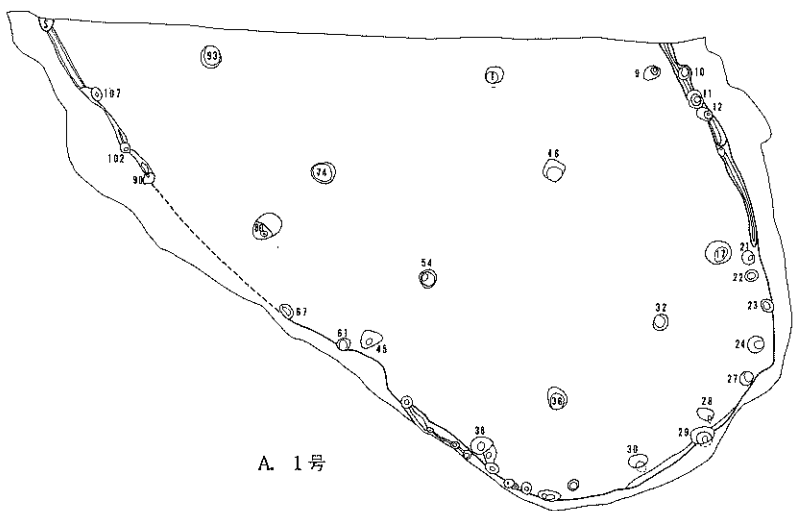
層位	色調	土性
1	7.5YR 3/5~3/6 黒褐色~極暗褐色	質的に15層と全んど差がない。
2	7.5YR 3/5 明褐色~暗褐色	浮石質砂質シルト。
3	7.5YR 3/5 黒褐色	土器を含む。12層と同じ。
4	〃	3層と同じ。
5	7.5YR 3/5 暗褐色	16層と同じ。
6	7.5YR 3/5 黒褐色	3層と同じ。
7	7.5YR 3/5 暗褐色	5層より若干黒味が強い。木灰の混入した層。
8	7.5YR 3/5 黒褐色	6層と同じ。
9	7.5YR 3/5~3/6 鈍い褐色~灰褐色	草木灰が多量混入。
10	7.5YR 3/5 極暗褐色	浮石質砂質シルト。
11	10 R 3/5 暗赤色	炭化物・焼土混入。
12	7.5YR 3/5 黒褐色	土器を多量に含む。15層と同じ。
13	7.5YR 3/5~3/6 灰白色~浅黄褐色	シラスブロック。
13'	7.5YR 3/5~3/6 暗褐色~灰褐色	シラスが混入した浮石質砂層。
14	7.5YR 3/5 暗褐色	16層と同じ。
15	7.5YR 3/5 黒褐色	浮石質砂層。シルト混入。土器が多い。
16	7.5YR 3/5 暗褐色	浮石質砂層。シルト混入。炭化物草木灰混入。
17	7.5YR 3/5 黒褐色	15層と同じ。
18	7.5YR 3/5 暗褐色	16層と全んど差がない。
19	7.5YR 3/5 暗褐色	18層と同じ。
20	7.5YR 3/5 黒褐色	15層にシラス混入。白っぽく見える層。
21	7.5YR 3/5 暗褐色	浮石質砂層。
22	7.5YR 3/5 浅黄褐色	シラス。
23	7.5YR 3/5 暗褐色	シラスが混入した浮石質砂層。
24	7.5YR 3/5~3/6 暗褐色~黒褐色	貼床。非常に固い。5面に細分される。
25	〃	シラスと暗褐色浮石質砂が混した貼床。

柱穴計測値一覧表

No.	長径×短径	底面の高さ	No.	長径×短径	底面の高さ
1	37cm×35cm	141.49m	56	27cm×27cm	142.14m
2	40cm×30cm	141.54m	57	35cm×30cm	142.03m
3	30cm×30cm	141.60m	58	20cm×18cm	142.22m
4	〃	141.58m	59	37cm×33cm	141.74m
5	50cm×40cm	141.36m	60	40cm×35cm	142.14m
6	30cm×	142.04m	61	23cm×23cm	142.16m
7	55cm×30cm	141.71m	62	24cm×18cm	142.29m
8	33cm×33cm	141.92m	63	25cm×22cm	142.29m
9	28cm×20cm	142.09m	64	38cm×20cm	142.09m
10	18cm×18cm	142.06m	65	20cm×18cm	142.21m
11	30cm×25cm	142.17m	66	25cm×16cm	142.29m
12	25cm×20cm	142.19m	67	25cm×16cm	142.38m
13	22cm×20cm	142.11m	68	20cm×20cm	142.09m
14	35cm×18cm	142.37m	69	20cm×18cm	142.23m
15	20cm×15cm	142.29m	70	25cm×22cm	142.24m
16	20cm×20cm	142.21m	71	20cm×17cm	142.29m
17	40cm×35cm	141.87m	72	35cm×30cm	141.73m
18	40cm×35cm	142.10m	73	25cm×22cm	141.98m
19	20cm×	142.20m	74	35cm×30cm	141.49m
20	37cm×30cm	142.05m	75	40cm×	141.70m
21	25cm×20cm	142.32m	76	40cm×	141.78m
22	20cm×18cm	142.49m	77	60cm×50cm	141.99m
23	23cm×20cm	142.20m	78	25cm×20cm	142.06m
24	25cm×25cm	142.23m	79	20cm×15cm	142.11m
25	25cm×25cm	141.93m	80	10cm×10cm	142.05m
26	30cm×22cm	142.40m	81	30cm×20cm	142.12m
27	20cm×20cm	142.24m	82	28cm×20cm	142.25m
28	25cm×18cm	142.16m	83	15cm×15cm	142.35m
29	37cm×27cm	142.37m	84	〃	142.30m
30	30cm×20cm	142.01m	85	20cm×18cm	142.35m
31	18cm×18cm	141.98m	86	20cm×20cm	142.38m
32	25cm×20cm	141.37m	87	20cm×20cm	142.39m
33	45cm×35cm	141.96m	88	〃	〃
34	30cm×30cm	141.94m	89	15cm×15cm	142.26m
35	25cm×	141.92m	90	20cm×18cm	142.38m
36	35cm×30cm	141.53m	91	16cm×15cm	142.26m
37	23cm×15cm	142.41m	92	30cm×25cm	141.93m
38	28cm×22cm	142.36m	93	35cm×32cm	141.30m
39	20cm×18cm	142.09m	94	23cm×	141.50m
40	22cm×22cm	142.16m	95	17cm×17cm	142.35m
41	20cm×20cm	142.36m	96	17cm×12cm	142.30m
42	25cm×22cm	141.95m	97	15cm×10cm	142.49m
43	20cm×18cm	142.39m	98	15cm×15cm	142.17m
44	20cm×20cm	142.32m	99	15cm×10cm	142.46m
45	33cm×25cm	142.27m	100	20cm×12cm	142.43m
46	30cm×	141.71m	101	20cm×15cm	142.35m
47	50cm×	141.50m	102	18cm×15cm	142.40m
48	28cm×	141.50m	103	23cm×20cm	142.48m
49	28cm×	141.69m	104	15cm×15cm	142.33m
50	50cm×	141.55m	105	22cm×16cm	142.16m
51	50cm×	141.50m	106	20cm×18cm	142.290m
52	50cm×	141.60m	107	20cm×15cm	142.44m
53	43cm×38cm	141.62m	108	18cm×15cm	142.56m
54	30cm×25cm	141.62m	109	60cm×50cm	141.78m
55	70cm×	141.41m	1	〃	〃



第33図 I-19住居跡 (遺構-1)



第34图 1—19住居跡 (遺構一2)



伴う遺構であり、先の土層図中央付近の24層上面を床面としている。本住居跡群の中でもっとも新しい住居跡である。

以上、本住居跡群を6棟に細分したが、これ以外にも床面や壁溝・柱穴が検出されているので、実際にはもっと多くの住居跡が存在するものと考えられる。しかし、現段階ではそれらを全て明らかにすることは不可能であり、1-19住居跡は6棟以上の住居跡が重複し合って作られた最終的な状態を示している。これらの住居跡はおそらく大きな時間的な隔りをもたないで改築等による重複と考えるのが妥当であろう。

### 〔遺物〕

#### 土器 (第35図、PL-49・PL-50の69~77)

本住居跡の埋土内に形成された包含層の中から第5面として取り上げた最下位面の土器を本住居跡に関係する土器として掲載したが、その事実は本住居跡に直接的に伴うものではない。しかし、これらを除外すると、本住居跡に伴う床面直上から出土した土器がないので、遺構の年代決定資料を欠くことになる。そこで、住居跡の時期的な下限を知るためにも、包含層最下位面出土の土器を本住居跡出土の土器とした。破片では他にも多く出土しているが、実測可能なもの16個体を掲載した。これらの土器は77を除くとすべて第Ⅲ群に入る土器である。77は第Ⅳ群に相当するであろう。62は頸部に肥厚帯をもって体部と口縁部を限り、肥厚帯の上面には半截竹管の斜位圧痕文を付し、口縁部には横位の単軸絡条体圧痕文が付されている。体部には単軸絡条体縦回転による木目状撚糸文をもつ。63は62にみられた頸部の肥厚帯がなくなり、肥厚帯上の刺突列が縄文原体の縦圧痕に変化している。口縁部の文様は6条の平行する原体圧痕文を全周させている。体部の縄文は連結による横方向羽状縄文である。65・66は頸部(66)や口縁部突起から頸部に垂下する(65~66)隆帯をもち、口縁部文様は平行する縄文原体の圧痕文をもつ。口縁部は4単位の波状を示す。体部縄文は末端に結節をもつ原体LRL縦回転による綾絡文をもつ複節斜行縄文が付されている。64・67はほぼ同じような文様をもつ。両者とも波状口縁であるが、67は不均整な波状口縁である。頸部に隆帯の貼り付けはないが、67ではボタン状の円形浮文の貼りつけがある。口縁部には直線や山形の原体圧痕文が付され、ともに端部には縦位の圧痕文を付す。体部縄文は原体LR横回転による単節斜行縄文を付した後、結節部の縦回転による3条の綾絡文をもつ。68は波状口縁で、突起部から2条の隆帯が頸部まで垂下し、口縁部には上位2条、下位2~3条の横走する原体圧痕文を付し、その上位と下位の間を縦位の原体圧痕文で充填している。口縁端部にも縦位の原体圧痕文をもつ。69~71は器表全面に縄文のみを付す土器であるが、70は口縁部文様帯をもつ土器と同じ器形を呈している。72・73は口縁部を欠失しているので定かでないが、体部の縄文が65~68とほぼ同じであることから、これらに近い文様をもつであろう。以上の特徴から、62はⅢ群2類、63はⅢ群3類、65・

・66はⅢ群4類、64・67はⅢ群5類、69～71はⅢ群14類、77はⅣ群4類に相当するものと考えられる。

## 石器

第5面として取り上げた遺物の中に石器が1点も含まれていない。したがって第1面から第4面までに出土した石器は包含層の項に掲載している。

### 〔遺構の年代〕

まず、これらの土器を全体的にみると、62は前期末葉、77は中期中葉に属する土器であるが、他はいずれも中期初葉に位置づけられる土器である。また、本住居跡内土坑-1から人骨と共伴して出土した土器(破片3個)はⅢ群2類に属する土器である。このようなことから本住居跡の年代を推定すると、少なくとも中期初葉には包含層が形成され始めていたことは確実であろうから、包含層よりもさらに前述の土坑-1よりも古い住居跡であろう。土坑出土の土器からみると、土坑そのものが本住居跡に直接伴うか、本住居跡廃絶直後の掘削と考えられることから、ここでは取り合えず、前期末葉に属する住居跡としておきたい。

## 10) I-22住居跡

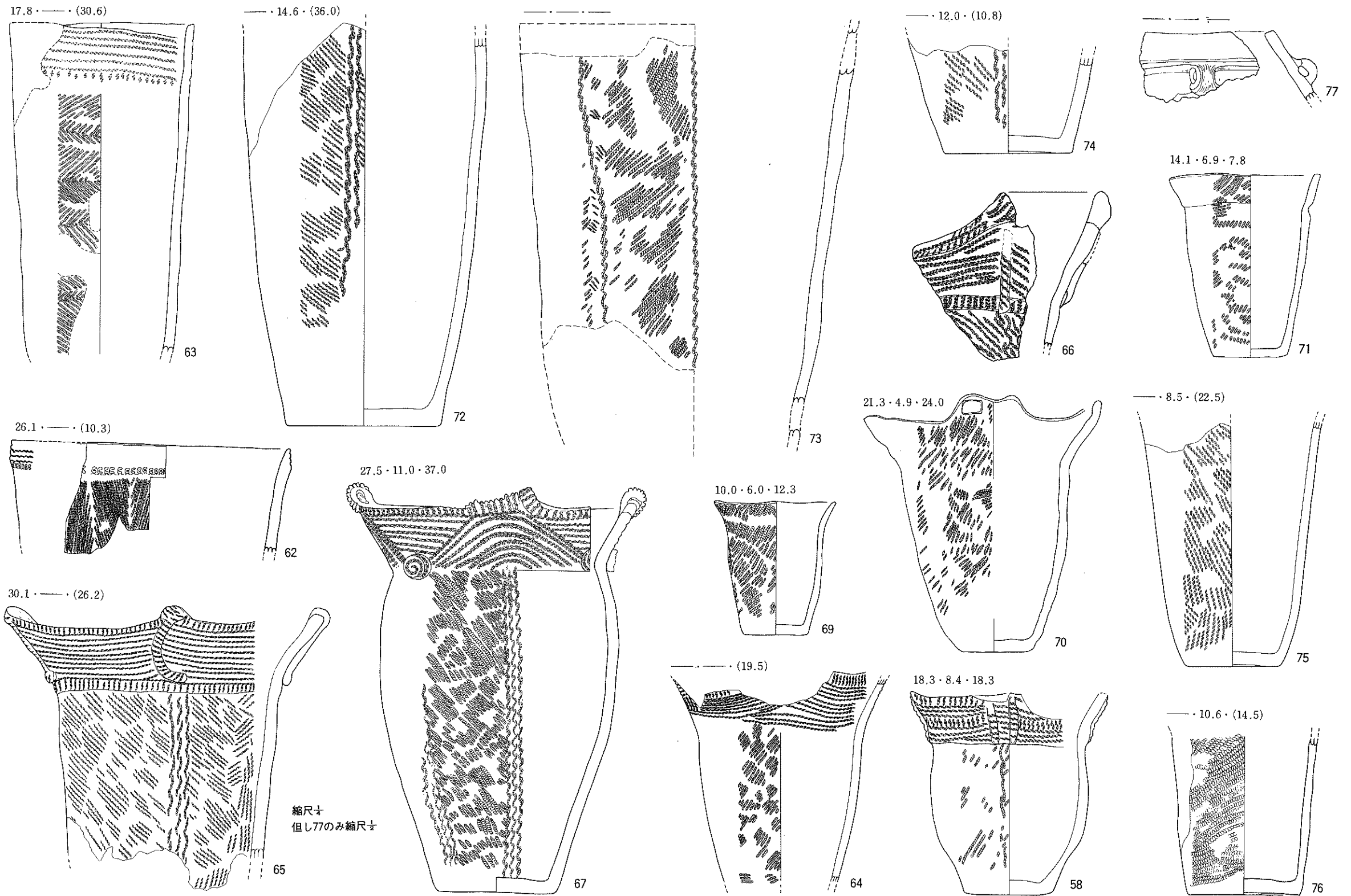
### 〔遺構〕(第36図、PL-11)

この住居跡はグリッドH-20・21・22・23、I-20・21・22・23にまたがって位置しているが、西側は路線外にさらに延びているので、西側の一部は未調査である。他遺構との重複はない。

検出された規模は南北の最大径が約13.80mで、東西は約5.20mを測り、平面形は南壁に方形の張り出しがつく長楕円形を示している。南壁の張り出し部分の規模は2.60m×2.50m位であるので、張り出し部分を除いた規模は南北径約11.30m位ということになる。本住居跡は調査時の地表面から床面までの深さは約1.25mであるが、検出面からの壁高は北壁で約45cm、南壁が5cm～10cmである。壁は床面に対して軽く外傾するような状況を示し、特に北壁の場合は中段に床面状の平坦面をもっている。床面に大きな起伏はないが、南側から北に向って緩やかに低くなっている。貼床はほとんどみられず、基本層序第Ⅳ層の中位～下位面が床面を作っており、良く締まっていて固い。本住居跡では40基の土坑が検出されているが、これらはいずれも柱穴状の規模の小さい土坑である。土坑の規模は個々によって大小があるものの、径が30cm～60cm、深さ40cm～80cmで平面形は円形か楕円形である。また北側床面には、楕円形で底面に浅い溝状の凹凸をもつ名称・用途ともに不明な施設が作られている。

本住居跡に伴う炉跡は、中軸線(南北)上の床面に焼土化した焼成面が3カ所で確認された。それ以外に石囲いとか埋設土器といった施設を伴う炉跡は検出されていない。このことから、





第35図 I-19住居跡遺物(第5面)

本住居跡に伴う炉跡は前記の3カ所の焼成面が該当するものと考えられる。もっとも南に位置する炉-1は範囲が約90cm×50cmの扁楕円形で、厚さは約5cm～6cmである。炉-2はP<sub>15</sub>を埋める在り方を示し、範囲が約90cm×50cmの楕円形で、床面が僅かに赤変しているのみである。もっとも北に位置する炉-3は範囲が約1.10m×80cmで、平面形が北と南が膨れる瓢箪形を示している。厚さは床面が僅かに赤変しているのみである。

本住居跡の埋土は黒色・黒褐色・暗褐色等のシルトや砂質シルトで構成され、粒径2mm～1cm位の浮石粒が多量に混入している。また、埋土内には比較的多くの土器片が混入しており、特に埋土3a層・3b層には多量の土器片が包含されていた。4層と5層にも土器片の混入は多かったが3層ほどではなかった。また、4a層のある一部には焼土粒の混入が多く目立った。全体的にみるとあまり締りがなく、どちらかというソフトである。

本住居跡の床面には前記のように40基の柱穴状土坑が検出されており、さらに、平面形も不規則であることから、何棟かの重複によって形作られた結果によるものと推定される。このような観点から柱穴状土坑の位置・規模や全体的な平面形を検討すると、以下のような住居跡の存在が想定される。しかし、これは現地調査中にそれぞれ個々の住居跡として認定されたわけではないので、一つの可能性としての推定であることを付記しておく。したがって、新旧関係についてはまったく不明である。

## 1 号 (第37図A)

本住居跡は検出された平面形の北端から南端までをその範囲とし、12基の柱穴によって構成されるものと推定されるが、その中でP<sub>4</sub>とP<sub>17</sub>の間、そしてP<sub>39</sub>とP<sub>34</sub>の間には検出されていない。しかし、この間隔が両者ともに約5.30mとあまりにも離れ過ぎていることから、中間に各1基の柱穴が存在したものであろうが、調査中に見落した可能性が大である。柱穴の規模は以下のとおりである。

P<sub>1</sub> (50cm×40cm・底面142.73m)、P<sub>4</sub> (70cm×50cm・底面142.63m)、PX 1 (不明)、P<sub>17</sub> (75cm×50cm・底面142.35m)、P<sub>20</sub> (60cm×50cm・底面142.15m)、P<sub>23</sub> (35cm×35cm・底面142.69m)、P<sub>25</sub> (45cm×35cm・底面142.37m)、P<sub>28</sub> (45cm×35cm・底面142.22m)、P<sub>34</sub> (40cm×35cm・底面142.46m)、PX-2 (不明)、P<sub>39</sub> (30cm×25cm・底面142.49m)、P<sub>40</sub> (45cm×40cm・底面142.95m)で、これらの柱穴は東側柱穴列6基、西側柱穴列が互いに相対するような配置関係を示し、全体が長方形になるように位置するが、南端のP<sub>1</sub>とP<sub>40</sub>、北端のP<sub>23</sub>とP<sub>25</sub>の間隔が他の部分より狭くなっており、上屋構造に関連する状況を表すものであろう。この柱穴配置から推定される本住居跡の規模は、長軸(南北方向)12m以上・短軸(東西方向)2.50m以上で、平面は長方形か長楕円形を呈するものと推定される。

## 2 号 (第37図B)



この住居跡は先の1号跡の柱穴P<sub>1</sub>とP<sub>40</sub>を共用し、全体で8基の柱穴で想定される。柱穴の規模は以下のとおりである。

P<sub>1</sub> (50cm×40cm・底面142.73m)、P<sub>7</sub> (60cm×50cm・底面142.01m)、P<sub>16</sub> (50cm×50cm・底面142.23m)、P<sub>21</sub> (50cm×40cm・底面142.41m)、P<sub>27</sub> (30cm×30cm・底面142.44m)、P<sub>35</sub> (30cm×30cm・底面141.96m)、P<sub>37</sub> (60cm×50cm・底面142.14m)、P<sub>40</sub> (45cm×40cm・底面142.95m)で、以上の柱穴は先の1号跡と基本的には同様の配置関係を示しているが、前者に比較すると柱穴数が少なく、各柱穴間の距離が長くなっている。平面形や規模も前の1号跡と大差がないものとおもわれる。

### 3号 (第37図C)

この住居跡は前2棟の柱穴とまったく異なる8基の柱穴によってその存在が推定される。しかし、その中にはP<sub>9</sub>とP<sub>22</sub>の中間に位置すると考えられる仮想柱穴が含まれていることを付記しておく。規模は次のとおりである。

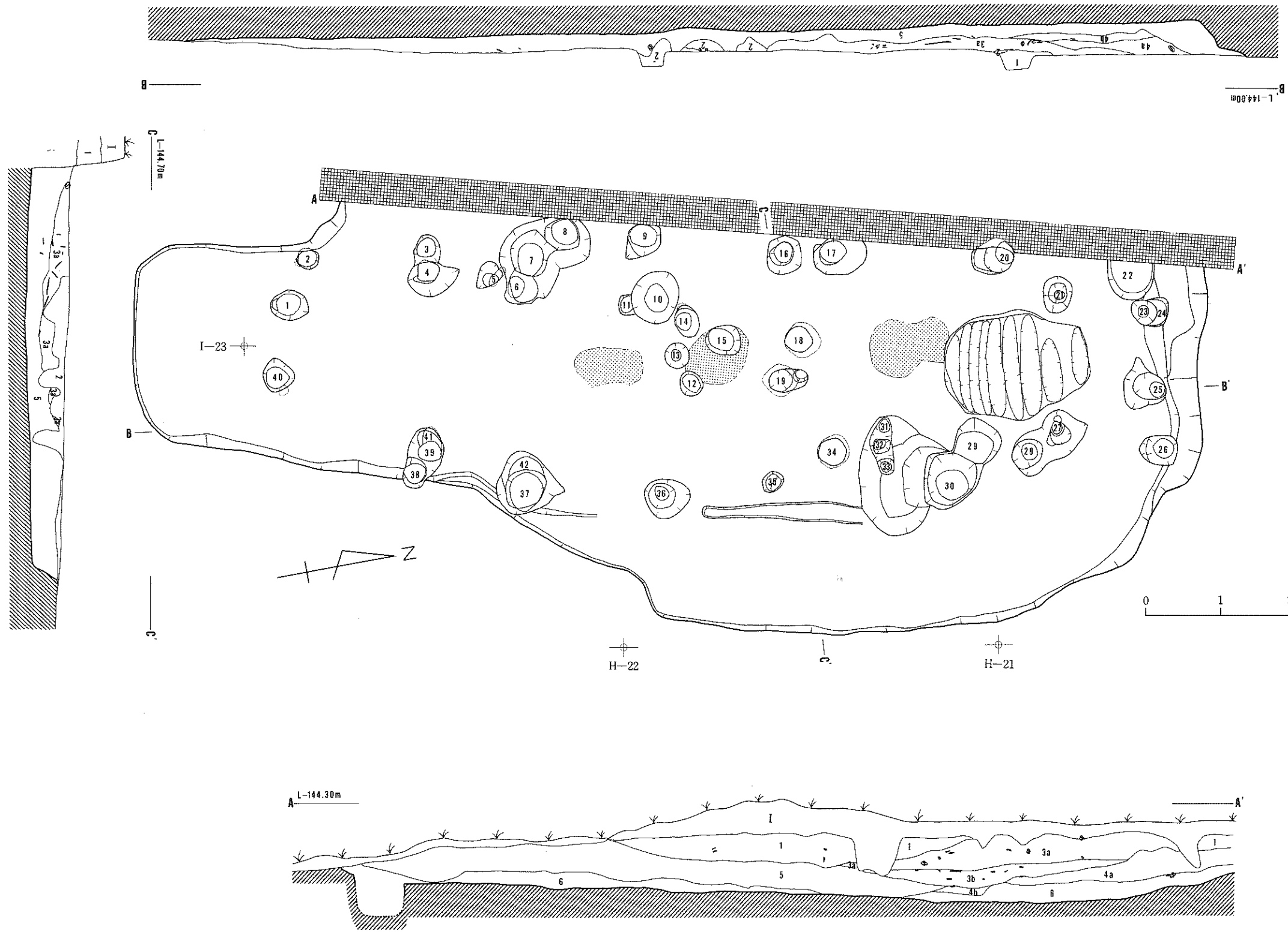
P<sub>3</sub> (40cm×不明・底面142.76m)、P<sub>9</sub> (45cm×45cm・底面142.33m)、PX- (不明)、P<sub>22</sub> (60cm×不明・底面142.77m)、P<sub>26</sub> (40cm×40cm・底面142.32m)、P<sub>30</sub> (70cm×65cm・底面141.96m)、P<sub>36</sub> (65cm×55cm・底面142.36m)、P<sub>38</sub> (35cm×30cm・底面142.39m)で、これらの柱穴配列状況は前2者と基本的には変化がない。しかし、各柱穴間の距離は2号跡の状況に近似している。このことから、規模や平面形もまた2号跡に近いものと考えられる。

以上、3棟に分解したのであるが、これ以外に、床面の中央付近を中心に柱穴状土坑がまだ検出されている。その中でP<sub>8</sub>-P<sub>15</sub>-P<sub>31</sub>を結ぶ柱穴列と、P<sub>5</sub>-P<sub>13</sub>-P<sub>32</sub>を結ぶ柱穴列が住居跡の柱穴列を構成している可能性がある。いずれにしても3棟以上の住居跡が重複して構築された結果の状況を示すものであろう。新旧関係については明確に提示できる資料に乏しい。埋土土層図の検討では複数の住居跡が重複し合う様子を積極的に示す結論は得られていない。この状況を妥当なものとして考えると、1号跡とした部分をもっとも規模が大きいことからもっとも新しい住居跡である可能性があり、他の住居跡はこれより古いものと考えられる。1号跡以外の2号・3号跡の柱穴配置も1号跡のそれと大差がないことから、改築による重複遺構群と考えることができる。検出された平面形が他の住居跡に比して若干不整なことから、1号～3号跡まで南北方向に長軸をもつ長方形か長楕円形を呈するものであろう。なお、南端部の方形張り出し部は出入口施設に関連するものと考えている。

### 〔遺物〕

土器 (第38～42図、PL-50の78～80・PL-51～PL-56)

床面直上や埋土内から出土したものを含めて91個体掲載したが、その中には実測土器62個体と拓本土器29個体が含まれている。出土状況では78～99までの22個体が床面直上から出土した



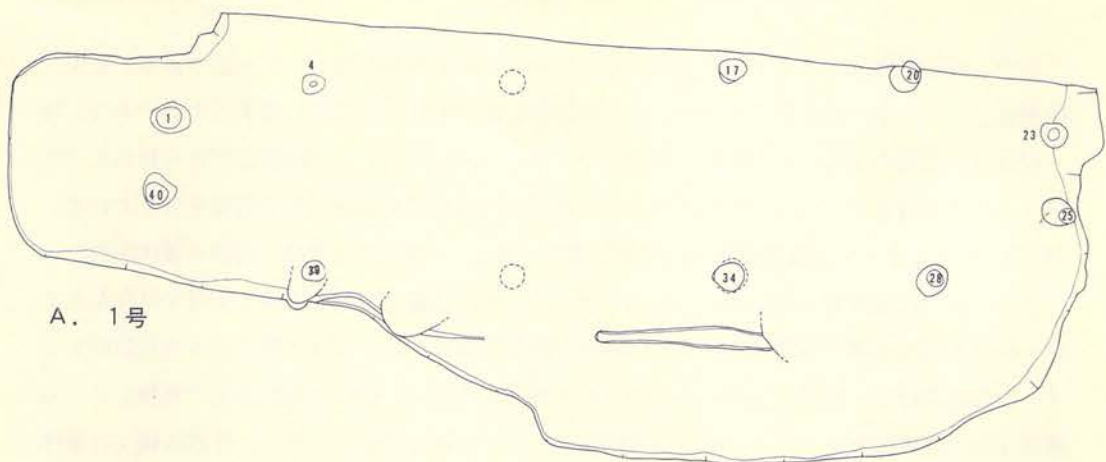
- 1-22住居跡埋土層注記
- | 層位 | 色調                   | 土性                    |
|----|----------------------|-----------------------|
| I  | 7.5YR 8/ 黒褐色砂質シルト    | 表土。基本層序第1層と同じ。        |
| 1  | 7.5YR 8/ 黒褐色浮石質砂質シルト | 中層浮石上部層に類似。           |
| 2  | 7.5YR 8/ 黒褐色シルト      | 耕作土等による擾乱。土器片・浮石多量混入。 |
| 3a | 7.5YR 8/ 黒褐色浮石質砂質シルト | 少量の炭化物混入。1層より黒味強し。    |
| 3b | 7.5YR 8/ 黒褐色浮石質砂層    | 炭化物多量混入。土器片多し。        |
| 4a | 7.5YR 8/ 暗褐色～明褐色(焼土) | 浮石質砂質シルト。部分的に焼土混入。    |
| 4b | 7.5YR 8/ 黒色浮石質砂質シルト  | 部分的に焼土混入。             |
| 5  | 7.5YR 8/ 暗褐色浮石質砂層    | 少量の焼土混入。              |
| 6  | 7.5YR 8/             |                       |

柱穴計測値一覧表

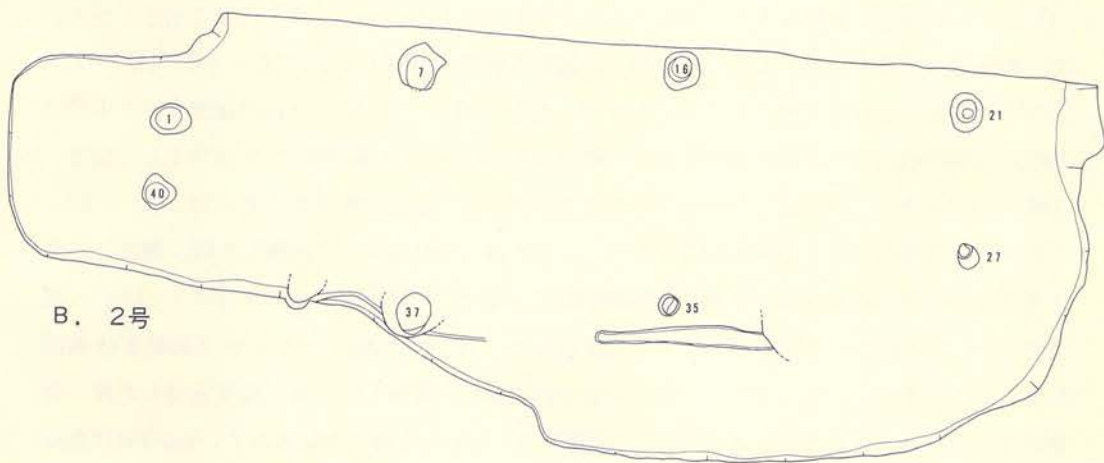
長径×短径	底面の高さ
1 50cm×40cm	142.73m
2 30cm×25cm	142.74m
3 40cm×	142.76m
4 70cm×50cm	142.63m
5 40cm×35cm	142.82m
6 50cm×40cm	142.50m
7 60cm×50cm	142.01m
8 50cm×45cm	142.67m
9 45cm×45cm	142.33m
10 70cm×65cm	142.58m
11 30cm×	143.01m
12 35cm×30cm	142.75m
13 32cm×32cm	142.59m
14 40cm×30cm	142.56m
15 50cm×40cm	142.33m
16 50cm×50cm	142.23m
17 75cm×50cm	142.35m
18 38cm×32cm	142.43m
19 30cm×30cm	142.64m
20 60cm×50cm	142.15m
21 50cm×40cm	142.41m
22 60cm×	142.77m
23 35cm×38cm	142.69m
24 40cm×	142.95m
25 40cm×35cm	142.37m
26 40cm×40cm	142.32m
27 30cm×30cm	142.44m
28 45cm×35cm	142.22m
29 60cm×	142.78m
30 70cm×65cm	141.96m
31 20cm×20cm	142.24m
32 25cm×20cm	142.24m
33 25cm×25cm	142.24m
34 40cm×35cm	142.46m
35 30cm×30cm	142.90m
36 65cm×55cm	142.36m
37 60cm×50cm	142.14m
38 35cm×30cm	142.39m
39 30cm×25cm	142.49m
40 45cm×40cm	142.95m
41 30cm×	142.67m
42 60cm×	142.44m

第36図 I-22住居跡(遺構-1)

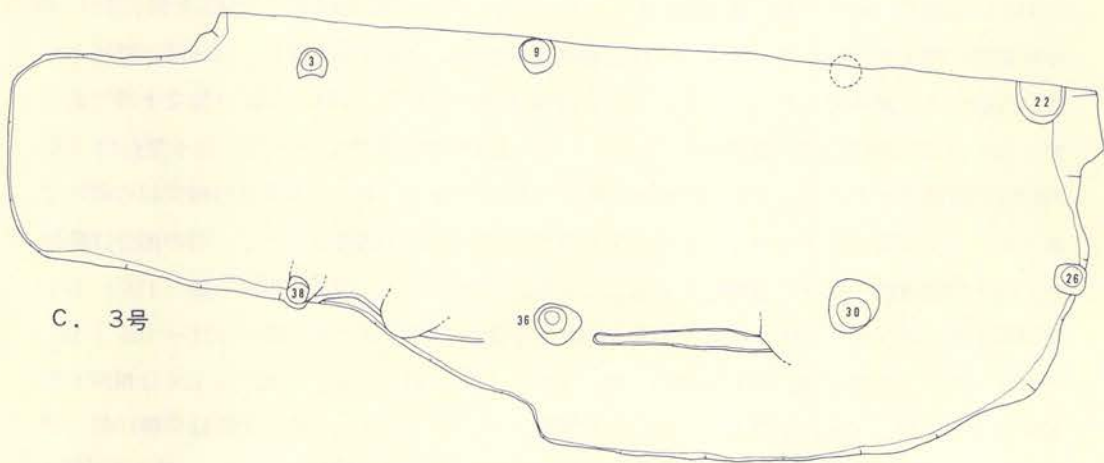




A. 1号



B. 2号

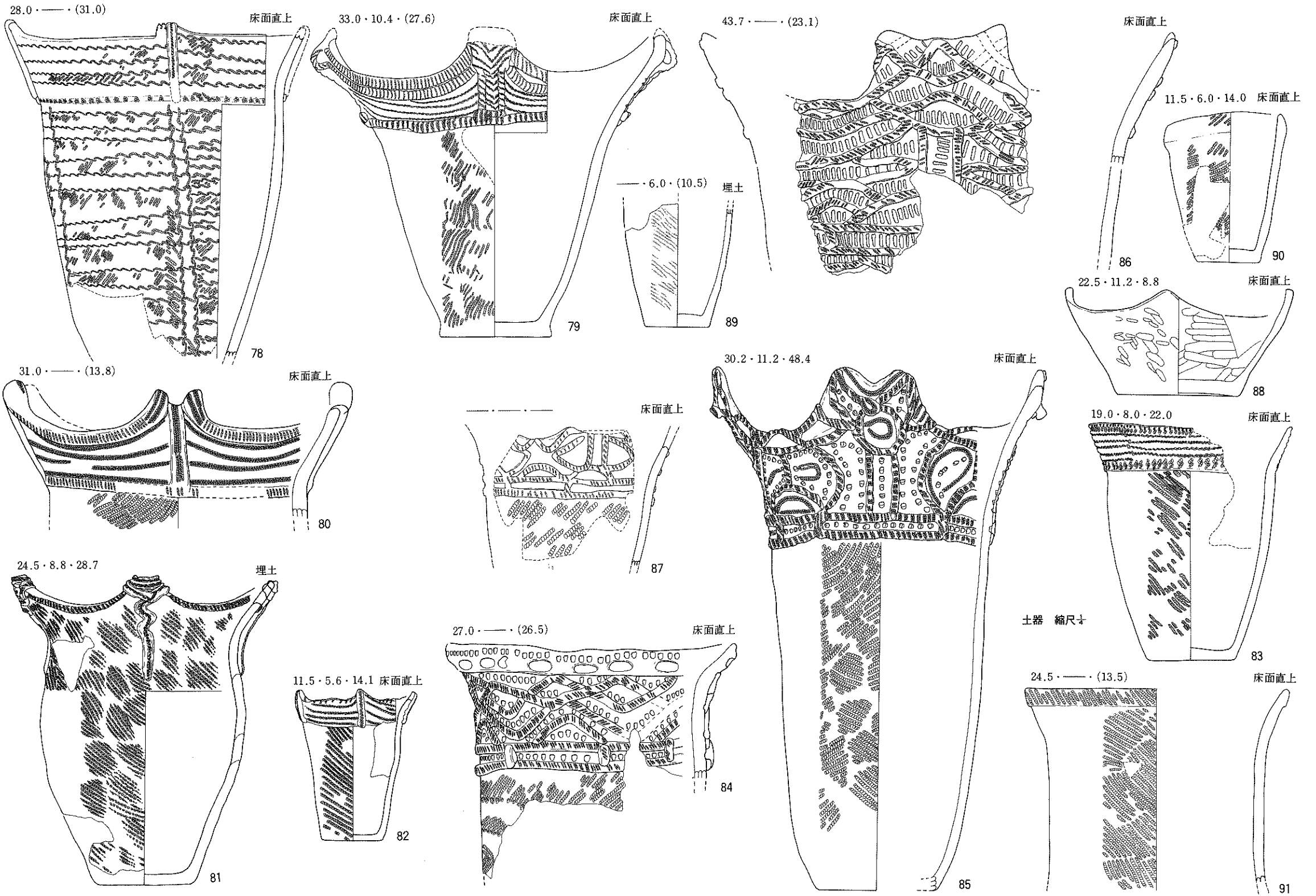


C. 3号

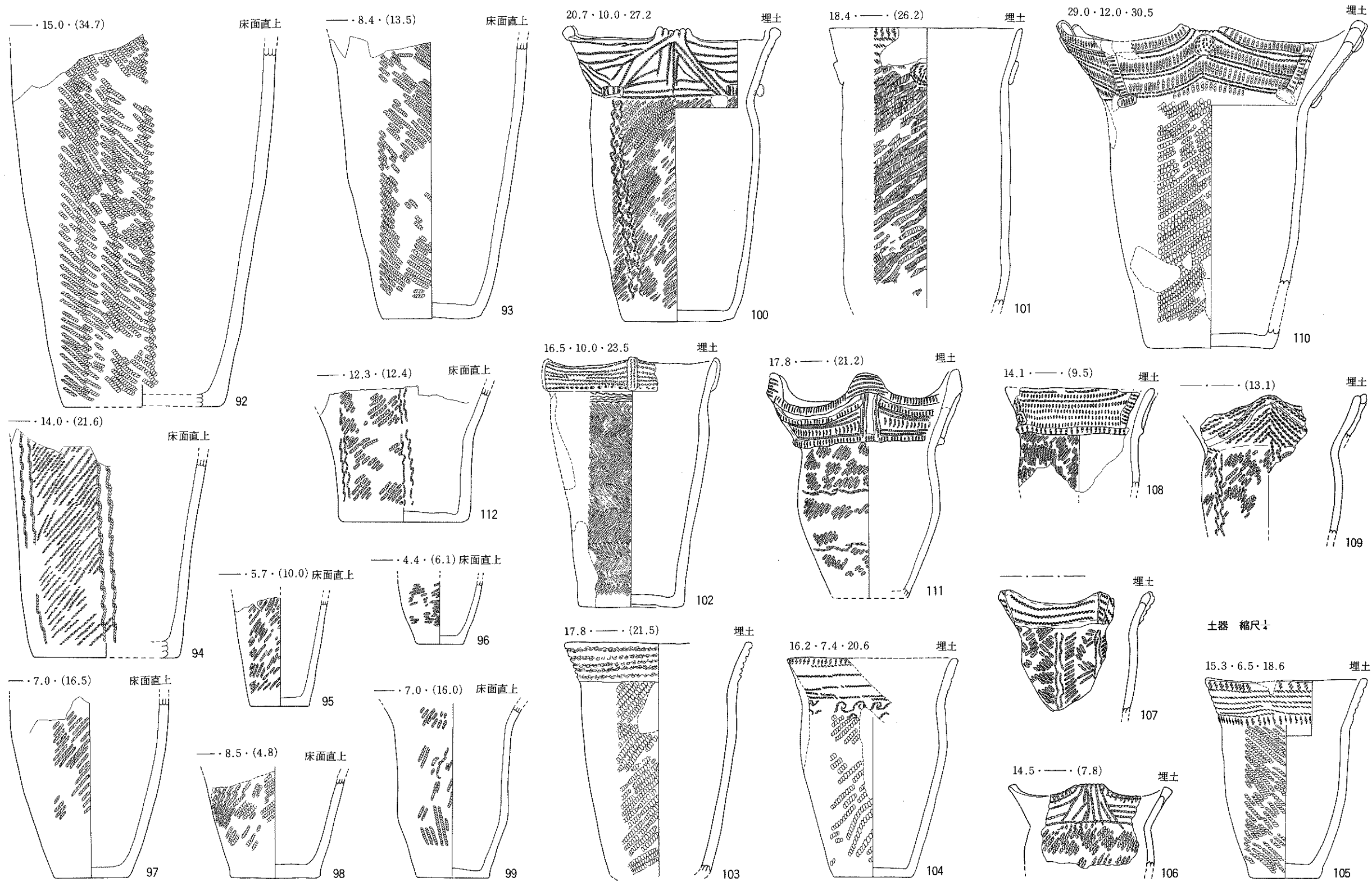
第37图 1-22住居跡 (遺構-2)

土器で、残る 100～168 までは埋土内やセクションベルト内から出土した土器である。まず、床面直上から出土した土器であるが、これらの土器はいずれも第Ⅲ群に属する土器である。78～82はほぼ同種の土器とおもわれ、口縁部が4単位の波状を示し、口縁突起部から頸部まで垂下する隆帯が付されている。79ではさらに、頸部や口縁端部にも全周する隆帯を付している。78・80～82では垂下する隆帯に縦位の原体圧痕文がある。口縁部の文様は、横位の原体圧痕によって付され、口縁端部(79～83)や頸部(79・80・83)に縦位の原体圧痕文を付す場合もある。84～86は頸部に全周する隆帯を付して口縁部と体部を限り、85・86は4単位の大波状口縁を示す。口縁部文様は、隆帯で区画し、区画された部分を篋先や竹管による刺突文で充填している。隆帯上には原体圧痕文を付す。87もほぼ同様であるが、刺突文をもたない。体部の縄文は原体LR横回転による単節斜行縄文(80・84・85・87)、原体RLR横回転による複節斜行縄文(81)や78のように綾絡文をもつ場合もある。埋土内やセクションベルト内から出土した土器も、床面直上出土の土器と大差がないので、個別の説明は省略するが、100～105、121～125は78～82の土器とほぼ同種であろうとおもう。ただ、110・111のように口縁部文様の中で、横位の原体圧痕の間を縦位の原体圧痕文で埋める方法のものが、床面直上からは出土していない。136～146までは、口縁部に横位の原体圧痕文が付され、頸部に肥厚帯をもつ例(137・139)があり、肥厚帯の上には竹管の刺突文がつく。136の口縁部は大きく内傾した後、端部で外反するらしい。体部の縄文は、単軸絡条体縦回転による木目状撚糸文(136・137・143)、原体RL・LRを連結して横回転した羽状縄文をもつ。148は体部破片であるが、多軸絡条体縦回転文をもつ。149・150・156・157は器表全面に単節(原体LR)斜行縄文を付した後、隆帯の貼りつけをしたものであるが、150には隆帯の上に原体圧痕文が付されている。151は頸部に縦形で2個1対のボタン状貼りつけがある。152～154は沈線による文様をもっている。158・159は沈線で区画した後、磨り消しをしているし、160～162は体部に原体LR横回転による単節斜行縄文を付した後、3条の併行沈線によって円文や渦巻文を付し、口縁部は肥厚させ、太い沈線による渦巻文をもっている。なお、口縁は波状である。163・164は無文土器であるが、163の口縁部には軽い突帯をもつ。165・166は器種が明確でないが、165は小型台付土器の台部の可能性があるし、166は口縁部突起の可能性が強い。167・168は口縁突起の破片であるが、167は隆帯貼りつけによって施文されている。168は顔面状を示し、眉の部分は隆帯で、目や口は沈線や凹みで表現している。これらの諸特徴から、144はⅢ群1類、136～143はⅢ群2類、78・83・101・102・108・127・128はⅢ群3類、79～82・103～105・107・109・125はⅢ群4類、106はⅢ群5類、100・110・111・121・123・126はⅢ群6類、124はⅢ群7類、129はⅢ群8類、84～86はⅢ群9類、87・149・156・157はⅢ群10類、88・130・163・164はⅢ群13類、90・91・113・118・134はⅢ群14類、152・154はⅣ群1





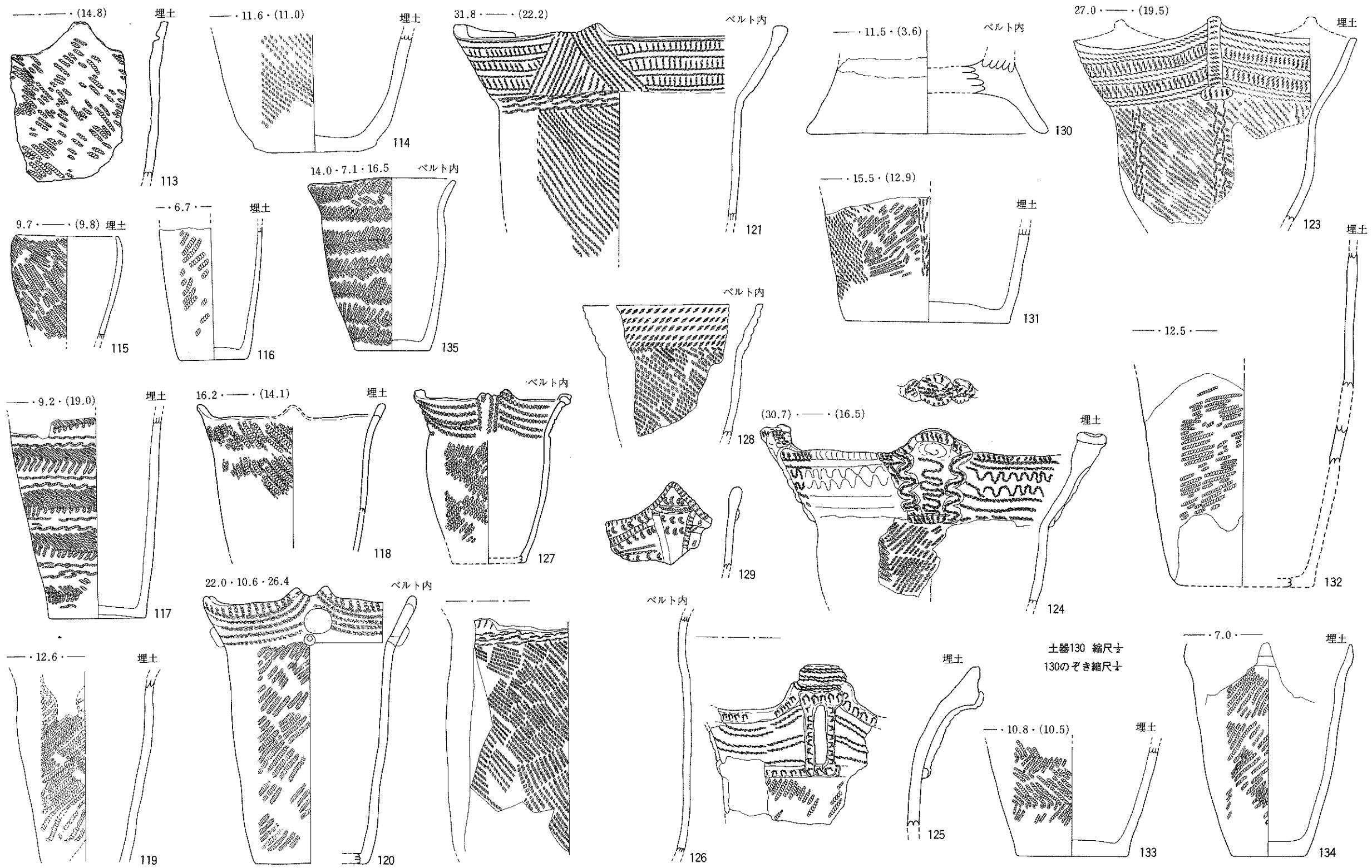
第38图 1-22住居跡 (遺物-1)



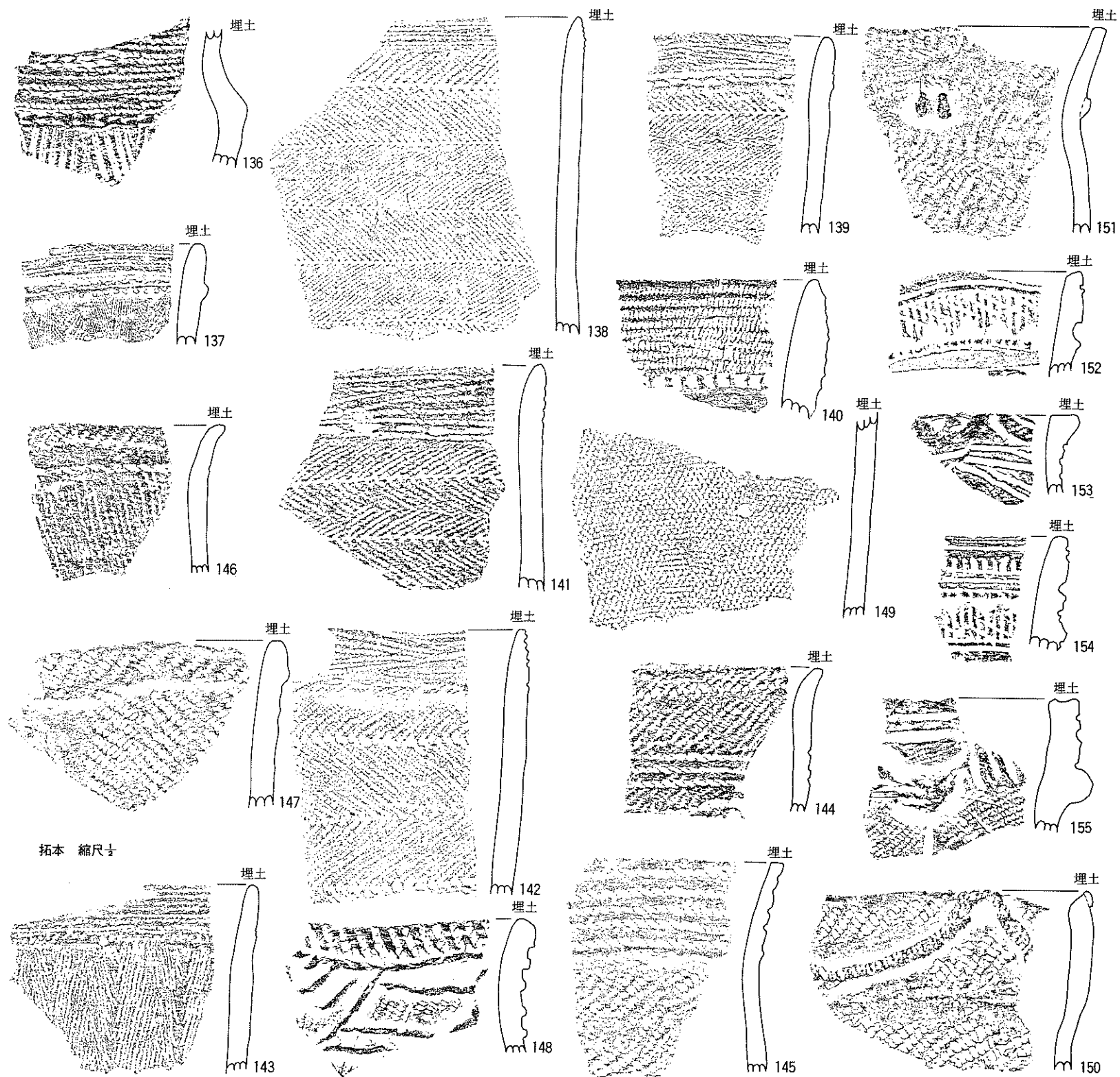
土器 縮尺

第39图 | -22住居跡 (遺物-2)





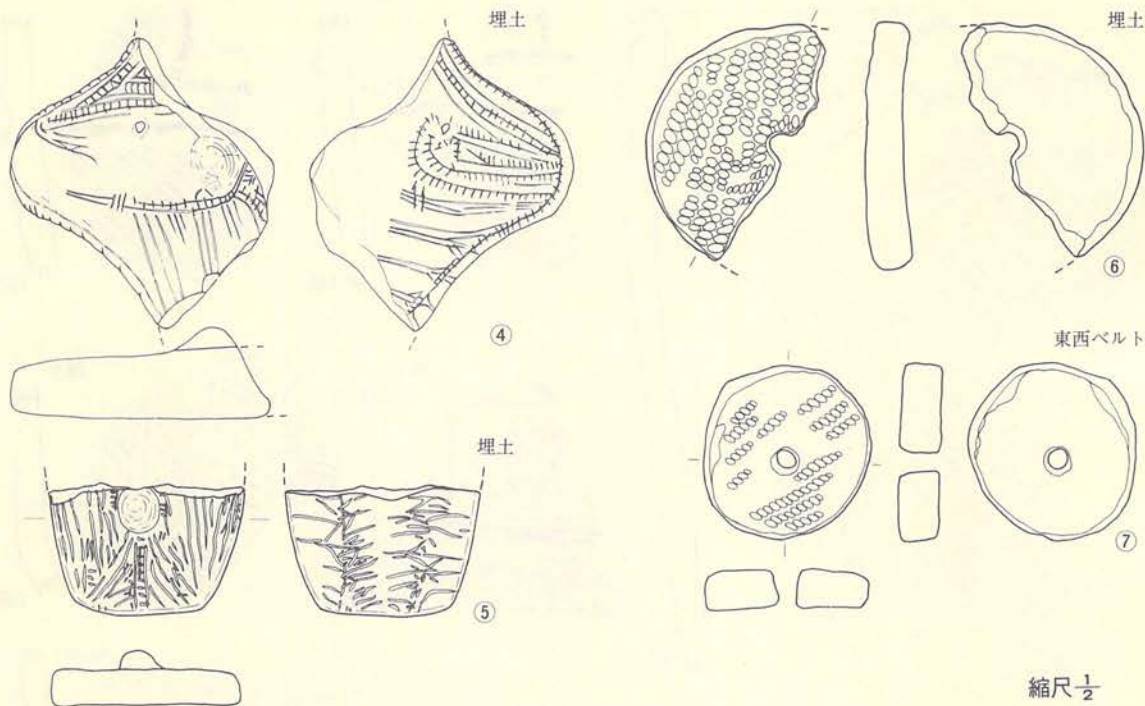
第40図 I-22住居跡(遺物-3)



第41图 1-22住居跡 (遺物-4)







第43図 1-22住居跡（遺物-6）

類、150・151はIV群2類、155はIV群3類、158～162はIV群4類にそれぞれ位置づけられる。

**土製品**（第43図、PL-56）

④・⑤は土偶の破片である。両者とも欠損品で、身体各部の表現は沈線によって描出されており、乳房と腹部はボタン状貼り付けで表している。⑥・⑦は土器片転用による有孔土製円盤で、6はほぼ $\frac{1}{2}$ を欠失している。周縁部は良く擦って形を調整している。

**石器**（第44～51図、PL-124C～PL-126A）

石器は94点出土している。この中には石鏃13点、石槍1点、石匙2点、石錐3点、石篋12点、搔器4点、切削器20点、磨製石斧3点、磨・擦石3点、半円状扁平打製石器15点、凹み石5点、石錘9点、敲き石1点、砥石1点、石棒1点、有孔石製品1点が含まれている。石鏃には有茎型12点（61～70・72・73）と、無茎型1点（71）があり、無茎のものは凹基型である。完形のもものは1点（68）だけで、他は茎部や先端部を欠失している。石槍は1点（74）の出土であるが、茎部が太く大きく作られ、先端部を欠失している。石匙（75・76）は比較的小型で縦形のものである。石錐（77～79）は77・78が先端部を欠失している。79は石鏃にも似ているが、先端部に磨滅痕をもつ。石篋（87～90）には打製石斧的なもの（85・88）も含む。搔器（92～95）

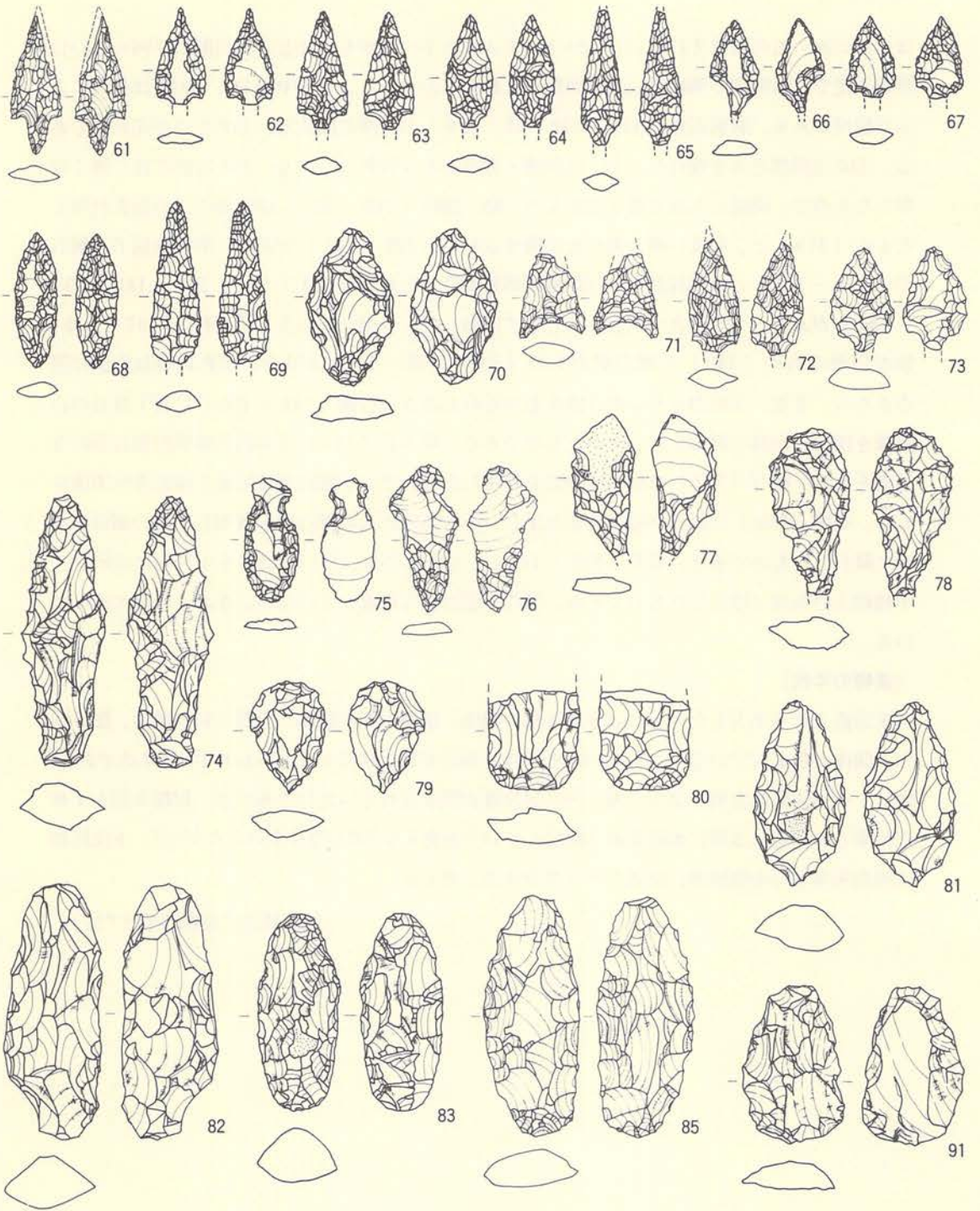


は石筥に近いものも含まれている。94はピエスエスキーユかも知れない。切削器(96~115)は形が不定で、周縁部や側縁部に剝離調整を入れたものである。その中で112・113は石錐に入る可能性がある。磨製石斧(116~118)は、116・117が欠損品で、118だけが完形品である。116は頭部だけを残存し、117は頭部・刃部ともに欠失している。118は細く長く薄く成形したもので、両面に入念な磨き痕をもつ。磨・擦石(119~121)は円礫の平坦面を利用したもの(119)と、細長い礫の側縁を使用するもの(120・121)がある。半円状扁平打製石器(122~136)には周縁部を敲打剝離で形態調整したもの(123・128・130・131・133・135)がある。129のように凹み石として併用している場合もある。凹み石は(137~141)形が円形のもの(140)と楕円形のもの(137~139・141)があり、138以外は両面に凹みをもつ。また、140のように磨り面をもつものもある。石錘(142~150)は若干長目の自然礫を使用し短軸の両端を打ち欠いたものである。敲き石(151)は半円状扁平打製石器的な要素をもつ。砥石(152)は極粗粒砂岩を利用したもので、平面的な使用面と線的な使用面をもつ。石棒(153)は断面が扁五角形を呈し、柱状節理の石英安山岩を使用し、角の部分に敲打したものである。有孔石製品(154)としたものは、薄い粘板岩を小判形に成形し、中軸線上の両端に穿孔したものである。図の下位の孔は貫通していない。なお、一部欠損している。

#### 〔遺構の年代〕

床面直上より出土した土器にはⅢ群3類2個体、Ⅲ群4類4個体、Ⅲ群9類3個体、Ⅲ群10類1個体が含まれている。これらの中でⅢ群3類と4類は共伴するといわれているものである。仮にI-19住居跡と同じように埋土内に包含層が形成されていたのであれば、Ⅲ群3類と4類が投棄された時には既に本住居跡は廃絶していたと考えなければならない。したがって、本住居跡は前期末葉から中期初葉に位置づけるのが妥当と考える。

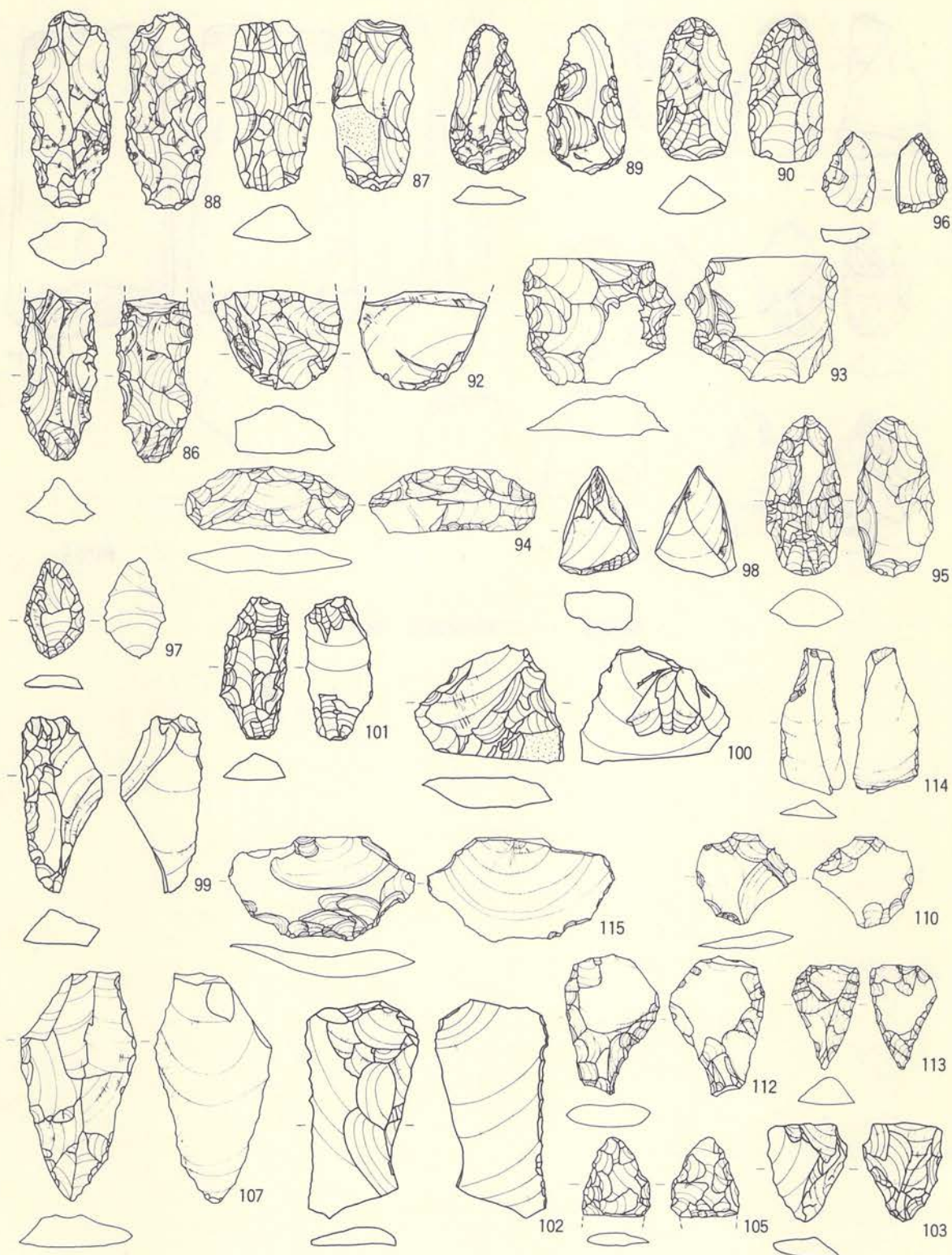
(住居跡全て高橋与右エ門)



縮尺  $\frac{1}{2}$

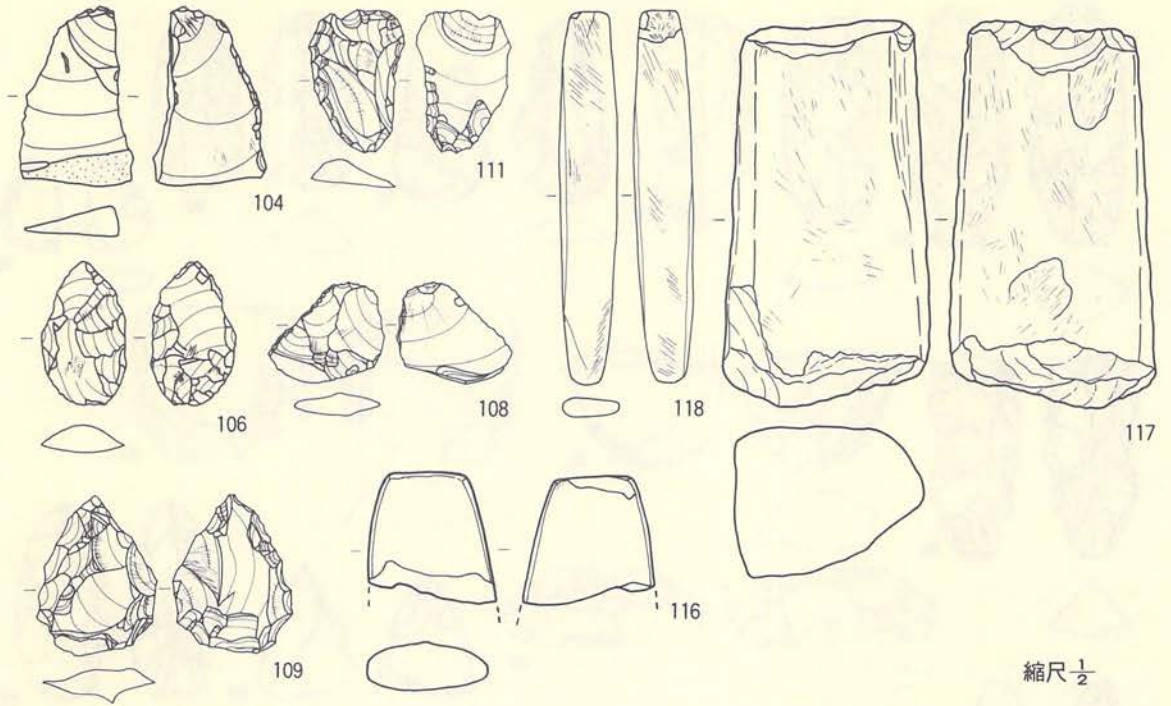
第44図 I-22住居跡遺物(遺物-7)





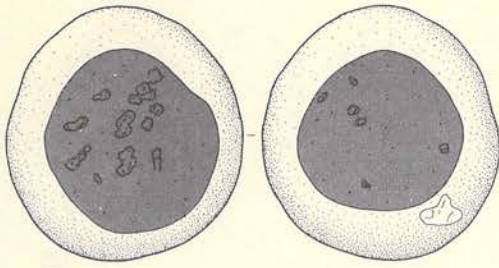
第45圖 I-22住居跡遺物 (遺物-8)

縮尺  $\frac{1}{2}$

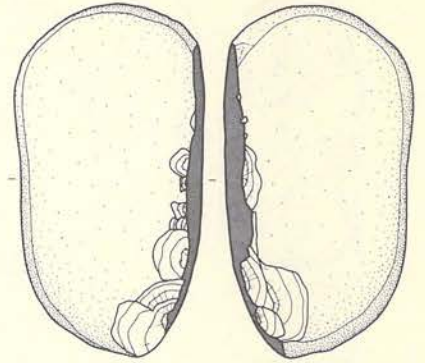
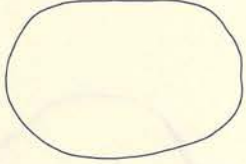


第46図 I-22住居跡遺物(遺物-9)

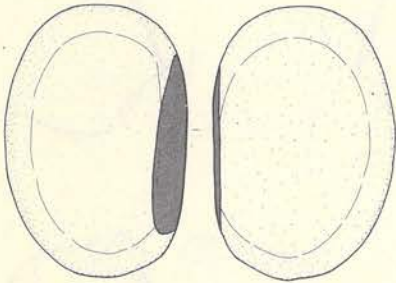
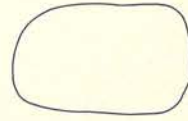




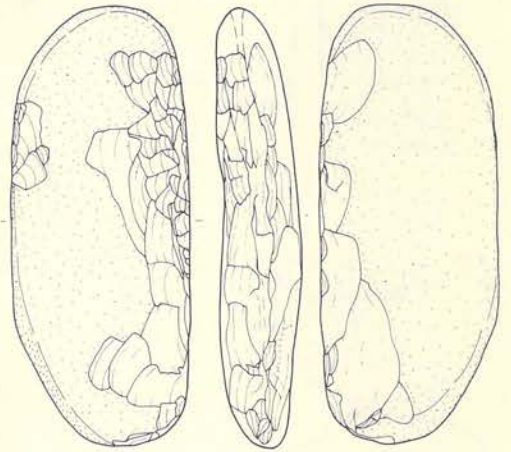
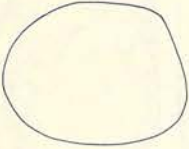
119



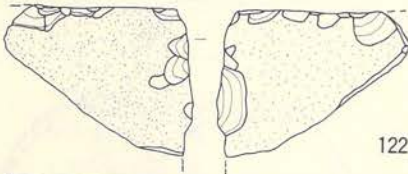
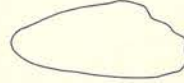
120



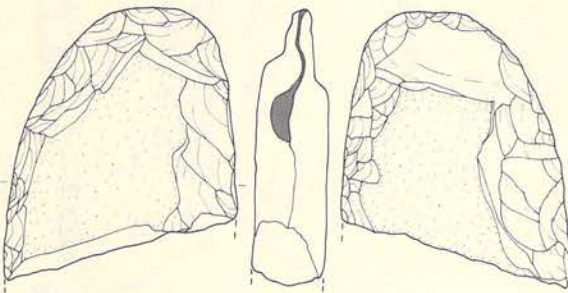
121



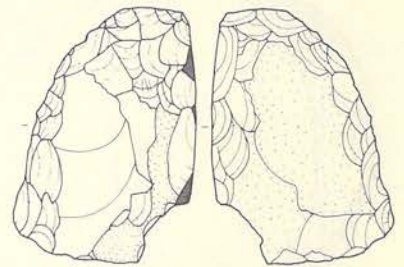
127



122



123

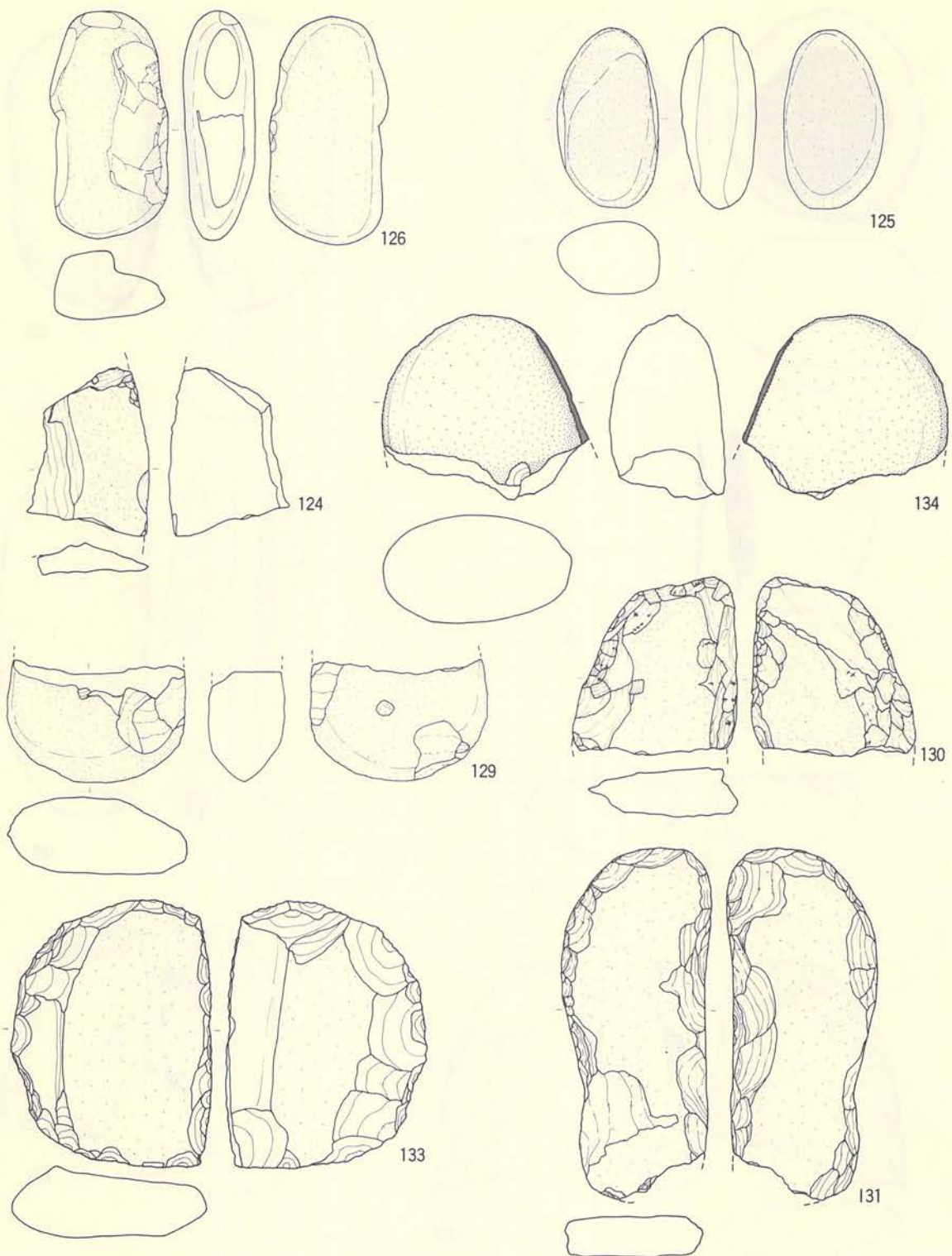


128



縮尺  $\frac{1}{3}$

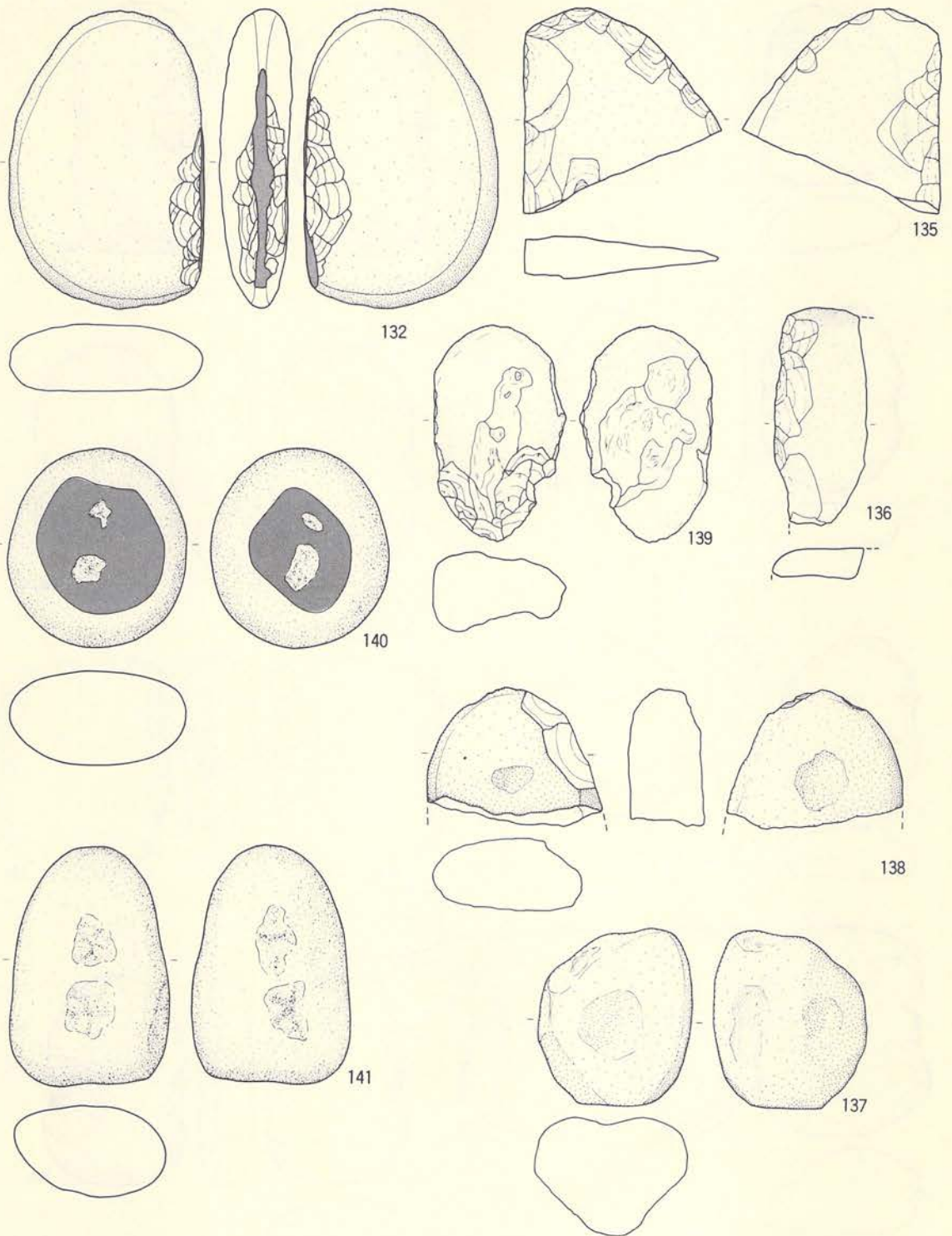
第47図 1-22住居跡遺物 (遺物-10)



縮尺  $\frac{1}{3}$

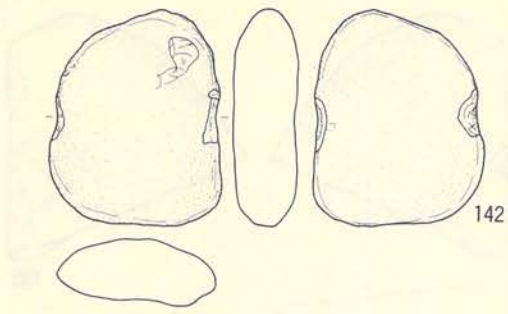
第48図 I-22住居跡遺物 (遺物-11)



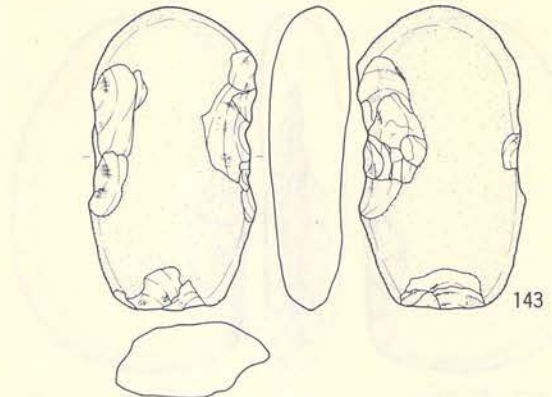


縮尺  $\frac{1}{3}$

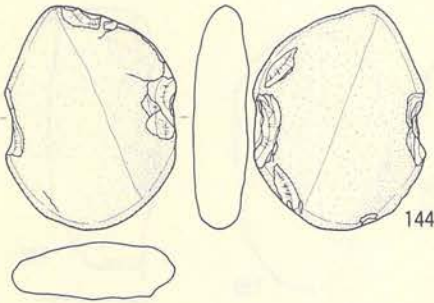
第49圖 I-22住居跡遺物 (遺物-12)



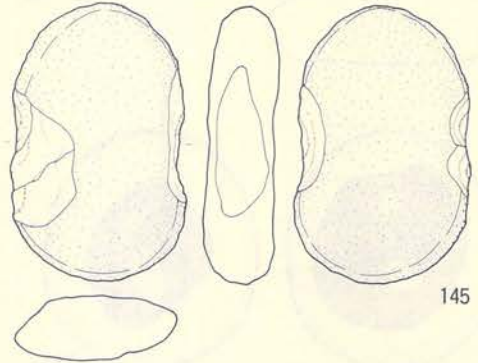
142



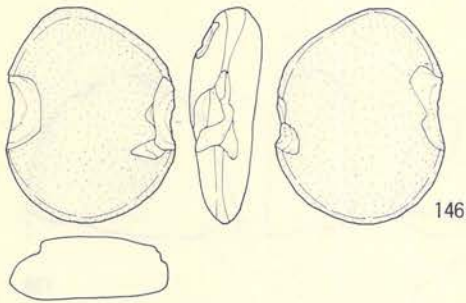
143



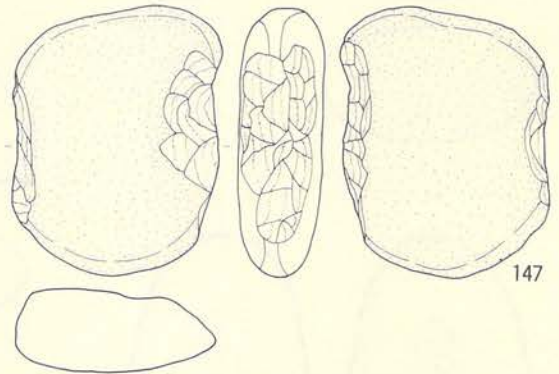
144



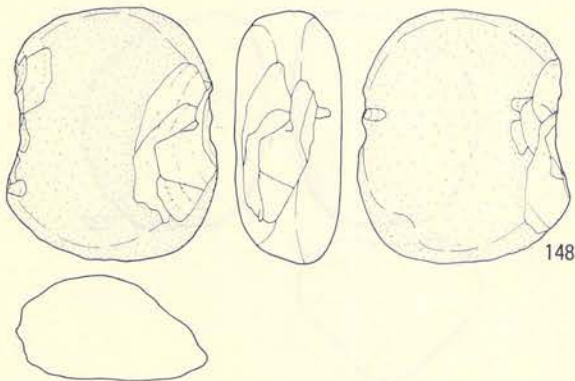
145



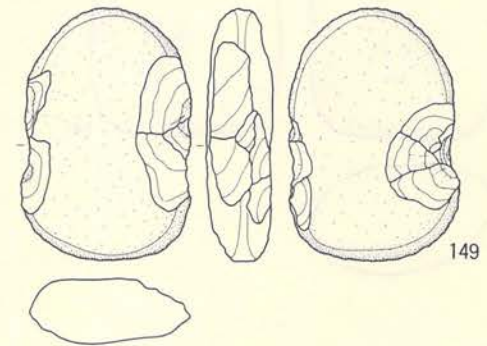
146



147



148

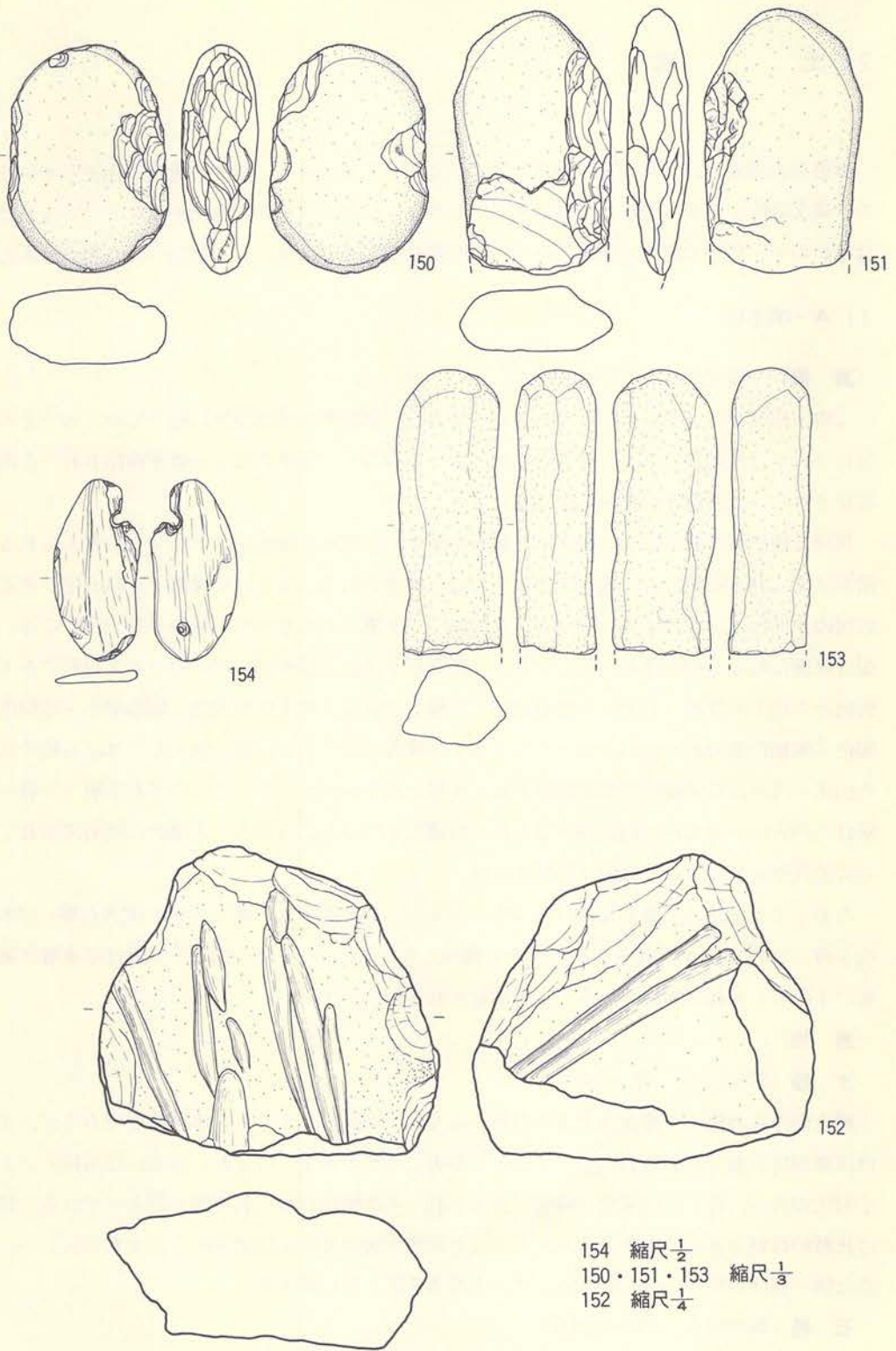


149

縮尺  $\frac{1}{3}$

第50図 I-22住居跡遺物(遺物-13)





第51図 I-22住居跡遺物 (遺物-14)

## 2. 土 坑

本遺跡の調査では土坑が79基検出されているが、1基は古代に属する遺物を出土しているの  
で、縄文時代に属する土坑は78基である。しかし、78基すべてから遺物が出土しているわけ  
ではないので、形態や埋土の状況等から、本時代に該当する土坑として結論づけた場合もある。

### 1) A-06土坑

〔遺 構〕 (第52図A、PL-15D)

この土坑はグリッドA-06を中心として位置し、東側部分は路線外に延びているのでその部  
分については未調査である。調査された部分からみると、全体のほぼ1/2強が検出されたものと  
推定される。他遺構との重複関係はない。

規模は検出面の開口部で径約2m・底面が径2mを測り、検出された部分から考えられる平  
面形は開口部・底面ともに円形を呈するものと推定される。深さは最深部で1.44m位であるが、  
底面の中央付近はほぼ水平に近いが、壁に向かって次第に高くなっているため若干浅くなる。壁  
面は底面に対して約68度で内傾しており、断面形では頸部径が約1.70mのフラスコ形であるが、  
底面から約1m付近より上位の壁面は逆に外傾している。埋土は黒褐色・極暗褐色・暗褐色・  
褐色・明褐色等の砂や地山ブロックやシルトで構成されており、混入物としては浮石粒や八戸  
火山灰・八戸浮石流凝灰岩等が観察され、9層に細分されている。その中でも3層・8層・9  
層は八戸火山灰や八戸浮石流凝灰岩だけが堆積しているところから、人為的に埋め戻されてい  
る可能性が大である。全体的に粘性はない。

なお、この土坑の土層から掘り込み面をみると、基本層序第Ⅲ層（所謂中掬浮石層）が本土  
坑を覆っており、その一部が土坑の埋土を構成している。したがって、掘り込み面は基本層序第Ⅳ  
層の上面もしくは第Ⅲ層ということが推定される。

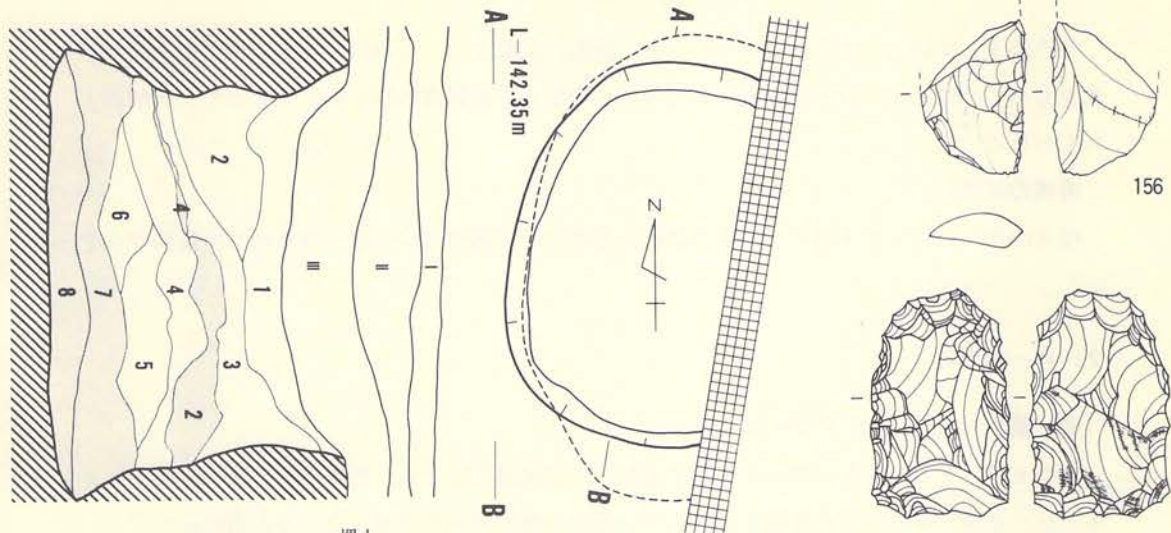
〔遺 物〕

土 器 (第52図A、PL-57)

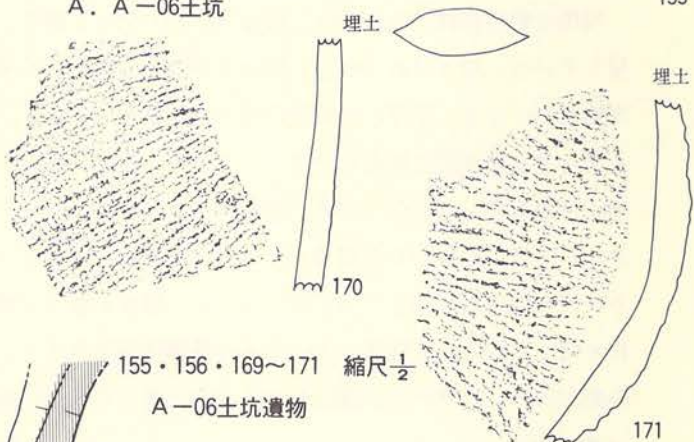
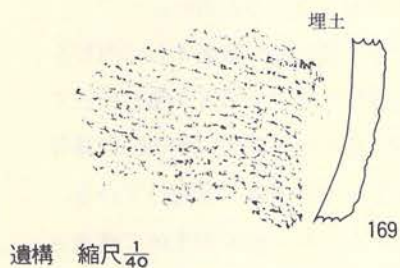
埋土内からの出土で底面直上よりの出土はない。169～171ともに体部破片であるが、171  
は底部面近い部分とおもわれる。3点とも器表に不整撚糸文が付され、内面には指押えによる  
小起伏がある。胎土には多量の繊維が混入され、その他に砂粒・石英等が混入している。焼成  
は比較的良好である。171の状況からみると底部形態は丸底か鈍角尖底を示すものらしい。3  
点は同一個体の破片とおもわれる。この土器はⅡ群3類に属する。

石 器 (第52図A、PL-126B)



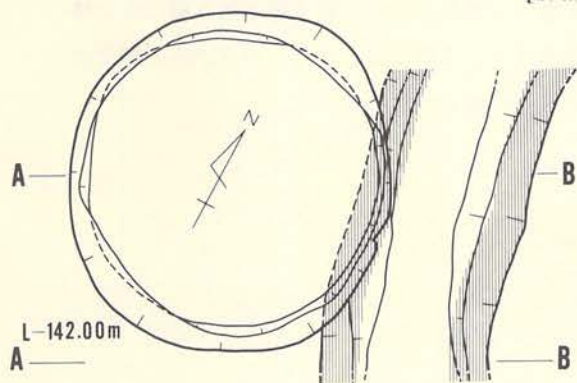


A. A-06土坑



155・156・169~171 縮尺 $\frac{1}{2}$

A-06土坑遺物



B. A-09土坑

A-06土坑土層注記

層位	色調	土性
1	7.5YR 3/6 極暗褐色~黒褐色	浮石質砂層。浮石が多い。
2	7.5YR 3/6 明褐色~褐色	ソフトローム。軟質浮石混入。
3	7.5YR 3/6 暗褐色	質的に1層に近似する。
4	7.5YR 3/6 暗褐色~褐色	質的には、3層に近似し、シラスの小ブロックが混入。
5	7.5YR 3/6 黒褐色~暗褐色	汚れたソフトローム。
6	7.5YR 3/6 褐色	浮石が多く混入した汚れたソフトローム。
7	7.5YR 3/6 褐色	八戸火山灰
8	7.5YR 3/6 明褐色	八戸浮石凝灰岩

A-09土坑土層注記

層位	色調	土性
1	7.5YR 3/6 明褐色	ソフトローム。パシス・炭化物・スコリヤ等の混入あり。
2	7.5YR 3/6 暗褐色	非常に汚れた火山灰。
3	7.5YR 3/6 黒褐色	中振浮石。
4	10 YR 3/6 褐色	ソフトローム。炭化物が混入。
5	7.5YR 3/6 明褐色	汚れたソフトローム。

2点出土している。155は石筥としたが、両面に剝離が入っていることから打製石斧的な要素をもっている。156は不定形剝片の周縁部に簡単な片面剝離調整を加えたもので、切削器とおもわれる。

#### 〔遺構の年代〕

埋土内から出土した土器や、埋土の状況から考えて前期初葉に位置づけられる可能性が大きい。

### 2) A-09土坑

#### 〔遺構〕 (第52図B、PL-14A)

この土坑はグリッドA-09とB-09にまたがって位置している。他遺構との重複関係では、本土坑の東側がA-08周溝遺構と重複しているが、新旧関係では本土坑の方が古い。

規模は開口部径が約1.80m、底面径が約1.60mを測り、平面形は開口部・底面ともに円形を呈している。深さは最深部で1.35mを測るが、底面の中央付近はほぼ水平であるが壁に向って次第に高くなり、壁面との接続は若干丸味をもっている。壁面は若干内傾気味(約80度)の部分もあるが、全体的な断面形ではピーカー形を呈し、底面より約1m上位で軽く外傾している。埋土は黒褐色・暗褐色・褐色・明褐色等を呈するシルトやよごれた八戸火山灰が主体で構成されているが、混入物や色調等によって5層に細分されている。その中の1層と4層にはよごれた八戸火山灰が堆積しているが、中でも1層は4層より明色を示し、基本層序第IV層に近い様相を呈している。土層図によってその堆積状況を見ると、1層のよごれた八戸火山灰の層位に疑問があり、自然状態で埋没した土坑とは考えられない面がある。

#### 〔遺物〕

出土していない。

#### 〔遺構の年代〕

縄文時代の土坑ではあるが時期は不明である。

### 3) A-10土坑-1

#### 〔遺構〕 (第53図A、PL-14B)

この土坑はグリッドA-10に位置し、他遺構との重複はない。

規模は開口部径が約1.40m×1.30mで、底面径は約1.50m×1.50mを測り、平面形は開口部・底面ともに円形を呈している。深さは最深部で約95cmを測るが、底面が中央に向って低くなっている。断面形は床面から約1m上位に径約1.2m×1.15mの頸部をもち、壁面が底面に対して約77度内傾するフラスコ形を呈している。埋土は黒色・極暗褐色・褐色・明褐色を呈するシ



ルトが主体で構成されているが、火山灰や浮石粒、炭化物粒を混入していることから、それらによって6層に細分されている。埋土の堆積状況を土層図で観察すると、ほぼ自然堆積で埋没した土坑と推定される。

〔遺物〕

土器 (第53図A、PL-57)

172は無文土器で、173は単節斜行縄文が付された体部破片である。胎土に砂粒や石英粒の混入がある。

石器

出土していない。

〔遺構の年代〕

埋土内から出土した土器は体部の小破片であるため、時期を特定するのは困難である。しかし、胎土に繊維が混入していないことから、中期以降の土器と考えられるので、本土坑も中期以降に位置づけられるであろう。

#### 4) A-10土坑-2

〔遺構〕 (第53図B、PL-14C)

この土坑はグリッドA-10に位置し、他遺構との重複はない。

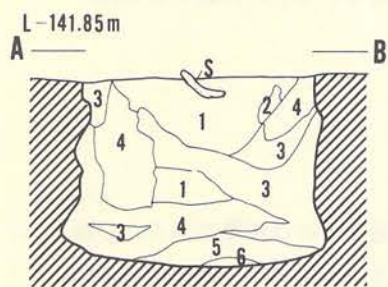
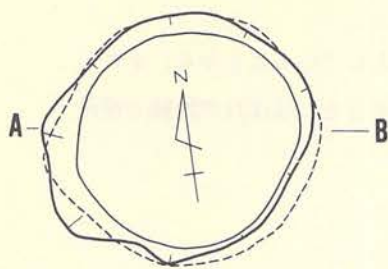
規模は開口部径約1.80m×1.55mで、底面径は約1.65m×1.55mを測り、平面形は開口部・底面ともにほぼ円形を呈している。深さは最深部で1.10mを測り、底面には若干起伏があるもののほぼ水平状態に近い。断面形は底面より約80cm上位に径約1.25mの頸部をもち、壁面が底面に対して約80度内傾するフラスコ形である。埋土は黒褐色・極暗褐色・暗褐色・褐色等のシルトとよごれた八戸火山灰によって構成されているが、全体的に浮石粒の混入が多く7層に細分されている。中でも1層はよごれた八戸火山灰の堆積層であり、自然堆積の土坑と比較して奇異な感をもっている。全体的に粘性がなくパサパサしている。このことから本土坑は人為的に埋め戻された可能性が大きい。

〔遺物〕

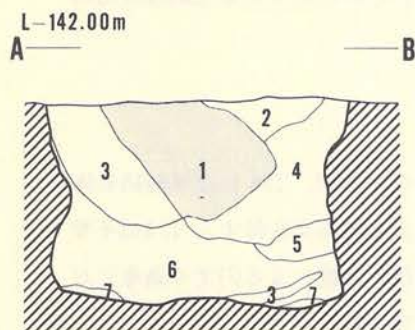
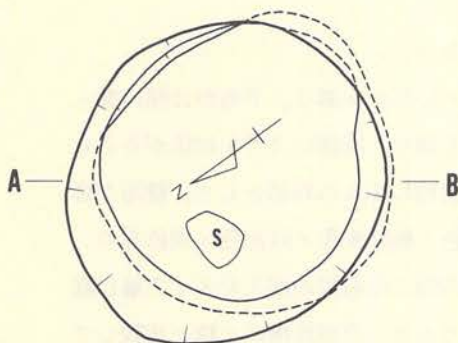
土器 (第53図B、PL-57)

埋土内から土器片が出土している。176と177は口縁部破片であるが、176には単軸絡条体圧痕文が横位で3条付されている。177は単軸絡条体縦回転による撚糸文を付す。174は不整撚糸文をもち、175は0段多条による単節斜行縄文が付された後、沈線による円文や渦巻文が描かれているらしい。174には胎土に繊維を含むが他のものにはない。

石器

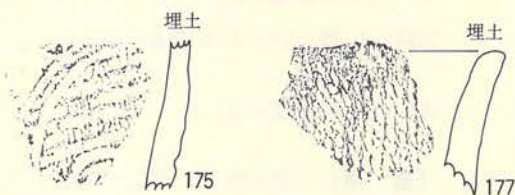
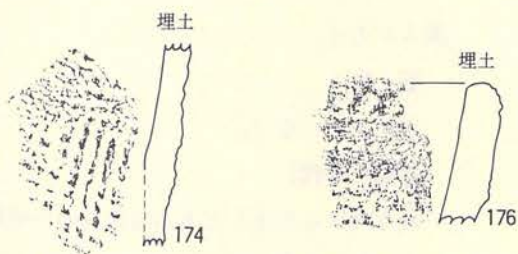
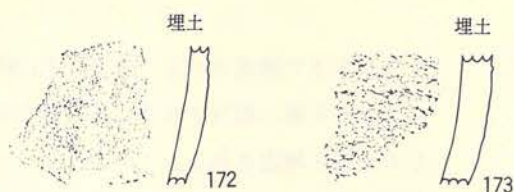


A. A-10土坑-1



B. A-10土坑-2

172~177 縮尺 $\frac{1}{2}$   
遺構 縮尺 $\frac{1}{40}$



A-10土坑-1 土層注記

層位	色調	土性
1	7.5YR 5/4 褐色シルト	中搬浮石を主とする。炭化物混入。
2	7.5YR 5/6 明褐色	八戸火山灰純層ブロック。
3	7.5YR 5/3 極暗褐色	シルト(砂質)。中搬浮石を基調とするしまりの良いシルト。炭化物混入。
4	7.5YR 5/2 極暗褐色	シルト(砂質)。質的には、1層と大差がない。
5	7.5YR 5/1 黒色シルト	炭化物・中搬浮石の混入が多い。ややしまる。
6	7.5YR 5/4 明褐色	シラス。

A-10土坑-2 土層注記

層位	色調	土性
1	7.5YR 5/4 暗褐色シルト質	黄褐色ロームに黒土が混入。軟かい。
2	7.5YR 5/3 極暗褐色	シルト(砂質)質的には、3層と大差なし。
3	7.5YR 5/2 黒褐色、砂質	シルト 中搬浮石・南部浮石・礫混入。
4	7.5YR 5/1 極暗褐色	シルト 中搬浮石の混入多し。
5	7.5YR 5/4 黒褐色シルト	質的には、4層と同じ。
6	7.5YR 5/6 褐色、シルト質	黄褐色ロームに黒土が混入した土。
7	7.5YR 5/4 明褐色	シラス。



出土していない。

#### 〔遺構の年代〕

出土した土器の中で時期決定としての資料になるのは175である。この土器には前記のような文様が付されていることから、IV群4類に相当するであろう。したがって中期中葉頃に属する土坑の可能性が大きい。

### 5) A-11土坑

#### 〔遺構〕 (第54図A、PL-15A)

この土坑はグリッドA-11に位置し、他遺構との重複はない。

規模は開口部径約1.70m×1.55mで、底面径は約1.50m×1.45mを測り、平面形は開口部・底面とも円形を呈している。深さは最深部で径約95cmで、底面には若干起伏があるものの、ほぼ水平状態に近い。断面形は底面より約45cm上位の壁面に径約1.55m×1.50mの頸部をもち、壁面が床面に対して約85度で内傾するフラスコ形であるが、全体的にみると頸部径と底面径に大差がみられないことから、開口部付近で外傾するビーカー形が本来の形態であろう。埋土は黒褐色・暗褐色・褐色・明褐色等を呈するシルトやよごれた八戸火山灰等で構成され、全体的に浮石粒の混入が多く6層に細分される。6層に粘性が若干みられる以外はほとんど粘性がなく、あまり締りがなくパサパサしている。6層は八戸火山灰の堆積層であり、このことから考えると、人為的に埋め戻された可能性が大きい。

#### 〔遺物〕

#### 土器 (第54図A、PL-57)

いずれも埋土内から出土した土器である。178は器表全面に縄文を付した後、3条平行する沈線を施文している。口縁端部にも沈線を付している。波状口縁で外反するらしい。179には縦位の撚糸文が付されている。180は器表全面に貝殻条痕文をもち、その上に太い凹線が不規則につく。181は器表に縄文を付した後、口縁端部付近に横走する不明瞭な綾絡文がある。182は波状口縁で、縄文を付した後、篋先による列点文を付すものである。183・184は貝殻条痕文だけを付す。180～184の胎土には繊維の混入がみられ、特に181・182が顕著である。

#### 石器

出土していない。

#### 〔遺構の年代〕

土器の所属時期をみると、中期(178・179?)、前期(181・182)、早期(183・184)のものが混在している。ここではもっとも新しい178の土器から本土坑を中期中葉に位置づけておく。

## 6) B-04土坑

〔遺構〕 (第54図B、PL-15B)

この土坑はグリッドB-04に位置し、他遺構との重複はない。

規模は開口部径約2.10m×2.10mで、底面径は約2.60m×2.50mを測り、平面形は開口部・底面ともにほぼ円形を呈している。深さは最深部で約1.50mを測り、底面はほぼ水平状態であるが、壁際が若干高くなり、壁とは丸味をもって接続している。断面形は底面より約75cm上位に径約2.20m×2.10mの頸部をもち、壁面が底面に対して約73度内傾するフラスコ形である。頸部から上位の壁面はほぼ垂直である。埋土は黒色・黒褐色・褐色等のシルトや砂および八戸火山灰等で構成され6層に細分されている。1層は混入物(浮石)の多少によって更に細分されている。その中で4層は八戸火山灰の堆積層であり、層相からみると壁面の崩壊による堆積状況を示すものであろう。4層には若干粘性があるが、他には粘性がなく全体的にザラザラした砂っぽい土質である。このような堆積状況から自然堆積で埋没した土坑と考えられる。

〔遺物〕

土器 (第55図、PL-57)

いずれも埋土内からの出土である。実測されたのは192・193の底部と185の大型破片だけである。185は体部に横位の連結羽状縄文をもち、口縁部には不明瞭な綾絡文を付す。186は不明瞭な単節斜行縄文をもち、187・188は器表に不整撚糸文がつけられている。189・190は器表全面に縄文を付した後、沈線や列点による文様を付している。191は2条を1対とする絡条体圧痕文をもち、194～197は貝殻条痕文を付した後、貝殻腹縁文を入れ、特に194の口縁部破片は斜位に平行する貝殻腹縁文を入れている。198は無文である。192・193は尖底や丸底の底部破片である。これらの胎土にはすべて繊維を混入し、特に185～191には顕著である。砂粒や石英粒を多く含む土器片が多い。

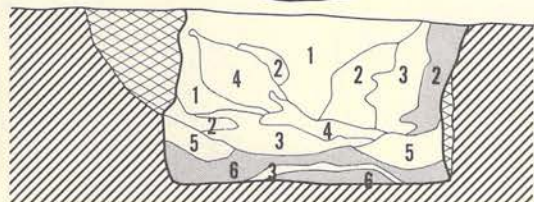
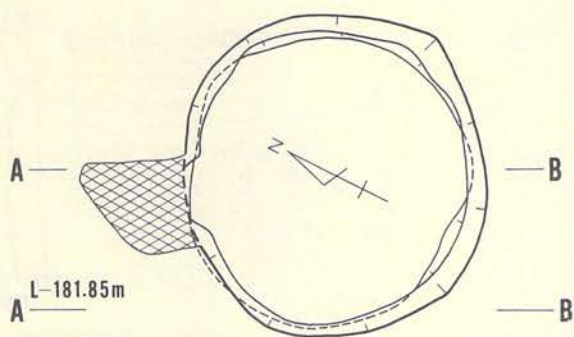
石器 (第55・56図、PL-126C)

11点出土しているが、いずれも埋土内から出土したものである。157は石鏃であるが、無茎凹基型のものである。158・159は縦形の石匙であるが、159は欠損品である。160・161は石筥で、161は欠損品である。162は不定形剝片を利用した切削器である。163は側縁部を使用した擦石である。164は磨石である。165は凹み石で両面に凹みをもつ。166は半円状扁平打製石器である。107は敲き石である。

〔遺構の年代〕

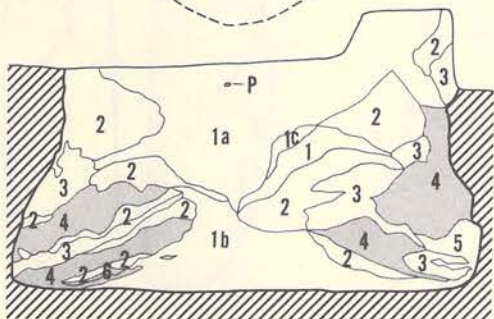
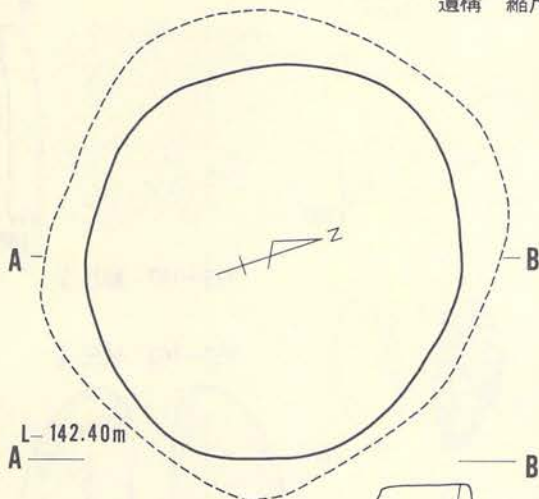
出土した土器の所属時期は早期(194～199)と前期(185～193)のものがある。ここでは一応前期初葉に位置づけられる土坑としておく。



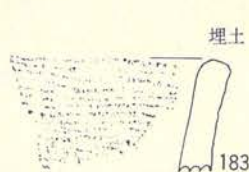
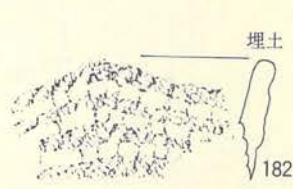
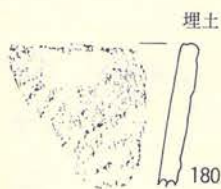
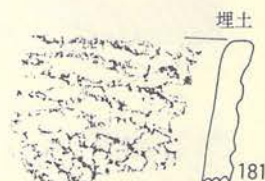
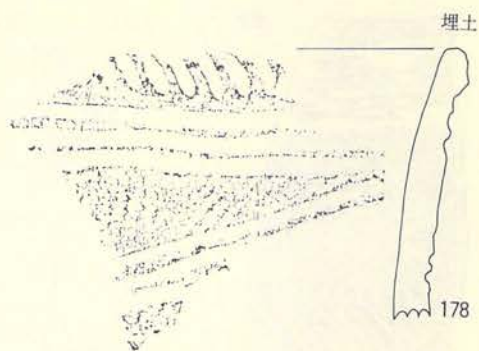


A. A-11土坑-11

遺構 縮尺 $\frac{1}{40}$



B. B-04土坑



178~184 縮尺 $\frac{1}{2}$

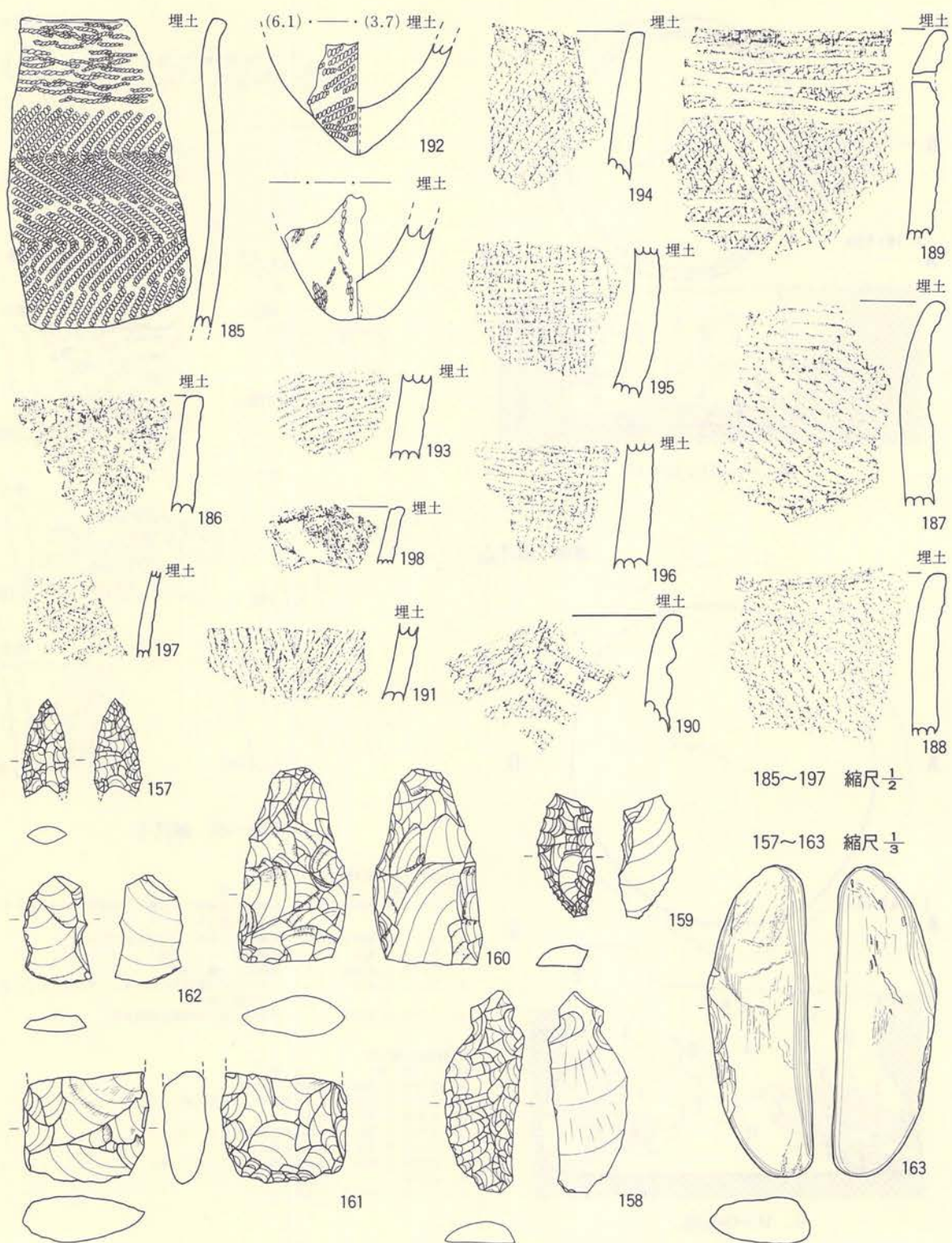
A-11土坑-1土層注記

層位	色調	土性
1	7.5YR 5/2 黒褐色シルト	中振浮石を基調とする層。1cm位のゴロタも混入する。炭化物の混入もみられる。
2	1より若干赤味が強い。	中振の混入が多く、ゴロタが少ない。
3	7.5YR 5/2 褐色シルト	中振浮石・ゴロタが混入し、ややしまる。
4	7.5YR 5/2 黒褐色シルト	質的には3層と同様。
5	7.5YR 5/2 褐色	八戸火山灰に黒色土の混入多く、やや黒ずんでいる。
6	7.5YR 5/2 明褐色	ゴロタ混入あり。八戸火山灰の上部層の純層混入。

B-04土坑土層注記

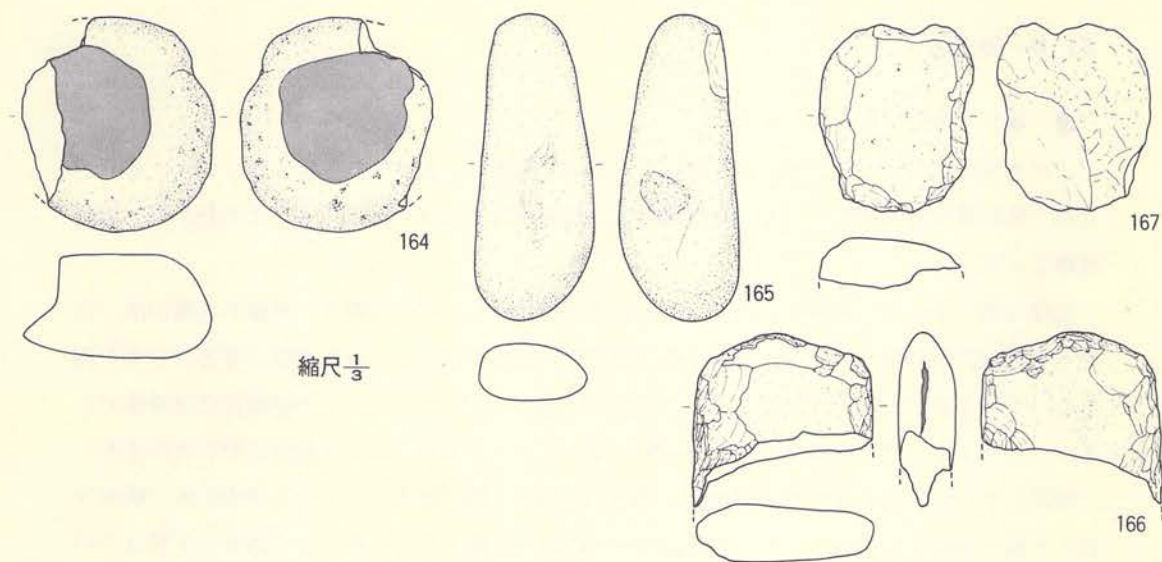
層位	色調	土性
1a	7.5YR 5/2 黒褐色	中振浮石の砂質。
1b	7.5YR 5/2 黒褐色	シルト質砂岩。浮石を多量に含む。
1c	7.5YR 5/2 黒色	砂質シルト。
2	7.5YR 5/2 黒色	南部浮石上層の黒色土と同じ。
3	7.5YR 5/2 褐色	南部浮石層。
4	7.5YR 5/2 褐色	南部浮石層下のソフトローム層。
5	7.5YR 5/2	注記まれ。
6	7.5YR 5/2 灰白色	シラス。

第54図 土坑



第55図 B-04土坑 (遺物-1)





第56図 B-04土坑（遺物-2）

## 7) B-08土坑

〔遺構〕（第57図A、PL-15C）

この土坑はグリッドB-08に位置し、B-06周溝遺構の南東部と重複している。新旧関係では本土坑の方が古い。

規模は開口部径約2.30m×1.15mで、底面径約2.10m×90cmを測り、平面形は開口部・底面ともに長楕円形を呈している。深さは最深部で50cm位を測るが、底面が南に向って高くなり次第に浅くなる傾向がある。実測図では底面に溝が在るように図示しているが、これは木根による攪乱であり、本土坑とは直接関係がない。全体的にみると小凹凸があるもののほぼ平坦である。断面形は、壁面が底面に対して若干外傾し、底面とは軽い丸味をもって接続する浅い皿形に近い形状を示している。埋土は黒褐色のシルトの単層だけで構成されている。混入物としては小粒の浮石粒や炭化物がみられる。自然堆没したものと考えられる。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の年代〕

遺物の出土がないので特定できない。

## 8) B-09土坑

〔遺構〕 (第57図B、PL-16A)

この土坑はグリッドB-09とB-10にまたがって位置し、南側でB-10土坑-3と、そして北側で集石遺構と重複している。重複遺構との新旧関係ではB-10土坑-3より新しく、集石遺構より古い。

規模は開口部径約1.55m×1.55mで、底面径約1.35m×1.30mを測り、平面形は開口部・底面ともに楕円形を呈している。深さは最深部で1.10m位を測るが、底面が壁に寄るほど若干高くなっているため、壁寄りには若干浅い。断面形は底面から80cm上位までの壁面はほぼ垂直であるが、その上位は軽く外傾するピーカー形を呈している。なお、底面と壁面は軽い丸味をもって接続している。埋土は橙色・明褐色・褐色・暗褐色・黒色等のシルトや八戸火山灰で構成され、6層に細分されている。1～3層は八戸火山灰が基調となる土層で、その中で1層は八戸火山灰そのものの感がある。全体的には浮石粒や炭化物粒が混入しており、粘性・締りともにほとんどない。堆積状況は自然埋没ともみえるが、1・2層の存在が若干気になり、人為的に埋め戻された可能性がある。

なお、開口部の北側部分には集石遺構に関連する河川礫が、本土坑内に半ば落ち込むような状態で検出され、底面に一部接する状態のものもある。これらの礫の大きさは約50cm×20cm×15cm位である。

〔遺物〕

土器 (第57図B、PL-58)

いずれも埋土内から出土したものである。199は付加条縄文で原体RL横回転である。200には撚糸文が付されている。201・202は原体RLに1段撚り紐を付加した付加条縄文で、同一個体の破片と考えられる。203は縄文と沈線そして磨消縄文による文様を付している。200～202には胎土に繊維を混入している。

石器

出土していない。

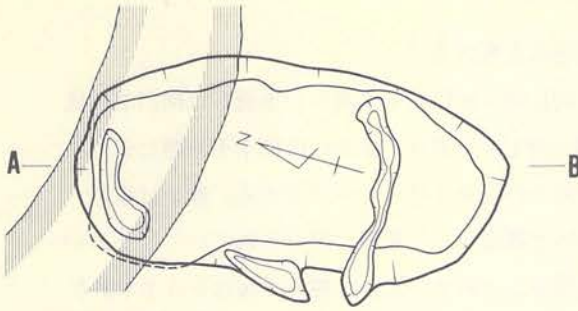
〔遺構の年代〕

出土土器の中には前期(200～202)と中期(203)のものが含まれ、199は時期不明である。したがって本土坑は中期頃に位置づけられる土坑と考える。

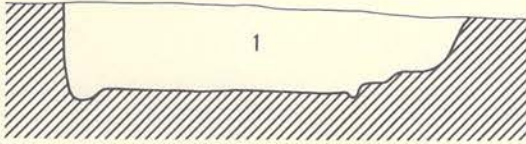
## 9) B-10土坑-1

〔遺構〕 (第57図C、PL-16B)

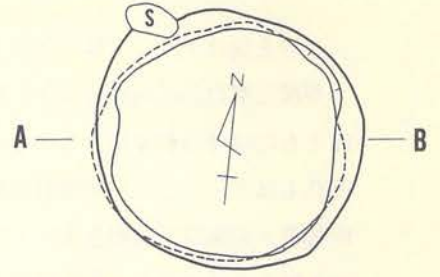




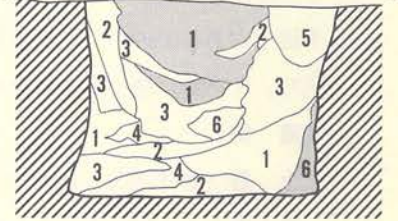
L-141.80m  
A ————— B



A. B-08土坑



L-141.85m  
A ————— B



遺構 縮尺  $\frac{1}{40}$

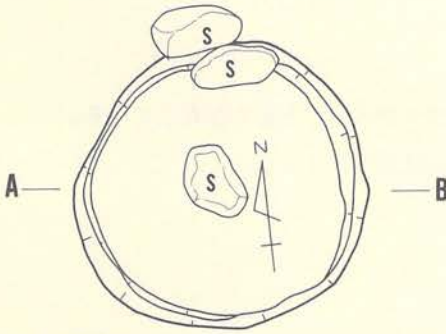
C. B-10土坑-1

B-08土坑

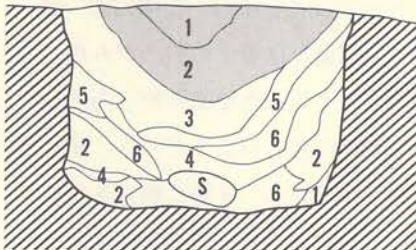
層位 色調 土性  
1 7.5YR 5/2 黒褐色シルト、砂質シルト 西による程黒味が強くなる。

B-10土坑-1 土層注記

層位	色調	土性
1	7.5YR 5/2 明褐色	八戸火山灰の汚れた土。
2	7.5YR 5/2 黒褐色	中振浮石と南部浮石が混入し、ややしまる。
3	7.5YR 5/2 暗褐色	中振浮石を基調とするややしまる。
4	7.5YR 5/2 暗褐色	3層とほとんど同様。
5	7.5YR 5/2 暗褐色	十和田火山灰の混入した攪乱孔。
6	7.5YR 5/2 橙色	八戸火山灰の純層混入。



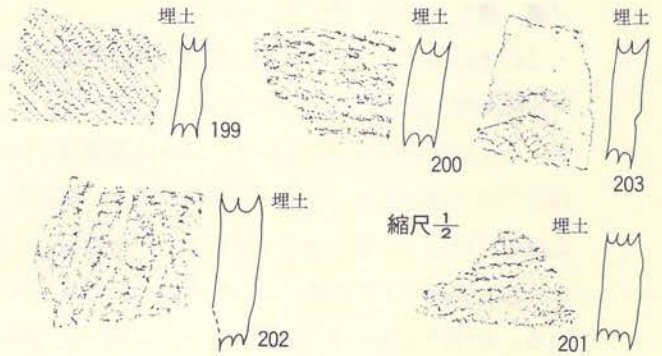
L-181.95m  
A ————— B



B. B-09土坑

B-09土坑土層注記

層位	色調	土性
1	7.5YR 5/2 橙色	八戸火山灰。
2	7.5YR 4/2 褐色	八戸火山灰に黒色土混入。
3	7.5YR 5/2 明褐色	八戸火山灰に炭化物が混入し、しまりなし。
4	7.5YR 3/2 黒色シルト	しまりなし。
5	7.5YR 3/2 暗褐色	黒色土に八戸火山灰が混入し、褐色にみえる。
6	7.5YR 3/2 極暗褐色シルト	浮石群が混入。



第57図 土坑

この土坑はグリッドB-10に位置し、他遺構との重複はない。

規模は開口部径約1.40m×1.35mで、底面径約1.35m×1.20mを測り、平面形は開口部・底面ともにほぼ円形を呈している。深さは最深部で約1mを測り、底面はほぼ水平状態に近く、凹凸もほとんどない。断面形は開口部に向って軽く外反するピーカー形である。埋土は橙色・明褐色・黒褐色・暗褐色等のシルトや八戸火山灰で構成され、6層に細分されている。その中の1層と6層は八戸火山灰層であるが、1層は若干よごれている。2層～5層はシルトであるが、浮石粒が混入している。5層は十和田a降下火山灰の混入した攪乱層である。全体的に若干締りがあるものの、粘性はほとんどない。土層図で堆積状況をみると、各層が乱雑な様相を呈し、人為的に埋め戻された可能性が大である。

#### 〔遺物〕

##### 土器 (第58図A、PL-58)

埋土内から土器片が出土している。204・205は器表に燃糸文が付され、口縁部に不明瞭な綾絡文を付す。206は体部破片であるが、単軸絡条体縦回転による木目状燃糸文を付している。210・211は口縁部に1条の沈線が引かれて口縁部と体部を限り、体部は縄文・口縁部は磨消する。213は口縁部に肥厚帯があり、その中央に太い凹線を入れる。212は口縁部に細い粘土紐を貼りつけている。

##### 石器

出土していない。

#### 〔遺構の年代〕

出土した土器には前期(204・205)と中期(207・210～213)の土器が混在している。ここでは、中期の土器の存在を重視し、本土坑を中期中葉に位置づけておく。

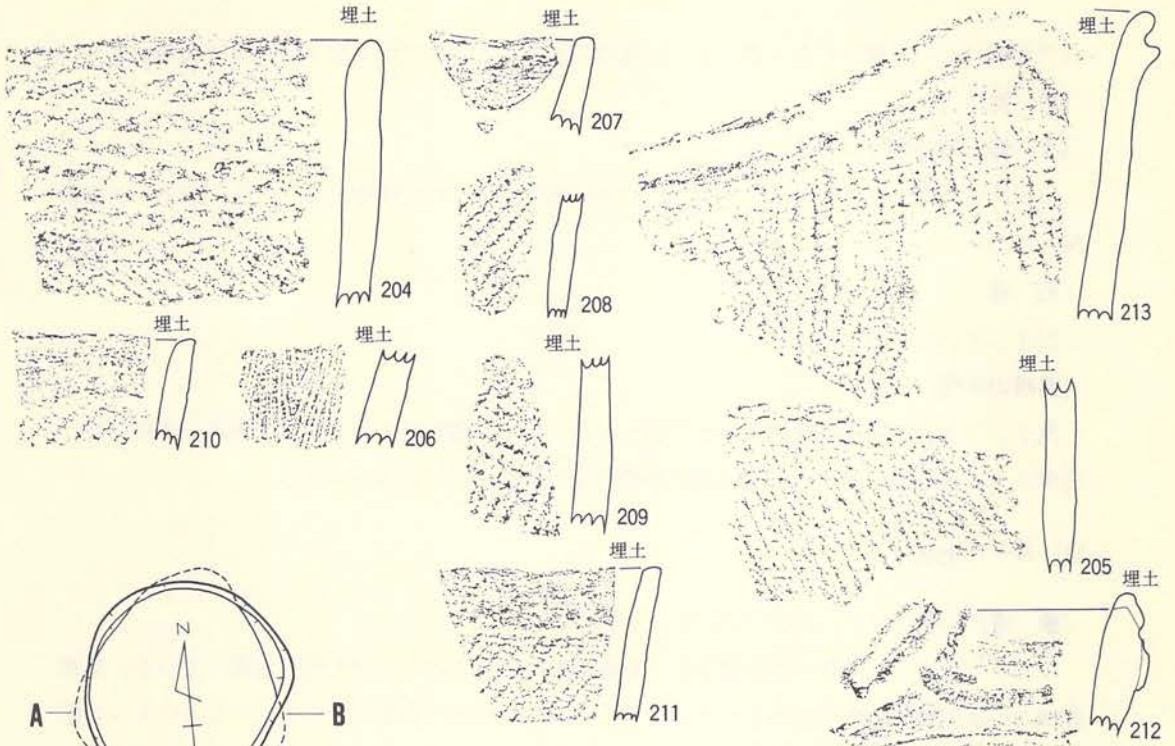
## 10) B-10土坑-2

#### 〔遺構〕 (第58図B、PL-17B)

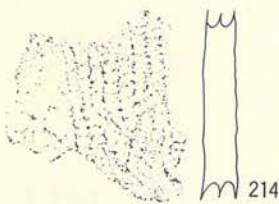
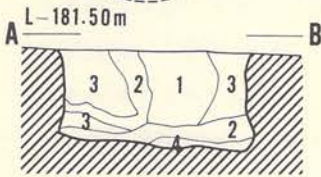
この土坑はグリッドB-10に位置し、他遺構との重複はない。

規模は開口部径約1.10m×1.10mで、底面径約1.25m×1.15mを測り、平面形は開口部・底面ともにほぼ円形を呈している。深さは最深部で約50cmを測り、底面には若干の凹凸があり、西方に寄るほど次第に高くなる傾向がある。断面形は、底面から立ち上った壁面が軽く内傾した後中位付近から軽く外反する形で、全体的にみればピーカー形の土坑といえるだろう。埋土は褐色・暗褐色・黒褐色・灰白色のシルトや八戸浮石流凝灰岩で構成され、4層に細分されている。全体的に八戸浮石流凝灰岩や浮石粒・炭化物粒が混入し、比較的締っているが粘性はない。その中で4層はよごれた八戸浮石流凝灰岩の層である。土層図で堆積状況を観察すると、



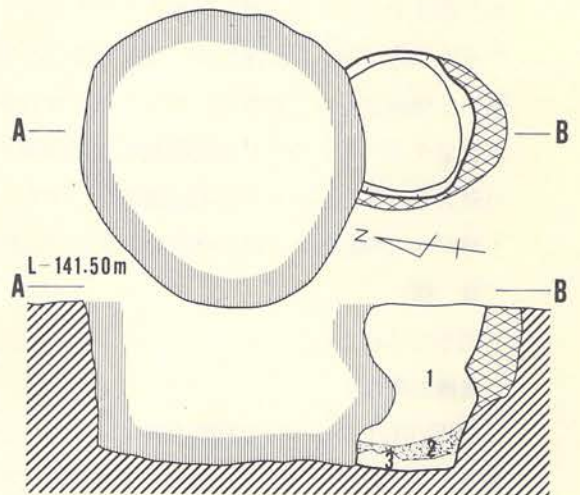


A. B-10土坑-1 遺物



204~214 縮尺  $\frac{1}{2}$   
遺構 縮尺  $\frac{1}{40}$

B. B-10土坑-2



C. B-10土坑-3

B-10土坑-2土層注記

層位	色調	土性
1	7.5YR $\frac{3}{6}$ 褐色シルト	中振浮石を主とする。炭化物の混入多し。
2	7.5YR $\frac{3}{6}$ 黒褐色シルト	少量の中振浮石を混入。
3	7.5YR $\frac{3}{6}$ 暗褐色シルト	中振浮石の混入多し。
4	7.5YR $\frac{3}{6}$ 灰白色	シラスの汚れた土。

B-10土坑-3土層注記

層位	色調	土性
1	10 YR $\frac{3}{6}$ 褐色シルト	南部浮石が混入。
2	10 YR $\frac{3}{6}$ 鈍い黄橙色	汚れたシラス。
3	10 YR $\frac{3}{6}$ 褐色シルト	1層と同じ。

自然堆積によって埋没したと考えるには難点があり、人為的に埋め戻された可能性がある。

〔遺物〕

土器（第58図B、PL-58）

土器片が1点（214）出土している。器表に縄文の付された体部破片である。胎土への繊維混入はない。

石器

出土していない。

〔遺構の年代〕

出土した土器の属する時期を特定できないが、胎土に繊維混入がないことから、中期以降に属する土器と推定されるので本土坑は中期以降に位置づけられるであろう。

11) B-10土坑-3

〔遺構〕（第58図C、PL-17C）

この土坑はグリッドB-10に位置し、他遺構との重複ではB-09土坑と重複している。重複遺構との新旧関係は本土坑の方が古い。したがって、北側の重複部分はB-09土坑によって掘り取られているため不明である。

規模は開口部径約80cmで、底面径は約70cmを測り、平面形は重複部分は定かでないが検出された部分で考えると円形を呈するものと推定される。深さは最深部で約85cmを測り、底面はほぼ水平状態に近い。断面形は、壁面が幾分不規則であるが、平均すると底面に対して約98度外傾する壁面をもち、全体的にみるとバケツ形を呈する土坑といえるだろう。埋土は黄橙色・褐色を呈するシルトや八戸浮石流凝灰岩で構成され、3層に細分される。特に2層は八戸火山灰の混入したよごれた八戸浮石流凝灰岩である。1層と3層はほぼ同質で褐色のシルトである。土層図から判断される堆積状況は、人為的に埋め戻された可能性が大である。

〔遺構〕

出土していない。

〔遺構の年代〕

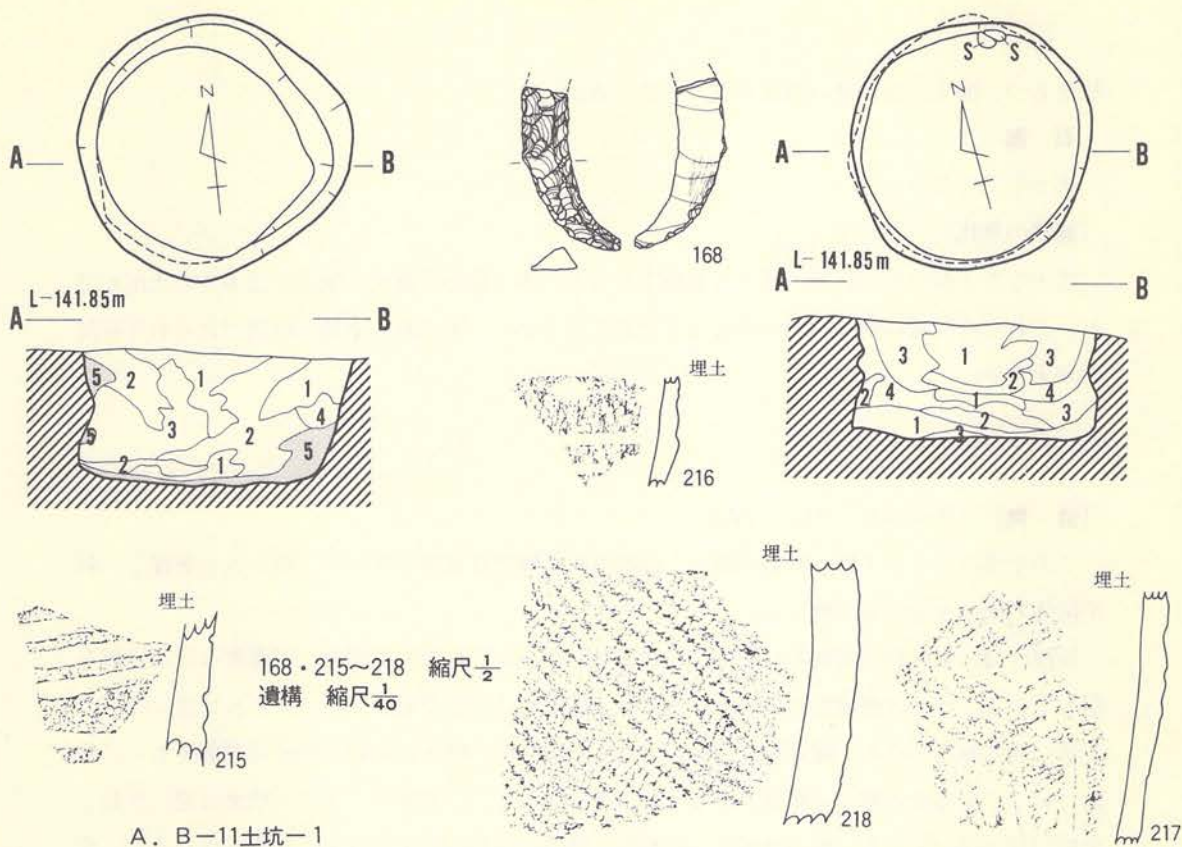
遺物の出土がないので時期を特定できないが、重複するB-09土坑が中期に位置づけられることから、前期～中期頃に属する可能性が大きい。

12) B-11土坑-1

〔遺構〕（第59図A、PL-16C）

この土坑はグリッドA-10・11、B-10・11にまたがって位置し、他遺構との重複はない。





A. B-11土坑-1

B. B-11土坑-2

B-11土坑-1 土層注記

層位	色	色調	土性	
1	7.5YR	3/4	暗褐色シルト	砂質シルト。中振浮石が主。しまり良し。
2	7.5YR	3/4	黒褐色シルト	中振浮石、ゴロタが混入した砂質シルト。
3	7.5YR	3/4	暗褐色	中振浮石が多量に混入した砂質シルト。
4	7.5YR	3/4	明褐色	八戸火山灰の純層。しまり良し。

B-11土坑-2 土層注記

層位	色	色調	土性	
1	7.5YR	3/4	褐色	八戸火山灰上部に黒色土が混した汚れた火山灰。
2	7.5YR	3/4	褐色	1層より黒色土多く混入。混入物に差なし。
3	7.5YR	3/4	極暗褐色	砂質シルト。浮石炭化物若干混入。
4	7.5YR	3/4	暗褐色	砂質シルト。混入物3層と同じ。

第59図 土坑

規模は開口部径約1.45m×1.45mで、底面径約1.15m×1.10mを測り、平面形は楕円形を呈している。深さは最深部で約70cmを測るが、底面が水平状態ではなく、中央部から壁に向かって次第に高くなっており、壁面とは軽い丸味をもって接続している。断面形は底面が若干西方に寄る状況を呈しているが、全体的にみれば概ねピーカー形かバケツ形に属するであろう。埋土は黒褐色・暗褐色・明褐色等を呈するシルトや八戸火山灰等で構成されており、5層に細分されている。全体的に浮石粒が多く混入しており、砂質気味である。比較的締りは良いが、粘性は少ない。なお、5層は八戸火山灰層である。土層図で埋土の堆積状況を観察すると、層が全体的に乱雑であり、自然堆積による埋没ではなく、人為的に埋め戻された可能性が大きい。

〔遺物〕

土器 (第59図A、PL-58)

埋土内から土器片(215)が1点出土している。器表には縄文が付された後、沈線による文

様をもつ。胎土には多量の繊維を混入している。

### 石器

出土していない。

### 〔遺構の年代〕

出土した土器は前期初葉に属するものであるが、本土坑の位置する地点には多くの土坑が在り、これらの所属時期は中期がほとんどであることから、本土坑も中期に位置づけられる可能性が大きい。

## 13) B-11土坑-2

### 〔遺構〕 (第59図B、PL-17A)

この土坑はグリッドB-11に位置し、他遺構の重複では東側でB-11土坑-3と重複し、新旧関係では本土坑の方が新しい。

規模は開口部径約1.30m×1.30mで、底面径約1.25m×1.25mを測り、平面形はほぼ円形を呈している。深さは最深部で約60cmを測るが、底面には小さな起伏があり、さらに壁に向かって次第に高くなっている。断面形は、底面から約35cm上位の壁面に径約1.20mの頸部をもち、底面に対して約75度内傾する壁面をもつフラスコ形であるが、頸部から上位の壁面は逆に外傾して開口部に続いている。埋土は褐色・暗褐色・極暗褐色等を呈するシルトで構成されるが、全体的に浮石粒や炭化物粒が混入しており、これらのことから4層に細分されている。いずれも締りが少なく、粘性がほとんどない。埋土の堆積状況を見ると、下位層は自然堆積に近い状況を示すが、上位層は乱雑に堆積している。このことから、下位層の一部が自然に堆積した後、上位の層が人為的に埋め戻された状況を示すものと考えられる。

### 〔遺物〕

#### 土器 (第59図B、PL-58)

埋土内から出土したが、いずれも体部や底部寄りの体部破片である。216・217は器表に縄文を付した後、沈線による文様を施したもので、いずれも胎土に繊維の混入がある。218は器表に縄文のみが付された破片で、胎土に繊維混入はない。

#### 石器 (第59図B、PL-126F)

1点出土している。石匙の欠損品である。

### 〔遺構の年代〕

出土した土器には前期(216・217)の土器と、胎土に繊維の混入しない中期以降と考えられる土器があり、本土坑は中期以降に属するであろう。



#### 14) B-11土坑-3

〔遺構〕 (第60図A、PL-17D)

この土坑はグリッドA-11とB-11にまたがって位置し、西側でB-11土坑-2と重複している。重複遺構との新旧関係は本土坑の方が古い。

規模は開口部径約1.15mで、底面径約1.00mを測り、重複部分は定かでないが、検出された部分から平面形を考えると、円形かもしくは楕円形を呈するものと推定される。深さは最深部で約50cmを測るが、底面が壁際に向かって次第に高くなっているので壁際は浅い。断面形は、底面から立ち上った壁面が開口部に向かって外傾するバケツ形を呈し、底面と壁面とはやや丸味をもって接続している。埋土は褐色・暗褐色・極暗褐色等のシルトで構成され、全体的に浮石粒の混入が多く、さらに、3層には炭化物粒も混入している。以上のような状況から5層に細分されている。1層には若干粘性があるが、他にはほとんどなく、締りもあまり良くない。埋土の堆積状況を土層図で観察すると、ほぼレンズ状堆積を示し、自然堆積によって埋没したものと考えられる。

〔遺物〕

土器 (第60図A、PL-58)

埋土内から1点(219)出土している。器表に縄文の付された体部破片で、胎土への繊維混入はない。

石器 (第60図A、PL-58)

2点出土している。169は石鏃で、170は石匙の欠損品である。

〔遺構の年代〕

出土した土器片の胎土に繊維の混入がないことから、中期以降に属する土器であろうから、本土坑は中期以降に位置づけられるであろう。

#### 15) B-15土坑

〔遺構〕 (第60図B、PL-17E)

この土坑はB-14・15とC-14・15にまたがって位置し、他遺構との重複はない。

規模は開口部径約2.05m×1.90mで、底面径約1.90m×1.75mを測り、平面形は胴張の隅丸方形気味を呈している。深さは最深部で約17cmを測るが、底面は壁際に寄るほど次第に高くなっているため、壁際ほど浅い。断面形は、壁面が底面から外傾する浅皿形を示し、底面と壁面とは丸味をもって接続している。埋土は暗褐色を呈する基本層序第Ⅲ層(中掬浮石上部層)に近似し、浮石質でサクサクした感のある土の単層である。おそらく、自然埋没したものと推定

される。なお、この土坑には柱穴状の小土坑が検出されている。P<sub>1</sub>は平面形の南東部に位置し、規模は径約18cm×16cmで深さは約24.5cmである。P<sub>2</sub>は南西部壁際に位置し、規模は径約14cm×12cmで深さは約32cmである。埋土はいずれも土坑の埋土と共通している。また、この土坑の底面は、いわゆる貯蔵穴状の土坑と比較して非常に固く、住居跡の床面に近い様相を示している。先の小土坑が本土坑に伴うことは確実であることから考えると、小規模ではあるが、住居跡である可能性が強い。しかし、炉跡の痕跡は確認されていない。

〔遺物〕

土器（第60図B）

埋土内から1点（220）出土している。器表に不整撚糸文のみが付され胎土に多量の繊維を含むものである。内面には指押えによる浅い凹凸がある。

石器（第60図B、PL-126E）

1点（171）出土している。半円状扁平打製石器に近い形状を示すが、欠損している。直線部分には敲打面と擦面をもつ。

〔遺構の年代〕

出土した土器の時期や埋土の状況から前期初葉に位置づけられるであろう。

16) B-22土坑

〔遺構〕（第60図C、PL-18A）

この土坑はグリッドB-22に位置し、他遺構との重複はない。

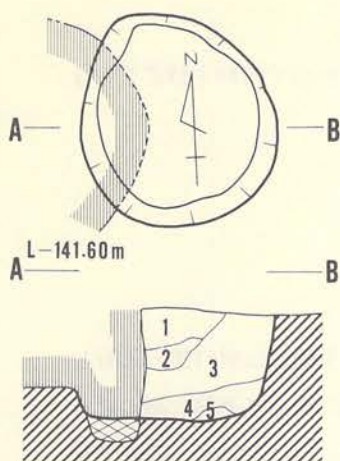
規模は開口部径約2.35m×2.35mで、底面径約2.40m×2.20mを測るが、北側の壁に一部掘り過ぎがあり、土層図から計測される開口部径は約2.00m位であることから、本来はこの数値と大差がないものと推定される。平面形は開口部・底面ともに楕円形を呈している。深さは最深部で約90cmを測るが、底面が壁に向かって次第に高くなっていることから、壁際は幾分浅くなる。断面形は、壁面の一部（特に南側部分）が不規則であるが、北壁は底面に対して約68度の角度で内傾するフラスコ形である。埋土は黒色・黒褐色・褐色等を呈するシルトで構成されるが、全体的に浮石の混入が多いので砂質気味の土層が多い。比較的良く締り固い。このような状況から6層に細分されている。6層は壁面の崩壊によって堆積した八戸火山灰である。埋土の堆積状況を土層図で観察すると、1層の状況に若干問題を感じるが、ほぼ自然堆積で埋没した状況を示すものであろう。

〔遺物〕

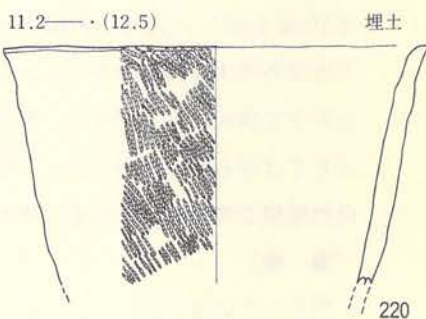
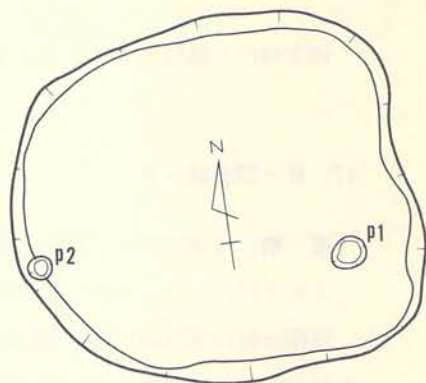
出土していない。

〔遺構の年代〕





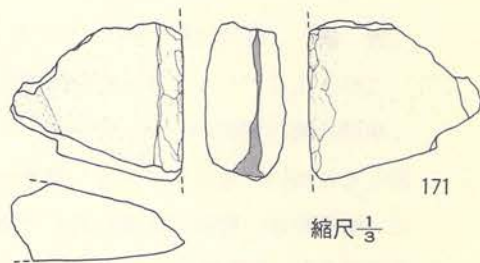
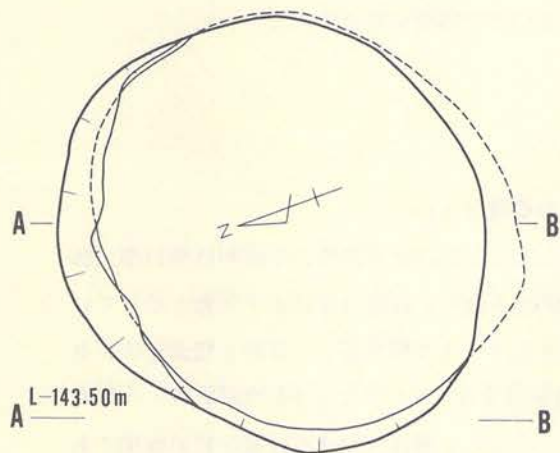
220 縮尺  $\frac{1}{4}$   
 219・169~171 縮尺  $\frac{1}{2}$   
 遺構 縮尺  $\frac{1}{40}$



A. B-11土坑-3

B-11土坑-3土層注記

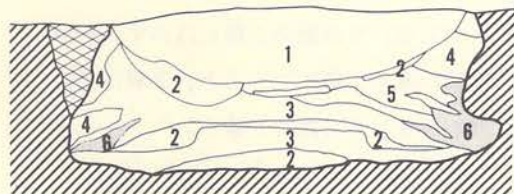
層位	色調	土性
1	10 YR 3/5 暗褐色	南部浮石混じりのシルト。粘性あり。
2	10 YR 3/5 褐色	南部浮石が少量混したシルト
3	10 YR 3/5 極暗褐色	南部浮石・炭化物が混入したシルト。
4	10 YR 3/5 純い褐色	汚れたソフトローム。南部浮石少量混入。
5	10 YR 3/5 褐色	シルト。



B. B-15土坑

B-22土坑-1土層注記

層位	色調	土性
1	7.5YR 3/5 褐色シルト	浮石を多量に含む。
2	7.5YR 1.8/1 黒色シルト	浮石を多量に含む。
3	7.5YR 3/5 黒褐色シルト	浮石を含む。
4	7.5YR 3/5 褐色シルト	
5	7.5YR 3/5 黒褐色シルト(砂質)	あわせ砂を多量に含む。
6		壁の崩壊による八戸火山灰。



C. B-22土坑-1

B-22土坑-2土層注記

層位	色調	土性
1	7.5YR 3/5 褐色シルト	やや硬くしまる。浮石を多量に含む。
2	7.5YR 3/5 褐色シルト	浮石の量少ない。

第60図 土坑

縄文時代の遺構であることは確実とおもうが、遺物が出土していないので時期を特定できない。

#### 17) B - 22土坑 - 2

〔遺 構〕 (第61図A、PL - 18B)

この土坑はグリッドB - 22に位置し、他遺構との重複はない。

規模は開口部径約1.15m×1.10mで、底面径約90cm×85cmを測り、平面形は開口部・底面ともに楕円形を呈している。深さは最深部で約30cmを測るが、底面が壁に向って次第に高くなっていることから、壁に寄るほど浅くなる。なお底面中央やや北西寄りには径約35cm×27cmで深さ10cmを測り、平面形が楕円形の副穴が検出されている。断面形は、壁面が底面に対して約106度外傾する浅皿形を呈し、壁面と底面は丸味をもって接続している。埋土は褐色を呈するシルトで構成されているが、若干の色調変化と混入物によって2層に細分されている。混入物としては浮石粒が観察され、1層は2層に比し若干固い。土層図で埋土の堆積状況を見ると、自然堆積で埋没した状況を示すものであろう。

〔遺 物〕

出土していない。

〔遺構の年代〕

縄文時代の土坑とおもうが、遺物が出土していないので時期を特定できない。

#### 18) B - 23土坑

〔遺 構〕 (第61図B、PL - 18C)

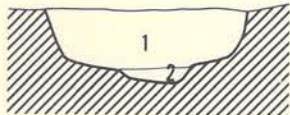
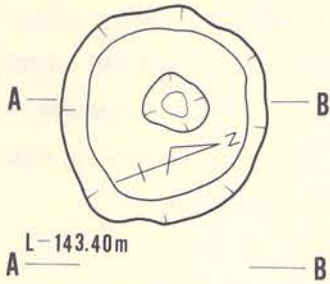
この土坑はグリッドB - 23に位置し、他遺構との重複はない。

規模は開口部径約1.50m×1.45mで、底面径約2.30m×2.10mを測り、平面形は開口部・底面ともに楕円形を呈している。深さは最深部で約90cmを測り、底面はほぼ水平状態を示している。断面形は、壁面が床面に対して約60度で内傾するフラスコ形を呈し、底面と壁面とは小さな丸味をもって接続している。埋土は褐色や暗褐色を呈するシルトや八戸浮石流凝灰岩・八戸火山灰等で構成されており、5層に細分されている。中でも2層は八戸浮石粒凝灰岩の堆積であり、5層は壁面の崩壊によると考えられる八戸火山灰層である。その他の土層にはいずれも浮石の混入が多く、全体的に比較的締っている。埋土の堆積状況を土層図で見ると、3層は自然堆積であらうが、その上位の土層はいずれも人為的に埋め戻された可能性が強い。

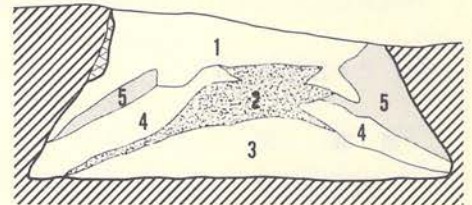
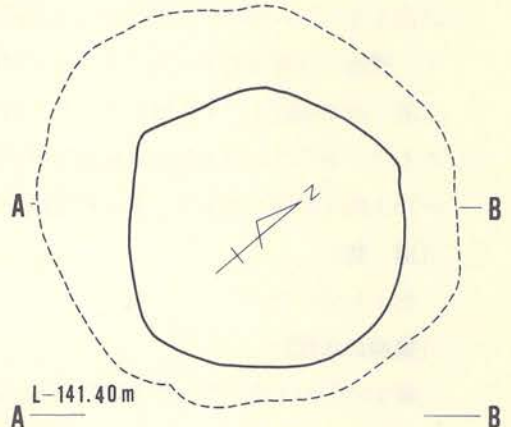
〔遺 物〕

出土していない。



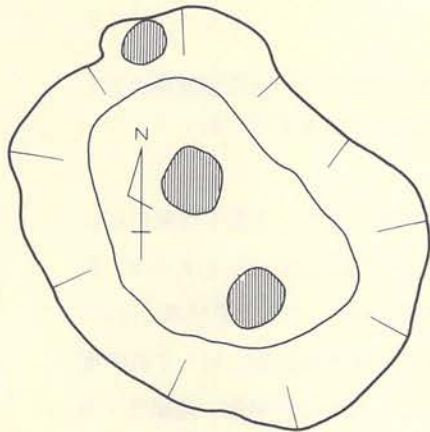


A. B-22土坑-2



B. B-23土坑

遺構 縮尺  $\frac{1}{40}$



C. C-16土坑

B-23土坑土層注記

層位	色調	土性
1	7.5YR 5/6 褐色シルト(砂質)	浮石を含む。
2	7.5YR 5/6 鈍い褐色ローム	(八戸浮石流質凝灰岩)人工的埋土。汚れている。
3	7.5YR 3/5 暗褐色シルト(砂質)	浮石を含み硬くしまる。
4	7.5YR 5/6 褐色シルト	浮石を少量含む。指圧痕がつく。
5	明褐色	ソフトローム(壁面が崩れたもの)。

B-22土坑-2土層注記

層位	色調	土性
1	7.5YR 5/6 褐色シルト	やや硬くしまる。浮石を多量に含む。
2	7.5YR 5/6 褐色シルト	浮石の量少ない。

第61図 土坑

[遺構の年代]

縄文時代の土坑とおもうが、遺物の出土がないので時期の特定はできない。

19) C-16土坑

[遺構] (第61図C、PL-19A)

この土坑はC-15・16にまたがって位置し、D-16住居跡の東側柱列と重複しているが、新旧関係ではD-16住居跡の方が新しい。したがって、図中の柱穴状土坑は本土坑と関係がない。

規模は開口部径約2.30m×1.70mで、底面は径約1.70m×1.10mを測り、平面形は開口部・底面ともに楕円形を呈している。深さは最深部で約30cmを測るが、中央部から壁に向かって次第

に高くなっているので、壁に寄るほど浅い。断面形は壁面が底面に対して外傾する浅皿形を示し、壁面と底面は若干の丸味をもって接続している。埋土は基本層序第Ⅲ層類似（中取浮石層上部）の暗褐色を呈する浮石質シルトの単層で構成されている。おそらく、自然堆積で埋没したものであろう。本土坑では底面で柱穴状の小土坑が検出されていないものの、他の特徴はB-15土坑に酷似しており、B-15土坑と同じような性格をもつかも知れない。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の年代〕

縄文時代の土坑と思うが、遺物の出土がないので時期を特定できない。しかし、先のような状況が正しいとすれば、前期初葉に位置づけられる可能性がある。

## 20) C-22土坑-1

〔遺構〕（第62図、PL-19C）

この土坑はグリッドC-22・23にまたがって位置し、D-23住居跡とD-24周溝遺構のともに北東部分と重複している。これらとの新旧関係は、D-23住居跡より本土坑が新しく、D-24周溝遺構より古い。

規模は開口部径約1.90m×1.70mで、底面は径約2.40m×2.40mを測り、平面形は開口部は楕円形であるが底面では正円に近い円形を呈している。深さは最深部が約2.30mであるが、D-23住居跡の床面からは約1.50mを測り、底面には小起伏があるものの、ほぼ水平状態に近い。断面形は底面から1.20m上位に径約1.60m×1.40mの頸部をもち、壁面が底面に対して約60度内傾するフラスコ形であり、頸部から上位の壁面は外傾している。埋土は黒褐色・暗褐色・黄褐色・褐色等を呈するシルトや八戸浮石流凝灰岩等で構成され、土性や混入物によって6層に細分されている。特に3層と5層は八戸火山灰や八戸浮石流凝灰岩の混合したような土が堆積している。全体的に浮石粒や炭化物粒の混入がみられる。このような堆積状況は、3層は人為的に投棄された可能性があるが、5層は壁面の崩壊による八戸浮石流凝灰岩層であろう。これらからみると、概ね、自然堆積で埋没したものと考えられる。

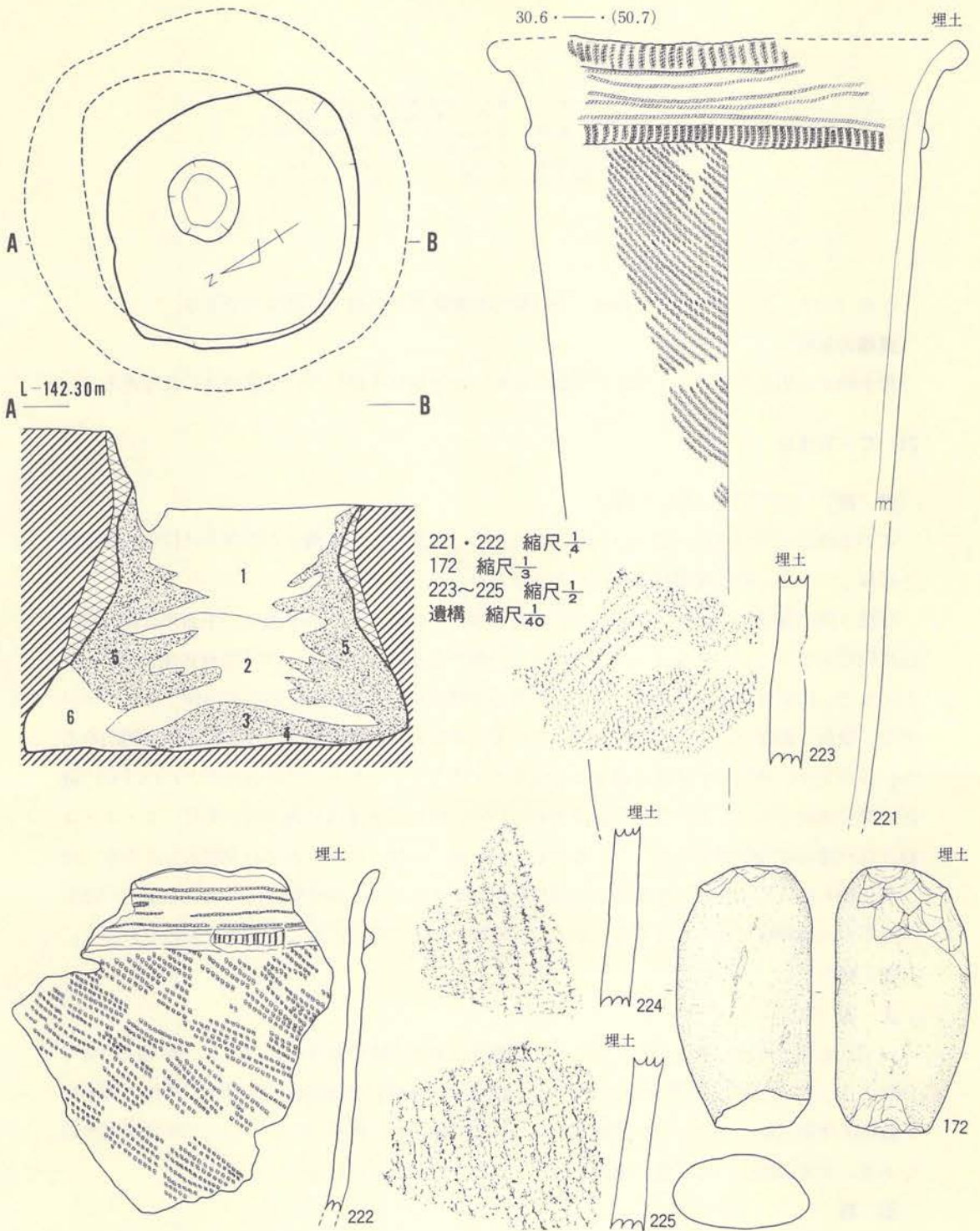
〔遺物〕

土器（第62図、PL-58）

いずれも埋土内から出土した。221・222ともにほぼ同じ特徴をもち、頸部に隆帯をもち、口縁部は厚体圧痕文を付す。体部地文は原体RLRの複節斜行縄文である。223～225は縄文のみが施文された体部破片で、いずれも単節斜行縄文を付す。

石器（第62図、PL-126G）





第62図 C-22土坑

C-22土坑土層注記

層位	色調	土性
1	10 YR 5/4 褐～黄褐色	湿り気のある砂質シルト。大粒の浮石あり。
2	10 YR 5/4 褐色	1の胎土と火山灰の互層。硬めの砂質シルト。
3	10 YR 5/4 鈍い黄橙色	硬い火山灰。1・2の汚れ土が薄層で挟まる。
4	10 YR 5/4 暗褐色	軟かい砂質シルト。1の胎土より暗色。
5	10 YR 5/4 鈍い黄橙色	火山灰ブロック。上方ソフトローム的。
6	10 YR 5/4 黒褐～暗褐色	硬い砂質土。1・2・4と全く異質の暗色土。

1点(172)出土している。細長い自然礫の長軸両端を使用した敲き石である。

〔遺構の年代〕

埋土内から出土した221・222の土器により、本土坑は中期初葉に位置づけられるだろう。

21) C-23土坑

〔遺構〕(第63図A、PL-19D)

この土坑はグリッドC-23・D-23にまたがって位置し、他遺構との重複ではD-23住居跡と重複している。新旧関係は本土坑の方が新しい。

規模は開口部径約1.60m×1.35mで、底面は径約2.40m×2.40mを測り、平面形は開口部では楕円形を呈するが、底面はほぼ正円に近い円形である。深さはD-23住居跡の床面から約1.55mで、底面はほぼ水平状態に近い。断面形は壁面が床面に対して約70度内傾するフラスコ形で、壁面と底面はほぼ70度位で接続している。また、壁面は直線的ではなく若干の凹凸をもち、外弯気味に外傾している。埋土は褐色系を主体としたシルトや八戸火山灰と八戸浮石流凝灰岩等で構成されており、5層に細分されている。特に2層は八戸火山灰であり、3・4・5層は八戸浮石流凝灰岩を主体とした層である。1層と5層には多くの浮石が混入しており、他に炭化物も混入している。土層図で堆積状況を観察すると、4層は壁面の崩壊による八戸浮石流凝灰岩の堆積層と考えられることから自然堆積によって埋没したことを表すものであろう。

〔遺物〕

土器(第63図A、PL-59)

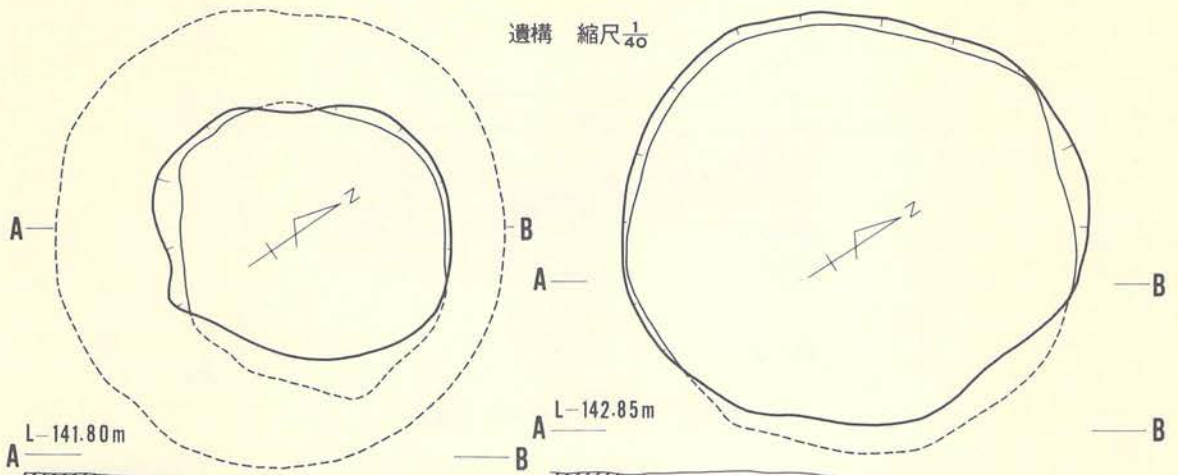
いずれも埋土内から出土した。226には頸部に縦長の隆帯貼りつけがあり、原体圧痕文で加飾する。227は頸部に竹管の刺突文をもち、口縁部は単軸絡条体圧痕文を付す。体部の縄文は単軸絡条体縦回転による木目状撚糸文をもち、228は器表に縄文のみをもち、229は無文土器である。228の胎土には多量の繊維が混入するが、他の土器にはない。

石器

出土していない。

〔遺構の年代〕

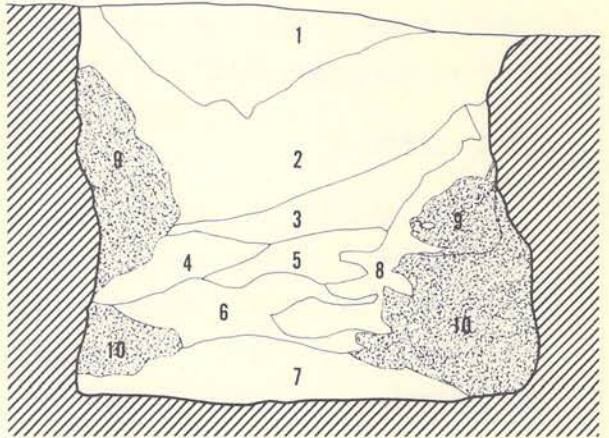
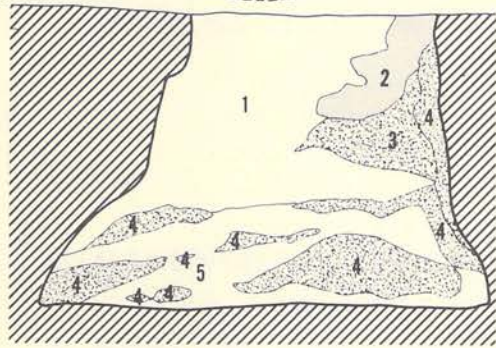




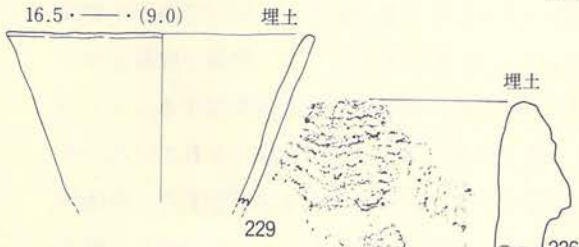
遺構 縮尺  $\frac{1}{40}$

L-141.80m

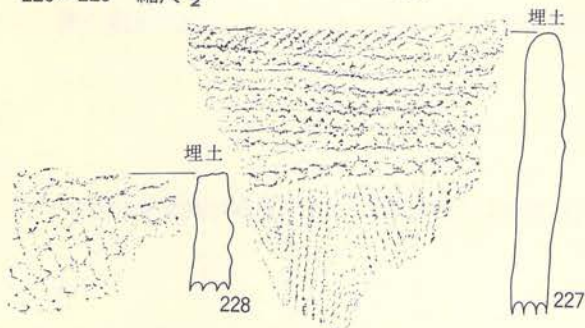
L-142.85m



B. D-22土坑-1



226~229 縮尺  $\frac{1}{2}$



A. C-23土坑

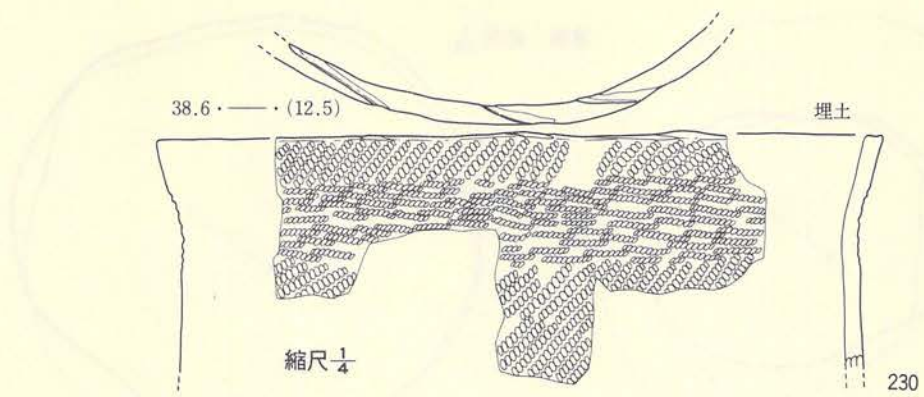
C-23土坑土層注記

層位	色調	土性
1	7.5YR 5/6 褐色	砂質シルト、浮石多量混入。
2	7.5YR 5/6 鈍い橙色	汚れたシラス。
3	7.5YR 5/6 灰褐色	汚れたシラス。
4	7.5YR 5/6 明褐色	汚れたシラス。
5	7.5YR 5/6 灰褐色	1層にシラス粒子が混入した層。

D-22土坑-1土層注記

層位	色調	土性
1	7.5YR 5/6 褐色砂質シルト	浮石多量に混入。
2	7.5YR 5/6 暗褐色砂質土	1層より大粒の浮石多量に混入。粘性無し。
3	7.5YR 5/6 黒褐色砂質土	浮石混入。しまり無く粘性も無し。
4	7.5YR 5/6 暗褐色砂質土	浮石多量に混入。しまり良好し。
5	7.5YR 5/6 黒褐色砂質土	浮石多量に混入。しまり良好し。
6	7.5YR 5/6 極暗褐色砂質土	硬くしまり良好し。浮石多量に混入。
7	7.5YR 5/6 黒褐色	硬くしまり良好し。浮石多量に混入。
8	7.5YR 5/6 暗褐色砂質シルト	少量の浮石混入。しまり無く軟かい。
9	7.5YR 5/6 褐色砂質シルト	白砂風化土。
10	7.5YR 5/6~5/6 灰白色~橙色	白砂風化土。部分的に硬い。

第63図 土坑



第64図 D-22土坑-1 (遺物)

出土した土器には前期 (227・228) と中期 (226) のものが含まれているが、226の存在によって本土坑を中期初葉に位置づけておく。

## 22) D-22土坑-1

〔遺構〕 (第63図B、PL-19B)

この土坑はグリッドC-21・22とD-21・22にまたがって位置し、D-23住居跡の北壁とD-22土坑-2と重複している。新旧関係はいずれの遺構より本土坑が新しい。

規模は開口部径約2.50m×2.50mで、底面径約2.35m×2.30mを測り、平面形は開口部・底面ともに円形を呈している。深さは最深部で約2.10mを測り、底面は小起伏があるもののほぼ水平状態に近い。断面形は壁面に軽い小凹凸があったりして不整であるが、総じてみると壁面が底面とほぼ直交の様相を示していることからピーカー形を呈している。壁面と底面とは若干の丸味をもって接続している。埋土は黒褐色・極暗褐色・暗褐色・褐色等を呈するシルトや砂質シルトと八戸浮石流凝灰岩等で構成され、土性や色調によって10層に細分されている。その中でも9層はよごれた八戸浮石流凝灰岩で、10層はよごれないその堆積層である。全体的に浮石粒の混入が多いためにサラサラした感触があり、粘性はいずれもなく比較的縮りが良い。堆積状況を土層図で観察すると、9・10層は壁面崩壊による堆積であろうから、自然堆積で埋没した状況を示すものであろう。

〔遺物〕

土器 (第64図)

埋土内から1点 (230) 出土した。器表全面に原体LR横回転による単節斜行縄文を付した後、口縁部に横方向の不明瞭な綾絡文をもつ。

石器

出土していない。



#### 〔遺構の年代〕

埋土内から出土した土器は前期初葉に属するが、本土坑は中期初葉の住居跡より新しいことが判明しているため、中期に位置づけられる土坑と考える。

#### 23) D-22土坑-2

##### 〔遺構〕 (第65図A、PL-19B)

この遺構はグリッドC・D-21にまたがって位置し、本土坑の大半は前のD-22土坑-1との重複で掘り取られているため、西側部分が僅かに残存しているに過ぎない。また、本土坑は精査前から存在が確認されたわけではなく、D-22土坑-1の精査中に確認されたものである。したがって、埋土土層図の作成はしていない。

検出された範囲で計測される規模は開口部径約2.35mで、底面径約2.50mを測り、平面形は開口部・底面ともに円形を呈するものと推定される。深さは約1.90mで、底面はほぼ水平である。断面形は明確でないが、検出された部分の壁面が底面に対して約70度内傾していることから、フラスコ形を呈しているであろう。埋土はD-22土坑-1と区別しないで掘り上げたので詳細は不明であるが、D-22土坑-1と大差がないものと考えられる。

##### 〔遺物〕

出土していない。

##### 〔遺構の年代〕

D-22土坑-1より古い土坑であるが、遺物が出土していないので定かでない。

#### 24) D-22土坑-3

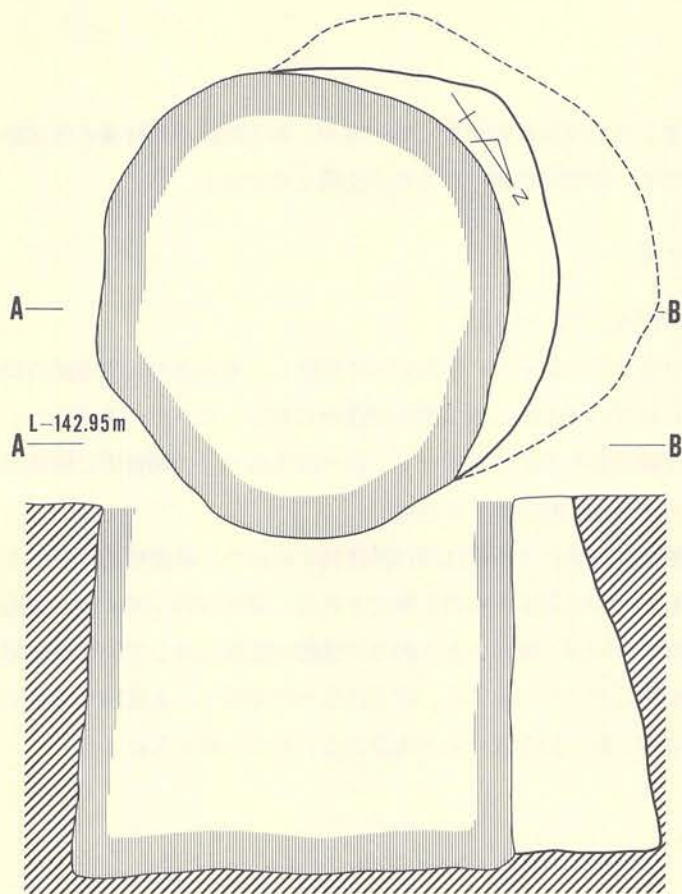
##### 〔遺構〕 (第65図B、PL-24A)

この土坑はグリッドD-21・22にまたがって位置し、E-22住居跡の範囲内に掘削されている。E-22住居跡との新旧関係は本土坑の方が新しい。

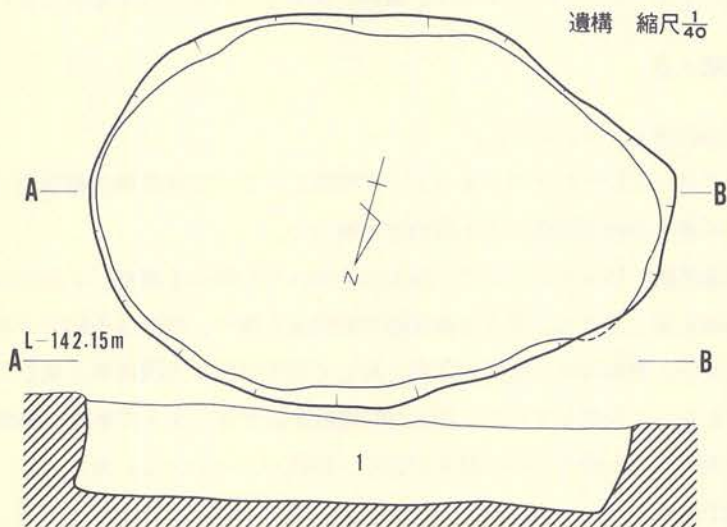
規模は開口部径約3.10m×2.10mで、底面は3.00m×1.95mを測り、平面形は開口部・底面ともに長楕円形を呈している。深さは最深部で約50cmを測り、底面は小起伏があるものの、ほぼ水平状態に近い。断面形は、壁面が底面に対して若干外傾する浅皿形を呈し、壁面と底面とは小さな丸味をもって接続している。埋土は暗褐色を呈するシルトの単層で構成されている。全体的に八戸火山灰の小塊や浮石の混入が多く、砂質がかっている。おそらく、人為的に埋め戻された土坑であろう。

##### 〔遺物〕

出土していない。



A. D-22土坑-2



B. D-22土坑-3

D-22土坑-3土層注記  
 層位 色調 土性  
 1 7.5YR 暗褐色シルト 全体として砂質。浮石が多量に混入。

第65図 土坑



### 〔遺構の年代〕

遺物が出土していないので特定できないが、E-22住居跡より新しいことが判明しているの  
で、中期以降に位置づけられる土坑であろう。

### 25) D-23土坑-1

#### 〔遺 構〕 (第66図、PL-20A)

この土坑はグリッドD-23・24・E-23にまたがって位置し、D-23住居跡の南壁と重複し  
ている。新旧関係では本土坑の方が新しい。

規模は開口部径約2.65m×2.50mで、底面径約2.80m×2.70mを測り、平面形は開口部・底  
面ともに楕円形を呈する。深さは最深部で約1.80mを測るが、底面が中央付近から壁に向って  
次第に高くなっていることから、壁に寄るほど若干浅くなる。断面形は、壁面が外弯気味を呈  
しているが、底面に対して約86度内傾する広義のフラスコ形を示している。埋土は黒褐色・暗  
褐色・褐色・明褐色・にぶい橙色等を呈するシルトや砂質シルトと八戸浮石流凝灰岩によって  
構成され、6層に細分されている。その中で、5層は黒色土と混合した八戸浮石流凝灰岩であ  
るし、6層は八戸浮石流凝灰岩の堆積である。その他の層には浮石の混入が多く、比較的良く  
締っている。3層には口縁部の一部を欠失した土器(232)が包含されていた。埋土の堆積状  
況を土層図でみると、壁際の6層は壁の崩壊による堆積と考えられることから、自然堆積で埋  
没したものであろう。

#### 〔遺 物〕

##### 土 器 (第66・67図、PL-59・60)

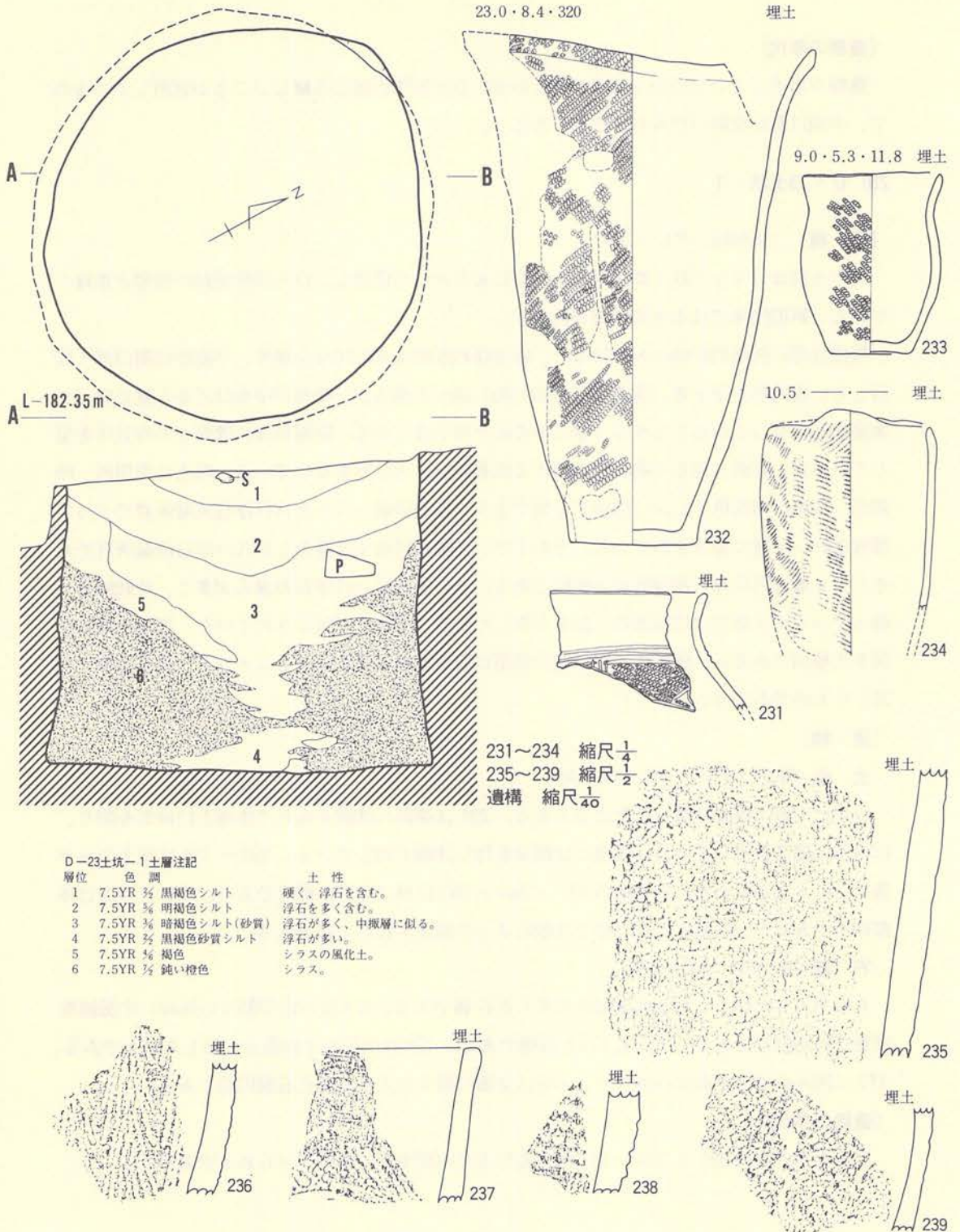
いずれも埋土内から出土した土器である。231は頸部に沈線を入れて体部と口縁部を限り、  
口縁部は縄文を消している。体部には縄文を付し沈線で施している。232～234は縄文のみが  
施文された土器である。その他の237・240・242以外は体部の破片である。244・245は体  
部破片であるが、隆帯とそれに伴う沈線によって施文された土器である。

##### 石 器 (第67図、PL-126D)

6点出土している。173は基部を欠失した石鏃である。174は不定形剝片の側縁に片面剝離  
調整した切削器である。175も174と同様である。176は円礫の平坦面を利用した磨石である。  
177は凹み石で、片面にのみもつ。178は全面に磨きを入れた有孔石製円盤である。

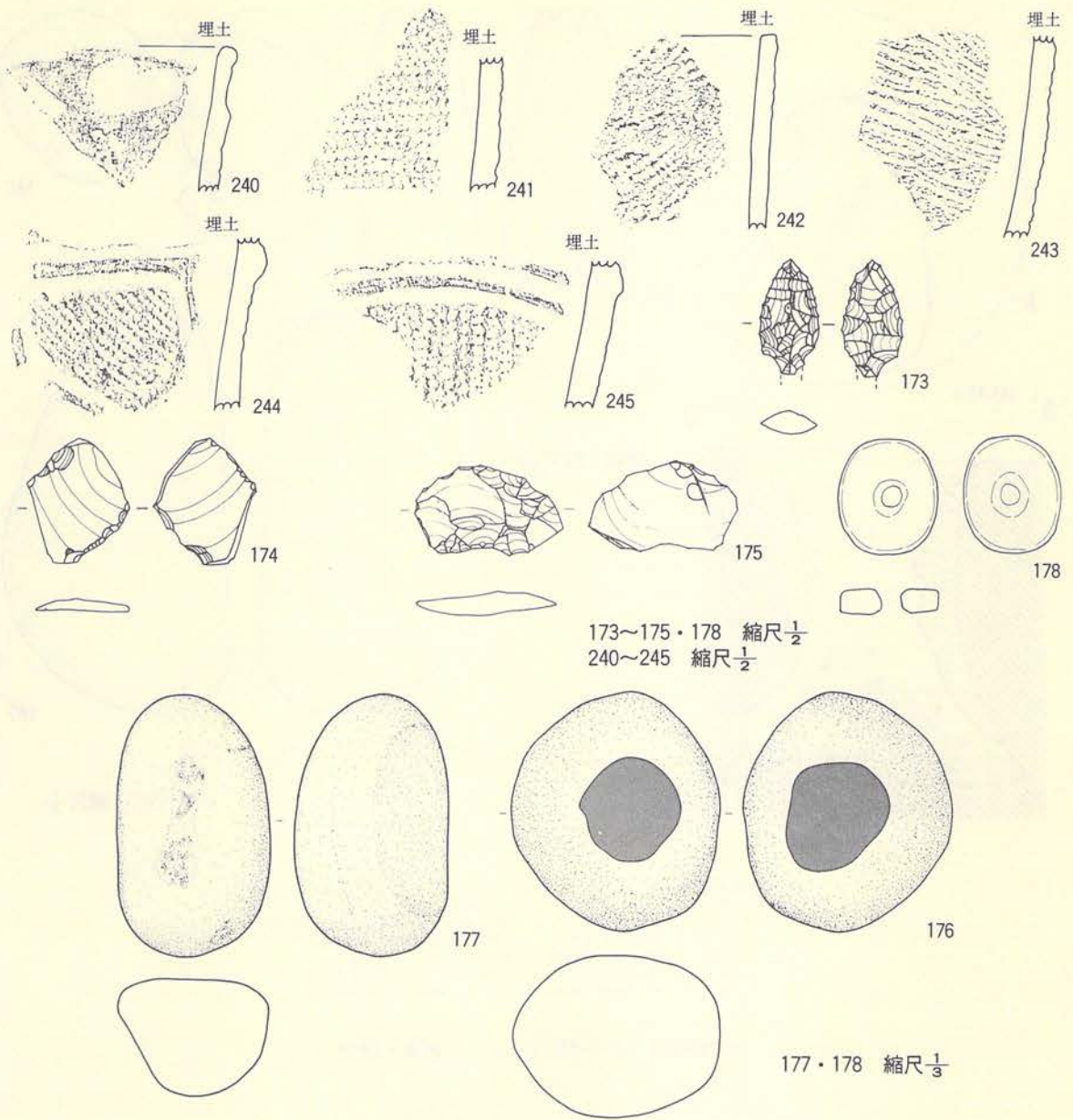
### 〔遺構の年代〕

出土土器の中の231・246・247の存在により中期中葉に位置づけられるであろう。



第66図 D-23土坑-1 (遺構・遺物-1)





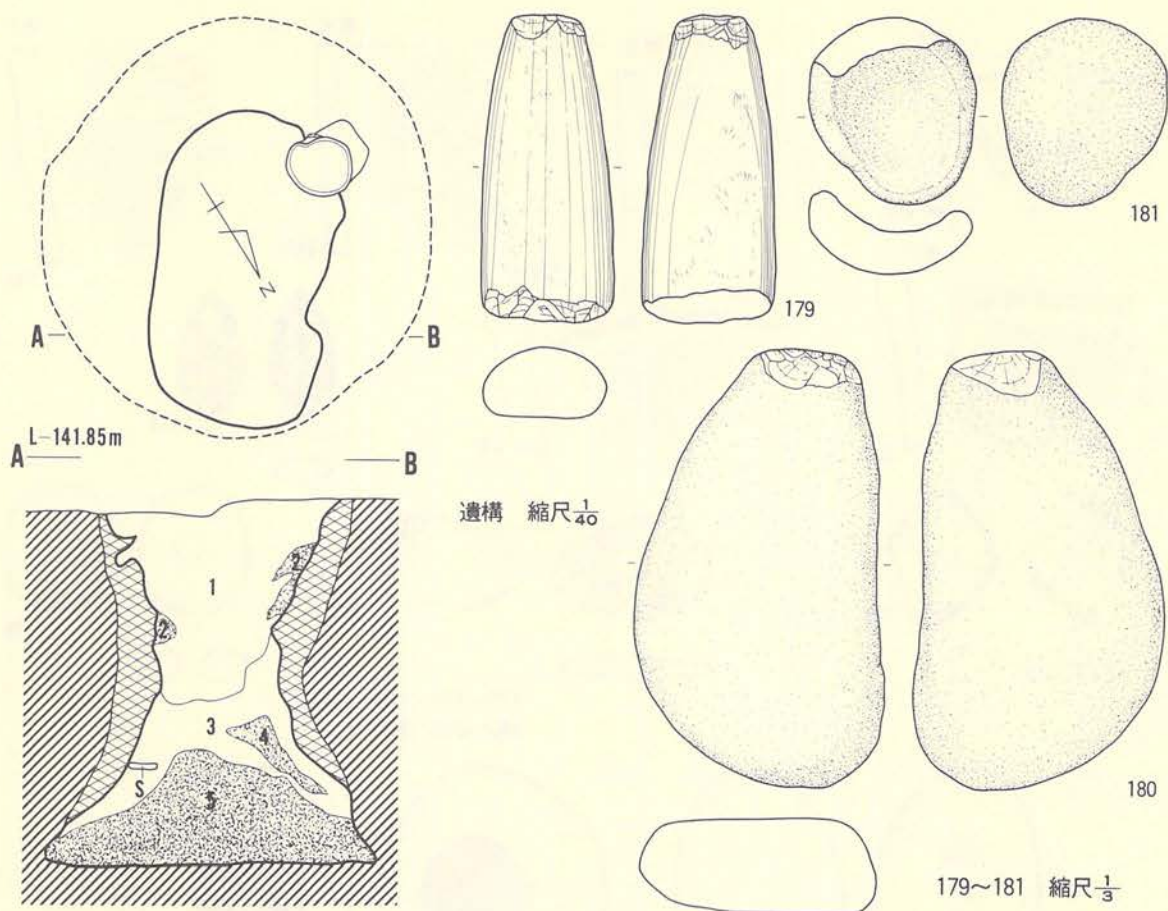
第67図 D-23土坑-1 (遺物-2)

26) D-23土坑-2

〔遺構〕 (第68図、PL-20B)

この土坑はグリッドD-23に位置し、D-23住居跡の南側床面を壊して掘り込んでいる。

規模は開口部径約95cmで、底面は径約2.20m×2.05mを測り、平面形は、開口部は北東部分が大きく掘り過ぎているので定かでないが、底面が円形を呈していることから開口部も円形で



D-23土坑-2土層注記

層位	色調	土性
1	10 YR 5/1 褐色砂質シルト	浮石・礫・小石・木炭片混入。砂質シルト。
2	10 YR 5/1-5/2 褐色～鈍い黄褐色	1層の土と火山灰ブロックの混合。
3	10 YR 5/1-5/2 褐色～鈍い黄褐色	硬い砂質シルト。木炭片混入。
4	10 YR 5/1-5/2 鈍い黄褐色～浅黄褐色	八戸浮石。八戸火山灰少量混入。
5	10 YR 5/1-5/2 鈍い黄褐色～明黄褐色	八戸浮石。純粋八戸火山灰混入。

第68図 D-23土坑-2 (遺構・遺物)

あったものと推定される。深さは最深部で約1.90mを測り、底面はほぼ水平状態に近いが、一部に小凹凸がある。断面形は、土層図の作成位置が不適当なため図上では表されていないが、完掘後の状況観察では、壁面が相当急角度で内傾するフラスコ形である。埋土は褐色と黄褐色～明褐色を呈する砂質シルトと八戸浮石流凝灰岩とで構成され、5層に細分されている。中でも4層と5層は八戸浮石流凝灰岩を基調とした土である。土層図で堆積状況を観察すると、5層の存在を留意するならば、人為的に埋め戻された可能性が大きい。



〔遺物〕

土器

出土していない。

石器（第68図、PL-127A）

3点出土している。179は刃部を欠失した磨製石斧である。180は扁平で細長い自然礫を使用した敲き石である。181は凹みをもつ自然礫である。

〔遺構の年代〕

土器が出土していないので時期を特定できないが、D-23住居跡より新しいことが判明しているので、中期以降に位置づけられるであろう。

27) E-14土坑

〔遺構〕（第69図A、PL-20C）

この土坑はグリッドE-14に位置し、A-12溝跡の南東側法面と重複している。新旧関係では本土坑の方が古い。

本土坑はA-12溝跡によって北西側のほぼ半分が削られているので全体的なことは不明であるが、検出された範囲で計測される規模は開口部径約1.90mで、底面は径約2.50mを測り、削られた部分の状況は定かでないが、検出された部分から考えられる平面形は円形と推定される。深さは最深部で約1.90mを測り、底面はほぼ水平状態に近い。断面形は、底面から約85cm位の壁面に頸部をもち、底面に対して壁面が約40度内傾するフラスコ形を呈している。壁面と底面は約73度で接続している。埋土は黒褐色や橙色を呈するシルトや砂質シルトと八戸浮石流凝灰岩等で構成されており、8層に細分されている。その中の3層は八戸火山灰層であり、5層は八戸浮石流凝灰岩の層である。他の層にも全体的に八戸浮石流凝灰岩の小塊が混入し、斑状を呈している。土層図から考えられる堆積状況は、自然堆積によって埋没したものと推定される。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の年代〕

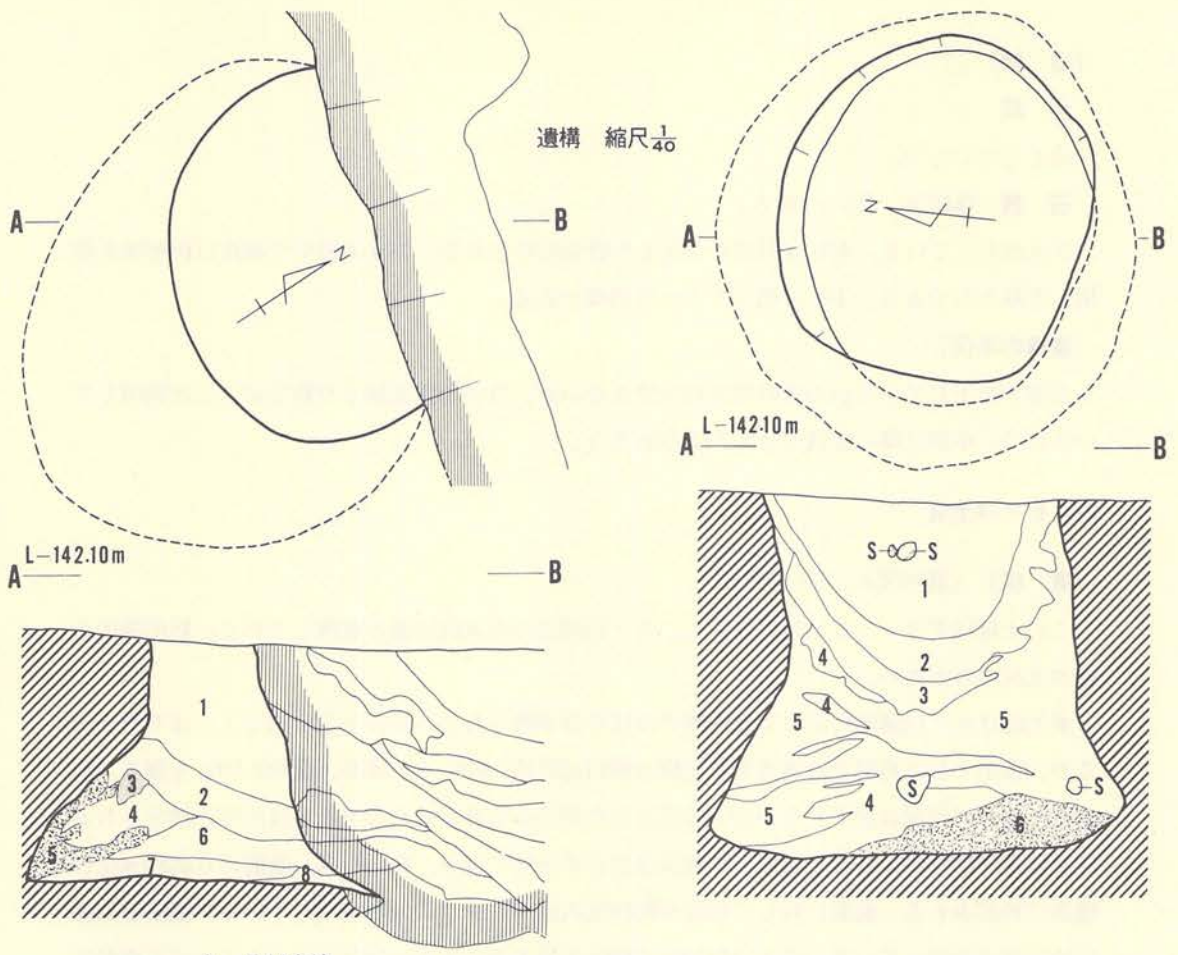
縄文時代の土坑とは思いますが、遺物が出土していないので時期は特定できない。

28) E-15土坑-1

〔遺構〕（第69図B、PL-21A）

この土坑はグリッドD-15、E-15にまたがって位置し、他遺構との重複はない。

規模は開口部径約1.80m×1.65mで、底面は径約2.50m×2.25mを測り、平面形は開口部・



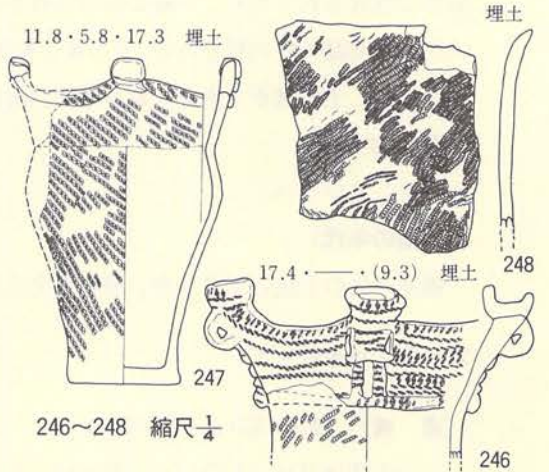
A. E14土坑

E-14土坑土層注記

層位	色調	土性
1	7.5YR 3/2 砂質シルト	白砂ブロック・浮石混入。炭化物を含む。
2	7.5YR 3/2 黒褐色	多量の炭化物を含む。浮石を多量に含む。
3	7.5YR 8/6 橙色	ソフトロームブロック。
4	7.5YR 3/2 黒褐色	ソフトローム・白砂のブロック混入。
5		白砂の崩壊土。
6	7.5YR 3/2 黒褐色	少量の炭化物を含む。他は2層に同じ。
7	7.5YR 3/2 黒褐色	浮石質砂層。
8		流水によって沈澱した川砂層。

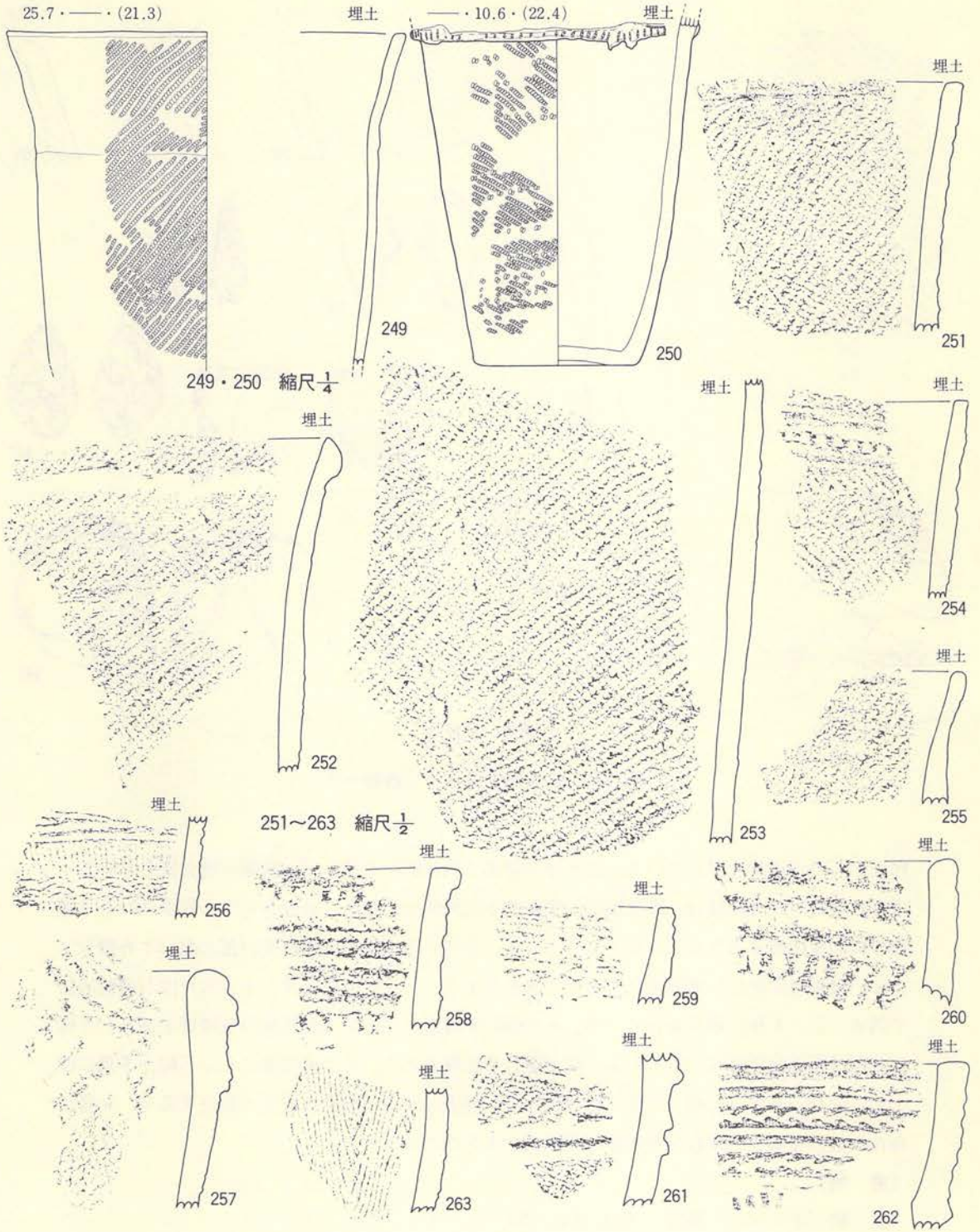
E-15土坑-1土層注記

層位	色調	土性
1	7.5YR 3/2 黒褐色土、砂質	少量の炭化物・多量のごろた・浮石を含む。
2	7.5YR 3/2 黒褐色土	1層に類似。ごろた少なく、浮石多し。
3	7.5YR 3/2 極暗褐色土	少量の炭化物と多量の浮石を含む。
4	7.5YR 3/2 砂質黒褐色土	少量の炭化物と多量の浮石を含む。
5	7.5YR 8/6 明褐色	汚れたローム。浮石を若干含む。
6	7.5YR 8/6 鈍い褐色ローム	若干汚れている。

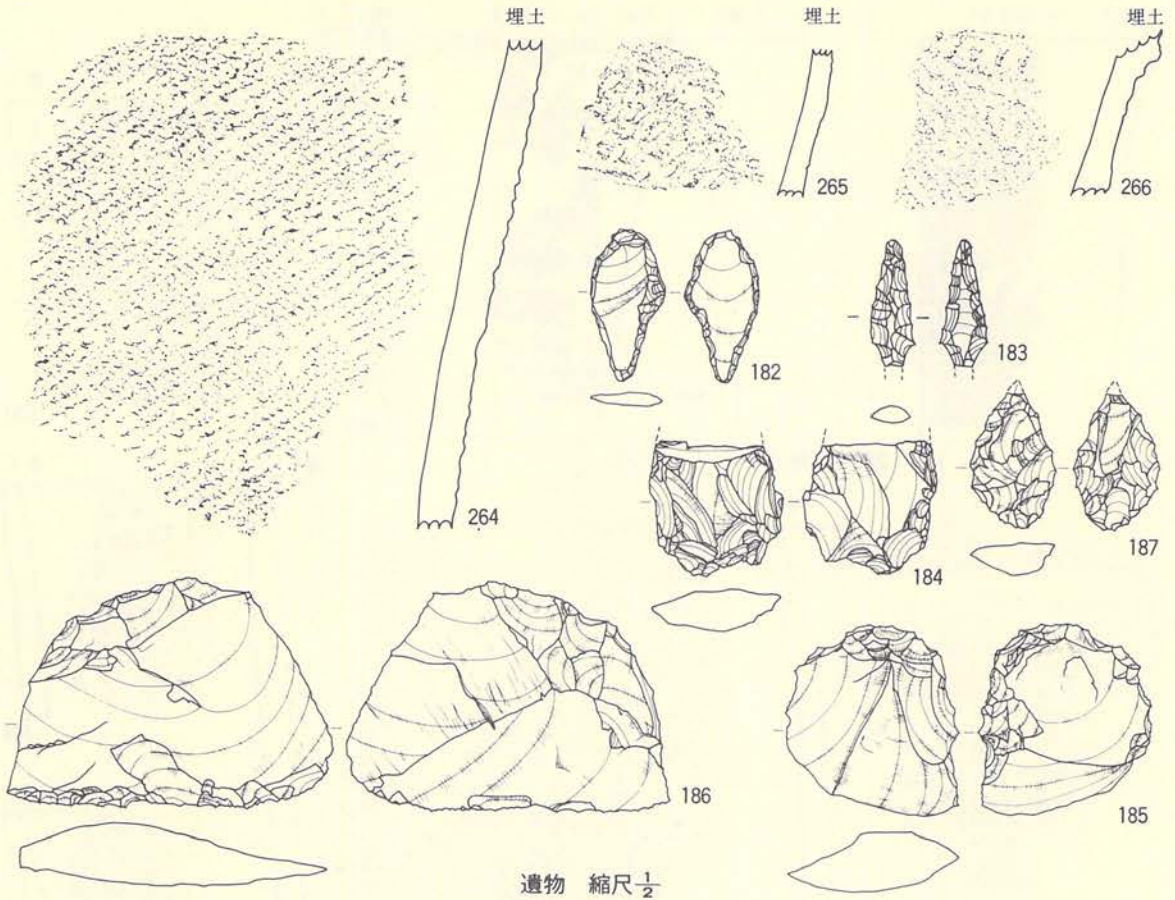


B. E-15土坑-1 (遺構・遺物-1)





第70圖 E-15土坑-1 (遺物-2)



遺物 縮尺 $\frac{1}{2}$

第71図 E-15土坑-1 (遺物-3)

底面ともに楕円形を呈している。深さは最深部で約1.85mを測るが、底面が壁に寄るほど高くなり、壁寄りが幾分浅い。断面形は、底面上位約95cmの壁面に頸部をもち、底面に対して壁面が約60度内傾するフラスコ形を示している。頸部から上位の壁面は開口部に向って外傾している。埋土は黒褐色・極暗褐色・明褐色等を呈するシルトや砂質シルトと、八戸浮石流凝灰岩で構成され、6層に細分されている。その中の6層は八戸浮石流凝灰岩の堆積層であり、5層は八戸浮石流凝灰岩粒と黒色シルト粒が混合した層である。その他の層にも浮石粒が多量に混入しており、全体的に締って固く粘性はない。埋土の堆積状況を土層図で観察すると、6層の存在が気になるが、概ね自然堆積の状況を示すものであろう。

〔遺物〕

土器 (第69図B・第70・71図、PL-59・60・61)

埋土内から土坑としては比較的多量の土器が出土している。246・247は器形が同じである



から同種のものとおもう。246 は波状口縁で口縁突起の下位の器面には橋状貼りつけと頸部に垂下する隆帯があり頸部にも隆帯の貼りつけがある。口縁部の文様は横位と縦位の原体圧痕文を付す。247 は縄文以外に文様をもたない。256・259・260・262 には沈線を主体とした文様をもつ。257・261 は隆帯と沈線を主体とした文様を施している。248・249・251・252 は縄文だけが施文された土器である。263～265 もほぼ同様である。

#### 石器 (第71図、PL-127B)

6 点出土している。182・183 は石鏃であるが、182 は先端部を、183 は基部を欠損している。184 は石筥とおもわれるが作りが粗雑である。185 は搔器である。186・187 は切削器としたが、186 は搔器の可能性はある。

#### 〔遺構の時期〕

埋土内から出土した土器の中で時期が明確なのは 248・249・252・259～264 である。この中でもっとも新しい土器は 259・263 である。この 2 点の存在を考慮するならば、本土坑は中期中葉に位置づけられるであろう。

### 29) E-15土坑-2

#### 〔遺構〕 (第72図、PL-21B)

この土坑はグリッドE-15・F-15にまたがって位置し、G-16住居跡の東壁と重複している。新旧関係は本土坑の方が古い。

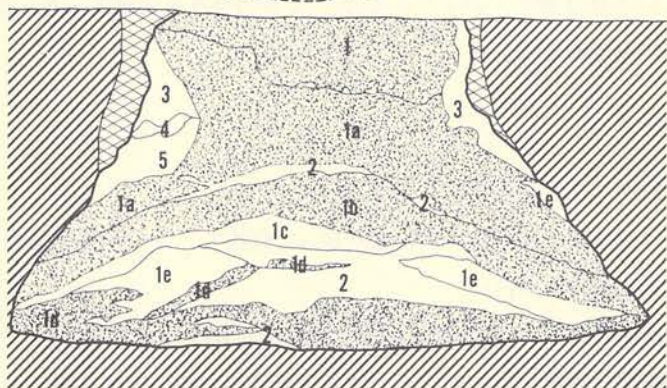
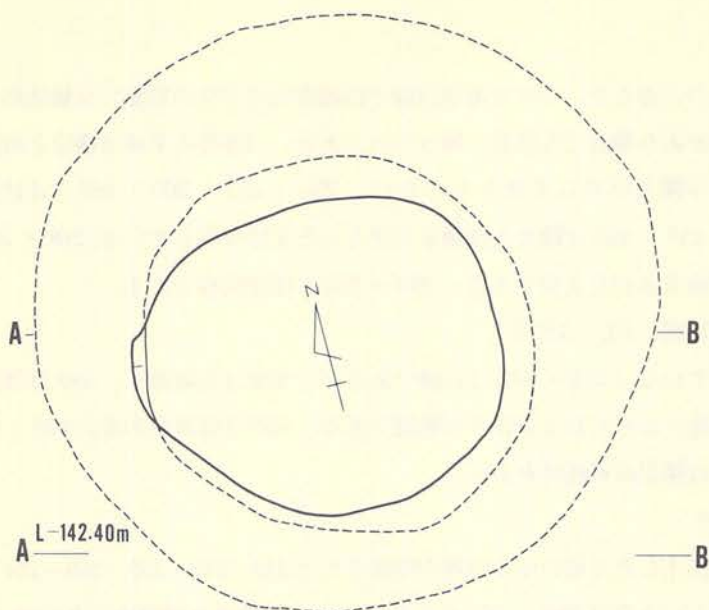
規模は開口部径約1.95m×1.65mで、底面は径約3.35m×3.20mを測り、平面形は開口部が楕円形であるが底面は円形を呈している。深さは最深部で約1.80mを測るが、底面中央から壁に向って次第に高くなっているので、壁際は若干浅い。断面形は底面から約1.35m 上位の壁面に径約1.70mの頸部をもつフラスコ形を示し、頸部から上位の壁面はほぼ垂直に近い。埋土は黒色・黒褐色・暗褐色・褐色・明褐色を呈するシルトや砂質シルトと八戸浮石流凝灰岩によって構成され、5層に細分されている。その中で1層は八戸浮石流凝灰岩を主体とした土層で、混入物や固さ等でa～eまでに細分されている。その他の土層にも浮石粒が多く混入している。埋土の堆積状況を土層図で観察すると、1層の存在に疑問を持っている。おそらく、この土坑は人為的に埋め戻されたものと考えられる。

#### 〔遺物〕

出土していない。

#### 〔遺構の時期〕

遺物を出土していないので定かでないが、G-16住居跡より古いことが判明しているので、前期末葉～中期初葉頃に位置づけられるであろう。



遺構 縮尺  $\frac{1}{40}$

E-15土坑-2土層注記

層位	色調	土性
1	7.5YR 7/5 明褐色	シラス。固結し、下層に炭化物多し。
1a	7.5YR 7/5 明褐色	シラス。軟かく、浮石が多く混入。
1b	7.5YR 7/5 明褐色	シラス。軟かく浮石は混入しない。
1c	7.5YR 7/5 明褐色-鈍い褐色	シラスに汚れたシラスの間層を挟む。
1d	7.5YR 7/5 明褐色	等粒子のシルト質シラス。
1e	7.5YR 7/5 明褐色	風化したシラス。
2	7.5YR 3/5 黒褐色	砂質土。浮石粒を多量に含む。
3	7.5YR 3/5 暗褐色	砂質土。シラス・浮石を多量に含む。
4	7.5YR 2/5 黒色土	軟かい砂質シルト。
5	7.5YR 7/5 褐色	汚れたソフトローム。

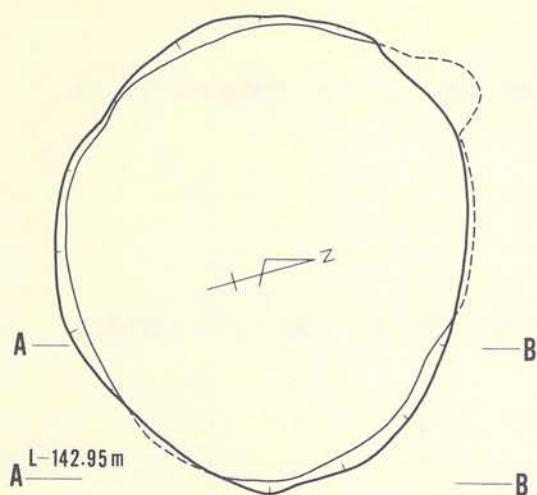
第72図 E-15土坑-2

30) E-22土坑

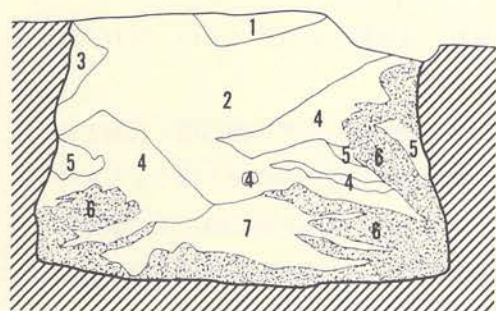
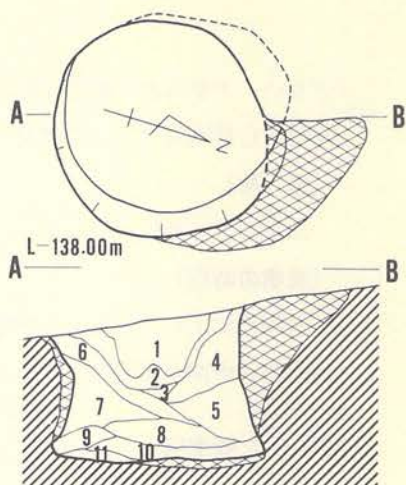
〔遺物〕(第73図A、PL-24B)

この土坑はグリッドE-22に位置し、E-22住居跡・E-23住居跡・E-22周溝遺構と重複している。重複遺構との新旧関係はE-22住居跡・E-22周溝遺構は新しく、E-23住居跡は古い。

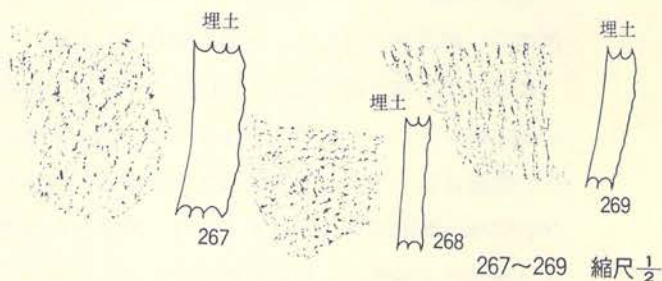




遺構 縮尺  $\frac{1}{40}$



A. E-22土坑



B. E-46土坑

E-22土坑土層注記

層位	色調	土性
1	7.5YR 5/1 黒色土	砂質シルト。耕作土(攪乱)。
2	7.5YR 5/2 褐色土	砂質シルト。浮石混入。しまり・粘性無し。
3	7.5YR 5/3 暗褐色土	砂質シルト。質は2層と同じ。
4	7.5YR 5/4 極暗褐色土	砂質土。中層浮土・アワ砂上部層に近い。
5		2層に類似。黄褐色のソフトローム混入。
6	7.5YR 5/6 灰白～橙	白砂と風化した白砂による火山灰層。
7	7.5YR 5/7 褐色	質は2層と同じ。

E-46土坑土層注記

層位	色調	土性
1	10 YR 5/1 黒褐色	浮石・木炭片を多量に含む砂質土。
2	10 YR 5/2 褐色砂質土	ソフトロームと火山灰が汚れたもの。
3	10 YR 5/3 鈍い黄橙色	火山灰ブロック。軟かい。
4	10 YR 5/4 黄褐色、砂質シルト	少し汚れた火山灰上部土。浮石を含む。
5	10 YR 5/5 黄褐色	4層とほぼ同じ。上面に暗色土入る。
6	10 YR 5/6 鈍い黄褐色～鈍い黄橙色	2に近似。木炭片有り。
7	10 YR 5/7 黄褐色	汚れたソフトローム。
8	10 YR 5/8 暗褐色砂質土	火山灰と有機質の混合。浮石を含む。
9	10 YR 5/9 鈍い黄褐色～黄褐色	砂質土。浮石を含む。
10	10 YR 5/10 鈍い黄褐色	砂質土。8層より火山灰を多く含む。
11	10 YR 5/11 鈍い黄橙色	少し硬く汚れた火山灰。

第73図 土坑

規模は開口部径約2.50m×2.30mで、底面は径約2.80m×2.60mを測り、平面形は開口部・底面ともに楕円形を呈する。深さは最深部で1.40mを測るが、底面が壁に向かって次第に高くなっているため、壁に寄るほど浅くなる。断面形は、底面に対して壁面が約80度内傾するフラスコ形である。埋土は黒色・極暗褐色・暗褐色・褐色・灰白色等を呈する砂質シルトと八戸浮石流凝灰岩とによって構成され、7層に細分されている。中でも6層は八戸浮石流凝灰岩の堆積層である。その他の土層にも全体的に浮石粒の混入が多く、比較的締りはいいが粘性はほとん

どない。土層図から堆積状況を観察すると、6層は壁の崩壊によるものと理解されるので、本土坑は自然堆積によって埋没したものと考えられる。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

遺物が出土していないので時期を特定できないが、E-22住居跡より新しいことが判明しているので中期中葉以降に位置づけられるであろう。

### 31) E-46土坑

〔遺構〕 (第73図B、PL-21C)

この土坑はグリッドE-45・E-46にまたがって位置し、他遺構との重複はない。なお、東側部分に掘り過ぎがあり、一部不明な点もある。

規模は開口部径約1.10m×1.10mで、底面は径約1.20mを測り、平面形は開口部・底面ともに楕円形を呈している。深さは最深部で80cmを測るが、斜面下位部分は約65cmと浅くなるものの、底面はあまり大きな起伏もなく、ほぼ平坦である。断面形は、底面の約40cm上位の壁面に径約85cmの頸部をもつフラスコ形で、頸部から上位の壁面は外傾して開口部に続いている。埋土は黒褐色・暗褐色・黄褐色等を呈するシルトやよごれた八戸浮石流凝灰岩で構成され、11層に細分されている。この土坑の埋土はいずれも八戸浮石流凝灰岩と黒色系シルトの混合した土であり、その混合具合で細分されている。また、堆積状況を土層図で観察すると、最初はほぼ平面的に堆積していたのが、次には斜面下位(南側)から流入し、最後に斜面上位(北側)から流入した状況を呈している。このような状況は自然堆積と考えるよりも人為的に埋め戻された可能性のあることを示すものであろう。

〔遺物〕

土器 (第73図B、PL-61)

3点(267～269)出土している。器表に縄文のみが付されたもので、胎土に繊維を混入している。

〔遺構の時期〕

出土した土器の胎土に繊維が混入していることからみると、前期に属する土坑であろう。

### 32) E-47土坑-1

〔遺構〕 (第74図A、PL-22A)

この土坑はグリッドE-47とF-47にまたがって位置し、他遺構との重複はない。



規模は開口部径約1.25m×1.10mで、底面は径約1.80m×1.55mを測り、平面形は開口部・底面ともに円形を呈する。深さは最深部で約1.35mを測るが、底面が中央から壁に向かって次第に高くなっているため、壁に寄るほど浅くなる。断面形は、壁面が上方に軽く張り出し底面に対して壁面が75度内傾するフラスコ形を示している。埋土は黒褐色・褐色と黄褐色を呈するシルトと八戸浮石流凝灰岩によって構成されている。その中でも、6層と8層はほぼ純粋な八戸浮石流凝灰岩が堆積している。したがって、この土坑の埋土は6層と8層の八戸浮石流凝灰岩とそれ以外の層に二分される。それ以外の土層にも多くの浮石粒が混入している。このような堆積状況から、本土坑は人為的に埋め戻されたものと考えられる。

#### 〔遺物〕

##### 土器 (第74図A、PL-61)

埋土内から2点(270・271)出土している。270・271ともに縄文のみが付された体部破片である。胎土に繊維混入はない。

##### 石器

出土していない。

#### 〔遺構の時期〕

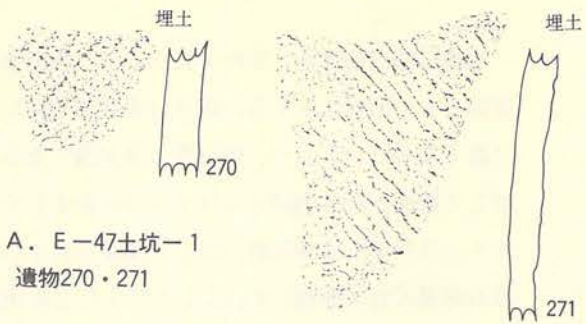
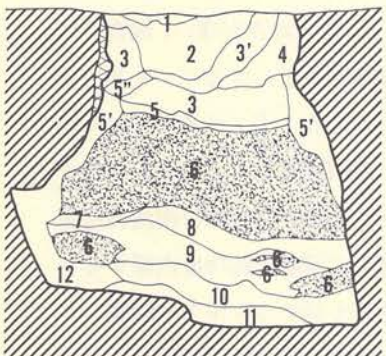
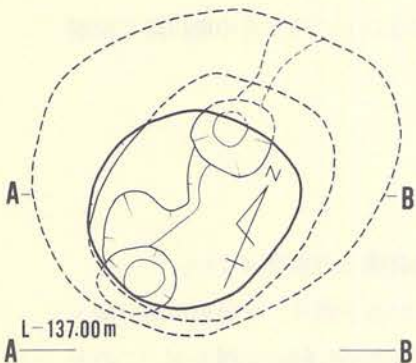
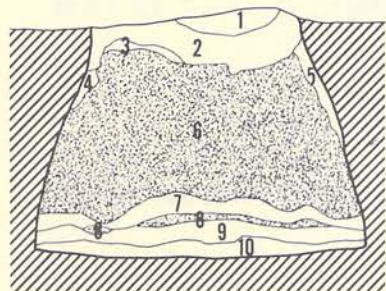
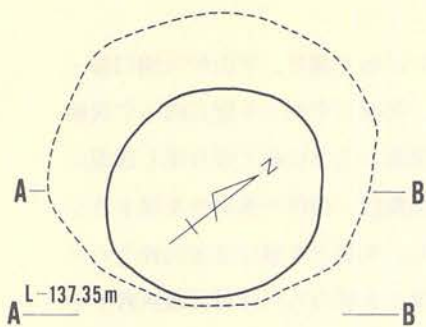
時期を特定できるような土器ではないが、胎土に繊維混入がないところから中期以降に位置づけられるであろう。

### 33) E-47土坑-2

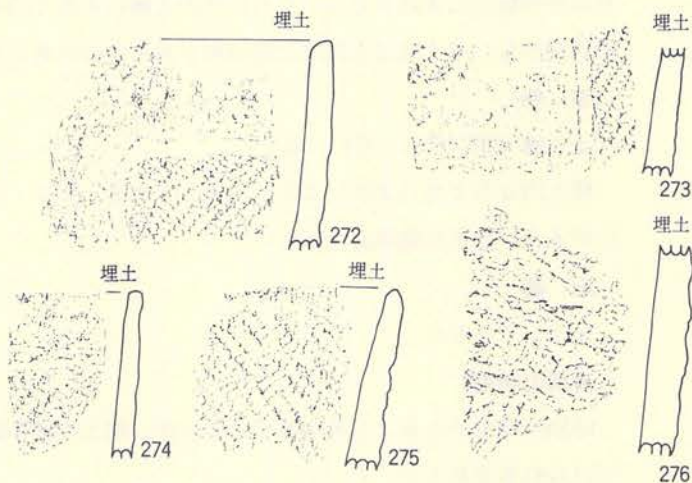
#### 〔遺構〕 (第74図B、PL-22B)

この土坑はグリッドE-47とF-47にまたがって位置し、他遺構との重複はない。

規模は開口部径約1.15m×1.00mで、底面は径約2.00m×1.65mを測り、平面形は開口部・底面ともに楕円形を呈している。深さはもっとも深い東側の底面で約1.65mを測るが、この土坑の底面には、東半と西半では約13cmの明瞭な段差があることから、西半の方が浅い。調査時に2基の土坑の重複とも考えたが、土層図でみると同時に埋没した様相を呈しており、1基の土坑と断定した。また、底面の段差のある境には南北各1基の副穴がある。P<sub>1</sub>は径約40cm×40cmで深さは西側底面から約39cm、P<sub>2</sub>は径約43cm×35cmで深さは西側底面から約37cmをそれぞれ測り、平面形はともに円形を呈し、P<sub>1</sub>とP<sub>2</sub>の距離は約90cmである。断面形は南西の壁面が不規則なので定かでないが、北東部の壁で観察すると底面に対して壁面が約78度内傾するフラスコ形である。埋土は黒褐色・暗褐色・褐色・明褐色・黄褐色等を呈するシルトや砂質シルトと八戸浮石流凝灰岩で構成され、11層に細分されている。その中の6層はほぼ純粋な八戸浮石流凝灰岩の堆積層である。その他の層でも全体的に浮石粒が混入し、締りが良く固い。土層



A. E-47土坑-1  
遺物270・271



B. E-47土坑-2  
遺物272~276  
270~276 縮尺  $\frac{1}{2}$   
遺構 縮尺  $\frac{1}{40}$

E-47土坑-1 土層注記

層位	色調
1	10 YR 5/6 褐色砂質シルト
2	10 YR 5/6~5/4 褐色~鈍い黄褐色
3	10 YR 5/6 黄褐色
4	10 YR 5/4 鈍い黄褐色
5	10 YR 5/4 鈍い黄褐色
6	10 YR 5/2~5/2 鈍い黄褐色
7	10 YR 5/4 鈍い黄褐色
8	10 YR 5/2~5/2 鈍い黄褐色
9	10 YR 5/2 黒褐色
10	10 YR 5/4~5/4 鈍い黄褐色~褐色

土性  
 浮石・ソフトロームと火山灰のブロック混入。  
 砂質シルト。1層に類似。混合物は少ない。  
 軟かいソフトロームブロック。  
 極く軟かい。ソフトロームと火山灰の混合。  
 粉状の八戸火山灰混入。  
 八戸火山灰純層。  
 軟かい砂質シルト。  
 八戸火山灰ブロック。硬い。  
 少し硬い砂質シルト。7層に類似。  
 軟かい砂質シルト。7・9層に類似。

E-47土坑-2 土層注記

層位	色調
1	10 YR 5/4 鈍い黄褐色
2	10 YR 5/4 暗褐色
3	10 YR 5/4 褐色
3'	10 YR 5/4 褐色
4	10 YR 5/4 褐色
5	10 YR 5/4 黄褐色
5'	10 YR 5/4 黄褐色~明黄褐色
5''	10 YR 5/4~5/4 5'より少し暗色
6	10 YR 5/4 鈍い黄褐色
7	10 YR 5/4 黄褐色
8	10 YR 5/4 黒褐色
9	7.5YR 5/4 明褐色
10	10 YR 5/4 鈍い黄褐色
11	10 YR 5/4 鈍い黄褐色
12	10 YR 5/4 鈍い黄褐色

土性  
 硬い少し汚れた火山灰。  
 軟かい砂質土。木炭片若干有り。  
 火山灰ブロックの混じる砂質土。  
 火山灰ブロックが3層と比べ少ない。  
 ソフトロームに砂質土と火山灰ブロックが混入。  
 ソフトロームに火山灰が混入。  
 ソフトロームに火山灰が混入。  
 硬い八戸火山灰。  
 軟かいソフトローム。  
 軟かい砂質土。  
 ソフトロームに火山灰が織状に入る。  
 砂質土に火山灰ブロックが入る。  
 ソフトロームに火山灰が混じった土。  
 少し汚れた軟かい火山灰。

第74図 土坑



図で埋土の堆積状況を観察すると、この土坑は人為的に埋め戻された可能性が大きい。

〔遺物〕

土器（第74図B、PL-61）

埋土内から出土した。272～274は器面を沈線で区画し、磨消縄文手法による文様をもつ。

275・276は縄文のみを付している。

石器

出土していない。

〔遺構の時期〕

出土した土器の中で270～272の存在から、この土坑は中期末葉に位置づけられるであろう。

34) F-45土坑-1

〔遺構〕（第75図A、PL-22C）

この土坑はグリッドF-44に位置し、他遺構との重複はない。

規模は開口部径約1.40m×1.50mで、底面は径約1.35m×95cmを測り、平面形は開口部・底面ともに楕円形を呈している。深さは最深部は45cmであるが、底面が南側に向って（斜面下位に向って）次第に低くなっているために、南壁部は約25cmと北壁より浅い。断面形は、底面を水平状態としてみると、壁面が底面に対して約100度外傾する浅皿形を呈している。埋土は黒褐色・暗褐色・黄褐色・黄橙色等を呈するシルトと八戸火山灰と八戸浮石流凝灰岩を主体としてそれらの混合した土で構成され、6層に細分されている。埋土の堆積状況を土層図で観察すると、人為的に埋め戻した状況を示すものであろう。

〔遺物〕

土器（第75図A、PL-62）

埋土内（277）から出土した。隆帯によって施文された、キャリパー形を示す器形の口縁部破片である。

石器

出土していない。

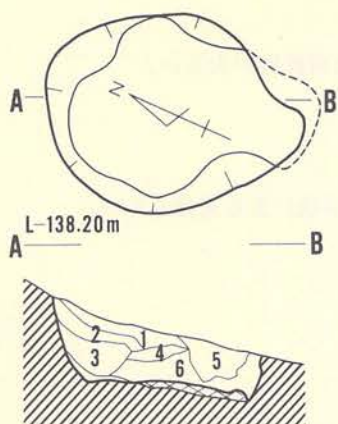
〔遺構の時期〕

埋土内から出土した土器から、中期中葉に位置づけられる土坑であろう。

35) F-45土坑-2

〔遺構〕（第75図B、PL-23A）

この土坑はグリッドF-45に位置し、他遺構との重複はない。



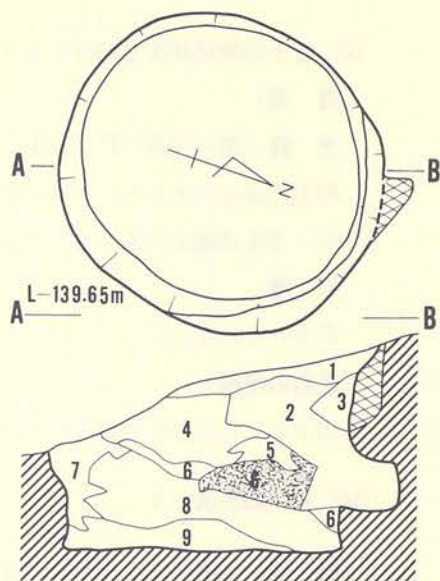
A. F-45土坑-1

F-45土坑-1 土層注記

層位	色調
1	10 YR 2/6 鈍い黄橙色
2	10 YR 2/6 黒褐色
3	10 YR 2/6~3/6 鈍い黄橙色~黄褐色
4	10 YR 2/6 鈍い黄褐色
5	10 YR 2/6 暗褐色砂質シルト
6	10 YR 2/6 鈍い黄橙色

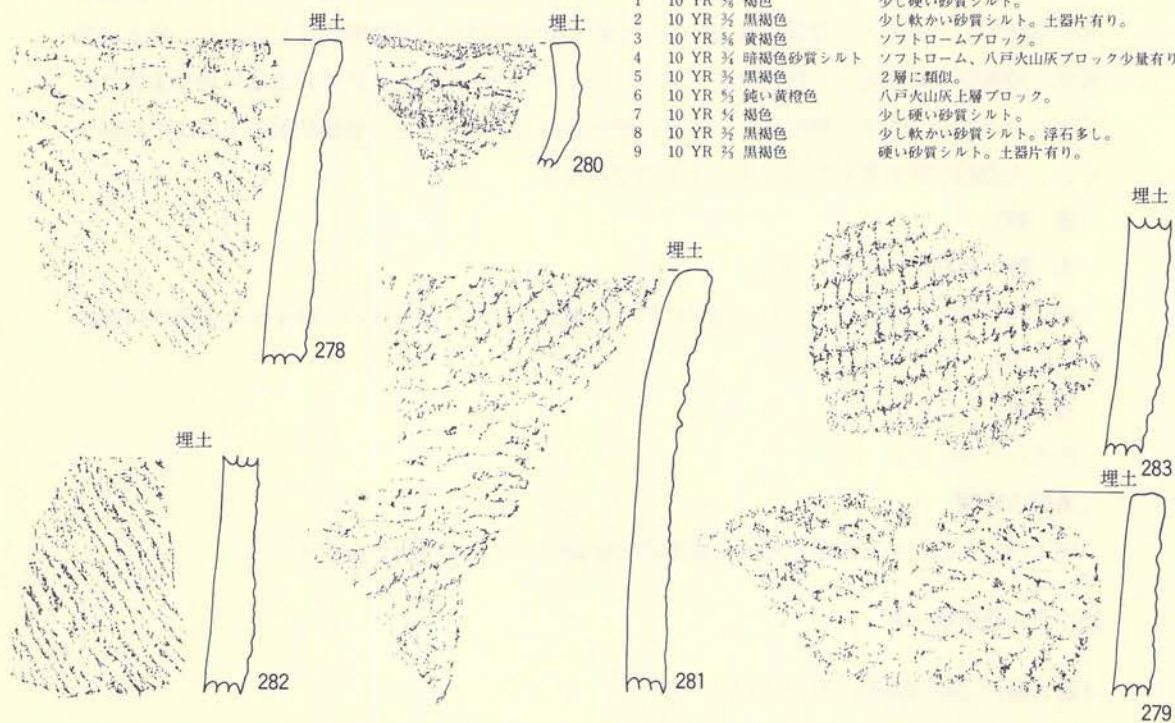
土性  
 砕けた火山灰にソフトロームが少量混入。  
 極端に軟かい細粒砂質シルト。  
 ソフトローム・火山灰ブロック・火山灰上部土が混合した土。  
 少し軟かい少し汚れた火山灰上部土。  
 有機質を含む土に火山灰ブロック少量混入。  
 八戸火山灰上部。少し硬い。

277~283 縮尺  $\frac{1}{2}$   
 遺構 縮尺  $\frac{1}{40}$



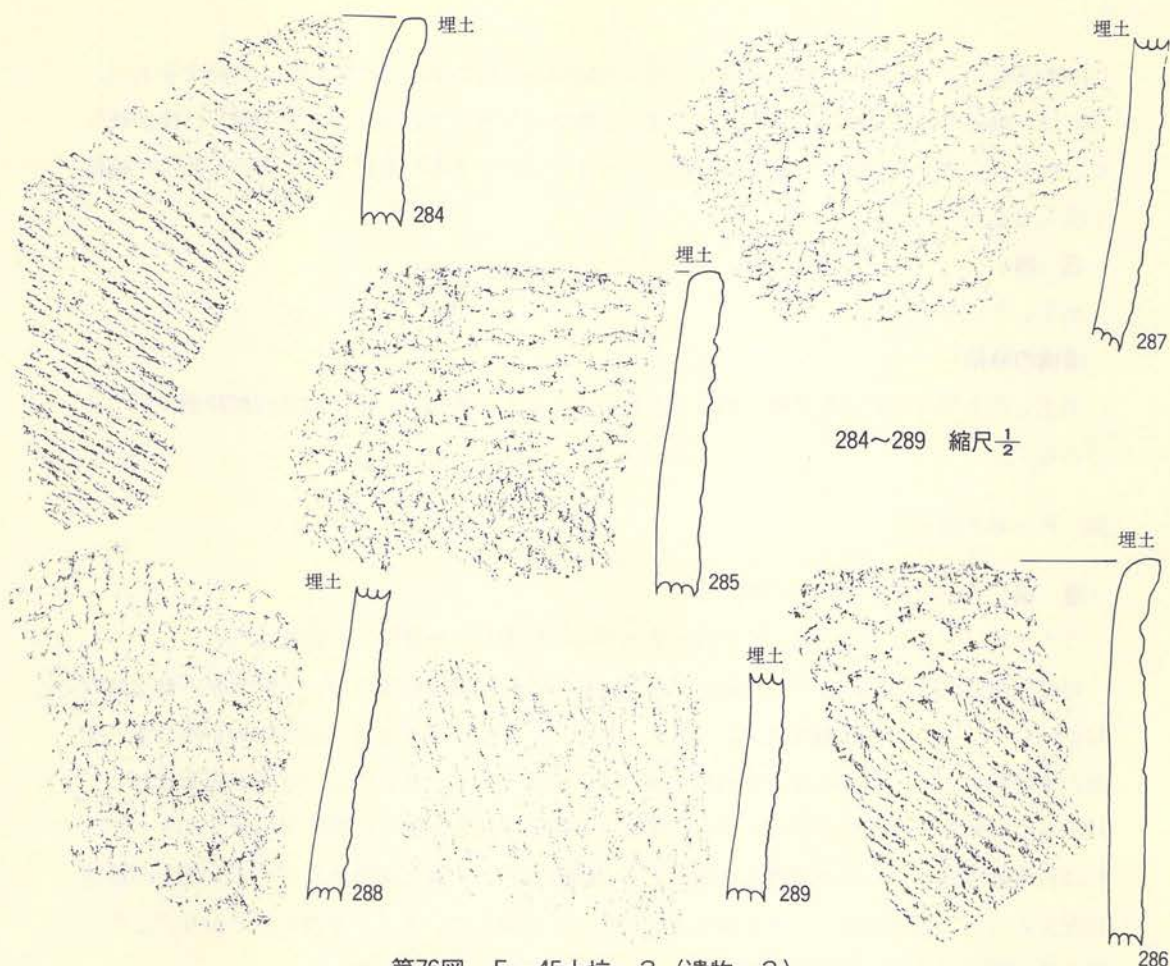
F-45土坑-2 土層注記

層位	色調	土性
1	10 YR 2/6 褐色	少し硬い砂質シルト。
2	10 YR 2/6 黒褐色	少し軟かい砂質シルト。土器片有り。
3	10 YR 2/6 黄褐色	ソフトロームブロック。
4	10 YR 2/6 暗褐色砂質シルト	ソフトローム、八戸火山灰ブロック少量有り。
5	10 YR 2/6 黒褐色	2層に類似。
6	10 YR 2/6 鈍い黄橙色	八戸火山灰上層ブロック。
7	10 YR 2/6 褐色	少し硬い砂質シルト。
8	10 YR 2/6 黒褐色	少し軟かい砂質シルト。浮石多し。
9	10 YR 2/6 黒褐色	硬い砂質シルト。土器片有り。



B. F-45土坑-2 (遺構・遺物-1)





第76図 F-45土坑-2 (遺物-2)

規模は開口部径約1.70m×1.60mで、底面は径約1.55m×1.40mを測り、平面形は開口部・底面ともに円形を呈する。深さは最深部で約1.10mを測るが、斜面下位の南壁では約50cmと浅いものの、底面は水平状態に近い。断面形は、壁面が底面に対して約95度で外傾するピーカー形を示し、壁面と底面はほぼ直交している。また、この土坑の北壁には、底面の上位25cmに横穴状の掘り込みがある。埋土は黒褐色・暗褐色・褐色・黄褐色等を呈するシルトや八戸浮石流凝灰岩とそれらの混合した土で構成され、9層に細分されている。その中の6層は八戸浮石流凝灰岩の堆積層である。埋土の堆積状況を土層図で観察すると、人為的に埋め戻した様相を呈している。

〔遺物〕

土器 (第75図B・第76図、PL-62)

いずれも埋土内から出土したものである。278・279・284～286は器表に縄文を付した後口縁部に不明瞭な横位の綾絡文を施している。体部縄文はいずれも撚糸文である。281は原体

LR横回転による単節斜行縄文を付した後、口縁部から約2cm下位に不明瞭な綾絡文をもつ。280は口縁部の縄文を磨消しているが、微かな綾絡文を残している。その他の破片は体部破片で、燃糸文(282・289)、単節斜行縄文(283・287・288)を付す。いずれも胎土に繊維を混入する。

#### 石器

出土していない。

#### 〔遺構の時期〕

出土した土器はいずれもII群に相当するものであるところから、本土坑は前期初葉に属するであろう。

### 36) F-45土坑-3

#### 〔遺構〕(第77図A、PL-24C)

この土坑はグリッドF-45・G-45にまたがって位置し、他遺構との重複はない。

規模は開口部径約1.25m×1.20cmで、底面は径約95cm×95cmを測るが、平面形が不整な楕円形を呈しているので、計測位置によって若干差が出てくる。深さは最深部で33cmを測るが、底面が不規則で、特に南半部分が比高約5cmで低くなっている。断面形は、壁面が底面に対して約110度外傾する浅皿形を示している。埋土は暗褐色・浅黄褐色・灰白色を呈するシルトや八戸浮石流凝灰岩とそれらの混合した土によって構成され、4層に細分されている。埋土の堆積状況を見ると、斜面下位の方から順次上位に向かって堆積していたことを表わしており、この土坑全体が何回かに亘って掘削され、そのつど埋め戻された可能性が強い。

#### 〔遺物〕

##### 土器(第77図A、PL-63)

埋土内から出土した。290は頸部～口縁部を残存する破片であるが、頸部に竹管刺突による列点文を付し、口縁部には単軸絡条体圧痕文を付す。291は体部破片であるが、縄文のみをもつ。いずれも胎土に微量の繊維を混入している。

##### 石器(第77図A、PL-127C)

1点出土している。両端を欠失している。切削器としたが大き目の石鏃の可能性はある。

#### 〔遺構の時期〕

出土した土器の290の存在から前期末葉～中期初葉に位置づけられる可能性がある。

### 37) F-46土坑-1

#### 〔遺構〕(第77図B、PL-23B)



この土坑はグリッドF-46に位置し、他遺構との重複はない。

規模は開口部径約1.50m×1.45mで、底面は径約1.50m×1.50mを測り、平面形は開口部・底面ともに円形を呈している。深さは最深部で約50cmを測るが、斜面下位の南東部では約30cmと浅くなる。底面は斜面下位の方が若干低いがほぼ平坦で、底面中央には径約25cm×22cm、深さ9cmの副穴が掘られている。埋土は黒褐色・暗褐色・褐色・黄褐色等を呈するシルトやよごれた八戸浮石流凝灰岩とそれらの混合した土で構成され、11層に細分されている。この土坑の埋土には八戸浮石流凝灰岩の純層の堆積はないが、全体的にみると人為的に埋め戻された状況を示している。

〔遺物〕

土器 (第77図B、PL-63)

埋土内から出土している。293は口縁部破片であるが、無文である。292には全面に擦痕が入り、列点状の文様をもつ。胎土にはいずれも微量の繊維を混入する。

石器

出土していない。

〔遺構の時期〕

出土した土器は早期的な要素をもっていることから、早期の土坑の可能性がある。

38) F-46土坑-2

〔遺構〕 (第77図C、PL-23C)

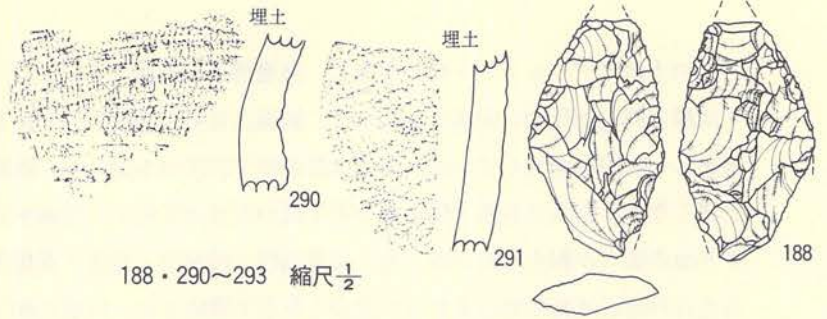
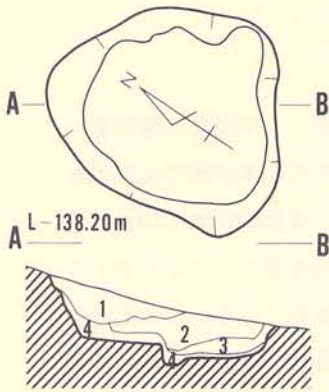
この土坑はグリッドF-46に位置し、F-46土坑-3と重複している。新旧関係は本土坑の方が新しい。

規模は開口部径約1.40m×1.30mで、底面は径約2.20m×2.20mを測り、平面形は開口部・底面ともに楕円形を呈している。深さは最深部で約1.40mであるが、斜面下位の方が浅くなるものの、底面はほぼ水平状態に近い。断面形は壁面が底面に対して約72度内傾するフラスコ形を呈しているが、この土坑の壁面は直線的ではなく外方に若干張り出ている。埋土は黒褐色・暗褐色・褐色・黄褐色等を呈するシルトや八戸浮石流凝灰岩とそれらの混合した土で構成され、11層に細分されている。中でも4層は八戸浮石流凝灰岩の堆積層である。この土坑の埋土は自然堆積で埋没したことを示すものであろう。

〔遺物〕

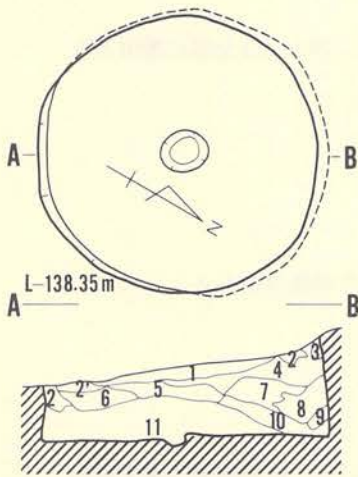
土器 (第78図A、PL-63)

埋土内から出土した土器である。294は器面に単節斜行縄文を付した後、口縁部に不明瞭な綾絡文を付す。295は頸部に細い隆帯を付し、口縁部には不明瞭な綾絡文をもつ。296・297

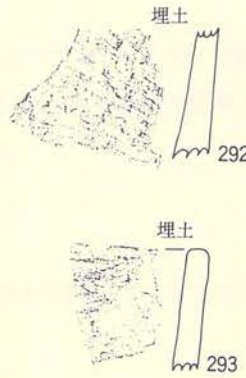


188・290～293 縮尺  $\frac{1}{2}$

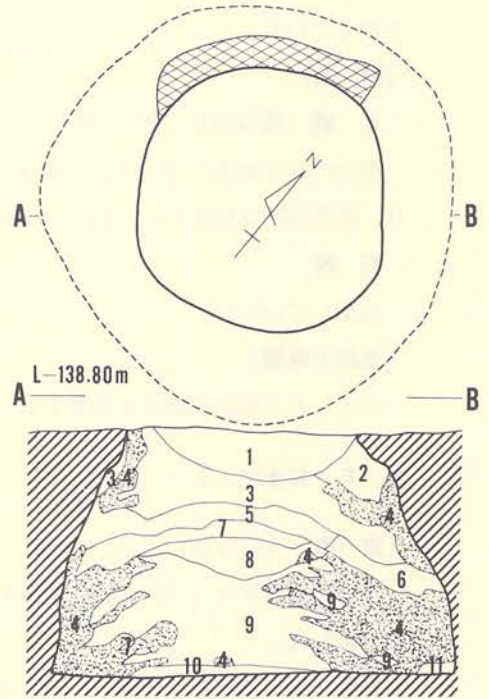
A. F-45土坑3



B. F-46土坑-1



遺構 縮尺  $\frac{1}{40}$



C. F-46土坑-2

F-45土坑-3土層注記

層位	色調	土性
1	10 YR 5/2 灰白色	八戸火山灰と汚れた火山灰の混合土。
2	10 YR 5/2 灰白色	八戸火山灰と砕けた火山灰の混合土。
3	10 YR 5/2 暗褐色	砂質シルトに火山灰ブロックが少し混入。
4	10 YR 5/2 浅黄褐色	軟かい火山灰上部土。

F-46土坑-1土層注記

層位	色調	土性
1	10 YR 5/2 黒褐色	砂質土。木炭片少量、浮石多量に含む。
2	10 YR 5/2 黄褐色	ソフトローム。軟かい砂質シルト。
3	10 YR 5/2 鈍い黄褐色	軟かい八戸火山灰ブロック。
4	10 YR 5/2 褐色砂質土	ソフトロームと有機質の混合土。
5	10 YR 5/2 暗褐色	少し硬い砂質土。
6	10 YR 5/2 褐色	ソフトロームの混入した砂質土。
7	10 YR 5/2 黒褐色	少し硬い砂質土。木炭粒あり。
8	10 YR 5/2 暗褐色	ソフトローム、火山灰、黒色砂質の縞状堆積。
9	10 YR 5/2 暗褐色	少し硬い砂質。木炭片僅少含む。
10	10 YR 5/2 鈍い黄褐色～褐色	砂質土。小石状浮石を含む。
11	10 YR 5/2 暗褐色	木炭粒が散在する少し硬い砂質土。

F-46土坑-2土層注記

層位	色調	土性
1	10 YR 5/2 暗褐色	浮石の混じる硬い砂質土。
2	10 YR 5/2 褐色～黄褐色	軟かい砂質シルト。木炭粒・ソフトロームブロック有り。
3	10 YR 5/2+5/2 黄褐色+暗褐色	ソフトロームと暗色砂質土の混合土。
4	10 YR 5/2 鈍い黄褐色	八戸火山灰ブロック。上半軟かく、下半硬い。
4'	10 YR 5/2 鈍い黄褐色	軟かい火山灰ブロック。
5	10 YR 5/2 黄褐色	ソフトローム。軟かい砂質シルト。
6	10 YR 5/2 黄褐色	極端に軟かい砂質土。浮石多量に混入。
7	10 YR 5/2 褐色	硬い砂質土。
8	5 Y 5/2 オリーブ黒	硬い砂礫土。
9	10 Y 5/2 暗褐色	ソフトローム中に、7・8層の土が縞状・ブロック状に混入。
10	10 Y 5/2 黒褐色	硬い砂礫土。
11	10 Y 5/2 鈍い黄褐色	軟かい砂質土。

第77図 土坑



は縄文のみが付された体部破片である。いずれも胎土に繊維を混入する。

### 石 器

出土していない。

#### 〔遺構の時期〕

294・295の存在から、前期前葉に属する土坑と考えられる。

### 39) F-46土坑-3

#### 〔遺 構〕 (第78図B、PL-24D)

この土坑はグリッドF-46に位置し、F-46土坑-2と重複している。新旧関係では本土坑の方が古い。したがって、重複部分の詳細は不明である。

規模は開口部径約1.00mで、底面は径約1.60mを測り、検出された部分から平面形を推定すると、円形を呈するものと考えられる。深さは最深部で約1.00mであるが、斜面上位の北西壁部分では若干深くなり、底面はほぼ水平に近いが、壁際が若干高くなっている。断面形は壁面が底面に対して約70度内傾するフラスコ形を示している。埋土は黒褐色・暗褐色・黄褐色等のシルトやシルトと八戸浮石流凝灰岩の混合した土で構成され、4層に細分されている。埋土の堆積状況を土層図で観察すると、自然堆積による埋没とは考えにくく、埋め戻された可能性が強い。

#### 〔遺 物〕

出土していない。

#### 〔遺構の時期〕

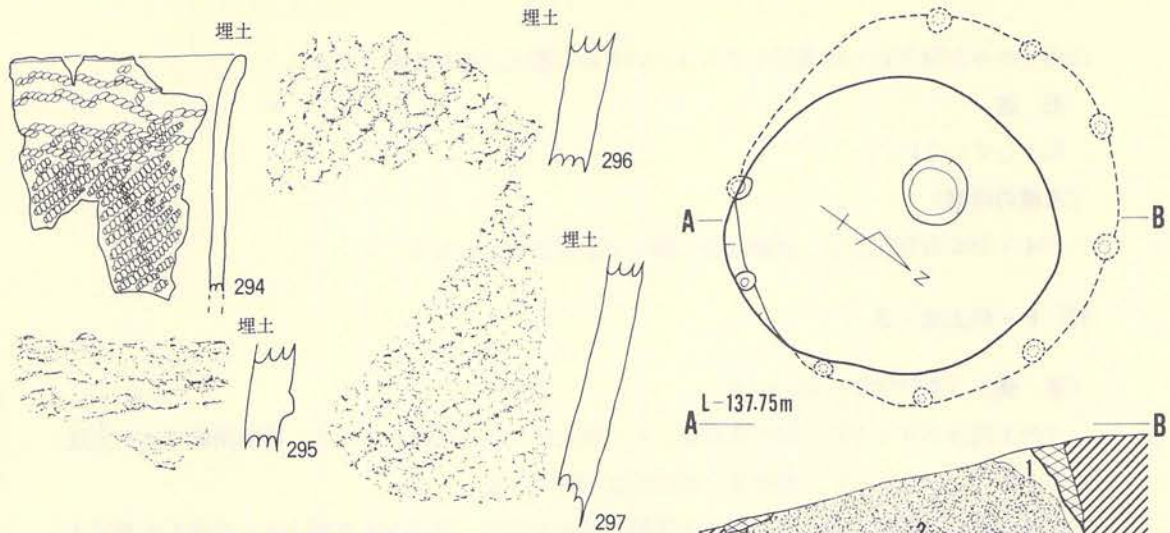
縄文時代の土坑とおもうが、遺物の出土がないので時期を特定できない。

### 40) F-47土坑-1

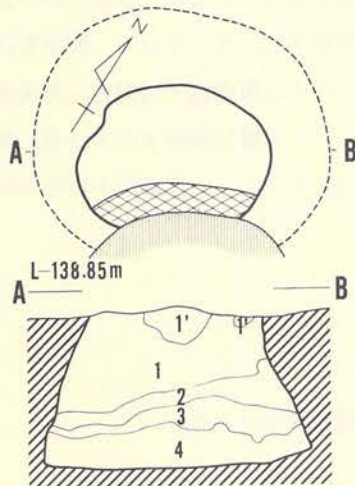
#### 〔遺 構〕 (第78図C、PL-25B)

この土坑はグリッドF-47に位置し、南西側部分がF-47土坑-3と重複している。新旧関係は本土坑の方が新しい。

規模は開口部径約1.65m×1.65mで、底面は径約2.05m×2.05mを測り、平面形は開口部・底面ともに楕円形を呈している。深さは最深部で約1.05mであるが、斜面下位の南側では約61cmと浅くなる。底面は中央から壁に向かって次第に高くなっているため、壁寄りには浅くなる。また、この土坑の底面には中央に1基(P<sub>1</sub>)と壁際に9基(P<sub>2</sub>~P<sub>10</sub>)の小土坑が掘られている。それらの規模はP<sub>1</sub>(37cm×33cm・深さ9.5cm)、P<sub>2</sub>(13cm×10cm・深さ8cm)、P<sub>3</sub>(10cm×8cm・深さ3cm)、P<sub>4</sub>(8cm×8cm・深さ3cm)、P<sub>5</sub>(10cm×10cm・深さ8cm)、

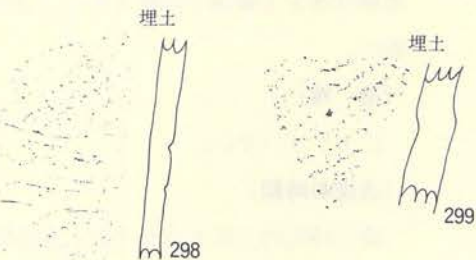


A. F-46土坑-2遺物



B. F-46土坑-3

293 縮尺 $\frac{1}{4}$   
 295~299 縮尺 $\frac{1}{40}$   
 遺構 縮尺 $\frac{1}{40}$



C. F-47土坑-1

F-46土坑-3土層注記

層位	色調	土性
1	10 YR 5/6 黄褐色砂質シルト	ソフトロームに若干砂質土混入。
1'	10 YR 5/6 鈍い黄褐色	1層に木根が貫入し、汚れたもの。
2	10 YR 5/6 暗褐色砂質土	1層と3層の混合土。
3	10 YR 5/6 黒褐色	少し軟かい砂質土で、最も暗色。
4	10 YR 5/6 鈍い黄褐色	汚れた火山灰。細砂質ないし砂質シルト。

F-47土坑-1土層注記

層位	色調	土性
1	10 YR 5/6~5/6 明黄褐色~鈍い黄褐色	砂質シルト+砂質土。
2	10 YR 5/6~5/6 鈍い黄褐色~明黄褐色	火山灰 2'若干濃色である。
3	10 YR 5/6 黒褐色	小石混じりの硬い砂質土。
4	10 YR 5/6 暗褐色	小石混じりの少し硬い砂質土。

第78図 土坑

P<sub>6</sub> (15cm×13cm・深さ12cm)、P<sub>7</sub> (13cm×13cm・深さ6cm)、P<sub>8</sub> (10cm×10cm・深さ8cm)、P<sub>9</sub> (14cm×10cm・深さ7cm)、P<sub>10</sub> (13cm×13cm・深さ7cm)であり、中央のP<sub>1</sub>が他より規模が大きく、その他のP<sub>2</sub>~P<sub>10</sub>は規模に大差がなくほぼ揃っている。壁際の土坑の間隔は50cm~67cmまで計測されるが、ほとんどは55cm~65cmの範囲に入る。このことから考えると、P<sub>6</sub>~P<sub>7</sub>の間に1基ないしは2基の小土坑が存在した可能性がある。断面形は、壁面



が底面に対して約75度内傾するフラスコ形を示している。埋土は黒褐色・暗褐色・黄褐色等を呈するシルトや八戸浮石流凝灰岩とそれらの混合した土で構成され4層に細分されている。その中の2層は八戸浮石流凝灰岩の堆積層である。埋土の堆積状況を土層図で観察すると、人為的に埋め戻された状況を示すものであろう。

〔遺物〕

土器 (第78図C、PL-63)

埋土内から出土している。298は体部破片であるが、沈線で区画し、縄文を磨消している。299は縄文のみが施文された体部破片である。

〔遺構の時期〕

297の存在により、本土坑は中期末葉に位置づけられるであろう。

41) F-47土坑-2

〔遺構〕 (79図A、PL-25A)

この土坑はグリッドF-47・F-48・G-47にまたがって位置し、他遺構との重複はない。規模は開口部径約2.70m×2.55mで、底面は径約2.75m×2.65mを測り、平面形は開口部・底面ともに楕円形を呈している。深さは最深部で約70cmであるが、斜面下位の南側では若干浅くなり約60cmである。底面には凹凸もなくほとんど水平状態に近い。断面形は、壁面が底面に対して約80度内傾するフラスコ形を呈している。埋土は黒色・黒褐色・暗褐色・褐色・黄褐色等を呈するシルトやシルトと八戸浮石流凝灰岩の混合した土等で構成され16層に細分されている。全体的にみると、壁面の崩壊による土と流入による土の互層を形成している。しかし、流入した土の中にも八戸浮石流凝灰岩の小塊が多量に混入していることから、この土坑の周囲に土坑内から掘り下げた土砂が放置されていたものと考えられる。この土坑の埋土堆積状況は自然堆積による埋没を示すものであろう。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

縄文時代の土坑とは思いますが、遺物の出土がないので時期を特定できない。

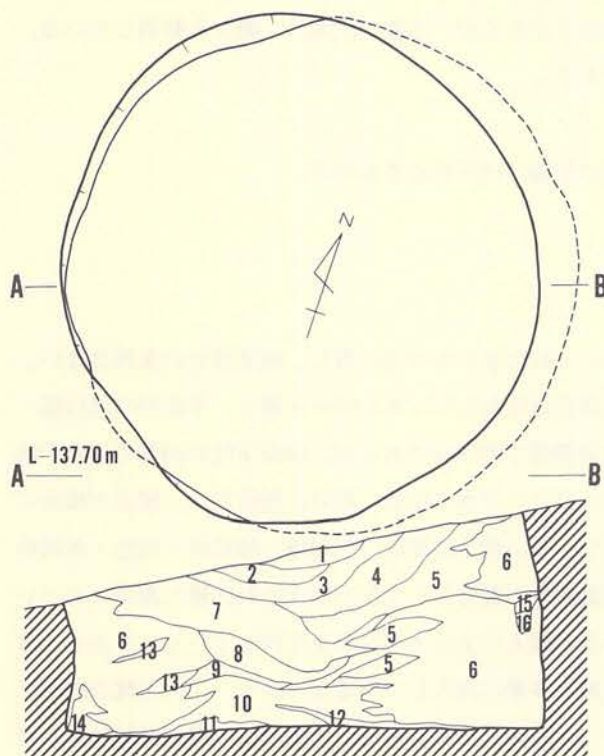
42) F-47土坑-3

〔遺構〕 (第79図B、PL-25C)

この土坑はグリッドF-47に位置し、F-47土坑-1と重複している。

規模は開口部径約1.30m×1.05mで、底面は径約1.30m×1.25mを測り、平面形は開口部・

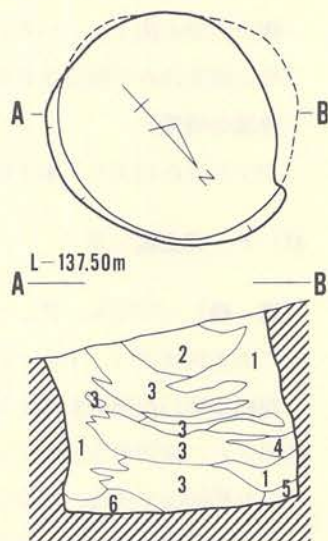
底面ともに楕円形を示している。深さは約1.05mを測るが、斜面下位の南側では約58cmと浅くなる。底面は中央部が壁面より若干低く、さらに、斜面下位に向って軽く低くなっていく。断面形は、壁面が底面に対して約85度内傾するフラスコ形を示している。なお、東側の壁面は底面から約45cm上位のところからは開口部まで外傾している。埋土は黒褐色・暗褐色・褐色等を呈するシルトやシルトと八戸浮石流凝灰岩の混合した土から構成され、6層に細分されている。埋土の堆積状況を観察すると、自然堆積によって埋没したものと考えられる。



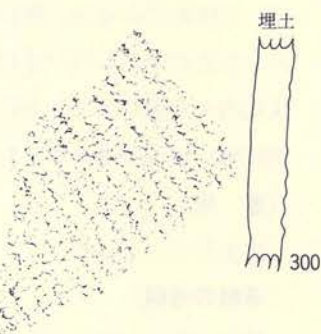
A. F-47土坑-2

F-47土坑-2土層注記

層位	色調	土性
1	10 YR 5/6 黄褐色	ソフトローム。硬く少し汚れている。
2	10 YR 3/4 ~ 5/4 黒色～鈍い黄橙色	上半は砂質土、下半は火山灰。
3	10 YR 5/4 鈍い黄褐色	軟かい砂質土。木炭粒僅少あり。
4	10 YR 3/4 暗褐色	砂質土中に火山灰ブロック多量に斑状に有り。
5	10 YR 3/4 黒褐色	少し硬い砂質土。
6	10 YR 5/6 ~ 5/4 + 10 YR 3/4 黄褐色～鈍い黄橙色	ソフトロームと火山灰ブロック。壁の崩落したもの。
7	10 YR 3/4 + 10 YR 5/4 黒色＋褐色	硬い砂質土。火山灰が混入し灰色と黒色の縞状。
8	10 YR 3/4 黒褐色砂質土	ソフトロームの板状ブロック有り。
9	10 YR 3/4 ~ 5/4 鈍い黄褐色～褐色	硬い砂質土。7層に近似。
10	10 YR 5/4 ~ 5/4 灰黄褐色～鈍い黄褐色	硬い砂質土。7層の灰色部分と同じ。
11	10 YR 3/4 暗褐色	少し軟かい砂質土。
12	10 YR 5/4 褐色	硬い砂質土。木炭粒僅かに入る。
13	10 YR 3/4 暗褐色	ソフトロームの亀裂に入った砂質土。
14	10 YR 5/4 褐色	軟かい砂質土。火山灰ブロック有り。
15	10 YR 3/4 褐色	少し軟かい浮石まじりのソフトローム。
16	10 YR 3/4 黒褐色	5層に近似。火山灰ブロック有り。



遺構 縮尺  $\frac{1}{40}$   
300 縮尺  $\frac{1}{2}$



B. F-47土坑-3

F-47土坑-3土層注記

層位	色調	土性
1	10 YR 5/4 褐色砂質シルト	ソフトロームを主に火山灰ブロックと暗色土が混合。
2	10 YR 3/4 ~ 3/4 褐色～暗褐色	砂質シルト。火山灰ブロック等混入。
3	10 YR 3/4 + 10 YR 3/4 暗褐色＋鈍い黄褐色	砂質シルト。暗色土中に、火山灰ブロックが多量斑状に混合。
4	10 YR 3/4 黒褐色	硬い砂質シルト。最も暗色。
5	10 YR 5/4 黄褐色	軟かい砂質シルト。
6	10 YR 3/4 暗褐色砂質シルト	3層に類似し、火山灰ブロック若干含む。



〔遺物〕

土器 (第79図B、PL-63)

埋土内から1点(300)出土している。器表に縄文の付された体部破片である。胎土に繊維混入はない。

43) F-48土坑

〔遺構〕 (第80図A、PL-26A)

この土坑はグリッドF-48に位置し、他遺構との重複はない。

規模は開口部径約1.35m×1.20mで、底面は径約1.95m×1.95mを測り、平面形は開口部が楕円形で底面は円形を呈している。深さは最深部で約1.45mを測るが、斜面下位の南側では、1.10mと浅くなる。なおこの土坑の底面の壁際には巾約10cmで深さ約5cmの溝が全周している。断面形は壁面が底面に対して約73度内傾するフラスコ形である。埋土は黒褐色・黄褐色・にぶい黄褐色等を呈するシルトと八戸浮石流凝灰岩やそれらの混合した土で構成され、5層に細分されている。その中でも2層は八戸浮石流凝灰岩の堆積層である。土層図で埋土の堆積状況を観察すると、人為的に埋め戻された可能性が大きい。

〔遺物〕

土器 (第80図A、PL-63)

埋土内から出土した。301・302ともに体部破片である。230は単軸絡条体回転文が付され、231は単節斜行縄文をもつ。230・231ともに胎土に微量の繊維を混入する。

石器 (第80図A、PL-127D)

1点出土している。189は切削器で先端部を欠失している。

〔遺構の時期〕

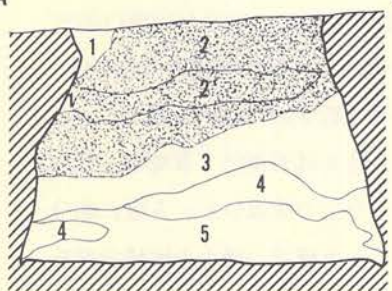
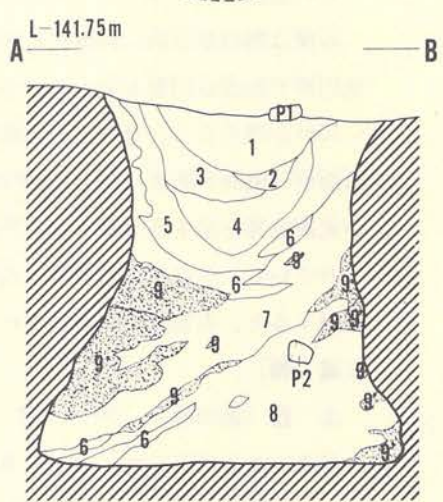
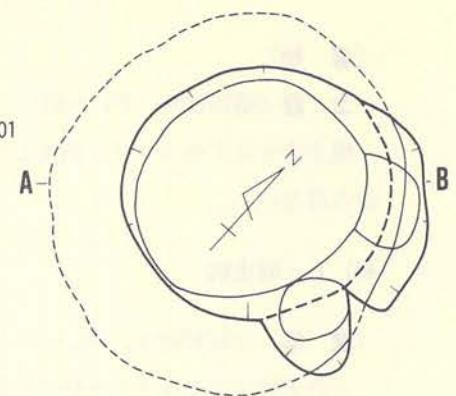
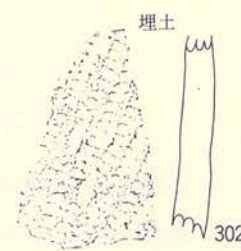
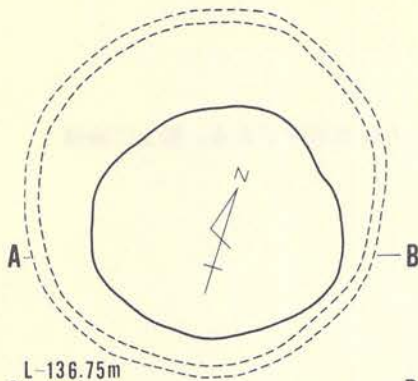
時期を決定するに足る土器が出土していないので断定しがたいが、胎土に繊維が混入していることから、前期に属する土坑の可能性がある。

44) G-16住居跡内土坑-1

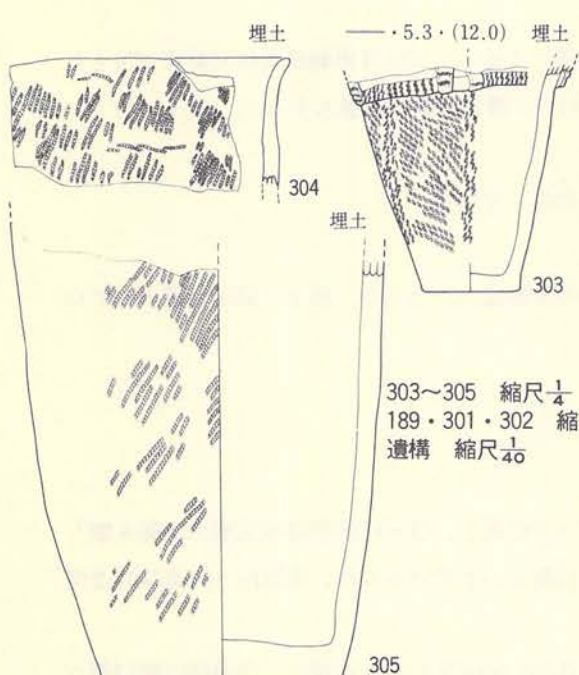
〔遺構〕 (第80図B、PL-26B)

この土坑はグリッドG-16とH-16にまたがって位置し、G-16住居跡南東部の床面を壊して掘り込んでいることから、G-16住居跡よりは新しい土坑であるが、住居跡との直接的な関係は不明である。

規模は開口部径約1.40m×1.35mで、底面は径約2.00m×1.95mを測り、平面形は開口部が円形であるが底面は楕円形を呈している。深さは最深部で約2.00mであるが、斜面下位の北東



A. F-48土坑



303~305 縮尺  $\frac{1}{4}$   
 189・301・302 縮尺  $\frac{1}{2}$   
 遺構 縮尺  $\frac{1}{40}$

F-48土坑土層注記

層位	色調	土性
1	10 YR 5/5 鈍い黄褐色	ソフトロームと八戸火山灰の混合砂質土。
2	10 YR 5/5~5/5 鈍い黄褐色	軟かく、若干汚れた八戸火山灰。
2'	10 YR 5/5~5/5 鈍い黄褐色	2層より汚れが強い。軟かい火山灰。
3	10 YR 5/5~5/5 黄褐色	2'層より一段汚れた火山灰。
4	10 YR 5/5 黄褐色	3層より鮮やかなソフトロームの砂質土。
5	10 YR 5/5 黒褐色	有機質が極めて多い、暗色の砂質土。

G-16住居跡内土坑-1土層注記

層位	色調	土性
1	10 YR 5/5 黒褐色砂質シルト	木炭片少量含む。
2	10 YR 5/5 暗褐色砂質シルト	1層に比べ、混合物があまりなく明色。
3	10 YR 5/5 黒褐色砂質シルト	1層に類似し、混合物はほとんどなし。
4	10 YR 5/5+10 YR 5/5 黒褐色+鈍い黄褐色	1層に類似。火山灰ブロックを含む。
5	10 YR 5/5 黒褐色砂質シルト	1層に類似。木炭片が右方に目立つ。
6	10 YR 5/5+5/5 黒褐色+褐色	砂質シルト。ソフトロームが多量混合。
7	10 YR 5/5 黒褐色砂質シルト	上方に微量のソフトロームが混合。
8	10 YR 5/5 黒褐色砂質シルト	7層にはほぼ同じ。
9	10 YR 5/5~5/5 黄褐色~褐色	ソフトロームブロック。
9'	10 YR 5/5 鈍い黄褐色	八戸火山灰ブロック。砂質シルト。

第80図 土坑



部では1.80m前後である。断面形は、底面の上位1.10mの壁面に径約1.17mの頸部をもち、壁面が底面に対して約70度内傾するフラスコ形で、頸部から上位の壁面は外湾気味に外傾している。埋土は黒褐色・暗褐色・黄褐色・にぶい黄橙色等を呈する砂質シルトと八戸浮石流凝灰岩やそれらの混合した土で構成され、9層に細分されている。その中の9層は八戸浮石流凝灰岩の堆積層である。埋土の堆積状況を観察すると、人為的に埋め戻された状況を示すものと考えられる。

#### 〔遺物〕

##### 土器 (第80図B、PL-64)

埋土内から出土している。303は土層図中のP<sub>2</sub>に相当するが頸部と口縁部に隆帯をもつが、口縁部を欠失している。体部には複節斜行縄文(RLR)と縦方向の綾絡文をもつ。305は土層図中のP<sub>1</sub>に相当するが、体部に縄文のみを施し口縁部を欠失した土器である。304は縄文のみを付した口縁部破片である。

##### 石器

出土していない。

#### 〔遺構の時期〕

303の存在により、本土坑は中期初葉に位置づけられるであろう。

### 45) G-16住居跡内土坑-2

#### 〔遺構〕 (第81図A、PL-26C)

この土坑はグリッドG-15・H-15にまたがって位置し、G-16住居跡の範囲内に在る。G-16住居跡との新旧関係は、本土坑の一部を壊してG-16住居跡の柱穴が掘られているので、本土坑の方が古い。

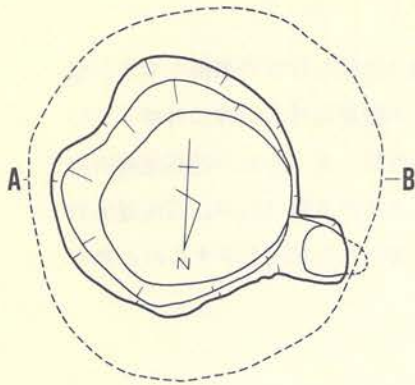
規模は開口部径約1.35m×1.15mで、底面は径約2.00m×1.70mを測り、平面形は開口部が楕円形であるが、底面は円形を呈している。深さはG-16住居跡の床面から約1.70mで底面はほぼ水平状態に近い。断面形は壁面が底面に対して約70度内傾するフラスコ形を示している。埋土は黒褐色・暗褐色・褐色・黄橙色等を呈するシルトや八戸火山灰・八戸浮石流凝灰岩とそれらの混合した土によって構成され、16層に細分されている。埋土の堆積状況を土層図で観察すると、人為的に埋め戻された状況を示すものと考えられる。

#### 〔遺物〕

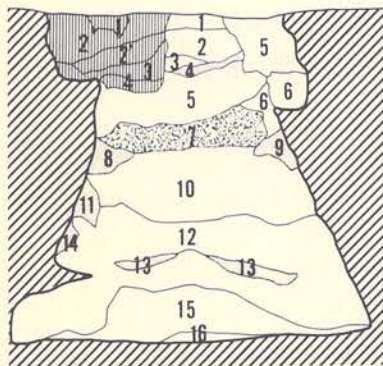
出土していない。

#### 〔遺構の時期〕

遺物が出土していないので断定できないが、G-16住居跡との重複による新旧関係から、前

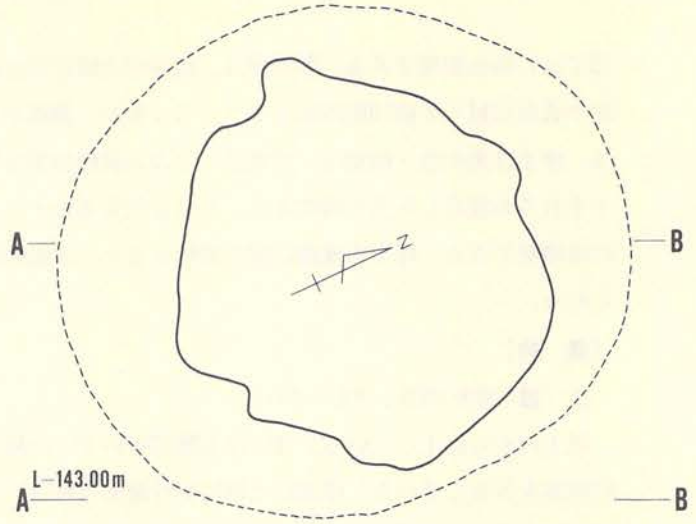


A L-141.85m

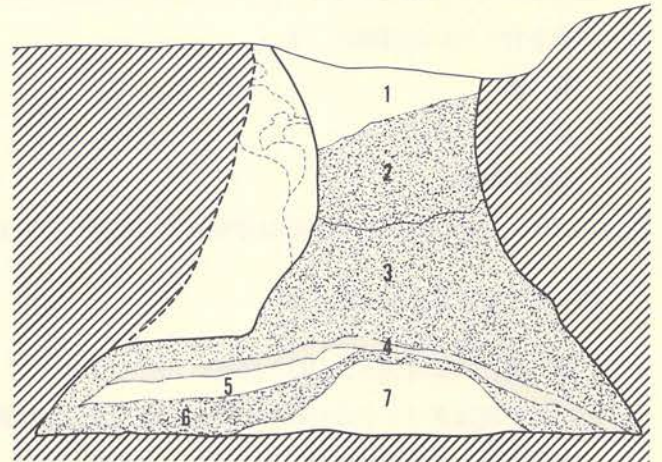


A. G-16土坑-2

遺構 縮尺  $\frac{1}{40}$



A L-143.00m



13.4 · (11.6) · (2.6) 埋土



306

縮尺  $\frac{1}{4}$

B. G-16土坑-3

G-16住居跡内土坑-2土層注記

層位	色調	土性
1	10 YR $\frac{3}{4}$ 暗褐色	硬く粗い砂質シルト。
2	10 YR $\frac{3}{4}$ 褐色	ソフトロームと暗色土の混合。
3	10 YR $\frac{2}{4}$ 黒褐色	粗い砂質シルト。
4	10 YR $\frac{3}{4}$ ~ $\frac{4}{4}$ 鈍い黄橙色	少し汚れたソフトローム。
5	10 YR $\frac{2}{4}$ 黒褐色	粗い砂質シルト。
6	10 YR $\frac{3}{4}$ 暗褐色	暗色土にソフトロームが混合。
7	10 YR $\frac{3}{4}$ ~ $\frac{2}{4}$ 黄褐色	ソフトローム下に暗色土の薄層が入っている。
8		ソフトローム・火山灰・暗色土のモザイク。
9	10 YR $\frac{3}{4}$ 黄褐色	ソフトロームが少し汚れたもの。
10	10 YR $\frac{3}{4}$ ~ $\frac{2}{4}$ 黒褐色	粗い砂質シルト。
11	10 YR $\frac{3}{4}$ 鈍い黄橙色	少し汚れた火山灰ブロック。
12	10 YR $\frac{4}{4}$ 褐色	粗い砂質シルト。10層に類似し、より明色。
13	10 YR $\frac{3}{4}$ 鈍い黄褐色	少し汚れた火山灰ブロック。
14	10 YR $\frac{3}{4}$ 鈍い黄褐色	11層と同じ。
15	10 YR $\frac{3}{4}$ ~ $\frac{2}{4}$ 鈍い黄橙色	かなり汚れた火山灰。
16	10 YR $\frac{3}{4}$ ~ $\frac{2}{4}$ 鈍い黄褐色	僅かに汚れた火山灰。

G-16住居跡内土坑-3土層注記

層位	色調	土性
1	7.5YR $\frac{2}{4}$ ~ $\frac{3}{4}$ 明褐色~鈍い橙色	汚れたシラスに浮石質砂岩が混合。
2	7.5YR $\frac{3}{4}$ ~ $\frac{2}{4}$ 明褐色	汚れたシラスに褐色の小粒浮石混入。
3	7.5YR $\frac{3}{4}$ 明褐色	シラス。
4	7.5YR $\frac{3}{4}$ ~ $\frac{2}{4}$ 明褐色	ソフトローム層。
5	7.5YR $\frac{2}{4}$ 極暗褐色	炭化物を含む浮石質砂層。
6	7.5YR $\frac{4}{4}$ 灰褐色	シラスと暗褐色浮石質砂の混合層。
7	7.5YR $\frac{3}{4}$ 黒褐色	浮石質砂層。シルト混入。



期末葉から中期初葉に位置づけられる土坑と考える。

#### 46) G-16住居跡内土坑-3

〔遺構〕 (第81図B、PL-27A)

この土坑はグリッドG-15に位置し、G-16住居跡の範囲内にある。G-16住居跡との新旧関係を明確に断定する資料は得られていないが、本土坑の埋土1層がG-16住居跡の床面に貼りついている土と近似し、表面が固いことから考えると、G-16住居跡より古い可能性が強い。なお、掲載した図面の土層図と平面図で規模に差があるのは、土層図を作成後、全掘途中で壁が崩落したためである。したがって、開口部径は土層図の方が実際の規模に近い。

規模は開口部径約1.15mで、底面は径約3.10m×2.65mを測り、平面形は開口部・底面ともに楕円形を呈している。深さはG-16住居跡の床面から約2.10mで、底面はほぼ水平状態に近い。断面形は、底面から約1.50m上位の壁面に径約85cmの頸部をもち、壁面が底面に対して約57度内傾するフラスコ形を示している。頸部から上位の壁面は開口部に向かって外傾している。埋土は黒褐色・極暗褐色・明褐色・褐灰色等を呈するシルトや八戸火山灰・八戸浮石流凝灰岩とそれらの混合した土で構成され、7層に細分されている。その中の2・3・6層は八戸浮石流凝灰岩の堆積層であり、4層は八戸火山灰の層である。このような埋土の堆積状況は、この土坑は人為的に埋め戻されたことを表すものであろう。

〔遺物〕

土器 (第81図B)

埋土内から出土したものである。306は小型の皿形を示す器形と考えられる。成形・調整ともに粗雑で、器表に棒状工具の先端を利用した横方向の沈線が入っている。

石器

出土していない。

〔遺構の時期〕

出土した土器から考えると、中期初葉頃に位置づけられるであろう。

#### 47) G-23土坑

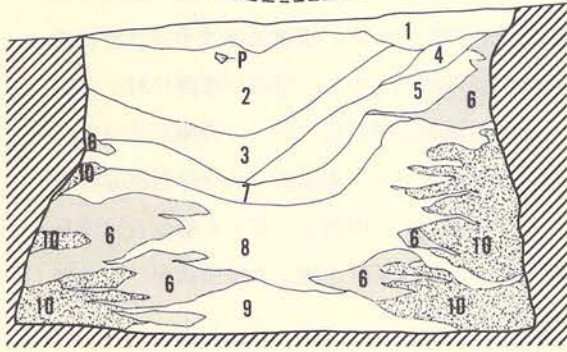
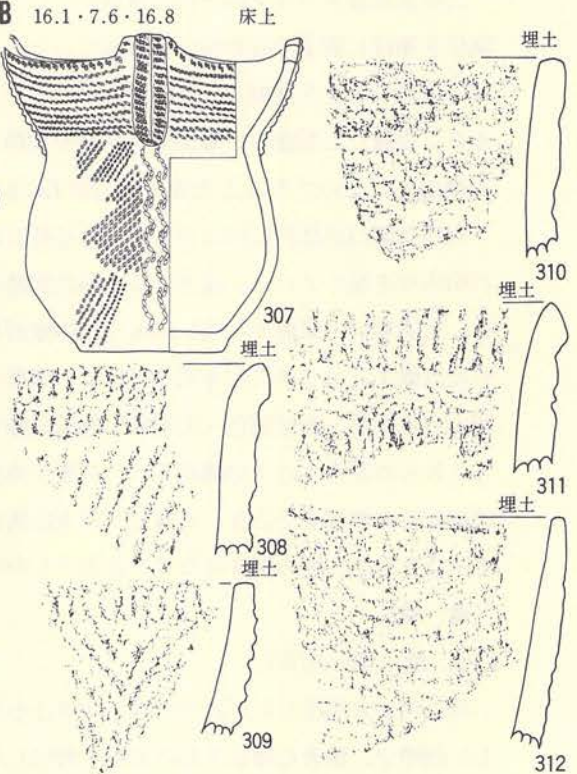
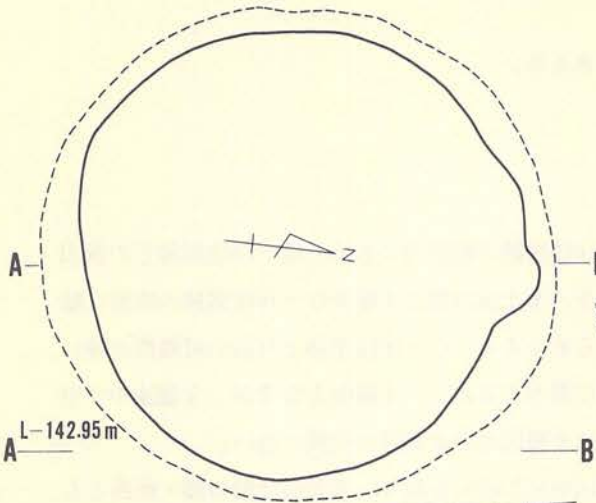
〔遺構〕 (第82図、PL-27B)

この土坑はF-23・G-23にまたがって位置し、他遺構との重複はない。

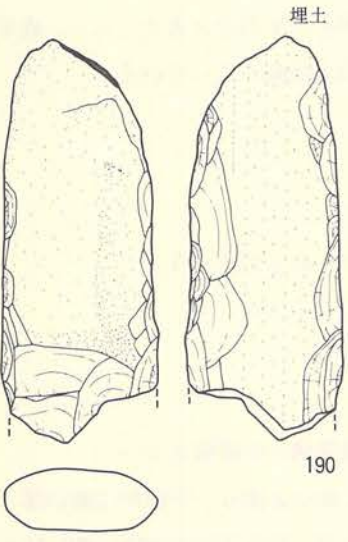
規模は開口部径約2.35m×2.30mで、底面は径約2.30mを測り、平面形は開口部・底面ともに円形を呈している。深さは最深部で約1.75mを測るが、斜面下位の南側は約1.55mである。底面は南壁際が若干高いものの全体的にみると水平状態に近い。断面形は、底面の約1.20m上

G-23土坑土層注記

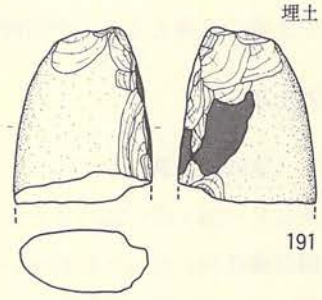
層位	色調	土性
1	7.5YR 2/5 黒褐色	砂質シルト。攪乱層。
2	7.5YR 3/5 暗褐色	砂質シルト。浮石混入。
3	7.5YR 2/5 極暗褐色	砂層。浮石混入。
4	7.5YR 2/5 黒褐色	砂層。浮石混入。
5	7.5YR 2/5 黒褐色	質的には3層と同様。
6	7.5YR 6/5 橙色	風化シラス。
7	7.5YR 2/5 黒褐色	4層と同様。
8	7.5YR 3/5 暗褐色	砂質シルト。
9	7.5YR 2/5 暗褐色	砂質。
10	灰白色	白砂。



遺構 縮尺  $\frac{1}{40}$



190



埋土

191

307 縮尺  $\frac{1}{4}$   
308~312 縮尺  $\frac{1}{2}$

190・191 縮尺  $\frac{1}{3}$

第82図 G-23土坑



位の壁面に径約2.15mの頸部をもち、壁面が底面に対して約75度内傾するフラスコ形を示している。頸部から上位の壁面は開口部に向って外傾している。埋土は黒褐色・極暗褐色・暗褐色・橙色等を呈する砂質シルトや砂・八戸火山灰・八戸浮石流凝灰岩等で構成され、10層に細分されている。中でも6層は八戸火山灰であり、10層は八戸浮石流凝灰岩の堆積層である。この土坑は自然堆積によって埋没したものと推定される。

#### 〔遺物〕

##### 土器 (第82図、PL-64)

307は底面上15cm位から、その他はいずれも埋土内から散発的に出土した。307は完形土器で、やや小型である。口縁は波状を示し、突起部には頸部に垂下する2条の隆帯があり、隆帯上には原体の圧痕文をもつ。口縁部には横位の原体圧痕文が付され、口縁端部には縦位の原体圧痕文をもつ。体部には複節斜行縄文と縦方向の綾絡文が2条付されている。308～311は307とほぼ同様な特徴をもつ土器片である。312は口縁部破片であるが、太く不明瞭な縄文のみを付している。

##### 石器 (第82図、PL-127E)

3点出土している。いずれも半円状扁平打製石器で、191には擦面ももっている。

#### 〔遺構の時期〕

出土土器の中の307や、他の土器もほぼ307と同様であることから、本土坑は中期初葉に位置づけられるであろう。

### 48) G-24土坑-1

#### 〔遺構〕 (第83図A、PL-27D)

この土坑はグリッドG-24に位置し、G-24土坑-2と重複している。新旧関係では本土坑の方が新しい。

規模は開口部径約2.45m×2.20mで、底面は径約2.60m×2.55mを測り、平面形は開口部・底面ともに楕円形を呈している。深さは最深部で1.90mを測るが、斜面下位の南側では約1.65mと若干浅い。底面には凹凸もほとんどなくほぼ水平状態に近い。なお、G-24土坑-2との重複部分には30cm×30cm位でやや台形気味を示す扁平な礫(石皿)が壁際に立ててあり、G-24土坑-2から土砂が流入するのを防いでいた。断面形は壁面が底面に対して約85度内傾するフラスコ形を呈する。埋土は黒色・黒褐色・極暗褐色・暗褐色・明褐色・橙色等を呈するシルトと砂質シルト、そして八戸浮石流凝灰岩やそれらの混合した土で構成され、7層に細分されている。その中でも4層は八戸浮石流凝灰岩の堆積層であるが、6層以下の壁際に堆積する4層と、6層より上位の中央に堆積する4層では堆積状況に違いがある。すなわち、6層以下の

4層は壁の崩壊土の堆積であるし、6層より上位の4層は、6層以下が埋没した時点で他から投棄された土である。これから考えるが、この土坑は最終的には人為的に埋め戻された土坑といえるだろう。

〔遺物〕

土器

出土していない。

石器（第83図A、PL-127F）

1点(192)出土しているが、重複部分の穴を塞いでいたものである。台形を示す石皿である。

〔遺構の時期〕

縄文時代の土坑と考えられるが、土器が出土していないので時期を特定できない。

49) G-24土坑-2

〔遺構〕（第83図B）

この土坑はグリッドG-23・G-24にまたがって位置し、G-24土坑-1と重複している。新旧関係は本土坑の方が古い。

規模は開口部径約1.10m×1.05mで、底面は径約2.50m×2.40mを測り、平面形は開口部・底面ともに円形を呈する。深さは最深部で約1.60mを測る。底面は中央付近が壁際より低くなり、さらに底面中央に1基（P<sub>1</sub>）と西壁際では検出されなかったが、他の北・東・南の各壁際で4基（P<sub>2</sub>～P<sub>5</sub>）の小土坑が検出されている。また、P<sub>1</sub>とP<sub>5</sub>の間には若干蛇行する小溝が掘られている。小土坑の規模はP<sub>1</sub>（約40cm×40cm・深さ10cm）、P<sub>2</sub>（約30cm×10cm・深さ10cm）、P<sub>3</sub>（約30cm×10cm・深さ5cm）、P<sub>4</sub>（約15cm×10cm・深さ5cm）、P<sub>5</sub>（約30cm×10cm・深さ10cm）であり、溝は巾約5cm～10cmで深さ約5cmを測る。なお、東側の壁面は間口1.10cm・奥行50cm・高さ50cm位の範囲が横穴状に大きく抉られている。底面も約5cm位低くなっている。断面形は底面から約90cm上位の壁面に径約1.10mの頸部をもち、壁面が底面に対して約50度内傾するフラスコ形を示している。埋土は黒褐色・暗褐色・褐色・橙色・灰白色等を呈する砂質シルト・八戸火山灰・八戸浮石流凝灰岩やそれらの混合した土で構成されている。堆積状況からみて、この土坑は人為的に埋め戻されたものと考えられる。

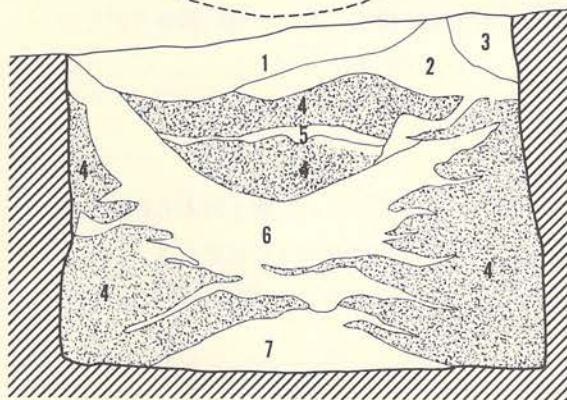
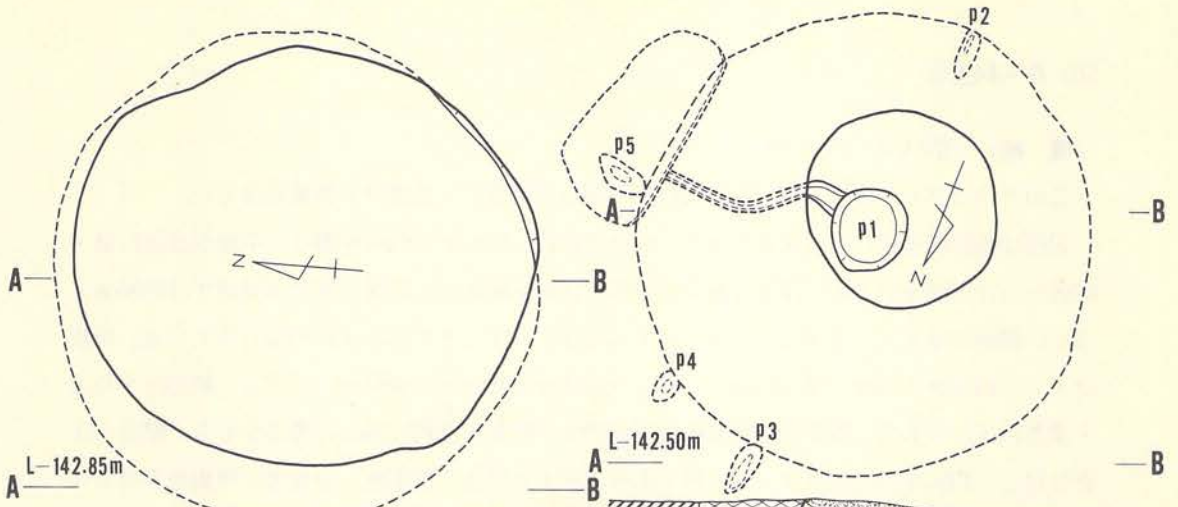
〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

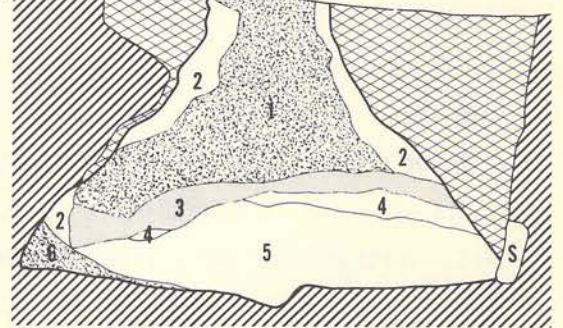
縄文時代に属すると思うが、土器が出土していないので時期を特定できない。



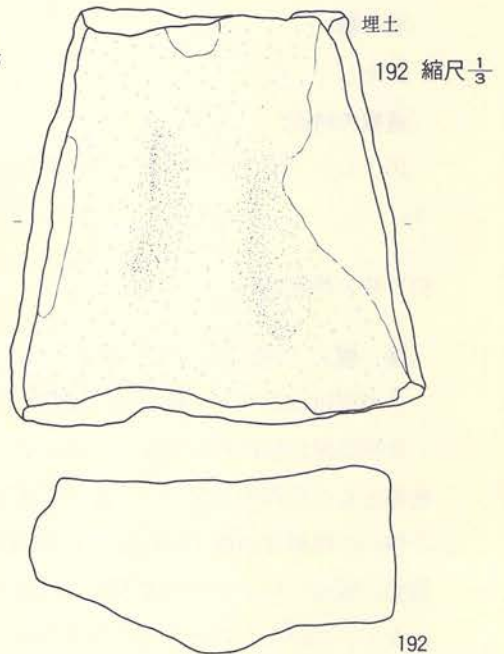


A. G-24土坑-1

遺構 縮尺  $\frac{1}{40}$



C. G-24土坑-2



B. G-24土坑-1 遺物

G-24土坑-1 土層注記

層位	色調	土性
1	7.5YR 3/5 黒褐色	砂質シルト。浮石混入。
2	7.5YR 3/5 明褐色	シルト質。汚れた風化シラス。
3	7.5YR 5/5 橙色	風化シラス。
4	7.5YR 3/5 明褐灰色	シラス。
5	7.5YR 3/5 黒色	砂層。
6	7.5YR 3/5 暗褐色	砂質シルト。浮石は多く、炭化物は少量。
7	7.5YR 3/5 極暗褐色	砂質シルト。浮石多し。

G-24土坑-2 土層注記

層位	色調	土性
1	7.5YR 3/5 灰白色	シラス。
2	7.5YR 3/5 褐色	汚れたシラス。炭化物混入。
3	7.5YR 5/5 橙色	ソフトロームに近い。
4	7.5YR 3/5 黒褐色	浮石質砂質シルト。上面は5/5黒色。
5	7.5YR 3/5 暗褐色	シラスと黒色土の混合した浮石質砂層。
6	7.5YR 3/5 灰白色	シラス。若干黒色土混入。

## 50) G - 44土坑

〔遺構〕（第84図、PL-28A）

この土坑はグリッドG-44とG-45にまたがって位置し、他遺構との重複はない。

規模は開口部径約1.35m×1.35mで、底面は径約1.85m×1.65mを測り、平面形は開口部・底面ともに円形を呈する。深さは最深部で約1.15mを測るが、斜面下位の南東側では約90cmと浅い。底面はほとんど水平に近いが、東半にはP<sub>1</sub>～P<sub>3</sub>までの小土坑が掘られている。規模はP<sub>1</sub>（約70cm×55cm・深さ15cm）、P<sub>2</sub>（約45cm×40cm・深さ61cm）、P<sub>3</sub>（約35cm×35cm・深さ18cm）である。断面形は底面の上位約55cmの壁面に径約1.35cmの頸部をもち、壁面が底面に対して約80度内傾するフラスコ形である。埋土は黒色・黒褐色・暗褐色・明褐色等のシルトと八戸火山灰やシルトと八戸浮石流凝灰岩の混合した土等で構成され、9層に細分されている。この土坑の埋土堆積状況は自然堆積で埋没したことを表すものであろう。

〔遺物〕

土器（第84図、PL-65）

313・314は副穴P<sub>3</sub>の底面から出土しているが、他のものはいずれも埋土内からの出土である。313は小波状の口縁で、口縁部には磨消縄文手法による三叉文が付されている。314は器形が313より一回り大きい口縁部文様をもたないものである。313も314と同じである。316・317は沈線で区画した後磨消したものである。

石器

出土していない。

〔遺構の時期〕

出土した土器の中で313・314の存在により、この土坑は晩期初葉に位置づけられるであろう。

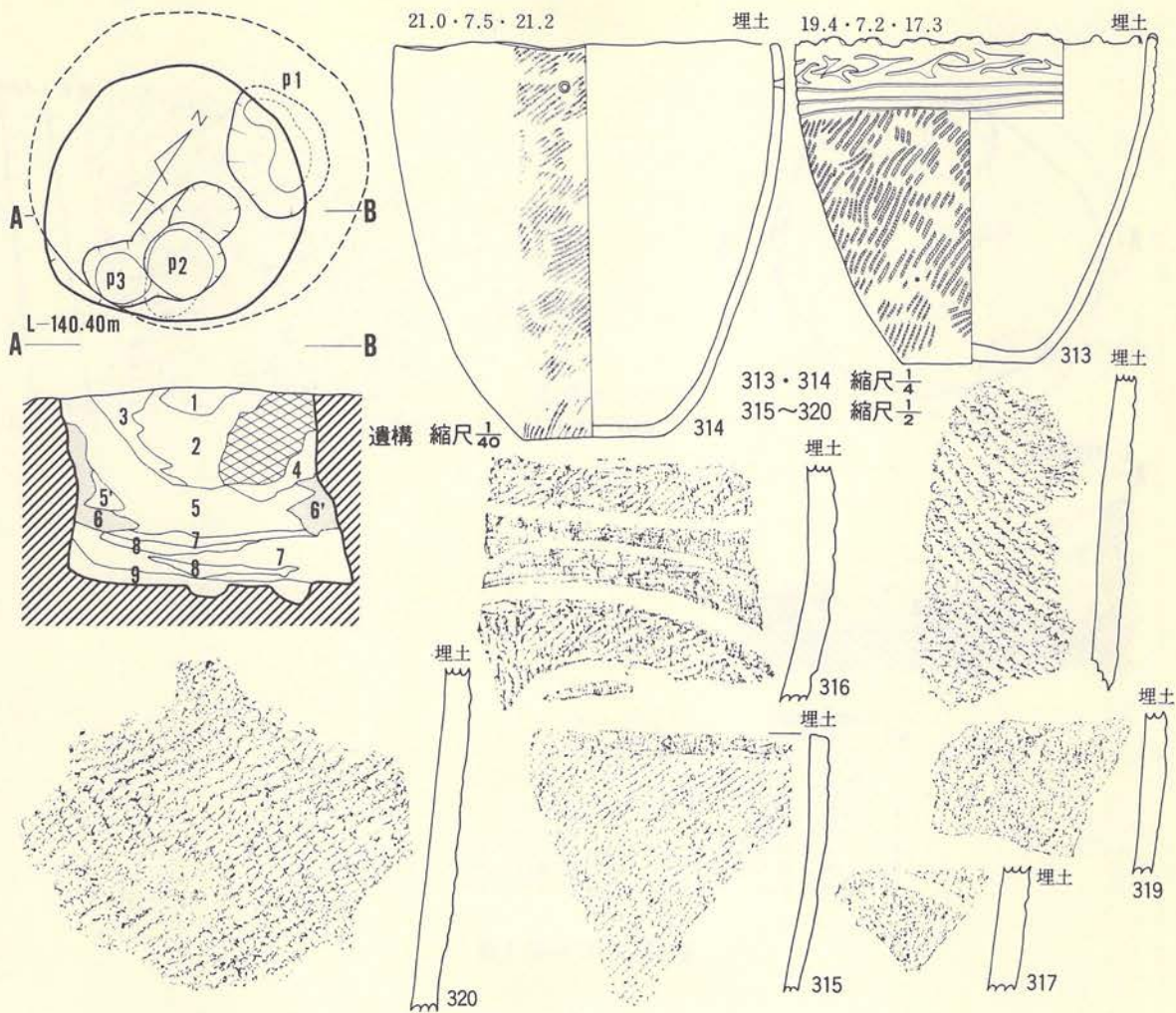
## 51) G - 45土坑

〔遺構〕（第85図、PL-28B）

この土坑はグリッドG-45に位置し、他遺構との重複はない。

規模は開口部径約1.75m×1.55mで、底面は径約1.85m×1.75mを測り、平面形は開口部・底面ともに楕円形を呈する。深さは最深部では約62.5cmを測るが、斜面下位の南側では約20cmと浅い。底面は斜面下位に向って軽い傾斜を示しているが、凹凸もなく平坦である。断面形は壁面が底面に対して約85度内傾するフラスコ形を示しているが、壁面が直線的に内傾するのではなく、内傾したのが上位で外弯気味に外傾して開口部に続く。なお、この土坑の底面には二



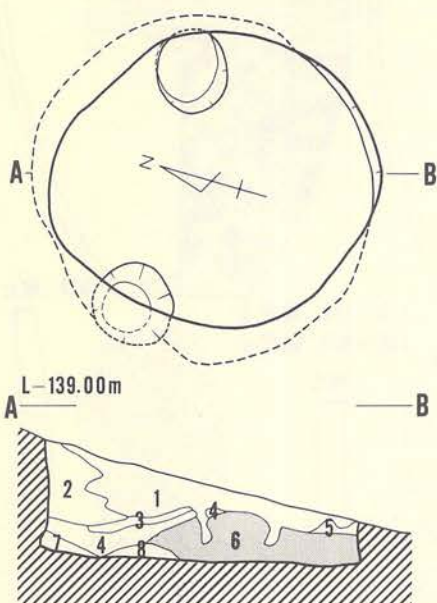


G-44土坑土層注記

層位	色調	土性
1	10 YR 3/2 暗褐色	少し硬めの砂質シルト。
2	10 YR 3/2 + 3/2 暗褐色 + 黄褐色	1層の土と八戸火山灰との混合。
3	10 YR 3/2 黒色	硬い砂質シルト。小粒の浮石多数。
4	10 YR 3/2 + 3/2 暗褐色 + 黄褐色	2層に類似。より軟かい。攪乱の一部。
5	10 YR 3/2 ~ 3/2 黒褐色	硬い砂質シルト。ソフトローム片混入。
5'	10 YR 3/2 ~ 3/2 黒褐色	ソフトロームが多く、右下り縞状に入る。
6	7.5YR 3/2 ~ 10YR 3/2 + 10YR 3/2 ~ 10YR 3/2 明褐色 ~ 黄褐色 + 鈍い黄橙色 ~ 明黄褐色	ソフトロームと八戸火山灰上層が壁からまとまってすべり落ちたような状態のもの。
6'	〃	ソフトローム多し。
7	10 YR 3/2 鈍い黄褐色	少し硬めの砂質シルト。
8	10 YR 3/2 黒褐色	硬い砂質シルト。
9	10 YR 3/2 暗褐色	硬めの砂質シルト。火山灰ブロック混入。

第84図 G-44土坑

つの小土坑がある。規模は P<sub>1</sub> (約43cm×41cm・深さ29cm)、P<sub>2</sub> (約45cm×38cm・深さ28cm) である。埋土は黒色・黒褐色・暗褐色・黄褐色・にぶい黄橙色等を示すシルトや砂質シルト、そして、八戸火山灰とそれらの混合した土で構成され、8層に細分されている。6層は八戸火山灰の堆積層であるが、黒色シルトが若干混入し汚れている。この土坑の埋土堆積状況は、人



321 縮尺  $\frac{1}{2}$   
遺構 縮尺  $\frac{1}{40}$



G-45土坑土層注記

層位	色調	土性
1	10 YR 5/6 黒褐色	少し硬い砂質シルト。
2	10 YR 5/6 黄褐色	ソフトローム。軟かいシルト。
3	7.5YR 5/6 鈍い橙色	八戸火山灰。
4	7.5YR 5/6 暗褐色	硬い砂質シルト。有機質土にソフトローム・火山灰上部土が混入。
5	10 YR 5/6 黄褐色	ソフトローム。軟かいシルト。
6	10 YR 5/6 鈍い黄橙色	八戸火山灰上部土。一部に暗色土混入。
7	10 YR 5/6 鈍い黄橙色	軟かい。八戸火山灰上部土の崩落(?)。
8	10 YR 5/6 黒色	砂質シルト。ゴロタを若干含む黒色土。

第85図 G-45土坑

為的に埋め戻された可能性が大きい。

〔遺物〕

土器 (第85図、PL-64)

埋土内から出土している。321は器表に撚糸文の付され、胎土に繊維の混入したものである。

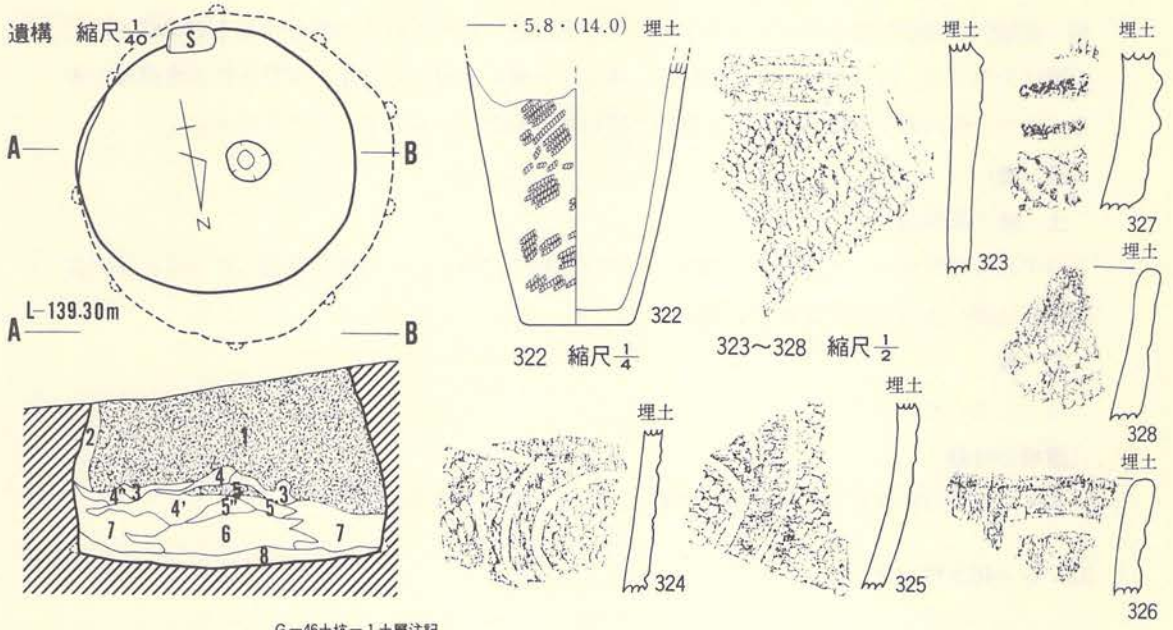
石器

出土していない。

〔遺構の時期〕

出土した土器の胎土に繊維が入っていることから、前期に属する土器とはおもうが、1片だけの出土であるので時期を特定できない。もし、直接伴う土器とすれば、本土坑は前期ということになる。





G-46土坑-1土層注記

層位	色調	土性
1	10 YR 7.5~7.0 鈍い黄橙色	砂質シルト。八戸火山灰にソフトローム混入。
2	10 YR 7.5 鈍い黄橙色	砂質シルト。若干汚れた八戸火山灰上層土。
3	10 YR 7.5 鈍い黄褐色	砂質シルト。黒色土混入。
4	10 YR 7.5 鈍い黄褐色	砂質シルト。1層の土にかなり汚れ入る。
4'	10 YR 7.5 鈍い黄褐色	砂質シルト。4層よりやや暗色。
4''	10 YR 7.5~7.0 鈍い黄褐色~褐色	4層の土に多量のソフトローム混入。
5	10 YR 7.5 鈍い黄褐色	砂質シルト。火山灰ブロック。
5'	10 YR 7.5+7.0 暗褐色+鈍い黄褐色	砂質シルト。4層の土に火山灰少量混入。
5''	10 YR 7.5+7.0 暗褐色+鈍い黄褐色	砂質シルト。4層の土に火山灰半量位混入。
6	10 YR 7.5 黒褐色	砂質シルト。火山灰ブロック塊状に入る。
7	10 YR 7.5 黄褐色	砂質シルト。4層の土、塊状に入る。
8	10 YR 7.5~7.0 鈍い黄褐色	砂質シルト。浮石多く、4層の土に類似。

第86図 G-46土坑-1

52) G-46土坑-1

〔遺構〕 (第86図、PL-28C)

この土坑はグリッドG-46・G-47にまたがって位置し、G-46土坑-2と重複している。新旧関係は本土坑の方が新しい。

規模は開口部径約1.45m×1.40mで、底面は径約1.75m×1.70mを測り、平面形は開口部・底面ともに円形を呈している。深さは最深部で1.10mを測るが、斜面下位の南東側では約90cmと浅くなる。底面は壁際より中央部が若干低くなっており、比高は10cm位を測る。しかし、凹凸もなく滑らかな底面を示している。断面形は壁面が底面に対して約81度内傾するフラスコ形である。また、底面寄りの壁面には半円形を示す窪みが9カ所付されている。底面まで掘りこむ状況ではないが、底面に副穴をもつものと同じ性格と考えられる。窪みは径約5cm~10cm位で、間隔は50cm~70cm位を測り一様ではないが、50cm台がもっとも多い。埋土は黒褐色・暗褐

色・黄褐色・黄橙色等を呈するシルトと八戸浮石流凝灰岩やそれらの混合した土で構成され、8層に大別され、さらに細分されている。中でも1層と5層は八戸浮石流凝灰岩の堆積層である。この土坑の埋土堆積状況は、人為的に埋め戻されたことを表すものであろう。

〔遺物〕

土器 (第86図)

いずれも埋土内から出土した。323～326は沈線で区画し、その中を磨消している。327は隆帯と沈線によって施文されている。

石器

出土していない。

〔遺構の時期〕

323～326の存在から、中期中葉に属する土坑と考えられる。

53) G-46土坑-2

〔遺構〕 (第87図A、PL-27C)

この土坑はグリッドG-46に位置し、G-46土坑-1・G-46土坑-3と重複している。新旧関係は、重複遺構の中では本土坑がもっとも古い。

検出された部分の規模は開口部径約1.00mで、底面径約1.10mを測り、重複部分は不明であるが、検出された部分から考えられる平面形は円形を示すものと推定される。深さは最深部で約36cmを測るが、斜面下位の南側は約15cmと浅くなる。底面には凹凸もなくほぼ水平である。断面形は壁面が底面に対して約65度内傾するフラスコ形であるが、壁面が直線的ではなく、若干上方に張り出す状況を示し、開口部付近で軽く外弯している。埋土は暗褐色や黄橙色を示すシルトやシルトと八戸火山灰の混合した土等で構成され、3層に細分されている。その中の3層は八戸火山灰層である。本土坑の埋土堆積状況は人為的に埋め戻された状況を示すものと考えられる。

〔遺物〕

土器 (第87図A、PL-65)

3点とも埋土内から出土している。329・330は口縁部破片であるが、縄文のみが施文された土器である。323は撚糸文をもつ体部破片である。

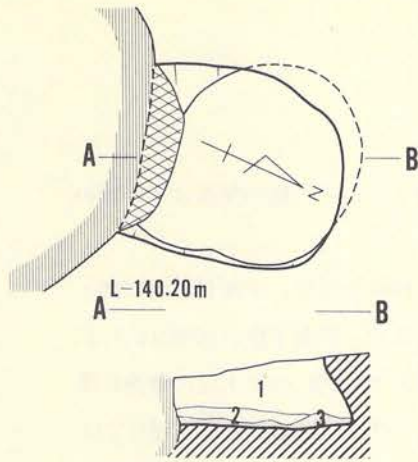
石器

出土していない。

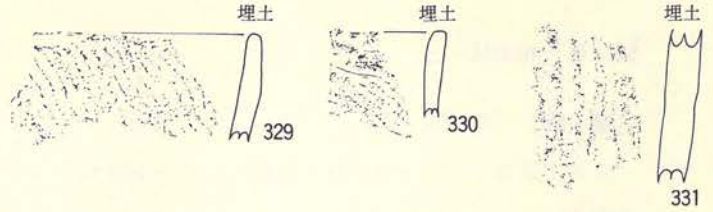
〔遺構の時期〕

縄文時代の土坑とは思いますが、時期を特定できない。





遺構 縮尺  $\frac{1}{40}$



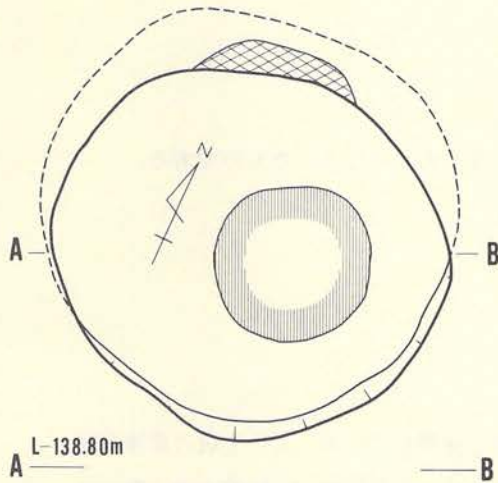
G-46土坑-2土層注記

層位	色調	土性
1	10 YR 3/5 暗褐色	砂質シルト。浮石多量・木炭粒僅少混入。
2	10 YR 3/5 暗褐色	砂質シルト。ソフトローム。
3	10 YR 5/5 鈍い黄橙色	砂質シルト。八戸火山灰そのものに近い。

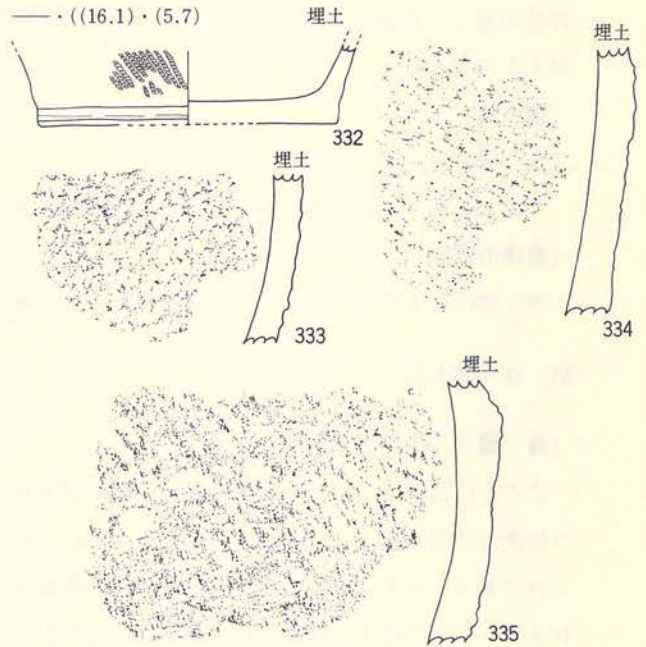
332 縮尺  $\frac{1}{4}$

329~331・333~335 縮尺  $\frac{1}{2}$

A. G-46土坑-2



B. G-46土坑-3



G-46土坑-3土層注記

層位	色調	土性
11	10 YR 3/5 黒色~暗褐色	少し軟かい砂質土。濃淡の縞有り。
12	10 YR 5/5 黄褐色	軟かいソフトローム。
13	10 YR 5/5 鈍い黄橙色	火山灰土層の土。
14	10 YR 5/5 鈍い黄橙色	硬い火山灰。
15	10 YR 3/5 暗褐色	火山灰ソフトロームの各ブロック混入。
16	10 YR 3/5 暗褐色	15層に類似。混入物なし。
17	10 YR 3/5 鈍い黄橙色	硬い汚れた火山灰。浮石混入。
18	10 YR 5/5 鈍い黄橙色	軟かい火山灰。

#### 54) G-46土坑-3

##### [遺構] (第87図B)

この土坑はグリッドG-46に位置し、G-46土坑-4と重複している。新旧関係は本土坑の方が古い。

規模は開口部径約2.10m×1.90mで、底面は径約2.20m×2.10mを測り、平面形は開口部・底面ともに楕円形を呈している。深さは最深部で約1.72mであるが、斜面下位の南側は約1.25mと浅い。底面には凹凸もなくほぼ水平である。断面形は、底面から約1.00m上位の壁面に径約2.00mの頸部をもち、壁面が底面に対して約87度内傾するフラスコ形に近い形態を示している。埋土は黒色・暗褐色・にぶい黄橙色を呈するシルトと八戸浮石流凝灰岩やそれらの混合した土で構成され、8層に細分されている。その中の4層は八戸浮石流凝灰岩の堆積であり、その他の層にも多量に混入している。この土坑の埋土堆積状況は、人為的に埋め戻された状況を示すものであろう。

##### [遺物]

##### 土器 (第87図B、PL-65)

いずれも器表に縄文のみが付された体部破片である。埋土内から出土したものである。

##### [遺構の時期]

縄文時代の土坑とはおもうが、時期の特定はできない。

#### 55) G-46土坑-4

##### [遺構] (第88図A、PL-29A)

この土坑はグリッドG-46に位置し、G-46土坑-3と重複している。この土坑の重複状況は特異な状況を示し、G-46土坑-3が完全に埋没(人為的)した後に、その埋土内に掘りこまれており、本土坑全体がG-46土坑-3の範囲内に入っている。なお、本土坑の存在はG-46土坑-3の半截中に確認されたために、南東部のほぼ $\frac{1}{2}$ が掘り過ぎであり、その部分は不明である。

規模は開口部径約0.82mで、底面は径約1.70mを測る。平面形は掘り過ぎ部分が不明であるが、検出された部分から考えると円形を呈するものと推定される。深さは最深部で約1.30mを測り、底面は南西部に向って若干低くなっている。断面形は東壁が不整形であるが、西壁が底面に対して約60度内傾するフラスコ形を示している。埋土は黒褐色のシルトと黄褐色系の八戸火山灰や八戸浮石流凝灰岩等で構成され、5層に細分されている。その中の1層は八戸浮石流凝灰岩であるし、4層は八戸火山灰の堆積層である。その他の土層も多くの八戸火山灰や八戸



浮石流凝灰岩を混入している。この土坑の埋土堆積状況は、人為的に埋め戻されたことを表すものであろう。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

縄文時代の土坑とは思いますが、時期を特定できない。

56) G-47土坑-1

〔遺構〕 (第88図B、PL-29B)

この土坑はグリッドG-47に位置し、G-47土坑-2と重複している。新旧関係は本土坑の方が新しい。

規模は開口部径約1.80m×1.70mで、底面は径約1.85m×1.70mを測り、平面形は開口部・底面ともに楕円形を呈している。深さは最深部で約60cmであるが、斜面下位の南側では約30cmと浅くなっている。底面には凹凸がほとんどなく、水平状態を示している。また、東側の底面には南北に長軸をもつ楕円形の副穴が掘られている。副穴の規模は径約53cm×30cm・深さ約20cmである。断面形は、壁面が底面に対して約83度内傾するフラスコ形であるが、壁面が底面に対して大きく内傾した後、外弯気味に外傾して開口部に続いている。埋土は黒褐色や褐色のシルトが主体で構成され、3層に細分されている。全体的には火山灰や浮石が多量に混入している。この土坑は、おそらく人為的に埋め戻されたものとおもわれる。

〔遺物〕

土器 (第88図B、PL-66)

3点(336~338)とも埋土内から出土している。いずれも器面に縄文のみが付された体部破片である。胎土に繊維の混入はない。

石器

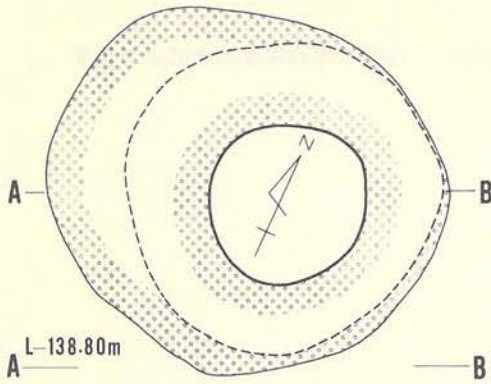
出土していない。

〔遺構の時期〕

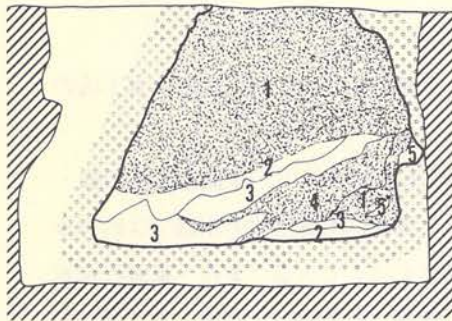
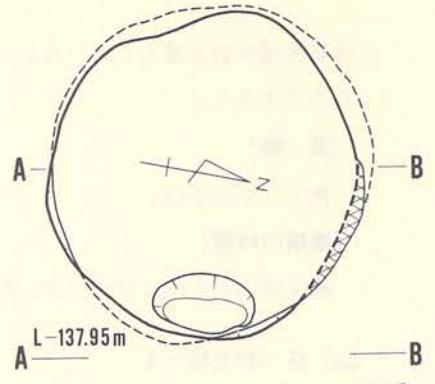
縄文時代の土坑とは思いますが、時期の特定はできない。しかし、出土した土器の胎土に繊維の混入がない所から、中期以降の土器とおもわれ、これから考えると、本土坑は中期以降に属するであろう。

57) G-47土坑-2

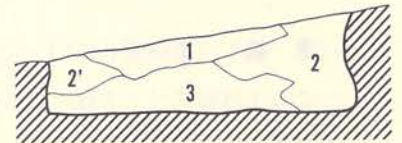
〔遺構〕 (第89図、PL-29C)



遺構 縮尺  $\frac{1}{40}$



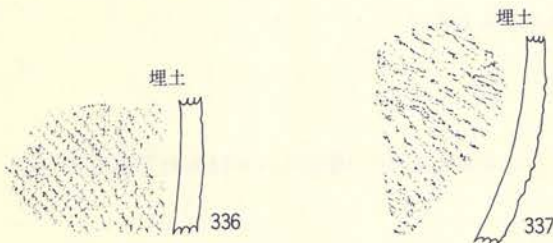
A. G-46土坑-4



G-46土坑-4 土層注記

層位	色調	土性
1	10 YR 5/6 鈍い黄褐色	八戸火山灰。織状に堆積順序を示している。
2	10 YR 5/6 黄褐色	ソフトローム。軟かい。
3	10 YR 3/6 黒褐色	砂質土。火山灰がかすみ状に浸入。
4	10 YR 5/6 明黄褐色～黄褐色	ソフトロームに、3層の砂質土織状に混入。
5	10 YR 5/6 鈍い黄褐色	軟かい砂質シルト。

336~338 縮尺  $\frac{1}{2}$



G-47土坑-1 土層注記

層位	色調	土性
1	10 YR 3/6 黒褐色	砂質シルト。木炭粒・浮石混入。
2	10 YR 5/6 褐色	ソフトロームと1、3層の暗色土の混合土。
2'	10 YR 3/6 黒褐色～暗褐色	砂質土。ソフトロームが少ない。
3	10 YR 3/6 黒褐	砂質土。1層と同じ。

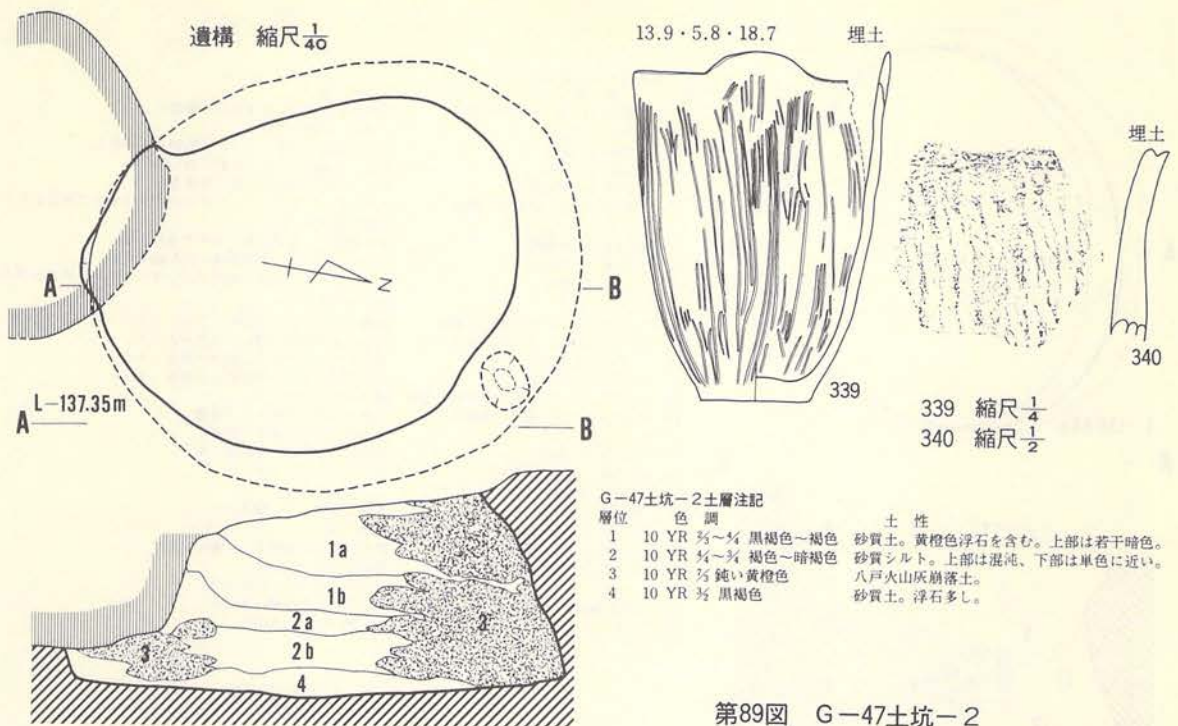
B. G-47土坑-1

### 第88図 土坑

この土坑はグリッドG-47に位置し、G-47土坑-1と重複している。新旧関係では本土坑の方が古い。

規模は開口部径約2.30m×1.75mで、底面は径約2.65m×2.20mを測り、平面形は開口部・底面ともに楕円形を呈している。深さは最深部で約1.00mである。底面は中央部から壁際に向かって次第に高くなっているが、凹凸はほとんどない。断面形は壁面が底面に対して約65度内傾





第89図 G-47土坑-2

するフラスコ形であるが、壁面が直線的ではなく外方に若干張り出すような形態を示している。埋土は黒褐色・褐色・にぶい黄橙色等を呈するシルトと壁の崩落によって堆積した八戸浮石流凝灰岩とから構成され、4層に細分されている。中でも、3層は八戸浮石流凝灰岩の堆積層である。本土坑は自然堆積によって埋没したものと考えられる。

[遺物]

土器 (第89図、PL-66)

いずれも埋土内からの出土である。339は器表全面に縦位の櫛描文をもつ。340は縦位の撚糸文を付す。胎土への繊維混入はない。

石器

出土していない。

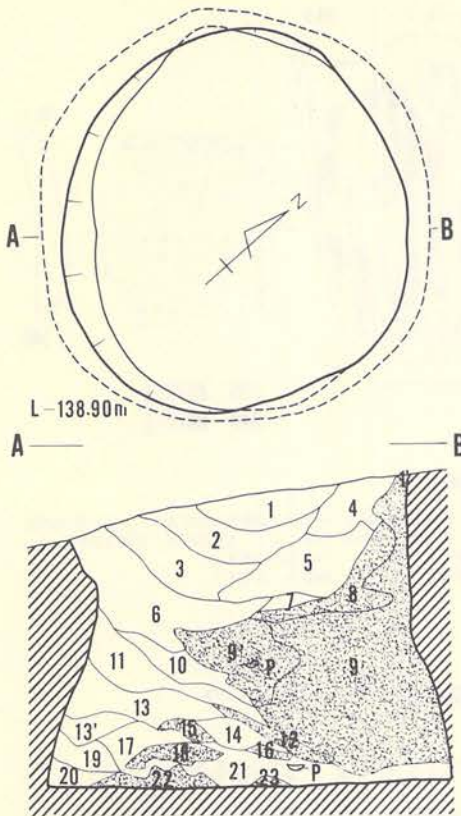
[遺構の時期]

339の存在から中期末葉に属する土坑と考えられる。

58) G-47土坑-3

[遺構] (第90図、PL-30A)

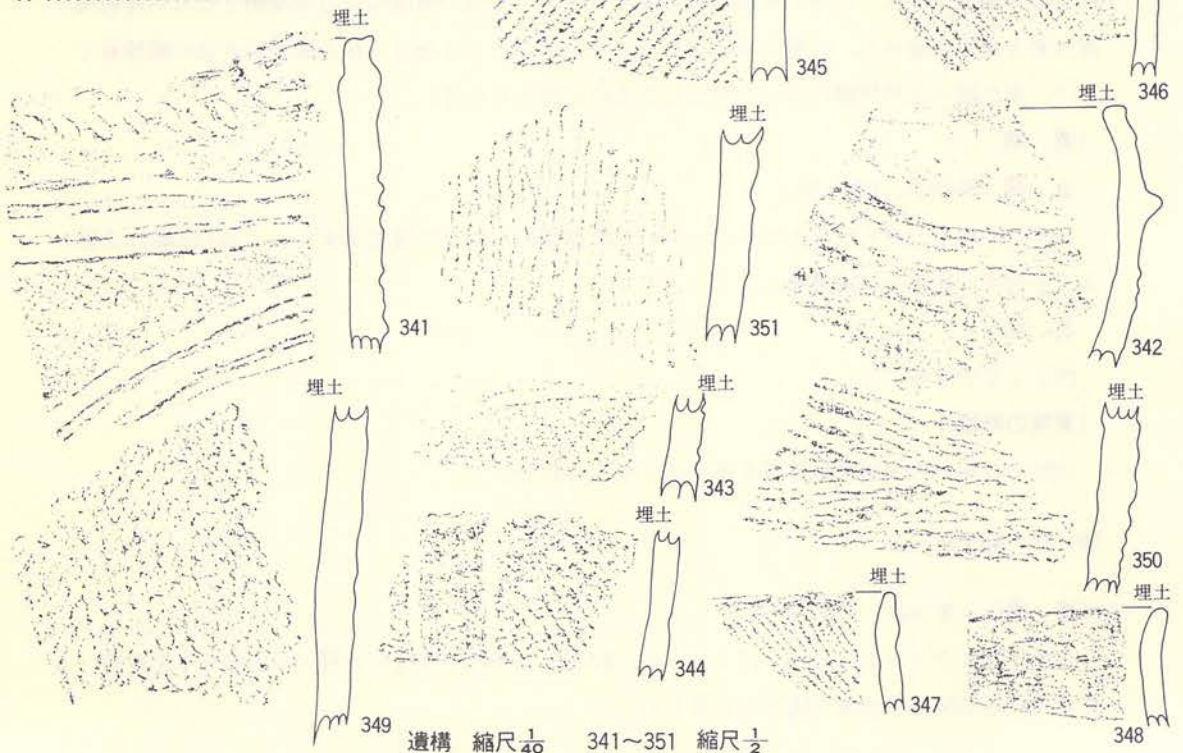
この土坑はグリッドG-46・47とH-46・47にまたがって位置し、H-47土坑-1と重複している。新旧関係では本土坑の方が新しい。



G-47土坑-3土層注記

層位	色調
1	7.5YR 3/4+3/4 暗褐色+褐色
1'	3/4
2	7.5YR 3/4 褐色
3	7.5YR 3/4 褐色
4	7.5YR 3/4 明褐色
5	7.5YR 3/4+3/4 暗褐色+褐色
6	7.5YR 3/4 黒褐色
7	7.5YR 3/4 暗褐色
8	7.5YR 3/4 橙色
9	7.5YR 3/4~3/4 鈍い橙色~橙色
9'	7.5YR 3/4~3/4 灰褐色~褐色
10	7.5YR 3/4 褐色
11	7.5YR 3/4 暗褐色
12	7.5YR 3/4~3/4 浅黄橙色~鈍い橙色
13	7.5YR 3/4~3/4 褐色~暗褐色
13'	3/4
14	7.5YR 3/4 褐色
15	10 YR 3/4 鈍い黄橙色
16	3/4
17	10 YR 3/4 暗褐色
18	10 YR 3/4 鈍い黄橙色
19	10 YR 3/4 鈍い黄褐色
20	10 YR 3/4 鈍い黄褐色
21	3/4
22	2.5Y 3/4 鈍い黄色
23	3/4

土性  
 硬い砂質土。大小の浮石が少量混入。  
 1層より軟かい砂質土。  
 地山。火山灰の小ブロックが散存する砂質土。  
 2層とほぼ同じ。1~3層で最も明色。  
 軟かい砂質シルト。浮石が少量混入。  
 ソフトローム・八戸火山灰ブロックが散存する少し硬い砂質土。  
 最も暗色で、浮石が若干混入する砂質土。  
 八戸火山灰ブロックを多量に含む砂質土。  
 ソフトローム・八戸火山灰ブロック・汚れた土が少し混入。  
 軟かい砂質シルト。  
 砂質シルト。八戸火山灰。上方ソフトローム。  
 汚れた土が縞状に混入する八戸火山灰。  
 火山灰ブロックを含む軟かい砂質シルト。  
 火山灰ブロックを含む軟かい砂質シルト。  
 硬い火山灰ブロック。  
 砂質土。火山灰ブロック多量。  
 火山灰ブロック少なく暗色。  
 白色浮石が混入する砂質シルト。  
 硬い火山灰ブロック。  
 10層に近似。少し暗色。  
 15層に同じ。  
 極めて軟かい砂質土。13層に近似。  
 極めて軟かい砂質土。  
 浮石が目立つ軟かい砂質土。  
 少し汚れたやや硬い火山灰。  
 少し硬い汚れた火山灰。



遺構 縮尺  $\frac{1}{40}$  341~351 縮尺  $\frac{1}{2}$

第90図 G-47土坑-3



規模は開口部径約2.05m×1.85mで、底面は径約2.20m×2.05mを測り、平面形は開口部・底面ともに楕円形を呈している。深さは最深部で約1.65mを測るが、斜面下位の南東側は約1.25mと浅い。底面には凹凸もなく、水平状態に近い。断面形は底面の上位約75cmの壁面に径約1.70mの頸部をもち、壁面が底面に対して約75度内傾するフラスコ形を示している。頸部より上位の壁面はほぼ直立状態で開口部に続いている。埋土は全体でみると23層に細分されているが、1～6層をA、8・9・12・15・16・18・22・23層をB、そしてそれ以外をCの3層に大別することができる。Aはもっとも最後の埋土で、火山灰の混入したシルトが主体である。Bは人為的に投棄された八戸浮石流凝灰岩の堆積層であり、CはBの間層を構成している。この土坑の埋土堆積状況は、人為的に埋め戻された状況を示すものであろう。

[遺物]

土器 (第90図、PL-66)

いずれも埋土内から出土した。341は器表が3条の沈線によって区画されるものである。343・344は器面が沈線で区画され、さらに縄文が磨消されている。342は隆帯で区画され、縄文が磨消されている。その他の破片は単節斜行縄文や撚糸文のみを付すものである。

石器

出土していない。

[遺構の時期]

343・344の存在から、本土坑は中期末葉に位置づけられるであろう。

59) H-39土坑

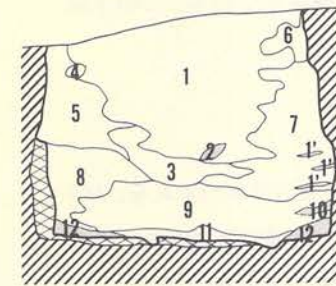
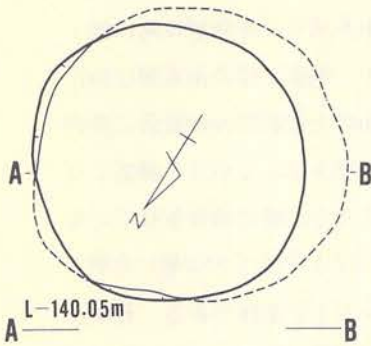
[遺構] (第91図、PL-30B)

この土坑はグリッドH-39に位置し、他遺構との重複はない。

規模は開口部径約1.50m×1.45mで、底面径約1.65m×1.55mを測り、平面形は開口部・底面ともにほぼ円形を呈している。深さは最深部で約1.25mを測るが、斜面下位の南側では約1.10mと若干浅い。底面は中央部が低く、壁際に向って次第に高くなっており、若干小凹凸がある。断面形は壁面が底面に対して約83度内傾するフラスコ形を示しているが、壁面が直線的ではなく、外方に軽く張り出す状態を示している。埋土は黒色・黒褐色・暗褐色・黄褐色等を呈するシルトや八戸火山灰とそれらの混合する土で構成されており、12層に細分されている。その他に全体的に八戸浮石流凝灰岩の小塊や浮石の混入が多くみられる。この土坑の埋土堆積状況は、人為的に埋め戻された可能性が大きい。

[遺物]

土器 (第91図、PL-67)

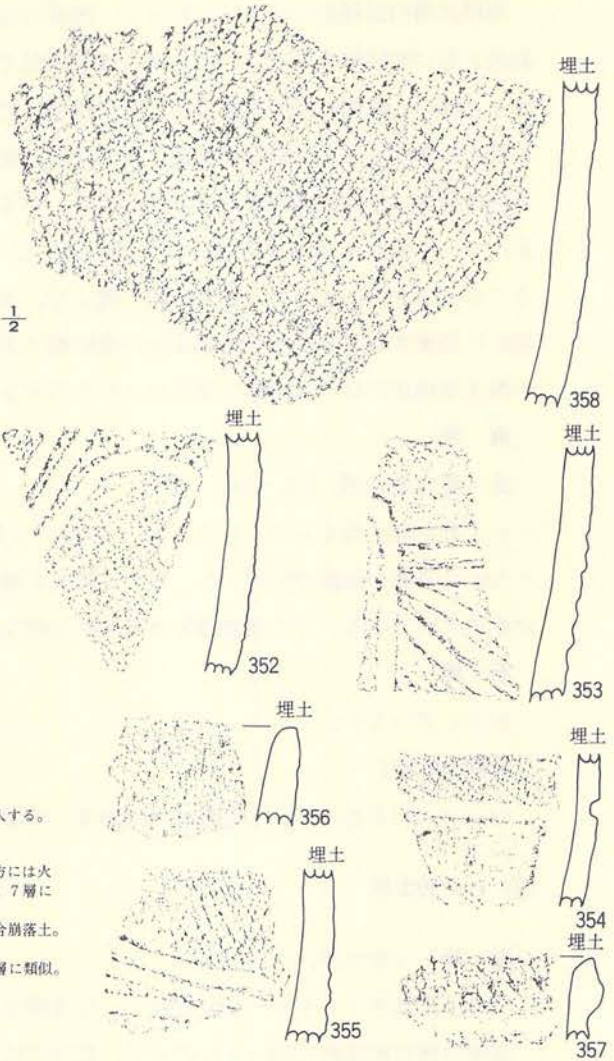


H-39土坑土層注記

層位	色調
1	10 YR 3/4 黒色
1'	10 YR 3/5 暗褐色
2	10 YR 5/5 黄褐色
3	10 YR 5/4 黒色
4	10 YR 3/4 暗褐色
5	10 YR 3/5 暗褐色
6	10 YR 3/5-3/5 暗褐色-黒褐色
7	10YR 5/4+5/4 黄褐色+鈍い黄橙色
8	10 YR 5/5 黄褐色
9	10 YR 5/4 黒色
10	10 YR 5/5 黄褐色
11	10 YR 3/5 黒褐色
12	10 YR 5/4 鈍い黄橙色

土性  
 硬い砂質シルト。浮石多量混入。  
 硬い砂質シルト。  
 ソフトロームブロック。  
 1層に近似。やや明色。  
 ソフトロームブロック。木根が貫入する。  
 硬い砂質シルト。  
 5層に近似。  
 上方はソフトロームブロック、下方には火山灰ブロックが目立つ砂質シルト。7層に近似。  
 ソフトローム・ゴロタ相当層の混合崩落土。  
 硬い砂質シルト。7層に近似。  
 より砂に近い砂質シルト。1・3層に類似。  
 軟かいソフトロームブロック。  
 硬い砂質シルト。  
 軟かい。ソフトローム+火山灰。

352~358 縮尺  $\frac{1}{2}$   
 遺構 縮尺  $\frac{1}{40}$



第91図 H-39土坑

いずれも埋土内からの出土である。352~357はほぼ同じ施文を示し、器表を複数の沈線で区画するもので、縄文の磨消はない。358は縄文のみを付す体部破片である。

石器

出土していない。

[遺構の時期]

352~355の土器により、本土坑は中期中葉に位置づけられるものであろう。



## 60) H-41土坑-1

〔遺構〕 (第92図、PL-30C)

この土坑はグリッドH-41とH-42にまたがって位置し、他遺構との重複はない。

規模は開口部径約2.10m×1.90mで、底面は径約1.75m×1.70mを測り、平面形は開口部・底面ともに楕円形を呈している。深さは最深部で22cmであるが、斜面下位の南東側は15cmと浅い。底面は中央部が若干低くなっており、さらに全体が南に向って緩やかに低くなっている。断面形は壁面が底面に対して115度外傾する浅皿形を示している。埋土は暗褐色シルトの単層で構成されている。全体的に固く、そして、橙色の浮石が混入しており、中振浮石に近似した土層である。この土坑は規模が小さいものの、深さ等からみて、住居跡の可能性はある。自然堆積による埋没であろう。

〔遺物〕

土器 (第92図、PL-67)

364～368は埋土最上層からの出土であるが、他はいずれも下位層からの出土である。特に359・360は底面に近い層位からの出土である。359～361は器面に単節斜縄文を付し、口縁部に不明瞭な綾絡文をもつ。368は半截竹管の刺突と原体圧痕によって施文されている。その他の破片は器表に縄文のみが施文された体部破片である。すべての破片が胎土に繊維を混入している。

石器 (第92図、PL-127G)

3点出土している。193は石鏃で先端部を若干欠損している。194・195は切削器としたものであるが、剥片の周縁部に粗雑な剝離調整をしたものである。

〔遺構の時期〕

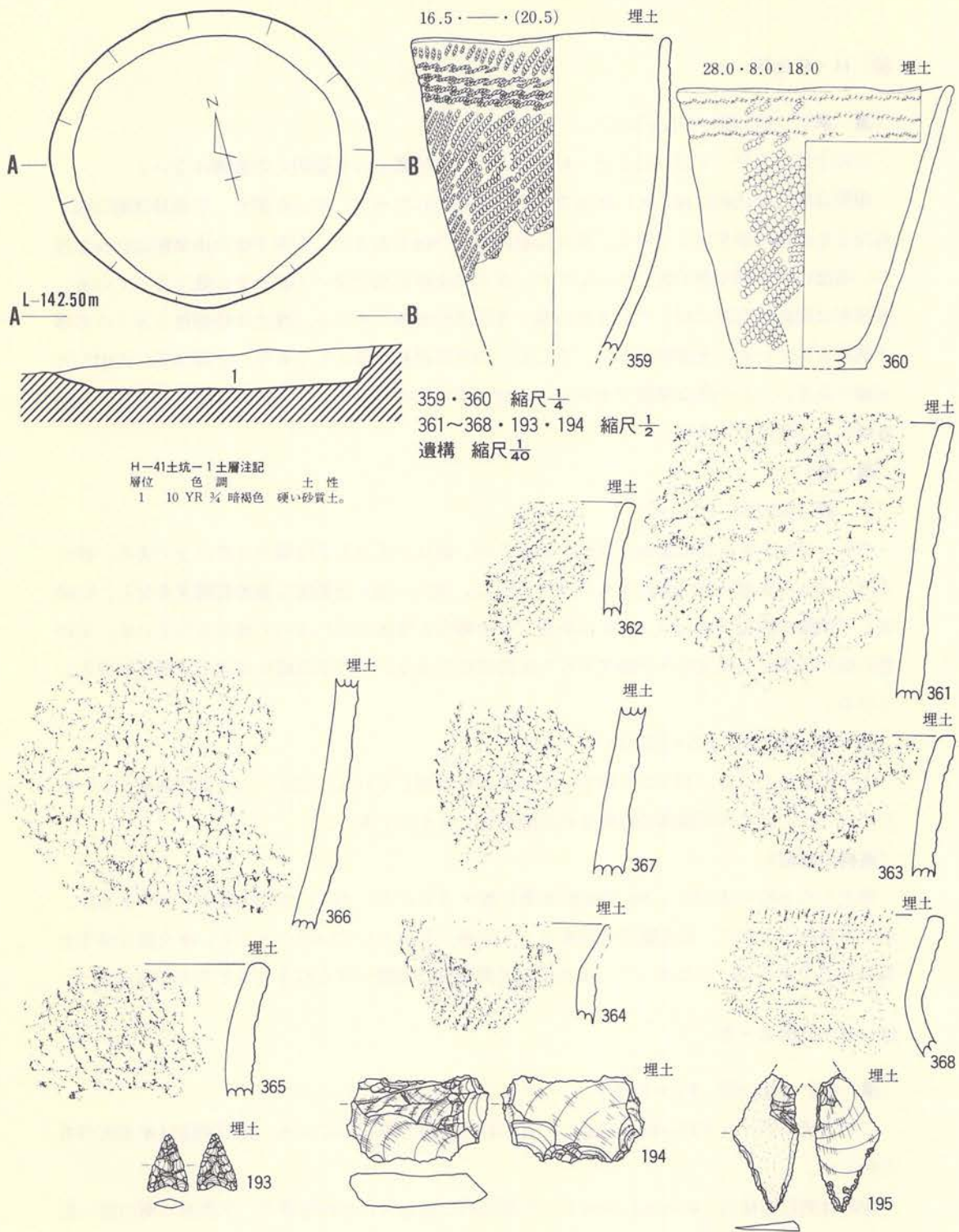
出土した土器には359～361の前期初葉に属するものと、368の前期末葉のものがあるが、前者が量的にも多く、出土層位も後者より下位層から出土していることから、本土坑に伴う土器は前者であろう。したがって、本土坑は前期初葉に位置づけられるものと考えられる。

## 61) H-41土坑-2

〔遺構〕 (第93図、PL-31A)

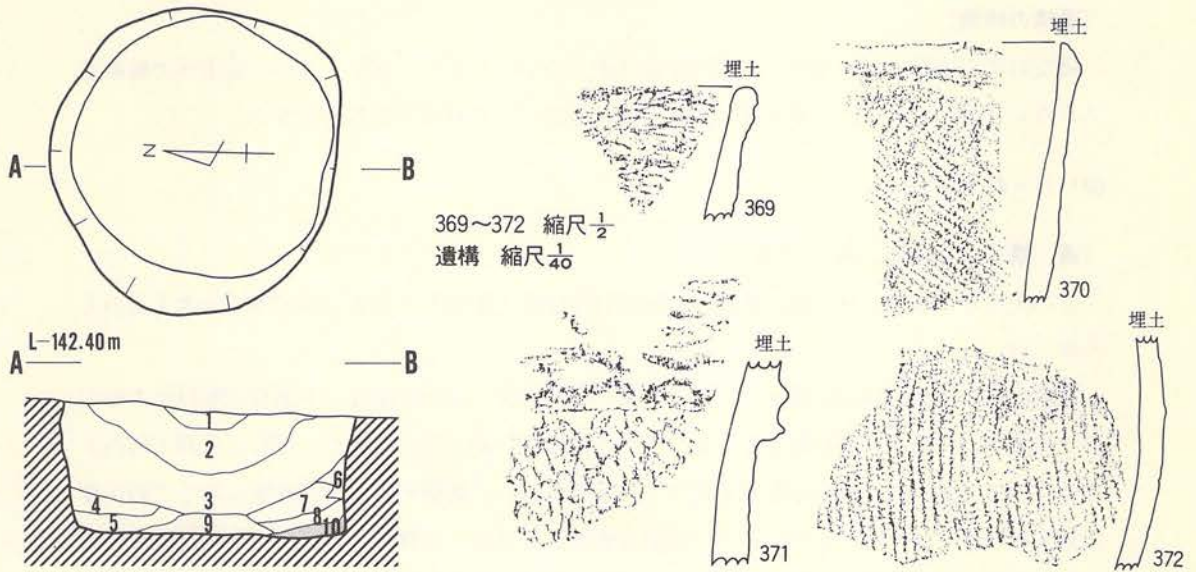
この土坑はグリッドH-41に位置し、H-41住居跡と重複している。新旧関係は本土坑の方が新しい。

規模は開口部径約1.60m×1.50mで、底面径約1.40m×1.40mを測り、平面形は開口部・底面ともに楕円形を呈している。深さは最深部で75cmを測るが、斜面下位の南側では約60cmと若



第92図 H-41土坑-1





H-41土坑-2土層注記

層位	色調	土性
1	10 YR 3/4 黒色	少し硬い砂質シルト。
2	10 YR 3/4 暗褐色	〃
3	10 YR 3/4 黒褐色	軟かい砂質シルト。
4	〃	硬い砂質シルト。
5	10 YR 3/4 〃	〃 最も暗色。
6	10 YR 3/4 暗褐色	軟かい砂質シルト。
7	10 YR 3/4 黒褐色	5層に類似。
8	10 YR 3/4 暗褐色	硬い砂質シルト。
9	10 YR 3/4 暗褐色	少し軟かい砂質シルト。
10	10 YR 3/4 黄褐色	〃

第93図 H-41土坑-2

干浅くなる。底面には凹凸もなく平坦であるが、南側に向って緩やかに傾斜している。断面形は、壁面が底面に対して約95度外傾するピーカー形を示している。埋土は黒色・黒褐色・暗褐色・黄褐色等を呈する砂質シルトを中心として構成されるが、10層に細分されている。全体的にみると、壁寄りが暗色で、中央部が明色であるが、色調では大差がなくいずれも近似している。また、八戸浮石流凝灰岩や八戸火山灰等の混入も多い。おそらく、自然堆積によって埋没した土坑であろう。

[遺物]

土器 (第93図、PL-68)

いずれも埋土内から出土している。371は頸部に隆帯をもち、隆帯上には棒状工具の先端圧痕による凹みを付しし、口縁部には不明瞭な綾絡文をもつ。369・370は縄文のみを付す口縁部破片である。372は体部破片で、縄文のみをもつ。369・372の胎土には繊維混入がある。

石器

出土していない。

[遺構の時期]

縄文時代の土坑とは思いますが、時期の特定はできない。しかし、370・372に胎土への繊維混入がないことからみると、本土坑は中期以降に位置づけられる可能性が大きい。

62) H-41土坑-3

[遺構] (第94図、PL-31B)

この土坑はグリッドH-41に位置し、H-41住居跡と重複している。新旧関係は本土坑の方が新しい。

規模は開口部径約78cm×70cmで、底面は径約1.65m×1.50mを測り、平面形は開口部が楕円形であるが、底面は円形を呈している。深さは最深部で約1.50mを測り、底面には若干凹凸があるものの、全体的にみるとほぼ平坦で水平状態に近い。断面形は壁面が底面に対して約70度内傾するフラスコ形を示しているが、壁面は直線的ではなく不整である。埋土は黒褐色・暗褐色等の砂質シルトで構成されており、9層に細分されている。八戸火山灰や浮石等の混入が多い。全体的にみるとどの層も良く似た土層である。この土坑は人為的に埋め戻された可能性が大きい。

[遺物]

土器 (第94図、PL-68)

いずれも埋土内から出土している。器表に縄文が付された体部破片のみで、口縁部文様をもつものはない。胎土への繊維混入は、373以外にはない。

石器

出土していない。

[遺構の時期]

縄文時代の土坑とは思いますが、時期を特定できない。しかし、出土した土器が繊維を混入しないものが主体であることから考えると、本土坑は中期以降に位置づけられる可能性が大きい。

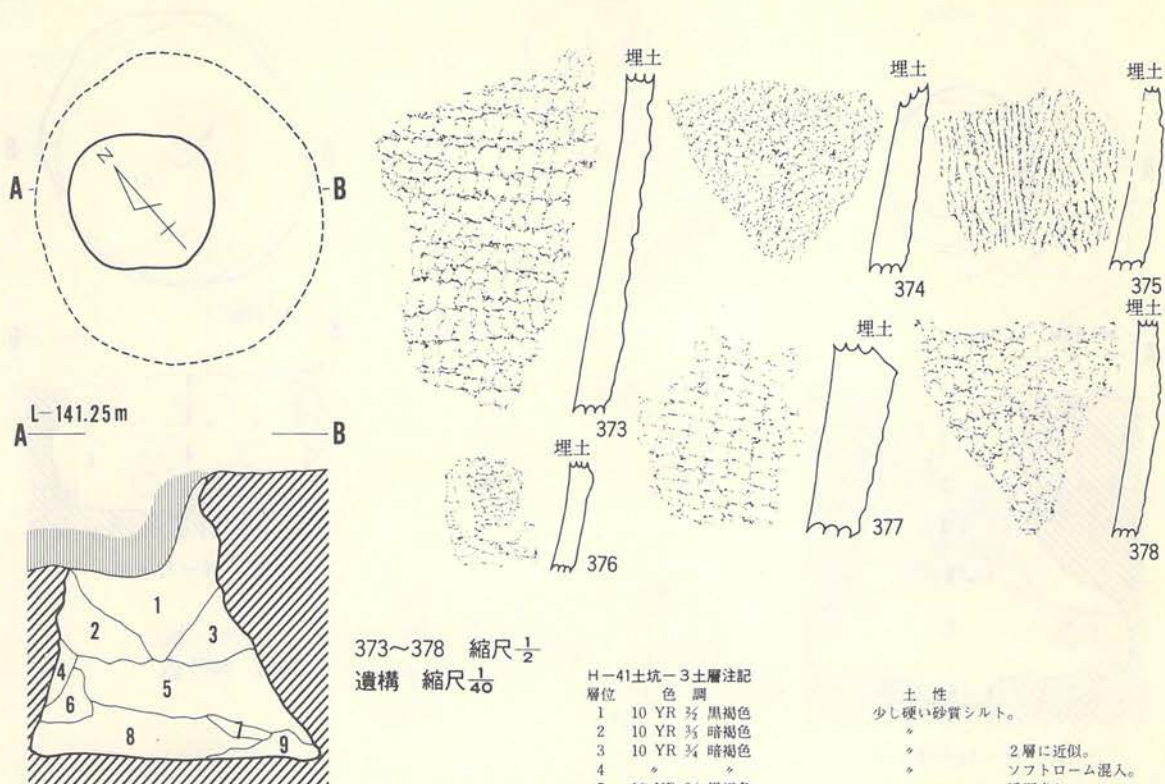
63) H-41土坑-4

[遺構] (第95図A、PL-31C)

この土坑はグリッドH-41に位置し、H-41住居跡の床面ほぼ中央にある。新旧関係は、埋土の状況や検出の様子を観察すると、H-41住居跡と同時存在かもしくは本土坑の方が古い状況を示しているが、出土遺物では本土坑の方が新しいことを示している。このことから考えると、本土坑が新しいとするのが正しいであろう。

規模は開口部径約90cm×90cmで、底面は径約1.85m×1.65mを測り、平面形は開口部がほぼ





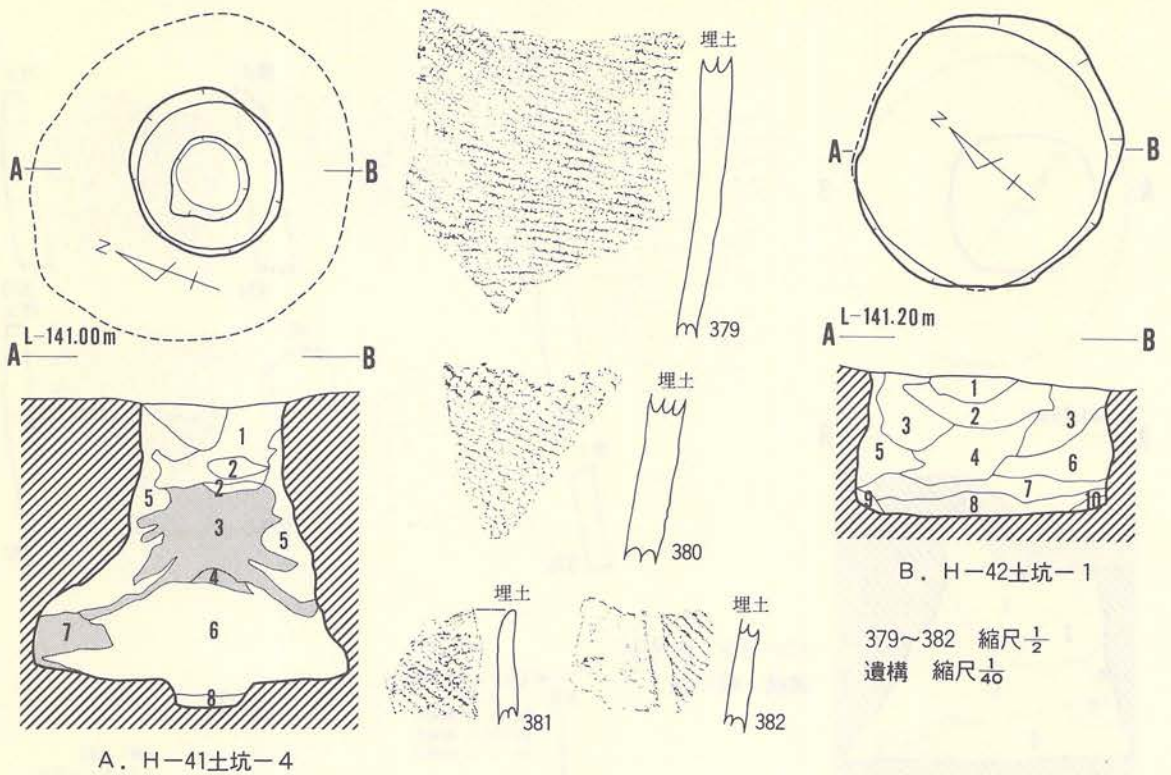
第94図 H-41土坑-3

円形を示し、底面は楕円形である。深さはH-41住居跡の床面から約1.50mを測り、底面は壁際から中央部に向って緩やかな傾斜を示し、底面ほぼ中央には径約45cm×45cm・深さ約13cmの副穴が1基ある。断面形は底面から約1.15m上位の壁面に径約75cmの頸部をもち、壁面が底面に対して約70度内傾するフラスコ形を呈している。頸部から上位の壁面は軽く外傾して開口部に続いている。壁面は直線的ではなく、特に、北側では下位のそれが外方に大きく抉れている。埋土は黒褐色・暗褐色・黄褐色・黄橙色等を呈する砂質シルトや八戸火山灰とそれらの混合した土で構成され、8層に細分されている。中でも3層・4層・7層は八戸火山灰かもしくは八戸火山灰を主体とした土層である。この土坑の埋土堆積状況は、人為的に埋め戻された状況を示すものであろう。

[遺物]

土器 (第95図A, PL-68)

いずれも埋土内から出土している。縄文以外の文様をもつものは382だけであり、この破片



379~382 縮尺  $\frac{1}{2}$   
遺構 縮尺  $\frac{1}{40}$

H-41土坑-4土層注記

層位	色調
1	10 YR 5/6 明黄褐色
2	10 YR 5/6~5/4 鈍い黄褐色~褐色
3	10 YR 5/6 鈍い黄橙色
4	10 YR 5/6 鈍い黄橙色
5	10 YR 5/6~5/4 黒褐色
6	〃
7	10 YR 5/6 鈍い黄橙色
8	10 YR 5/6~5/4 暗褐色~鈍い黄褐色

土性

軟かい砂質シルト。  
 〃 1層の土が汚れたもの。  
 〃 ソフトロームと八戸火山灰の混合土。  
 砂質シルト。八戸火山灰ブロック  
 軟かい砂質土。  
 砂質土。5層とほぼ同じ。  
 砂質シルト。八戸火山灰ブロック。  
 砂質シルト。

H-42土坑-1土層注記

層位	色調
1	10 YR 5/6 黒褐色
2	10 YR 5/6~5/4 黒褐色~暗褐色
3	10 YR 1.7 1 黒色
4	10 YR 5/6 黒色
5	10 YR 5/6 暗褐色
6	10 YR 5/6 黒色
7	7.5YR 5/6 黒色
8	7.5YR 5/6~5/4 黒褐色~極暗褐色
9	7.5YR 5/6 褐色砂質シルト
10	7.5YR 5/6 暗褐色

土性

硬い砂質シルト。  
 硬い砂質シルト。  
 1・2層より粗目の砂質シルト。  
 軟かい砂質シルト。3層に近似。  
 砂質シルト。ソフトロームに(3層に類似)混入。  
 砂質シルト。4層に類似し、1より暗色。  
 砂質シルト。  
 砂質シルト。7層に類似し、より明色  
 ソフトロームと暗色砂質シルトの混合土。  
 9層に類似し、より暗色。

第95図 土坑

は器表が沈線で区画され、縄文が磨消されている。その他の破片は縄文のみを付す体部破片である。胎土に繊維を混入するものはない。

石器

出土していない。

[遺構の時期]

382の存在から本土坑は中期末葉に位置づけられるであろう。



#### 64) H-42土坑-1

〔遺構〕 (第95図B、PL-32A)

この土坑はグリッドH-42・H-43にまたがって位置し、H-42土坑-2とH-43土坑-1と重複している。新旧関係は、本土坑が重複するいずれの遺構より新しい。

規模は開口部径約1.45m×1.35mで、底面径約1.35m×1.30mを測り、平面形は開口部・底面ともにほぼ円形を呈している。深さは最深部で約75cmであるが、斜面下位の南側では約60cmと若干浅くなる。底面には凹凸もなくほぼ平坦で水平に近いが、壁寄りが若干高くなっている。断面形は壁面が底面に対してほぼ直交するピーカー形を示している。埋土は黒色・黒褐色・暗褐色・褐色等を呈するシルトや砂質シルトで構成され、10層に細分されている。全体的にみると、シルトと八戸浮石流凝灰岩等の混入が多く観察される。この土坑の埋土堆積状況は、人為的に埋め戻されたことを示す可能性が強い。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

縄文時代の土坑とは思いますが、時期の特定はできない。

#### 65) H-42土坑-2

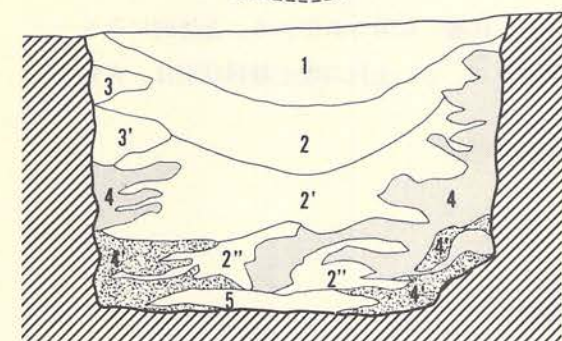
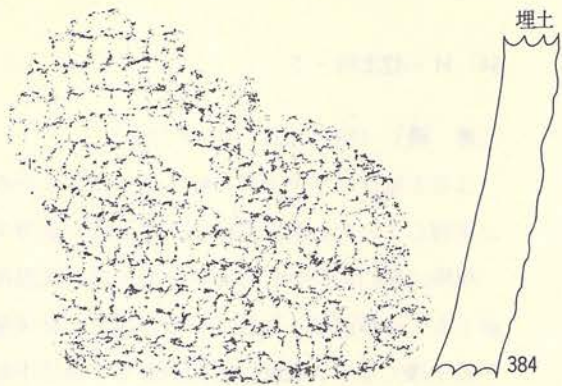
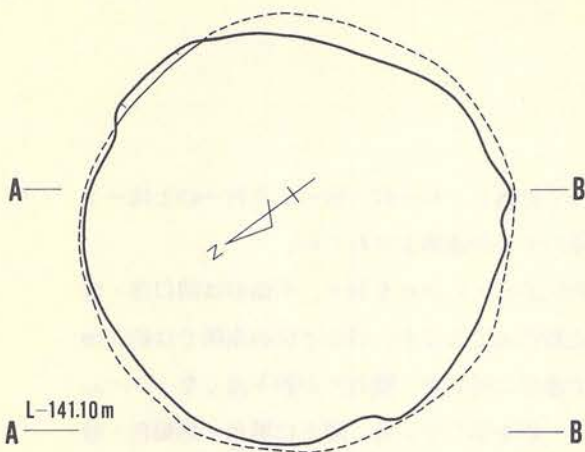
〔遺構〕 (第96図、PL-32B)

この土坑はグリッドH-42とH-43にまたがって位置し、H-42住居跡・H-42土坑-1・H-43土坑-1と重複している。新旧関係は、本土坑がH-43土坑-1より新しく、H-42住居跡とH-42土坑-1よりは古い。

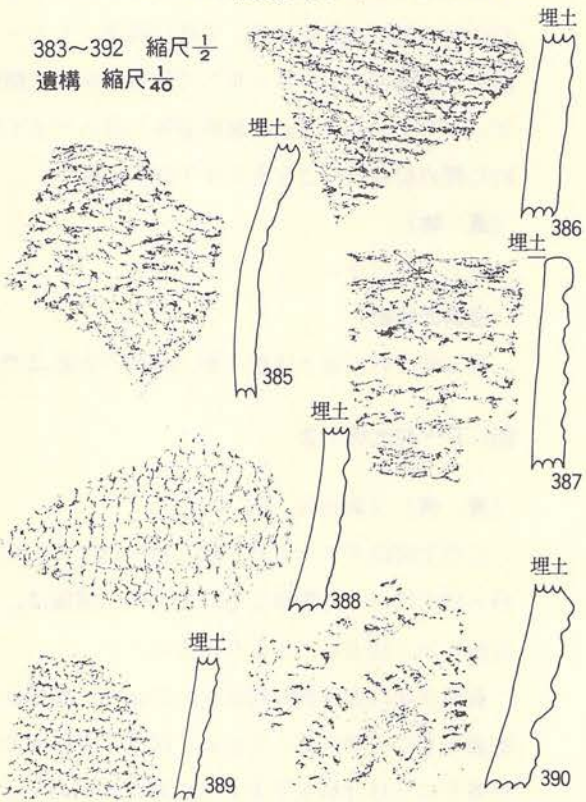
規模は開口部径約2.20m×2.20mで、底面は径約2.30m×2.30mを測り、平面形は開口部・底面ともに円形を呈している。深さは最深部で約1.50mを測るが、この土坑の底面には、西側壁寄りに三日月形を示すように高い面があり、低い面との比高は約22cmである。断面形は壁面が底面に対して約92度外傾するピーカー形を示している。埋土は黒色・黒褐色・暗褐色等のシルトや八戸火山灰・八戸浮石流凝灰岩とからなり、5層に大別されている。2層はさらに3層に、3・4層も2層に細分されている。しかし、大別すると、1層～3層、4層、5層というように3層に大別することも可能である。この土坑の埋土堆積状況は自然堆積による埋没を示すものであろう。

〔遺物〕

土器 (第96図、PL-68・69)



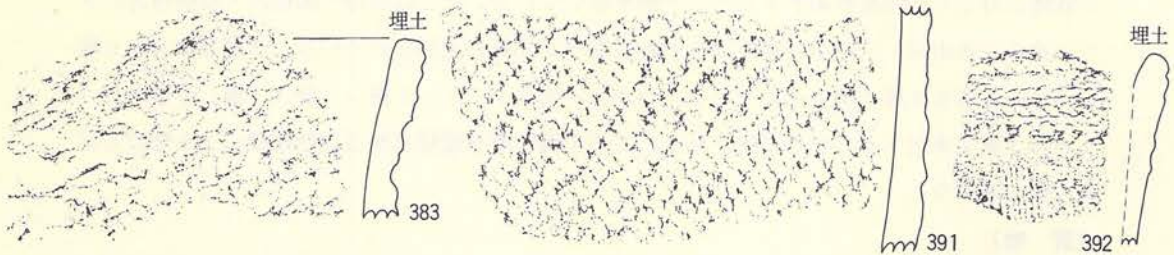
383~392 縮尺  $\frac{1}{2}$   
遺構 縮尺  $\frac{1}{40}$



H-42土坑-2土層注記

層位	色調
1	10 YR 5/2 黒褐色
2	10 Y R 5/2 黒褐色
2'	〃 〃
3	10 YR 5/2 黒褐色
3'	10 YR 5/2 褐色~暗褐色
4	10 YR 5/2 褐色砂質シルト
4'	10YR 5/2+2/4 黄褐色+鈍い黄橙色
5	10 YR 5/1 黒色

土性  
 砂質シルト。下面中程に暗色帯有り。  
 1層に類似。少し硬い。  
 1層に類似。暗褐色土ブロックを含む。  
 1層に類似。2'層の土性に加え汚れた砂などが織状に入る。  
 硬い砂質シルト。  
 3層に近似、3層にソフトローム混入。  
 ソフトロームに暗色土織状に入る。  
 軟かい砂質シルト。ソフトローム十八戸火山灰。  
 砂質シルト。1層に類似し、混入物少なし。



第96図 H-42土坑-2



いずれも埋土内から出土している。口縁部破片は383・385・387・392の4片だけであるが、この中の前者3片はほぼ同じ特徴を有し、単節斜行縄文を地文とし口縁部に不明瞭な綾絡文をもつ。392は頸部に肥厚帯を有し、肥厚帯の上には円形刺突があり、口縁部には撚りの異なる2条の縄文原体を1対とした圧痕文をもつ。その他の破片は縄文のみが付された体部破片である。383～385・387・392には胎土に繊維を混入している。

## 石器

出土していない。

### [遺構の時期]

出土した土器には383・385・387の様に前期初葉のものと、382の前期末葉、390のような中期前葉のものが混在しているが、ここでは390の存在から本土坑を中期前葉に位置づけておく。

## 66) H-43土坑-1

### [遺構] (第97図A、PL-35A)

この土坑はグリッドH-43に位置し、H-42土坑-1・2とH-43土坑-2と重複している。新旧関係は、重複するいずれの遺構より本土坑が古い。したがって、他遺構との重複によって全体の約半分が壊されているので、詳細は定かでない。

規模は開口部径約1.50mで、底面は径約1.35mを測り、平面形は検出された部分から考えると円形かもしくは楕円形を呈していたものと推定される。深さは最深部で約10cmと非常に浅い。底面は凹凸もなくほぼ平坦で水平に近い。断面は壁面が底面に対して外傾する浅皿形を示している。埋土は暗褐色を呈する砂質シルトの単層であり、中礫浮石層に近似している。おそらく、この土坑は自然堆積で埋没したものであろう。

### [遺物]

出土していない。

### [遺構の時期]

縄文時代の土坑とはおもうが、時期は不明である。

## 67) H-43土坑-2

### [遺構] (第97図B)

この土坑はグリッドH-43に位置し、H-43土坑-1と重複している。重複遺構との新旧関係は本土坑の方が新しい。

規模は開口部径約77cm×73cmで、底面は径約63cm×47cmを測り、平面形は開口部・底面とも

に楕円形を呈している。深さは最深部で約39cmを測り、底面は平坦である。断面形は壁面が底面に対して外傾するピーカー形である。埋土は暗褐色を呈するシルトの単層で構成されている。全体的に橙色の小粒浮石が多く混入し、中礫浮石層に近似している。自然堆積で埋没した土坑と考えられる。

**[遺物]**

出土していない。

**[遺構の時期]**

縄文時代の土坑とは思いますが、時期は不明である。

**68) H-44土坑**

**[遺構] (第97図C、PL-32C)**

この土坑はグリッドH-44に位置し、他遺構との重複はない。

規模は開口部径約1.20m×0.95mで、底面は径約1.80m×1.80mを測り、平面形は開口部が楕円形であるが、底面はほぼ円形である。深さは最深部で約1.25mを測り、底面は中央部が低く壁寄りに向って緩やかに高くなっている。断面形は、底面から約60cm上位の壁面に径約1.10mの頸部をもち、壁面が底面に対して約70度内傾するフラスコ形を示し、頸部から上位の壁面は軽く外傾して開口部に続いている。また、この土坑の壁面は直線的ではなく不規則で、特に西側にその傾向が強く、下位部分は外方に向って大きく抉れている。埋土は黒褐色・暗褐色・褐色・明黄褐色等を呈する砂質シルトや八戸火山灰とそれらの混合した土で構成されており、8層に細分されている。全体的にみると八戸浮石流凝灰岩や浮石の混入が多くみられる。中でも3層と4層は壁の崩落による八戸火山灰の堆積層である。この土坑は、おそらく、自然堆積で埋没したものであろう。

**[遺物]**

**土器 (第97図C、PL-69)**

いずれも埋土内から出土している。縄文のみが付された体部破片である。縄文には0段多条による単節斜行縄文(393)、無節斜行縄文(394)、網目状縄文(395)、単節斜行縄文(396)等がある。393は胎土に繊維を混入するが他にはない。

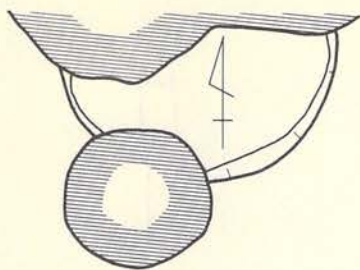
**石器**

出土していない。

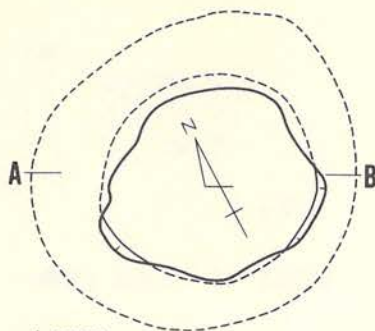
**[遺構の時期]**

縄文時代の土坑とは思いますが、時期決定に足る土器が出土していない。しかし、出土した土器の胎土に繊維の混入しないものが多いことからすると、中期以降に位置づけられる可能性が強い。

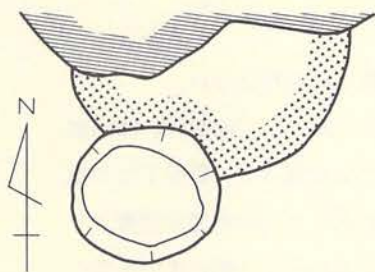




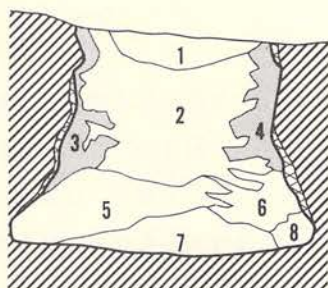
A. H-43土坑-1



L-141.10m  
A B



B. H-43土坑-2



C. H-44土坑



埋土  
393



埋土  
394

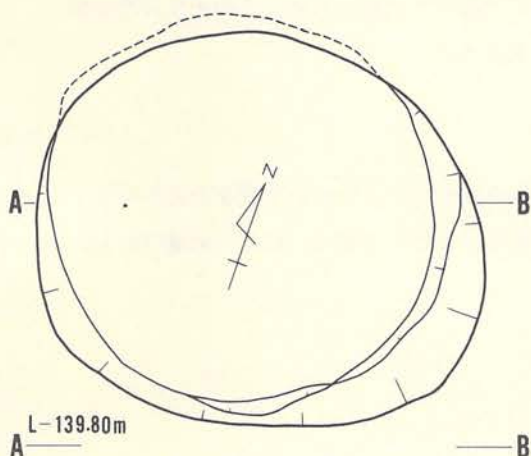


埋土  
395

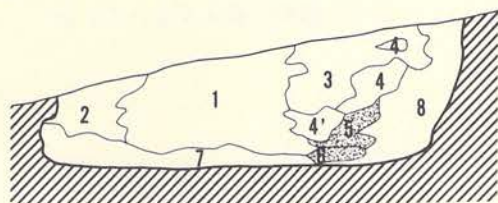


埋土  
396

393~396 縮尺 $\frac{1}{2}$   
遺構 縮尺 $\frac{1}{40}$



L-139.80m  
A B



D. H-46土坑

H-44土坑土層注記

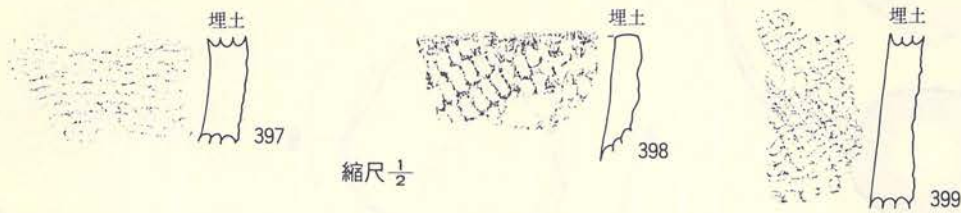
層位	色調
1	10 YR 5/2 黒褐色
2	10 YR 5/2 黒褐色
3	10 YR 5/2 暗黄褐色
4	10 YR 5/2 褐色
5	10 YR 5/2 黒褐色
6	10 YR 5/2 暗褐色
7	10 YR 5/2-3/2 褐色~暗褐色
8	10 YR 5/2 黒褐色

土性  
 硬い砂質シルト。  
 少し軟かい砂質シルト。1層に類似。  
 八戸火山灰上層にソフトローム若干混入。  
 ソフトロームが主。  
 少し硬い砂質シルト。1・2層に類似。  
 ソフトローム崩壊土。5層の土が混入。  
 硬めの砂質シルト。  
 少し硬い砂質シルト。浮石を含む。

H-46土坑土層注記

層位	色調
1	10 YR 5/2 暗褐色
2	10 YR 5/2-3/2 黄褐色~褐色
3	10 YR 5/2 黄褐色
4	10 YR 5/2 鈍い黄褐色
5	10 YR 5/2 鈍い黄褐色
6	10 YR 5/2-3/2 鈍い黄褐色~鈍い黄褐色
7	10 YR 5/2+5/2 黒褐色+鈍い黄褐色
8	10 YR 5/2 鈍い黄褐色

土性  
 少し硬い砂質土。  
 砂質シルト。ソフトロームが汚れたもの。  
 2層とほぼ同じ。  
 砂質シルト。火山灰ブロック若干暗色化。  
 硬い火山灰ブロック。  
 軟かい砂質シルト。八戸浮石流上部が若干汚れたもの。  
 砂質土。木炭片を含み、上部に暗色土有り。火山灰上部土の汚れたもの。  
 軟かい砂質シルト。



第98図 H-46土坑 (遺物)

## 69) H-46土坑

〔遺構〕 (第97図D、PL-33A)

この土坑はグリッドG-46・H-46にまたがって位置し、他遺構との重複はない。

規模は開口部径約2.40m×2.05mで、底面は径約2.45m×2.00mを測り、平面形は、開口部が楕円形を示すが、底面は円形を示している。深さは最深部で約80cmを測るが、斜面下位の南東部は約35cmと浅くなっている。底面には凹凸もなく、ほぼ平坦であるが、中央部が壁際より若干低くなっている。断面形は壁面が底面に対して約105度外傾するピーカー形に近い形態を示している。埋土は黒褐色・褐色・黄褐色・黄橙色を呈する砂質シルトと八戸火山灰等で構成され、8層に細分されている。全体的にみると1層と7層は黒色土系、2・3・4・5・6層は八戸火山灰やシルトとそれらの混合した前者より明色の土層に2大別される。この土坑の埋土堆積状況は、人為的に埋め戻されていることを表すであろう。

〔遺物〕

土器 (第98図、PL-69)

埋土内から出土した。398は口縁部であるが、他は体部破片で、いずれも縄文のみを付している。縄文の種類は単節斜行縄文(398・399)と撚糸文(397)がある。胎土への繊維混入はない。

石器

出土していない。

〔遺構の時期〕

縄文時代の土坑とは思いますが、時期を特定できない。しかし、胎土に繊維の混入がないことから考えると、中期以降に位置づけられるであろう。

## 70) H-47土坑-1

〔遺構〕 (第99図A、PL-33B)

この土坑はグリッドH-47に位置し、G-47土坑-3と重複している。重複遺構との新旧関



係は本土坑の方が古い。したがって G-47土坑-3 との重複部分は不明である。

規模は開口部径約1.20mで、底面は径約85cmを測り、平面形は開口部・底面ともに楕円形を呈していたものと推定される。深さは最深部で約55cmであるが、斜面下位の南側では約5cmと非常に浅くなっている。底面にも若干凹凸があり不規則である。断面形は明確でないが、残存する北側壁面は底面に対して約115度外傾するピーカー形に近い形態を示している。埋土は黒褐色・褐色・黄橙色等を呈する砂質シルトと八戸火山灰で構成されている。この土坑は自然堆積で埋没したものと考えられる。

[遺物]

出土していない。

[遺構の時期]

縄文時代の土坑とは思いますが、時期は不明である。

71) H-47土坑-2

[遺構] (第99図B、PL-33C)

この土坑はH-47に位置し、他遺構との重複はない。

規模は開口部径約1.75m×1.75mで、底面は径約1.65m×1.65mを測り、平面形は開口部・底面ともにほぼ円形を呈している。深さは最深部で約50cmを測るが、斜面下位の南東側は約13cmと浅くなり、底面は平坦でほぼ水平に近い。断面形は、底面から約38cm上位までの壁面が約91度外傾するピーカー形を示している。上位の壁面は下位より大きく外傾して開口部に続いている。埋土は暗褐色・褐色・黄褐色等を呈するシルトや八戸浮石流凝灰岩やそれらの混合した土によって構成され、8層に細分されている。中でも1層は八戸浮石流凝灰岩や八戸火山灰の混入層である。この土坑の埋土は自然堆積によって埋没したことを表すものであろう。

[遺物]

土器 (第99図B、PL-69)

3点とも埋土内からの出土である。400は口縁部で他は体部の破片である。3点ともに縄文が付され、400には1条の沈線がみられる。胎土への繊維混入はない。

石器

出土していない。

[遺構の時期]

縄文時代の土坑とは思いますが、時期は明確でない。しかし、胎土に繊維が混入していないところからみると、中期以降に位置づけられるであろう。

## 72) H-48土坑-1

### [遺構] (第99図C、PL-34A)

この土坑はグリッドH-48に位置し、他遺構との重複はない。

規模は開口部径約1.20m×1.10mで、底面は径約1.10m×0.70mを測り、平面形は開口部・底面ともに不整な長楕円形を呈している。深さは斜面上位・斜面下位ともに約20cm～25cmと、検出面と底面がほぼ平行している。断面形は壁面が底面に対して約145度外傾する浅皿形である。埋土は黒褐色や暗褐色を呈する砂質シルトで構成され、2層に細分されている。いずれの土層も浮石の混入がみられ、しまりがある。この土坑は人為的に埋め戻された可能性が大きい。

### [遺物]

#### 土器 (第99図C)

1点(403)出土している。縄文のみが付された体部破片である。胎土への繊維混入はない。

#### 石器

出土していない。

### [遺構の時期]

縄文時代の土坑であろうが、時期は不明である。しかし、胎土に繊維を混入しないことからみると、中期以降に位置づけられるであろう。

## 73) H-48土坑-2

### [遺構] (第100図A、PL-34B)

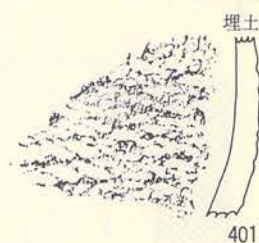
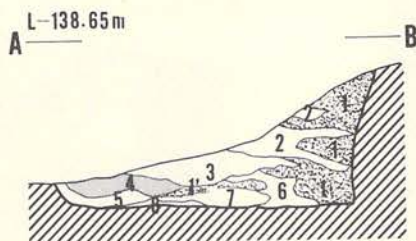
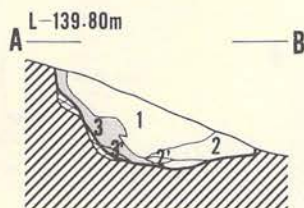
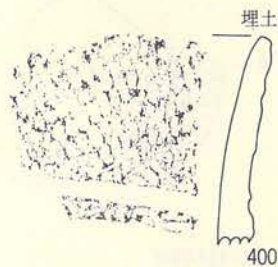
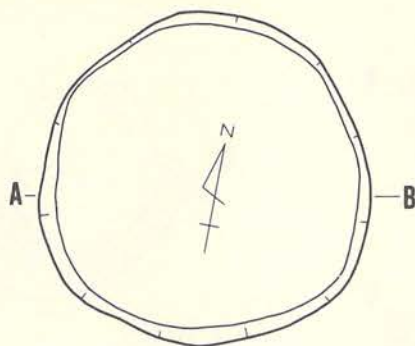
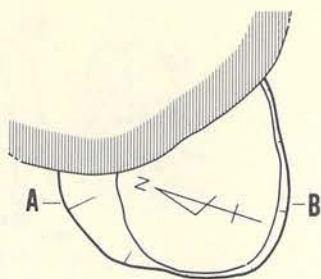
この土坑はグリッドH-48とH-49にまたがって位置し、他遺構との重複はない。

規模は開口部径約90cm×70cmで、底面は径約1.15m×1.10mを測り、平面形は開口部・底面ともに楕円形を呈している。深さは最深部で約1.20mを測るが、斜面下位の南側では約1.10mと浅い。底面には若干起伏があるが、全体的にみるとほぼ平坦である。断面形は底面から約90cm上位の壁面に径約85cmの頸部をもち、壁面が底面に対して約82度内傾するフラスコ形を示している。頸部から上位の壁面は更に強く内傾して開口部に続いている。埋土は黒褐色・暗褐色・褐色・黄褐色等の砂質シルトや八戸浮石流凝灰岩とそれらの混合した土で構成されており、5層に細分されている。中でも1層と2層は八戸浮石流凝灰岩の堆積層である。3・4・5層にも八戸浮石流凝灰岩が多く混入し、締りが良く固い。この土坑の埋土堆積状況は人為的に埋め戻されたことを表すものであろう。

### [遺物]

出土していない。

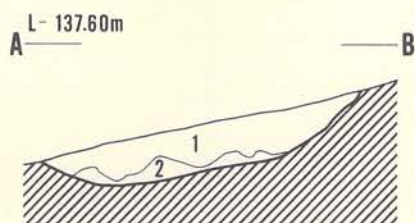
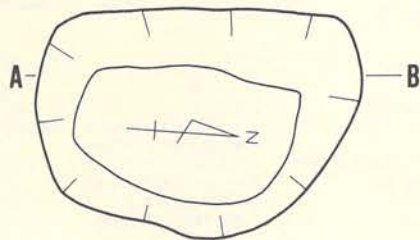




A. H-47土坑-1

B. H-47土坑-2

400~403 縮尺  $\frac{1}{2}$   
遺構 縮尺  $\frac{1}{40}$

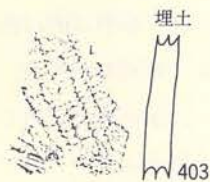


H-47土坑-1 土層注記

層位	色調	土性
1	10 YR 5/2 褐色	少し硬い砂質シルト。
2	10 YR 5/2 黒褐色	少し硬い砂質シルト。
2'	10 YR 5/2 黒褐色	2層と同じ。やや暗色。
3	10 YR 5/2 鈍い黄褐色~鈍い黄橙色	ソフトローム+火山灰上部土。
3'	10 YR 5/2 鈍い黄褐色~明黄褐色	ソフトローム。少し硬い砂質シルト。

H-47土坑-2 土層注記

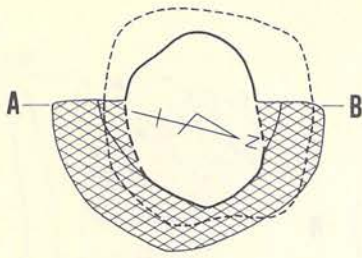
層位	色調	土性
1	10 YR 5/2 鈍い黄橙色	軟かい砂質シルト。
1'	*	1層の硬いブロック。
2	10 YR 5/2 褐色	軟かい砂質土。火山灰とソフトローム・有機物の混合。
3	10 YR 5/2 暗褐色	少し硬い砂質土。木片若干含む。
4	10 YR 5/2 黄褐色	少し硬い砂質土。
5	10 YR 5/2 褐色	硬い砂質土。
6	10 YR 5/2 褐色	軟かい。2層に近似。
7	10 YR 3/2 暗褐色	硬い。3層に近似。
8	10 YR 5/2 鈍い黄褐色	硬い。3層に近似し、より白色



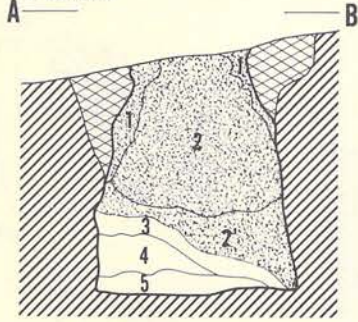
C. H-48土坑-1

H-48土坑-1 土層注記

層位	色調	土性
1	10 YR 5/2 黒褐色	しまりのある砂質土。
2	10 YR 5/2 暗褐色	しまりのある砂質土。浮石多量混入。

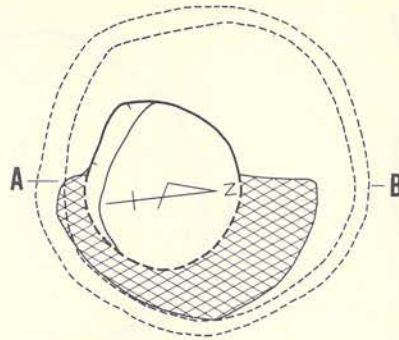


L-137.00m

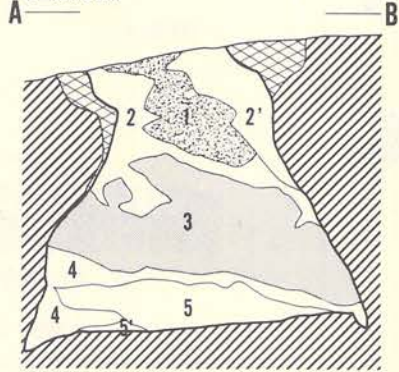


A. H-48土坑-2

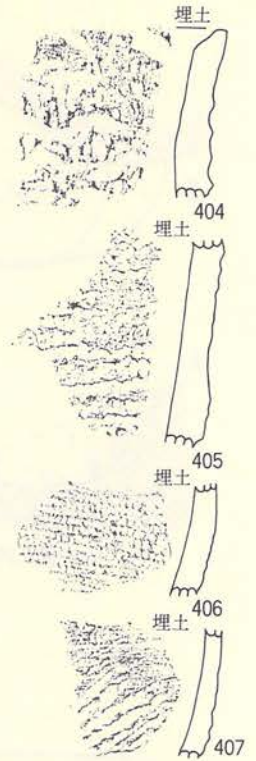
404~407 縮尺  $\frac{1}{2}$   
遺構 縮尺  $\frac{1}{10}$



L-137.00m



B. H-48土坑-3



H-48土坑-2土層注記

層位	色調
1	10 YR $\frac{3}{4}$ 暗褐色
2	10 YR $\frac{5}{4}$ ~ $\frac{7}{4}$ 鈍い黄褐色~明黄褐色
2'	10 YR $\frac{5}{4}$ ~ $\frac{7}{4}$ 黄褐色~明褐色
3	10 YR $\frac{5}{4}$ ~ $\frac{7}{4}$ 褐色
4	10 YR $\frac{3}{4}$ 暗褐色
5	10 YR $\frac{3}{4}$ 黒褐色

土性

汚れた八戸火山灰。  
ソフトロームが若干混入した八戸火山灰。  
2層よりソフトロームの混入が多いためか、暗色の八戸火山灰。  
浮石の混じる砂質土。  
しまりのある硬い砂質土。

H-48土坑-3土層注記

層位	色調
1	10 YR $\frac{5}{4}$ 明黄褐色
2	10 YR $\frac{3}{4}$ ~ $\frac{5}{4}$ 暗褐色~褐色
2'	※
3	10 YR $\frac{5}{4}$ ~ $\frac{7}{4}$ 明黄褐色~黄褐色
4	10 YR $\frac{5}{4}$ ~ $\frac{7}{4}$ 褐色
5	10 YR $\frac{3}{4}$ 黒褐色
5'	※

土性

砂質シルト。ソフトロームまじりの火山灰。  
ソフトロームと火山灰のまじる黒色土。  
2層とほぼ同じ。やや暗色。  
上半火山灰ブロック。下半ソフトローム。  
軟かく小石の目立つ砂質土。  
しまりのある硬い砂質土。  
5層より軟かくより暗色。

第100図 土坑

[遺構の時期]

縄文時代の土坑とは思いますが、時期を明確にできない。

74) H-48土坑-3

[遺構] (第100図B、PL-34C)

この土坑はグリッドH-48とH-49にまたがって位置し、他遺構との重複はない。

規模は開口部径約1.00m×0.80mで、底面は径約1.75m×1.75mを測り、平面形は開口部が楕円形であるが、底面では円形を呈している。底面は南側に向って緩やかな傾斜を示すが、起伏もなくほぼ平坦である。壁面直下の底面には巾7cm~17cmで深さ10cm~14cmの溝が全周している。断面形は壁面の上位部分が不規則であるが、底面に対して約65度内傾するフラスコ形を呈している。埋土は黒褐色・褐色・暗褐色・明黄褐色等を呈する砂質シルトと八戸浮石流凝灰



岩やそれらの混合した土で構成され、5層に細分されている。中でも1層と3層は八戸浮石流凝灰岩の堆積層であり、5層以外のその他は混合土であるし、5層は砂質シルトである。この土坑の埋土堆積状況は人為的に埋め戻されたことを表すものであろう。

#### [遺物]

##### 土器 (第100図B、PL-70)

いずれも埋土内から出土した破片で、404は口縁部であるが、他は体部の破片である。4点ともに縄文のみを付しているが、404には口縁部に不明瞭な綾絡文が在るし、405・406は単節斜行縄文をもち、407は燃糸文である。404～406には胎土に繊維を混入しているが、407にはない。

##### 石器

出土していない。

#### [遺構の時期]

縄文時代の土坑とは思いますが、時期は特定できない。しかし、407の存在は中期以降に位置づけられることを示す。

### 75) I-19住居跡内土坑-1

#### [遺構] (第101図、PL-36)

I-19住居跡の上に形成された分厚い遺物包含層のたるみから、かなり早い段階から存在が予想されていた。上記遺物包含層の下部(第5面)は、この土坑に流れこんでいる。I-19住居跡の中心から北東寄りに造られている。住居跡よりは新しいが、住居廃棄後あまり経過しない時期に掘られたものである。開口部径約1.37m×1.30m、底面径1.80m×1.60mを測り、平面形は開口部・底部ともに少し歪んだ円形である。深さは住居跡の床面から2.50m～2.53mを測り、底面はほぼ平坦である。断面形は、上部 $\frac{1}{2}$ 位が原形を失っているものの、フラスコ形を呈している。埋土は、上位 $\frac{2}{3}$ 位が黒褐色ないしは暗褐色の砂質シルトで、上半には円筒土器の包含層が外から連続している。下半は少し硬めであるが、上半に類似した土である。これら砂質シルトの下に、この土坑の開口部近くの壁となっていた火山灰のブロックが崩落し堆積しており、さらにこの下に、人骨を含む火山灰と暗色砂質シルト・ソフトローム(八戸火山灰)の互層が堆積する。堆積状況は自然であり、人骨包含層においても、後記以上の推測はできない。人骨は、崩落火山灰のブロックを取り除いて間もなく、住居跡床面から2.1m少々下位で第1号人骨の下肢骨及び頭骨から始まって、次々に検出された。検出当時は、頭骨以外の個体の関係が不明であったが、壁際に頭を置くというやり方は大体把握できた。何しろ直径1.80m以下の坑底一杯に人骨が広がっており、しかも、腐朽した木材のような軟弱な状態であったので、

現地での詳細な記録は極めて困難であったことから、土坑の底部ごと掘り上げて、室内での専門的調査に期待することにした。医学的な所見は巻末の付編に記述されているとおりである。

人骨の出土状況から推察される本遺構の埋没の進行は次のようになる。①土坑が廃棄され、若干の外からの流入土と共に壁面が少しずつ剝離して、底面中央に高さ35cm程の小さな高まりができる。②前記の高まりを均すことなく7体の死者が一時に葬られる。この時、乱雑に投げこまれはしなかったが、厚く土を被せた様子は、直上の埋土の状況からは認められない。直上の土は、人骨の下の土同様、薄層が互層をなしており、明らかに自然堆積状態である。土をかけたとしても、死者の姿が見えなくなる程度のものであったろう。③埋葬後それほど経過しないで、開口部周囲が一気に崩落する。④その後、若干の崩落が初期に見られたが、以後は、I-19住居跡とその中の本遺構が形成する大きな窪みに向けて、大量の廃棄行為が繰り返され、遺物の大包含層下に埋没してゆく。

以上のような順序が推定されるが、いずれにしても、内陸部に形成された遺跡の中から、その当時の人骨が出土することは稀有な例であり、岩手県でも勿論初めての発見である。当時の人骨が現在まで残存した理由はなんなのか興味があることは言うまでもない。しかし、本土坑の性格が当初から墓塚であったかは定かでない。筆者等は貯蔵穴を墓穴として転用した可能性が強いものと考えている。

#### [遺物]

##### 土器 (第101図、PL-69・70)

本土坑の埋土上位の土器包含層の分は、包含層第5面の遺物としてI-19住居跡の項に掲載した。本土坑の遺物としたのは、その土器包含層より下位から出土したものである。その中でも408・409は埋土4層からの出土であるし、410～412は人骨の包含層内から出土した。409は波状口縁で、口縁端部から頸部まで垂下する隆帯をもち、隆帯上には原体圧痕がある。口縁部の文様は横位の原体圧痕文の間を縦位の原体圧痕文が充填されている。頸部には横位の綾絡文を3条付し、体部には原体LRの単節斜行縄文をもつ。408は縄文のみが付されている。410・411は体部に単軸絡条体縦回転による木目状撚糸文をもち、頸部には横位の刺突列を付す。口縁部は横位の原体圧痕文のみによって施文している。412は体部に横位の羽状縄文を付し、口縁部には原体圧痕文をもつ。また、410・412の体部上端には横位の綾絡文を付している。

##### 石器 (第101図、PL-127H)

4点出土している。中でも196・197は人骨に共伴している。196は石鏃、197は石匙、198は石錐、199は切削器である。

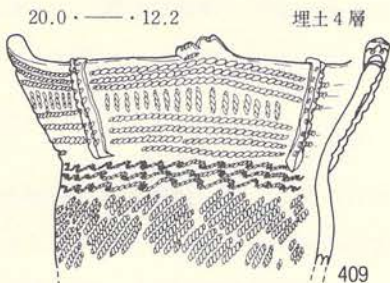
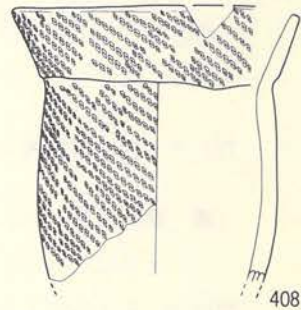
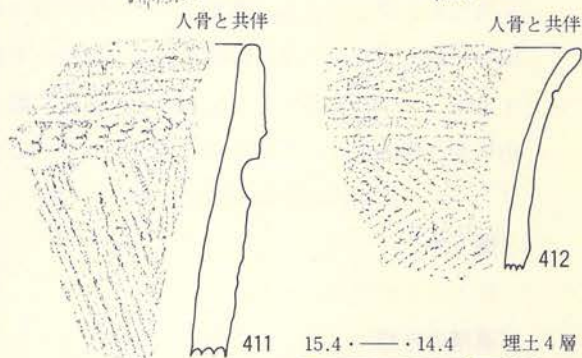
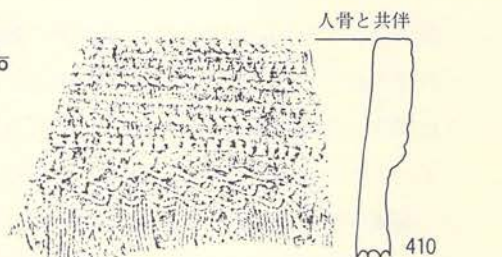
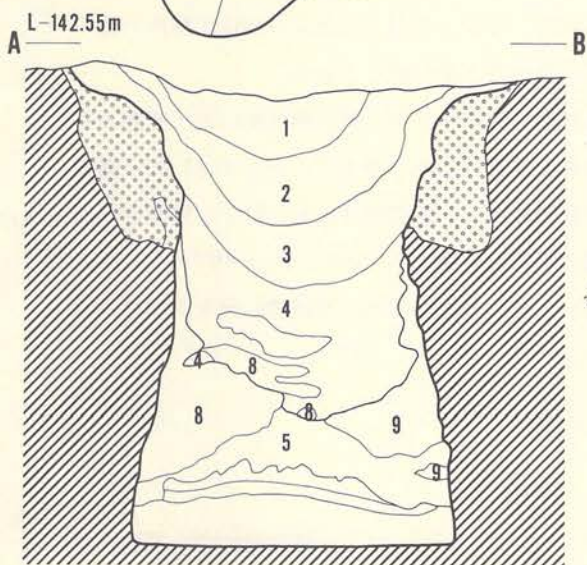
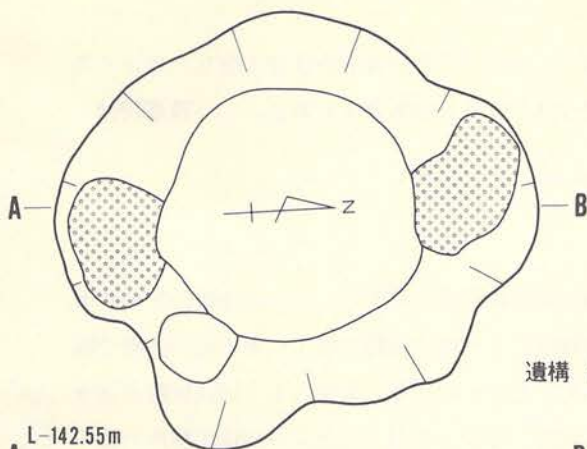
#### [遺構の時期]

408・409はほぼ同時期の土器で中期初葉に属するものであろうが、410～412は前者とは



I-19住居跡内土坑-1土層注記

層位	色調	土性
1	10 YR 5/2 黒褐色	砂質シルト。全体に木炭を含む。
2	〃	1層に同じ。土器、礫、木炭多し。
3	10 YR 5/2 黒褐色	1層に類似。木炭少ない
4	10 YR 5/2~5/3 黒褐色~暗褐色	砂質シルト。1層に類似。雑物全 んど含まず。
5	10 YR 3/5~5/5 暗褐色~鈍い黄褐色	硬い砂質シルト。4層の土とソフ トローム、火山灰の薄い互層。
6	10 YR 5/5~5/4 鈍い黄褐色~鈍い黄橙色	砂質シルト。火山灰に3層の土が 混入。
7	10 YR 5/4~5/4 褐色砂質シルト	3層の土にソフトローム、火山灰 混入。
8	10 YR 5/2 鈍い黄褐色	火山灰ブロック。
9	〃	8層に同じ。



第101図 I-19住居跡内土坑-1

異なり、前期末葉に位置づけられるものであろう。出土状況では後者がほぼ人骨包含層からの出土であることから、本土坑は前期末葉に位置づけられるものと考えられる。（遠藤勝博）

#### 76) I-19住居跡内土坑-2

〔遺構〕（第102図、PL-35D）

この土坑はグリッドI-18に位置し、I-19住居跡の範囲内にある。I-19住居跡との新旧関係は、I-19住居跡の埋土土層図の観察によれば、I-19住居跡の埋土が本土坑の位置で断ち切られていることから、本土坑の方が新しいものと考えられる。本来はI-19住居跡が完全に埋没した後の地表面から掘り込まれたものと思う。なお、この土坑はI-19住居跡内土坑-1の人骨取り上げの為に、半分しか掘り上げていないことを付記しておく。

規模は開口部径約1.35m×1.10mで、底面は径約1.60mを測り、平面形は開口部・底面ともに楕円形を呈している。深さはI-19住居跡の床面から約30cmを測るが、かつては1.00m強の深さと推定される。底面は凹凸もなくほぼ水平状態に近い。断面形は底面に対して壁面が内傾するフラスコ形を呈する。埋土は、黒褐色・褐色・黄褐色等を示す砂質シルトや汚れた八戸火山灰等で構成され、7層に細分されている。この土坑の埋土は平面的な堆積状況を示していることから、人為的に埋め戻された可能性が強い。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

縄文時代の土坑とは思いますが、時期の特定はできない。しかし、I-19住居跡内の土器包含層を掘りこんでいるらしいことから、中期中葉頃に位置づけられるであろう。

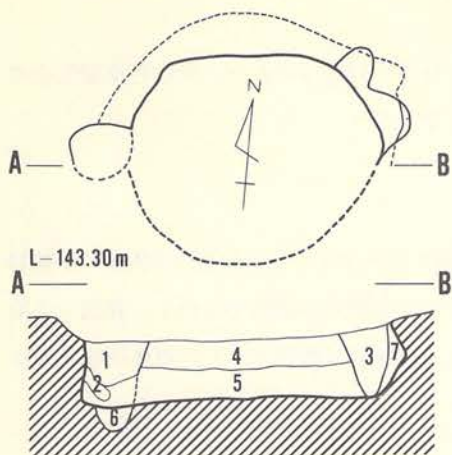
#### 77) I-19住居跡内土坑-3

〔遺構〕（第103図、PL-35C）

この土坑はグリッドI-18に位置し、I-19住居跡の範囲内にある。I-19住居跡との新旧関係は、本土坑がI-19住居跡の床面や柱穴を壊していることから、本土坑の方が新しい。

規模は開口部径約1.00mで、底面は径約2.00m×2.00mを測り、平面形は、開口部が楕円形で底面は円形を呈する。深さはI-19住居跡の床面から約1.80mであり、開口部径や深さから考えるとI-19住居跡の床面に近い土層に掘り込み面があるものと考えられる。底面には凹凸はほとんどないが、南側が若干高くなっている。断面形は底面の上位約1.30mに径約80cmの頸部をもち、壁面が底面に対して約70度内傾するフラスコ形を示している。埋土は黒色・黒褐色・暗褐色・黄褐色・黄橙色等を示す砂質シルトや八戸浮石流凝灰岩とそれらの混合した土で構成



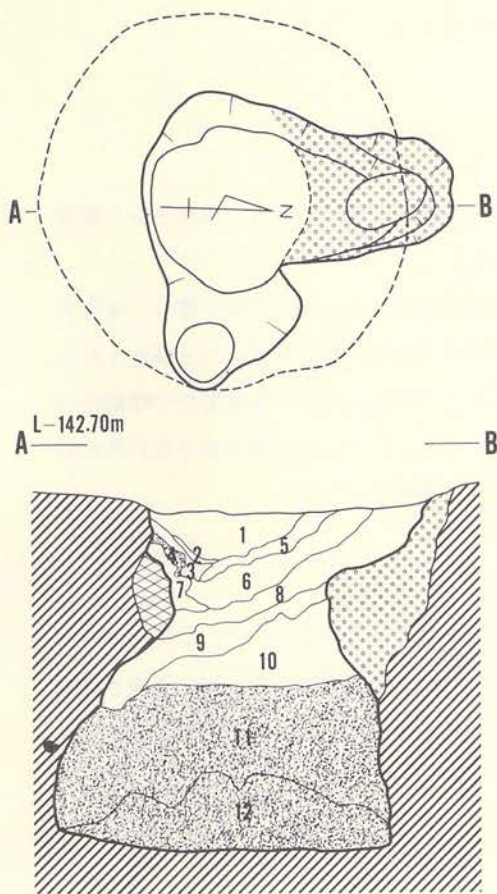


1-19住居跡内土坑-2土層注記

層位	色調	土性
1	10 YR 3/2 黒褐色砂質シルト	4層の土に火山灰ブロック散在。
2	10 YR 3/4 鈍い黄褐色	砂質シルト。火山灰に汚れた土融合。
3	10 YR 3/6-5/6 黄褐色	砂質シルト。火山灰・ソフトローム。
4	10 YR 3/2 黒褐色	砂質シルト。木炭片僅少有り。
5	10 YR 3/2 黒褐色	4層とほぼ同じ。僅かに明色。
6	10 YR 3/4 褐色	汚れた火山灰。
7	10 YR 3/6-5/6 黄褐色~明黄褐色	ソフトロームと汚れた火山灰。

遺構 縮尺  $\frac{1}{40}$

第102図 1-19住居跡内土坑-2



413 縮尺  $\frac{1}{4}$   
遺構 縮尺  $\frac{1}{40}$

1-19住居跡内土坑-3土層注記

層位	色調	土性
1	10 YR 3/2 黒褐色	少し軟かい。木炭片少し有り。
2	10 YR 1.7/1 黒色	木炭有り。
3	10 YR 3/4 鈍い黄褐色	砂質シルト。1層に類似。
4	10 YR 3/4 鈍い黄褐色	火山灰ブロック。
5	10 YR 3/4 暗褐色	砂質シルト。混人物なし。
6	10 YR 3/2 黒褐色	木炭片・浮石混入。1層に類似。
7	〃	火山灰・ソフトローム・暗色土の混合。
8	10 Y 7.7/2-5/2 鈍い黄褐色	若干汚れた火山灰。
9	10 YR 3/4 鈍い黄褐色	汚れたソフトローム。
10	10 YR 3/4 暗褐色	砂質シルト。1層に類似。
11-12	10 YR 3/4 鈍い黄褐色	よごれた白砂。

第103図 1-19住居跡内土坑-3

されており、12層に細分されている。その中で4層・11層・12層は汚れた八戸浮石流凝灰岩の堆積層である。この土坑は人為的に埋め戻された土坑であろう。

[遺物]

土器 (第103図、PL-70)

完形のものが1点出土している。しかし、埋土上部層からの出土である。413は体部に単軸絡条体縦回転による木目状燃糸文が付され、また体部上端には横位の綾絡文を付す。頸部には隆帯をもち、その隆帯は交互刺突によって蛇行している。口縁部は波状を示し、原体圧痕を主体とした文様をもっている。

石器

出土していない。

[遺構の時期]

413の出土により、中期初葉に位置づけられるものとする。

78) I-43土坑

[遺構] (第104図、PL-35B)

この土坑はグリッドI-43に位置し、そのほとんどが路線外に延びている。検出された部分は全体の $\frac{1}{4}$ 未満であるので、全体的なことは不明である。

検出された部分の規模は径約1.50m×0.30mで、底面は径約1.30m×0.20mを測り、検出された部分の平面形は円弧を描いているので、全体形は円形か楕円形を呈するものと推定される。断面形は定かでないが、検出された部分では播鉢状を示している。埋土は極暗褐色や暗褐色のシルトで構成され、4層に細分されている。全体的にみると、八戸浮石流凝灰岩や八戸火山灰の混入が多い。おそらく、人為的に埋め戻された土坑であろう。

[遺物]

土器 (第104図、PL70)

6点ともに埋土内から出土している。414・415は口縁部破片であるが、414は縄文のみが付され、415は沈線で区画され、端部に磨消部をもつ。416は体部破片であるが、沈線で区画された磨消部をもつ。417は無文である。418は隆帯の貼付けがあり、隆帯上に原体圧痕文を付す。419は縄文を付した後、3条の平行沈線によって施文している。

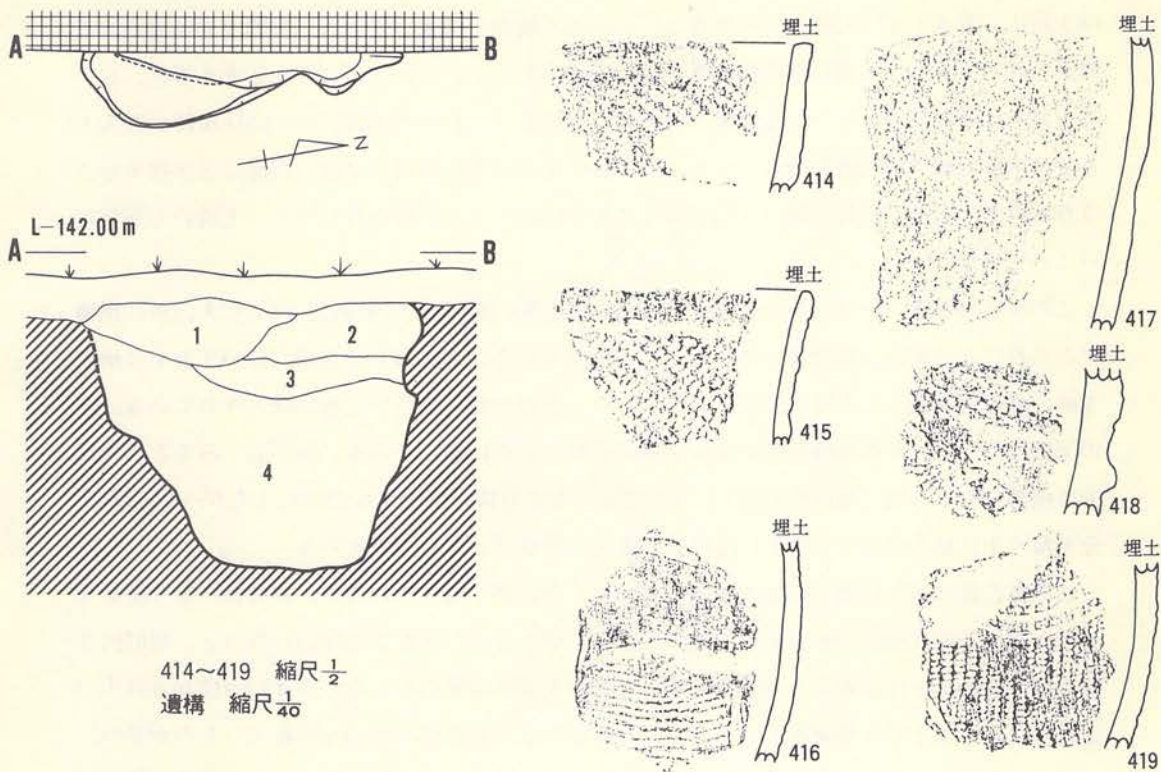
石器

出土していない。

[遺構の時期]

415・416・418・419の存在から、中期中葉に位置づけられるであろう。





第104図 I-43土坑

### 3. 集石群遺構

〔B-08集石群〕 (第105図、PL-37)

この集石群はグリッドB-08・09、C-08・09・10にまたがって位置するが、全体的にみると、B-08・C-08の部分と、B-09・C-09・C-10の部分とに分かれている。他遺構との重複関係では、本集石群の周辺部がB-09住居跡・B-09土坑・C-08土坑と重複しているような位置関係を示しているが、検出された状況では、これらの壁際に構成礫の一部と考えられる礫が落ちこんでいる様子はみられるものの、新旧関係を明確にできる状態ではなかった。C-

08土坑内に混入していた礫と比較すると、C-08土坑内の礫はいずれも二次的な火熱を受けた痕跡を残しており、本集石群の構成礫とは全く違うものである。このことから考えると、B-08土坑とは時期を異にしている遺構と考えられるだろう。B-09土坑とB-09住居跡に混入する礫は本集石群の構成礫と同質とおもえる。特にB-09土坑の場合には、底面にはほぼ接するような状態で1個と北壁に1個の2個が落ちこんでいる。この状況からみると、土坑の方が新しいことが推定される。

この集石群を覆う土は、部分的ではあるが、検出面の最上層に十和田a降下火山灰の堆積がみられ、この付近が窪地状であったことが推定される。それ以外の土層にはいずれも2mm～5mmの浮石粒が混入した黒色土層が覆っており、色調や混入物等で3層に細分されている。礫の下位面はいずれも基本層序第Ⅲ層の中振浮石層の上面に接している。地形的にみると、南部は他の部分より低く窪地状を示し、この部分に本集石群が構成されている。したがって、この部分を覆う土は他の部分より厚く、高位より流入し再堆積したものであろう。

この集石群は北部32個、南部122個の合計154個の礫で構成されるが、北部はあまり密集せず散在し、南部は比較的まとまった在り方を示している。しかし、全体的にみると、規則的な配列関係を示すとは認めがたい部分も多い。礫の大きさは最小のものでは径10cm位から最大では長径1.20m位まで各種混在しているが、全体でみると長径40cm～60cmの範囲のものが多い。一部には欠損した礫や割石状のものもみられるが、ほとんどは円礫で構成されている。礫の形状は円形・隅丸長方形・長円形等雑多である。石質については正式な鑑定を受けてはいないが、安山岩質のもの、チャート系のもの、花崗岩等がみられた。

このような状況を総合して判断した場合、所謂「配石遺構」や「積石遺構」として認定できるかどうか非常に難しい問題である。しかし、本遺跡の立地する地形にこのような礫が密集する状況は有り得ないことであり、このことから考えると人為的に搬入された礫群であることは事実であろう。旧地主談によれば、耕作の際に相当の礫を除去したとのことであるから、以前にはもっと多くの礫が存在したらしいことは推定されるが、規則的な配列状態であったかは不明である。

#### [遺物]

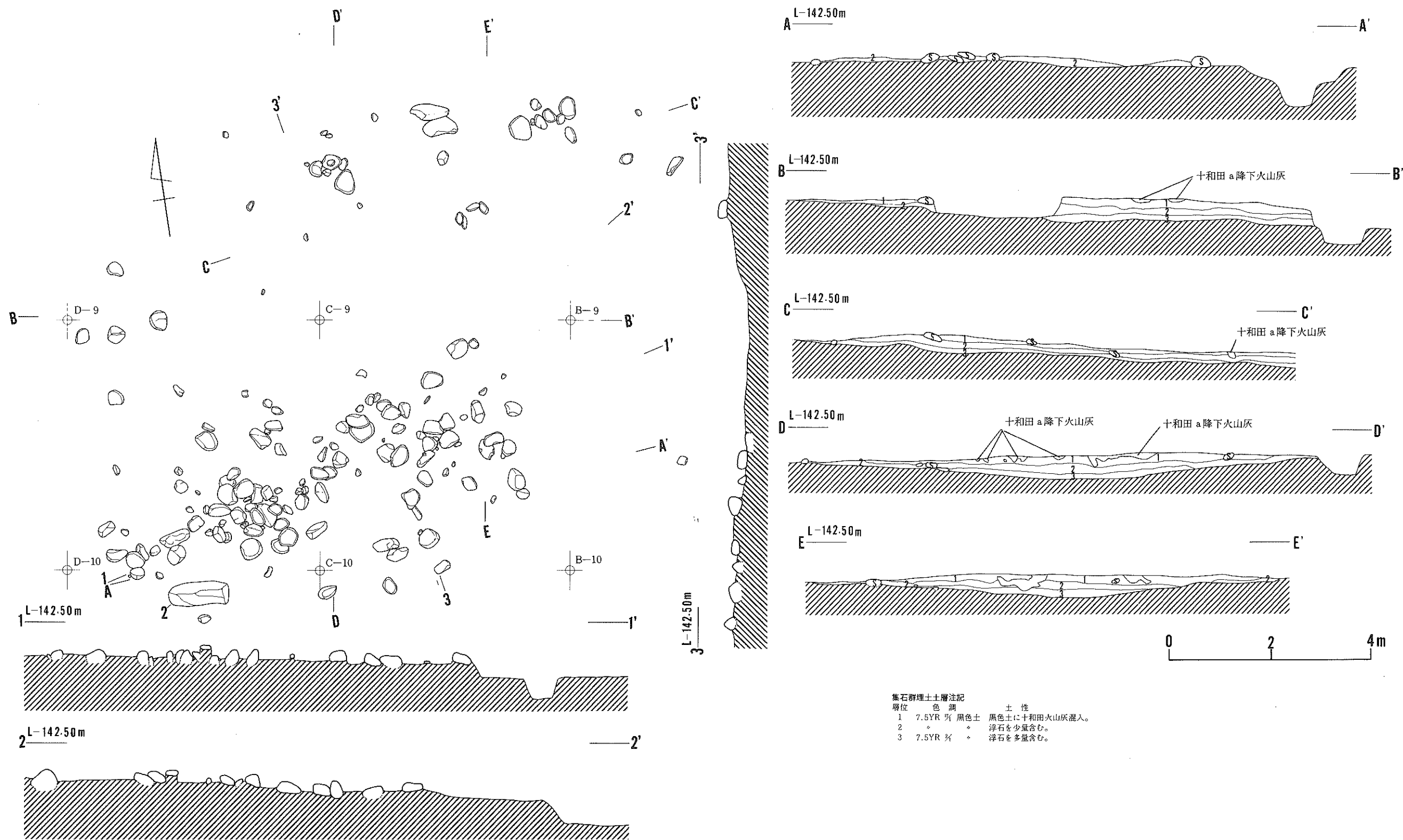
##### 土器 (第106図、PC-70)

直接的に共伴するものかは定かでないが、この範囲内から3点の土器片が出土している。この中に口縁部破片は含まれていないが、422は沈線で区画された後、縄文が磨消されている。他の破片は縄文のみが付されている。

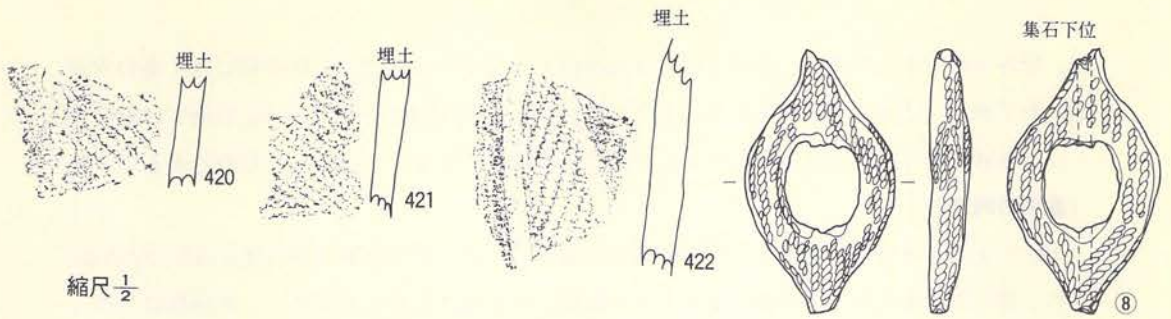
##### 土製品 (第106図、PL-127 I)

⑧の土製品は両端に長く突き出たドーナツ状を呈するもので、図の縦長が約7cm、横径約4

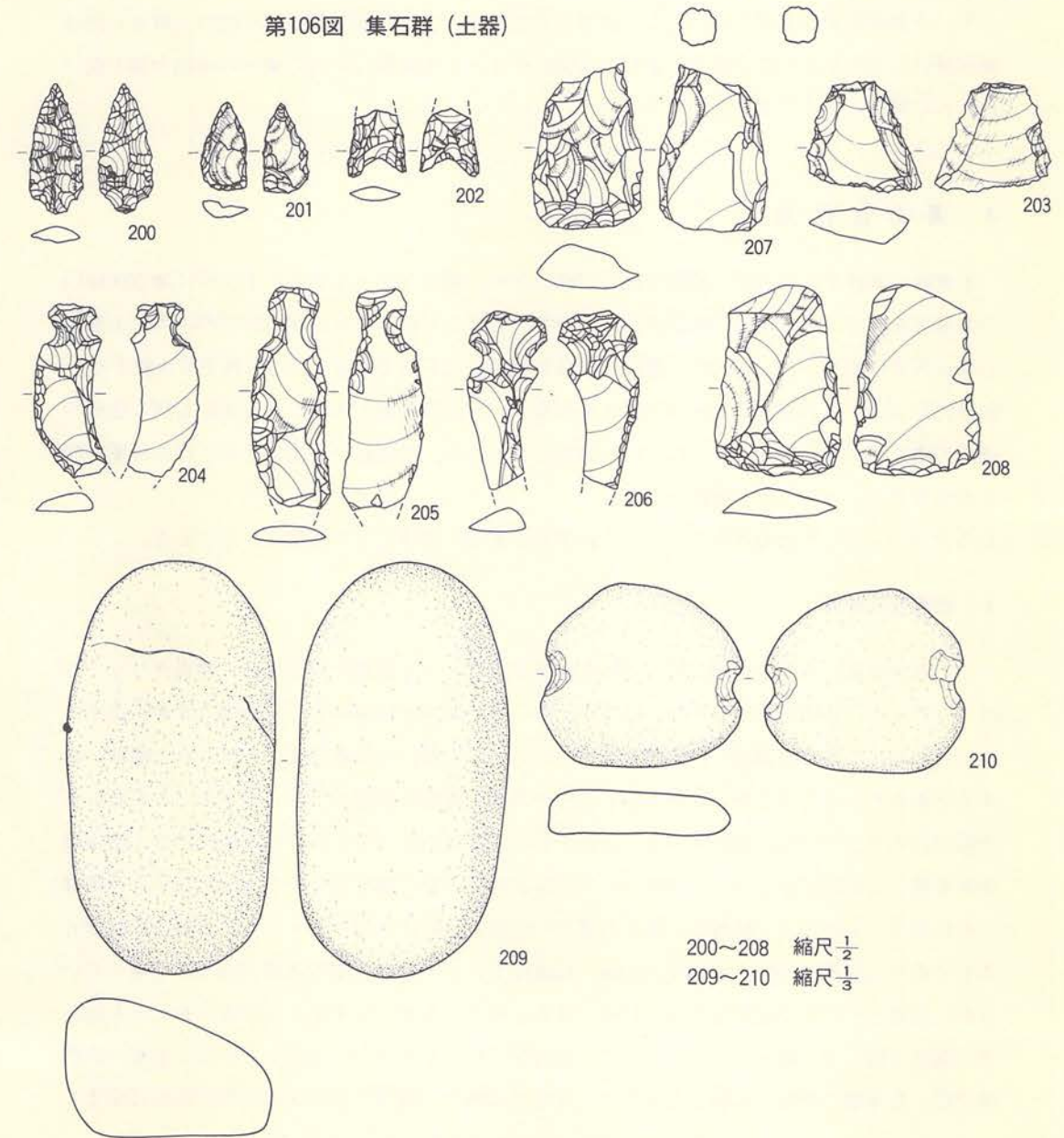




第105図 集石群



第106図 集石群 (土器)



第107図 集石群 (石器)



cm、厚み8mm～9mmを測り、内径は縦2.3cm×横1.9cmである。なお、図の縦には1条の穴が穿たれており、上端から下端まで貫通している。おそらく、紐通し穴であろう。器面には原体R Lによる単節斜行縄文が付されている。なお、本遺構の下位面から出土したものである。

#### [遺構の時期]

422の土器が本遺構に共伴するかが問題であるが、この土器は中期末葉に属するものである。この土器の出土状況が、本遺構を覆う土からの出土であることから考えると、本遺構は少なくとも、中期末葉には完成していたことは事実であろう。また、本遺構より下位の土層からは前期前葉の土器が出土していることをも考え合わせると、本遺構は前期中葉から中期中葉の間に造られた遺構といえるだろう。

## 4. 遺物包含層

本遺跡の調査では2ヶ所の遺物包含層が確認され、調査を行っている。1ヶ所は調査区域内の北端部を中心とする場所で検出されたもので、もう1ヶ所はI-19住居跡の埋土内に土器や石器が大量に投棄され、結果的に遺物包含層を形成したものである。前者と後者を比較すると、結果的には同じ包含層ではあるが、その形成された過程を考えると、必ずしも同じ仕組や過程の中で形成されたとは考えにくい一面を持っている。両者間では出土する土器の所属時期にも差があり、その一端を物語っている。

したがって、ここでは両者を分けて、それぞれを単独の遺構として取扱うことにした。

### 1) 北端部包含層

この包含層は、今回の調査区域内では北端部を中心とする位置で検出され、調査グリッドではA～D-1～18の範囲に分布しているが、その中でもA-12溝跡より北の部分で多く出土している。特にI群の土器にこの傾向が強い。出土した土器には器表に縄文が付された前期に属するとおもわれる尖底土器と、縄文をもたない尖底や丸底・平底の早期に属するとおもわれる土器等があり、一時期に包括される土器群でないことは明らかである。出土層位では、基本層序第V層とした南部浮石層と、同III層の中振浮石層との間に挟まれた土層（同IV層）から両群ともに出土しているが、IV層とした浮石混じりの黒色土層は上位からa・b・c層までに細分されており、層厚は上位から10cm・20cm・15cm位で、いずれの土層も遺跡全面をほぼ覆っているが、各層ともに若干起伏をもっている。地形からみてもグリッドI-20付近がもっとも高く北に向って緩やかに傾斜していることにも起因するものであろう。出土した土器と土層との関係では、基本層序の項でも記したように、a層では縄文の施文された尖底土器が中心に出土し

b層からは条線文系の土器群、c層からは貝殻文系の土器がそれぞれ出土している。しかし、調査中にこれらを明確に識別することができず、一部は混じり合う状態で取り上げた場合もあった。

以上のことから、本包含層から出土した土器は層位的に区分され得る傾向を示してはいるもののここでは形式学的な分類に従って、出土した土器を紹介することにした。分類規準はまとめで詳述するが、早期の土器群を第Ⅰ群、前期の土器群は第Ⅱ群とするが、量的には第Ⅱ群土器の方が多い。

### 〔第Ⅰ群土器〕

この群に入る土器の器表に付されている文様は①貝殻腹縁文 ②貝殻条痕文 ③貝殻背圧痕文 ④沈線文や刺突文 ⑤無文 ⑥条線文 ⑦細隆起線文 等の種類があり、ここではこれらの特徴を基準にして大別し、さらに他の要素を加味して細分した。

#### 1 類

本類には貝殻腹縁文をもつものを一括したが、地文として条痕をもつものもたないもの、そして、沈線と組み合わせるもの等があるのでA・B・Cの3種に細分した。

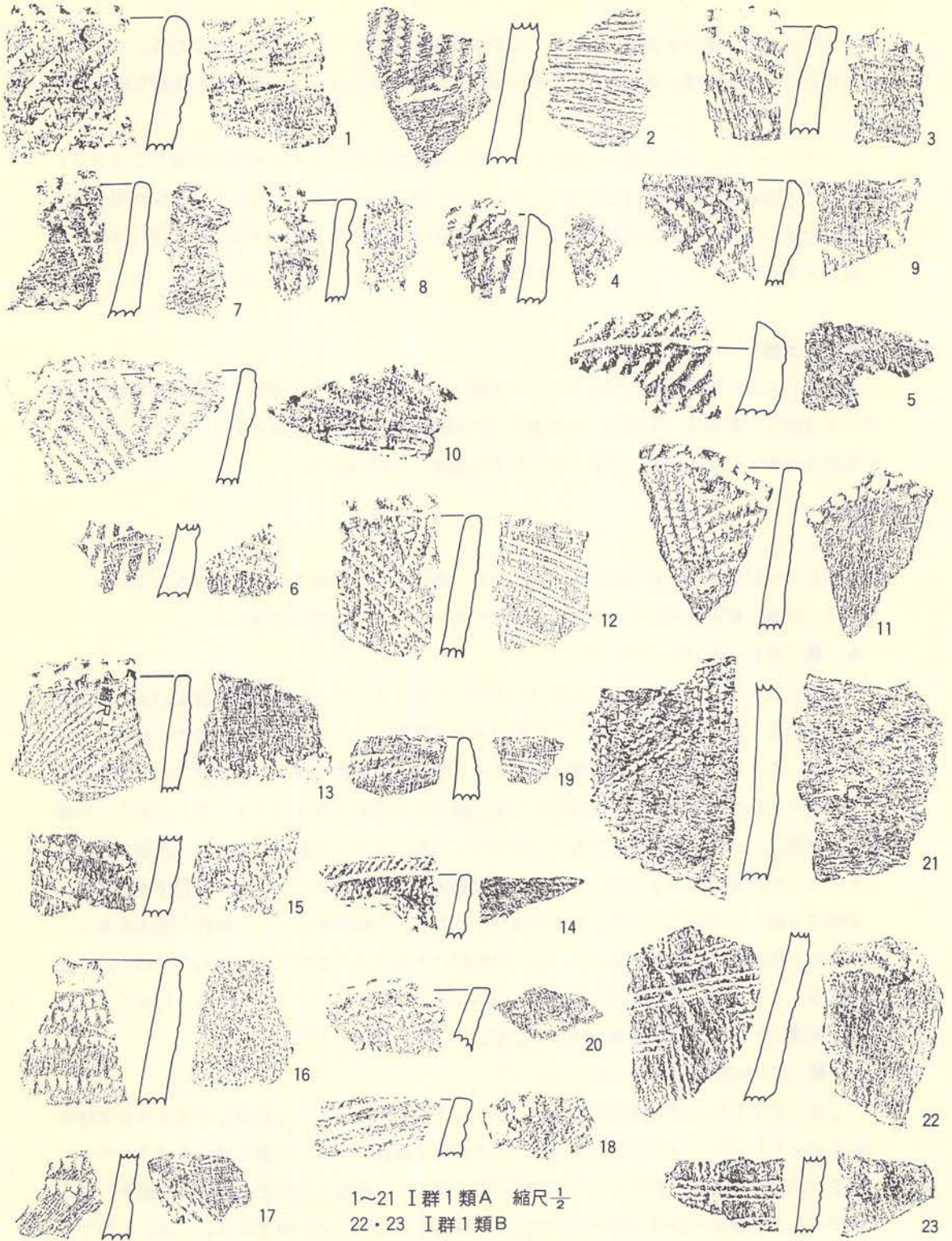
##### A 種 (第108図、PL-71・72)

ここには地文として条痕をもたないもの(1~21)を入れたが、貝殻腹縁文の入れ方に①1~14のように口縁端部と直交または斜交させて腹縁文を入れるもので、二段や一段入るものがある。また斜交させるものは横向きの「ハ」字状と、縦向の逆「ハ」字状に交差させる場合があり、直交・斜行ともに文様帯の下端に横方向に列点を付す例(2・3)がある。口縁は波状縁(7・10・11)と平縁のものが共存し、口唇は丸型・角型・外削ぎ型・角型で凹みをもたないもの等一様でないが、いずれも貝殻刺突や篋先押圧等による刻みを付すものが多い。器厚は4mm~1cm位までであり、胎土にはいずれも若干の繊維が混入し、砂粒の混入も多い。全体的に焼成があまり良くない。②、口縁部に平行させて腹縁文を施すもので15~21が該当する。それ以外の特徴は前のグループと同じである。という2種がある。しかし、文様が若干違うのみで、それ以外の特徴には差がないので同種の土器であろう。

##### B 種 (第108図・第109図、PL-71・72)

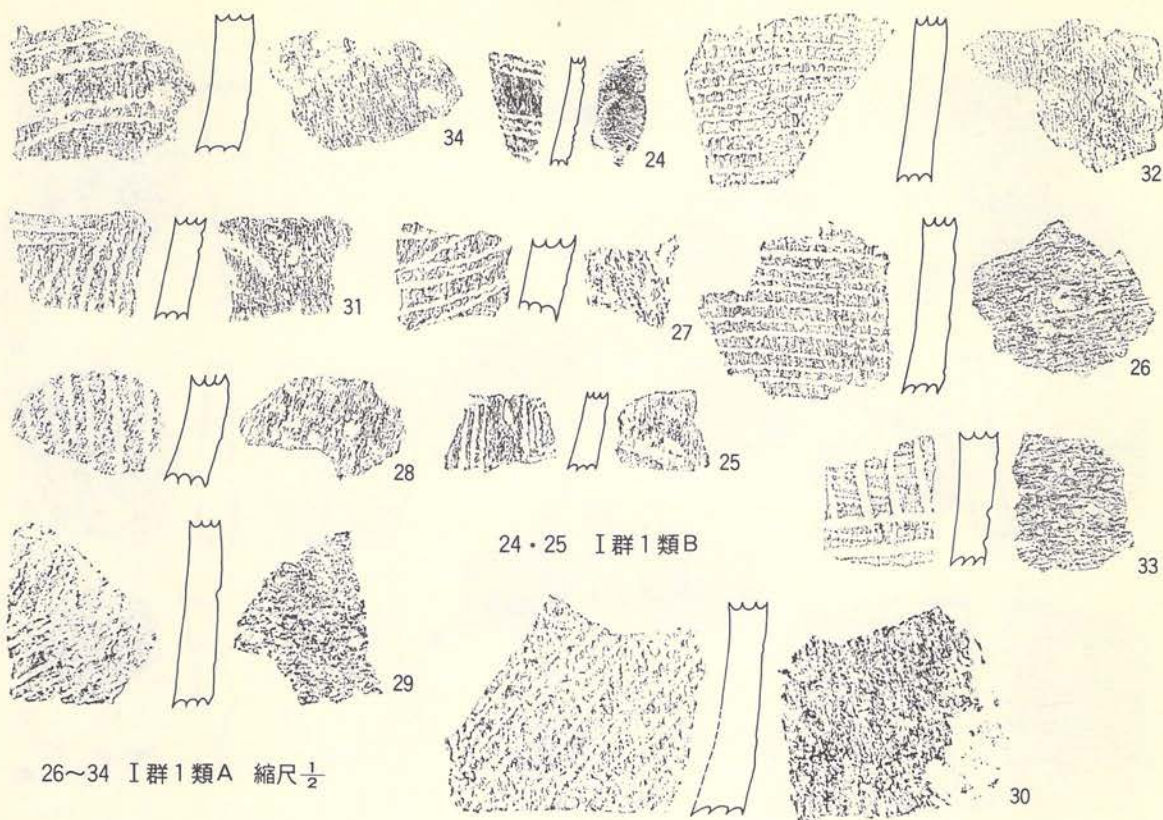
2条~3条平行させて腹縁文を付し、さらにそれらが直交または斜交し合うような文様構成を示すもので22~24が該当する。胎土にはA種と同様に少量の繊維を混入させており、A種より砂粒が少なく、そのかわり石英粒が多く混入し、焼成も良好である。内面調整も良く撫でられ、A種より器厚が薄い。口縁部は残存していないので不明である。一部の土器片の





第108圖 北端部遺物包含層（土器一）





第109図 北端部遺物包含層（土器-2）

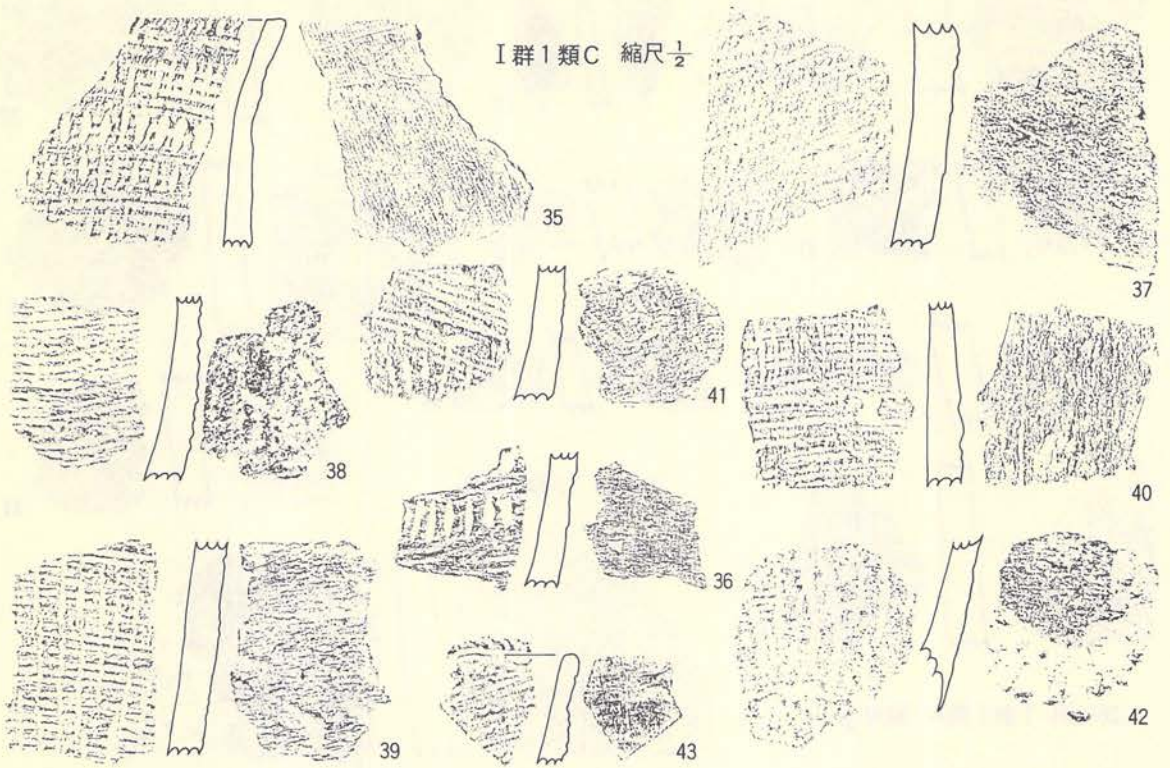
器表には2類A種としたような断続する貝殻条痕らしい痕跡を残す破片がある。

底部の良好な資料はないが、尖底になるものと推定される。

C 種（第110図、PL-72・73）

本種は地文として貝殻条痕文をもち、その上に横位・縦位・斜位等に貝殻腹縁文や篋先による刻み目を入れるものを一括した。腹縁文を施すもの（37~42）は不整の波状口縁を示し、口唇にも腹縁文をもつ。体部は器表全面に横位の条痕を施した後、体部上位は横位、底部寄りには縦位に腹縁文を入れているが、内面に条痕をもつものはない。胎土には微量の繊維と少量の細砂を混入するが、全体的に密な土を使用している。器厚は5mm~1cm位であるが、口縁寄りほど薄くなる傾向がある。色調は暗い褐色を示し、焼成はあまり良くない。内面調整はあまり良好とはいえずザラザラとした感触がある。篋先圧痕による刻み目を付すもの（35・36）は、口縁が平縁で軽く外反し、口唇は幾分丸味をもち、平らに撫でられている。器表には横位の貝殻条痕文をもち、さらに条痕と直交する様な篋先圧痕による刻み目が4段付されている。篋の先端部は円弧状を示し、文様は爪形に良く似ている。胎土には若干の繊維が混





第110図 北端部遺物包含層（土器一3）

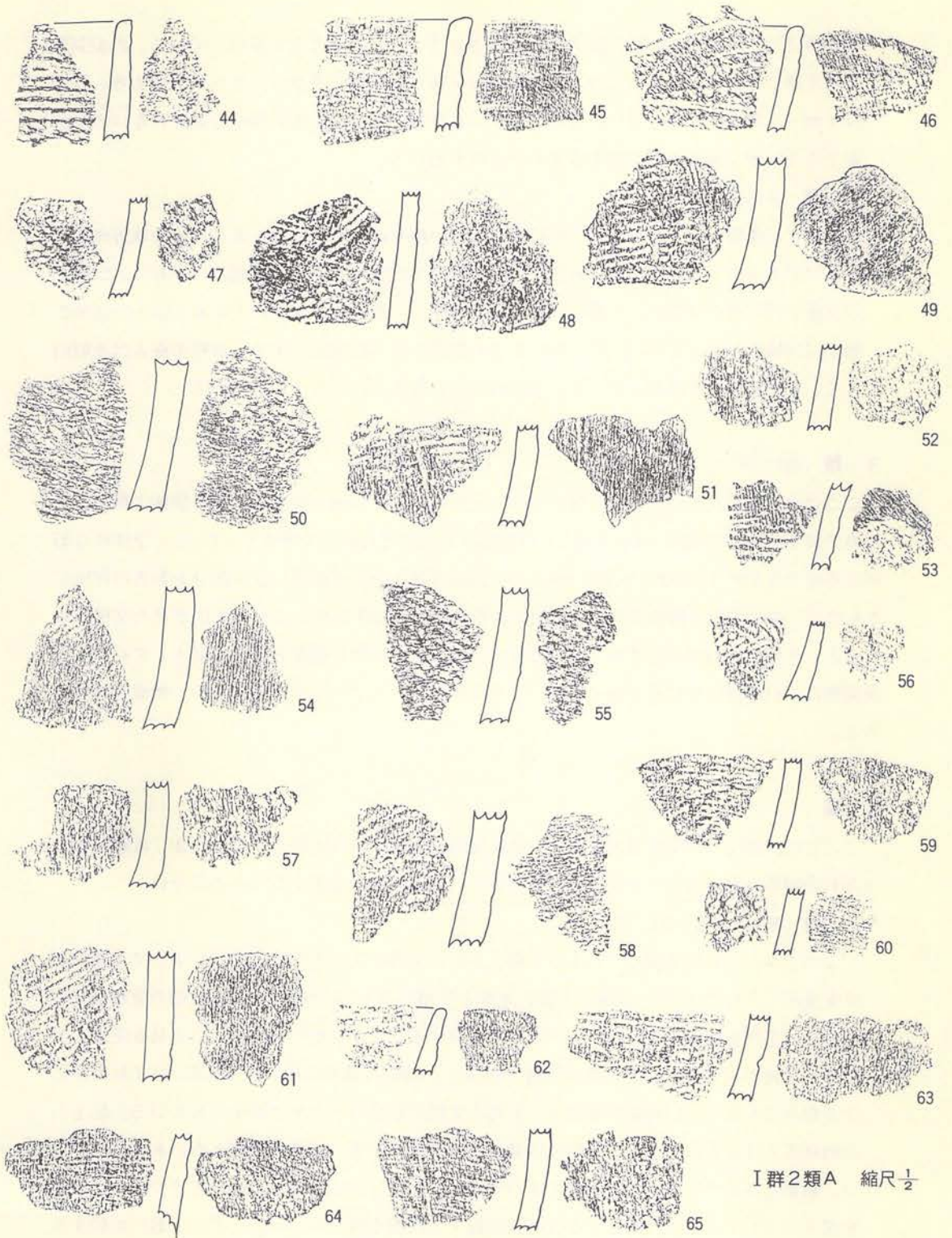
入し、腹縁文のものより砂粒を多目に混入している。器厚は4mm～8mm位であるが、口縁部寄りほど薄い。内面調整は非常に良好で光沢をもつ。色調は外面が褐色で、内面は外面より暗色で焼成は非常に良好である。43は本種の特徴と若干異なる点もあるが、取り合えずここに入れておいた。内面に条痕をもつものを含まず、底部（40・42）は尖底となるであろう。

## 2 類

本類には条痕文をもつものを一括したが、条痕の中に断続するものと、擦痕状のものや線状のものが含まれているので、A種とB種に細分した。

### A 種（第111図、PL-73・74）

ここには器表に断続する貝殻条痕文をもつものを入れたが、内面に条痕を付すものはない。口縁部破片は44～46・62の4片のみであるので詳細は不明であるが、口縁部は条痕文以外の文様を付すものはない。口縁部は波状のものと平縁があり、さらに外傾するものと軽く内弯するものがある。口唇部には指頭押圧によるとみられる刻み目を付すものがある。胎土に微量の



I群2類A 縮尺 $\frac{1}{2}$

第111圖 北端部遺物包含層 (土器-4)



繊維を混入し、砂粒の混入はあまり観察されず、比較的密な土を使用している。内面調整は良く撫でられ光沢をもつもの(45・49・54・76)と粗雑でザラツとしたものがある。器厚は4mm～1cm位と一様でない。焼成はいずれも良好である。底部の良好な破片がないので断定できないが、丸底風の尖底を示すものとおもわれる。

#### B 種 (第112図A、PL-74)

本種には条痕というより擦痕とも呼ぶべき粗い削り痕をもつものを入れた。口縁部破片は66だけであるので詳細は不明であるが、波状口縁で爪先と指頭による刻み目をもつ。口縁部に文様を付すものはない。一部(71～73)に内面にも条痕を付すものがある。67・74以外の胎土には繊維の混入がない。67・74にしても繊維の混入は微量である。砂粒の混入は比較的多く、やや粗い土を使用している。全体的に粗野な感じのする土器群である。

### 3 類 (第112図B、PL-75)

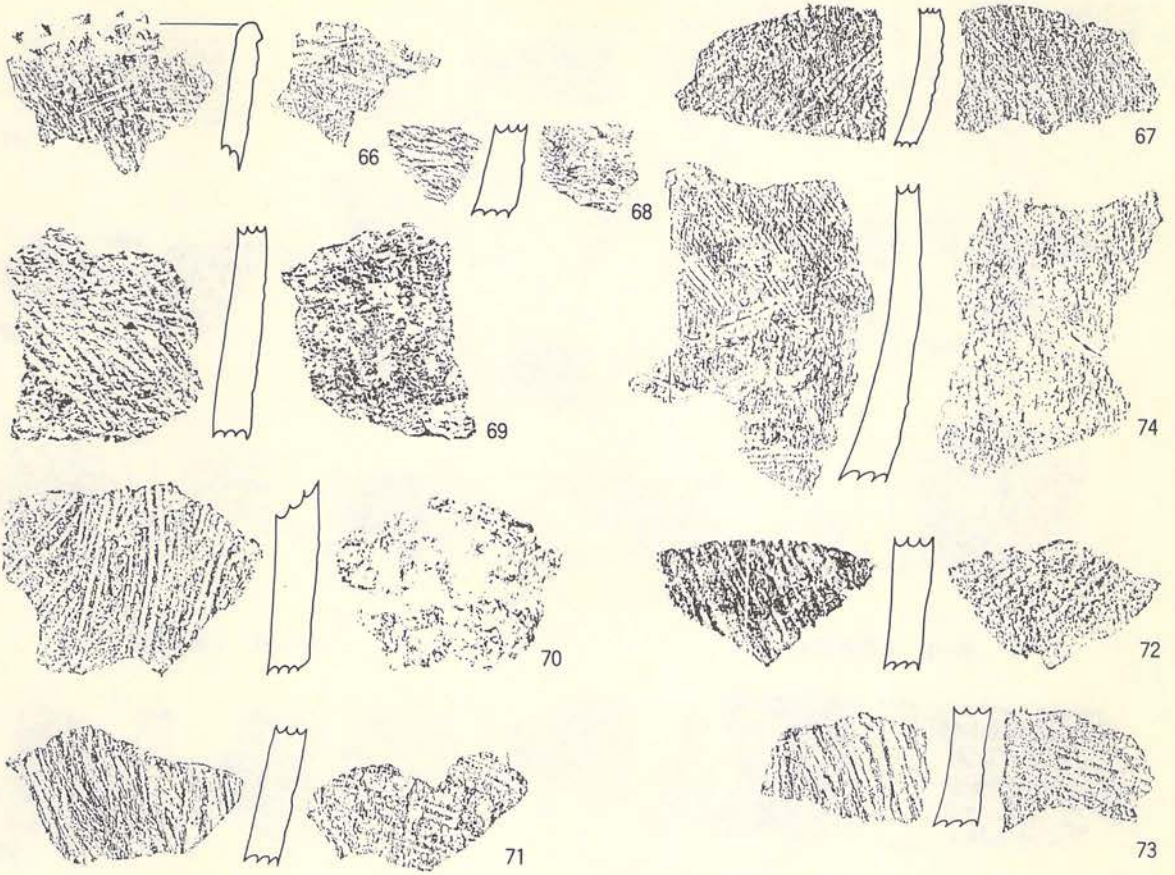
ここには器表に貝殻背圧痕文を付すものを入れた。破片は他にも在るが同一個体の破片であるので割愛した。口縁部は波状を示し、口唇部は外削ぎされ軽い丸味をもっている。全体的な器形は不明であるが、口縁部は外反するらしい。器表の背圧痕文は殻頂に近い部分を器表に押し付けたもので、施文方向は横位である。使用された貝の種類は不明であるが、表出された文様からみると、小型の貝殻が使用されているらしい。胎土には少量の繊維と砂粒が混入している。内面調整は、口縁部付近は良く撫でられ、下半はザラツとしているが条痕はない。焼成は良好である。

### 4 類

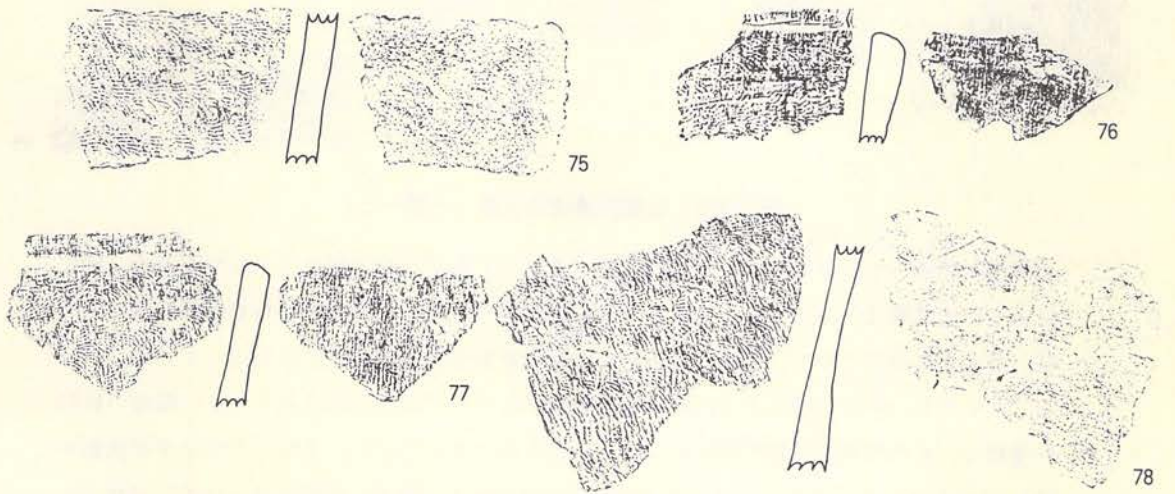
ここには沈線文や刺突文等の貝殻文以外の文様が施文された土器を一括したが、沈線や刺突とそれの組み合わせによって更に細分される。内外面ともに条痕をもつものはない。

#### A 種 (第113図A、PL-75)

このグループには沈線だけによって施文された土器を入れたが、施文具によって①棒状工具を使用したもの(79)、②篋状工具の先端を使用したもの(80～84)、③貝殻の腹縁部とおもわれる工具を使用したもの(85～88)に細分することが可能である。①の工具を使用した土器は1点のみであるので詳細は不明であるが、口縁部は波状口縁で、口唇部には工具押圧による刻み目をもつ。口縁部の文様は、工具の先端で長目の列点や沈線を入れている。胎土への繊維混入はほとんどなく、比較的多量の砂粒を混入する。焼成・調整ともにあまり良くない。粗雑な作りである。②の工具を使用する土器片には胎土に少量の繊維とやや多目の砂粒を混入している。文様は斜交する沈線と平行する沈線で付されている。①の土器に比較する

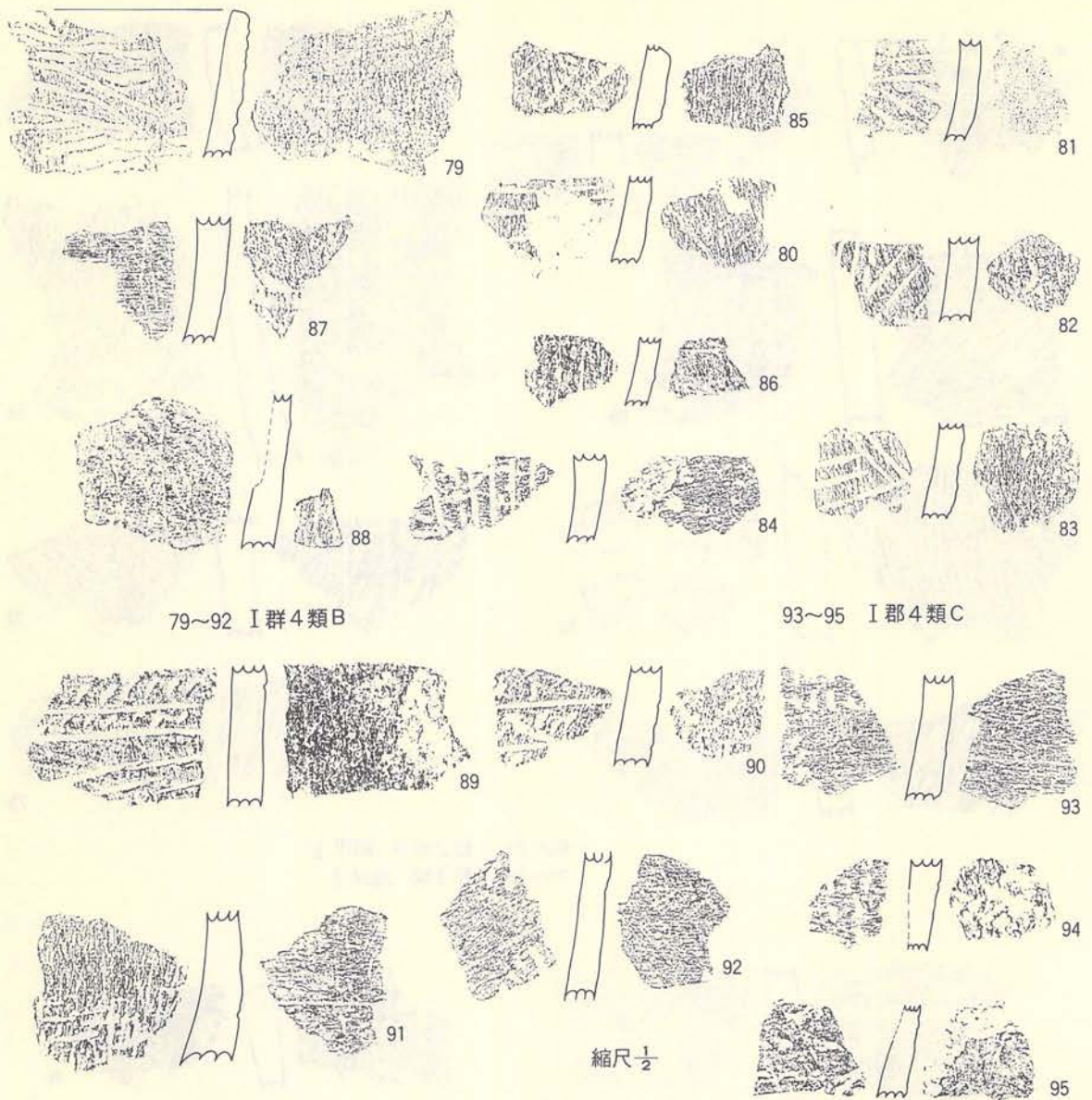


66~74 I 郡 2 類 B 縮尺  $\frac{1}{2}$   
 75~78 I 郡 3 類 縮尺  $\frac{1}{2}$



第112図 北端部遺物包含層 (土器-5)





第113図 北端部遺物包含層 (土器-6)

と調整・焼成ともに良好である。③の工具を使用して施文した土器片は4片であるが、細片であるので詳細は不明である。付された沈線の状況を見ると、断面が三角形状で非常に巾の狭い沈線を表出している。いずれにしても、先端が非常に鋭利な工具を使用していることは明らかであり、蛤の貝殻のように殻頂から腹縁部にかけて縞状の凹凸をもたない種類の貝殻を使用し、その腹縁部を軽く押圧して付されたものと考えている。文様としては平行沈線を付しているのみであるが、口縁部等の状態は不明である。胎土への繊維混入は②の破片より

多く、砂粒の混入は少ない。調整・焼成ともに①よりは良好で、②より若干劣っている。

#### B 種 (第113図B、PL-75)

沈線と爪形状の刺突文をもつ破片を入れたが、89・90の2点が該当する。口縁部を残す破片ではないので詳細は不明であるが、平行する沈線が横位に付され、沈線と沈線の間を不等間隔に斜位の爪形を充填する文様をもつ・沈線・爪形ともに粗雑である。胎土には少量の繊維が混入し、他に砂粒も混じっている。内外面とも調整があまり良好とはいえず、やや粗雑な感のする土器である。焼成は比較的良好である。底部形態は不明である。

#### C 種 (第113図C、PL-75・76)

ここには半截竹管の刺突によるとおもわれる半月形状(91~94)や篋先とおもわれる縦形の刺突痕をもつ(95)ものを一括した。文様としては92~94のように複数列平行して刺突を入れる場合と、91のように不規則に入れる場合がある。胎土には少量の繊維を混入し、砂粒の混入は少なく比較的密な土を使用している。内外面とも調整が良く光沢をもつ部分もあり、焼成は良好である。内外面ともに条痕をもつものはない。底部形態は尖底であろう。

### 5 類 (第114・115図、PL76・77)

本類には無文土器を一括した。本類に入った口縁部破片をみると、口縁が波状のもの、平縁のもの等があり、さらに口唇部に刻みをもつものともたないものが混在している。また、96のように口縁突起部の器表に円形の貼瘤をもつものもみられる。口唇部の作り方をみると、角張るもの、丸味をもつもの、軽く肥厚するもの、外削ぎ気味のもの等種々の形態が混在している。全体的に他の類の土器より作りが粗雑で調整も悪い。胎土には多かれ少なかれ繊維が混入し、中には砂粒を多量に混入するものもみられる。焼成も良好なものとも悪いものが混在している。これらの土器がすべて同時期に相伴するとは考え難いが、取り合えずここに一括しておく。底部の破片が少ないので底部形態が明確でないが、出土しているものは尖底を呈するらしい。

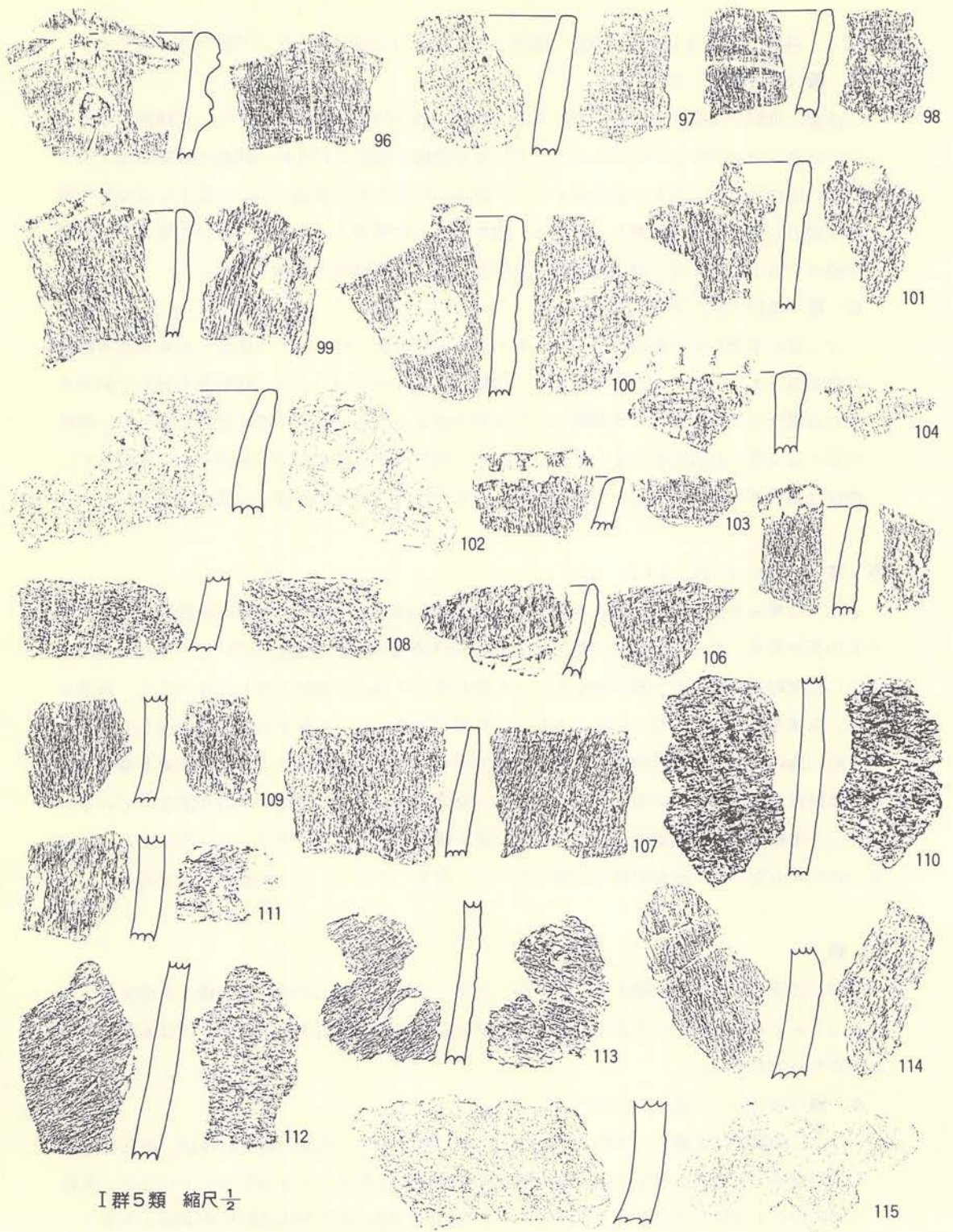
### 6 類

本類には器表に条線文を施すものを一括したが、これらの中には内面に明瞭な条痕をもつものほとんどもないものがあるので両者を細分した。本群に属する土器の中では本類に入る土器がもっとも多い。

#### A 種 (第116・117図、PL-77・78・79)

ここには器表に条線文・内面に条痕文をもつものを入れた。器表の施文順序は、最初に横位の貝殻条痕文を全面に付した後、細い棒状工具の先端を利用して条線を施しているが、条線に何条かを1単位とするような状況はみられない。口縁部破片と体部破片の条線をみると、

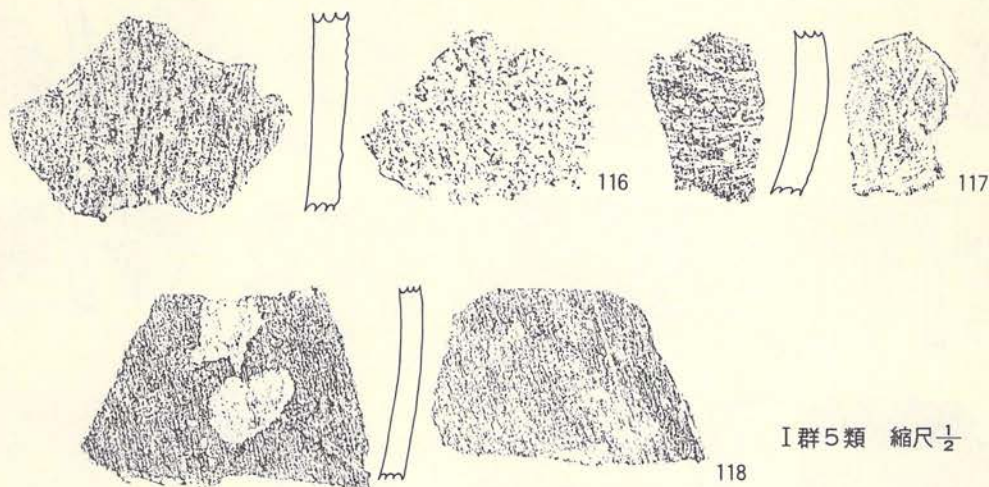




I群5類 縮尺 $\frac{1}{2}$

第114図 北端部遺物包含層 (土器-7)





第115図 北端遺物包含層（土器-8）

口縁部と体部の条線の方向を変えているもの（81・82・97）があり、口縁部の条線は斜位か縦位が多く横位は少ない。口唇部は角張るもの、丸味をもつもの等があり、94のように口唇部に小さな刻み目を付すものもある。明らかに文様を意識して付したとおもわれるもの（88・96・113）もあるが、条線を付す方向には縦位・横位・斜位・格子状・斜格子等があり、乱雑に付された感が強い。条線を付す工具の太さにも太いもの細いもの、条線の深さにも深いもの浅いもの等があり、個体差が大きい。複元されたものがないので全体的なことは不明であるが、波状口縁はなく、口縁部は外反するのが一般的らしい。底部付近の破片（99・105・111）が少ないので断定はできないが、平底ではなく丸底を呈するらしい。胎土には繊維が少量と、砂粒が混入している。器厚は本群の土器の中ではもっとも薄く4mm～6mm位である。内外面ともに調整は概して粗雑である。

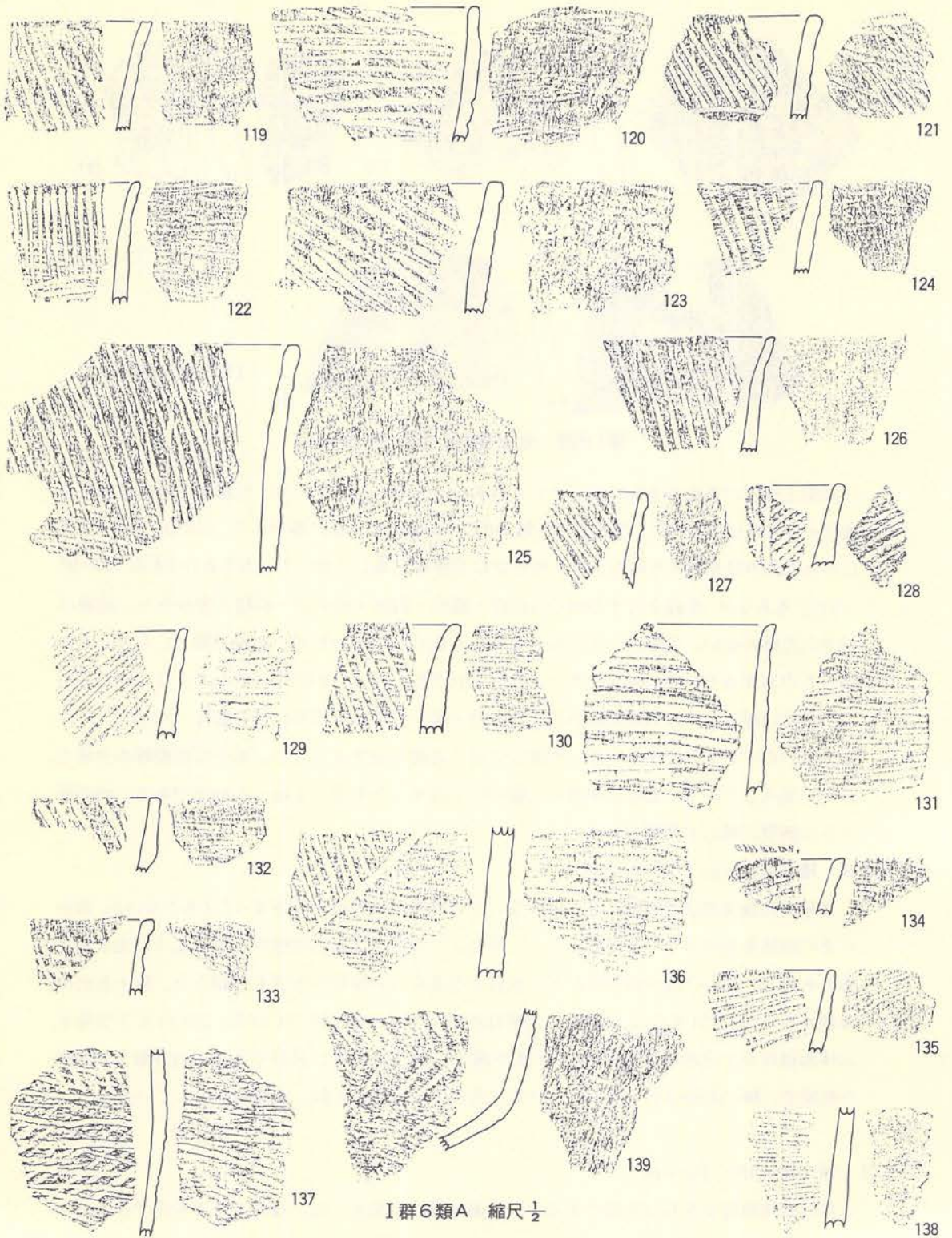
#### B 種（第118図、PL-79・80）

条線文の施文方法は前種と全く差がないが、内面に貝殻条痕文をまったくもたないか、微かにその痕跡を止めるものを一括した。しかし、この種には底部形態が123のように完全に平底のもの、119～122・124のように丸底となるらしい様相を示すものがある。胎土も前種と差がないが、123だけには多量の金雲母が混入し他と全く異っている。123のような胎土の体部破片が1点ある（未掲載）。器厚が薄く、焼成は非常に良好である。内外面とも調整が粗雑で、特に内面はサラッとしている。次の7の胎土に近似した様相を示している。

#### 7 類（第119図、PL-80）

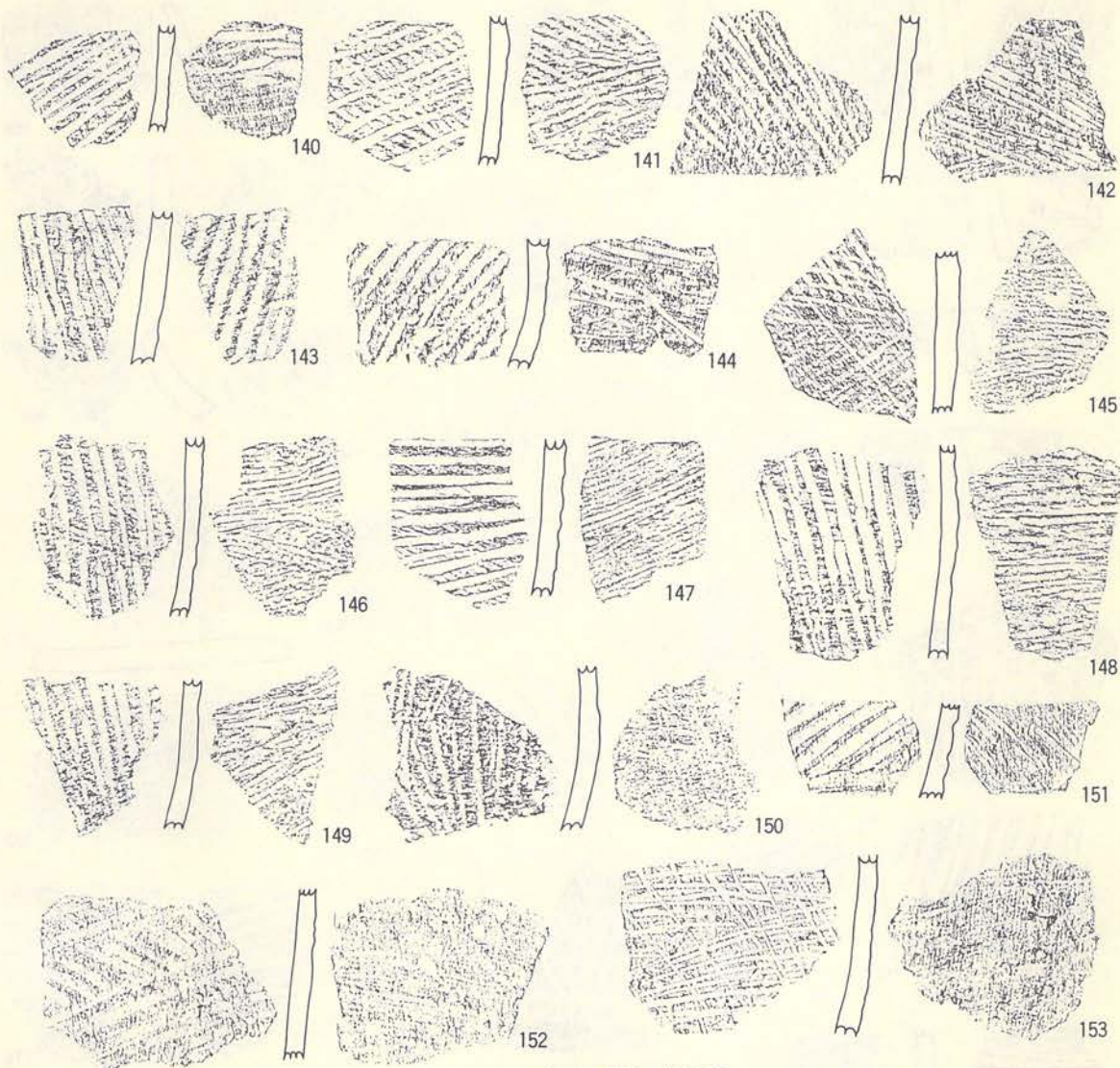
本種は細隆起線文をもつ土器であるが、1個体だけが出土した。複元されたものでみると、





第116圖 北端部遺物包含層 (土器-9)



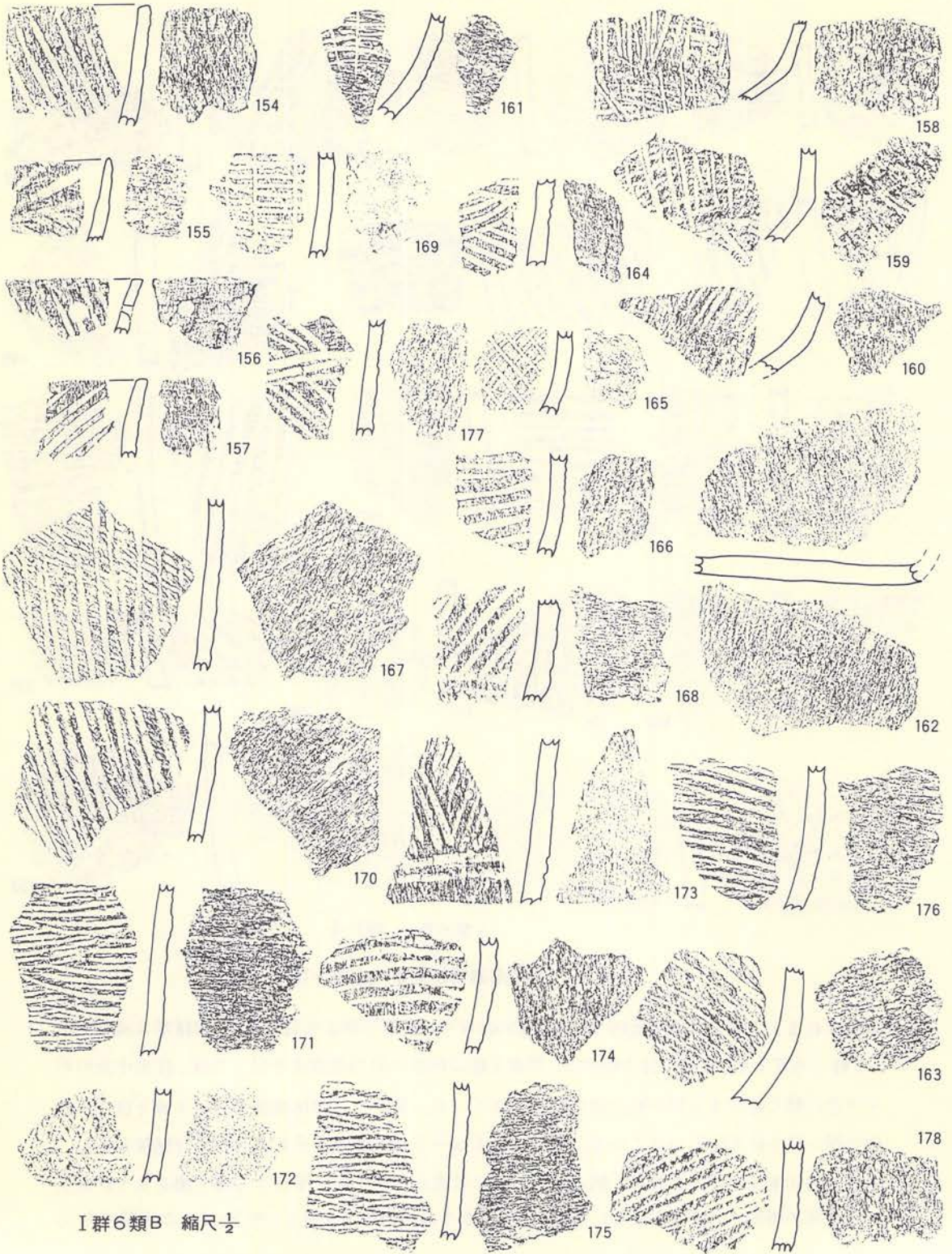


I群6類A 縮尺 $\frac{1}{2}$

第117図 北端部遺物包含層 (土器-10)

推定される大きさは口縁部径19.5cm・器高20cm位で、底部形態は丸底である。口縁部は波状を示し、軽く外反する。文様を付す順序は、器表全面に横位の貝殻条痕文を付した後、体部中央の若干下位に軽く蛇行する細い粘土紐を全周させている。続いて、口縁端部より約3mm下位から斜位に細い粘土紐を貼りつけている。粘土紐は1cm～2cmの間隔でそれぞれが平行関係を示し、本数は約30本位と推定される。粘土紐の両側には微かな粘土紐と平行する撫で痕をもつ。胎土には少量の繊維と、砂粒を混入し、内面には微かな貝殻条痕文を残し、ザラツとした調整である。

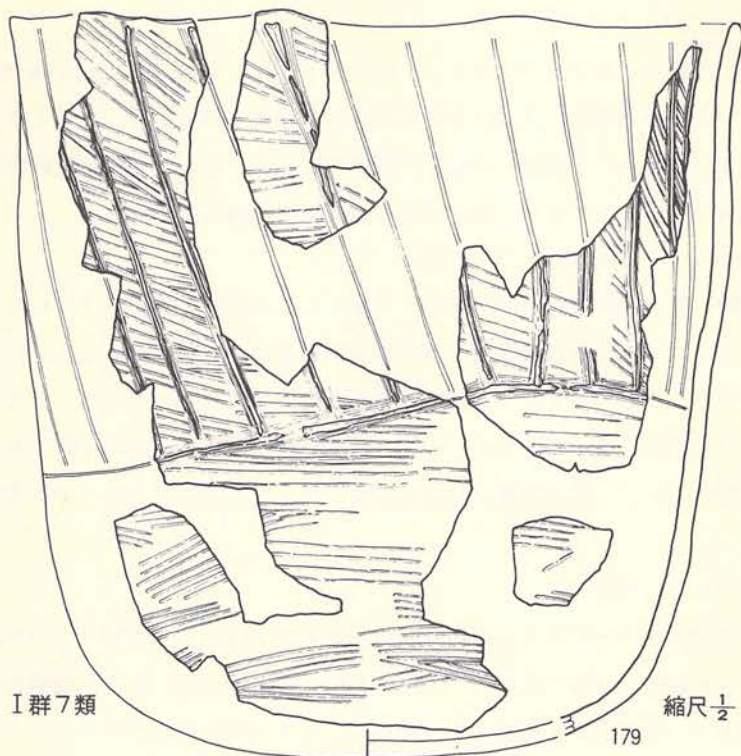




I群6類B 縮尺 $\frac{1}{2}$

第118図 北端部遺物包含層 (土器-11)





第119図 北端部遺物包含層（土器-12）

器厚は4 mm～5 mm位と薄く全体的に均一で、焼成は非常に良い。

### 〔第2群土器〕

本群には、①胎土に繊維を混入している、②底部形態が尖底とおもわれる、③体部に縄文が付されている。等の特徴をもち、前期初頭に属すると考えられる土器を一括したが、これらは①縄文原体の種類と使用方法、②縄文原体以外の施文具との組み合わせと表出文様、によって次の7類に細分した。それらの各類の中で種々の基準によって細分されている。しかし、実測できるように完形になるまで複元された個体は少なく、いずれの実測図も反転によって図上複元したものであり、分類の基礎となったのは破片であることをお断りしておく。

#### 1 類

ここには器表に単節斜行縄文の付されているものを一括したが、使用原体と表出された縄文によって次のA～C種までに細分した。内面に縄文や条痕文を付すものはなく、良く撫でられるか、指頭押えによる軽い凹凸があるかである。



### A 種 (第120図A、PL-81)

非常に太い原体が使用された個体(1~10)で、原体LRを横回転させている。口唇部は角張るもの(9)が1点あるが、他はいずれも丸味をもつか先細り気味となるもので、口縁部は平縁で外反する。胎土には繊維や砂粒が多量に混入しているが、焼成は比較的良好である。器厚は7mm~1cm位とやや厚い。底部形態は丸底風の鈍角尖底である。

### B 種 (第120図B、第121図A、PL-81)

A種に比較すると非常に細い原体を使用して施文した単節斜行縄文を付すもの(11~23)である。その中で11~14は0段多条(3条撚りか)の原体を使用しているし、15には撚り戻しがかかっているようにもみえたが、断定できかねたので取り合えずここに入れた。縄文は原体LR・RLの横回転によって付されている。胎土の調整や焼成は前のA種とまったく差がない。実測土器によれば、底部形態は丸底・鈍角尖底・乳頭状突起のつく尖底等多種類がみられる。

### C 種 (第121図B、PL-82)

ここにはA種に使用された原体の撚りを戻した原体(LL)の横回転によって縄文を付したものである。口縁端部が若干肥厚し、口唇部は丸味をもっている。胎土の調整や焼成はA・B種と同じである。底部破片が出土していないが、A・B種と同様であろう。

### D 種 (第122図A、PL-82)

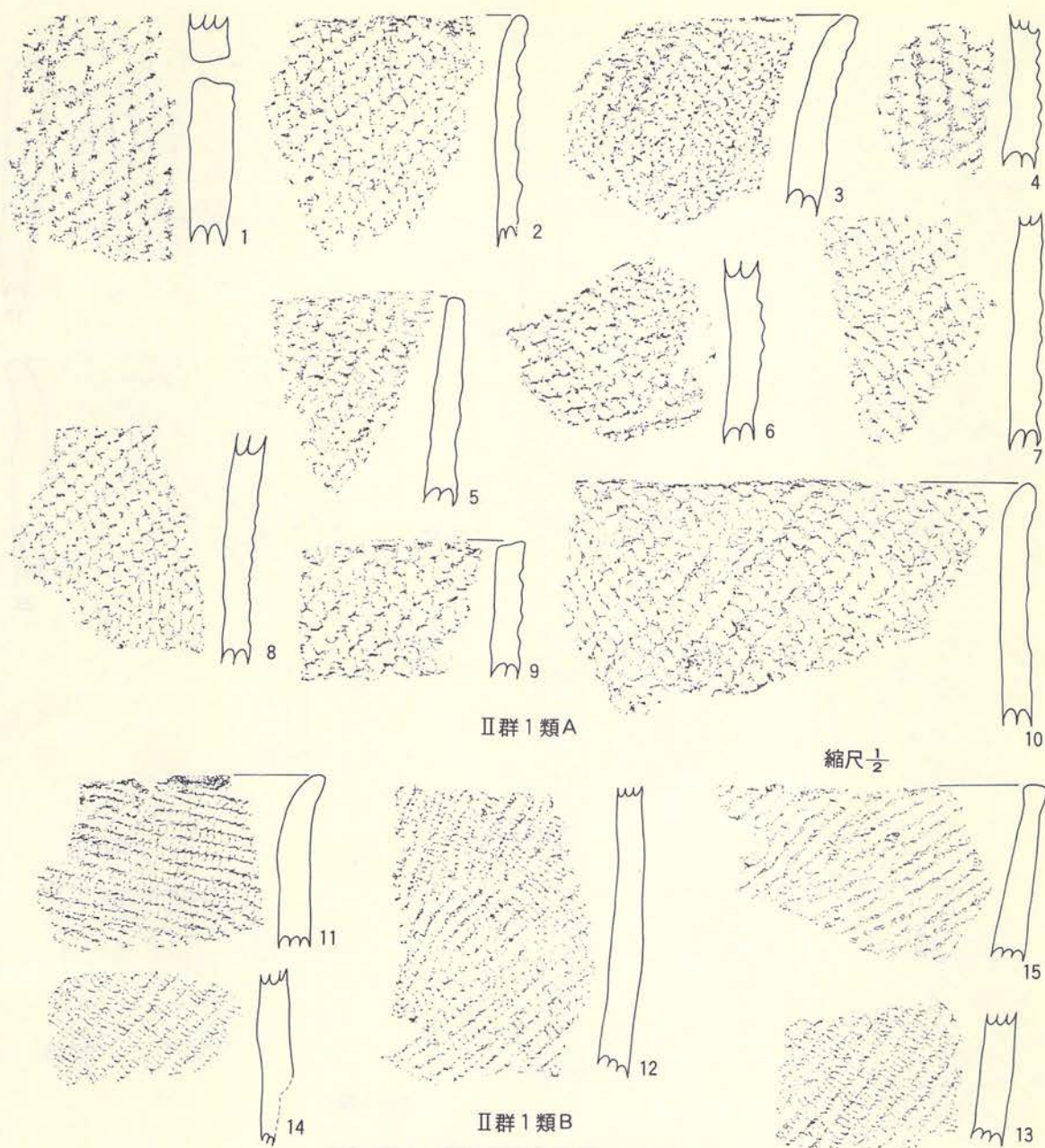
本種は付加条の原体を使用して縄文を付した土器である。LRの原体に細いRの原体を巻きつけた原体を回転して施文したもので、回転方向は縦・横ともにある。口縁部は軽く外反して先細りとなり、口唇部は丸味をもつ。胎土や焼成は前種と差がない。底部は出土がないので定かでないが、おそらく前種と同じであろう。

## 2 類 (第122図B、PL-82)

本類は羽状縄文の付された土器である。撚りの異なる2本の原体を連結させ、横回転させることによって横方向の羽状縄文を表出しているが、途中で原体の上下を持ち換えて回転しているものもある(32)。口縁部は軽く外反し、端部で若干肥厚して口唇は丸味をもつ。底部形態は鈍角尖底が乳頭状突起のつく尖底である。胎土には繊維や砂粒が多く混入しているが、焼成は比較的良好である。内面は良く撫られ、条痕や擦痕をもつものはない。

## 3 類

ここには撚糸文の付された土器を一括したが、他の原体との併用や施文方法によってA~C種まで細分されている。内面には指頭押圧とみられる小起伏がみられるものの、条痕等を付す



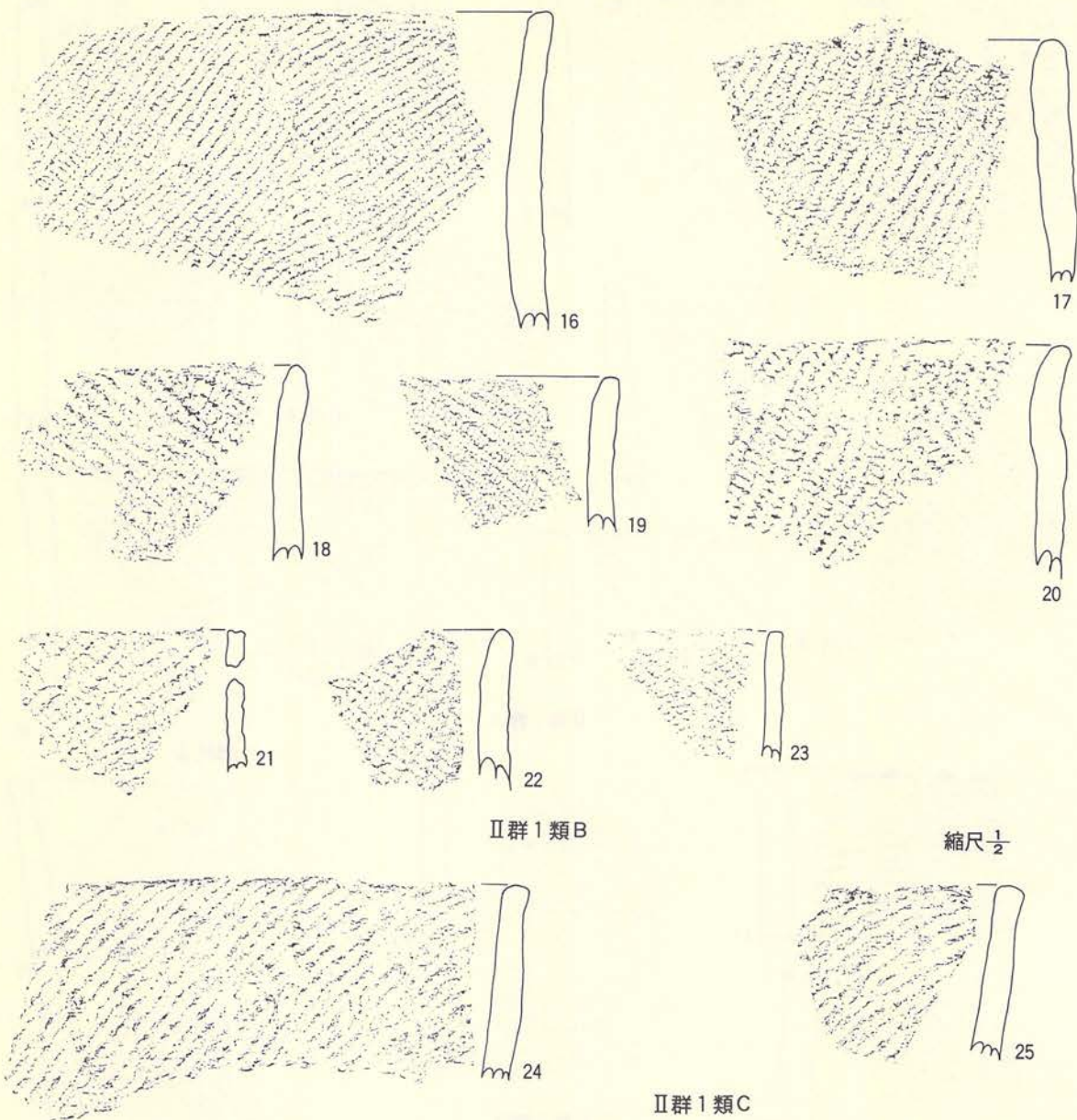
第120図 北端部遺物包含層 (土器-13)

ものはなく、良く撫でられている。

**A 種** (第123図、PL-83)

本類の基準となるもので、器表全面に単軸絡条体の回転による撚糸文の付された土器である。回転方向は縦位・横位・斜位やそれらの組み合わせともみられる。原体の太さも太いもの細いものがある。口縁部は直立・外反するものがあり、端部が先細りとなるものや肥厚



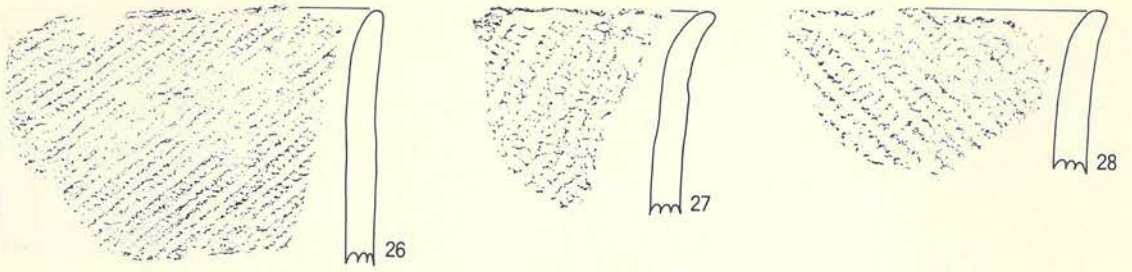


第121図 北端部遺物包含層 (土器-14)

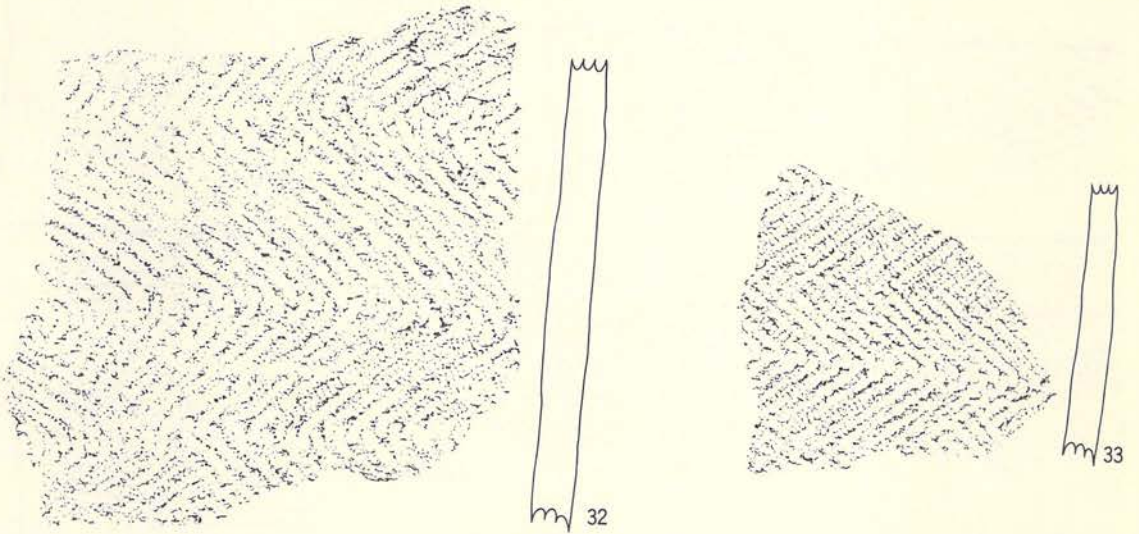
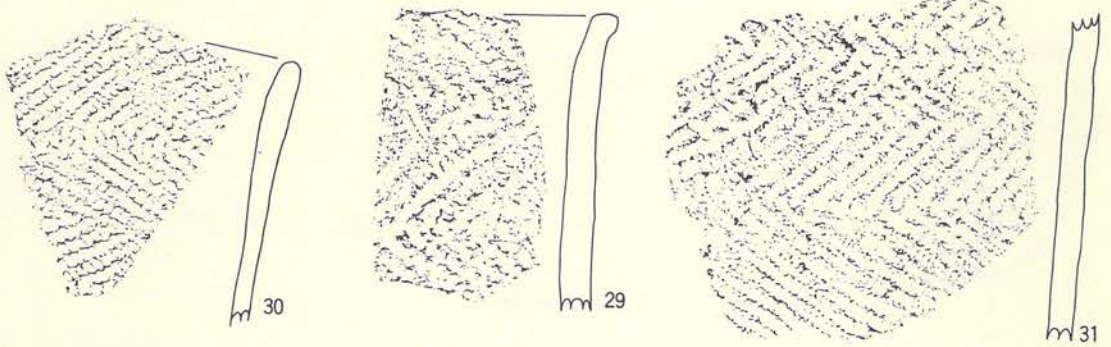
するものもある。口唇部にも丸味をもつもの、角張るもの、軽く内削ぎされるもの等一様ではない。実測土器の底部形態は鈍角尖底である。胎土には1類・2類の土器より多量の繊維と砂粒が混入しているが、焼成は良好である。

**B 種** (第124図A、PL-84)

基本的には前種と同じであるが、地文として捺糸文を付した後、口縁部に端部と平行して



II群1類D



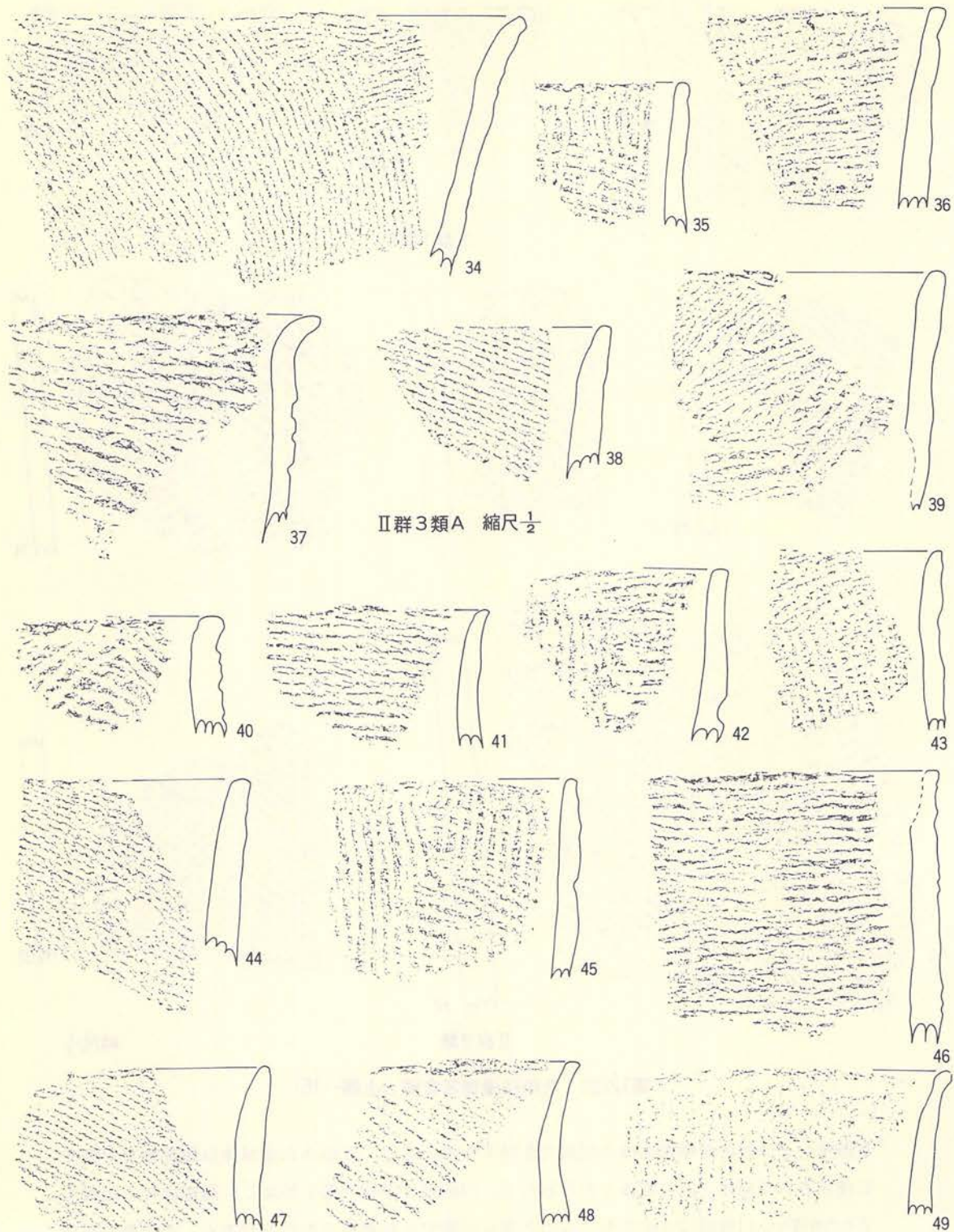
II群2類

縮尺 $\frac{1}{2}$

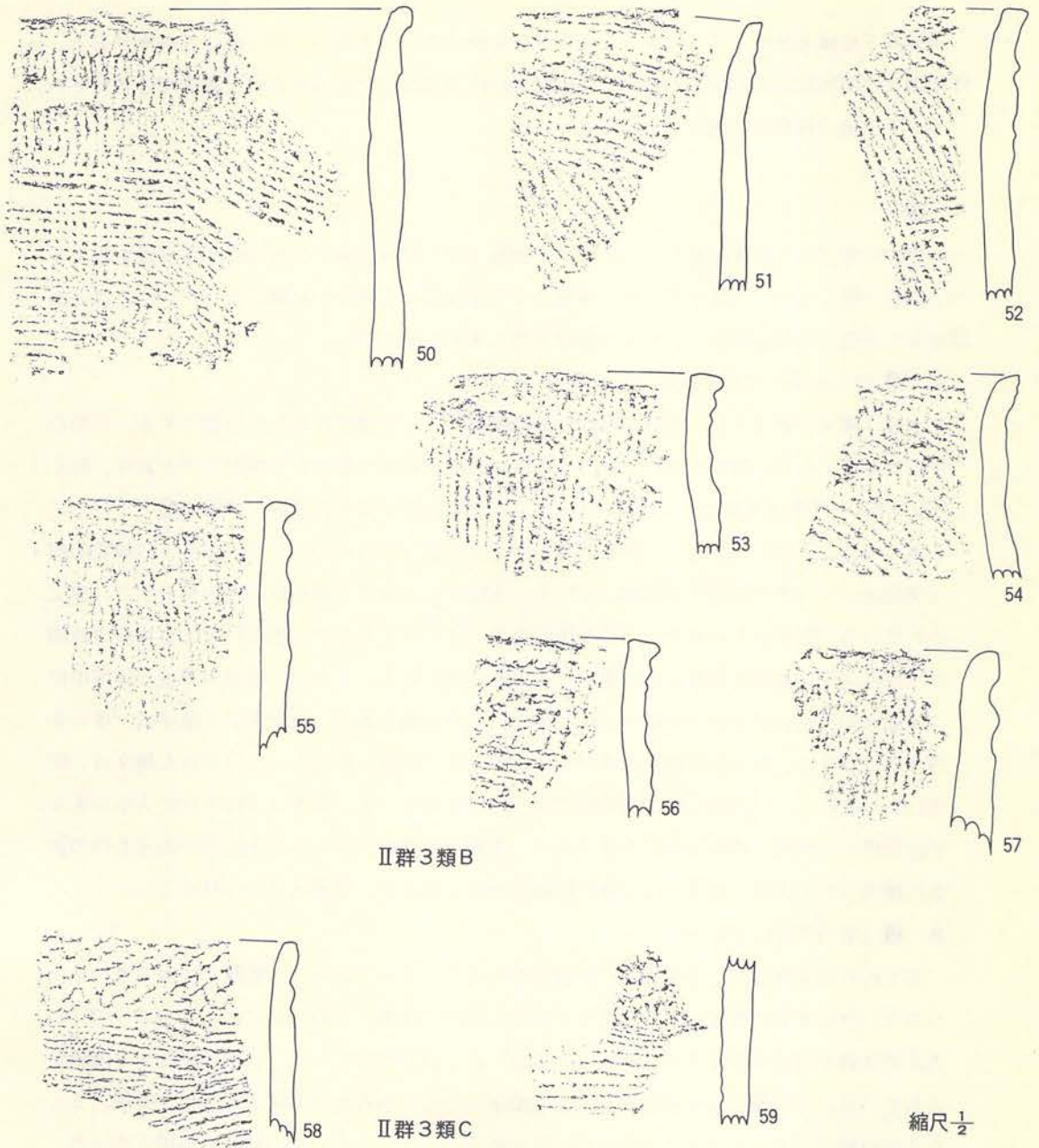
第122図 北端部遺物包含層 (土器-15)

2段ないし3段の単軸絡条体の圧痕文を付すものである。圧痕される原体は体部地文の施文に使用された原体と同じ原体とおもわれる。口縁部は平縁で若干外反し、端部は軽く肥厚するものが多い。口唇部は丸味をもつものと平らに撫でられ角張るものがある。その他の特徴





第123圖 北端部遺物包含層 (土器-16)



第124図 北端部遺物包含層（土器-17）

はA種と同様であるが、底部形態は不明である。

**C 種**（第124図C、PL-84）

この種は体部地文にA種と同じ単軸絡条体の回転施文による撚糸文が付され、口縁部には



全く異なる原体を使用しているものである。破片数は2点であるが、同一個体の破片である。体部地文は横回転による施文であり、口縁部は原体LR横回転による単節斜行縄文が付されている。その他の特徴は前種とまったく差がない。

#### 4 類

本類には地文として縄文をもち、その上に沈線・押し引き沈線・列点等による文様を施文した土器を一括したが、沈線や列点等の種類によってA種～E種までに細分された。この群の土器は全て黒色～暗褐色を示し、多量の繊維を混入するものが多い。

##### A 種 (第125図・第126図A、PL-84)

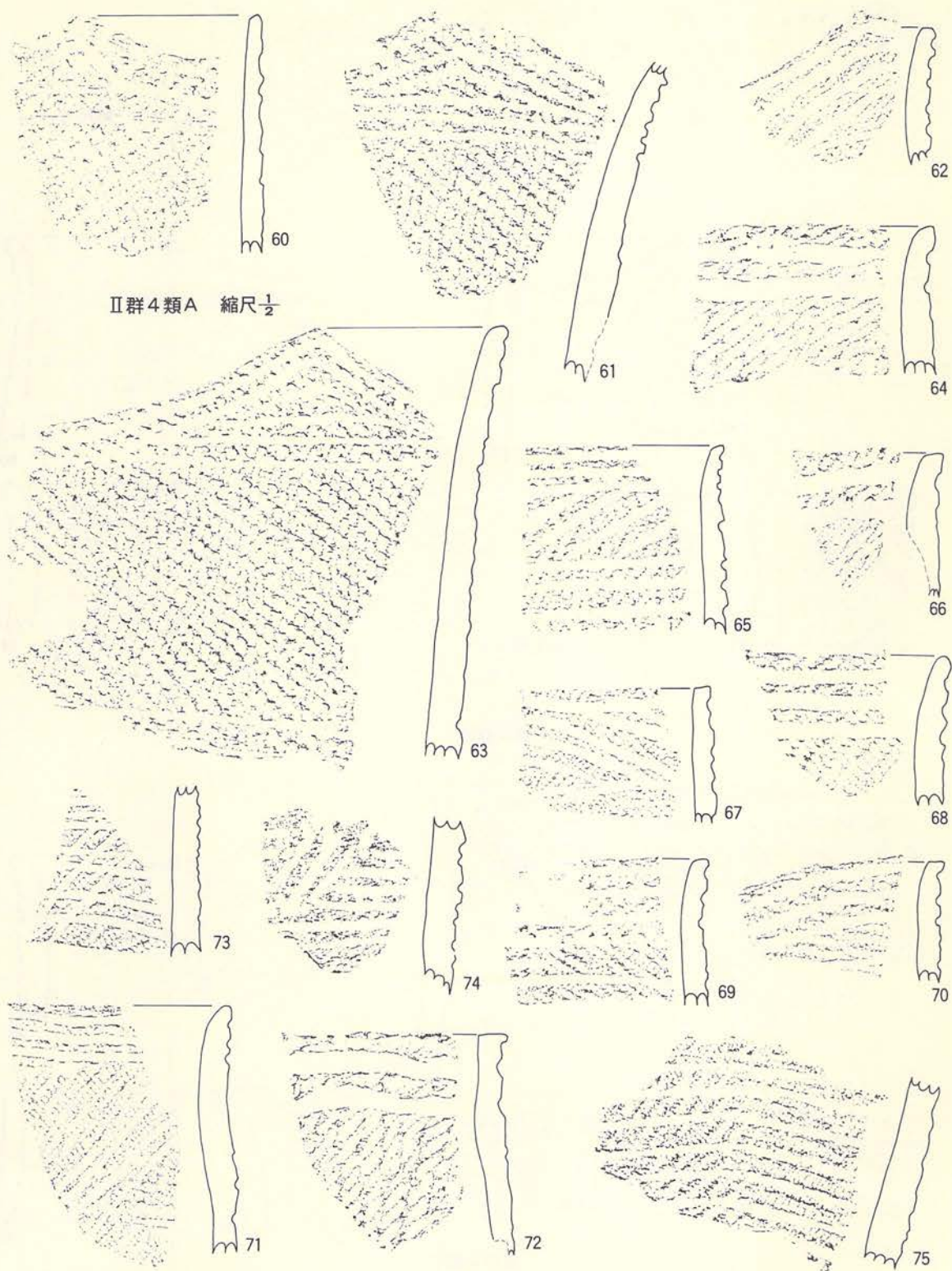
本種は縄文を地文とし、単純な複数の平行沈線によって施文された土器群である。本類の中ではもっとも多い型である。口縁は4単位の大波状を示すものと平縁のものがあり、軽く外反する。口唇部は丸味をもつもの角張って平らなもの等がある。沈線は口縁端部と平行して2条～3条、体部にも5条～7条が器表を全周するように引かれている。また、口縁突起部は突起部に平行する沈線と平縁部に平行する沈線が引かれ、三角形状に区画するように施文されている。完形のものがないので全体的なことは不明であるが、底部付近にも複数の沈線が全周し、更に縦方向にもほぼ等間隔に引かれる例もある。なお、口縁部の沈線と体部中位の沈線は斜方向に引かれた沈線によって繋がっている例もある。沈線を引く順序は、横に全周する方が先で、斜方向や縦方向がその後に行われている。地文として付された縄文は、原体LR・RL・LL・ $\frac{1}{2}$ -RL等の横回転によって付されている。器形は深鉢だけで大小がある。底部形態には丸底と鈍角尖底のものがある。内面に指頭の撫でによる小起伏があるものの調整は概ね良好である。胎土には多量の繊維と砂粒が混入し、焼成はあまり良くない。

##### B 種 (第126図B、PL-85)

基本的にはA種と同じであるが、沈線が押し引きによって付され、断続しているものを入れたが、沈線を引く順序がA種と異っている。量的には多くない。特に79・80の破片では斜方向の沈線を引いて全体を何分割(4分割か)かに割りつけてから、口縁と平行する沈線を入れている。この種に入る土器が全てこの順序になっているかは不明であるが、前種とまったく逆の順序になっていることは注目しなければならない。その他の特徴は前種とまったく差がない。

##### C 種 (第126図C、PL-86)

ここには先の沈線が列点状に付されるものを入れたが、本類の中では数が少ない。胎土や調整・焼成・器形は先のA・B種と差がない。

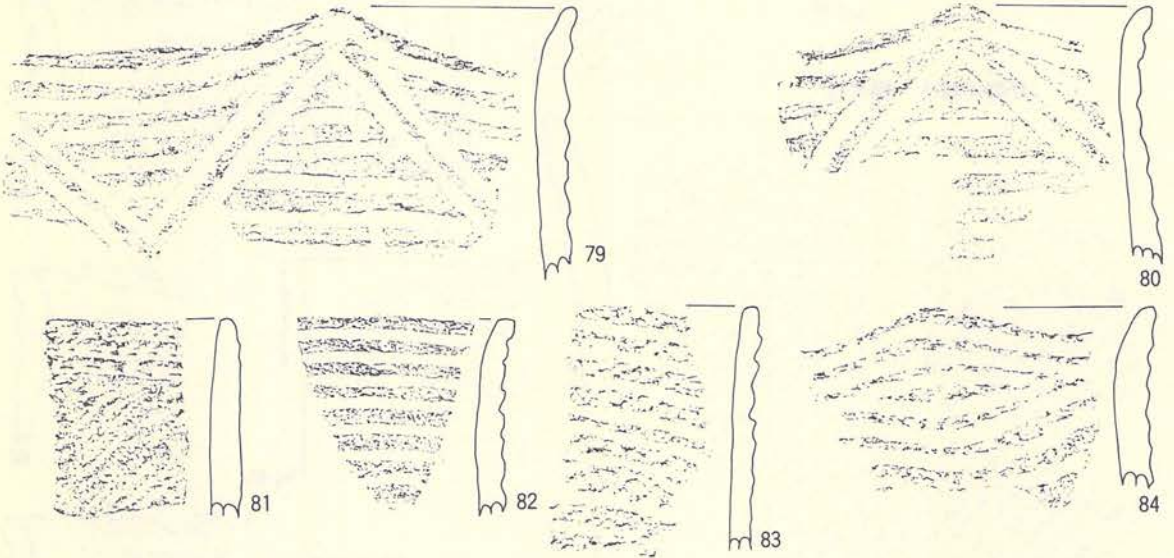


第125図 北端部遺物包含層 (土器-18)

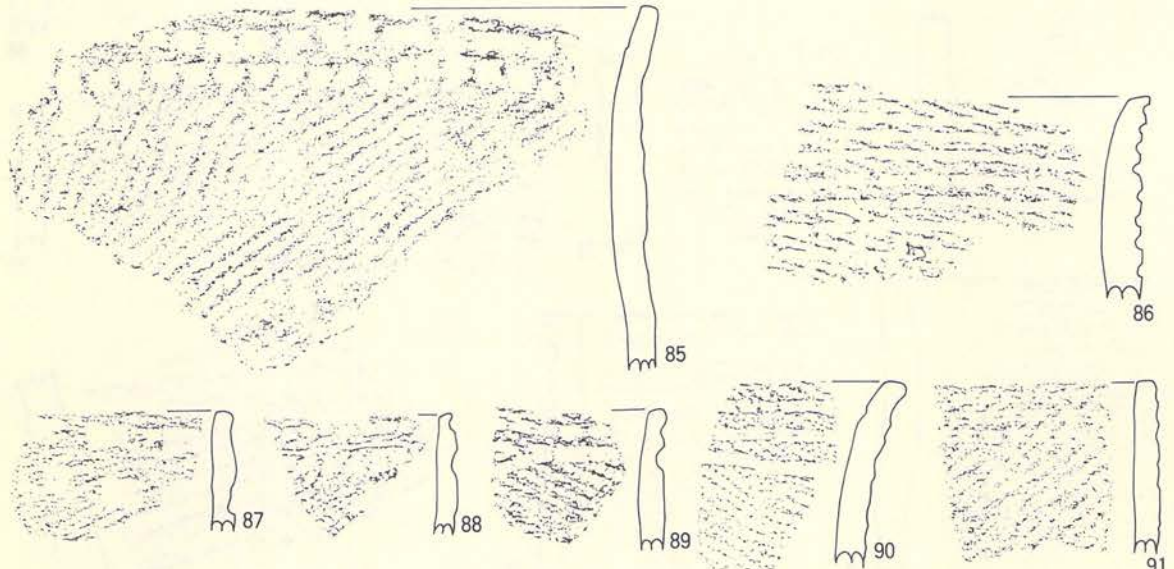




Ⅱ群4類A

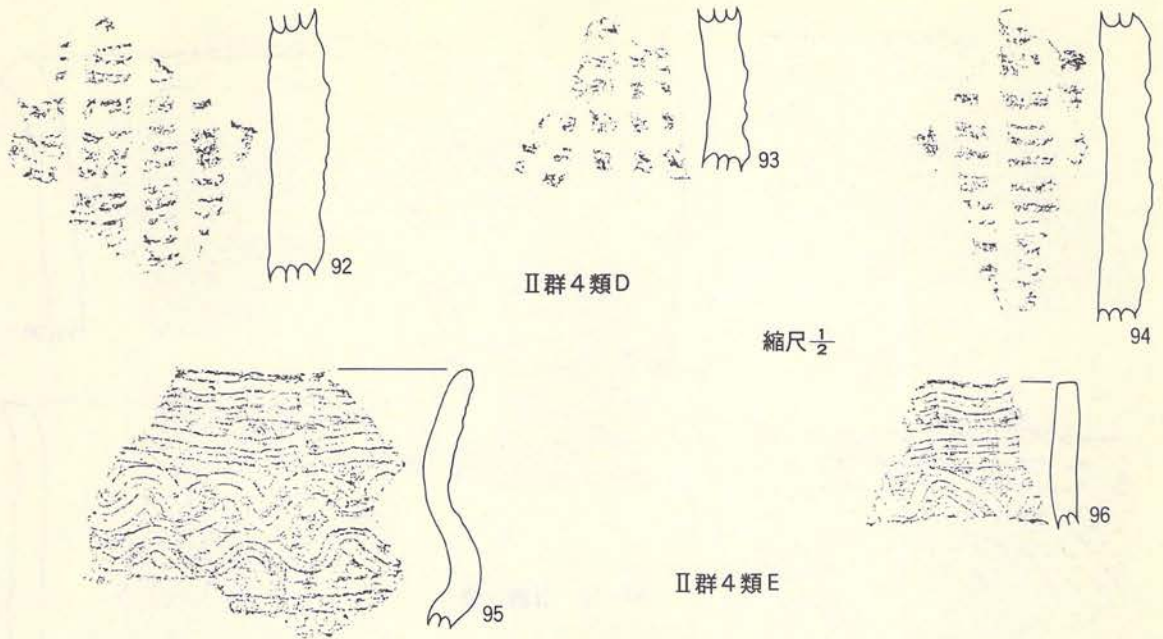


Ⅱ群4類B



Ⅱ群4類C

第126圖 北端部遺物包含層 (土器-19)



第127図 北端部遺物包含層 (土器20)

D 種(第127図A、PL-86)

ここには沈線を格子目状に引く土器を入れたが、次のE種とともに数の少ないものである。先のA種～C種に比較すると、胎土への繊維混入が多く、焼成の悪い土器である。器厚も本類の中ではもっとも厚い。複元された個体がないので全体的なことは不明である。

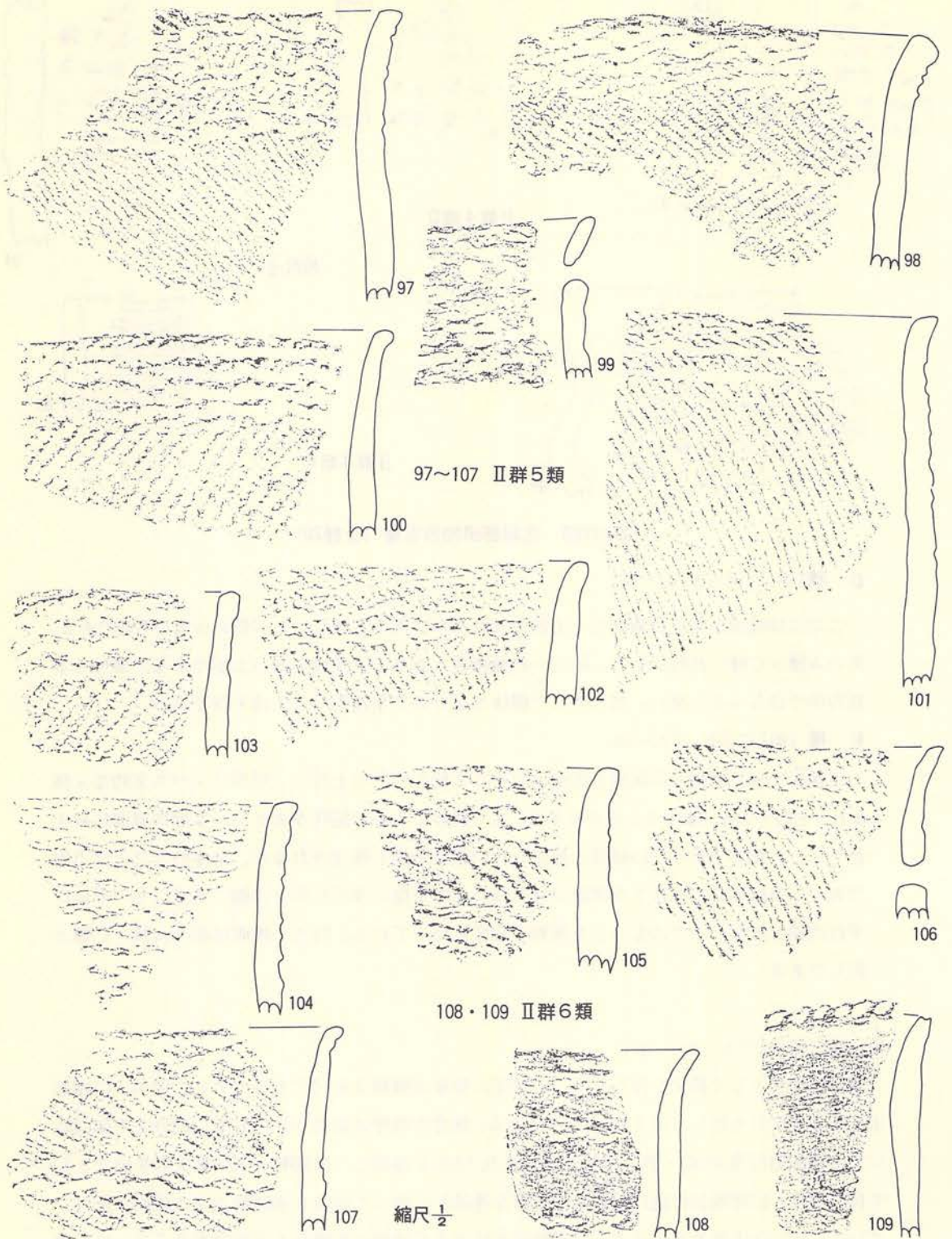
E 種(第127図B、PL-86)

口縁部文様に直線と波状線を組み合わせた文様を付した土器で、所謂コンパス文的な文様をもつ土器である。破片は2点であるが、同一個体である可能性が大きい。器形は肩部に最大径をもって頸部で窄み、口縁部は外反し、口縁は平縁と推定されるが、全体的なことは不明である。口縁端部に平行する沈線が付され、その下位に波状を示す沈線、さらにその下位に平行沈線と本類の中ではもっとも複雑な施文を行っている。胎土や焼成は前のA種～C種と同じである。

5 類(第128図A、PL-87)

本類は地文として縄文を付した後、口縁部に数条の綾絡文を付す土器である。中には口縁部より若干下位にも付している例(107)もある。施文の順序は器表全面に原体LRやRLの横回転による単節斜行縄文(97・99・107)や、原体LRとRLを連結して横回転し羽状縄文等を地文として付した後、口縁端部付近に何個かの結節を連続して作った原体を横回転させた綾絡文を付している。107の状況からみると、口縁端部だけでなく体部にも施文する場合があるらしい。遺





第128図 北端部遺物包含層 (土器-21)



第129図 北端部遺物包含層（土器-22）

構内（H-41土坑-1）から出土したほぼ完形になる土器（359・360）では底部が平底であるので、本類に入る土器は平底になるものと推定される。胎土には少量の繊維と砂粒が混入し、焼成は良い。

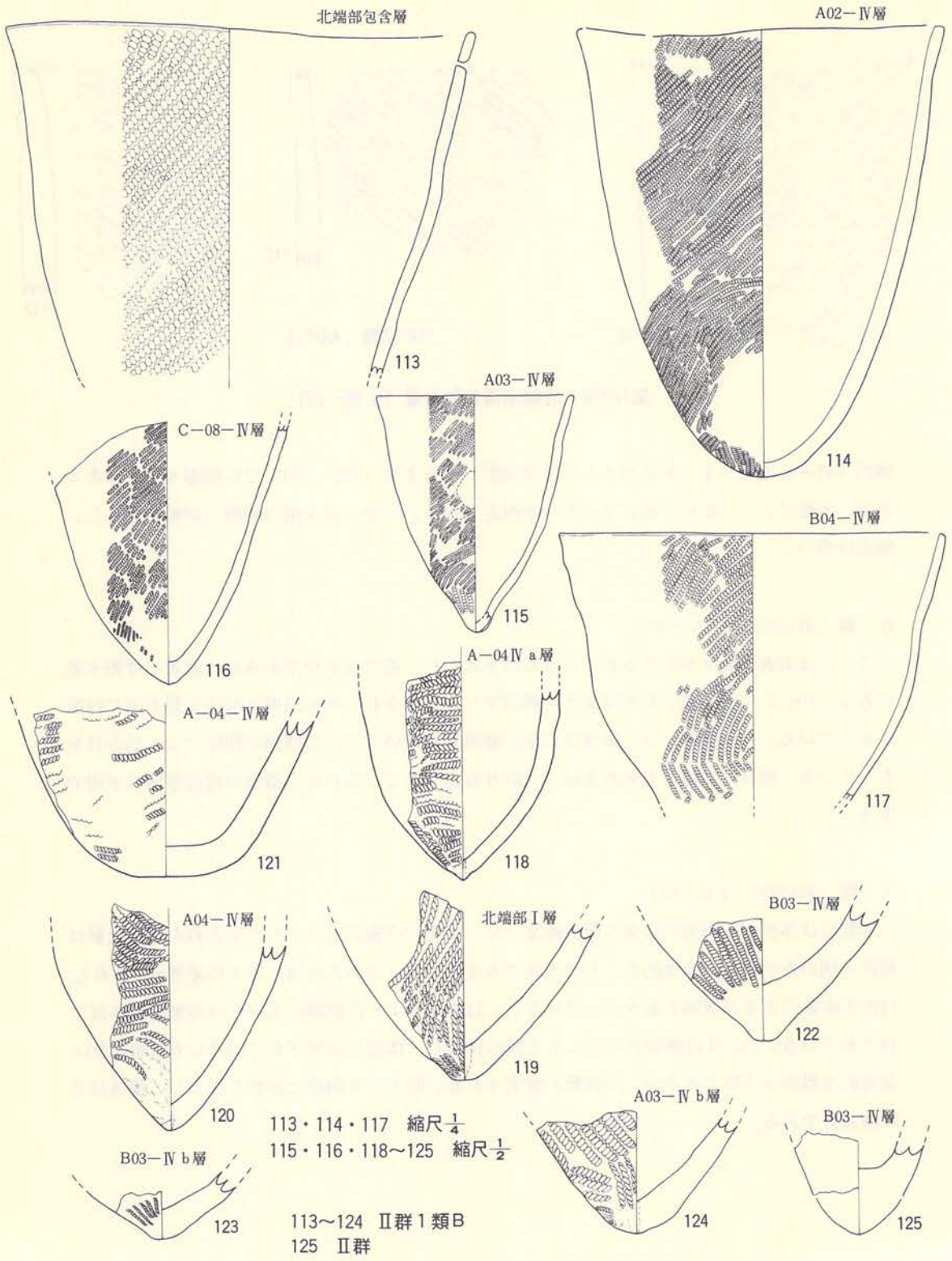
#### 6 類（第128図B、PL-87）

ここには器表の地文が磨消されているものを入れた。破片は2点であるが、両者には若干差がある。108には消し残された地文？（綾絡文）が観察され、それ以外は前の5類と同じ特徴をもっている。109の場合は、体部は完全に磨消されているが、口唇部に押圧による刻み目をもっている。両者は別種かも知れないが、取り合えずここに入れた。器形や底部形態は不明である。

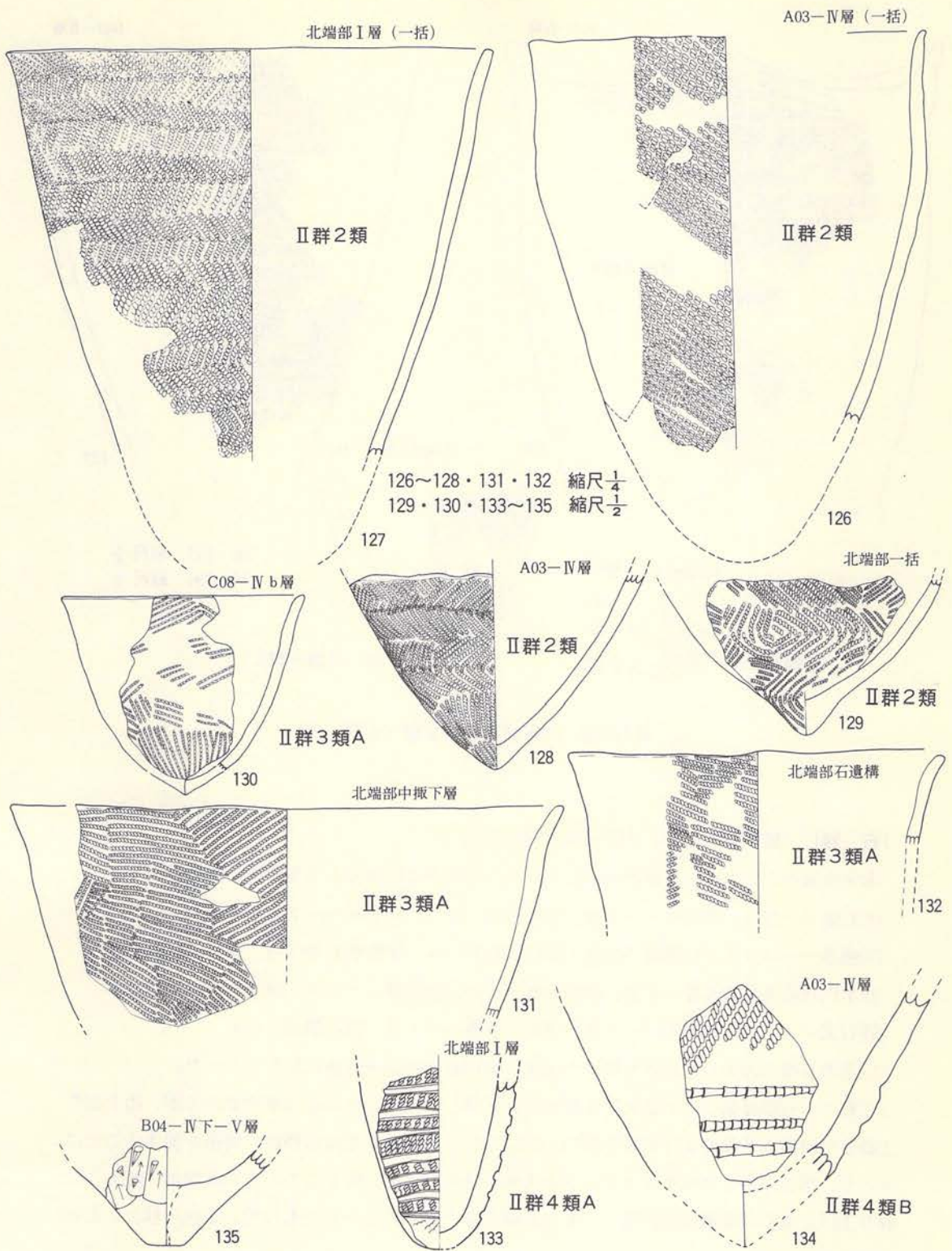
#### 7 類（第129図、PL-88）

本類には体部や口縁部の地文に環付縄文（ループ文）の施文されたものを入れた。出土量は破片3個のみである。全体的なことは不明であるが、ループの入り方に若干の差異がみられる。110は体部にあまり間隔をおかないで付され、111は110よりは間隔が広いものの矢張り体部に付されている。112は口縁部に平行して2段に付され、体部には付されていないかも知れない。全体的な器形は不明であるが、深鉢形と推定される。胎土には繊維と砂粒を混入し、焼成は比較的良好である。



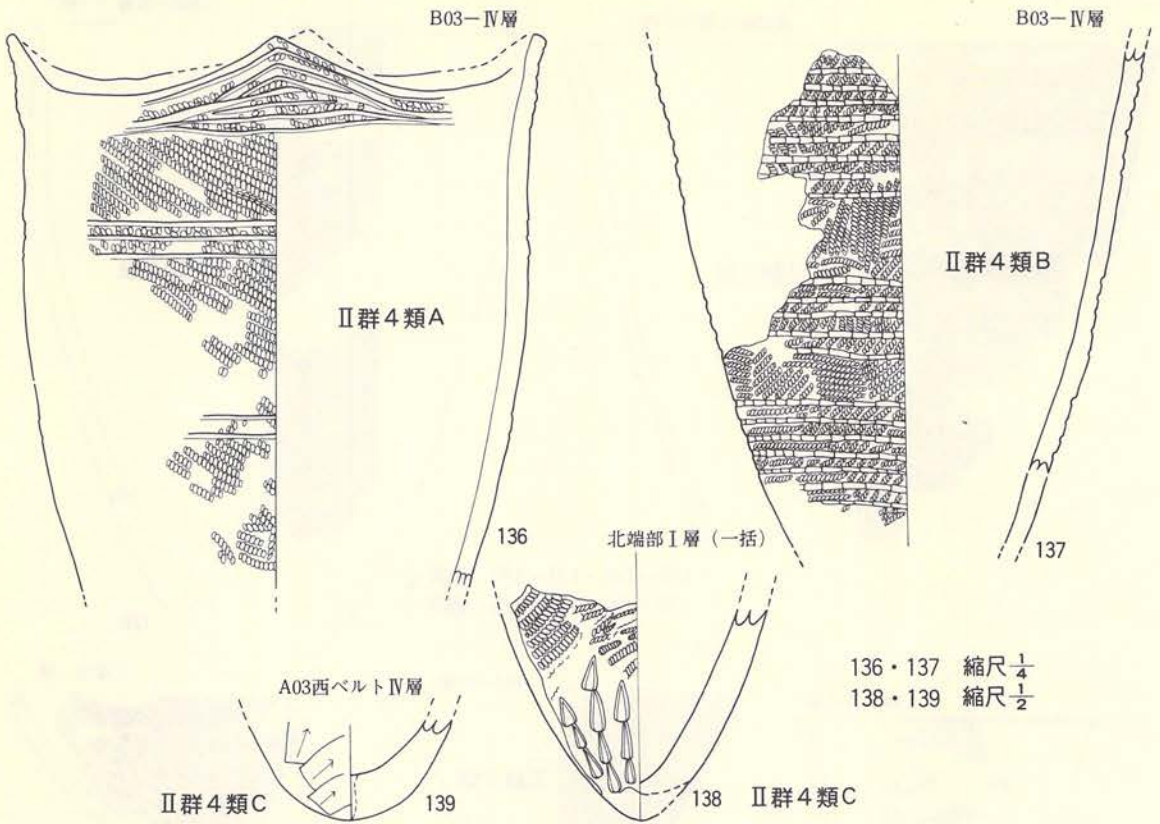


第130圖 北端部遺物包含層 (土器-23)



第131圖 北端部遺物包含層 (土器-24)





第132図 北端部遺物包含層 (土器-25)

〔石器〕 (第133~149図、PL-128~133A)

本包含層から242点の石器が出土している。その中には次のような器種と点数がある。

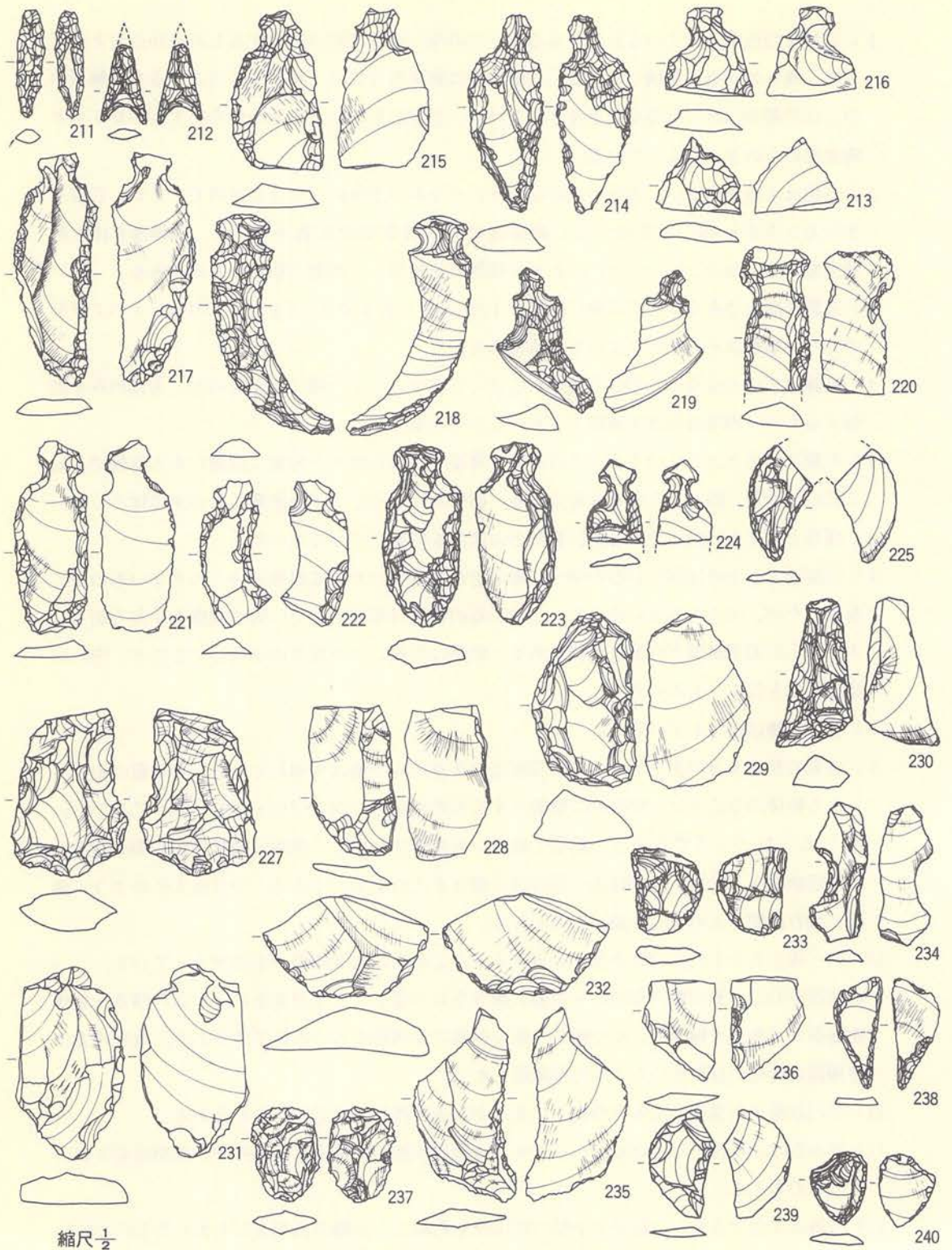
- ①石鏃——22点、②石槍——4点、③石匙——39点、④石錐——7点、⑤石篋——15点
- ⑥搔器——14点、⑦切削器——55点、⑧打製石斧—0、⑨磨製石斧-9点、⑩磨(擦)石—30点
- ⑪半円状扁平打製石器—4点、⑫凹み石—30点、⑬石錘——3点、⑭敲き石—7点
- ⑮石皿——1点、⑯砥石——1点、⑰石(刀)棒——1点、⑱石製品——0

以上の石器の出土した地点や層位と法量は第10表の石器一覧表に記しておいた。

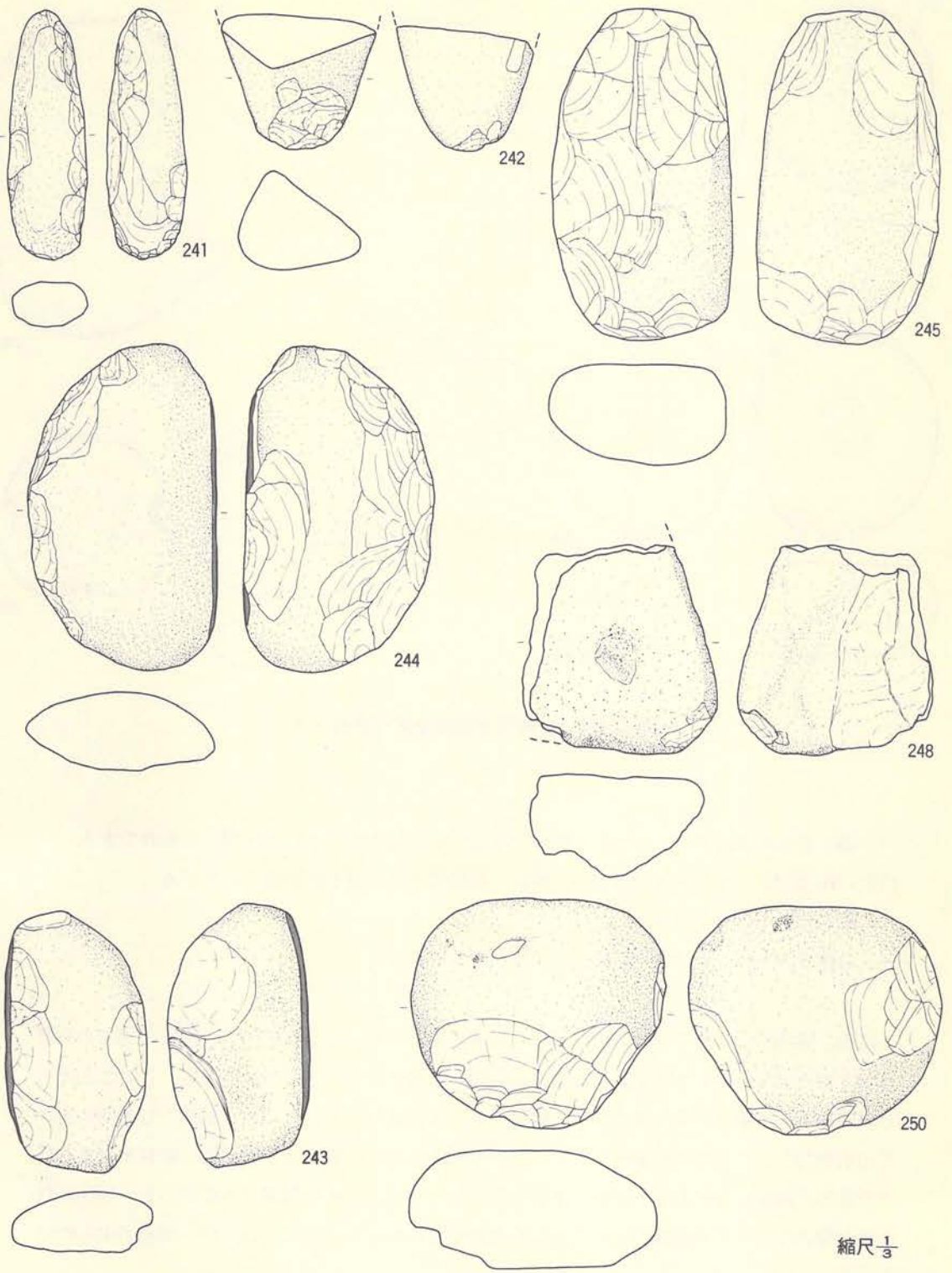
これらの石器は第I群土器と第II群土器に共伴して出土したことは事実であるが、出土した土器との明確な共伴関係は把握されていない。したがって、ここでは器種別に説明を加えることにするが、図版の割付け順序はグリッドでA列・B列・C列の順とした。なお北端部一層として取り上げた遺物は遺構検出段階に、本包含層の最上面から出土したもので、全区一括としたものである。

- 1) 石鏃は22点出土しているわけであるが、この中にはほぼ形の判明するものが19点含まれており、残りの3点は欠損している。型態別では無茎型が12点・有茎型7点となるが、無茎の中には凹基が10点と平基が2点含まれている。有茎のものには、茎を作り出すものが3点と柳葉形のもものが4点入っている。
- 2) 石槍は4点と少ない。完形のもものは259 だけなので全体的なことは不明であるが、石質や作り方をみると258・259 のように硬質泥岩や硬質泥質凝灰岩を使用し、周縁部全体を剥離調整するものと、257 や351 のように粘板岩を使用し、調整が粗雑なものもある。
- 3) 石匙は39点であるが、この中に横形が1点(432) 含まれているが、その他はすべて縦形であり、形態はそれぞれによって変化がある。
- 4) 石錐は7点と少ない。形はそれぞれによって差があつて一概にいえませんが、刃部のみを調整するもの、周縁部全体を調整するものなどがある。
- 5) 石篋は15点出土しているが、この器種は搔器や打製石斧との分類に問題のある器種である。ここには石篋「的」なものも含めている。調整からみると、片面調整のものを主体とした。
- 6) 搔器としたのは14点であるが、石篋との関係を明確にできなかった。
- 7) 切削器としたのは剥片石器の中で、所謂定形石器といわれる器種の中に入らないもの全てを入れたが、55点の多きに達した。この石器の特徴は形が不定で、大小関係も千差万別といえ、さらに刃部調整が非常に粗雑である。剥離は片面にのみ施すのが中心であるが、中には両面剥離を行なうものもある。
- 8) 打製石斧は出土していない。
- 9) 磨製石斧は9点の出土であるが、完形品は2点のみで他は欠損している。本石器の中でもっとも特徴的なことは、局部的に磨製とするものが多い(241・302・392~394) ことである。例えば、241 や393 でみると、扁平で細長い河川礫を利用し、側縁に敲打剥離や叩きつぶしで形態調整をした後、刃部付近や側縁部に磨きを入れるものである。中には392 のように側縁に敲打調整を入れないで磨くものもある。
- 10) 磨(擦)石としたものは全部で30点あるが、この中には2種類のものが入っている。一つは所謂磨石で、形が扁円形で平らの面に磨きをもつ型で、7点が含まれている。残る一方は断面形が三角形や扁平で、やや細長い礫の側縁に使用面をもつもので27点ある。後者の方の使用面の両側には往々にして敲打剥離面をもつ。
- 11) 半円状扁平打製石器は4点の出土であるが、先の擦石と近似したものもある。
- 12) 凹み石は30点出土しているが、この中には磨石や擦石と併用したものや、使用面を2面にもつものもある。
- 13) 石錘は3点であるが、扁平で小型の河川礫を利用し、長軸の両端を打ち欠いたものである。





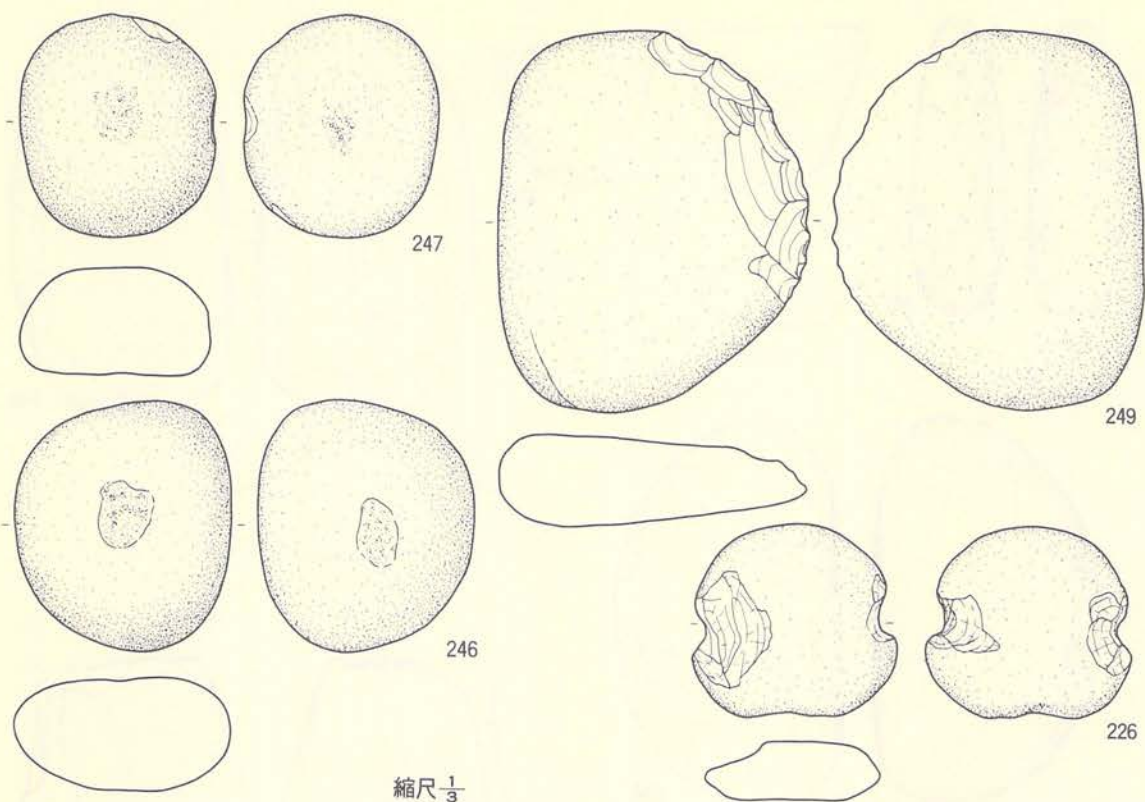
第133図 北端部遺物包含層 (石器一)



縮尺  $\frac{1}{3}$

第134図 北端部遺物包含層 (石器-2)

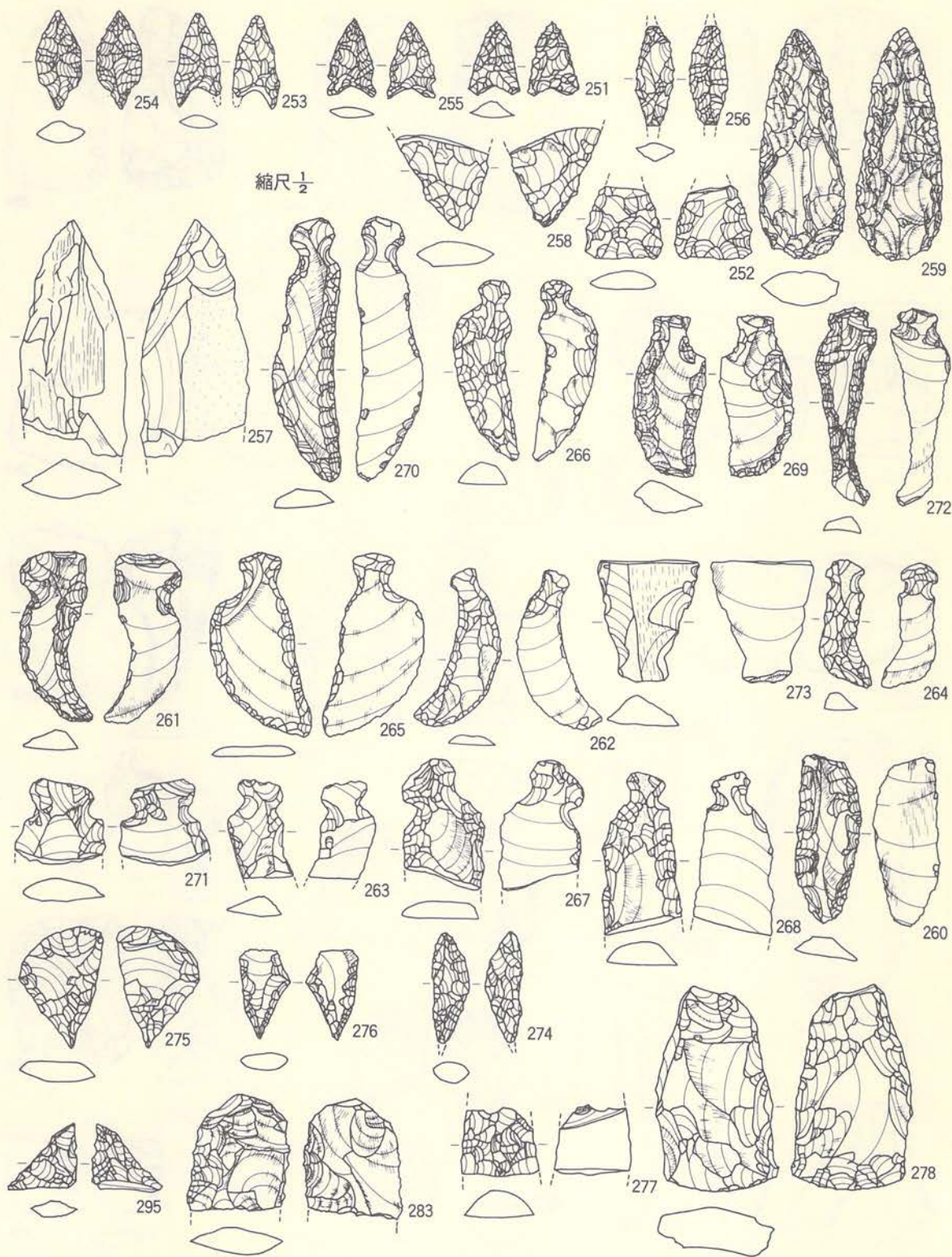




第135図 北端部遺物包含層 (石器-3)

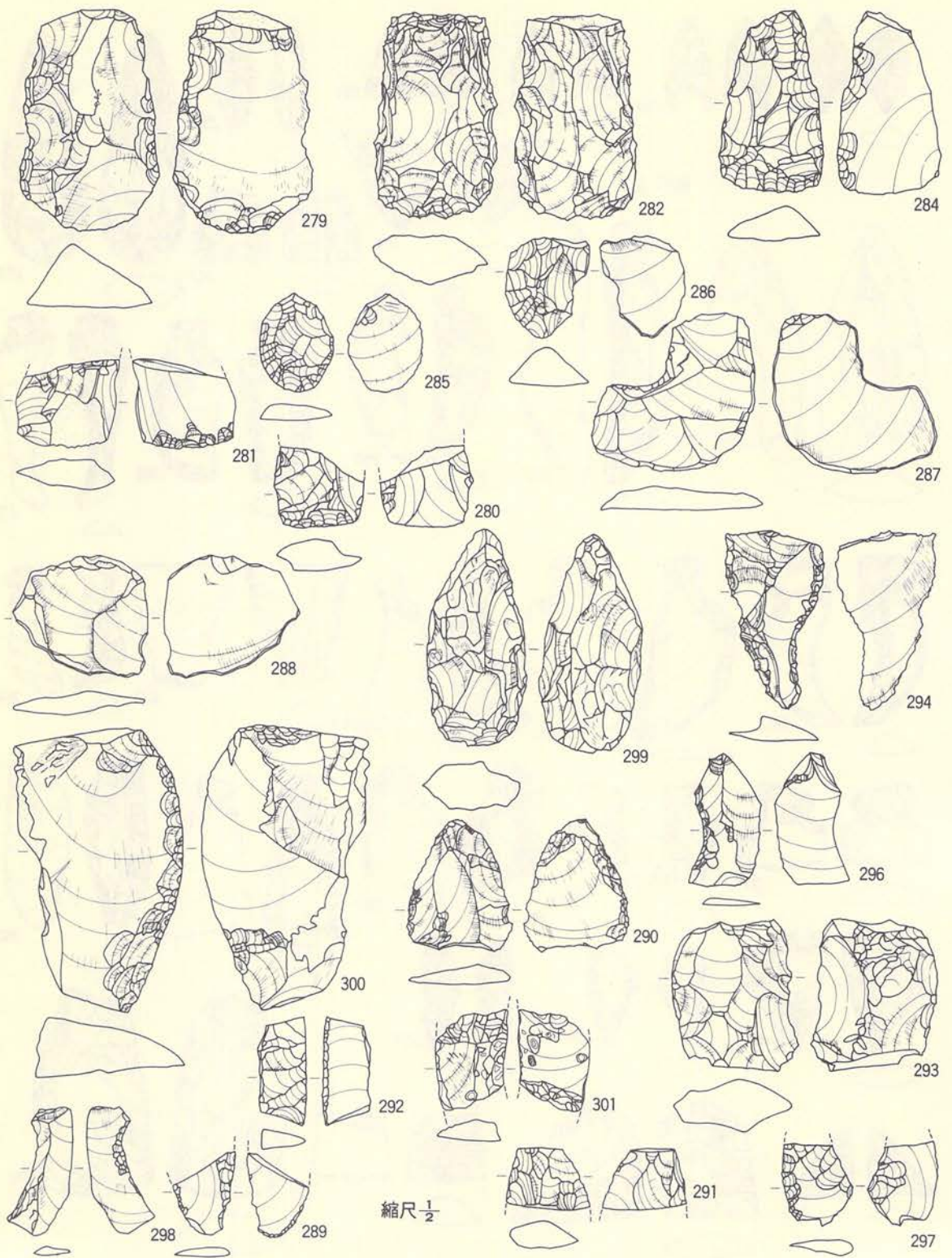
- 14) 敲き石は7点出土しているが、礫の周縁や一端を敲き道具として使用したものである。
- 15) 石皿は417の1点のみであるが、扁平な自然礫の平坦面を使用面としている。
- 16) 砥石は1点の出土である。
- 17) 石棒は343の1点のみであるが、作りが粗雑である。

以上、概括的にそれぞれの器種についての説明をしたが、先にも記したように、これらの石器は第Ⅰ群土器（早期）と第Ⅱ群土器（前期初葉）と共伴したことは事実である。このことは、この時期の石器組成を考えるための好資料であることはいうにおよぼず、早期から前期にかけての石器群としての特徴を示唆している面が多々みられる。例えば、局部的に磨製とする石斧の存在や、断面三角形を示す擦石、横形石匙の少ない石匙、中期初葉（本遺跡のⅠ-19住居跡内包含層の出土例）の石鏃に比して有茎石鏃が少ない等といったことはその一端を示すものであろう。

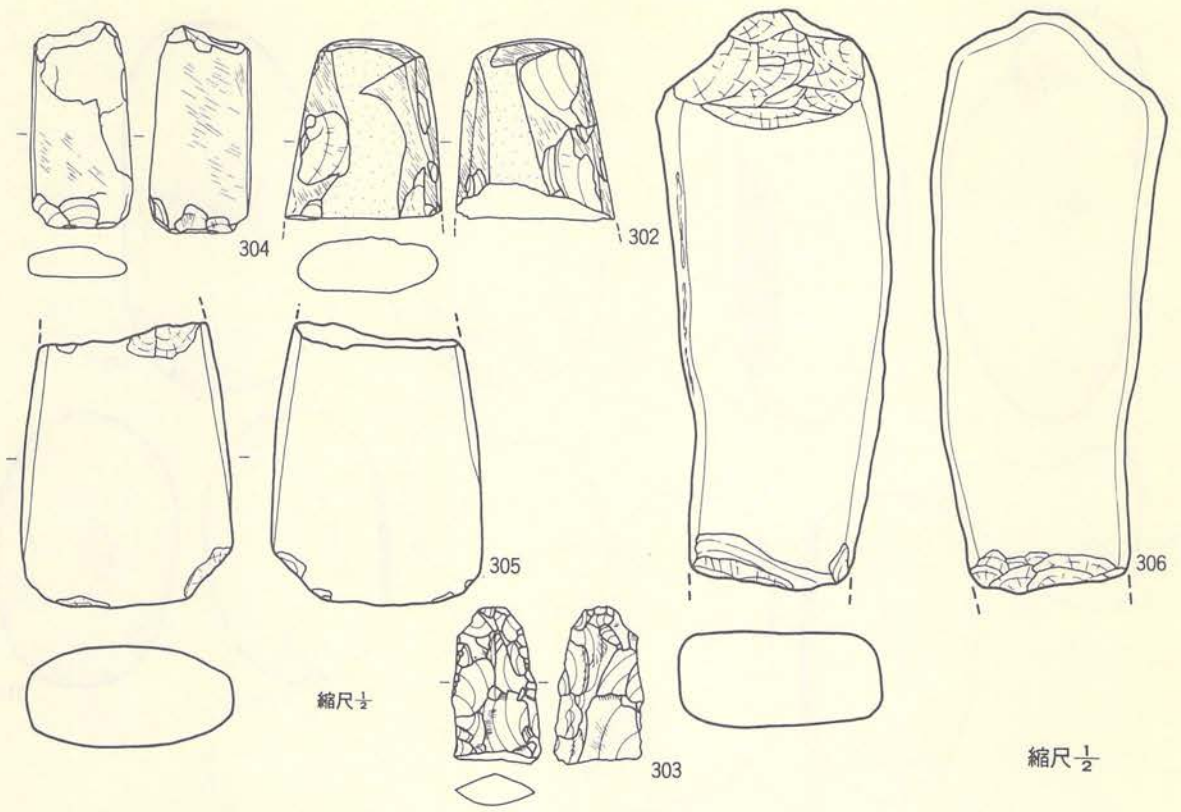


第136圖 北端部遺物包含層 (石器-4)





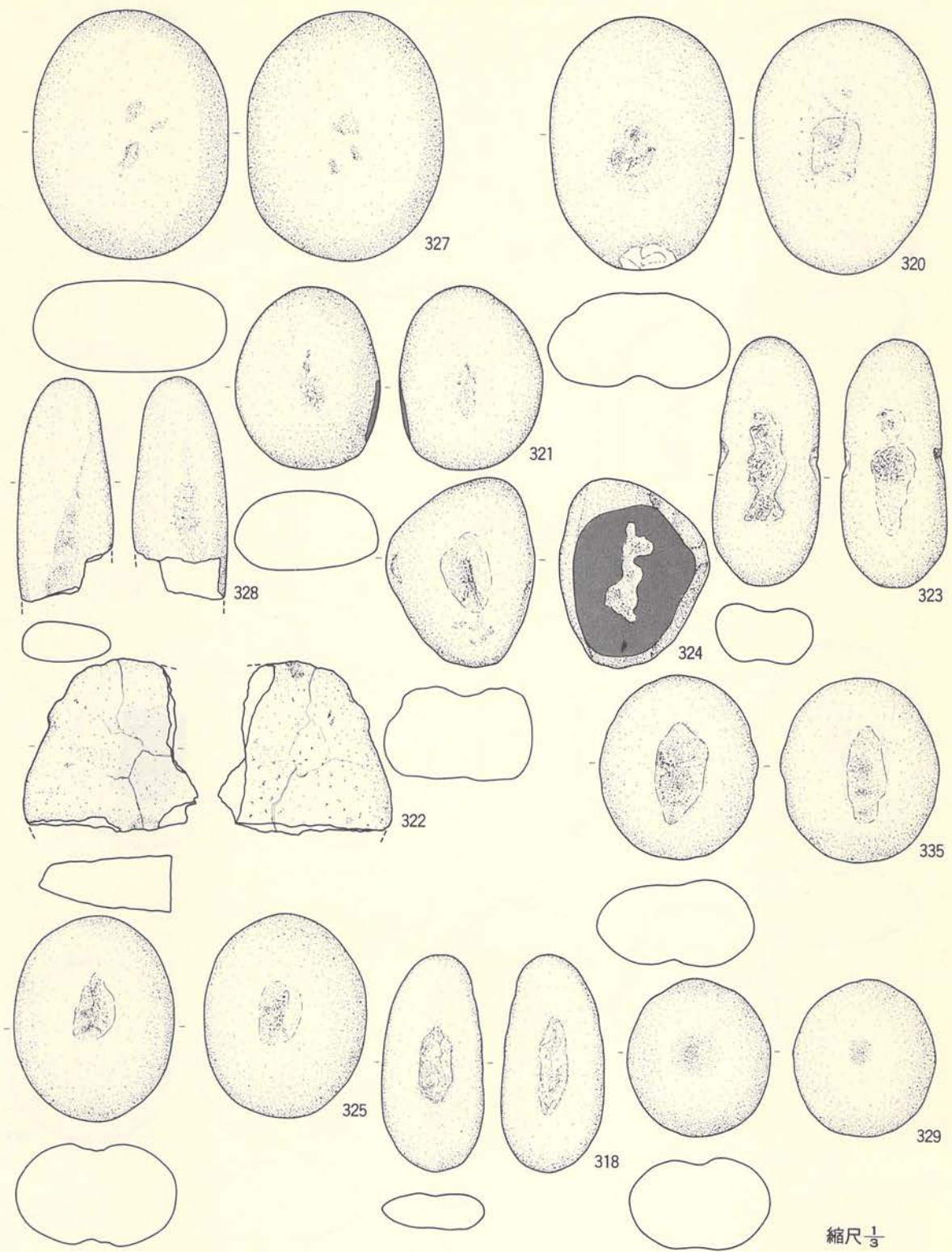
第137図 北端部遺物包含層 (石器-5)



第138図 北端部遺物包含層 (石器-6)

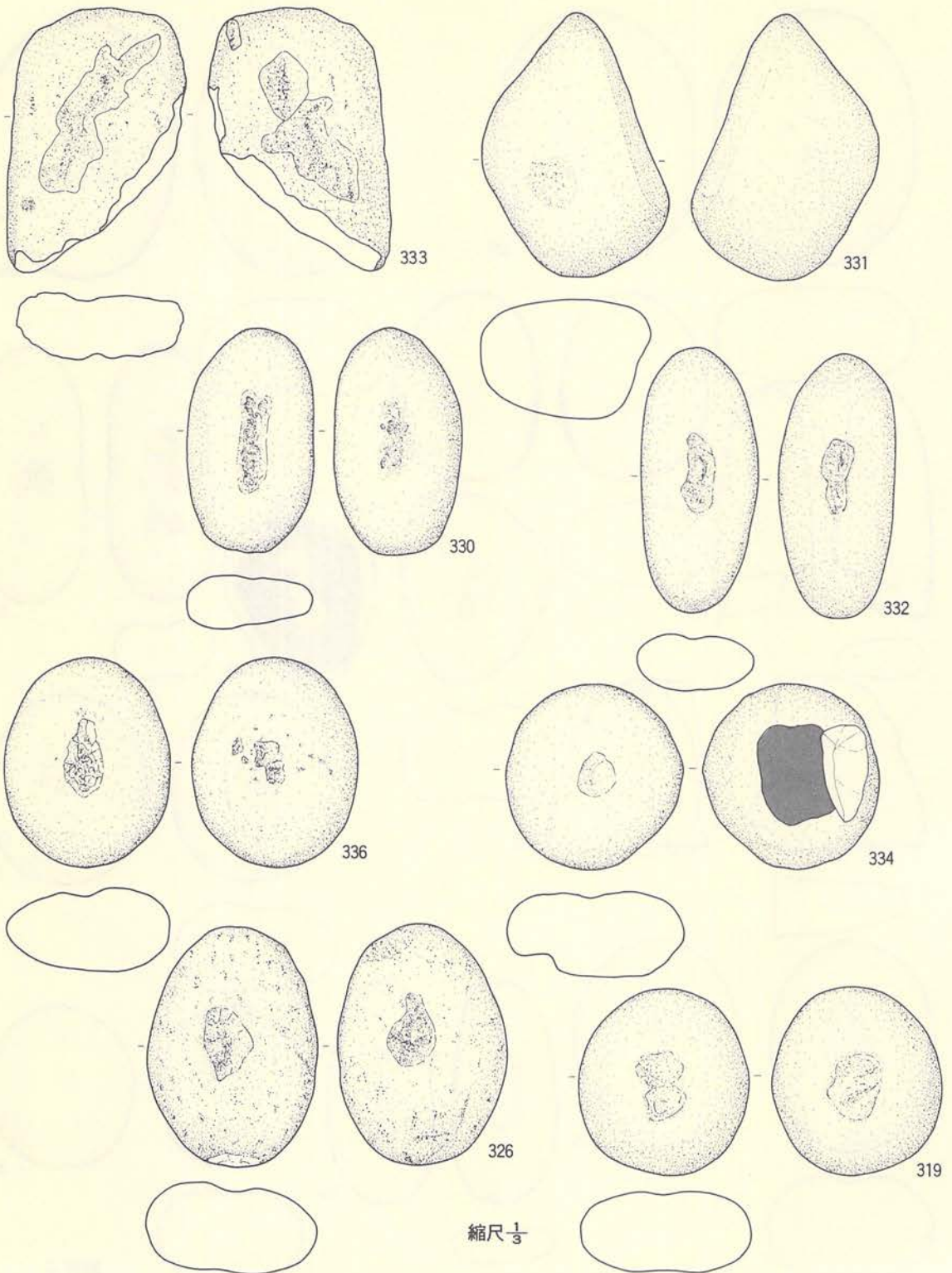




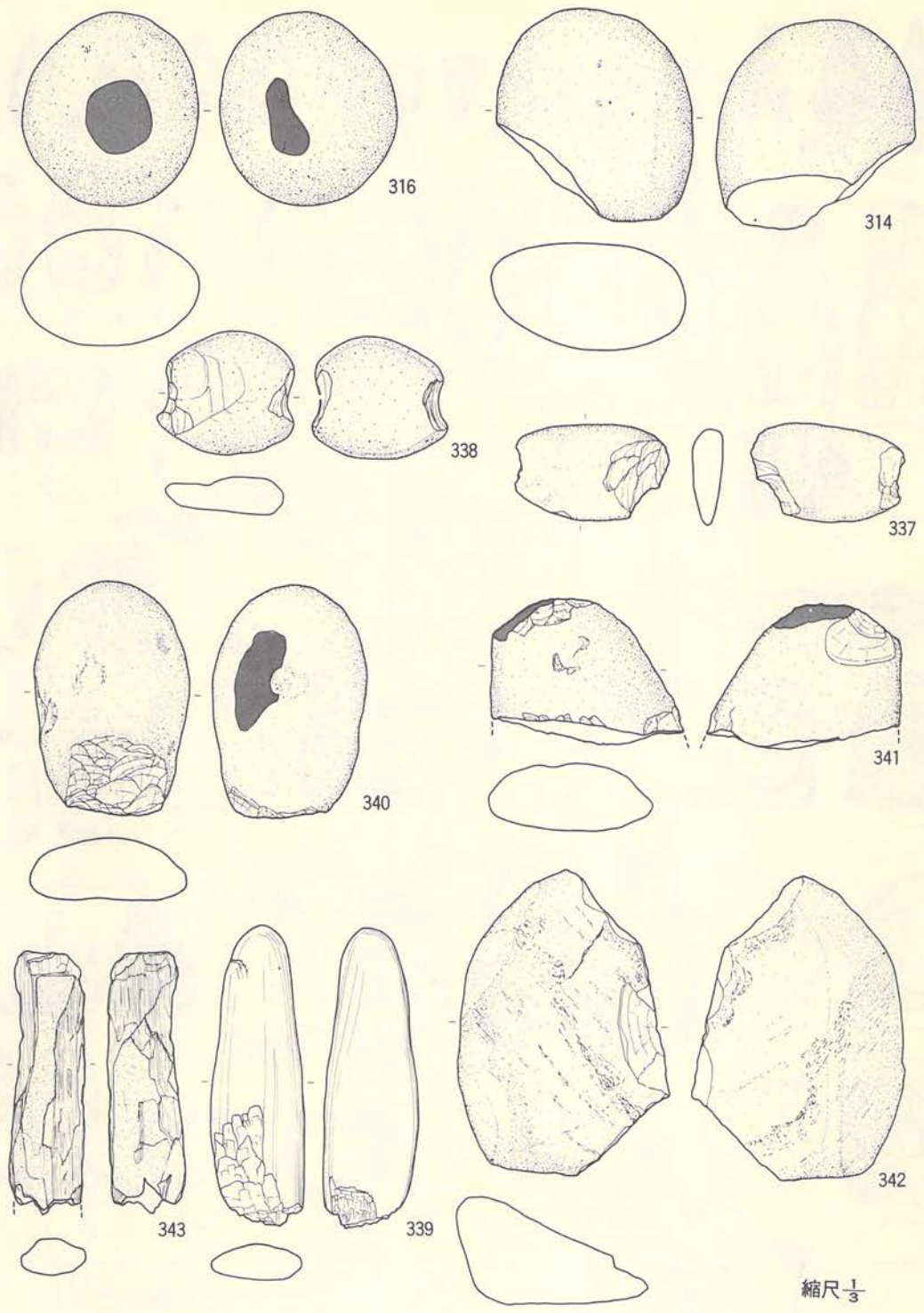


第140図 北端部遺物包含層 (石器-8)



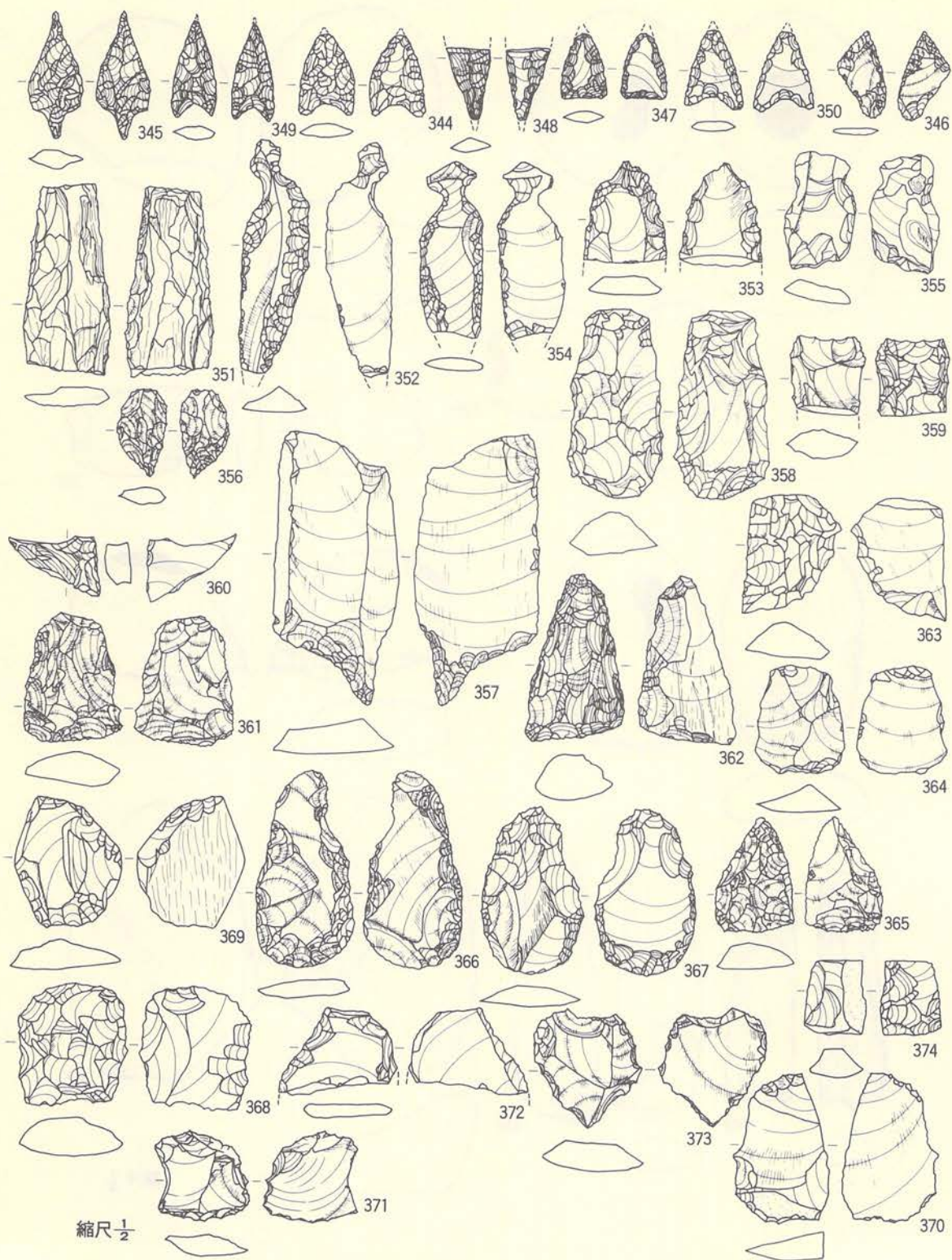


第141図 北端部遺物包含層 (石器-9)

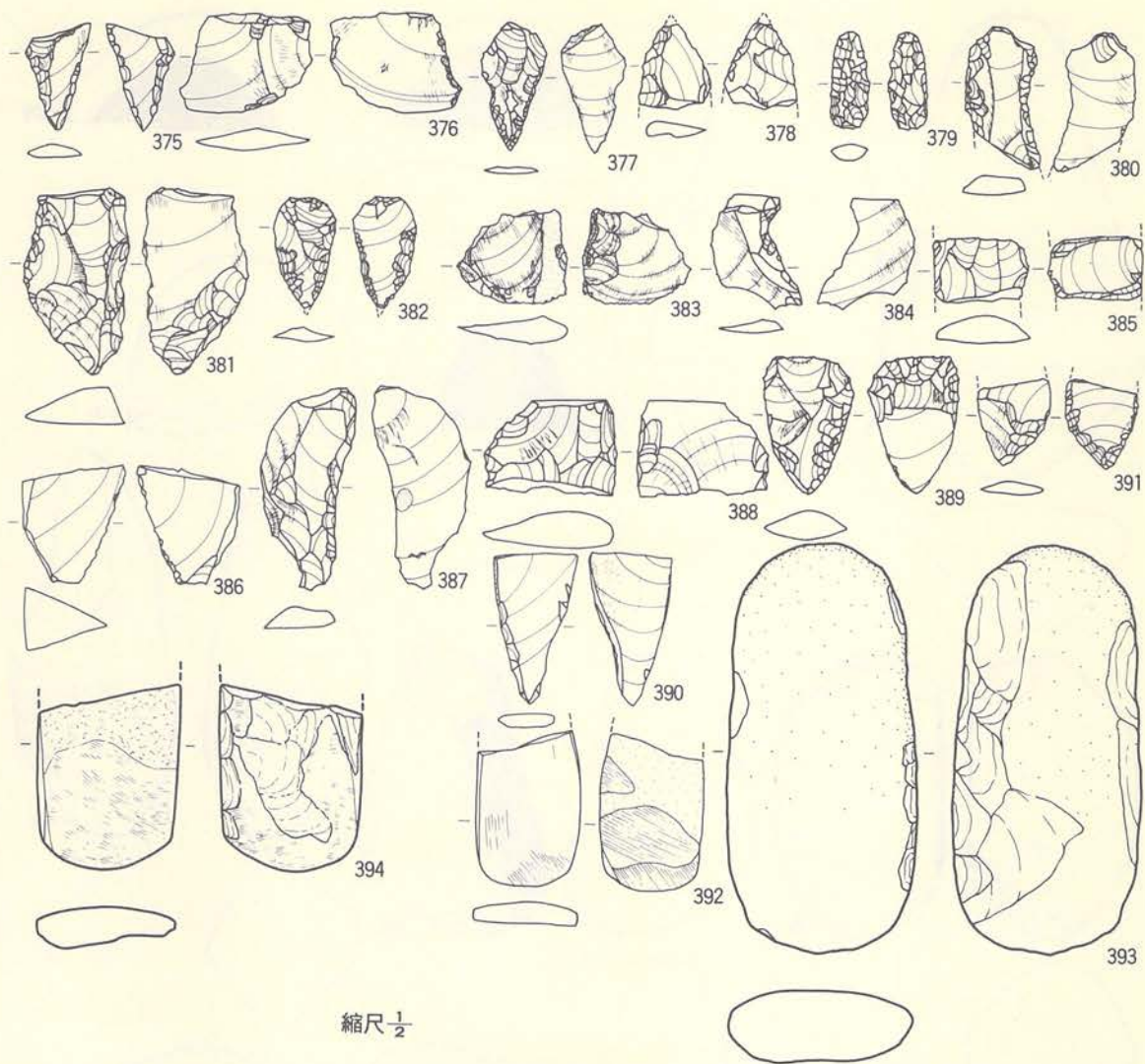


第142図 北端部遺物包含層 (石器-10)





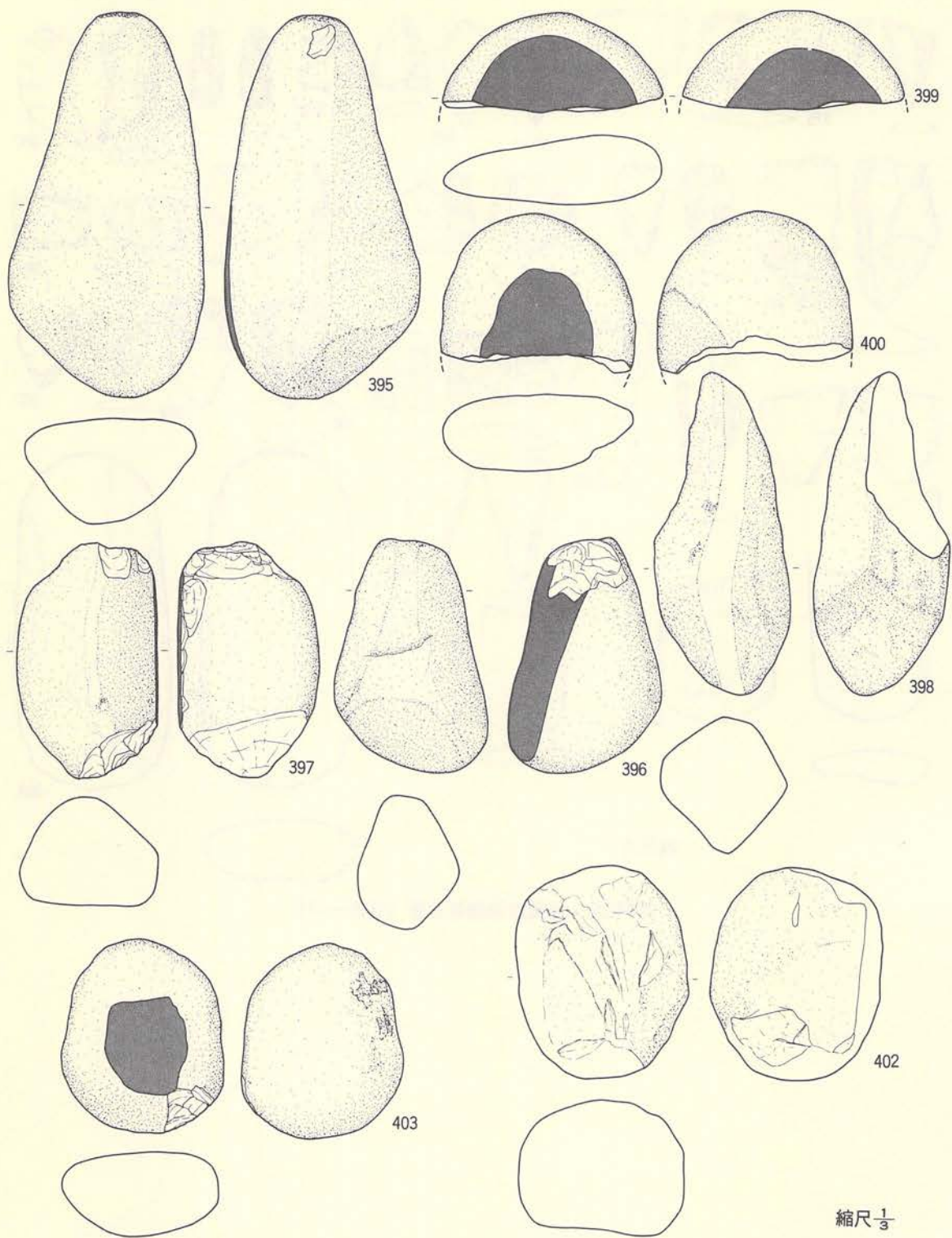
第143圖 北端部遺物包含層 (石器-11)



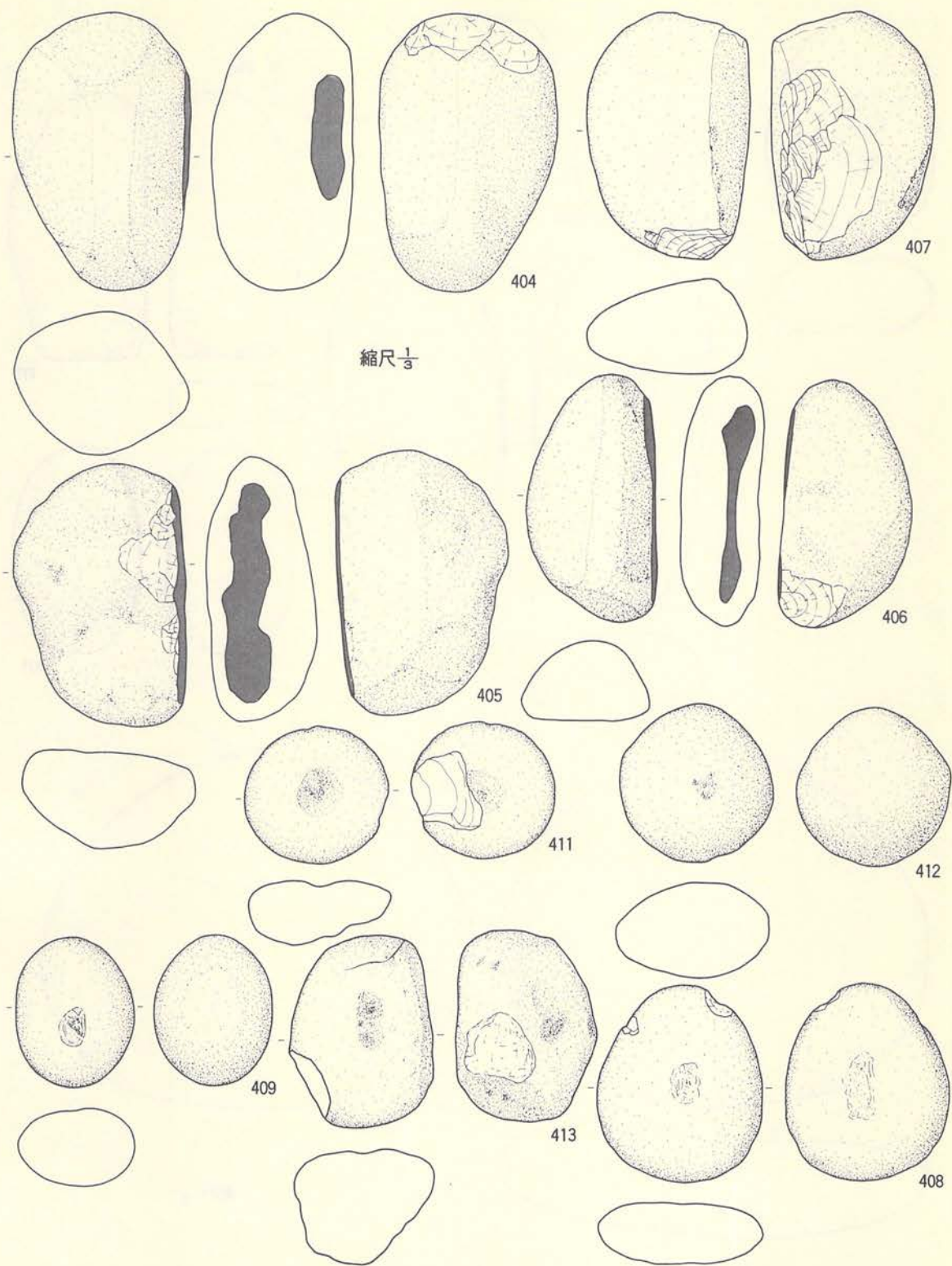
縮尺  $\frac{1}{2}$

第144図 北端部遺物包含層 (石器-12)



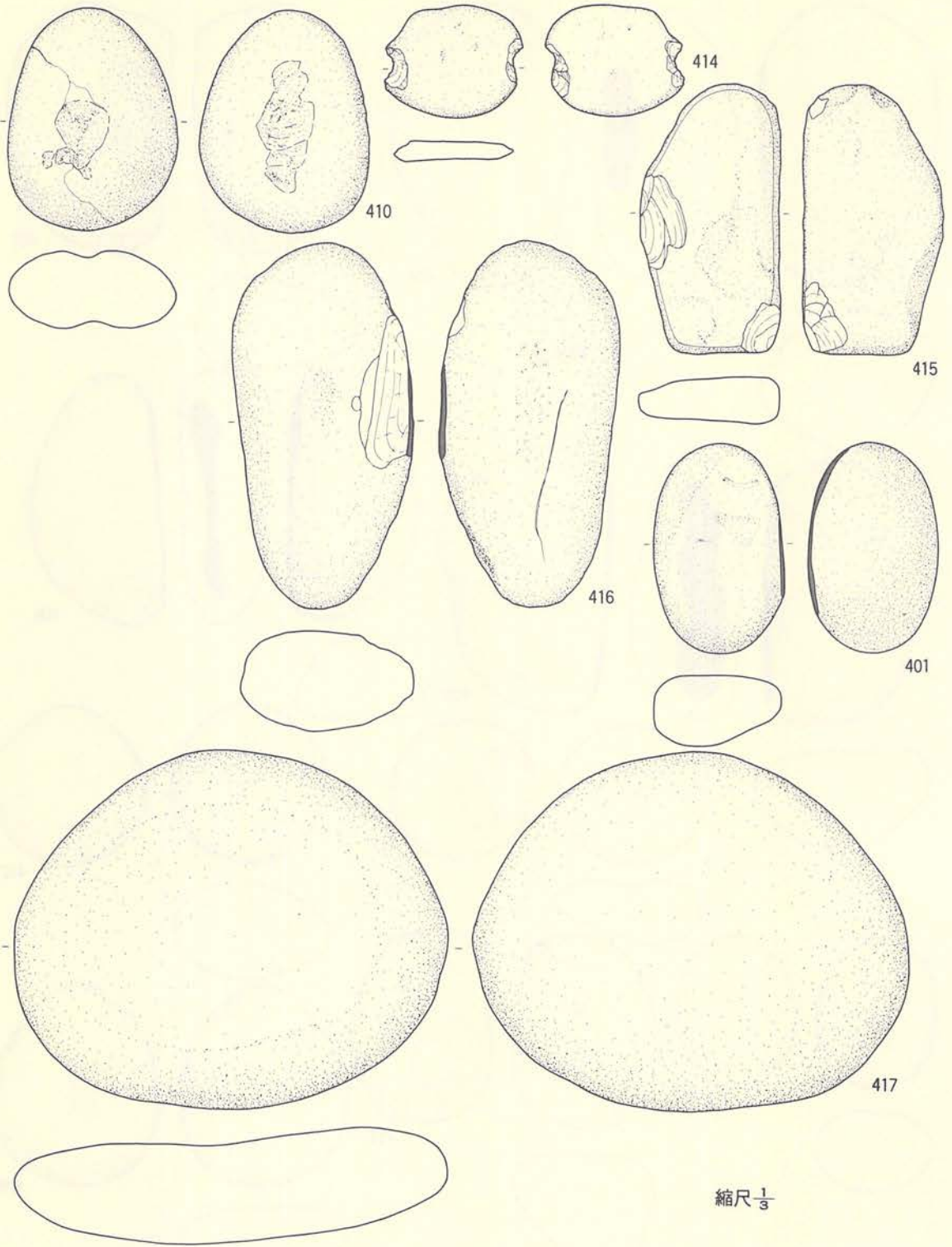


第145図 北端部遺物包含層 (石器-13)



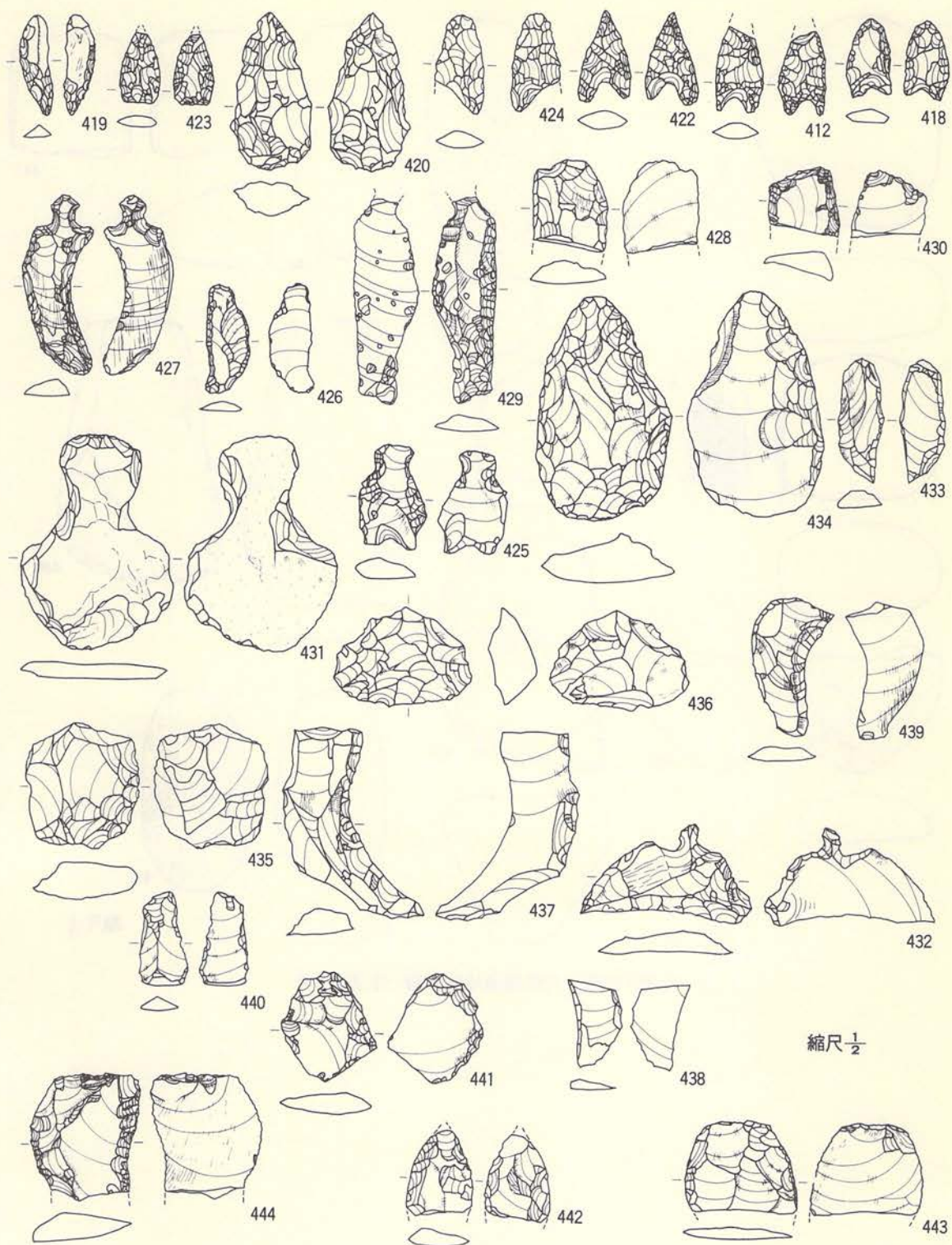
第146圖 北端部遺物包含層 (石器-14)





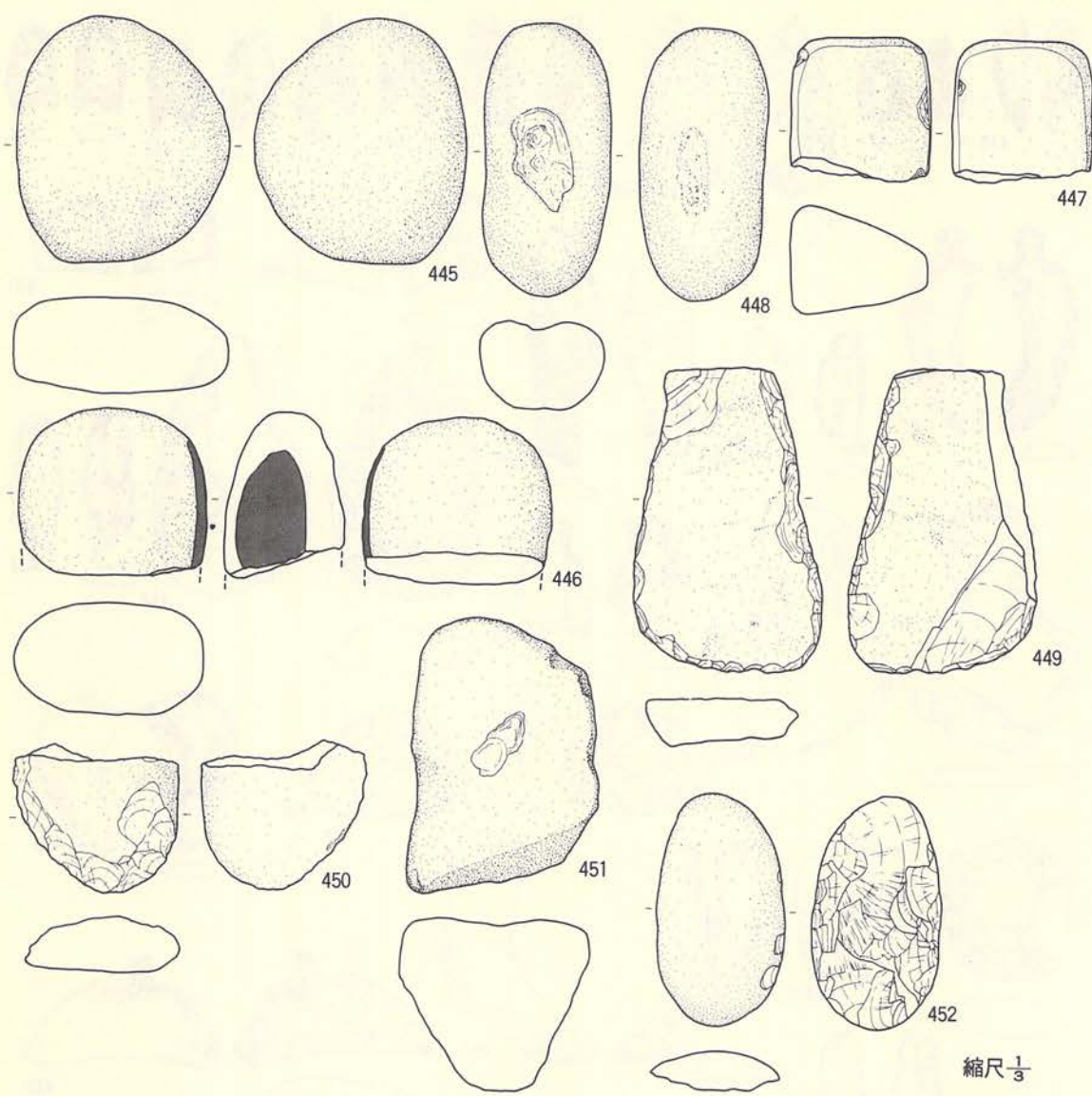
縮尺  $\frac{1}{3}$

第147図 北端部遺物包含層 (石器-15)



第148図 北端部遺物包含層 (石器-16)





縮尺  $\frac{1}{3}$

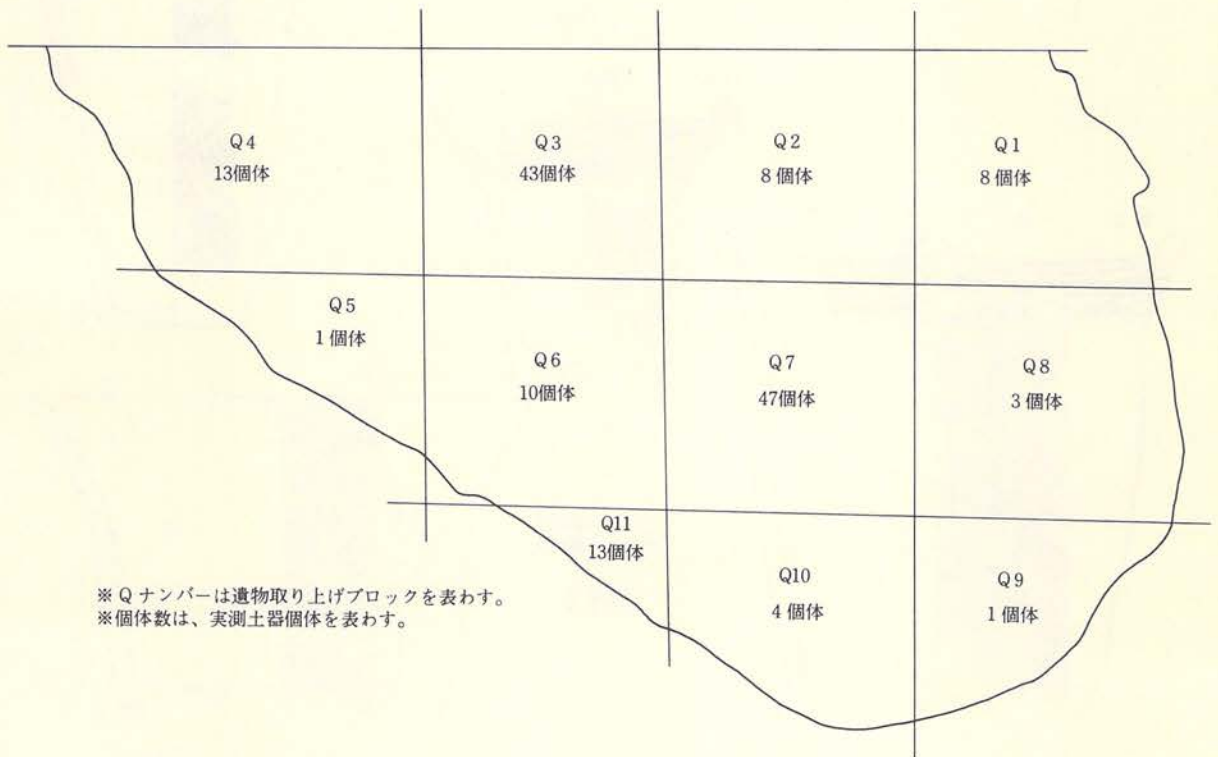
第149図 北端部遺物包含層 (石器-17)

## 2) I-19住居跡内包含層

I-19住居跡の埋土が遺物包含層を形成していたことは前述のとおりである。この住居跡の埋土は調査時の地表面から約1.8 mもの層があり、表土や攪乱層の分を除去しても1.2 mもの層厚を測り、これがそのまま包含層を形成していた。埋土の堆積状況を観察すると、住居跡が廃絶後一次埋没がほぼ終了した時点で、草木灰や炭化物を多量に含む土とともに、多量の土器や石器が投棄されている。投げ込み方向は、最初北方から投げこまれていたのが、次第に南方に変わり、最終的には窪み部全面に投棄され埋没が終了している。

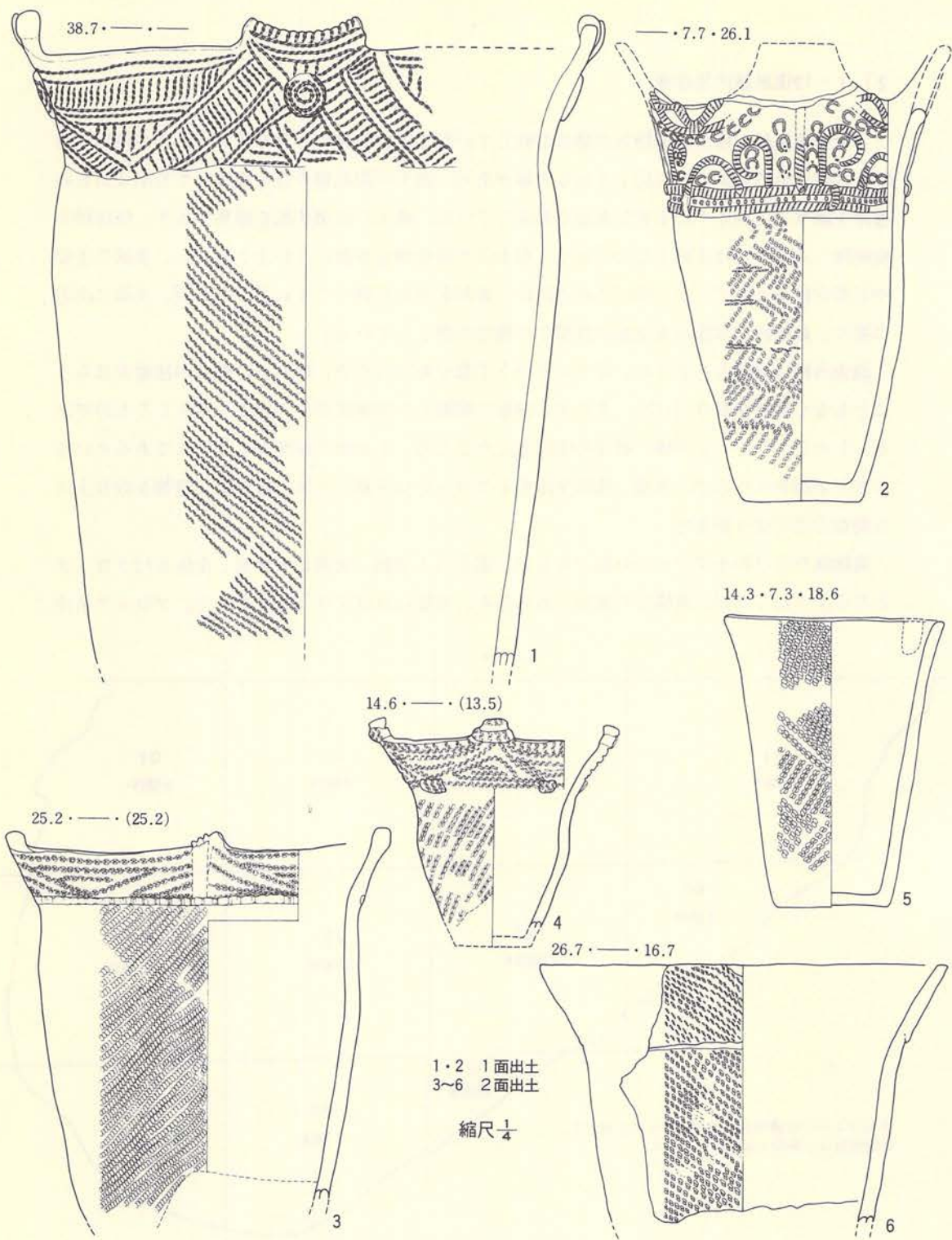
調査当初は層厚もあまりないだろうという予想であったので、取りわけ細心の注意をはらうこともなく遺物を取り上げた。それが、図版に掲載した実測図の中の埋土一括としたものである。しかし、ボーリング棒で層厚の確認をしたところ、1 m位の層厚がありそうであるということが予測されたので、急遽、遺構全体を小ブロックに分割した後、層位的に遺物を取り上げる調査方法に切り換えた。

遺物取り上げの小ブロック分割であるが、南北に4分割、東西に3分割し全体が12ブロックとなるようにしたが、遺構が不整形であるため、実際には11ブロックとなった。ブロック名は

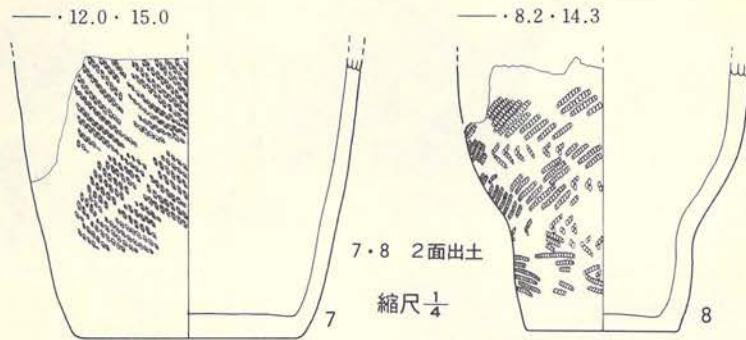


第150図 I-19住居跡内遺物包含層・遺物取上げブロックの実測個体数





第151圖 1-19住居跡 (Q-2・土器-1)



第152図 I-19住居跡 (Q-2・土器-2)

北西隅をQ1として南西へ順次Q2・Q3・Q4とし、中央の列は南から北に向ってQ5・Q6・Q7・Q8、東側列は北より南に向ってQ9・Q10・Q11と命名した。1ブロックの面積は約4㎡～5㎡である。

実際の調査では層位ごとに掘り下げたというよりは、上位から面で下げていったという方が正しい表現である。下位に行くに従って2面・3面・4面・5面とし、実際の最下位面は5面である。土層図で埋土の堆積状況を見ると、周囲が高く中央部が低くなる層相を示しているのので、層位的な面からみると実情とそぐわない面もある。

I-19住居跡の床面直上からは土器がほとんど出土していないので、5面として取り上げた遺物はI-19住居跡の項に掲載している。また、4面と5面は遺構全面を1区として取り上げているので、ブロック割りはない。なおブロック割りとその出土個体数(4面と5面出土は含まない)は第150図に示しておいた。

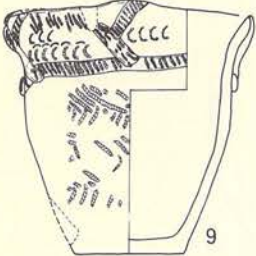
したがって、ここでは各ブロックごとに各面ごとに簡単に説明を加え、最後に全体的な傾向について触れたい。なお、Q1には実測できるような土器の出土はない。

〔Q-2〕 (第151・152図、PL-90・91)

実測できた土器は8個体である。口縁部文様帯を残すものは全て第Ⅲ群に入る土器だけである。しかし、体部で見ると第Ⅳ群に入るとおもわれる器形を示す土器(8)もある。面で見ると、1面では第Ⅲ群6類と8類、2面では第Ⅲ群5類と14類に入る土器が出土している。この状況は下位ほど古い時期に属する土器が出土していることを示している。

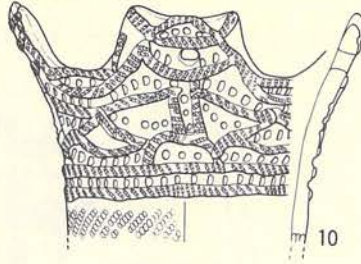


13.2 · 5.8 · 13.5 ·



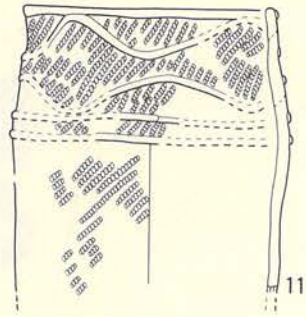
9

18.0 · — · (12.5)



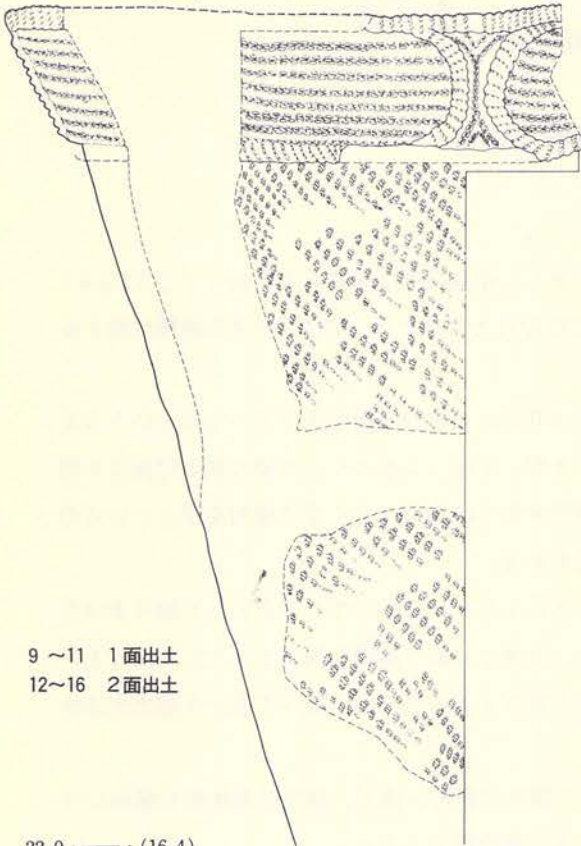
10

13.5 · — · (15.3)



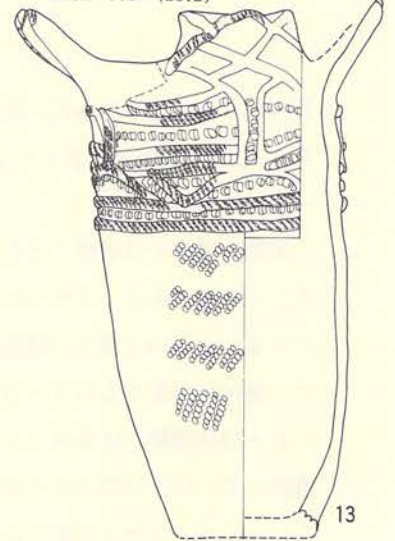
11

43.8 · — · (45.0)



12

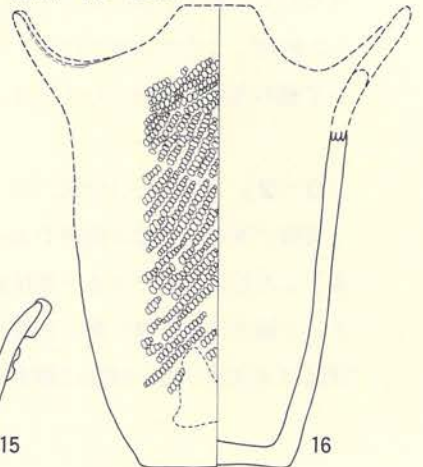
18.6 · 7.3 · (28.2)



13

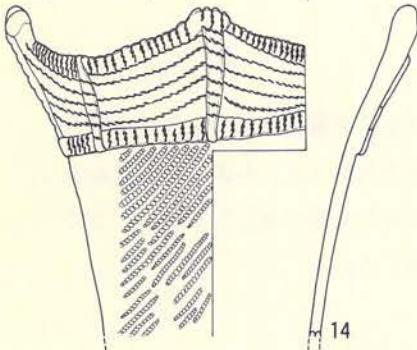
9 ~ 11 1面出土  
12 ~ 16 2面出土

(21.0) · 7.9 · (24.6)



16

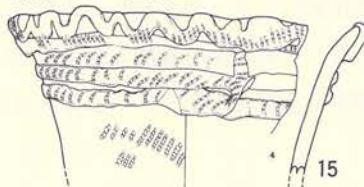
22.0 · — · (16.4)



14

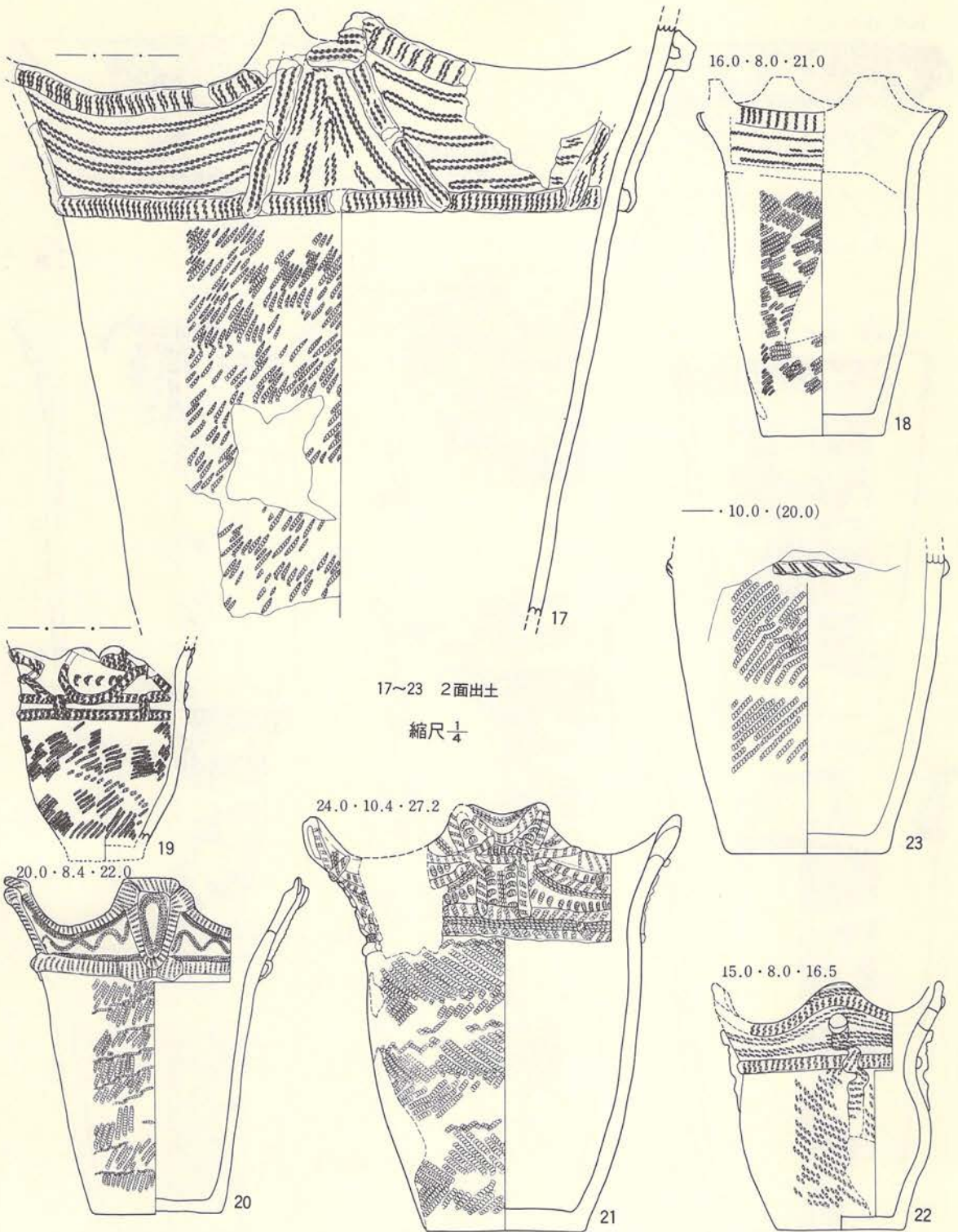
縮尺  $\frac{1}{4}$

19.0 · — · (8.8)



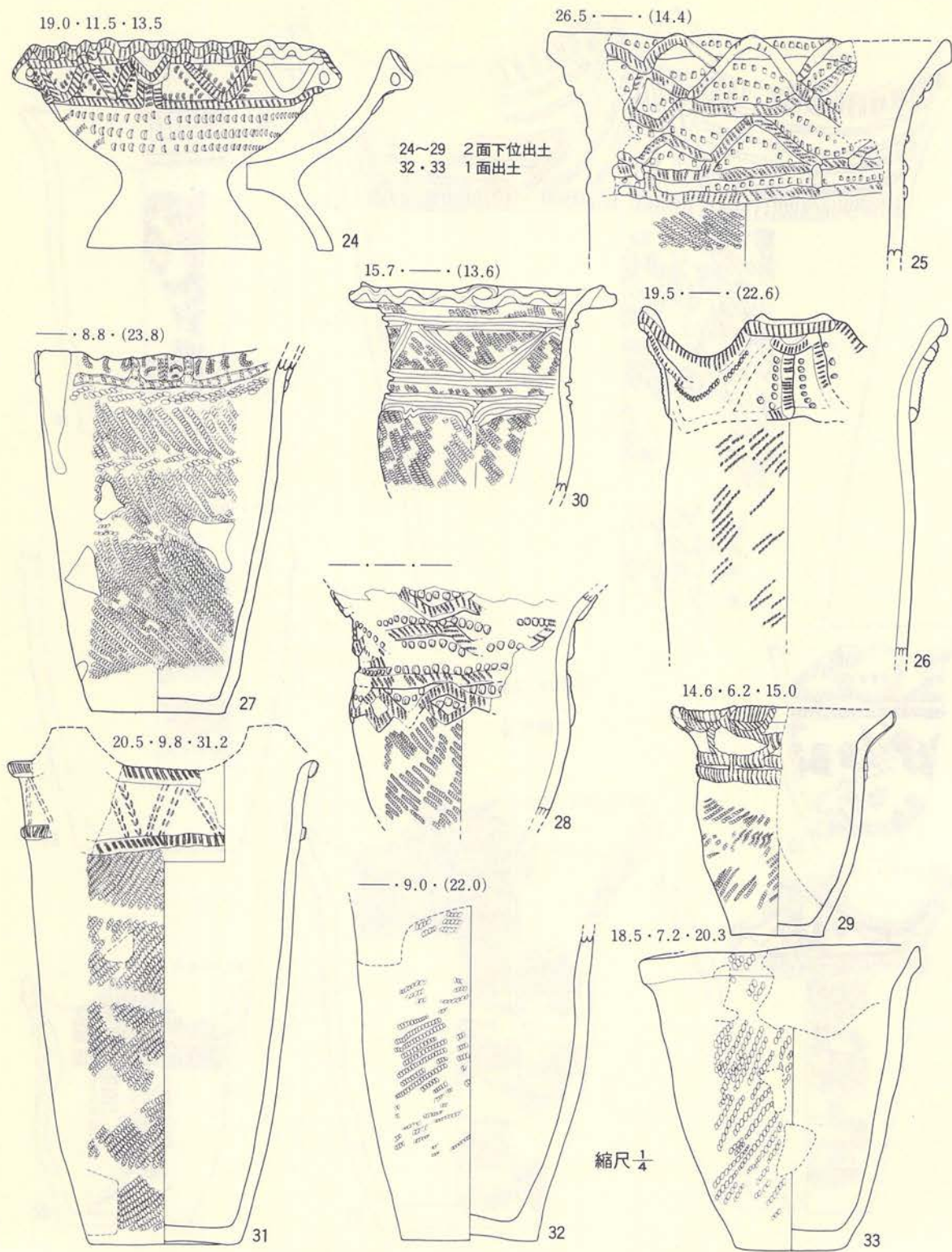
15

第153図 1-19住居跡 (Q-3 · 土器-3)

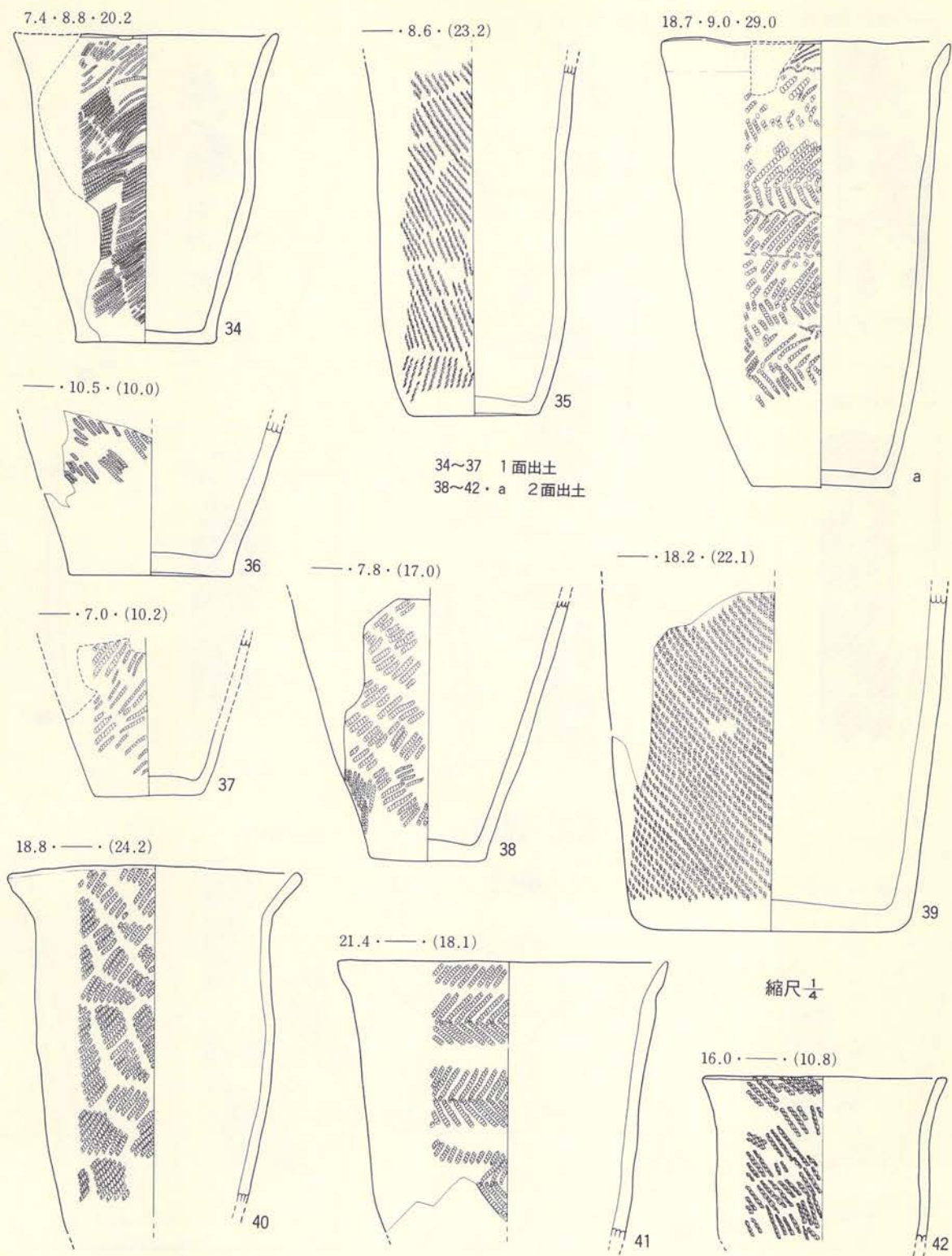


第154圖 I-19住居跡 (Q-3 · 土器-4)



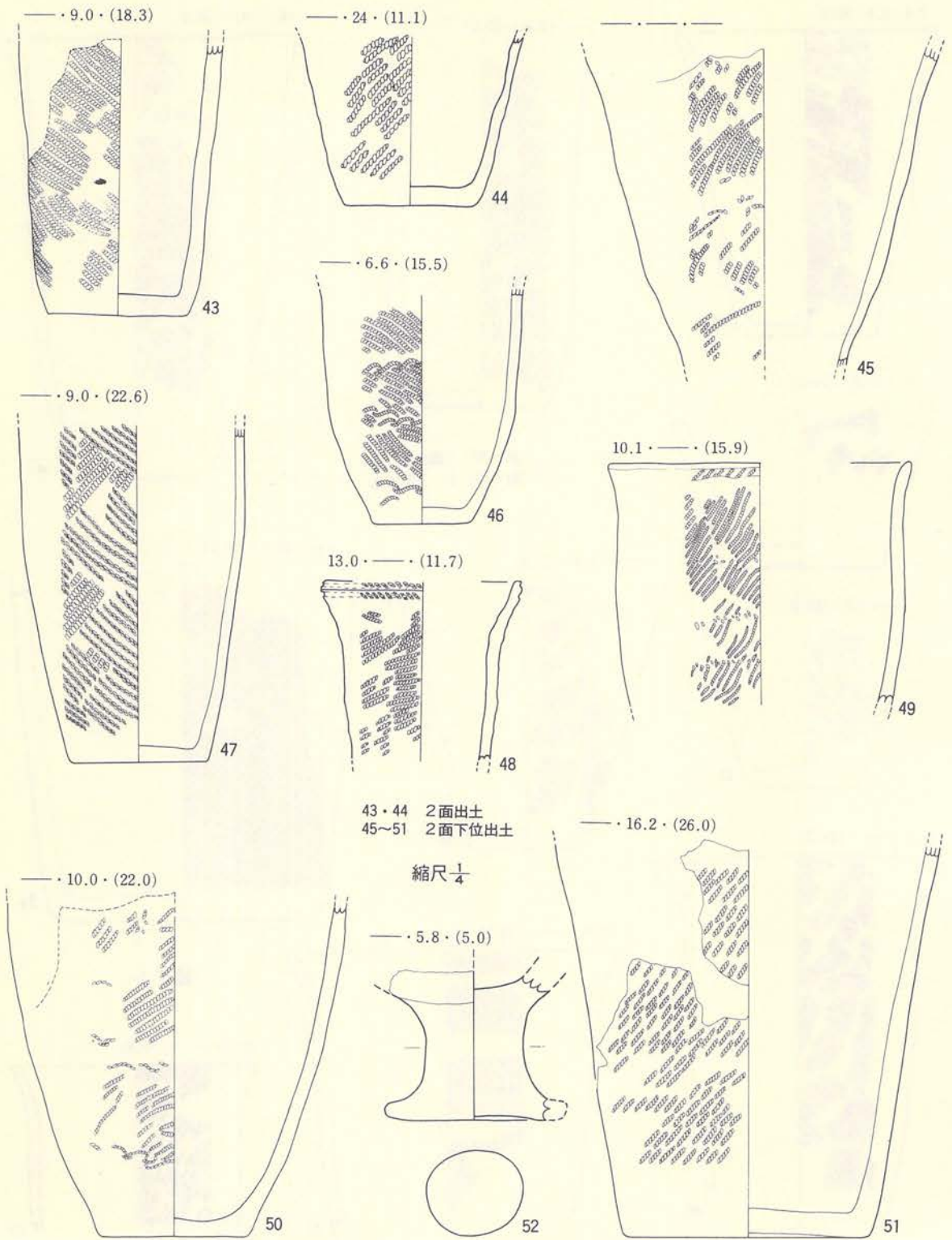


第155図 I—19住居跡 (Q—3·土器—5)

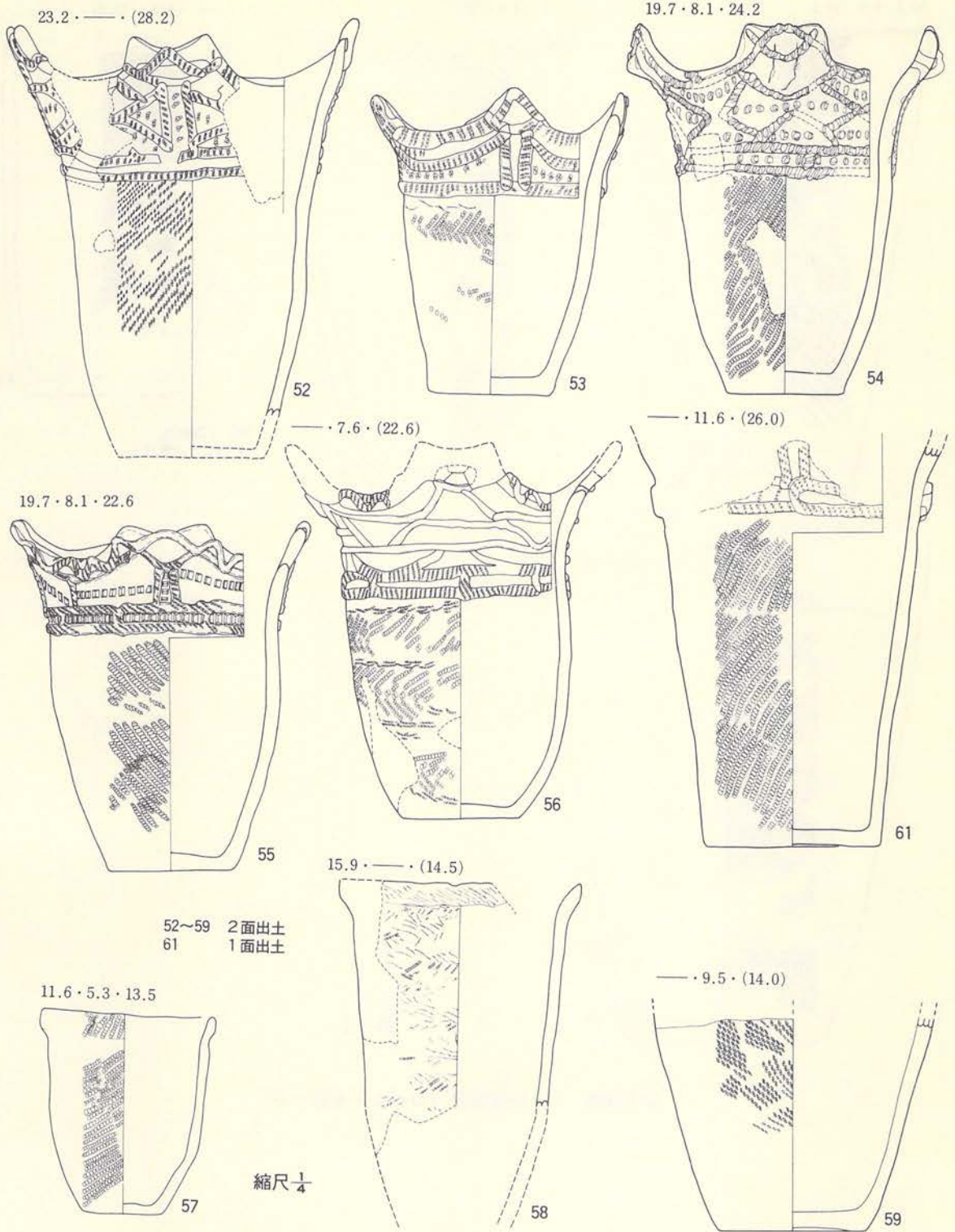


第156図 I-19住居跡 (Q-3 · 土器-6)





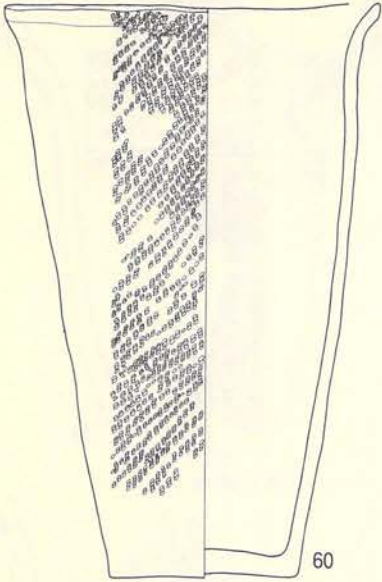
第157図 I-19住居跡 (Q-3・土器-7)



第158図 I-19住居跡 (Q-4・土器-8)

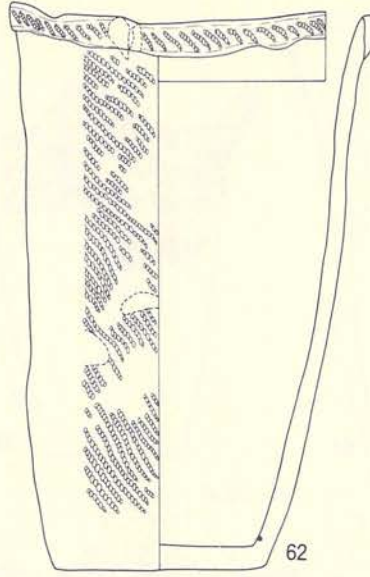


20.0 · 9.9 · 30.2



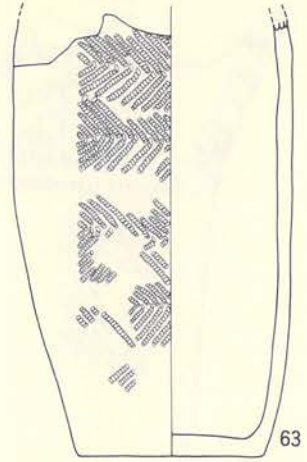
60

19.5 · 11.2 · 29.0



62

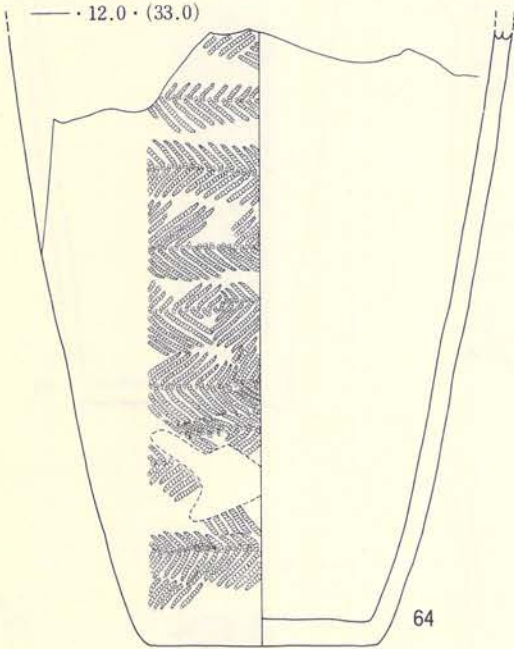
— · 9.8 · (23.4)



63

60 1面出土  
62~64 2面出土

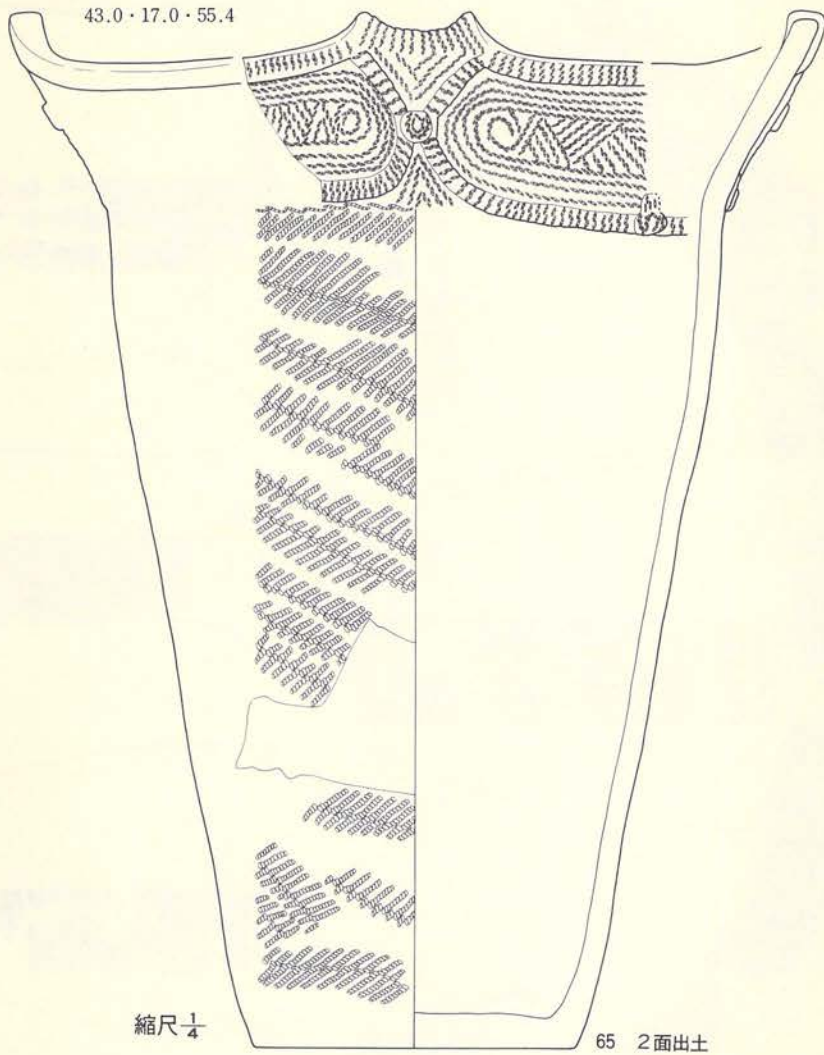
— · 12.0 · (33.0)



64

縮尺  $\frac{1}{4}$

第159図 t-19住居跡 (Q-4 · 土器-9)

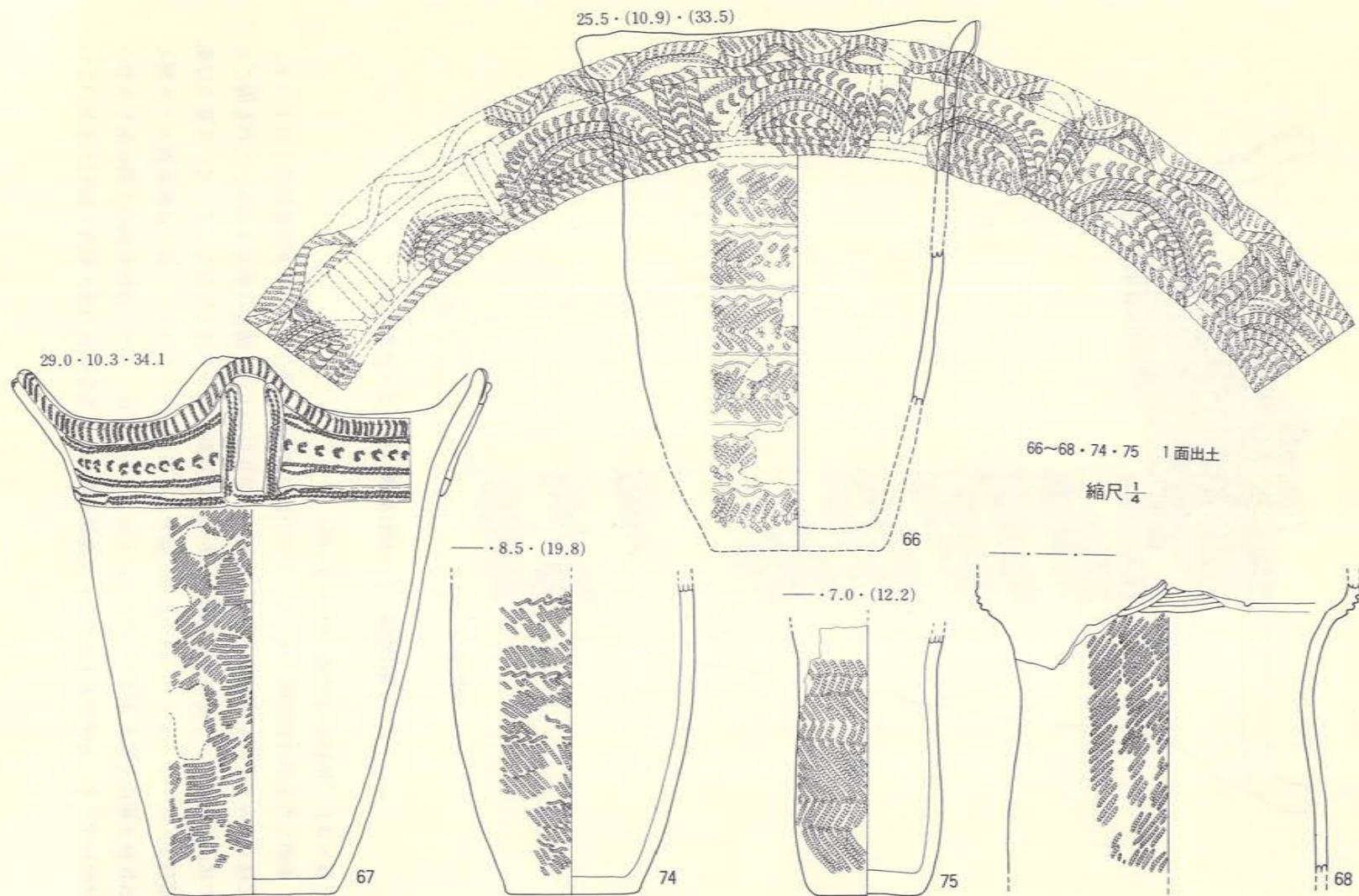


第160図 I-19住居跡 (Q-5・土器-10)

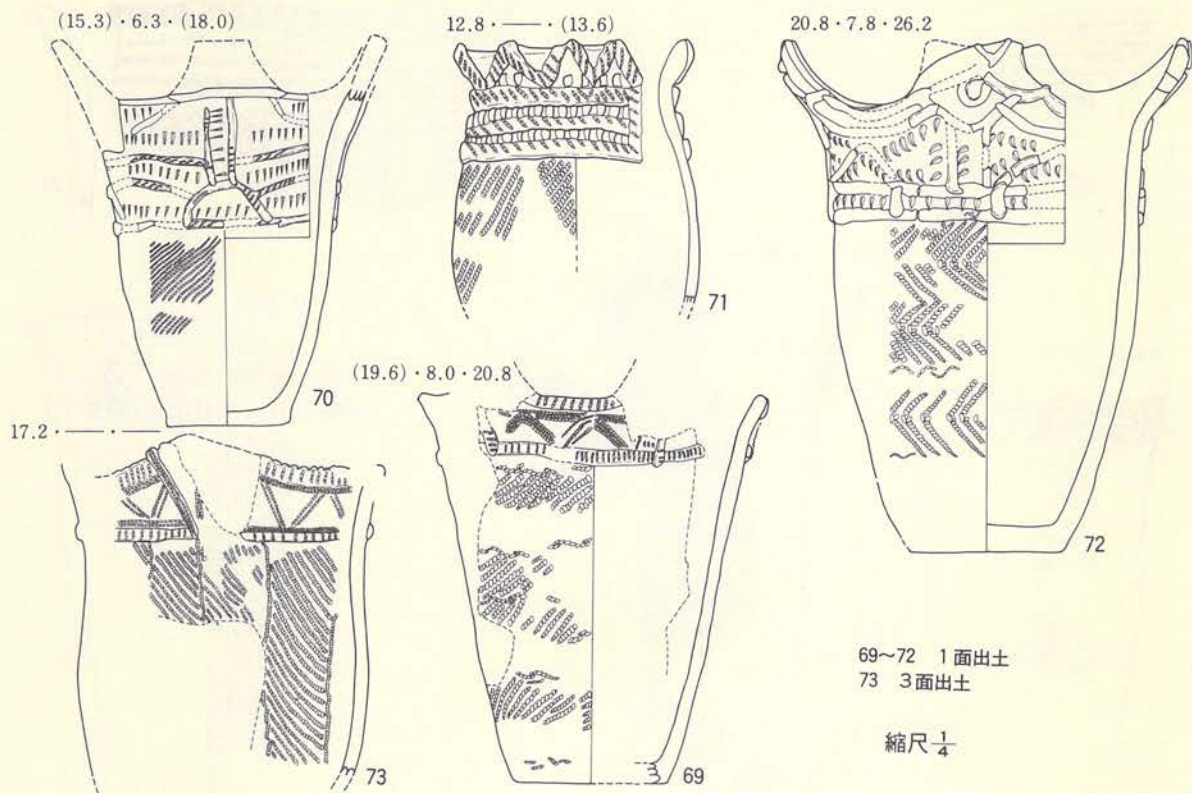
〔Q-3〕 (第153~157図、PL-91~96)

実測した土器は42個体であるが、その中に口縁部まで残存するものが30個体含まれている。文様からみると、第Ⅲ群に入る土器28個体と第Ⅳ群の土器2個体に細分される。これを面ごとの状況でみると、1面では第Ⅲ群8・9類と第Ⅳ群2類が共伴して出土している。2面では第Ⅲ群4・5・7・8・9・14の各類に属する土器が混在している。3面では第Ⅲ群8・9類と第Ⅳ群2類の土器が共伴している。以上のように本ブロックでは各群各類の土器が混じり合う状況を示しているのであるが、これは遺物の取り上げ方法か其の後の処理に適切さを欠いてい





第161圖 I-19住居跡 (Q-6 · 土器-11)



第162図 Ⅰ-19住居跡 (Q-6・土器-12)

たことによる可能性が大きい。

〔Q-4〕 (第158・159図、PL-96・97)

このブロックからは実測土器が13個体出土しているが、すべて第Ⅲ群に属する土器だけであるものの、8・9・14の各類に入る土器が混在している。各面ごとでは、1面が8・9・14の各類が混在、2面では8・14類の土器が混在する状況を示している。このブロックでの特徴は、1面・2面ともに第Ⅲ群の3・4・5類の土器を含まないことである。

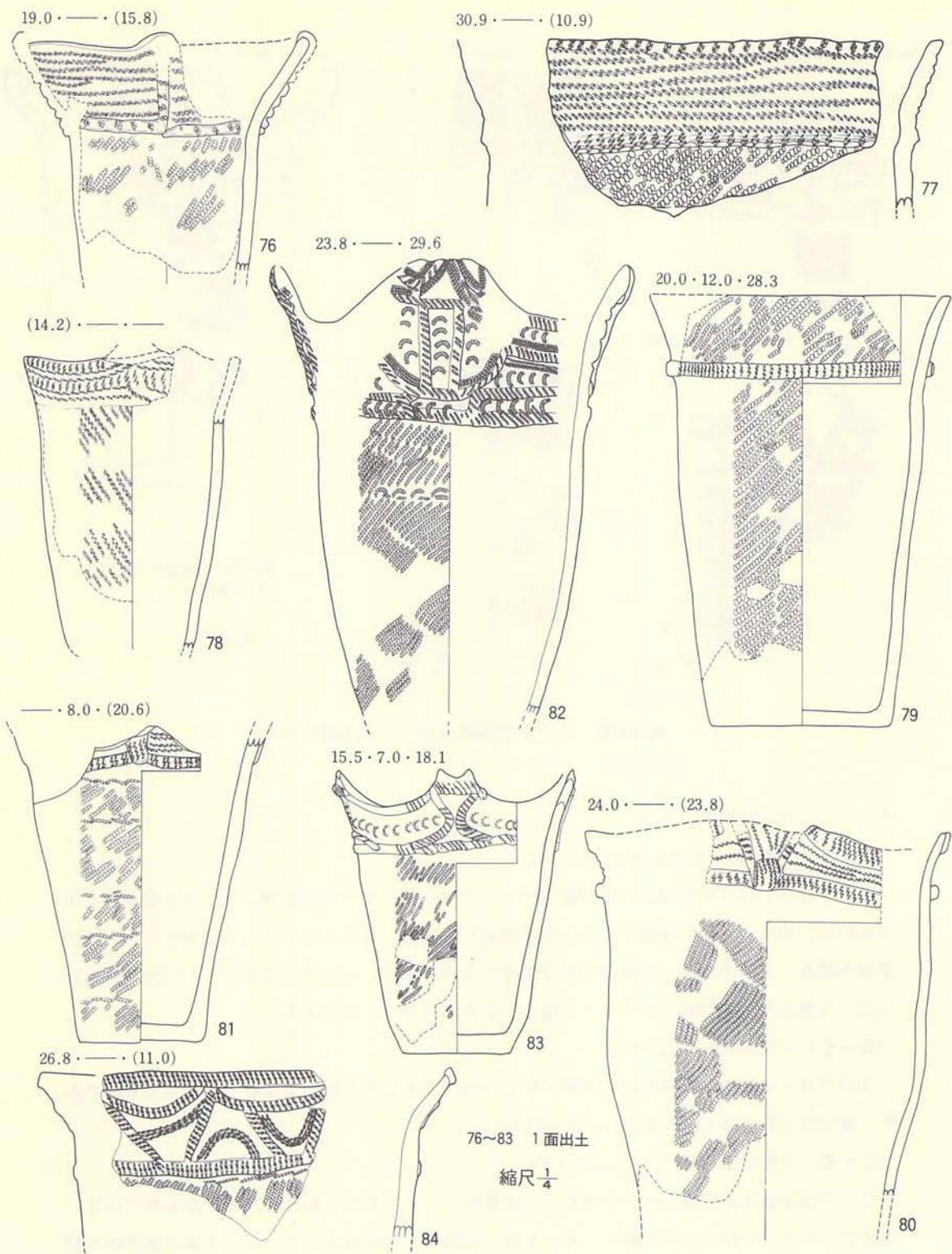
〔Q-5〕 (第160図、PL-98)

このブロックでは1個体だけが実測されている。出土した土器は第Ⅲ群7類に入るものであり、層位は2面である。1面からの出土はない。

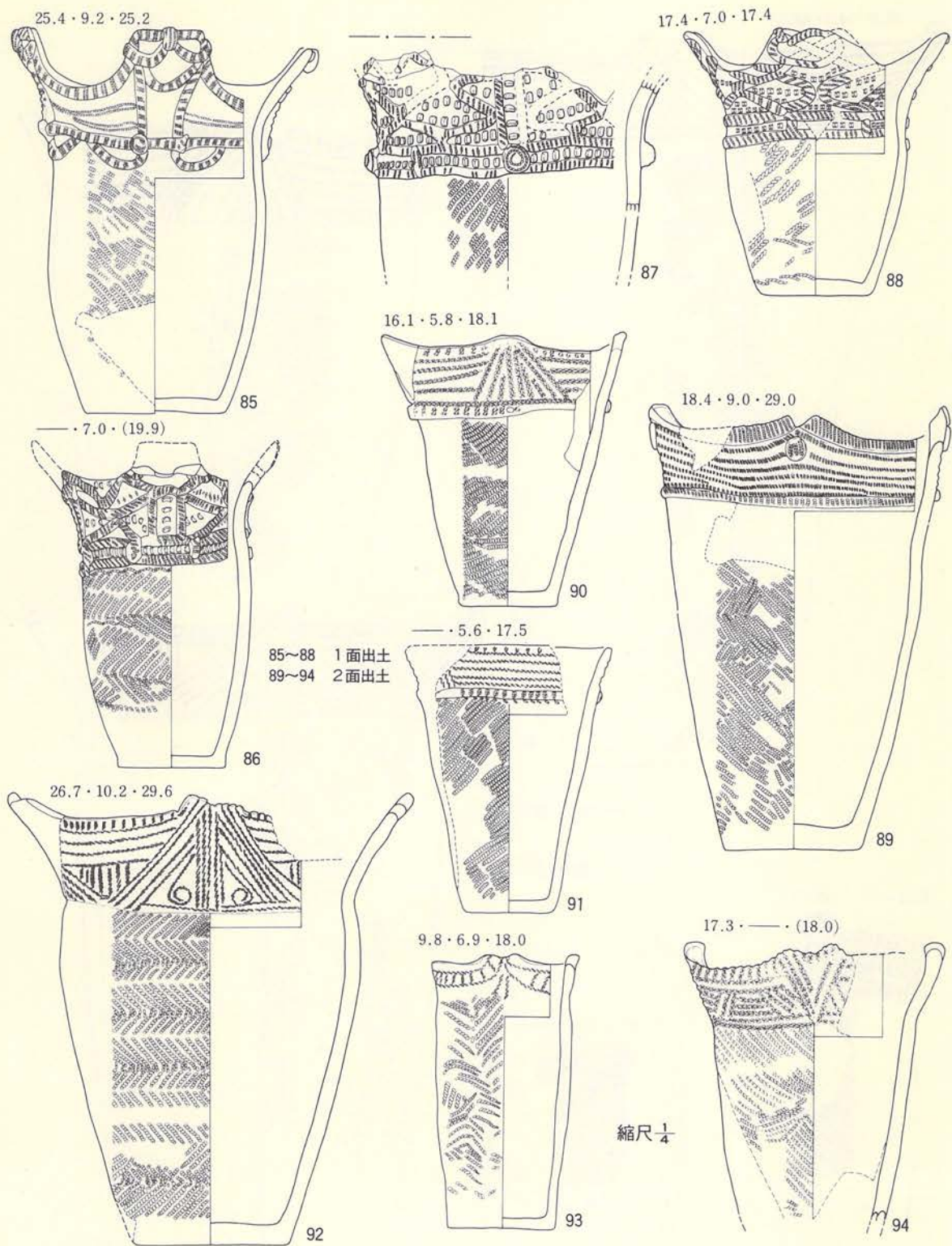
〔Q-6〕 (第161・162図、PL-98・99)

ここでは10個体の実測され、その中には第Ⅲ群7・8・9類と第Ⅳ群3類が含まれている。各面ごとでは、1面では第Ⅲ群7・8・9類と第Ⅳ群3類が混在している。2面は第Ⅲ群7類



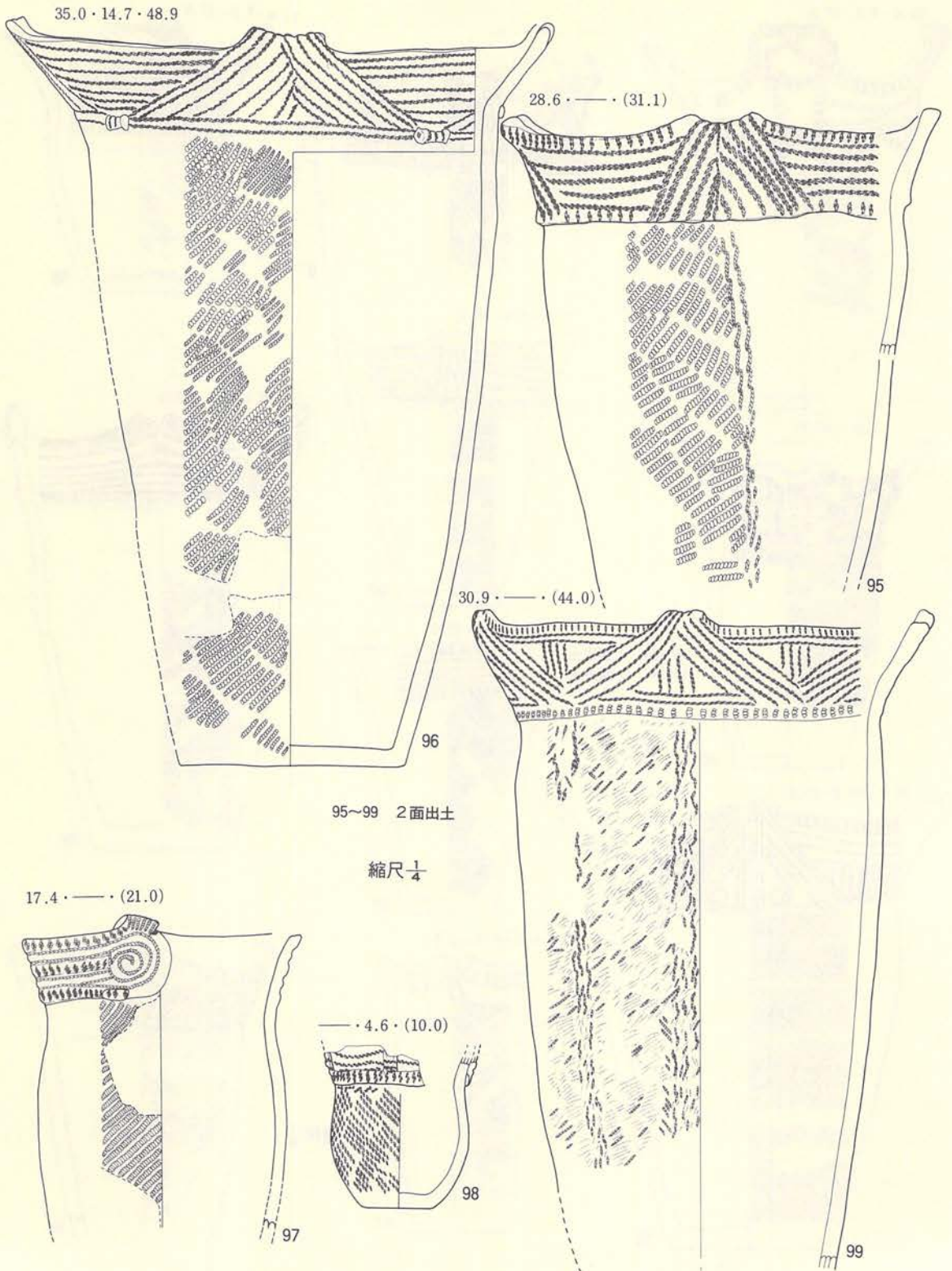


第163図 I-19住居跡 (Q-7・土器-13)

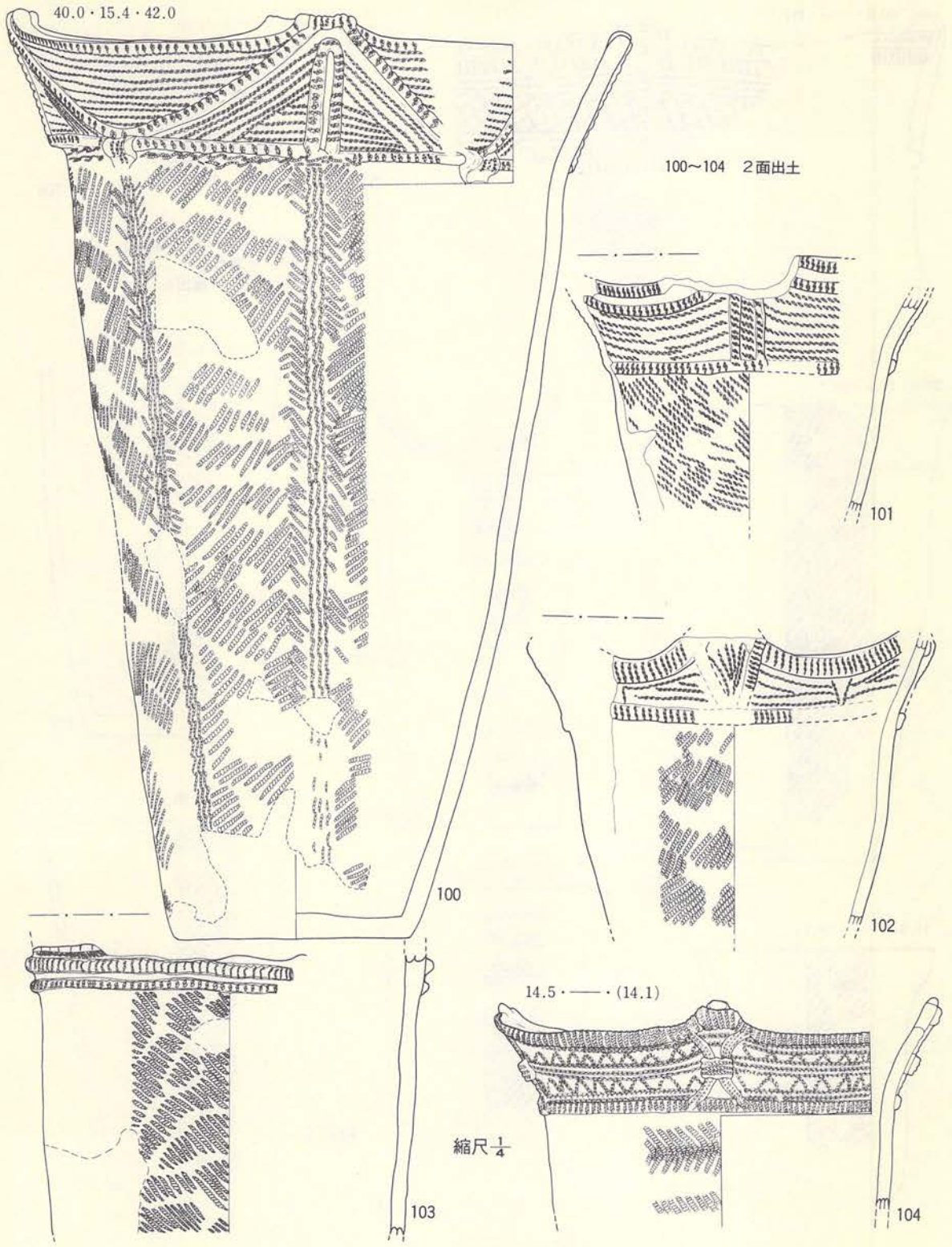


第164図 I-19住居跡 (Q-7・土器-14)



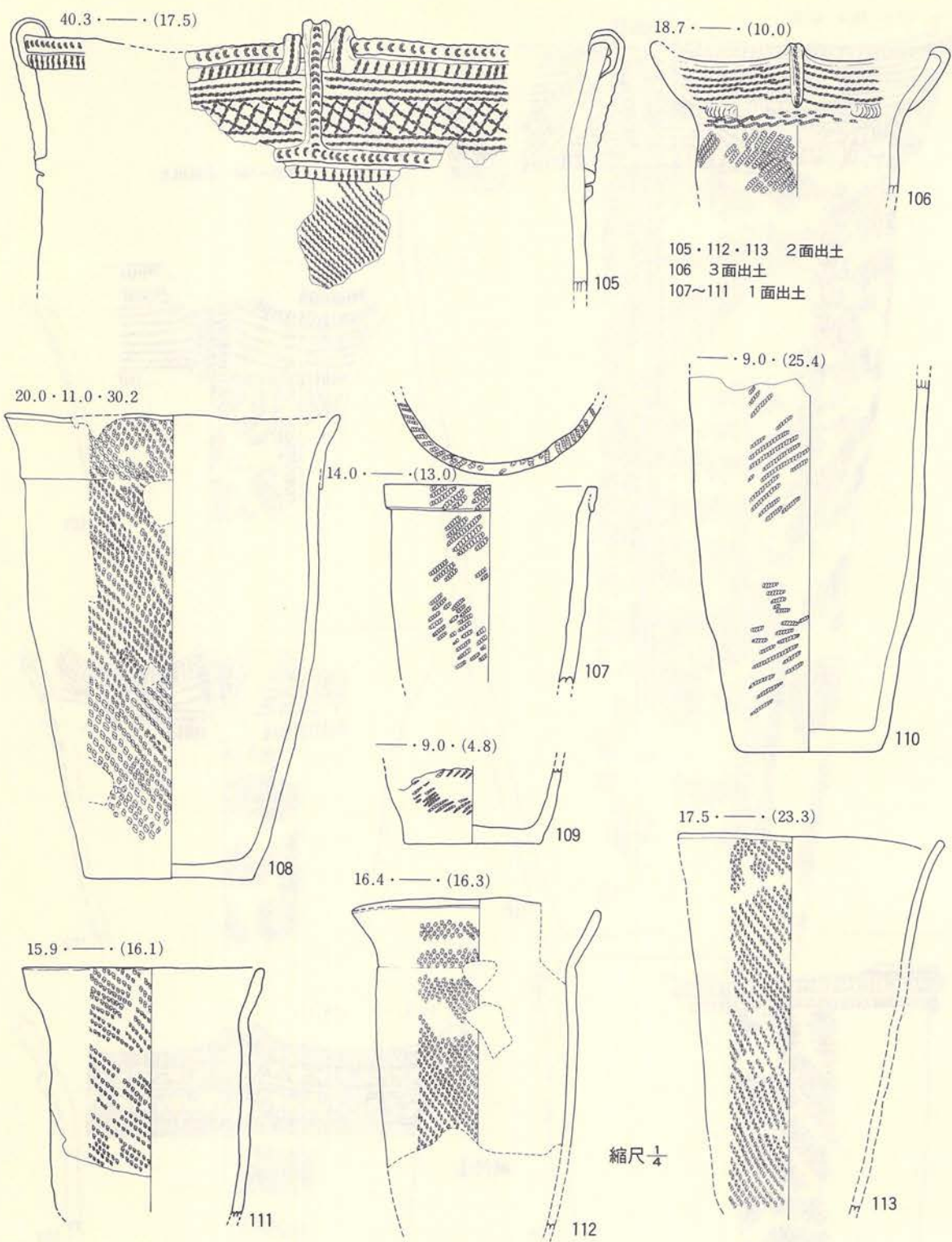


第165圖 I-19住居跡 (Q-7 · 土器-15)

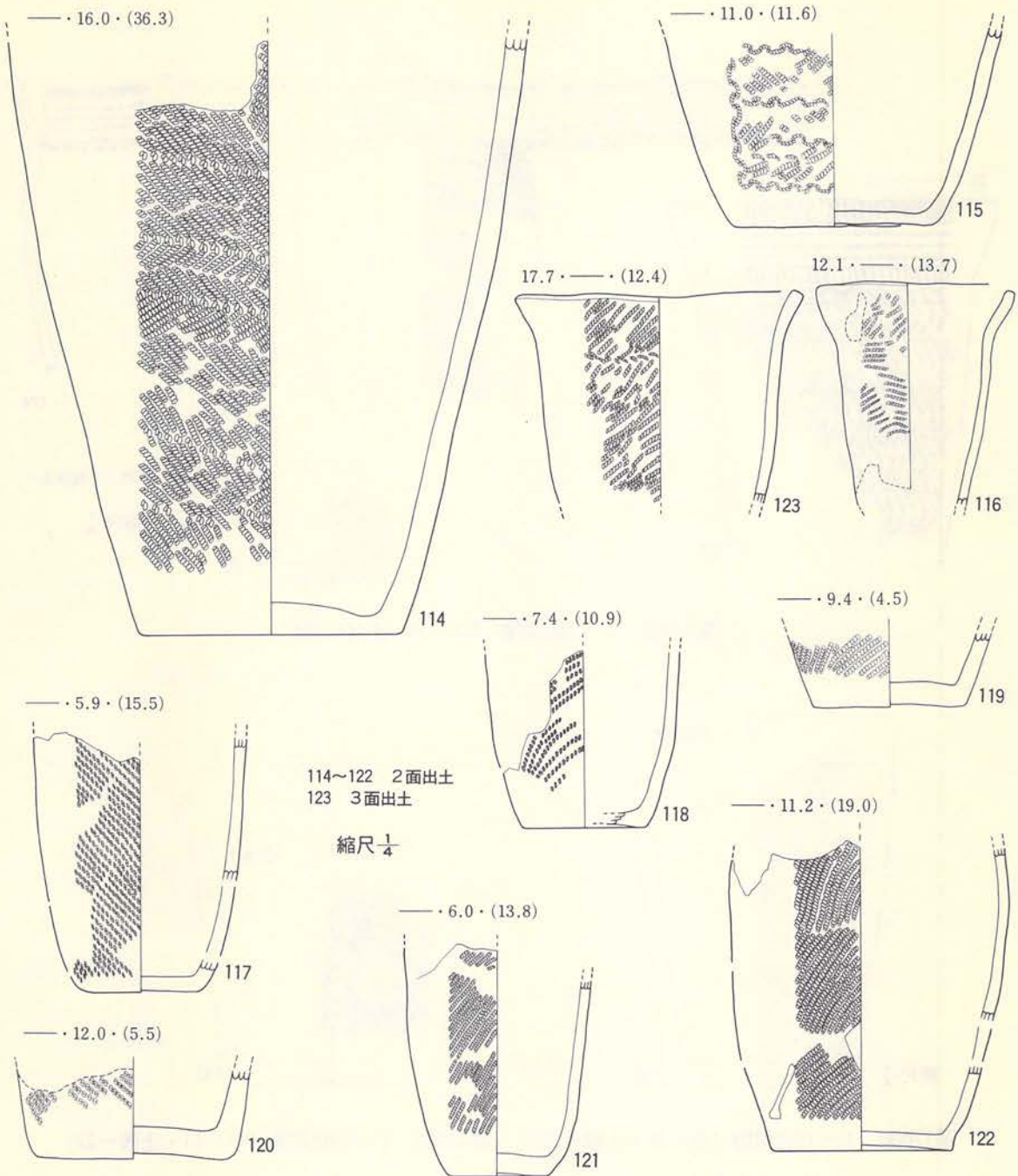


第166図 I-19住居跡 (Q-7 · 土器-16)



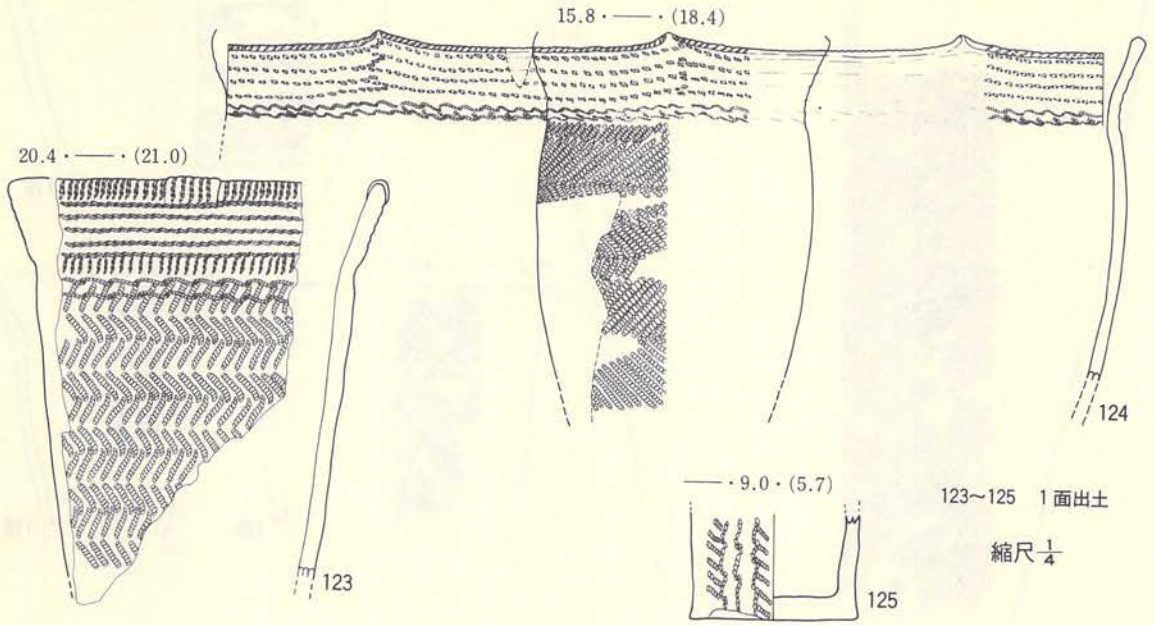


第167図 I-19住居跡 (Q-7・土器-17)

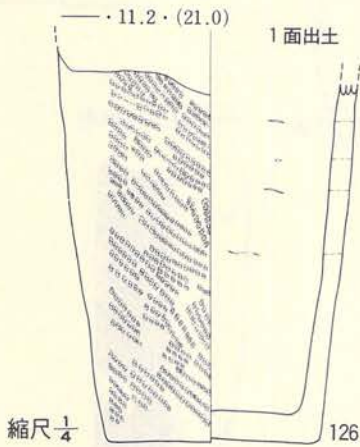


第168図 I-19住居跡 (Q-7・土器-18)

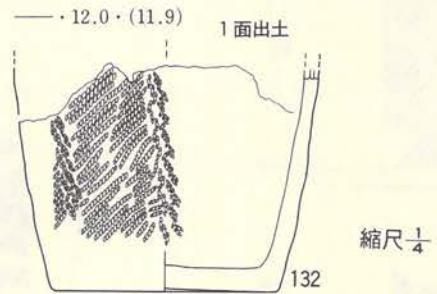




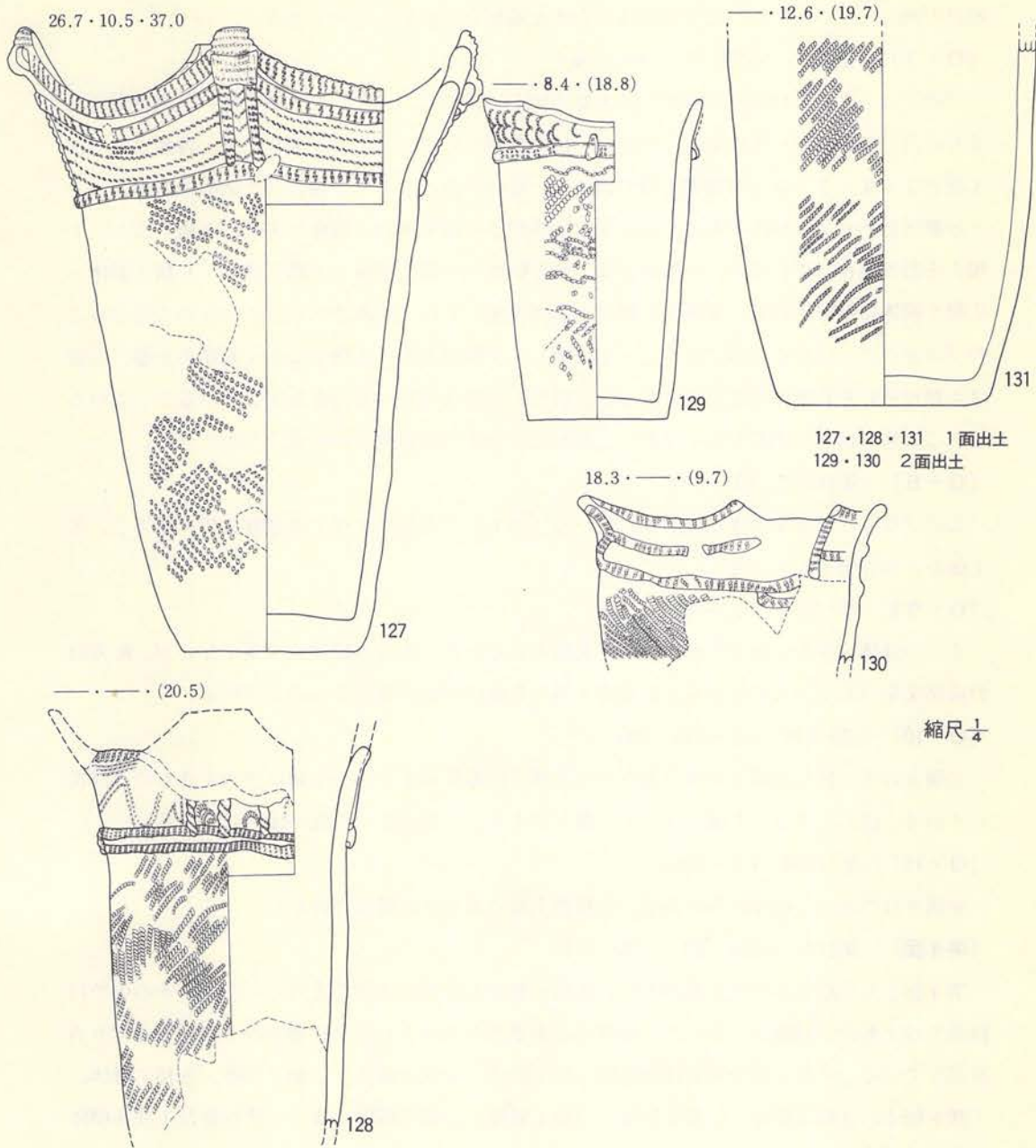
第169図 I-19住居跡 (Q-8・土器-19)



第170図 I-19住居跡 (Q-9・土器-20)



第172図 I-19住居跡 (Q-11・土器-22)



第171図 I-19住居跡 (Q-10・土器-21)



だけが出土している。これは下位面ほど古くなる傾向を示すものであろう。

〔Q-7〕（第163～168図、PL-99～104）

このブロックでは48個体の実測可能土器が出土している。出土した土器はすべて第Ⅲ群に入るものだけであるが、その中には3～9・14の各類に相当する土器が混在する。各面ごとでは1面が3・4・6・8・14類の土器であるが、量的にみると8・9類が計7個体で他の3・4・6類は合わせて6個体である。特に3類は破片からの実測で1個体である。2面では3～7類の土器が混在しているが、個体数では3類1個体・4類2個体・5類6個体・6類5個体・7類2個体に細分される。3面は4類が1個体出土しているのみである。これらのことからこのブロックについてまとめてみると、1面は8・9類の土器、2面では5・6類の土器、3面は4類がそれぞれ主体を成していることが判り、下位ほど古い土器を出土していることがいえる。この他に14類の土器も多く出土し、各面ごとにその対応関係を知ることができる。

〔Q-8〕（第169図、PL-104）

このブロックでは3個体が実測されている。出土した土器はすべて第Ⅲ群3類に相当し、第1面からのみ出土している。

〔Q-9〕（第170図、PL-104）

ここでは第1面から出土した1個体が実測されている。土器の属性は明確でないが、縦方向の綾絡文を付していることから、第Ⅲ群3類～5類位の間には属するものと考えられる。

〔Q-10〕（第171図、PL-104・105）

実測されたのは5個体である。出土した土器には第Ⅲ群4・7～9類に相当するものが混在している。面としては、1面では4・8類が出土し、2面が8・9類が出土している。

〔Q-11〕（第172図、PL-105）

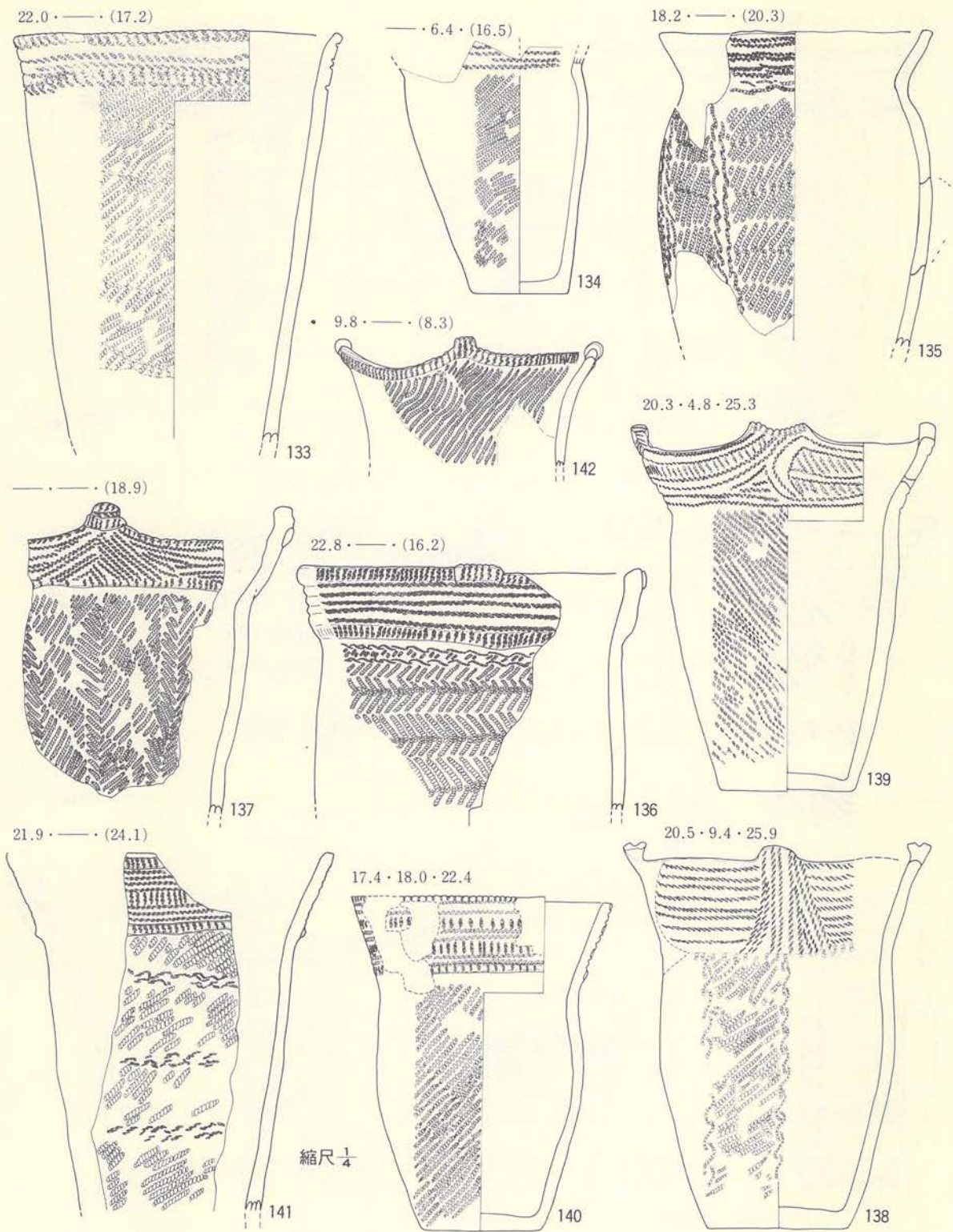
実測されたのは1個体のみである。第Ⅲ群土器であろうと推定される。

〔第4面〕（第173～181図、PL-105～112）

第4面として取りあげた土器の中に、実測可能なものが70個体含まれていたが、その中で口縁部を残すものは49個体であった。49個体は第Ⅲ群を主体として第Ⅳ群を若干混在する在り方を示している。それらの分類では第Ⅲ群3類5個体、4類8個体、5類4個体、6類7個体、7類8個体、8類2個体、12類2個体、13類1個体、14類7個体となり、第Ⅳ群は1類4個体である。

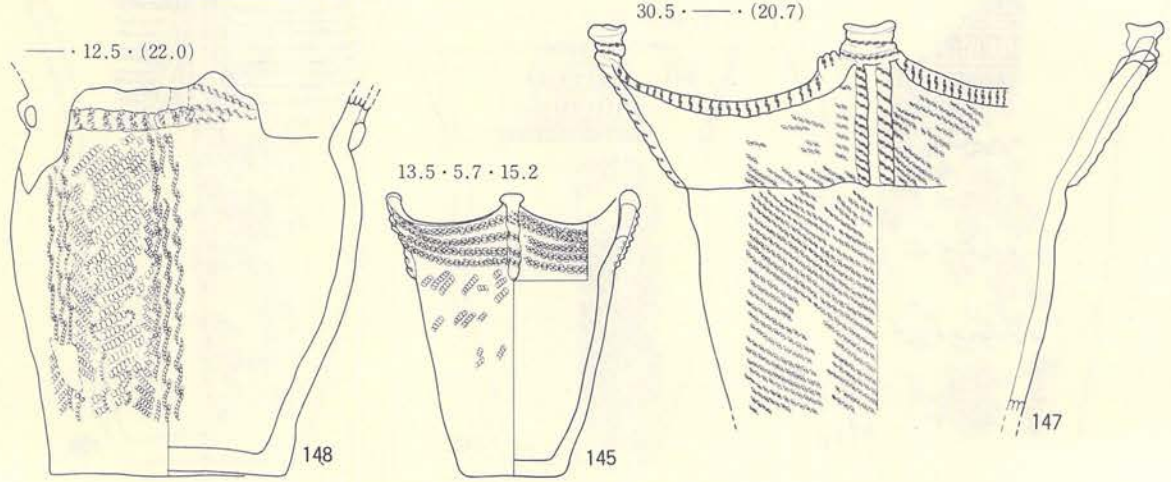
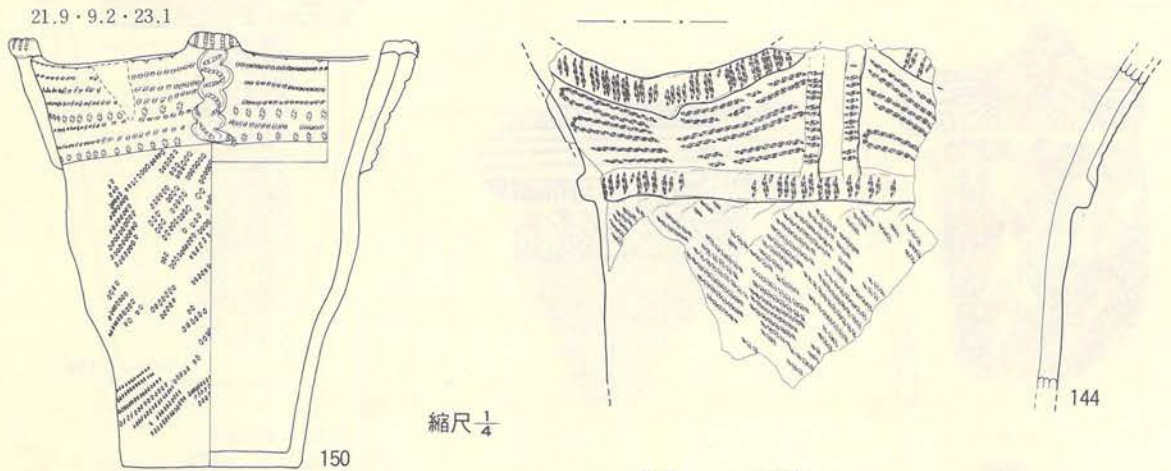
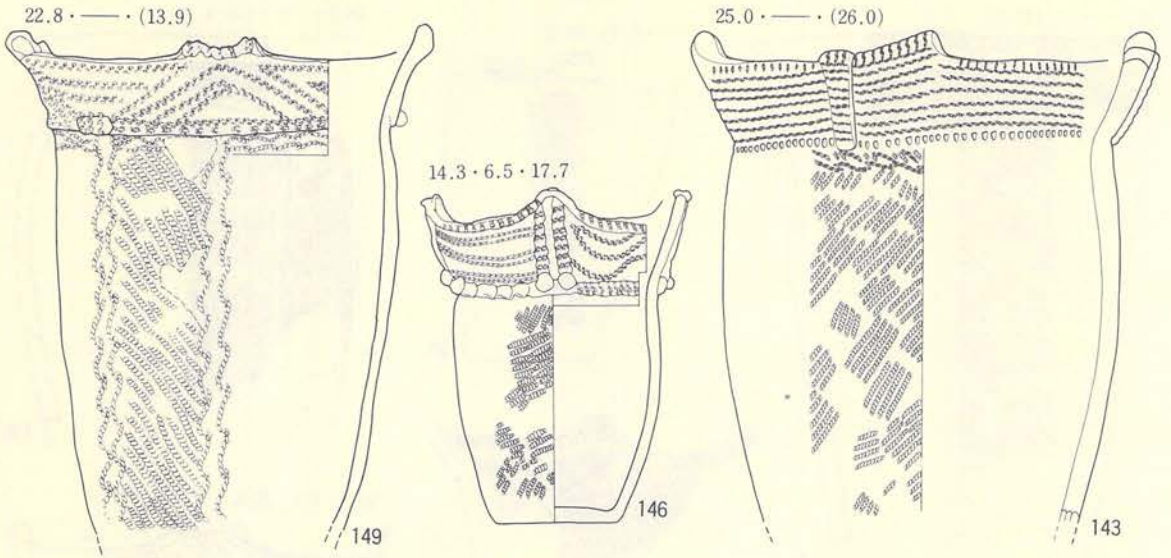
〔第5面〕（第35図、PL-49・50）

第5面出土の土器には実測可能なものが16個体あり、その中には第Ⅲ群と第Ⅳ群の土器が含まれている。第Ⅲ群の土器には2～4・6・14の各類が各1個体、5類が3個体出土している。第Ⅳ群は1類である。

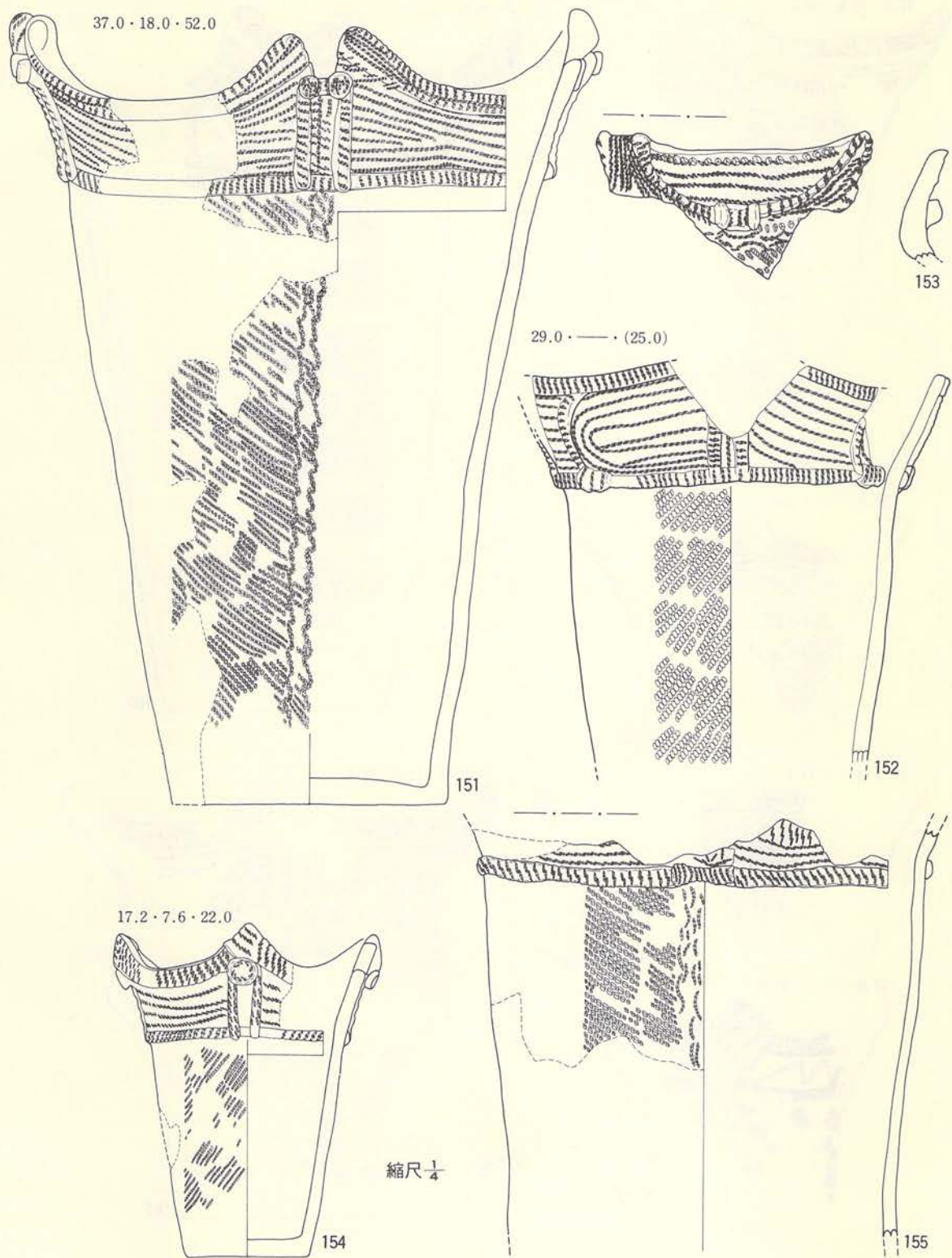


第173図 I-19住居跡 (第4面・土器-23)



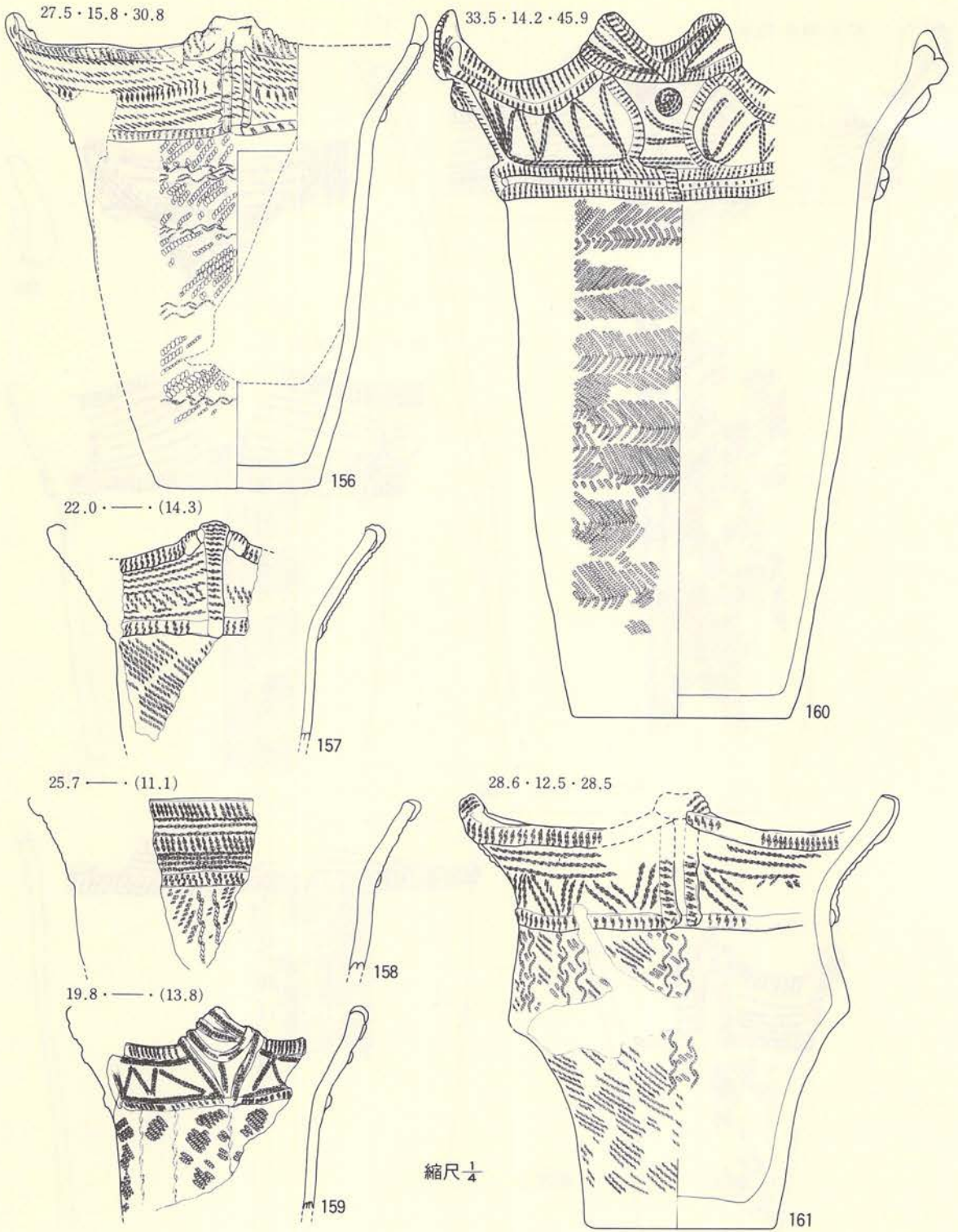


第174図 I—19住居跡 (第4面・土器—24)

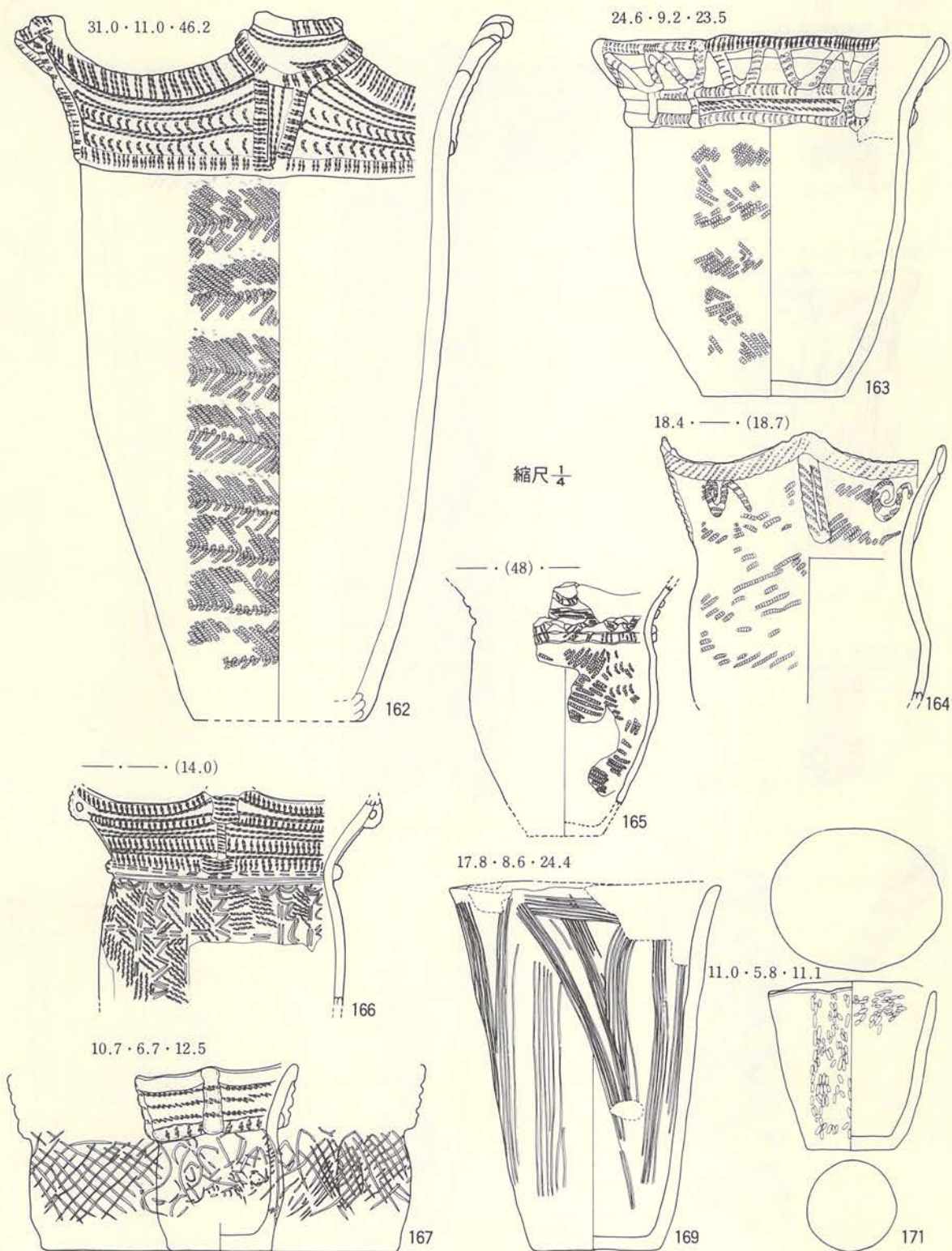


第175図 I—19住居跡（第4面・土器—25）





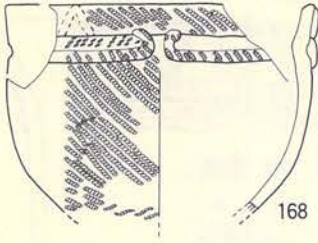
第176図 I—19住居跡 (第4面・土器—26)



第177図 | -19住居跡 (第4面・土器-27)



16.5 · — · (11.0)



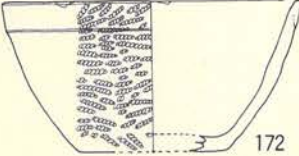
168

15.1 · 8.7 · 21.3



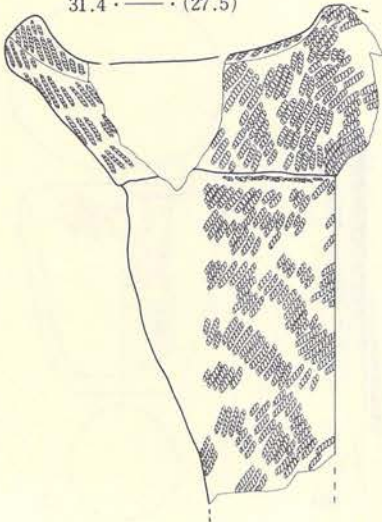
170

15.8 · 7.8 · 8.0



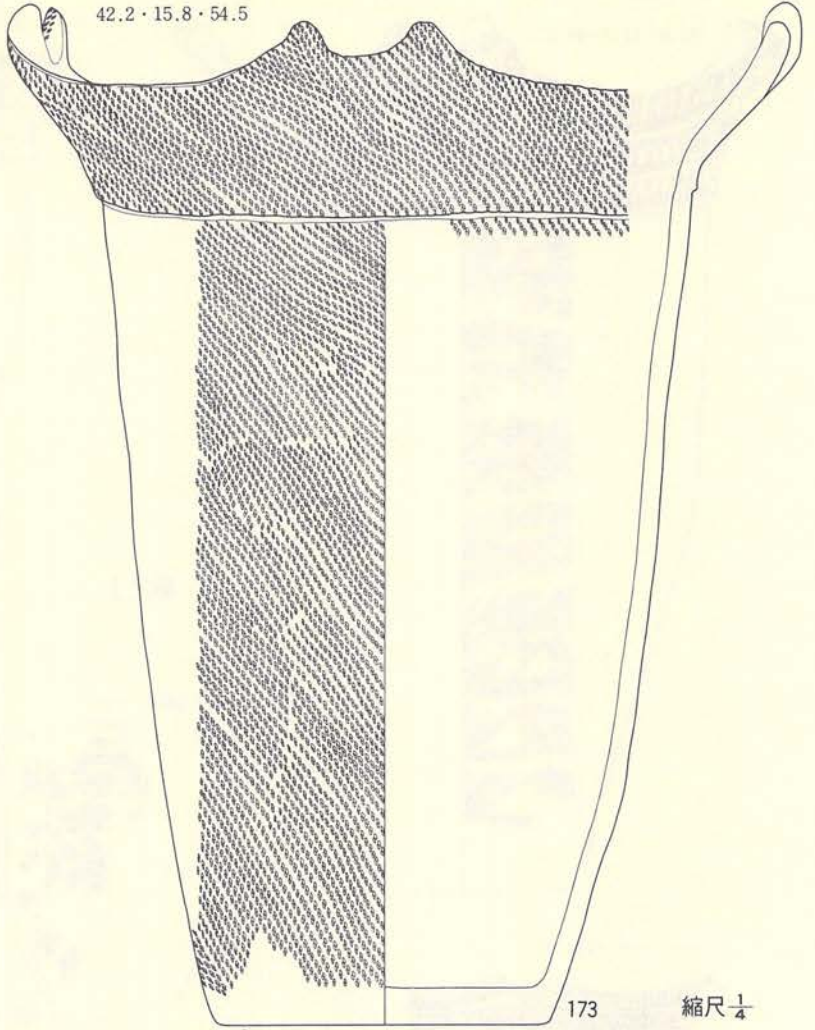
172

31.4 · — · (27.5)



171

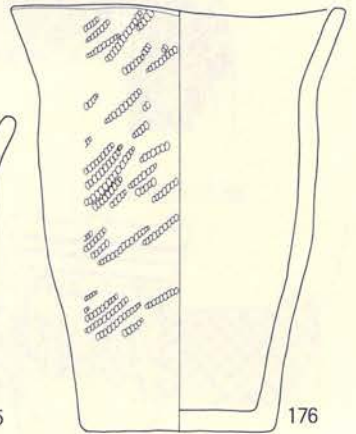
42.2 · 15.8 · 54.5



173

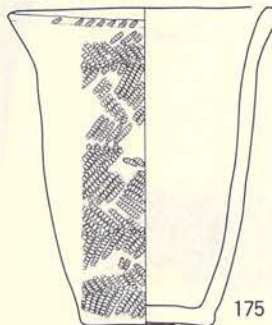
縮尺  $\frac{1}{4}$

19.8 · 10.0 · 22.6



176

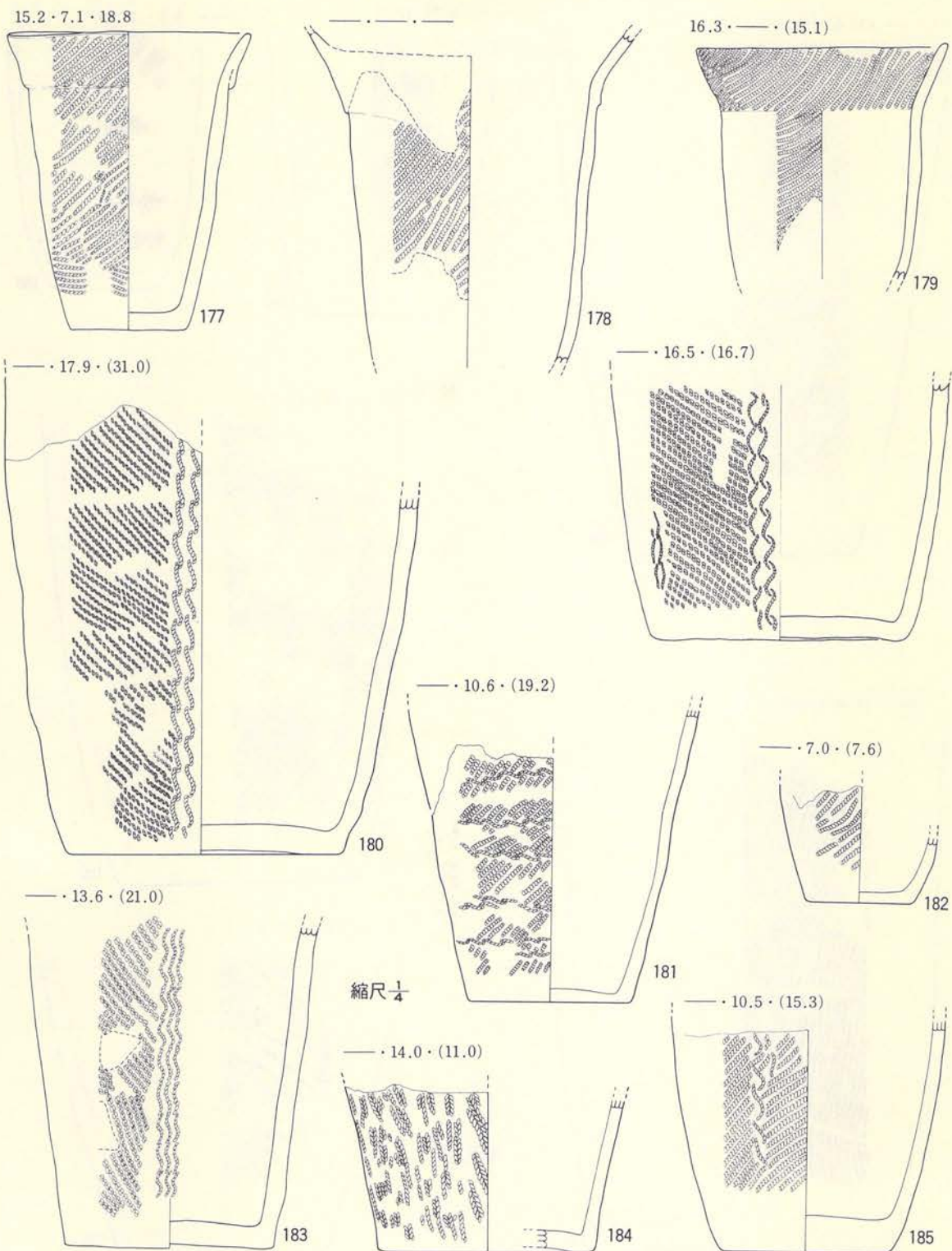
14.3 · 7.0 · 16.9



175

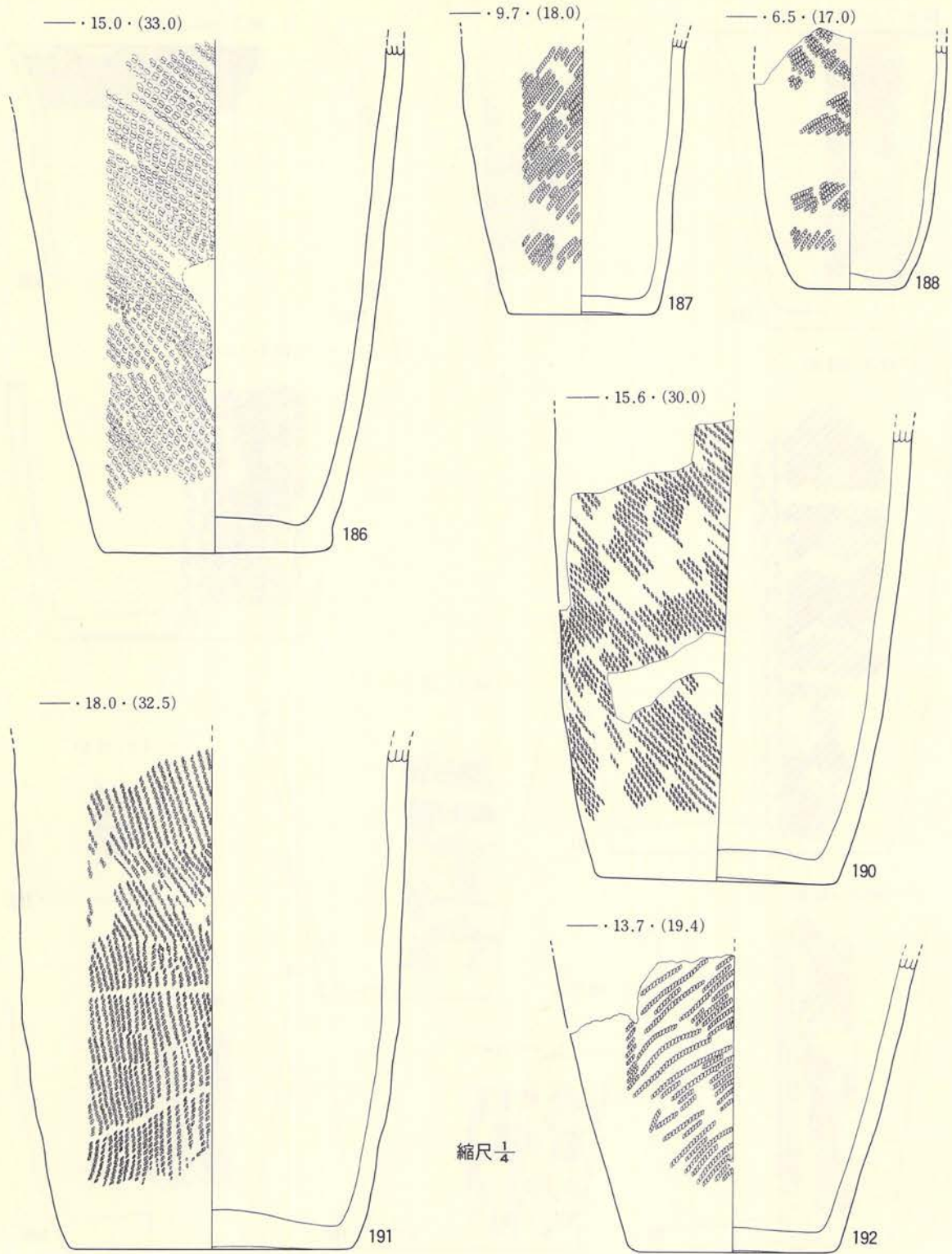
174

第178図 I-19住居跡 (第4面・土器-28)

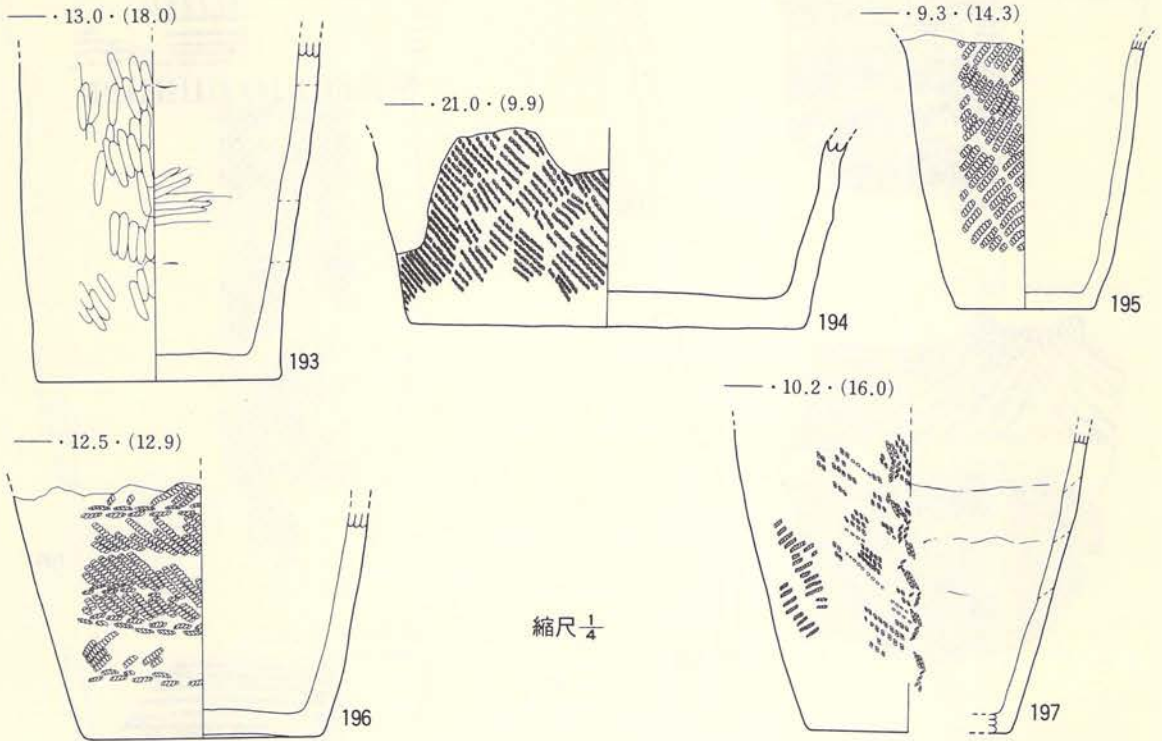


第179図 I-19住居跡 (第4面・土器-29)





第180図 I-19住居跡 (第4面・土器-30)



第181図 1-19住居跡 (第4面・土器-31)

以上のことから4面・5面の状況をまとめると、1面～3面まで出土していた第Ⅲ群9類をまったく共伴していないことに注目する必要がある、さらにまた、8類の土器も2個体のみと主体となるような状況ではなく、客体としての在り方を示すことにも注目しておきたい。このことから、4面・5面は第Ⅲ群4類～7類の土器が主体でそれに第Ⅳ群1類が混じる形で構成されるものであろう。

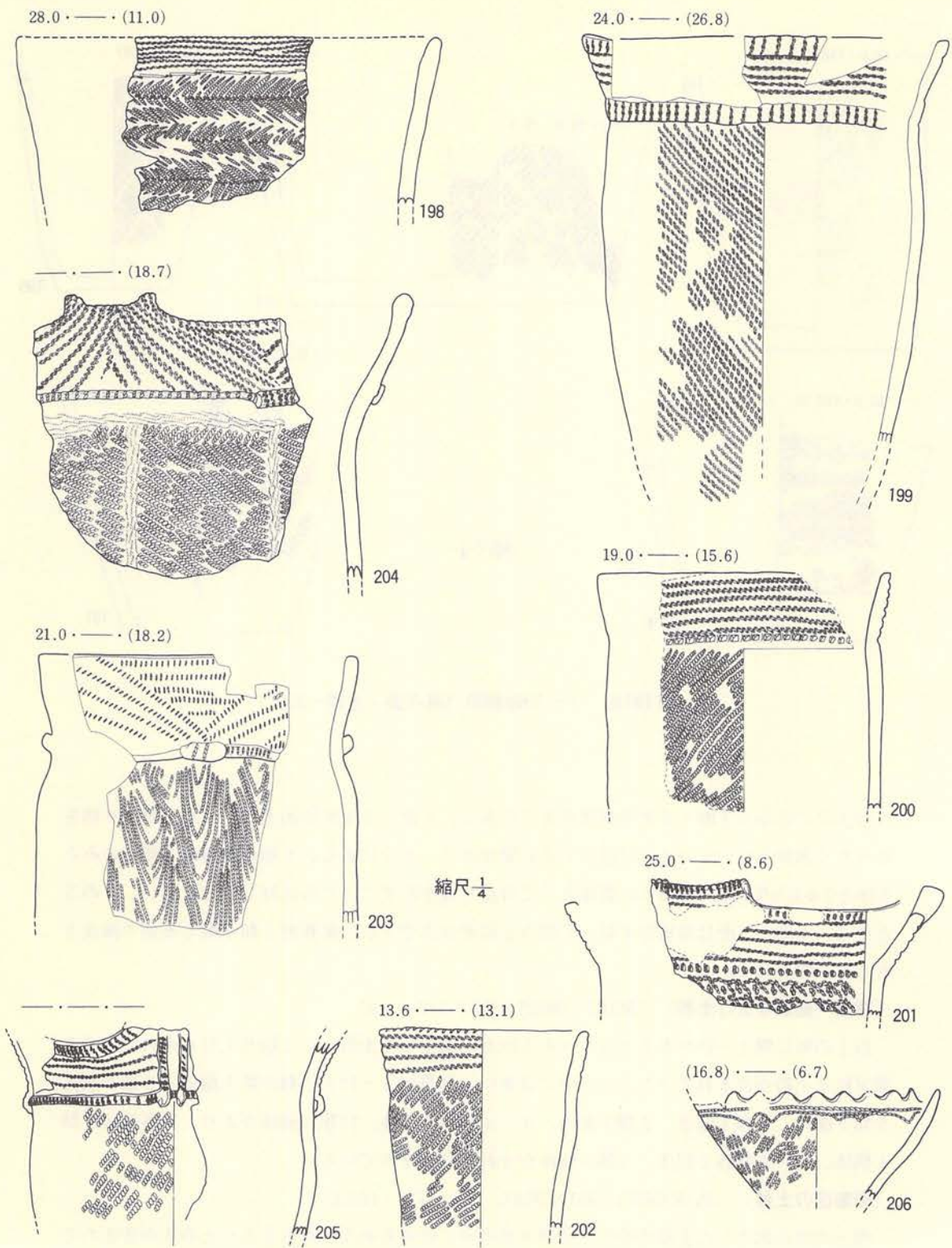
〔埋土一括取り上げ土器〕 (第182～189図、PL-112～118)

以上の外に埋土一括やセクションベルト内から出土した土器として取り上げた中に74点の実測可能な土器が含まれていた。この中には更に、第Ⅲ群2・12・13類が各1個体、8類2個体、5類3個体、9類4個体、6類5個体、3・4類各7個体、14類10個体があり、第Ⅳ群は1類1個体、2・4類各2個体、3類4個体がそれぞれ含まれている。

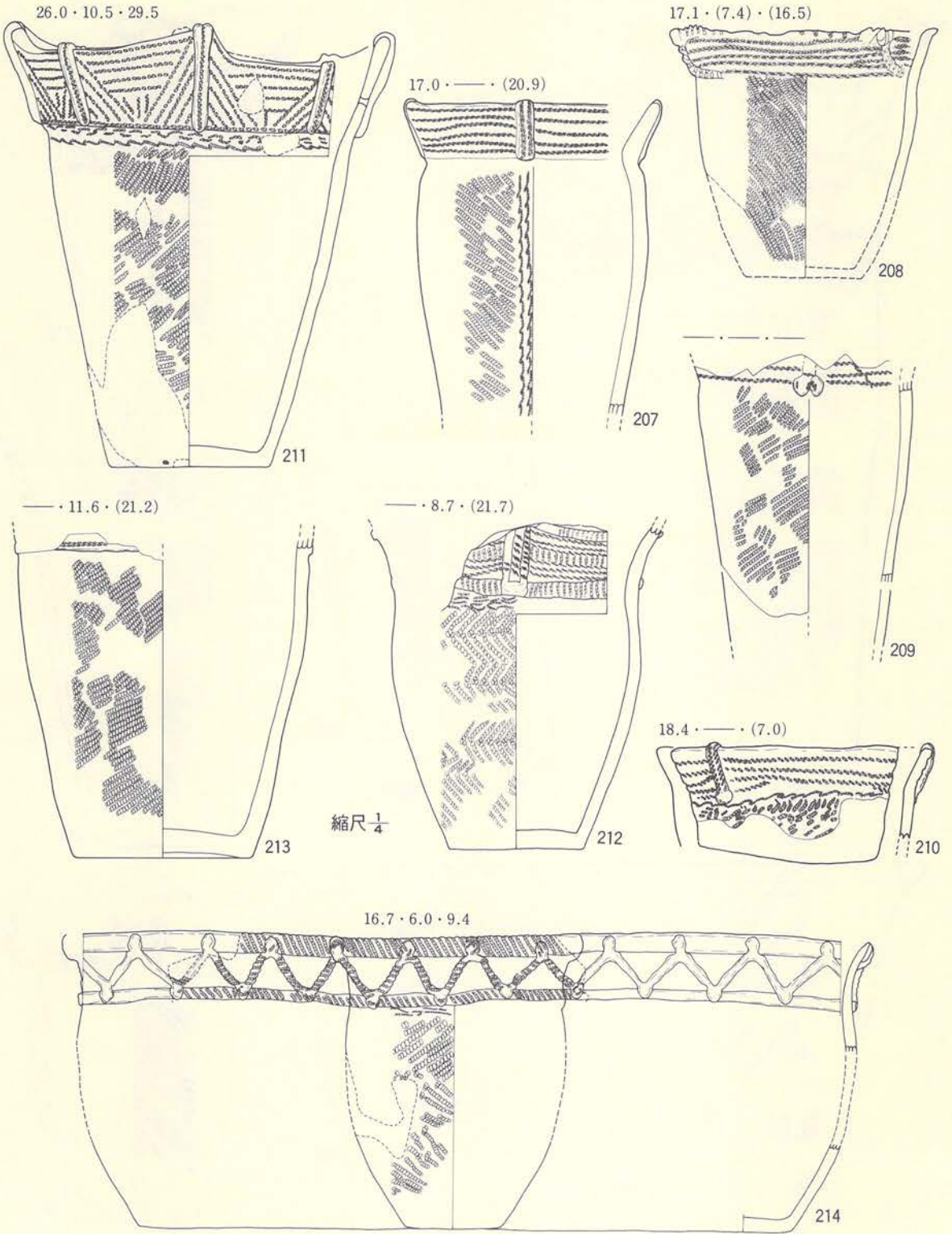
〔拓影図の土器〕 (第190図273～第192図301、PL-119・120A)

埋土内から出土した土器の中に、完形土器の中にはみられない特徴をもつ土器片が含まれて



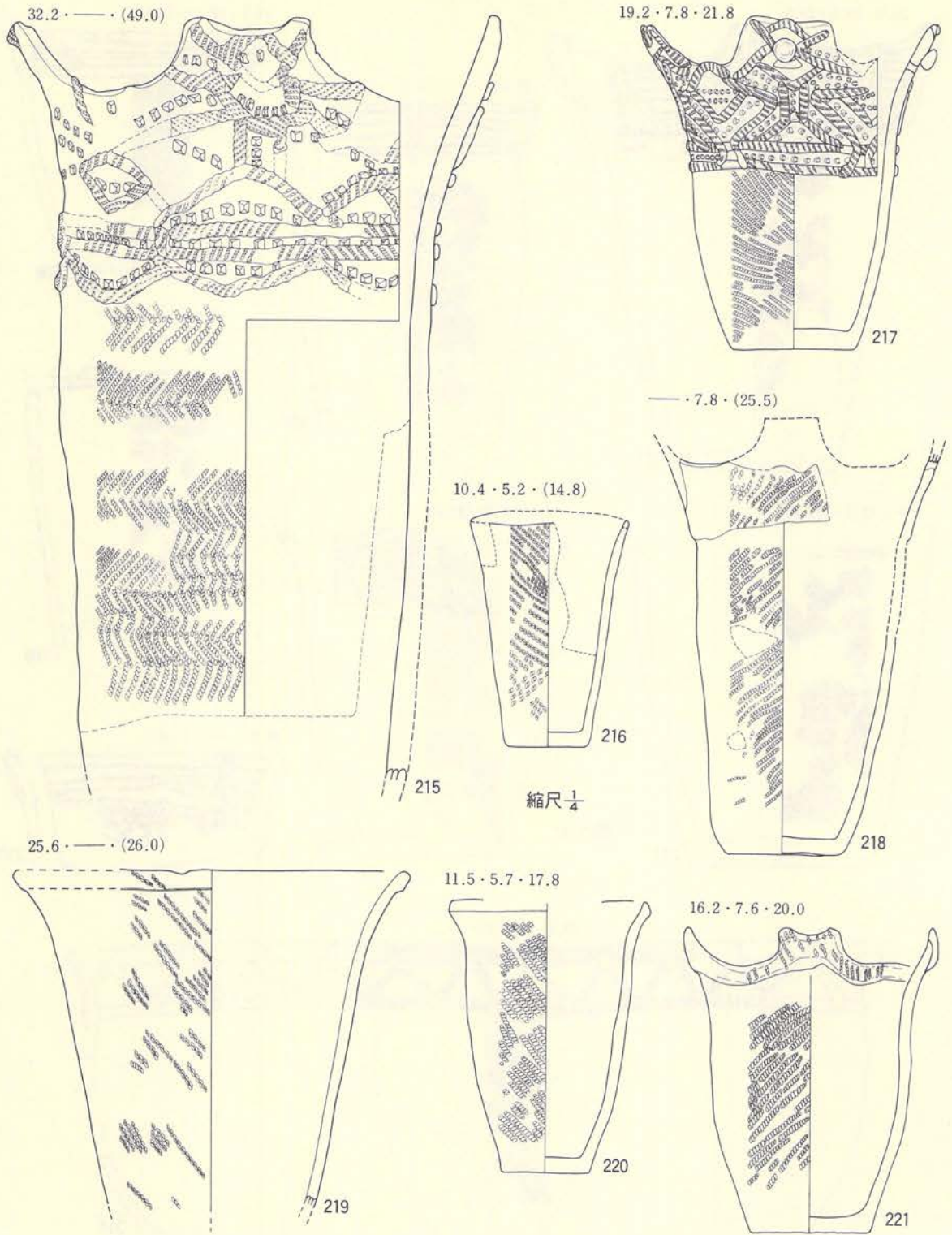


第182図 I—19住居跡 (ベルト・土器—32)

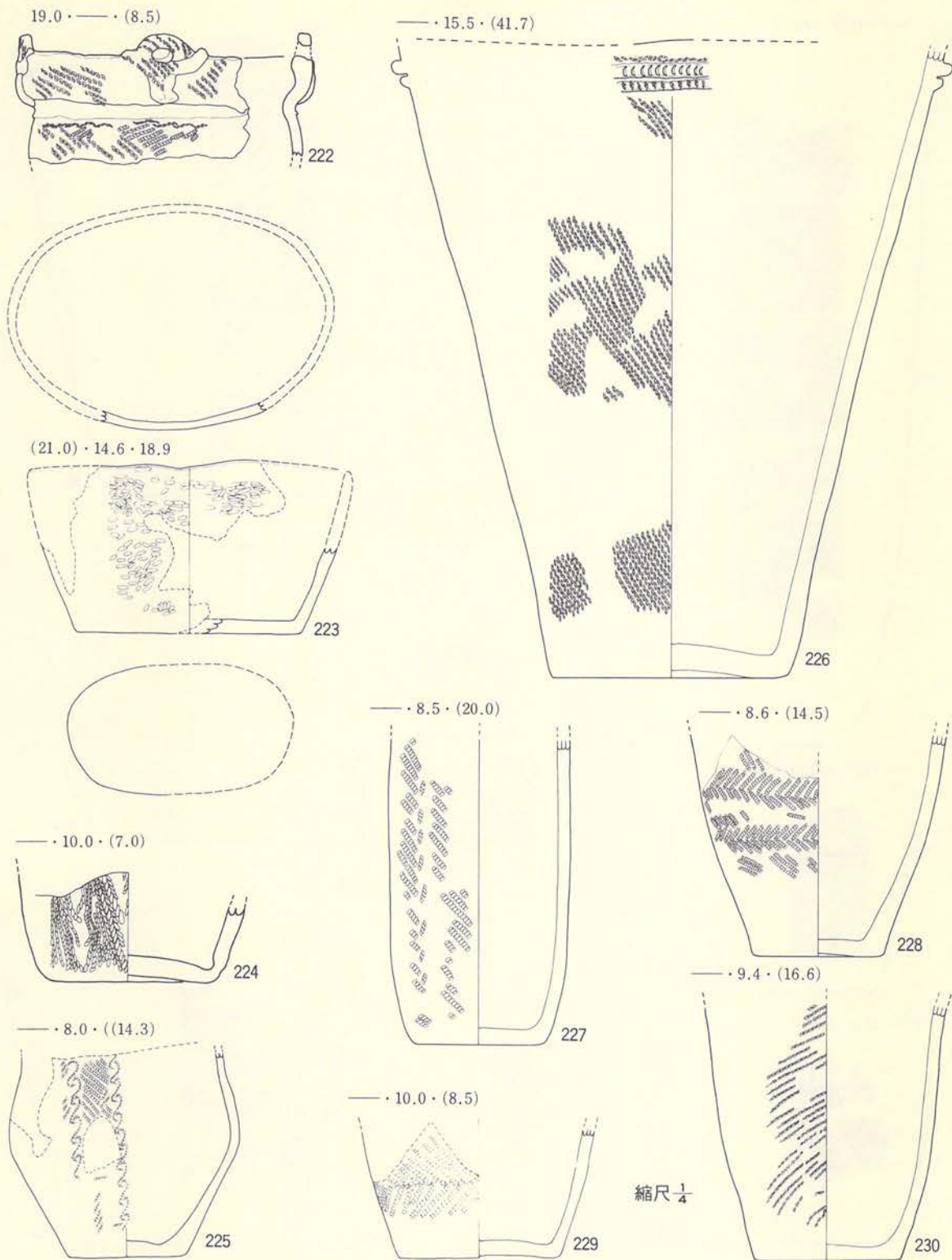


第183図 I-19住居跡 (ベルト・土器-33)



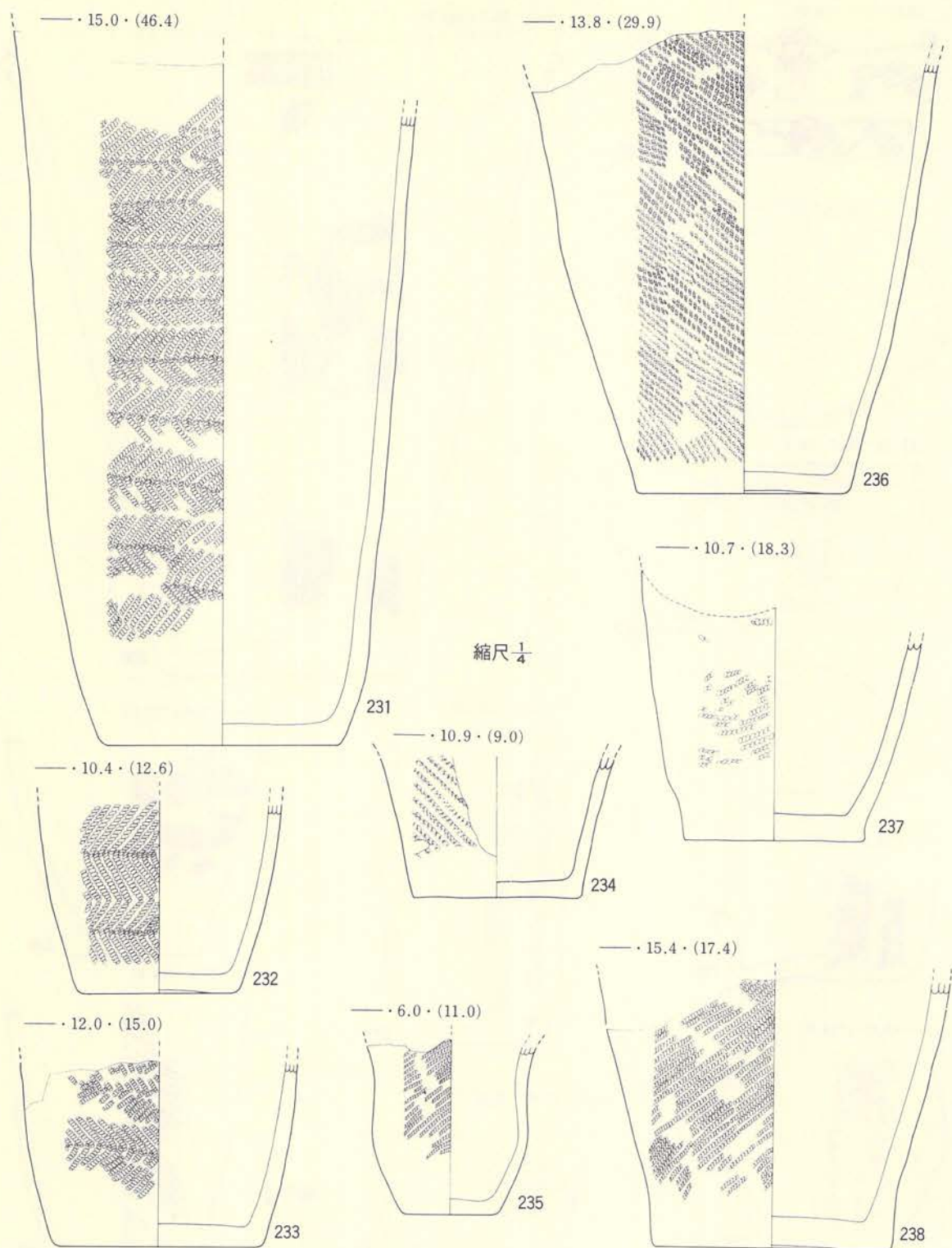


第184図 I-19住居跡 (ベルト・土器-34)

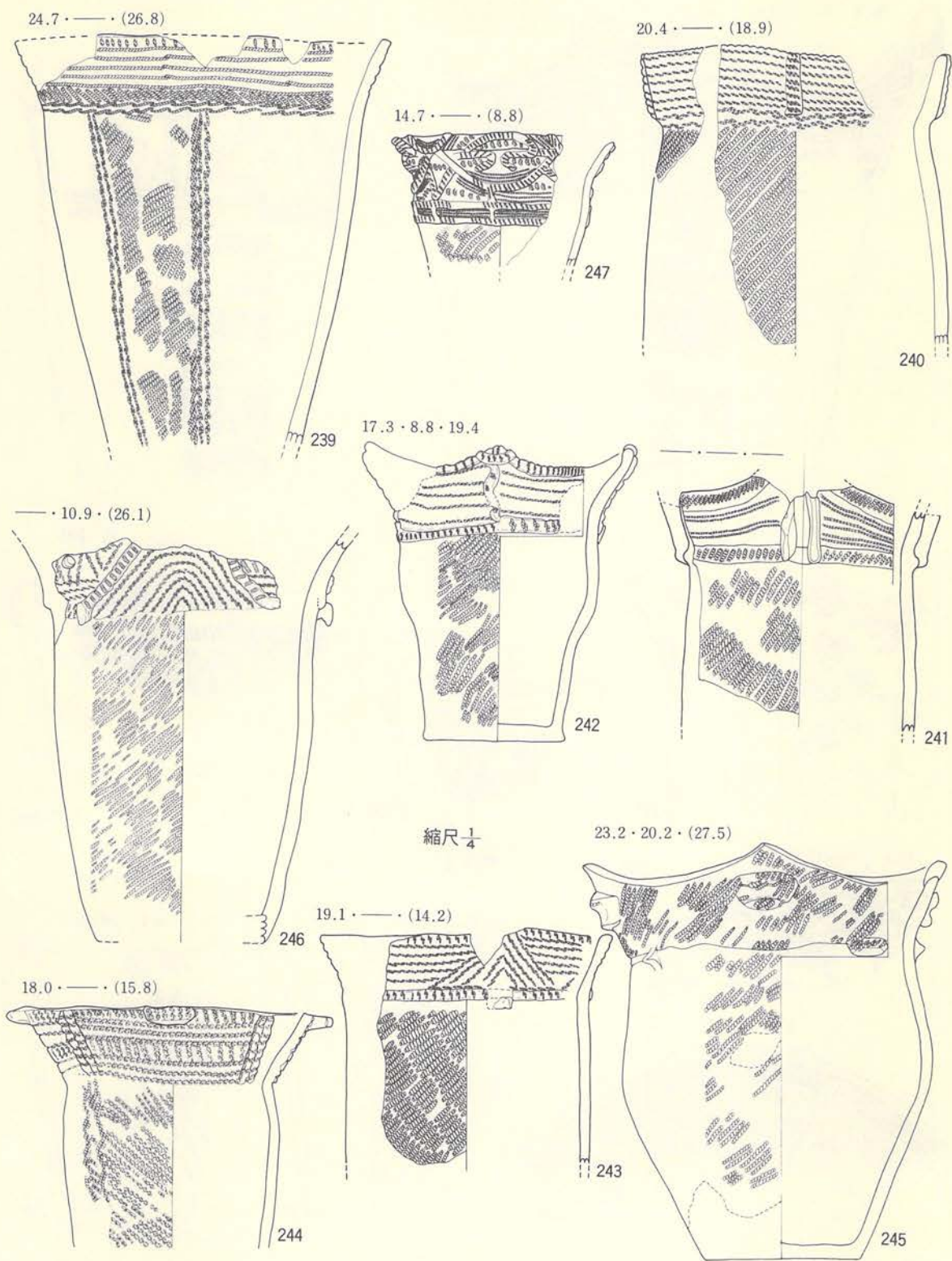


第185図 I-19住居跡 (ベルト・土器-35)



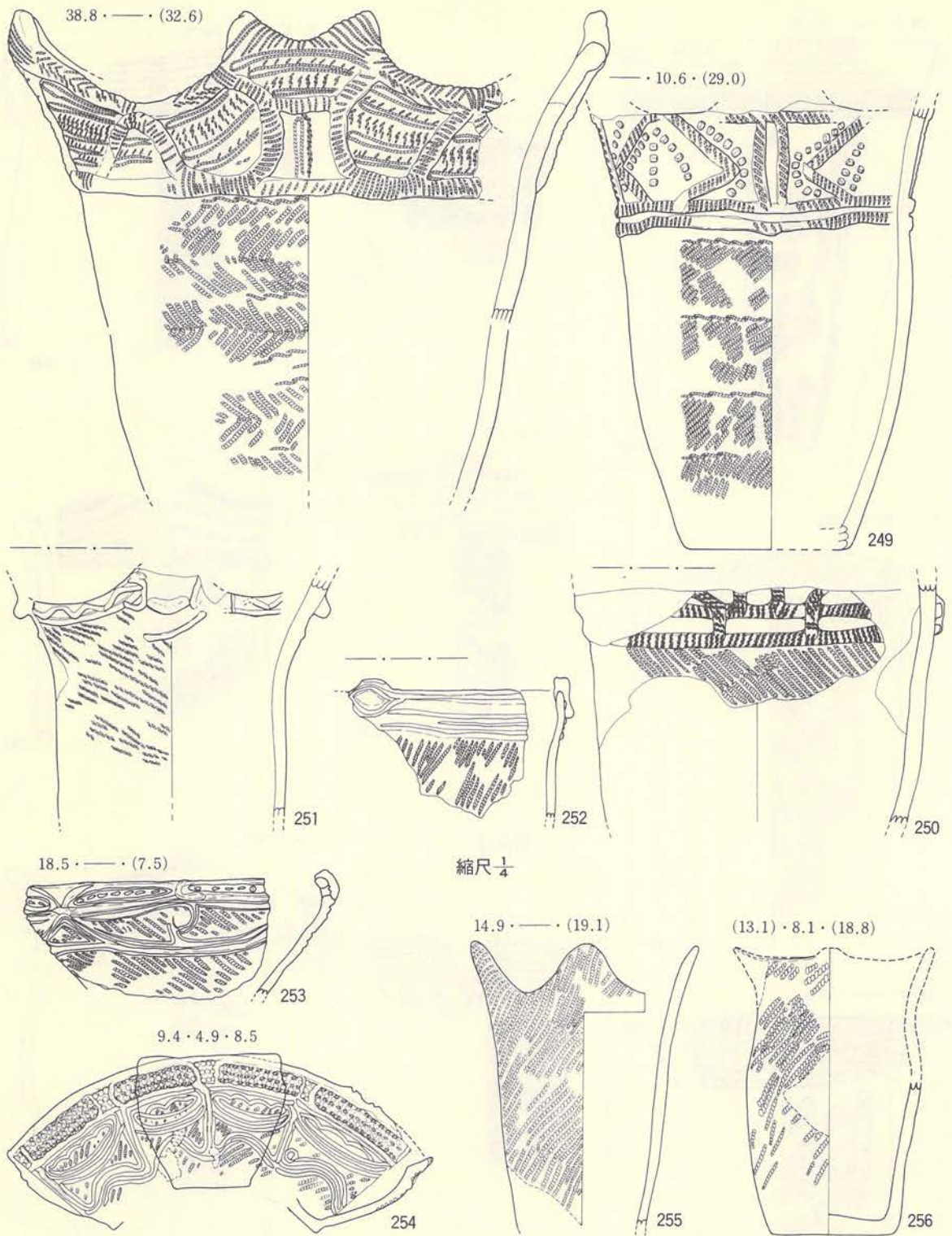


第186図 Ⅰ～19住居跡 (ベルト・土器-36)

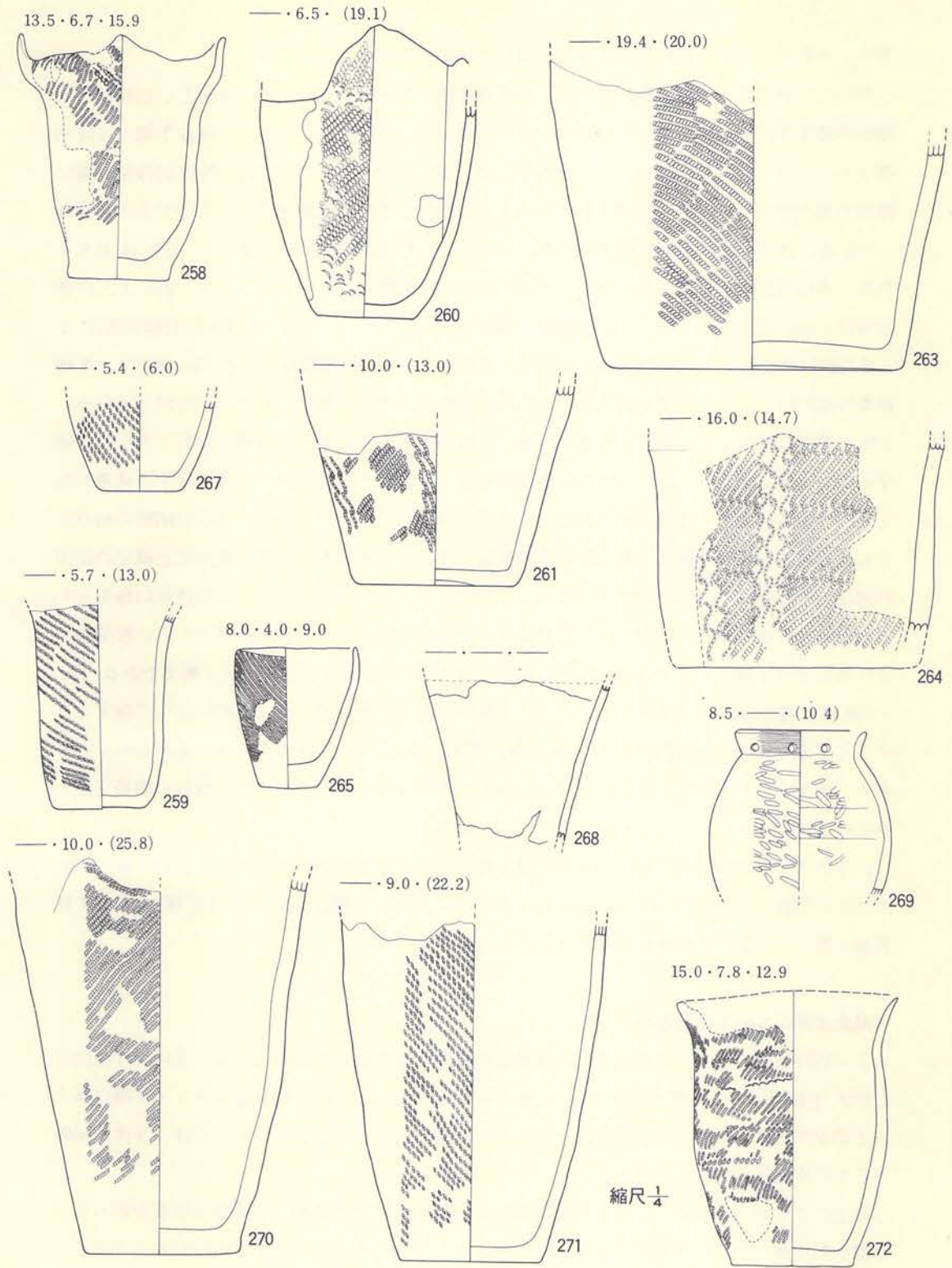


第187圖 I—19住居跡(埋土・土器—37)





第188圖 I—19住居跡 (埋土・土器—38)



第189図 I-19住居跡 (埋土・土器-39)



おり、それらの中から選択して拓影を作成して掲載した。

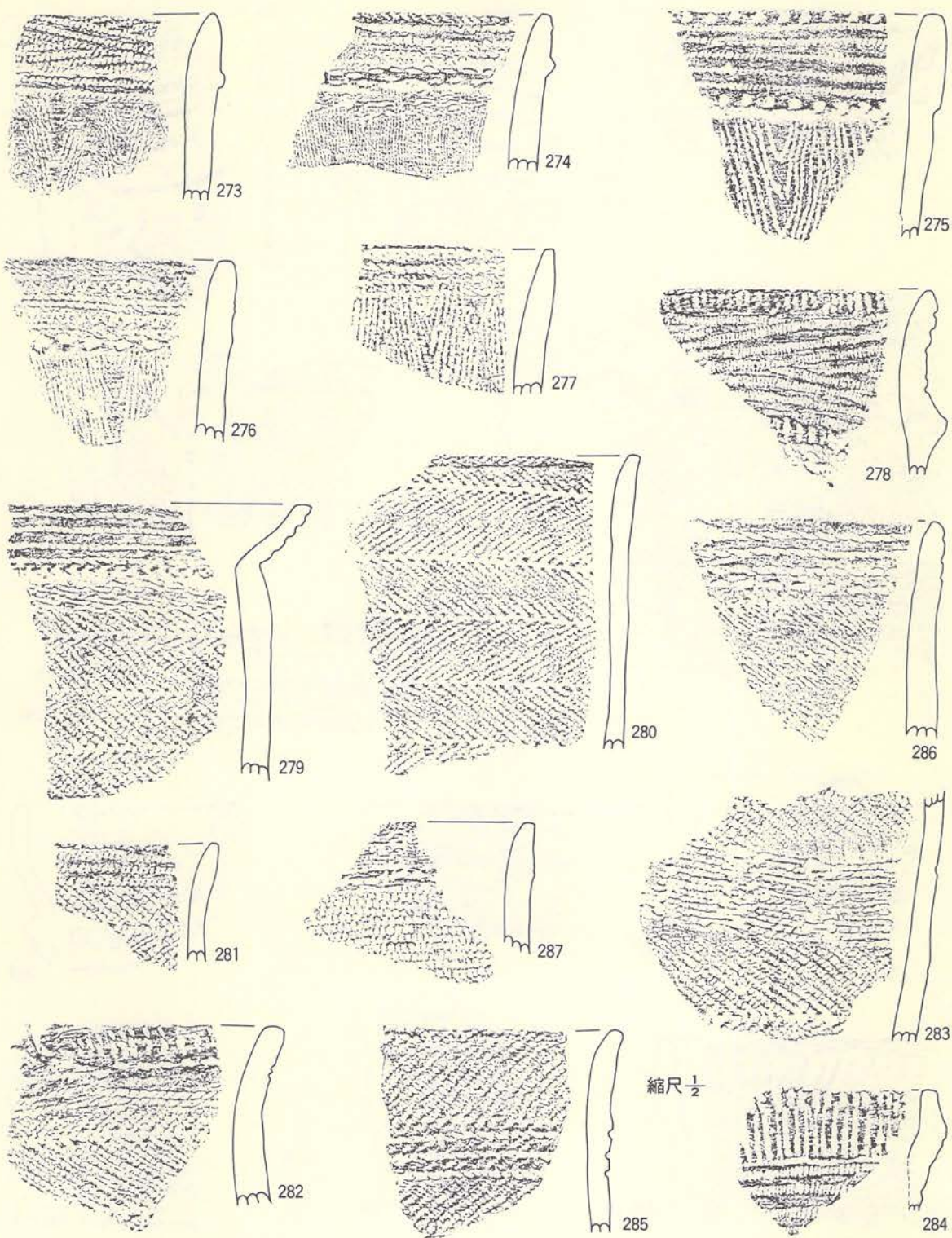
273～277までは、体部に撚糸文(274)や木目状撚糸文(273・275・277)を付し、口縁部には横位の絡条体圧痕(273～276)や原体圧痕(277)によって施文している。口縁部下端には隆起帯をもつもの(273・274・276)ともたないもの(275・277)があり、277以外は口縁部下端に横位の列点をもつ。体部の状況が不明であるが、278もほぼ同じ状況を示すものであろう。279～283は、体部に横位の羽状縄文をもち、口縁部の文様は前者と同じであるが、279は大きく外反する口縁部をもっている。284は282と近似した要素をもっている。なお、283は、体部が横位の羽状縄文であるが、中央に横位の絡状体回転文をもつ、285は、原体LR横回転による単節斜行縄文を付しているが、頸部に相当する部分に原体の圧痕文をもっている。287は、多軸絡条体縦回転によって地文が施され、口縁部は単軸絡条体横回転による撚糸文を付している。288は頸部に連続山形の隆帯をもち、隆帯上には原体圧痕文をもつ。口縁部は軽く外反し、地文のみを施す。289は、刻み目をもつ縦位の隆帯と、斜位または横位の2条併行する隆帯で施文されている。297もほぼ同様であるが、口縁部がキャリパー形に近い。290は横位の刻み目をもつ隆帯をもち、体部には単軸絡条体横回転によるとおもわれる横位の撚糸文と縦位の鋸歯状連続山形文をもつ。291・292は沈線によって文様の付された土器で、291は波状口縁を示す。292は297と同様キャリパー形に近い器形を示す。293～296はほぼ同様の特徴をもち、隆帯と原体圧痕によって施文されている。体部の地文は原体LR横回転による単節斜行縄文である。297・298は沈線による渦巻文をもっている。299は隆帯とその両側に入る沈線によって施文されている。地文は原体LR横回転による単節斜行縄文である。300も隆帯と沈線の組み合わせであるが、地文としての縄文を全くもたない。301は縄文をもたないで、横位と縦位の楕円描文を入れている。

以上のような特徴から、283・285はⅢ群1類、先の2点を除いた273～287はⅢ群2類、288・289はⅢ群10類、291・292はⅣ群1類、293～297はⅣ群2類、298～300はⅣ群3類、301はⅣ群4類、302はⅢ群12類にそれぞれ相当するであろう。

#### 〔出土土器についてのまとめ〕

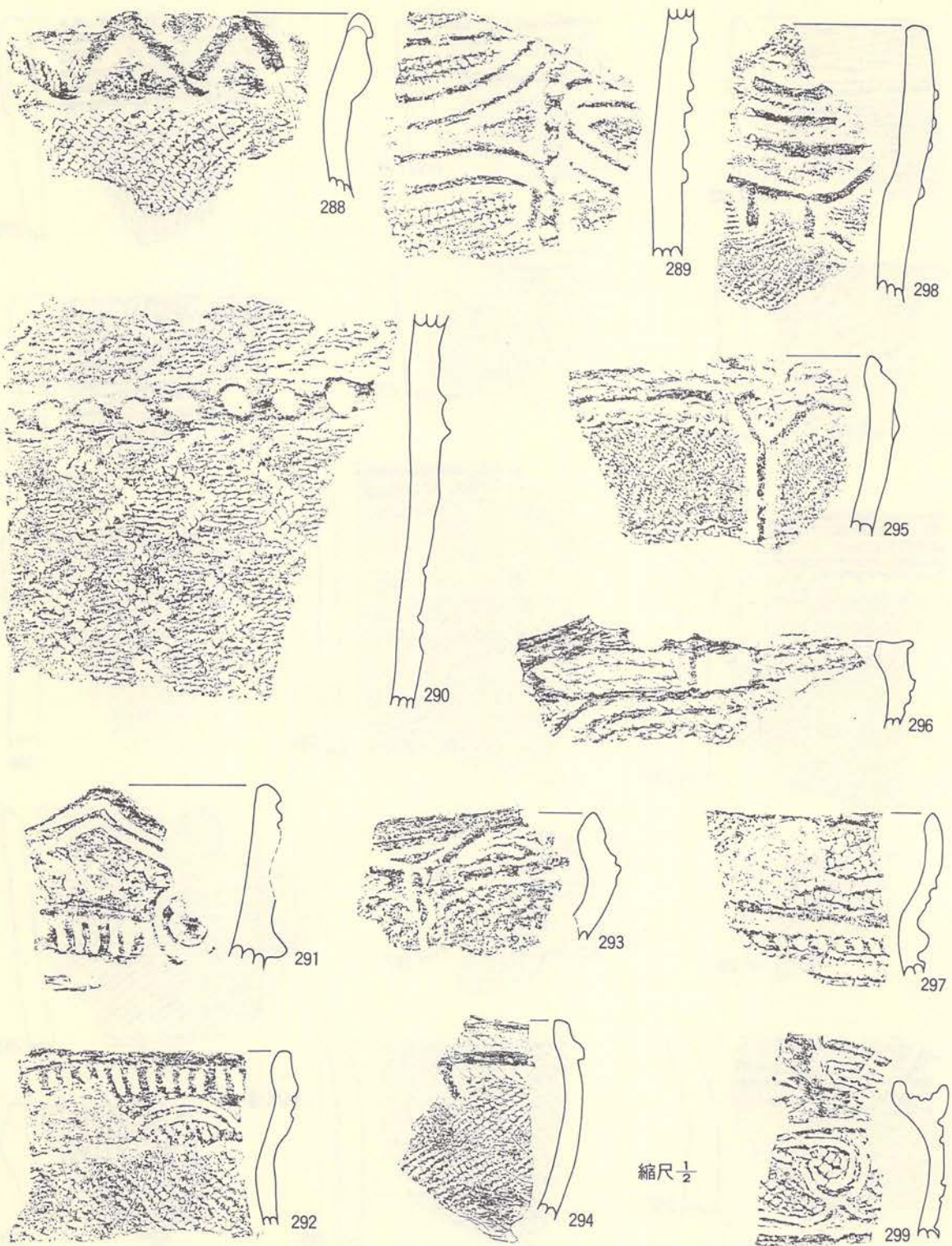
I-19住居跡の埋土内に形成された遺物包含層の状況について説明したが、全体的な傾向としては、下位ほど古い土器が出土している傾向がみられる。その中で第Ⅲ群3～5・7類に属する土器が非常に多いことと、第Ⅳ群土器との共伴関係を示す出土状況については、今後に示唆するものが大きいといえるだろう。

以上のことから考えると、本包含層はⅢ群3類が使用された時期から遺物の投棄が始められⅢ群9類が使用された時期まで継続されている。しかし、その間に若干の消長をみることで

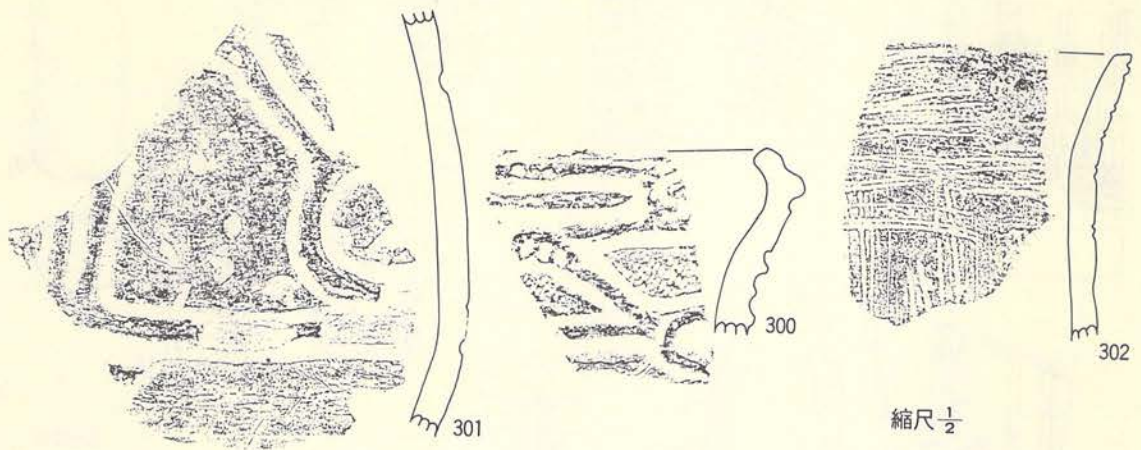


第190図 I-19住居跡 (埋土・土器-40)





第191图 I-19住居跡(埋土・土器-41)



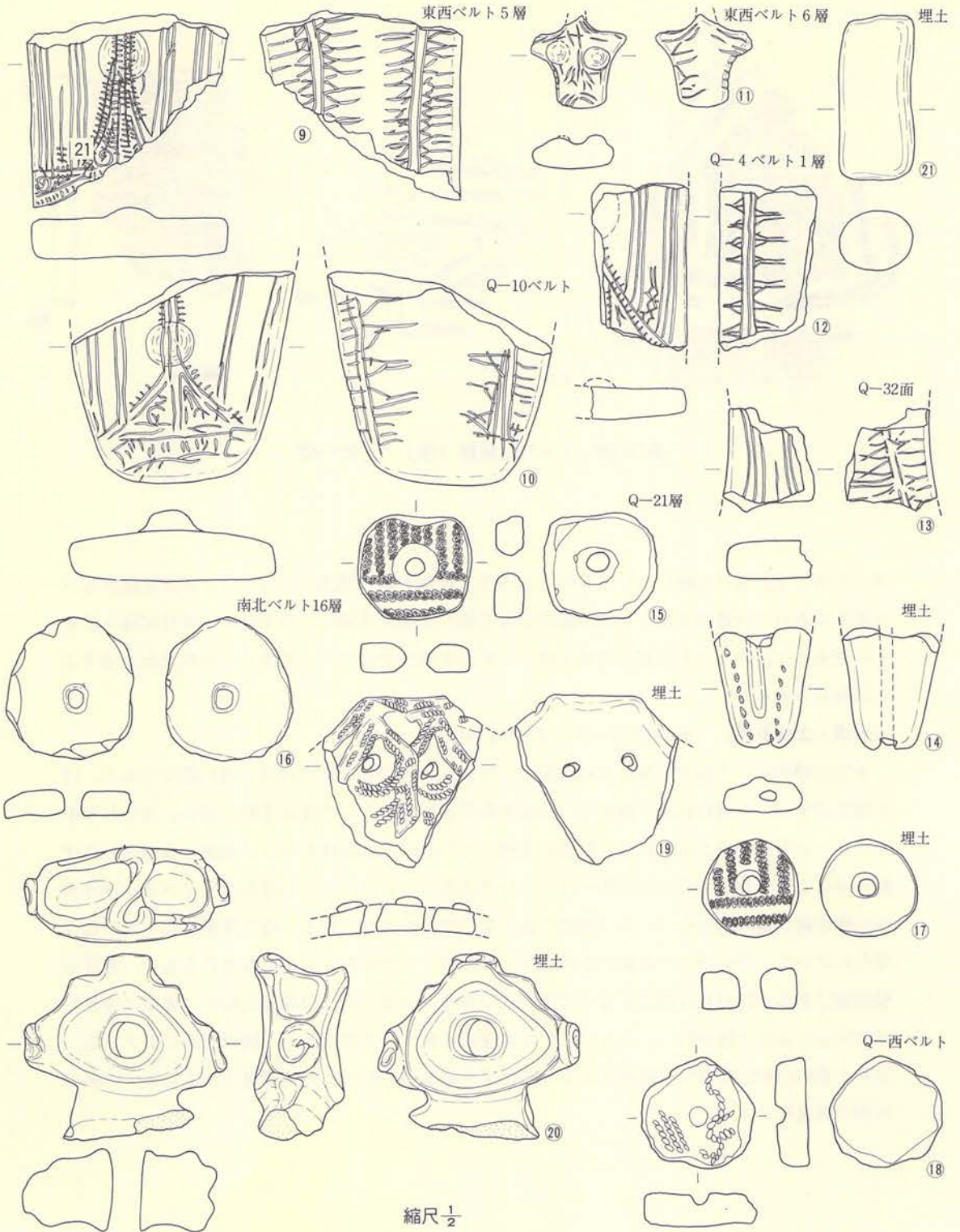
第192図 I-19住居跡（埋土・土器-42）

き、それが土器量に反映しているものであろう。Ⅳ群土器の問題については、共伴関係からみる限りにおいてはⅢ群3類～9類の間にⅣ群1類～3類が共伴し、いずれかと併行関係を示すものであろう。少くともⅣ群土器は主体としての土器群ではなく、客体としての状況を示すことは明らかである。

〔土偶・土製品類〕（第193図9～21、PL-119）

本包含層内から土偶や土製品が13点出土している。その中で⑨～⑭は土偶の破片である。11の個体がかつとも残存状態が良好で、頭部を若干欠損するのみでほぼ完形に近い。出土した中ではかつとも小型である。腹部と胸部が隆起している以外は板状を示し、表面・裏面ともに沈線のみによって施文している。⑨～⑬については先の11とほぼ同じ特徴をもっている。⑭は表面の腹中線に隆起帯をもち、その両側に各1条の列点を入れている。縦に貫通する1ヶの孔が穿たれている。⑮～⑱は土器破片を再利用したもので、中央部に1ヶの貫通孔をもつ、有孔土製円盤である。⑱の孔は貫通しないで凹み状である。19は土器の口縁部突起で、表面に隆帯と原体圧痕による文様を付し、さらに2ヶの貫通孔をもつ。文様全体が人間の顔面に似ている。⑳も土器の口縁部突起で、隆帯によるS字状文や渦巻文をもち、良く研磨されている。中央に円形の貫通孔をもつ。





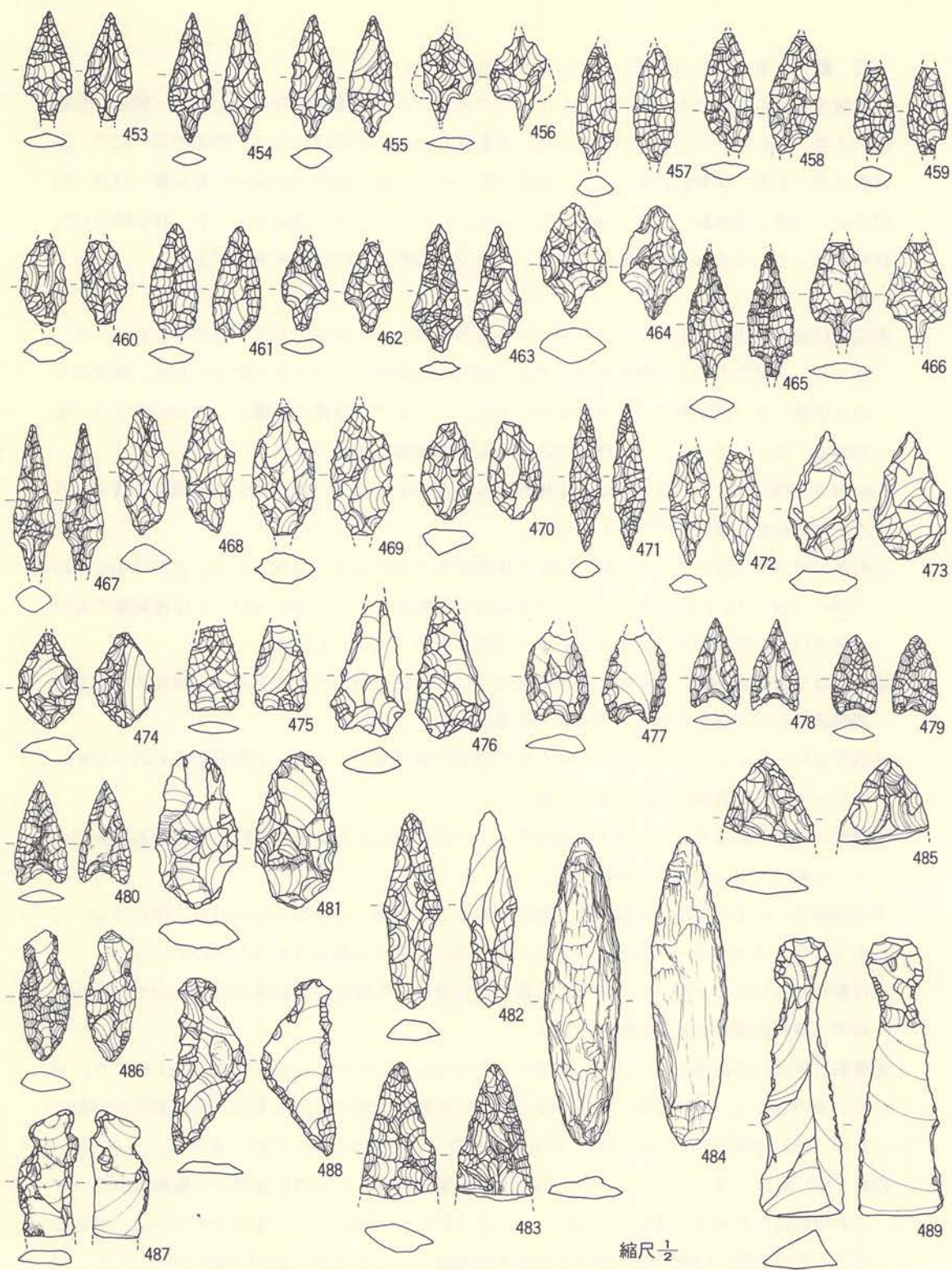
第193図 1-19住居跡 (土製品)

〔石器〕（第194図～206図、PL-133B～PL-137A）

本包含層から総数で179点の石器が出土しており、その器種別の内訳は①石鏃-30点、②石槍-3点、③石匙-11点、④石錐-5点、⑤石筥-13点、⑥搔器-11点、⑦切削器-42点、⑧打製石斧-1点、⑨磨製石斧-11点、⑩磨（擦）石-7点、⑪半円状扁平打製石器-14点、⑫凹み石-10点、⑬石錘-7点、⑭敲き石-6点、⑮石皿-2点、⑯砥石-4点、⑰石棒-1点、⑱石製品-1点である。数量も多いので、ここでは器種別に簡単に説明を加える。

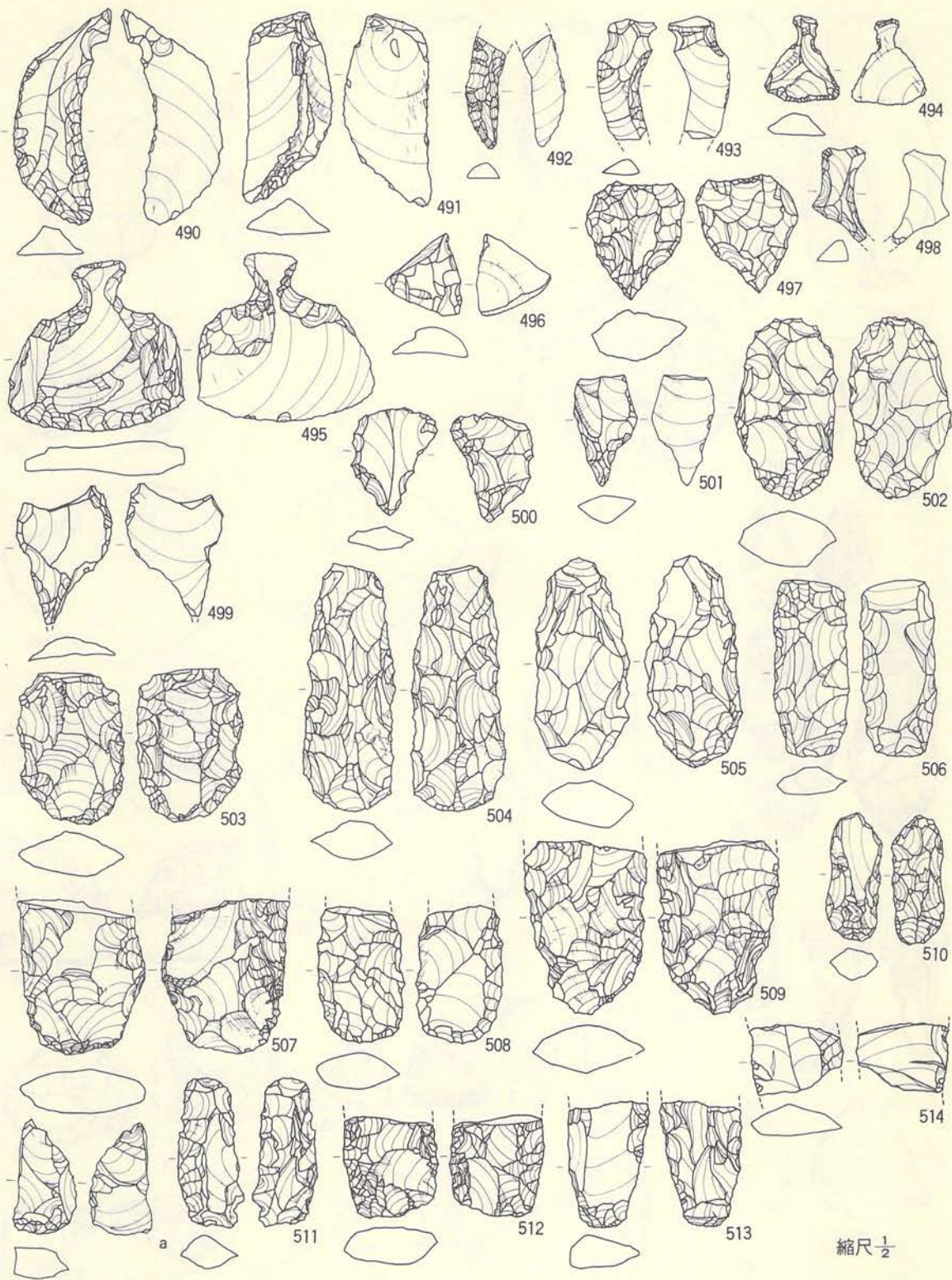
- ①石鏃は30点の出土であるが、この中には有茎のもの21点、無茎のもの9点が含まれている。さらに、有茎のものは茎部を作りだすもの18点と柳葉形のもの3点に細分される。無茎のものは平基1点、凹み基5点、丸基3点になる。この中で、特異な形態としては482のように茎部が太く長いものがある。全体的にみると入念な調整のものが多い。
- ②石槍は3点の出土であるが、ほぼ全体が判るのは484のみで、483・485は先端部を残すのみである。484は粘板岩で作られている。
- ③石匙は11点の出土であるが、494・495が横形である以外は全て縦形である。完形は486・488・489・494・495であるが、これらの中には両面剥離のもの（486・488）と片面剥離のもの（前者以外全て）がある。また、非常に小型のもの（494）もある。
- ④石錐は5点であるが、この中には497のように石鏃に近い形のものもある。剥片の先端部を剥離調整して刃部を作りだしたものである。
- ⑤石筥は13点出土しているが、この中には打製石斧的なもの（504）や搔器的なもの（508）も入っている。器種の認定が非常に難しい。
- ⑥搔器は11点であるが、いわゆる典型的なもの（518～520）もあるが「的」なものも含めている。石筥とともに器種認定が難しい。
- ⑦切削器は、以上の器種に充当しない剥片石器を入れたが、42点出土している。中には535のようにピエスエスキーユ的なものとか、564～570のように搔器なものも含めている。
- ⑧打製石斧は577の1点のみである。Ⅰ群土器と共伴した局部磨製石斧と近いもので、細長い扁平な礫の両側縁を敲打調整している。
- ⑨磨製石斧は11点出土しているが、完形のものはない。この中には575・578・581のようにやや小型のもの、576・579・582・586のように比較的大型のものもある。残存部位が頭部のもの（574・575・578・580・582）と刃部のもの（572・576・579・581）がある。
- ⑩磨（擦）石は7点と少なく、Ⅰ群土器やⅡ群土器に共伴した30点に比較して極端に少ない。この中にはいわゆる「磨石」（585～589）と「擦石」（590・591）が含まれている。磨石はほとんどの場合、円形や扁円形の平坦面を使用面としたもので、586・588・589のように凹





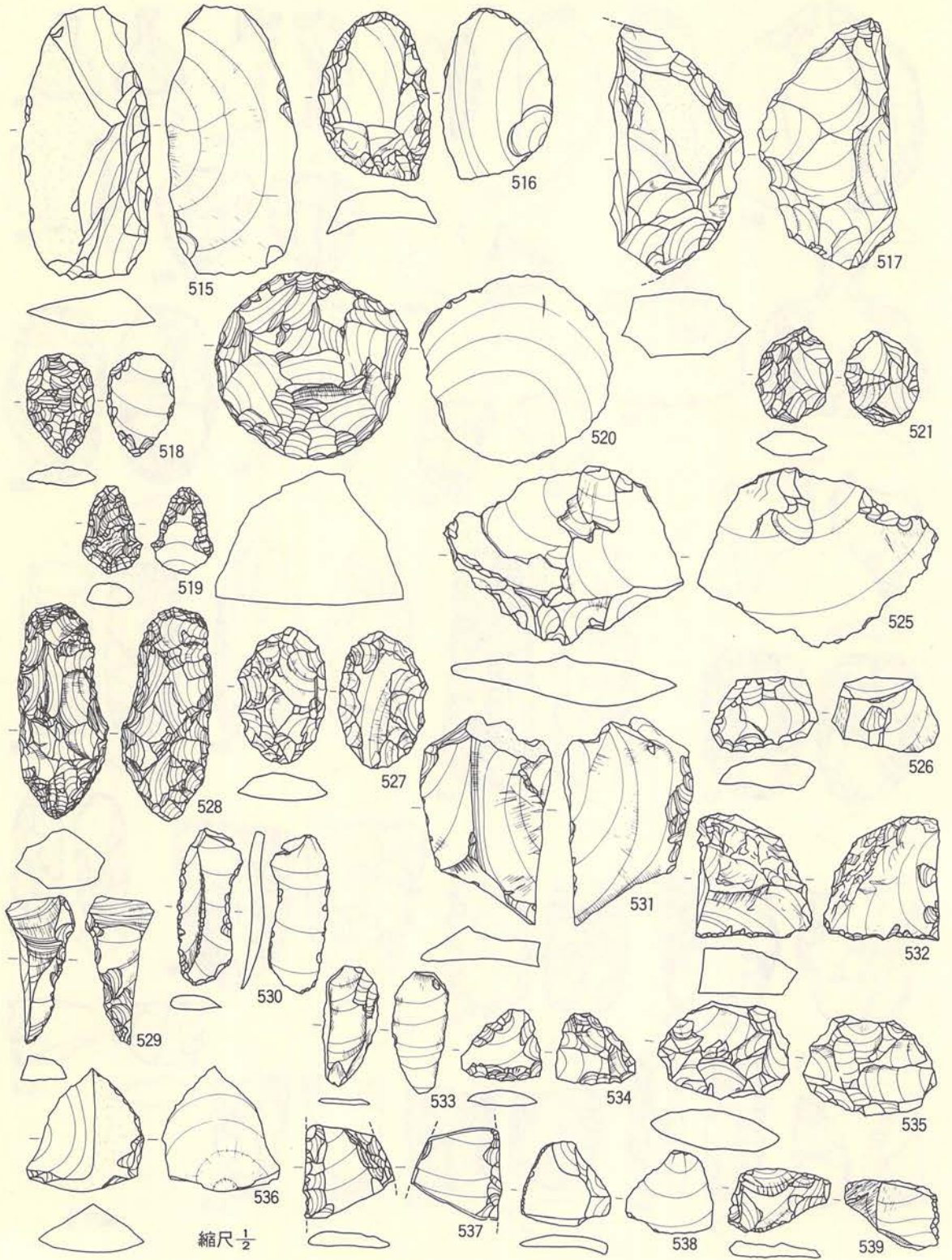
第194図 I-19住居跡内遺物包含層(石器-1)





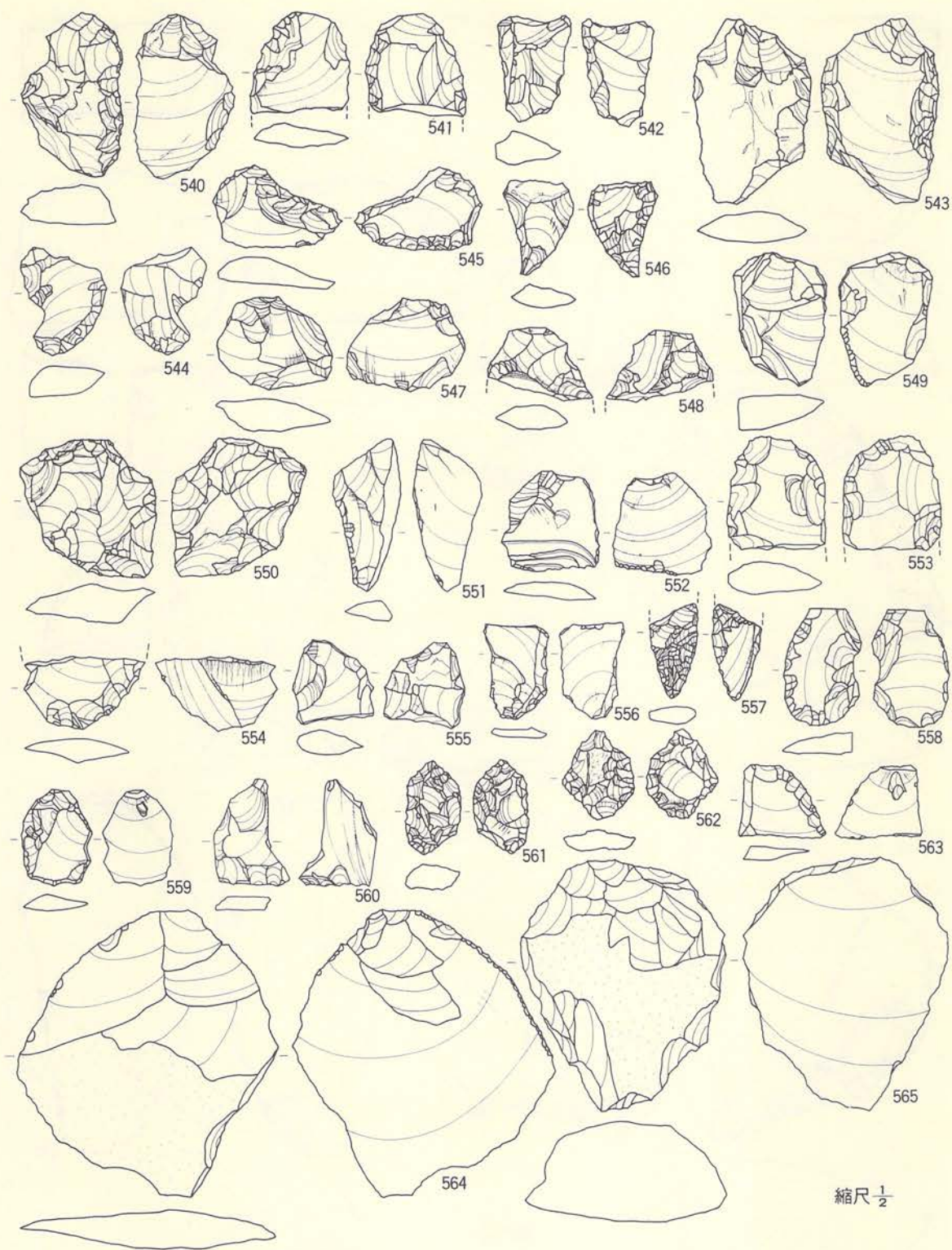
第195圖 1-19住居跡内遺物包含層(石器-2)





第196圖 Ⅰ—19住居跡内遺物包含層 (石器—3)



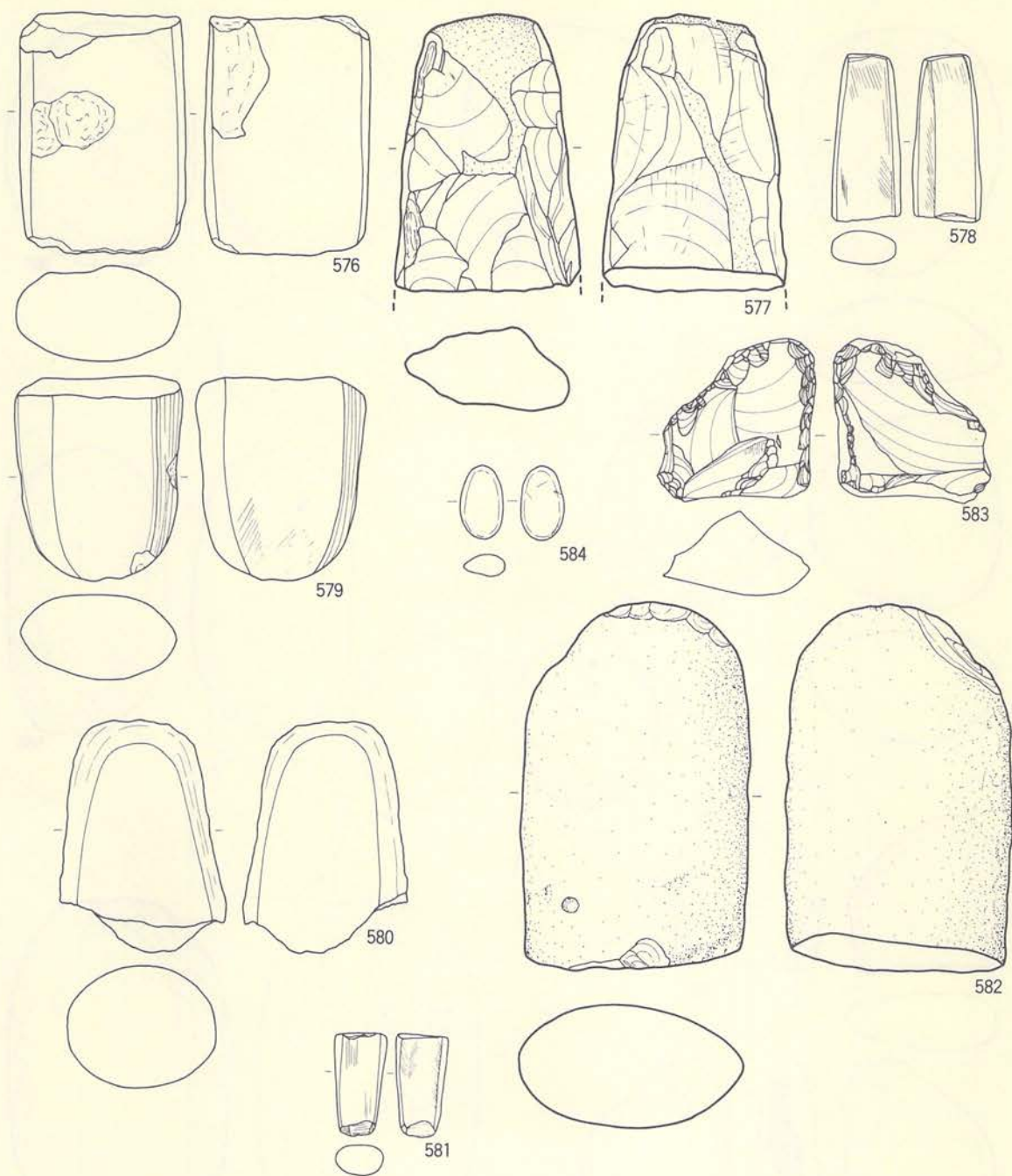


第197図 I-19住居跡内遺物包含層(石器-4)





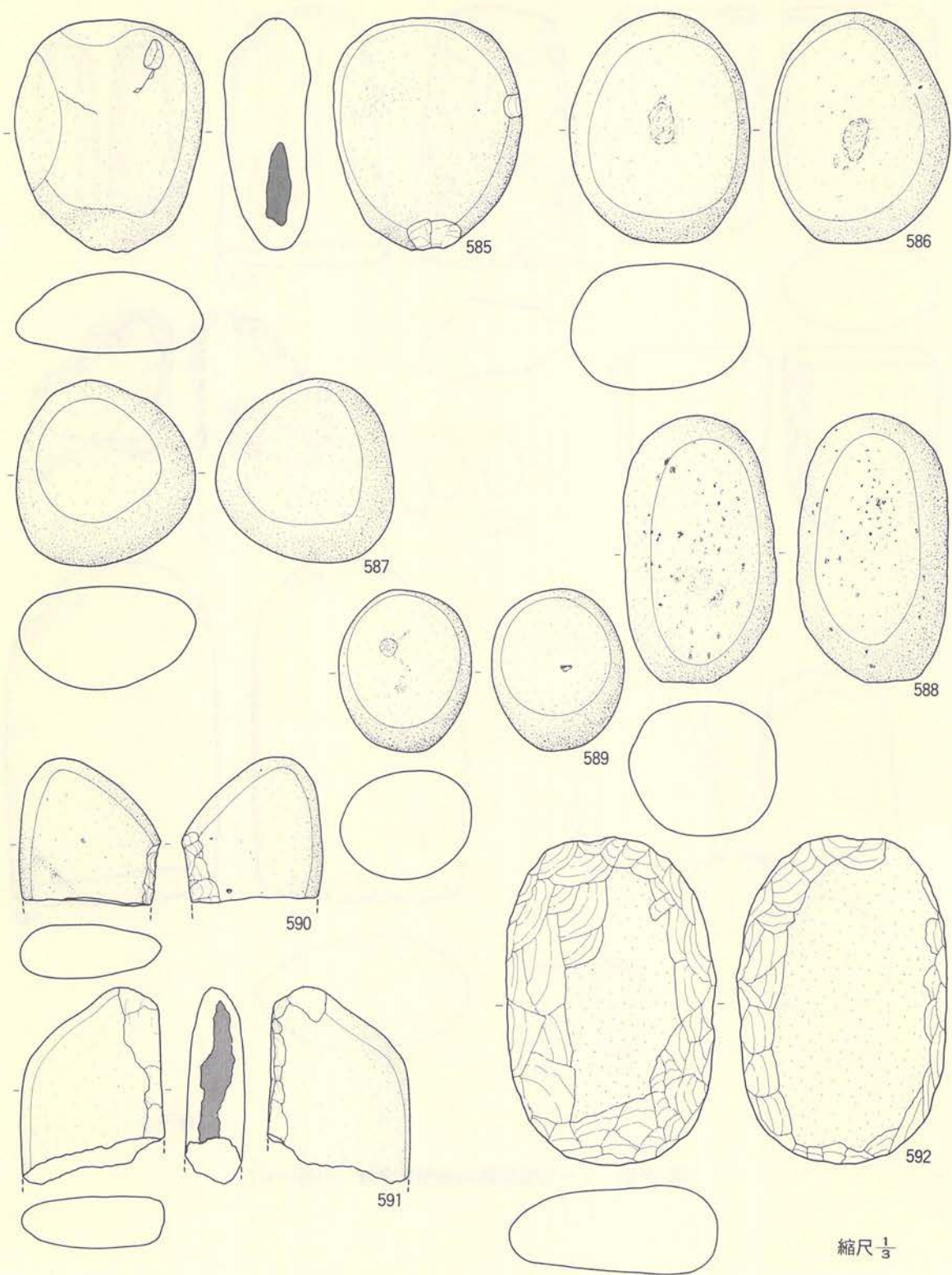
第198図 1—19住居跡内遺物包含層 (石器—5)



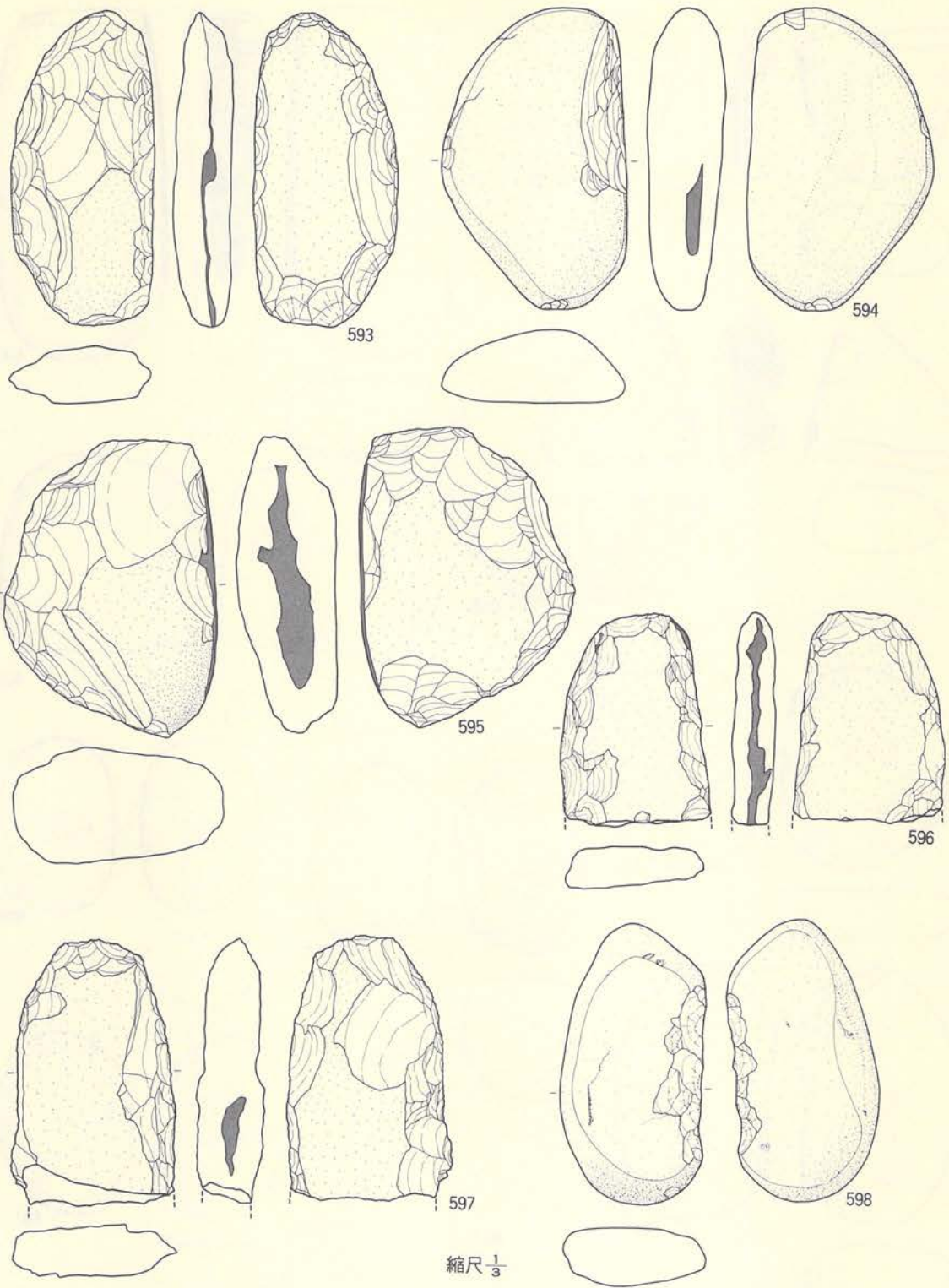
縮尺  $\frac{1}{2}$

第199図 I-19住居跡内遺物包含層(石器-6)



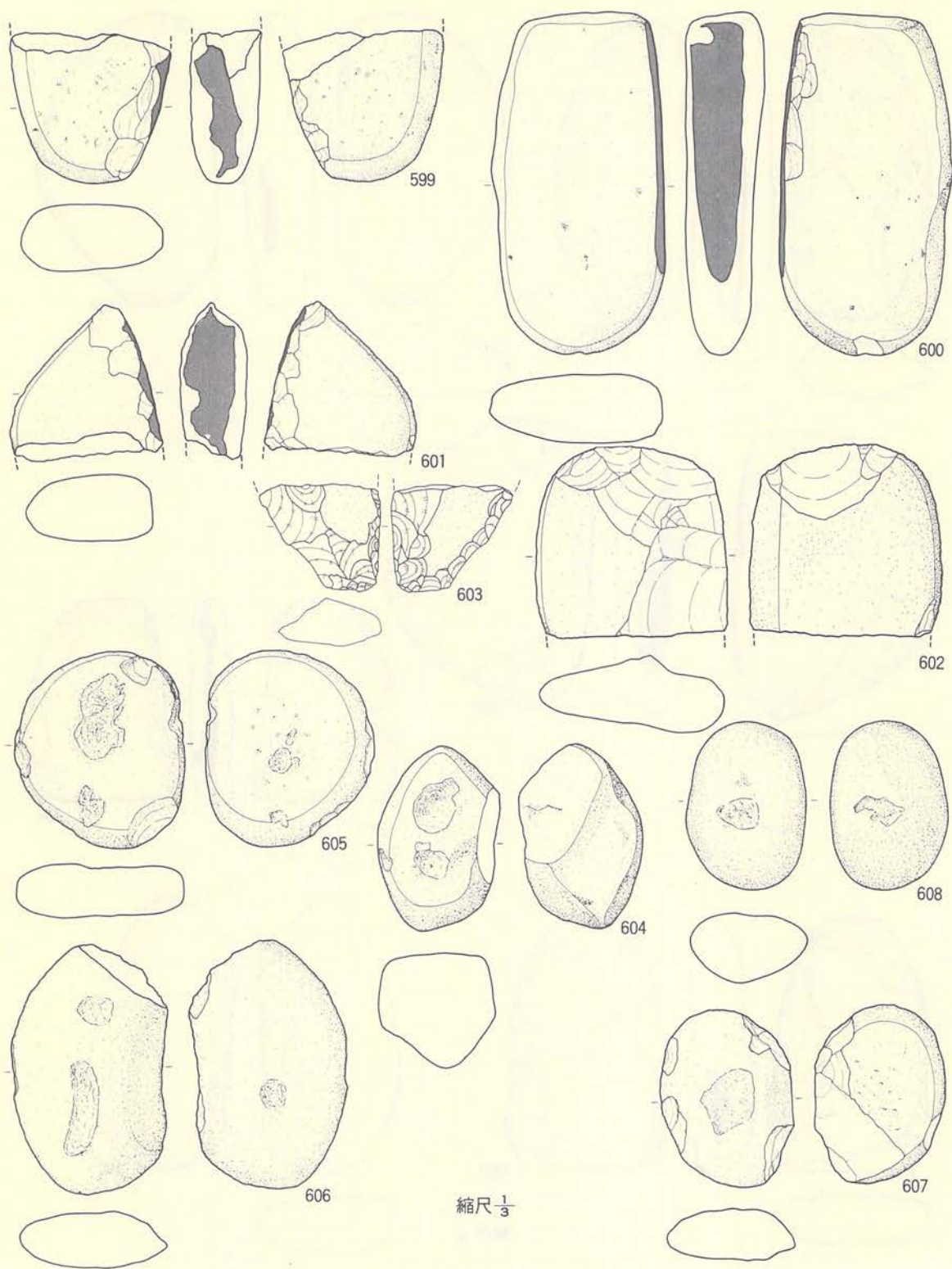


第200図 I-19住居跡内遺物包含層 (石器-7)



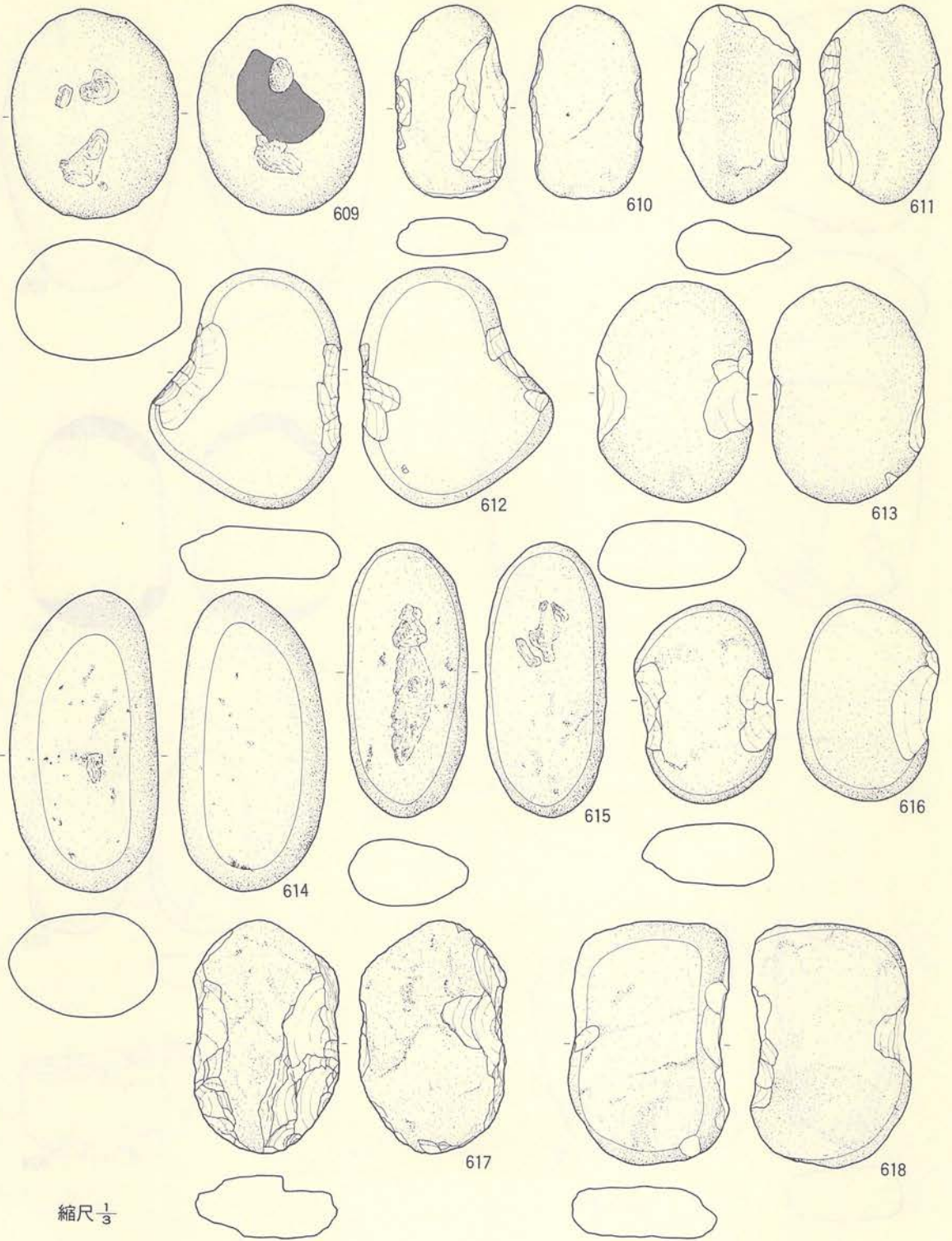
第201図 I-19住居跡内遺物包含層(石器-8)





縮尺  $\frac{1}{3}$

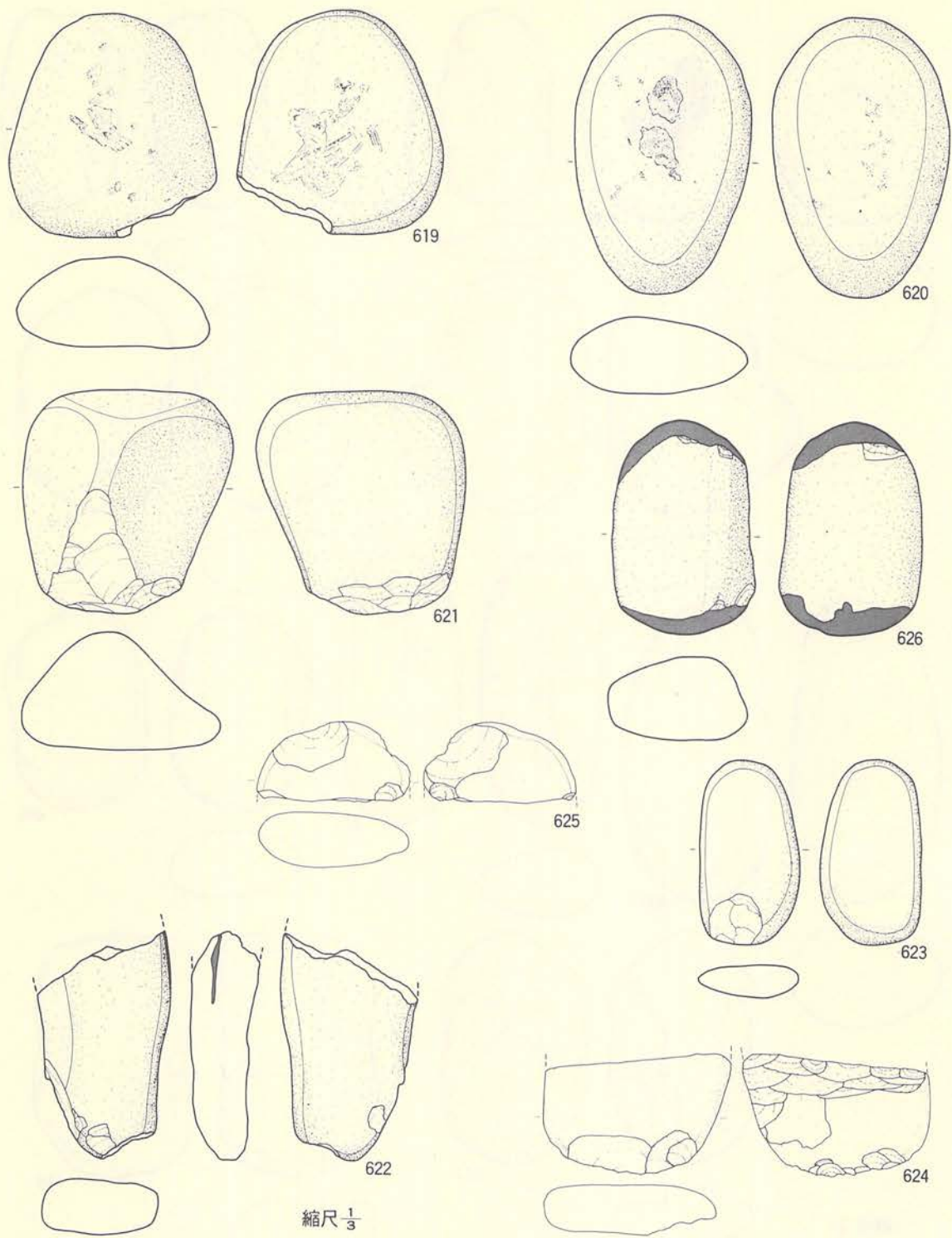
第202図 I-19住居跡内遺物包含層 (石器-9)



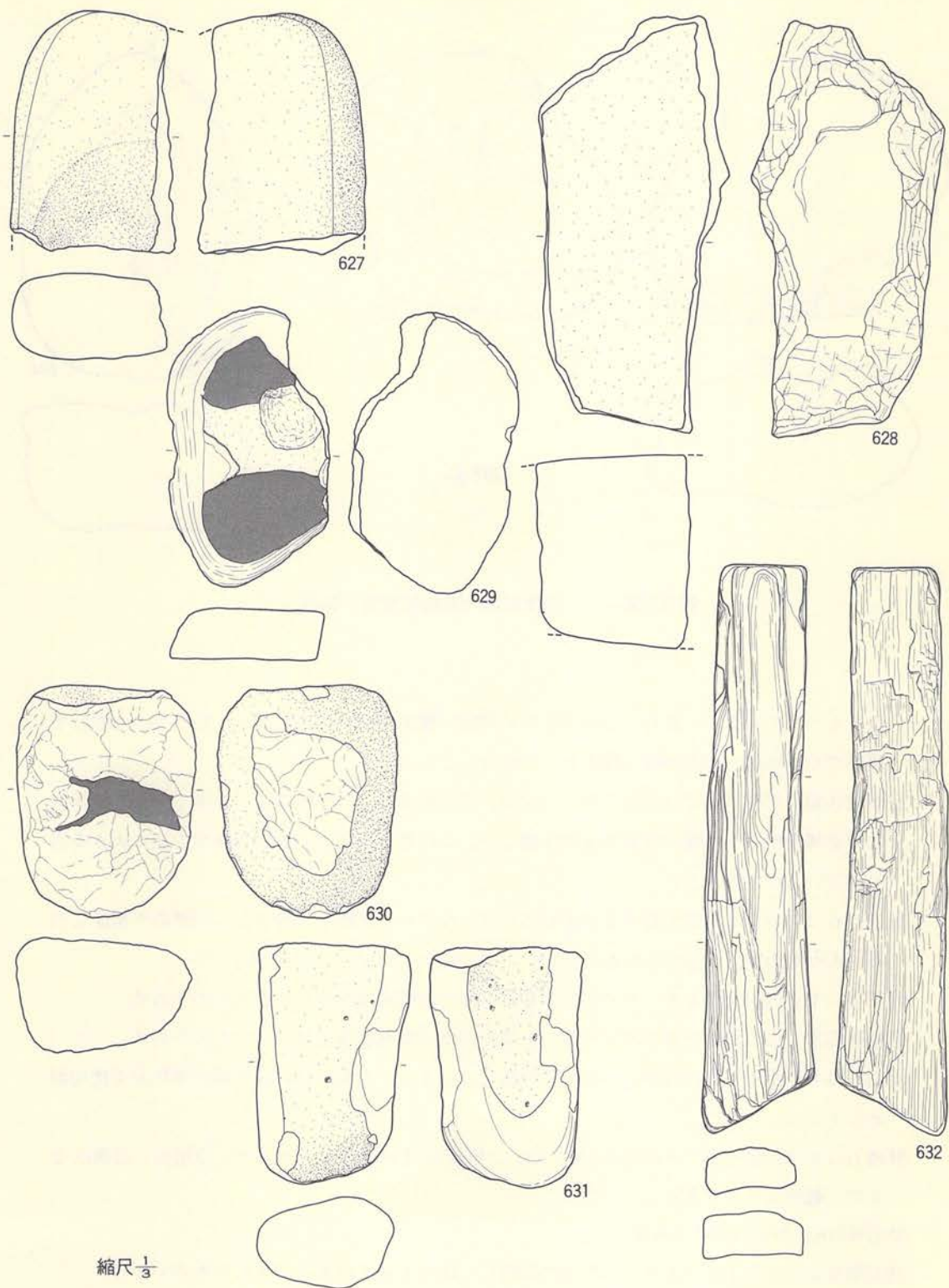
縮尺  $\frac{1}{3}$

第203図 Ⅰ-19住居跡内遺物包含層 (石器-10)





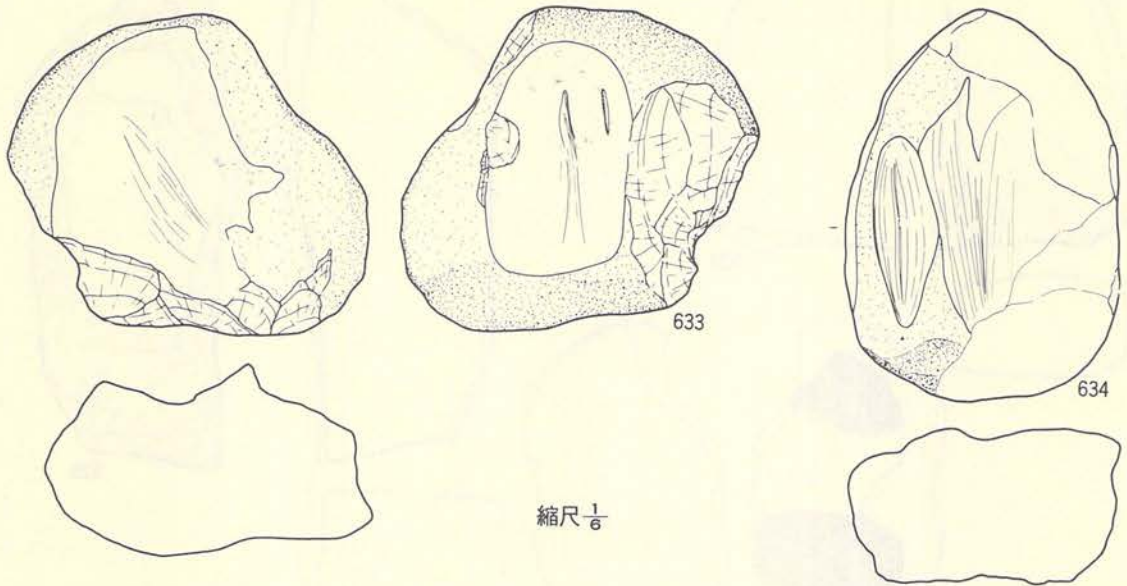
第204図 Ⅰ-19住居跡内遺物包含層 (石器-11)



縮尺  $\frac{1}{3}$

第205図 Ⅰ—19住居跡内遺物包含層 (石器—12)





第206図 I-19住居跡内遺物包含層（石器-13）

みをもつものもある。また、585のように側縁に擦面をもつものもある。590・591は擦石で扁平でやや細長い礫の側縁を擦面として使用している。

⑪半円状扁平打製石器は14点出土しているが、擦石的なもの（593～601）が多く含まれている。この器種と擦石を明確に判別するのは難しい。この両者には、一義的な使用方法に大きな違いがないものであろう。

⑫凹み石は10点で、I群土器やII群土器に共伴した30点に比較して少ない。円礫の平坦面に凹みをもつもので、両面にもつもの（605・606・608・609・615）もある。

⑬石錘は7点の出土である。やや長目の扁平な礫の短軸両端を打ち欠いたものである。

⑭敲き石は6点の出土であるが、長軸の一端または両端を敲き道具としたものである。

⑮石皿は2点出土しているが、いずれも欠損している。やや大き目の扁平礫の平坦面を使用面としている。

⑯砥石は4点の出土で、その中の633・634は非常に使い込まれたもので、使用面には面的なものと線的なものがある。

⑰石棒は631の1点だけである。

⑱石製品は632の1点であるが、板状に剝離した珪化木をそのまま使用したものである。

以上、本包含層から土器と共伴して出土した石器を簡単にその概略を説明したが、これらの石器は、第Ⅲ群土器に共伴し、中期前葉に位置づけられる石器群である。器種構成や形態変化等、先の北端部包含層から出土した第Ⅰ群土器や第Ⅱ群土器に共伴した石器群との比較対比することで、それぞれの特徴を示唆するものが多いであろうと考えられる。

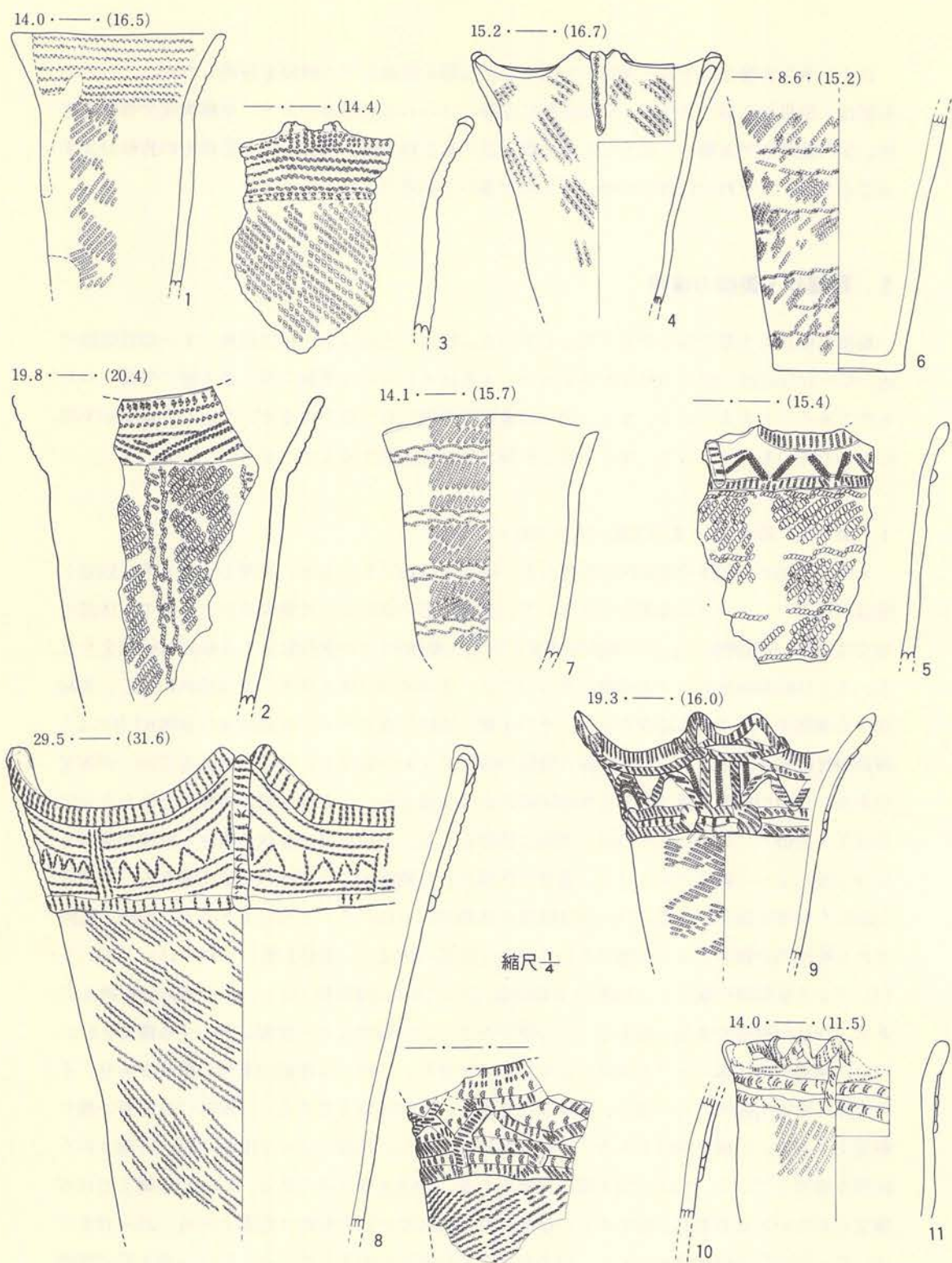
## 5. 粗掘り・表採の遺物

粗掘り中にも土器や石器が多く出土している。特に、土器はI-19住居跡・I-22住居跡付近やG-16住居跡付近での出土が多かった。本来はそれらの住居跡の埋土最上層に包含されたものであろうと考えられる。また、中には遺構に共伴した土器であるが、出土した遺構が不明になったものも含めている。次に土器と石器を分けて説明することにする。

### 1) 土 器 (第207図～第210図、PL-120・121)

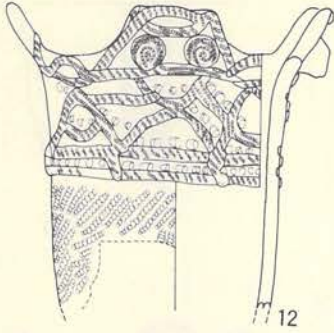
土器は全部で40個体の実測図を掲載した。破片では他にもあるが、実測できるものに限し他は割愛した。1～3は隆帯をもたないで、原体圧痕のみによって施文された土器で、体部の地文は原体LR横回転による単節斜行縄文(1・2)と原体RLRの横回転による複節斜行縄文をもち、2には結節縦回転による綾絡文をもつ。2・3は波状口縁を示す。4は波状口縁で、突起部から頸部まで垂下する隆帯があり、その上面に原体圧痕がある。体部地文は原体RLRによる複節斜行縄文をもち、5～7は体部に横位の綾絡文をもち、7は口縁部まで同一の施文である。5の口縁部文様は隆帯と原体圧痕による文様をもち、8は体部に綾絡文をもたない以外は5と近似している。9～11はほぼ同じ特徴をもち、口縁部は山形状や横位・縦位の隆帯と原体圧痕によって施文されている。隆帯で区画された範囲内には原体の圧痕文をもち、隆帯の上面にも原体圧痕文がある。12～14は隆帯の状態が9～11のそれと同じであるが、隆帯で区画された範囲内が刺突によって施文されている。体部の地文は、原体LR(11・12・15)とRL(9・13)による単節斜行縄文と、原体RLR縦回転(10)やLRL横回転(8)による複節斜行縄文である。16は口縁部や体部に地文としての縄文がなく、口縁端部から頸部に垂下する隆帯をもち、17は口縁部から体部にかけて沈線による文様が付き、口唇には連続山形状の隆帯があり、その上面に原体圧痕がある。18は、浅鉢形の土器で、体部は無文である。口縁部には凹帯が周り刺突文をもち、口縁は波状である。19は波状口縁を示し、沈線によって区画され、区画された範囲を磨消している。24は小型土器の台部である。22は土製丸玉である。20～23は縄文だけが施文されたいわゆる粗製土器である。形態は21の形と22・23の形の2形態がある。25～37までは、25・27以外は口縁部を欠失し、33や36はさらに底部を欠失している。38は小型土器で底部





第207図 粗掘・表採 (土器一)

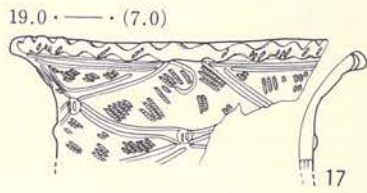
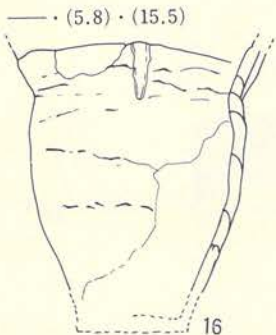
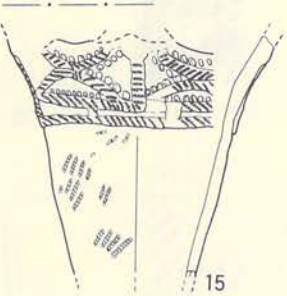
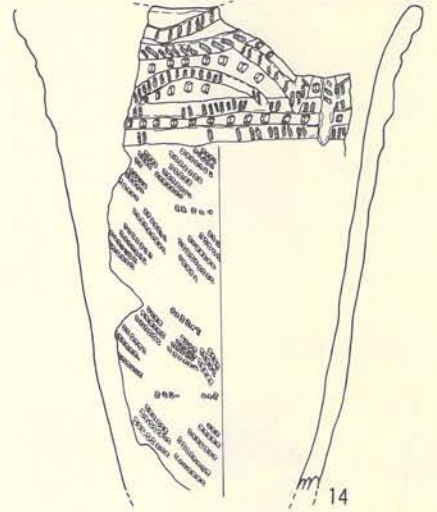
16.8 · —— · (16.0)



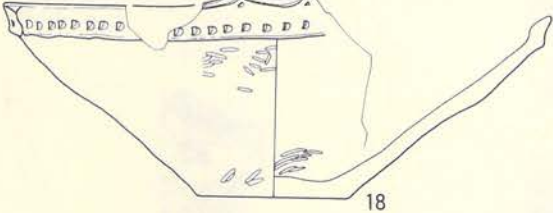
13.8 · —— · (8.3)



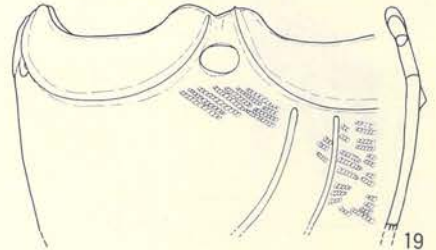
21.2 · —— · (25.7)



14.0 · 8.0 · 11.1



18.5 · —— · (12.1)



—— · 5.0 · (5.2)



3.9



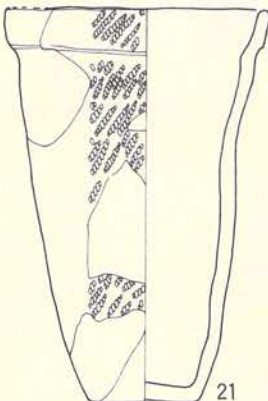
24

22

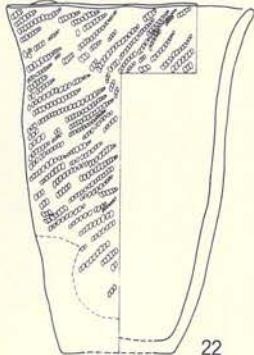
13.8 · —— · (8.0)



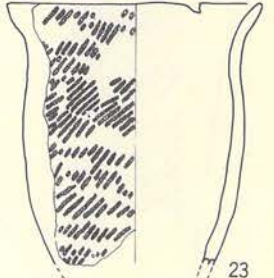
13.8 · 5.5 · 21.0



13.0 · 5.8 · 18.7



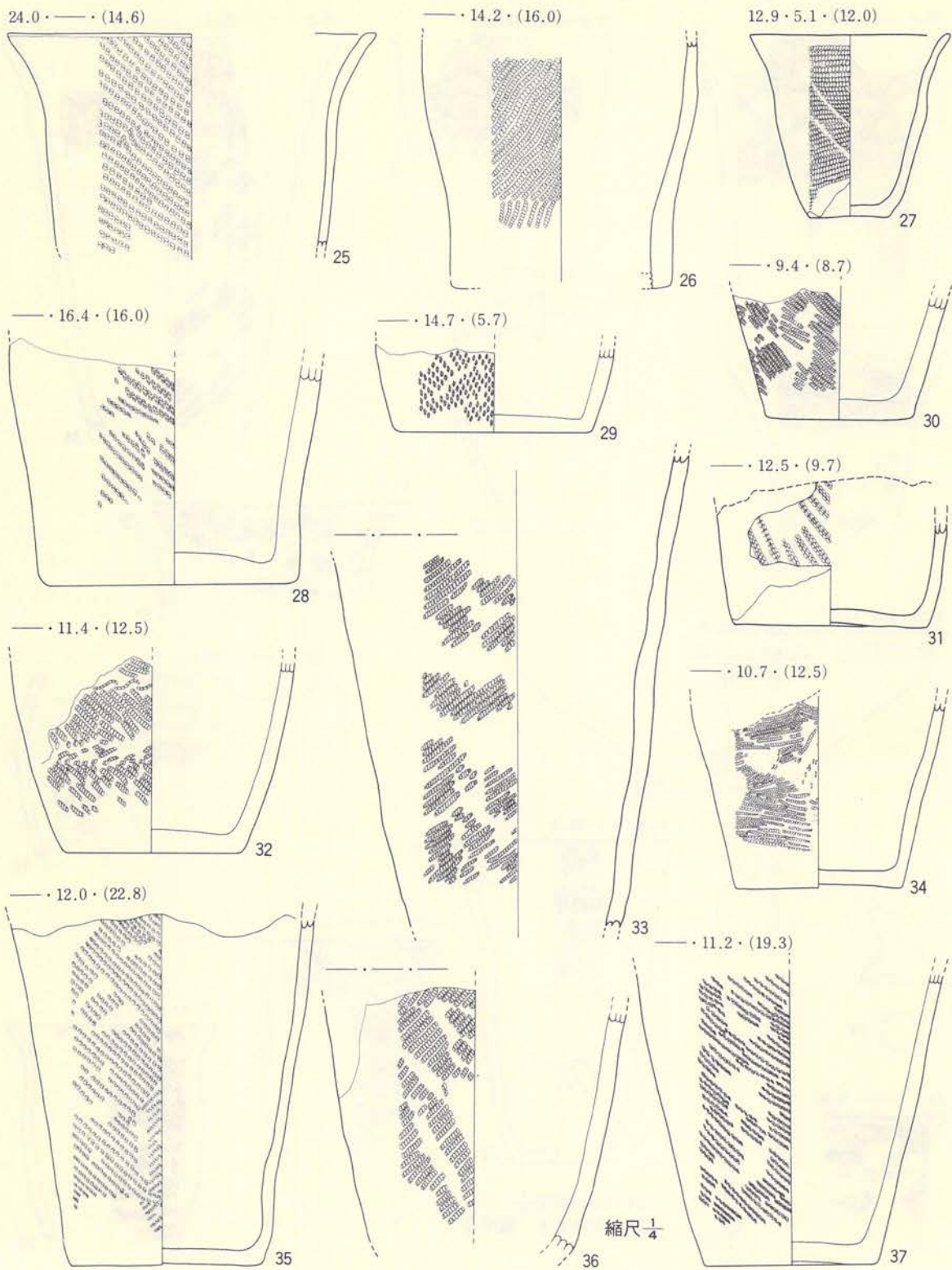
13.6 · —— · (14.0)



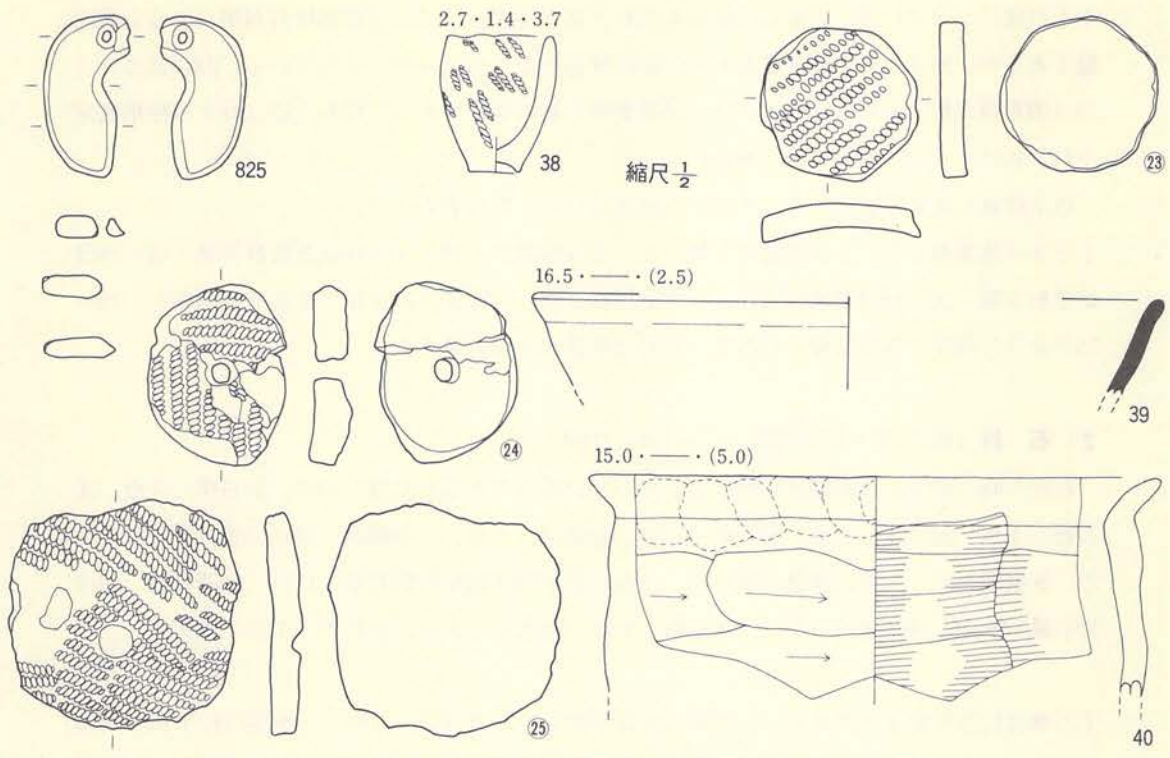
24 · 22 縮尺  $\frac{1}{2}$   
24 · 22 のぞき 縮尺  $\frac{1}{4}$

第208図 粗掘・表採 (土器-2)





第209図 粗掘・表採 (土器-3)



第210図 粗掘・表採 (土器-4)



が上げ底になっている。胎土には繊維を含む。第210図23～25は土器破片再利用による土製円盤であるが、24は1ケの貫通孔をもち、25は貫通しないで凹み状となっている。23にはない。39は須恵器坏形土器の破片で、40は土師器甕形土器の破片である。坏形土器はロクロ使用成形され、40はロクロ不使用成形である。

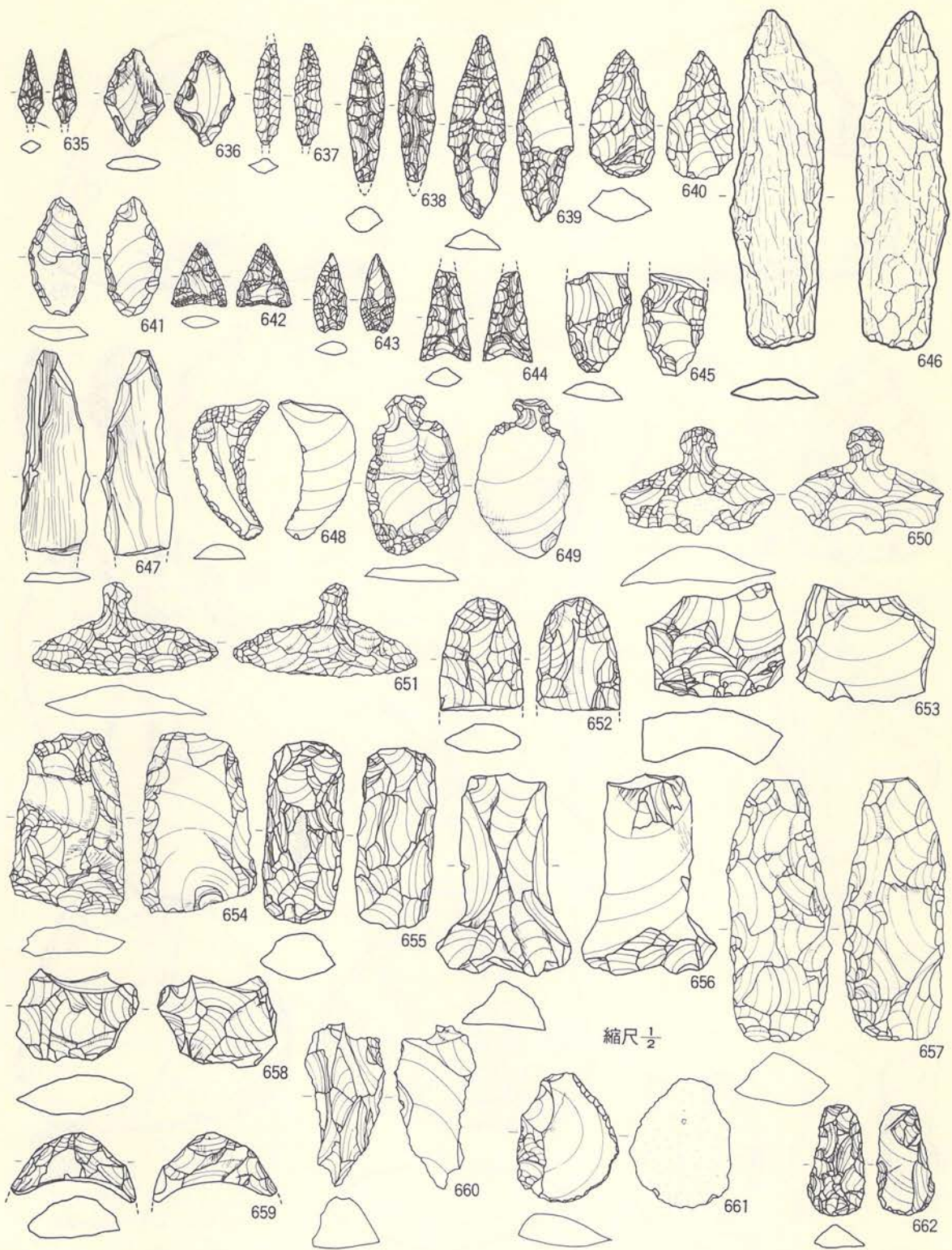
以上簡単に説明を加えたが、それらの属性について触れておこう。

1と3は第Ⅲ群3類、2は第Ⅲ群5類、5・8は第Ⅲ群7類、9～11は第Ⅲ群8類、12～15は第Ⅲ群9類、16・18は第Ⅲ群13類、17は第Ⅳ群2類、23は第Ⅳ群6類にそれぞれ相当し、20～23のように縄文以外の文様をもたないものは第Ⅲ群14類に属する。

## 2) 石器 (第211図～第218図、PL-137～139A)

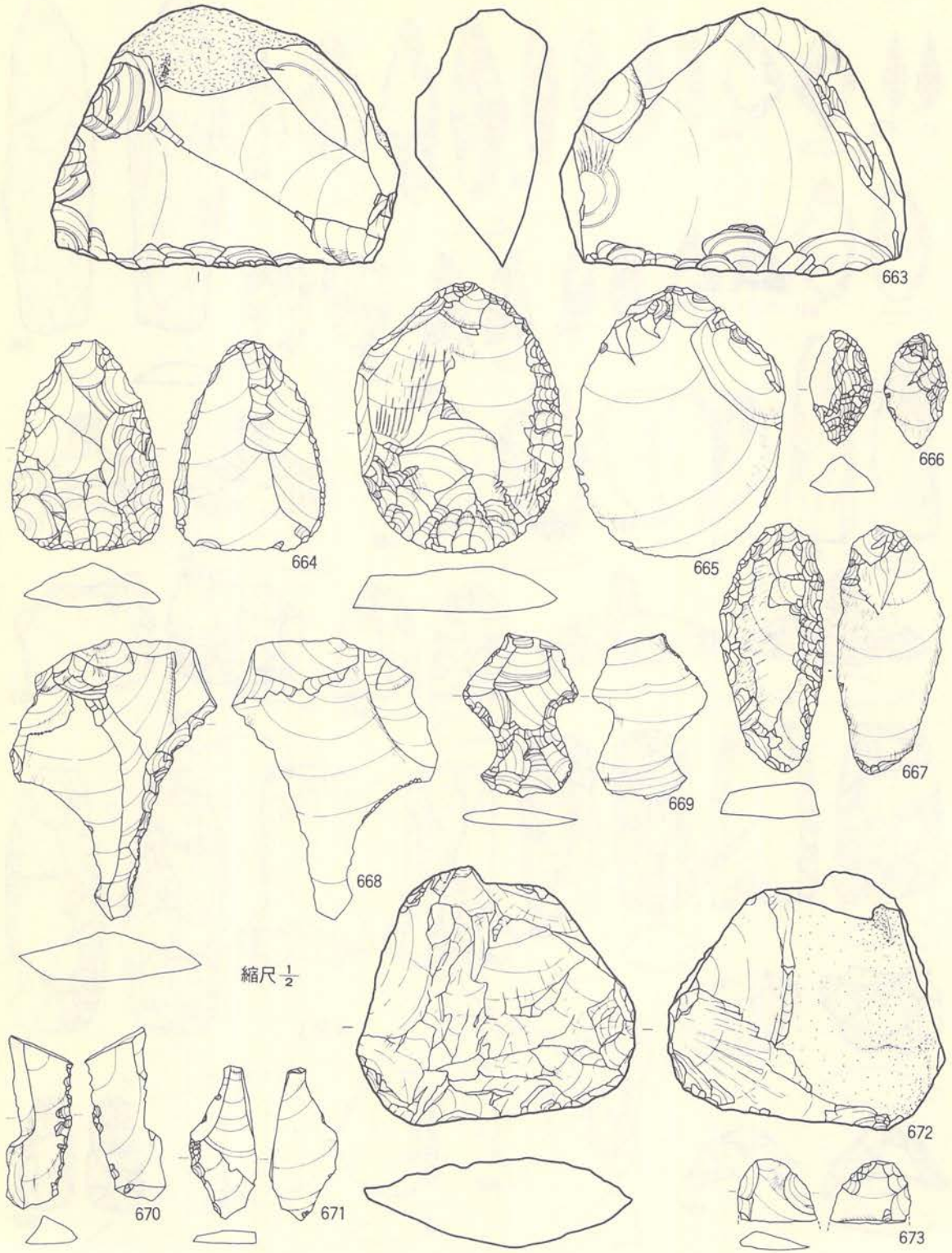
粗掘り時に出土した石器は総数で105点あり、その内訳は①石鏃 10点、②石槍 3点、③石匙 4点、④石錐 0点、⑤石篋 7点、⑥搔器 9点、⑦切削器 15点、⑧打製石斧 2点、⑨磨製石斧 7点、⑩磨(擦)石 12点、⑪半円状扁平打製石器 17点、⑫凹み石 10点、⑬石錘 5点、⑭敲き石 1点、⑮石皿 1点、⑯砥石 2点、⑰石刀 1点、である。

- ①石鏃は10点の出土であるが、この中には有茎のもの5点(635～639)と無茎のもの(640～644)があり、さらに、有茎のものには基部を作り出さないものが3点ある。無茎のものには丸基2点、凹み基3点がある。
- ②石槍は645～647の3点で646・647は基部を若干欠損し、645は先端部を欠損している。646・647は粘板岩で作っている。
- ③石匙は4点と少ないが、縦形(648・649)と横形(650・651)のものがある。
- ④石錐は出土していない。
- ⑤石篋は7点であるが、搔器に近いものもある。
- ⑥搔器は9点で、664や665のように典型的なものと篋状のものもある。
- ⑦切削器は15点の出土であるが、677のようにピエスエスキーユ的なものもある。形としては不定形であり、剥片の側縁部に剝離調整をしたものである。672は搔器に入るべきものかも知れない。
- ⑧打製石斧は1点で、側縁部や先端部に入念な剝離調整を入れたもので、刃部は丸味をもつ。684は扁平な円礫の中央に1ケの貫通孔を付したいわゆる環状石斧である。本遺跡では1点の出土である。周縁部に敲打による剝離痕を残している。
- ⑨磨製石斧が6点出土しているが、完形のものはない。690は側縁に擦り切り痕を残している。685は頭部を欠損し、691は刃部を欠損している。

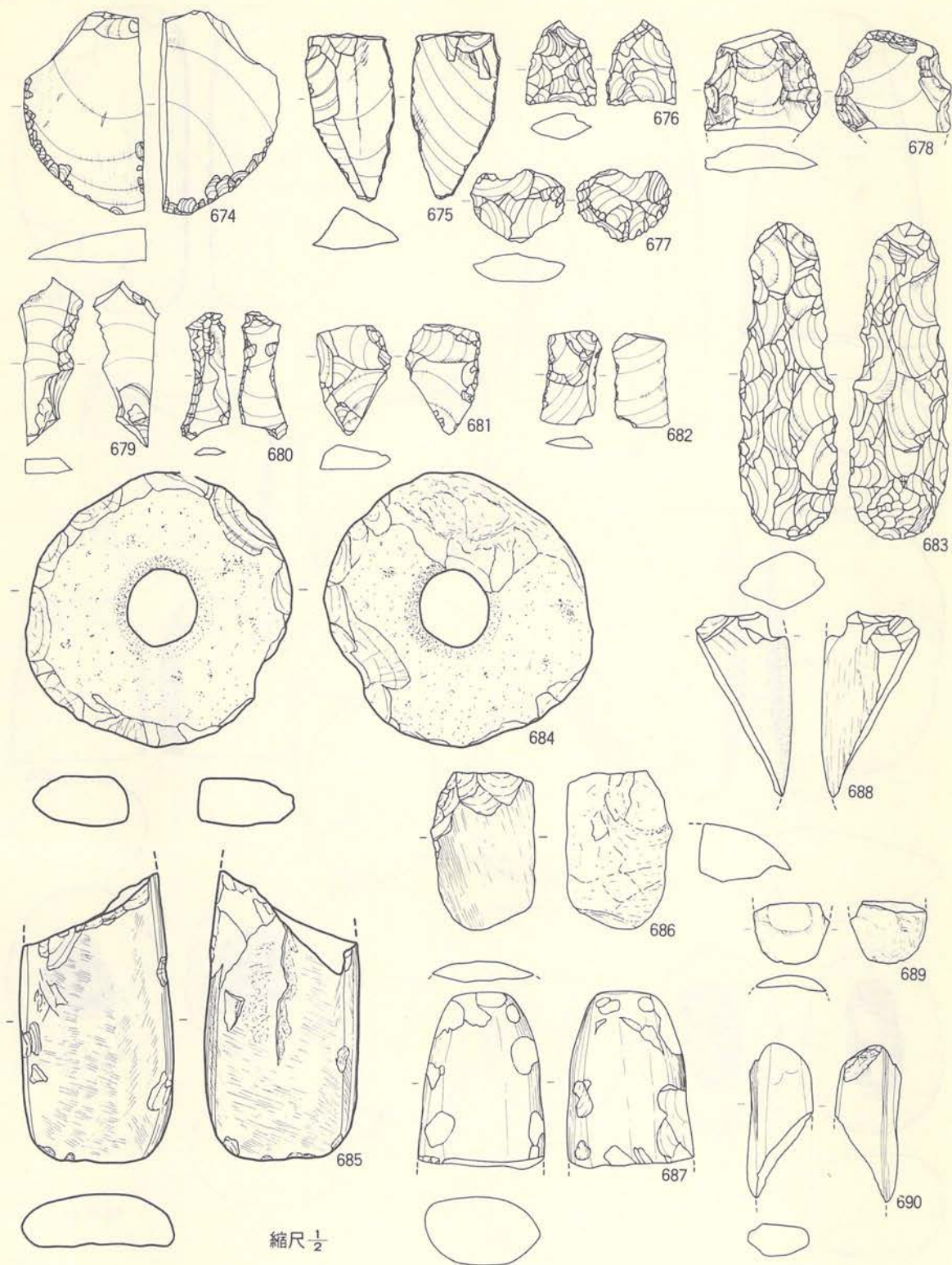


第211図 粗掘・表採 (石器-1)



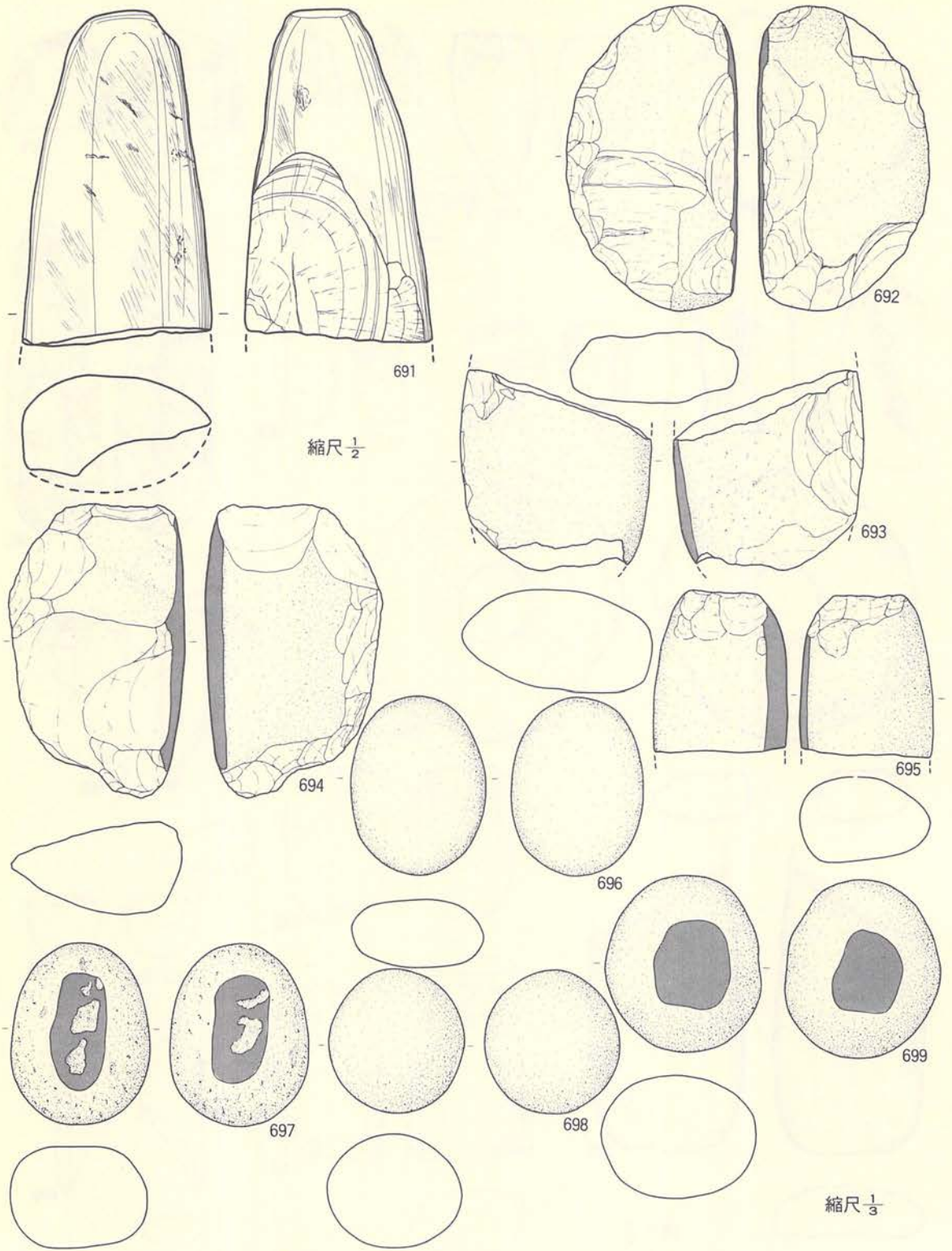


第212図 粗掘・表採 (石器-2)

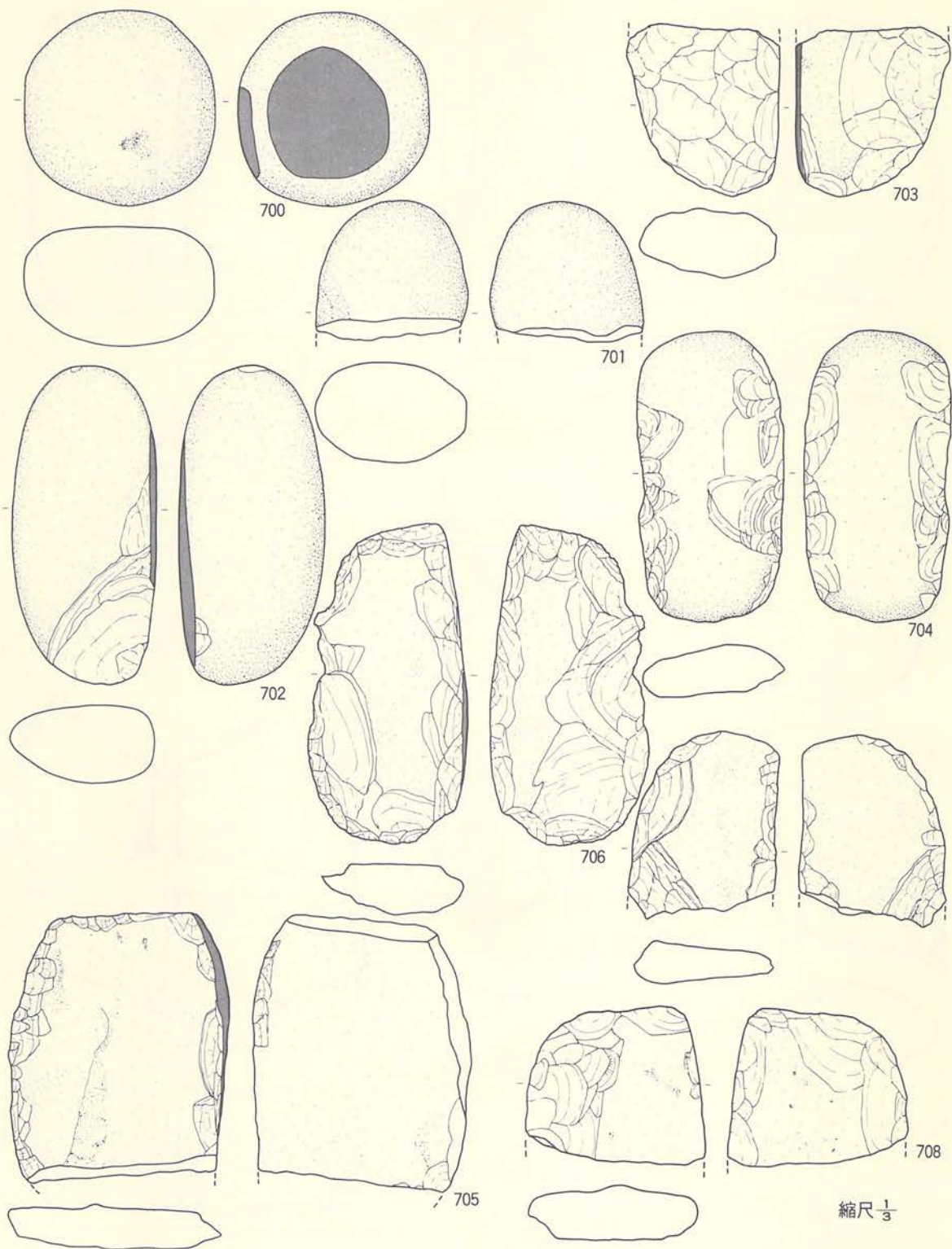


第213図 粗掘・表採 (石器-3)



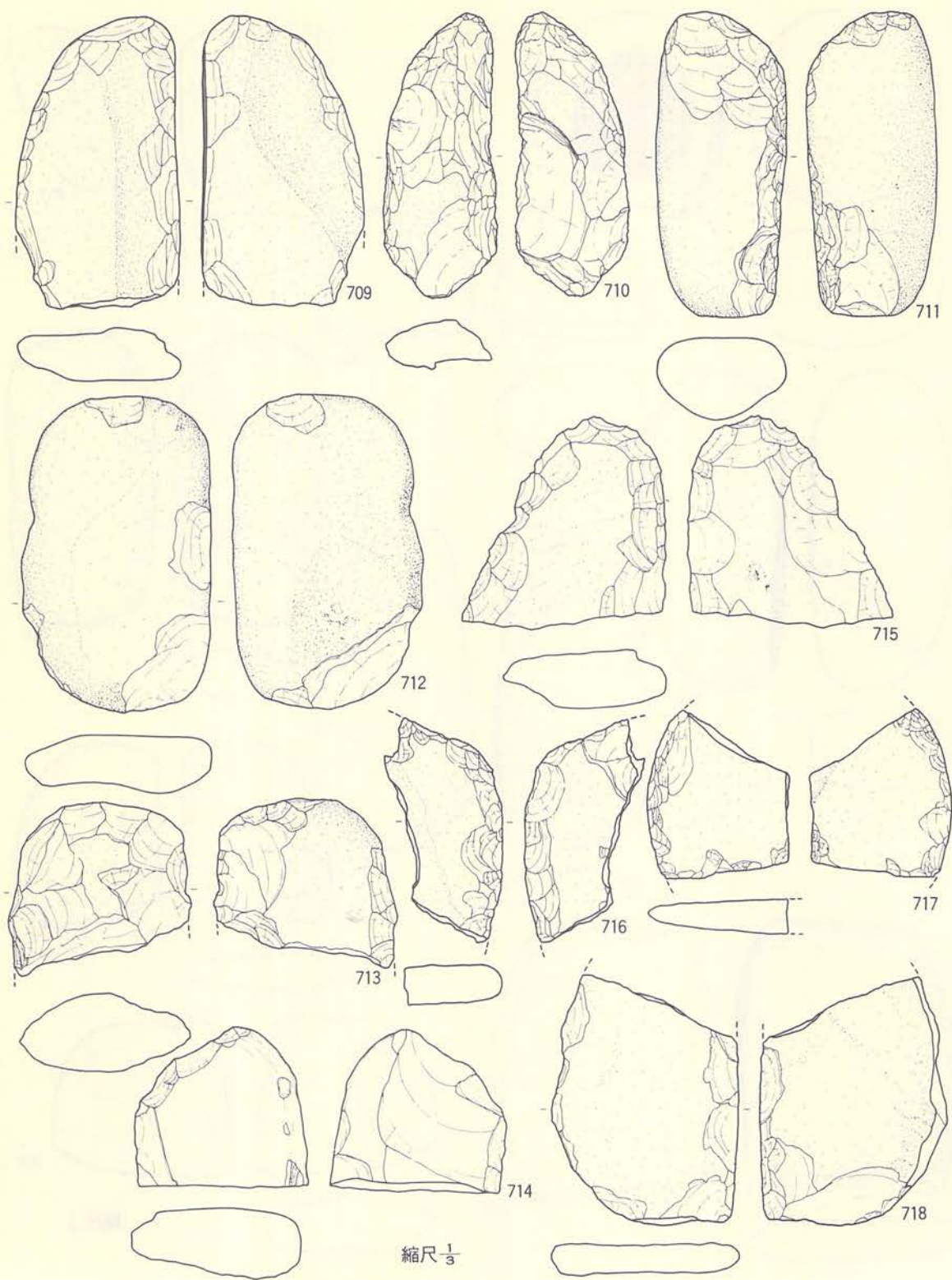


第214図 粗掘・表採 (石器-4)

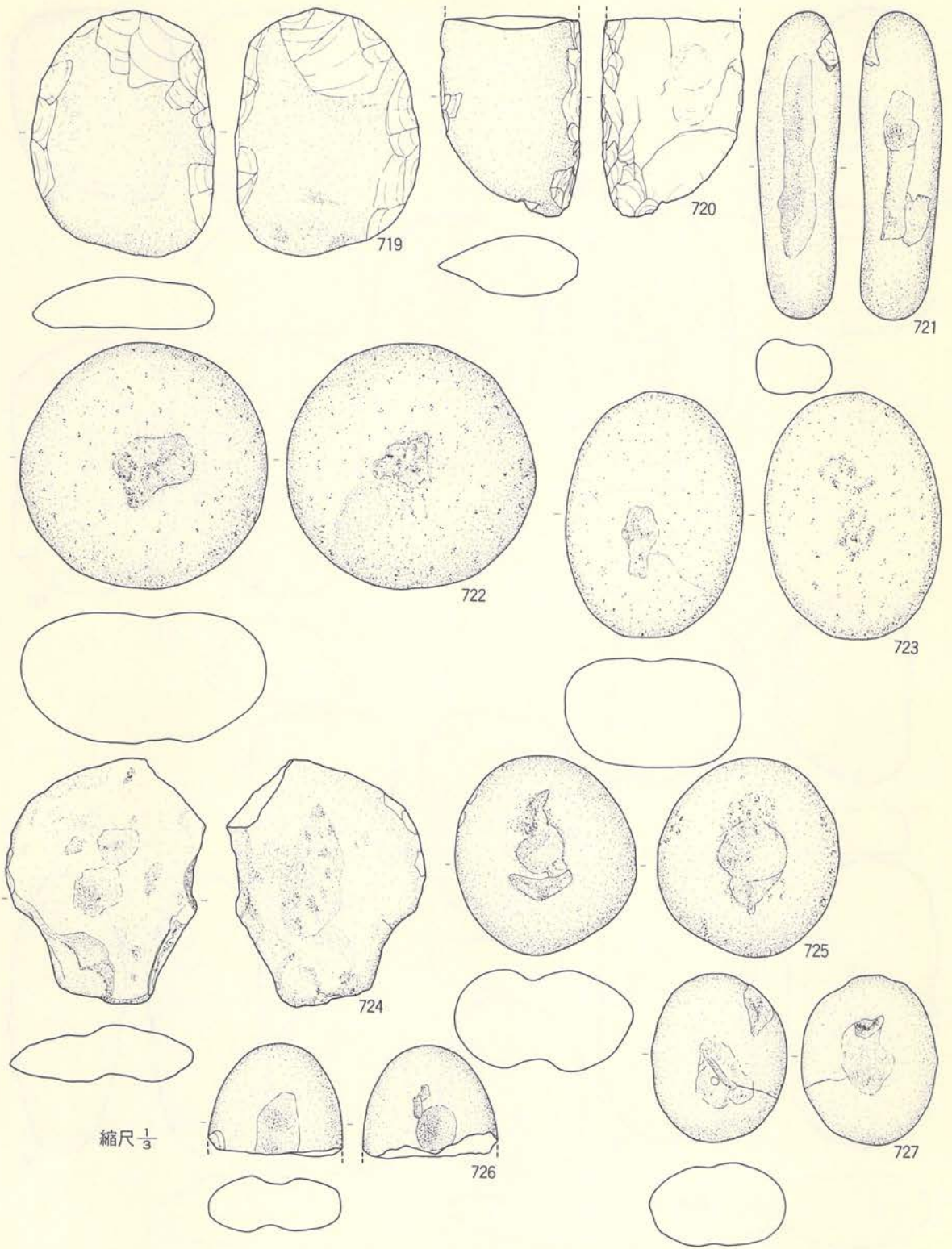


第215図 粗掘・表採 (石器-5)



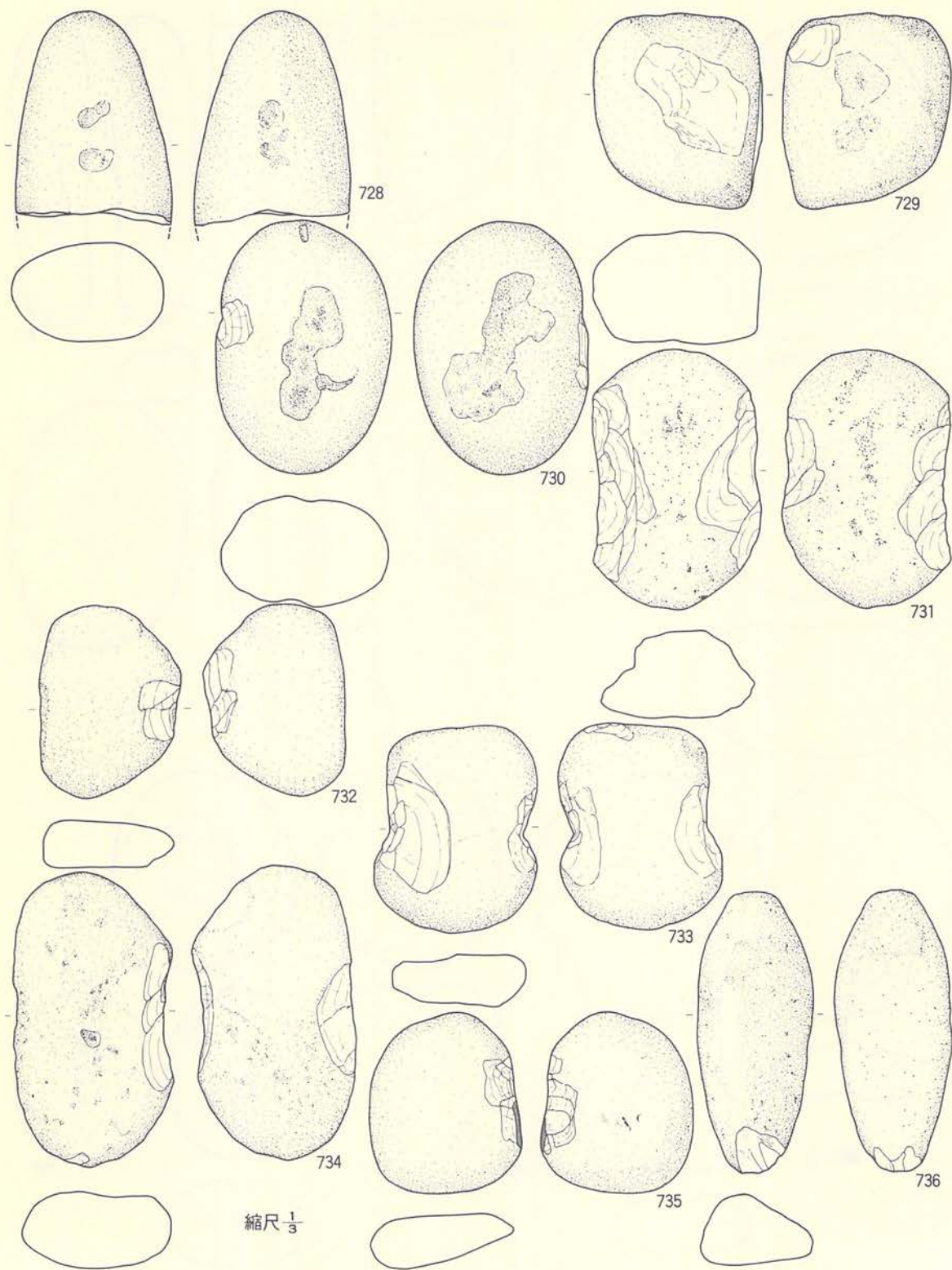


第216図 粗掘・表採 (石器-6)



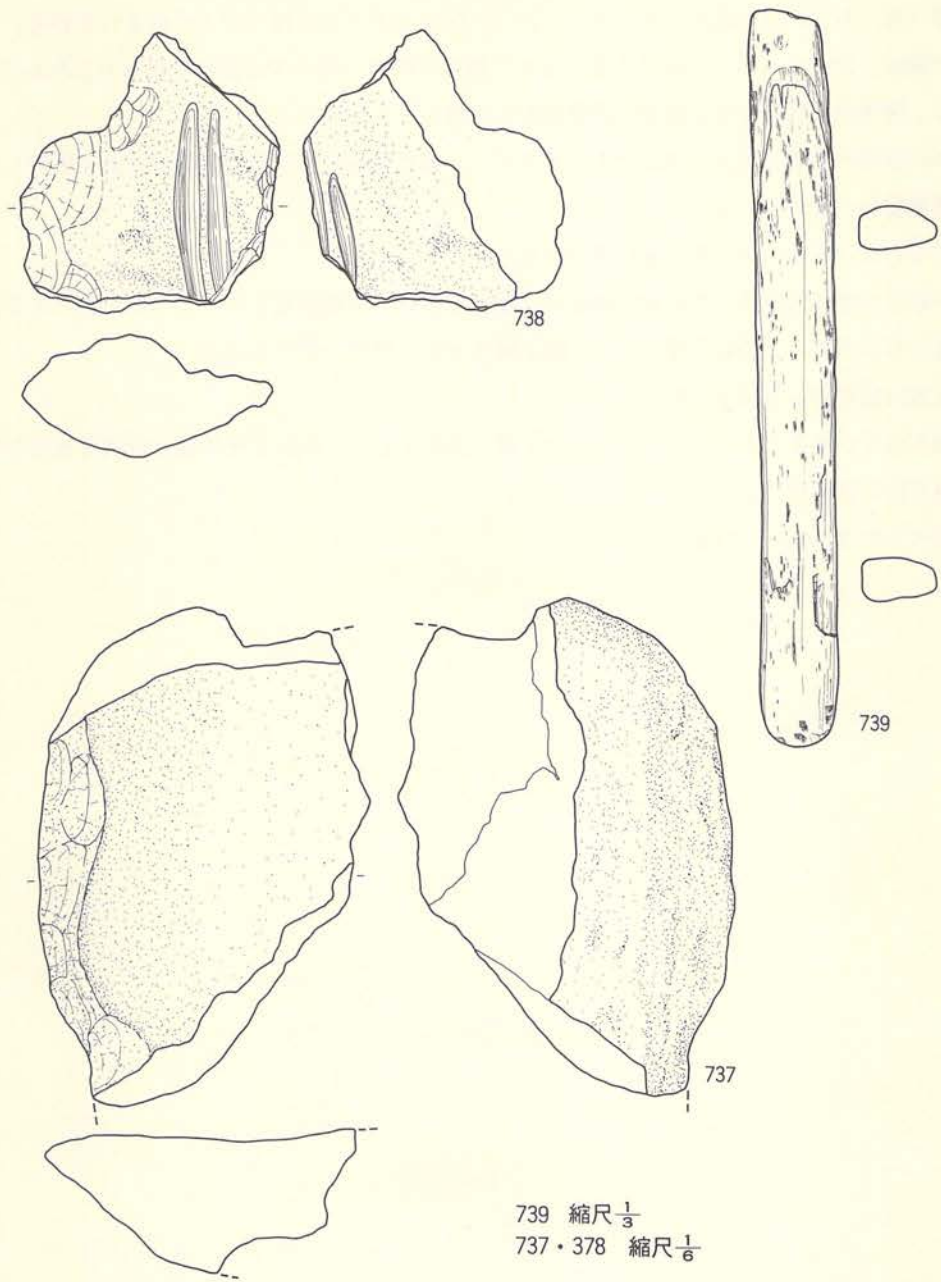
第217図 粗掘・表採 (石器-7)





縮尺  $\frac{1}{3}$

第218図 粗掘・表採 (石器-8)



第219図 粗掘・表採 (石器-9)



- ⑩磨（擦）石は12点の出土であるが、この中には磨石が6点と擦石が6点含まれている。697は両面に凹みをもち、700は片面にもつ。擦石は細長い礫の側縁部を使用面としたものである。使用面の片側または両側に剝離痕をもつ例がある。
- ⑪半円状扁平打製石器は17点の出土であるが、一部に擦石的なものもある。周囲を敲打して形態調整したものもある。
- ⑫凹み石は10点でいずれも両面に凹みをもっている。
- ⑬石錘は5点の出土で、やや長目の扁平な礫を使用し、短軸両端を打ち欠いたものである。
- ⑭敲き石は1点で、長目の礫の一端を敲き道具として使用している。
- ⑮石皿は破片が1点出土している。
- ⑯砥石は2点出土しているが、ここには1点のみ図示した。面的な使用面と線的な使用をもち、良く使い込んでいる。
- ⑰石刀が1点出土している。

## VI. 古代の遺構と遺物

本遺跡の調査で古代に位置づけられる遺構は、①住居跡-1棟、②土坑-1基、③周溝遺構-10基、④溝跡-1条である。これらの遺構を古代に属する遺構として結論づけたのは、住居跡や溝跡では古代の土師器や須恵器の破片を出土していることによる。周溝遺構も一部で土師器や須恵器の破片を出土しているので、問題がないものと判断したが、遺物を出土していない場合も遺構平面が遺物を出土している遺構と同じであることから、古代に属する遺構とした。土坑の場合は土器の他に鉄鏝が出土していることと、遺構の形状が該期の住居跡に近似していることから、一応古代に属する土坑として報告する。

### 1. 住 居 跡

#### 〔B-09住居跡〕

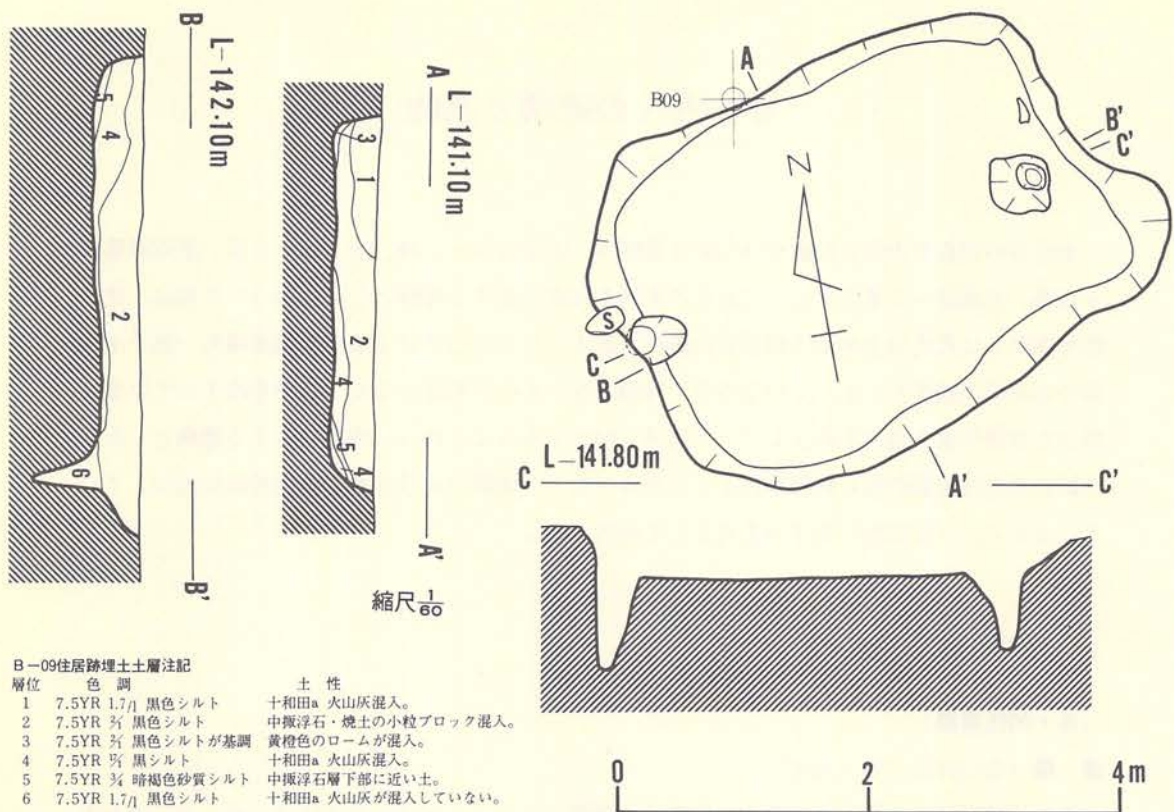
#### 遺 構 (第220図、PL-38A)

この住居跡は調査範囲内では北に位置する遺構の一つで、グリッドではA-09・B-09を中心とする地点に在る。他遺構との重複関係ではA-08周溝遺の西側部分と重複し、新旧関係では本住居跡の方が新しい。

規模は長軸約3.8m・短軸約3mで、平面形は長軸が磁北に対して76度東偏する隅丸長方形を呈している。壁高は検出面から約35cmで、床面に対して95度外傾している。床面は凹凸もなく平坦でほぼ水平に近いが、全体的にみるとそれほどの固さはなく、むしろ、軟弱な床面といえる。壁溝は検出されていない。埋土は5層に細分されているが、いずれの土層も黒色や暗褐色を呈するシルトで構成され、全体的に軟かくフカフカしている。混入物としては1・2・4層に十和田a降下火山灰とおもわれる灰白色の火山灰がブロック状に混入しているのが観察される。

床面では柱穴状の土坑が2基検出された以外には土坑の検出はない。柱穴は南西壁中央やや西寄りの壁際に接してP<sub>1</sub>が、P<sub>2</sub>は北東壁中央やや東寄りの壁の南約30cmに検出されている。規模はP<sub>1</sub>が径約40cm×35cmの円形で、深さは約72cmである。P<sub>2</sub>は一辺約45cmの不整形を示し、深さは約61cmであるが、下部に移行するほど狭くなっている。柱穴の埋土は両方とも同じで、十和田a降下火山灰のまったく混入しないフカフカした黒色シルトで構成される。柱痕跡は確認されていない。

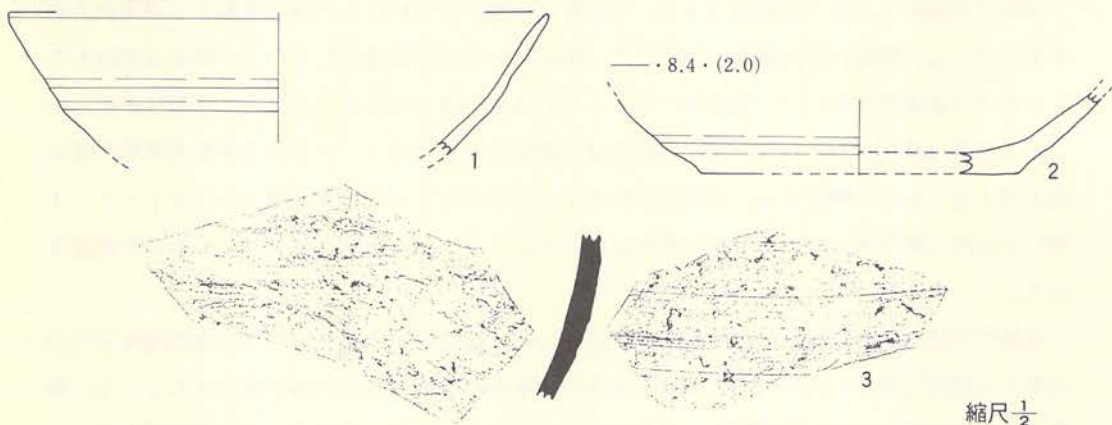




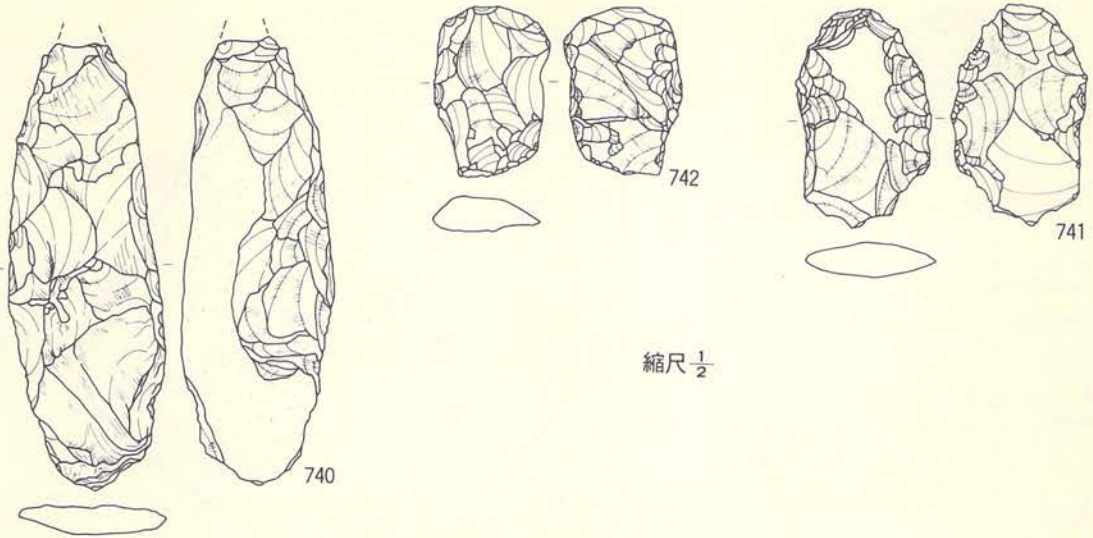
B-09住居跡埋土土層注記

層位	色調	土性
1	7.5YR 1.7/1 黒色シルト	十和田a 火山灰混入。
2	7.5YR 3/1 黒色シルト	中振浮石・焼土の小粒ブロック混入。
3	7.5YR 3/1 黒色シルトが基調	黄橙色のロームが混入。
4	7.5YR 3/1 黒シルト	十和田a 火山灰混入。
5	7.5YR 3/1 暗褐色砂質シルト	中振浮石層下部に近い土。
6	7.5YR 1.7/1 黒色シルト	十和田a 火山灰が混入していない。

14.3・—・(3.5)



第220図 B-09住居跡 (遺構・遺物)



第221図 B-09住居跡（遺物）

カマド跡や炉跡は検出されていない。

**遺物**（第220・221図、PL-139・143）

本住居跡の埋土内から酸化炎焼成の土師器坏形土器と甕形土器、そして、床面直上から環元炎焼成された須恵器の破片が出土している。その他に縄文時代の石器もある。土師器坏形土器は4点の出土であるが、いずれもロクロ使用成形されている。図化された（1・2）個体は内外面とも二次的な調整がまったくない所謂赤焼土器であるが、図化できなかった破片の中には内面黒色処理のものもある。大きさは1が口径約14.5cm、2は底径約8.5cmである。3の須恵器は瓶の肩部破片と考えられるが、全体的なことは不明である。内外面ともロクロ成形された痕跡を残しているが、外面の体部には篋削り調整が入っている。縄文時代の石器は、器種が石槍（740）、切削器（741・742）である。740の石槍は残存長約11.9cm・巾4cm・厚み1cmと比較的大振りである。調整はあまり良好とはいえず、片面に自然面を大きく残し、粗雑な剥離である。741・742の切削器は器形が不定形で、周縁部に剥離調整を施している。741はピエスキュー的な要素をもっている。大きさは741が全長5.8cm、742が4.44cmである。

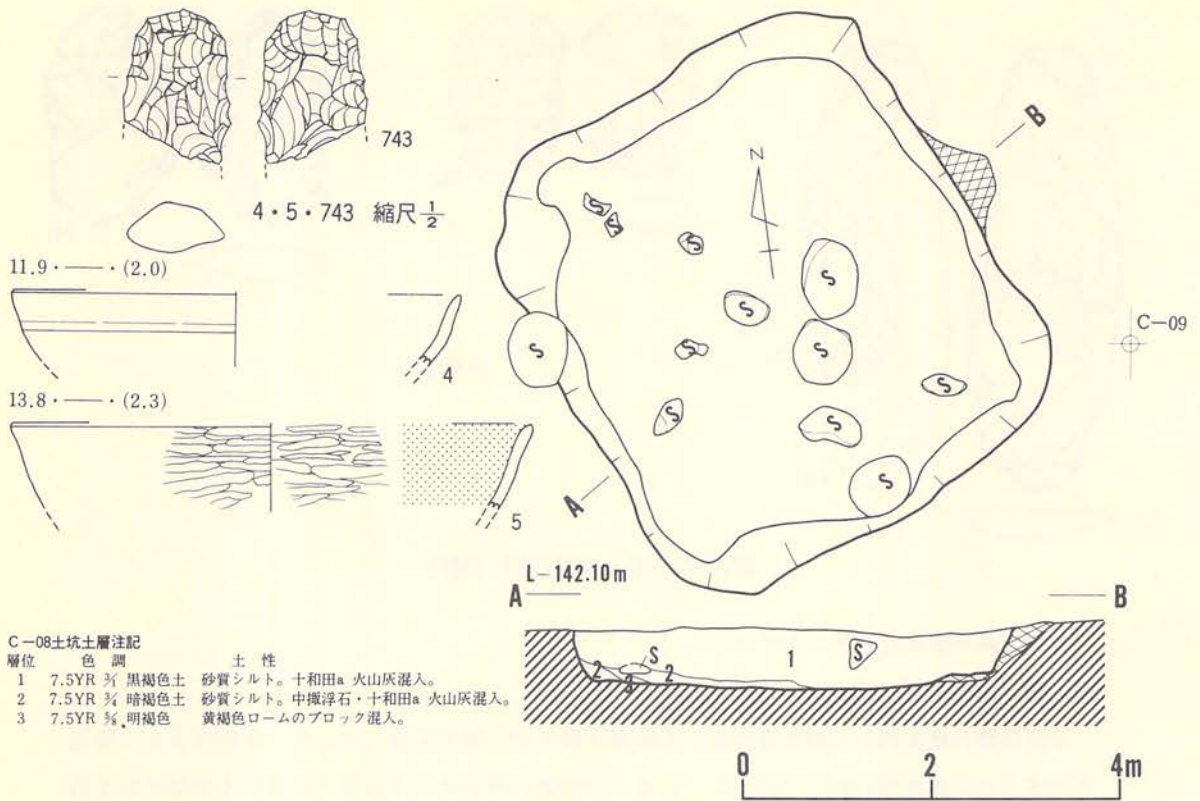
## 2. 土 坑

〔C-08土坑〕

**遺構**（第222図、PL-38B）

この土坑はB-09住居跡の西方約5mに位置し、グリッドではC-08とC-09にまたがっている。規模は東西約2.4m、南北約2.6mで、平面形は隅丸方形を呈している。壁高は約30cm





第222図 C-08土坑 (遺構・遺物)

位で、壁は床面に対して約20度外傾している。床面にはほとんど凹凸もなく平坦でほぼ水平に近いが、あまり固くない。壁溝や柱穴状の土坑は検出されていない。埋土は黒褐色・暗褐色・明褐色のシルトで構成され、3層に細分されている。1層と2層には十和田a 降下火山灰が混入している。また、埋土内や床面直上には径10cm~40cm位の河川礫が多く混入しており、そのほとんどは火熱を受けて赤変したり亀裂が入ったりしている。少量ではあるが鉄鏝も混入していた。

遺物 (第222図、PL-140・143)

酸化炎焼成された土師器坏形土器と甕形土器、縄文時代の石器、鉄鏝が出土しているが、床面からの出土はなく、すべて埋土内からの出土である。土師器の出土がもっとも多いが、図化できたのは4・5の2点のみである。5はロクロ成形の後、内外面とも入念なミガキ調整がなされ、内面は黒色処理されている。4はロクロ成形で、内外面とも二次調整のない赤焼土器である。甕形土器は細片であるので詳細は不明であるが、外面に縦方向の篋削り調整が入っている。大きさは5が口径約14cm、4が約12cmである。743は縄文時代の石器で器種は石篋状石器とおもうが、先端部を欠失しているため、断定はできない。大きさは現存最長約4cm、巾約3cm、厚み1.3cm位である。調整は周縁部を両面に剝離しており、特に図の上端部分は入念な調整が入っている。両面に剝離されていることからみると、打製石斧的な要素も具備している。

### 3. 周溝遺構

#### 1) A-04周溝遺構

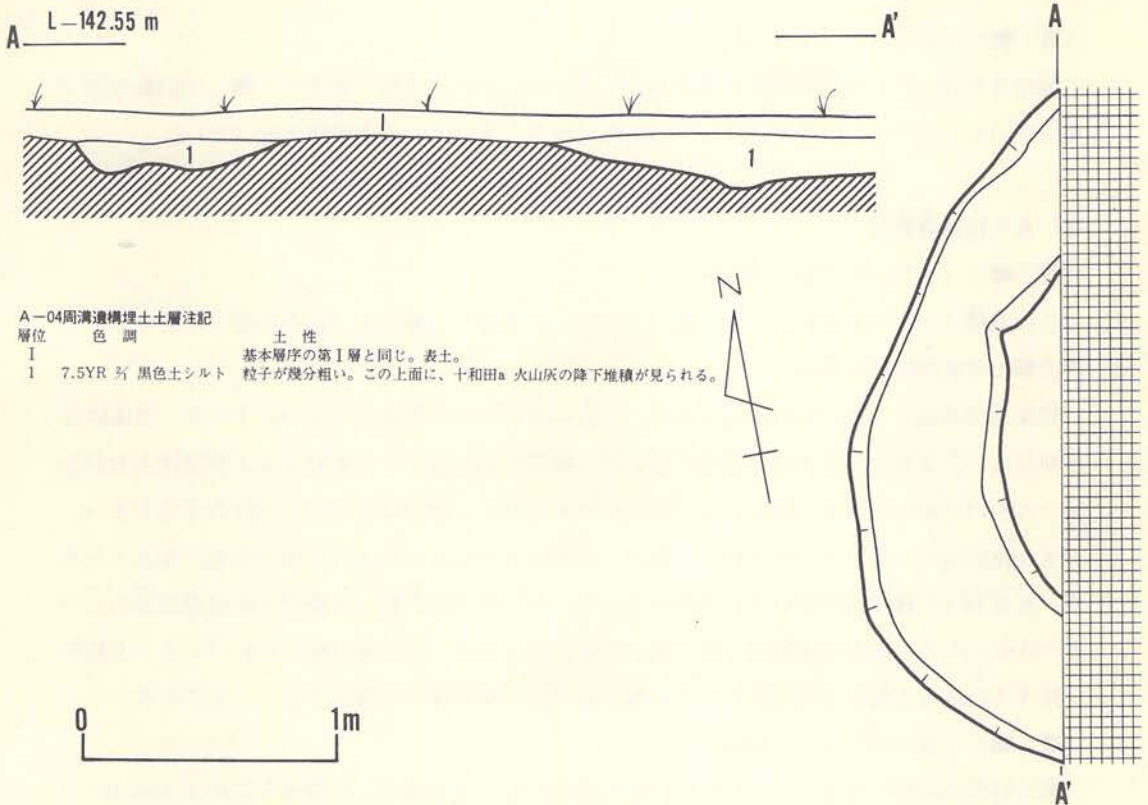
[遺構] (第223図)

この遺構は調査範囲の中では北端部に位置する遺構の一つであるが、C-06周溝遺構の北約1mにあり、グリッドではA-04に位置し東側は路線外に延びている。検出された形状は円弧状であるが、全体的な形状は不明である。他遺構との重複はない。

検出された規模は長さ約2.5m分であり、溝の巾は40cm~70cmの範囲であるが、60cm位の所がもっとも多い。溝の断面形は上縁が若干開くU形を示し、深さは約10cm位とこの種の遺構の中ではもっとも浅い。埋土は黒色シルトの単層で構成されるが、浮石の混入によって若干粒子が粗い感がある。部分的ではあるが、十和田a降下火山灰が本層の上面に堆積している。

[遺物]

出土していない。



第223図 A-04周溝遺構



## 2) A-08周溝遺構

〔遺 構〕 (第224図、PL-39A)

この遺構は調査範囲の中では北寄りに在り、グリッドではA-08、A-09にまたがって位置しているが、東側は路線外に延びているので全体的なことは不明である。他遺構との重複関係は南西辺北寄りではA-08住居跡と、周辺の南寄りではA-09土坑と重複しているが、これらの新旧関係はA-08住居跡は新しくA-09土坑は古い。

検出された規模は、南西辺の長さ約7.6 mと北西辺の長さ約5 mで、検出された部分から考えられる平面形は胴張隅丸方形を呈するものと推定されるが、切れ目をもつのかは不明である。溝の巾は90cm～1.3 mの範囲であるが、1 m前後の所がもっとも多い。深さは検出面から60cm～70cmであるが、埋土土層図Aの観察により、本遺構の切り込み面は表土直下であり、深さも80cmあるらしい。断面形は上縁が若干開くU形を示し、底面も凹凸のない平坦面を呈している場合が多く、全体的にみると整然とした状況を示している。埋土は黒色や褐色系のシルトで構成されているが、色調や混入物の違いそして量的な差によって9層に細分されている。混入物としては、十和田 a 降下火山灰が比較的多量に混入する他に浮石粒や八戸火山灰等も観察され全体的に締りもなくフカフカしている。

〔遺 物〕 (第224図、PL-143)

酸化炎焼成された土師器環形土器が出土している。ロクロ成形で底部切り離しが回転糸切り無調整のものである。口径約13.8cm、器高4.7 cmの大きさで、内面黒色処理はない。

## 3) A-15周溝遺構

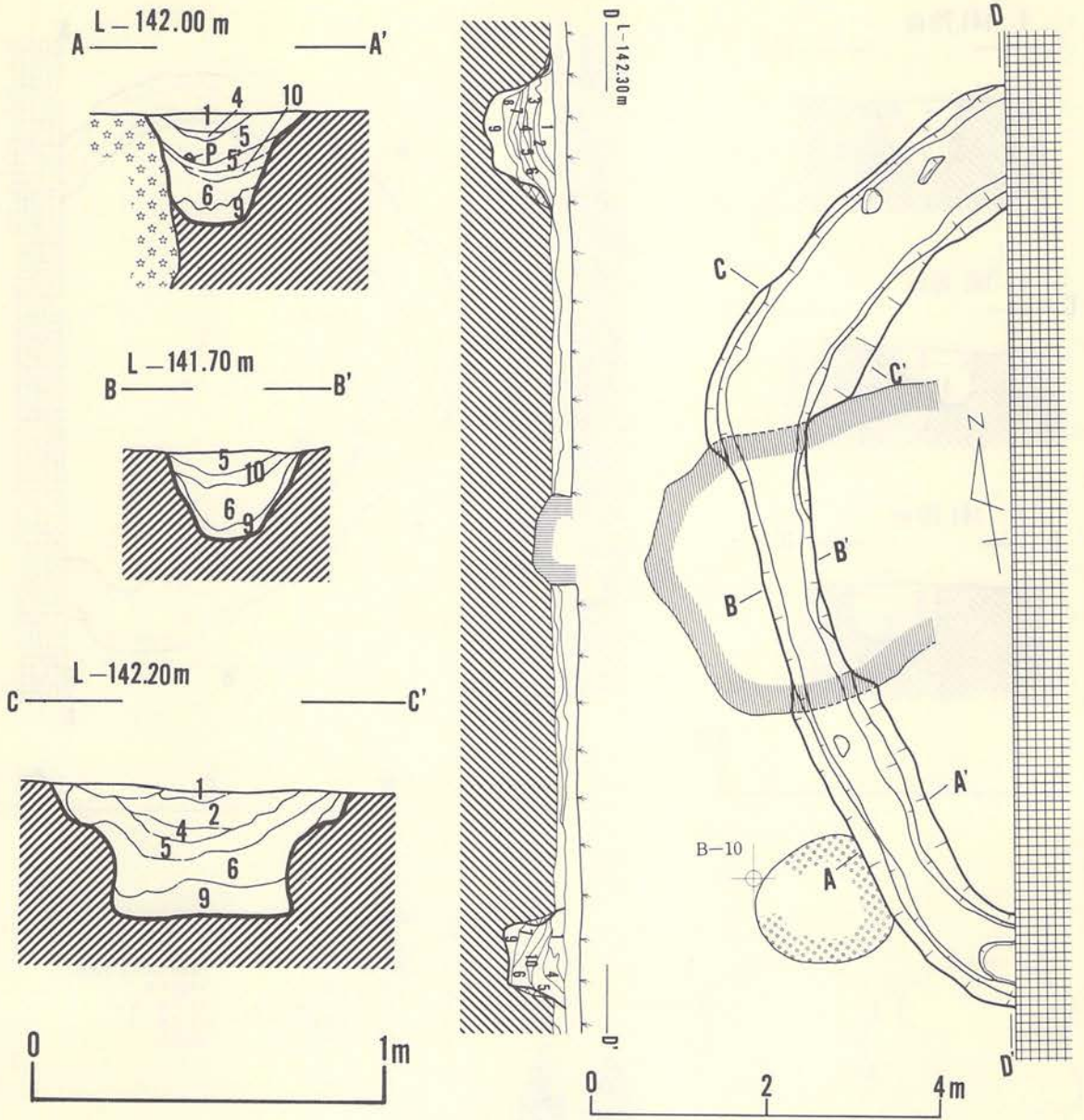
〔遺 構〕 (第225図、PL-39B)

この遺構はグリッドA-15、A-16にまたがって位置し、東側の一部が路線外に延びている。他遺構との重複関係はない。

規模は南東辺5.4 m、北西辺4.4 mで、北西-南東方向の外周径が約6 mである。全体的な平面形は一部未調査であるので定かでないが、検出された部分から推定すると胴張隅丸方形を呈するものと考えられる。巾は50cm～70cm位であるが、全体的にみると60cm位の部分が多い。深さは検出面からだと30cm～40cmであるが、土層図Aでみると40cm～50cmが本来の深さであろう。断面形は上縁が若干開いたU字形を呈している。埋土は黒色・暗褐色・極暗褐色等のシルトで構成されるが、浮石や十和田 a 降下火山灰等の混入によって6層に細分されている。十和田 a 降下火山灰は1層と2層に混入している。いずれの層も締りがなくフカフカしている。

〔遺 物〕 (第225図、PL-140B)

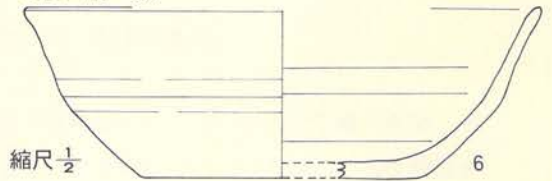
縄文時代の石器が出土している。744は莖部を欠失した石鏃で、残存部全長約3.3 cm、巾1.5



A-08周溝遺構埋土土層注記

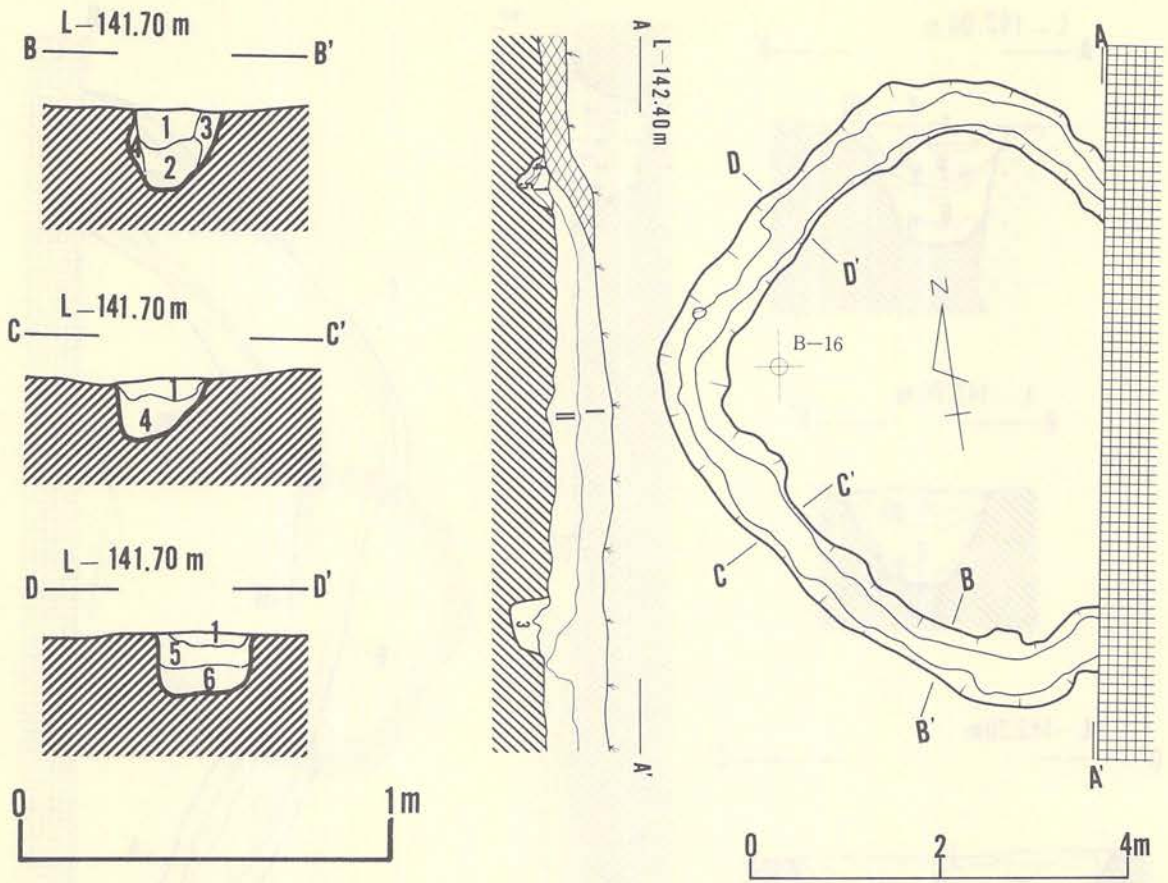
層位	色調	土性
1	7.5YR 弱 灰褐色シルト	砂質シルト。十和田A 火山灰混入。
2		1層の中で、十和田A 火山灰の多い所。
3	7.5YR 弱 黒褐色砂質シルト	微量の十和田A 火山灰混入。
4	7.5YR 弱 黒色シルト	十和田A 火山灰全どなし。
5	7.5YR 弱 黒褐色シルト	十和田A 火山灰多量混入。
5'	7.5YR 弱 極暗褐色シルト	十和田a 火山灰少量混入。
6	7.5YR 弱 黒色シルト	微量の十和田A 火山灰混入。
7	7.5YR 弱 黒褐色	十和田a 火山灰混入。
8	*	十和田a 火山灰ブロック混入。
9	7.5YR 弱 明褐色	ソフトロームに黒色シルト・十和田a 火山灰混入。
10	7.5YR 弱 極暗褐色シルト	焼土ブロック・十和田a 火山灰混入。

13.6・7.3・4.6



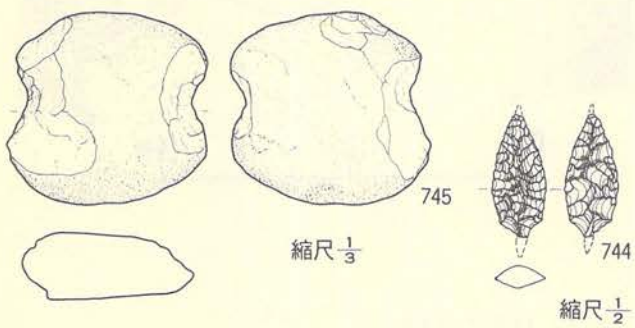
第224図 A-08周溝遺構 (遺構・遺物)





A-15周溝遺構埋土層注記

層位	色調	土性
1	7.5YR 1.7/1 黒色シルト	十和田火山灰a 少量混入。
2	7.5YR 3/ 〃	十和田火山灰a 多量混入。
3	7.5YR 3/ 暗褐色	中搬浮石層。
4	7.5YR 3/ 黒色砂質シルト	浮石多量に混入。
5	7.5YR 3/ 極暗褐色砂質シルト	浮石多量に混入。
6	7.5YR 3/ 黒色シルト	浮石混入。



第225図 A-15周溝遺構 (遺構・遺物)

cm、厚み6mmで、両面に入念な剥離調整を施している。745は扁平な円礫の両端を打ち欠いた礫石錘である。長軸7.7cm、短軸6.6cm、厚み2.5cmで、両面に自然面を残している。

#### 4) B-03周溝遺構

〔遺構〕 (第226図)

この遺構は本遺跡の調査範囲の中ではもっとも北に位置し、グリッドではB-03とB-04にまたがっている。また、西側が数mで段丘崖に続いていることから全体が検出されていない。おそらく、この段丘崖は比較的新しい時期(古代以降)まで崩壊が続いたために、崩壊の時に本遺構とともに崩壊したものと考えられる。検出された規模は、北側は全長約5mで西に向って彎曲する円弧を描いている。南側は北側の南端から約2.8m南で検出され、検出された部分は約1mと僅かである。溝の中は位置によって若干差はあるものの60cm~80cm位の所が多く、深さについても40cm~50cmと位置によって差がある。溝の断面形は上縁に向って軽く開くU字形を示している。以上のことから、この周溝遺構は南東部で溝が切れることや、I-19周溝遺構例のように北西部も切れていた可能性が考えられるので、全形は円弧が向い合う形となるであろう。埋土は、十和田a降下火山灰や浮石粒の混入したシルトの単層で構成され、地点による差はない。全体的に軟弱でフカフカしている。

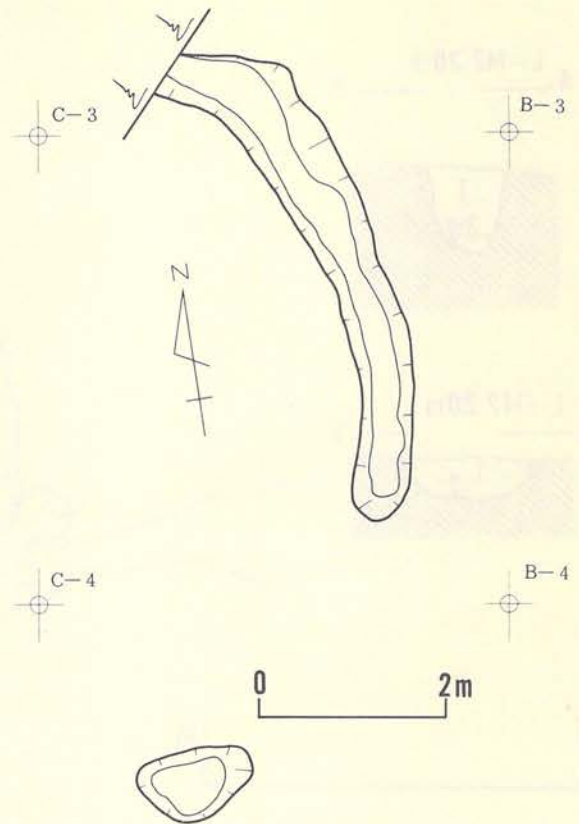
〔遺物〕

出土していない。

#### 5) B-05周溝遺構

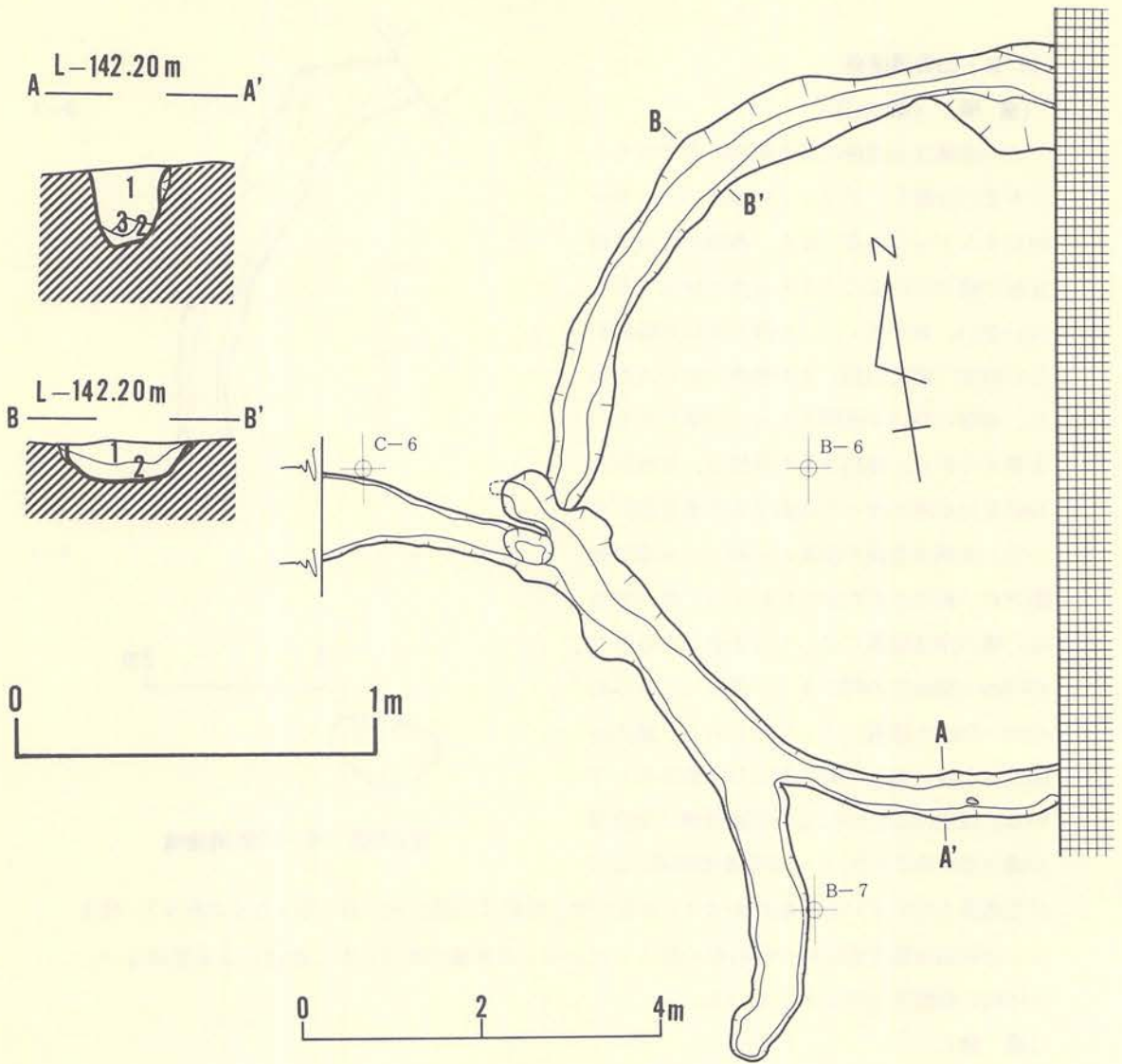
〔遺構〕 (第227図、PL-40A)

この遺構はA-04周溝遺構の南約1mにあり、グリッドではB-05・B-06にまたがって位置している。東側はさらに路線外に延びており、検出された部分は全体の約半分位と推定されるので、全体的なことは不明である。他遺構との重複関係では、南西部でC-06周溝遺構の北東部分と重複している。それら両者の新旧関係を埋土土層図Bで観察するとC-06周溝遺構の方が新しい。



第226図 B-03周溝遺構

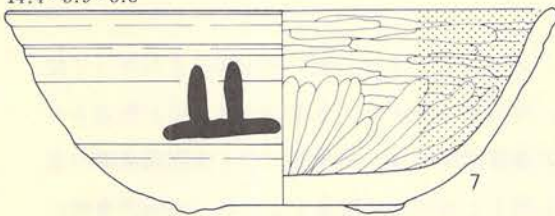




B-05周溝遺構埋土土層注記

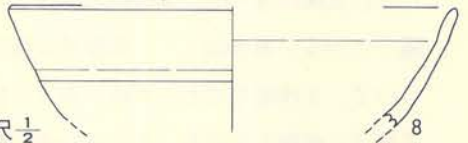
層位	色調	土性
1	7.5YR 2/4 黒色土	シルト。十和田 a 火山灰混入。
2	7.5YR 2/5 極暗褐色	砂質シルト。十和田 a 火山灰混入。
3	7.5YR 2/4 褐色	中概浮石層。

14.4・5.9・5.3



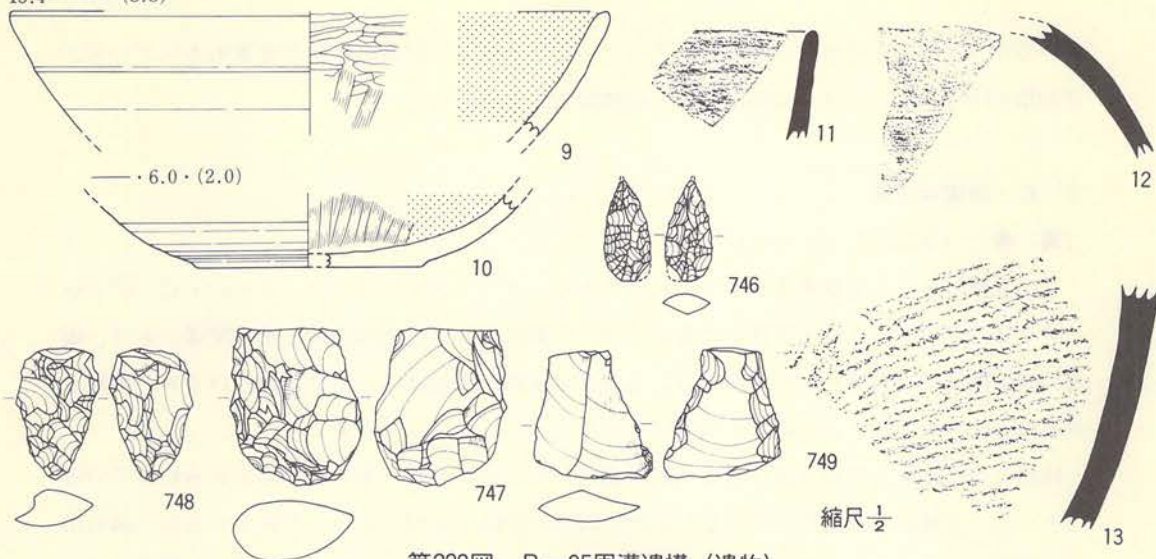
11.8・——・(3.3)

縮尺 1/2



第227図 B-05周溝遺構 (遺構・遺物)

15.4・——・(3.3)



第228図 B-05周溝遺構 (遺物)

検出された部分で計測される外周の規模は、南北で径約8.6mで、検出された部分から推定される平面形は円形を呈するものと考えられ、切れ目なく全周する形であろう。溝の中は50cm～80cmの範囲であるが、全体的にみると50cm位の部分が多い。特に、北側に一部広い部分が見られるが、他はほぼ50cm位である。深さは検出面から20cm～40cm位であるが、40cm位の所がもっとも多い。断面形では上縁が若干開くもののほぼU字形を示し、底面には若干凹凸がある。埋土は黒色・極暗褐色・褐色を呈するシルトで構成されているが、全体的に浮石や火山灰の混入が見られる。十和田a降下火山灰との関係では1層と2層に小塊状で混入しているが量的にはそれほど多いものではない。軟く締りがなくフカフカしている。

〔遺物〕 (第227図、第228図、PL-140C・143)

本遺構の埋土内から酸化炎焼成された土師器環形土器と還元炎焼成された須恵器環形土器・大甕体部破片や、縄文時代の石器等が出土している。土師器はいずれもロクロ成形され、底部は回転糸切りされた後、手持ち篋削り調整がある。7は全体の半分ほど残存しているが、内面の体部～口縁部は横方向、底部から体部下半は放射状のミガキが入り、全面が黒色処理されている。また、体部外面には何かの符号とみられる墨書が入っている。内面が黒色処理された他の9・10も前の7と大同小異である。8はロクロ使用成形で酸化炎焼成され、内面に黒色処理をもたない赤焼土器である。11は小破片であるので詳細は不明であるが、還元炎焼成された須恵器環形土器の口縁部である。13は器表に平行叩き目を持ち、内面にナデ痕をもつ須恵器大甕の体部破片である。縄文時代の石器には石鏃・石錐・搔器・切削器が在る。石鏃(746)は無茎円基型で、全長2.66cmと比較的小型のものである。石錐(747)としたものは石鏃にも近似しているが、先端部に明瞭な磨滅面を残しており、全長3.54cmである。搔器は先端部のみを残存し



ているが、先端部が両面に剝離調整が入っていることから、打製石斧的な要素ももっている。切削器(749)はフレークの両側縁に片面剝離調整をしている。

## 6) C-06周溝遺構

〔遺構〕(第229図、PL-40B)

この遺構はB-03周溝遺構から約8m南にあり、グリッドではB-06・B-07・C-06・C-07にまたがっている。他遺構との重複では、北東部がB-05周溝遺構と重複関係にあり、両者の新旧関係では本遺構の方が新しい。なお、本遺構の西部は段丘崖に延びているが、検出された部分から考えると、崩壊した部分はそれほど大きくないものと考えられる。

検出された部分の外周規模は北東-南西方向で約9mを測り、南東部で約1.8m切れていることから、全体的な平面形は北西部も切れて円弧が対峙する形であろうと考えられる。溝の中はほぼ70cm位で一定し、深さも20cm~30cmとほぼ一定しているが、溝底には若干小凹凸がある。断面形は上縁で若干開くU字形を呈する部分が多い。埋土は黒色と暗褐色のシルトで構成され、いずれも十和田a降下火山灰や浮石粒の混入が観察される。全体に締りがなく、軟かでフカフカしている。

〔遺物〕(第229・230図、PL-140D)

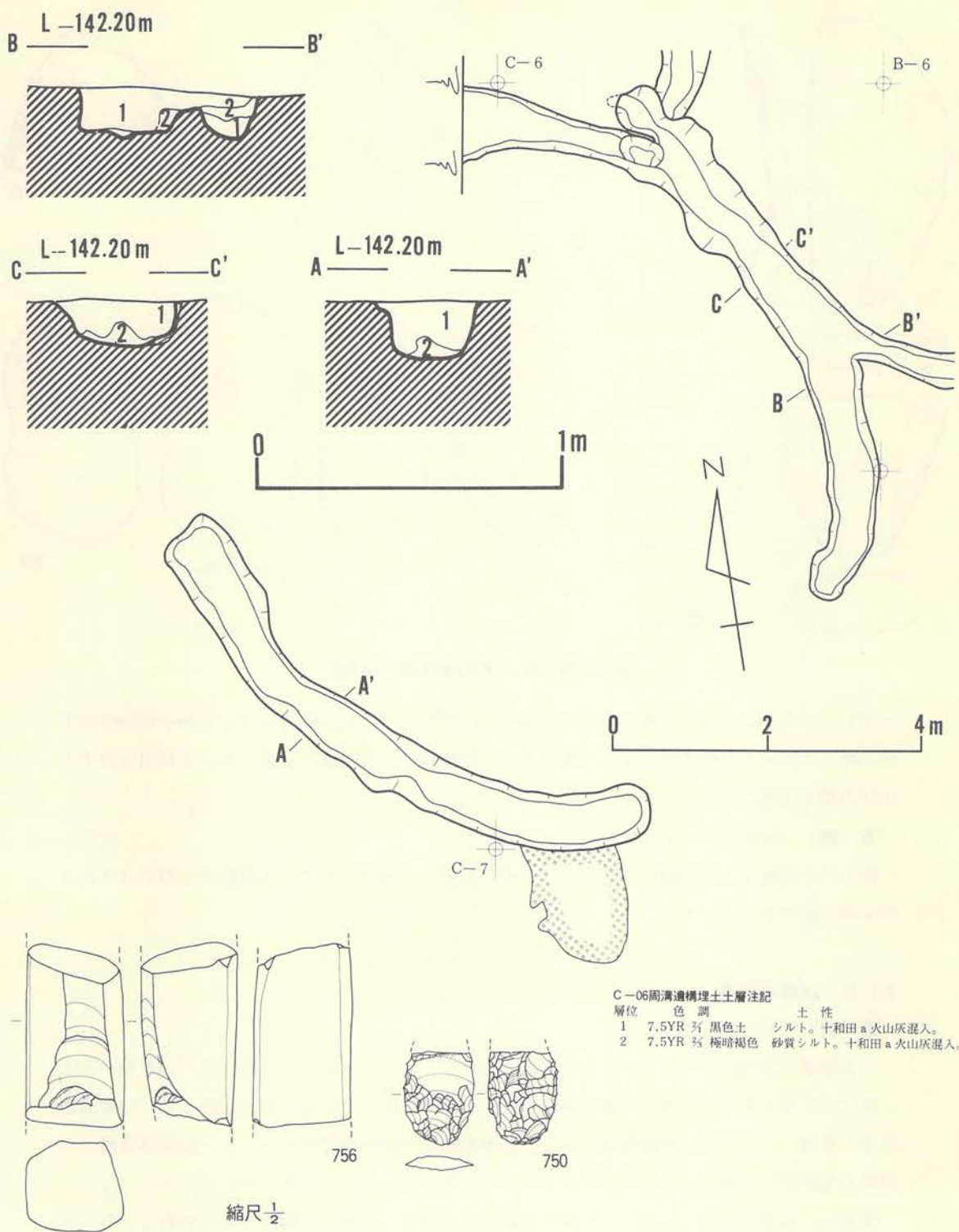
埋土内から縄文時代の石器が出土している。750は先端部を欠失した石鏃で、無茎円基型のものである。大きさは残存部全長2.95cmである。751は擦石であるが、両側縁に擦面をもつ。円礫を利用したもので自然面を多く残している。全長7.5cmである。752・753は半円状扁平打製石器であるが、753は欠失部分が多い。753は直線部に敲打痕と擦り面をもっている。752の大きさは全長14.2cmである。754の石錘は、自然礫の短軸両端を打ち欠いたものである。755は敲き石であるが、 $\frac{1}{2}$ 位を欠失している。756は断面が略方形を呈する石棒の欠損品である。側面全面に擦り面をもっている。

## 7) C-19周溝遺構

〔遺構〕(第231図、PL-42A)

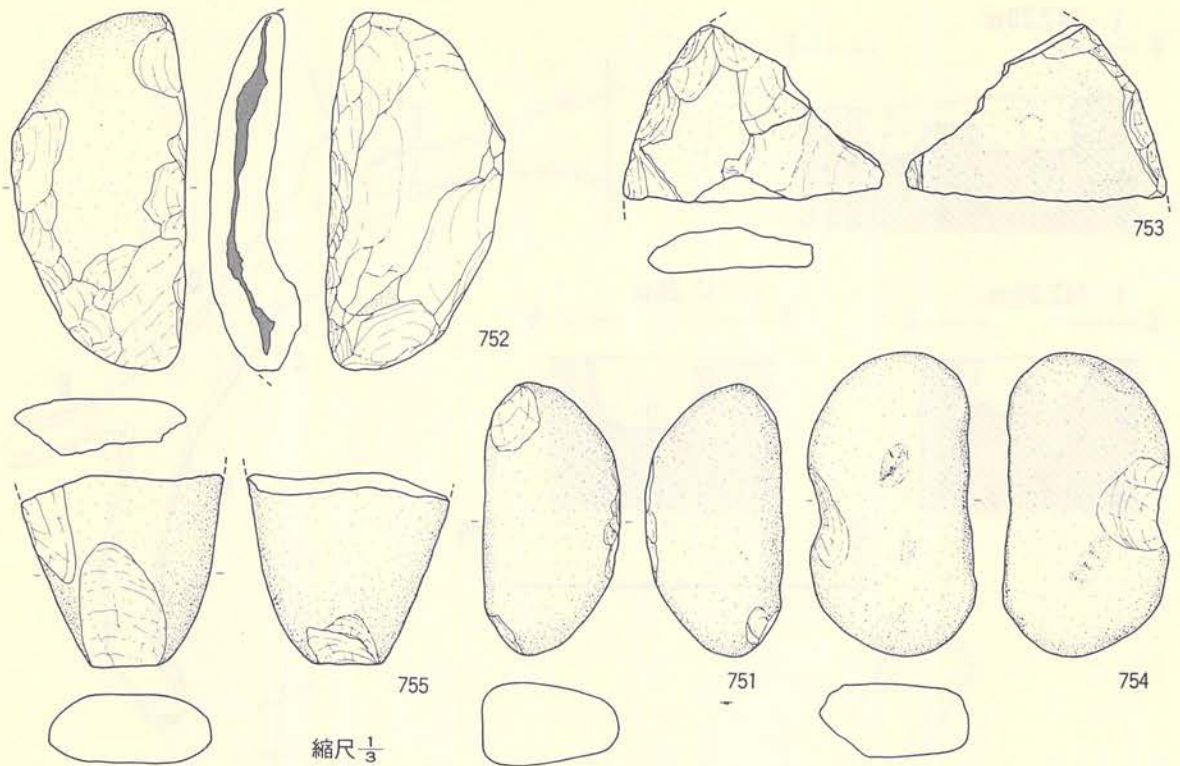
この遺構はグリッドC-18・C-19・D-18・D-19にまたがって位置し、A-16周溝遺構の南西約10mの地点にある。他の遺構との重複関係はない。

規模は外周径で南東-北西約9.6m、南西-北東8.4mで、南東部3.1mと北西部2.2mの間が切れている。平面形は南東と北西に切れ目をもち、円弧が対峙している形であるが、南西側部分の南東端寄りとは北西端寄りに、北東に向って方向転換する部分があり、円形というよりも不規則な胴張隅丸方形気味を呈している。巾は50cm~1.1m位の範囲であるが、60cm位の部



第229図 C-06周溝遺構（遺構・遺物）





第230図 C-06周溝遺構（遺物）

分がもっとも多い。深さは検出面から20cm～50cmであるが、全体的にみると30cm～40cm位が多い。埋土は黒色と明褐色のシルトで構成され、全体的に浮石が混入している。十和田 a 降下火山灰の混入は確認されていない。

〔遺物〕（第231図、PL-143）

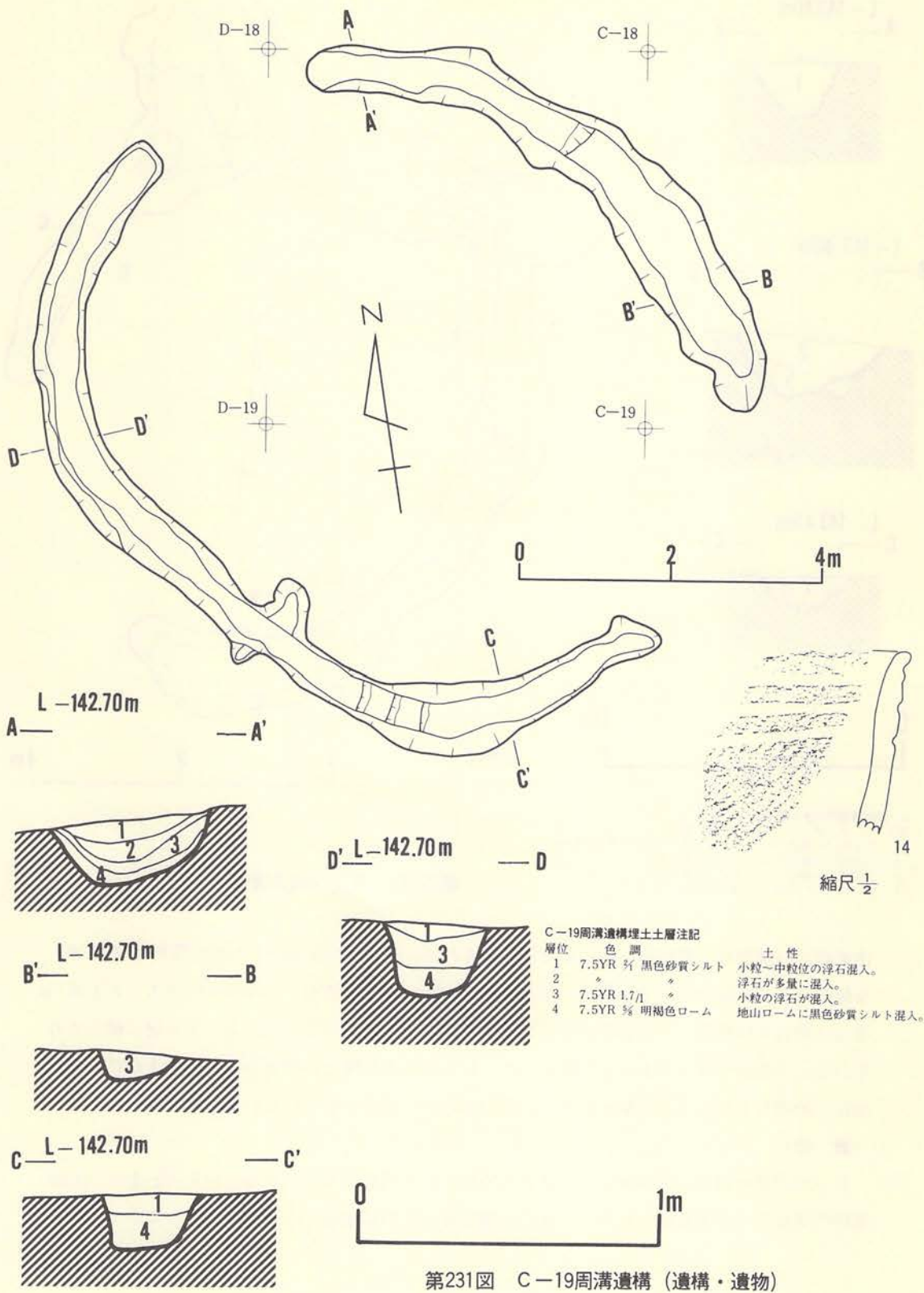
埋土内から縄文土器の破片が出土している。土器は口縁部破片で、本遺跡の分類ではⅡ群4類A種に属するものである。

#### 8) D-24周溝遺構

〔遺構〕（第232図、PL-42B）

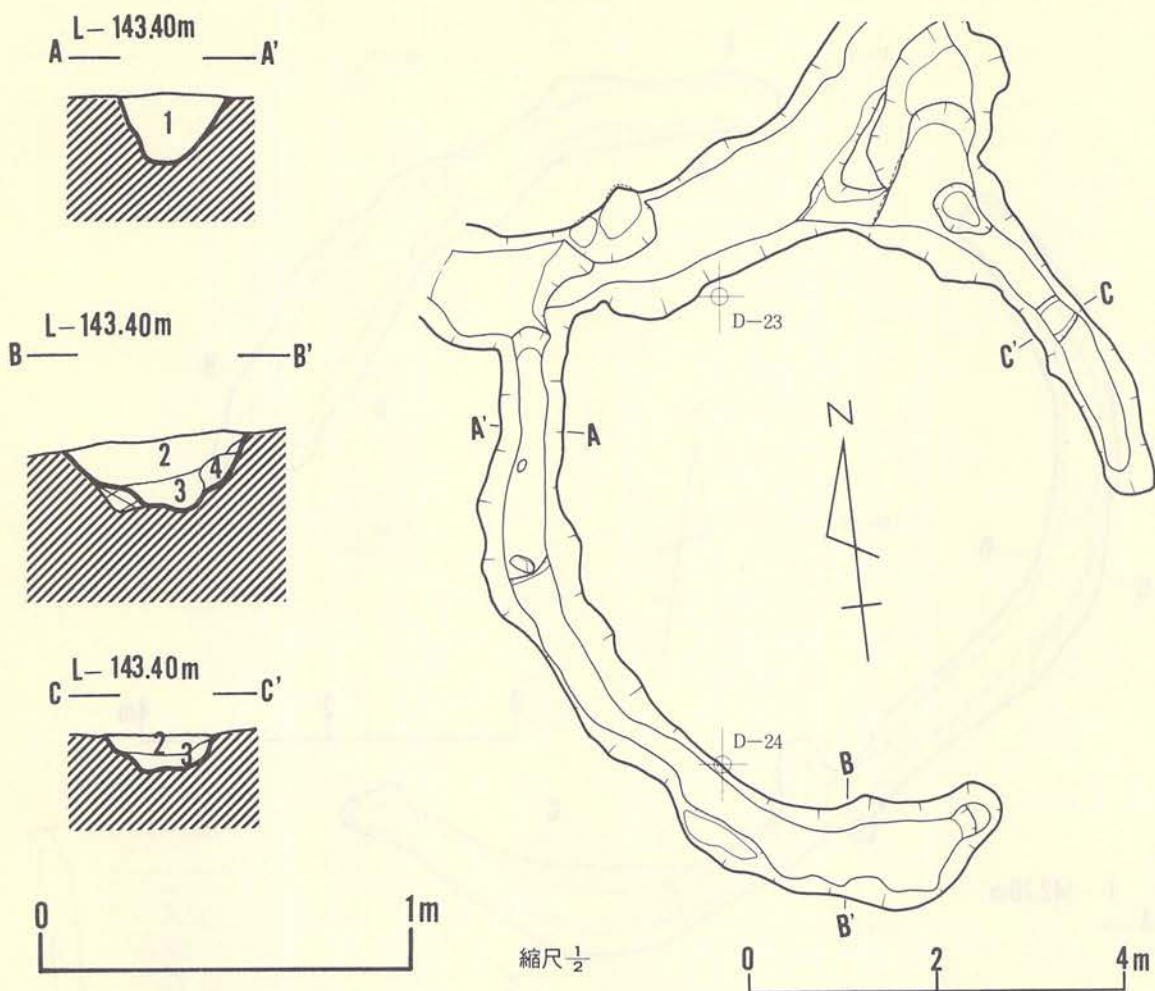
この遺構は調査範囲のほぼ中央やや東寄りに在り、グリッドではC-23・D-23を中心とする地点に位置する。他遺構との重複関係では、C-22土坑-1・D-23住居跡・E-22周溝遺構等と重複しているが、新旧関係はいずれも本遺構より古い遺構である。E-22周溝遺構との関係を重複部分の埋土土層図で観察すると、本遺構の方が新しい状況を示している。

規模は、外周径で東-西約7m・南-北約8mを測り、南東部の約3.5mが切れている。E-22周溝遺構との重複部分の状況が定かでないが、検出された形状から推定される平面形は、



第231図 C-19周溝遺構 (遺構・遺物)





D-24周溝遺構埋土層注記

層位	色調	土性
1	7.5YR 3/1 黒色シルト	浮石とソフトロームを多量に含む。
2	7.5YR 4/1 褐色シルト	浮石を少量含む。
3	7.5YR 5/1 褐色シルト	浮石を多量に含む。
4	10 YR 1.7/1 黒色	黒色炭化物。炭の破片。

第232図 D-24周溝遺構

南東部で一部切れる馬蹄形を示すものと考えられる。溝の中は60cm~1.1mの範囲であるが、全体的にみると80cm位の所が多い。深さは35cm~50cm位であるが、40cm位の所がもっとも多い。埋土は黒色・暗褐色・黒褐色等のシルトで構成され、浮石等の混入物によって5層に細分されている。十和田 a 降下火山灰との関係では、E-22周溝遺構との重複部分の埋土上部に層厚10cm位で堆積しているのが観察されたが、他の部分では観察されていない。

〔遺物〕

E-22周溝遺構との重複部分で、還元炎焼成された須恵器等が出土しているが、E-22周溝遺構の底面の方が本遺構の底面より低く、須恵器は底面に密着するものが多かったので、次の

E-22周溝遺構に一括して掲載した。

## 9) E-22周溝遺構

〔遺 構〕 (第233図、PL-41A)

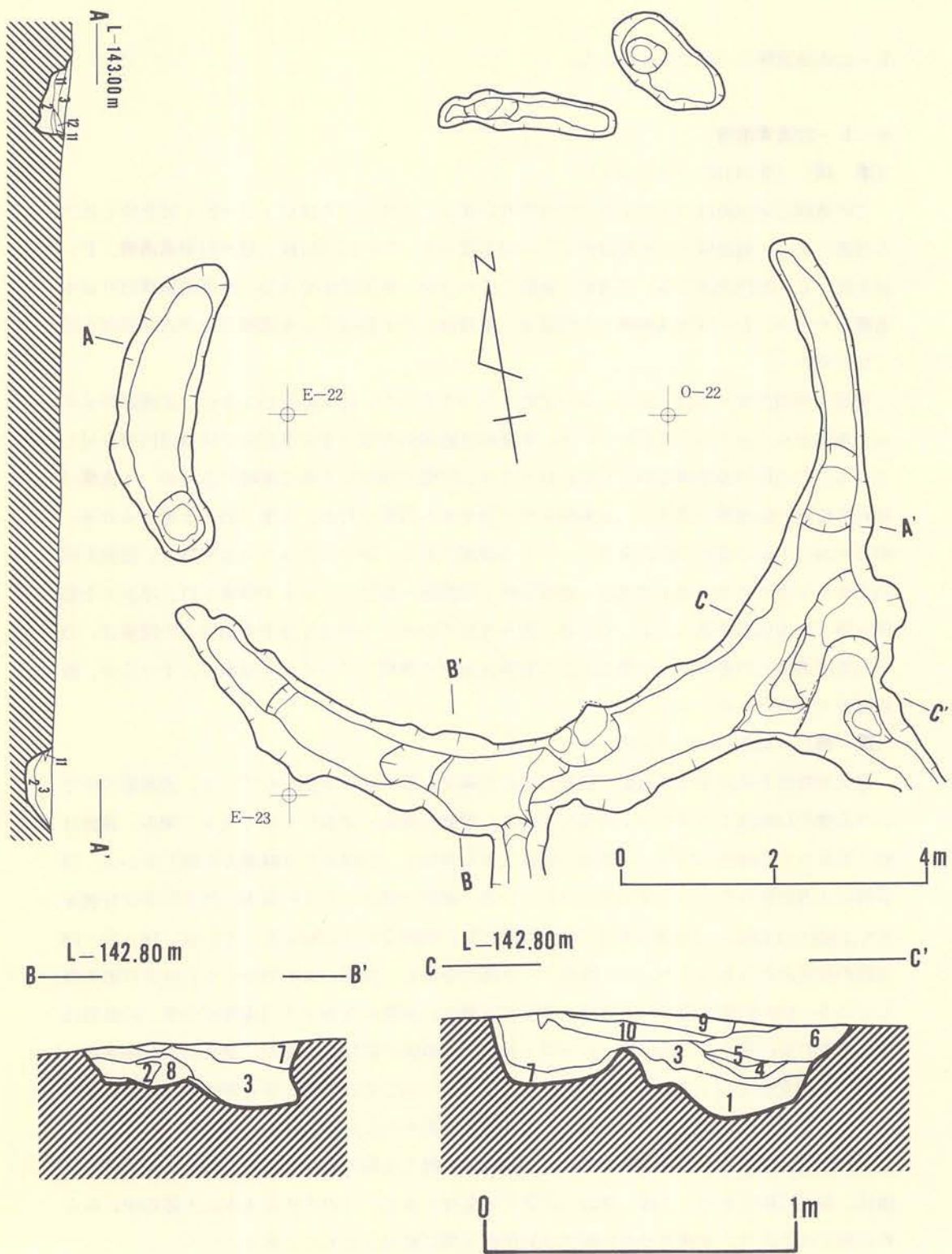
この遺構は調査範囲のほぼ中央やや東寄りに在り、グリッドではD・E-21・22を中心とする位置にある。他遺構との重複関係はD-22土坑-2、D-23住居跡、D-24周溝遺構、E-22土坑、E-22住居跡等多くの遺構と重複しているが、新旧関係ではD-24周溝遺構以外は本遺構より古い。D-24周溝遺構との関係は、重複部分の土層図では本遺構の方が古い状況を示している。

規模は外周径東-西約9.8 m、南-北約9.5 mであるが、北東部が約2.5 m、北西部が3.4 m、西部が0.9 mそれぞれ切れている。平面形は断続的ではあるが全体的ではほぼ円形を呈している。この種の他遺構の中にも切れ目があり、円弧が対峙する形の遺構があるが、本遺構は切れる位置が他遺構と違うが、本遺構も切れ目をもち円弧が対峙する型と同一と考えられる。巾は50cm~1 mと差が比較的大きく、やや不規則である。深さは20cmでほぼ平均し、底面も凹凸が少く平坦である。埋土は黒色・極暗褐色・暗褐色・褐色のシルトで構成され、浮石や十和田a降下火山灰等の混入によって7層に細分されている。十和田a降下火山灰との関係は、D-24周溝遺構との重複部分の埋土上位に層厚10cm位で堆積しているのが観察されているが、他の部分では観察されていない。

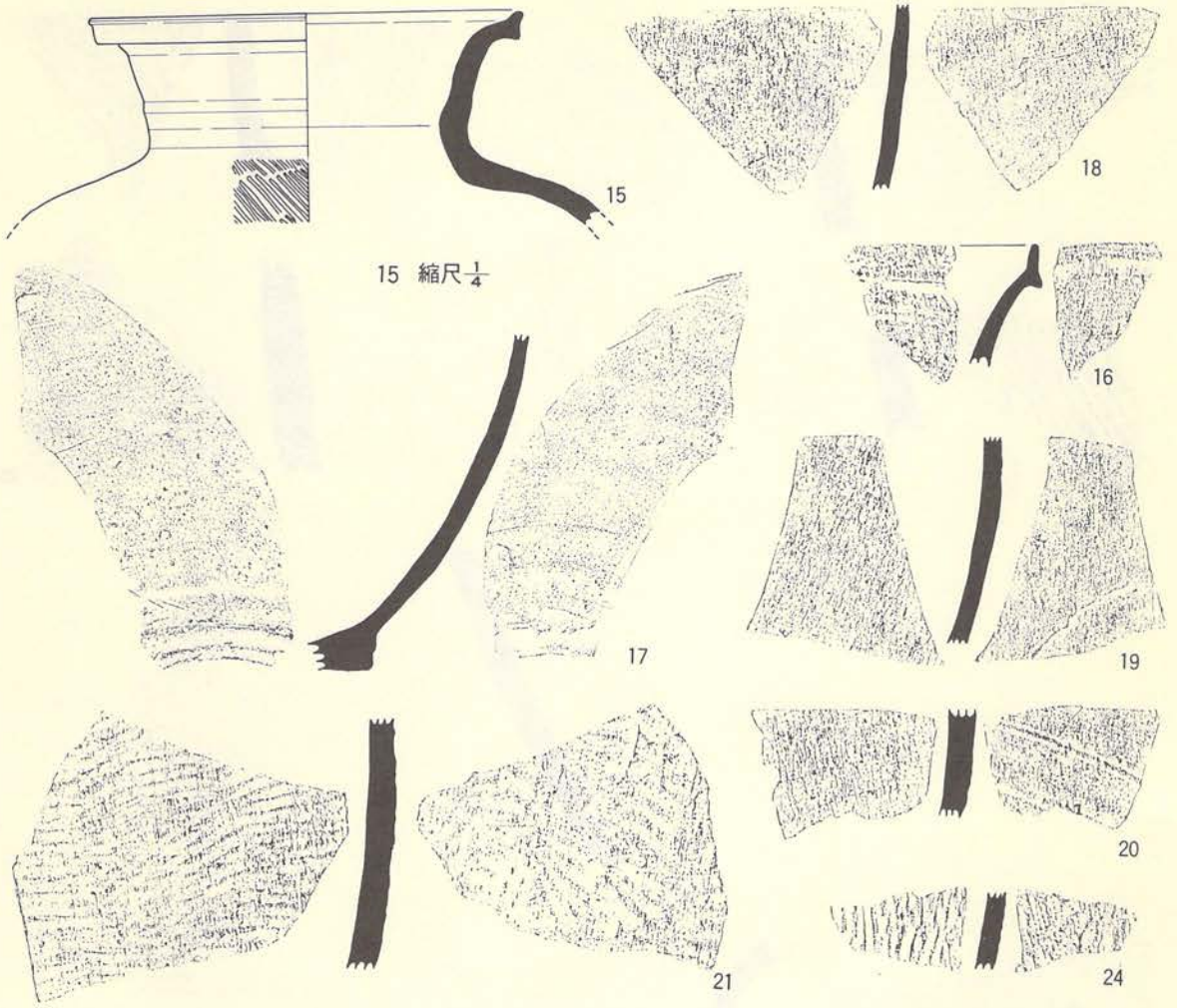
〔遺 物〕 (第234・235図、PL-143・144)

還元炎焼成された須恵器大甕や瓶等の破片と縄文土器の破片が出土している。須恵器の中で15は大甕の口縁部でほぼ全体が残存している。形態は肩部~頸部にかけて大きく窄み、頸部は軽く外反して口縁部に移行し、頸部上端は大きく外折し、口縁部には縁帯が全周している。口唇部は上方に挽きだされ、受口状を呈している。頸部下端から下位の器表には平行叩き目痕をもち、内面には頸部~口唇部にかけての内外面ともに明瞭なロクロ痕を残している。16~20・28は瓶の破片とおもわれるが、17の底部はベタ高台を付し、体部には内外面ともにロクロ痕を残している。16の口縁部破片によれば、外反する頸部に縁帯の全周する口縁部がつき、口唇部は挽きだされ受口状を呈している。21~27・30は同一個体の破片であるが、器表に平行叩き痕、内面に蓮藕文<sup>れんぐうもん</sup>をもつ大甕の体部片である。26・27・29ともに外面に平行叩き痕をもつ大甕の体部破片であるが、26・29では内面にも平行叩き痕をもっている。胎土の特徴等でみると21~23・27は同一個体である可能性が大きい。30~33は縄文土器の破片である。施文されている文様は、器表に縄文を付した後、沈線で区画する文様である。この方法は大木式土器の中にみられる施文法であり、本遺跡での分類では第IV群4類に相当するものである。





第233圖 E-22周溝遺構



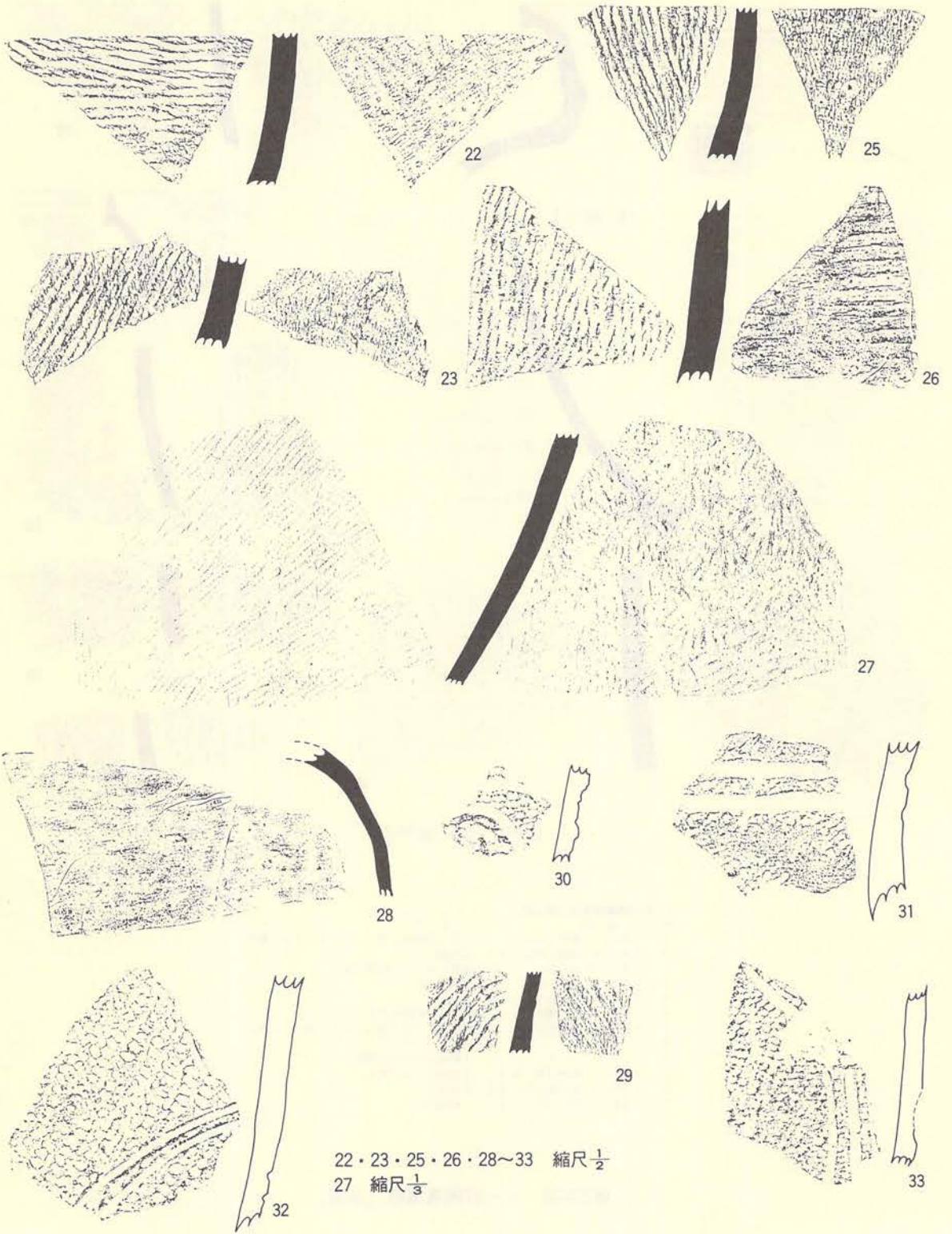
16~21・24 縮尺  $\frac{1}{2}$

E-22周溝遺構埋土土層注記

層位	色調	土性
1	7.5YR $\frac{3}{4}$ 褐色シルト	シラスに黒色土混入。シラスブロック有り。
2	7.5YR $\frac{3}{4}$ 黒褐色砂質シルト	浮石混入。
3	7.5YR $\frac{3}{4}$ 極暗褐色	砂質シルト。小粒浮石混入。
4	7.5YR $\frac{3}{4}$ 黒色シルト	小粒浮石混入。
5	7.5YR $\frac{3}{4}$ 暗褐色シルト	
6	7.5YR $\frac{3}{4}$ ~ $\frac{3}{4}$ 褐色シルト	少量の小粒浮石混入。
7	7.5YR $\frac{3}{4}$ 暗褐色シルト	汚れたシラスと褐色シルトの混入した土。
8		汚れたシラス。
9		十和田 a 火山灰の純層。
10	7.5YR $\frac{3}{4}$ 褐色砂質シルト	十和田 a 火山灰混入。
11	7.5YR $\frac{3}{4}$ 暗褐色砂質シルト	浮石混入。
12	7.5YR $\frac{3}{4}$ 褐色砂質シルト	小粒浮石混入。

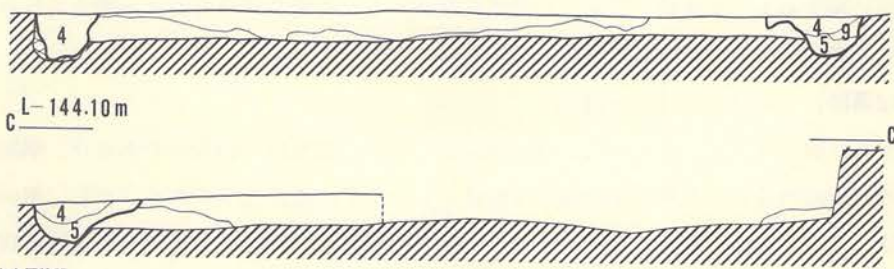
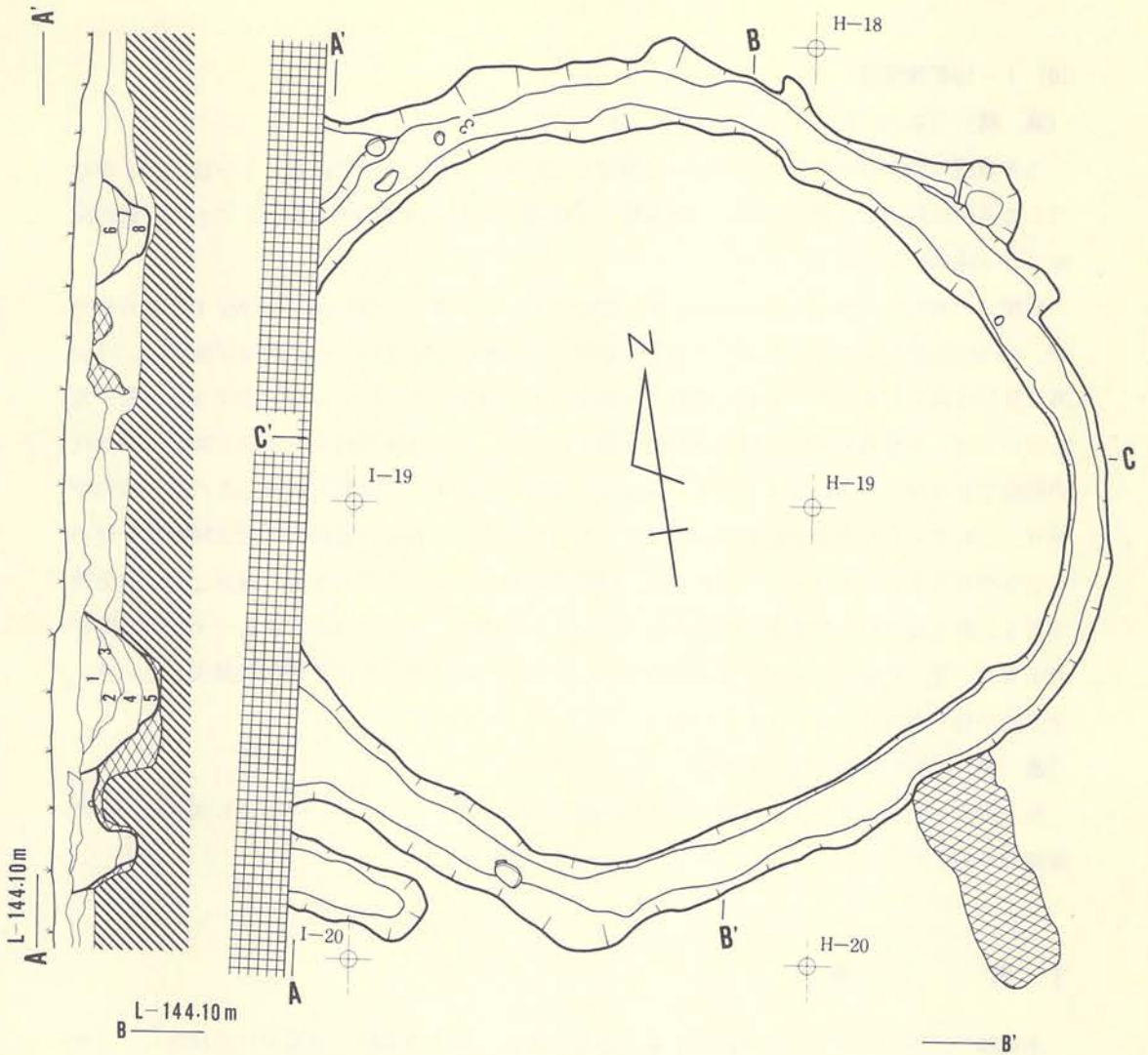
第234図 E-22周溝遺構 (遺物)





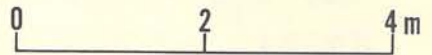
22 · 23 · 25 · 26 · 28 ~ 33 縮尺  $\frac{1}{2}$   
 27 縮尺  $\frac{1}{3}$

第235圖 E-22周溝遺構 (遺物)



I-19周溝遺構埋土層注記

層位	色調	土性
1	7.5YR 3/2 黒褐色シルト	小粒の浮石が混入。
2	7.5YR 3/2 暗褐色シルト	褐色シルトが混入。
3	7.5YR 3/2 暗褐色シルト	
4	7.5YR 1.7/1 黒色シルト	
5	7.5YR 3/2 暗褐色シルト	浮石が多量に混入。
6	7.5YR 3/2 黒褐色シルト	小粒の浮石が多量に混入。
7	7.5YR 3/2 黒色シルト	小粒の浮石が少量混入。
8	7.5YR 3/2 暗褐色シルト	大粒の浮石が多量に混入。
9	7.5YR 3/2 暗褐色砂質シルト	中振浮石層に近似。



第236図 I-19周溝遺構



### 10) I - 19周溝遺構

〔遺 構〕 (第236図、PL-41B)

この遺構は調査範囲の中ではほぼ中央西寄りに位置し、グリッドではH・I-18・19を中心にして西側は路線外に延びている。他遺構との重複ではI-19住居跡と重複しており、新旧関係では本遺構の方が新しい。

規模は、外周径で南-北約9.3 m、東-西約9.6 mで、溝の巾は40cm~80cm位までみられたが、60cm位の部分が多量にも多く、あまり整然とした形状ではない。全体的な平面形は、路線外に延びる部分が未調査であるので断定できないが、検出された部分から推定すると、若干歪んでいるが、不整隅丸方形を呈するものと考えられる。深さは検出面からみると30cm~55cm位の範囲であるが、西側の埋土土層図でみると、現表土の直下から遺構が切り込まれているのが判り、これからみると最深部で80cm位はあったものと考えられる。断面形では上縁が若干開いたU字形を示す部分がほとんどであるが、底面が平坦な所と若干凹凸をもつ部分とでは幾分差がある。埋土は黒色・黒褐色・褐色を呈するシルトで構成されているが、浮石や十和田 a 降下火山灰等の混入程度によって5層に細分され、十和田 a 降下火山灰は小塊状に混入している。全体的に締りがなくフカフカしている。

〔遺 物〕 (第236図、PL-140 E)

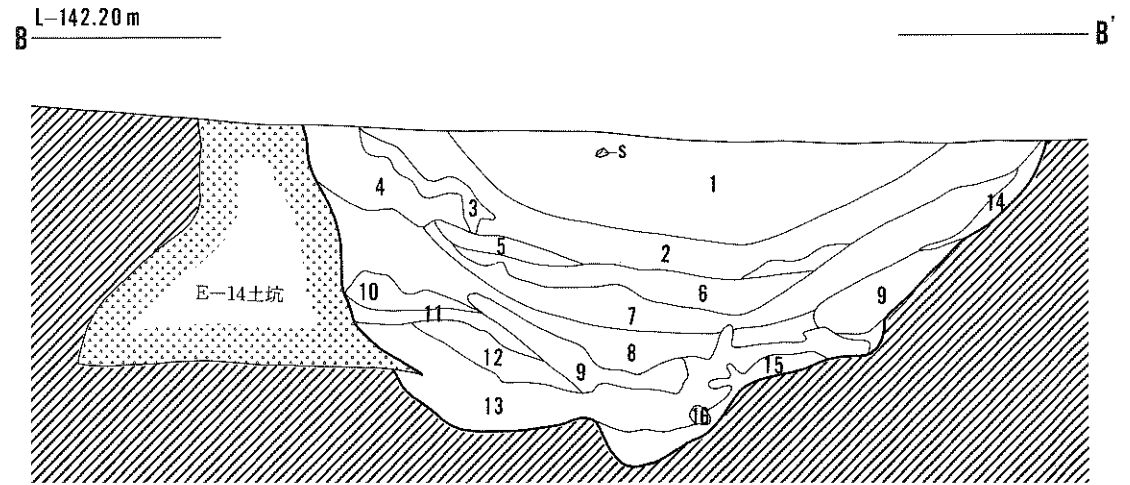
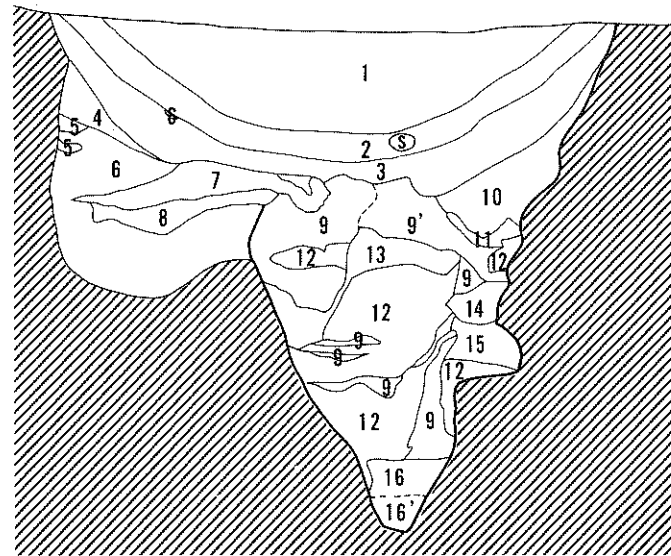
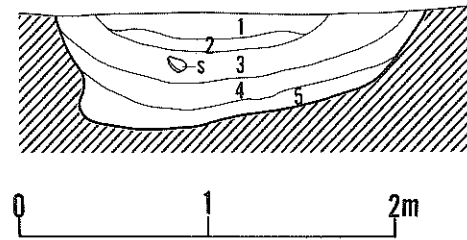
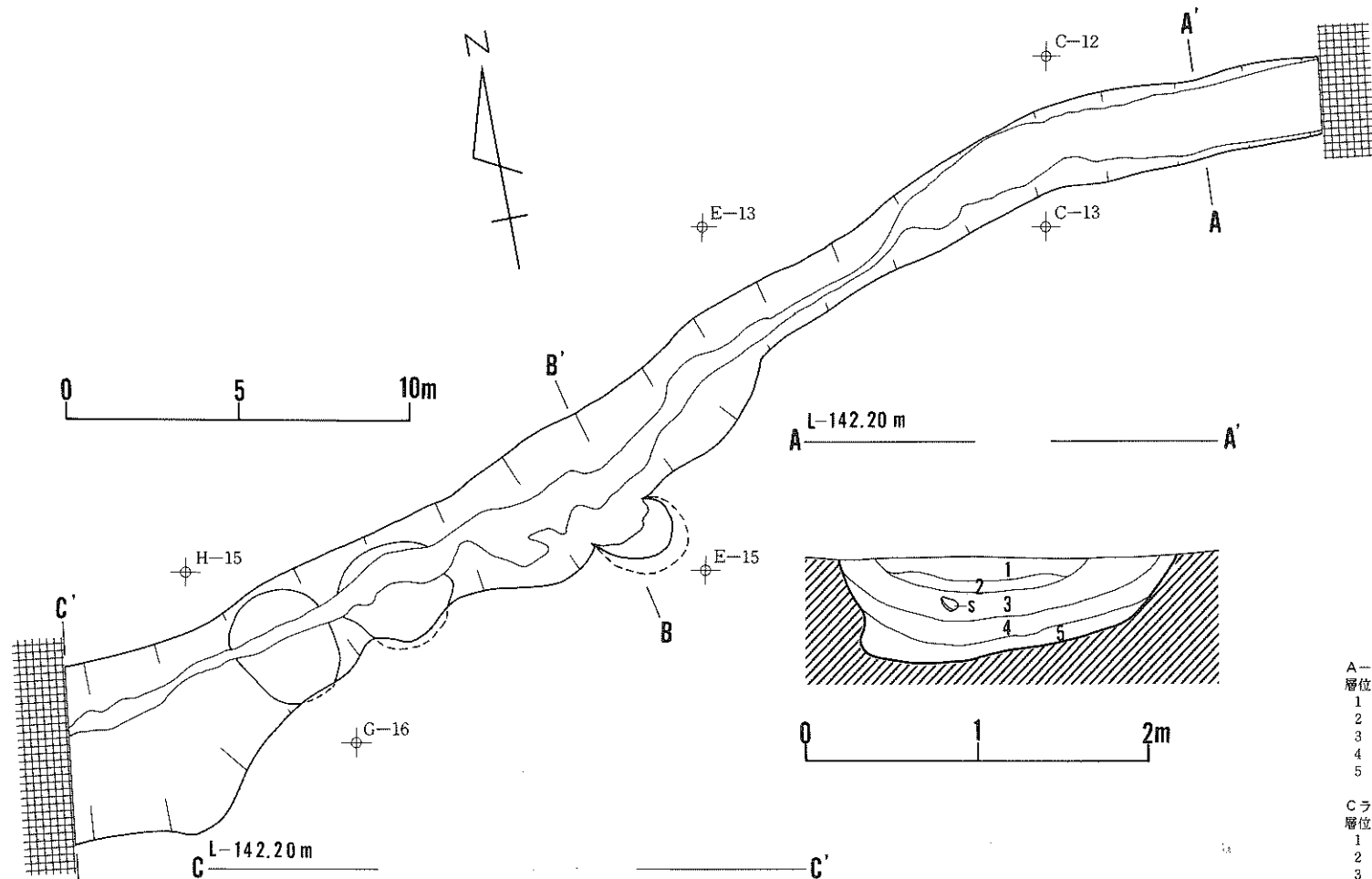
埋土内から先端部を欠失した縄文時代の石錐(757)が出土している。頭部にも入念な両面剝離調整を加えている。

## 3. 溝 跡

本遺跡の調査で検出された溝跡は1条である。古代に属する溝跡と結論づけた理由は、北東端の溝底に接するような状態で出土した酸化炎焼成された土師器環形土器と、埋土内に混入する十和田 a 降下火山灰の存在による。

〔A-12溝跡〕 (第237図、PL-44A)

検出された場所はグリッドA-12~H-16にまたがり、総延長は約40mであるが、溝跡の南西部は段丘崖に到達し、北東部は路線外に延びているので全長は不明である。また、南西部は雨裂崩壊によって大きく崩れており、それによって縄文時代の住居跡や土坑等の遺構を破壊しているが、北東端寄りには原形を残しているため、掘削当初の規模や形状等をある程度推定することができる。原形を残している部分の規模は、上縁巾が約2 m~2.5 mで、北東端の深さは70cm位であるが、南西方向に寄るほど深くなる傾向がみられる。雨裂崩壊はC-13グリッド付近から始まり、南西に向うほどその規模を大きくし、これらの部分の最大巾は4 m強で、もっ



A-12溝Aライン埋土土層注記

- | 層位 | 色調            | 土性                    |
|----|---------------|-----------------------|
| 1  | 7.5YR 5/1 黒色  | シルト。浮石混入。             |
| 2  | 7.5YR 5/2 黒褐色 | 砂質シルト。黄褐色のソフトローム混入。   |
| 3  | 7.5YR 5/1 黒色  | シルト。浮石若干混入。           |
| 4  | 7.5YR 5/1 黒色  | 砂層。シルト・浮石混入。          |
| 5  | 7.5YR 5/2 暗褐色 | 砂質シルト。ソフトローム混入。底面に砂層。 |

Cライン埋土土層注記

- | 層位  | 色調             | 土性                    |
|-----|----------------|-----------------------|
| 1   | 7.5YR 5/1 黒色   | Aラインの1層に同じ。           |
| 2   | 〃              | Aラインの3層に同じ。十和田a火山灰混入。 |
| 3   | 7.5YR 5/2 黒褐色  | シルト。少量の十和田a火山灰混入。     |
| 4   | 7.5YR 5/2 極暗褐色 | シルト。白砂の崩壊土混入。         |
| 5   | 〃              | ソフトローム。               |
| 6   | 7.5YR 5/1 黒色   | シルト。                  |
| 7   | 7.5YR 5/1 黒色   | 黒色土。白砂ブロックを含む。        |
| 8   | 7.5YR 5/2 黒褐色  | 砂質シルト。                |
| 9   | 7.5YR 5/2 極暗褐色 | 〃                     |
| 9'  | 7.5YR 5/2 暗褐色  | 〃                     |
| 10  | 7.5YR 5/2 極暗褐色 | シルト。                  |
| 10  | 〃              | 10層にソフトロームが混合した層。     |
| 12  | 〃              | 白砂。                   |
| 13  | 7.5YR 5/2 橙色   | 白砂の風化による層。            |
| 14  | 〃              | 流水によって沈澱した川砂。         |
| 15  | 〃              | 褐色シルトと汚れた白砂の混合層。      |
| 16  | 〃              | 流水によって沈澱した川砂。         |
| 16' | 〃              | 川砂層。シルトを含む。           |

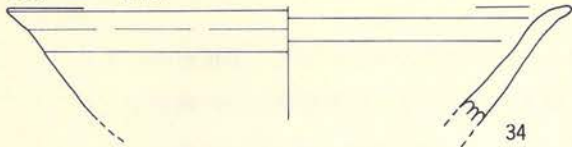
Bライン埋土土層注記

- | 層位 | 色調             | 土性                        |
|----|----------------|---------------------------|
| 1  | 7.5YR 5/1 黒色   | Aラインの1層に同じ。               |
| 2  | 〃              | Aラインの3層に同じ。               |
| 3  | 7.5YR 5/2 極暗褐色 | シルト十和田a火山灰混入。             |
| 4  | 7.5YR 5/2 黒褐色  | 3層に同じ。                    |
| 5  | 7.5YR 5/2 黒褐色  | 砂層。                       |
| 6  | 10 YR 5/1 黒色   | シルト。十和田a火山灰混入。            |
| 7  | 7.5YR 5/2 暗褐色  | 砂質シルト。                    |
| 8  | 7.5YR 5/2 黒褐色  | 浮石質の砂層。                   |
| 9  | 7.5YR 5/1 黒色   | シルト。暗褐色シルト混入。             |
| 10 | 7.5YR 5/2 黒褐色  | 砂層。ゴロタ多量混入。               |
| 11 | 7.5YR 5/1 黒色   | あわ砂の混入層。                  |
| 12 | 〃              | ゴロタを多く含むシルト質の砂層。          |
| 13 | 〃              | 白砂崩壊土に黒色シルト・橙色ソフトロームの混合層。 |
| 14 | 7.5YR 5/2 暗褐色  | シルト。ソフトローム混入。             |
| 15 | 〃              | 崩壊した白砂。                   |
| 16 | 7.5YR 5/1 黒色   | シルト。                      |

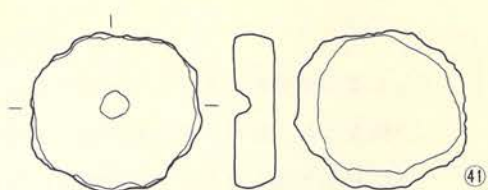
第237図 A-12溝跡



14.9 · — · (3.0)

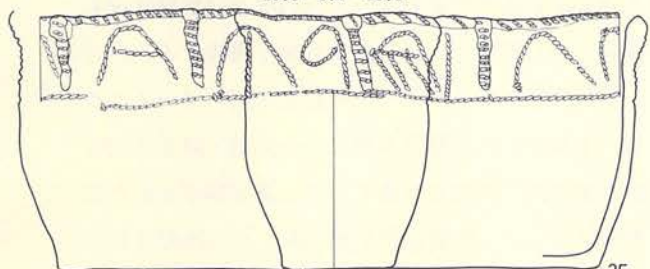


34



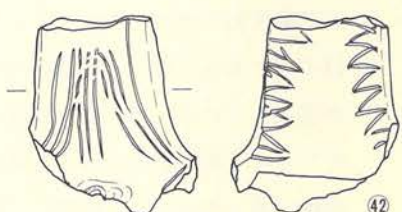
41

10.5 · 5.8 · 13.8



35

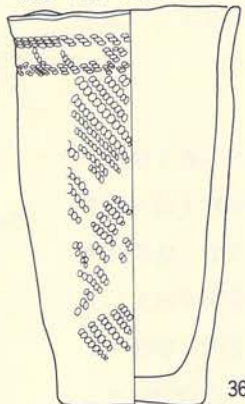
土製円盤



42

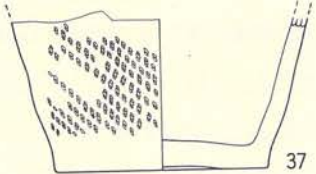
土偶

12.2 · 7.5 · 21.2

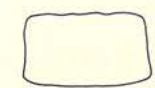


36

· 11.3 · (4.0)



37



10.7 · — · (10.4)



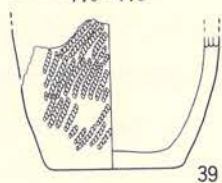
40

· 7.4 · 8.9



38

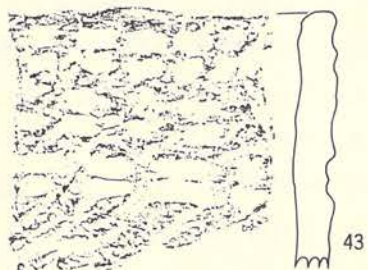
· 7.0 · 7.5



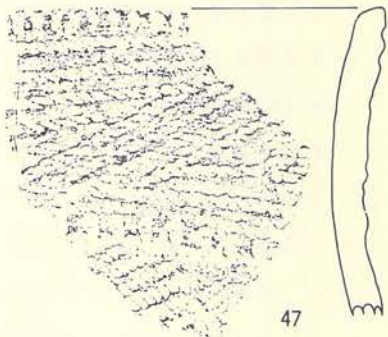
39



45



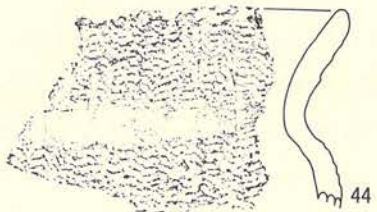
43



47



46



44

35~40 縮尺  $\frac{1}{4}$   
34 · 41~47 縮尺  $\frac{1}{2}$

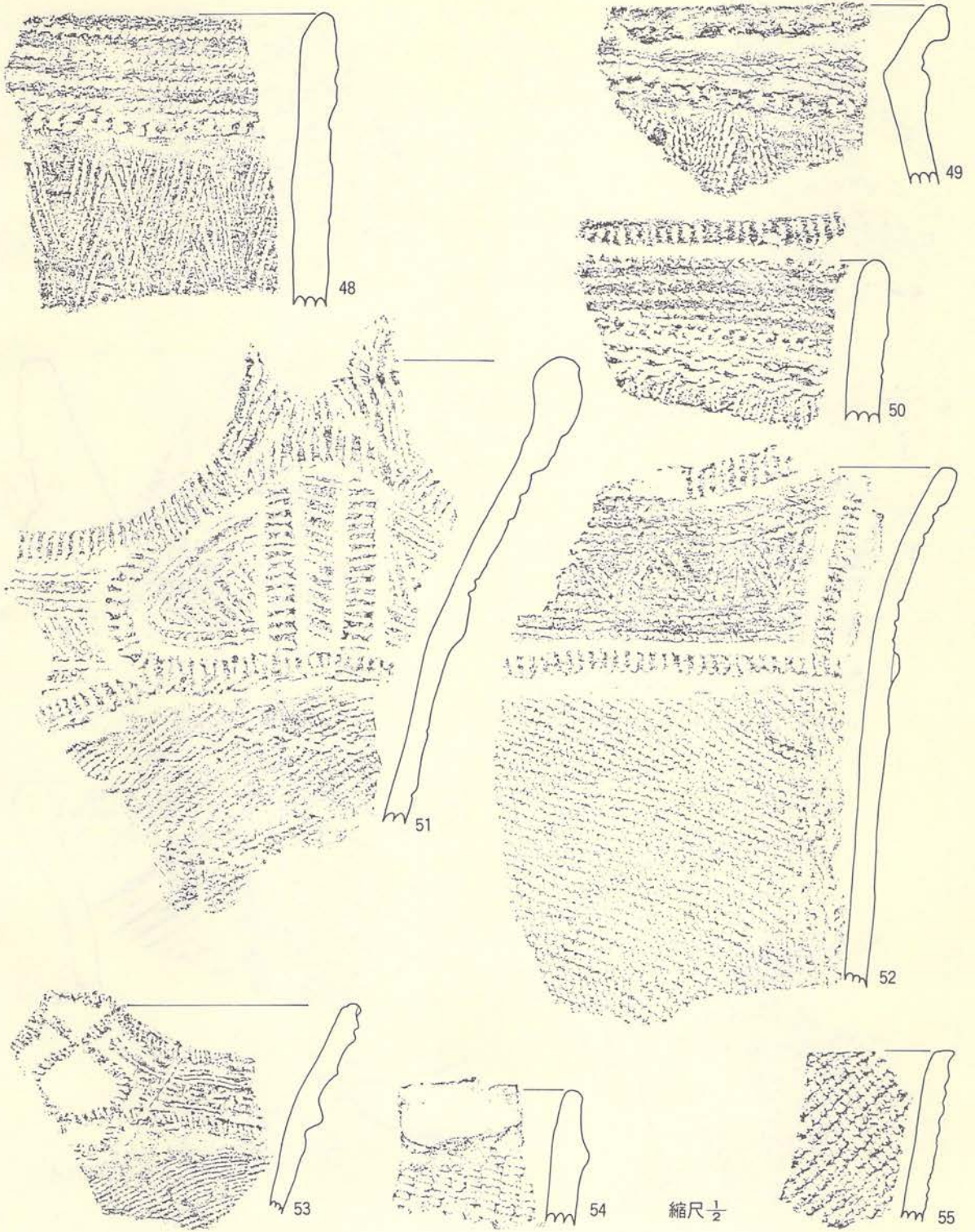
第238図 A-12溝跡 (土器-1)

とも深い部分の深さは2.5 m強である。原形を残している部分の埋土は黒色や黒褐色のシルトで構成され、砂粒や浮石粒の混入程度等で5層に細分されている。雨裂崩壊部分の埋土は、土層図Bの1層～8層までと土層図Cの1層～3層までは、北東端の原形を残す部分の埋土と良く共通し、層相も整然とした自然堆積の状況を示しているが、それより下位の埋土は堆積状況も雑然としている。特に土層図Cはその様子を良く表しており、12層は基盤層を構成する八戸浮石流凝灰岩の崩壊した大塊である。しかし、この崩壊が1度だけなのか数度に亘っているのかは不明である。なお、土層図Bの3層と6層、土層図Cの2層と3層には十和田A降下火山灰が混入している。この様な状況から雨裂崩壊と本溝跡との関連を考えると、溝が掘削されたことによって雨裂崩壊が起った場合と、溝を掘削する以前に雨裂崩壊が起り、その後埋没して窪地であった所に溝を掘削して接続した場合の二説が考えられるが、溝跡の埋土上位が原形を残す部分も残さない部分もほとんど差がないことに疑問を感じるが、溝を掘削することによって、水流が溝底を削り取ることによって雨裂崩壊が誘発されたものと考えられる。

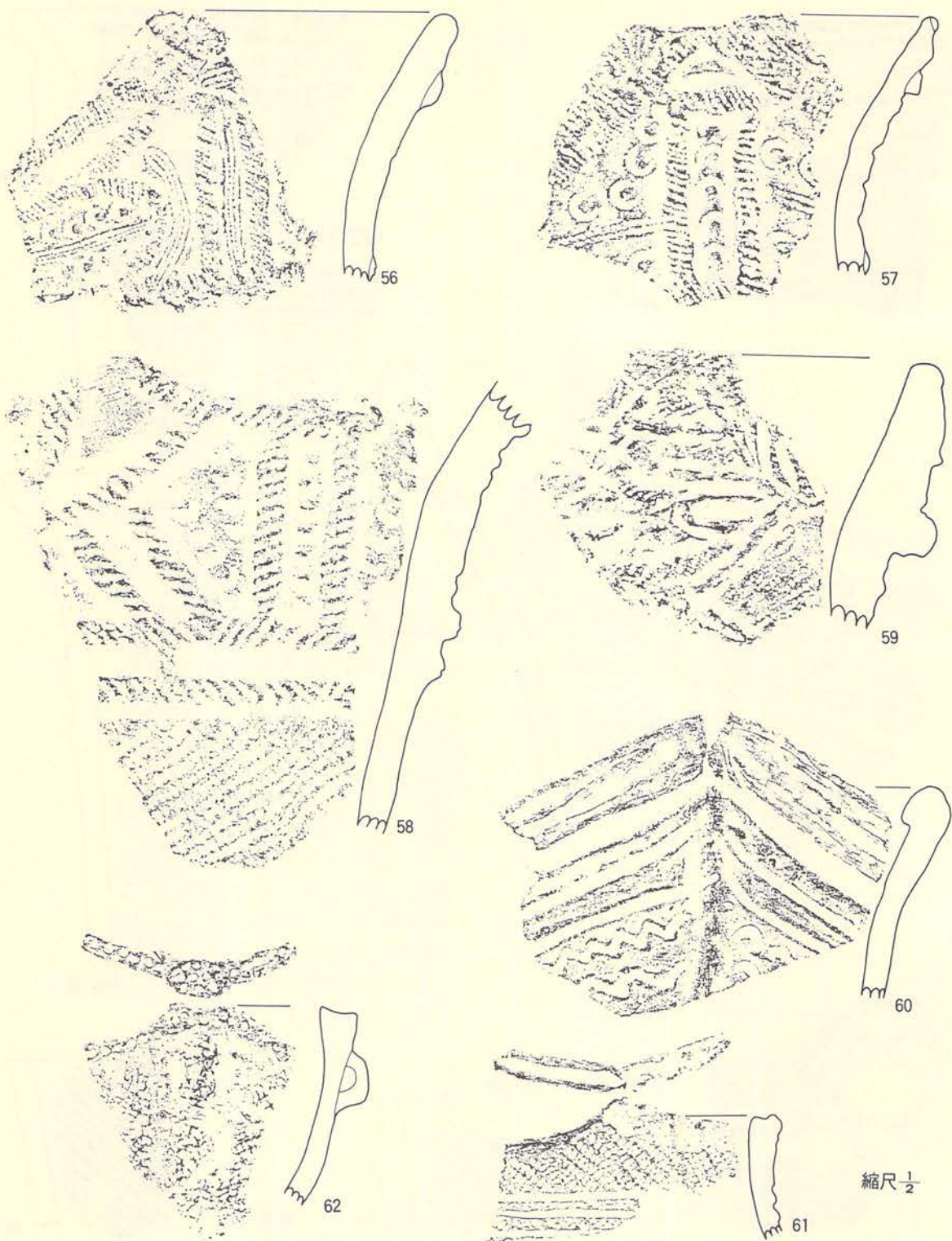
〔遺物〕（第238～246図、PL-140～142・145～147）

遺物の出土状況が溝の原形を残している部分と、雨裂崩壊の部分ではその状況を若干異にしている。原形を残している部分では、酸化炎焼成された赤褐色を呈する土師器环形土器と縄文土器や石器が混在している。雨裂崩壊部分では上層部・下層部とも縄文土器のみで、他の時代の遺物は含まれていない。特に後者の下層部では完形土器や石器を含む大量の遺物が出土している。量的なことから考えると、本溝跡によって破壊されたG-16住居跡の埋土内に包含されていた遺物だけとは考えられず、この付近に遺物包含層的状况を示す部分があったのではないかと考える。出土遺物の大半は土器であるが、その中に67点の石器が含まれている。土器の99%は縄文土器であるが、そのほとんどは破片で、完形土器は2点、実測出来るような大型破片も5点のみである。したがって、ここでは実測可能な土器以外は、破片の中から各時期・各型式のものを選択して拓本図で掲載した。なお、土器以外に土偶1点と有孔土器片円盤が1点出土している。34は東端のほぼ底面に密着して出土した、酸化炎焼成された赤褐色の土師器环形土器である。内外面に二次調整や内面黒色処理のないものである。縄文土器には第II群と第III群そして第IV群のものが含まれている。第II群は43・44の2点だけを掲載したが、出土量も少ない。これらはどちらかというとな北東端寄りの埋土内からの出土が多い。43は原体L R横回転による単節斜行縄文が付された後、口縁部に平行する列点文が付されており、II群4類C種とした土器群に属する。44は器形がII群4類E種に近似しているが、沈線による波状文がないことや地文に組紐回転文を付す等の違いがある。しかし、器形や胎土に類似性が強いことから4類E種に入る土器であろう。第III群に入る土器は、本溝跡出土の土器の主体を占めており、時期的にも各時期に亘っている。分類に従えば1類(36)、2類(45～50)、7類(51～53)、8類(56



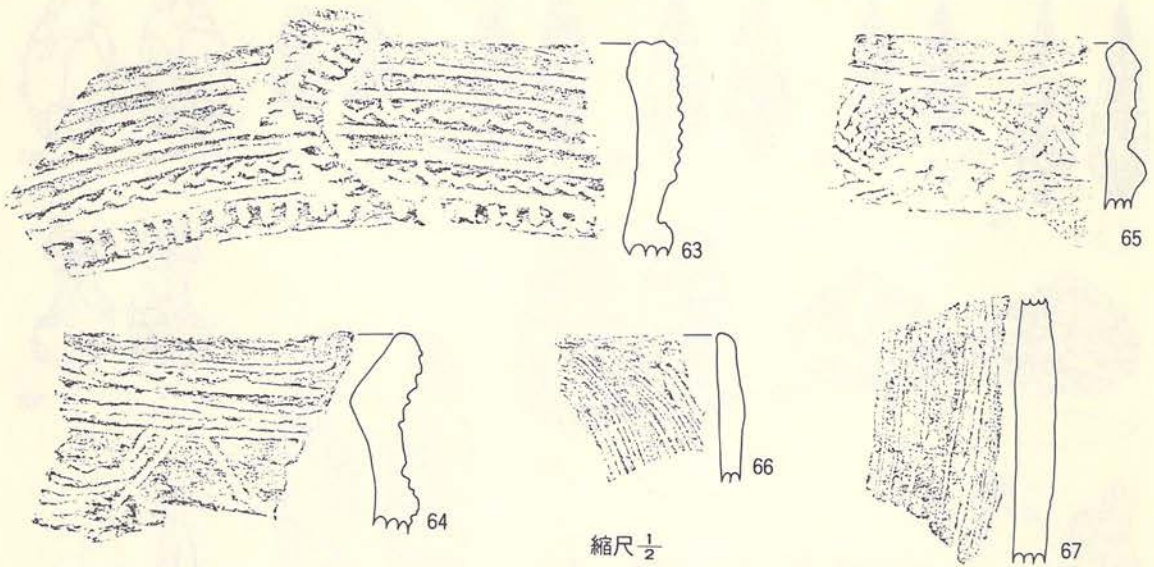


第239図 A-12溝跡 (土器-2)



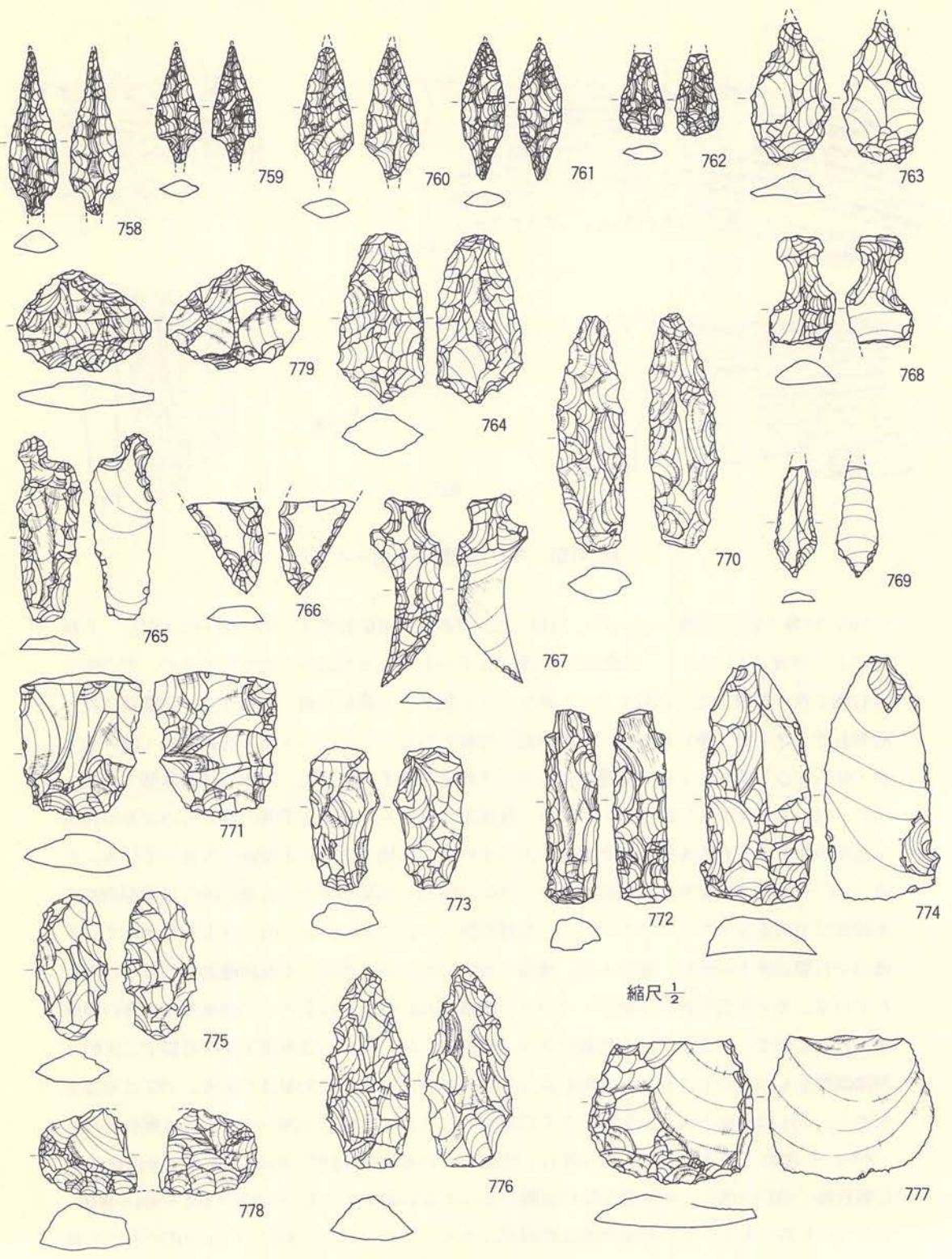
第240図 A-12溝跡 (土器-3)





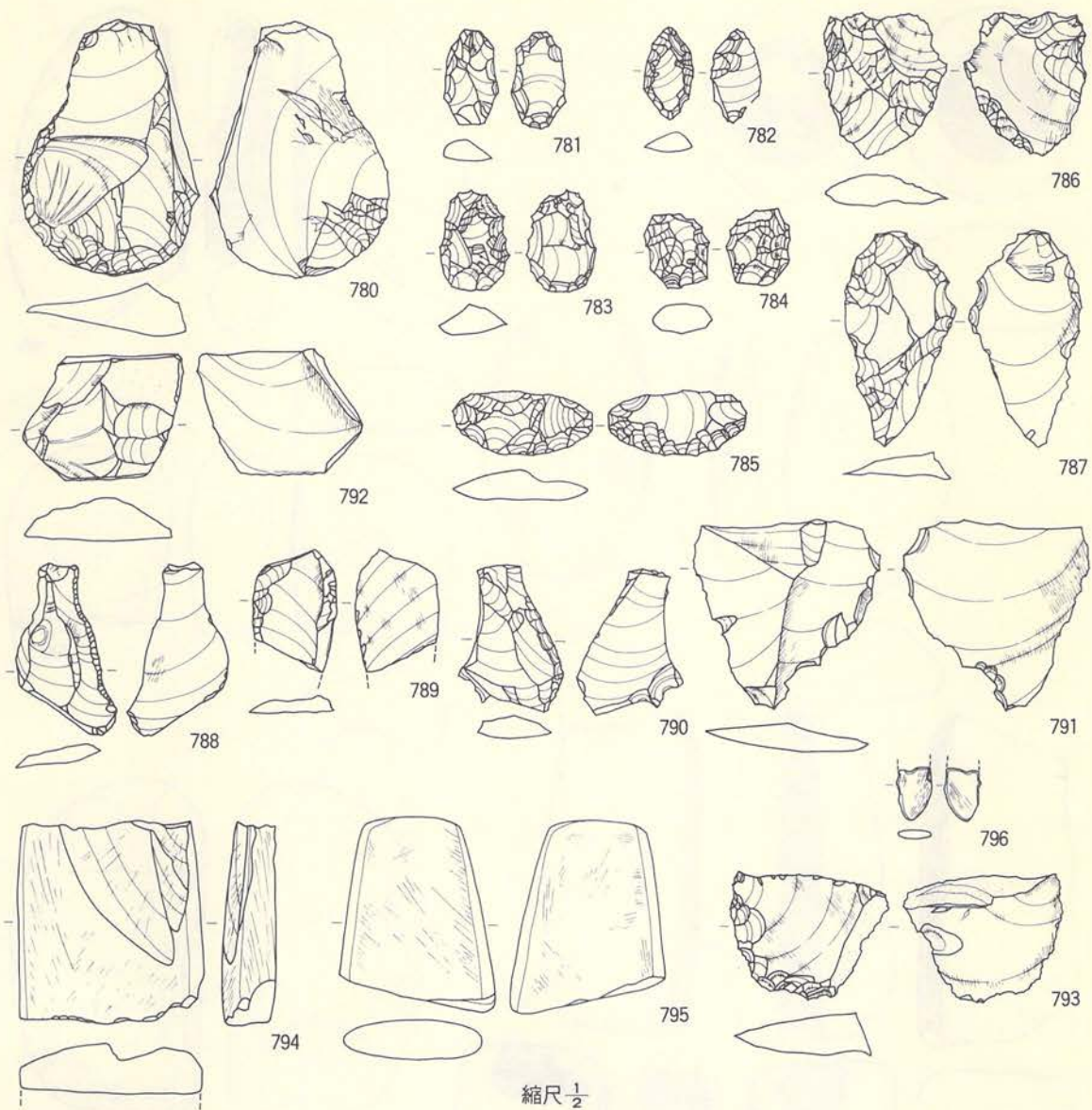
第241図 A-12溝跡 (土器-4)

~58)、10類 (59)、12類 (66・67)、14類 (40) がある。第IV群では1類 (60・63・64)、2類 (65) が含まれている。石器が67点出土していることは前記のとおりであるが、その中には石鏃7点・石槍1点・石匙4点・石錐1点・石筥6点・搔器3点・削器2点・切削器12点・磨製石斧2点・磨(擦)石6点・半円状扁平打製石器8点・凹み石4点・石錘3点・敲き石3点・砥石1点・装飾品1点・器種不明3点がそれぞれ含まれている。石鏃には有茎型 (758~761・764) と無茎型 (762・763) があり、無茎型にはさらに円基と平基に近いものがある。764は基部の作り方が有舌尖頭器的な調整が入っている。石槍 (770) は先端部を欠失している。石匙 (767・768) はいずれも縦形のもので、766・768は欠損品である。石錐 (769) は小型剥片の先端部に刃部を作りだしたものである。所謂石筥 (771~776) には「的」なものも含めている。搔器や打製石斧との区別に難がある。搔器 (777~782) は先端部に片面剥離調整したものを入れている。やや大型の剥片を利用している。削器 (783・784) は主として側縁部に片面の剥離を入れたもので、不定形でやや粗雑である。切削器 (781~793) は所謂不定形石器で二次的な剥離調整をもつものを入れた。磨製石斧 (794・795) はいずれも欠損品である。795は刃部を欠失し、794は頭部と刃部を欠失しさらに縦割れしている。磨石 (797~800) には擦石 (799・800) も含めている。これらには凹石と併用しているもの (797・800) もある。半円状扁平打製石器 (801~809) に周縁部を敲打剥離によって器形調整するもの (803・804・806~808) としないものがある。主たる使用面は直線部にある。凹石 (811~814) には片面のものと同



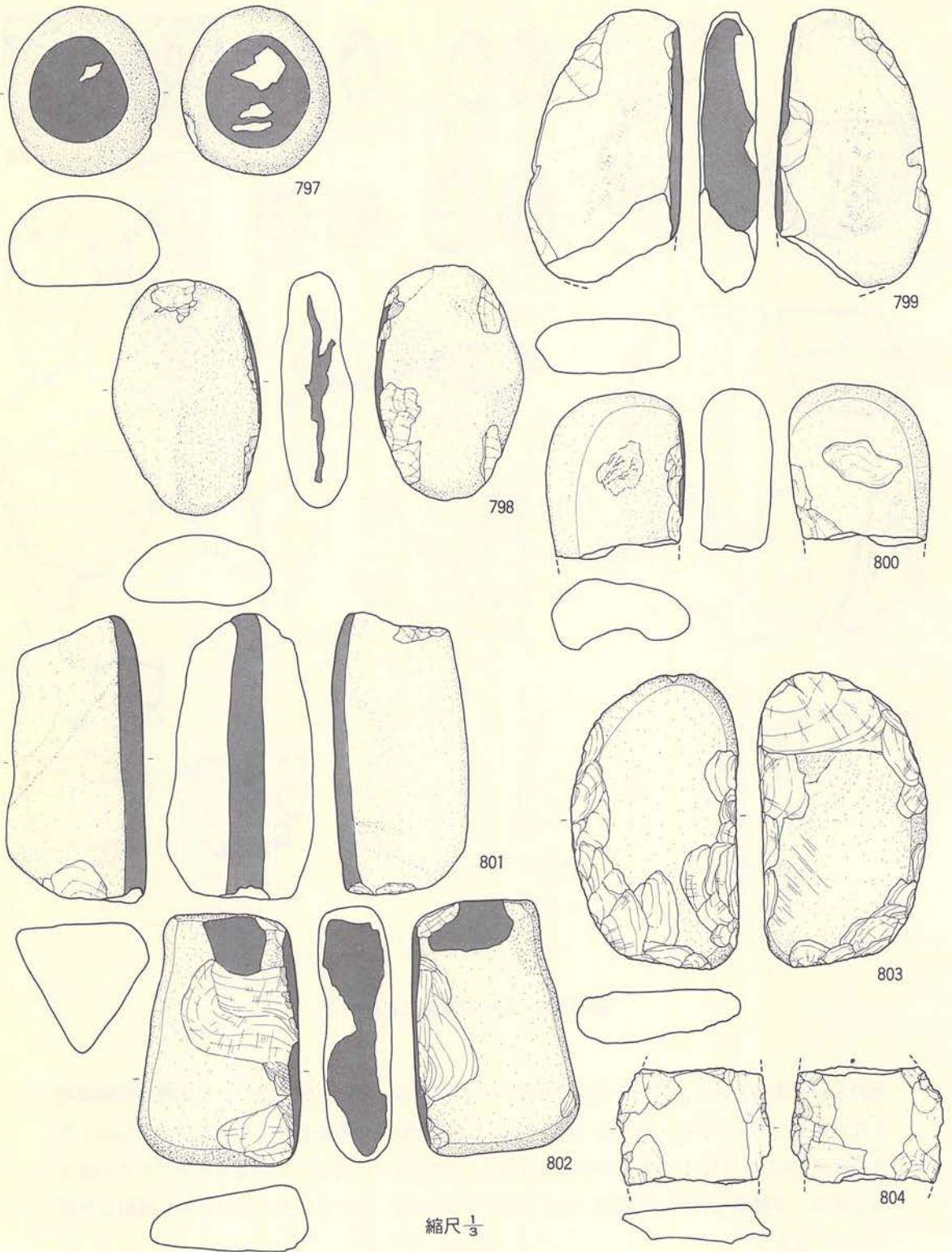
第242図 A-12溝跡 (石器-1)





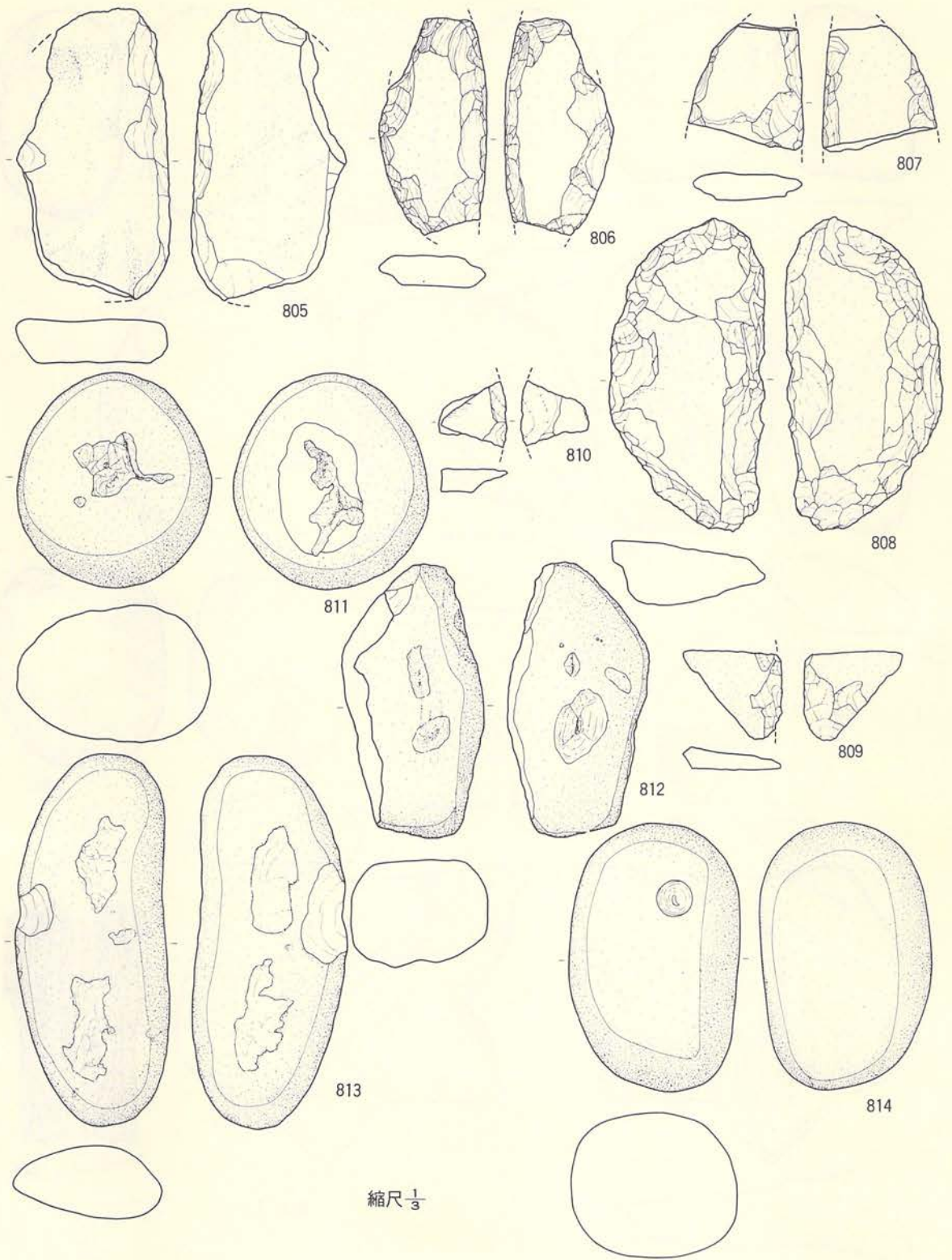
第243図 A-12溝跡 (石器-2)

面のものがあり、さらに磨石や擦石と併用のものもある。石錘 (815~817) は円礫の短軸両端を打ち欠いたものである。敲き石 (818・819) は円礫の一端を敲打具として利用したものである。砥石 (823) は扁平な砂岩の両面を使用し、使用面には面としての使用と条としての使用痕がある。装飾品や器種不明石器 (795・821・822・824) の中には824の圭化木を利用した篋様のものもある。

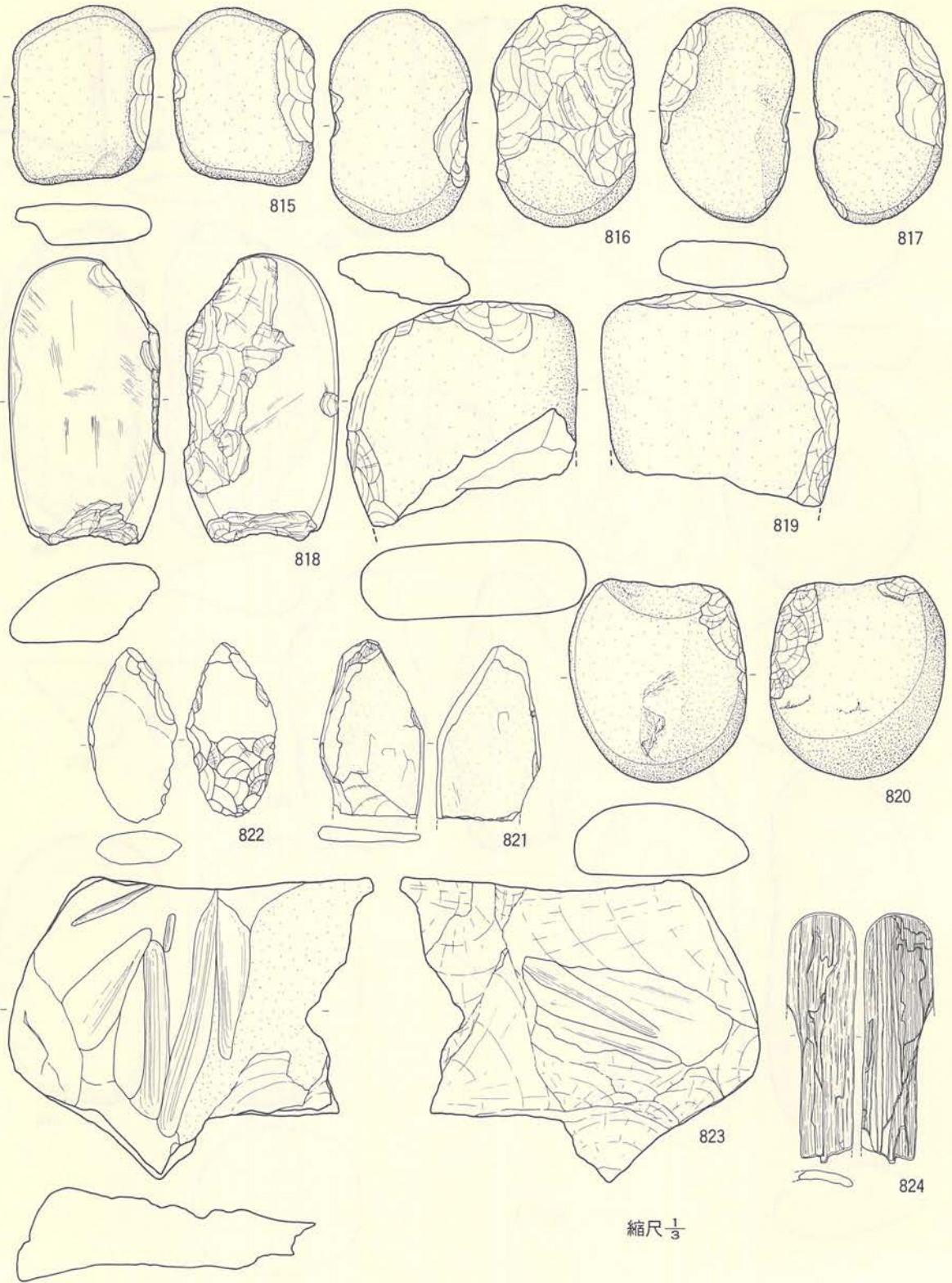


第244図 A-12溝跡 (石器-3)





第245図 A-12溝跡 (石器-4)



第246图 A-12沟迹 (石器-5)



## Ⅶ. 中世の遺構と遺物

本遺跡の調査で明らかに中世に属すると認定される遺構・遺物は、城館跡に伴う堀跡のみである。しかし、検出された遺構の中に縄文時代や古代に属する遺構と考えにくい住居跡が1棟検出されている。したがって、本項ではこの住居跡と堀跡を中心にして記述し、最後に城館跡に若干触れて締めくくりとしたい。なお、遺物は陶磁器の破片と貨幣が出土しているが、量も少ないので簡単に説明を加える。

### 1. 住 居 跡

本遺跡で中世に属する住居跡としたのは、二戸市地内の他遺跡（下村B遺跡、家の上遺跡、長瀬C・D遺跡、沢内B遺跡）で検出されている所謂「方形張り出しをもつ方形の竪穴式住居跡」に近似した形状を示している住居跡である。共伴遺物がまったくないので時代や時期を明示できないが、本遺跡の調査範囲は次に記述する「石切所城」と古書に記録されている城館跡の一部であることや、当地域で検出される古代の奈良・平安時代の住居跡とまったく異質な住居跡であることから、ここでは、一応中世に属する住居跡として報告しておく。

#### 〔D-16住居跡〕（第247図、PL-43）

この住居跡は、表土の層厚が30cm位と薄かった為に粗掘り段階での確認が遅れ、貼床や柱穴が検出されて初めて住居跡であることが明らかとなった。したがって、竪穴式なのか、平地式掘立柱建物であるかは定かでない。ここでは確認された規模とその状況について記す。

検出された貼床の範囲は、長軸（南東-北西）約5.2m・短軸（南西-北東）約4.4mであり、平面形は長方形を示している。なお、この住居跡には南南東壁の東隅寄りに約2m×1.5mが張り出すようにも貼床されている。四周の最大限界は不明であるが、全体規模はこの貼床の範囲と大きな差はないものと考えられる。貼床に使用された土は、黄褐色の粘土質シルト（八戸火山灰に酷似している）で、検出範囲全面で観察されていないが、層厚はもっとも厚い部分で5cm位あり、全体的に良く締まり固い。柱穴は貼床範囲四周に平行して20基と張り出し部に2基、そして床面ほぼ中央に2基の合計24基が検出されている。柱穴の規模は、検出面で径20cm～40cmの範囲であるが、全体的に見ると径30cm位が多く、平面形は円形か楕円形である。深さも個々によって差があり、床面から50cm～145cmの範囲までみられるが、80cm～120cmに

入るものももっとも多い。この様子を断面図で観察すると、 $P_1 \sim P_7$ を結ぶ柱穴列では $P_1 \cdot P_2 \cdot P_4 \cdot P_6$ が深く、 $P_{12} \sim P_{19}$ を結ぶ柱穴列では $P_{12} \cdot P_{15} \cdot P_{17} \cdot P_{18}$ が深くっており、意識的に深い柱穴と浅い柱穴に掘ったことが知られる。柱穴の配置されている距離は $P_1 \sim P_7$ が全長約4.8 m（南東から100cm+60cm+80cm+60cm+60cm+120cm）、 $P_7 \sim P_{12}$ が約3.7 m（北西より50cm+70cm+70cm+70cm+110cm）、 $P_{12} \sim P_{18}$ が約4.8 m（北西から70cm+70cm+120cm+70cm+70 cm+80cm）、 $P_{18} \sim P_1$ が約3.7 m（東から140cm+110cm+120cm）であり、各柱間では若干の異同がみられるものの、全体では約4.8m×3.7mで四隅はほぼ直交している。また、張り出し部を構成する南東部の $P_{19}$ と $P_{20}$ は120 cmの距離があり、 $P_{19}$ は $P_{18}$ より120cm、 $P_{20}$ は $P_{21}$ より150 cmそれぞれ南東に位置している。床面中央に在る $P_{23}$ と $P_{24}$ は本住居跡長軸線上にほぼあり、 $P_{10}$ と $P_{24}$ が190 cm、 $P_{24}$ と $P_{23}$ が100 cmそれぞれ東に位置している。これらの柱穴を埋めている土は5層に大別される。色調では黒褐色・暗褐色・褐色等の差があるが、質的には大差がなくいずれも多少の浮石粒が混入している。なお、柱痕跡部分の埋土は非常に軟くフカフカし、浮石粒の混入も他に比して少ない。柱痕跡から考えられる柱の太さは径15cm~20cmの円柱と推定され、いずれも坑底に達している。

遺物の出土はまったくなかった。

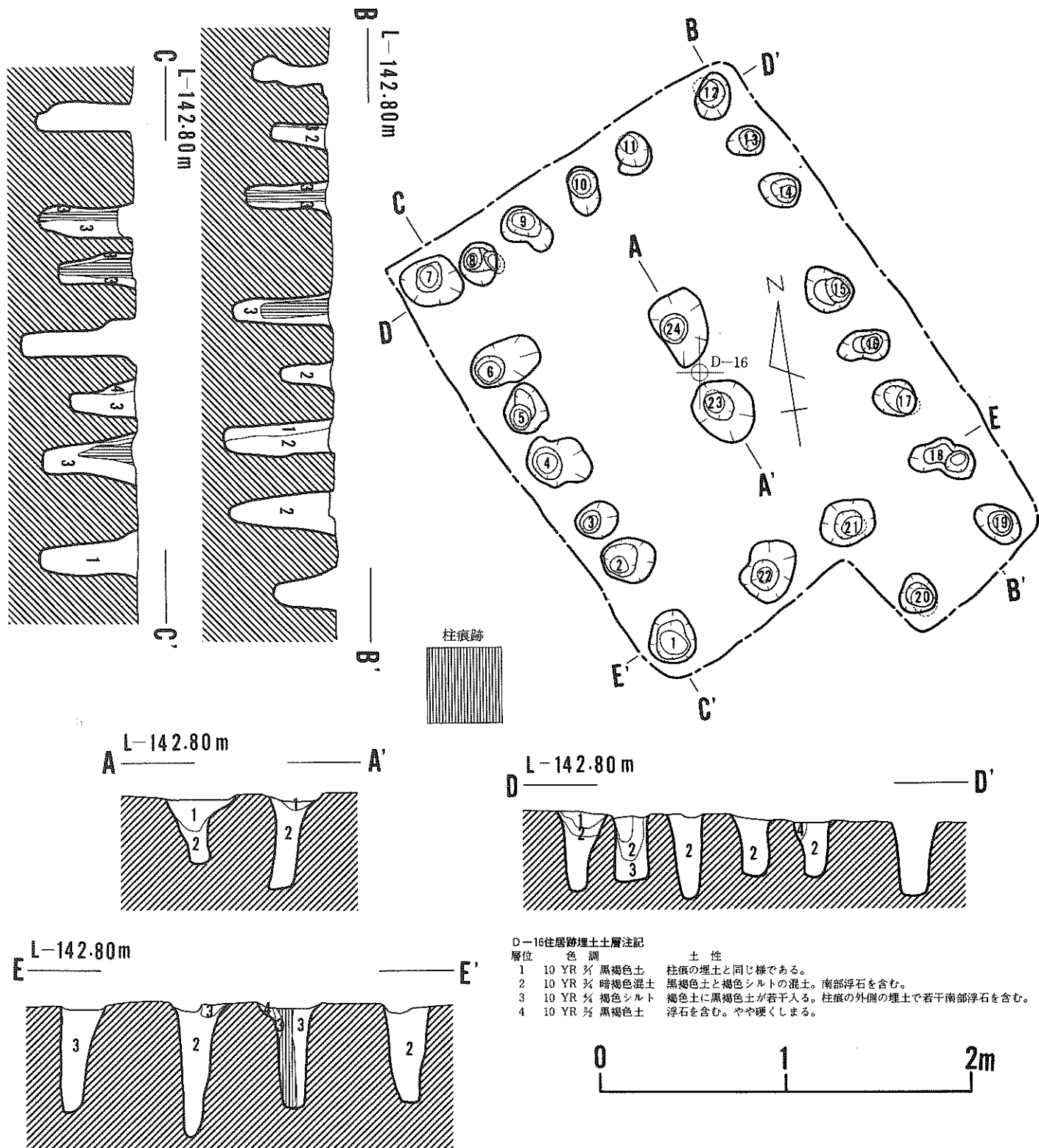
## 2. 堀 跡

(第248図、PL-44B)

本遺跡は古書に記載されている「石切所城」跡の範囲内に位置していることは前記のとおりであり、今度の調査では堀の一部を調査している。城館跡全体には次項で触れることにして、ここでは実際に調査した部分に限定してその状況を報告する。

この堀の現状は、北西段丘崖から35m位南東に延び、この部分で東に方向を転じ約60m先で止っている。その中で今回調査したのは東端部分の約35mである。堀の調査時の現況は、果樹園や畑地として利用され、南側に隣接している現用農道の法面がそのまま堀の法面に連続している。農道の南側法面はそのまま緩斜面となっている。調査地点の堀の上巾は約5 m、下巾は40cm~50cm位、深さは東端で約1.8 m・西端が3.1 mで、断面形が鈍角な逆台形を示すいわゆる「葉研堀」である。堀の北側法面には巾1 m~1.5mの削平段地（犬走り）が周り、この段地の上位約2.2 mに郭面がある。この堀を埋めている土は現地表面から約3 mの層厚があり、土層図で見ると34層までに細分されているが、全体的にみるとA~Dまでの4グループに大別される。Aグループは黒色を基調とする砂質シルトで小礫や火山灰・浮石等を混入した比較的軟かい土性を示し、1層から3層までが該当している。Bグループは色調が褐色系で、土質は川砂とシルトの混合土であり、4層~9層まで相当する。Cグループは細砂とシルトの混合し

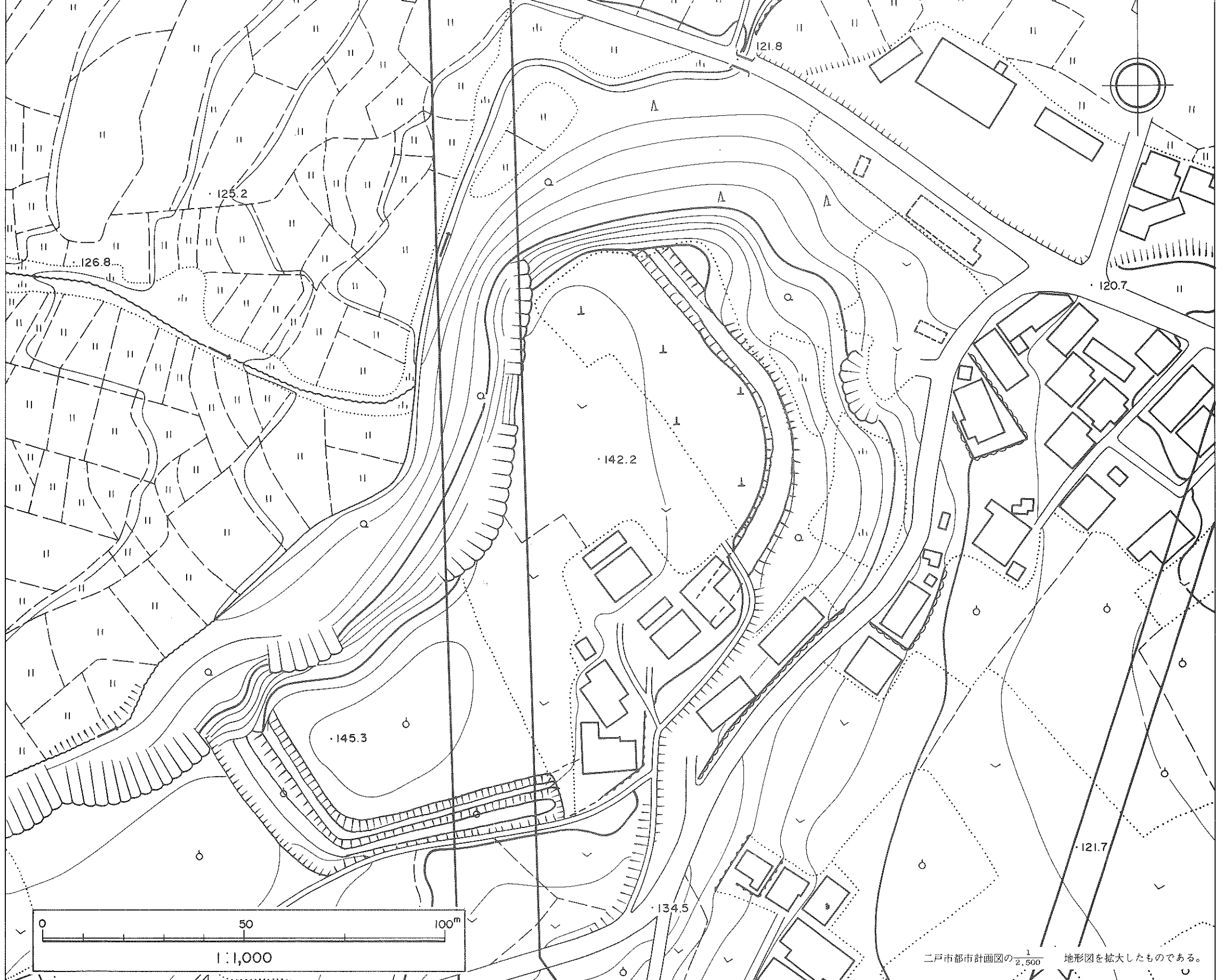




第247図 D-16住居跡







第249図 石切所城現況図

た砂質シルトで、色調はにぶい黄褐色を呈し、11層と14層がこのグループに該当する。Dグループは本台地（福岡段丘）の基盤を構成する八戸浮石流凝灰岩の崩壊土とそれ以外の土との互層を成す土層である。浮石流凝灰岩の色調は白色～灰白色であるが、その他の土層は黒色や褐色等種々雑多である。16層から下位がこの状況を示している。どの土層の場合も粘性はほとんどなく、下位の土層ほど強く締まっている。堆積状況を観察すると下位の土層ほど北方すなわち郭内から流入したことを表す堆積状況を示しており、いずれも自然的営力によって流入したものと考えられる。なお、下位に互層として堆積している浮石流凝灰岩はこの地形（福岡段丘）の基盤を構成する八戸浮石流凝灰岩が、この堀の法面に露出しているために、雨水等で崩壊して堆積したものである。また、この堀の底面は東方に寄るほどレベルが高くなっているために、底面に西方に向かって流れた雨裂溝が1条在り、深い所で20cm～30cm位みられる。

### 3. 石切所城について

（第249図）

本遺跡は石切所城跡の範囲内に位置することは前述のとおりであることから、この石切所城跡の概況について紹介しておく。

現地調査中に踏査した結果によれば、本城館跡に関連する施設や遺構は、今回調査した堀とそれに続く帯郭状の削平段地、そしてそれらに区画された郭だけである。一般的な分類に従えば単郭型式の城館跡である（築部善次郎氏はその著の中で、堀が2条あり複郭型式であるとしているが確認できなかった）。まず、郭の規模であるが、総面積は約6,800㎡（郭面のみ）で形状は南西－北東方向に長軸（約146m）、短軸は約50m）をもち、若干弯曲した不整隅丸長方形形状を呈している。南西端を限る堀は上巾約18mで、調査区域の底面がそのまま続くとすれば深さは5m強となるものと推定される。調査範囲で検出された犬走り状の削平段地は、おそらく、そのまま続くものと思うが現状では明確でない。堀の東端部分と東側の帯郭状の削平段地の取り付き方は、民家が建っているので判然としない。堀の現在の東端が掘削当初の東端と一致するのか現状から把握するのは困難であるが、現在の地形からみると、堀の東端部分の地形が若干張り出しており、このような地形は北端部分にもみられ、北端部では張り出した部分を堀で切っていることからみれば、東端部分の堀ももう少し東方まで延びて張り出した部分を切っていると判断した方が妥当と考えられる。調査の際にも現状のほぼ東端に位置する部分を掘り下げているが、まだ東に延びている様子が確認されている。しかし、底面レベルは東方に向かうほど高くなっているのは事実であり、調査範囲の37mの区間で約70cmの比高がある。東側斜面には郭面より約2.5m下位に先の堀に関連するとおもわれる帯郭状の削平段地が周っている。この段地は巾約5m位で、北端部分は堀になっている。削平段地から下位はそのまま米沢段丘



面に続く斜面であるが、傾斜度はそれほど強いものではない。北側から北西側の斜面部には人工的施設はみられず、自然状態の急斜面である。郭内の標高は南西で約145m・北東で約139mを示し、北方に向って軽い傾斜を示している。郭を構成する施設といえるのは、先の住居跡1棟のみで、他は不明である。調査範囲の問題もあるが、掘立柱建物跡の存在を示すような柱穴状の小土坑が検出されていないだけでなく、直接関連するような遺物はまったく出土していない。

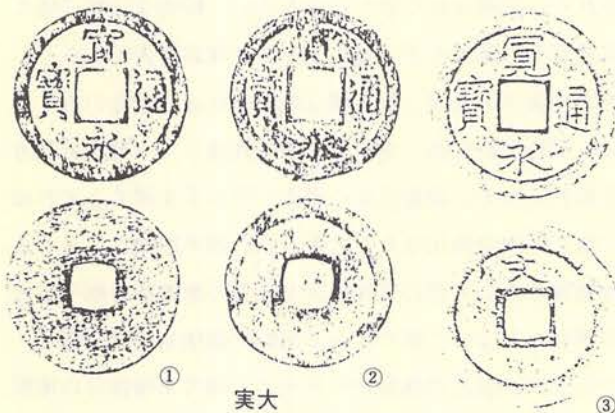
このようなことから考えると、あまり長期に亘って使用された城館跡ではないように考えられる。

## 2. 遺 物

### (1) 貨 幣 (第250図、PL-147B)

調査によって3枚の銅銭が出土しているが、種類は3枚ともに江戸時代に鑄造された所謂「寛永通寶」銭である。その中で①は元文3年(1738)に秋田藩で作った銭といわれているものであるし、②については宝永5年(1708)に江戸亀戸村で鑄造されたものと近似している。③は俗に「文銭」とも呼称されるもので寛文8年(1668)に江戸亀戸村で作られた銭である。

以上の銭はいずれも江戸時代に使用された銭であることは前述のとおりであり、これからみる限りにおいては、城館跡とは直接関連しないものであろう。



第250図 貨幣拓影図

時代的にみた場合には、中世期の生産品とは考えられない。おそらく、江戸期かそれ以降の所産と考えられる。

### (2) 陶磁器 (PL-147C)

陶磁器の破片が2個出土している。①は染体磁器は器形は袋物があることは事実であるが明確でない。釉には若干濁りがあり、染付呉須の色調にも若干灰緑色がかった濁りがある。②は陶器で、胎土は緻密で良く締り、茶色味の強い色調を示す。器形は甕であろう。器表に茶色の釉が施されている。

## VIII. ま と め

本遺跡で検出された遺構や遺物には縄文時代・古代・中世の各時代に属するものがあるので、本項では記述の都合上、各時代別に項を分けて記述していくことにする。なお、前項では遺構内から出土した遺物はその遺構の部分で記述したが、本項では遺構と遺物を分けて記述する。

### 1. 縄文時代

#### (1) 遺 構

本遺跡の調査で検出された遺構は、住居跡10棟・土坑78基・集石群1ヶ所・遺物包含層2ヶ所であるが、ここでは住居跡と土坑について若干のまとめをしておきたい。集石群については前項で詳しく触れたのでここでは触れないことにする。遺物包含層については、出土した土器の分類とその属性についてだけを、本遺跡全体から出土したもの全てを含めて、次項の遺物の中で詳述する。

また、本遺跡はグリッド東西軸27～39までの約60m間に浅い谷が入っているため、遺構が検出されていない。したがって、本遺跡は遺構の存在しない区間を狭んで、南の部分と北の部分に分かれて遺構が分布していることから、ここでは便宜的に北側を「Aブロック」、南側を「Bブロック」と呼称することにした。

#### 1) 住居跡

当遺跡で検出された縄文時代に属する住居跡が10棟検出されていることは既に記したとおりであるが、これらの住居跡全てが同じような特徴を具備しているのではない。たとえば、時期・規模・形状等に相違がみられることから、これらの点について考え、本遺跡の集落立地とその構成等を考えてみたい。なお、遺構の状況は第4表に示しておいた。

#### [時 期]

検出された住居跡を、出土した土器や他遺構との重複関係から所属時期を検討すると、つぎのようである。

- |                 |  |
|-----------------|--|
| ①前期前葉（円筒下層 a 式） | H-41住居跡                                    |
| ②前期末葉（円筒下層 d 式） | I-19住居跡                                    |
| ③中期初葉（円筒上層 a 式） | D-23住居跡・E-23住居跡・G-16住居跡<br>G-46住居跡・I-22住居跡 |



第4表 本遺跡で検出された住居跡

	遺構名	規 模 長軸 × 短軸	形 状	柱 穴	壁 溝	炉 跡	時 期	出土遺物	備 考
1	D-23住	9.30m × 8.10m	隅丸長方形	6 本	有	不 明	円筒上層式 a	土器・石器	
2	D-46住	3 m × 1.3m 残存	円 形 ?	な し	無	不 明	不 明	な し	削平
3	E-22住	5.40m × 5.05m	楕 円 形	1 本	無	な し	円筒上層式 c	土器・石器	
4	E-23住	5.10m × 不 明	円 形 ?	不 明	無	不 明	前期末～ 中 期 初	な し	D-23住より古い
5	G-16住	11m + a × 6.60m + a	長楕円形か 隅丸長方形	183本	有	3 (土器埋設炉)	円筒上層式 a	土器・石器	重複がはげしい
	1号	10m + a × 6 m	長楕円形	8本?	有				
	2号	10m + a × 6.50m	長楕円形	8本?	無				
	3号	11m + a × 4.5m + a	長楕円形	8本～ 10 本	有				
6	G-46住	4.75m × 4.85m	不 明	な し	無	不 明	前期末～ 中 期 初	な し	削平がはげしい
7	H-41住	4.10m × 3.80m	楕 円 形	な し	無	な し	前期初頭	土器・石器	
8	H-42住	3.10m × 3.0m	円 形	不 明	無	な し	中 期	土 器	
9	I-19住	12m + a × 7.50m + a	楕 円 形 か 長楕円形	109本	有	不 明	円筒下層式 b	土器・石器	埋土内に遺物包含層がある この住居跡は縮 小されている
	1号	12m + a × 7.50m + a	長楕円形	10本?	無	不 明			
	2号	1号跡より小型	〃	10本?	無	〃			
	3号	2号跡より小型	長楕円形	8本?	有	〃			
	4号	3号跡より小型	楕 円 形	6本?	有	〃			
	5号	4号跡より小型	楕 円 形	4本?	有	〃			
	6号	5号跡より小型	楕 円 形	不 明	不明	〃			
10	I-22住	13.80m × 5.20m + a	長楕円形	40 本	一部に 有 り	3 (地床炉)	前期末～ 中 期 初	土器・石器	南東部に張り出しがある
	1号	12m + a × 2.5m + a	長楕円形 隅丸長方形	12本?					
	2号	1号とほぼ同じ?	〃	8本?					
	3号	〃	〃	8本?					

- ④中期中葉（同筒上層c式） E-22住居跡
- ⑤中期後半（特定できない） H-42住居跡
- ⑥不 明（遺物が出土せず） D-46住居跡

以上のような状況からみると、本遺跡では前期初葉から中期後半までに属する住居跡が検出されていることになり、その中でも前期末葉から中期前葉にかけての住居跡が7棟もあり、この時期の住居跡が主体を成していることが判る。しかし、調査範囲がバイパス路線内に限定されていることや、出土した土器からみれば、北端部包含層を形成した人達が残した遺構が、今回の調査では全く検出されていないことから、調査範囲外に集落の中心が存在する可能性を考慮する必要があるであろう。

Aブロックで検出された住居跡は7棟で、そのいずれもが前期末葉～中期中葉に属している。特に、このブロックにある住居跡は、北東方向に開口部をもつ馬蹄形状の位置関係を示している。北からG-16→I-19→I-22→G-24→E-22・E-23→D-23の各住居跡という配列状態を示し、それぞれの所属時期からみると、この中でG-16・I-22・G-46・D-23の各住居跡は同時存在の可能性を示すものであろう。もし、同時存在でないにしても、非常に近接した時間帯の中に位置づけられるものと考えられる。I-19住居跡はこれらの集落期より一時期古い段階の集落期に伴う住居跡であろうし、E-23住居跡はD-23住居跡に削平されていることからみると、I-19住居跡と同時期の可能性が大きい。残るE-22住居跡はD-23住居跡より二時期新しい土器を出土していることからみると、D-23住居跡等の集落より新しい時期の集落を構成した住居跡といえるだろう。このようにみえてくると、Aブロックで検出された住居跡は前期1期、中期2期の3期にわたる住居跡が含まれていることになる。Aブロック全体（調査範囲外も含めて）の地表面での遺物分布状況をみると、北東に寄るほど前期末葉～中期の遺物の分布が稀薄となり、本遺跡でI群土器・II群土器（後述）とした早期～前期初葉の遺物が多くなる。逆に南西部分は前期末葉は少ないが中期の遺物は多量に分布している。この様子はI-22住居跡から70m位南西まで続いている。このような地表面での分布状況と検出された遺構の位置関係とは良く一致している。このことからAブロックの集落を考えると、調査で検出された住居跡は集落の東端部に位置している住居跡である可能性が強いものと考えられるし、今回の調査範囲では検出されなかったI群・II群の各土器を使用した人々の集落は、調査範囲の東側に埋存している可能性が強いことを示しているであろう。Bブロックは段丘崖の斜面部分と段丘面が含まれているが、この部分では3棟の住居跡が検出されている。これらの所属時期は、H-41住居跡が前期初葉、H-42住居跡は時期の特定はできないが中期、D-46住居跡は不明という構成になる。この付近全体から出土した土器と、南西側の調査範囲外の地表面に分布する遺物を総合して考えると、Aブロックで主体を占める前期末葉～中期前葉に



属する土器が非常に少なく、逆にAブロックで出土しなかったIV群5類や6類（中期後半の大木系土器）が出土している。これは時期を特定できないとしたH-42住居跡が中期後半に属する可能性を表している。特にこの傾向は土坑内出土の土器にみられる（土坑の項で詳述）。また、土坑から晩期初葉の土器が出土する等、Aブロックの集落とは異なる様相を示している。このブロックで検出された住居跡に関連する集落の主体は、調査範囲の南西～西側に埋存しているものと考えられる。

以上のようなAブロックとBブロックの様相を総合して考えると、Aブロックの集落とBブロックの集落は異時期に形成されたと考えることができ、両者間の直接的な関連はないであろう。しかし、H-41住居跡より出土した土器とほぼ同じ土器がAブロックの北端部包含層からも出土しており、さらに、本報告では土坑としたB-15・C-16の各土坑が住居跡の可能性を含んでいるので、前期初葉には浅い谷を狭んで両方に集落を営んでいたものであろう。

#### 〔形状・規模〕

本遺跡で検出された住居跡の平面形には次のような変化がある。

- ①ほぼ円形                   D-46住居跡、E-22住居跡、E-23住居跡  
                                  G-24住居跡、H-41住居跡、H-42住居跡
- ②楕円形                    D-23住居跡
- ③隅丸長方形～長楕円形   G-16住居跡、I-19住居跡、I-22住居跡

規模も加味すると、①のほぼ円形がもっとも多く、規模は長軸で3m～5.5mの範囲内である。②の楕円形は1棟のみであるが、本来は①の円形に包括される形かも知れない。しかし、規模の点では、長軸が9.1mと前者よりも3.5m強も大きい。③の隅丸長方形～長楕円形は3棟であるが、この3棟はいずれも建て替えによると考えられる他の住居跡と重複し、その中で形が変化している。規模はいずれも長軸が10m以上と、①に比較すると格段の差がある。

以上のことから要約すると、形状は円形～楕円形と隅丸長方形～長楕円形に2大別され、規模もまた、長軸が5.5m未満と9m以上に2大別される。

ここで特に問題となってくるのは最大径が9mを超える規模をもつ住居跡の存在である。所謂「大型住居跡」の範疇に入る住居跡と理解することができるのであるが、一言に大型住居跡といっても「大型住居跡」の概念規定と定義づけが必要であり、現段階ではこのような手続きが完全に終了したとはいえない状況にあるといえるだろう。にもかかわらず、「大型住居跡」という用語だけが定着してきつつあるのが現状であろう。「おおがた」といった場合にtype(型)としての「大型」なのか、form(形)としての「大形」なのかといった基本的な問題がある。「大形」といった場合には小形の住居跡が具備している条件をそのまま備えていればいいのであ

第5表 岩手県内の大型住居跡の検出された遺跡

遺跡名	遺跡所在地	棟数	掲載した遺構名	時期	規模	形状	炉跡	その他
1 長瀬B遺跡	二戸市米沢字長瀬	1	Bi 03住	早期中葉	9.6m±×7.3m±	隅丸長方形	なし	他に4棟検出。寺の沢式土器が共存
2 中曾根II遺跡	二戸市石切所字中曾根	3	149号址 155号址 193号址	前期初頭	9.8m × 3.6m 12.8m × 6.6m 11.6m × 8.5m	隅丸長方形	屋外炉	前期初頭の住居跡が8棟検出 前期尖底土器～大木2b式土器を共存
3 長者屋敷遺跡	岩手郡松尾村松尾字大花森		HⅢ-12住群 FⅣ-4住 GⅤ-2住	前期前半	23.0m±×8.2m± 11.6m±×8.0m± 12.8m±×4.8m・5.5m±	槽円形～隅丸長方形 長目の槽形 隅丸長方形	28 (地床炉) 6 (地床炉) 12 (地床炉)	縄文の住居跡が236棟検出 前期～晩期まである 大型は他にも多数含まれている
4 野駄遺跡	岩手郡松尾村	1	CⅠ-1住	円筒下層c式	8.0m±×4.5m±	長方形	3 (地床炉)	縄文の住居跡10棟と土坑78基検出 尖底土器500ヶ体出土
5 上里遺跡	二戸市石切所字上里	4	I-19住 I-22住 G-16住 D-23住	円筒下層d式 円筒上層a式	12m±×7.5m± $\alpha$ 13.8m×5.2m± $\alpha$ 11m±×6.6m± $\alpha$ 9.30m×8.10m	槽円形～長橋円形 長橋円形 長方形～長橋円形 隅丸長方形	不明 3 (地床炉) 3 (土器埋設炉) 不明	縄文の住居跡10棟と土坑78基検出 尖底土器500ヶ体出土
6 鳩岡崎遺跡	和賀郡江釣子村鳩岡崎	3	CⅡ-24住 CⅠ-21住 DⅤ-18住	大木6式	23m±×5m± 14m± $\alpha$ ×6.2m± $\alpha$ 23m±×8.5m±	長方形 長方形 長橋円形～隅丸長方形	3 (地床炉) 不明 14 (地床炉)	多くの土坑・住居跡が検出 住居跡内より多量の遺物出土
7 荒屋II遺跡	二戸郡安代町字荒屋	1	EⅠ-1住	円筒上層a式	6.9m±×4.0m±	槽円形	2 (土器埋設1 土器埋設石囲い1)	
8 塩ヶ森I遺跡	岩手郡雫石町蟹字塩ヶ森	8	Bi 09住 AD 30住		14.3m × 6.0m 13.0m±×9.3m±	長方形 槽円形	3 (地床炉) 1 (土器埋設石囲い炉)	全部で44棟の住居跡が検出 前期初頭～中期初頭まである
9 大鏡町遺跡	盛岡市厨川大鏡町	1	RA 102住	大木8a式	8.5m × 6.6m以上	槽円形	3 (地床炉)	多くの遺構・遺物が検出
10 馬場平遺跡	二戸郡一戸町岩館字馬場平	4	C 3住 C 4住 C 7住 C 9住	大木8b式 大木8b式 大木8b式 大木8b式	12.3m × 6.3m 13.9m × 6.4m 11.9m × 6.0m 11.2m × 6.6m	隅丸長方形 隅丸長方形 長方形 長方形	4 (地床炉) 5 (地床炉3石囲い炉) 2 (地床炉) 4 (地床炉)	中期前半の集落遺跡である
11 荒谷A遺跡	二戸市米沢字荒谷	1	IF-50住	大木8b式末	17.0m±×8.0m±	槽円形～隅丸長方形	4 (1基は石囲い炉)	縄文の住居跡が他に23棟検出
12 爪屋敷I遺跡	九戸郡軽米町大字軽米	1	EⅢ-3住	大木9式	9.8m × 7.0m	長橋円形	1 (石囲い炉)	縄文の住居跡が41棟ある
13 観音堂遺跡	稗貫郡大迫町	1	1号住		9.0m±×8.6m±	ほぼ円形	1 (複式炉)	中期末葉の集落跡
14 繁一Ⅲ遺跡	盛岡市	3	I-8住 J-7住	大木10式 大木10式	8.0m × 7.4m 9.8m × 9.5m	隅丸扁四角形 隅丸扁五角形	1 (複式炉) 2 (複式炉)	中期末葉の住居跡が31棟ある 他に土坑も多数検出
15 湯沢遺跡	紫波郡蔭村湯沢	1	CⅢ-7住	大木10式	8.8m±×8.5m±	ほぼ円形	3 (土器埋設が2)	住居跡160棟・土坑18基検出
16 丸子館遺跡	北上市鬼柳町荒洲	2	D-1-1 D-2-1ロ	不明 堀の内I式	外径 7m×6.5m 11m×10.4m	ほぼ円形	不明	柱列として検出された
17 八天遺跡	北上市更木町八天	1	5号家屋跡	宝ヶ峰式	(1号) 17.0m×13.5m (3号) 12.7m×10m	槽円形	不明	5号家屋跡は10棟に分解されている
18 曲田I遺跡	二戸郡安代町曲田	1	FⅢ-0116住 (仮称)	大木B式	9.2m位	円形	石囲い炉	重箱が著しい
19 繁一V遺跡	盛岡市繁字館市	2	未掲載	大木8式	3号 10~11m×5m 5号 6.10m×5m	槽円形 隅丸長方形	石囲い炉	
20 坊主峠遺跡	北上市更木町秋牛	1	未掲載		7.5m位×4.2m位	長橋円形	石囲い炉?	
21 鷹畑遺跡	北上市更木町秋牛		未掲載	大木6式	不明	方形?	地床炉	
22 鳩岡崎遺跡上の台	和賀郡江釣子村鳩岡崎	1	未掲載	大木8b式	12.6m×6.8m以上	槽円形	1 (石囲い炉)	
23 樺山遺跡	北上市稲瀬町大谷地	1	未掲載	大木7b式	6.0m × 4.5m	隅丸長方形	1 (石囲い炉)	
24 牧の集館遺跡	東磐井郡千鶴町字大沢田	1	未掲載	不明	不明	長方形	直線的に多数	破壊が著しい

注・この表は昭和57年12月現在で何んらかの形で公表されている遺跡を対象として作成した。

- ・遺構数の多い長者屋敷遺跡の例は形状がはっきり判るものを選択した。
- ・その他の項には遺跡全体の様子を記した。



て、ただ単に、他の住居跡に比較（その集落内での相対的規模とその差）して大規模であることを示すものであろう。もう一方の「大型」とした場合には規模が大規模である以外に、炉跡や遺物の種類やその出土状況、そして住居跡内の施設等の内的条件が小規模の住居跡と違うという含みがあるのではないだろうか。このような問題については渡辺誠（渡辺 1980）<sup>①</sup>、高橋文夫（高橋 1981）、中村良幸（中村 1982）、相原康二（相原 1982）の各氏が詳しくまとめ<sup>②</sup>ており、筆者も各氏の意見を妥当なものと考えているので、この問題<sup>③</sup>については各氏の論に譲り、特に触れないでおく。また、ここで「大型住居跡」としているのは、内的条件より集落内での相対的な差としての大規模な住居跡を差していることをお断りしておく。

本遺跡で検出された4棟の大型住居跡の平面形には、D-23住居跡のように楕円形を示すものと、残る3棟のように長方形や長楕円形を示すものがあり、この状況を岩手県内で検出された他遺跡との比較から考えてみたい。

#### 〔岩手県内の大型住居跡とその形態変遷〕

岩手県内で大型住居跡の検出された遺跡は昭和57年12月現在で23遺跡を数え、遺構数では60棟以上の多きに達している。時期的にみた場合には、長瀬B遺跡の早期中葉（寺の沢式土器を共伴）から曲田I遺跡の晩期前葉（大洞B～B-C式）に位置づけられる住居跡まで検出されている。この中でもっとも集中して例が多くなるのは前期末葉（大木6式）から中期前半にかけてである。他に前期前半にも多く見られるらしい。前記の3氏も述べているように、この時期に大型住居跡が構築される最盛期があるものと考えられる。また、この時期は集落規模の大きい遺跡が多くなり、このような規模の大きい遺跡では若干の差こそあれ、何棟かの大型住居跡が検出されていることから考えると、集落規模の大型化に伴う大型住居跡の果たすべき役割が背景にあるものと推定されることから、集落が大型化する前期末～中期前半に大型住居跡が盛行するという事とは全く無縁ではあるまい。

なお、岩手県内で検出された遺跡とその概要は第5表に記しておいた。それに伴う遺構の平面図は第251図に示した。それでは岩手県内での例を遺跡ごとに紹介しておこう。

- ①長瀬B遺跡<sup>⑤</sup> この遺跡では5棟の早期に属する住居跡が検出され、その中の1棟が長径9.6m・短径7.3mの規模があり、平面形は隅丸長方形であるが、短径と長径の比率が1.31と小さい。この遺跡は大型1棟と小型4棟で構成される集落といえるだろう。いずれも屋内炉をもたない。
- ②中曾根II遺跡<sup>⑥</sup> この遺跡では前期初頭（大木1～2式）の住居跡が8棟検出され、その中の3棟が大型住居跡である。規模は9.8m×3.6m・12.8m×6.6m・11.6m×8.5mをそれぞれ測る。平面形はいずれも長方形か隅丸長方形である。短径と長径の比率は2.72・1.93・1.36と、先

の長瀬B遺跡例に近い形とより細長くなる形が共存している。どの住居跡も屋内炉をもたず、屋外炉をもつ例がある。

- ③長者屋敷遺跡<sup>⑦</sup> 前期初頭から晩期に及ぶ住居跡が329棟も検出された大規模な集落遺跡である。この中に20棟以上の大型住居跡が含まれ、時期的には前期前葉・前期末葉・中期末葉の各時期にみられる。ここでは、前期前葉2棟・前期末葉1棟・中期末葉1棟を紹介しておく。前期前葉は23m×8.2m・11.6m×8.0mで、前期末葉は12.8m×4.8m～5.5m、中期末葉は12.4m×9.2mの規模で、平面形は前期前葉が長方形と長楕円形、前期末葉が隅丸長方形、中期末葉は楕円形である。短径と長径の比率は2.8・1.45・2.32・1.34となり、前期前葉の住居跡には比率の比較的小さいものと大きいものが混在し、前期末葉では細長い形が残る。また、中期末葉には比率が小さくなり、次第に円に近くなる。炉跡はいずれも複数もっている。
- ④野駄遺跡<sup>⑧</sup> この遺跡では前期後葉から晩期までの住居跡が13棟検出されているが、その中の前期後葉に位置づけられる1棟が長径8m・短径4.5mを測る大型住居跡で、平面形は隅丸長方形である。短径と長径の比率は1.77で、炉跡は中軸線上に3基の地床炉をもつ。
- ⑤上里遺跡<sup>⑨</sup> 本遺跡の例は前述のとおりであるが、D-23住居跡の短径と長径の比率が1.14と円形に近い隅丸長方形気味の楕円形である。他の3棟は全体が検出されていないので定かでないが、長方形気味や長楕円形を示すような様相を示している。
- ⑥鳩岡崎遺跡<sup>⑩</sup> この遺跡は前期末葉から晩期に至る遺構が多数検出された大規模な遺跡である。住居跡は10棟検出され、その中に3棟の大型住居跡が含まれている。時期的には前期末葉2棟と中期初葉1棟になる。ここでは2棟の平面図を掲載した。掲載した2棟はともに長径23m以上で、短径は5mと8.5mである。平面形は前期末葉のCJ-24住は長方形、中期初葉のDE-18住居跡は長方形と隅丸長方形気味のものが重複している。短径と長径の比率は4.6と2.7で、非常に細長い形を示している。炉跡は中軸線上に複数の地床炉をもっている。
- ⑦荒屋Ⅱ遺跡<sup>⑪</sup> この遺跡では中期の住居跡が5棟検出され、その中の中期初葉に属する1棟が大型住居跡である。規模は6.9m×4.0mで、平面形は隅丸長方形気味の長楕円形である。短径と長径の比率は1.72である。この住居跡の炉跡は土器埋設炉と土器埋設石囲い炉の2基が検出されている。
- ⑧塩ヶ森Ⅰ遺跡<sup>⑫</sup> この遺跡では前期初葉～中期末葉に至る44棟の住居跡が検出され、その中に8棟の大型住居跡が含まれている。ここでは2棟の平面図を掲載した。2棟ともに中期初葉に属し、規模は14.3m×6mと13m×9.3mを測り、平面形は前者が長方形で後者は楕円形を示している。短径と長径の比率は前者2.38・後者1.39と、この遺跡では平面形が2形態あり、それが同時期に共存しているらしい。炉跡は前者が地床炉、後者は土器埋設石囲い炉である。
- ⑨大館町遺跡<sup>⑬</sup> この遺跡では2棟の大型住居跡が検出されているが、ここには平面形の明確な



- 1棟を掲載した。規模は8.5m×6.6mで、平面形は楕円形である。短径と長径の比率は1.28である。なお、この住居跡は中期中葉に属し、炉跡は2基の地床炉をもっている。
- ⑩馬場平Ⅱ遺跡<sup>14</sup> 縄文時代の住居跡が40棟検出され、その中に4棟の大型住居跡が含まれている。4棟とも中期中葉に属し、ここではその中から2棟の平面図を掲載した。規模は12.3m×6.3m・13.9m×6.4mで、平面形は長方形と隅丸長方形である。短径と長径の比率は2.17と1.95である。炉跡には地床炉と石囲い炉があり、いずれも複数設置している。
- ⑪荒谷A遺跡<sup>15</sup> この遺跡では中期中葉末の住居跡が24棟検出され、その中に1棟の大型住居跡が含まれている。規模は17m×8mを測り、平面形は長楕円形と隅丸長方形気味のもの重複している。短径と長径の比率は2.12で、炉跡は石囲い炉を1基含む4基である。
- ⑫吠屋敷Ⅰ遺跡<sup>16</sup> 縄文の住居跡が41棟検出され、その中に中期後葉に属する大型住居跡が1棟含まれている。規模は9.8m×7mを測り、平面形は楕円形である。短径と長径の比率は1.4で、炉跡が石囲い炉1基である。
- ⑬観音堂遺跡<sup>17</sup> この遺跡は中期後半の集落跡で、1棟の大型住居跡が検出されている。規模は9m×8.6mを測り、平面形は円形である。短径と長径の比率は1.04で、1基の複式炉をもつ。
- ⑭繫一Ⅲ遺跡<sup>18</sup> この遺跡では前期前葉1棟、中期前葉3棟、中期末葉29棟の住居跡が検出されているが、この中に中期前葉1棟、中期末葉2棟の大型住居跡が検出されている。ここでは中期末葉の2棟を紹介しておこう。規模は8m×7.4mと9.8m×9.5mを測り、平面形は前者が隅丸扁四角形で、後者は隅丸扁五角形を示している。短径と長径の比率は1.08と1.03で、炉跡は前者は複式炉を1基、後者は複式炉1基と地床炉1基をもっている。
- ⑮湯沢遺跡<sup>19</sup> 縄文時代の住居跡が160棟検出され、その中に大型住居跡が1棟含まれている。この住居跡は中期末葉に属し、規模は8.8m×8.5mを測り、平面形はほぼ円形を呈している。短径と長径の比率は1.03で、炉跡は土器埋設を伴う3基が検出されている。
- ⑯丸子館遺跡<sup>20</sup> この遺跡は前期末葉～晩期に至る大規模な遺跡であるが、竪穴式ではないが後期に属する所謂円形柱列が2基検出されている。この遺構を住居跡とするか問題も残るが、一応紹介しておこう。規模は7m×6.5m・11m×10.4mで、平面形はほぼ円形である。短径と長径の比率は1.07と1.05である。炉跡は検出されていない。なお、遺構は後期に属する。
- ⑰八天遺跡<sup>21</sup> この遺跡は縄文時代～中世に至る大規模な遺跡であり、縄文時代の遺構としては、住居跡や土坑がある。その中で後期に属する5号家屋が大型住居跡である。この住居跡は重複が著しく、10棟に分解されているが、ここでは1号跡と3号跡を紹介しておこう。規模は1号が17m×13.5m、3号は12.7m×10mでともに楕円形である。短径と長径の比率は1.25と1.27である。炉跡は不明である。
- ⑱曲田Ⅰ遺跡 この遺跡は縄文晩期の住居跡が40棟以上も検出された大規模な遺跡である。そ

の中に晩期前葉に属する大型住居跡が1棟検出されている。規模は9.2m×9.2mで平面形はほぼ円形である。短径と長径の比率は1.1で、炉跡は石囲い炉である。

以上、18遺跡について紹介したが、その他に繫一V遺跡、坊主峠遺跡、鷹畑遺跡、鳩岡崎上の台遺跡、樺山遺跡、牧の巣館遺跡等でも検出されている。

これらの住居跡の規模は最大23m×8.2mから最小6.9m×4m位の範囲であるが、これは、その集落内で検出された住居跡全体の中での相対的な規模の差によるものであり、その意味では「大型住居跡」としての条件を具備しているかということが重要な問題である。しかし、ほとんどの住居跡は長径が10m以上を超えていることは事実であり、大型住居跡の条件としての目安とはなるであろう。

遺構の時期をみると、早期中葉～晩期までであることは既に記したとおりであるが、具体的にみると、早期1遺跡1棟、前期5遺跡10棟以上、中期9遺跡16棟以上、後期2遺跡12棟、晩期1遺跡1棟になるが、前期の場合は2遺跡の5棟が前期前半に属し、残る5棟は前期末葉に属している。中期の場合は、4遺跡の5棟が中期後葉～末葉に属し、残る11棟以上が中期前半に位置づけられる。このように遺跡数・遺構数ともに多くなるのは前期末葉から早期中葉までであり、次いで中期末葉が多く、その他の時期は遺跡数・遺構数ともに少ない。これはそのままこのような大型住居跡を必要とした時期と考えることができるであろう。

平面形についてみよう。第251図でみると、①長方形、②①より長い長方形や長楕円形、③楕円形か、ほぼ円形の3型態に大別されることが判り、それらが各時期の流れの中で変化していることが考えられる。このことについて型態別にみてみよう。

①A型 所謂「長方形」であるが、短径と長径の比率が1.3～1.45と寸ズマリの長方形である。

この形の住居跡は現在の所長瀬B遺跡(1)・中曽根Ⅱ遺跡(2)・長者屋敷遺跡(3)でのみ検出されており、時期的にも早期～前期前半に限定されている。炉跡は長瀬B遺跡の早期と中曽根Ⅱ遺跡の前期初葉では屋内炉をもたず、屋外炉としている。長者屋敷遺跡例では前期前半としているが、屋内炉としていることをみると、中曽根Ⅱ遺跡例(大木1～2b式)より後出する要素といえるだろう。柱穴配置はいずれも長径の両壁に沿って対をなす配列状況を示す。長者屋敷遺跡ではこの時期のこの型態の住居跡が他にも検出されているが、他遺跡例も含めると検出例は少ない。

②B型 短径と長径の比率が1.5以上で、先のA型より細長い長方形や長楕円形を示す形である。長方形の中には四隅が角張るものと隅丸のものがあるが、前者は鳩岡崎遺跡のCJ-24住居跡と塩ヶ森Ⅰ遺跡のB:09住居跡の2棟だけである。時期的にみると、もっとも古いのは中曽根Ⅱ遺跡の前期初葉(大木1～2b式)の住居跡であり、もっとも新しいのは荒谷A遺跡の



大木8b式末であるが、遺構数・遺跡数ともに多いのは前期末葉大木6式～中期中葉大木8式期であり、この型態の盛期はこの時間巾にあるであろう。平面形のとり方であるが、短径と長径の比率でみると1.6～1.9が8棟、2.1～2.8が8棟、4.6が1棟となり、規則性を示す状況はないが、1.5～2.0の比率に一つの中心があることが推定され、その他に2.3～2.8にも中心があるらしい様相を示している。大型住居跡の中でこの型態に入る住居跡がもっとも多いが、この中で時期によって若干形が変化しているらしい。明確にこの時期からこう変化するとは言いきれないが、隅丸長方形や長方形から長楕円形に変化していく傾向があるらしい。また、この型態には円筒式土器を出土した住居跡と大木式土器を出土した住居跡があるが、両者間における平面形上の差はほとんどないが、鳩岡崎遺跡や塩ヶ森Ⅰ遺跡のような四隅が角張る長方形を示す住居跡は円筒式土器を出土した住居跡にはない。炉跡は地床炉が中心であるが、中期になると石囲い炉や土器埋設炉・土器埋設石囲い炉が出現し、いずれの場合も複数もつのが通例である。なお、前期初葉の住居跡には屋内炉がない。柱穴配置は長径の両壁に沿って位置対をなすのが一般的であるが、長者屋敷遺跡例ではジグザグ形の配列を示す例も知られている。

- ③C型 この型態は楕円形と円形を示すもので、短径と長径の比率が1.4以下とズングリムックリの形状を示している。比率が1.4以下としたが、1.3～1.4は長者屋敷遺跡のHⅦ-1住居跡と吠屋敷Ⅰ遺跡のEⅢ-3住居跡だけで、その他は1.1以下が6棟、1.2～1.3が2棟である。この型態は中期初葉に出現し、その後晩期までほぼこの形が踏襲されている。しかし、後期や晩期では大型住居跡の検出遺跡や検出数ともに極端に少なくなり、これらの時期にはこのような大型の住居跡をあまり必要としなかったものであろう。中期の集落規模に比較し集落規模が縮小し、さらに分散していく傾向があるといわれていることから、それが妥当だとすれば、集落規模の縮小化と分散という現象と、大型住居跡が少ないこととは関連する可能性が強い。炉跡は地床炉よりも石囲い炉や土器埋設石囲い炉が多くなり、大木9・10式には大型の複式炉が作られる。しかし、中期末葉の湯沢遺跡例では所謂複式炉ではなく複式炉が退化しその名残りを残した炉跡である。後期の炉跡は定かでないが、晩期では石囲い炉である。しかし、B型では長径の中軸線上を定位置として複数あった炉が、この型では数が減り、ほとんどは定位置に1基もち、2基以上の場合には1基は位置が不定である。柱穴配置は、周壁に沿って4本以上もつのが一般的で、新しくなるに従って、その本数が多くなる傾向がみられる。

以上の事柄を要約してみると、まず、平面形はズングリムックリの長方形から次第に細長い長方形となり、その四隅が丸くなって隅丸長方形が出現し、長方形の最後には長楕円形になる。

隅丸長方形や長楕円形が盛行していた時期にズングリムックリの楕円形が出現し、それが縄文時代の終末まで踏襲される。この型態変化を時期で見ると、長方形は早期～前期前半まで、細長い長方形や長楕円形は前期初葉～中期中葉まで、楕円形は中期初葉～晩期までそれぞれ構築されている。

屋内炉として炉が出現するのは大木3式期以降の可能性が強いが、出現以後前期末葉まではいずれも地床炉のみで、それも複数もち、定位置化していく。中期初葉には石囲い炉や土器埋設炉・土器埋設石囲い炉等が出現するが、大木7a式期～大木8a式期までは地床炉も共用され、大木8b式期には石囲い炉や土器埋設炉・土器埋設石囲い炉等が定着する。炉の数は大木8b式期までは定位置に複数もつ場合が多いが、長楕円形よりも楕円形（C型）は数が少ない。大木9式期には複式炉が設置されるようになるが、定位置につくられるのは1基となり、2基もつ場合の2基目は不定位置となる。

柱穴配置は長方形（A型）や長楕円形（B型）では基本的に差がなく、お互いに対をなす配置を示す場合が多く、一部にジグザグ型配置を示す例もある。楕円形（C型）では周壁に沿うように位置し、やはり対をなす場合が多い。

このように要約された事柄を大型ではない普通型住居跡のそれと比較してみると、早期～前期前半まではほとんど差のない同じような形態変化をしているらしい。この時期の平面形は方形や比率の小さい長方形が基調であるといわれていることから、この時期の住居跡は規模が違っただけで、その他の施設には差がない可能性を示すものであろう。前期後半～中期中葉までの住居跡は、大型住居跡と普通型住居跡との間に大きな差がある。前期中葉の平面形は定かでないが、前期末葉～中期中葉の普通型住居跡は円形が主体である。これを大型と比較すると、普通型の円形を半割しそのまま左右に離れた形が大形住居跡の長楕円形ということになろう。これは、大型の短径の長さや普通型の直径の長さや大差がないのはこのためであろうと考えられる。同心円的に規模を大きくして行くと、建築部材の選定や伐り出しに影響がでるが、横（桁方向）に長くして行くと、同じ長さの部材が量的に増えるだけで済むことになり、横に長くする方が建設作業上合理的であることはいうまでもない。炉跡であるが、普通型の場合には1基が一般的であり、多くても2基ぐらいであろう。それも、大型の場合には直線的に多数（最多で28基）もつのが一般的であり、大型住居跡の特徴の一つともいわれている。柱穴は基本的には同じであり、規模に応じて数が増えるのみである。

#### 〔小 結〕

これらのことを本遺跡で検出された大型住居跡の特徴と比較してみると、大きな矛盾はない。



したがって、D-23住居跡・G-16住居跡・I-19住居跡・I-22住居跡は、所謂大型住居跡の範疇に入るものと考えて大過ないであろう。以上のことから本遺跡での集落構成をみると、大型住居跡と小型（普通型）住居跡が混在する在り方を示すと考えるのが妥当であろう。

## 2) 土 坑

本遺跡の調査で検出された縄文時代に属する土坑は78基であることは、既に記したとおりである。しかし、78基全てが同じような特徴をもっているわけではない。平面形はほぼ円形であるものの、断面形や規模・所属時期・埋土の状況・調査範囲内の分布状況に違いや変化があり、それらを個別にまとめをしておく。規模や形態・特徴等については第6表に示しておいた。

### 〔調査範囲内での分布状況〕

本遺跡で検出された土坑の分布はAブロックが6ヶ所、Bブロック2ヶ所に集中して分布する在り方を示している。この状況をAブロックでみると、まず、北に位置する土坑であるが、A-06土坑・B-04土坑が規模や形態に類似性が強く、ほぼ同一のグループと考えられ、東側の調査区域外に土坑の分布が広がるであろう。次の分布域はグリッドA・B-10・11に位置し、11基の土坑で構成される。ここに位置する土坑は規模が比較的小型で、深さが50cm～1.2m・底径70cm～1.65mの範囲に入る。第3の分布域はD-23住居跡付近に位置し、D-23住居跡やE-22住居跡・E-23住居跡等と重複する在り方を示している。ここに在る土坑は11基で構成されるが、B-22土坑-1・B-22土坑-2・B-23土坑・D-22土坑-3を除くと、規模が非常に大きく、深さ1.4m～2.3m・底径2.2m～2.8mの範囲である。第4の分布域はG-16住居跡付近に位置し、6基で構成される。ここに在る土坑の規模は深さ1.7m～2.1m・底径2.0m～3.30mの範囲である。第5の分布域としては、I-19住居跡内に3基あり、規模は深さ1.8m～2.5m・底径1.8m～2.0mである。第6の分布域としてG-24住居跡の北側に3基あり、規模も深さ1.6m～1.9m・底径2.3m～2.6mと近接している。

Bブロックでは39基の土坑が検出されているが、これらの土坑はほぼ2ヶ所に分かれて分布している。1ヶ所はH-41・H-42の各住居跡付近に位置し、平坦面に位置する10基の土坑群である。もう1ヶ所は、斜面部に位置する土坑群で、29基で構成される。しかし、これらが分布域を異にする土坑群と認定できるかは明らかでない。

以上のような分布状態を示しているとはいうものの、規模や形状（後述）をも加味してみると、第2の分布域に位置する土坑とその他の地点にある土坑では全く異なる様相を示しているので、この両者は時期や使用目的に差がある可能性が強いものと考えられる。

### 〔規 模〕

第6表 縄文時代の土坑一覧表

遺構 番号	遺 構 名	平面形	断 面 形	頸部 の有無	規 模			所属時期	出土遺物
					開 口 部	底 面	深 さ		
1	A-06	円 形	フラスコ形	有	径 2 m	径 2 m	最深部1.44m	前期初頭	土器・石器
2	A-09	円 形	ピーカー形	無	1.80m	1.60m	◇ 1.35m	縄文時代	
3	A-10-1	円 形	フラスコ形	有	1.40m×1.30m	1.50m×1.50m	約 95m	中期以降	土器
4	A-10-2	円 形	フラスコ形	有	1.80m×1.55m	1.65m×1.55m	1.10m	中期中葉頃	土器
5	A-11	円 形	フラスコ形	有	1.70m×1.55m	1.50m×1.45m	95cm	中期中葉	土器
6	B-04	円 形	フラスコ形	有	2.10m×2.10m	2.60m×2.50m	1.50m	前期初頭	土器・石器
7	B-08	長楕円形	皿 形	無	2.30m×1.15m	2.10m× 90cm	50cm		
8	B-09	楕円形	ピーカー形	無	1.55m×1.55m	1.35m×1.30m	1.10m	中 期 頃	土器
9	B-10-1	円 形	ピーカー形	無	1.40m×1.35m	1.35m×1.20m	1 m	中期中葉	土器
10	B-10-2	円 形	ピーカー形	無	1.10m×1.10m	1.25m×1.15m	50cm	中期以降	土器
11	B-10-3	円 形	バケツ形	無	80cm	70cm	85cm	中期～前期	
12	B-11-1	楕円形	ピーカー形	無	1.45m×1.45m	1.15m×1.10m	70cm	中 期	土器
13	B-11-2	円 形	フラスコ形	有	1.30m×1.30m	1.25m×1.25m	60cm	中期以降	土器・石器
14	B-11-3	円 形	バケツ形	無	1.15m	1.00m	50cm	中期以降	土器・石器
15	B-15	隅丸方形	浅皿形	無	2.05m×1.90m	1.90m×1.75m	17cm	前期初頭	土器・石器
16	B-22-1	楕円形	フラスコ形	無	2.35m×2.35m	2.40m×2.20m	90cm	縄文時代	
17	B-22-2	楕円形	浅皿形	無	1.15m×1.10m	90cm× 85cm	30cm	縄文時代	
18	B-23	楕円形	フラスコ形	無	1.50m×1.45m	2.30m×2.10m	90cm	縄文時代	
19	C-16	楕円形	浅皿形	無	2.30m×1.70m	1.70m×1.10m	30cm	前期初頭	
20	C-20	楕円形	フラスコ形	無	1.90m×1.70m	2.40m×2.40m	2.30m	中期初頭	土器・石器
21	C-23	楕円形	フラスコ形	無	1.60m×1.35m	2.40m×2.40m	1.55m	中期初頭	土器
22	D-22-1	円 形	ピーカー形	無	2.50m×2.50m	2.35m×2.30m	2.10m	中 期	土器
23	D-22-2	円 形	フラスコ形	無	2.35m	2.50m	1.90m	中 期	
24	D-22-3	長楕円形	浅皿形	無	3.10m×2.10m	3.00m×1.95m	50m	中期以降	
25	D-23-1	楕円形	フラスコ形	無	2.65m×2.50m	2.80m×2.70m	1.80m	中期中葉	土器・石器
26	D-23-2	円 形	フラスコ形	無	95cm	2.20m×2.05m	1.90m	中期以降	石器
27	E-14	円 形	フラスコ形	有	1.90m	2.50m	1.90m	縄文時代	
28	E-15-1	楕円形	フラスコ形	有	1.80m×1.65m	2.50m×2.25m	1.85m	中期中葉	土器・石器
29	E-15-2	楕円形	フラスコ形	有	1.95m×1.65m	3.35m×3.20m	1.80m	前期末葉～ 中期初葉頃	
30	E-22	楕円形	フラスコ形	無	2.50m×2.30m	2.80m×2.60m	1.40m	中期中葉	
31	E-46	楕円形	フラスコ形	有	1.10m×1.10m	1.20m	80cm	縄文時代	
32	E-47-1	円 形	フラスコ形	無	1.25m×1.10m	1.80m×1.55m	1.35m	中期以降	土器
33	E-47-2	楕円形	フラスコ形	無	1.15m×1.00m	2.00m×1.65m	1.65m	中期末葉	土器
34	F-45-1	楕円形	浅皿形	無	1.40m×1.50m	1.35m× 95cm	45cm	中期中葉	土器
35	F-45-2	円 形	ピーカー形	無	1.70m×1.60m	1.55m×1.40m	1.10m	前期初頭	土器
36	F-45-3	楕円形	浅皿形	無	1.25m×1.20m	95cm×95cm	33cm	前期末葉～ 中期初葉	土器・石器
37	F-46-1	円 形	フラスコ形	無	1.50m×1.45m	1.50m×1.50m	50cm	早 期	土器
38	F-46-2	楕円形	フラスコ形	無	1.40m×1.30m	2.20m×2.20m	1.40m	前期前葉	土器
39	F-46-3	円 形	フラスコ形	無	1.00m	1.60m	1.00m	縄文時代	
40	F-47-1	楕円形	フラスコ形	無	1.65m×1.65m	2.05m×2.05m	1.05m	中期末葉	土器



遺構 番号	遺 構 名	平面形	断面形	頸部 の有無	規 模			所属時期	出土遺物
					開 口 部	底 面	深 さ		
41	F-47-2	楕円形	フラスコ形	無	2.70m×2.55m	2.75m×2.65m	70cm	縄文時代	
42	F-47-3	楕円形	フラスコ形	無	1.30m×1.05m	1.30m×1.25m	1.05m	縄文時代	土器
43	F-48	楕円形	フラスコ形	無	1.35m×1.20m	1.95m×1.95m	1.45m	前 期	土器・石器
44	G-16住居跡内-1	楕円形	フラスコ形	有	1.40m×1.35m	2.00m×1.95m	2.00m	中期初葉	土器
45	G-16住居跡内-2	楕円形	フラスコ形	無	1.35m×1.15m	2.00m×1.70m	1.70m	中期初葉	
46	G-16住居跡内-3	楕円形	フラスコ形	有	1.15m	3.10m×2.65m	2.10m	中期初葉	土器
47	G-23	円 形	フラスコ形	有	2.35m×2.30m	2.30m	1.75m	中期初葉	土器・石器
48	G-24-1	楕円形	フラスコ形	無	2.45m×2.20m	2.60m×2.55m	1.90m	縄文時代	石器
49	G-24-2	円 形	フラスコ形	無	1.10m×1.05m	2.50m×2.40m	1.60m	縄文時代	
50	G-44	円 形	フラスコ形	有	1.35m×1.35m	1.85m×1.65m	1.15m	晩期初葉	土器
51	G-45	楕円形	フラスコ形	無	1.75m×1.55m	1.85m×1.75m	62.5m	前 期	土器
52	G-46-1	円 形	フラスコ形	無	1.45m×1.40m	1.75m×1.70m	1.10m	中期中葉	土器
53	G-46-2	円 形	フラスコ形	無	1.00m	1.10m	36cm	縄文時代	土器
54	G-46-3	楕円形	フラスコ形	有	2.10m×1.90m	2.20m×2.10m	1.72m	縄文時代	土器
55	G-46-4	円 形	フラスコ形	無	82cm	1.70m	1.30m	縄文時代	
56	G-47-1	楕円形	フラスコ形	無	1.80m×1.70m	1.85m×1.70m	50.4m	中期以降	土器
57	G-47-2	楕円形	フラスコ形	無	2.30m×1.75m	2.65m×2.20m	1.00m	中期末葉	土器
58	G-47-3	楕円形	フラスコ形	有	2.05m×1.85m	2.20m×2.05m	1.65m	中期末葉	土器
59	H-39	円 形	フラスコ形	無	1.50m×1.45m	1.65m×1.55m	1.25m	中期中葉	土器
60	H-41-1	楕円形	浅皿形	無	2.10m×1.90m	1.75m×1.70m	22cm	前期初葉	土器・石器
61	H-41-2	楕円形	ピーカー形	無	1.60m×1.50m	1.40m×1.40m	75cm	中期以降	土器
62	H-41-3	楕円形	フラスコ形	無	78cm×70cm	1.65m×1.50m	1.50m	中期以降	土器
63	H-41-4	円 形	フラスコ形	有	90cm×90cm	1.85m×1.65m	1.50m	中期末葉	土器
64	H-42-1	円 形	ピーカー形	無	1.45m×1.35m	1.35m×1.30m	75cm	縄文時代	
65	H-42-2	円 形	ピーカー形	無	2.20m×2.20m	2.30m×2.30m	1.50m	中期前葉	土器
66	H-43-1	円 形	浅皿形	無	1.50m	1.35m	10cm	縄文時代	
67	H-43-2	楕円形	ピーカー形	無	77cm×73cm	63cm×47cm	39cm	縄文時代	
68	H-44	楕円形	フラスコ形	有	1.20m×0.95m	1.80m×1.80m	1.25m	中期以降	土器
69	H-46	楕円形	ピーカー形	無	2.40m×2.05m	2.45m×2.00m	80cm	中期以降	土器
70	H-47-1	楕円形	ピーカー形	無	1.20m	85cm	55cm	縄文時代	
71	H-47-2	円 形	ピーカー形	無	1.75m×1.75m	1.65m×1.65m	50cm	中期以降	土器
72	H-48-1	長楕円形	浅皿形	無	1.20m×1.10m	1.10m×0.70m	20~25cm	中期以降	土器
73	H-48-2	楕円形	フラスコ形	有	90cm×70cm	1.15m×1.10m	1.20m	縄文時代	
74	H-48-3	楕円形	フラスコ形	無	1.00m×0.80m	1.75m×1.75m	10~14cm	中期以降	土器
75	I-19住居跡内-1	円 形	フラスコ形	無	1.37m×1.30m	1.80m×1.60m	2.50m	前期末葉	土器・石器
76	I-19住居跡内-2	楕円形	フラスコ形	無	1.35m×1.10m	1.60m	30cm	中期中葉	
77	I-19住居跡内-3	楕円形	フラスコ形	無	1.00m	2.00m×2.00m	1.80m	中期初葉	土器
78	I-43	円 形	楕鉢状	無	1.50m×0.30m	1.30m×0.20m		中期中葉	土器

本遺跡で検出された土坑の規模を第252図Aで底径と深さの関係をみると、底径の長さに匹敵する深さをもつ土坑は3基と少なく、他はいずれも底径の長さよりも深さが小さい数値を示している。しかし、全体的な傾向としてみるならば、底径と深さの間には相関関係があり、底径が大きくなると、深さも増加するいわば比例関係を示す土坑が多いことを示している。このような比例関係を示す土坑は全体の約60%の46基がこの型態に入り、これらの土坑は切れまなくほぼ全体に散在する在り方を示し、特に特徴的な傾向を示してはいない。この型態の部類に入らない土坑は、底部に比較して深さの浅い土坑で、約40%の31基が入る。後者の型態には底径1.85m以下で深さ75cm以下のものと、底径が2.0m～2.55mで深さが70cm～1.1mのものに細分される。

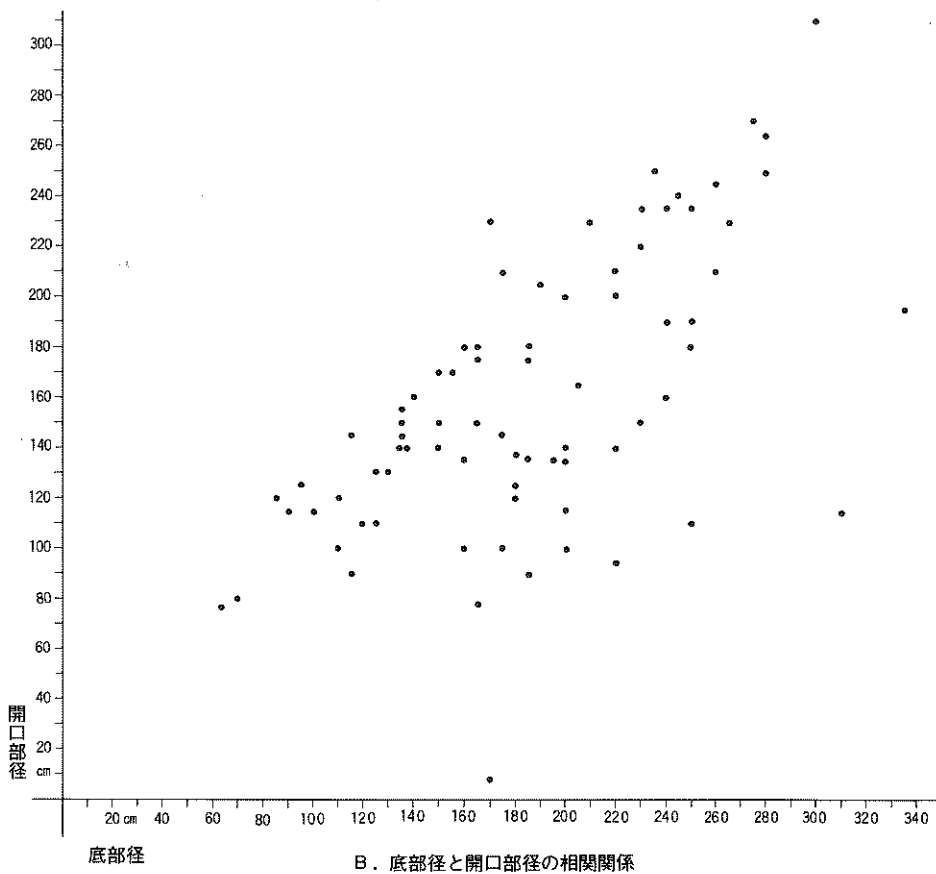
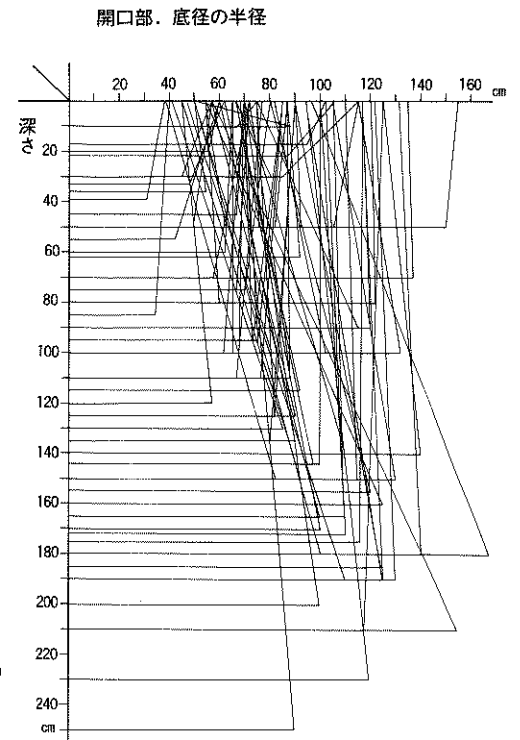
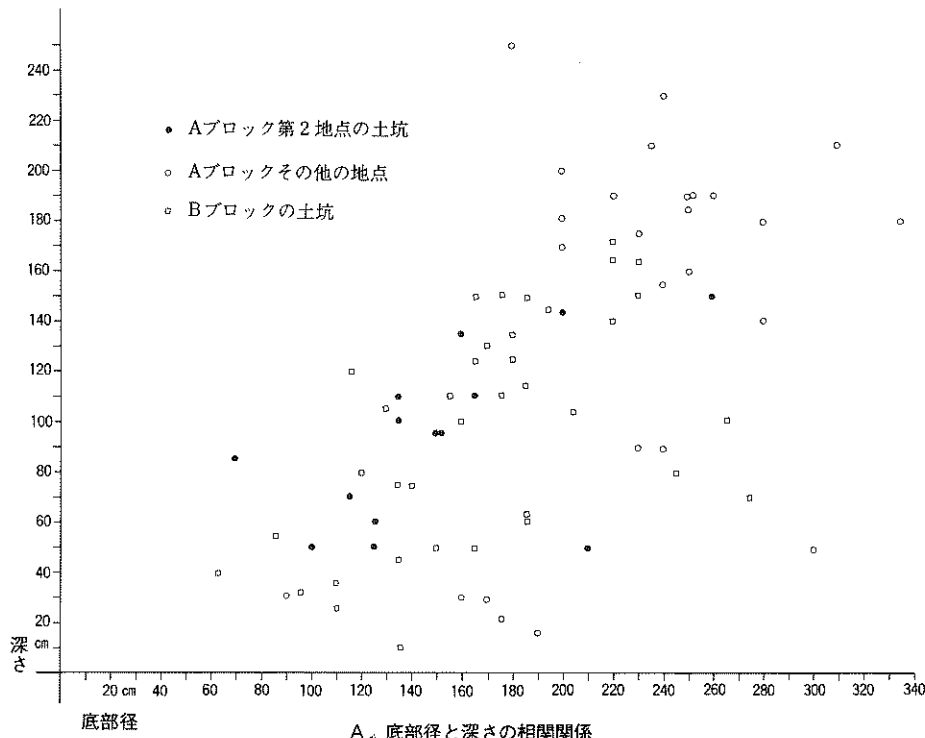
規模を深さと底径に分けて考えてみよう。まず、深さであるが、もっとも浅い土坑は約10cm、もっとも深い土坑は2.5mを測り、全てこの範囲に入る。しかし、深さが30cm以下と2.0m以上は7基と少なく、その他は30cm～2.0mの範囲で、ある部分に集中することもなくほぼ全体に散在している。底径の規模は60cm～3.3mの範囲であるが、90cm～2.6mの範囲に入るのが多く、この中で特に集中するような部分もみられないが、強いていえば、1.5m～2.0mの25基、2.3m～2.6mに15基入るのが集中している傾向といえるかもしれない。

開口部径を第252図Bでみると、65cm～3.35mまでみられるが、80cm～2.8mまでが多く、その他は少ない。この中に特別集中する部分もみられないが、1.2m～2mに39基が入っていることから、この部分に開口部径の中心があるものとおもう。

以上のことを地点別にみると、まずAブロックでは先の第2地点に位置する土坑とそれ以外の地点に位置する土坑では規模に差がある。第2地点の土坑は底径と深さがほぼ比例する形で、底径が1.0m～1.65m、深さが50cm～1.35mとやや規模の小さい土坑が密集している。その他の地点の土坑は、本遺跡で検出された土坑の中では最大規模の部類で、底径2.0m～3.35mで深さ1.4m～2.5mの範囲に入る。Bブロックに位置する土坑は、底径と深さが比例している土坑と、そうでない土坑に二分され、後者はさらに細分される。前者は底径1.15m～2.3m、深さ1.0m～1.7mの範囲に入る土坑で16基が相当する。後者の一方は底径が65cm～1.85mで深さが10cm～75cmの範囲に入り14基が該当する。残る一方は、底径2.05m～2.75mで深さ70cm～1.05mの範囲に入り4基が相当する。

これらのことを総合して規模を考えると、本遺跡で検出された土坑は個々によって規模の差が大きいものの、底径と深さがほぼ比例関係を示す土坑と、底径の割合に深さが浅い土坑に二分され、後者はさらに大小関係がみられる。また、位置する地点によって規模に差があり、Aブロックでは第2地点とそれ以外の地点に位置する土坑に明確な規模の差がみられる。Bブロックに位置する土坑は3型態に細分されるが、地点別の差はあまりない。





第252図 土坑の集計図

このような規模の差は時期差や性格（機能的）の違いによるものであろう。

#### 〔型 態〕

本遺跡で検出された土坑の中で、B-08土坑・D-22土坑-3の平面形が楕円形を示す以外は、全て円形やほぼ円形を示している。このことは、縄文時代の土坑は平面形が円形を呈するのが一般的であることを示すものであろう。断面形については第252図Bで底部径と開口部径の相関関係をみると、底部径よりも開口部径が広い所謂ピーカー形は39%の30基で、残る61%の47基は底部径より開口部径が狭い所謂フラスコ形を示しているが、埋土の堆積状況を観察すると、壁の崩落と思われる堆積状況を示す土坑が多くみられることから、断面形がピーカー形を示す土坑の中にも、掘削当初は断面フラスコ形の土坑が多かったものと推定される。この様子を表したのが第252図Cである。この図を良くみると、深さが1.35mより深い土坑には断面ピーカー形を示す土坑は全くなく、底部径が1.9m以上の土坑には断面ピーカー形の土坑が3基と少ない。

いずれにしても、本遺跡で検出された土坑には人為的に埋め戻された形跡を残す土坑と、廃棄後自然状態で埋没した土坑があり、埋没の過程に差があると遺構の崩壊にも差があることを考えれば、調査時点の断面形態がそのまま掘削時の形態を残しているとはいいいきれない一面もっている。以上のことから、本遺跡で検出された土坑は、平面形は円形、断面形はフラスコ形を示すのが一般的で、中には平面形が楕円形、断面形がピーカー形のものが含まれていることを記すに止めたい。

#### 〔時 期〕

本遺跡で検出された土坑内から遺物として土器を出土したのは67.9%の53基であるが、その中で、遺構の所属時期を明確にするような土器が出土しているのは44.8%の35基のみで、その他の土坑は直接資料で所属時期の決定はできない。しかし、本遺跡では、土坑相互や住居跡と重複する土坑が多くあり、重複遺構との新旧関係から相対的な時期を推定できる土坑もある。それらを総合して決定した各土坑の所属時期は第6表の一覧表に記しておいた。また、時期別の遺構数は第7表に示した。それらの時期別とその位置関係は第254図に示した。

以上のことから時期別に考えてみよう。早期に属する土坑はない。出土遺物の中に早期の土器を含む例（A-11土坑・B-04土坑）があるが、他の時期の土器も伴出しているので、早期に属する土坑とはいいいきれない。

前期に属する土坑は11基検出されているが、この中には初葉の土器を出土している7基と、末葉の土器を出土している4基が含まれている。しかし、前者の7基の中には住居跡の可能性



第7表 時期別の土坑数

早 期	前 期		中 期					中期以降	晩 期	時期不明
	初 葉	末 葉	初 葉	前 葉	中 葉	後 葉	末 葉			
0	7	4	9	1	12	1	5	19	1	19
	8.97%	5.12%	11.53%	1.28%	15.38%	1.28%	6.41%	24.35%	1.28%	24.35%

があるとしたB-15土坑とC-16土坑が含まれているので、所謂「土坑」は5基のみである。位置関係をみると、Aブロックでは北端部にA-06土坑とB-04土坑があり、いずれも深さの割合に開口部が広く、断面形がフラスコ形気味を示す。BブロックにはH-41土坑-1・F-44土坑-2・F-46土坑-2があり、規模や断面形はAブロックのそれに近似している。末葉の土坑はAブロックに1基、Bブロックに3基あり、AブロックのI-19住居跡内土坑-1の内部からは人骨が7体出土している。この時期の土坑は深さの割合に開口部径の小さい土坑が多い。

本遺跡では中期の土坑がもっとも多く、何んらかの関係で中期に関連する土坑も含めると、47基がこの時期に入り、全体の60.25%を占めている。この時期をさらに細分すると、初葉に属する土坑は9基で、Bブロックに1基（F-44土坑-3）ある以外は全てAブロックに位置し、特に、この時期の住居跡の周囲にある。前葉の土坑はBブロックに1基あるのみである。中葉の土坑は12基であるが、Aブロックに8基、Bブロックに4基位置している。Aブロックの8基は、住居跡の周囲にある4基と、A・B-10・11に位置する4基があり、この両者は規模に差があることから機能的な性格に差があるものと考えられる。Bブロックの4基は散在する在り方を示し、規模はAブロックに近い。後葉に属する土坑はBブロックに1基あるのみである。末葉の土坑は5基であるが、いずれもBブロックに位置し、南東向斜面に密集する在り方を示している。残る19基は中期の範囲内に入ることは明らかであるが、時期の決定資料を欠いている。

後期に属する土坑は検出されていないが、晩期に属する土坑がBブロックで1基検出されている。また、遺物の出土や他遺構との重複がないために所属時期を明確にし得ない土坑が19基ある。しかし、時期の明らかな土坑との関係でみると、大雑把な推定は可能である。特にAブロックの土坑はその可能性が強い。なかでも、第2地点の土坑は中期中葉と後葉に属する土坑のみであることから、中期以後とした5基と時期不明とした1基も中期中葉か後葉に属する土坑である可能性が強い。このことは規模や断面形がほぼ近いことから言えるだろう。その他住居跡の周囲にある土坑は、住居跡の所属時期に近い時期に入る可能性が大きい。おそらく、中期初葉～中葉の範囲に位置づけられるであろう。Bブロックの場合には一概に推定すること

はできない。なぜならば、住居跡が少ないことと、住居跡と離れた地点に土坑群を形成しているからである。しかし、この南東側斜面部の土坑群は前期初葉～晩期に位置づけられる土坑があるものの、主体が中期中葉～末葉であることを考えると、中期以降とした土坑はこの中期中葉～末葉の範囲に入る可能性が強いことを示すものであろう。

#### 〔廃棄と埋没について〕

本遺跡で検出された土坑の埋土には、多量の八戸火山灰や八戸浮石流凝灰岩が混入していることは前項で記したとおりであるが、堆積状況と埋没過程には様相を異にする何種類かの型がある。これを埋没過程でみると、①A型 人為的埋め戻しによる埋没、②B型 自然埋没が中心で、一部が人為的埋め戻しによる埋没、③C型 流れ込みや壁の崩落による自然埋没、の3型に大別することができる。これらの代表的な埋土の堆積状況を示す例は第253図に示した。

A型とした人為的に埋め戻された状況を示す土坑は34基の43.5%あるが、この中には、①底面付近には黒色土系の土が堆積し、その上層に八戸浮石流凝灰岩が開口部まで堆積している土坑—10基、②中間層に八戸浮石流凝灰岩が堆積し、その上下層に黒色土系の土が堆積した土坑—7基、③最下層に八戸浮石流凝灰岩が堆積した土坑—6基、④最上層に凸レンズ状に八戸火山灰が堆積した土坑—10基が含まれている。

B型は22基の28.2%みられるが、この中には廃棄直後に一部を埋め戻す例と自然流入で埋没し凹み状の所に残土を投棄する例があり、この型も広義の意味ではA型に近い。

C型はB型と同じく22基で28.2%を占めている。

以上の状況を総合して考えると、何んらかの形で多少とも人為的に埋め戻している土坑が56基の71.79%あり、今、ここで問題になるのはA型とB型であることが判る。A型に入る土坑はAブロック・Bブロックともにみられるが、先の①・②はBブロックに多く、Aブロックに少ない傾向があり、③は逆にAブロックに多くてBブロックに少なく、④はAブロックのみにみられる。掘り上げた土坑を埋め戻して行く行為とその背景はなんであろうか。A型①は廃棄(使用しない)した土坑を一気に埋め戻したことを表わすものであろう。それは、今仮に、本遺跡で土坑を掘削したとすると、最初に掘りだされるのが黒色土系の土であり、これがA型①の最下層に相当する。次いで掘られるのが八戸火山灰や八戸浮石流凝灰岩であり、これがA型①の上層や②の中層・③の下層に相当する。このことは、A型①～③のような状況で混入する八戸火山灰なり八戸浮石流凝灰岩はどこかを地中深く(調査地点では地表面より約80cm下層)掘り込まないと得られない土であることから考えると、埋め戻された土坑の近くに新しい土坑を掘削し、その際掘り出された土を隣りの古い土坑に投棄したために、結果的に埋め戻された状



況を示しているものと考えられる。この考え方が正しいとすれば、土坑は何年間も継続して使用するのではなく、使用目的が済むと廃棄する可能性があり、一度だけしか使っていないことが考えられる。また、A型④はAブロック第2地点にみられる状態である。中央部に落ち込んだように堆積する八戸火山灰の入り方に疑問を感じている。普通に自然流入によって埋没したのであれば、八戸火山灰の状況が不自然である。やはり人為的な堆積状況を示している可能性が強い。これは、土坑内に腐敗性の強い「何か」が貯蔵された後、上面が土饅頭状に盛土されたために、内部の貯蔵物が腐敗することによって、盛土部分が陥没してこのような堆積状況を示したのではないだろうか。岩手県北部では、冬期間に根菜類を貯蔵する方法として土中に埋める方法（土坑貯蔵）を現在でも使用している。この方法によると、春暖を迎えると早目に取りださないと、貯蔵物が腐敗し、土饅頭状の盛土が陥没し、A型④と同じような埋土堆積状況を示す可能性が強い。

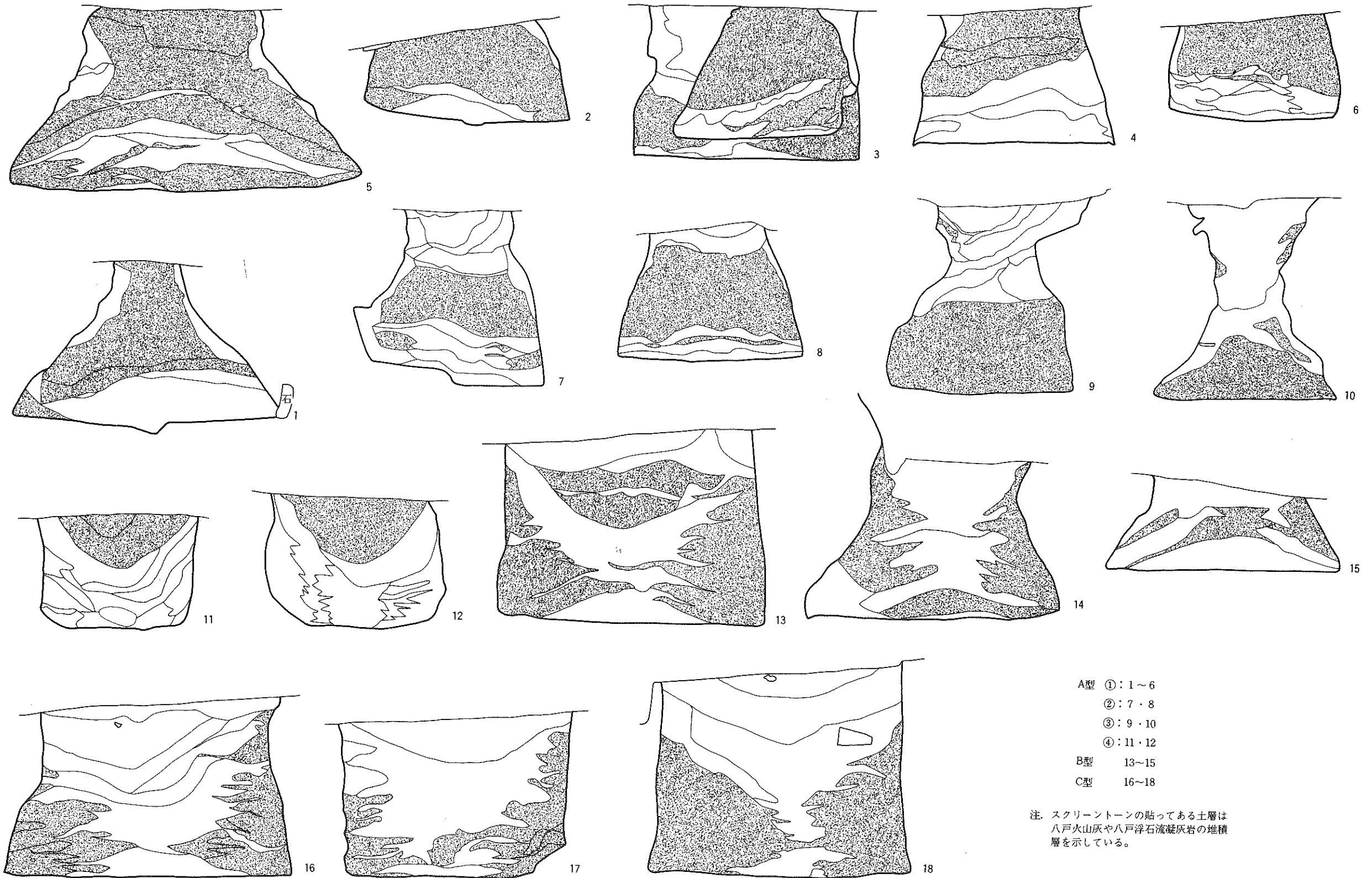
B型には第253図の13のように自然流入によって埋没する途中で掘り上げた土を窪地に投棄しているものと、14のように土坑が廃棄された時に若干の残土が投棄されているが、その後は自然状態で埋没した土坑も含まれるが、何んらかの形で人為的作用を受けている土坑である。

C型にも八戸火山灰や八戸浮石流凝灰岩が混入しているが、このような混入状況は壁の崩落による混入堆積の状況を示しているのであり、人為的に埋め戻した状態を示していない。

#### [小 結]

以上、本遺跡で検出された土坑78基について、各項目ごとに若干のまとめをしたが、ここで簡単な総括をしておく。

まず、本遺跡での土坑の分布状況はAブロック・Bブロックに大別されるが、それぞれの中で密集する地点のあることが判り、それらが、時期的な関わりの中で密集範囲を形成していくらしいことが判明した。たとえば、Aブロック第1地点は前期初葉、第2地点は中期中～後葉、第3地点～第6地点は前期末葉～中期初葉と中葉にそれぞれ位置づけられる。したがって、Aブロックでは住居跡と至近距離にあり、住居跡と有機的な継がりの中で構成される土坑群（この例は第3地点～第6地点）と、住居跡と離れた地点に土坑だけで遺構群を構成する土坑（この例は第1・2地点）に2大別される。この現象は時期こそ違え川向Ⅲ遺跡（九戸村・晩期）<sup>29</sup>や鳩岡崎遺跡例にも見ることができる。本遺跡の場合には、形態や規模の違いから考えると、機能的性格に差があるのではないかと考えている。端的に言えば、第2地点の11基は墓塚の可能性が考えられる。第1・3～6地点の土坑は貯蔵穴としての性格が強いであろう。人骨を出土したI-19住居跡内土坑-1は、本来は貯蔵穴が目的の土坑で、不慮の大量死によって墓塚として転用されたものであろうと考えている。Bブロックの土坑は地点でみると平坦部と斜面部

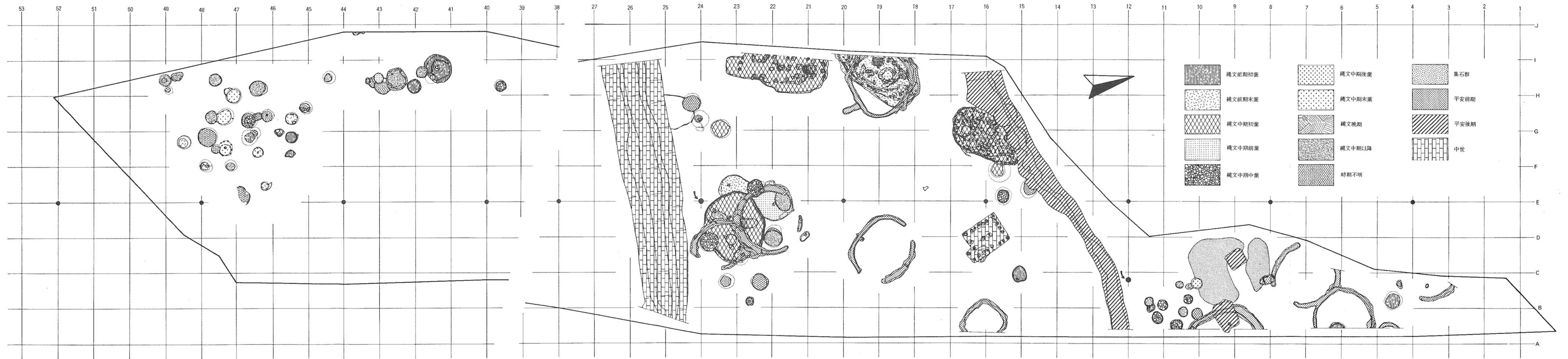


- A型 ①：1～6  
 ②：7・8  
 ③：9・10  
 ④：11・12  
 B型 13～15  
 C型 16～18

注. スクリーントーンの貼ってある土層は  
 八戸火山灰や八戸浮石流凝灰岩の堆積  
 層を示している。

第253図 土坑の埋土堆積状況





第254図 遺構の時期区分図

があるが、形態や規模・時期ともに大きな変化はない。しかし、住居跡と離れた地点に土坑だけで遺構群を構成するらしい様相を示していることは、Aブロック第2地点の土坑群と近いが、埋土の堆積状況が全く異なり、やはり貯蔵穴的性格が強いものと考えられる。

#### 参考文献

- ①渡辺 誠 『縄文時代の植物食』 雄山閣 1974  
 渡辺 誠 「雪国の縄文家屋」 『小田原考古学会報』 小田原考古学会 1980
- ②高橋 文夫
- ③中村 良幸 「大形住居」 『縄文文化の研究—8—P 134~145』 雄山閣 1982
- ④相原 康二 『東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書 XV 江釣子村鳩岡崎遺跡』 岩手県教育委員会 昭和57年
- ⑤四井 謙吉 「二戸バイパス関連遺跡調査報告書二戸市長瀬B遺跡」 『岩手県埋文センター報告第36集』 岩手県埋蔵文化財センター 昭和57年
- ⑥関 豊 『中曾根Ⅱ遺跡発掘調査報告書』 二戸市教育委員会 昭和56年
- ⑦高橋 文夫他 「松尾村長者屋敷遺跡—遺構編Ⅰ・Ⅱ」 『岩手県埋文センター報告書第12・20集』 岩手県埋蔵文化財センター 昭和55年・56年
- ⑧四井 謙吉他 「東北縦貫自動車道関係遺跡発掘調査報告書 松尾村野駄遺跡・寄木遺跡・西根町崩石遺跡」 『岩手県埋文センター報告第11集』 岩手県埋蔵文化財センター 昭和55年本報告書
- ⑨高橋与右エ門
- ⑩相原 康二 「東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書 XV 江釣子村鳩岡崎遺跡」 『岩手県文化財調査報告書第70集』 岩手県教育委員会 昭和57年
- ⑪四井 謙吉他 「東北縦貫自動車道関係遺跡発掘調査報告書 安代町荒屋Ⅰ遺跡・荒屋Ⅱ遺跡・越戸Ⅱ遺跡」 『岩手県埋文センター報告第21集』 岩手県埋蔵文化財センター 昭和56年
- ⑫松野 恒雄  
 本 沢 慎 輔 「御所ダム建設関連遺跡発掘調査報告書 零石塩ヶ森Ⅰ・Ⅱ遺跡」 『岩手県埋文センター報告第31集』 岩手県埋蔵文化財センター 昭和57年
- ⑬八木 光則  
 千田 和文他 『大館遺跡群—昭和55年度発掘調査概報—』 盛岡市教育委員会 1981
- ⑭高田 和徳 『一戸バイパス関連遺跡発掘調査報告書—Ⅲ—馬場平2遺跡』 一戸町教育委員会1983
- ⑮鈴木 優子 「荒谷A遺跡発掘調査報告書」 『岩手県埋文センター報告第57集』 岩手県埋蔵文化財センター 昭和58年
- ⑯小平 忠孝他 「臥屋敷ⅠA遺跡発掘調査報告書」 『岩手県埋文センター報告第61集』 岩手県埋蔵文化財センター 昭和58年
- ⑰中村 良幸 『観音堂遺跡—第2次発掘調査概報—』 大迫町教育委員会 1981
- ⑱高橋 正之他 「御所ダム建設関連遺跡発掘調査報告書 盛岡市繫—Ⅲ・Ⅳ遺跡他」 『岩手県埋文センター報告第13集』 岩手県埋蔵文化財センター 昭和55年
- ⑲高橋 文夫  
 三浦 謙一他 「都南村湯沢遺跡」 『岩手県埋文センター報告第2集』 岩手県埋蔵文化財センター
- ⑳ 縄文時代検討会資料 於秋田県能代市 1981 本堂氏よりの御教授を受けた。
- ㉑本堂 寿一 「八天遺跡—本文編—」 『北上市文化財調査報告第27集』 北上市教育委員会



- 昭和54年
- ② 『埋文センター調査略報昭和56年度』 『岩手県埋文センター報告第33集』  
岩手県埋蔵文化財センター 昭和57年
- ②③ 上野 猛 『御所ダム建設関連遺跡発掘調査報告 盛岡市繫-V遺跡他』 『岩手県埋文センター  
中川重紀 報告第30集』 岩手県埋蔵文化財センター 1982
- ②④ 司 東 真雄 『北上市の原始・古代の遺跡』 北上市立博物館・北上史談会 昭和49年  
菊池敬治郎他
- ②⑤ 注②④に同じ
- ②⑥ 江釣子村教育委員会 『縄文時代前・中期の大集落跡を確認』 『わらびて第10号』  
岩手県立埋蔵文化財センター 1983
- ②⑦ 『江刺郡稲瀬村樺山遺跡調査報告』 『岩手県文化財調査報告第3集』  
岩手県教育委員会 昭和29年  
鈴木孝志他 『北上市稲瀬町樺山遺跡緊急調査報告』 『文化財調査報告第7集』  
北上市教育委員会 昭和44年
- ②⑧ 未 報 告 千厩町教育委員会畠山篤雄氏よりの御教授を受けた。謝意を表する
- ②⑨ 吉 田 洋 『川向Ⅲ遺跡発掘調査報告書』 『岩手県埋文センター報告第26集』  
高橋与右エ門 岩手県埋蔵文化財センター 1981
- ③⑩ 相 原 康 二 前掲 注⑩に同じ

## (2) 遺物

本遺跡の調査で出土した縄文時代の遺物として土器・土製品・石器・石製品があるので、ここでは1)土器・土製品、2)石器・石製品に項を分けて記述する。

### 1) 土器・土製品

本遺跡の調査で出土した縄文土器は多数にのぼるが、本報告にはその中から実測個体500点、拓本個体616点を掲載したが、それらの中には縄文時代早期～晩期までの土器が含まれている。したがって、分類にあたってはそれらの時期が反映されるように留意して、つぎのような群構成とした。

- 第Ⅰ群土器 縄文早期に属する土器群で、貝殻文系、沈線文系、条痕文系、細隆起線文、条線文系、無文系の土器が含まれている。なお、この群には縄文の施文された土器は含まない。
- 第Ⅱ群土器 縄文前期に属する土器群であるが、その中でも底部形態が尖底や丸底のものを中心とした、前期初頭の土器である。
- 第Ⅲ群土器 本群には円筒式土器の範疇に含まれる土器を一括しているため、この中には前期から中期に属する土器まで含まれている。しかし、この群全体で見ると中期に入る土器が中心である。本遺跡で出土した土器の主体を占める。
- 第Ⅳ群土器 ここには大木式土器の範囲に入る土器を一括している。この群の土器は第Ⅲ群の土器と共伴して出土したものであり、量的には少ない。
- 第Ⅴ群土器 晩期に属する土器で、量的にはもっとも少ない。

以上の順序に従って記述して行くが、第Ⅰ群と第Ⅱ群についての特徴や内容は前項の北端部包含層で記述しているので、ここでは改めて触れないことにする。したがって、第Ⅰ群と第Ⅱ群に入る土器の図版は先の第108図～第132図を参考にしてほしい。

### 〔第Ⅰ群土器〕

本群に入る土器は北端部包含層から出土したが、この中には貝殻文・沈線文・条線文・条痕文・無文等の土器が含まれており、1類から7類までに細分されることから、全てが同一の範囲に包括される土器でないことは明らかであろう。したがって、各類別ごとに他遺跡での出土例との比較からその属性について考えてみる。

1類は貝殻文を付す土器を一括しているが、さらに細分されている。1類A種とした土器は岩手県内での出土例はないらしい。東北北半では青森県砂沢平遺跡<sup>①</sup>、同県螢沢遺跡<sup>②</sup>、秋田県鳶ヶ長根Ⅳ遺跡での出土例がある。また、函館市住吉町遺跡出土の土器群<sup>③</sup>、福島県常世遺跡出土の土器にも<sup>④</sup>若干似た要素をもっている。すなわち、砂沢平遺跡の第Ⅰ群B類土器、螢沢遺跡の早期第Ⅱ類土器、鳶ヶ長根Ⅳ遺跡第Ⅰ群土器が該当するものと考えるが、全てが全く同じ特徴



をもっているわけではない。たとえば、他遺跡でみられる連続する山形沈線文をもつ土器は本遺跡では出土していない。他遺跡で出土した本類に相当する土器の中には、本遺跡での1類A種・2類・4類A種・5類の土器が共伴して出土している。この状況は先の3遺跡とも同様であることから考えると、本遺跡でもこれらが共伴する土器群である可能性が強いことを示すものであろう。そのことから考えると、先の山形沈線文を付す土器が本遺跡では出土していないことは事実であるが、4類Aとした沈線文をもつ土器が出土していることから考えると、ほぼ同じ特徴をもつものといえるだろう。しかし、その中で第113図87・88のように貝殻腹縁を使用した細沈線文は出土例がないようである。その他の①貝殻刺痕は口縁と平行または直交や斜交して数段付され、斜交の場合は横位や縦位の羽状を示す場合が多い。②口縁は平縁・波状縁があり、口唇に貝殻刺痕を入れたり、指頭押圧による刻み目を付す場合が多い。③内外面ともに貝殻条痕を入れるものがあるが、量的には少ない。④口縁部文様帯の下部に列点を付すものがある。⑤沈線文や無文の土器もある。⑥断続的な貝殻条痕文を付す土器がある。等といった事柄は先の3遺跡とほぼ同じ特徴を具備しているものと考えて大過ないであろう。このような特徴をもつ土器に対して、三宅徹也氏は先の螢沢遺跡調査報告書の中で「螢沢AⅡ式」という名称を与えた上で、吹切沢式より後出する技法であるとしている。また、名久井文明氏は新形式としての提唱はないが、このような特徴は吹切沢式土器に伝統的にみられる手法であるとした上で、「吹切沢式系統の末期に位置づけられる土器群」であるとしている。筆者はこの種の土器に対する知見が浅いので、先の両氏の考えに沿って、本群1類A種・2類・4類A種・5類は早期中葉に位置づけられる吹切沢式系統の土器として理解し、型式名でいうならば三宅氏の螢沢AⅡ式にもっとも近似している土器群としておく。

1類B種は2条の平行沈線の間をそれと平行する貝殻腹縁文を充填する手法で施文された土器であり、このような特徴は物見台式や明神裏Ⅲ式にみられる施文法であり、この土器もまた、ほぼ両者のいずれかに該当するものと思うが、本遺跡では口縁部破片を含まないことや、小破片が4片だけであることから全体的な文様構成や器形が不明であるので、いずれとも決し難い面もあるので、先に両者のいずれかに属すと記したのでこれで止めておく。

1類C種は体部～底部まで斜位または縦位の貝殻腹縁文をもつ特徴をもつ。このような特徴は現在の所寺の沢式土器の特徴として知られている。しかし、同じ二戸市の長瀬B遺跡<sup>⑧</sup>で出土した寺の沢式相当の土器には、地文としての貝殻条痕文が本遺跡のそれと比較して少ないという差もみられる。本遺跡の1類A種相当の土器を出土した先の螢沢遺跡の出土例では、地文として条痕を付す土器が多くあり、ほぼこの例に近いであろう。以上のことから、本種は寺の沢式に相当する土器群と理解し、早期中葉に位置づけておく。

I群3類は、所謂貝殻背圧痕をもつ土器であるが、この手法は函館市住吉町遺跡<sup>⑨</sup>での住吉町



下層式といわれる1群の土器に多用されている。住吉町下層式土器の特徴をみると、先の蜚沢AⅡ式の特徴と良く一致する部分が多く、現に砂沢平遺跡出土の蜚沢AⅡ式相当の土器の中には貝殻背圧痕文の土器が含まれている(同報文第36図140・141・143)。これから考えると、本遺跡の本類もまた、本遺跡I群1類A種に共伴する土器である可能性を示すものであろう。なお、岩手県内での出土例としては種市町の大宮遺跡例が知られている。

4類A種については先に触れたとおり蜚沢AⅡ式の範囲に入るものであろう。B種はA種とC種の特徴を兼備していることから考えると、4類は全体が蜚沢AⅡ式に入る土器群と考えると大過ないであろう。

5類は無文土器であるが、ほぼ蜚沢AⅡ式に相当するであろう。

6類はA種・B種ともに器表に条線文を付した土器であり、ムシリI式や早稲田貝塚3類に相当する土器であろう。しかし、ムシリI式といわれる土器は、底部形態が平底であるといわれている。本遺跡での例は平底もある(第118図162)が、体部下位で強く屈曲して底部に移行し、底部が尖底風を示す例(第116図139、第118図158~161・163)のものがあるらしい。この形態はA種・B種ともに共通しており、この両種はほぼ同種に入る土器群であろう。器表の条線文をみると、中には文様を意識した可能性を示すもの(第116図121・128・136・150、第118図164・173・174)もあるが、例とすれば非常に少ないものである。青森県早稲田貝塚<sup>12</sup>では、本遺跡の本類とほぼ同じ様相を示す土器と、沈線と列点を組み合わせたものや、細隆起線文の土器が共伴しているが、本遺跡では列点文を付すものは1点も含まれていない。岩手県内での本類に相当する土器で列点文をもつ例は下猿田I遺跡や大渡野遺跡<sup>13</sup>にあり、この二遺跡での出土例と本遺跡での出土例を比較すると、逆に二遺跡では条線文だけのものが少ないか、下猿田I遺跡例のように全くないという相違がある。しかし、青森県鳴戸遺跡<sup>14</sup>での出土例は本遺跡例に近い様相を示し、列点文を付すものや意識的な文様構成を示すものはなく、乱雑に条線文を付すものだけが出土している。このことは下猿田I遺跡や大渡野遺跡と本遺跡は時期を異にしている可能性を示すものであろう。おそらく、本遺跡例より下猿田I遺跡や大渡野遺跡例は後出する要素であろう。この事については熊谷常正氏<sup>15</sup>も同じようなことを指摘している。以上のことから考えると、本遺跡出土の本類土器は広義の意味でムシリI式土器に相当するものと考えられる。岩手県内での出土例はあまり多くない。特に本遺跡のようにまとまった出土はない。

7類とした土器は、前掲の早稲田貝塚では先のムシリI式土器とした条線文土器と共伴している。岩手県内の遺跡では野中遺跡、下長谷地遺跡、下猿田Ⅲ遺跡、野駄遺跡、土弓遺跡、オミ坂遺跡<sup>17</sup>等で出土しているが、いずれも断片的な資料のみで、底部が残存しているのは本遺跡例のみである。本遺跡で出土した土器の底部形態は丸底であり、この形は青森県売場遺跡<sup>23</sup>での



出土例と同じである。このような土器と同じ文様をもつ土器として、東北南半では楓の木Ⅰ式、<sup>24</sup>関東地方では野島式が知られているが、これらの遺跡例と必ずしも同じ特徴をもつとはいえない。<sup>25</sup>細隆起線の表出技法は、器表全面に条痕を付した後、細い粘土紐を貼りつけその両側を篋状工具で撫でて表出しており、この技法は野島式に近い要素である。野駄遺跡例や野中遺跡例では全面に化粧粘土を塗りつけた後、篋状工具の先端で掻き取って表出しており、この技法は楓の木Ⅰ式に近い技法といえるだろう。このようなことを総合して考えると、本遺跡で出土した7類は、ムシリⅠ式や野島式の中の細隆起線をもつ土器とほぼ併行関係にあるものと理解される。

以上のことから、本遺跡で第Ⅰ群とした土器は、古い方から寺の沢式そして蝸沢AⅡ式と次に物見台式系の土器と続き、細隆起線文+条線文をもつ野島式やムシリⅠ式にほぼ相当する土器に大別される。

## 〔第Ⅱ群土器〕

本遺跡出土の本群土器は①胎土にいずれも多量の繊維を混入している、②器表に縄文を付し、内面に縄文や条痕を付すものを含まない、③口唇や刺突や押圧等による刻みをもたない、④底部形態は尖底と平底がある等といった特徴をもっており、このことから考えると、早稲田4類<sup>26</sup>や赤御堂式<sup>27</sup>に代表される早期末葉の縄文施文土器群とは別種と考えられ、前期初葉に位置づけられる土器群と考えることができるであろうが、出土した土器には地文として多種類の縄文が使用されており、その種類や他の施文法との組み合わせによって7類に細分されている。したがって、全て同時期に共伴する土器群であるかは定かでないので、次にその属性について考えてみる。

4類とした土器について考えてみよう。この土器の特徴は①口縁に波状縁と平縁があり、口縁部や底部付近に沈線や押し引き沈線・列点による文様をもつこと、②底部形態には尖底・丸底風尖底・乳頭状突起のつく丸底風尖底がある、③胎土には多量の繊維を混入し、焼成は一般に良い、④地文として単節斜行縄文・撚り戻し縄文がある、といったことがあげられる。このような土器の岩手県内での出土例はないらしい。東北北半での出土例としては青森県早稲田貝塚<sup>28</sup>や鷹架遺跡<sup>29</sup>、北海道春日町遺跡<sup>30</sup>等が知られている。早稲田貝塚では6類a・b、鷹架遺跡では第Ⅱ群A類・B類、春日町遺跡では第Ⅱ群A類・B類としている土器がそれぞれであり、春日町遺跡では春日町式と命名して報告している。これらの土器群の特徴はほぼ同様であり、本遺跡の4類A種～D種の特徴とほぼ同様である。たとえば、早稲田6類の特徴をみると、①口縁には波状縁と平縁がある、②底部形態は尖底である、③沈線・押し引き沈線によって施文される、④地文は単節斜行縄文が主体、等といったことがいえ、この特徴は本遺跡例とも一致する。春日

町遺跡でもほぼ同じ特徴があるが、地文として単節斜行縄文の他に、ループ文や羽状縄文をもつものもある。鷹架遺跡例でもほぼ同様であるが、地文として菱形を示す羽状縄文やループ文があり、春田町例に近いといった特徴は本遺跡例の特徴とはほぼ一致している。このことから、先の3遺跡例と本遺跡の4類A種～D種はほぼ同種の土器群と考えられ、時期的に並行関係にあるものと考えられる。また、他遺跡例では、沈線等による文様をもたない縄文だけを付した土器も共伴している。使用される縄文は沈線文をもつそれと同じである。このことを本遺跡例でみると、単節斜行縄文を付す1類、羽状縄文をもつ2類が4類に共伴する可能性がある。しかし、沈線文をもたない土器で波状縁を示す個体がないことを考えると、別種であるかも知れない。同じ4類の中でE種とした土器は、沈線による文様をもつ点では先のA種～D種と同じであるが、平行沈線とその間を埋める2条の連続山形沈線を付すことが特徴であり、所謂「コンパス文」の変形と理解される。コンパス文を付す土器の岩手県内での出土例は沢内遺跡で1点出土しているのみで他にはないらしい。他県の出土例では北海道石川野遺跡例がある<sup>31</sup>。石川野遺跡例は非常に端整なコンパス文であり、本遺跡例や沢内遺跡例とは若干差がある<sup>32</sup>。おそらく、コンパス文のくずれた文様であろう。この土器群の特徴は関東地方の関山式に類例が多くみられることから、ほぼこの時期に平行する土器と推定される。

7類としたループ文をもつ土器は、本遺跡では少量である。本遺跡の場合には体部にもループ文をもつものと、口縁部に数段付すものがある。この縄文を他遺跡での共伴例でみてみると、本遺跡4類相当にも共伴すると報告されていることから、本類も本遺跡4類と共伴する土器であろう。

3類とした撚糸文を付す土器について考えてみよう。3類は口縁部に絡条体圧痕をもつものともたないもので細分され、絡条体圧痕をもたないものを基本種としてA種としている。本類は底部形態が尖底という特徴をもっている。岩手県内での出土例として沢内B遺跡の第I群B種2aがあるが、底部形態は定かでない。岩手県内でのそれ以外の出土例はないらしい。青森県の例としては、早稲田貝塚6類C種にみられるが、口縁部の絡条体圧痕はない。沢内B遺跡例の場合は、単節斜行縄文、結束羽状縄文、非結束羽状縄文等と共伴したもので、それ単独の土器群ではない。早稲田貝塚例もほぼ同じことがいえる。器表に撚糸文をもつ土器群として深郷田式土器の存在が知られているが、深郷田遺跡の報文によれば、深郷田式には尖底のものを含まないことも特徴の一つであるとされている。熊谷常正氏は先の沢内B遺跡の第I群B種2aと本類は近い土器とし、深郷田式に通じる所があるとしながらも、沢内B遺跡よりも後出する位置を与えている。このようなことから、ここでは底部形態に違いがあるものの、一応本類を深郷田式に近い土器群と理解し、A種よりB種を後出する手法として考えたい。

3類C種とした土器は、長七谷地第Ⅲ群土器にほぼ相当するものと考えられるが、体部縄文



に捺糸文が付され、口縁部に単節斜縄文という組み合わせは長七谷地貝塚例と異なる。

5類とした土器は、口縁部に不整綾絡文を付す土器であるが、この種の土器は新城館遺跡<sup>37</sup>や塩ヶ森I遺跡<sup>38</sup>に類例があるが、この両遺跡出土の土器は必ずしも同種とは言えない。それは新城館遺跡例<sup>38</sup>は丸底であるし、塩ヶ森I遺跡例は平底である。岩手県北部での出土例としては野田村上明内遺跡<sup>39</sup>に好資料がある。この遺跡出土の土器はいずれも平底で、塩ヶ森I遺跡例に近い様相を示している。これらの土器と本遺跡出土のものを比較すると、本遺跡例の完形土器は平底であることなどは塩ヶ森I遺跡や上明内遺跡例と近い状況を残している。熊谷常正氏は前掲論文の中で、塩ヶ森I遺跡出土の土器を円筒下層a式的要素が強いとしている。このように、口縁部に不整綾絡文をもつ土器は、円筒下層a式や大木1式土器の後半部分に認めることができる。本遺跡例もこの両者のいずれかに相当する土器群と考えられ、ここでは一応円筒下層a式に相当する土器群としておく。

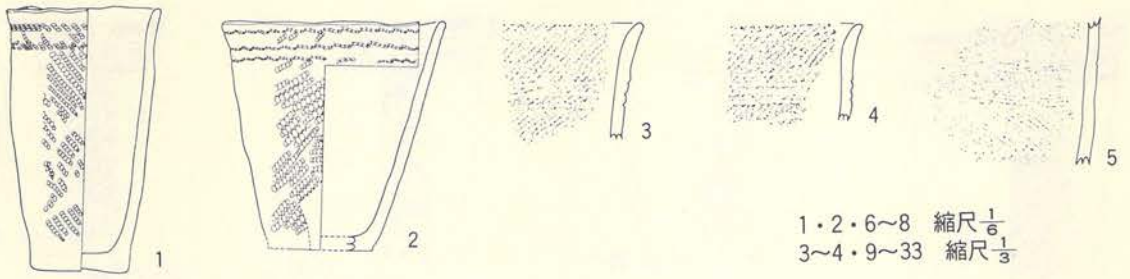
6類は、体部地文として不整綾絡文を付した後、器面を磨消し、一部では口唇に刻みを付す。この特徴は5類の器面に磨消を入れると本類と同じになる。したがって、本類は前の5類と同じ土器と考えることができる。

以上のことを踏まえて第Ⅱ群土器全体の位置づけを考えてみると、長七谷地第Ⅲ群相当とした3類C種を最古として、春日町式や早稲田6類a・b相当や石川野遺跡のコンパス文に近いとした4類土器が続き、次いで沢内B遺跡I群B種相当の1類・2類、次に深郷田式に近いとした3類A・B種があり、最後に円筒下層a式相当を考えられる5類・6類という序列が考えられる。このようなことから、少なくとも早稲田5類相当の土器を含まないので、これら全てが前期初葉に位置づけられるであろう。筆者はかつて沢内B遺跡の報文の中で、沢内B遺跡出土の第I群B種を早期末葉～前期初葉に位置づけられると報告したが、今度の上里遺跡の調査結果によって、沢内B遺跡例も前期初葉に入る土器群と理解するに至った。ここで訂正を加えておく。

### 〔第Ⅲ群土器〕

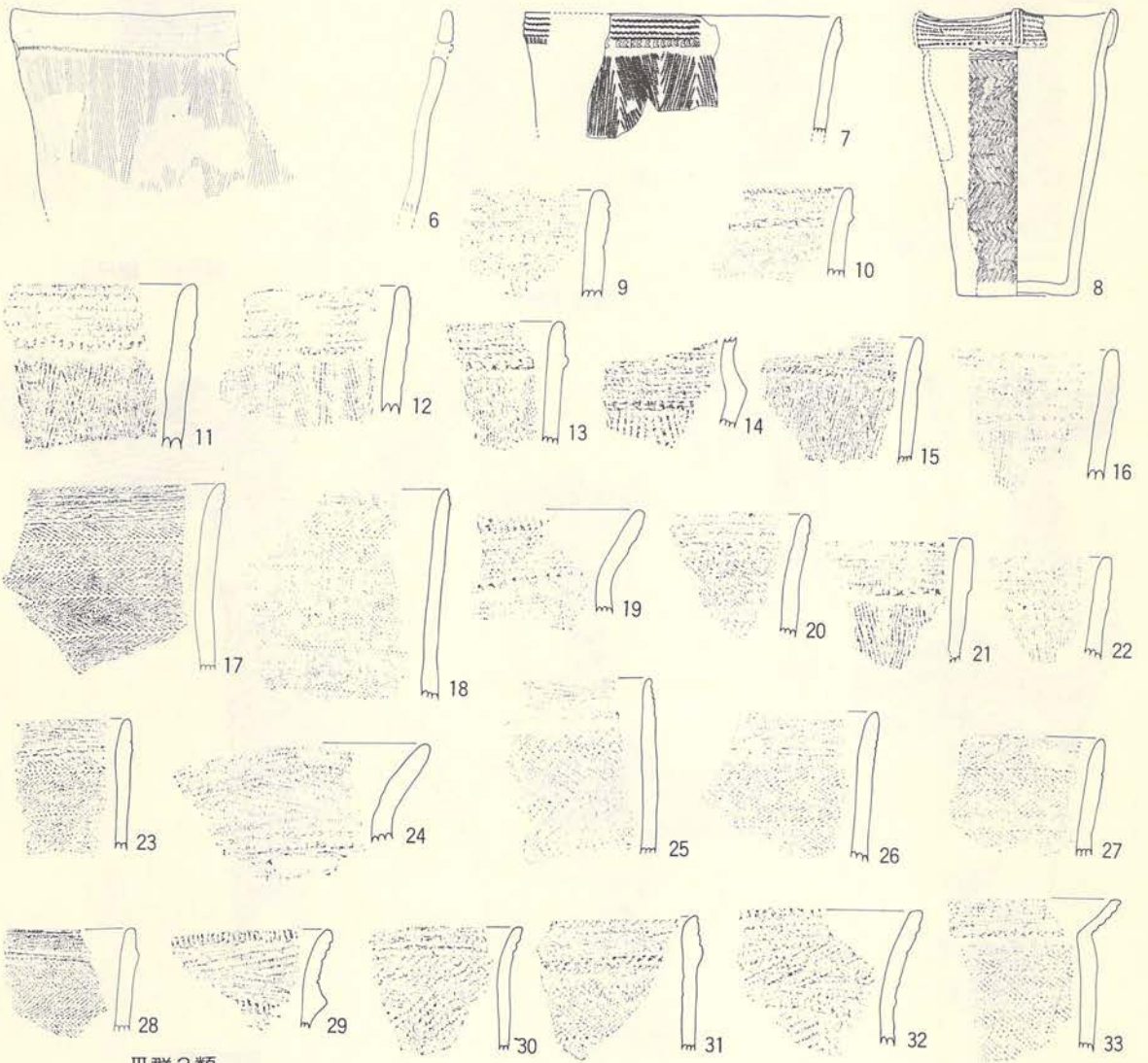
第Ⅲ群土器には円筒式土器に入るものを一括している。本群全体を概観すると、前期末葉～中期までであるが、主体をなすのは中期に入る土器である。円筒式土器の編年的細分は、基本的なことは長谷部言人氏<sup>40</sup>や山内清男氏<sup>41</sup>によってなされ、それを基礎にして江坂輝弥氏<sup>42</sup>と村越潔氏<sup>43</sup>によってほぼ確立されている。

ここでは、江坂氏や村越氏の編年を基準にして分類した。



1·2·6~8 縮尺  $\frac{1}{6}$   
 3~4·9~33 縮尺  $\frac{1}{3}$

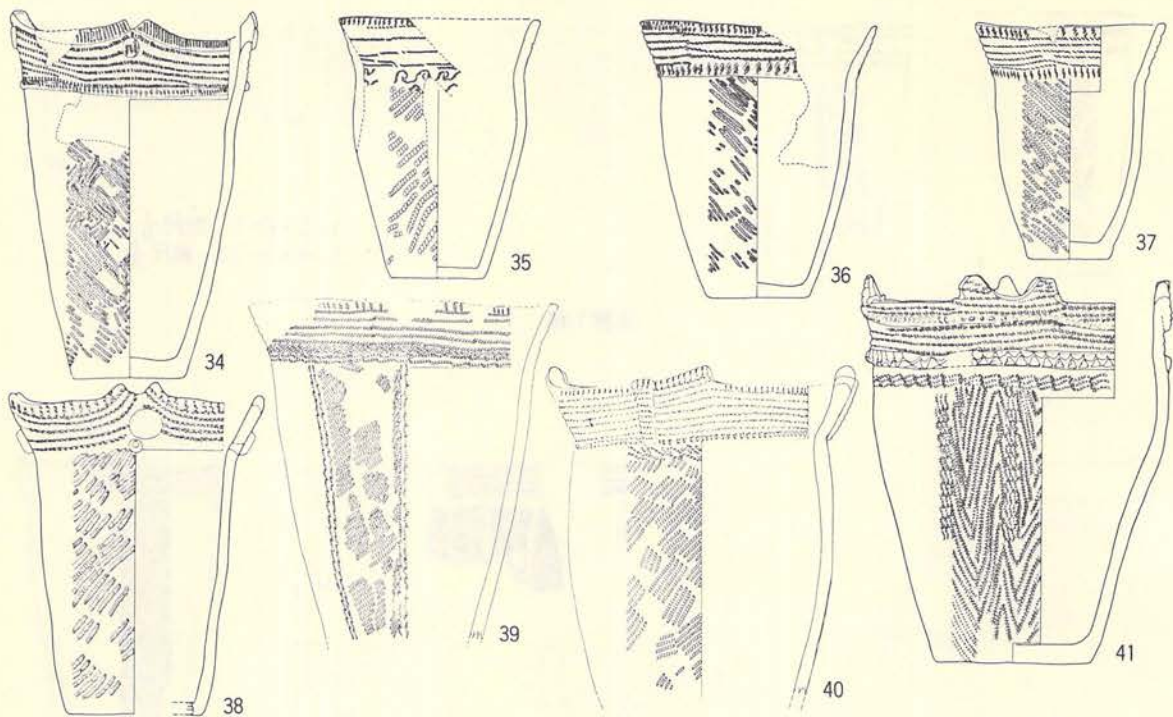
Ⅲ群1類



Ⅲ群2類

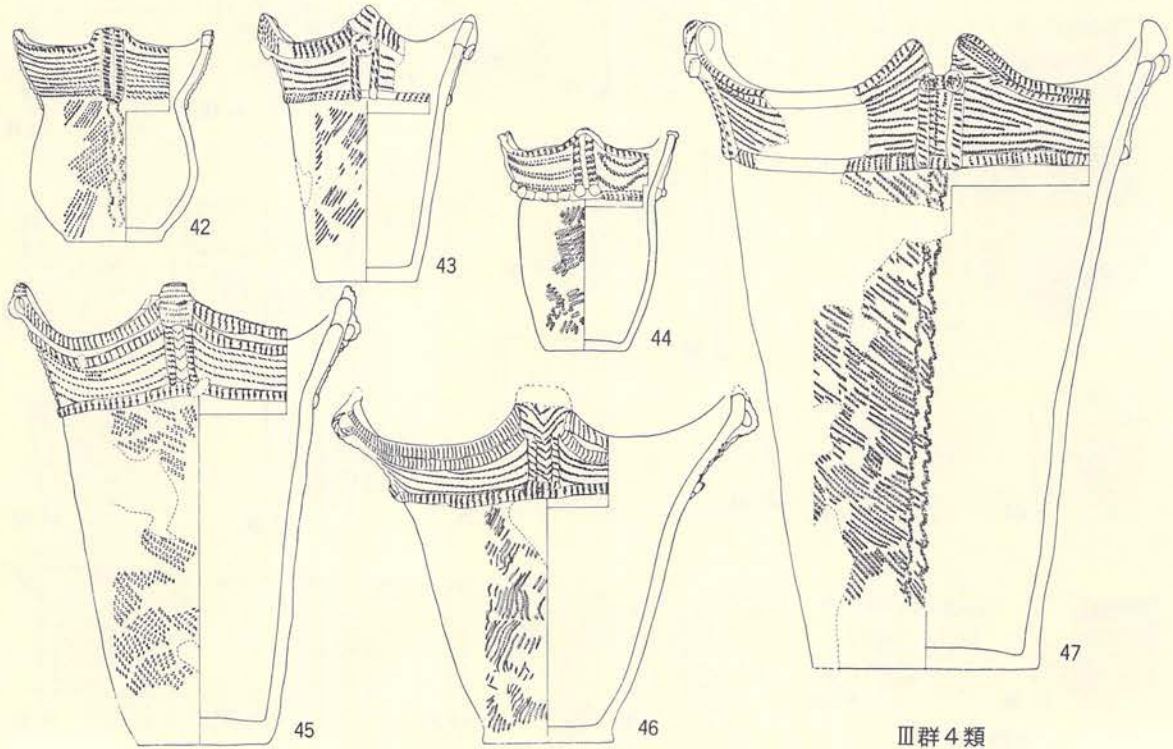
第255図 土器分類図





34~47 縮尺  $\frac{1}{6}$

Ⅲ群3類



Ⅲ群4類

第256図 土器分類図

### 1 類 (第255図1～5)

ここには円筒下層c式相当とおもわれる土器を入れたが、2点(1・2)の完形土器が含まれている。本類に直接伴う土器はなく、A-12溝跡や住居跡内から破片として出土したものが多く、本類の特徴は1・3・4ともに口縁部に数条の原体側面圧痕文が横位に全周するように付されることである。体部の縄文は原体LR・RLの横回転による斜行縄文である。器形はほぼ円筒形を示す。2は口縁部に全周する横位の綾絡文を付す土器で、前者より古くなる要素をもっているが、取り合えずここに入れておく。5は口縁部破片ではないが、体部にスタレ状圧痕文を付すものである。器種は深鉢であろう。

### 2 類 (第255図6～33)

円筒下層d式に相当するとおもわれる土器であるが、その中でもd<sub>2</sub>式に近いものと考えられる。実測されたものは3個体で(6～8)その他はいずれも破片で出土している。口縁部の文様は原体の側面圧痕によるものだけであり、使用される原体は2段撚りL・Rか単軸絡縄体である。頸部には低い隆帯を付すものが多く、隆帯上には列点状の刺突をもつ。頸部に隆帯をもたない土器では、隆帯相当の位置に列点状の刺突をもつ例もある。体部の縄文は原体LRの単節斜行縄文・結束羽状縄文・木目状撚糸文・綾絡文をもつ木目状撚糸文等がある。器形は体部が軽く外傾し、口縁部は外反する。器種は深鉢だけであろう。

### 3 類 (第256図34～41)

円筒上層a式のもっとも古い部分か、円筒下層d<sub>2</sub>式の新しい部分に相当すると考えられる土器群である。口縁部文様は先の2類と同様横位の原体側面圧痕が付され、2類の中にみられた頸部の隆帯や列点状の刺突痕が本類にはなく、それと違って縦位の短かい原体圧痕文や横位の綾絡文を入れている。口縁には波状縁と平縁があり、口縁突起部に円形のボタン状貼りつけや縦位の隆帯を付すものもある。また、口縁端部には縦位の短かい原体圧痕文を付す。体部縄文は原体LR・RLの単節斜行縄文や、木目状撚糸文があり、中には綾絡文を付すものもある。器形は、所謂円筒形のものを含まず、体部が外傾し、口縁部は外反する。

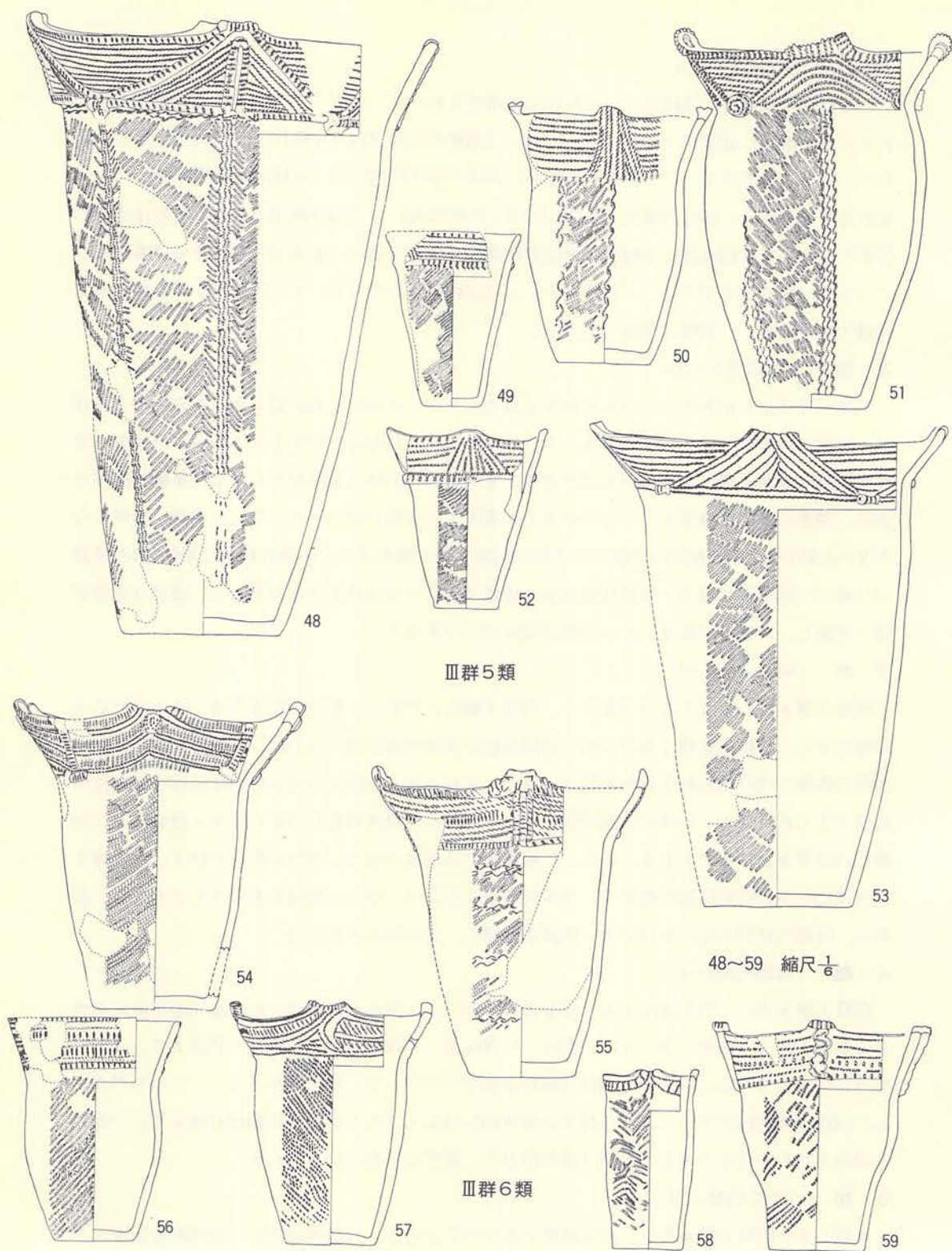
### 4 類 (第256図42～47)

円筒上層a式の一部を構成する土器と考えられる。口縁部文様は横位の原体側面圧痕が主であるが、3類より隆帯が多くなり、頸部・口縁端部・口縁突起部から縦位に頸部までといった部分に付されている。中には、口縁端部には貼りつけないで、単に肥厚させるだけのものがある。口縁は波状縁である。体部の縄文は原体LR・RL・LRLの単節や複節斜行縄文で、一部には綾絡文をもつものがある。器種は深鉢のみで、器形は3類と同じである。

### 5 類 (第257図48～53)

本類もまた円筒上層a式の一部を構成するものであろう。口縁部文様は、原体側面圧痕文が





第257図 土器分類図

中心であることは3類と近いが、圧痕文が横位と口縁突起部から斜位で頸部に向って付している。中には斜位の隆帯を貼りつけそれに並行する様に圧痕文を付すものもある。口縁はほとんど波状縁であるが、それほど高い突起ではない。体部の縄文は原体LR・RLによる単節斜行縄文で、綾絡文を付す例もある。器種や器形は4類のそれと同じである。

#### 6 類 (第257図54~59)

本類には円筒上層 a 式の標準的なものを入れた。口縁部文様は、隆帯が少なく、原体の側面圧痕文が主である。圧痕文は横位と、横位の間を縦位で充填する短かい圧痕文を付すのが特徴である。隆帯を付す場合は頸部を全周するものと口縁部突起から頸部に垂下するものである。体部の縄文は原体LR・RL・LRLによる単節や複節の斜行縄文である。1例だけ縦位の綾絡文をもつものがある。器種や器形は5類とほとんど差がない。

#### 7 類 (第258図60~67)

本類もまた円筒上層 a 式の標準的なものであるが、口縁部文様は、隆帯が少なく、原体圧痕文が中心である。圧痕文は横位と縦位や斜位そして山形状蛇行文等があり、それらの組み合わせで構成される。口縁はほとんど波状を示す。器形は6類とほとんど差がないが、67のように吹浦型の変形とおもわれるものもある。体部縄文は原体LR・RLの単節斜行縄文や結束羽状縄文と、羽状縄文の変形等があり、斜行縄文のものには綾絡文をもつ例がある。

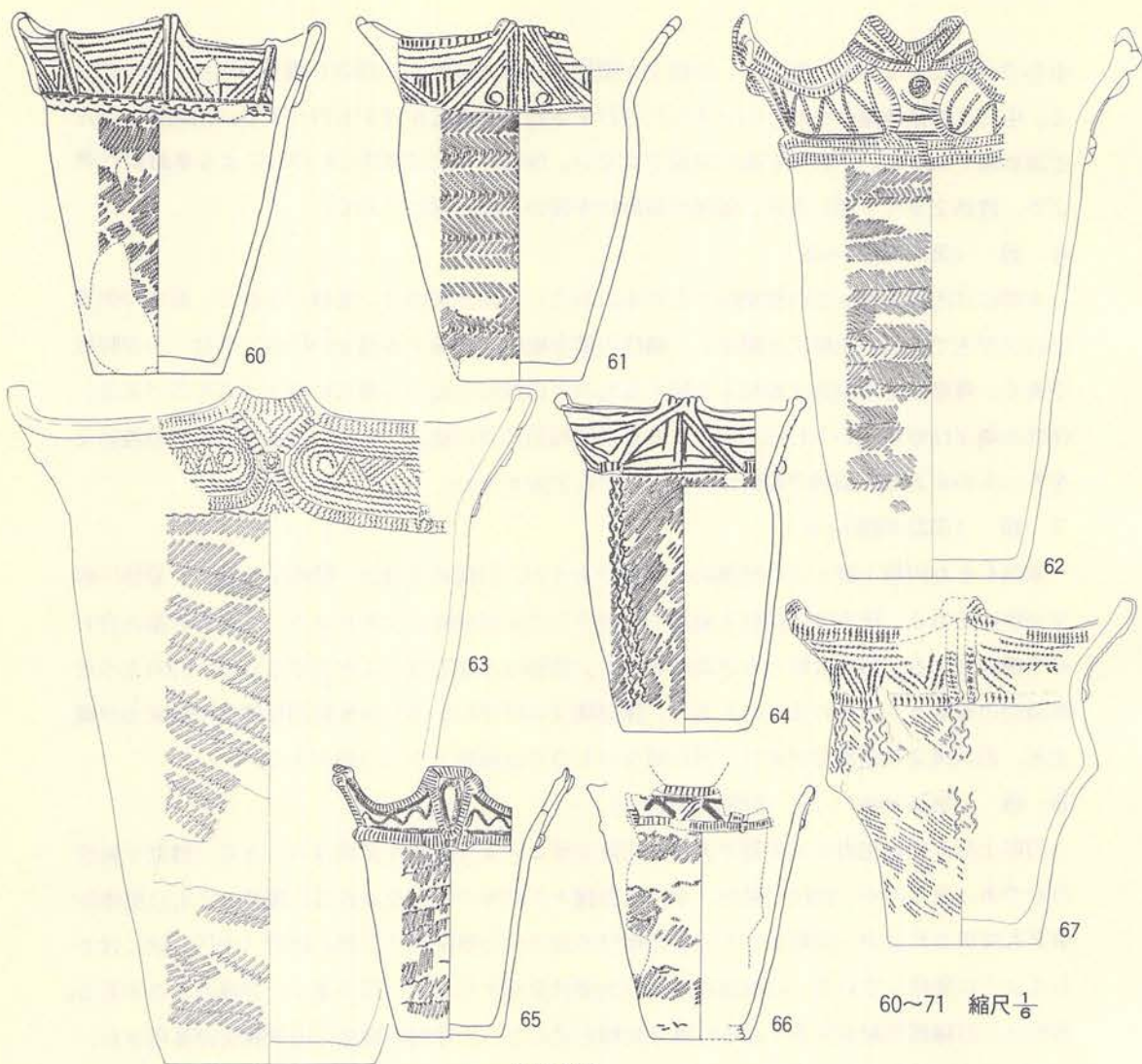
#### 8 類 (第258図67~71、第259図72~76)

円筒上層 b 式に相当する土器である。円筒上層 a 式より隆帯が多用され、さらに横位や縦位のみであったものが、斜位や蛇行、半円状等種々の貼りつけがなされる。隆帯とともに原体圧痕文も併用されるが、前類までみられた縦位の短かい圧痕文が「C形」状や「半円」状に付されるように変化している。口縁は四単位の大波状を示すものと、76のように平縁のものがある。器形は、口縁部突起が大きくなる以外は前種と差がない。体部の縄文は羽状縄文が多用され、その他に原体LR・RLの斜行縄文である。羽状縄文の場合に原体の末端に結束をもつものがある。器種は7類と同じである。

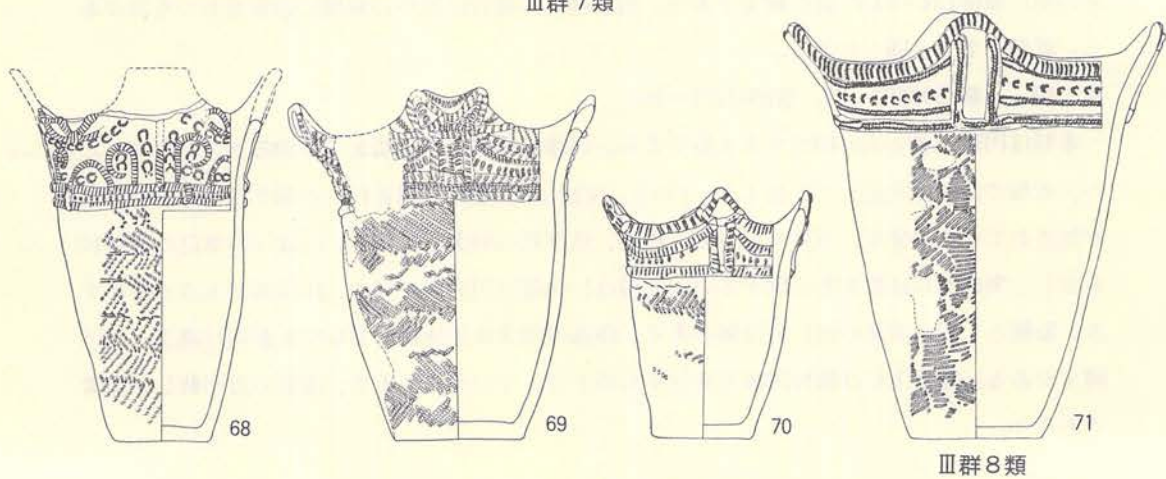
#### 9 類 (第259図77~80、第260図81~86)

本類は円筒上層 c 式に相当する土器である。口縁部文様帯が8類までは頸部までと狭かったが、本類では体部上位までと広がっている。文様には隆帯が多用され、8類までは原体圧痕文が施されていた部分が、方形や長方形、円形、爪形状の刺突痕に代る。口縁は四単位の大波状を示し、突起部には窓をもつ例が多い。器形は、体部は円筒形に近く、口縁部が大きく外反する。器種としては深鉢の他に台付鉢がある。体部の縄文は原体LR・RLの単節斜行縄文と羽状縄文がある。隆帯上には原体圧痕文を付すものと付さないものがあり、後者の方が新しい要素であろう。

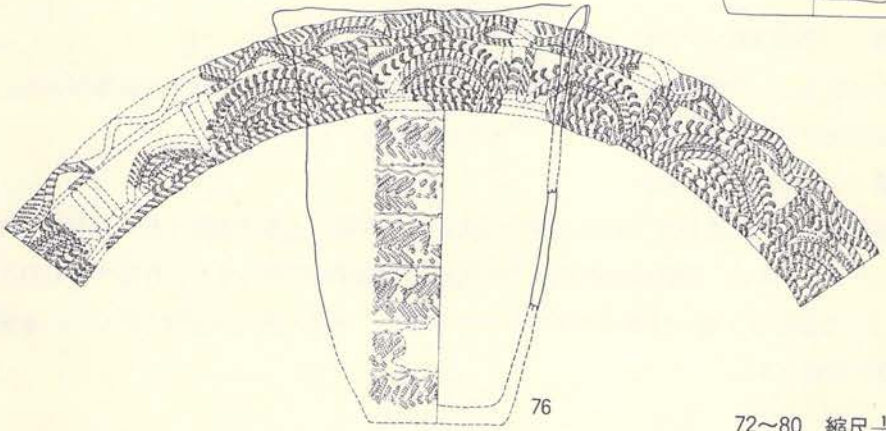
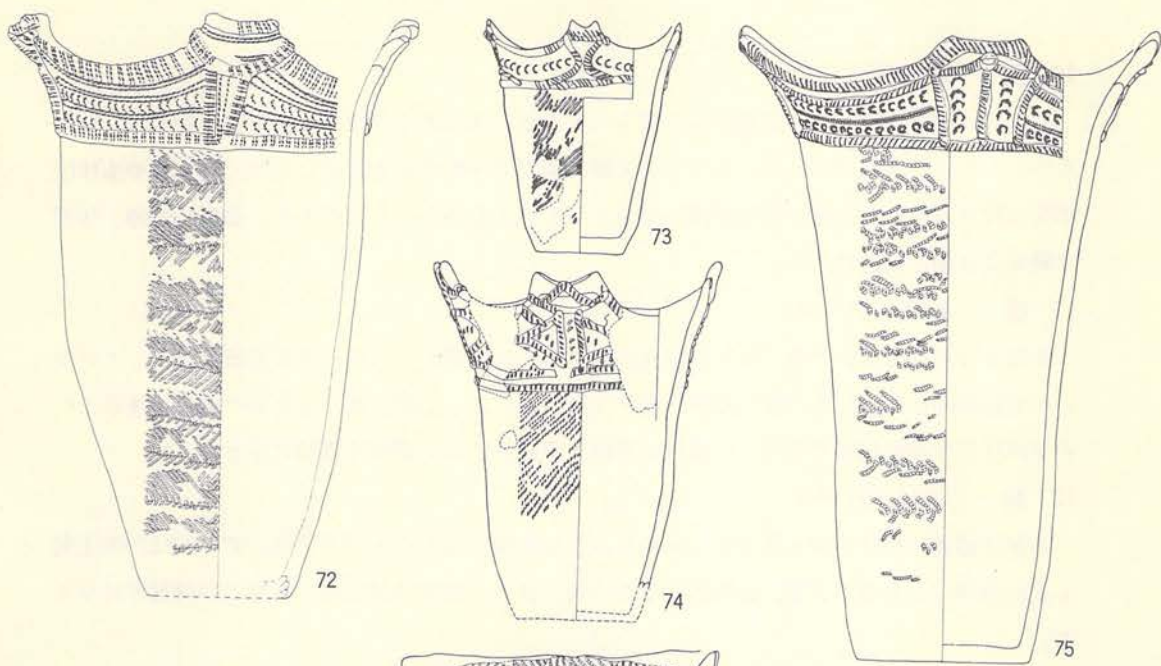




Ⅲ群7類

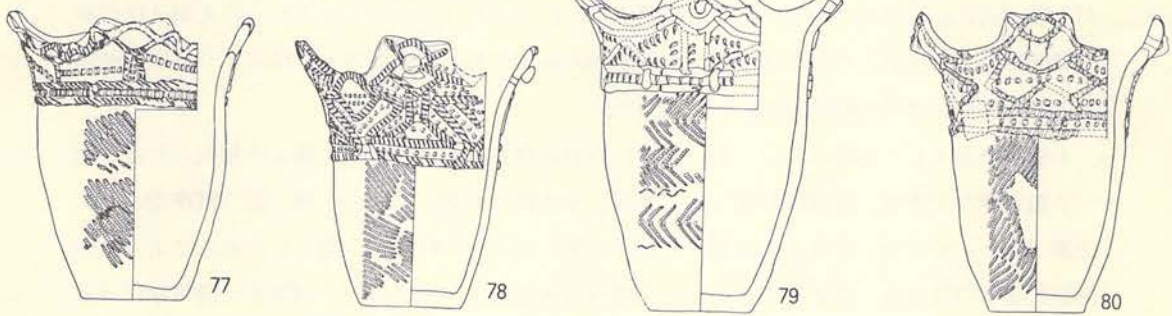


第258図 土器分類図



72~80 縮尺  $\frac{1}{2}$

Ⅲ群8類



Ⅲ群9類

第259図 土器分類図



#### 10 類 (第260図87～90)

ここには円筒上層 d 式に相当する土器を入れたが、d 式の中では古い部分に位置づけられるものとおもう。文様帯は 9 類と同じで、文様は隆帯で区画されるだけになり、刺突痕や原体圧痕文は付されない。隆帯上には原体圧痕をもつものもたないものがある。器形や器種、体部の縄文は 9 類と同様である。

#### 11 類 (第260図91～96)

本類は円筒上層 d 式の中で新しい部分に属するものと考えられる。完形土器は出土していないので拓影図を掲載した。細い隆帯の貼りつけのみによって施文された土器である。隆帯上への原体圧痕は非常に稀である。口縁は波状縁と平縁がある。器形や器種は定かでない。

#### 12 類 (第261図97～99)

本類は器表に楕状の施文具でひっかいたような条線を施した土器である。97・98は円筒上層 a 式に共伴した土器である。比較的小型の土器に多く、器形は体部が円筒形で口縁部が外反する。

#### 13 類 (第261図101～104)

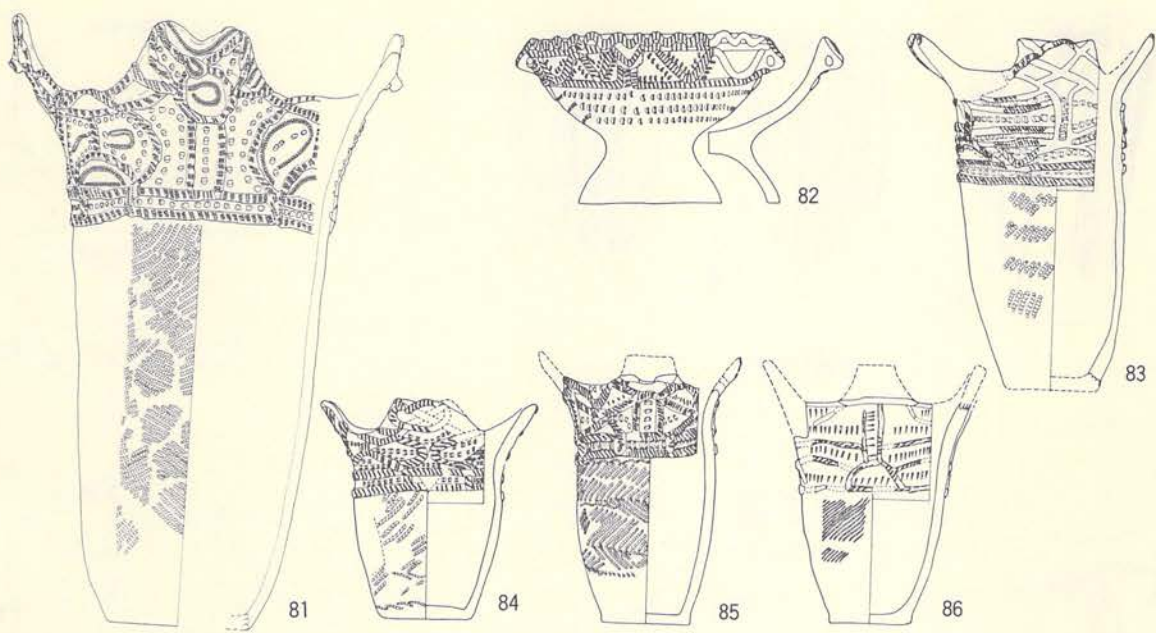
本類は地文として縄文をもたない無文土器である。器種としては鉢・浅鉢等がある。この種の土器は同筒上層 a 式や b 式に共伴して出土したものである。

#### 14 類 (第261図105～114)

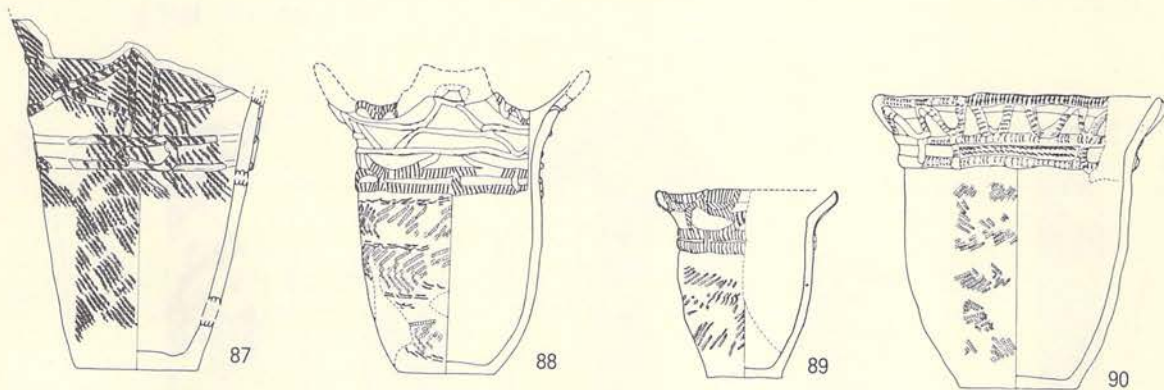
器表に縄文のみが施された粗製土器を一括した。本類の土器は本群 3 類～11 類までの土器に共伴したものである。器形は体部が軽く外傾し、口縁部が肥厚したり、外反するものが多い。113 のような器形は 9 類～11 類に共伴する機会が多い。体部の縄文は原体 LR・RL の単節斜行縄文や羽状縄文が多い。

以上、第Ⅲ群とした円筒式土器に入る土器を分類をしたのであるが、本遺跡での円筒式土器は前期に属するものは少なく、中期に入るものが主体であることが判る。その中で特に上層 a 式～c 式の範囲に位置づけられる土器が多く出土している。これは、本遺跡で検出された集落が上層 a 式と b 式に相当することとも関連するものであろう。しかし、これらの土器は住居跡の床面直上から出土したものは少なく、埋土内から出土したものが多く、特に I-19 住居跡埋土内から実測個体が約 450 個体強出土している。

本遺跡で出土した本群の中で、特に留意しなければならないのは、上層 a 式相当とした 3 類～7 類の存在である。村越氏の編年によれば、本遺跡の 6 類と 7 類が上層 a 式の標準型として位置づけられている。本遺跡の 3 類～5 類は上層 a 式のどの時期に位置づけられるであろうか。円筒式土器の文様は、原体圧痕文による文様→原体圧痕文+隆帯貼付→刺突痕+隆帯貼付→隆

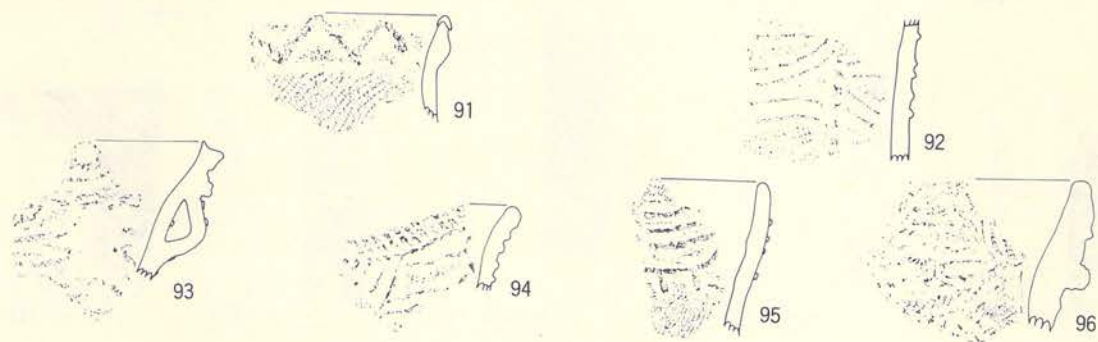


Ⅲ群9類



Ⅲ群10類

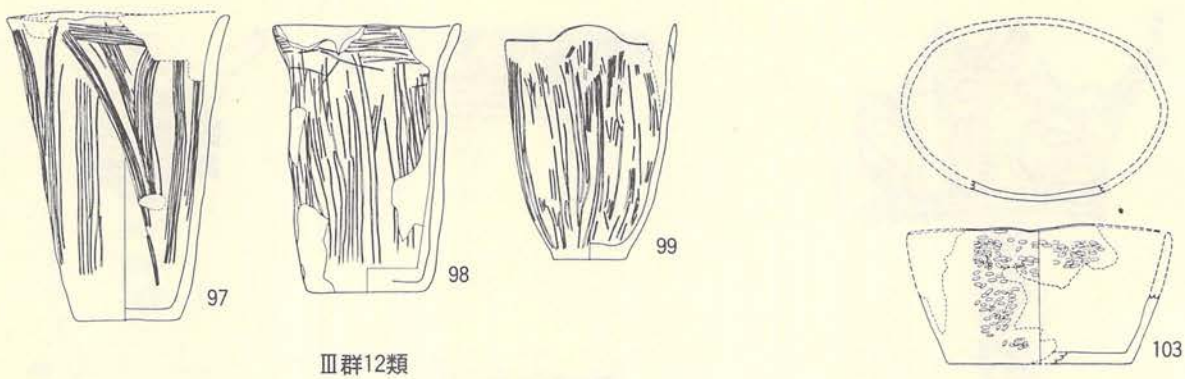
81~90 縮尺  $\frac{1}{6}$   
 91~96 縮尺  $\frac{1}{3}$



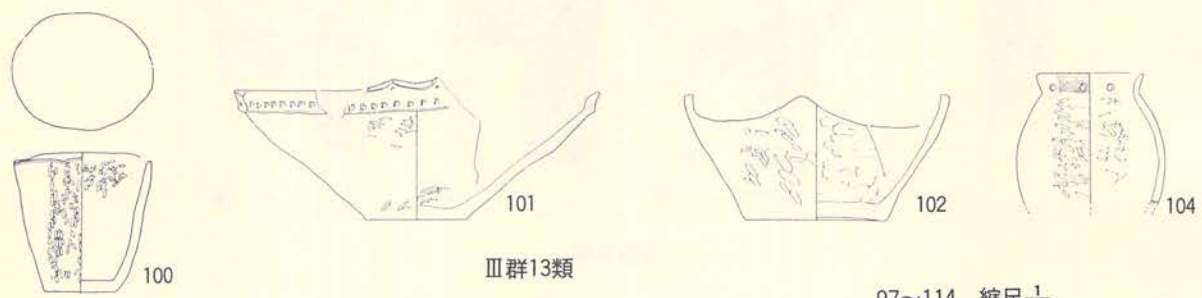
Ⅲ群11類

第260圖 土器分類圖





Ⅲ群12類



Ⅲ群13類

97~114 縮尺  $\frac{1}{6}$



Ⅲ群14類

第261圖 土器分類圖

帯貼付→沈線という変遷をたどるといわれている。また、原体圧痕文を付す方法は、下層d<sub>2</sub>式は口縁部にほぼ並行するように圧痕するのが一般的であるが、上層a式には縦位にも圧痕文を入れるようになる。この過程を是とするならば、本遺跡3類～5類は村越氏編年との対比では、上層a式の中でもっとも古い時期に位置づけることができるであろうと考えられる。しかし、円筒式土器は青森県内でも津軽地方（日本海側）と南部地方（太平洋側）では差が大きいといわれていることから考えると、地域的な特徴であるかも知れない。

この問題については、他遺跡での出土例との対比を踏まえて改めて稿を草したい。

#### 〔第Ⅳ群土器〕

本群には大木式土器の系統に入る土器を一括したが、これらの土器の中で1類～3類までは先の第Ⅲ群土器と共伴して出土した土器であるが、量的には非常に少ない。細分にあたっては大木式土器の編年に従った。

##### 1 類 (第262図<sup>44</sup>1～7)

ここには大木7a式に相当すると考えられる土器を入れた。1・6のように口縁部文様に原体側面圧痕文によって円筒上層a式と同じ文様を施し、体部に大木式土器としての沈線による文様をもつという合の子的な土器もある。その他は、直線や鋸歯状の沈線によって文様を付している。口縁は波状縁と平縁があり、隆帯を貼りつけるものもある。器形は体部が膨らみ、頸部で窄んだ後、口縁部が外反する(1・6)。2・4は吹浦型であるかも知れない。器種は深鉢である。

##### 2 類 (第262図8～15)

本類は大木7b式に属する土器を一括したが、11は第Ⅲ群11類に入る可能性もある。文様は隆体、原体側面圧痕等によって施文している。器形としては9のような吹浦型や12の浅鉢がある。体部の縄文は原体LR・RLの単節斜行縄文や原体RLRの複節斜行縄文等がある。

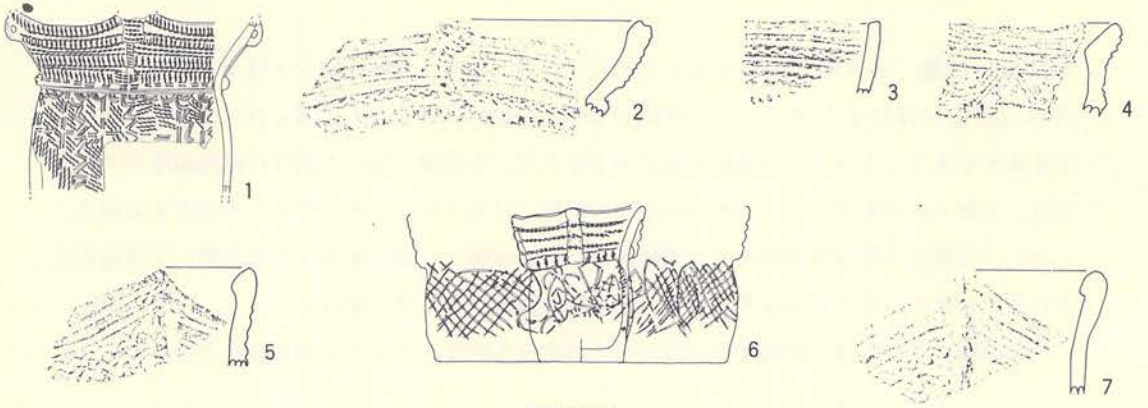
##### 3 類 (第262図16～23)

ここには大木8a式に相当すると考えられる土器を一括した。完形土器は18のみであり、17は浅鉢の破片である。他は深鉢とおもうが16はキャリパー型であろう。口縁部文様は沈線のものと隆沈線(24)のものがある。21・22は榎林式に入る可能性があるが、量的に少ないのでここに入れた。体部の縄文は原体LR・RLの単節斜行縄文である。

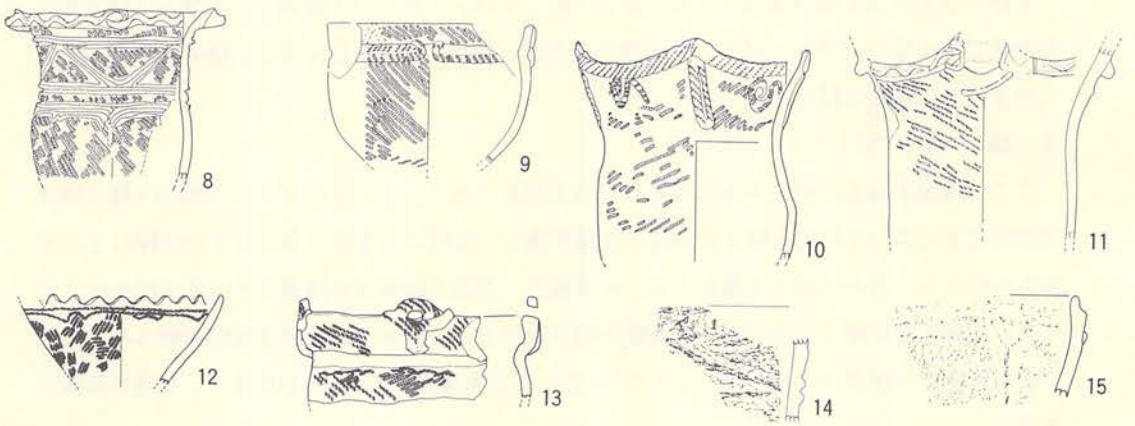
##### 4 類 (第263図25～33)

ここには大木8b式に相当する土器を入れたが、25・27・29・30・32は榎林式であるかも知れない。文様は、榎林式と考えられる先の5点は沈線、それ以外の土器は隆沈線によって施文されている。円文・渦巻文・直線を主文様としているが、両者ともほぼ同様である。口縁端部は



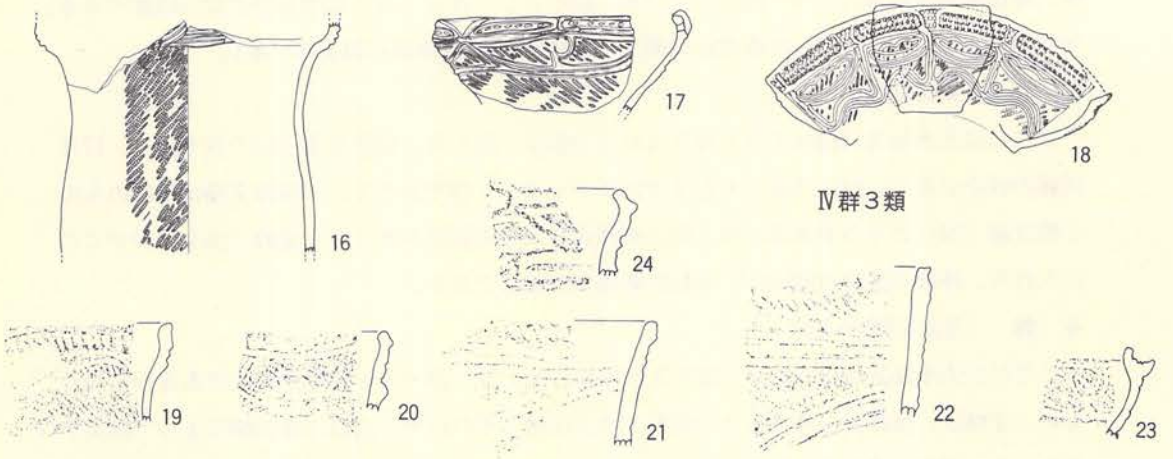


IV群1類



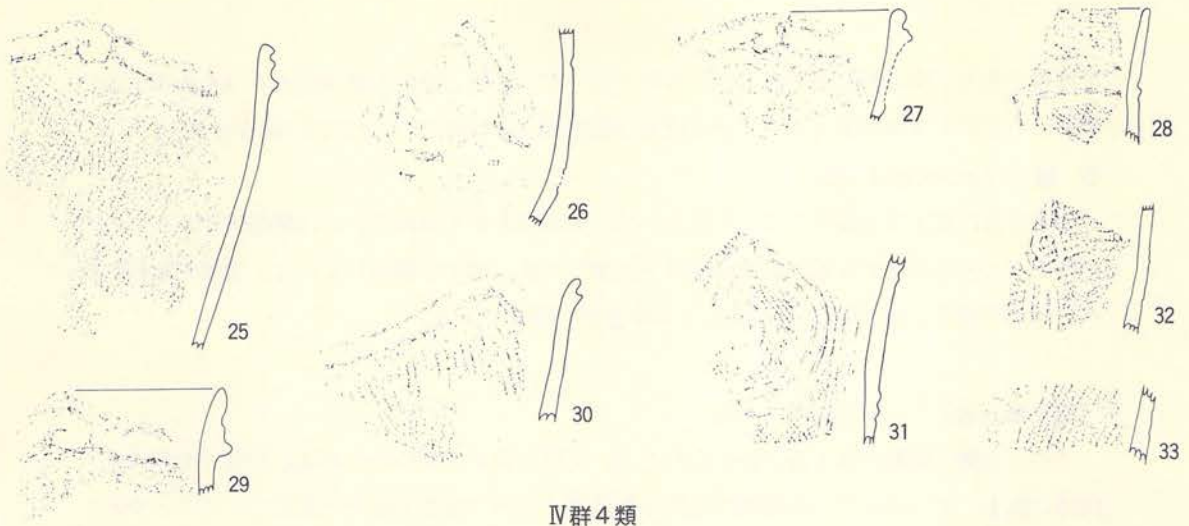
IV群2類

1・6・8~13・16~18 縮尺 $\frac{1}{6}$   
2~3・19~23 縮尺 $\frac{1}{3}$

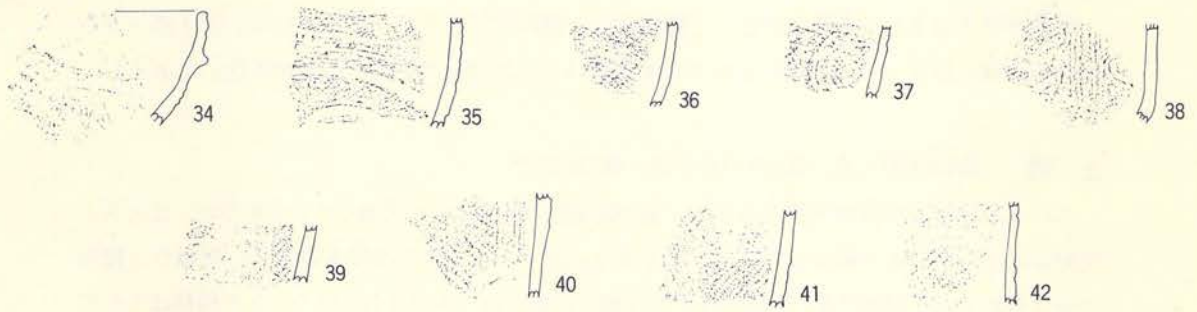


IV群3類

第262図 土器分類図

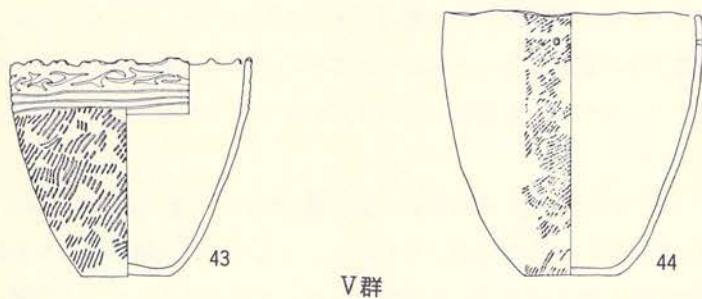


IV群4類



IV群5類

25~42 縮尺 $\frac{1}{3}$   
43・44 縮尺 $\frac{1}{6}$



V群

第263図 土器分類図



肥厚帯をもち、突起部に渦巻を入れるもの(25・27・29)と巾広の磨消帯をもつものがある。器形はいずれも深鉢であろう。体部の縄文は原体RL縦回転による単節斜行縄文である。

#### 5 類 (第263図34~42)

大木9式に属する土器をここに入れた。34は大木10式かも知れない。口縁部破片がないので全体的なことは不明である。文様は沈線で区画した後、縄文を磨消している。器厚が比較的薄い。体部の縄文は原体RLの縦回転による単節斜行縄文である。

#### 〔第V群土器〕 (第263図43~44)

ここには縄文晩期に属する土器を入れたが、完形土器が2点のみである。両者が土坑内から同時に出土しているので、同時期の土器であろう。43の口縁部文様が三叉文であることから、大洞式土器の編年に従えば大洞B式に相当するものである。

#### 〔土製品〕

本遺跡から出土した遺物の中で、土製品とした遺物は21点ある。その中には、①土偶—9点 ②土製円盤—10点・③その他—2点が含まれている。各種類ごとにその概略を記しておく。

#### 土 偶 (第43図④・⑤、第193図⑨~⑭、第238図42)

これらはいずれも板状土偶であるが、第193図⑪が頭部を少し欠損しているものの、ほとんど完形品に近いが、その他はいずれも破片である。出土した9点の土偶をみると、文様で2種類に分けられる。1種類は第193図⑭のように表面に刺突痕を入れるもので、もう1種類はすべて沈線だけによって施文された土偶で先の1点を除いた8点がこの種類に入る。おそらく、前者は後者よりも後出するものと考えられる。これらの土偶は円筒式土器と共伴したものであることは確実である。円筒式土器の特徴の中で沈線や刺突を入れるものはほとんどない。それが土偶にだけ沈線や刺突を入れることにはどういう背景があるのであろうか。青森県石神遺跡で出土した土偶には原体側面圧痕によって施文された土偶が多く見られる。それとともに沈線文をもつ土偶も出土している。本遺跡では少量の大木式土器が出土していることから、円筒式土器文化に大木式土器文化の影響があったものであろう。おそらく本遺跡で出土した土偶は大木式土器文化の影響下のもとに作られたものと考えるのが妥当であろう。

#### 有孔土製円盤 (第23図①~③、第43図⑥・⑦、第193図⑮~⑰、第238図41)

これらはいずれも土器の破片を利用したもので、これのために特別作ったものは1点も含まれていない。土器片の周囲を打ち欠いたり磨いたりして形を整えた後、中心部に1ヶの貫通を

もつものである。しかし、中には孔が貫通しないで、途中で止まっているものもある。使用方法等は定かではない。

#### その他 (第106図⑧、第193図⑳)

その他としたのは、集石群遺構から出土したドーナツ状を示すものと、I-19住居跡内遺物包含層内から出土した断面が円形で、棒状を示すものである。両者とも装飾品であろうか。

#### 引用文献

- ①藤田 亮一 「大鰐町砂沢平遺跡」『青森県埋蔵文化財調査報告書第53集』青森県教育委員会 昭和54年
- ②三宅 徹也 「釜沢遺跡第4章早期編」 釜沢遺跡発掘調査団 1979
- ③庄内 昭夫 「鳶ヶ長根Ⅳ遺跡」『国道103号線バイパス工事関係遺跡発掘調査報告書』  
秋田県教育委員会 1981
- ④児玉作左衛門 「函館市住吉町遺跡の発掘について」『北方文化研究報告』 北海道大学 昭和28年  
大場 利夫
- ⑤桑山 龍進 「会津盆地の早期縄文文化」『日本考古学年報Ⅰ』 日本考古学協会編纂 誠文堂新光社  
昭和26年
- ⑥前掲註②に同じ
- ⑦名久井文明 「4. 早期の土器 貝殻文尖底土器」『縄文文化の研究第3巻』 雄山閣 1982
- ⑧四井 謙吉 「二戸バイパス関連遺跡発掘調査報告書二戸市長瀬B遺跡」『岩手県埋文センター報告第36集』 岩手県埋蔵文化財センター 昭和57年
- ⑨前掲註④に同じ
- ⑩熊谷 常正 「早期」『岩手県の土器』 岩手県立博物館 昭和57年
- ⑪江坂 輝弥 「ムシリ遺跡」『日本考古学年報2・4・7』 日本考古学協会編纂 誠文堂新光社発行
- ⑫佐藤 達夫 角 鹿 扇三 「早稲田貝塚」『上北考古学会報告』 北上考古学会  
二本柳 正一 渡 辺 兼 庸
- ⑬上野 猛 「下猿田Ⅰ遺跡」『岩手県埋文センター報告第29集』 岩手県埋蔵文化財センター  
中川 重紀 昭和57年
- ⑭相原 康二 「大渡野遺跡」『岩手県文化財調査報告書第32集』 岩手県教育委員会 昭和54年
- ⑮新谷 雄蔵 「鳴戸遺跡」『鱒ヶ沢バイパス関係発掘調査報告書』 鱒ヶ沢町教育委員会 1979
- ⑯熊谷 常正 「岩手県における縄文時代前期土器群の成立」『岩手県立博物館研究報告Ⅰ』 1983
- ⑰松野 恒雄 「野中遺跡」『岩手県埋文センター報告第30集』 岩手県埋蔵文化財センター 昭和57年
- ⑱松野 恒雄 「下長谷地遺跡」『岩手県埋文センター報告第28集』 岩手県埋蔵文化財センター 昭和57年
- ⑲高橋 正之 「下猿田Ⅲ遺跡」『岩手県埋文センター報告第16集』 岩手県埋蔵文化財センター 昭和56年  
本 沢 慎 輔
- ⑳四井 謙吉 「野駄遺跡」『岩手県埋文センター報告第11集』 岩手県埋蔵文化財センター 昭和55年
- ㉑遠藤 勝博 「上弓遺跡」『岩手県埋文センター報告第50集』 岩手県埋蔵文化財センター 昭和58年
- ㉒吉田 義昭 「岩手県盛岡市太田オミ坂遺跡」『日本考古学年報16』 日本考古学協会
- ㉓青森県立埋蔵文化財センター三宅徹也氏の御好意により、筆者が遺物を実見した。謝意を表する。
- ㉔山内 清男 「関東北における繊維土器」『史前学雑誌第1巻第2号』 史前学会 昭和4年



- ②5赤星直忠 「神奈川県野島貝塚」『考古学集刊第1冊』東京考古学会 昭和23年
- ②7二本柳正一 「青森県上北郡早稲田貝塚」『考古学雑誌第43巻第2号』日本考古学会 1957  
佐藤達夫他
- ②7工藤竹久他 『御赤堂遺跡発掘調査概要報告書』八戸市教育委員会 昭和51年
- ②8前掲註②6に同じ
- ②9成田滋彦他 「鷹架遺跡」『青森県埋蔵文化財調査報告第63集』青森県教育委員会 1980
- ③0児玉作左衛門 「函館市春日町出土の遺物について」『北方文化研究報告-9-1』北海道大学 昭和29年  
大場利夫
- ③1上野猛 「沢内遺跡発掘調査報告書」『岩手県埋文センター報告第4集』  
岩手県埋蔵文化財センター 昭和53年
- ③2前掲註③0に拓影図が掲載されている。
- ③3高橋与右エ門 「沢内B遺跡発掘調査報告書」『岩手県埋文センター報告第7集』  
岩手県埋蔵文化財センター 昭和54年
- ③4成田末五郎 「深郷田遺跡調査概報」『中里町誌全』中里町 昭和40年  
佐藤達夫他
- ③5熊谷常正 前掲註①6に同じ
- ③6上野猛 「沢内遺跡発掘調査報告書」『岩手県埋文センター報告第4集』岩手県埋蔵文化財センター  
昭和53年
- ③7松野恒雄 「新城館遺跡」『岩手県埋文センター報告第30集』岩手県埋蔵文化財センター 昭和57年
- ③8松野恒雄 「塩ヶ森Ⅰ・Ⅱ遺跡」『岩手県埋文センター報告第31集』  
本沢慎輔 岩手県埋蔵文化財センター 昭和57年
- ③9熊谷常正 『岩手県の土器・前期』岩手県立博物館 昭和57年
- ④0長谷部言人 「円筒土器文」『人類学雑誌42-1』人類学会 1929
- ④1山内清男 「斜行縄文に関する二・三の観察」『史前学雑誌2-3』1930
- ④2江坂輝弥 『石神遺跡』ニューサインス社
- ④3村越潔 『円筒土器文化』考古学選書10 雄山閣
- ④4小岩末治 「先史編」『岩手県史第1巻』岩手県 昭和36年

## 2) 石器

本遺跡の発掘調査では 821点の石器が出土しているが、遺構別の器種別出点数は第8表に示したし、その構成比率は第265図に示しておいた。なお、石質別器種別出点数は第9表に記載した。

### 〔器種組成〕 (第8表、第264図・265図)

本遺跡で出土した石器は18器種に分類されているが、石筥・搔器・切削器とした器種の分類に若干問題を残している。例えば、石筥と搔器の関係、石筥と打製石斧の関係、搔器と切削器の関係に難点がある。したがって、それらの器種の中には、所謂「的」なものも含めている。また、切削器としたものは剥片石器の中で明確に器種の分類ができなかった石器や刃部に使用

第8表 遺構別器種別出土点数

遺構名 \ 器種	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18			
	石 鏃	石 槍	石 匙	石 鏃	石 鏃	搔 器	切 削 器	打 製 石 斧	磨 製 石 斧	磨 (擦) 石	半 円 状 扁 平 打 製 石 器	凹 み 石	石 錘	石 敲 き 石	石 皿	砥 石	石 棒 (石 刀)	石 製 品		合 計 (点 数)	比 率 (%)
D-23住居跡	2					1	5			1	1			1			1			12	1.46
E-22住居跡							1		1	1	3	1			2			1		10	1.21
G-16住居跡	2				1		8	1	5	3	13	1				3				37	4.50
H-41住居跡							1													1	0.12
I-22住居跡	13	1	2	3	12	4	20	3		3	15	5	9	1		1	1	1		94	11.44
I-19住居跡	30	3	11	5	13	11	42	1	11	7	14	10	7	6	2	4	1	1		179	21.80
土坑	7		5	1	4	1	11		2	3	3	1		4	1			2		45	5.48
集石	3		3		1	1	1			1			1							11	1.33
包含層 北端部	2		13	1	1	3	10		1	2	2	3		2						40	4.87
A区	6	3	14	3	8	2	15		5	11		19	2	3		1	1			93	11.32
B区	7	1	4	2	5	7	22		3	13		6	1	2	1					74	9.01
C区	7		7	1	1	2	8			4	2	2								34	4.14
D区			1																	1	0.12
粗掘	10	3	4		7	9	15	2	7	12	17	10	5	1	1	2				105	12.78
B-09住居跡		1					2													3	0.36
土坑(C-08)					1															1	0.12
周溝	3			2		1	1			1	2		2	1				1		14	1.70
A-12溝跡	7	1	4	1	6	3	14		2	6	8	4	3	3		1		4		67	8.16
合計(点数)	99	13	68	19	60	45	176	7	37	68	80	62	30	24	7	12	5	9		821	
比率(%)	12.05	1.58	8.28	2.31	7.30	5.48	21.43	0.85	4.50	8.28	9.74	7.55	3.65	2.92	0.85	1.46	0.60	1.09		99.92	



痕らしい刃毀れのある剥片等を一括しているの、この中のものから石筥や搔器に入るものが含まれている可能性がある。礫器の中では磨石と擦石の関係、擦石と半円状扁平打製石器の関係が若干曖昧な部分を残している。特に、擦石と半円状扁平打製石器の分類については一考を要する。両種とも使用面に擦面・磨面・敲打面をもつ例が多くあり、これだけではどちらとも決めたい場合があった。形態についても同様であり、必ずしも定形的な形状を示すことは限らないようである。しかし、傾向とすれば、擦石は半円状扁平打製石器より厚味があり、半円状扁平打製石器のそれは薄い。時期でみると、擦石は早期や前期前半に共伴する 경우가多く、半円状扁平打製石器は前期末葉～中期前葉に多く共伴し、両者は少なくとも時期的な特徴を示す石器であることはいえるだろう。

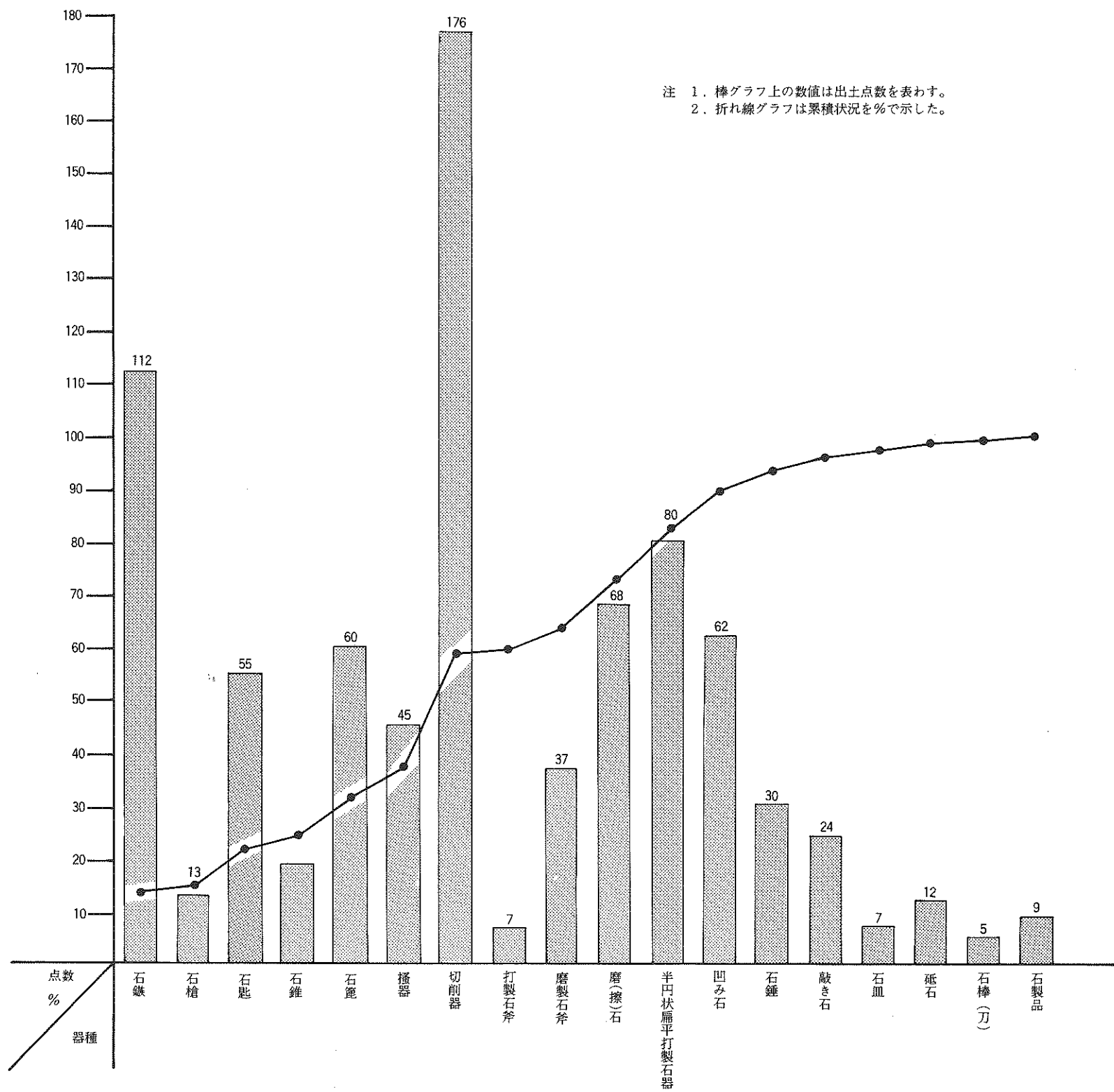
- ① 石鏃は全部で112点出土しており、全体の13.64%を占めている。出土遺構ではI-19住居跡内遺物包含層が30点・北端部包含層が22点と、この2者で全体の50%以上を占めている。それ以外では、I-22住居跡13点・粗掘10点が、その他はいずれも10点以下である。石鏃でもっとも特徴的なことは、中期に属するI-19住居跡内遺物包含層から出土したものと、早期と前期初葉に属する北端部包含層から出土したものを比較すると、前者では半分以上の22点が有茎石鏃で圧倒的に多く、後者では有茎石鏃は4点のみで、無茎石鏃が圧倒的に多く、さらに、無茎石鏃の中心は凹み基が10点と多い。両者の示すこのような状況はそのまま時期的な特徴を反映しているものであろう。
- ② 石槍は全体で13点と少なく、わずか1.58%を占めるにすぎない。出土した遺構も特に傾向を示すような状況ではないが、この器種で特徴的なことは、石材として粘板岩が多く使用されていることで、石鏃の石材とは異なる様相を示している。
- ③ 石匙は68点出土し、全体の8.28%に相当する。この器種は北端部包含層から39点と多く出土し、I-19住居跡内遺物包含層からは11点と少なく、その他の遺構ではいずれも5点以下である。この器種には縦形と横形があるわけであるが、北端部包含層出土のものには横形が1点含まれるのみで、他は全て縦形である。一方、I-19住居跡内遺物包含層では横形が2点あり、両者の出土量での比率でみると、後者の方が大きく、これは、一般に早期や前期初葉には横形石匙がないといわれていることとほぼ同じ状況を示すものであろう。同じ形態相互間では個体差が大きく、一概にまとめることは困難である。しかし、形態による構成比率の差は時期差としての傾向を示すものであろう。
- ④ 石錐は19点、2.31%と本遺跡では出土が少ない。もっとも出土の多いのは北端部包含層の7点であり、ついでI-19住居跡内遺物包含層からの5点で、それ以外は出土が少ない。器形やその他にこれといった特徴はないが、中には石鏃の欠損品を石錐として転用したものが

ある。

- ⑤ 石筥は60点の7.3%と本遺跡出土の石器では6番目の出土量である。この器種の出土状況は、北端部包含層からの15点を最高に、I-19住居跡内遺物包含層13点、I-22住居跡12点と続き、それ以外は少ない。この器種は先にも記したとおり、器種認定に難があるので、本来はこの器種に入るものが、他の器種に入っている可能性がある。器形が、先端部を頂点とする長三角形を示し、刃部は直線的で片面剝離調整のものを入れている。しかし、典型的なものは少なく、打製石斧的なもの、搔器的なものが多かった。
- ⑥ 搔器は45点5.48%の出土である。一般的な器種であるが全体的にみると、出土量はあまり多くない。特徴的な傾向もあまりみられないが、出土遺構では北端部包含層14点、I-19住居跡内遺物包含層11点で、その他の遺構からの出土は少ない。
- ⑦ 切削器は176点出土し、比率では21.43%を占め、本遺跡出土の石器ではもっとも数が多い。この器種は器種認定に若干難があることは前述のとおりであるが、所謂不定形石器といわれる剥片石器の一群が、他の器種に比較して数が多いということは、石鏃や石匙等のように定形的な形態をもたない石器が多いことを示しているのであろう。また、このことは剥片をそのまま石器（主として切削器）として使用したり、刃部に簡単な剝離調整を入れるだけで石器として使用する場合が多くあったことも考えられる。これを遺構別にみると、I-19住居跡内遺物包含層が42点、北端部包含層が55点と多く、ついで、I-22住居跡20点、A-12溝跡14点等が多い方で、その他での出土は少ない。形態的には千差万別で、これといった特徴はないが、どの遺構からも万遍なく出土している。
- ⑧ 打製石斧は7点の出土で、全体の0.85%を占めるに過ぎない。この器種は石筥との分類に迷ったのであるが、形態が細長く、横断面が菱形で、刃部が丸味をもち両面剝離調整のものを入れた。I-22住居跡から3点出土した以外は特徴的なことはない。
- ⑨ 磨製石斧は37点出土し、その比率は4.5%である。この器種は比較的多くの遺構から出土しているが、I-19住居跡内遺物包含層からの11点をもっとも多く、ついで、北端部包含層からの9点が多く、その他からの出土は少ない。37点の中に完形品は3点のみで他はいずれも欠損している。個体による大小差が比較的著しく、所謂「石斧」と「手斧」との機能差によって大小があるものであろう。また、北端部包含層からの出土には、扁平で細長い河川礫の周縁部を敲打調整した後、側縁部や刃部のみを磨製した「局部磨製」ともいべき石斧が5点出土したが、この種の石斧は他遺構では全く出土していないので、早期～前期に共伴する石斧であることは確実で、この様相は筆者が調査した沢内B遺跡(二戸市 高橋 1979)の例と同じである。このことは、この種の製作技法で作られた石斧は時期的に限定(早期～前期初葉)された時期に共伴することを示すものであり、注目される。



- ⑩ 磨(擦)石とした石器は全部で68点出土し、8.28%を占めているが、先にも記したとおり、次の半円状扁平打製石器との器種分類に難点があるので定かでない面もあるが、いずれにしてもこの3器種の石器は台石(石皿状のもの)と対をなすことによってこの器種本来の機能を果たすものと推定されるが、形状をみると三者三様である。特に、磨石は円球状の礫を使用し、使用頻度が激しい場合には全面に磨面を残している。時には凹み石として兼用している場合もあるが、敲击道具としての兼用例は稀である。一方、擦石は時に棒状擦石や特殊擦石とも呼称され、やや長目で断面が扁平か扁三角形を示し、その稜線を使用したもので、使用面の両側には往々にして敲打剝離痕を残し、先の磨石ほど平滑な磨面をもたない場合が多い。以上のように使用部分に違いはあるものの、台石の上で物を擦りつぶすことを主目的としていることから両種を一括した。器種としては、本来は両種を分けるべきかも知れない。出土遺構でみると、北端部包含層30点、I-19住居跡内遺物包含層7点と、北端部包含層からの出土が圧倒的に多く、早期～前期初葉に共伴する時期的な特徴を示す石器であることを示すものであろう。特に擦石の方にその傾向が強い。
- ⑪ 半円状扁平打製石器は80点出土し、全体の9.74%を占めている。この石器は前述のとおり擦石との分類に迷ったのであるが、出土遺構でみると、G-16住居跡・I-22住居跡・I-19住居跡内遺物包含層からの出土がともに10点以上で、この3遺構出土のものでこの器種全体の50%強を占めている。一方、北端部包含層からは4点と非常に少ない出土である。この現象は、この器種の時期的な特徴を示すものであろう。このことは、前種の中の擦石が発展して本種が発生した可能性を示すものではないだろうか。両種を比較してみると、平面形は本種は半円状が基本で前種は棒状、断面形は本種は扁平で前種は厚みのある扁平か扁三角形、使用部分はともに稜線部分、使用形態が本種は擦面と同時に相当数の敲打剝離面を前種は擦面が主で往々にして敲打剝離痕をもつ、といった共通点と相違点をもっている。時期的にみると、前種が古く本種が新しいことは事実であるので、形は棒状から半円状へ、断面形は厚みのあるものからより薄く、使用部分には変化なく、使用形態が擦ることから次第に敲击道具として変化といった流れがあることが判り、このような変化を妥当なものとするれば、棒状擦石や特殊擦石と呼ばれる擦石から半円状扁平打製石器に変化し、両種は同じ系列の石器の可能性が強い。
- ⑫ 凹み石は62点の出土で、全体の7.55%を占めている。所謂円礫の両面または片面に凹みをもつもので、磨石的に使用され、さらに凹みをもつものもある。出土状態でみると、北端部包含層からの出土が30点と全体のほぼ半数を占め、その他の遺構からの出土はいずれも10点以下と少ない。時期的な傾向でも示すものであろうか。今後の課題である。
- ⑬ 石錘の出土は30点で、比率は3.65%にすぎない。I-19住居跡内遺物包含層の9点や、I



第264図 器種別出土点数





第265図 石器の遺構別器種組成

—22住居跡の9点の出土が多い方で、他は非常に少ない。特に北端部包含層での出土も3点と少ない。本遺跡で出土した石錘は円礫両端打ち欠きによる礫石錘であることは他遺跡例と変化がないが、I—19住居跡内遺物包含層やI—22住居跡出土のそれは長端部打ち欠きではなく、短端部打ち欠きであることを特徴とし、北端部包含層から出土した3点がいずれも長端部打ち欠きであることも差があり、時期的な様相を示すものであろう。

- ⑭ 敲き石は24点の出土で、2.92%を占めているにすぎない。細長い礫の一端または両端を敲き道具としたもので、時期的な差はない。出土状況ではI—19住居跡内遺物包含層6点と北端部包含層が多い方で、その他の遺構では出土が少ない。
- ⑮ 石皿は7点、0.85%の出土と極端に少なく、さらに完形は1点のみで他は欠損品である。石皿とはいっても形態調整したものは1点もなく、扁平なやや大き目の自然礫の平坦面を使用したもので、石皿としてよりも台石的使用の方が強いであろう。
- ⑯ 砥石は12点の出土で、比率ではわずかに1.46%を占めるにすぎない。この器種は北端部包含層からの出土が1点と少なく、その他はいずれも中期の遺構や古代・中世の遺構から出土している。使用痕をみると、面的な広がりをもつ使用面と、線的な細長い溝状の使用面があり、その両方をもっているものもある。
- ⑰ 石棒や石刀はわずか5点の出土であり、比率は0.6%となる。この中にはD—23住居跡の床面から出土した大型石棒も含まれている。
- ⑱ 石製品は9点の出土と少なく、比率では1.09%を占めるにすぎない。この中には、E—22住居跡出土の岩偶、I—22住居跡出土の有孔石製品、I—19住居跡内遺物包含層の磨製小型礫、A—12溝跡出土の有孔石製品、その他扶状耳飾り等が出土している。

#### [器種と石材の選択について]

(第9表)

本遺跡で出土した821点の石器の中から784点について石材石質同定を行ったところ、石材として43種類の石質が使用されていることが判明した。それを器種別・石質別にその出土点数を集計したのが第9表である。

この表でもっとも目につくのは、石鏃や石匙等をはじめとする剥片石器と、磨石・石錘等の礫石器では、石材として使用される石質が異っていることである。すなわち、剥片石器に使用されるのは、第9表の1の珪質泥岩～15の輝石安山岩までと、29の玻璃質流紋岩を含めた16種類の石質であることがわかる。その中でも、珪質泥岩・硬質砂岩・珪質細粒凝灰岩・珪質凝灰質泥岩・粘板岩の5種類を使用した石器が圧倒的に多く、剥片石器463点の内364点がこの5種を石材として使っている。しかし、器種別にみると使われ方に若干差のあることがわかる。一方、礫石器は輝石安山岩を石材とする石器が158点もあり、礫石器316点の50%強を占めている。



その他の石質では、両輝石安山岩42点・硬砂岩23点・凝灰質硬質砂岩18点が多い方で、それ以外は10点以下と極端に少なくなる。また、この4種類の石質は器種による増減がなくほぼ平均した使われ方をしている。なお、礫石器に使われる石材の中で少数ではあるが、主に剥片石器の石材として使用される石質のものが礫石器の石材として使われる場合もあり、粘板岩がこの例にあたる。比較的多くの石質のものを石材とするのは磨製石斧で、剥片石器用の石質から礫石器用の石質までほぼ万遍なく石材としており、43種類の内23種類を使い、総数40点の中で粘板岩が7点あるのがもっとも多く、他は少ない。

それでは次に器種別にみてみよう。

- ① 石鏃は珪質泥岩・珪質細粒凝灰岩・粘板岩製が多く、他の石質は少ない。全体では16種類を石材としている。
- ② 石槍は粘板岩がもっとも多く、その他は少ない。4種類を石材としている。
- ③ 石匙は珪質泥岩・珪質凝灰質泥岩が多く、その他は少ない。12種類を石材としている。
- ④ 石錐は石匙とほぼ同じ様相を示しているが、石材は7種類と少ない。
- ⑤ 石篋は硬質泥岩・珪質凝灰質泥岩が多く、その他は少ない。石材は13種類と比較的多い。
- ⑥ 搔器は珪質凝灰質泥岩・珪質細粒凝灰岩・粘板岩がやや多い以外は少ない。12種類を石材としている。
- ⑦ 切削器は珪質泥岩・硬質泥岩・珪質凝灰質泥岩がもっとも多く、次いで珪質細粒凝灰岩と粘板岩が多い。石材としては15種類が使用されている。
- ⑧ 打製石斧は珪質細粒凝灰岩と硬砂岩が使用されている。
- ⑨ 磨製石斧は前述のとおりである。
- ⑩ 磨（擦）石は輝石安山岩がほぼ半数を占め、その他は少ない。石材としては15種類使用し、この中には主として剥片石器に使用される石材が3種類入っている。
- ⑪ 半円状扁平打製石器は約 $\frac{2}{3}$ の50点が輝石安山岩で占め、その他は極端に少ない。石材としては12種類使用しているが、安山岩類について砂岩類が多い。
- ⑫ 凹み石はそのほとんどを輝石安山岩が占め、使用される石材も4種類と少ない。
- ⑬ 石錘は安山岩類と砂岩類がほとんどを占め、石材も7種類と少ない。
- ⑭ 敲き石も石錘とほぼ同じ様相を示している。
- ⑮ 石皿は安山岩類を使用している。
- ⑯ 砥石は砂岩類を使用するものが多く、次いで輝石安山岩であるが、石材は5種類と少ない。
- ⑰ 石棒や石刀は4種類の石材を使用しているが、いずれも1点ずつであるので定かでない。
- ⑱ 石製品も石棒と同様である。





## [小 結]

器種構成や石材等について説明を加えてきたが、石器について若干まとめをしておく。本遺跡で出土した石器は総数で 821点であることは前述のとおりであり、これらの石器は早期～前期初葉に属する石器群と、中期初・前葉に属する石器群に2大別されることも前述したとおりであり、この両者についても随時触れてきたとおりである。また、石器を作るために使用された石材についても剥片石器と礫石器では使用される石材に大きな差があり、磨製石斧がその両者の石材を使用していることについても触れた。これらのことが、そのまま本遺跡で出土した石器群の特徴であるといえるだろう。出土点数はともかくとして、本遺跡は中期円筒式土器を共伴する集落遺跡であり、それらにともなう石器群はいずれも中期円筒式土器にともなう石器群であることは事実であり、その意味では岩手県北部の円筒式土器にともなう石器として稀有な例といえ、貴重な資料を提供したことになる。早期～前期初葉にともなう 242点の石器については、早期と前期を分離できなかったことは残念であるが、岩手県北部の該期の石器を考えるための資料とはなり得るであろう。

以上のようなことについて、筆者は必ずしも完全に理解していないのが実情であり、今後に発表される資料も含めて、次の機会に期したい。

## 2. 古 代

### 1) 遺 構

本遺跡で検出された遺構は住居跡1棟・土坑1基・周溝遺構10基・溝跡1条であり、縄文時代の遺構より少ない。

#### [住居跡]

住居跡は1棟の検出であることは前述のとおりであるが、この住居跡はカマドも炉も設置しないという特徴をもっている。このような状況を示す住居跡は今の所金ヶ崎町西根遺跡や鳥海遺跡等に例がみられるのみである。古代の住居跡は11世紀頃までは住居内にカマドを付設するのが一般的であり、それ以降は炉をもつかもたない形態に変化するといわれている。このようなことから考えられるのは、本遺跡例は少なくとも11世紀以降に属するものと考えられる。遺物については後述するが、所謂赤焼土器坏と須恵器瓶の破片が出土しており、11世紀以降であることを暗示している。

#### [土 坑]

土坑は1基であるが、埋土内から鉄鏝が出土したことから古代としたのであるが、おそらく住居跡とほぼ同時期に位置づけられる土坑であろうと考えられる。

#### 〔周溝遺構〕

本遺跡では断片的なものも含めて10基検出されている。この中には、形態で次のような種類がある。

- ①円形 a. 全周 B-05周溝
- b. 弧状 B-03周溝・C-06周溝・D-24周溝・E-22周溝
- c. 不明
- ②方形 a. 全周 A-15周溝・I-19周溝
- b. 弧状 C-19周溝
- c. 不明 A-04周溝・A-08周溝

以上の結果からみると、円形・方形ともに各5基ずつであるが、全周するかある部分が切れているかということになると、円形では弧状が4基・全周が1基と弧状形が圧倒的に多い。一方、方形では弧状が1基・全周2基・不明2基となり、不明が2基あるものの、全周形が多い傾向を示している。形態的には以上のような変化があるものの、機能的には差がないであろう。

このような遺構は岩手県内の多くの遺跡で検出されているが、性格を明確にした例は少ない。今、二戸市内の遺跡に限ってみても、長瀬D遺跡（円形全周型、火葬墓の周溝）、上田面遺跡（円形弧状型、性格不明）、火行塚遺跡（円形全周型、性格不明）、大淵遺跡（方形全周型、性格不明）、堀野遺跡（円形全周型、古墳の周溝）、中曽根遺跡（円形全周型と弧状型、性格不明）の6遺跡がある。いずれの場合も古代の集落か土器に伴って検出されていることから、古代に属する遺構であろう。ただ、長瀬D遺跡例は火葬墓の周溝であることから、若干時期が下がる可能性がある。

本遺跡の場合、共伴遺物でみると、平安時代の中でも前半部分に属する遺構であることは確実であろう。

この種の遺構は古墳の周溝として検出される場合が多くあることから、本遺跡例や二戸市内で検出された同種の遺構も、古墳であるかどうかは別にして、古代の墳墓に関連する区画溝（周溝）である可能性が強いものと考えられる。時期的には平安時代中葉頃と推定される。

## 2) 遺物

本遺跡の調査で古代に属する遺物として①土師器—11点・②須恵器—21点がある。

土師器には甕1点と坏10点があるが、甕は非ロクロ使用成形であるが、坏はいずれもロクロ



使用成形で、底部切り離しは回転糸切りであるが、再調整のあるものとなないものがある。坏の内面には黒色処理をもつものともたないものがある。住居跡から出土した坏はいずれも内面黒色処理がなく、所謂赤焼土器である。周溝遺構から出土した土器には内面黒色処理のものとなないものが相伴している。このような状況からみると9世紀後半～10世紀にかけての時期に属すると考えられる。

須恵器は21点出土しているが、この中には同一個体と考えられる破片も何点かみられるので、実際の個体数をもっと少ないであろう。器種としては瓶・坏・大甕がある。坏は小破片が1点であるので詳細は不明である。瓶は3点であるが、断片的な破片であるので詳細は不明である。大甕は2個体分位の破片があるらしい。内面の当て具痕に「蓮藕文」を付すものと平行当て具痕を持つものがある。前者の蓮藕文をもつ大甕は岩手県内では比較的多くの出土例があり、いずれも9世紀一杯位に属する遺跡や遺物と相伴して出土している。本遺跡のものも、大きく離れた時期の生産ではないだろう。

#### [小 結]

本遺跡に於ける古代の状況は、集落は11世紀、周溝遺構は9世紀～10世紀位の時期に位置づけられる状況を示している。これは遺構的にも、遺物的にも同じことがうかがい知れる。集落と墓域の時期に差があるということは、墓域を設定した人達の集落が他に存在するという事を表すものである。いずれにしても、本遺跡での周溝遺構については、時期はともかくとして、性格・機能を決定づける資料は何もない。県内での同種の遺構でも同じことがいえる。性格等については資料不十分ではあるが、一応、墳墓の区画溝と理解しておく。今後、改めて検討を加え稿を改めたい。

### 3. 中 世

調査によって検出された遺構の中で、中世と考えられるのは先の住居跡と、本城館跡に伴う堀跡のみである。しかし、調査によって遺物が出土していないことから、時期を明確に示すことは困難であるが、他遺跡例や城館跡との関連の中から若干のまとめをしておきたい。

先ず、住居跡についてであるが、このような構造や形状を示す住居跡は、岩手県内では北は当二戸市や九戸村から、南は水沢市や大東町までの範囲で多くの遺跡から検出されている。岩手県以外でも青森県や秋田県で多くの例が知られている。検出される遺跡の性格としては、本遺跡例のように中世の城館跡に伴う場合と、集落的性格の場合と両方みられる。当二戸市地域では沢内B・下村B・長瀬C・長瀬D・家の上の各遺跡で検出されているが、いずれも遺跡の性格は集落であり、明らかに城館跡の範囲内での検出としては本遺跡が最初である。二戸市地域

の他遺跡での遺物共伴例では中国明時代の貨幣「洪武通寶」や美濃窯産の陶磁器破片等であり、これから推定されるこのような住居跡の時代下限は16世紀頃とおもわれ、筆者はその中でも16世紀後半まで残る遺構であろうと考えている。おそらく、本遺跡例もこの時期から大きくはズレることはないだろう。

石切所城という名称は江刺恒久が南部藩内の地誌として著した『奥々風土記』の中の二戸郡条に「石切所城」として書き残している。また、大巻秀詮の『邦内郷村志』では石切所村の項に「舊館 邑人不傳姓名」として城館跡が存在することを書いている。これらの江戸時代に書かれた地誌類に石切所城や舊館として書き残された城館跡が、果たして今回調査した城館跡と同じなのかは定かではない。まして、前記の二書のいう城館跡が同じ遺跡を指しているのかも不明である。江戸時代の石切所村は、東は馬淵川、北は米沢村、西は外山村、南は似鳥村にそれぞれ接する範囲であったといわれ、今、旧石切所村の範囲内で城館跡を探すと、本遺跡以外に本遺跡の南約500mの地点にもう一ヶ所の城館跡がある。後者の方は当理文センター報告書第23集の中で紹介したとおり、本城館跡に比較すると堀跡は規模が大であるが、全体的な面積では本城館跡の方が広い。二戸郡と九戸郡の城館跡を調査した築部善次郎氏は、その著『元戸郡古城館址考』の中で、本城館跡を石切所館、後者を蒼前館という名称で報告している。岩手県内の場合、館主やその事蹟を記録や伝説として残さない城館跡がほとんどであることからみれば、本城館跡もその例にもれない城館跡ということが出来る。築部氏の蒼前館と比較した場合、前述のとおり、本城館跡の方が面積が広大であることからみれば、江戸時代の書々に書き残されている石切所城や舊館は本城館跡を指しているのではないかと推定される。しかし、調査範囲内は勿論のこと、城内からの表面採集でも遺物がほとんどない。出土した遺物はいずれも江戸時代以降のものであり、本城館跡とは直接関連しないであろう。また、関連遺構についても、前記のD-16住居跡はあるが、掘立柱建物跡の痕跡はまったく検出されていない。このことは何を意味するのであろうか。城内には付属施設がなく、遺物もまったく出土しないということは、常時居住した居館跡ではない可能性がある。このようなことから考えると、有事の際の逃城的性格の城館であったか、有事の際に急いで構築し、事態が治まった時点で廃棄されたかが考えられるが、いずれにしても、あまり長期に亘って使用された城館でないことは事実であろう。少なくとも、天正20年（1592）の諸城破却書上げの中に石切所城は含まれていないことから、天正20年にはすでに廃城になっていたか、それほど重要性がなかったと考えられる。これらのことを総合して考えると、有事に構築しその後は廃城とした城館跡として考えるよりも、有事の際の陣地として構築された遺構とは考えられないだろうか。天正19年（1591）の九戸政実の乱の時には、この付近に東北・北海道勢の陣地が敷かれており、本遺跡との関連をも考慮する必要があるものと考えている。



## IX. さ い ご に

以上、上里遺跡に対する発掘調査の概要を中心に、そのまとめと若干の問題点を呈示した。本遺跡は岩手県北部に所在する縄文中期円筒式土器を伴出する遺跡の調査としては、九戸郡九戸村の田代遺跡が草間俊一氏の手によって調査されて以来の調査といえる。田代遺跡の場合には、多量の土器の出土はみたものの、遺構は検出されなかった。が、本遺跡の場合は大型住居跡4棟を含む10棟の縄文前期末葉～中期前葉を中心とする集落と、それに付随する78基の土坑そして集石群遺構等々、岩手県の中期円筒式土器文化に伴う集落の実体の一部を垣間みることができた。今回の調査範囲は遺跡全面積からみれば10%に満たないものと思われるし、調査範囲も遺跡の東端部分であることをみると、相当大規模な遺跡であることは事実であり、調査によって検出された遺構群もその片鱗をみせたにすぎない位の大集落であろうことが推定される。それでもなお、多くの新事実を我々に提供してくれた。たとえば、内陸部に位置する遺跡としては岩手県初の縄文時代前期末葉に属する7体の人骨が出土、住居跡の埋土内に形成された遺物包含層から実測可能な円筒上層式土器が約450個体出土、土坑の在り方には住居跡の周囲や至近に存在する一群と、住居跡と離れて土坑だけで構成する一群がみられ、それらが形態的にも埋土堆積状況にも差があり、どうも機能的にも差があるらしいこと、岩手県ではじめて出土した第Ⅰ群土器1類～5類と第Ⅱ群土器4類の土器、平安時代前期の周溝遺構等があり、これらは、今後、岩手県北の縄文時代を考えるための資料としては勿論のこと、土器文化の系統系譜論、遺構論や集落論の展開のための好資料を提供したものと確信している。しかしながら、調査中にイメージとして抱いた上里遺跡観が整理中にそのまま文章として表現できなかった。この点については調査担当者として遺憾におもっている。脱漏した部分については何らかの形で補充していきたい。

さいごになったが、本遺跡の調査や整理では、林謙作氏、村越潔氏、山内昭雄氏、市川金丸氏、鈴木克彦氏、三宅徹也氏、三浦圭介氏、名久井文明氏、熊谷常正氏、野坂洋一郎氏、佐藤二郎氏より多大なる御助言と御指導をいただいた。また、山内昭雄・野坂洋一郎両氏からは、玉稿をお寄せいただいた。ここに記して厚く感謝の意を表するとともに、御指導いただいた部分を十分活用できなかった点は筆者の責任であり、ご寛恕を乞いたいと思う。

また、現地調査では泉館源司氏をはじめとする二戸市の方々50数名、室内整理にあたっては勝政タカ子・南館恭子・藤島ヒロ子の各女史をはじめとする30数名の方々より多大なる御助力をいただいた。併せて、感謝の意を表したい。

第10表 石器計測一覧表

No	遺構名 (グリッド名)	出土層位	器種	石質	産地	法量			
						全長	全巾	厚み	重さ
1	D-23住	埋土土層	石 鎌	珉質泥岩	零石 中新統	3.64	1.58	0.68	2.90
2	"	Q-1埋土Mix	"	流紋岩質細粒凝灰岩	奥羽山地 中新統	2.9	1.76	0.54	1.6
3	"	Q-2北埋土Mix	切削器	硬質泥岩	零石 中新統	3.6	4.7	0.5	7.85
4	"	Q-1埋土Mix	"	"	"	3.08	2.2	0.42	2.45
5	"	"	"	粘板岩	北上山地 古生界	3.8	4.56	0.5	9.8
6	"	Q-2埋土Mix	"	流紋岩質細粒凝灰岩	奥羽山地 中新統	3.64	1.4	0.46	1.95
7	"	Q-6	"	珉質泥岩	零石 中新統	4.9	2.45	0.95	8.7
8	"	"	擽 器	硬質凝灰質泥岩	"	3.94	2.43	1.23	10.95
9	"	埋土	擦 石	凝灰質硬砂岩	北上山地 古生界	11.5	5.1	3.7	355
10	"	"	半円状扁平打製石器	輝石安山岩	二戸一帯 中新統	12.9	10.5	2.2	340
11	"	"	敲き石	"	"	9.9	8.6	5.0	680
12	"	床直	石 棒	"	"	64.0	20.5	13.0	
13	E-22住	埋土混合	切削器	珉質細粒凝灰岩	零石 中新統	3.2	3.5	0.4	0.5
14	"	"	磨製石斧	凝灰質硬砂岩	北上山地 古生界	8.9	6.7	3.2	380
15	"	石-No.4	擦 石	"	"	12.5	7.5	4.6	560
16	"	石-No.8	半円状扁平打製石器	輝石安山岩	二戸一帯 中新統	6.9	7.1	2.3	135
17	"	No.6	"	"	"	8.5	7.0	2.6	300
18	"	石-No.7	"	"	"	18.5	8.2	2.4	510
19	"	埋土混合	凹み石	崗輝石安山岩	奥羽山地 第四系	9.7	7.8	4.8	480
20	"	石-No.1	石 皿	"	"				2,180
21	"	"	"	"	"				
22	"	石-No.5	岩 偶	白色細粒凝灰岩	二戸一帯 中新統	12.1	8.5	2.2	115
23	G-16住	E Mix	石 鎌	珉質細粒凝灰岩	零石 中新統	2.90	1.6	0.56	1.25
24	"	N Sベルト13層	"	珉質粘板岩	北上山地 古生界	3.66	1.36	0.54	2.30
25	"	SW Mix	籠 状 石 器	"	"	5.76	3.5	1.78	43.3
26	"	Pit No.2	切削器	珉質細粒凝灰岩	零石 中新統	4.04	4.3	1.34	24.55
27	"	埋土南半	"	硬砂岩	北上山地 古生界	8.1	9.0	2.50	210
28	"	柱穴Mix	"	珉質細粒凝灰岩	零石 中新統	4.24	3.0	1.06	4.15
29	"	埋土混合	"	"	"	4.08	1.00	0.58	2.0
30	"	No.19	"	"	"	8.20	3.20	1.78	34.95
31	"	柱穴21	"	"	"	2.78	2.00	0.56	3.25
32	"	Pit No.2	"	"	"	4.6	3.40	1.30	23.9
33	"	埋土混合	"	"	"	4.42	2.90	1.74	9.7
34	"	SW	打製石斧	"	"	8.74	3.00	1.50	39.75
35	"	SW	磨製石斧	緑色細粒凝灰岩	北上山地 古生界	7.6	4.00	1.60	80
36	"	H-48 P-3	"	"	"	9.68	4.38	2.56	220
37	"	N Sベルト13層	"	"	"	5.76	4.48	3.18	150
38	"	南西埋土	"	"	"				320
39	"	N Sベルト13層	局部磨製石斧	粘板岩	"	7.50	4.62	0.58	25.25
40	"	南西	磨 石	緑色細粒凝灰岩	"	3.5	4.6	1.8	60
41	"	埋土南西	"	凝灰質砂岩	二戸一帯 中新統	7.5	8.5	4.9	515
42	"	南西	"	硬砂岩	北上山地 古生界	7.3	8.1	3.6	410
43	"	柱穴Mix	半円状扁平打製石器	輝石安山岩	二戸一帯 中新統	5.8	6.8	1.5	80
44	"	N E Mix	"	"	"	6.1	7.1	0.8	50
45	"	南西	"	"	"	11.4	6.8	1.8	190
46	"	"	"	輝石玢岩	北上山地 中生界	9.1	7.3	4.1	535
47	"	"	"	輝石安山岩	二戸一帯 中新統	10	5.7	1.9	210
48	"	埋土南西	"	"	"	5.2	6.5	1.8	110
49	"	"	"	淡緑色凝灰岩	奥羽山地 中新統	14.9	8.0	2.6	365
50	"	"	"	"	"	11.7	7.4	3.3	450
51	"	南西	"	輝石安山岩	二戸一帯 中新統	14.0	14.0	1.5	290
52	"	D-4	"	"	"	10.2	9.7	2.5	390
53	"	埋土南半	"	"	"	13.1	10.6	3.1	540
54	"	南西	"	"	"	9.0	6.0	5.6	430
55	"	No.2 p	"	粘板岩	北上山地 古生界	16.0	6.30	2.10	330



No	遺構名 (グリッド名)	出土層位	器種	石質	産地	法量			
						全長	全巾	厚み	重さ
56	G-16住	Pit No.2	凹み石	輝石安山岩	二戸一帯 中新統	19.0	12.7	6.1	2,270
57	"	南西	砥石	凝灰質砂岩	"	9.7	5.1	2.4	70
58	"	北西埋土	"	"	"	11.7	9.2	4.1	470
59	"	南西	"	"	"	6.1	5.7	1.2	40
60	H-41住	埋土混合	切削器	チャート	北上山地 古生界	3.24	2.80	0.74	6.95
61	I-22住	東埋土第1層	石鎌	珪質細粒凝灰岩	零石 中新統	4.43	1.60	0.55	2.55
62	"	埋土混合	"	粘板岩	北上山地 古生界	3.1	1.6	0.3	1.85
63	"	"	"	珪質泥岩	零石 中新統	3.7	1.6	0.5	2.85
64	"	西埋土第1層	"	掘璃質流紋岩	奥羽山地 中新統	3.54	1.44	0.5	2.5
65	"	中央埋土第1層	"	珪質泥質凝灰岩	零石 中新統	4.26	1.34	0.58	2.6
66	"	W部上層	"	珪質泥岩	"	3.0	1.5	0.4	2.0
67	"	埋土内	"	硬質泥質凝灰岩	"	2.57	1.34	0.43	1.7
68	"	西埋土第1層	"	"	"	4.28	1.3	0.5	2.85
69	"	住ベルトMix	"	粘板岩	北上山地 古生界	5.0	1.5	0.74	5.3
70	"	第1層	"	珪質泥質凝灰岩	零石 中新統	4.96	2.80	1.0	12.5
71	"	西端部分(21)	"	硬質凝灰質泥岩	"	2.6	2.06	0.58	2.25
72	"	"	"	珪質細粒凝灰岩	"	3.5	1.64	0.70	3.00
73	"	"	"	チャート	北上山地 古生界	3.20	2.05	0.76	4.55
74	"	埋土混合	石槍	硬質泥質凝灰岩	零石 中新統	8.5	2.44	1.5	26.1
75	"	W部上層	石匙	粘板岩	北上山地 古生界	3.90	1.76	0.4	3.05
76	"	西端部分	"	珪質泥岩	零石 中新統	4.60	1.80	0.58	4.75
77	"	埋土上層E端	石錐	"	"	4.4	1.80	0.7	5.03
78	"	検埋土	"	硬質泥質凝灰岩	"	5.26	2.50	0.94	12.05
79	"	W部上層	"	"	"	3.44	2.36	0.93	6.45
80	"	上層E端	石篋	硬質泥岩	"	2.96	2.90	1.06	11.55
81	"	埋土内	"	輝綠凝灰岩	北上山地 古生界	5.9	2.8	1.64	21.95
82	"	埋土層W端	"	硬質泥岩	零石 中新統	8.05	3.1	1.74	44.0
83	"	W埋土第1層	"	珪質泥質凝灰岩	"	6.18	2.5	1.80	24.75
84	"	検7	"	"	"	4.4	1.9	1.8	10.07
85	"	東埋土第1層	"	"	"	7.60	3.03	1.30	29.6
86	"	W部上層	"	珪質凝灰質泥岩	"	5.4	2.38	1.52	18.65
87	"	埋土上層東部	"	チャート	北上山地 古生界	5.5	2.6	1.2	21.7
88	"	W部上層	"	硬質泥質凝灰岩	零石 中新統	6.3	2.74	1.6	26.05
89	"	"	"	硬質泥岩	"	4.8	2.5	1.8	10.08
90	"	埋土混合	"	硬質泥質凝灰岩	"	4.6	2.4	1.66	16.0
91	"	中央埋土第1層	"	珪質泥質凝灰岩	"	4.9	3.1	1.1	16.45
92	"	埋土層E	搔器	硬質泥岩	"	3.2	3.7	1.90	24.75
93	"	西端部分	"	"	"	4.10	5.00	1.45	34.9
94	"	"	"	粘板岩	北上山地 古生界	2.00	5.44	0.90	10.95
95	"	"	"	"	"	5.26	2.46	1.14	16.35
96	"	埋土層E端	切削器	硬質泥岩	零石 中新統	2.5	1.6	0.4	1.80
97	"	W埋土Iベルト	"	粘板岩	北上山地 古生界	3.2	1.9	0.48	3.4
98	"	"	"	珪質凝灰質泥岩	零石 中新統	2.56	3.5	1.5	12.2
99	"	中央埋土第2層	"	硬質泥岩	"	5.76	2.78	1.2	16.25
100	"	E埋土中	"	珪質凝灰質泥岩	"	4.1	4.4	1.0	19.85
101	"	中央埋土	"	珪質泥岩	"	4.6	2.06	0.94	10.01
102	"	No.9	"	珪質泥質凝灰岩	"	6.86	3.74	0.72	16.7
103	"	埋土層W端	"	"	"	3.3	2.54	0.8	5.95
104	"	E端	"	粘板岩	北上山地 古生界	3.0	4.7	0.9	10.08
105	"	埋土混合	"	"	"	2.6	2.2	0.5	3.2
106	"	中央埋土上部	"	硬質泥質凝灰岩	零石 中新統	3.74	2.24	0.74	5.7
107	"	中央埋土第2層	"	珪質泥質凝灰岩	"	7.3	3.8	1.06	25.2
108	"	西端部分	"	硬質泥岩	"	3.08	2.38	0.44	2.90
109	"	"	"	珪質泥岩	"	4.22	3.20	1.12	15.35
110	"	"	"	硬質凝灰質泥岩	"	3.00	3.24	1.64	4.90

No	遺構名 (グリッド名)	出土層位	器種	石質	産地	法量			
						全長	全巾	厚み	重さ
111	I-22住	西端部分	切削器	珪質泥質凝灰岩	雫石 中新統	3.74	2.48	1.78	7.95
112	"	"	"	硬質凝灰質泥岩	"	4.50	3.03	0.70	10.45
113	"	"	"	チャート	北上山地 古生界	3.50	2.15	1.04	6.00
114	"	内-4	"	珪質泥岩	雫石 中新統	4.6	2.6	0.5	5.35
115	"	東西ベルト西半分混合	"	珪質泥質凝灰岩	"	3.4	6.1	1.26	19.55
116	"	東埋土	磨製石斧	粘板岩	北上山地 古生界	3.56	3.34	1.56	25.65
117	"	西埋土第1層	"	緑色細粒凝灰岩	"	10.0	5.4	3.90	440
118	"	東埋土第1層	"	チャート質緑色凝灰岩	"	9.80	1.54	0.52	15.25
119	"	第1層中央埋土	磨石、擦石	両輝石安山岩	奥羽山地 第四系	10.1	9.5	6.2	820
120	"	第1層東埋土	"	凝灰質硬砂岩	北上山地 古生界	14.0	7.6	4.4	810
121	"	埋土上層西端	"	花崗内縁岩	北上山地 中生界	10.9	7.3	5.6	735
122	"	E端埋土第1	半円状扁平打製石器	輝石安山岩	二戸一帯 中新統	5.74	7.2	1.35	65.0
123	"	埋土上層西端	"	"	"	8.3	7.8	2.3	210
124	"	中央埋土	"	"	"	8.0	5.8	1.8	85
125	"	第1層中央埋土	"	"	"	8.7	4.9	3.5	200
126	"	第1層	"	凝灰質硬砂岩	北上山地 古生界	11.0	5.4	3.3	300
127	"	床上	"	"	"	17.5	7.1	3.0	590
128	"	東側埋土	"	輝石安山岩	二戸一帯 中新統	10.2	6.9	2.3	210
129	"	第1層	"	"	"	5.2	8.6	3.7	220
130	"	西-2	"	"	"	9.5	9.1	2.5	335
131	"	埋土内	"	"	"	16.5	7.0	2.0	380
132	"	埋土混合	"	"	"	14.3	9.3	3.2	660
133	"	中央	"	"	"	12.5	9.7	3.4	480
134	"	"	"	"	"	8.8	9.9	5.2	590
135	"	W-4	"	"	"	8.4	9.4	2.0	170
136	"	西埋土第1層	"	両輝石安山岩	奥羽山地 中新統	10.2	4.4	1.4	100
137	"	西埋土第1層	凹み石	輝石安山岩	二戸一帯 中新統	8.3	7.4	5.4	420
138	"	第1層	"	"	"	6.4	8.2	3.5	230
139	"	埋土上層西端	"	"	"	10.3	6.3	3.5	275
140	"	第1層東端埋	"	"	"	9.5	8.5	4.5	560
141	"	西埋土第1層	"	"	"	11.4	7.6	4.4	560
142	"	埋土1層東端	石 鏝	両輝石安山岩	奥羽山地 第四系	8.6	6.8	2.5	220
143	"	埋土上層西端	"	輝石安山岩	二戸一帯 中新統	12.1	6.7	2.9	330
144	"	埋土1層東端	"	凝灰質硬砂岩	北上山地 古生界	8.6	6.8	2.2	170
145	"	"	"	両輝石安山岩	奥羽山地 第四系	11.1	7.0	2.6	290
146	"	"	"	輝石安山岩	二戸一帯 中新統	8.5	6.7	2.5	210
147	"	埋土1層西端	"	両輝石安山岩	奥羽山地 第四系	10.5	8.0	3.2	460
148	"	第1層東埋土	"	"	"	10.2	8.2	4.2	540
149	"	埋土東端	"	輝石安山岩	二戸一帯 中新統	10.1	6.8	2.6	270
150	"	埋土1層東端	"	両輝石安山岩	奥羽山地 第四系	10.4	7.3	3.4	234
151	"	埋土1層東端	敲き石	"	"	11.9	7.1	2.9	330
152	"	埋土混合	砥石	極粗粒砂岩	二戸一帯 中新統				3,850
153	"	中央	石 棒	石英安山岩	北上山地 中新統	12.9	4.6	3.5	300
154	"	西側埋土	有孔石製品	粘板岩	北上山地 古生界	5.48	2.38	0.40	6.95
155	A-06P	A-06	石 篋	"	"	6.02	3.18	1.58	36.7
156	"	"	切削器	"	"	4.08	2.82	0.84	8.7
157	B-04P	々	石 鏝	"	"	3.14	1.43	0.51	1.55
158	"	"	石 匙	"	"	4.17	1.94	0.84	6.25
159	"	"	"	"	"	6.60	2.36	0.77	12.85
160	"	埋土西半	篋 状	流紋岩質細粒凝灰岩	雫石 中新統	3.58	4.16	1.48	27.5
161	"	"	石 篋	"	"	6.31	3.66	1.55	34.8
162	"	"	切削器	"	"	3.48	2.14	0.60	4.95
163	"	IV層ピット上	刃部磨製石斧	硬砂岩	北上山地 古生界	5.0	7.0	2.3	130
164	"	埋土西半	磨石	輝石安山岩	北上山地 中生界	12.2	4.7	2.3	220
165	"	埋土混合	"	"	二戸一帯 中新統	8.6	7.6	4.1	410



No	遺構名 (グリッド名)	出土層位	器種	石質	産地	法量			
						全長	全巾	厚み	重さ
166	B-04P	埋土混合	敲き石	チャート	北上山地 古生界	15.4	4.9	2.3	250
167	"	"	"	輝石安山岩	二戸一帯 中新統	7.5	6.0	1.9	120
168	B-11P-2	埋土	石 匙	珪質凝灰質泥岩	零石 中新統	3.96	1.26	0.5	4.00
169	B-11P-3	南半埋土	石 鏝			3.94	2.26	0.62	2.3
170	"	"	石 匙			2.54	1.81	0.96	3.9
171	B-15P	埋土混合	半円状	輝石安山岩	二戸一帯 中新統	6.2	6.8	3.1	140
172	C-22P	"	敲き石	"	"	12.7	6.5	3.6	430
173	D-23P-1	"	石 鏝			3.30	1.75	0.81	3.85
174	"	"	切削器			2.52	4.25	0.78	7.15
175	"	"	"			3.61	2.88	0.48	5.20
176	"	埋土上面	磨 石	輝石安山岩	二戸一帯 中新統	10.5	9.2	7.1	860
177	"	"	凹み石	"	"	11.5	6.6	5.1	600
178	"	"	有孔石製円盤			3.34	2.96	0.77	6.4
179	D-23P-2	埋土混合	磨製石斧	凝灰岩質硬砂岩	北上山地 古生界	12.2	5.3	2.8	340
180	"	埋土断面第3層	敲き石	両輝石安山岩	奥羽山地 第四系	17.5	9.8	3.7	990
181	"	埋土混合	自然礫	輝石安山岩	二戸一帯 中新統	7.5	6.5	1.8	160
182	E-15P-1	埋土下層 床上15cm	石 鏝	硬質泥質凝灰岩	零石 中新統	4.00	2.00	0.46	3.45
183	"	"	"			3.34	1.21	0.63	2.0
184	"	埋土Mix	筥 状	硬質凝灰質泥岩	零石 中新統	3.4	3.5	1.1	16.0
185	"	南半埋土(P-2)	搔 器	硬質泥質凝灰岩	"	5.1	4.5	1.90	41.6
186	"	"	切削器	硬質泥岩	"	6.08	8.67	2.06	90
187	"	"	"	珪質泥岩	"	3.48	2.24	0.84	6.05
188	F-45P-3	埋土混合	"	硬質凝灰質泥岩	"	6.26	3.64	1.30	24.7
189	F-48P-1	"	"	珪質凝灰質泥岩	"	2.70	2.86	0.56	5.75
190	G-23P	"	半円状扁平打製石器	粘板岩	北上山地 古生界	15.9	6.2	2.5	2.90
191	"	"	"	両輝石安山岩	奥羽山地 第四系	5.8	5.5	2.4	140
192	G-24P-1	"	石 皿			34.5	31.5	12.5	
193	H-41P-1	埋土混合	石 鏝	珪質細粒凝灰岩	北上山地 古生界	1.86	1.33	0.3	0.4
194	"	"	切削器	珪質凝灰質泥岩	零石 中新統	2.62	4.66	1.1	17.2
195	"	"	"	粘板岩	北上山地 古生界	4.24	2.14	0.36	2.70
196	I-19P-1	人骨に伴出	石 鏝	珪質細粒凝灰岩	零石 中新統	3.16	1.62	0.56	2.25
197	"	"	石 匙	珪質泥岩	"	4.38	5.90	0.96	17.85
198	"	埋土混合	石 錐	硬質泥質凝灰岩	"	4.34	3.2	1.27	12.15
199	"	中央	切削器			6.03	3.82	2.06	70.0
200	集石	集石下土層	石 鏝	硬質泥岩	零石 中新統	4.9	1.5	0.45	3.1
201	"	集石下土層	"	輝石安山岩	北上山地 古生界	2.56	1.40	0.35	1.25
202	"	集石	"	"	"	1.8	1.74	0.38	1.05
203	"	集石下土層	切削器	硬質泥質凝灰岩	"	3.0	3.1	1.0	10.09
204	A-C08, 09	集石下土層	石 匙	珪質泥岩	零石 中新統	5.00	1.70	5.00	6.45
205	"	"	"	"	"	6.40	2.10	4.05	10.05
206	"	"	"	"	"	5.20	2.30	0.7	8.85
207	"	"	石筥状	硬質泥岩	"	5.5	3.70	0.90	20.09
208	"	"	搔 器	珪質泥質凝灰岩	"	4.6	3.20	1.20	20.07
209	"	"	擦 石	硬砂岩	北上山地 古生界	18.0	9.10	6.1	1,430
210	"	"	石 錘	両輝石安山岩	奥羽山地 第四系	8.0	8.8	1.90	230
211	北端部	北端一層(一括)	石 鏝	珪質泥岩	零石 中新統	3.48	0.6	0.5	1.7
212	"	"	"	硬質泥岩	"	2.51	1.48	0.36	0.65
213	"	N端	石 匙	珪質細粒凝灰岩	"	2.44	2.80	0.62	4.2
214	"	北端一層	"	"	"	6.5	2.48	0.60	16.5
215	"	"	"	珪質凝灰質泥岩	"	5.24	2.65	0.94	14.3
216	"	"	"	珪質細粒凝灰岩	"	2.88	2.88	0.76	6.9
217	"	" (R)	"	珪質凝灰質泥岩	"	7.40	2.65	0.68	11.25
218	"	"	"	珪質泥岩	"	7.40	1.88	0.74	11.85
219	"	"	"	珪質凝灰質泥岩	"	5.50	2.08	0.80	7.60
220	"	"	"	珪質粘板岩	北上山地 古生界	4.61	2.18	0.66	9.6

No	遺構名 (グリッド名)	出土層位	器種	石質	産地	法量			
						全長	全巾	厚み	重さ
221	北端部	北端一層	石匙	珉質泥岩	零石 中新統	6.04	2.4	0.58	9.85
222	"	"	"	"	"	4.46	1.8	0.86	7.25
223	"	"	"	硬質泥岩	"	5.91	2.55	0.91	14.8
224	"	"	"	"	"	2.82	1.81	0.44	1.6
225	"	"	"	"	"	3.64	1.96	0.36	0.65
226	"	"	石錘	輝石安山岩	二戸一帯 中新統	7.5	7.2	2.3	190
227	"	" (一括)	石篋	珉質凝灰質泥岩	零石 中新統	5.44	3.64	1.31	28.85
228	"	"	搔器	硬質泥岩	"	4.93	2.89	0.92	12.05
229	"	"	"	珉質細粒凝灰岩	"	5.52	3.34	1.60	38.2
230	"	"	"	珉質凝灰質泥岩	"	4.68	2.29	1.05	10.15
231	"	"	切削器	珉質細粒凝灰岩	"	5.99	3.40	1.58	33.85
232	"	"	"	"	"	3.34	5.36	1.40	26.85
233	"	"	"	珉質凝灰質泥岩	"	2.81	2.17	0.81	3.85
234	"	"	"	"	"	4.55	1.84	0.46	2.80
235	"	N端梅木体クリーニング	"	珉質泥岩	零石 中新統	6.00	3.06	0.55	10.45
236	"	北端一層	"	粘板岩	北上山地 古生界	3.34	2.43	0.68	5.04
237	"	"	"	硬質泥岩	零石 中新統	3.04	2.10	0.70	4.95
238	"	"	石錘	珉質粘板岩	北上山地 古生界	3.62	1.50	0.34	2.05
239	"	"	"	珉質凝灰質泥岩	零石 中新統	3.56	2.14	0.36	2.55
240	"	"	"	硬質泥岩	"	2.38	1.86	0.41	1.56
241	"	N端中腰一下層	磨製(局部)	硬砂岩	北上山地 古生界	11.9	3.8	2.1	130
242	"	IV C層	擦石	"	"	6.4	7.3	4.6	180
243	"	北部 (III IV)	"	輝石安山岩	二戸一帯 中新統	10.2	6.7	2.9	350
244	"	"	半円状扁平打製石器	"	"	15.5	8.9	3.6	730
245	"	"	"	"	"	15.66	8.46	4.58	910
246	"	北部包含層	凹石	両輝石安山岩	奥羽山地 第四系	10.0	8.6	4.6	570
247	"	北端一層	"	"	"	8.9	7.8	4.3	440
248	"	IV C層	"	"	"	9.2	9.8	6.7	540
249	"	北部包含層	敲き石	硬砂岩	北上山地 古生界	15.1	12.4	3.7	970
250	"	" (III IV)	"	"	"	11.82	10.75	5.77	1,040
251	A-02	4-(IV)選	石鏃	チャート	北上山地 古生界	2.34	1.64	0.54	1.95
252	A-03	第2面	"	珉質泥岩	零石 中新統	2.28	2.48	0.60	4.15
253	"	"	"	"	"	3.04	1.48	0.43	1.35
254	A-07	4 IV	"	珉質凝灰質泥岩	"	3.26	1.50	0.62	2.45
255	"	"	"	珉質細粒凝灰岩	"	2.50	1.60	0.34	1.12
256	A-C10	10~VI	"	珉質凝灰質泥岩	"	3.26	1.30	0.66	2.35
257	A-03	3 (IV)	石楨	粘板岩	北上山地 古生界	7.24	3.50	1.32	35.50
258	"	第2面 (IV)	"	硬質泥岩	零石 中新統	2.94	2.58	0.86	6.05
259	A-06	2 III層	"	硬質泥質凝灰岩	"	7.50	2.80	1.10	27.35
260	A-02	51-(IV)	石匙	珉質細粒凝灰岩	"	5.36	2.05	0.64	8.39
261	"	4-(IV)	"	珉質泥岩	"	5.60	2.24	0.92	9.05
262	A-03	第3面	"	珉質凝灰質泥岩	"	4.40	1.50	0.32	3.97
263	"	3 (IV)	"	珉質泥岩	"	3.16	1.80	0.73	4.17
264	"	第2面	"	"	"	3.8	1.26	0.55	3.06
265	"	"	"	硬質泥岩	"	6.18	2.72	0.64	7.04
266	"	3 (IV)	"	流紋岩質細粒凝灰岩	"	5.70	1.66	0.74	6.85
267	A-04	黒色土 (IV)	"	珉質泥岩	"	3.8	2.62	0.72	8.50
268	"	(IV)	"	珉質凝灰質泥岩	"	5.00	2.50	1.68	11.3
269	"	~3 (IV上)	"	硬質泥質凝灰岩	"	5.3	2.3	1.0	11.85
270	A-05	2-(III下)	"	珉質粘板岩	北上山地 古生界	8.64	2.00	0.67	13.75
271	A-06	IV a層	"	珉質細粒凝灰岩	"	2.62	2.74	0.9	7.80
272	A-10	下面-V上	"	珉質粘板岩	"	6.26	1.54	0.66	1.75
273	AB13-14	B-14IV-V	"	硬質泥岩	零石 中新統	4.0	3.3	1.0	11.6
274	A-03	2面	石錘	珉質凝灰質泥岩	"	3.62	1.18	0.66	2.80
275	"	3 (IV)	"	粘板岩	北上山地 古生界	3.78	2.66	0.81	7.65



No.	遺構名 (グリッド名)	出土層位	器種	石質	産地	法量			
						全長	全巾	厚み	重さ
276	A-04	黒色土(Ⅳ)	石 錘	珉質泥岩	雫石 中新統	2.90	1.50	0.52	2.05
277	A-02	2面	石 篋	珉質泥岩	"	2.18	2.50	1.00	7.45
278	A-03	第2面	"	珉質細粒凝灰岩	"	6.56	3.80	1.43	41.50
279	"	ベルト	"	粘板岩	北上山地 古生界	7.16	4.46	2.12	70.0
280	"	3(Ⅳ)	"	硬質泥岩	雫石 中新統	2.60	2.90	1.22	8.20
281	"	2Ⅲ	"	珉質凝灰質泥岩	"	2.70	3.30	1.00	9.80
282	"	"	"	粘板岩	"	6.58	3.98	1.84	53.3
283	A B-10	10~11~Ⅴ~Ⅳ	"	硬質凝灰質泥岩	"	3.78	3.16	0.86	14.06
284	"	"	"	珉質泥岩	"	5.92	3.38	1.09	22.10
285	A-04	(Ⅳ)	擦 石	"	"	3.18	2.40	0.56	5.50
286	"	3(Ⅳ)	"	珉質凝灰質泥岩	"	2.6	3.5	1.3	12.05
287	A19-20	粗(Ⅳ)	切削器	硬質泥岩	"	5.2	5.0	0.8	17.3
288	A B13-14	13~14	"	珉質泥岩	"	3.9	4.4	0.6	11.6
289	A-03	2面	"	硬質泥岩	"	2.16	1.94	0.40	1.50
290	"	3面	"	硬質泥質凝灰岩	"	4.1	3.50	0.6	13.85
291	A-04	(Ⅳ)	"	流紋岩質細粒凝灰岩	"	1.96	2.70	1.10	6.34
292	"	黒色土(Ⅳ)	"	珉質粒板岩	北上山地 古生界	3.50	1.52	0.66	4.35
293	"	3(Ⅳ)	"	珉質細粒凝灰岩	雫石 中新統	4.66	3.80	2.22	44.65
294	A-05	3-(Ⅲ)	"	流紋岩質細粒凝灰岩	"	5.74	3.22	0.78	11.90
295	"	S-ベルトⅣ	"	珉質凝灰質泥岩	"	2.20	2.12	0.65	2.35
296	"	東ベルト一括混合	"	珉質粘板岩	北上山地 古生界	4.30	2.00	0.23	3.25
297	A-06	中振浮石	"	流紋岩質細粒凝灰岩	"	2.43	2.08	0.46	1.95
298	"	5Ⅳ-Ⅴ	"	珉質凝灰質泥岩	"	4.06	1.34	0.46	2.45
299	"	Ⅳa層	"	粘板岩	"	7.00	3.20	1.72	34.05
300	"	5Ⅳ-Ⅴ	"	珉質細粒凝灰岩	雫石 中新統	9.30	5.40	1.90	110
301	"	4(Ⅲ下)	"	粘板岩	北上山地 古生界	3.10	2.30	0.70	5.07
302	A-03	2(Ⅳ)	磨製石斧	淡緑色珉質凝灰岩	"	4.74	4.00	1.36	46.15
303	"	第2面	"	硬質凝灰質泥岩	"	4.16	2.30	0.86	9.25
304	"	3(Ⅳ)	"	珉質凝灰質泥岩	"	5.46	2.62	0.80	18.70
305	A-07	西ベルトⅣbⅣc混合	"	輝石安山岩	北上山地 中生界	7.04	5.58	2.90	195
306	"	Ⅴ	"	流紋岩質細粒凝灰岩	北上山地 古生界	15.4	6.0	2.5	500
307	A-02	Ⅳa層	擦 石	輝石安山岩	二戸一帯 中新統	16.3	7.6	6.6	1,080
308	A-03	4-(Ⅳ)	"	"	"	5.2	6.6	4.2	240
309	"	面-ベルト	"	硬砂岩	北上山地 古生界	12.5	6.9	5.2	165
310	"	第2面	"	輝石安山岩	二戸一帯 中新統	10.9	7.3	5.1	460
311	"	"	"	硬砂岩	北上山地 古生界	6.2	4.9	5.3	250
312	A-04	西ベルトⅣb層上	"	輝石安山岩	二戸一帯 中新統	14.7	14.1	6.5	1,090
313	"	"	"	"	"	8.7	5.6	3.7	260
314	"	"	磨 石	"	"	9.2	8.7	4.7	575
315	A-06	西ベルトⅣc層	擦 石	石英安山岩	奥羽山地 中新統	15.5	7.0	6.0	940
316	A B-10	10~11Ⅴ-Ⅵ上	磨 石	輝石安山岩	二戸一帯 中新統	8.7	8.9	5.2	460
317	"	"	擦 石	"	"	10.7	8.2	5.5	535
318	A-02	4-(Ⅳ)	凹み石	"	"	10.7	5.1	1.7	150
319	"	"	"	"	"	9.0	8.2	3.9	400
320	"	"	"	"	"	10.4	9.0	4.6	590
321	"	ベルトⅣa	"	両輝石安山岩	奥羽山地 第四系	9.00	7.1	4.0	415
322	A-03	第2面	"	輝石安山岩	二戸一帯 中新統	7.6	8.5	2.8	240
323	"	北ベルト(Ⅲ~Ⅳ)	"	"	"	12.3	5.1	2.8	370
324	"	.3-3(Ⅳ)	"	"	"	9.3	7.4	4.6	390
325	"	第2面	"	"	"	10.1	8.0	5.0	480
326	"	4(Ⅳ)	"	"	"	11.5	8.2	4.3	485
327	"	"	"	"	"	12.3	9.7	4.5	780
328	"	第2面	"	硬砂岩	北上山地 古生界	10.7	4.7	2.0	640
329	A-04	4-(Ⅳ)	"	両輝石安山岩	奥羽山地 第四系	7.8	7.0	4.6	350
330	"	"	"	輝石安山岩	二戸一帯 中新統	10.8	6.0	2.5	240

No.	遺構名 (グリッド名)	出土層位	器種	石質	産地	法量			
						全長	全巾	重み	重さ
331	A-04	4-(IV)	凹み石	輝石安山岩	二戸一帯 中新統	12.7	8.2	5.7	700
332	A B-10	10-11IV下面~V下	"	"	"	12.8	5.6	2.7	250
333	"	"	"	両輝石安山岩	奥羽山地 第四系	10.9	8.1	2.9	310
334	"	02-04粗	"	輝石安山岩	二戸一帯 中新統	8.8	8.5	4.0	430
335	A-C10	08, 09集石下	"	両輝石安山岩	奥羽山地 第四系	9.20	7.80	4.30	410
336	A D区	5~2(III一下)	"	輝石安山岩	二戸一帯 中新統	10.0	8.0	4.0	385
337	A-04	3(IV上)	石 錘	砂質粘板岩	北上山地 中生界	6.8	4.3	1.4	6.0
338	A B-10	02-04粗	"	硬砂岩	北上山地 古生界	5.51	6.00	1.66	80
339	A-03	3(IV)	敲き石	粘板岩	"	13.3	4.2	1.6	145
340	A-07	V	敲き石、凹みあり	緑色角礫質凝灰岩	奥羽山地 中新統	10.4	6.90	2.70	310
341	A-C10	08, 09集石下	敲き石	硬砂岩	北上山地 古生界	6.20	8.50	3.00	260
342	A D区	3-5(IV下)	砥石	"	"	13.6	9.4	3.5	340
343	A-02	2面	石 棒	粘板岩	"	11.7	2.3	1.6	80
344	B-02	埋土混合	石 鎌	硬質泥岩	零石 中新統	3.66	1.74	0.46	2.45
345	B-04	2面(IV)	"	珪質凝灰質泥岩	"	4.04	1.76	0.6	2.7
346	"	4(IV)選	"	珪質泥岩	"	2.80	1.40	0.2	1.00
347	B-06	3(IV)	"	輝緑凝灰岩	北上山地 古生界	2.10	1.48	0.29	1.00
348	"	"	"	粘板岩	"	2.30	1.32	0.44	1.15
349	"	"	"	珪質細粒凝灰岩	零石 中新統	3.16	1.50	0.48	1.75
350	B-16区	浮石混り黒土	"	硬質凝灰質泥岩	"	2.50	1.86	0.36	2.00
351	B-06	第2面(中搬浮石)	石 槓	粘板岩	北上山地 古生界	6.20	2.70	0.6	17.45
352	B-02	第2面	石 匙	珪質泥岩	零石 中新統	7.66	2.12	0.94	14.25
353	B-04	V上	"	硬質凝灰質泥岩	"	3.32	2.72	0.68	6.95
354	B-06	3(IV)	"	珪質泥岩	"	5.56	2.05	0.42	6.35
355	B-07	2IV-V選	"	珪質泥岩	"	13.8	2.2	0.5	4.15
356	B-03	4(IV)	石 錘	硬質泥質凝灰岩	"	2.90	1.60	0.5	3.3
357	B-06	6IV	"	珪質泥岩	"	7.80	4.10	1.10	44.0
358	B-03	5IV-V	石 籠状	硬質泥岩	"	6.20	2.90	1.30	32.25
359	B-04	第2面(IV)	"	珪質泥岩	"	2.62	2.50	0.98	8.05
360	"	"	"	流紋岩質砂粒凝灰岩	"	3.05	2.00	0.84	4.30
361	"	4(IV)選	"	硬質泥岩	"	4.20	3.20	1.1	16.8
362	B-06	6IV	"	珪質泥岩	"	5.30	3.10	1.50	25.6
363	B-03	3(IV)	搔 器	粘板岩	北上山地 古生界	3.70	3.00	1.17	14.32
364	"	5IV下-V上	"	珪質凝灰質泥岩	零石 中新統	3.50	2.95	0.92	9.25
365	"	4(IV)	"	粘板岩	北上山地 古生界	3.80	2.50	0.9	8.15
366	"	第2面(IV)選	"	硬質泥岩	零石 中新統	5.40	3.20	0.6	16.6
367	B-04	第2面(IV)	"	珪質泥岩	"	5.36	3.24	0.80	14.50
368	B-05	2(中搬浮石)	"	硬質凝灰質泥岩	"	3.94	3.54	1.24	19.35
369	B-06	IV-V	"	粘板岩	北上山地 古生界	4.24	3.50	1.04	14.5
370	B-02	3(IV上)	切削器	珪質凝灰質泥岩	零石 中新統	4.68	2.96	1.16	14.30
371	B-04	第2面(IV)	"	硬質泥岩	"	2.98	2.92	1.00	7.35
372	B-05	4IV下	"	輝緑凝灰岩	北上山地 古生界	2.56	3.38	0.56	5.6
373	B-06	4IV-V	"	硬質泥岩	零石 中新統	3.80	3.80	1.10	14.9
374	B-16区	浮石混り黒土	"	硬質泥岩	"	2.43	1.94	1.00	7.30
375	B-02	第2面	"	珪質凝灰質泥岩	"	2.6	1.48	0.38	1.25
376	"	3(IV上)	"	硬質凝灰質泥岩	"	2.62	3.05	0.72	5.80
377	"	4(IV)	"	珪質凝灰質泥岩	"	3.43	1.66	0.20	1.15
378	B-03	3(IV)	"	珪質細粒凝灰岩	"	2.26	1.89	0.42	2.02
379	"	2(IV)	"	"	"	2.64	1.00	0.5	1.45
380	"	構埋土内Mix	"	"	"	3.28	1.85	0.52	4.65
381	"	2(IV)	"	珪質泥岩	"	4.90	3.00	1.03	15.36
382	"	3(IV)	"	珪質凝灰質泥岩	"	2.94	1.73	0.40	1.70
383	B-04	4(IV)選	"	チャート	北上山地 古生界	2.50	2.90	0.7	4.9
384	B-05	2	"	珪質泥岩	零石 中新統	3.16	1.80	0.34	1.95
385	"	3(IV)	"	"	"	1.67	2.50	0.74	4.6



No.	遺構名 (グリッド名)	出土層位	器種	石質	産地	法量			
						全長	全巾	厚み	重さ
386	B-05	3 (IV)	切削器	流紋岩質細粒凝灰岩	雫石 中新統	2.93	2.64	1.05	8.5
387	B-06	"	"	硬質凝灰質泥岩	"	5.56	2.20	0.7	8.80
388	"	西ベルトIV B層	"	流紋岩質細粒凝灰岩	"	2.48	3.54	1.10	12.6
389	"	2 III	"	粘板岩	北上山地 古生界	3.68	2.30	0.82	7.10
390	B-07	2 IV-V選	"	珪質泥岩	雫石 中新統	4.1	2.2	0.4	5.95
391	B-16	浮石混り黒土	"	粘板岩	北上山地 古生界	2.13	1.88	0.36	2.10
392	B-03	5 IV下-V上	磨製石斧	淡緑色珪質凝灰岩	雫石 中新統	4.05	2.84	0.68	12.55
393	"	"	"	輝石珪岩	北上山地 中生界	11.0	5.1	1.90	180
394	B-05	SベルトIV C層	"	粘板岩	北上山地 古生界	4.62	3.78	1.06	27.80
395	B-03	4 (IV)	擦石	両輝石安山岩	奥羽山地 第四系	18.7	9.6	5.10	1,260
396	"	6 (IV-V)	"	輝石安山岩	二戸一帯 中新統	11.3	7.4	5.50	635
397	"	"	"	"	"	11.5	6.9	5.30	585
398	"	IV-V上	"	"	"	15.3	6.5	6.6	500
399	B-04	4 (IV)	磨石	"	"	4.8	11.0	3.4	210
400	"	5 (IV下)	"	"	"	7.0	9.5	3.7	360
401	"	第2面(IV)	擦石	"	"	10.1	6.2	3.5	340
402	"	4 (IV)選	"	硬砂岩	北上山地 古生界	10.4	8.3	6.4	1,080
403	B-05	IV C層	磨石	両輝石安山岩	奥羽山地 第四系	9.5	7.9	4.1	420
404	"	"	擦石	輝石安山岩	二戸一帯 中新統	13.6	8.7	7.0	10.10
405	"	2 (IV)	"	"	"	12.8	8.4	4.8	695
406	"	IV C層	"	凝灰質硬砂岩	北上山地 古生界	12.0	6.3	3.9	420
407	B-07	3 V-IV	"	輝石安山岩	二戸一帯 中新統	12.0	8.0	4.6	650
408	B-04	5 (IV下)	凹み石	"	"	9.6	8.0	3.0	320
409	"	第2面黒色土(IV)	"	"	"	7.3	5.7	3.8	190
410	B-05	IV C層	"	"	"	10.7	8.2	3.7	390
411	"	"	"	"	"	6.8	7.0	3.1	120
412	"	"	"	両輝石安山岩	奥羽山地 第四系	7.7	7.5	4.7	370
413	B-07	3 V-IV	"	輝石安山岩	二戸一帯中新統	9.3	7.0	5.6	430
414	B-03	第2面(IV)選	石錘	"	"	5.40	6.60	1.10	60
415	B-04	6 (IV下)-V	敲き石	"	"	13.0	6.7	2.20	310
416	"	4 (IV)	"	"	"	17.7	8.4	4.8	1,110
417	B-03	"	石皿	"	"	17.4	21.0	4.7	3,080
418	C-07	包含層第3面	石鏝	流紋岩質細粒凝灰岩	雫石 中新統	2.48	1.42	0.43	1.10
419	C-07	IV-V上	"	"	"	3.20	0.88	0.48	0.95
420	"	3 IV-V	"	輝緑凝灰岩	北上山地 古生界	5.04	2.62	1.17	1.08
421	"	包含層第3面	"	流紋岩質細粒凝灰岩	雫石 中新統	2.70	1.56	0.58	1.80
422	"	"	"	珪質細粒凝灰岩	"	2.84	1.72	0.54	1.90
423	"	"	"	珪質泥岩	"	2.24	1.30	0.43	1.30
424	C-08	IV b層	"	流紋岩質細粒凝灰岩	"	2.70	1.50	0.64	1.75
425	C-06	V-IV	石匙	粘板岩	北上山地 古生界	3.30	2.20	0.6	3.80
426	C-07	4-5上	"	珪質細粒凝灰岩	"	3.38	1.36	0.48	1.70
427	"	2 (IV-V)	"	珪質泥岩	"	5.6	1.90	0.6	7.1
428	C-08	IV b層	"	輝緑凝灰岩	"	2.76	2.40	0.78	1.80
429	"	IV下-V上No11	"	粘板岩	"	6.6	2.1	0.5	8.25
430	"	"	"	珪質泥岩	雫石 中新統	2.2	2.3	0.7	4.20
431	C D区	14-15V上	"	粘板岩	北上山地 古生界	6.90	4.83	0.64	23.80
432	D区	12-13V	"	珪質泥岩	雫石 中新統	2.9	5.4	0.7	10.85
433	C-07	2 (IV-V)	石錐	"	"	3.9	1.50	0.5	3.5
434	"	16-18IV	石籠状	硬質凝灰質泥岩	"	7.22	4.22	1.66	47.75
435	"	3 IV-V	搔器	硬質泥岩	"	3.90	3.64	1.18	20.06
436	"	2 IV-V上	"	粘板岩	北上山地 古生界	4.40	3.10	1.40	17.05
437	"	2 (IV-V)	切削器	珪質泥岩	雫石 中新統	6.1	2.2	0.8	21.15
438	"	"	"	硬質泥岩	"	2.3	1.6	0.2	1.05
439	"	"	"	珪質泥岩	"	3.4	2.3	0.45	4.8
440	"	包含層第3面	"	珪質細粒凝灰岩	"	3.00	1.56	0.48	2.40

No	遺構名 (グリッド名)	出土層位	器種	石質	産地	法量			
						全長	全巾	厚み	重さ
441	C-07	2Ⅱ-V上	切削器	珪質泥岩	零石 中新統	3.54	2.94	0.88	2.20
442	C-08	Ⅳ-V	"	流紋岩質細粒凝灰岩	"	2.58	2.10	0.68	3.75
443	"	Ⅳ-V	"	流紋岩質細粒凝灰岩	"	2.90	3.52	0.54	6.80
444	"	Ⅳ下~Ⅴ上No11	"	硬質泥岩	"	4.1	3.4	0.9	14.15
445	C-07	3Ⅳ-V	磨石	輝石安山岩	二戸一帯 中新統	10.3	8.90	4.0	490
446	"	2(Ⅳ-V上)	擦石	"	"	7.00	7.90	4.60	430
447	"	包含層第3面	"	"	"	6.1	5.7	4.5	250
448	C D区	16~18Ⅳ	磨石	硬砂岩	北上山地 古生界	9.70	5.38	1.78	110
449	C-01	V-上	半円状扁平打製石器	輝石安山岩	二戸一帯 中新統	12.6	7.90	2.00	200
450	C D区	19~21Ⅴ	"	両輝石安山岩	奥羽山地 第四系	5.5	6.9	2.3	135
451	C-07	3Ⅳ-V	凹み石	輝石安山岩	二戸一帯 中新統	11.2	7.70	7.10	720
452	C D区	14~18Ⅳ	"	"	"	11.5	5.3	3.7	300
453	I-19住	埋土混合	石 鏝	珪質泥岩	零石 中新統 上部	3.46	1.60	0.46	2.25
454	"	"	"	珪質凝灰質泥岩	零石 中新統	4.14	1.30	0.48	2.00
455	"	"	"	チャート	北上山地 古生界	3.90	1.48	0.66	2.90
456	"	Q 8-1層	"	"	"	2.79	1.60	0.56	2.25
457	"	Q-4-2 Mix	"	粘板岩	"	3.73	1.31	0.72	3.30
458	"	南北軸12層	"	珪質細粒凝灰岩	零石 中新統	3.90	1.54	0.65	3.25
459	"	Q-4-2 Mix	"	玻璃質流紋岩	奥羽山地 中新統	2.86	1.30	0.62	2.20
460	"	埋土混合	"	珪質細粒凝灰岩	零石 中新統	2.70	1.50	0.78	2.40
461	"	Q-3埋土	"	珪質泥岩	零石 中新統 上部	3.48	1.56	0.56	3.0
462	"	Q-8-3 Mix	"	珪質凝灰質泥岩	零石 中新統	2.94	1.46	0.40	1.45
463	"	埋土混合	"	珪質細粒凝灰岩	"	4.14	1.56	0.56	2.75
464	"	北端P1埋土	"	粘板岩	北上山地 古生界	3.72	2.10	1.00	5.95
465	"	南埋土	"	珪質泥質凝灰岩	零石 中新統	4.08	1.46	0.60	3.10
466	"	Q 8-1層	"	硬質泥岩	"	3.16	1.93	0.54	3.10
467	"	東西ベルト3層	"	珪質細粒凝灰岩	"	4.78	1.35	0.8	3.75
468	"	Q 8-1層	"	粘板岩	北上山地 古生界	4.04	1.74	1.04	6.30
469	"	"	"	硬質泥岩	零石 中新統	4.15	2.07	1.05	8.35
470	"	Q-8-1 Mix	"	珪質細粒凝灰岩	"	3.16	1.74	0.84	3.75
471	"	Q-7-2 Mix	"	珪質凝灰質泥岩	"	4.64	1.00	0.52	1.75
472	"	Q 8-1層	"	珪質泥岩	"	3.78	1.36	0.74	3.65
473	"	Q-8-3 Mix	"	玉ずい	時代産地不詳	5.04	2.68	0.84	8.75
474	"	Q-8-1 No.3	"	珪質細粒凝灰岩	零石 中新統	4.05	2.30	0.94	3.35
475	"	Q-7-1 No.6	"	珪質凝灰質泥岩	"	2.78	1.70	0.34	1.70
476	"	東西ベルト12層	"	硬質泥岩	"	4.30	2.34	0.78	6.70
477	"	4-16N端1層	"	珪質細粒凝灰岩	"	2.89	19.60	0.54	3.05
478	"	4-18	"	粘板岩	北上山地 古生界	3.32	1.76	0.43	1.55
479	"	4-61N端1層	"	珪質細粒凝灰岩	零石 中新統	2.56	1.46	0.48	1.55
480	"	Mix	"	硬質泥岩	"	2.96	1.60	0.34	2.15
481	"	Q-3埋土	"	珪質凝灰質泥岩	"	4.90	2.66	0.80	11.15
482	"	Q-9WベルトMix	"	玻璃質流紋岩	奥羽山地 中新統	6.26	1.78	0.74	7.96
483	"	4-61N端1層	石 槍	珪質凝灰質泥岩	零石 中新統	4.29	2.49	0.9	7.60
484	"	No.5 P 5面	"	粘板岩	北上山地 古生界	9.98	2.42	0.68	20.4
485	"	南北ベルト1層	"	硬質泥岩	"	2.54	2.92	0.68	5.35
486	"	4-61N端1層	石 匙	珪質凝灰質泥岩	零石 中新統	3.90	1.63	0.57	4.10
487	"	"	"	硬質泥岩	"	3.88	1.74	0.44	4.25
488	"	Q-3ベルトMix	"	珪質凝灰質泥岩	"	5.60	2.20	0.50	6.15
489	"	東西ベルト3層	"	珪質細粒凝灰岩	"	9.00	2.74	1.08	22.90
490	"	埋土混合	"	珪質凝灰質泥岩	"	6.90	2.14	0.86	15.09
491	"	Q-10床上O-15	"	"	"	5.90	2.70	1.12	19.75
492	"	4-61N端1層	"	"	"	3.24	1.25	0.58	2.00
493	"	南北ベルト24層	"	珪質泥質凝灰岩	"	3.77	1.48	0.76	4.50
494	"	Q-9-2 Mix	"	珪質凝灰質泥岩	"	2.84	2.30	0.64	2.65
495	"	東西ベルト12層	"	珪質泥岩	零石 中新統 上部	5.34	5.60	1.10	27.90



No.	遺構名 (グリッド名)	出土層位	器種	石質	産地	法量			
						全長	全巾	厚み	重さ
496	I-19住	4-61N端1層	石匙	珪質細粒凝灰岩	零石 中新統	2.58	2.42	0.82	4.00
497	"	SNベルト23層	石錐	珪質凝灰質泥岩	"	3.74	3.10	1.74	15.85
498	"	南北ベルト24層	"	珪質細粒凝灰岩	"	3.08	1.50	0.76	2.95
499	"	埋土混合	"	珪質凝灰質泥岩	"	3.67	3.18	0.90	8.30
500	"	Q-6埋土第一	"	"	"	3.54	2.48	0.90	7.00
501	"	南北ベルト24層	"	硬質泥岩	"	3.54	1.96	0.81	5.15
502	"	Q8-1層	石籠状石器	粘板岩	北上山地 古生界	5.90	3.20	1.80	35.75
a	"	"	"	チャート	"	1.90	3.52	1.20	8.05
503	"	S埋土	"	珪質凝灰質泥岩	零石 中新統	4.72	3.40	1.52	29.55
504	"	埋土混合	"	硬質泥岩	"	7.80	3.00	1.40	35.00
505	"	Q-9WベルトMix	"	"	"	6.76	2.88	1.58	29.50
506	"	埋土混合	"	珪質細粒凝灰岩	"	5.60	2.42	0.98	15.65
507	"	南北ベルト層	"	"	"	5.00	4.00	1.45	31.50
508	"	Q-7-2 Mix	"	珪質凝灰質泥岩	"	4.30	2.80	1.24	16.45
509	"	E壁側	"	粘板岩	北上山地 古生界	5.48	3.95	1.52	36.05
510	"	Q-1-1 Mix	"	珪質細粒凝灰岩	零石 中新統	4.07	1.67	1.04	7.25
511	"	東西ベルト12層	"	"	"	4.86	2.00	1.10	9.85
512	"	南北ベルト17層	"	硬質泥岩	"	3.16	3.00	1.10	14.70
513	"	N埋土	"	珪質凝灰質泥岩	"	4.00	2.62	1.10	14.55
514	"	Q-4-1 No.1	"	硬質泥岩	"	2.10	3.00	1.14	7.95
515	"	南埋土	搔器	粘板岩	北上山地 古生界	8.84	4.08	1.10	48.25
516	"	Q-10床土O-15	"	硬質泥岩	零石 中新統	5.60	3.60	12.40	25.07
517	"	Q8-1層	"	珪質細粒凝灰岩	"	4.50	7.78	2.44	90
518	"	Q-8-1 Mix	"	玉ずい	時代産地不詳	3.30	2.20	0.60	5.55
519	"	西埋土	"	チャート	北上山地 古生界	2.80	1.98	0.60	3.45
520	"	第5面	"	珪質細粒凝灰岩	零石 中新統	6.26	6.10	4.10	150
521	"	埋土混合	"	チャート	北上山地 古生界	3.00	2.30	0.80	7.05
522	欠番								
523	"								
524	"								
525	I-19住	埋土混合	搔器	硬質泥岩	零石 中新統	7.30	5.60	1.40	70.00
526	"	検出クリーニング	"	珪質細粒凝灰岩	"	1.30	3.20	1.00	9.80
527	"	Q-3ベルトMix	"	"	"	4.50	2.90	0.90	13.80
528	"	南北ベルト5層	"	珪質泥質凝灰岩	"	7.00	2.96	1.98	37.35
529	"	南ベルト	切削器	珪質泥岩	"	4.74	2.23	0.80	6.30
530	"	東西軸6層	"	硬質泥岩	"	5.16	1.72	0.38	4.35
531	"	第5面	"	"	"	5.98	4.26	1.40	39.0
532	"	埋土混合	"	珪質泥岩	零石 中新統 上部	3.88	4.04	2.15	30.05
533	"	4-18	"	硬質泥岩	零石 中新統	4.00	1.75	0.22	2.15
534	"	埋土混合	"	珪質凝灰質泥岩	"	2.32	2.67	0.46	2.85
535	"	"	"	珪質泥岩	零石 中新統 上部	3.2	4.24	1.20	17.85
536	"	Q8-1層	"	珪質細粒凝灰岩	零石 中新統	4.00	3.52	1.72	19.35
537	"	4-61N端1層	"	硬質泥岩	"	2.98	2.70	0.46	5.45
538	"	Q-9-WベルトMix	"	珪質凝灰質泥岩	"	2.80	2.86	0.40	3.25
539	"	中央中	"	玉ずい	時代産地不詳	2.20	3.16	0.67	4.15
540	"	"	"	硬質泥岩	零石 中新統	5.30	3.20	14.00	21.60
541	"	東西ベルト3層	"	"	"	3.10	3.20	0.78	9.50
542	"	南埋土	"	珪質凝灰質泥岩	"	3.20	2.36	1.90	7.50
543	"	4-59	"	硬質泥岩	"	5.70	3.90	1.26	26.85
544	"	Q-8-1 No.6	"	珪質細粒凝灰岩	"	3.10	2.44	1.00	5.70
545	"	No.50	"	粘板岩	北上山地 古生界	2.67	4.18	1.01	10.10
546	"	埋土混合	"	珪質凝灰質泥岩	零石 中新統	3.10	1.98	0.90	3.70
547	"	東西軸5層	"	硬質泥岩	"	2.90	3.70	1.10	11.40
548	"	埋土混合	"	珪質泥岩	零石 中新統 上部	3.40	1.95	0.86	6.70
549	"	Q3ベルトMix	"	粘板岩	北上山地 古生界	4.40	2.90	1.30	18.00

No	遺構名 (グリッド名)	出土層位	器種	石質	産地	法量			
						全長	全巾	厚み	重さ
550	I-19住	Q4Wベルト	切削器	硬質泥岩	雫石 中新統	4.52	4.00	1.33	28.20
551	"	Q-2-1 Mix	"	珪質泥岩	雫石 中新統 上部	4.60	2.20	0.60	6.80
552	"	Q-1-1 Mix	"	珪質凝灰質泥岩	雫石 中新統	2.30	3.20	0.60	6.60
553	"	Q-7ベルト Mix	"	硬質泥岩	"	3.58	3.20	0.96	10.50
554	"	埋土混合	"	珪質凝灰質泥岩	"	2.30	3.70	0.70	7.35
555	"	東西ベルト12層	"	硬質泥岩	"	2.60	2.40	0.78	5.70
556	"	埋土混合	"	珪質凝灰質泥岩	"	3.00	2.10	0.32	2.65
557	"	Mix	"	玉ずい	時代産地不詳	2.66	1.60	0.58	3.00
558	"	Q-10Wベルト Mix	"	珪質凝灰質泥岩	雫石 中新統	3.80	2.40	0.70	6.85
559	"	埋土混合	"	硬質泥岩	"	3.08	2.20	0.60	3.80
560	"	Q8-1層	"	"	"	3.37	2.36	0.50	4.15
561	"	埋土混合	"	珪質凝灰質泥岩	"	3.00	1.78	0.82	5.20
562	"	Q-8-3 Mix	"	チャート	北上山地 古生界	2.90	2.40	0.70	4.45
563	"	中央中	"	珪質凝灰質泥岩	雫石 中新統	2.30	2.90	0.50	3.75
564	"	埋土混合	"	"	"	14.50	8.40	1.54	100.00
565	"	"	"	"	"	8.20	6.7	3.3	170
566	"	"	"	"	"	7.4	8.3	4.1	320
567	"	"	"	"	"	9.70	9.40	2.40	230.00
568	"	南北ベルト4層	"	硬質泥岩	"	4.8	7.1	2.1	75.0
569	"	粗掘時周辺	"	粘板岩	北上山地 古生界	11.8	8.2	4.0	450
570	"	埋土混合	"	珪質凝灰質泥岩	雫石 中新統	10.8	5.8	2.8	140
571	"	Q-6-1N	磨製石斧	硬質泥岩	"	2.1	5.5	1.8	30.06
572	"	検出クリーニング	"	粘板岩	北上山地 古生界	4.92	3.1	0.7	16.33
573	"	Q-7、Q-2埋土第1層	"	輝緑凝灰岩	"	3.26	5.7	0.98	24.9
574	"	Q-1-2 一括混合	"	粘板岩	"	3.14	3.6	1.0	21.5
575	"	Q-9Wベルト Mix	"	珪質細粒凝灰岩	雫石 中新統	3.7	2.9	0.8	16.5
576	"	埋土混合	"	輝石玢岩	北上山地 中生界	7.2	5.0	2.9	200
577	"	南埋土	打製石斧	両輝石安山岩	奥羽山地 中新統	8.5	5.6	2.4	180
578	"	埋土混合	磨製石斧	輝緑凝灰岩	北上山地 古生界	5.0	2.18	1.0	21.5
579	"	中央中	"	花崗閃緑岩	北上山地 中生界	6.1	5.1	2.6	130
580	"	東埋土	"	"	"	6.9	5.1	3.7	195
581	"	Q-7-2 一括混合	"	輝緑凝灰岩	北上山地 古生界	3.06	1.6	1.92	8.05
582	"	埋土中	"	安山岩	北上山地 中生界	11.2	6.9	9.2	500
583	"	埋土	擦石	珪質細粒凝灰岩	雫石 中新統	4.78	4.58	2.20	60.0
584	"	南埋土	磨石	珪質凝灰質泥岩	"	2.08	1.29	0.75	2.70
585	"	"	"	輝石安山岩	奥羽山地(二戸一帯)中新統	11.3	9.1	3.9	580
586	"	埋土混合	"	安山岩	北上山地 中生界	11.2	8.8	6.0	910
587	"	Na1 P5号直東	"	"	"	9.0	8.7	5.0	630
588	"	Q-6-3下向石器	"	"	"	13.0	7.3	6.5	1,000
589	"	Na19	"	輝石安山岩	奥羽山地(二戸一帯)中新統	7.9	6.3	5.2	340
590	"	東埋土	半円状扁平打製石器	"	"	6.9	6.9	2.6	200
591	"	W埋土	"	"	"	8.6	7.0	2.6	260
592	"	粗掘時周辺	"	安山岩	北上山地 中生界	15.9	10.2	4.4	1,130
593	"	東側クリーニング	"	粗粒凝灰質硬砂岩	北上山地 古生界	14.8	7.8	2.7	390
594	"	南埋土	"	硬砂岩	"	14.2	8.8	3.5	630
595	"	埋土中	"	"	"	9.1	10.0	5.5	790
596	"	埋土混合	"	輝石安山岩	奥羽山地(二戸一帯)中新統	9.8	6.9	1.9	200
597	"	Q-7、Q-2埋土第1層	"	"	"	12.5	7.7	2.4	350
598	"	東埋土	"	両輝石安山岩	奥羽山地 第四系	13.4	6.7	2.8	420
599	"	南埋土	"	輝石安山岩	奥羽山地(二戸一帯)中新統	7.1	7.7	3.3	250
600	"	東埋土	"	粗粒凝灰質硬砂岩	北上山地 古生界	16.6	7.4	3.4	950
601	"	Q-7、Q-2埋土第1層	"	両輝石安山岩	奥羽山地 第四系	7.2	7.3	3.2	230
602	"	東側クリーニング	"	輝石安山岩	奥羽山地(二戸一帯)中新統	9.3	9.3	3.3	430
603	"	Q-7-3面	"	"	"	4.96	5.90	2.20	65.0
604	"	粗掘時周辺	凹み石	"	"	8.8	5.8	5.6	350



No	遺構名 (グリッド名)	出土層位	器種	石質	産地	法量			
						全長	全巾	厚み	重さ
605	I-19住	Q-7、Q-2埋土第1層	凹み石	輝石安山岩	奥羽山地(二戸一帯)中新統	8.6	8.3	2.6	275
606	"	粗掘時周辺	"	"	"	12.2	7.4	2.7	300
607	"	検出クリーニング	"	"	"	8.5	6.4	2.5	215
608	"	埋土混合	"	両輝石安山岩	"	8.2	5.7	3.4	230
609	"	"	"	輝石安山岩	"	10.2	8.1	5.8	610
610	"	粗掘時周辺	石 錘	粘板岩	北上山地 古生界	9.3	5.4	1.8	145
611	"	"	"	輝石安山岩	奥羽山地(二戸一帯)中新統	9.5	5.8	2.6	200
612	"	"	"	凝灰質砂岩	"	11.6	9.2	2.6	400
613	"	Q-6-3下面	"	両輝石安山岩	奥羽山地 第四系	10.7	7.4	3.2	330
614	"	粗掘時周辺	凹み石	輝石安山岩	奥羽山地(二戸一帯)中新統	14.6	7.1	5.0	780
615	"	"	"	"	"	8.3	5.8	3.3	385
616	"	南埋土	石 錘	凝灰質硬砂岩	北上山地 古生界	9.7	6.7	3.0	280
617	"	Q-2、Q-7埋土第1層	"	粘板岩	"	11.3	7.2	3.0	310
618	"	床面上	"	凝灰質硬砂岩	"	11.8	7.5	2.4	350
619	"	Q-7、Q-2埋土第1層	凹み石	輝石安山岩	奥羽山地(二戸一帯)中新統	10.7	9.9	4.3	590
620	"	Q-6-3下向	"	"	"	13.3	8.5	3.7	620
621	"	粗掘時周辺	敲き石	安山岩	北上山地 中生界	10.7	10.0	5.6	88.5
622	"	No.4-A P	"	凝灰質硬砂岩	北上山地 古生界	10.1	6.4	2.6	325
623	"	南北軸12層	"	輝石安山岩	奥羽山地(二戸一帯)中新統	8.9	4.9	1.6	130
624	"	Q-7-3面	"	両輝石安山岩	奥羽山地 第四系	5.6	8.8	2.53	190
625	"	粗掘	"	輝石安山岩	奥羽山地(二戸一帯)中新統	3.76	7.26	2.67	90.0
626	"	東側クリーニング	"	硬砂岩	北上山地 古生界	10.3	6.8	4.0	580
627	"	南埋土	石 皿	輝石安山岩	奥羽山地(二戸一帯)中新統	10.2	7.7	4.0	560
628	"	No.1 P 第3号北No.51	"	花崗閃緑岩	北上山地 中生界	20.0	8.8	9.2	2,420
629	"	粗掘時周辺	砥 石	凝灰質硬砂岩	北上山地 古生界	13.0	7.5	2.4	450
630	"	"	"	"	奥羽山地(二戸一帯)中新統	11.1	8.5	5.4	725
631	"	"	石棒頭部	粗粒凝灰質硬砂岩	北上山地 古生界	11.6	7.2	4.4	620
632	"	Q-7-3面	珪化木	珪化木	二戸一帯 中新統	27.0	5.3	2.1	470
633	"	No.3 P上	砥 石	輝石安山岩	奥羽山地(二戸一帯)中新統	25.6	259	13.8	
634	"	No.7 P	"	"	"	30.8	21.7	12.0	
635	粗掘	Mix	石 鏡	珪質細粒凝灰岩	零石 中新統	2.40	0.81	0.41	0.58
636	"	遺構検出クリーニング	"	粘板岩	北上山地 古生界	3.17	1.91	0.51	3.25
637	"	79	"	珪質泥岩	零石 中新統	3.25	0.9	0.56	1.65
638	"	粗掘	"	粘板岩	"	4.12	0.95	0.63	3.40
639	"	"	"	珪質泥岩	"	5.68	1.56	0.37	6.75
640	"	"	"	珪質細粒凝灰岩	"	3.77	1.95	0.85	9.40
641	"	Mix	"	珪質泥岩	"	3.90	1.96	0.46	4.15
642	"	表採	"	輝緑凝灰岩(チャート)	北上山地 古生界	2.08	1.78	0.38	1.05
643	"	79	"	珪質泥岩	零石 中新統	2.50	1.10	0.40	1.10
644	"	粗掘	"	粘板岩	北上山地 古生界	2.66	1.34	0.35	2.50
645	"	"	石 槍	"	"	3.24	2.18	0.62	4.53
646	"	Mix	"	"	"	11.40	2.86	0.84	32.95
647	"	粗掘	"	"	"	6.63	2.28	0.54	8.4
648	"	Mix	石 匙	珪質泥岩	零石 中新統	4.40	1.65	0.50	4.83
649	"	"	"	珪質凝灰質泥岩	"	5.22	3.00	0.60	11.10
650	"	粗掘	"	硬質凝灰質泥岩	"	3.53	5.00	1.02	12.65
651	"	"	"	珪質凝灰質泥岩	"	3.10	6.05	1.08	12.65
652	"	"	石 篋	"	"	3.58	2.71	1.11	11.55
653	"	"	"	珪質細粒凝灰岩	"	3.66	4.67	1.64	24.13
654	"	遺構検出	"	珪質凝灰質泥岩	"	5.78	3.74	1.28	30.07
655	"	粗掘	"	珪質泥岩	北上山地 古生界	6.61	4.42	1.76	33.60
656	"	"	"	粘板岩	"	5.82	2.48	1.71	26.82
657	"	Mix	石篋状	珪質細粒凝灰岩	零石 中新統	8.06	3.20	1.80	53.25
658	"	粗掘	"	珪質泥岩	"	3.08	4.16	1.34	14.8
659	"	"	搔 器	珪質凝灰質泥岩	"	4.14	2.15	1.64	10.48

No.	遺構名 (グリッド名)	出土層位	器種	石質	産地	法量			
						全長	全市	厚み	重さ
660	粗掘	79	搔器	粘板岩	北上山地 古生界	4.90	2.40	1.73	20.25
661	"	"	"	"	"	4.24	3.24	1.00	12.65
662	"	1-20付近	"	"	"	3.68	1.86	0.9	5.8
663	粗掘	"	"	硬質凝灰質泥岩	雫石 中新統	7.91	10.66	4.54	430
664	Mix	"	"	硬質泥質凝灰岩	"	6.86	4.82	1.43	44.05
665	"	"	"	硬質細粒凝灰岩	"	8.80	6.60	1.40	110
666	"	"	"	玉ずい	" (?)	3.74	2.10	1.18	8.10
667	粗掘	"	"	硬質凝灰質泥岩	"	7.96	3.28	0.98	31.95
668	表採粗掘	"	切削器	"	"	9.18	6.14	1.55	57.55
669	粗掘	"	"	珪質凝灰質泥岩	"	5.20	3.78	0.48	9.00
670	"	"	"	硬質泥岩	"	5.20	1.86	0.04	4.60
671	"	19	"	珪質凝灰質泥岩	"	4.99	2.38	0.60	6.63
672	"	"	"	硬砂岩	北上山地 古生界	8.1	9.0	2.29	265
673	SWMix	"	"	粘板岩	"	2.04	2.40	0.55	3.30
674	粗掘	"	"	硬質泥岩	雫石 中新統	6.46	3.86	1.53	35.7
675	"	"	"	珪質泥岩	"	5.45	2.72	1.38	18.0
676	Mix	"	"	珪質凝灰質泥岩	"	2.76	2.26	0.92	4.01
677	"	"	"	"	"	2.33	3.02	0.82	5.00
678	遺構検出	"	"	粘板岩	北上山地 古生界	3.14	3.08	0.96	13.05
679	"	79	"	珪質泥岩	雫石 中新統	4.06	2.04	0.66	6.70
680	"	"	"	"	"	3.80	1.68	0.33	1.80
681	Mix	"	"	珪質泥岩	"	3.48	2.33	0.76	5.34
682	"	"	"	"	"	3.05	1.76	0.34	2.60
683	"	"	打製石斧	珪質細粒凝灰岩	"	13.60	3.20	1.80	65.00
684	粗掘	"	環状石斧	"	"	8.82	8.05	1.60	140.0
685	Mix	"	磨製石斧	淡緑色細粒凝灰岩	奥羽山地 中新統	9.33	4.90	1.62	130.0
686	"	79	"	凝灰質千枚岩	北上山地 古生界	5.08	3.36	0.83	16.15
687	遺構検出	"	"	凝灰質硬砂岩	"	5.53	4.05	2.13	80.0
688	"	79	"	粘板岩	"	5.96	3.30	1.73	2.77
689	Mix	"	"	"	"	1.92	2.38	0.40	2.35
690	表採粗掘	"	"	珪質淡緑色凝灰岩	奥羽山地 中新統	5.08	2.20	1.02	14.35
691	粗掘	"	"	硬砂岩	北上山地 古生界	10.88	5.93	3.58	350
692	遺構検出	"	擦石半円状	長石粉岩	北上山地 中生界	15.0	8.4	3.50	685
693	"	"	擦石	輝石安山岩	二戸一帯 中新統	9.0	9.2	4.9	710.5
694	"	79	"	輝石粉岩	"	14.3	8.6	4.5	820
695	表採粗掘	"	"	輝石安山岩	北上山地 古生界	7.9	7.0	4.2	400
696	"	"	磨石	"	"	6.6	8.7	3.3	580
697	"	79	"	両輝石安山岩	奥羽山地 第四系	9.0	6.8	5.1	410
698	"	"	"	"	"	7.1	6.6	5.7	380
699	表採粗掘	"	"	輝石安山岩	二戸一帯 中新統	8.7	7.6	6.1	290.5
700	粗掘	"	"	"	"	9.48	9.58	5.94	840.0
701	"	"	"	閃緑岩	北上山地 中生界	6.62	7.37	5.09	370
702	表採粗掘	"	"	輝石安山岩	北上山地 古生界	15.5	7.1	3.7	710.5
703	"	79	搔石	"	二戸一帯 中新統	8.1	7.5	3.2	300
704	表採粗掘	"	半円状扁平打製石器	"	"	24.3	6.9	2.4	420
705	遺構検出	"	"	"	"	12.9	10.7	2.00	580
706	表採粗掘	"	"	"	"	15.4	6.9	2.5	360.5
707	"	79	"	"	"	8.80	7.2	2.00	160
708	粗掘	"	"	"	"	12.22	8.71	3.00	434.0
709	粗掘79	"	"	両輝石安山岩	奥羽山地 第四系	14.0	8.0	2.50	410
710	遺構検出	"	"	硬質泥質凝灰岩	雫石 中新統	12.7	5.5	2.00	200
711	粗掘	"	"	硬砂岩	北上山地 古生界	14.69	6.28	4.17	550
712	"	"	"	"	"	15.32	9.30	3.19	680
713	"	"	"	"	"	7.39	8.93	3.84	300
714	"	"	"	硬砂岩	北上山地 古生界	7.49	8.3	3.52	330



No.	遺構名 (グリッド名)	出土層位	器種	石質	産地	法量			
						全長	全巾	厚み	重さ
715	粗掘	粗掘	半円状扁平打製石器			10.14	9.81	2.92	350
716	"	表採粗掘	"	輝石安山岩	二戸一帯 中新統	8.9	4.7	1.8	150
717	"	79	"	"	"	8.2	6.80	1.7	110
718	"	"	"	"	"	11.1	9.1	1.40	250
719	"	粗掘	"	"	"	7.93	8.63	2.72	258.0
720	"	"	"	"	"	9.94	7.08	3.00	290
721	"	表採粗掘	凹み石	粘板岩	北上山地 古生界	15.1	3.7	2.7	260
722	"	79	"	輝石安山岩	二戸一帯 中新統	12.2	12.2	6.5	1,170
723	"	粗掘	"	"	"	12.14	8.60	5.44	810
724	"	表採粗掘	"	輝石安山岩	二戸一帯 中新統	11.1	9.0	2.4	360
725	"	79	"	"	"	9.8	8.9	5.1	630
726	"	"	"	"	"	18.9	13.1	5.4	130
727	"	粗掘	"	"	"	8.36	6.57	4.11	330
728	"	"	"	輝石安山岩	二戸一帯 中新統	9.9	7.6	4.8	520
729	"	表採粗掘	"	"	"	9.1	8.2	5.5	720.5
730	"	79	"	両輝石安山岩	奥羽山地 第四系	12.4	8.6	5.0	730
731	"	"	石 錘	"	"	12.71	8.05	4.30	590
732	"	粗掘	"	"	"	10.08	7.93	2.59	355.0
733	"	"	"	"	"	9.39	6.84	2.34	250.0
734	"	79	"	両輝石安山岩	奥羽山地 第四系	14.4	7.7	3.9	540
735	"	"	"	"	"	8.8	7.3	2.5	290
736	"	粗掘	敲き石	"	"	13.75	5.66	4.26	430
737	"	79	石 皿	輝石安山岩	二戸一帯 中新統	5.5	6.6	2.8	1,390
738	"	表採粗掘	砥 石	"	"	10.7	10.0	4.18	380.5
739	"	粗掘	石 刀	"	"	29.25	3.14	1.82	325
740	B-09住	埋土混合	石 槍	粘板岩	北上山地 古生界	11.9	4.0	1.0	60
741	"	"	切削器	珪質泥岩	雫石 中新統	5.80	3.36	0.9	21.2
742	"	"	"	チャート	北上山地 古生界	4.44	2.96	1.0	17.9
743	C-08土抗	埋土	石篋状	"	"	3.90	2.86	1.36	14.85
744	A-15周溝	"	石 鏃	硬質泥質凝灰岩	雫石 中新統	3.20	10.48	0.64	2.25
745	"	"	石 錘	硬砂岩	北上山地 古生界	7.6	8.0	2.7	230
746	B-05周溝	"	石 鏃	珪質泥岩	雫石 中新統	2.66	1.24	0.5	1.34
747	"	"	石 錐	珪質凝灰質泥岩	"	3.54	2.28	1.1	7.70
748	"	"	播 器	硬質泥質凝灰岩	"	4.20	3.46	1.34	25.15
749	"	"	切削器	硬質泥岩	"	3.38	3.1	0.56	8.6
750	C-06周溝	S W部埋土	石 鏃	硬質凝灰質泥岩	"	2.95	7.30	0.60	4.85
751	"	E側 S端埋土	擦 石	両輝石安山岩	奥羽山地 第四系	7.5	7.9	2.7	270
752	"	"	半円状	輝石安山岩	二戸一帯 中新統	7.7	9.9	1.6	120
753	"	"	"	粗粒硬砂岩	北上山地 古生界	14.2	7.0	2.2	310
754	"	"	石 錘	輝石安山岩	二戸一帯 中新統	12.1	6.5	3.0	320
755	"	"	敲き石	凝灰質硬砂岩	北上山地 古生界	10.9	5.5	3.3	320
756	"	"	石 棒	"	"	5.8	3.2	2.9	100
757	I-19周溝	W埋土	石 錘	硬質泥質凝灰岩	雫石 中新統	3.15	2.54	1.70	3.15
758	A-12溝跡	南部部埋土	石 錐	"	"	5.4	1.6	0.7	4.9
759	"	南端部	"	珪質泥岩	"	3.80	1.46	0.56	2.4
760	"	南西埋土	"	珪質細粒凝灰岩	"	4.3	1.90	0.76	4.5
761	"	南端部埋土	"	珪質粘板岩	北上山地 古生界	4.54	1.48	0.61	3.2
762	"	"	"	珪質凝灰質泥岩	雫石 中新統	2.66	1.44	0.44	1.7
763	"	Sベルト	"	硬質泥岩	"	4.76	2.58	1.1	11.5
764	"	南端埋土	有舌尖頭器状	珪質細粒凝灰岩	"	5.5	2.86	1.44	22.03
765	"	埋土混合	石 匙	珪質粘板岩	北上山地 古生界	6.1	2.1	0.5	8.3
766	"	北より10m	"	硬質泥質凝灰岩	雫石 中新統	3.06	2.3	3.7	5.15
767	"	S端	"	珪質泥岩	"	6.20	2.34	0.7	8.05
768	"	S端	"	珪質凝灰質泥岩	"	3.54	1.96	0.74	6.45
769	"	南端	石 錐	珪質泥質凝灰岩	"	3.6	1.3	0.42	1.7

No	遺構名 (グリッド名)	出土層位	器種	石質	産地	法量			
						全長	全巾	厚み	重さ
770	A-12溝跡	南端	石槍	粘板岩	北上山地 古生界	7.70	2.22	1.04	18.90
771	"	Nより5m~10m	籠状	珉質粘板岩	"	4.5	4.0	1.4	29.1
772	"	埋土混合	"	硬質泥質凝灰岩	雫石 中新統	6.36	1.80	1.20	17.05
773	"	センター	"	鉄石英	産地時代不詳	4.70	2.30	1.24	15.15
774	"	中央付近	石籠	珉質凝灰質泥岩	雫石 中新統	8.0	3.56	1.36	42.3
775	"	北端	"	珉質細粒凝灰岩	"	4.78	2.40	1.08	11.85
776	"	"	"	粘板岩	北上山地 古生界	6.6	2.67	1.5	23.75
777	"	北端埋土	搔器	硬質泥岩	雫石 中新統	4.74	5.68	1.0	34.5
778	"	南端	"	珉質泥質凝灰岩	"	2.8	2.84	1.5	12.1
779	"	"	切削器	硬質泥岩	"	3.30	4.36	1.1	15.6
780	"	南端部	搔器	珉質泥岩	"	7.16	4.88	1.52	49
781	"	埋土混合	切削器	鉄石英	産地時代不詳	2.7	1.6	0.7	3.45
782	"	センターMix	"	チャート	北上山地 古生界	2.68	1.46	0.6	2.45
783	"	センター	"	鉄石英	産地時代不詳	2.8	1.95	1.14	0.65
784	"	"	"	"	"	2.3	1.88	0.9	4.15
785	"	埋土混合	"	チャート	北上山地 古生界	3.9	1.6	0.82	6.3
786	"	No1 5m~10m	"	硬質泥質凝灰岩	雫石 中新統	4.1	3.48	0.8	11.25
787	"	南端埋土	"	珉質泥質凝灰岩	"	5.9	3.13	0.8	11.96
788	"	埋土混合	"	珉質凝灰質泥岩	"	4.7	2.36	0.4	6.55
789	"	S端	"	硬質泥岩	"	3.1	2.38	0.36	4.0
790	"	南端	"	珉質泥質凝灰岩	"	3.94	3.82	0.62	7.3
791	"	溝南10ベルト	"	硬質泥質凝灰岩	"	5.2	5.16	0.84	17.5
792	"	センターラインベルト	"	珉質粘板岩	北上山地 古生界	3.36	3.55	1.66	22.8
793	"	北端1層	"	硬質泥質凝灰岩	雫石 中新統	3.4	4.4	1.24	18.2
794	"	"	磨製石斧	凝灰質粘板岩	北上山地 古生界	5.67	5.15	1.48	75.5
795	"	南端	"	粘板岩	"	5.1	4.20	1.33	48.6
796	"	南端部上部埋土	装飾品	チャート質凝灰岩	"	1.43	0.96	0.2	0.5
797	"	センターラインベルト	磨石	安山岩	北上山地 中生界	8.4	7.4	4.4	430
798	"	埋土南端	擦石	砂質粘板岩	北上山地 古生界	11.6	7.3	3.3	800
799	"	"	"	輝石安山岩	二戸一帯 中新統	8.7	7.6	2.7	440
800	"	"	"	両輝石安山岩	奥羽山地 第四系	7.9	5.8	2.9	320
801	"	"	"	"	"	8.8	6.9	6.3	360
802	"	"	"	安山岩	北上山地 中生界	7.5	8.0	3.2	650
803	"	センターラインベルト	半円状扁平打製石器	両輝石安山岩	奥羽山地 第四系	9.5	8.1	2.5	500
804	"	北より10m	"	輝石安山岩	二戸一帯 中新統	7.4	5.6	1.9	110
805	"	埋土混合	"	"	"	14.4	7.5	2.0	325
806	"	埋土南端	"	"	"	10.5	5.3	1.5	135
807	"	センターMix	"	"	"	6.0	5.7	1.4	60
808	"	北端1層	"	"	"	15.3	7.7	3.0	380
809	"	南埋土北より10m	"	"	"	4.2	4.8	1.1	30
810	"	北より10m	"	"	"	3.3	3.4	1.1	10
811	"	埋土南端	凹み石	"	"	10.7	9.6	6.7	870
812	"	"	"	"	"	13.5	6.8	5.2	570
813	"	北より10m	"	"	"	18.4	7.4	3.7	620
814	"	埋土南端	"	"	"	13.2	8.3	7.2	1,240
815	"	北より10m	石錘	"	"	8.3	6.9	2.0	180
816	"	埋土南端	"	"	"	10.8	7.0	2.4	245
817	"	"	"	両輝石安山岩	奥羽山地 第四系	10.3	6.4	2.2	230
818	"	"	敲き石	"	"	8.7	7.3	3.6	565
819	"	"	"	輝石安山岩	二戸一帯 中新統	9.1	11.2	3.6	715
820	"	"	"	両輝石安山岩	奥羽山地 第四系	9.5	8.5	3.5	490
821	"	南10mベルト	用途不明	粘板岩	北上山地 古生界	8.6	5.2	0.67	41.3
822	"	センターラインベルト	"	粘板岩ホルンフェルス	"	8.4	4.34	1.76	70
823	"	表面	砥石	"	"	38.0	32.5	8.0	73.20
824	"	南西部埋土	用途不明	珉化木	二戸 中新統	12.2	3.4	0.4	22.9
825	"	"	挾状耳飾り	"	"				



# 写 真 图 版

〈P L - 1 513 ~ P L - 147 659〉



P L - 1 調査後全景 (空中写真)





A. 集石群



B. 北端部土坑群

P L - 2 調査後全景

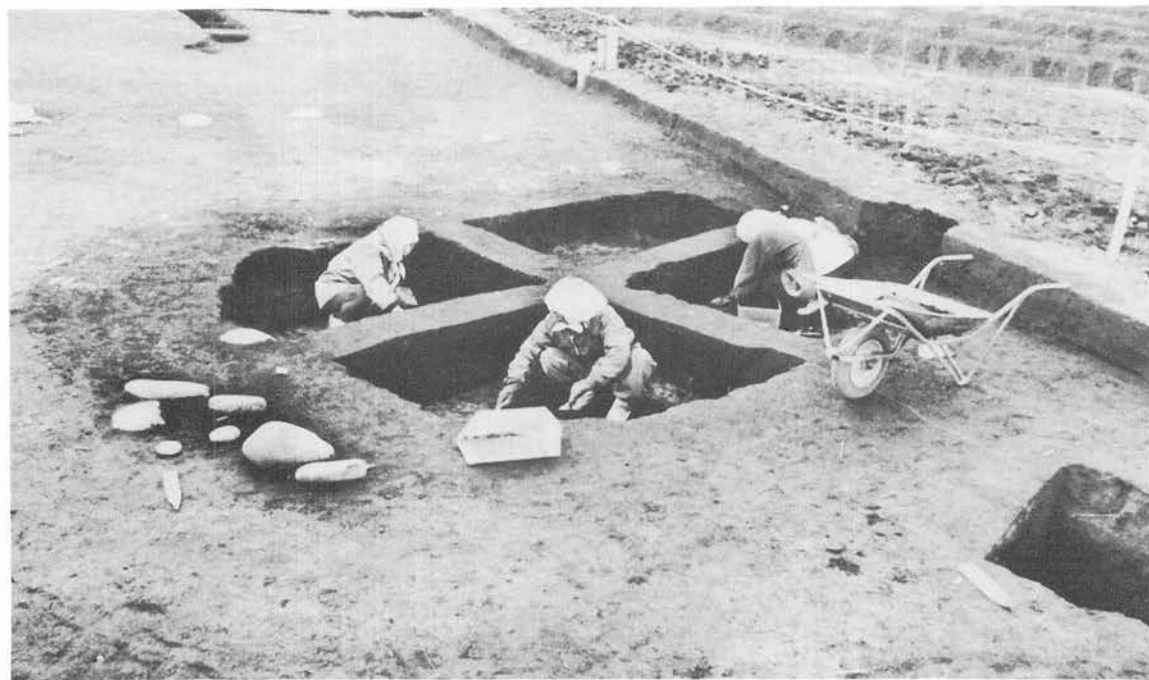


A. 南端部土坑群



B. 調査風景

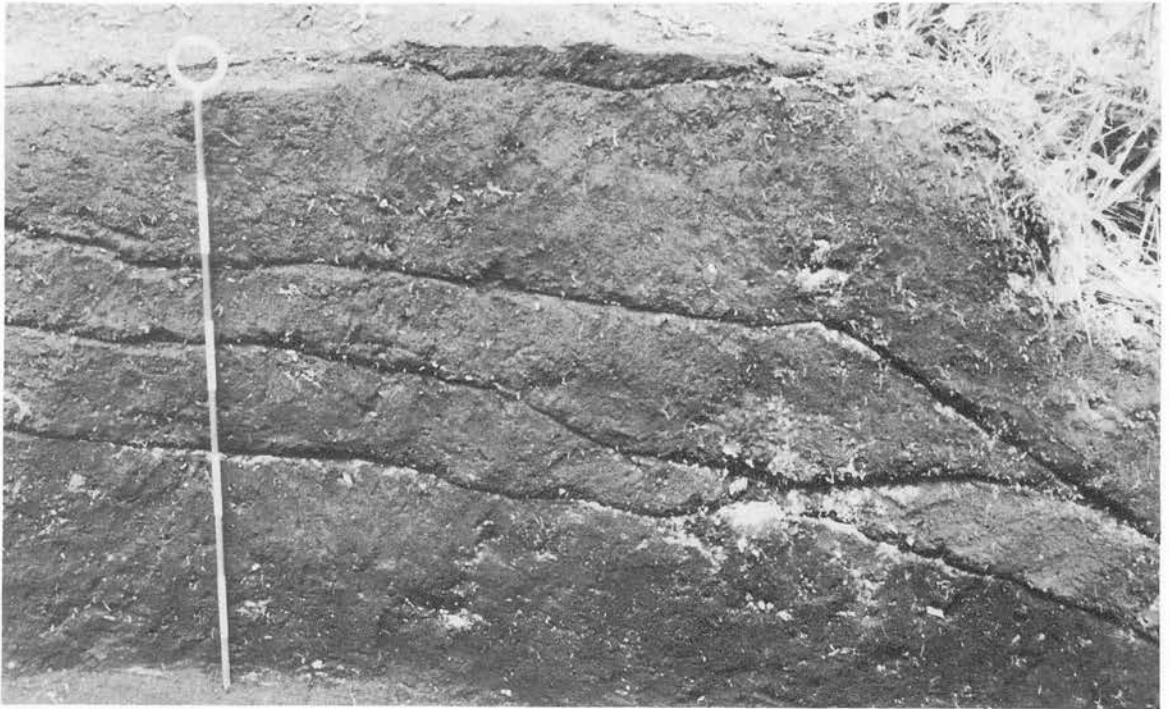




PL-4 調査風景



A. 北端部基本層序



B. 南端部基本層序

PL-5 基本層序

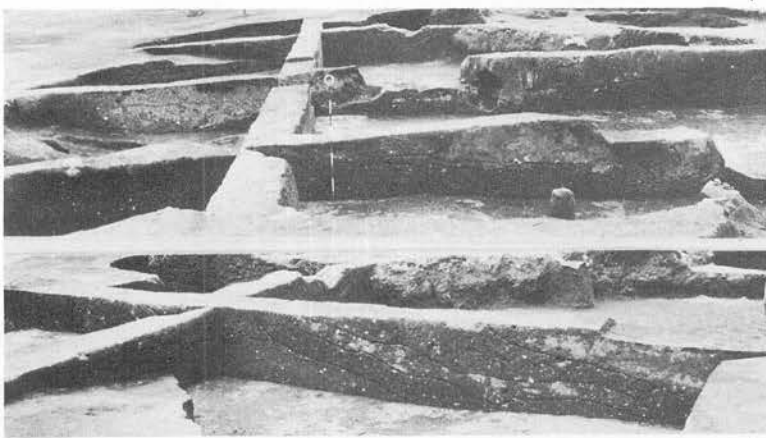




1



5



2

1. 完掘後全景
2. 埋土土層
3. 特殊掘り込み遺構
4. 同上埋土土層
5. 遺物出土状況



4



3



A. D-46住居跡



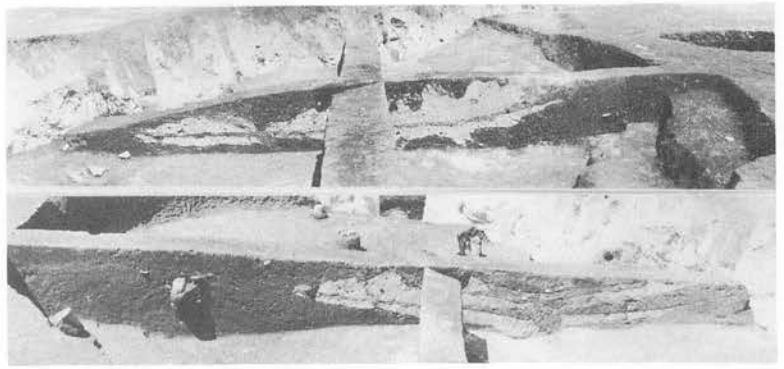
B. E-22住居跡





PL-8 G-16住居跡 (遺構-1)

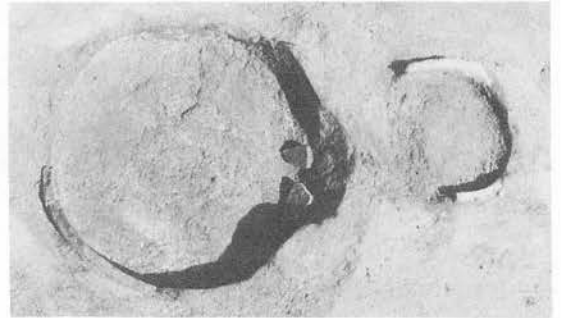
- 1. 埋土土層
- 2. 炉跡-2
- 3. 炉跡-1



1



2



3

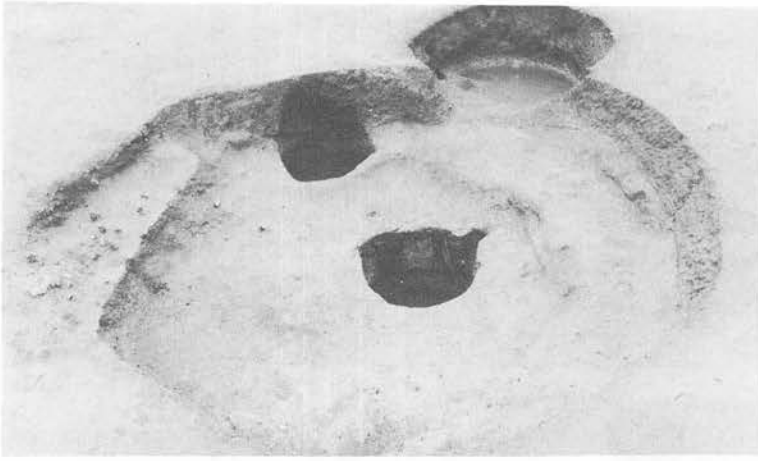
A. G-16住居跡 (遺構-2)



B. G-24住居跡

P L-9住居跡 (遺構)

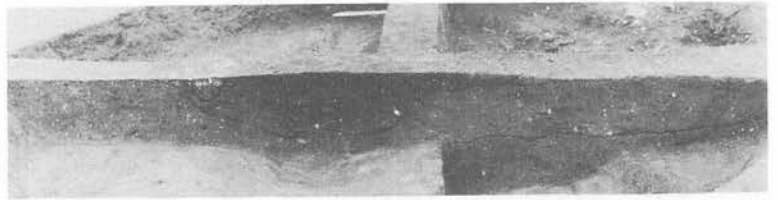




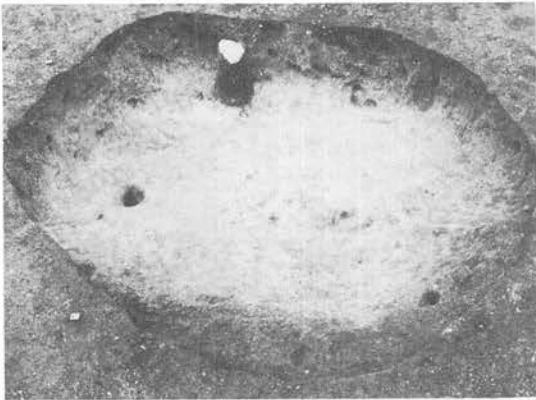
- 1. 完掘後全景
- 2. 埋土土層

1

A. H-41住居跡



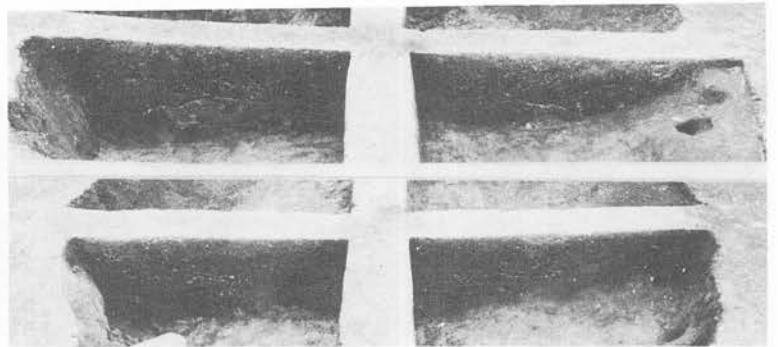
2



- 3. 完掘後全景
- 4. 埋土土層

3

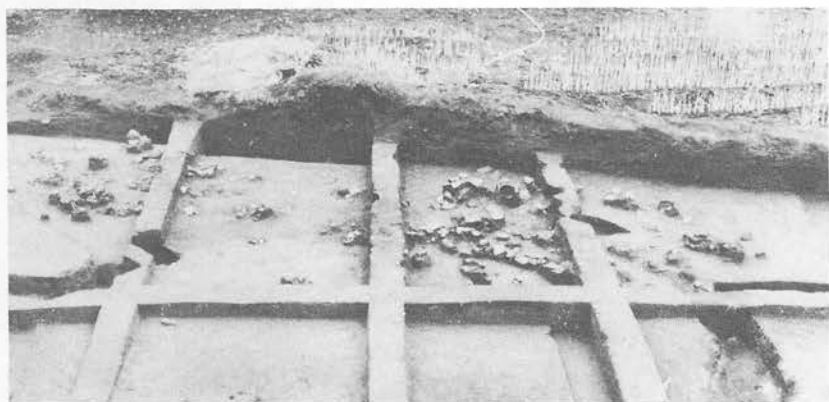
B. H-42住居跡



4



1



2

- 1. 完掘後全景
- 2. 埋土土層と遺物出土状況
- 3・4. 出土土器

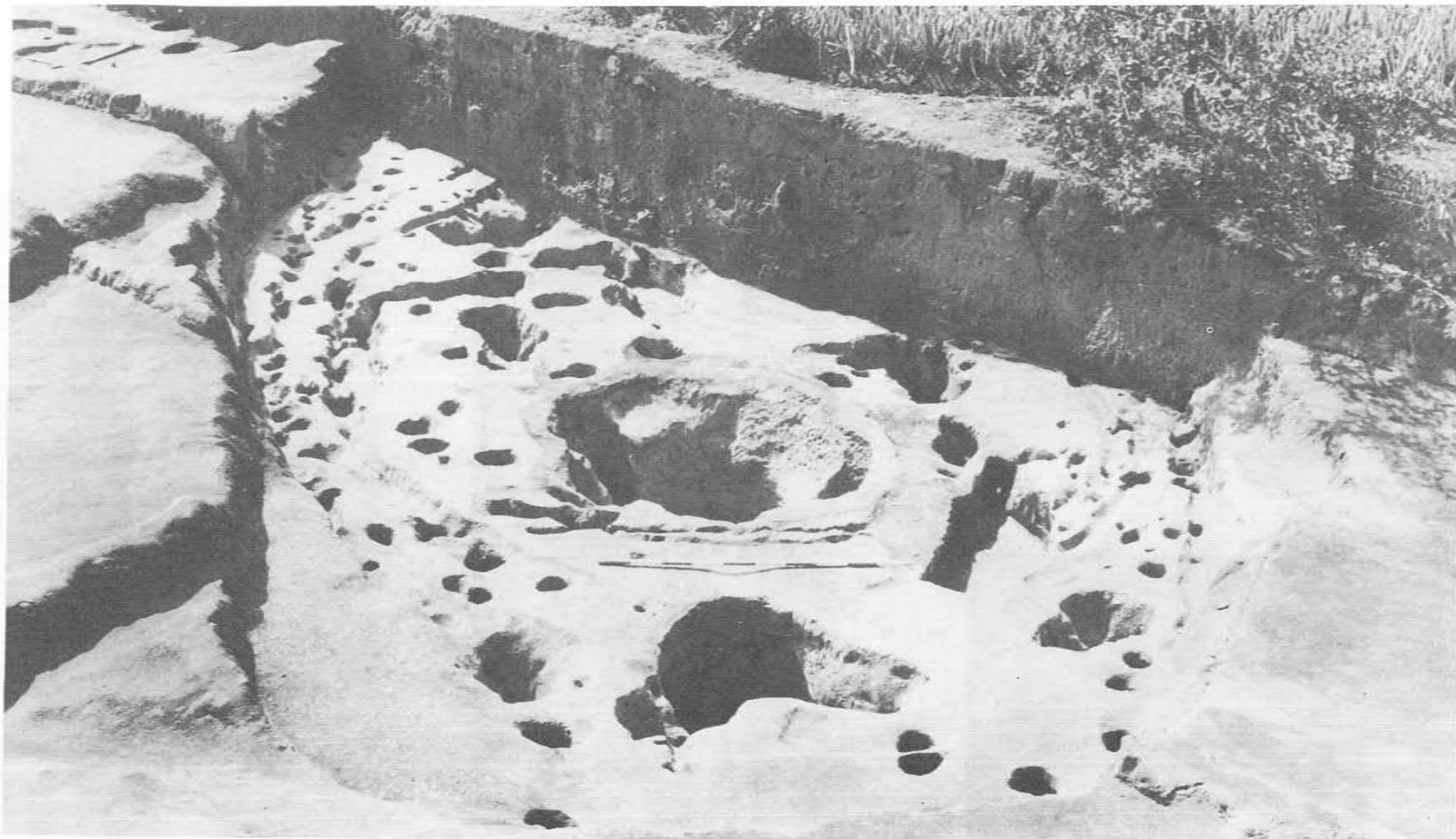


3



4

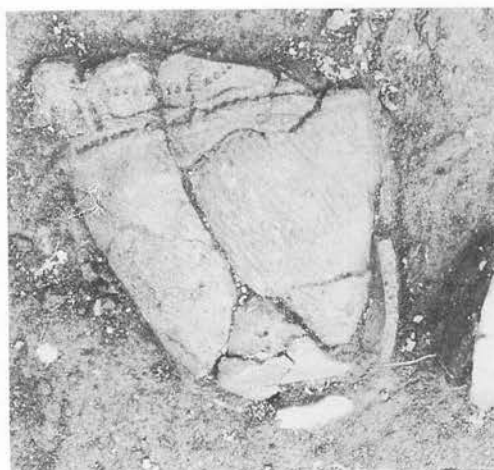




PL-12 I-19住居跡 (遺構-1)



1



2

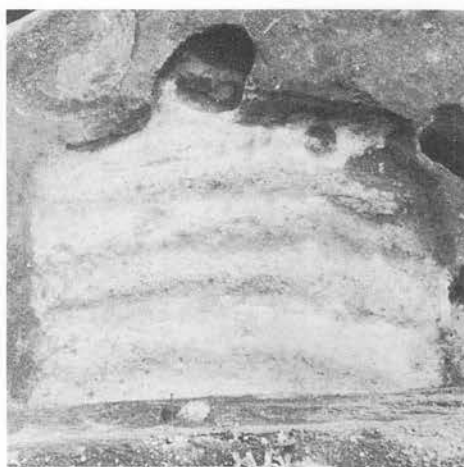


3

- 1. 第5面遺物出土状況
- 2・3. 出土状況
- 4. 重複状況
- 5. 特殊掘り込み遺構

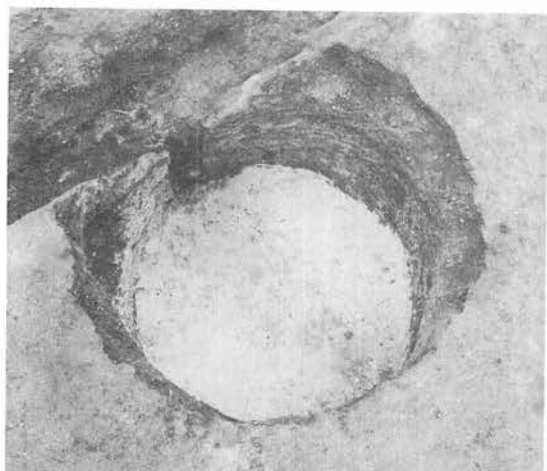


4

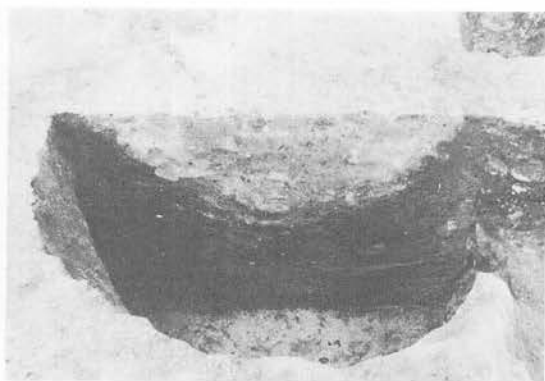


5





1



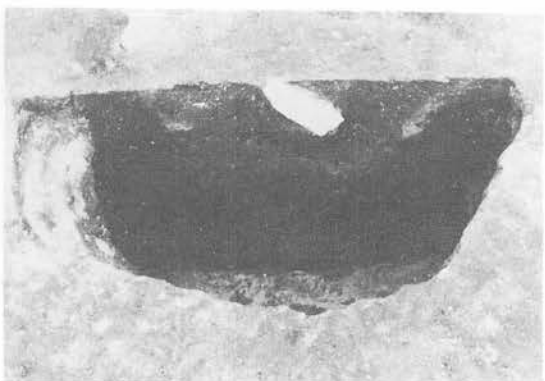
2

1. 平面 2. 土層

A. A-09土坑



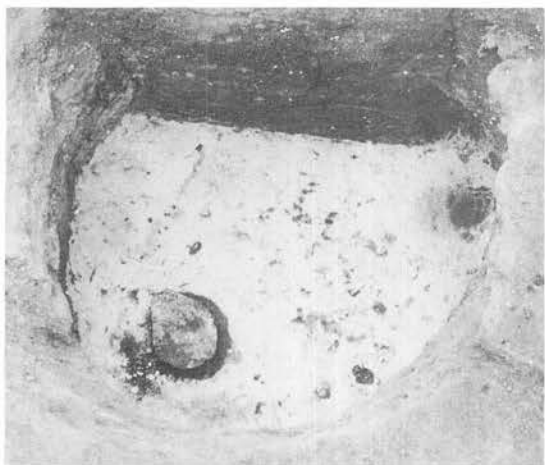
3



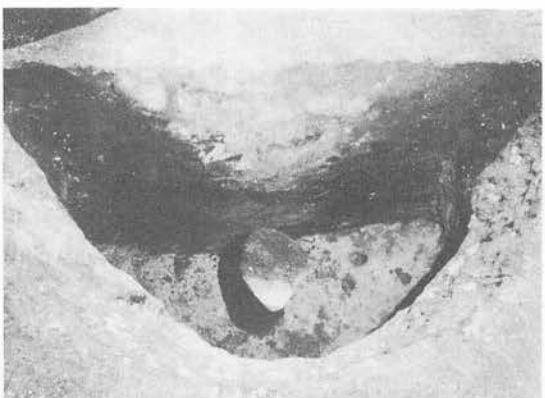
4

3. 平面 4. 土層

B. A-10土坑-1



5

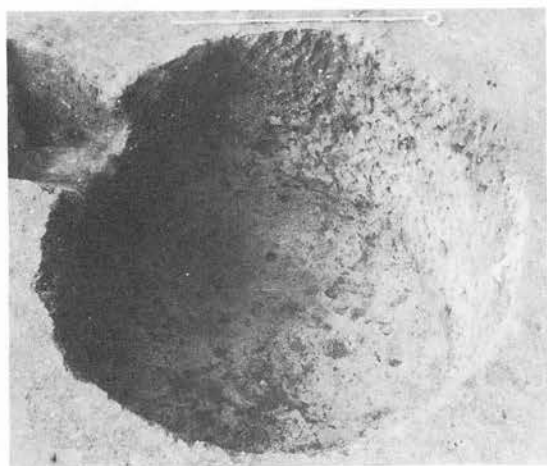


6

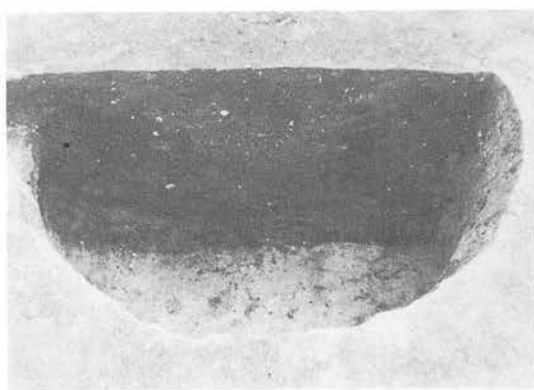
5. 平面 6. 土層

C. A-10土坑-2

PL-14 土坑



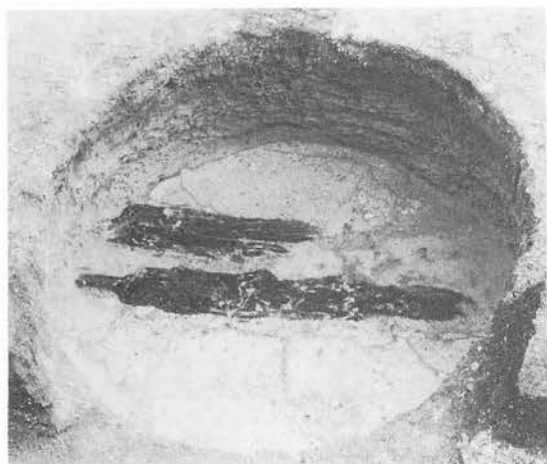
1



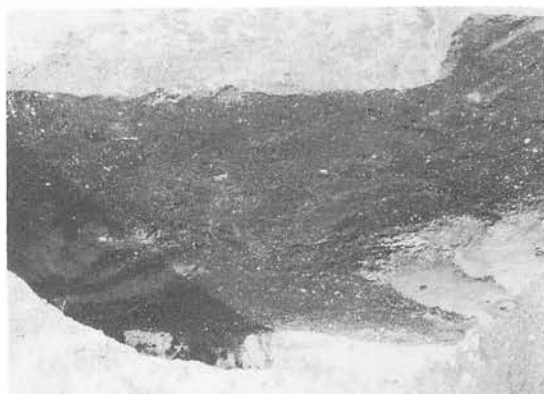
2

1. 平面  
2. 土層

A. A-11土坑



3



4

3. 平面  
4. 土層

B. B-04土坑



5

5. 平面 6. 土層

C. B-08土坑

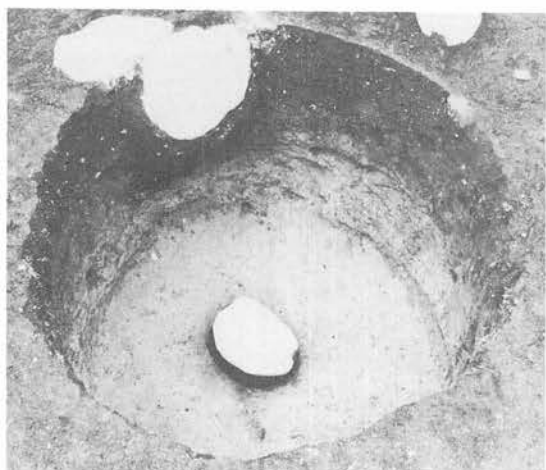


6

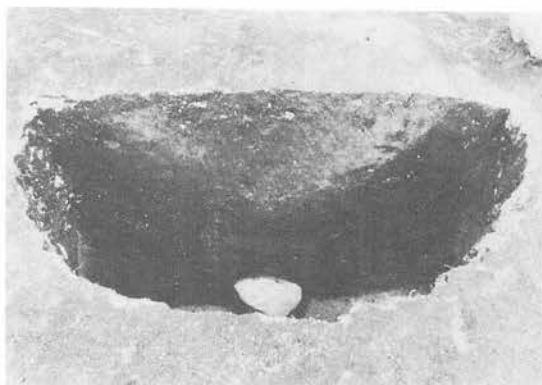
D. A-06土坑

PL-15 土坑





1



2

1. 平面  
2. 土層

A. B-09土坑



3



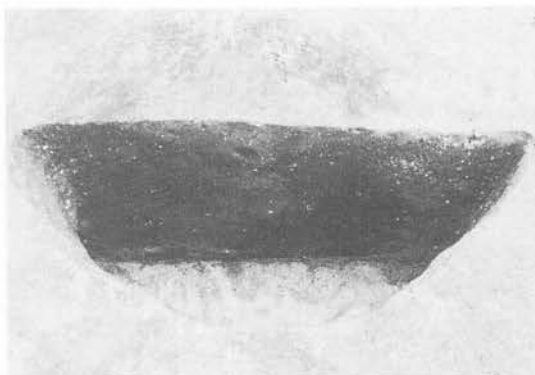
4

3. 平面 4. 土層

B. B-10土坑-1



5

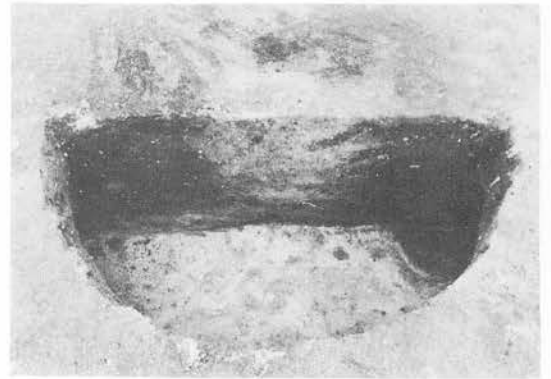
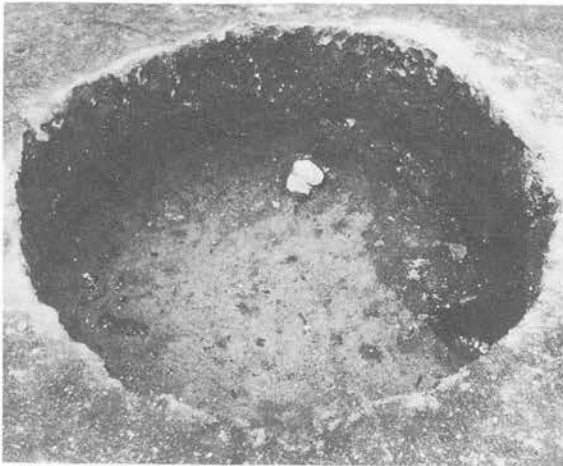


6

5. 平面 6. 土層

C. B-11土坑-1

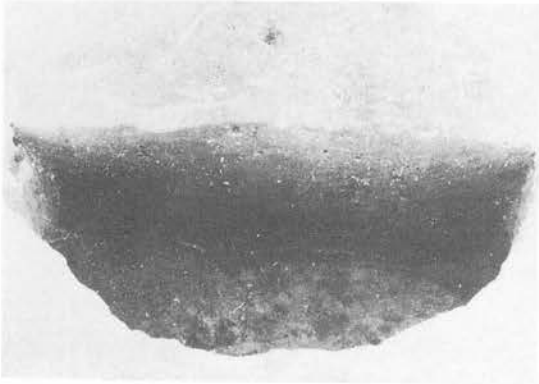
P L-16 土坑



1. 平面  
2. 土層

2

1 A. B-11土坑-2



B. B-10土坑-2 土層



C. B-10土坑-3 土層



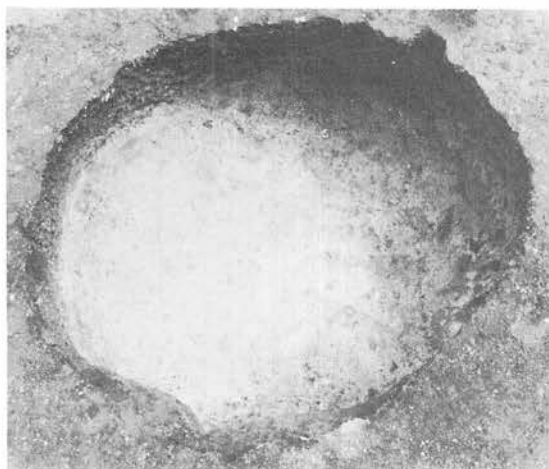
D. B-11土坑-3 土層



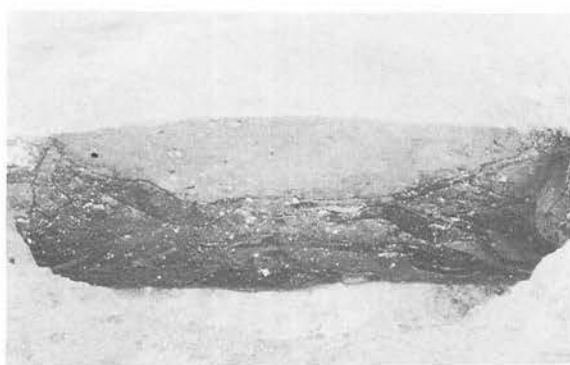
E. B-15土坑 土層

P L-17 土坑





1



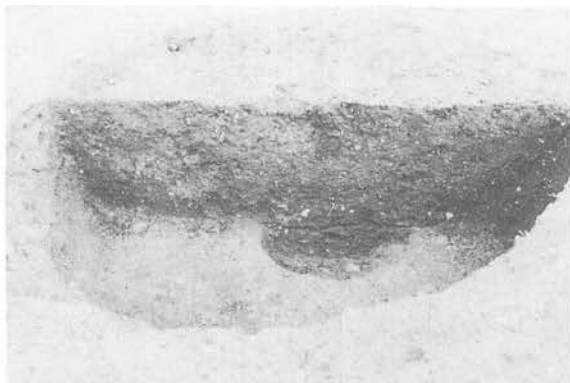
2

1. 平面  
2. 土層

A. B-22土坑-1



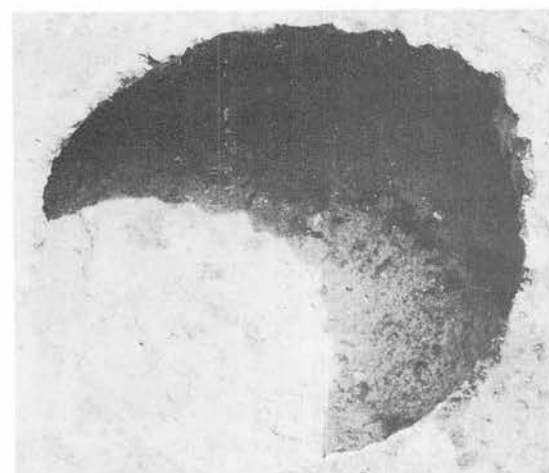
3



4

3. 平面  
4. 土層

B. B-22土坑-2



5

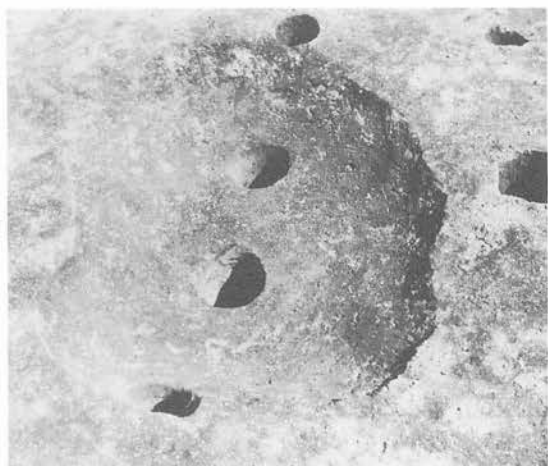


6

5. 平面 6. 土層

C. B-23土坑

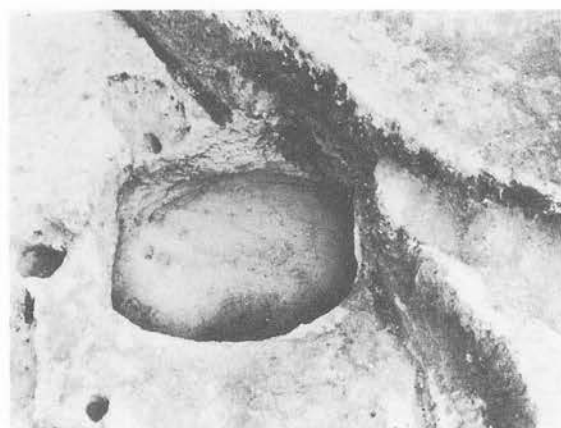
P L-18 土坑



A. C-16土坑



B. D-22土坑-1·2



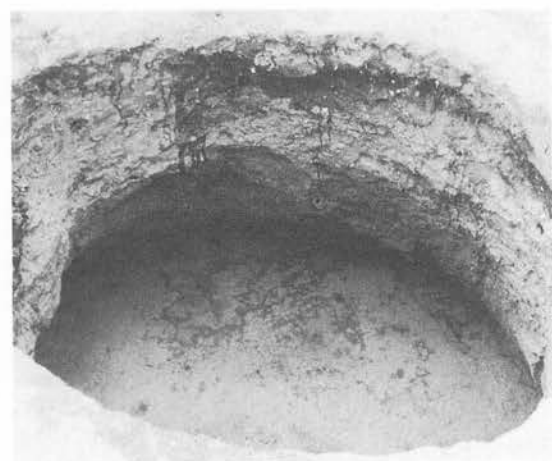
1



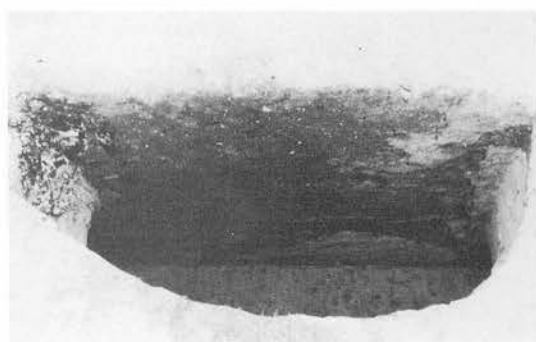
2

1. 平面 2. 土層

C. C-22土坑



3



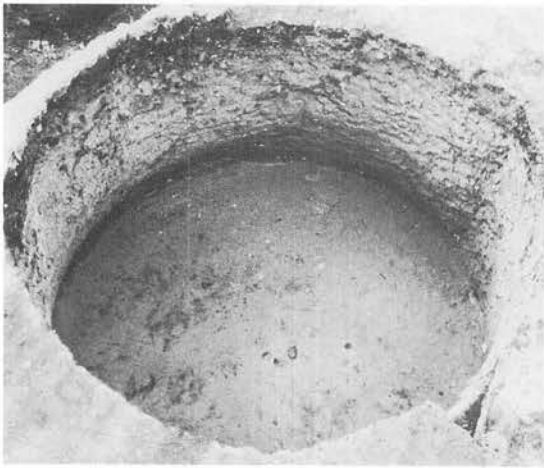
4

3. 平面  
4. 土層

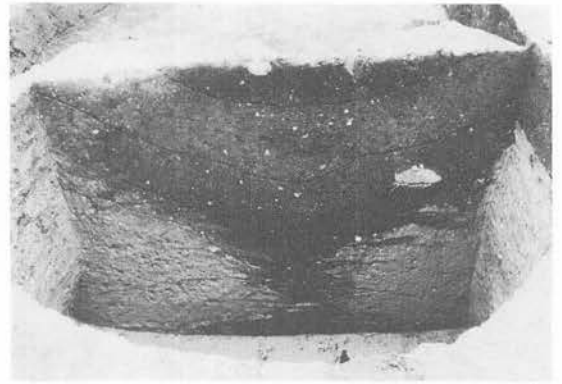
D. C-23土坑

P L-19 土坑





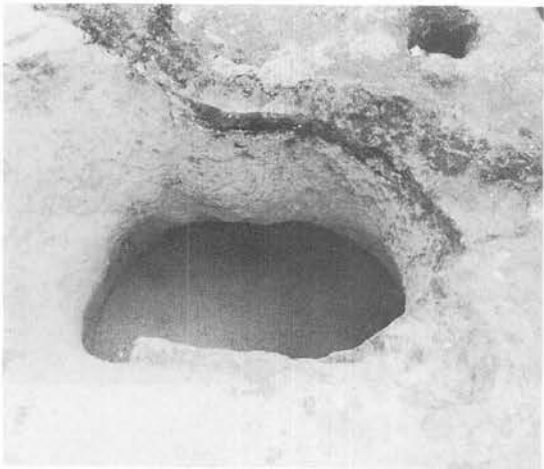
1



2

1. 平面  
2. 土層

A. D-23土坑-1



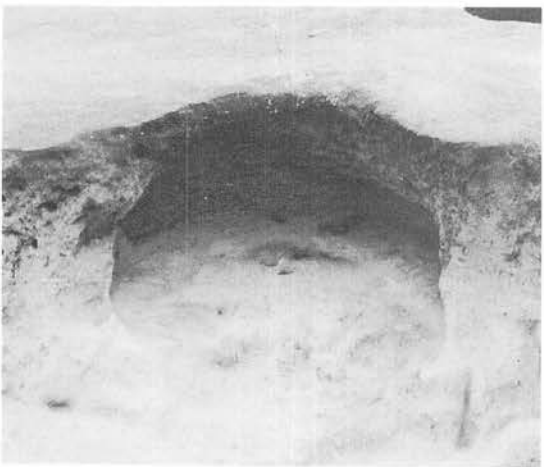
3



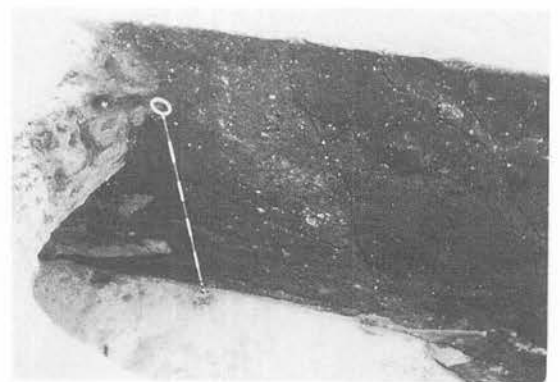
4

3. 平面 4. 土層

B. D-23土坑-2



5



6

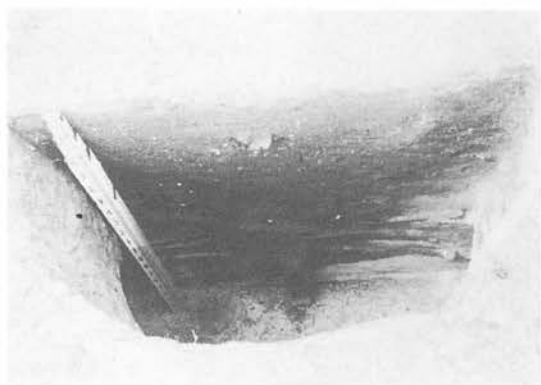
5. 平面  
6. 土層

C. E-14土坑

PL-20 土坑



1



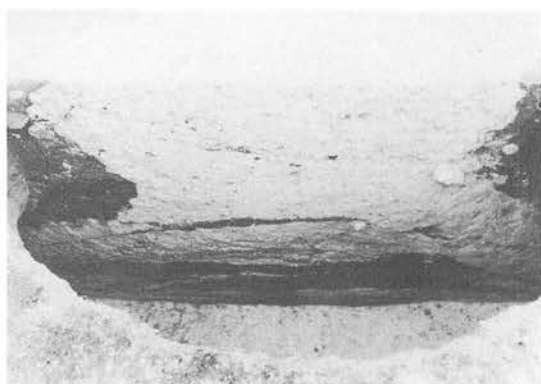
2

- 1. 平面
- 2. 土層

A. E-15土坑-1



3



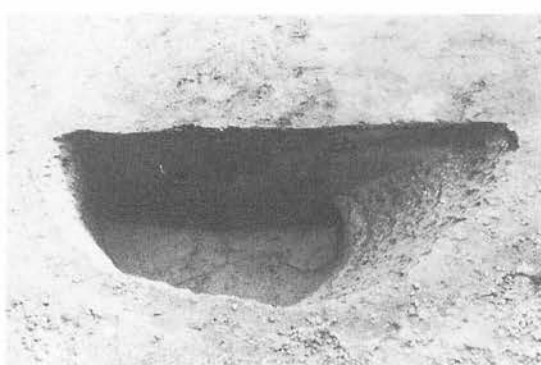
4

- 3. 平面
- 4. 土層

B. E-15土坑-2



5



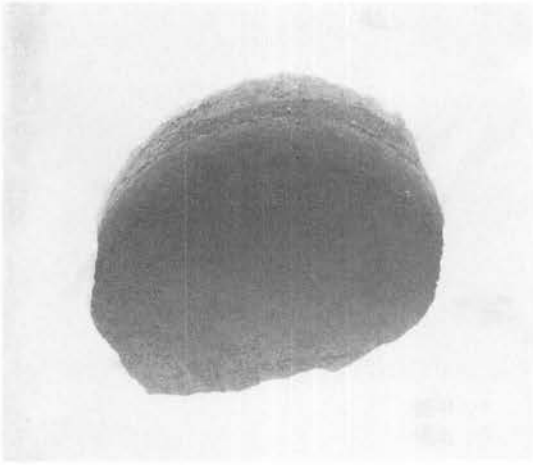
6

- 5. 平面
- 6. 土層

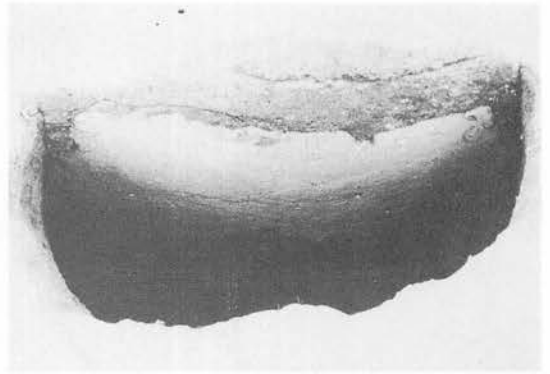
C. E-46土坑

P L-21 土坑





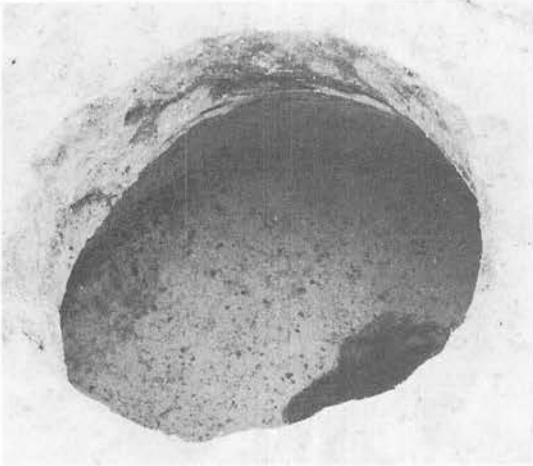
1



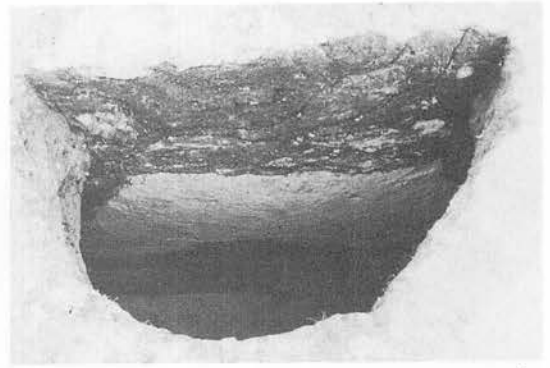
2

1. 平面  
2. 土層

A. E-47土坑-1



3



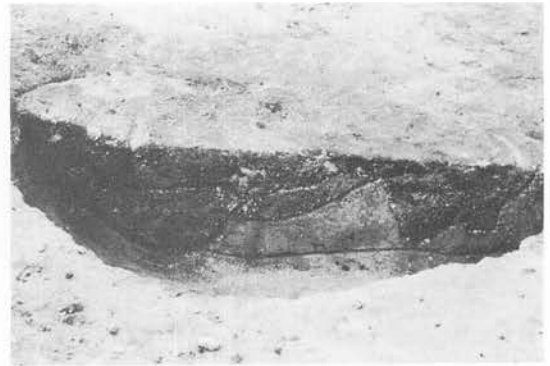
4

3. 平面  
4. 土層

B. E-47土坑-2



5



6

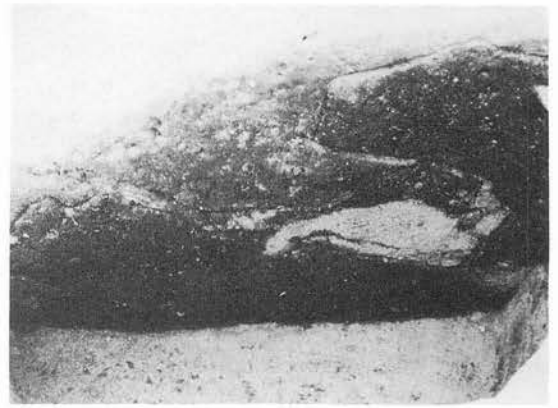
5. 平面  
6. 土層

C. F-45土坑-1

PL-22 土坑



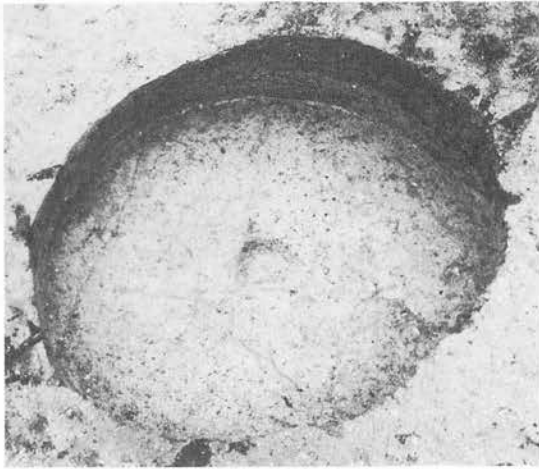
1



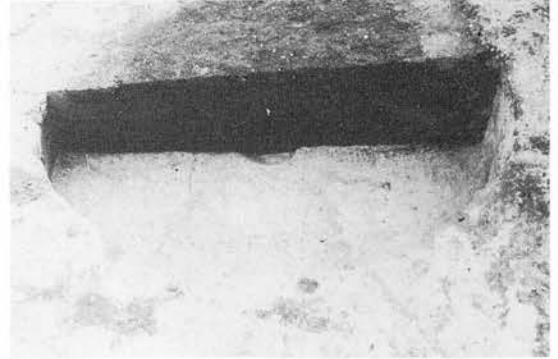
2

1. 平面 2. 土層

A. F-45土坑-2



3



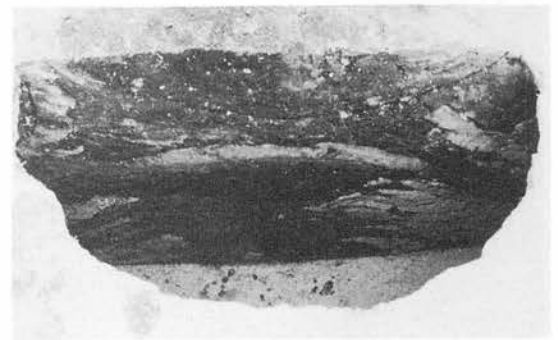
4

3. 平面  
4. 土層

B. F-46土坑-1



5



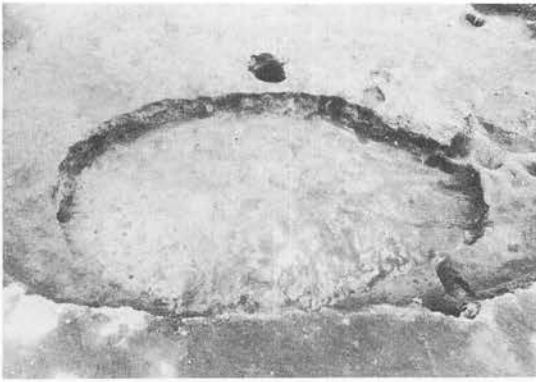
6

5. 平面  
6. 土層

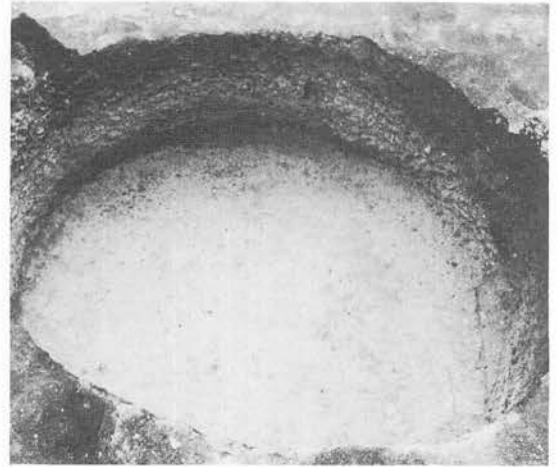
C. F-46土坑-2

P L-23 土坑

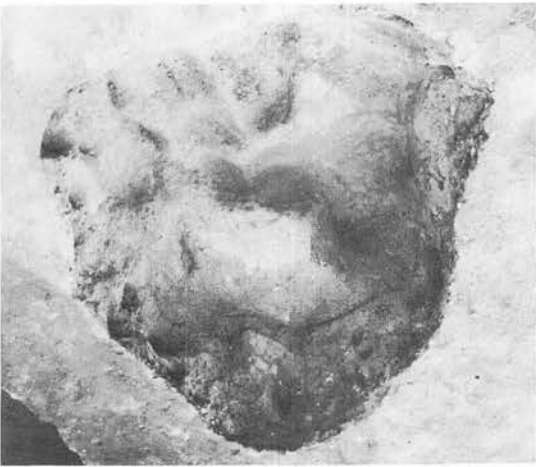




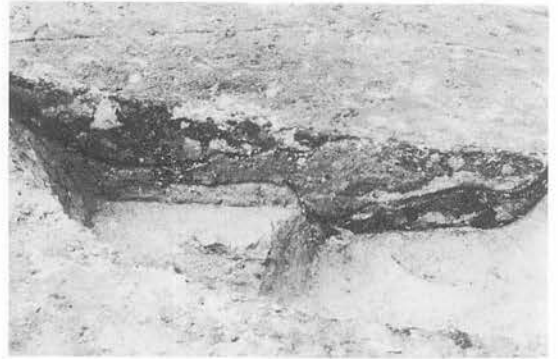
A. D-22土坑-3



B. E-22土坑



1



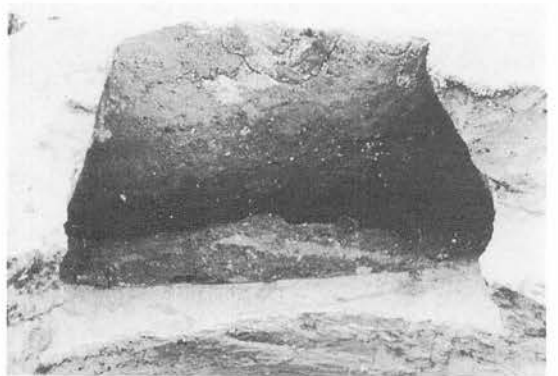
2

1. 平面 2. 土層

C. F-45土坑-3



3



4

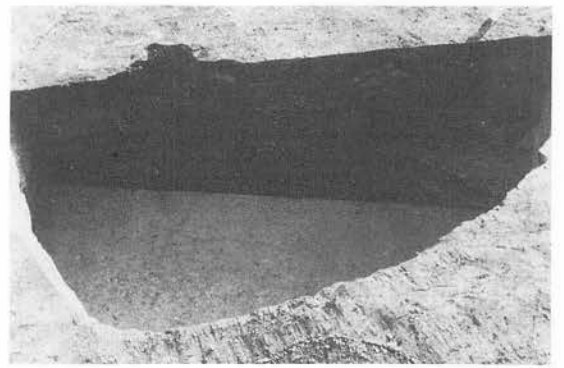
3. 平面 4. 土層

D. F-46土坑-3

P L -24 土坑



1



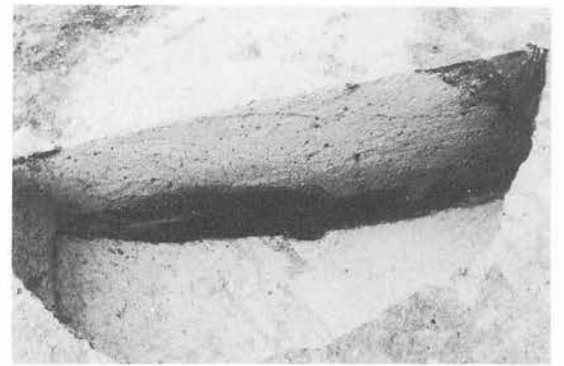
2

1. 平面  
2. 土層

A. F-47土坑-2



3



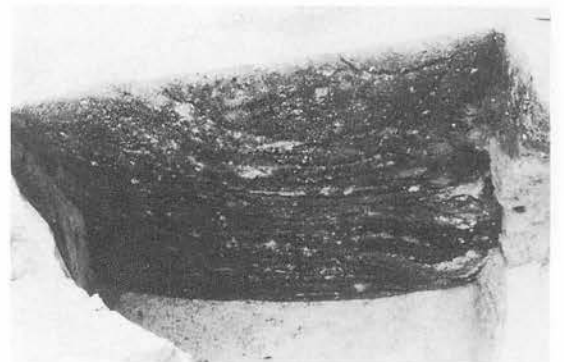
4

3. 平面  
4. 土層

B. F-47土坑-1



5



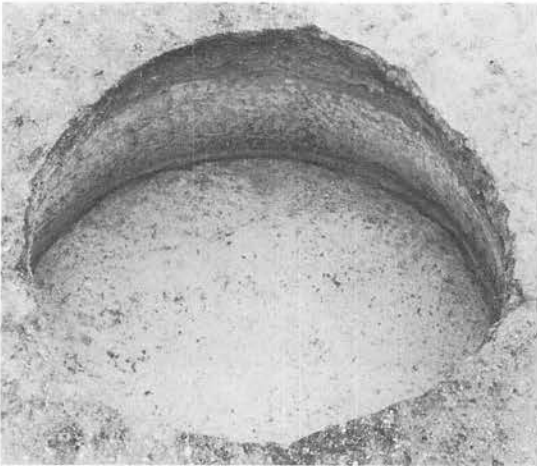
6

5. 平面 6. 土層

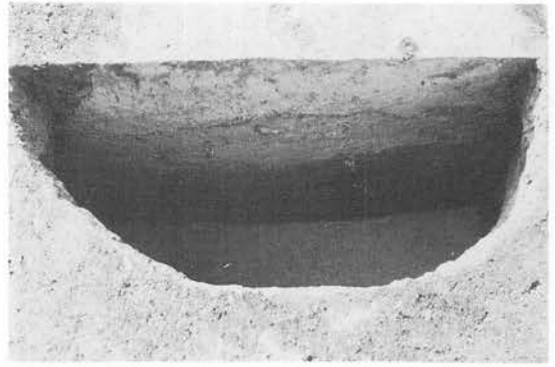
C. F-47土坑-3

P L -25 土坑





1



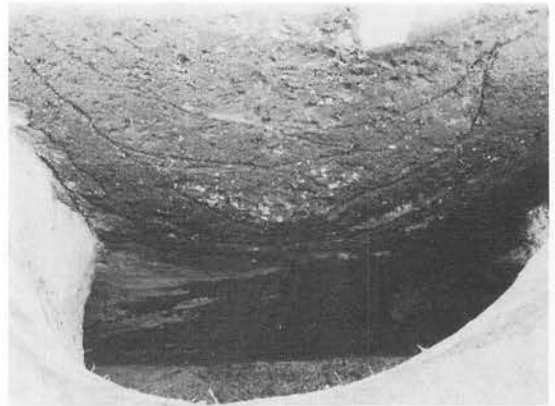
2

1. 平面  
2. 土層

A. F-48 土坑



3



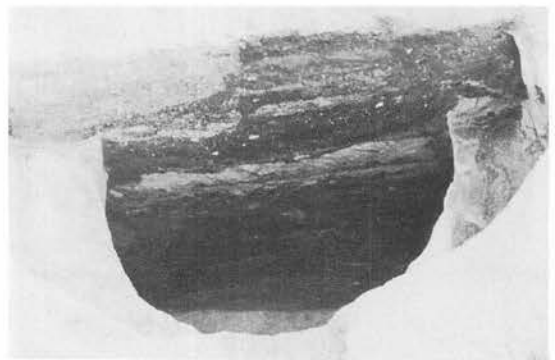
4

3. 平面 4. 土層

B. G-16住居跡内土坑-1



5



6

6. 土層 5. 平面

C. G-16住居跡内土坑-2

P L-26 土坑



1



2

1. 平面  
2. 土層

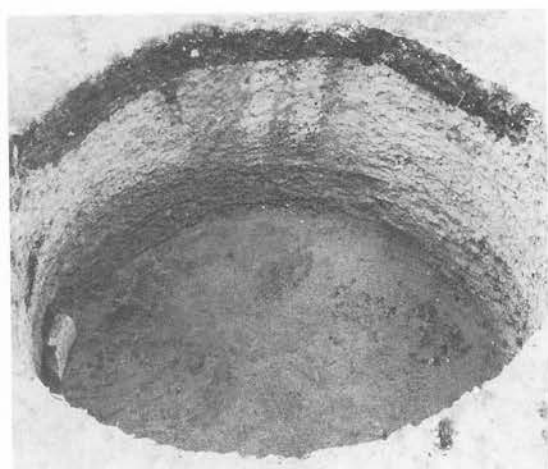
A. G-16住居跡内土坑-3



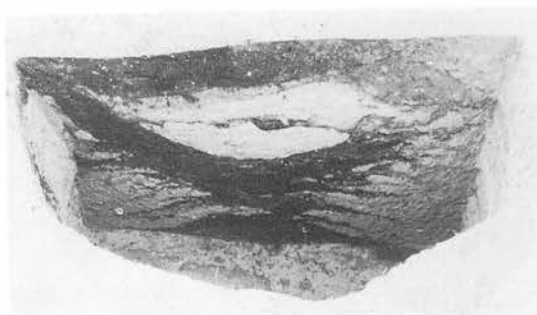
B. G-23土坑



C. G-46土坑-2



3



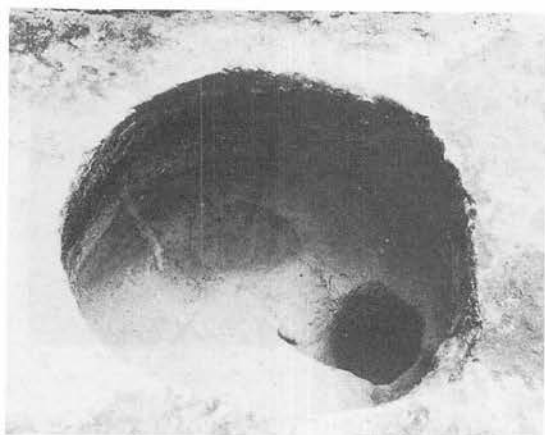
4

3. 平面  
4. 土層

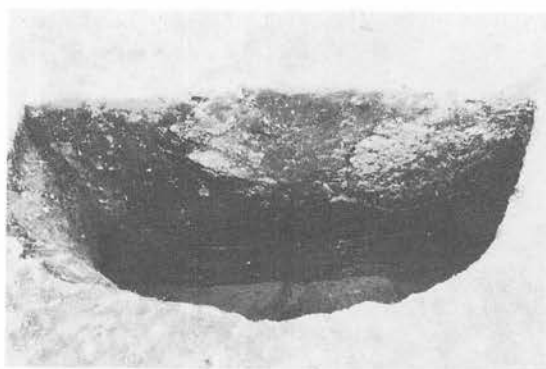
D. G-24土坑-1

PL-27 土坑





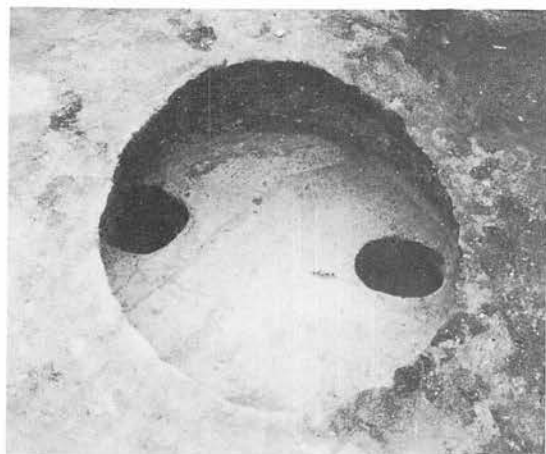
1



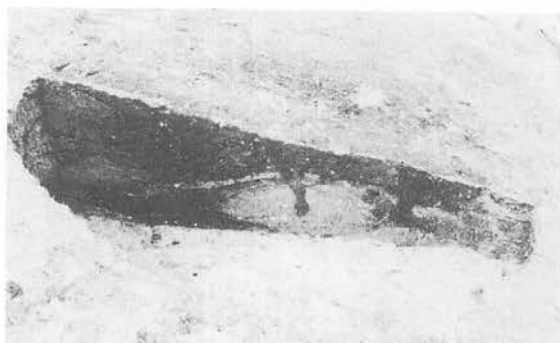
2

1. 平面  
2. 土層

A. G-44土坑



3



4

3. 平面  
4. 土層

B. G-45土坑-1



5

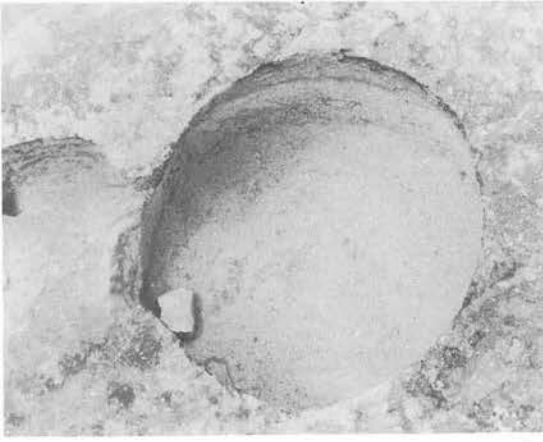


6

5. 平面 6. 土層

C. G-46土坑-1

P L-28 土坑



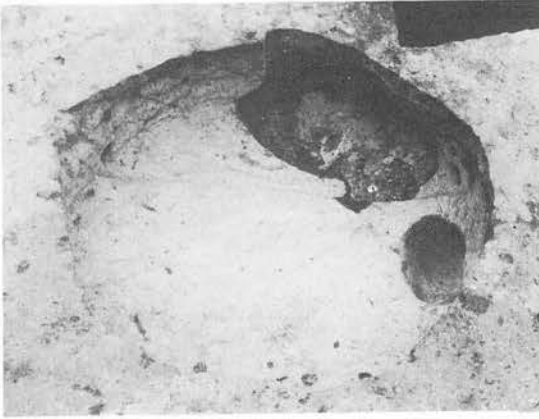
1



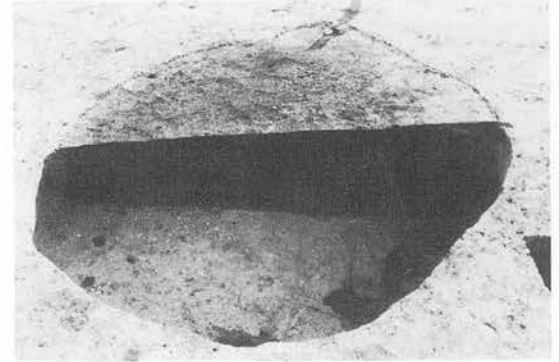
2

1. 平面  
2. 土層

A. G-46土坑-4



3



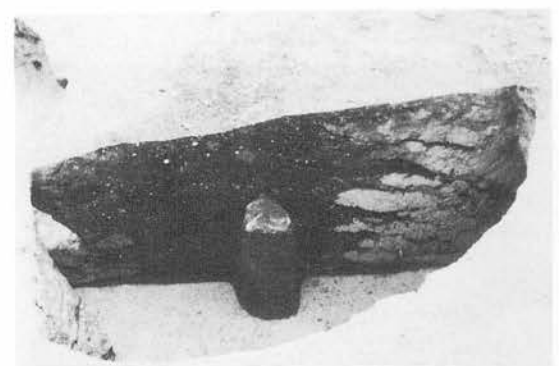
4

3. 平面 4土層

B. G-47土坑-1



5



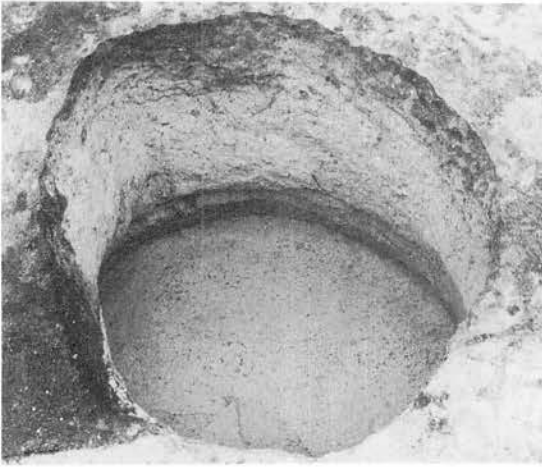
6

5. 平面  
6. 土層

C. G-47土坑-2

PL-29 土坑





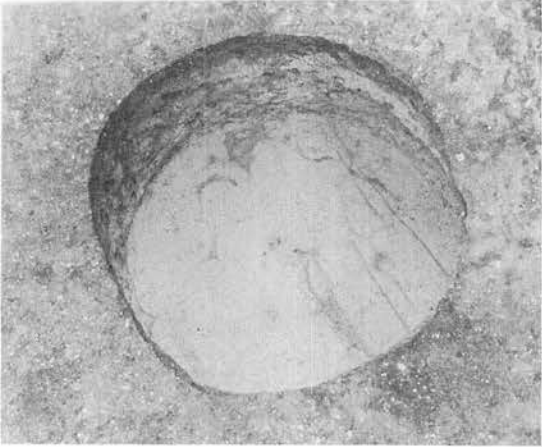
1



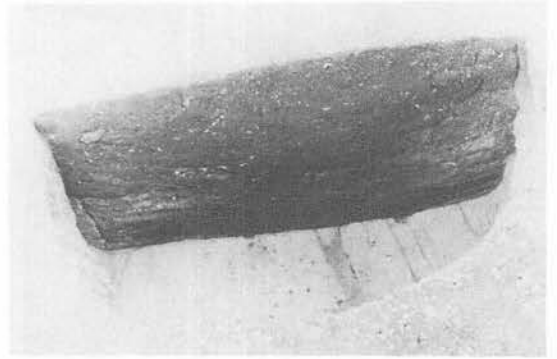
2

- 1. 平面
- 2. 土層

A. G-47土坑-3



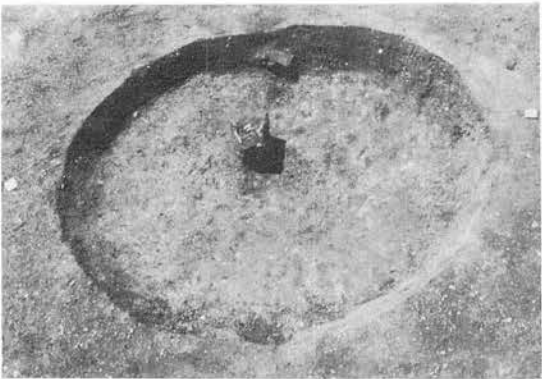
3



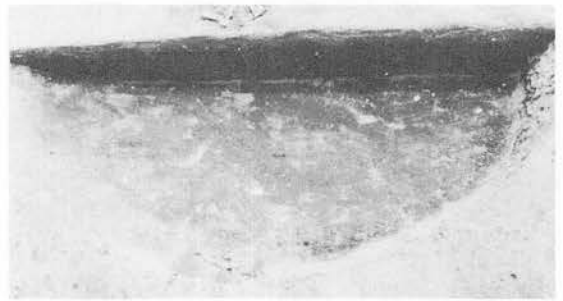
4

- 3. 平面
- 4. 土層

B. H-39土坑



5

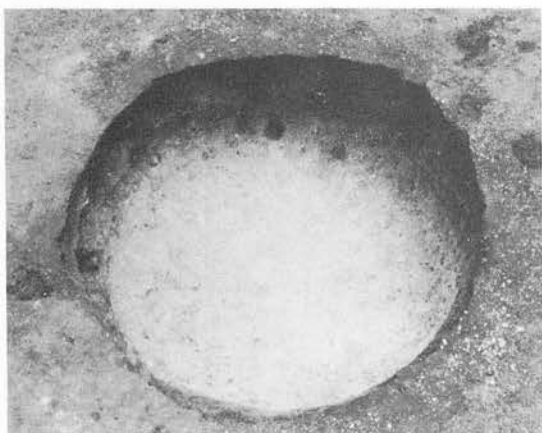


6

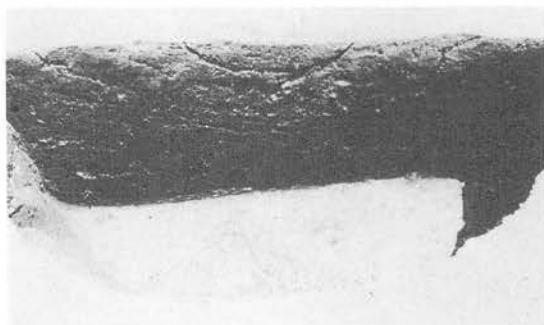
- 5. 平面
- 6. 土層

C. H-41土坑-1

P L-30 土坑



1



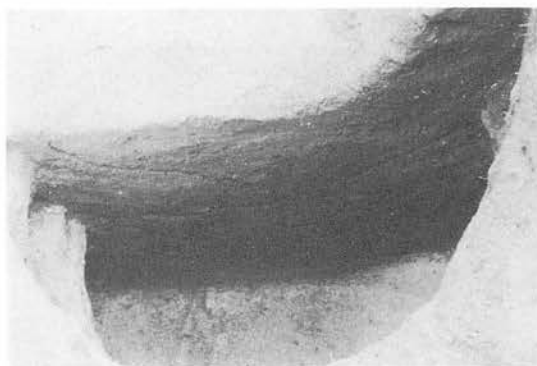
2

1. 平面  
2. 土層

A. H-41土坑-2



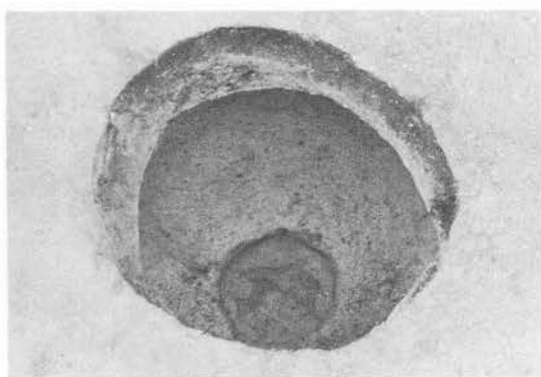
3



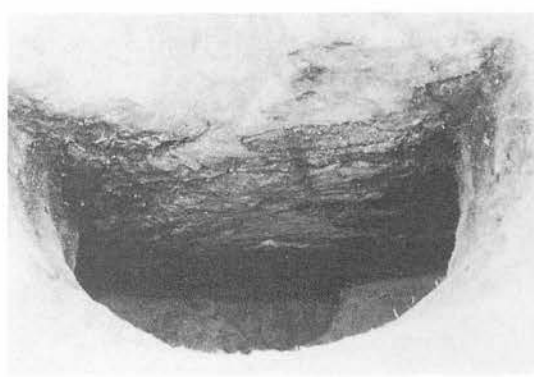
4

3. 平面  
4. 土層

B. H-41土坑-3



5



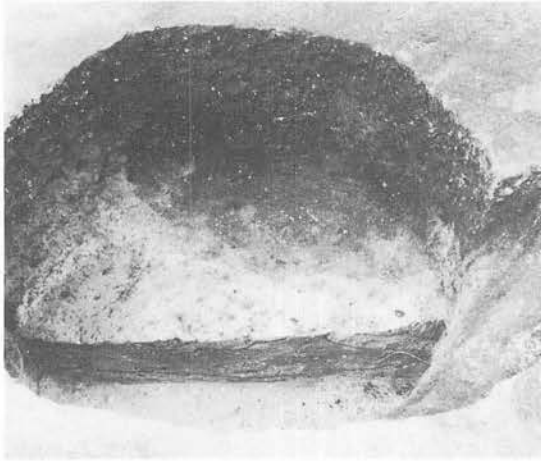
6

5. 平面 6. 土層

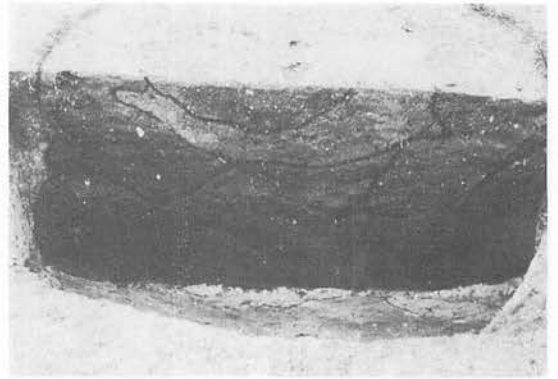
C. H-41土坑-4

PL-31 土坑





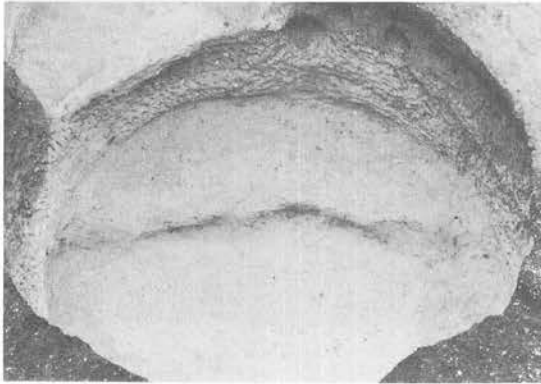
1



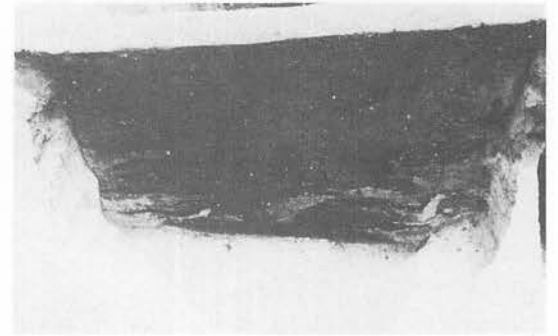
2

1. 平面  
2. 土層

A. H-42土坑-1



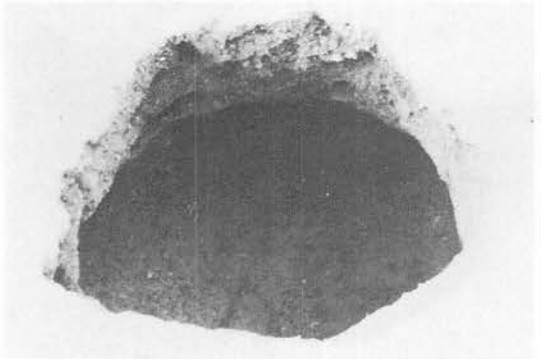
3



4

3. 平面  
4. 土層

B. H-42土坑-2



5



6

5. 平面 6. 土層

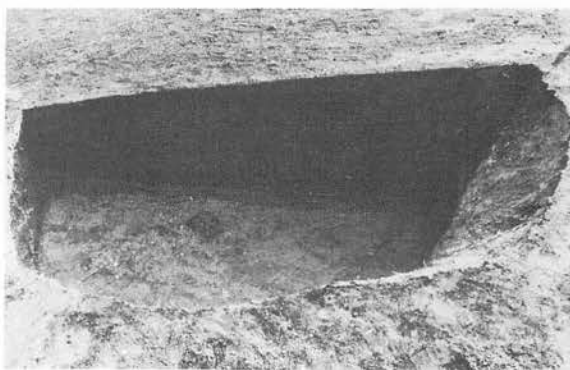
C. H-44土坑

PL-32 土坑



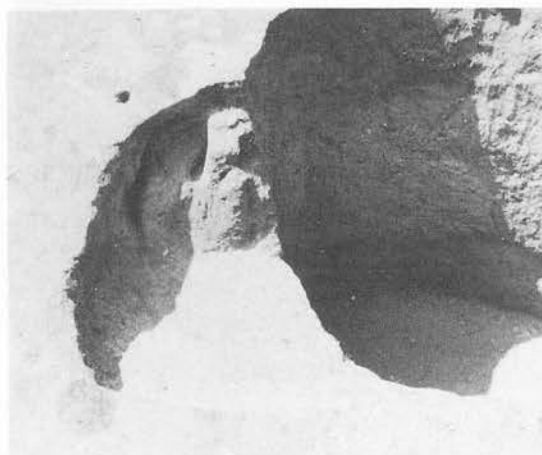
1

A. H-46土坑



2

1. 平面  
2. 土層



3

B. H-47土坑-1



4

3. 平面  
4. 土層



5

C. H-47土坑-2



6

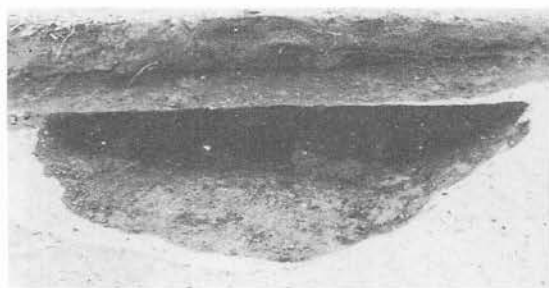
5. 平面 6. 土層

P L-33 土坑





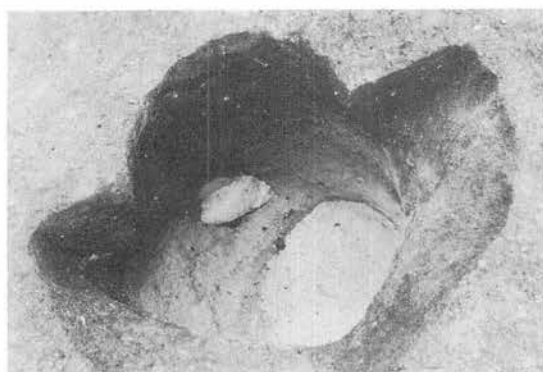
1



2

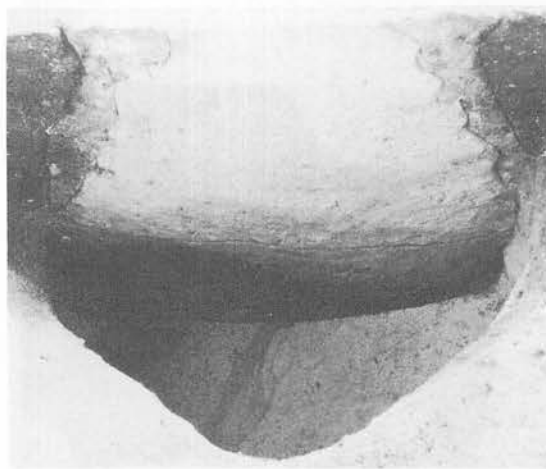
- 1. 平面
- 2. 土層

A. H-48土坑-1



3

- 3. 平面
- 4. 土層



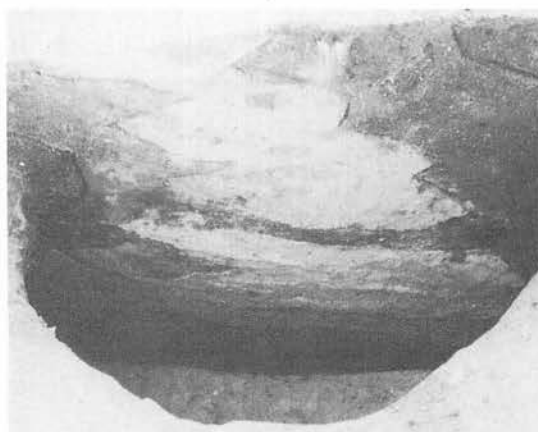
4

B. H-48土坑-2



5

- 5. 平面
- 6. 土層



6

C. H-48土坑-3

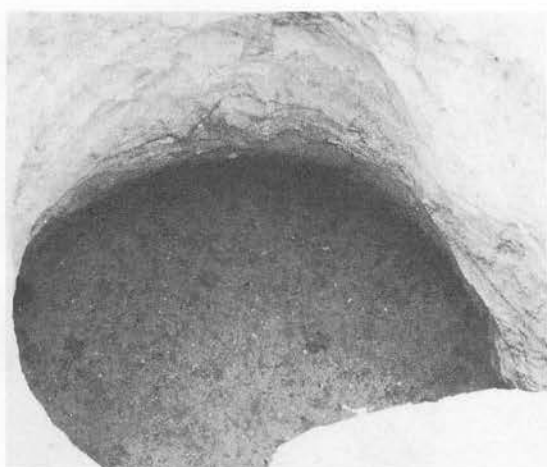
P L-34 土坑



A. H-43土坑-2



B. I-43土坑



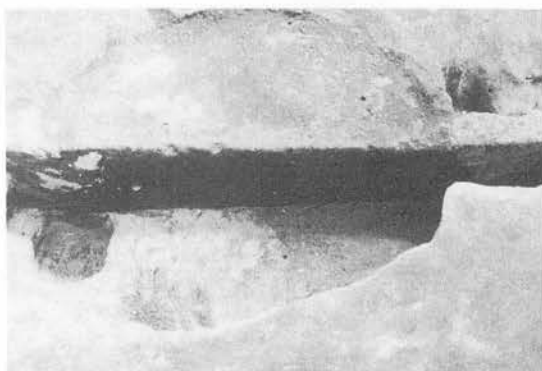
1



2

- 1. 平面
- 2. 土層

C. I-19住居跡内土坑-3



D. I-19住居跡内土坑-2

P L-35 土坑





1



4



5



2



6



3

1. 人骨検出状況
2. 埋土上部土器出土状況
3. 土層
4. 人骨取り上げ後
5. 人骨下位埋土土層
6. 人骨下位埋土除去後の状況



1. 全景 2~5. 細部近景

1



2



3



4



5





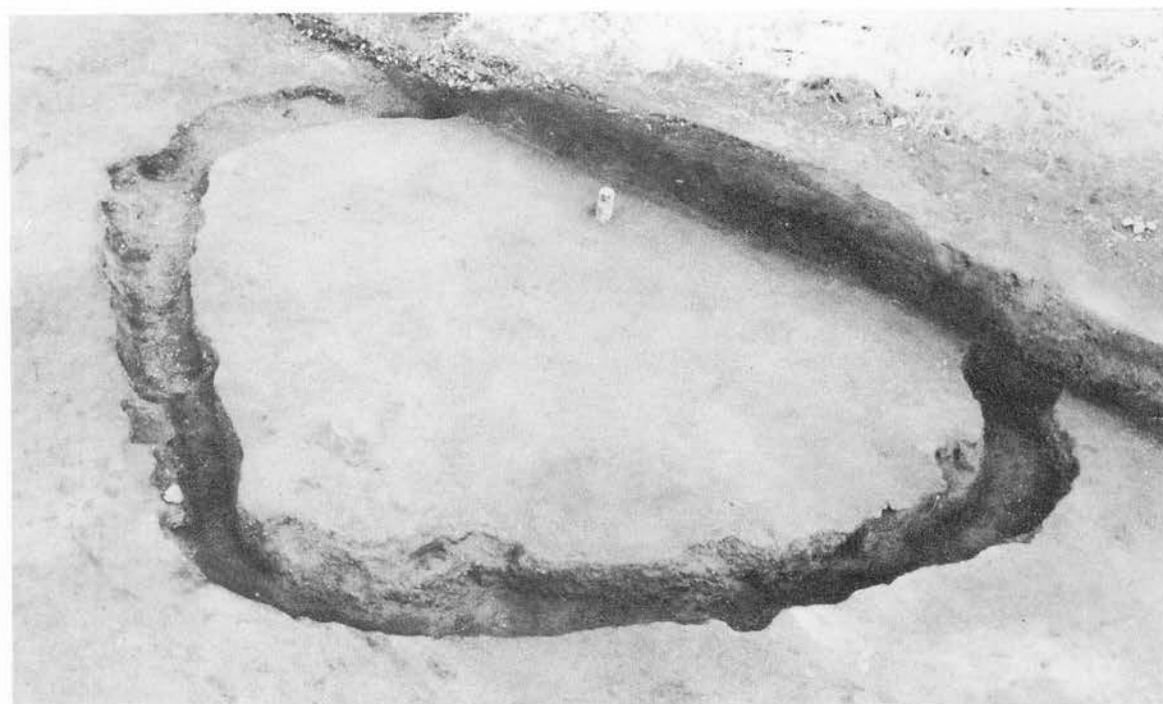
A. B-09住居跡



B. C-08土坑

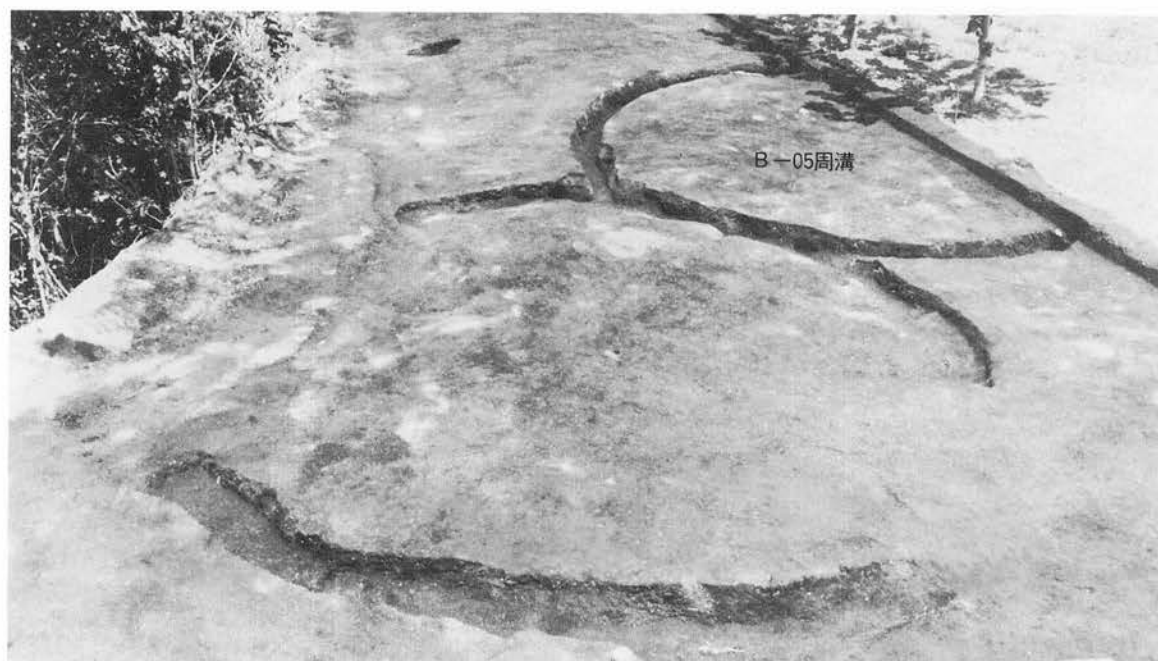


A. A-08周溝遺構全景

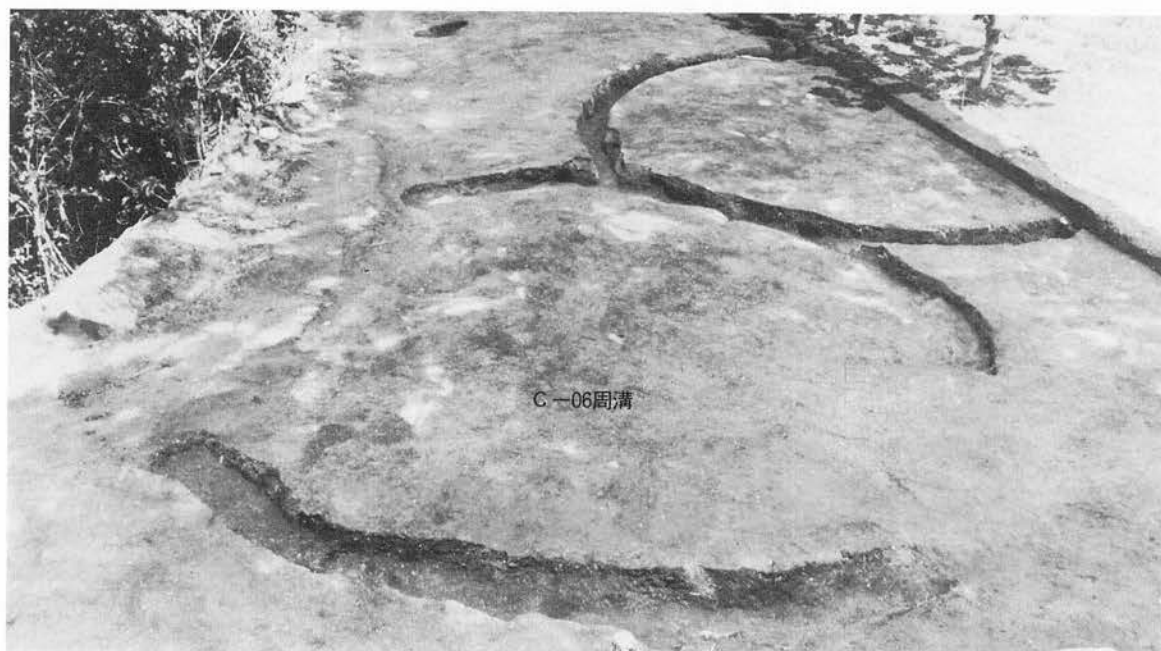


B. A-15周溝遺構全景





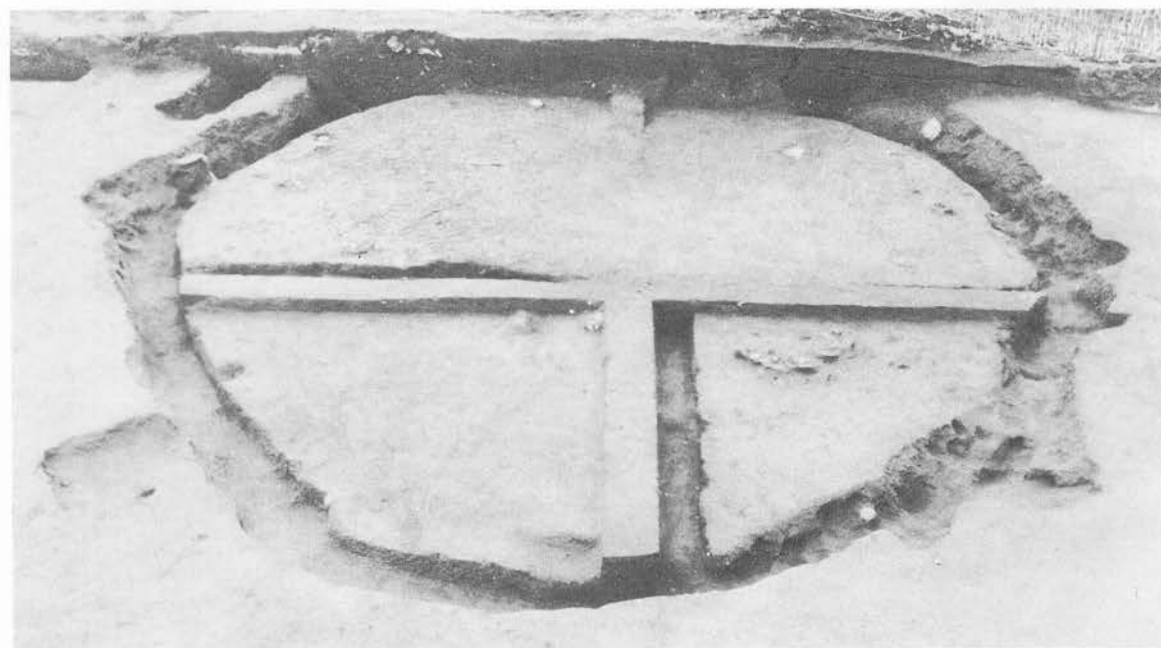
A. B-05周溝遺構全景



B. C-06周溝遺構全景

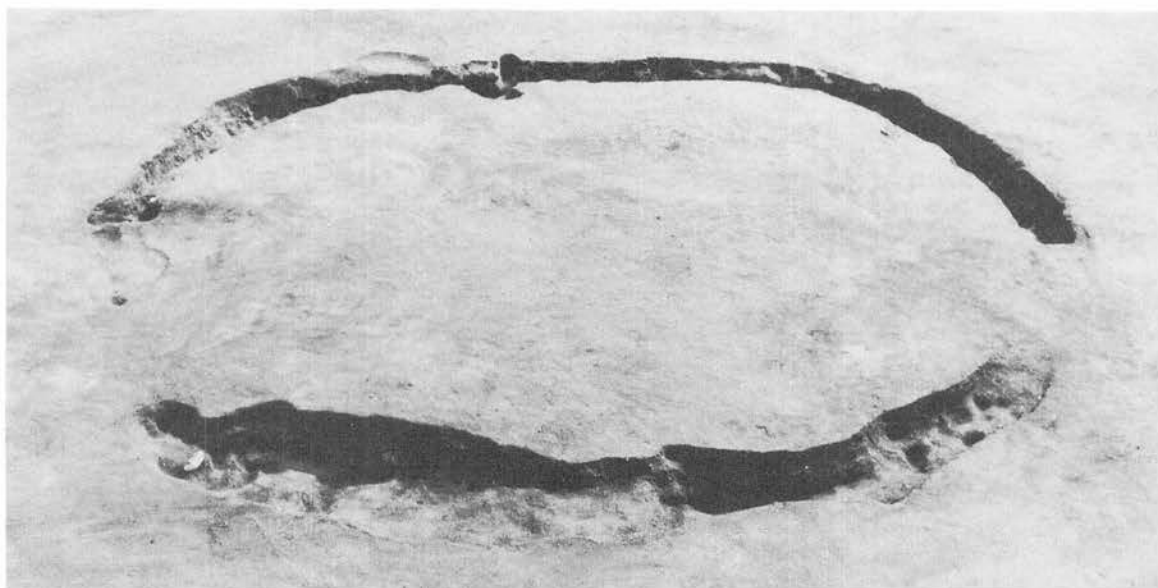


A. E-22周溝遺構全景

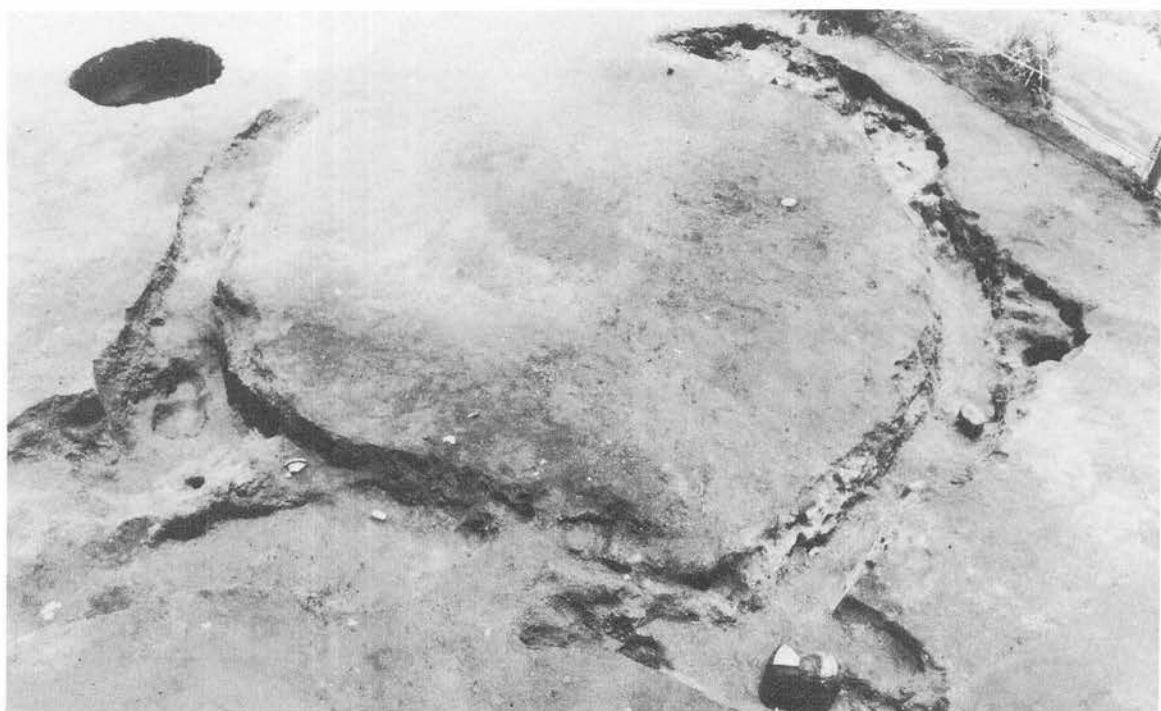


B. I-19周溝遺構全景

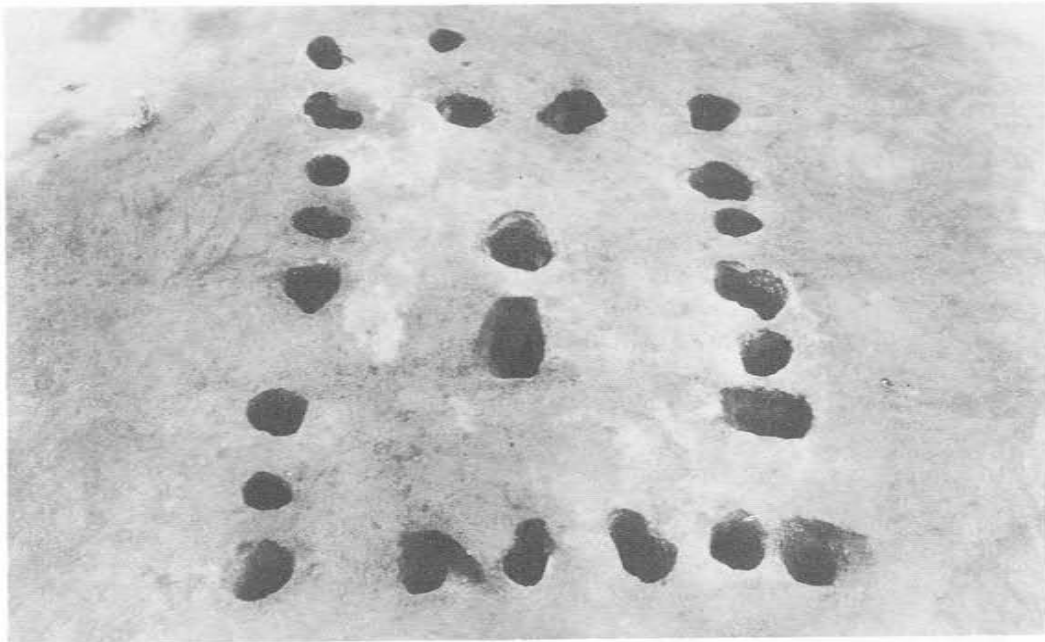




A. C-19周溝遺構全景

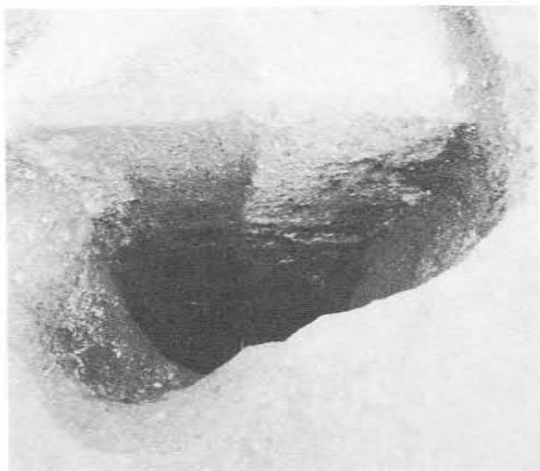


B. D-24周溝遺構全景



1. 遺構全景  
2・3・4 柱穴土層断面

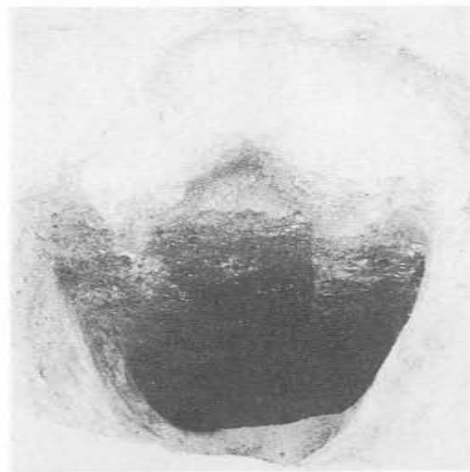
1



2



3



4

PL-43 D-16住居跡(遺構)



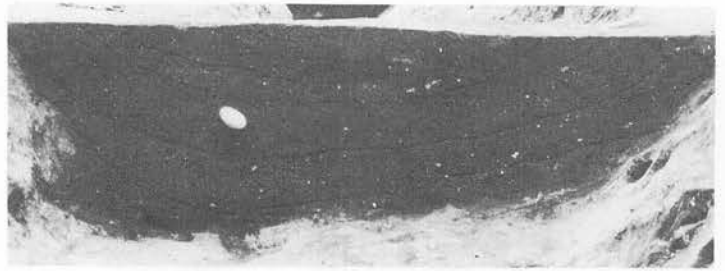


1. 全景  
2・3. 土層



2

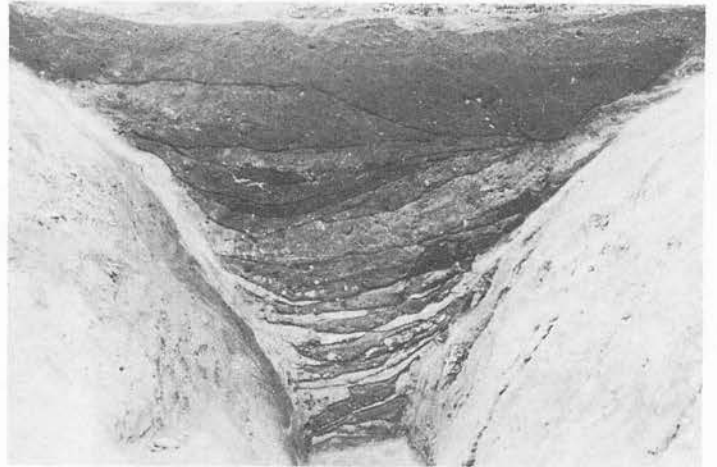
A. A-12溝跡



3



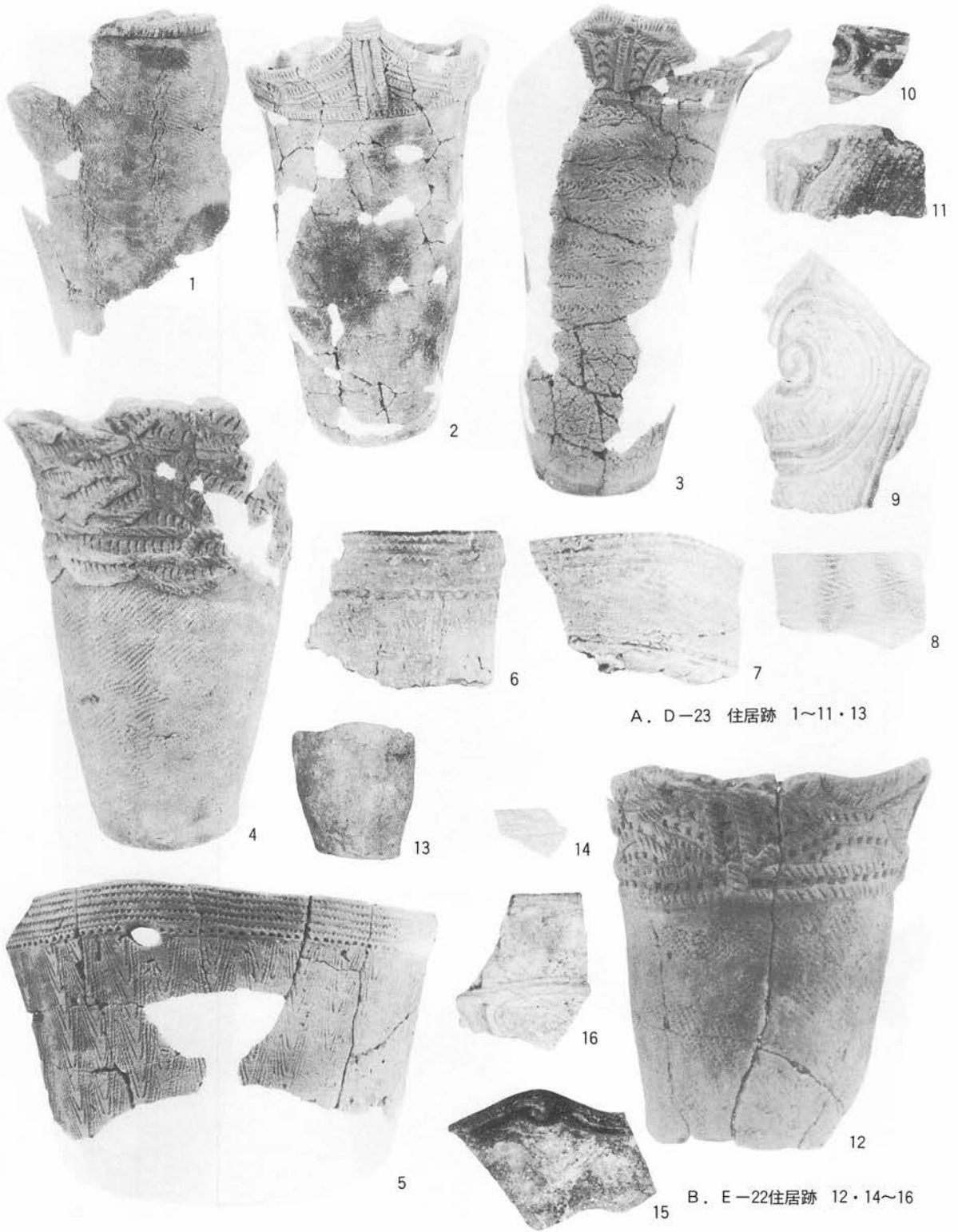
4



5

4. 全景  
5. 土層

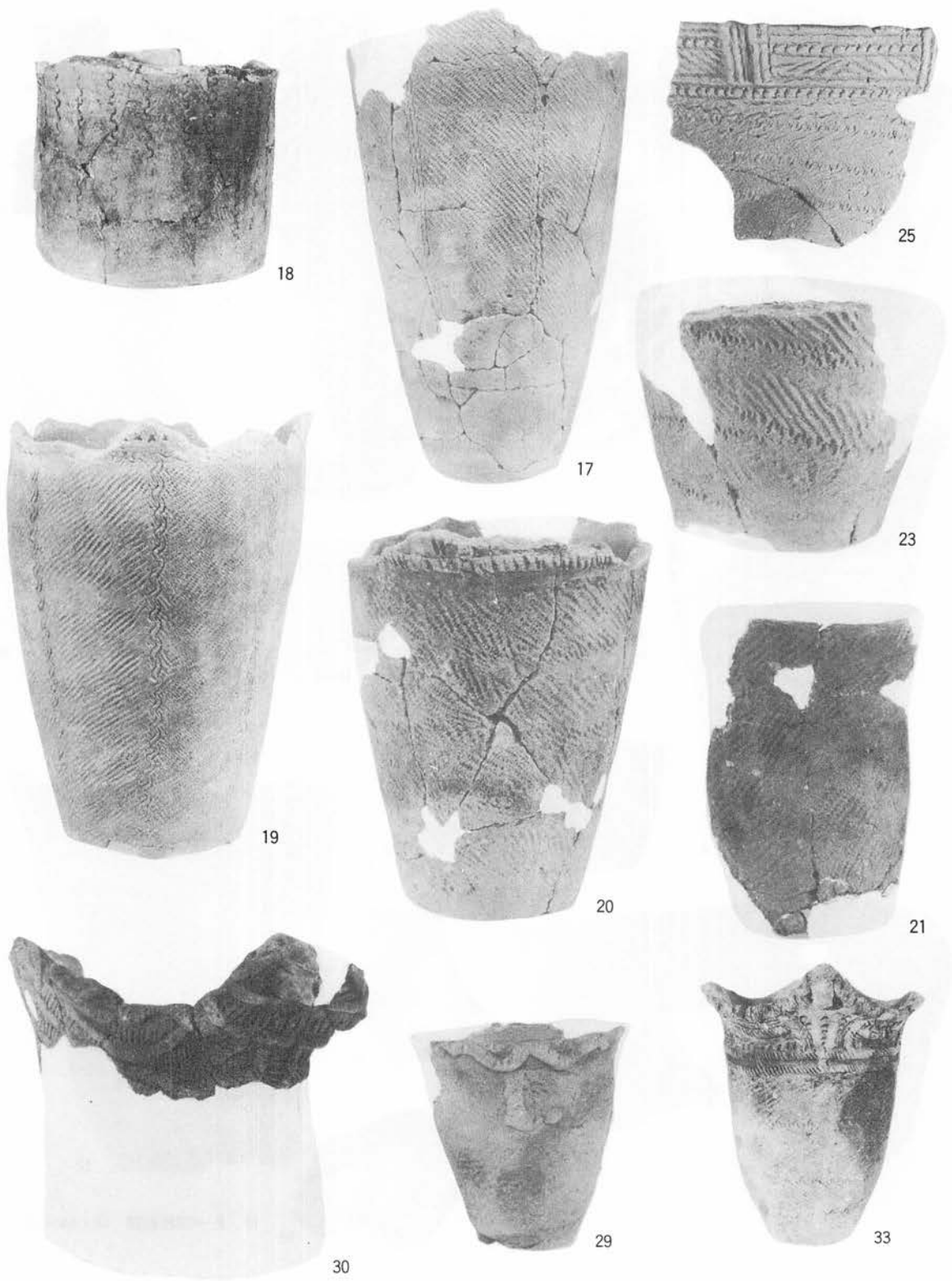
B. 空掘



A. D-23 住居跡 1~11・13

B. E-22住居跡 12・14~16





P L - 46 G - 16住居跡 (遺物 - 1)



35



32



26



27



42



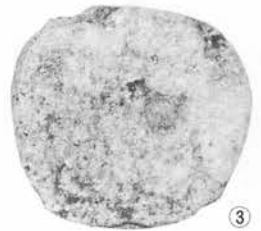
39



①



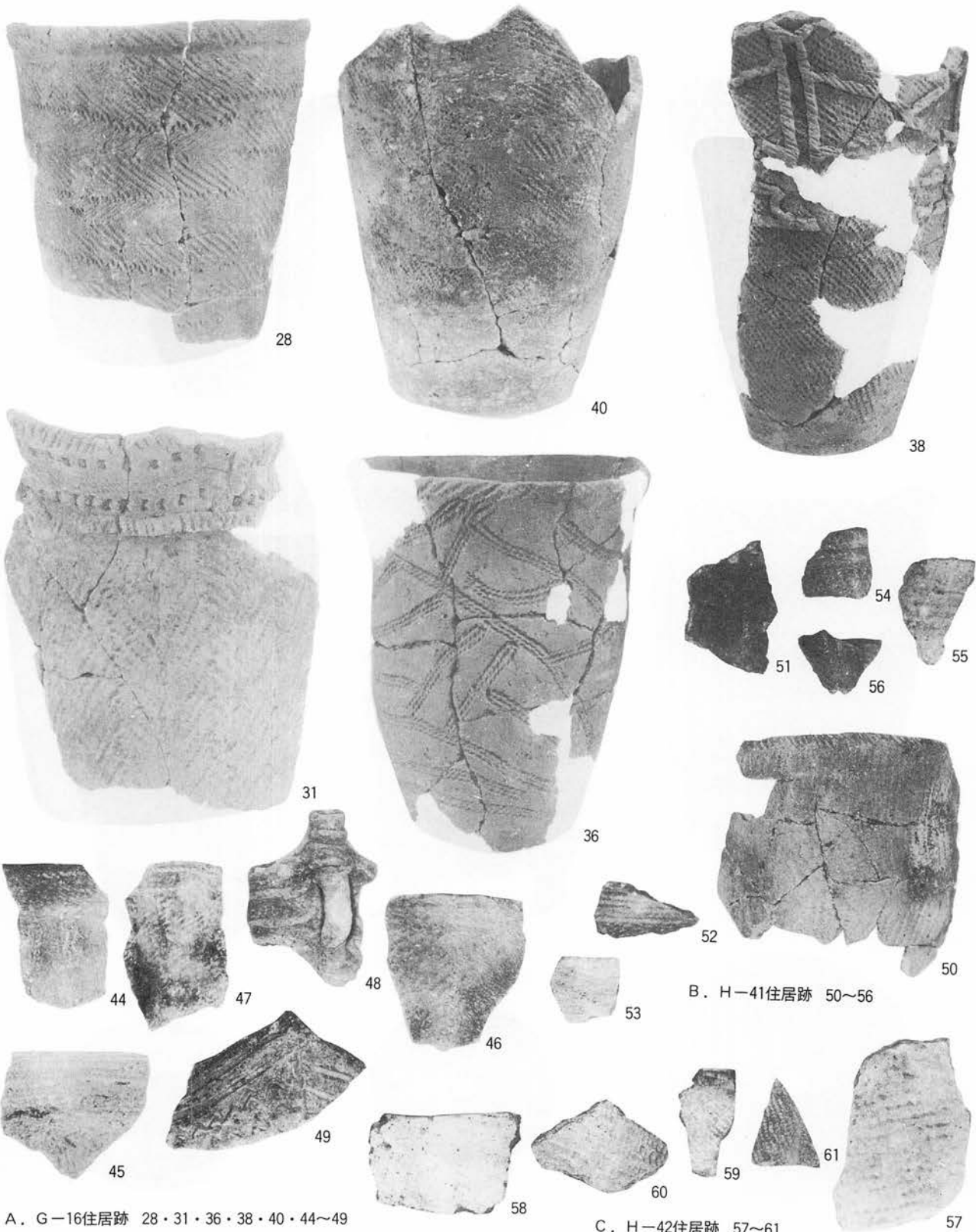
②



③

P L-47 G-16住居跡 (遺物-2)





A. G-16住居跡 28・31・36・38・40・44~49

B. H-41住居跡 50~56

C. H-42住居跡 57~61

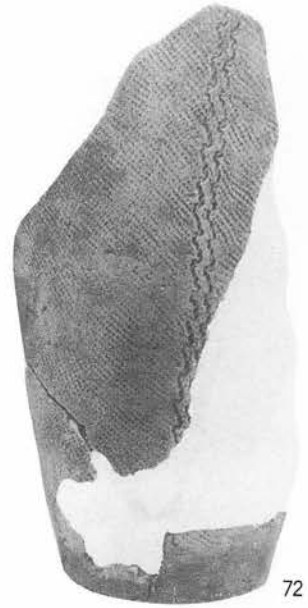
PL-48 遺物



63



67



72



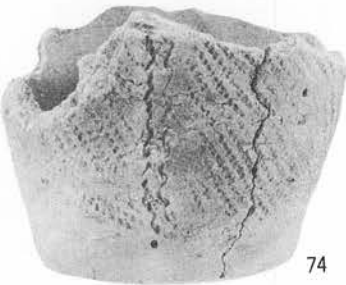
64



68



62



74



66



71





73



75



69



76



77



70

A. I-19住居跡 69・70・73・75~77



79



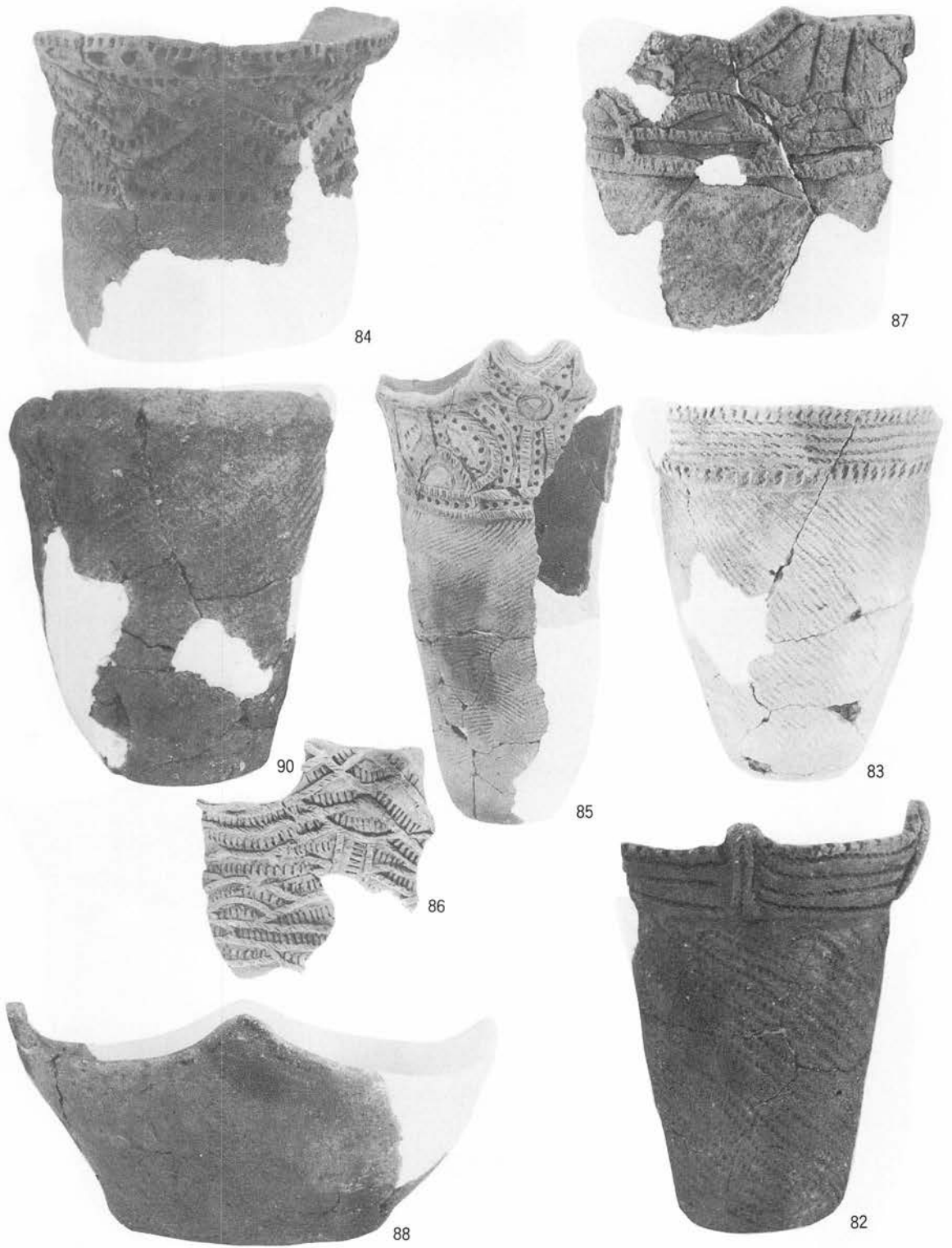
80

B. I-22住居跡 78~80



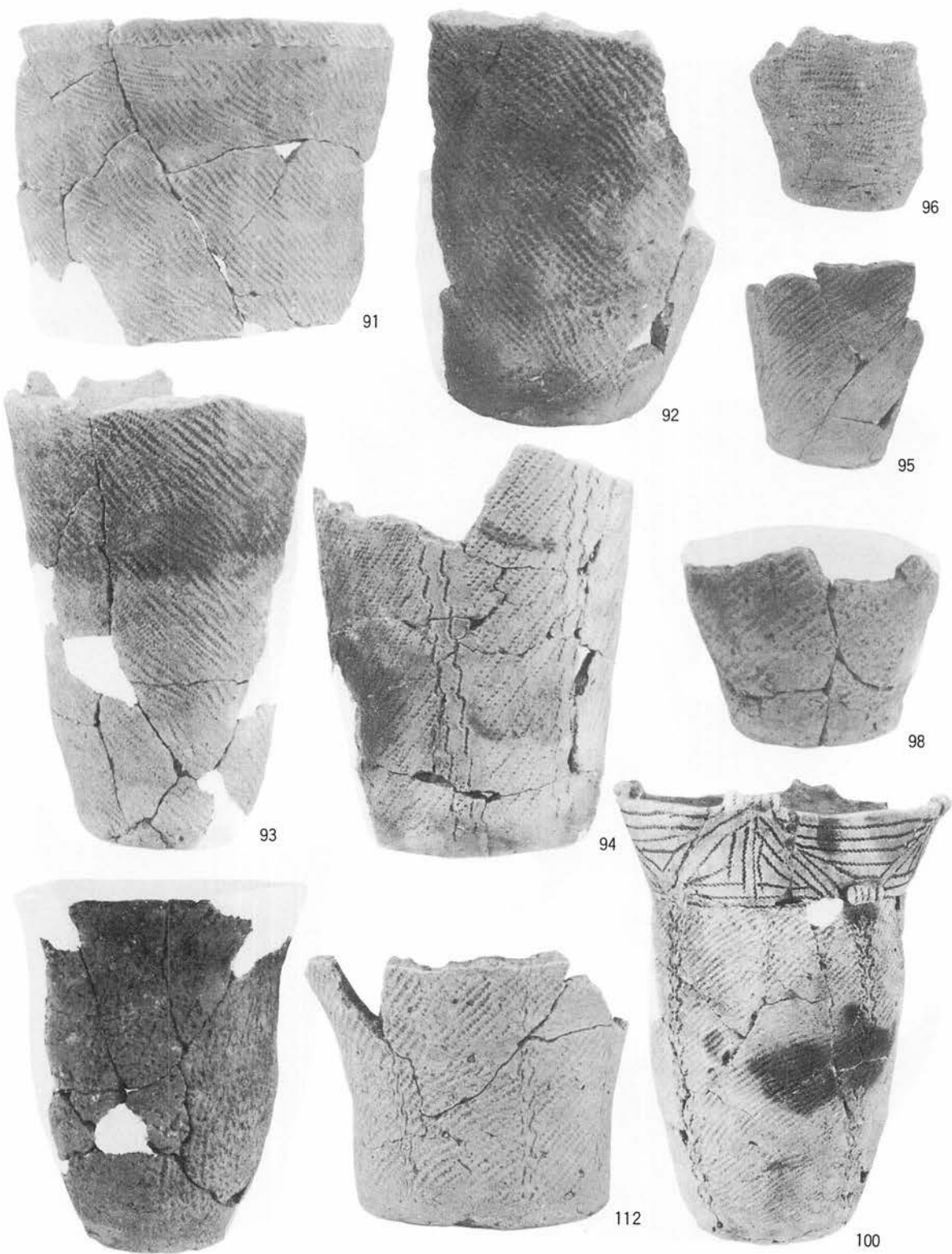
78

P L-50 遺物



P L - 51 I - 22住居跡 (遺物 - 2)





P L-52 I-22住居跡 (遺物-3)



102



103



104



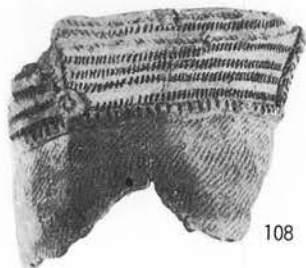
105



109



111



108

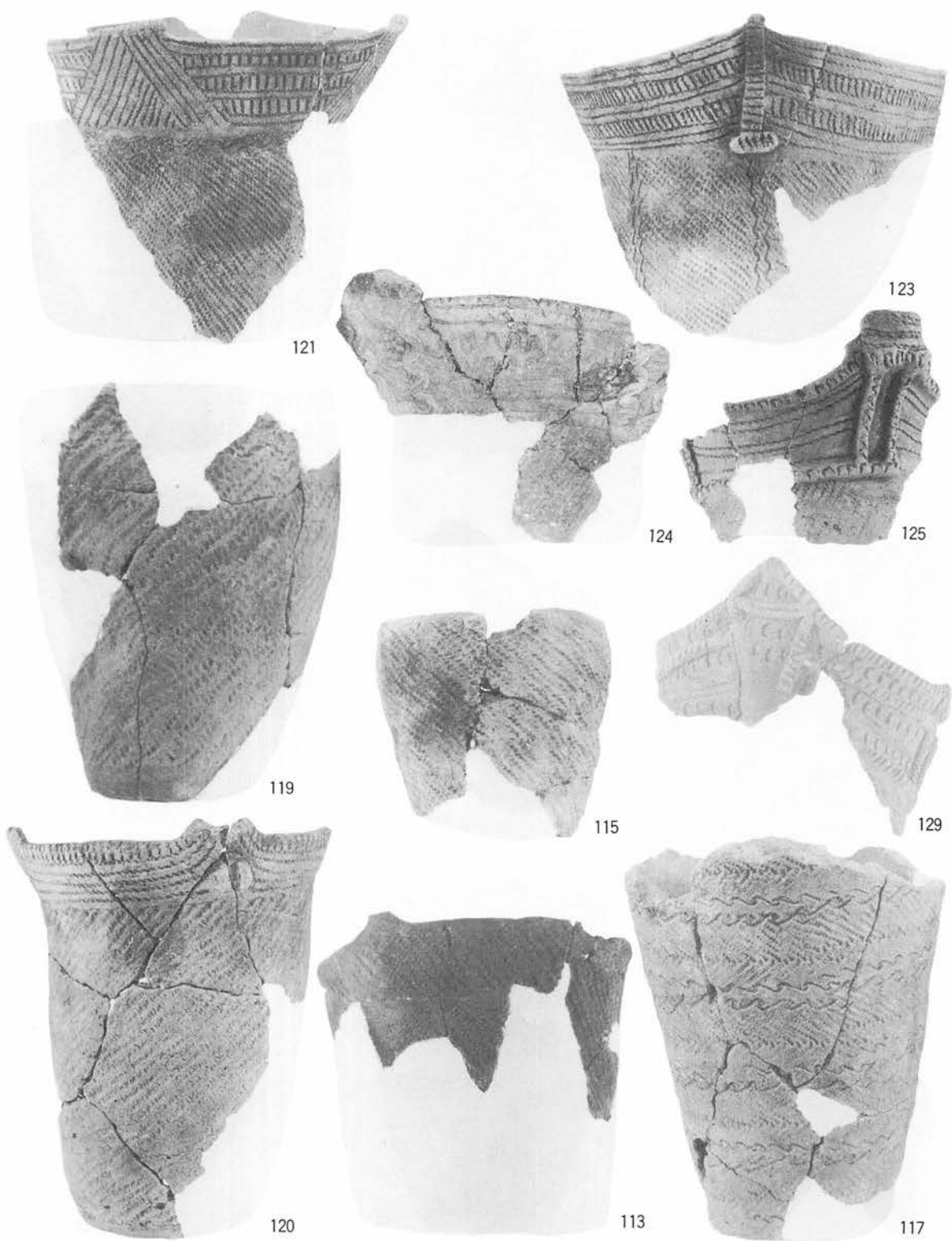


110

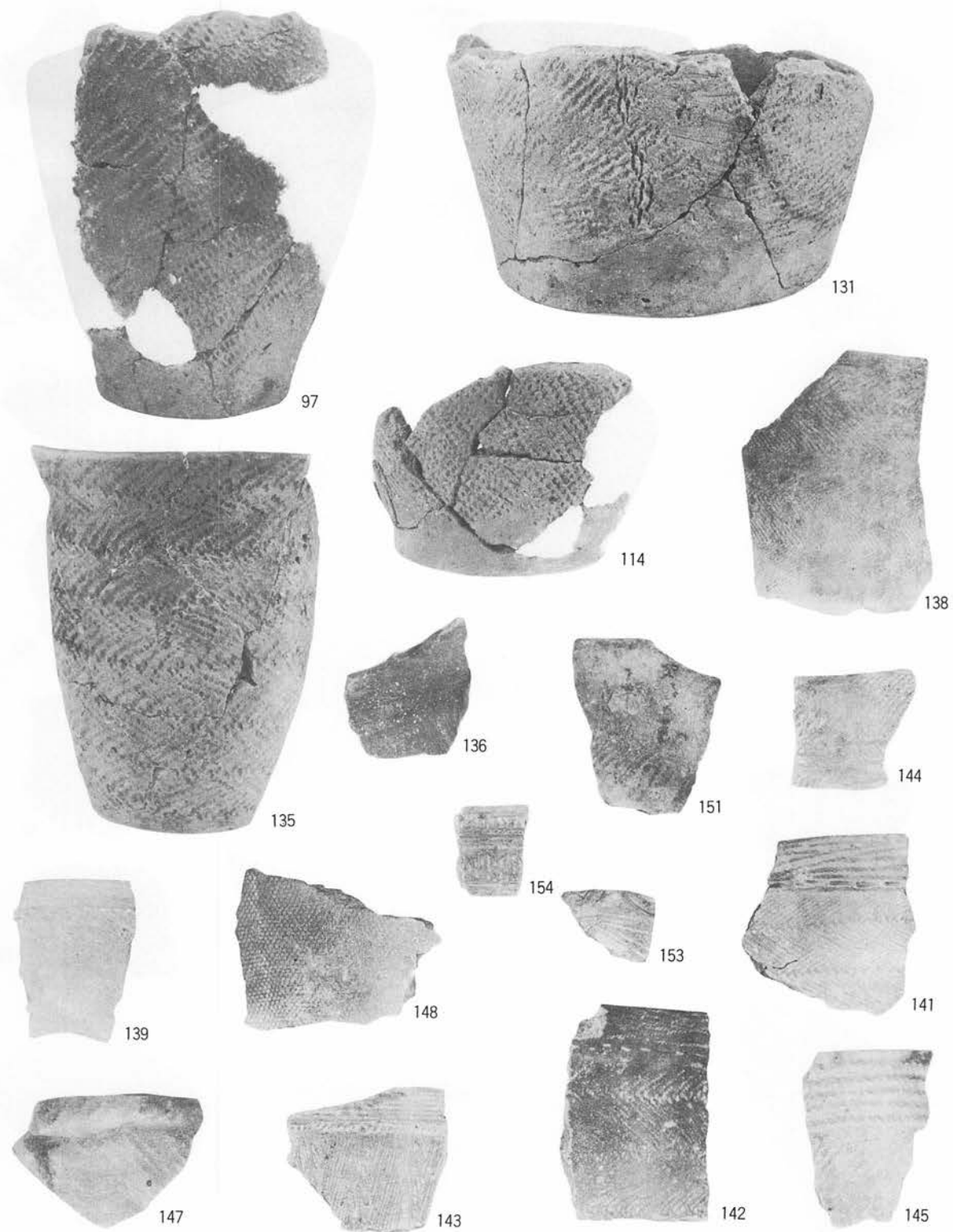


101



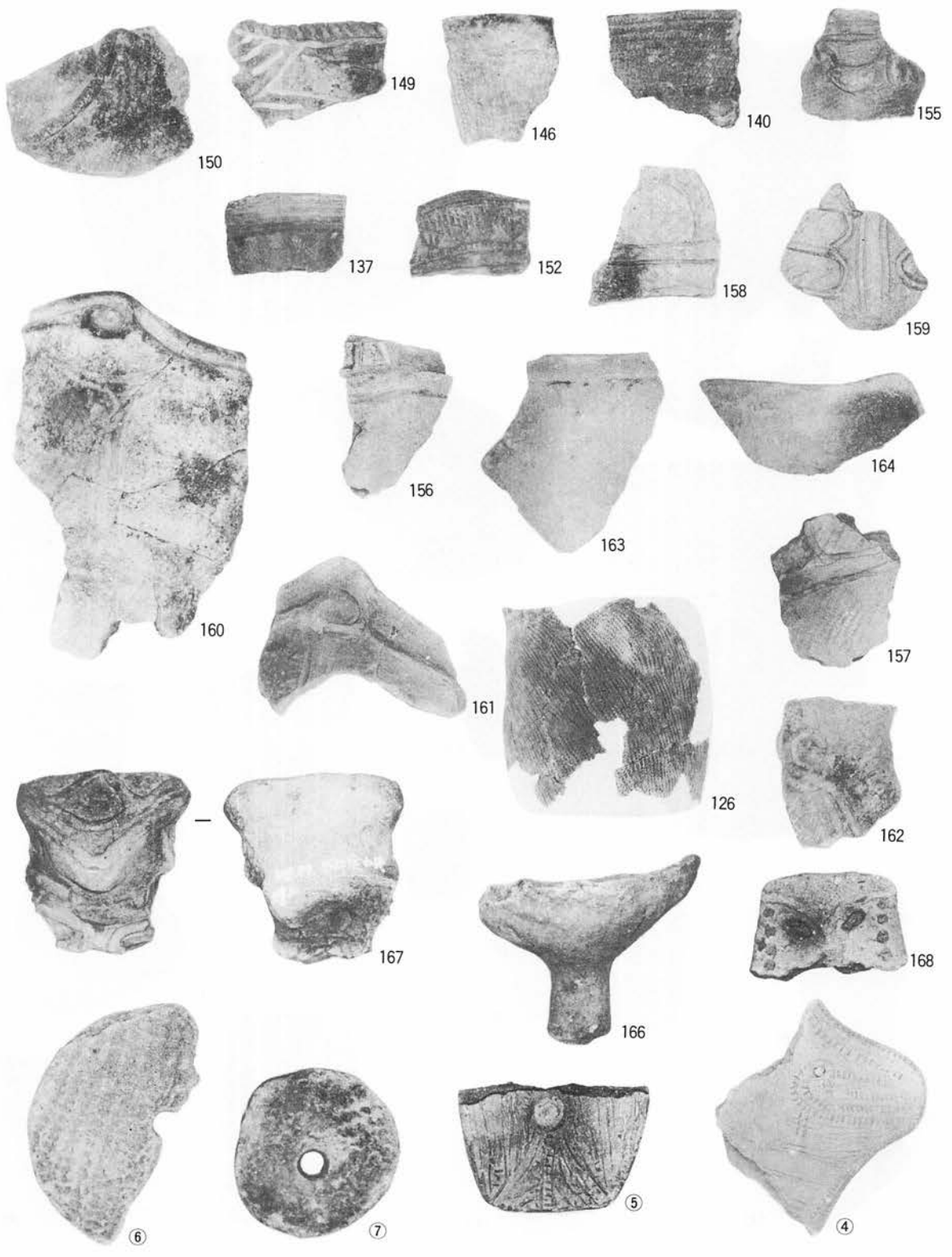


P L-54 I-22住居跡 (遺物-5)

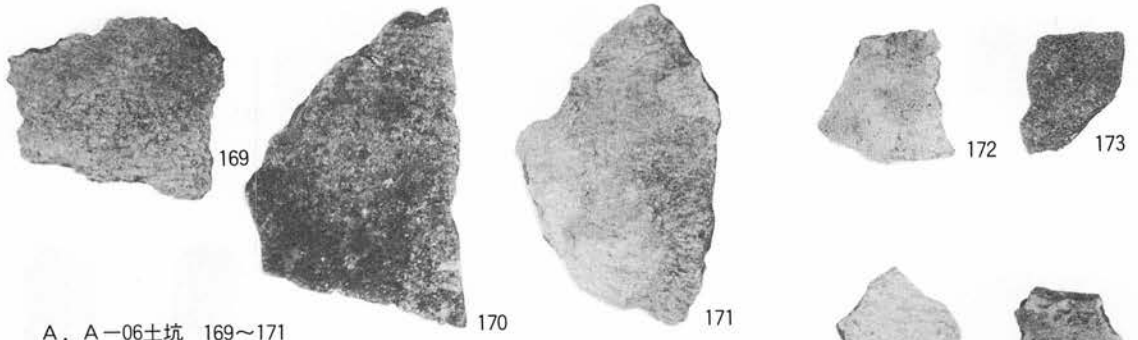


P L-55 I-22住居跡 (遺物-6)

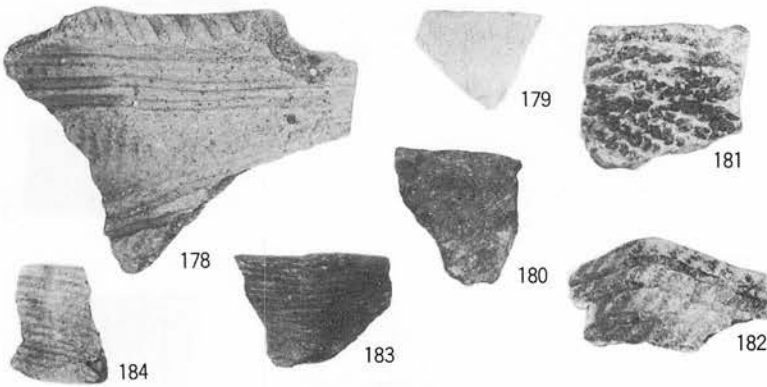




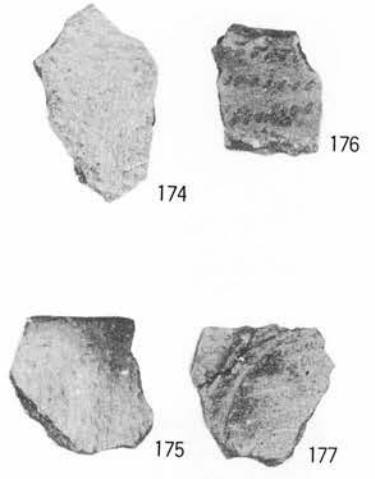
P L—56 I—22住居跡 (遺物—7)



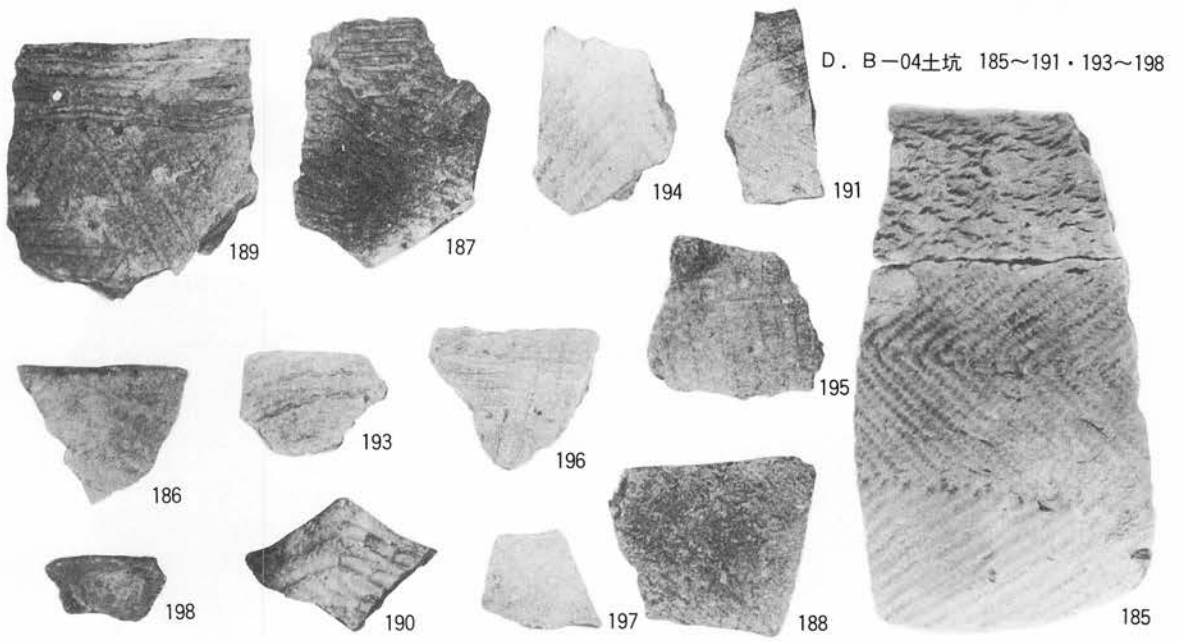
A. A-06土坑 169~171



C. A-11土坑 178~184



B. A-10土坑-2 172~177

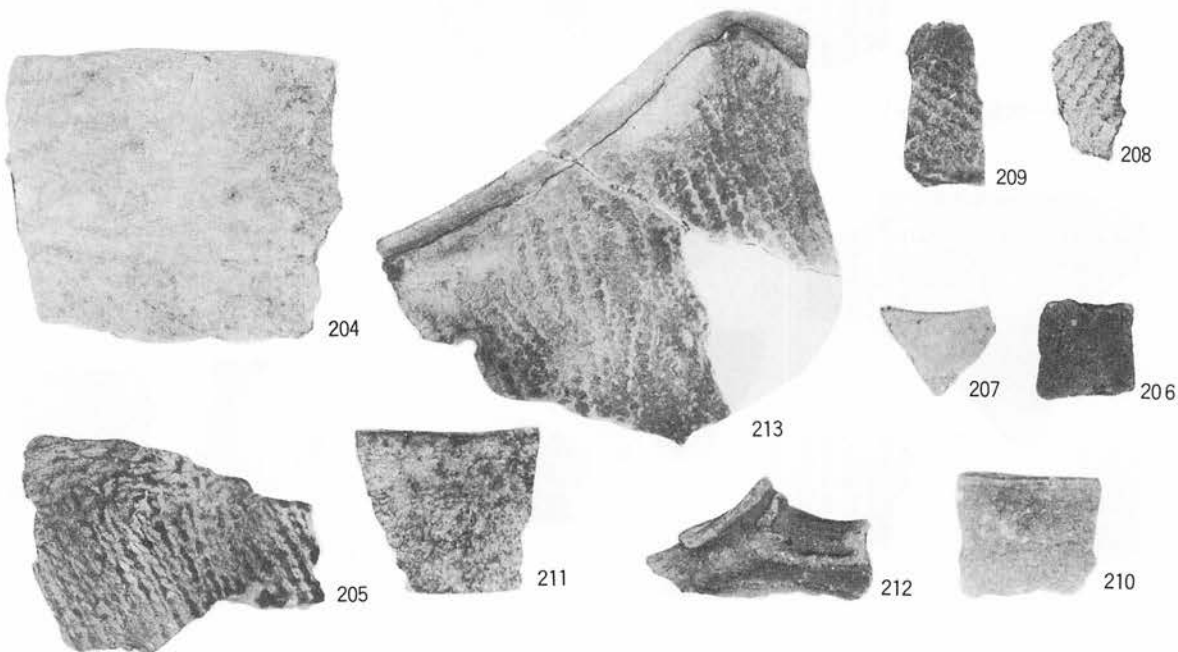


D. B-04土坑 185~191・193~198

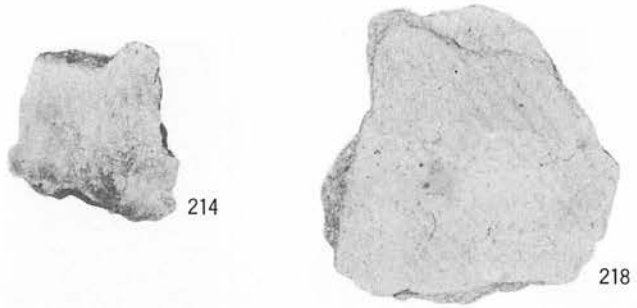




A. B-09土坑 199~203



B. B-10土坑-2 204~214



C. B-11土坑-1 215



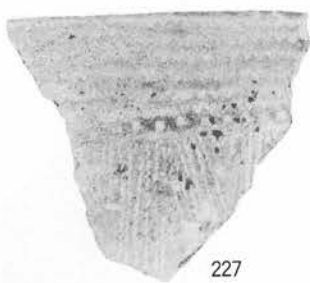
E. B-11土坑-2 216~218



D. B-11土坑-3 219



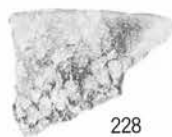
F. C-22土坑 221



227



226



228

A. C-23土坑 226~228



233



236



246



237



235



238



239



231

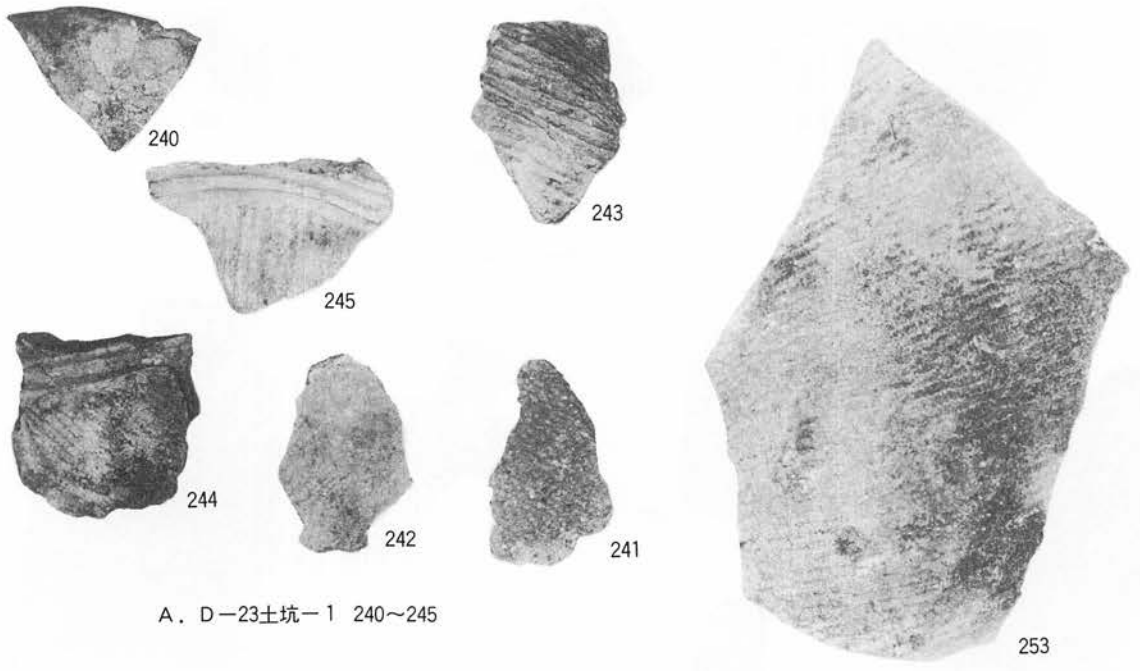
B. D-23土坑-1 231・233・235~239



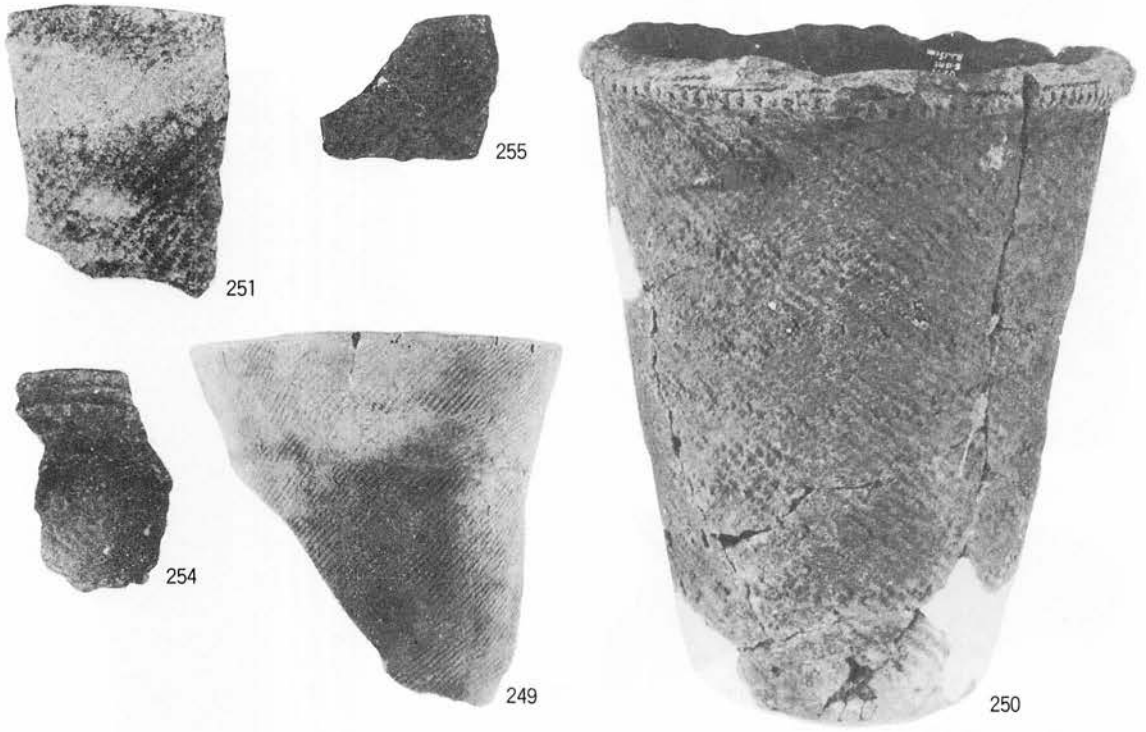
247

C. E-15土坑 246・247





A. D-23土坑-1 240~245



B. E-15土坑-1 249~251 • 253~255



254



260



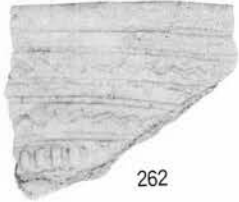
258



252



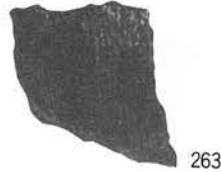
256



262



261



263



259

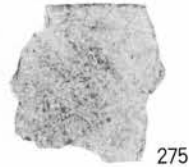
C. E-47土坑-2 270~276



264



266



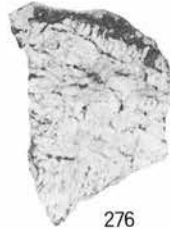
275



271



265



276

A. E-15土坑-1 252・254・256・258~266



273



270



267



268



269

B. E-46土坑 267~269

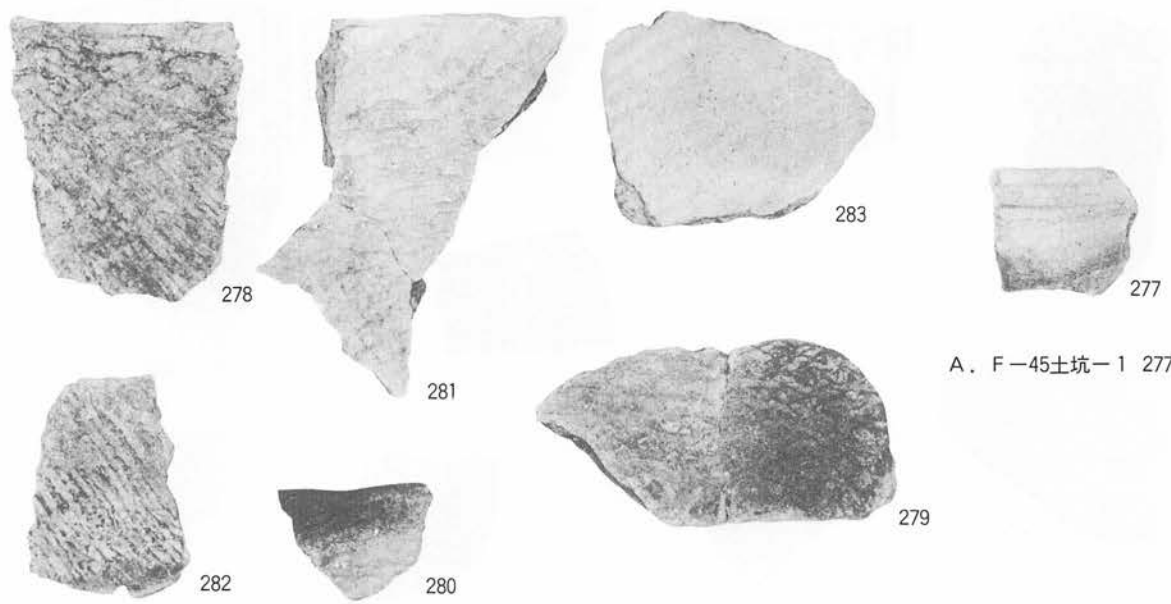


274

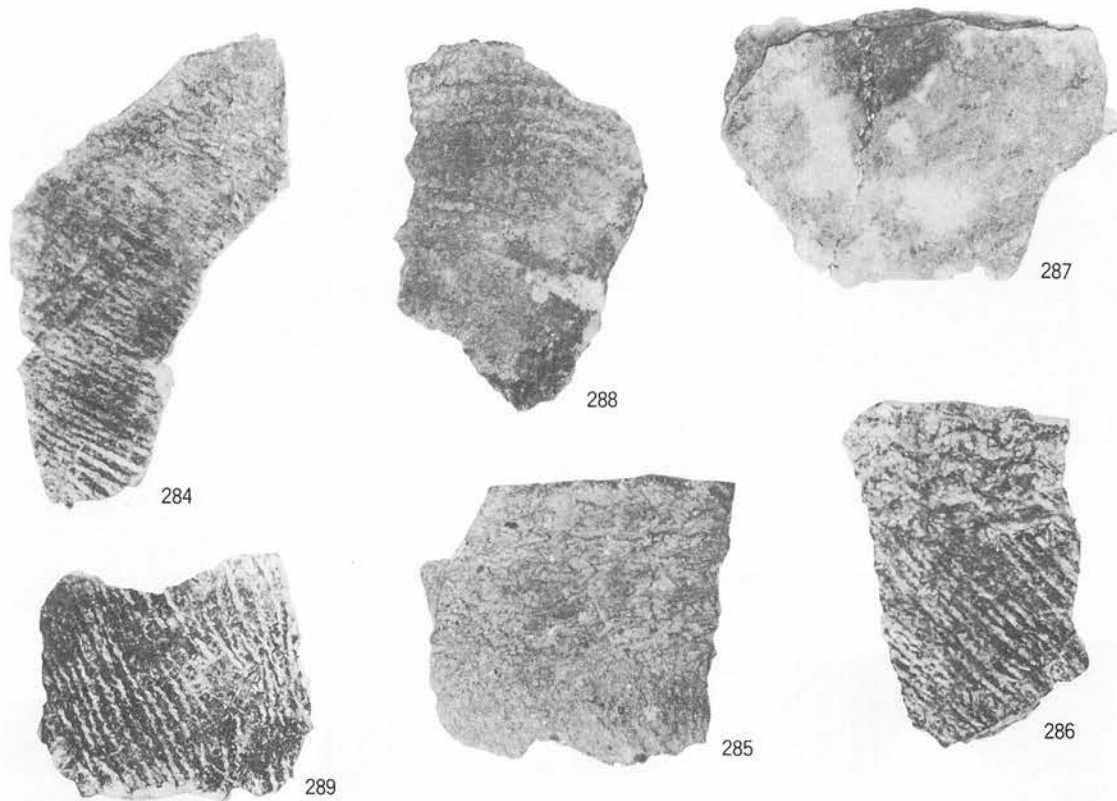


272

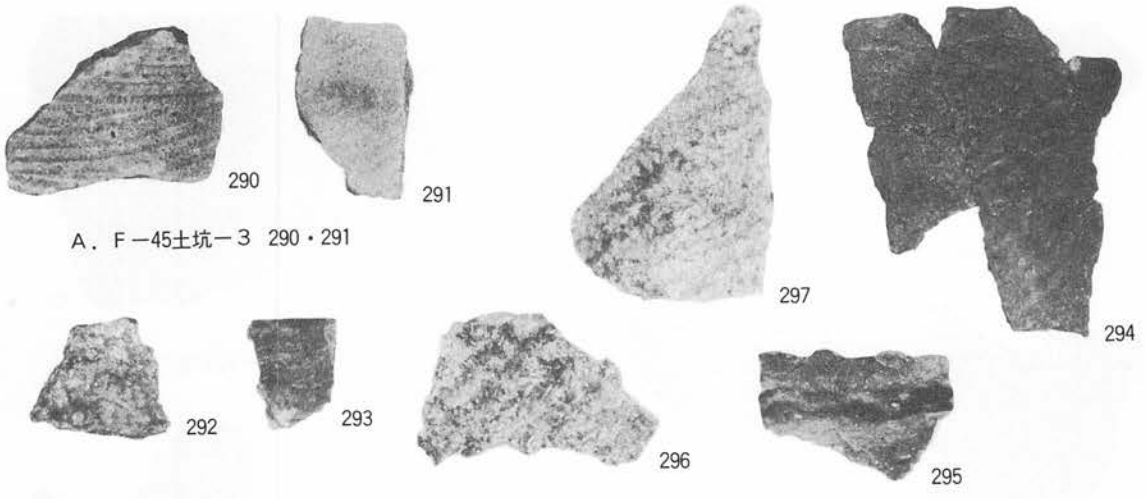




A. F-45土坑-1 277

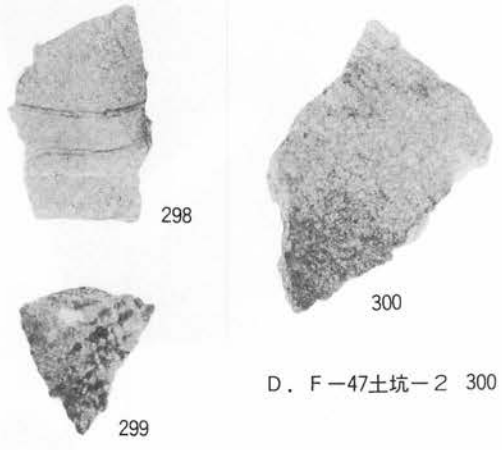


B. F-45土坑-2 278~289



A. F-45土坑-3 290・291

B. F-46土坑-1 292~297



D. F-47土坑-2 300

C. F-47土坑-1 298・299



303



305

E. F-48土坑 303・305





301



302

A. F-48土坑 301・302



321

C. G-45土坑 321



307



322



310



309



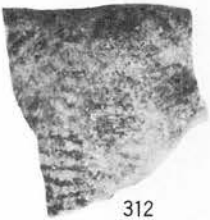
308



323



327



312



311

B. G-23土坑 307~312



325



326



328

D. G-46土坑-1 322~328



324



314



313



320



316



318



315



317



319

A. G-44土坑 313~320



329



331



330



334



333



335

B. G-46土坑-2 329~331

C. G-46土坑-3 333~335





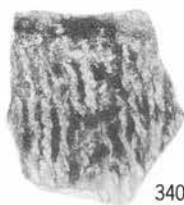
336



337



338



340



339

A. G-47土坑-1 336~338

B. G-47土坑-2 339・340



348



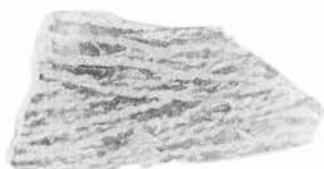
346



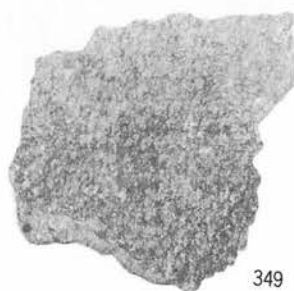
343



341



350



349



347



342



344

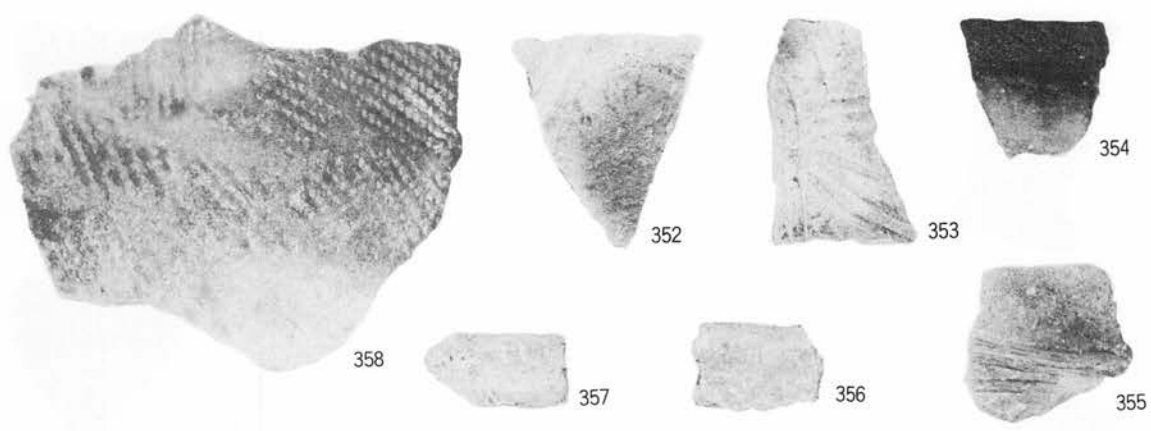


345

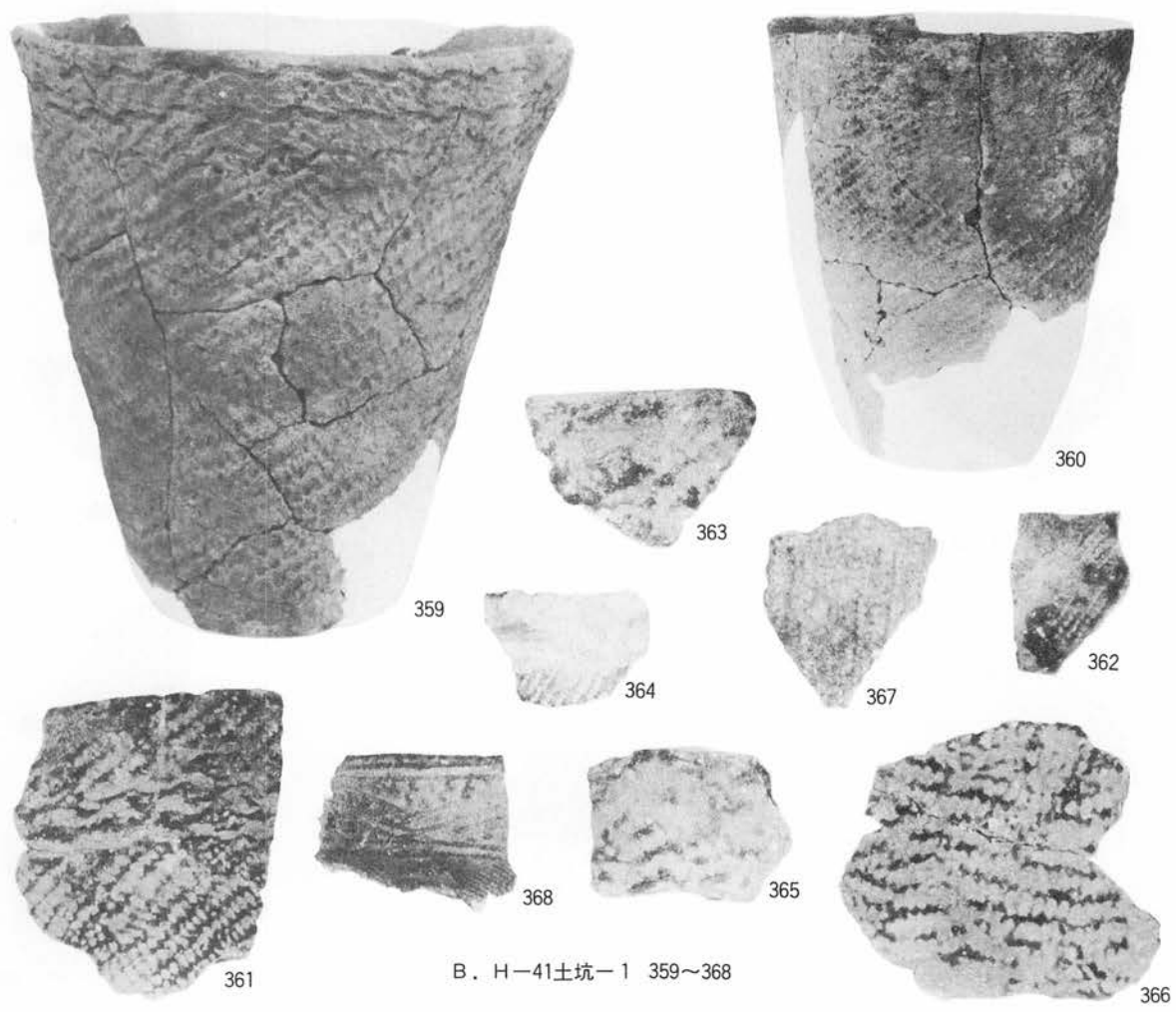


351

C. G-47土坑-3 341~351

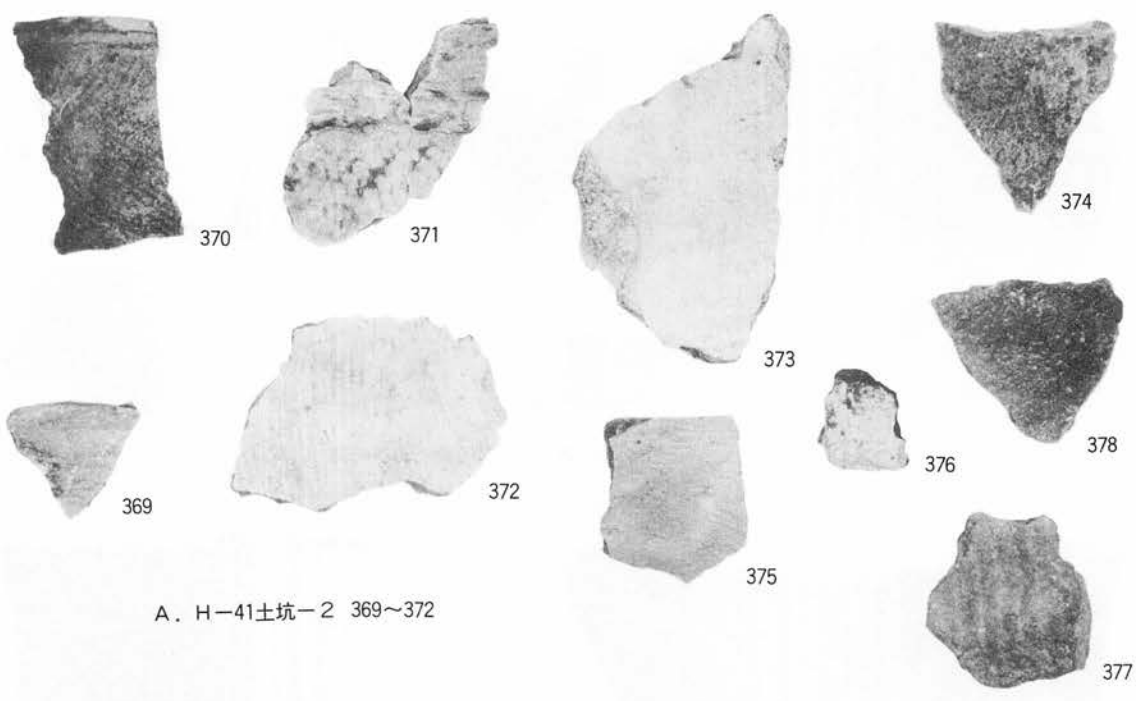


A. H-39土坑 352~358



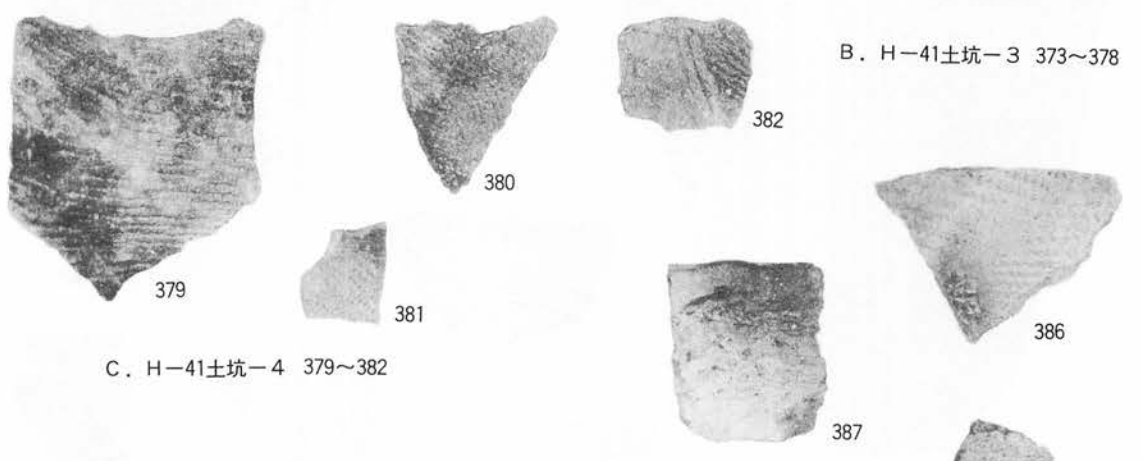
B. H-41土坑-1 359~368



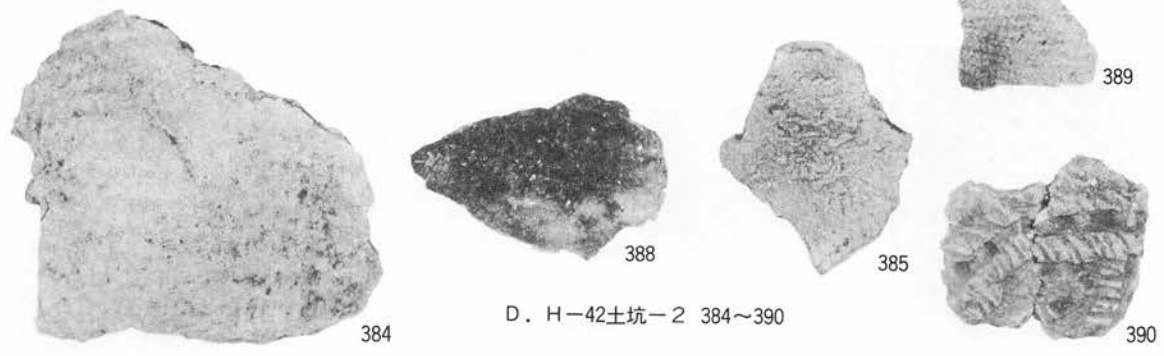


A. H-41土坑-2 369~372

B. H-41土坑-3 373~378



C. H-41土坑-4 379~382



D. H-42土坑-2 384~390



383



391



392

A. H-42土坑-2 383・391・392



393



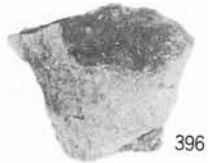
394



409



395



396

B. H-44土坑 393~396



397



398



399

C. H-46土坑 397~399



400



402



401

D. H-47土坑-2 400~402



408

E. I-19住居跡内土坑-1 408・409





411



410



412

A. I-19住居跡内土坑-1 410~412



413

B. I-19住居跡内土坑-3 413



418



414



416



415



419



417

C. I-43土坑 414~419



405



406



407



404

D. H-48土坑-3 404~407



422



421



420

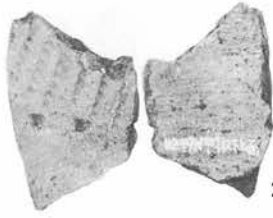


⑧

E. 集石群 ⑧・420~422



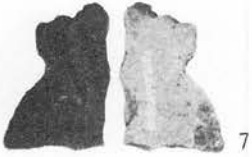
1



2



3



7



8



4



9



10



5



6



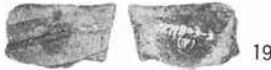
12



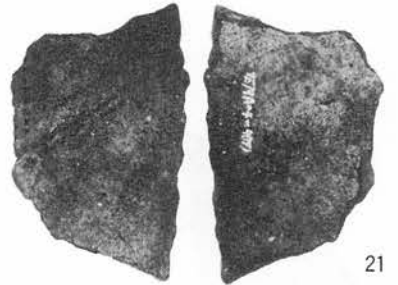
11



13



19



21



15



14



16



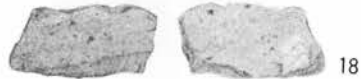
20



22



17



18



23

I 群1類A

I 群1類B (22・23)





32



25



34



31



24

I群1類B (24・25)



26



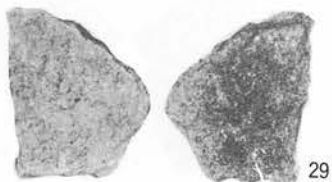
28



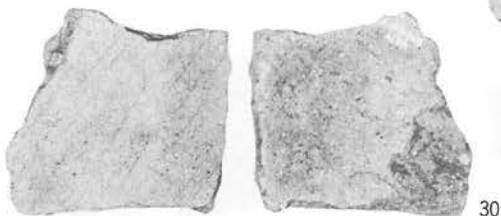
27



33



29



30

I群1類A 26~34



35



37



38

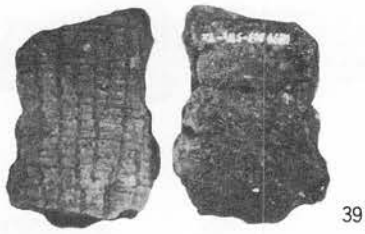


41

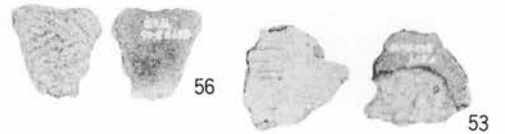
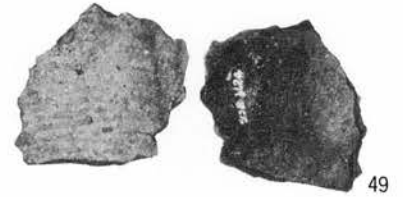
I群1類C 35・37・38・40・41



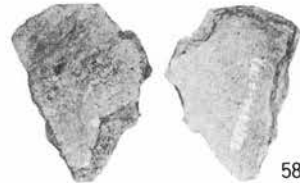
40



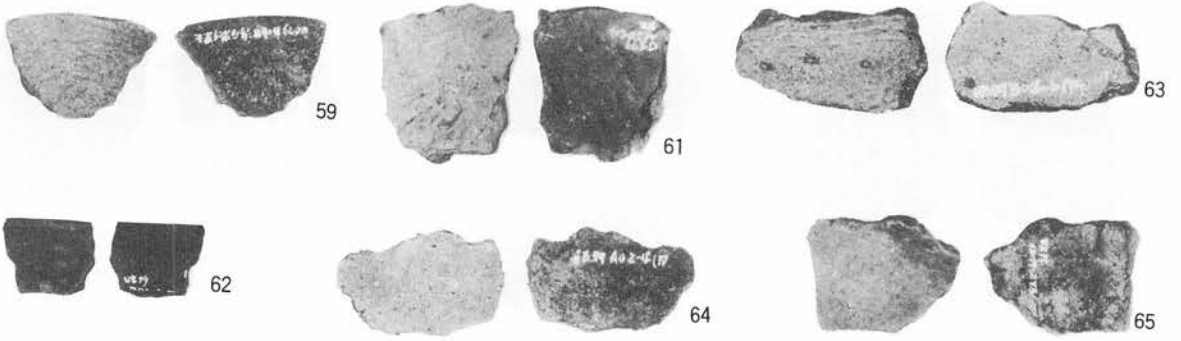
I群1類C 36・39・42・43



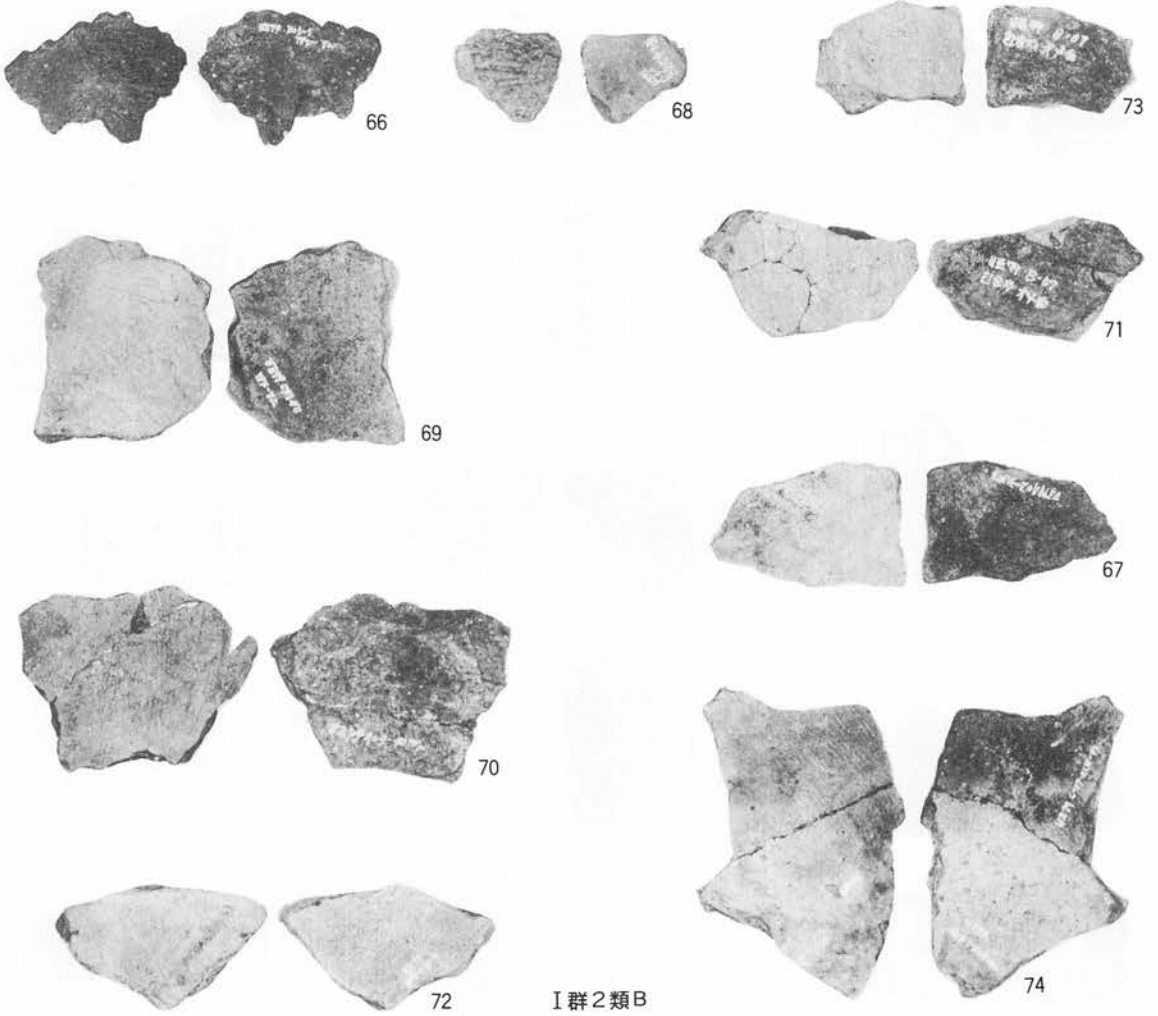
I群2類A



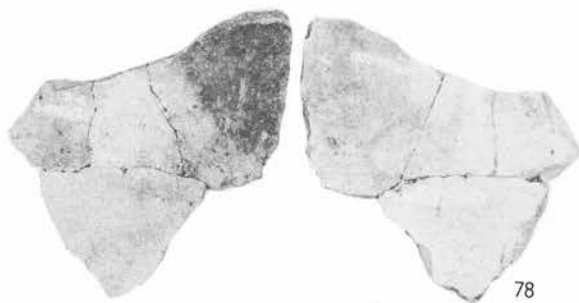
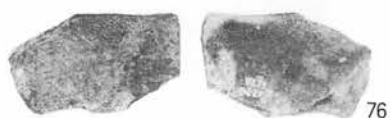




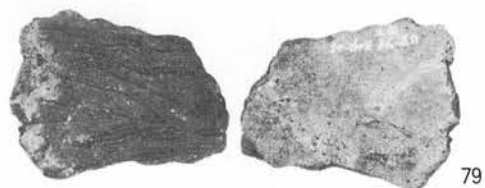
I 群 2 類 A



I 群 2 類 B



I 群 3 類 75~78



I 群 4 類 A 79~88



I 群 4 類 B 89・90



I 群 4 類 C 92・95





93

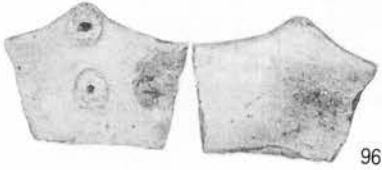


94



91

I群4類C



96



97



98



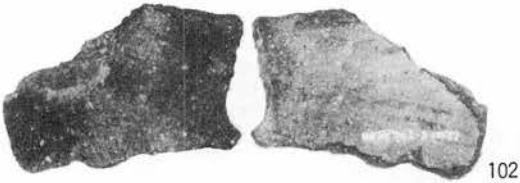
99



100



101



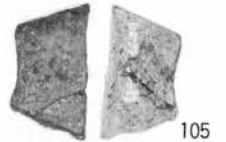
102



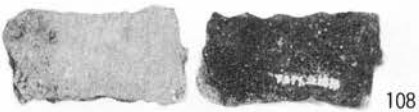
104



103



105



108



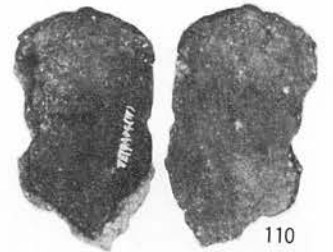
106



109

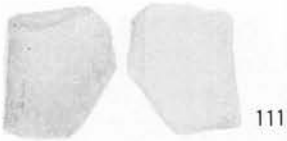


107



110

I群5類



111



113



114



112



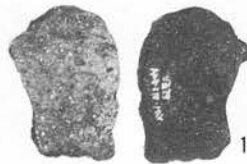
115



116

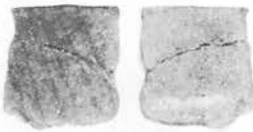


118



117

I 群5類



119



120



121



122



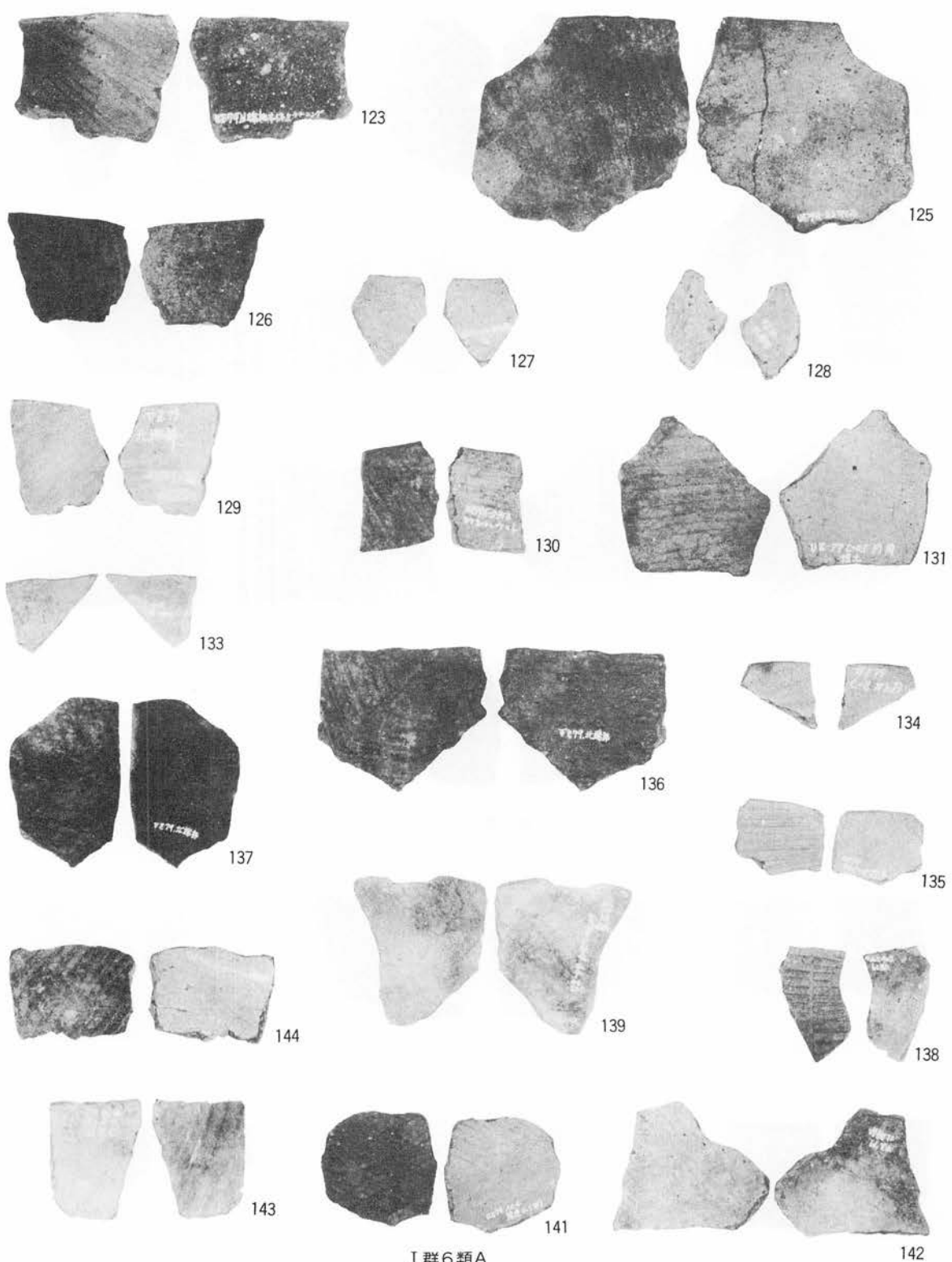
124

I 群6類A



132



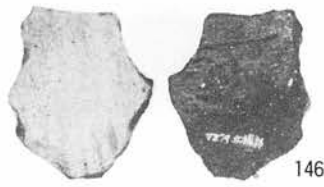


I 群6類A

PL-78 北端部遺物包含層 (土器-8)



140



146



147



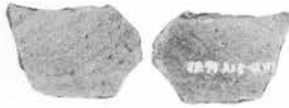
145



149



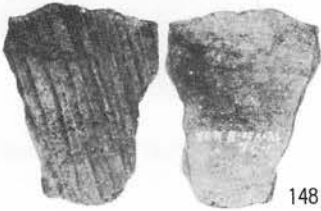
150



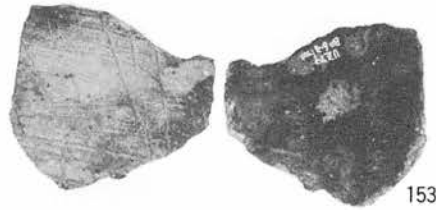
151



152



148



153

I群6類A 140・145~153



154



161



164



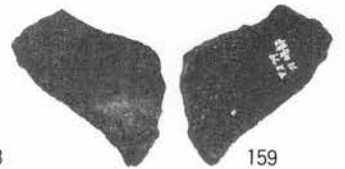
155



167



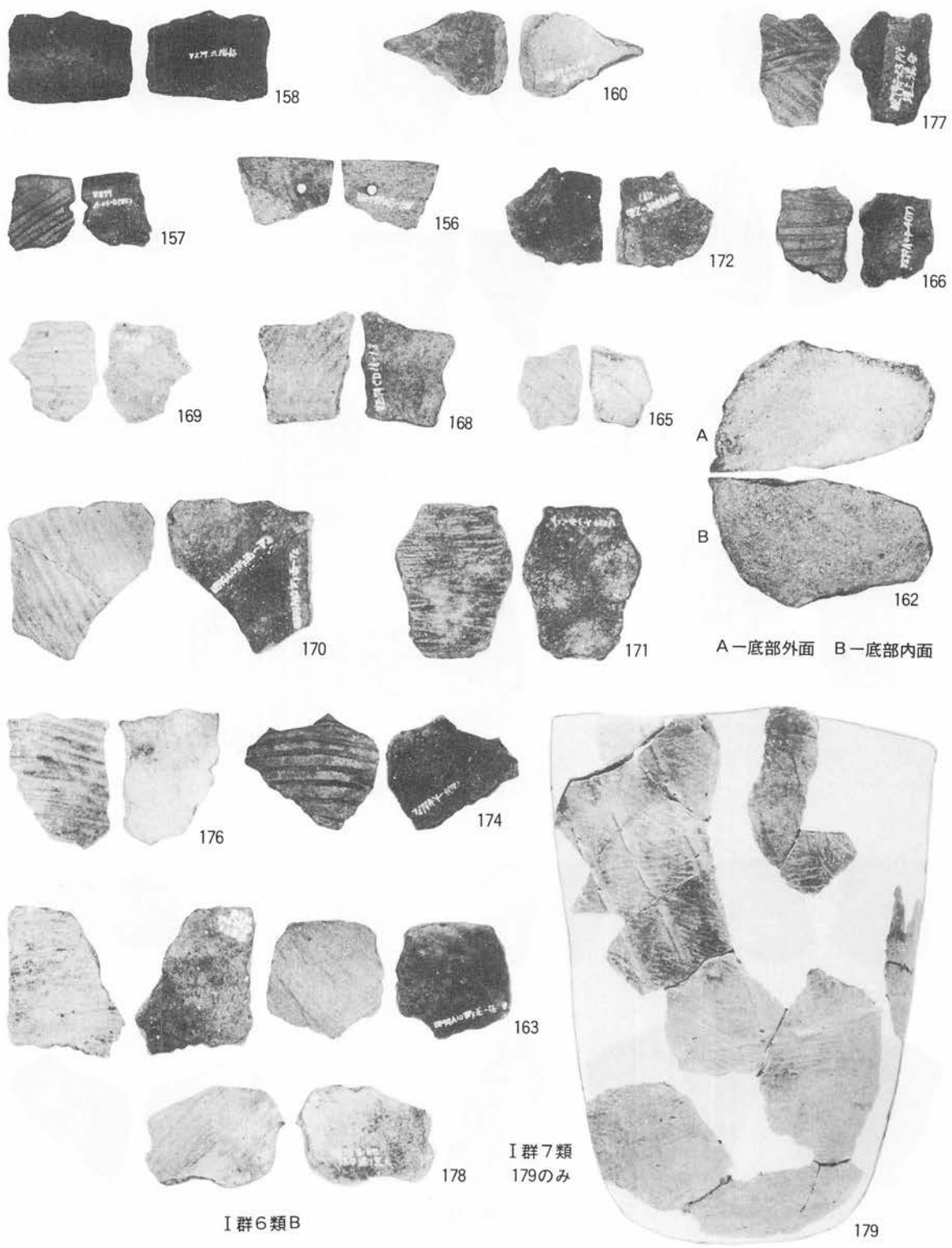
173



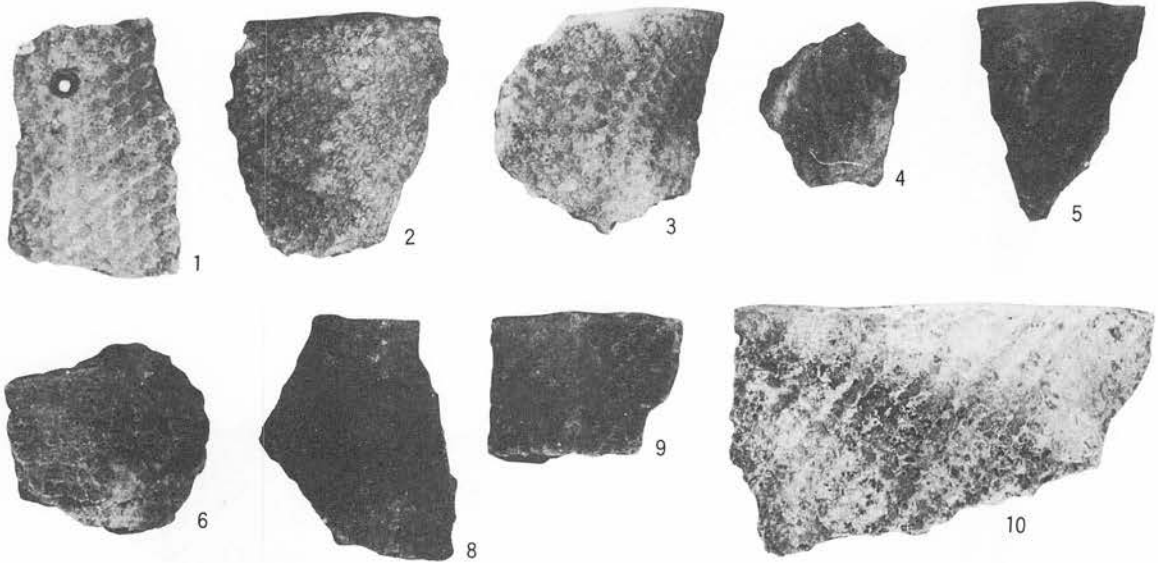
159

I群6類B

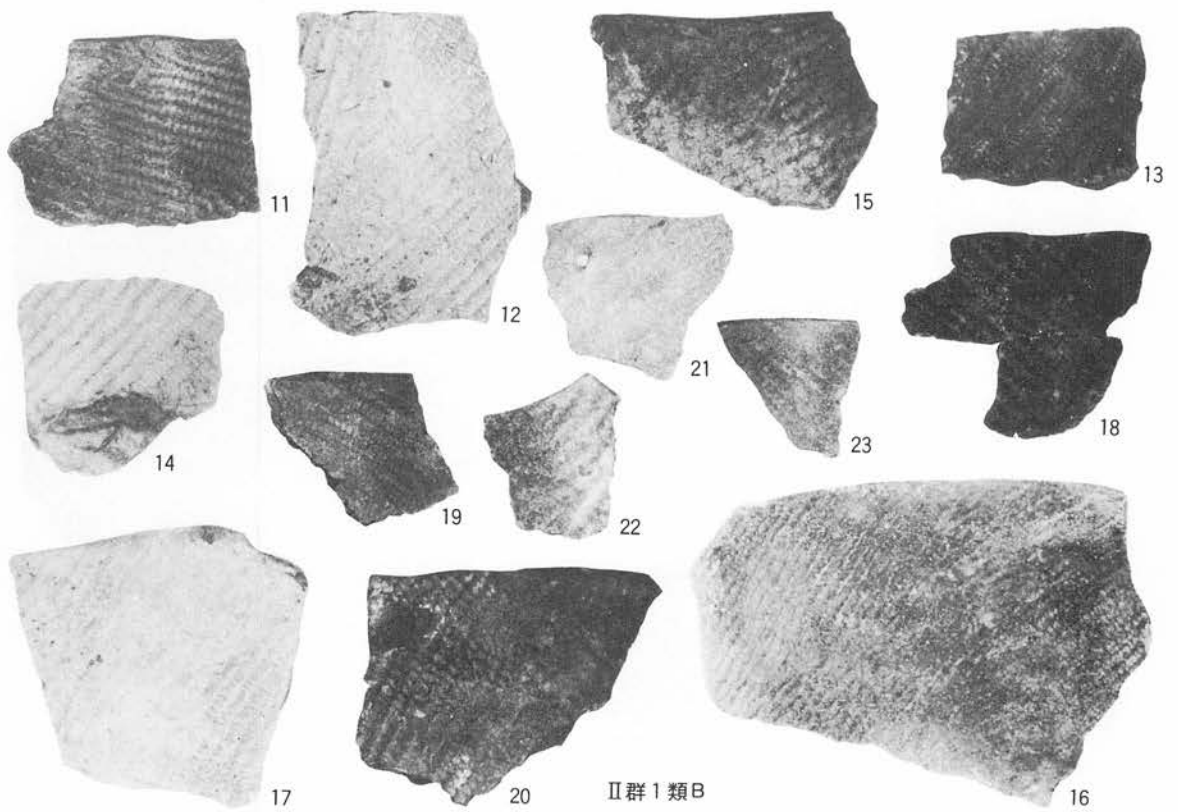




P L - 80 北端部遺物包含層 (土器-10)

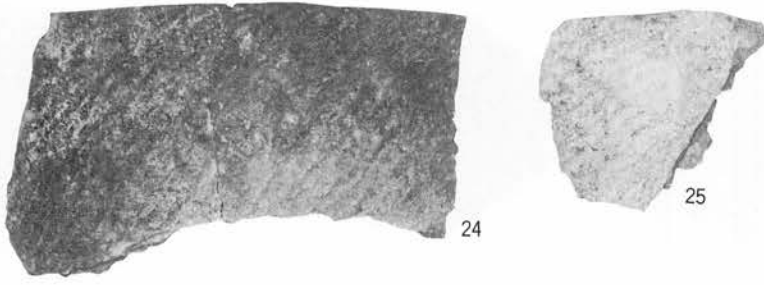


II群1類A

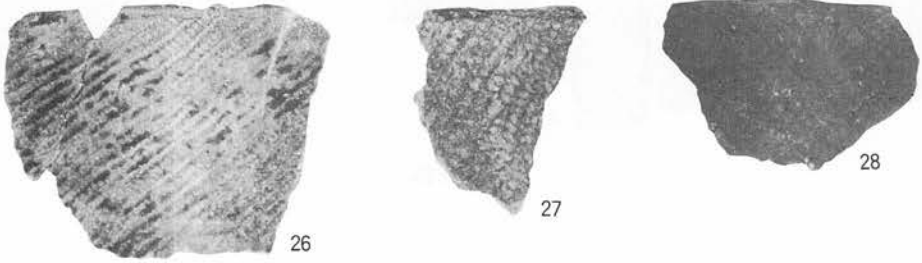


II群1類B

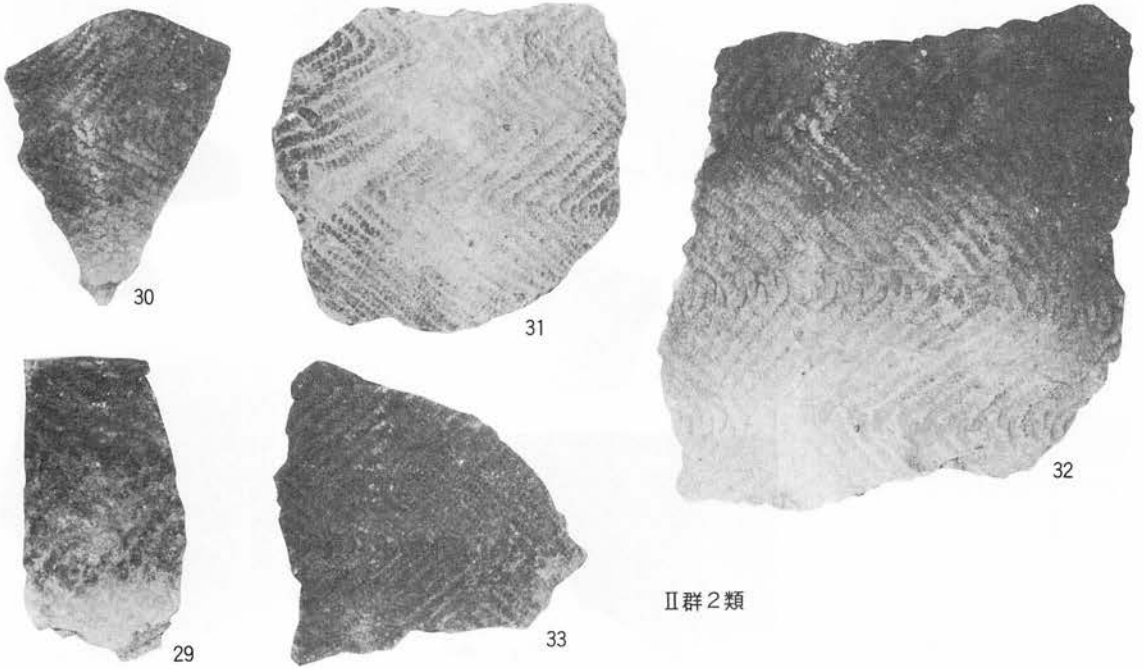




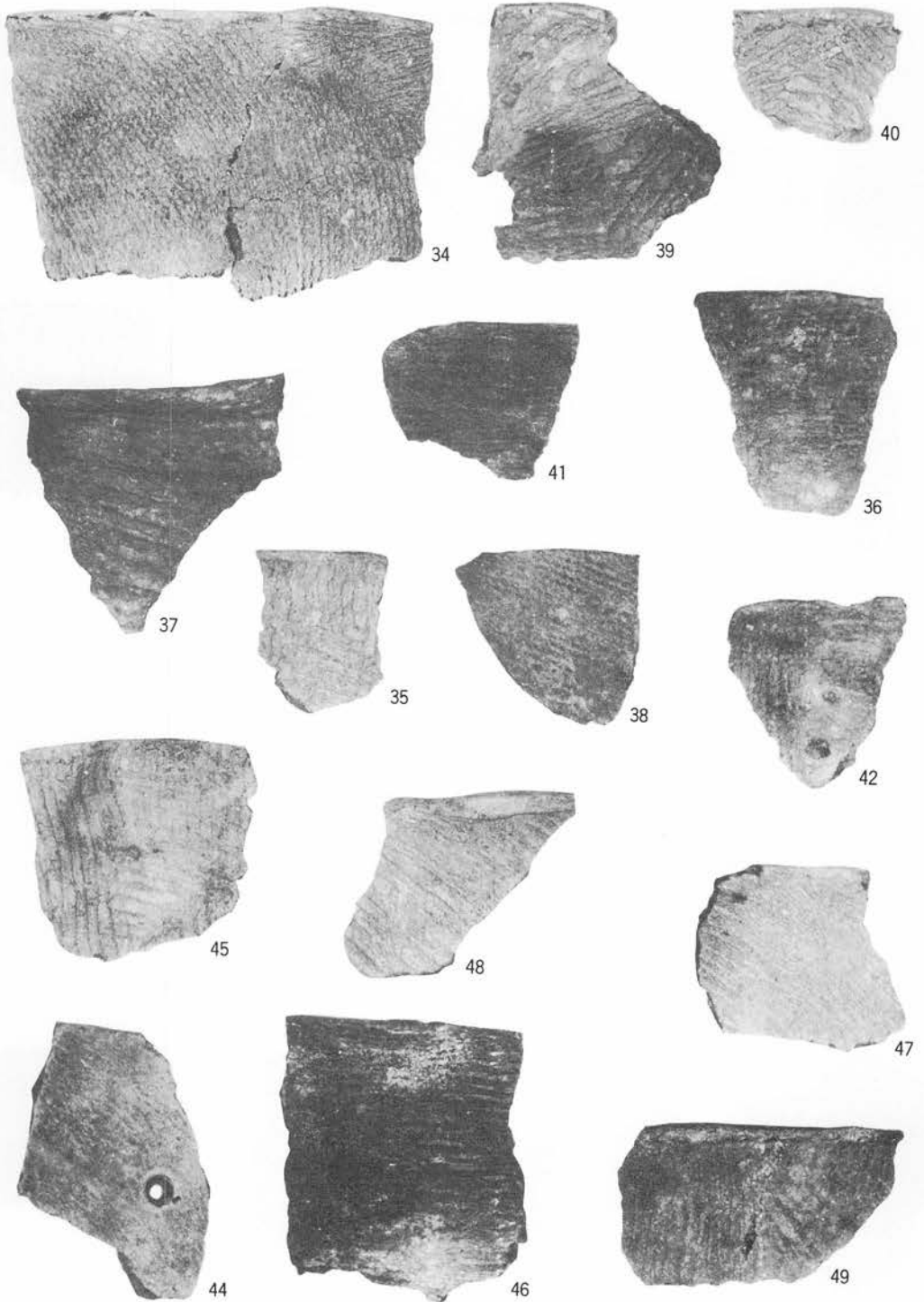
II群1類C



II群1類D

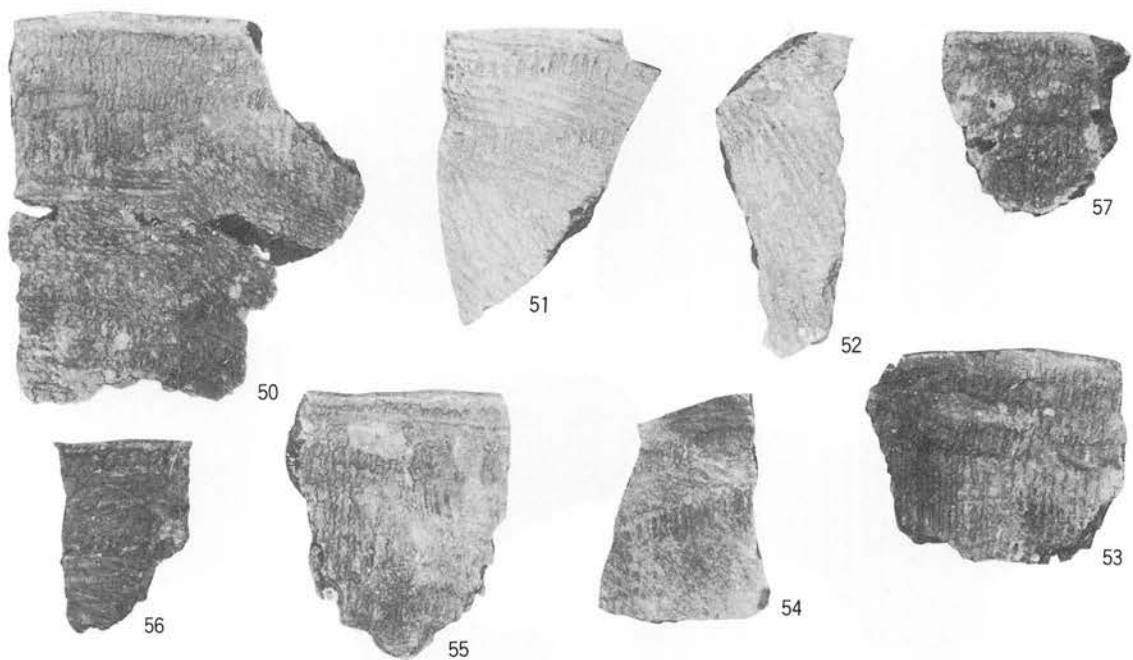


II群2類

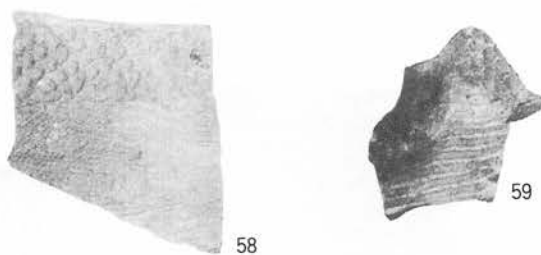


II群3類A





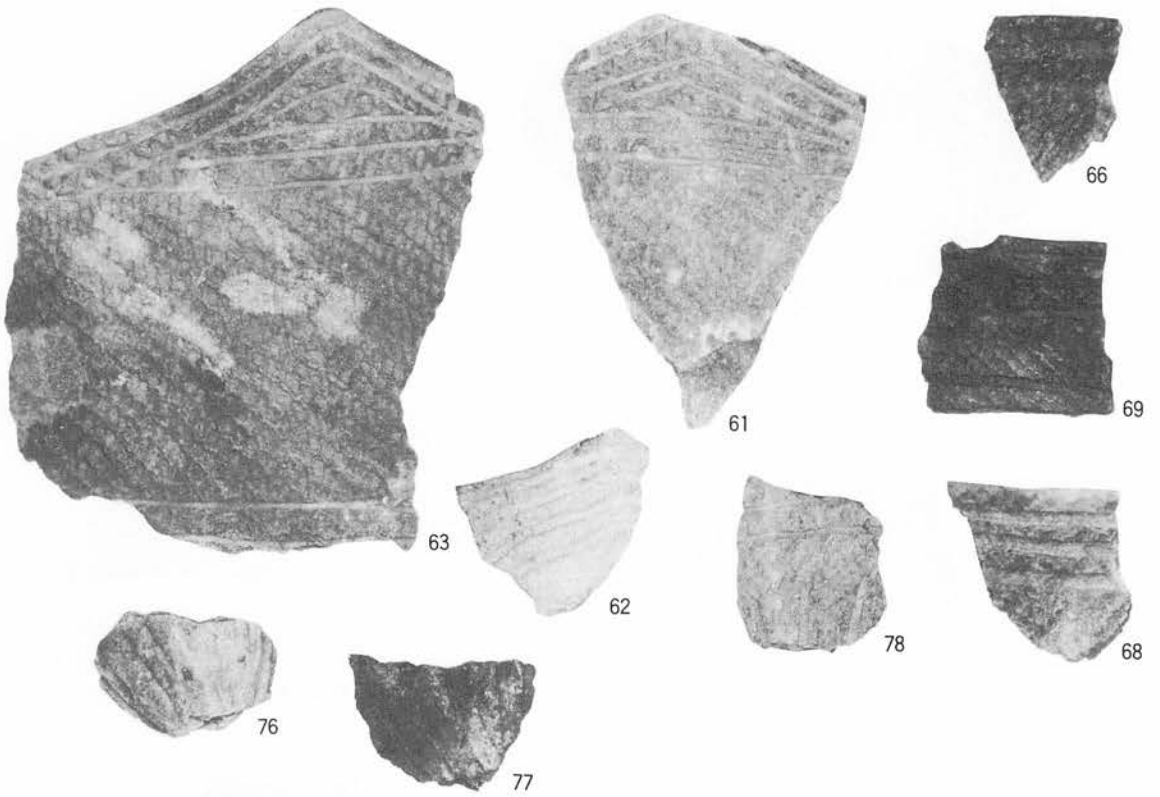
II群3類B



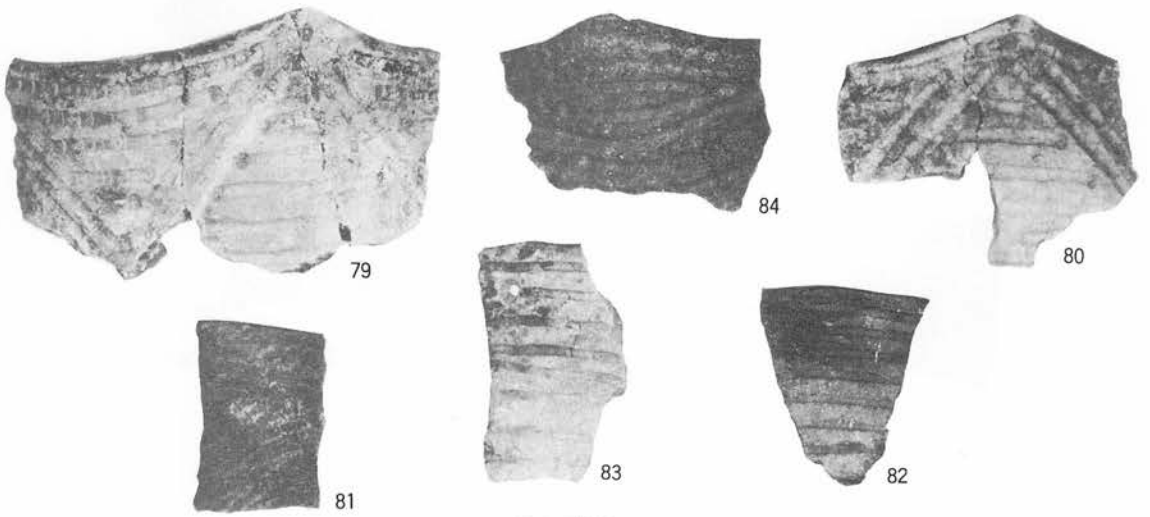
II群3類C



II群4類A

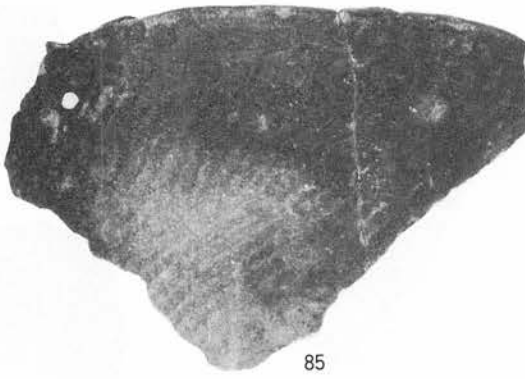


Ⅱ群4類A

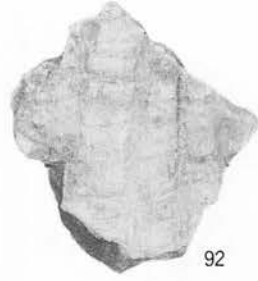


Ⅱ群4類B

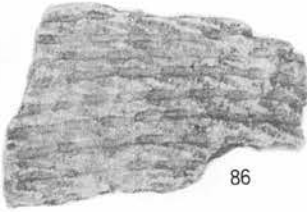




85



92



86

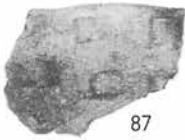


94

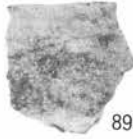


93

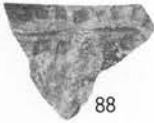
II群4類D 92~94



87



89



88



95



91



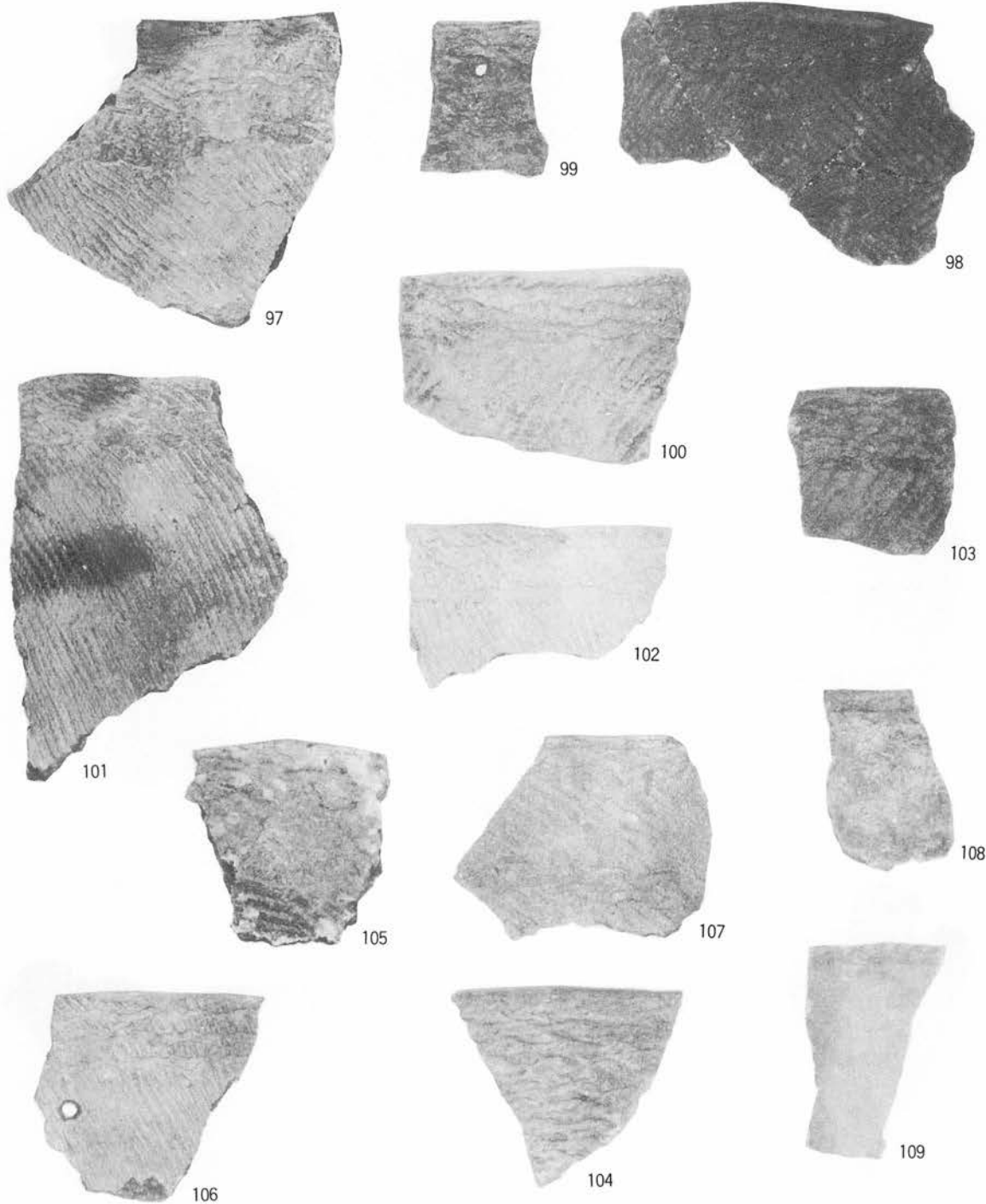
90



96

II群4類E 95・96

II群4類C 85~91



II群5類 97~107

II群6類 108・109





110

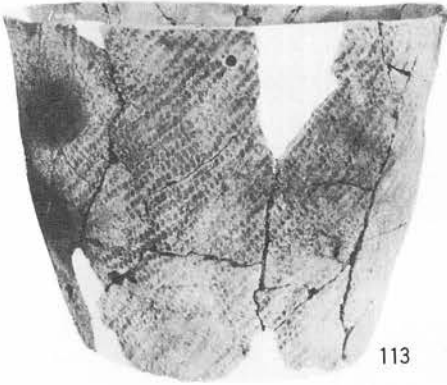


111



112

II群7類



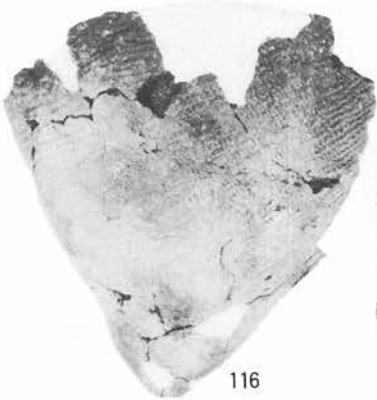
113



115



114



116



118



120



121

II群1類B



119

Ⅱ群1類B



122

Ⅱ群1類B



124

Ⅱ群1類B



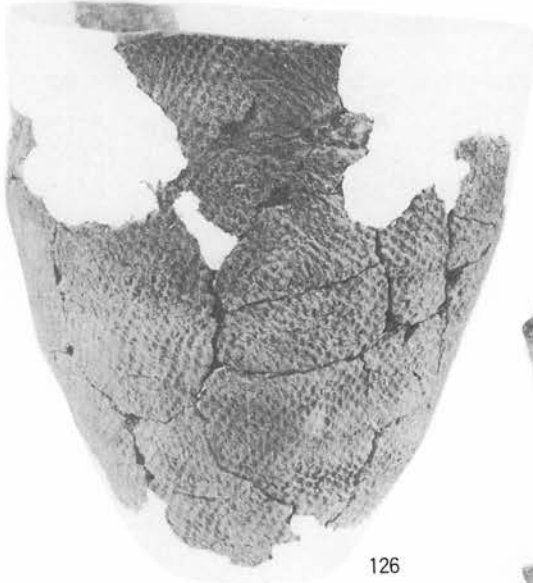
129

Ⅱ群2類



125

Ⅱ群



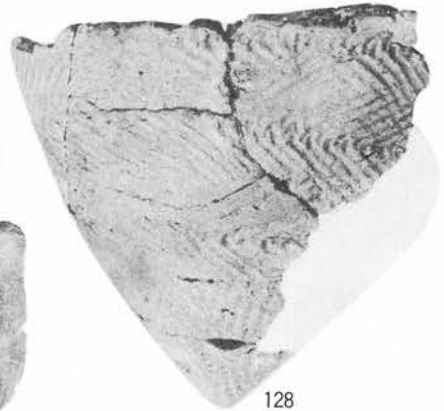
126

Ⅱ群2類



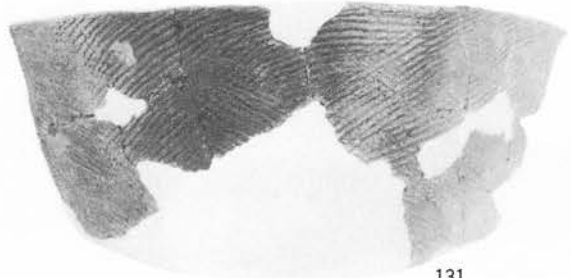
130

Ⅱ群3類A



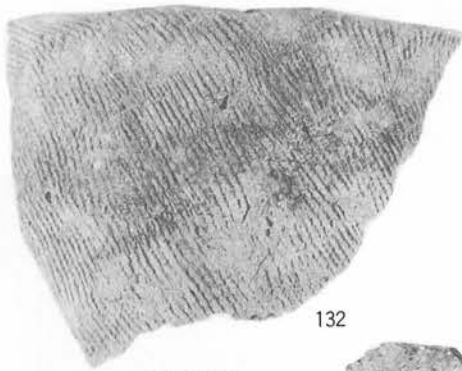
128

Ⅱ群2類



131

Ⅱ群3類A



132

Ⅱ群3類A



135



133

Ⅱ群4類A



134

Ⅱ群4類B





136

II群4類A



137

II群4類B



139

II群4類C



138

II群4類C

A. 北端部遺物包含層 (土器-20)

Q-1 1面出土遺物

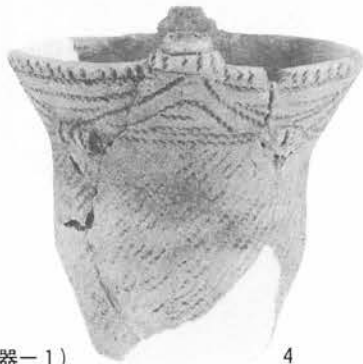


1



2

Q-2 2面出土遺物



4

B. I-19住居跡内遺物包含層 (土器-1)

P L-90 土器



3

Q-2出土



7

3 2面出土



5

5・7・8 1面出土



8



9



10



11

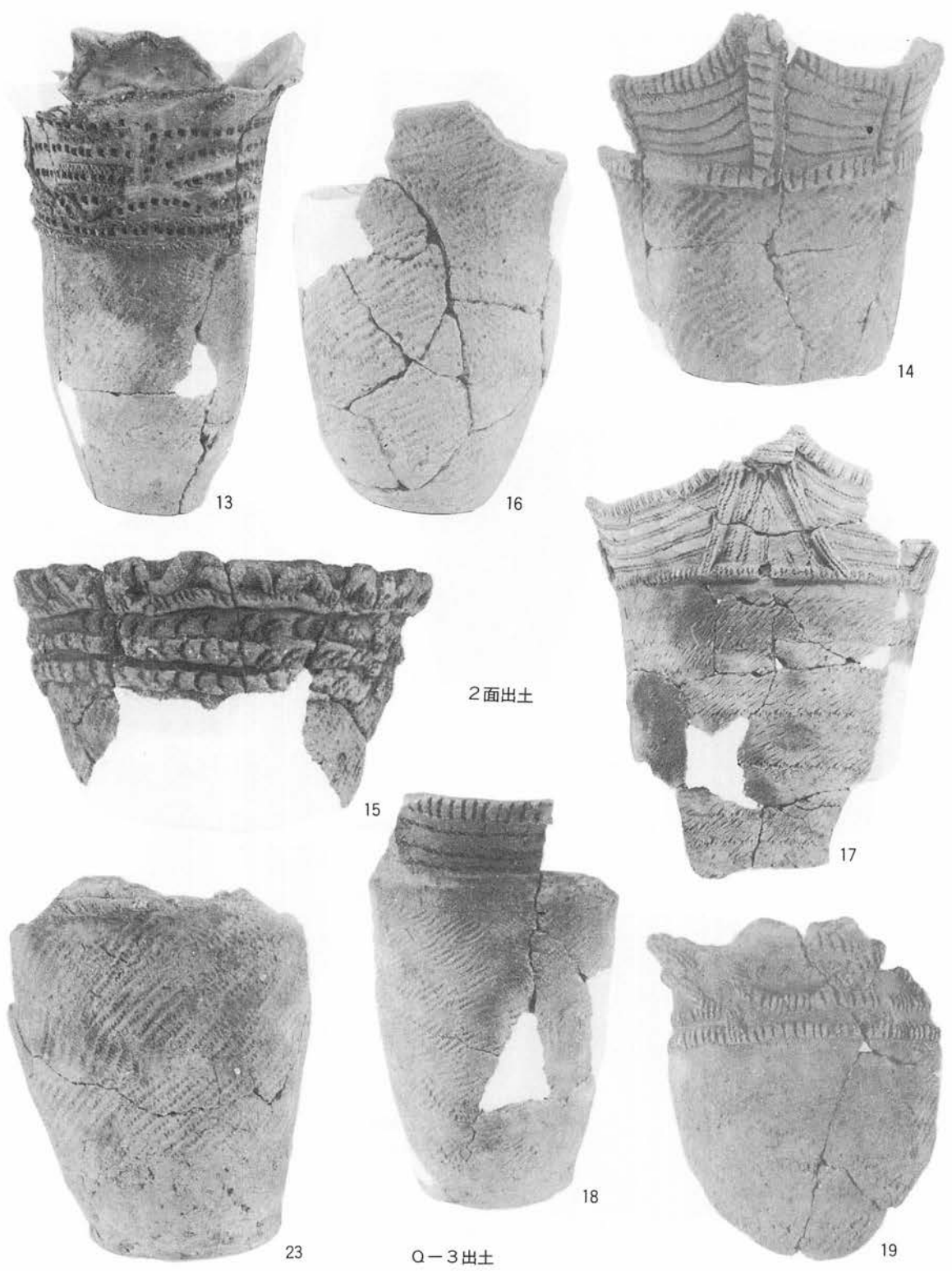
9~11 1面出土  
12 2面出土

Q-3出土



12





P L - 92 I - 19住居跡内遺物包含層 (土器 - 3)



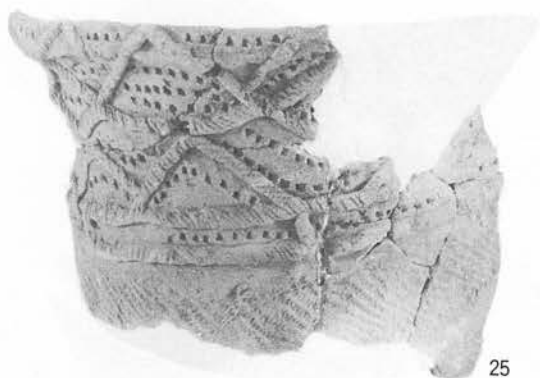
20



21



22



25



24

20~22 2面出土  
24~27・30 2面下位出土

Q-3出土



27



30



26





31



28



29



32



33



34



36



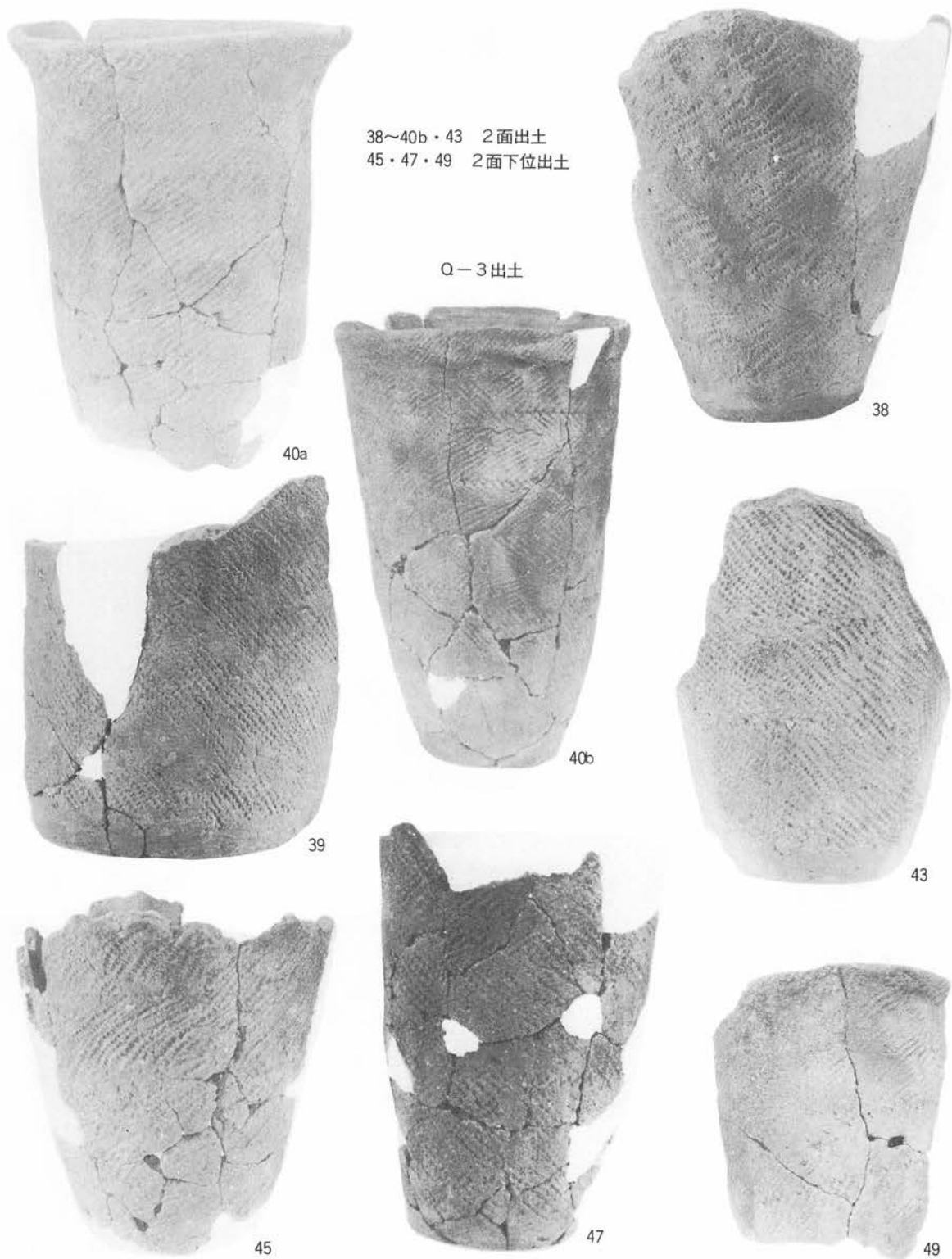
37



35

28・29・31 2面下位出土  
32～37 1面出土

Q-3出土



38~40b・43 2面出土  
 45・47・49 2面下位出土

Q-3出土

40a

38

39

40b

43

45

47

49





46



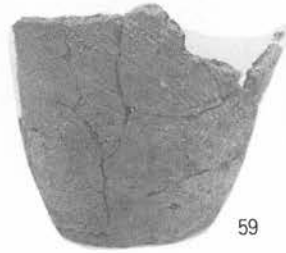
51



57



50



59



55

46・50・51 2面下位出土

Q-3出土

53・55・57・59・60 1面出土

Q-4出土



53



60



58



52

52・54・58 1面出土  
61~64 2面出土

Q-4出土



54



63



61



62



64

P L-97 I-19住居跡内遺物包含層 (土器-8)





65

2面出土  
Q-5出土



66



75



67

66~68・71・74・75 1面出土

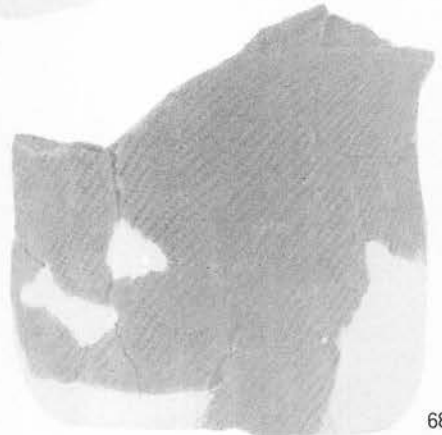
Q-6出土



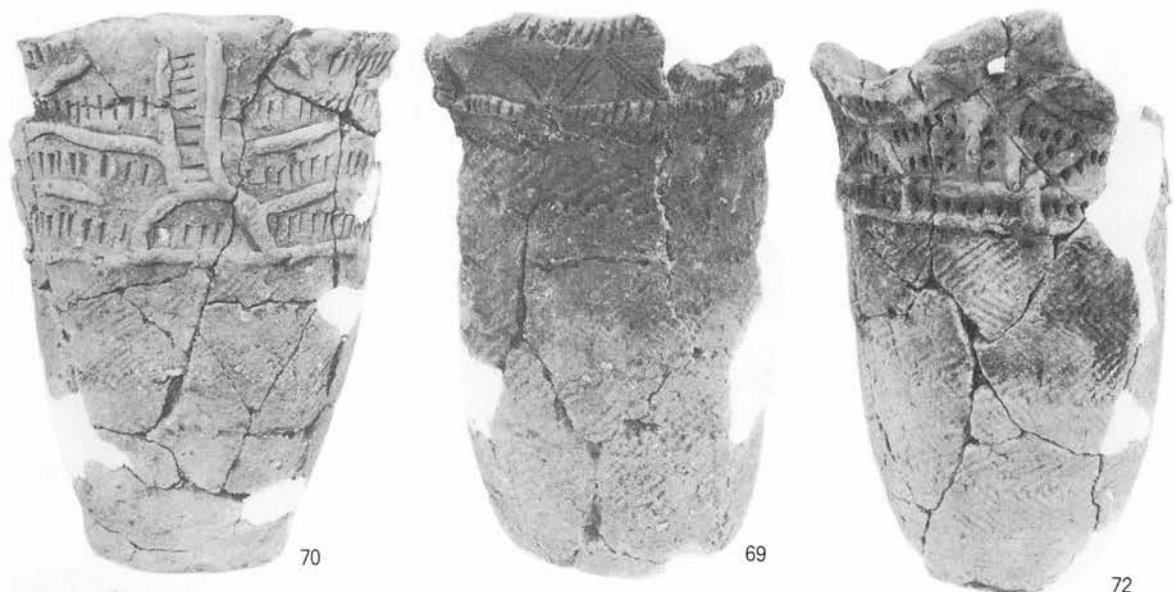
71



74



68



70

69

72

Q-6出土

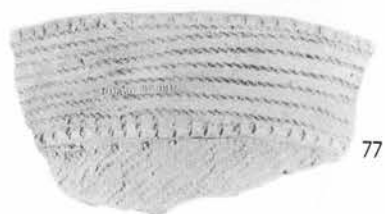
69・70・72 1面出土  
73 3面出土



73



76



77



82

76~78・81・82  
1面出土

Q-7出土



81



78





79



83



80



87



88



85



86



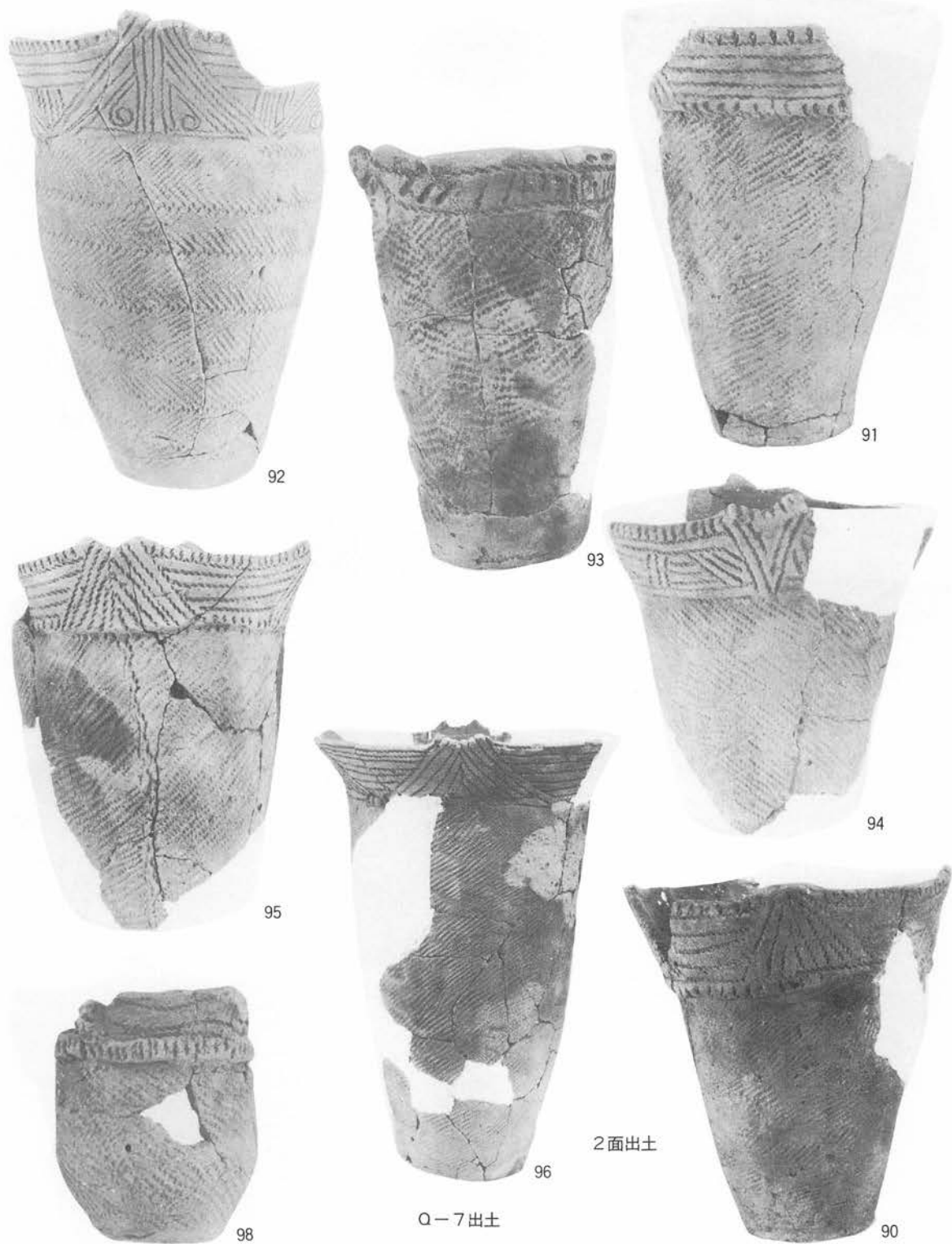
84

1面出土

Q-7出土



108



P L - 101 I - 19住居跡内遺物包含層 (土器-12)





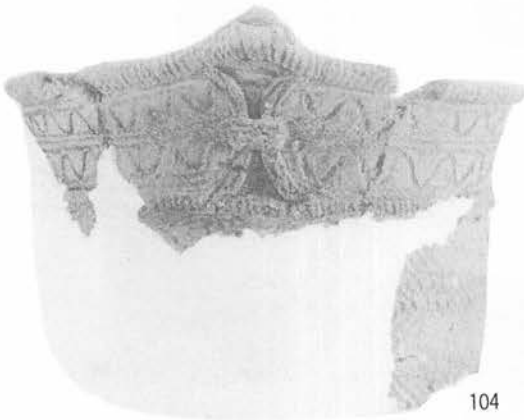
97



99



100



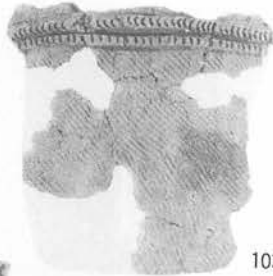
104



101



102



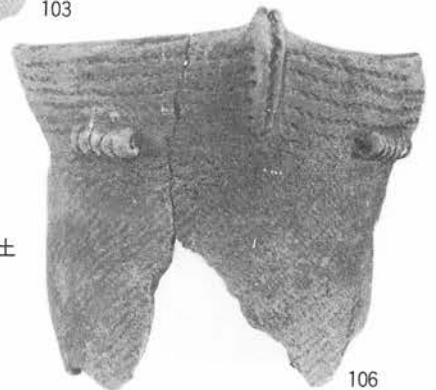
103



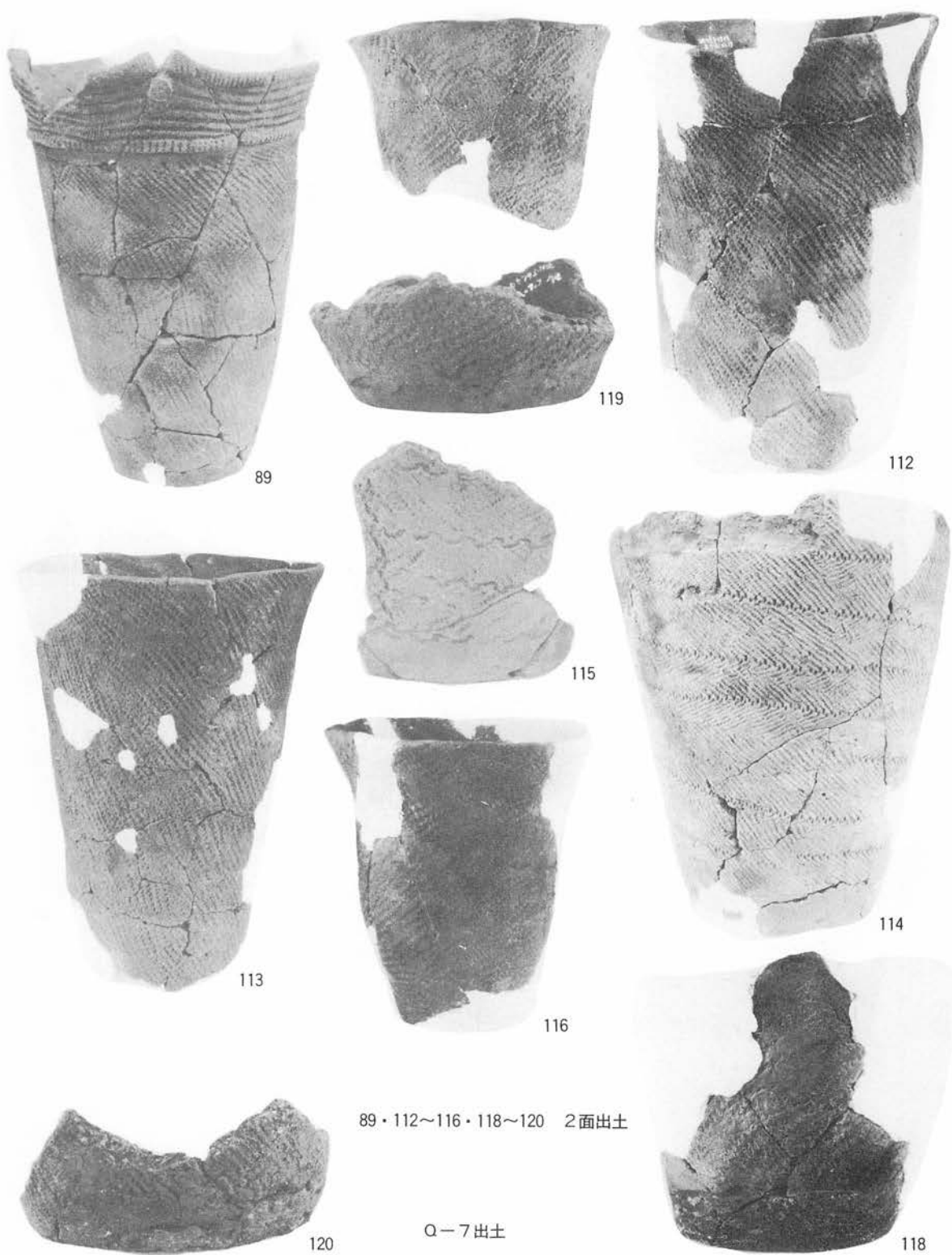
105

97・99~105 2面出土  
106 3面出土

Q-7出土



106



89・112~116・118~120 2面出土

Q-7出土





121



117



122

121・122・117 2面出土  
Q-7出土



123

123・124 1面出土  
Q-8出土



124



126

1面出土  
Q-9出土



127



128

127・128 1面出土  
Q-10出土



129



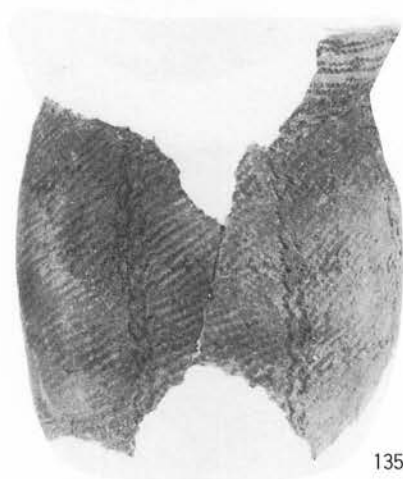
130

129・130 2面出土  
Q-10出土



132

1面出土  
Q-11出土



135



137



136



133



134



141

133~137・139・141 4面(全区一括)出土



139





140



142



138



149



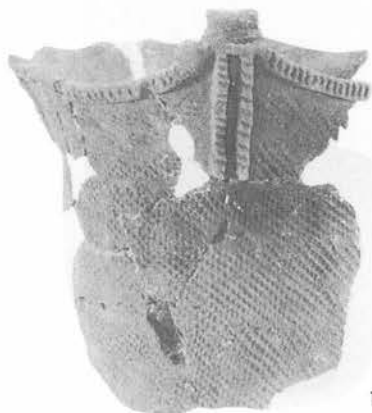
143



144



146



147

4面(全区一括)出土



150



148



145



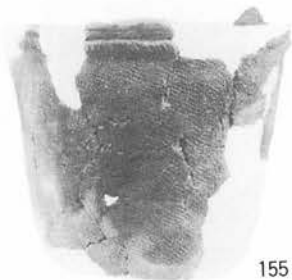
151



152



154



155



153

4面(全区一括)出土





156



157



160



163



161



159



164



158



162

4面 (全区一括) 出土



166

4面 (全区一括) 出土



167



169



170



172



174



173



171



168



4面(全区一括)出土



175



179



176



177



180



178



182



181



184



4面 (全区一括) 出土



185



183



186



187



190



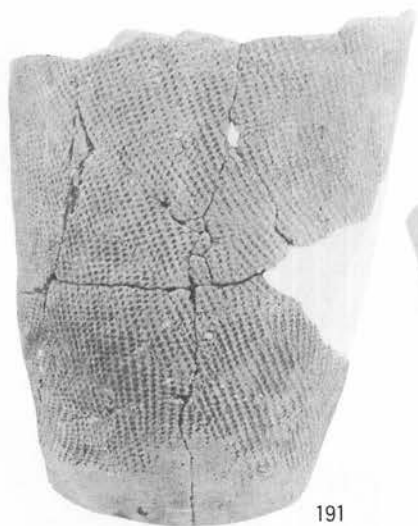
194



188



4面 (全区一括) 出土



191



193



192



196

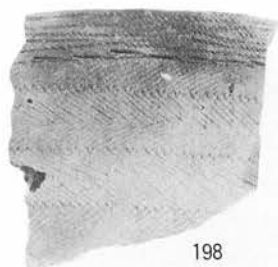


195



197

ベルト内出土



198



201



204



200



199

ベルト内出土



203



205



206



208



211



213



209



214



215





218



217



219



216



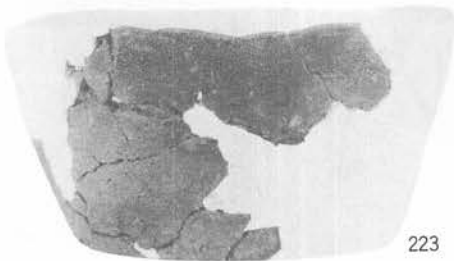
220



222

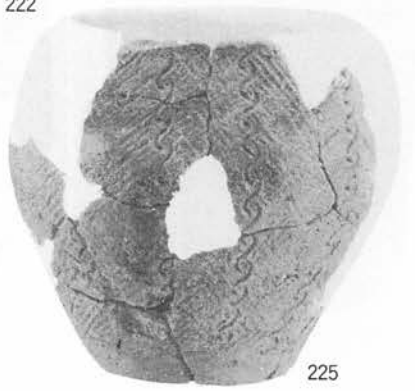


221



223

ベルト内出土



225

ベルト内出土



226



227



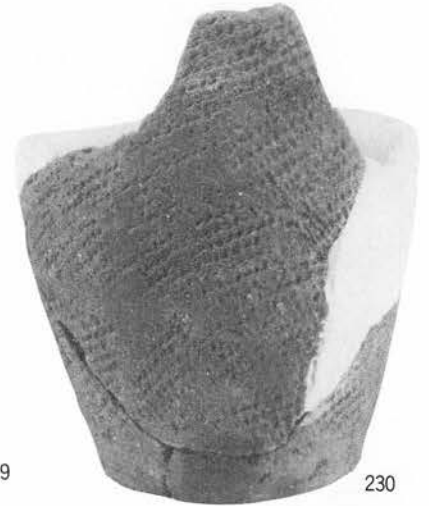
228



231



229



230



234



236



237



ベルト内出土



232



235



238



242



247



240



241



239



243



246

埋土(一括)出土

埋土(一括)出土



244



245



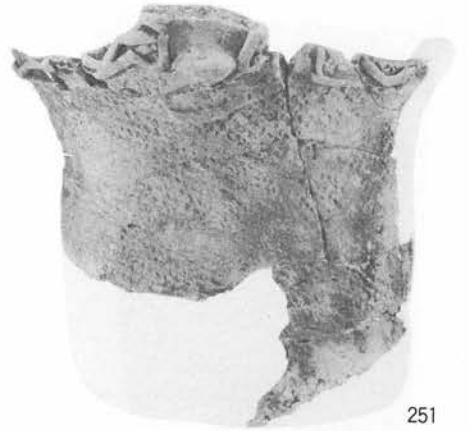
248



249



252



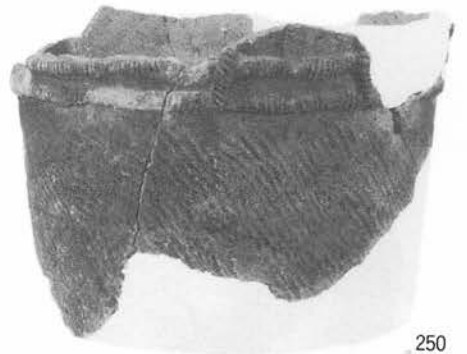
251



254



256



250



埋土(一括)出土



255



260



258



259



267



261



265



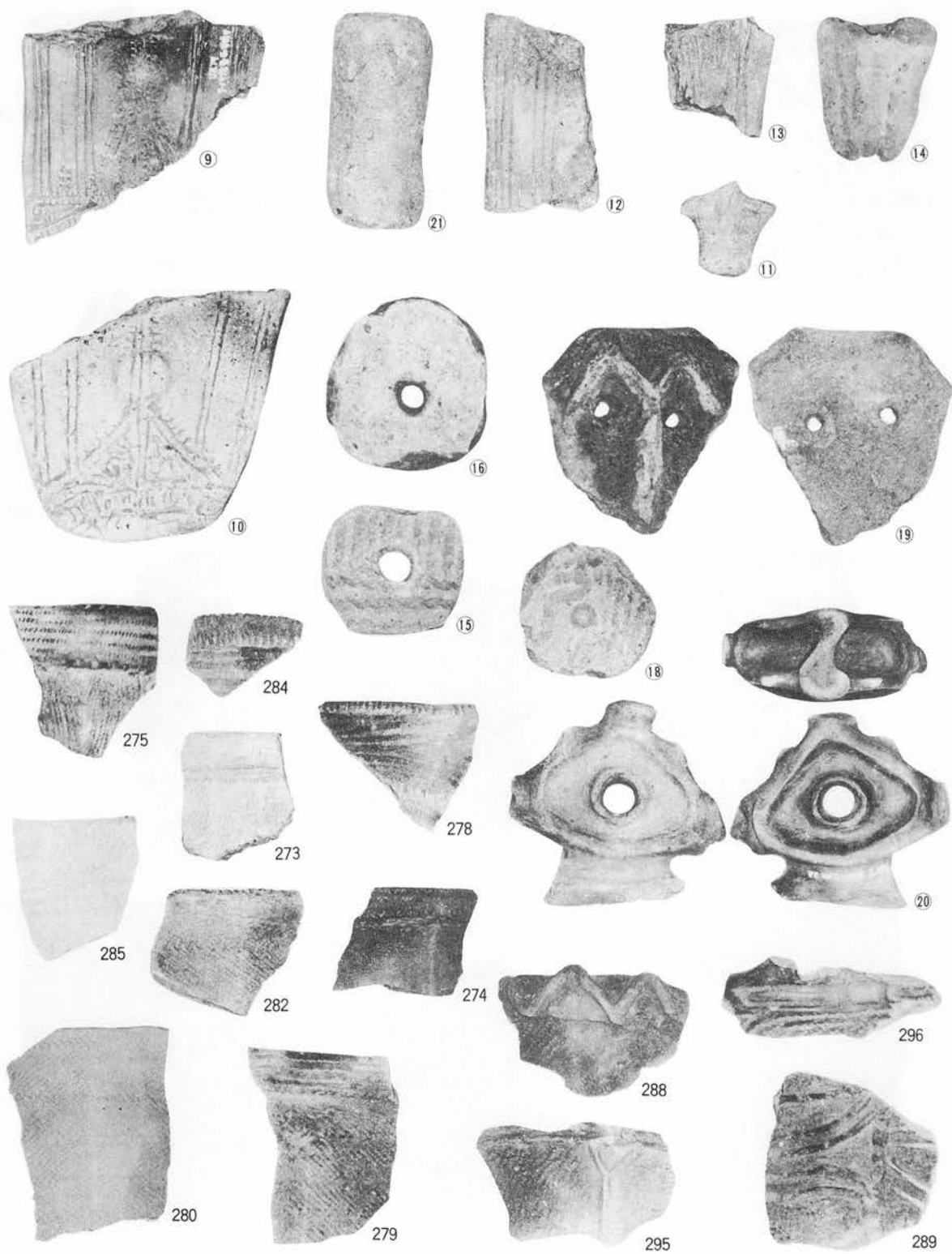
264



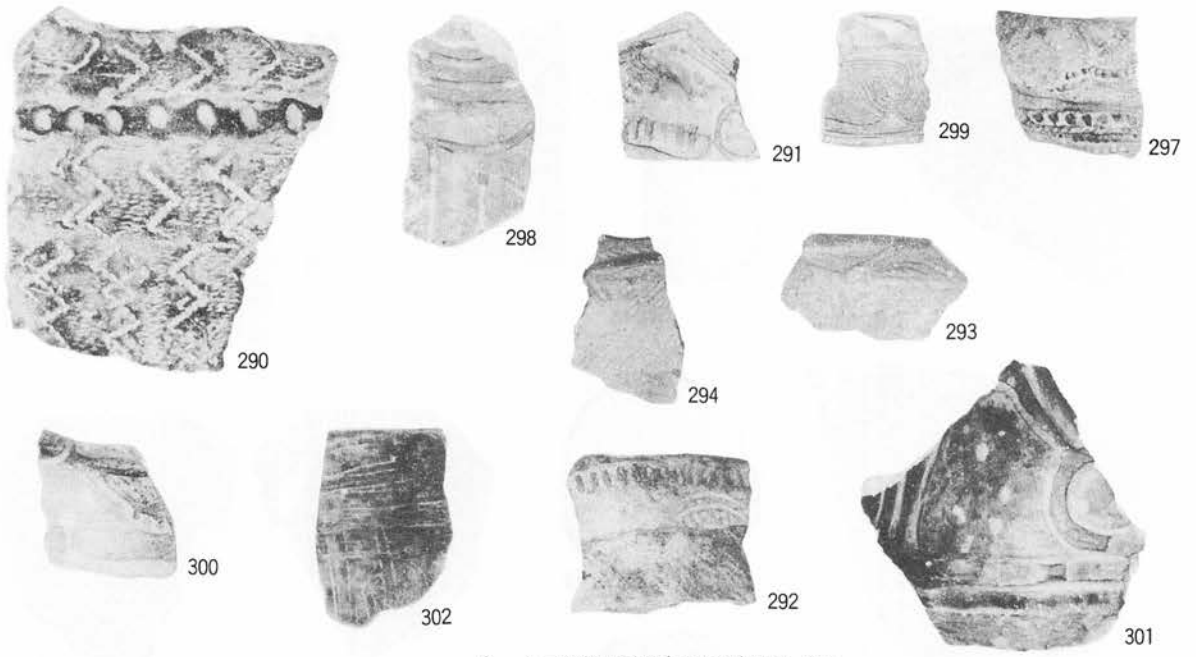
268



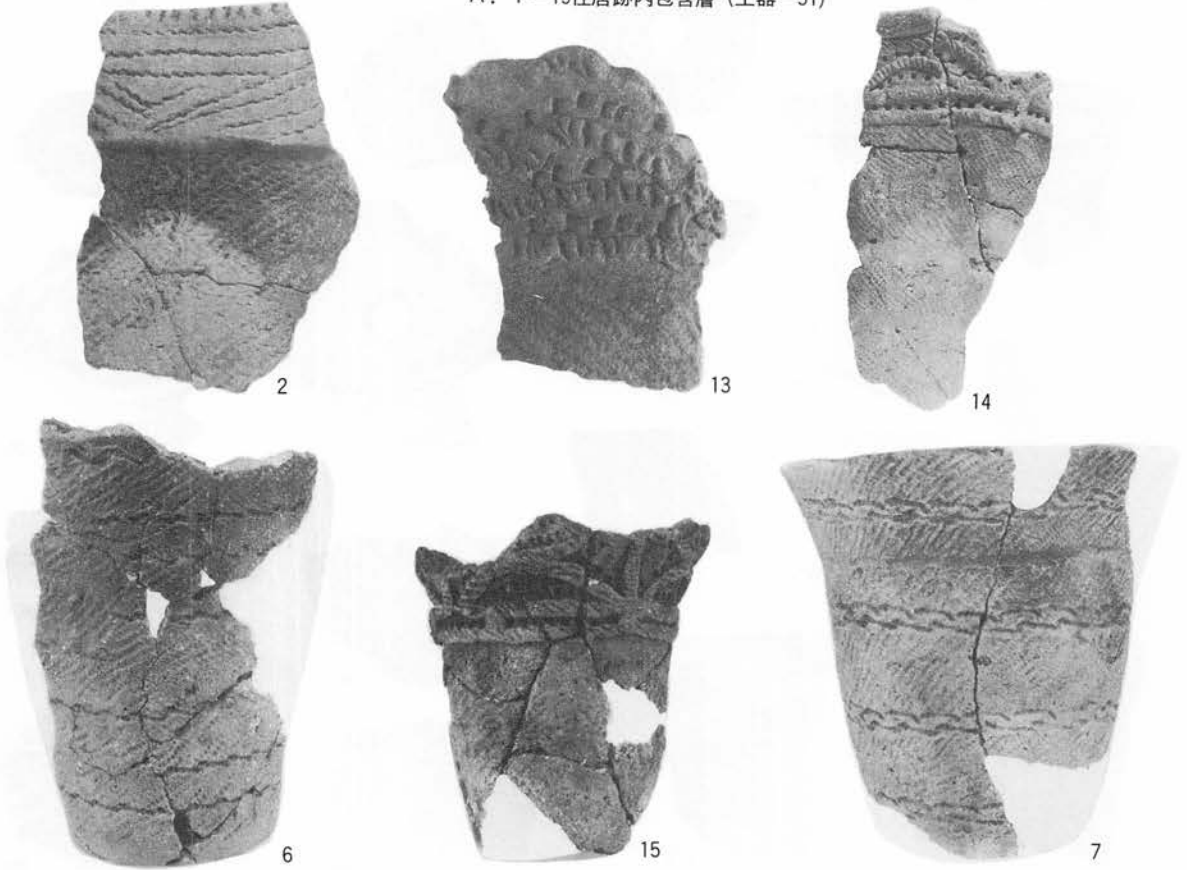
269



P L - 119 I - 19住居跡内遺物包含層 (土器-30)



A. 1-19住居跡内包含層 (土器-31)



B. 粗掘

P L-120 土器





8



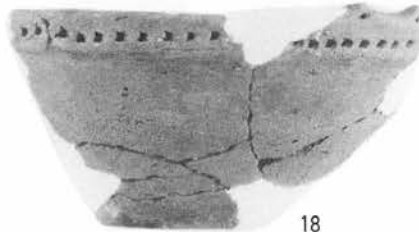
19



4



38



18



12



825



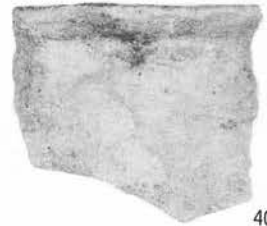
23



25



24

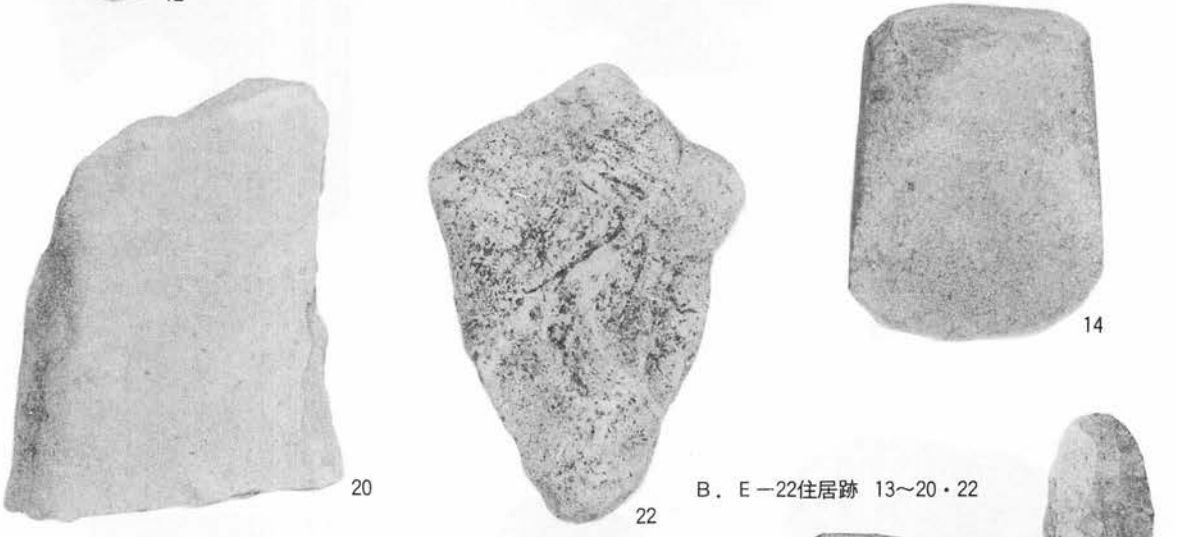
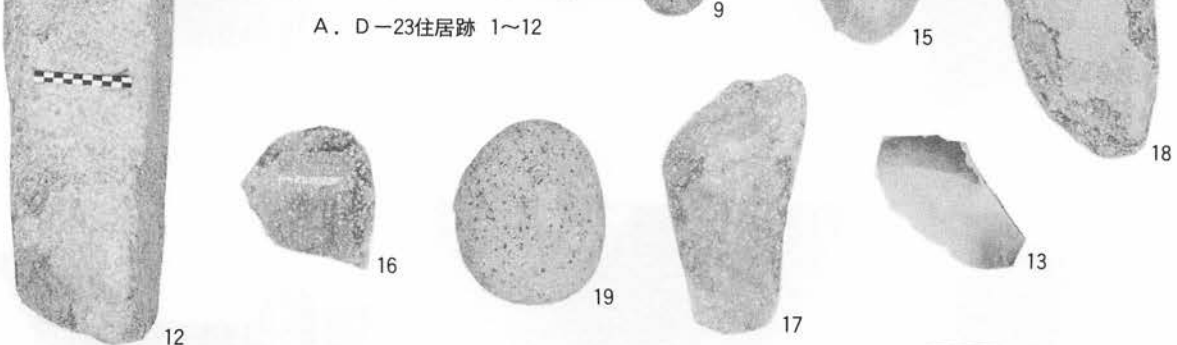


40

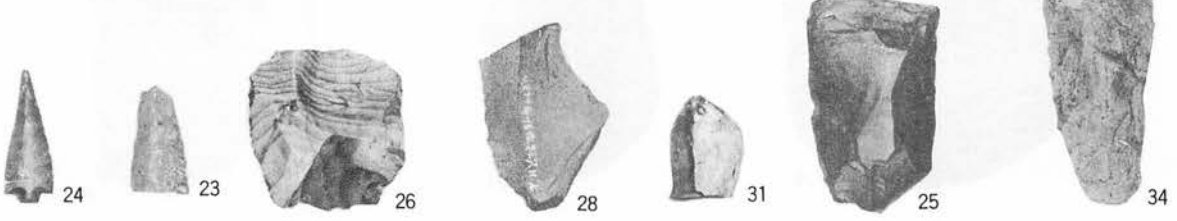
P L-121 粗掘・表採 (土器・その他)



A. D-23住居跡 1~12



B. E-22住居跡 13~20・22



C. G-16住居跡 (1) 23~26・28・34・31

P L-122 石器 (住居跡)



PL-123 石器 (住居跡)





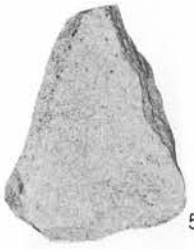
45



55



56



58



60

B. H-41住居跡

A. G-16住居跡 (3) 45・55・56・58



61



62



63



64



65



66



67



68



69



70



71



72



73



74



75



76



77



78



79



80



81



82



83



85



91



84



87



88



89



90



86



93



92



95



97



94



98



96



101



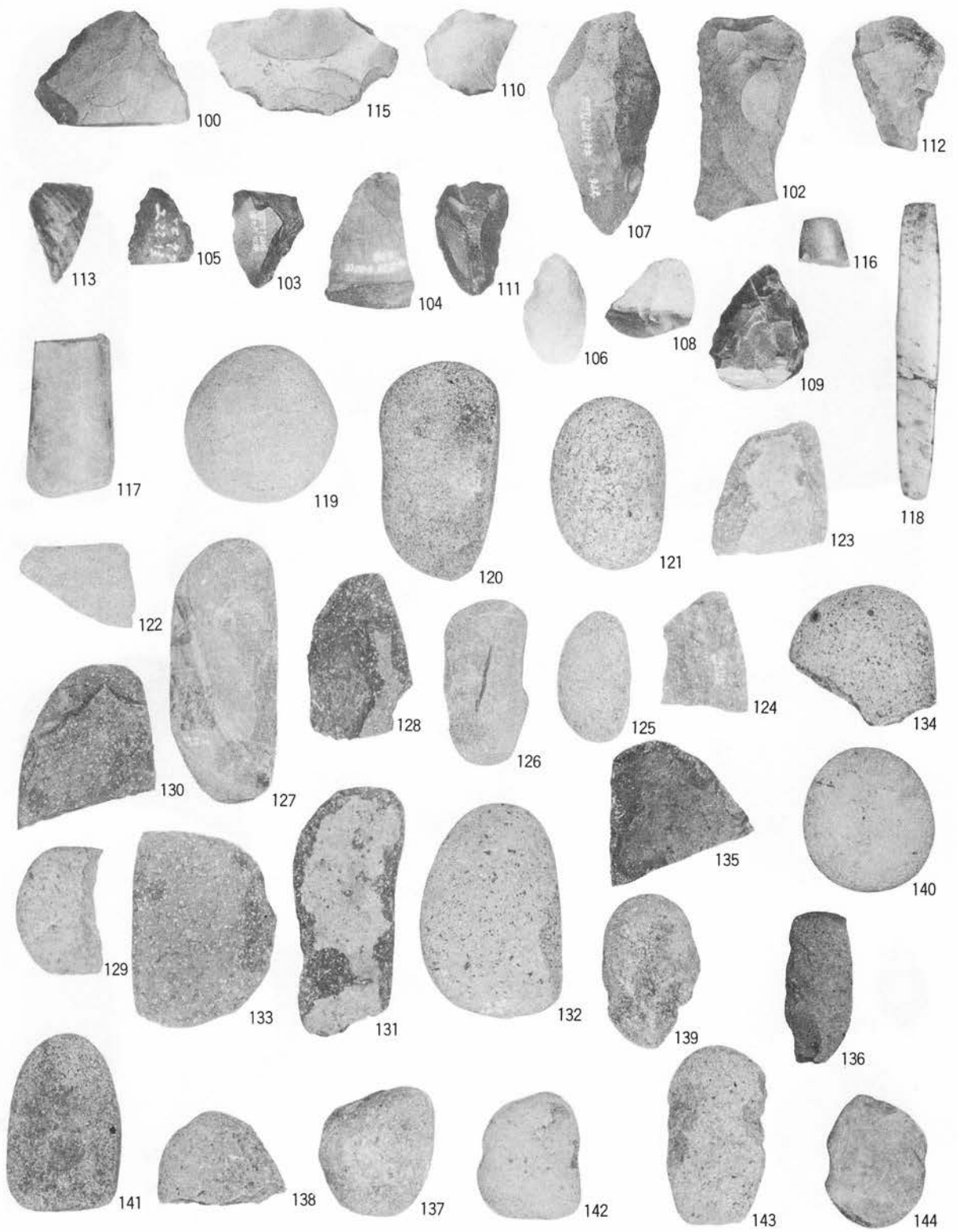
99



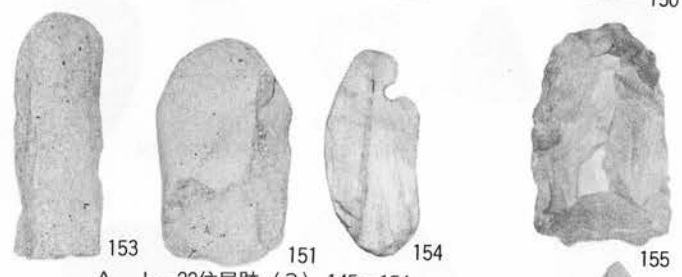
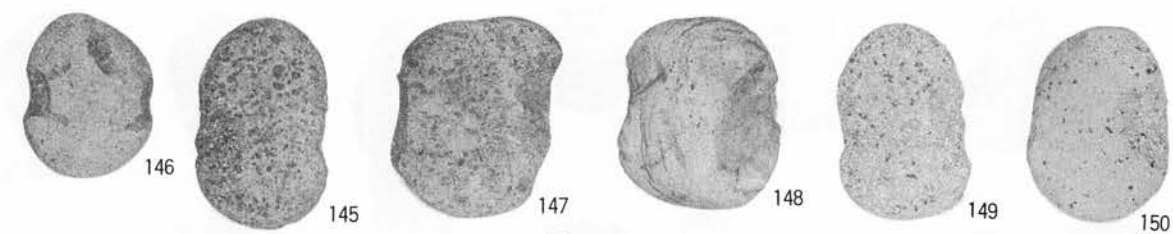
114

C. I-22住居跡 (1) 61~99・101・114

PL-124 石器 (住居跡)



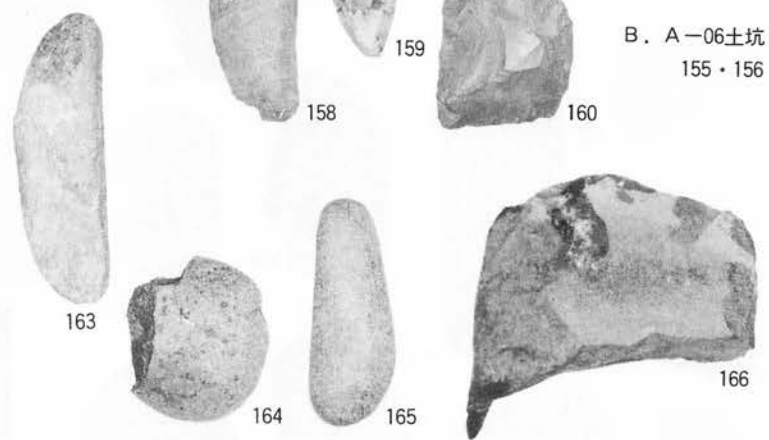
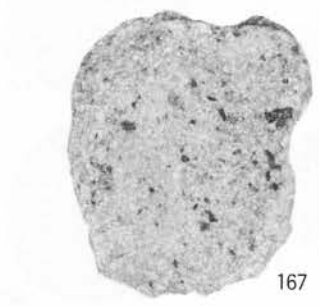
I-22住居跡(2)  
 P L-125 石器(住居跡)



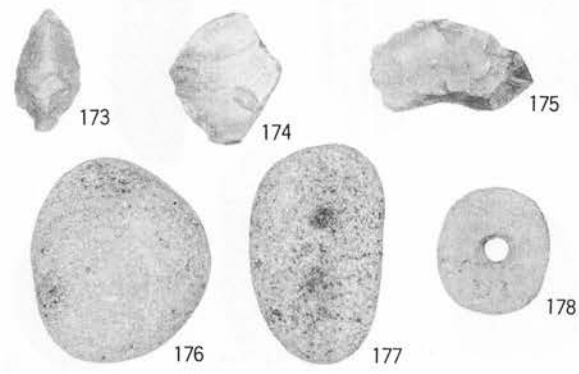
A. I-22住居跡 (3) 145~154



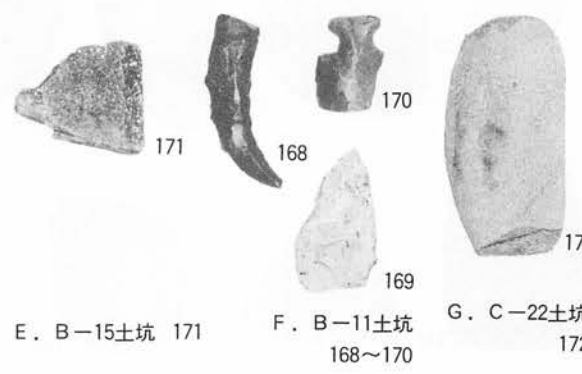
B. A-06土坑 155・156



C. B-04土坑 157~167



D. D-23土坑 173~178

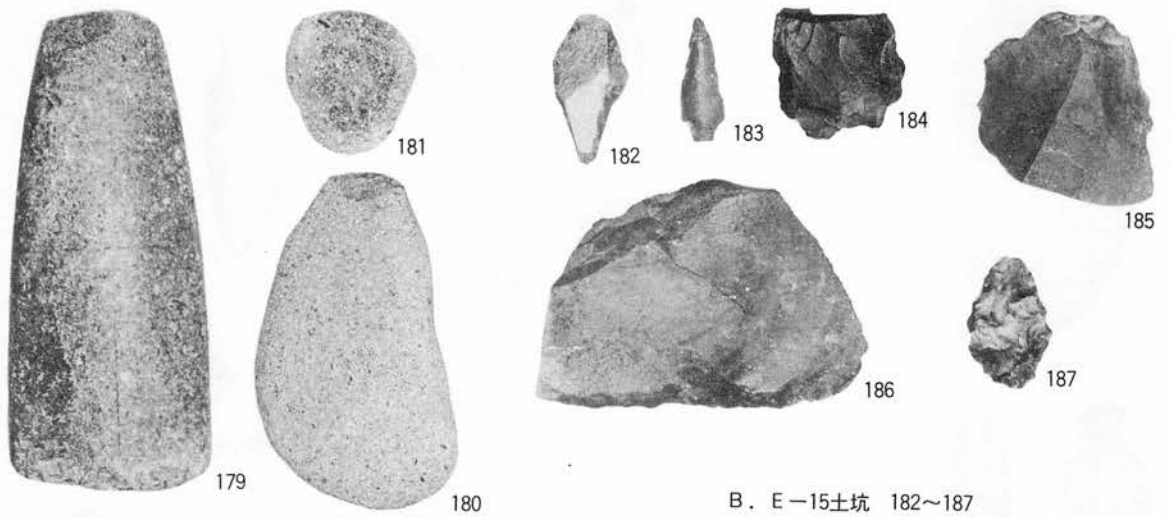


E. B-15土坑 171

F. B-11土坑 168~170

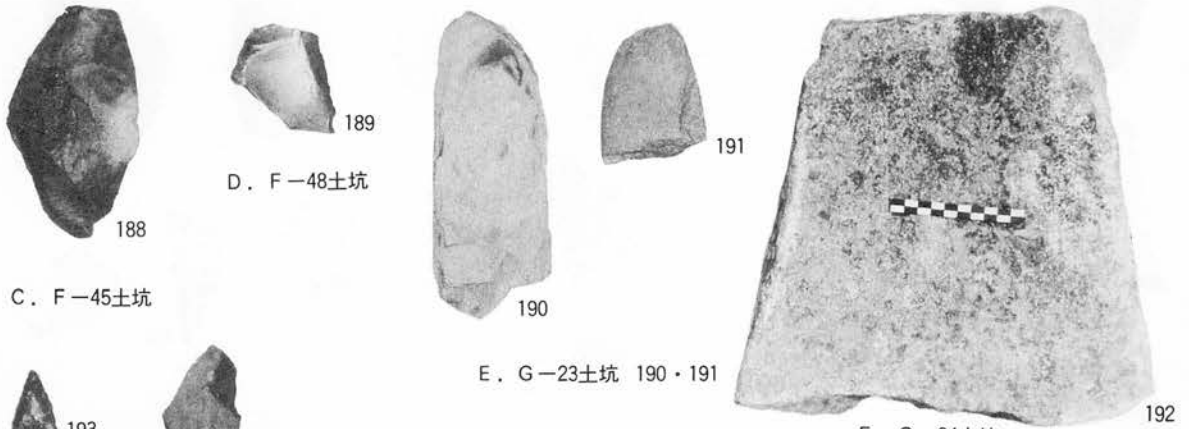
G. C-22土坑 172





A. D-23土坑 179~181

B. E-15土坑 182~187



C. F-45土坑

D. F-48土坑

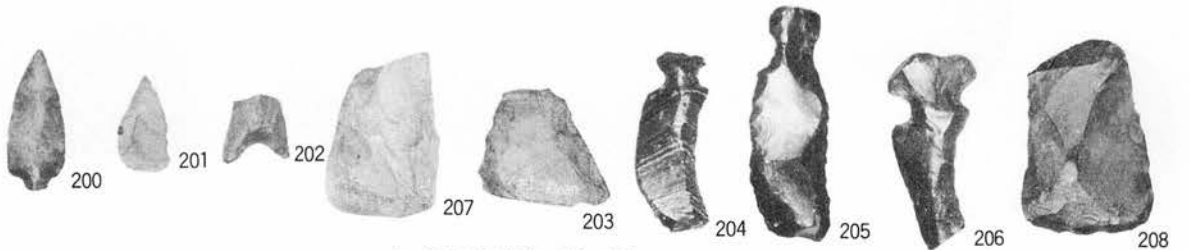
E. G-23土坑 190・191

F. G-24土坑



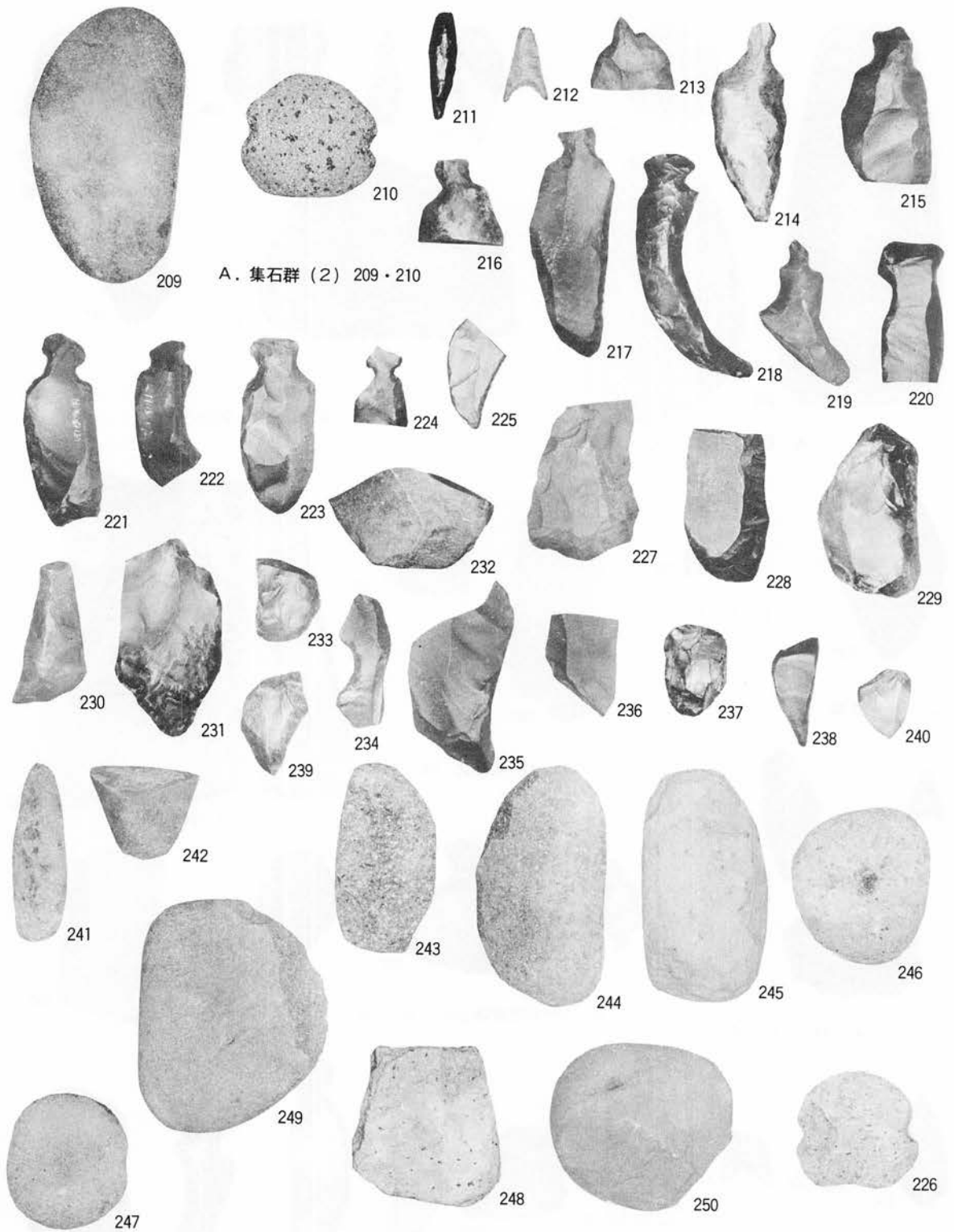
G. H-41土坑 193~195

H. I-19住居跡土坑 196~198



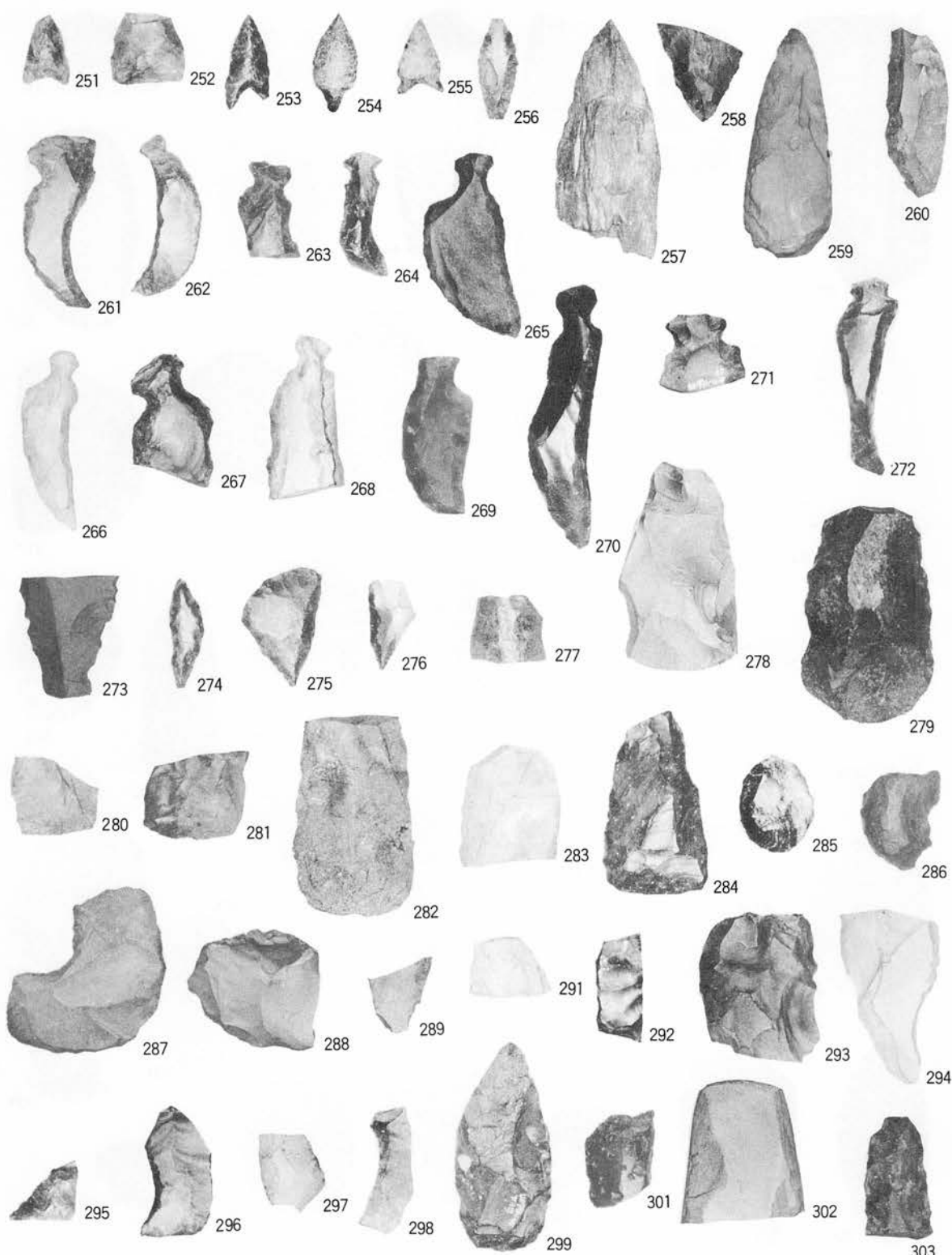
I. 集石群 (1) 200~208

P L-127 石器 (住居跡・土坑・集石群)



A. 集石群 (2) 209・210

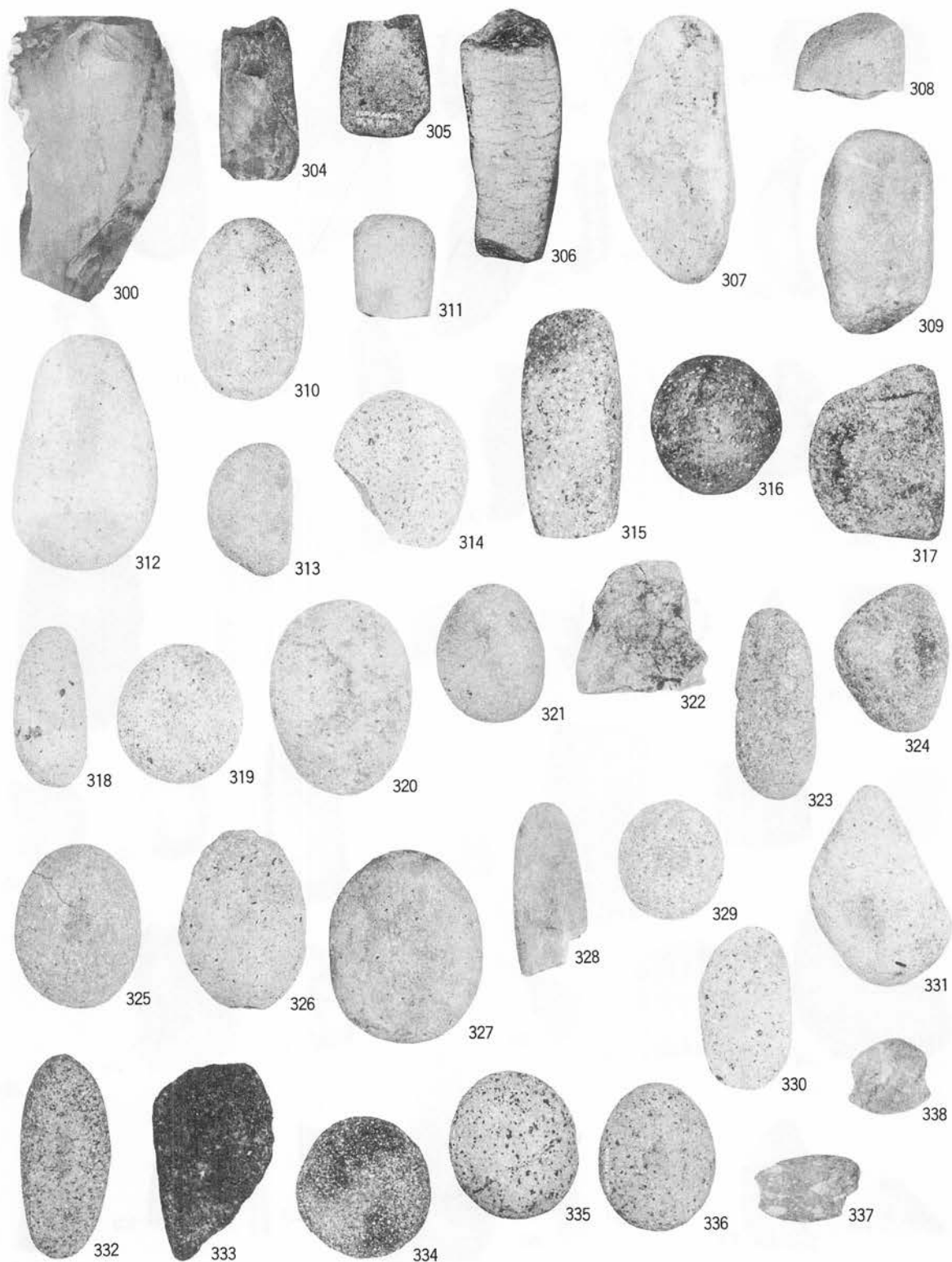
B. 北端部遺物包含層 (石器-1) 211~250



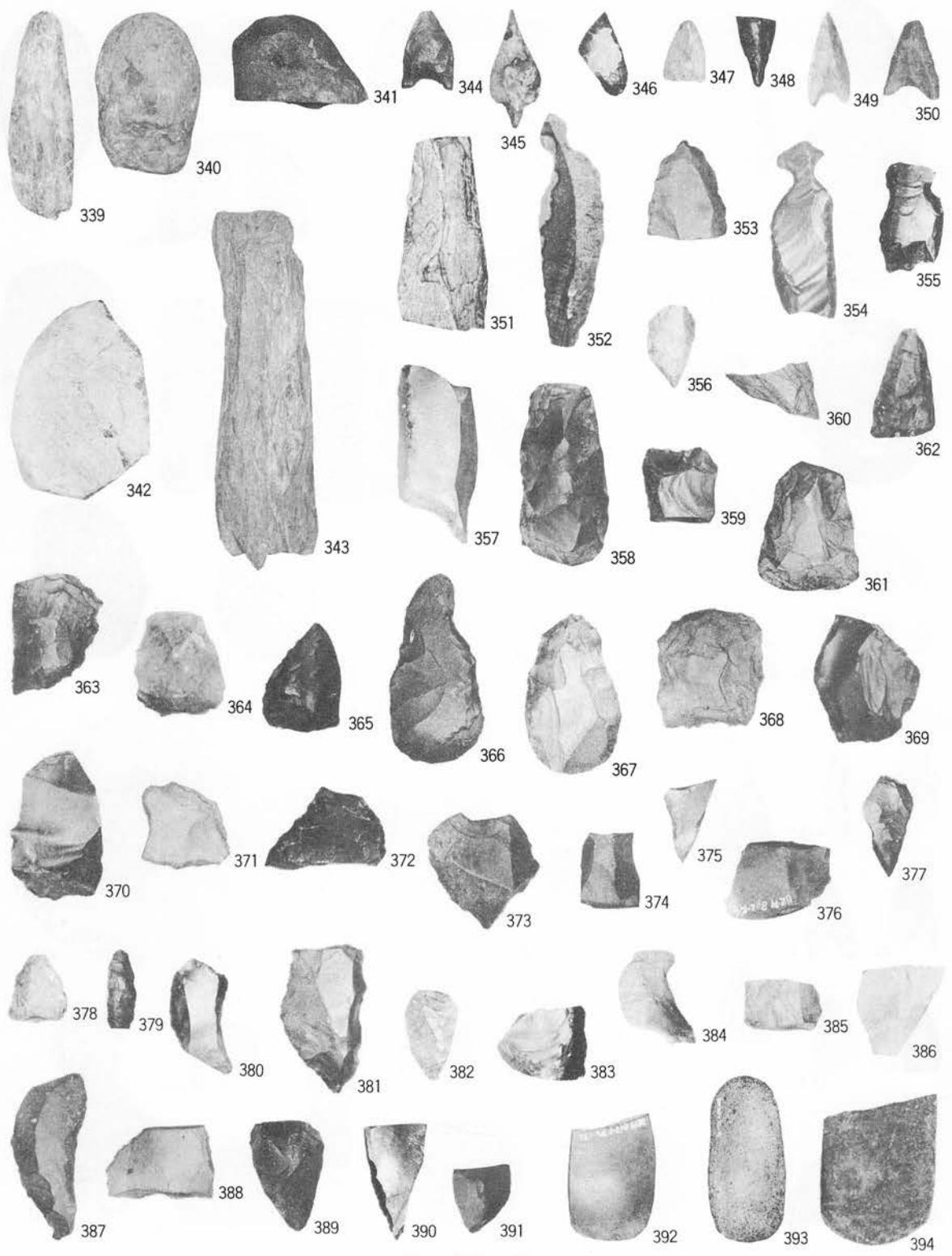
北端部遺物包含層 (石器-2)

PL-129 石器 (包含層)



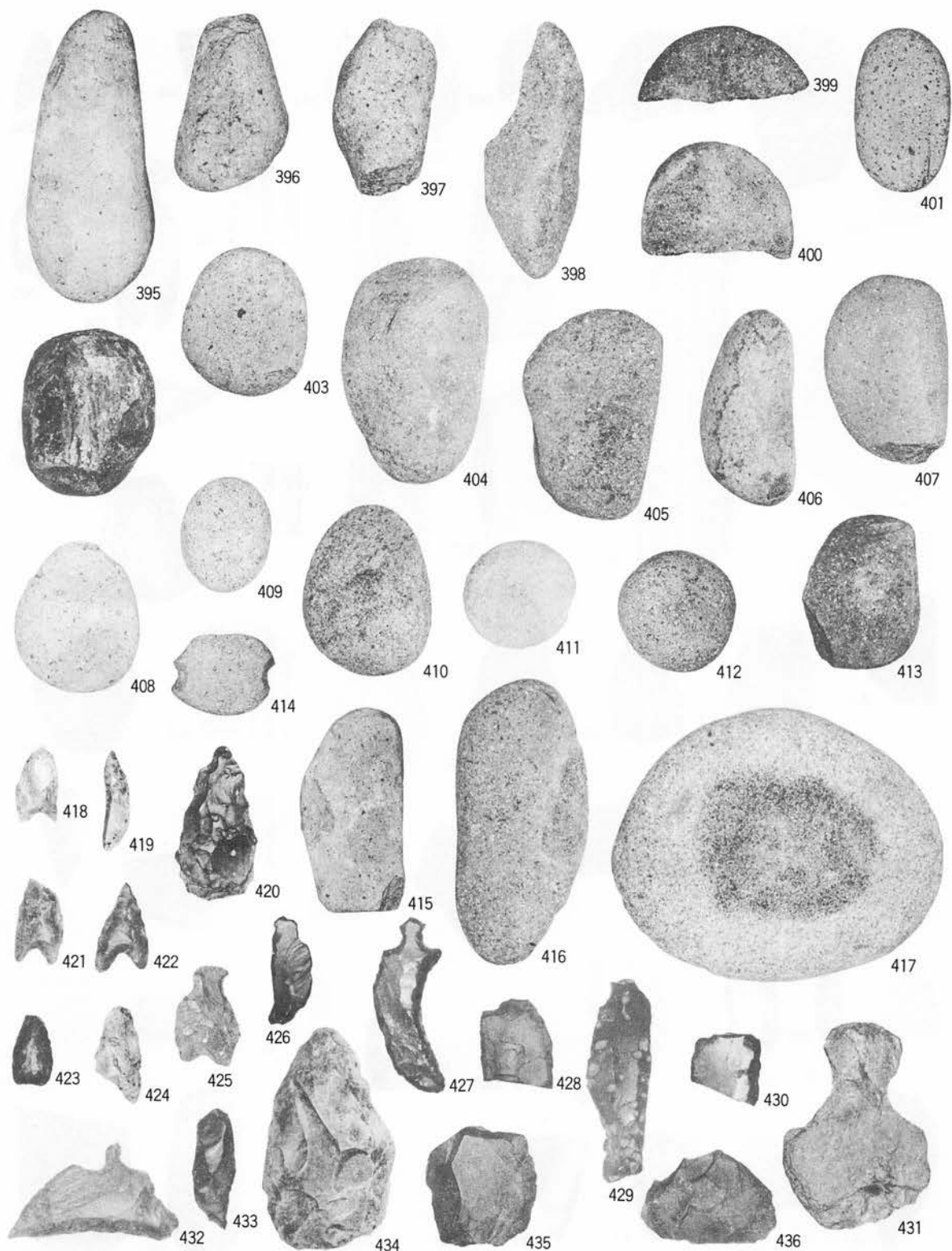


北端部遺物包含層 (石器-3)  
 PL-130 包含層



北端部遺物包含層 (石器-4)

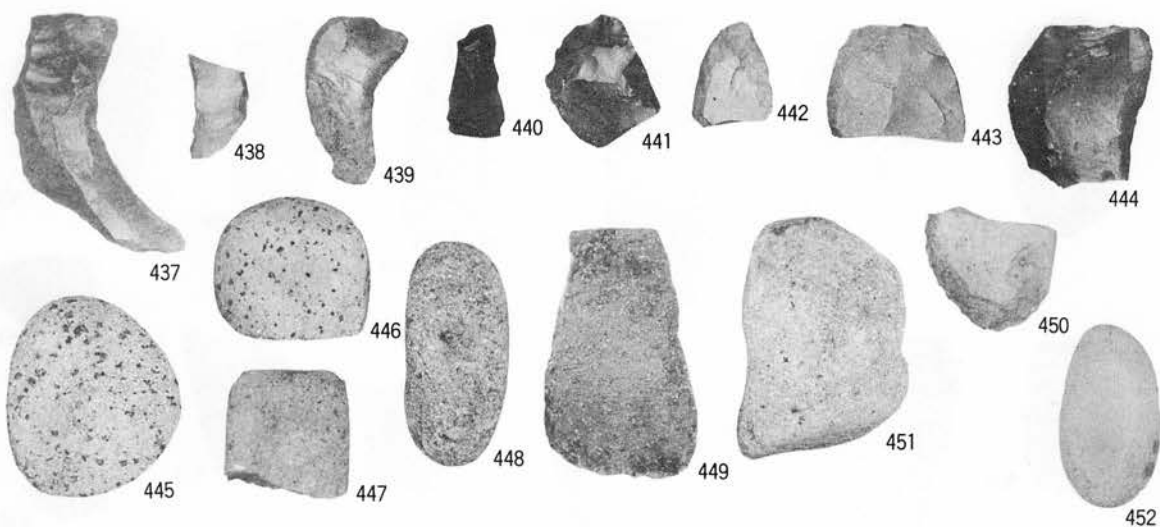
PL-131 包含層



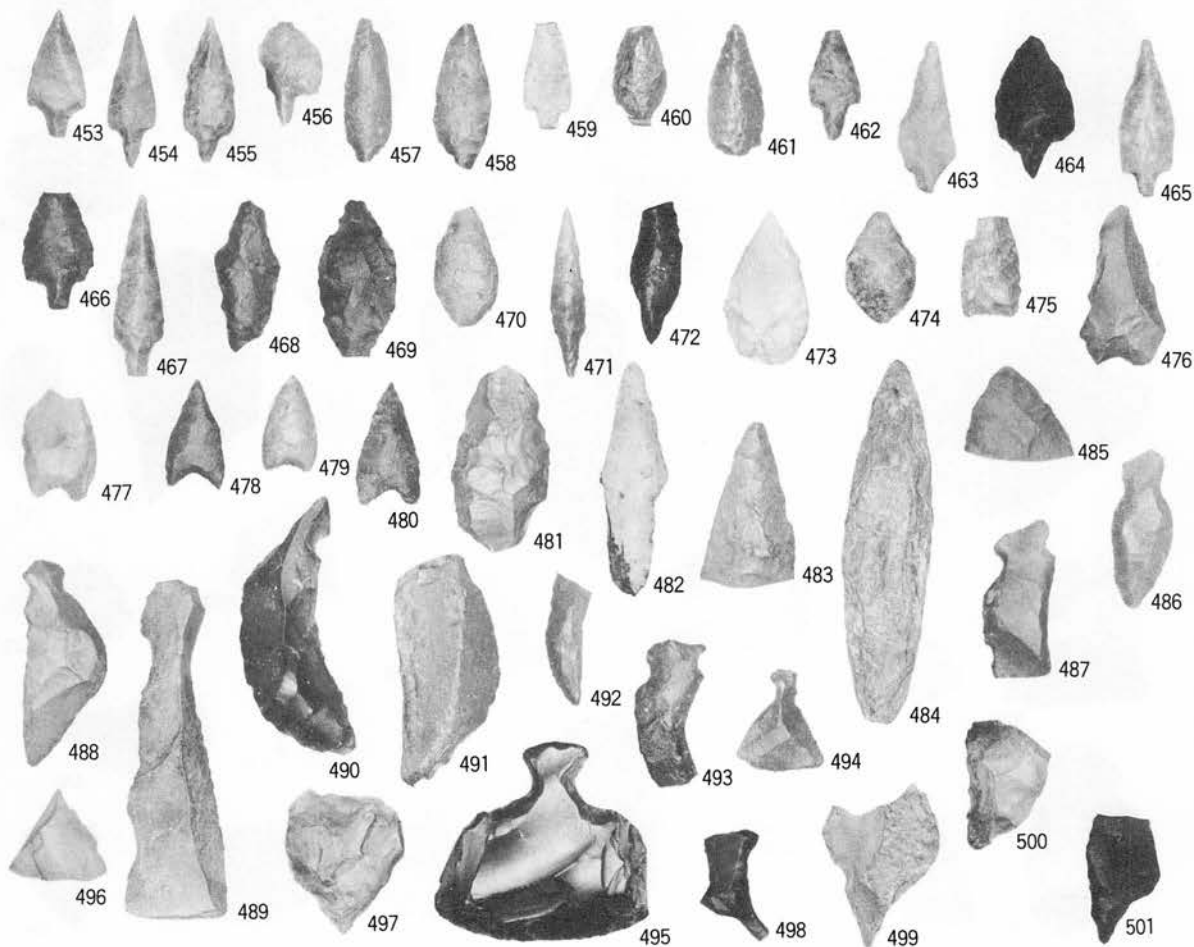
北端部遺物包含層 (石器-5)

P L - 132 包含層

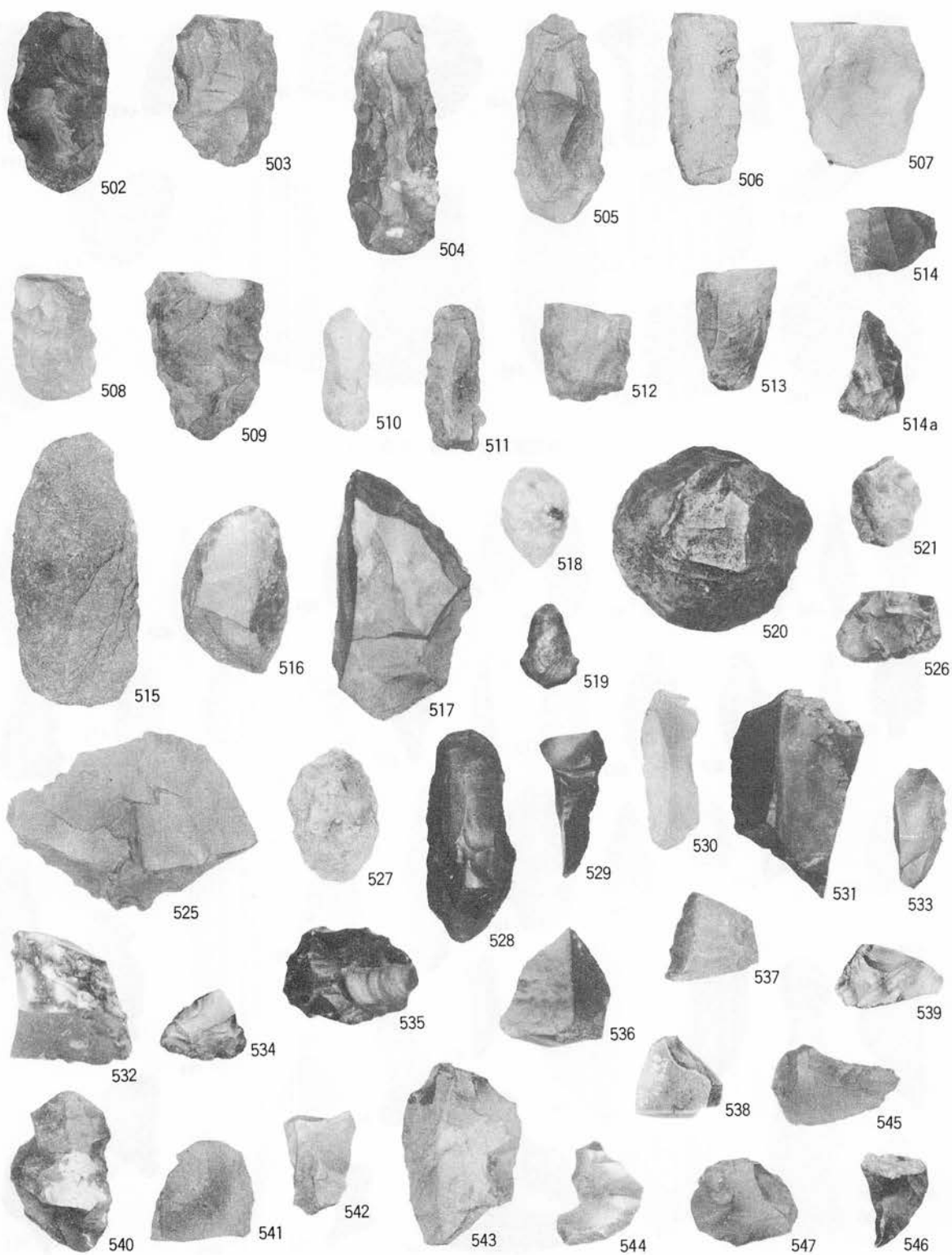




A. 北端部遺物包含層 (石器-6)

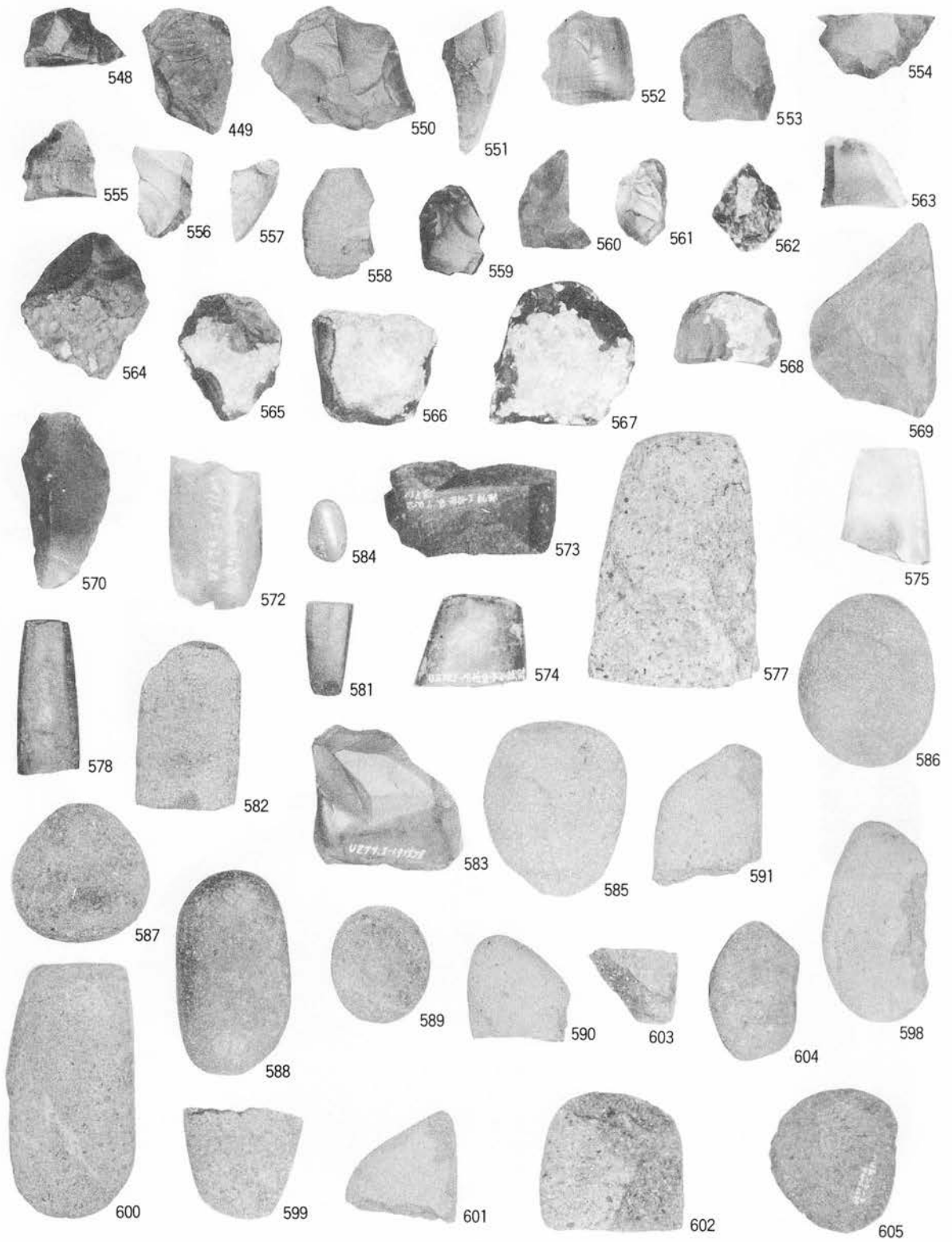


B. I-19住居跡 (1)  
P L-133 包含層



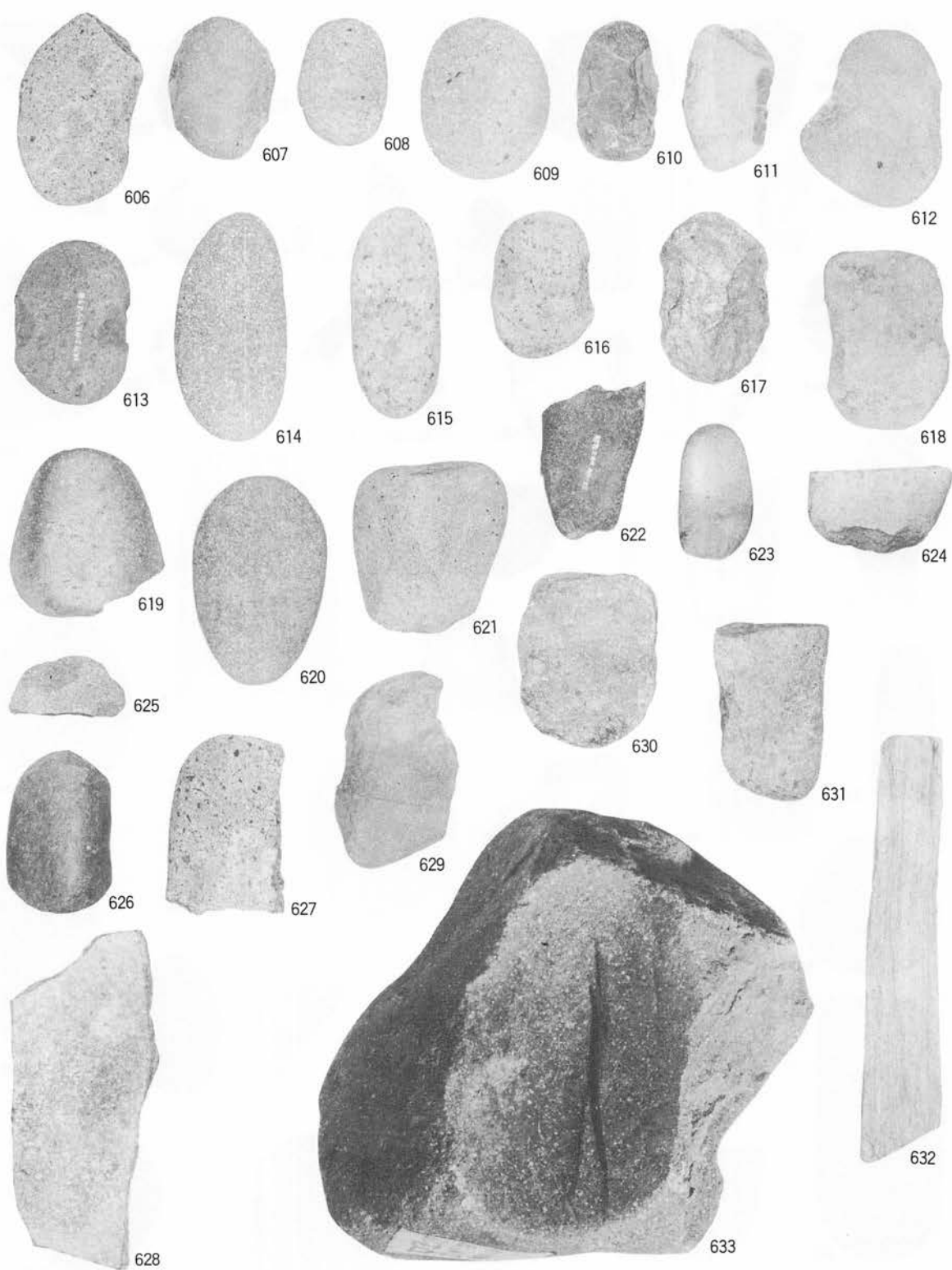
I-19住居跡(2)

PL-134 包含層



I-19住居跡(3)  
 P L-135 包含層





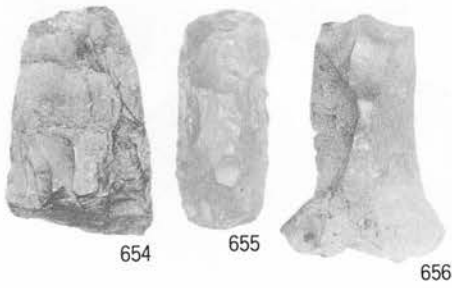
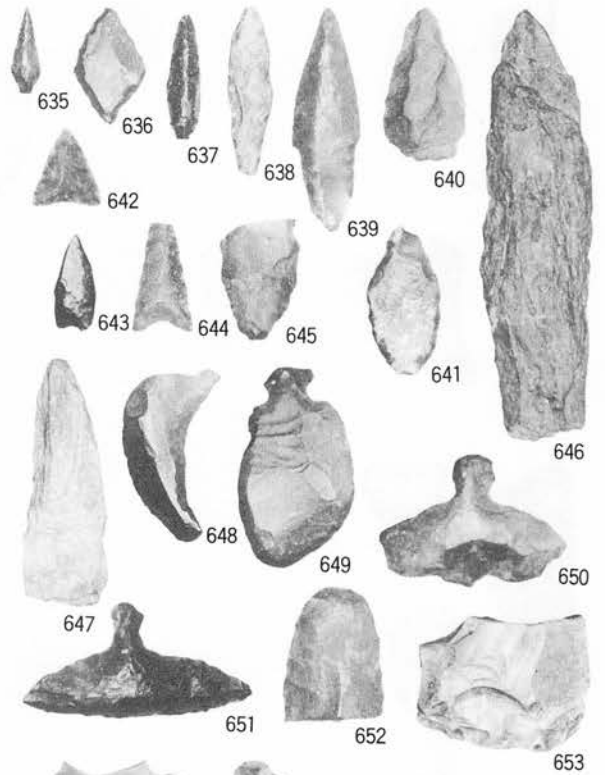
I-19住居跡(4)

PL-136 包含層



634

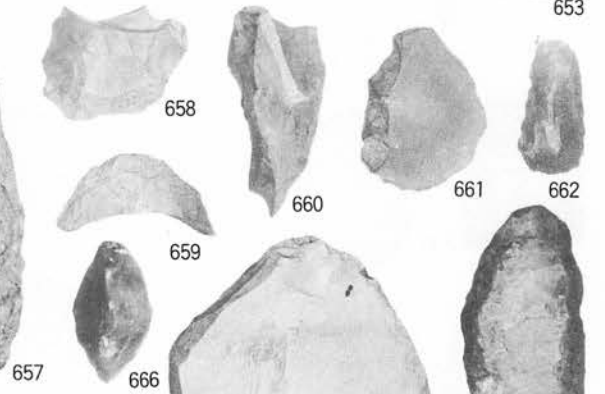
A. I-19住居跡 (5) 634



654

655

656



658

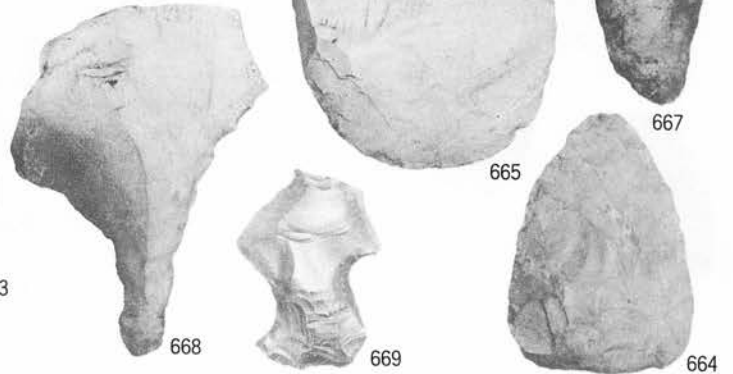
659

666



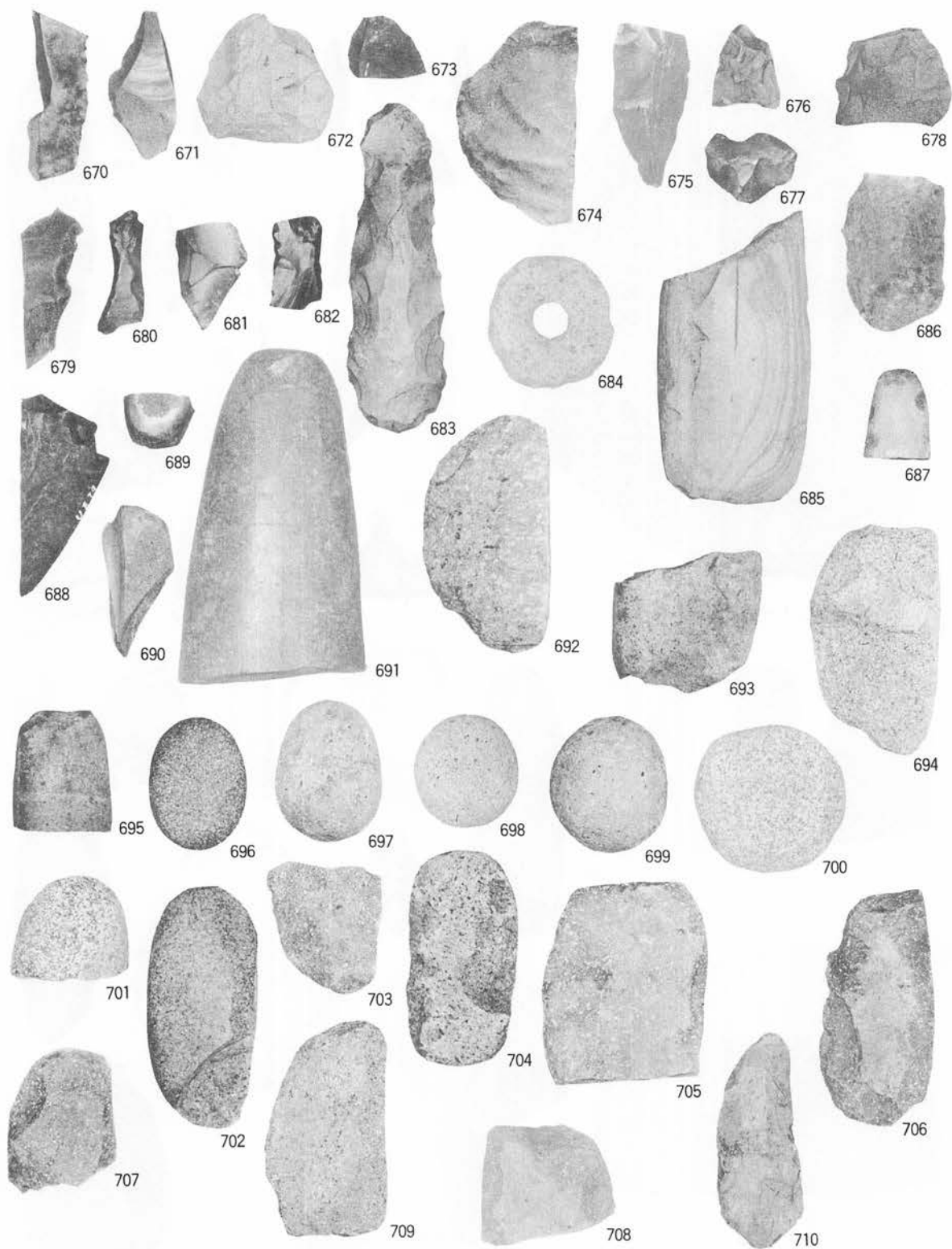
663

B. 粗掘 (1) 635~669



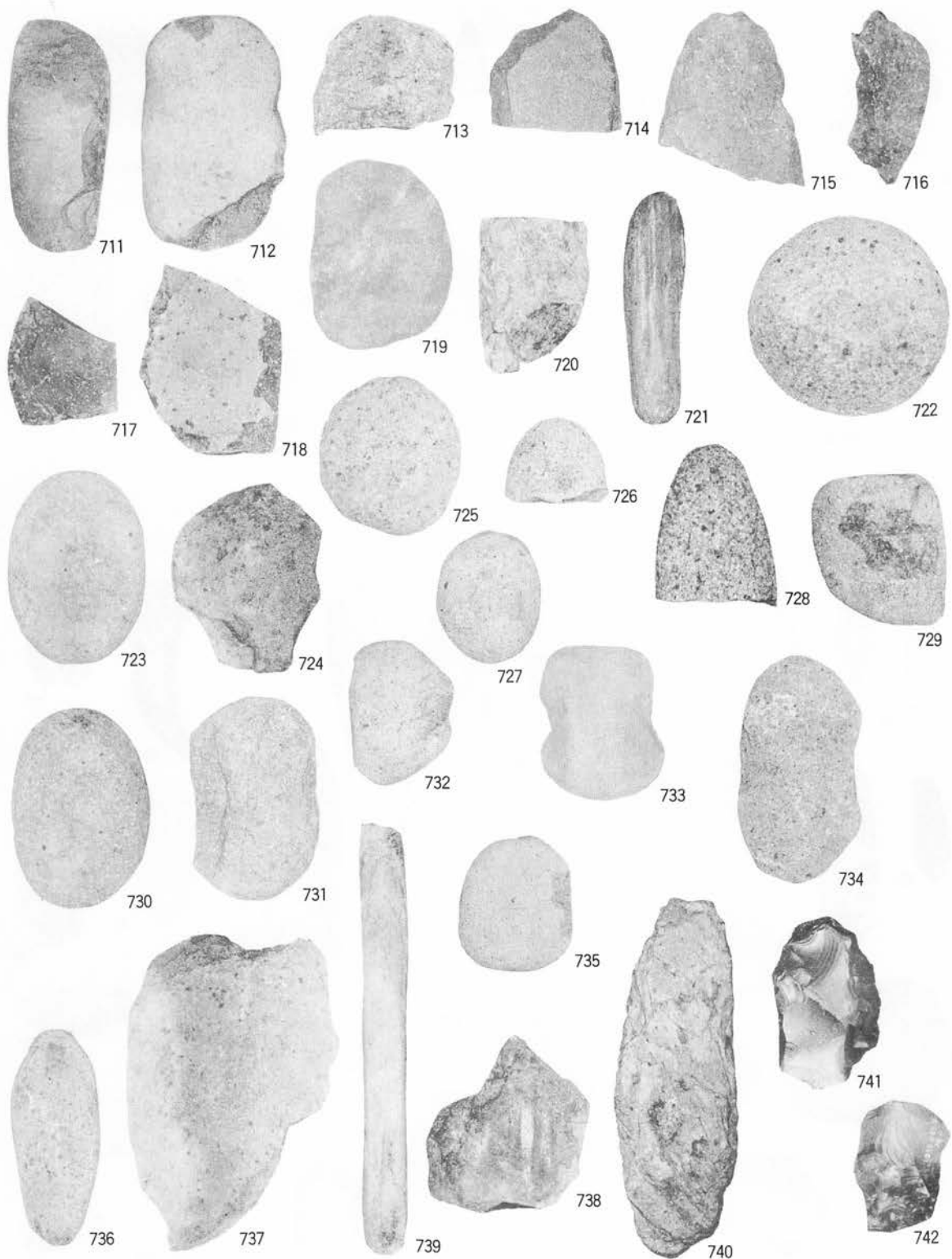
668

669



粗掘 (2)





A. 粗掘 (3) 711~739

B. B-09住居跡 740~742



743



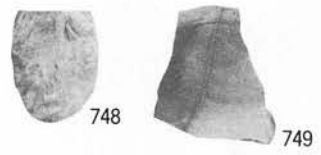
744

745



746

747



748

749

A. C-08土坑

B. A-15周溝744・745

C. B-05周溝746~749



757



756



750



751



752



753



755



754

E. I-19周溝

D. C-06周溝 750~756



758



759



760



761



762



763



764



765



766



767



768



769



770



771



773



772



774



775



776



777



779



778



780



781



782



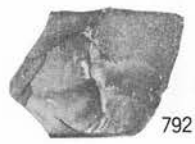
783



784



785



792



786



787



789



788



796



790

F. A-12溝跡 (1) 758~790・792・796



791



793



794



795



797



798



799



800



801



802



803



804



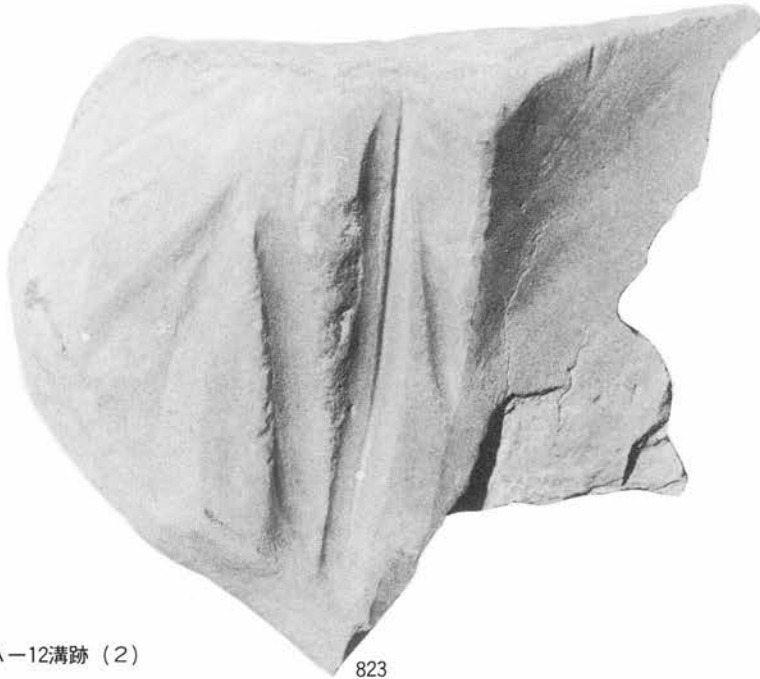
805



806



807

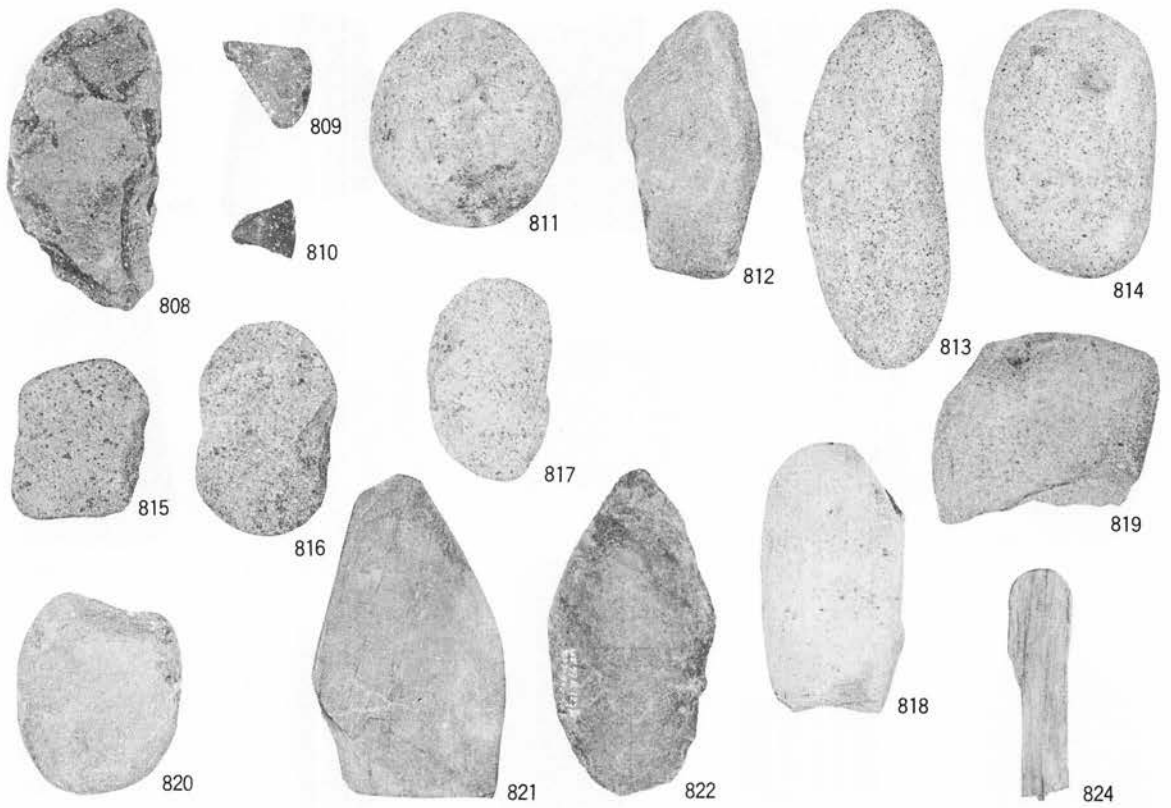


823

A-12溝跡 (2)

PL-141 石器 (溝跡)





A-12 溝跡 (3)  
 P L-142 石器 (溝跡)

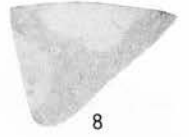
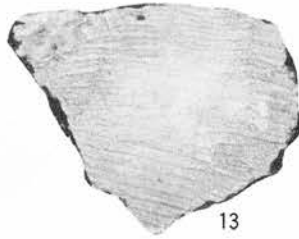
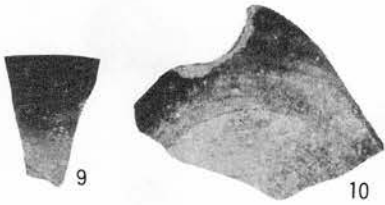
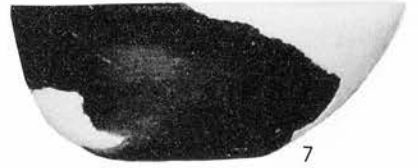


A. B-09住居跡 1~3

B. C-08土坑 4・5



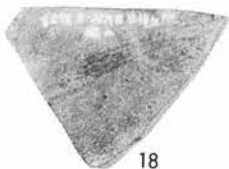
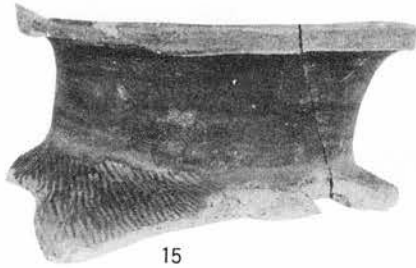
C. A-08周溝



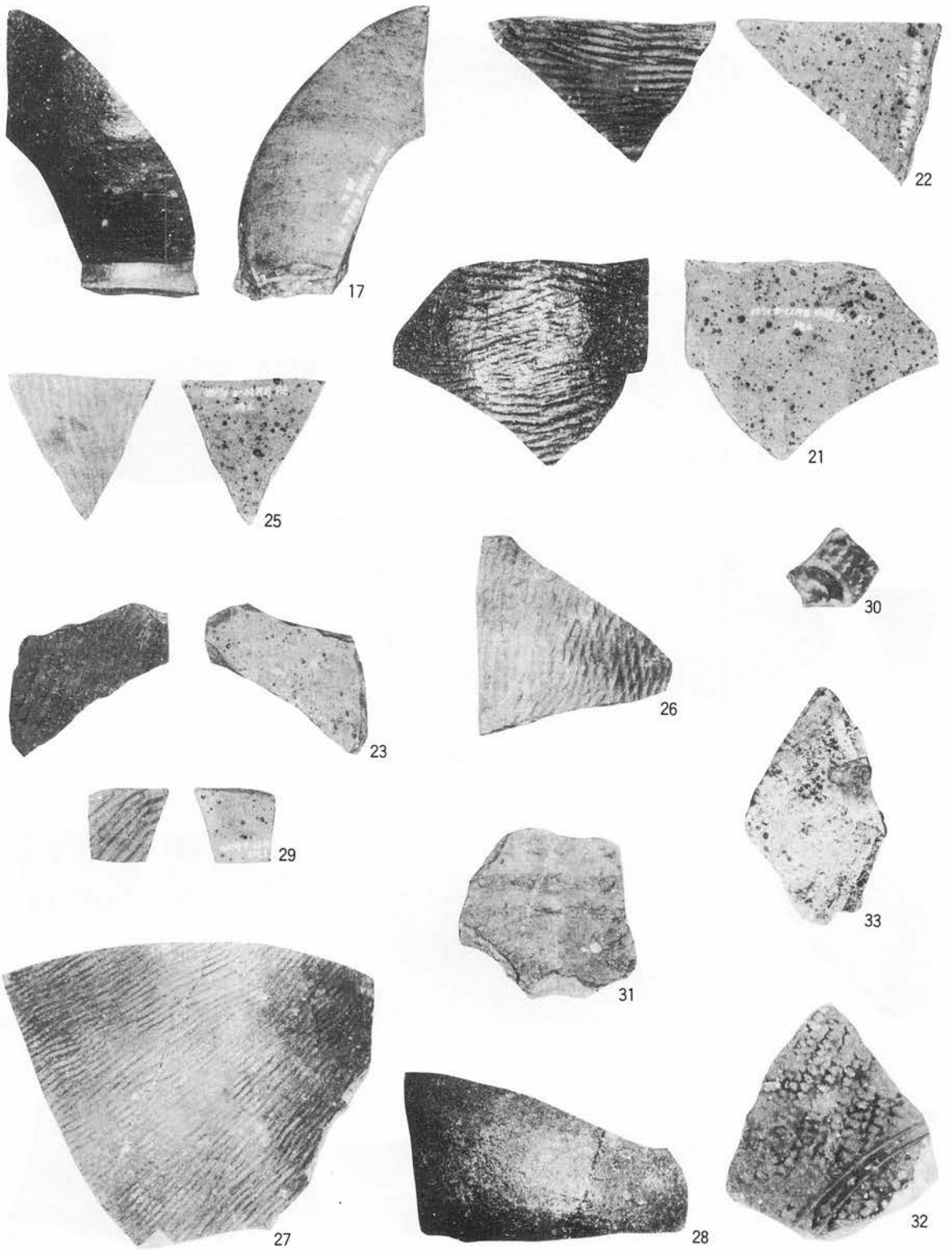
D. B-05周溝 7~13



E. C-19周溝



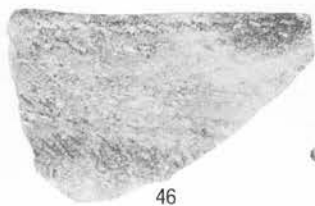
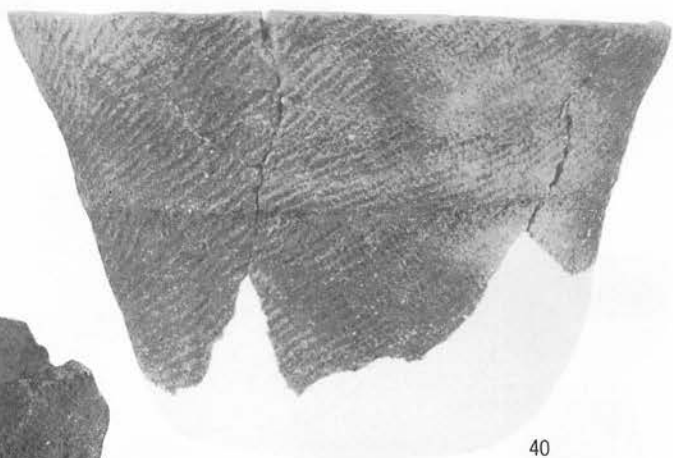
F. E-22周溝 (1)15・16・18~20・24



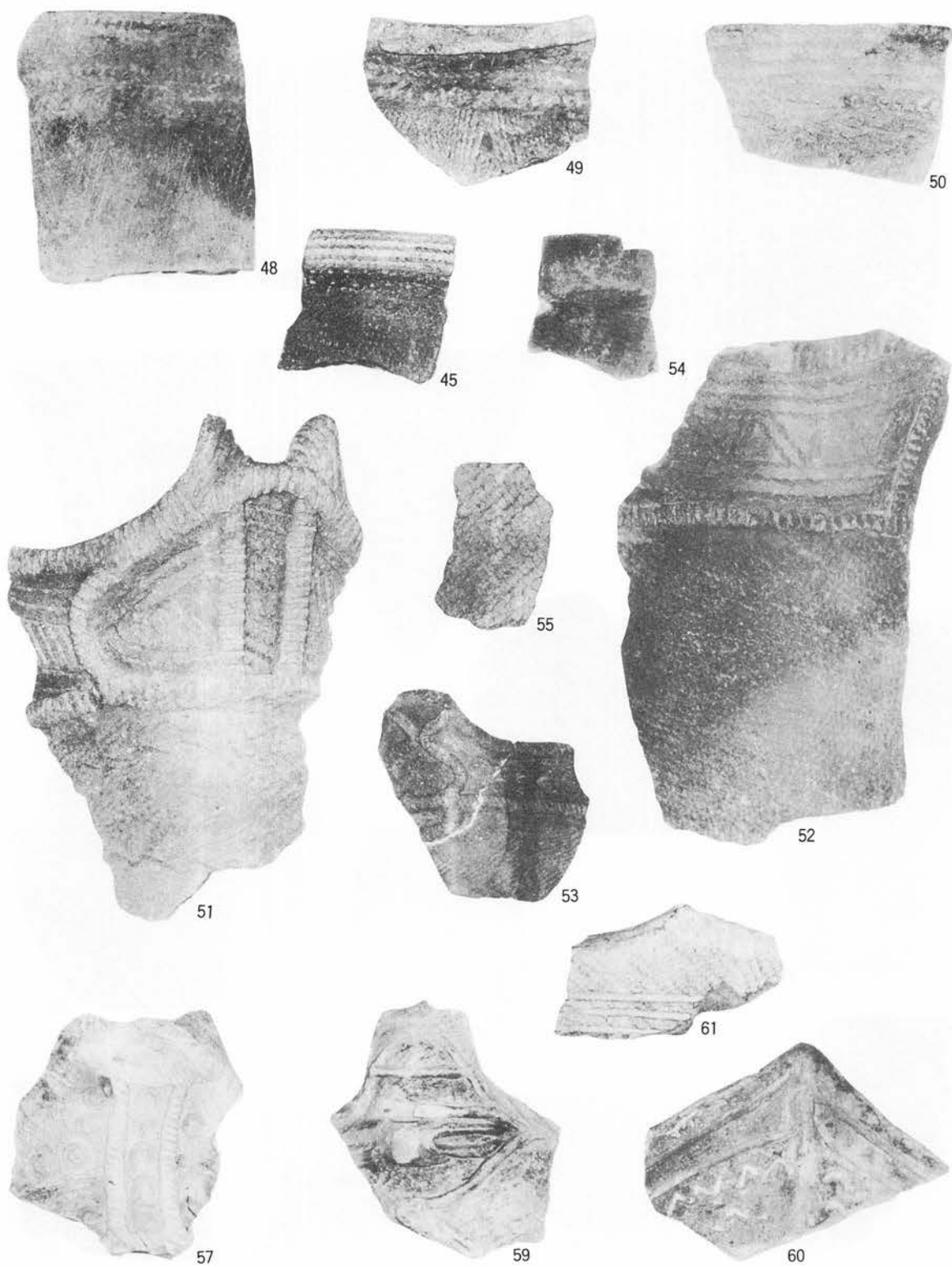
E-22周溝 (2)

PL-144 土器





A-12 溝跡  
P L - 145 土器



A-12溝跡  
P L-146 土器



58



62



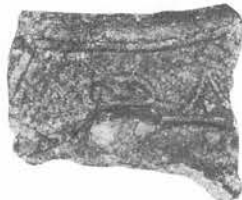
56



63



64



65



66



67

A. A-12溝跡 58・62~67



68

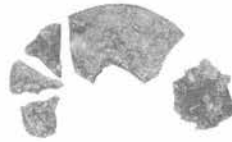


69

C. 陶磁器 68・69



3



4



2



1

B. 出土貨幣



---

---

岩手県埋文センター文化財調査報告書第55集  
上里遺跡発掘調査報告書  
二戸バイパス関連遺跡発掘調査

印刷 昭和 58 年 3 月 19 日

発行 昭和 58 年 3 月 25 日

発行 財団法人岩手県埋蔵文化財センター

〒020 岩手県紫波郡都南村大字下飯岡  
第11地割字高屋敷185

TEL (0196) 38-9001・9002

印刷 山口北州印刷株式会社

© 岩手県埋文センター 1983

---

---